Nihon gikyoku zenshū

日本戯曲全集
第三十七巻

池田大伍
仲木貞一
灰野庄平
林和

清見陸郎
小寺融吉
額田六福

現代篇第五輯

東京
春陽堂版



「名月八幡祭」の尾上松助



「男達ばやり」市川猿之助と市川壽美藏



「西郷と豚姫」舞臺面



「南方女兒國」の 水谷八重子



「芙木屋幸齋」の舞臺面



「柿實る村」の娘八重（中村かなめ）



「柿實る村」の村長（市川市升）



「心中兩國橋」の
宗十郎の八郎兵衛
梅幸のおつま



「萩江露友」野川の森律子 露友の守田勘彌 一濱の初瀨浪子



「坂崎出羽」の舞臺面



「眞如」の舞臺面



池田大伍



仲木貞一



灰野庄平


林和


清見陸郎


小寺融吉


額田六福

日本戲曲全集　第三十七卷　目次

池田大伍篇

林和篇

清見陸郎篇

池田大伍篇

瀧口時頼

西八條邸、西の軒廊

春の夜やゝ更けて中空高くなりしおぼろ月軒廊の中央に見ゆる。饗宴の席より遁れ出でたる侍女三人、小打着に長袴して欄干によりて疲れを休めゐる。

侍女一　まあ、この風の心もちのよいこと、まああの御席の蒸し熱いこと、このやうに逆上てしまうて……

侍女二　ほんに、私も……、まあ男の方はおえらいこと、今日は午過ぎから、ずうと續けての御酒盛に、どなたも足元も定まらないほど醉つておいでなされて、まだ御興が盡きないのやら……

侍女三　女でもさすが其道のもの、白拍子達はようめげずに御相手の出來ますこと、私どもには迚もなりませぬ。

侍女一　まあ、あの騒ぎは。こゝまで聲が聴えまする。まあどうしてあんな大きな聲が出るのでせう。

侍女二　あれ、白拍子を追驅けて臺盤へつまづいて横仆しになられた……何誰ぢややら。

侍女三　あれ、難波様がいつもの癖で、お醉ひなさると惡ふざけをなされて……あれ紅梅様の懐へ手を入れて、ま、よい氣味、紅梅様に高頬を平手で……

侍女一　あれ憎らしい、今度は、冷泉さまの懐へ……

侍女二　ほんとに憎いは、年寄の醉漢、見得も外聞もない惡ふざけして……わたしも先刻、あの厭らしい鬚面を頬先へ押つけられた……

侍女三　ほゝゝゝ、まあ、それはお仕合な……だが此方達がちと揶揄れてほしい方達はあつても、たゞ柔しう他人の樣をみて笑つてばかり、ほんにまゝならぬ……

侍女一　おほゝ、紅葉様の揶揄れてほしい人は、瀧口時頼様か、あの左衛門義春さまか、笑止なことには時頼さまには西の曹司の横笛さまが深い中、義春さまは、白拍子の刈藻と久しい馴染ぢや。

侍女三　はゝ、はてさう直それと御氣のつくところをみると、あなたもやつぱり揶揄れてほしいのぢやな。ほゝゝほ……ま、それ〳〵横笛様と申せば、内大臣様が……

侍女二　お、あなたもお氣がつきましたか。御酒盛のはじめからじろり〳〵と横笛さまを見てばかり……

侍女一　さう〳〵、段々御醉ひなされると横笛様をよんで傍から離さず、上様の御覽なされてゐるもかもはず、い

ろ〳〵なお戯れをなされて……

侍女二　おゝ、あの時はもう上様は大相御醉ひなされて、夜叉御前の御膝を枕に假睡をなされておいでなさつた。まあその前に御膝を枕になさつたまゝ、「わいへん」を御謡ひなされて、文句を忘れ、幾度も〳〵「わいへんの〳〵」とお繰返しなされてもあとが思ひ出せず、それでもなほ「わいへんの〳〵」つて、まあ可笑しくつて、夜叉様と顔見合せて笑ひを堪へた苦しさ、まああんなに御醉なさるまで召さずともぢや。

侍女三　あれ、さつきから大分騒ぎがひどくなつたとおもうてゐたら、上様はもう御引けになつた、御席が空ぢや。

侍女一　いや〳〵、また一旦御引けになつて眞夜中ごろにまたお出御になるのぢや。其時に皆が御引けなされた前の通りに揃つて騒いでゐねば御機嫌が悪いのぢや。こりや、また今宵は夜明しぢや。

侍女二　ほんに今日でもう十日いろ〳〵の御遊が續く。花の咲いてゐる間は休みもなからう。御家の盛りも今に超える時はあるまい。

侍女三　おゝ、さう申せば、關東では石橋山で大敗けに敗けて逃げた頼朝が、また旗上げをして大相勢がついて、今にも都へ逆寄にも寄せさうぢやとやら、ほんとうのことか御存じか。

侍女一　さあ、ほんとうか、虚か、それはわたしも知らないが、もしほんとうなら、かう安穏に御酒宴をよもなされてはおいでがあるまい。

侍女三　なるほど、こりやさうぢや。

侍女二　あれ内大臣様がたうとう立上られて横笛様を追驅けて、あれ到頭摑へて横抱きになされてもとの御席へ……時頼さまのこと、御存知ない譯はないのに、ま、時頼さまの見るまへで……お、時頼さまがつと立上つて、あれ、御座敷の外へ……こりや御道理ぢや。

侍女三　ほんとに〳〵、いかに昔からの御癖ぢやとて、呆れたもの。まあ御氣の毒な、時頼さまは先刻から沈み勝ちにしてゐられたが、

侍女一　いや先刻からではない、此頃はいつも御沈み勝の樣ぢや。それで却つて威が具つてちと面瘦せがして眼が大きうみえて一段と御縹致が上つた。

侍女二　あれ、時頼さまがこの御廊下傳ひに此方の方へ來るわ。

侍女三　お、ほんに。や、あとからも人が、や、義春さまぢや。何時の間に。先刻から資盛卿さまの御前で、いろいろの女御の品定めをなされておいでなされたが、

侍女二　ほゝゝゝほ、はて、お二人とも、義春さまと時頼さまのことは何から何まで御委しい、あの御席にゐても

始終其方ばかり御覽なされておいでなされたのぢやな。

侍女一　しつ、これ聽ゆる、もうそれへおいでなされてぢや。

（と三人下手の方へ席を避ける、上手より瀧口時頼、好みの狩衣に立烏帽子、六骨扇を携へて出る。後より左衞門義春、直垂に立烏帽子、いづれも太刀を帶びず。瀧口物思はしげに行過ぎんとする。）

（左衞門後より。）

これ、時頼、時頼、待て〳〵、――

時頼　誰ぢや、――おゝ、義春、どうしてそちはあの席から出てきたのぢや。

義春　はてそれはこの私がそちに聽くことぢや、そちはどうしてあの席を立つたのぢや。

時頼　はて、先刻から、大分盃の數が重つてちと心地が重うなつたから、醒さうとして立つてきたのぢや。

義春　いや、さうではあるまい、私は先刻から時々そちの素振を見てゐた。で、そちがふと席を立つたので、わしも直立つて後から追うてきたのぢや。そちはあの……いや〳〵これは云はずとも分つたこと。殊に今の氣持には云ひ出すは罪なことぢやが、ちと仔細あつて云はねばならねこと……これ時頼、そちはまあ……

（と云ひかけて、下手の女達をふと見付け。）

や、御達も、これにか。わはゝゝは。こりや、騷がしきを避けて靜かに花を樂しまうといふ風流ぢやな。その興を破つてかやうの高聲。これは御免を。さ、時頼あちへゆかう……

（と立掛る時、上手にて。）

聲　義春々々、何處へ〳〵

（とよぶ。）

義春　誰ぢや、や、これは中將さま。

（と跪く、上手より、右近衞の中將資盛、小直衣、指貫、冠にて先に立ち、白拍子かるも、侍二三人に酒肴を携へさせて出る。續いて文章博士康仲、醉どれて烏帽子も衣紋付もゆがみたる難波の六郎（五十位半白）ひよろ〳〵と從いて出る。）

資盛　これ義春、そちが最前の話の餘りおもしろさに、席を立たれたるが殘念さに、これまで追うてきた。あの騷がしい中では兎角落着かぬ。あの放出を裝置せて心知りのもの共ばかりで、其方が品定の續きを聽かうと、酒肴を改めさせ、酌人もわざとかるも一人召連れたわ。

義春　これはつまらぬ物語に御懇の御意、忝けなう。さらば御供申しませう。

資盛　やあ、それに居るは時頼ぢやな。最前は席遠くて語る折もなかつたが、義春に劣らぬこの道の先達、そちが

批判もおもしろからう、さ、そちも參れ……

時賴　は、私は……

義春　いや、時賴もお供いたしまする、ちと心地惡しいとは申してをりまするが、さほどともみえませぬ。

資盛　お、さらば參つてくれ。や、女原もこれに居るな。

難波の六郎　なに女原が、これにも、どれ〳〵。

資盛　えい、醉ひどれ奴。そちは參るなと申したになぜ附いてまゐつた……

六郎　はて、主從は三世、いづくまでも御伴仕りまする。は、御免を〳〵。

（と人々を搔きわけて侍女達の傍へよる。）

はゝゝは、成程、こゝにも居たわ。

侍女一　あれ、何をなされまする。

六郎　わはゝは、では、こなた。

侍女二　えい、いやらしい。

六郎　これはしたり、ではこなた……あいたつた、こりや、手を取らぬうちに撲たれた。や、大事ぢや。これ、なぜ、私の扇を隱した。これ人の惡い、こなた、懷に……

侍女一　あれ。

六郎　ではこなた……

侍女二　あれ。

侍一　これ、六郎どの、こなたの扇は半開きにして襟にさしてぢや。

六郎　えい、知つてゐる。

侍一　あはゝ、知つてる扇を何んで搜すのぢや。

六郎　はて、餘計なことを、えい、こりや、ちと目が廻うてきた、うゝ〳〵。

資盛　えい醉ひどれめ。醉へばしだらもない奴め。おゝ、俯首をつたとおもつたら、もう寢てしまうた。はゝゝは、やあ、よい月ぢや。あの寢殿よりはもう見えなうなつた月が、こゝでは丁度眞つたゞ中にみゆる。おゝ、放出までもなし。こゝで端居して月みながらの物語りが却つて興が深からうわ。

義春　おゝ、それも一段でござりませう。

文章博士康仲　はて、月を追つて宴席を移すとは、和漢の故事にも例なき風流、これは當代の規模、後代の龜鑑にござります。

資盛　あはゝゝは、康仲には太う感に堪へたな。さらば後日の記念、即興一首所望ぢや。

康仲　は、これは……今宵はいたく醉ひましたので。

資盛　おゝ醉うたれば、出來ぬといふか。……さては笑止や、康仲は李白が醉へば興愈々發するには、いたく劣つたな。さらば、もうその盃、おけ。そちは醉ふとも冗な男ぢやわ。

康仲　はて、さらばちと覺めたのかな。では今一盞重ねてみませう。

資盛　こりや出來たわ。あはゝゝは。

（一同笑ふ。）

（この中時賴饗宴のある方をぢつと熟視ゐる。）

（資盛みて、）

資盛　おゝ時賴、これ時賴――

時賴　はつ。

資盛　おゝ、心地惡しいか。思へば氣の毒な。先程よりの大臣の振舞。叔父君ながらあんまりな御仕打。父君の御家人たる時賴が最愛の……

義春　いや、時賴はちと飲べ過してそれ故いたう頭が重いとのこと。時賴、しばし御暇賜はつて、その邊を逍遙せい。わしがちと後程に用もあれば餘り遠くへ行くまいぞ。

時賴　さらば義春、あとにて御免しを乞うてくれ。……では御免下されませう。

（と額へ手をあて下手へ入る。）

義春　さゝ、中將樣、いま一盞、それ、かるもお酌……

資盛　いや、それよりは先刻の話の續きが所望ぢや。さ、此盞はそちに與らさう。さ、してあの話の續きはどうぢや。

義春　はて、あの話の續きなら、その男が、その女を捨ててしまうたといふまでゞござりまする。あはゝは。

資盛　はて、さりとては女の心が無殘な……

義春　でも未遂げぬ戀なら、捨つるがようござる、戀は苦しうてして何の甲斐もありませぬ。はて、樂しうてこそ、戀のうれしさもある。所詮は浮世の慰みぢや。色よき女は一人でない。何れも仔細にみればそれ／＼の取柄はある。一人に深う泥むはよいことではござりませぬ。

資盛　では通盛どのゝ簾中のやうなはどうぢや。通盛どのが三年が間、戀ひ侘びても志操固うて靡かれず、中宮の御媒妁にて、漸くにかなつた戀。このやうなは、なつての後の志、さこそとおもはれるではないか。

義春　ほう、いかにも。が、憚りなう申せば、このやうな御方は物さへ果敢々々しうはいはれぬ性、その樣に思ひざしは深うても、面にあらはれず。とかく賴しげな所はあつても、この某しのやうな氣輕者は、輕口いうてもにつと笑はれたきりでは、侮づられたやうで打解けにくい。これでは始終に氣がおけてをかしうもござりますまい。

康仲　さらばどのやうな女を好まるゝ。

義春　はて、どのやうな女をと申して、泥まぬ心には、心上れるも、浮氣なも、內氣なも、とり／＼に面白うござる。たゞ、泥む心がついては、どれも／＼面白うなうなります。心上れるは親しみがたう、浮氣なは賴もしげな

く、内氣なは物足らず……

資盛　はゝ、義春、そのやうなこと、此かるもが前で申してよいのか。これ、かるも、義春は憎い奴ぢやの——

かるも　ほゝ、ちつとも憎うはござりませぬ。

義春　はゝ、中將さま、かるもめは、この義春を世界でいつち愛しいものにしてをりまする。

康仲　でもあのやうなこと云ひをつてもか。

かるも　ほゝ、なんの、義春さまほどの男、このかるも一人で持つてをりまするのは、勿體なうおもうてをりまする。

康仲　こりや、深うも泥んだものぢや。わはゝゝは。

義春　いや、女は情あつく、一人の男に思ひ入りの深い性は、とかく、嫉妬深くて、つい愼みのない振舞なぞして、男の心を反らしまする。また、嫉む氣もなく、大様に花やかなは、面白げな所はあつても、心をゆるすともみえませぬ。所詮は氣心を知り合うて、善いにつけ、悪しいにつけて、大方のことは互に見ゆるして、逢ひ遂げて隔てもなうなつた仲こそ、世にもをかしいものでござる。のう、かるも。

かるも　ほゝ、さうでござります。

資盛　はゝ、義春、そちは幸福な……

義春　はゝ、幸福。世の中はたゞ樂しう面白う過すべきもの。縦、人定命を保つといつても、七十八十を過ぎませぬ。其間にも、人の身の盛んなること、わづかに二十餘年、過すに間もない世でござる。

資盛　まことにさうぢや。花の盛りも今日明日ぢや。ましてや、月を追うて宴を移せし今宵の興會は、又何時の世にかはぢや。心ゆくまで眺めあかさう。さゝ、義春まづ唄へ、さ、かるも、酌せ、——

（と資盛盃を取り上げ、ふと物思ふ體。）

義春　はて、なんとなされました。

資盛　いや今ふと思ひ出したことがあるのぢや。今朝當館へ、相模の大庭景親よりの早打に、頼朝勢ひ以ての外に猖獗ぢやといふことぢや。大事にもならうかの。

義春　はて、なんの、頼朝づれが謀叛、何事がござりませう。唯今の當家の御勢ひ、御征討の道々に御勢を驅催しても十五萬騎は瞬く間。たゞ一挫ぎでござりませう。

資盛　おゝ、さうぢやのう、はゝ、そちがいふ通りぢや、さゝ、盃をめぐらせい。

（この中。難波の六郎、眼さめてふと聽きつけたる心。）

六郎　何ぢや、頼朝、何の、頼朝ごときに。いざとならば、この六郎一人馳せ向つて手捕りにして、鞍の前輪に引繫つて罷りかへらうわ。……だが、待てよ。そりや昔の六郎ぢや。もう年を老つたわ。いや、おればかりでない、

戰場老功のものは、みな年老つたわ。又若い奴原は、みなぬらくら漢ばかり。これであの阪東武者に驅け合うたら、あゝ、こりや敗けるわ〳〵。平家の世ももうこりや終ぢや。あゝ……

資盛　これ、六郎、何をいふのぢや。

六郎　あゝ、醉うた〳〵、なぜかう醉うたんぢや。かう酒を飲んでは、長うは生きられぬわ。……あ、後の世はあるかしらん。此頃慈心坊とやらいふ坊主が、地獄を見てきてかへつたといふことぢや。そんならおれは地獄へ墮つるわ。あゝ助けてくれえ……

資盛　この醉ひどれ奴をあちへ連れてゆけ。

侍ども　はつ。

（と立掛りて。）

さ、御意ぢや、六郎どの、あちらへ。

六郎　おゝ、獄卒どもぢやな、どうぞ助けて……

侍一　はて、六郎どの、何を馬鹿な、さ、あちらへ。

（と二人ばかりにて引連れゆく。）

（資盛と義春と顏見合せ淋しく笑ふ。）

資盛　えゝ埒もない醉漢のたは言に何となう興が破れたわ。――おゝ、夜更けては花も却つて淋しうみゆる。お、まだ、あちでは、あのやうに騷いでゐる。さ、こゝの風は寒うなつた彼方へゆかうわ。みなもこい。

義春　は、勝手ながら、私は時頼にちと申すべきことがござりますれば。

資盛　おゝ、では後より、……さ、みな參れ。

（と資盛先きに、侍、かゐも、侍女等入る。）

（時頼下手より出る。）

義春　おゝ、時頼。

時頼　義春、用とはなんぢや。

義春　はて時頼、そちはまあ、何であのやうに白痴たんぢや。

時頼　なにあのやうに白痴たとは。

義春　はてあの滿座の中で、あれ程のことに心亂して、そちの想ひを引隱しえぬとは何うしたものぢや。はてさうまでに迷うたか。大臣どのゝ御戲も、半ばは、そちが苦しむ顏のおもしろさにぢや。心の苦悶を他人に示すとは、そちの日頃の氣象にも似ぬことぢや。

時頼　えい、もう何ともなれ……

義春　時頼、のみならず、そちは此程より、母御の許へかへらぬな。

時頼　おゝ、どうしてそれを知つてゐるのぢや。

義春　昨日、母御が私の許へござられて、さま〳〵に嘆いて行かれた……

時頼　なに母上が、……

義春　さうぢや、そちが橫笛といふ素姓賤しきものに戲れて母御がすゝむる良緣を拒み、母御が老後の安心も、そちが行末の立身もみなその女に見代へをつたとのお腹立であつた。

時賴　……

義春　やがてはまたさめ〴〵と泣かれて、「親の訓に反く憎い奴、惜しいとはおもはぬが、一粒種の木守り、祖先の祀り絕されず、今一度かへるやう……」よう意見してとわしへのお賴みであつた。

時賴　なに母上がそのやうにいはれたか……むゝ。

義春　おゝ、さういはるゝ心の裏には、深くも籠る御慈愛に、この義春、思はず母御の心が思はれ、落淚した……これ時賴、なんでかうまであの小女郞に泥んだのぢや。

時賴　はて、……この時賴、都に人となつて、こゝの女、かしこの女、とそちとも鐙を竝べてゆうべの陣外より、遊君が籬のもとへ駒をよせ、かれが情けもおもしろく、これが志も嬉しくて浮れあるきに年を經てわれよりは深うも思はず、何れも待遇さるゝ面白さに戀てうものはかかるもの、古今に讀んだ戀うたの意はみんな空事ぢや。人の情は、みな僞りの、たゞその當座の情こそあれ、後朝には離ればなれに別れゆいて、心は別々、深いも淺いもあるものかと、これより、あれへの心移りに、心止まる方もなく、慕ひよるをば、笑ひ捨て、世の中安うあつた身が、あの女に泥んでより、かうまでに心うつけて……

義春　はてさうまでに分別あつて、なぜそのやうに逆上するのぢや。

時賴　さ、それぢや、悲しいそれがしが心きいてくれるか。

義春　おゝ、聽かいでか、其方の嘆きは、わが嘆きぢや。

時賴　おゝ、忝けない。この時賴は、此頃ふと人のまことが欲しうなつた……

義春　ほう、してまたそのまことを得てゐながら、なんでさう悲しいのぢや。

時賴　さあ、それが自業の果ぢや。浮いたる戀に世を經た身は、たまさかの眞の情も浮いたる樣におもはるゝ。此時賴が若い日の、それよりそれへの移り心に、女も同じ若さには又同じやうな移り氣も起らうかと疑ひの眼にはさもない素振も疑はれて、女の情は得ながらも、それを我ものとおもひ得ぬのぢや。

義春　はて、淺猿しい心になつたの。

時賴　おゝ、淺猿しいわ。淺猿しいと知りながらも、此心を除り得ぬ苦しさ。おゝ、いつそ此苦しさを續くるより、女奴が殘る方なく、私を欺かつたと知つて心ゆくまで我愚かさを笑ひたいわ。

義春　はて、何をいふのぢや。さうまでに苦しいなら、その疑ひもろともに女を捨てゝしまわぬのぢや。なぜ、あの女ばかりにさう泥むのぢや。ちとほかの花も見ぬのか。今宵の宴席にも女原はみな、そちの方へ秋波を送つてゐたぞ。相國の御傍の夜叉御前さへ折々盗み眼して其方を見てをつたわ。

時賴　おゝ、もうそのやうなことはきゝたうない。

義春　はて、なんでさう顏を反くるのぢや。このやうなこと聽くさへ厭ぢやとおもふほどにあの女を思うてをるのか。してあの女もそれほどに其方を思うてゐるのか。

時賴　これ、義春。なぜその樣なことを云ふんぢや。

義春　おゝ免してくれ／＼。だが、なぜさうまでに悶ゆるのぢや、相國樣の御上を見い。佛御前を得たまひては、祇王を芥のやうにも捨てられたは、情ない御仕方とおもうてゐたが、さうまでにおもはせられた佛御前が又後を隱しても震動せられた體もなく、佛にまさつた白拍子、國一を召し出され、佛に見放されたれば、夜叉を愛しがるのぢやとて夜叉御前と呼ばせられて御寵愛をなさるゝわ。これでこそ、男らしい御振舞ぢや。兎角のことは申しても、やつぱり御一門には隨一人ぢや。思うたまゝをなされて毫も泥むところもない。これ、時賴、もう好い程にそのやうな頑固な心を捨てゝ、母御にも孝養して、過ぎ易い世を樂しまぬのぢや。思ふばかりに、過ぎてしまふぞ。

時賴　おゝ、義春、そちには、此時賴が心かわからぬのぢや。そちのいふ樂みなんぞに、此心が慰めらるゝ程ならば、なんでかうまで物に狂はうぞ。世の逸樂に厭き果てて、はじめて人の眞の情の欲しい心も憑いたのぢや。

義春　はて、むづかしい。さらば、何うしてもその心を捨てぬといふか。なるほど、そちの樣な一圖な男が思ひ詰めては……あゝ私には迚も出來ぬことぢやわ。

（かるも上手より出る。）

かるも　義春さま、まだ、これにか。あちで召します。

義春　おゝ、さうか。……これ時賴、……平家の春ももう幾返へりか。やがて世も變らうぞ。昨日弓場殿で、久し振りに弓引いたに拳がよう定まらぬやうになつたわ。平治の軍に十三で初陣して、敵の首取つたに比べては著るしい劣り樣ぢや。が、別に悔む心もおこらぬ。思ふままなる世を經ては、末はいかなる野末に屍を曝すともぢや。たゞ、わが世のほどは面白うぢや。花は散るとて咲かぬものか、思ひのまゝに咲き誇つて、たゞ散り際は潔ぎよう……

かるも　はて、なんでその樣なこと——

義春　まゝ、それはまだ先のこと、今ではないわ。さゝ、

彼方へ行つて、久し振りにそちが今様きかうぞ。

（と二人上手へ入る。あと。）

時賴　えい、子を愛するさへ、眞賞をいはず、「親の訓に反く憎い奴、惜しいとはおもはぬが祖先の祀りたやされず、今一度かへるやう……」とは何事ぢや。……子が假初の家出にも驚き騒がれて、他人を賴まるゝほどな御慈愛があるならば、なぜさうまで言を飾らるゝのぢや。……その御心では横笛がこと御心に召さぬも道理この事扱かせらるゝも道理ぢや。……この間も御庭訓に反いたとて持佛へ入つて御看經の御睟の淋しさ、聽くに堪へかね、そぞろにも出た家出ぢや。子にはなほこれほどの心がある に……おゝ、親子の愛さへまゝならぬ、まして他人の横笛が心に勝手あるは道理ぢや。おゝ、かうまでに知りながら、かうまでに思ひ絶えぬは、偏に女の情に泥んで、離れがたなうなつた故ぢや。この上はかねての覺悟ぢや。女の情の底を正して……おゝ、誰ぞくる、や、横笛めぢや。

（上手より横笛、微醉の體、小袿を脱ぎかけ、白衣に長袴して、檜扇を口へあてゝ出る。）

横笛　おゝ時賴さま、まだ、こゝにか。

時賴　おゝ、居るがどうした……

横笛　ほゝ、誰ぞを待つて。

時賴　えゝ、そちは醉うてゐるな。

横笛　え、右大臣さまが、無理強ひなさるので、つい飮みました。

時賴　えい、おのれ、默れい。

横笛　ま、またお怒りなされて、何故まあそのやうに……

時賴　えい、我が見る前も憚らず、右大臣とのあの態は、ありやなんぢや。

横笛　ま、ありや是非がござりませぬ。右大臣様の遊ばすこと、さう情なうはなりませぬ。

時賴　はてその情なうならぬとは、あの右大臣にそちや、心を寄せてゐるのぢやな。

横笛　なんの、まあそのやうなことを……

時賴　でも、かう何時までも時をすごして……やツぱり心を寄せてをるのぢやな……さうか、さうか、返事せい。

横笛　えゝも、くどい。

（と扇拍子をとりゐる。）

時賴　なに、くどい、……二言目にはその様なことを、さういふ手間につい一言、わしの心を和げう言葉をかくることはならぬか。

横笛　でも、あなたはくどいゆゑ。

時賴　なにくどいとはおのれ、はて、物きいて答へぬに、も一度きいたが、何がくどい。えい、おのれ、時賴ほどの

ものを弄びをる。きく事に正しい返事だにもせず、其上に男に恥を與ふるか。おのれ。

横笛　え、また、そんな大きな聲、なんでそんなに恐い顏、あなたは恐い。

時頼　なに恐い、……さてはもう私に愛想がつきたといふのか。

横笛　えゝ。

時頼　えい、愛想が盡きずば、なんで恐い、恐い男が思うてゐられようか。

横笛　えい、また、あなたはさう一圖な……

時頼　おゝ一圖ぢや、もうこの時頼は唯一圖ぢや、おゝ、此一圖に、そちに、親も見代へたわ。今はたゞおのれの心一つでは、この世も捨てうとしてゐるわ。

横笛　ほゝ、あなたはお口が上手ぢや。

時頼　なに、口が上手、かうまでに眞實を語る時頼をまだ弄りをるか。

横笛　でも、あなたは時々頼もしげもないことばかり、此契もいつまで續かうかの、もう別るゝ時がきたのと、聞きたうもないことばかり。

時頼　おゝ、そりや、そちの心が疑はれた時ぢや。頼もしげない女に、頼もしげもないことといふは當然ぢや。

横笛　ほゝ、それその通り、どうせ、さうぢや、あなたの心は分つてある。

時頼　はて、なんぢや、なにが何うせぢや。何が分つてゐるのぢや。

横笛　なんでもよい。

（と横を向く。）

時頼　えい、なぜ物を明瞭いはぬのぢや。

横笛　はて、心におもうてゐることを、さう易々人にいふものでない。

時頼　この私にもか。

横笛　え、あなたにも。

時頼　なに私にも……ではもう別るゝ時がきたわ。

横笛　なに別れる……いやぢや。

時頼　えい、なりや、なぜその樣なことをいうてこのわしの心を惑はすのぢや。

横笛　なにも惑はしはせぬ、あなたが一人でおれてござるのぢや。

時頼　でもおのれ、わしにも心を語らぬというたぞよ。

横笛　ぢやというて語る要もないこと、語らうほどのこともござりませぬ。

時頼　でもおのれ、人は要のあることばかり語るものか、私が語つてきかせいといふに、悖きをるか、おのれ……

横笛　はて、まあどうなされた。あなたはまるで氣狂ひぢ

や。

時頼　おゝ、氣狂ひぢや、それでそちは愛想を盡したのぢやな。

横笛　えいもう二言目にはそのやうなことを、こりやもう私に愛想が盡きたんぢやな……えい、口惜しうござる。

時頼　はてなにが口惜しい、やつぱり、私を思うてゐるといひをるのか。

横笛　それを今更……

時頼　それでそちや泣くか。

横笛　いゝえ、泣きやしませぬ。

（と涙を拭うてゐる。時頼それをぢつとみて、にはかに心が開いたやうに。）

時頼　おゝ、ゆるしてくれ。泣いた涙を隱さうとするは、柔しい幼い女心ぢや。そちが明瞭とした物言ひせず、とかくに物を引隱すも、同じ心ぢや。この時頼が世に古びて硬くなりたる心の一圖に、それを情ない仕業と思ひとつたは過りぢや、免してくれ。横笛、私は、そのやうな柔しい女心を喜びながら、萬づに不束なそちの足らぬ心を責めようとしてゐた、こりや、私が惡かつたのぢや。……ゆるしてくれ。

横笛　では、お心が融けましたか。

時頼　おゝ、融けたわ。……これ、そちにはじめてまことの情けを覺えた時頼、かならずおもひすてゝくれるな。

横笛　なんのまあ、勿體ない。そりやわたしの申すこと……

時頼　この時頼は今はそなたがたゞ命ぢや。……必らず心をかへてくるゝな。

横笛　まあ、もうその樣なことを、何やら悲うなります。さ、もうお止めなされませ。……さうぢや。私や、かうしてはゐられぬ。

時頼　え、なんでぢや。

横笛　上樣がさつき、此滿開の櫻を御覧なされて、花ももう今日明日が盛りの頂上、散らぬ中にと急に明日嵐山へのお成りを仰せ出されたので、私等は朝まだきからのお伴、早う行て、支度をせねばなりませぬ。

時頼　ではもう、こゝにゐぬといふのか。我を思ふといふ口の下から。

横笛　でも、これは上樣のお伴で、仕方がござりませぬ。

時頼　でもそりや病氣ぢやというても濟むことぢや。

横笛　でももう此春には最後の御宴。

時頼　で、そちも往きたいのか、その通りぢや、やつぱり口ばかりで眞實の心はないのぢやな。

横笛　あれ、またあなたはお怒りなさるのか。

時頼　お、いゝや、怒らぬ〱、が、ま一度そちにきかう。まつことそちは私を思ふのか。

横笛　えゝ。
時賴　では、私がかうせいといふこと、何なりとするか。
横笛　えゝ、……この身の出來ますことならば……
時賴　なに此身に出來ることならば……はゝ、そりや、よい言葉ぢや。出來ぬことは出來ぬことぢやからのう……
横笛　え、ぢやというて、何でもすると云うたら、あなたは又、そりや嘘ぢやといふであらう。
時賴　…………
横笛　あゝ、もう私(わたし)や、つむりが痛い。戀がこの様に苦しいものなら、わしや、もう厭ぢや。男なんぞは男なんぞは。……何所(いづく)へも身を捨てゝ尼法師ともならう。
時賴　えい、そちの心はそれぢや、苦しい思ひまでして、男をしたふ心がないのぢや。そちの心は浮れてゐる、世の榮華を慕つて、多くの浮れ男どもの口に上るを喜んで思ひありげな素振に男の心を誘ひをるのぢや。
横笛　なんで私が、そんなまあ。……
時賴　えい、では、なんで私を捨ておいても明日の櫻狩には往かうといふのぢや……えい、そちはなんで眞實を語りをらぬのぢや。
横笛　眞實とてこれより外に眞實はない。
時賴　えい、僞り者奴、おのれ〳〵。
横笛　えい、もうではあなたの宜い様に、あなたの勝手になされませい。もう〳〵男なんぞには〳〵。……
時賴　えい、おのれ、よういうたな。これが親にも見代へた女か。馬鹿め、おのれ、時賴のうつけ者め。こんな女に眞實の情を濺(そゝ)ぎ盡してかゝる淺猿しい愚痴の奴となりをつたか。えい、いよ〳〵私を思はぬといふのぢやな。これなぜ口を利かぬのぢや、なぜ口を利かぬのぢや。えい、女はおのれの都合によつては、只押默つて勝たうとする。よい、さらばその押默つたを返事の印ともみようわ。ま一度私が問ふに答へずば、それが返事ぢや。全く私をおもはぬのぢやな、おゝ、いよ〳〵默つてをるな。えい、情けない奴、いままで此時賴を欺きをつたな、おのれ、弄びをつたな。いや〳〵もうそれはいはぬわ。そちが眞實の情を戀したれ、その情の失(なく)なつたそちは私にとつては何んでもないのぢや。たゞ戀しいは、眞實の情のあつたそちぢや。……おゝ、なれども先刻までの振舞には僞りならぬ眞もみえた、ありやどうしたのぢや。
横笛　はて、どうでもようございます。
時賴　ではあれもまことは思うてはをらんのぢやな……これどうぢや。
横笛　はて思うてゐたとて、それをその人の前で云うたとて何になる、云ひたくばその人の居ぬ所でいひます。
時賴　えい、またしても、そんな謎々。女奴はかう男の苦

しむのをみて、胸の中で笑ひをるのぢや。大方の女の戀とはさうしたのぢや。男の情を弄んで喜びをるのぢや。僞りもない男の眞心を嬉しいともおもはぬのぢや。おゝ、この様な僞りの情を、親の情に代へたか、えい、その親の情とて、……淺猿しいは世の中ぢや、もう此上はたゞかうぢやわ。

（と矢庭に烏帽子脱れのけ、隱し持つたる小刀逆手に髻おし切る。）

（横笛みて驚き。）

横笛　えい、まあこれはどうしたのぢや。

時頼　わはゝゝゝは、髻切り下して一切の緣を放下すれば、早や心にかゝる雲もないわ。浮世の女が寄つて來て、われを拔けばとて、もうなにあらう。流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者、横笛さらばぢや。

横笛　これまつて時頼さま、あなたは私をほんとに捨てゝおしまひなさるのか、これ、どうか、も一度止まつて……これからは、最うあなたの心に逆らはぬ、何のやうなことがあつても、……

時頼　はて、一時の情に、そのやうに誓うたとて女がそれを守らるゝか。……えい、放て、

横笛　いゝや、放さぬ。

時頼　えい、放しをれ。

横笛　いやぢや。

（と此途端、電光、雷鳴、風雨。――この前よりいつか月を隱し次第に暗くなりゐる―。）

あれ……

（とおもはず、手を放し、俯伏す。）

時頼　はて、時ならぬ雷鳴ぢや。

（と横笛をみて。）

わはゝゝは、わが男の一大事を止めんとする時に、雷光の光に怖れて手を放つか、はゝ、男の情を弄んで慰みにしをるほどの膽太さに、これほどの雷鳴がなに怖い、なにおびえる、おゝ、女とはその様なものぢや、雷かはためけば、慄へをのゝき、空が晴るれば、けろりと忘れはつるのぢや。

横笛　なんのまあ、そのやうなこと……

（横笛の肩へ手をかけ。）

時頼　はて、ではなぜこのやうに慄へをるのぢや、女は慄へてゐながらも、恐れてゐぬと僞りをる。僞つて少とも心に恥ぢをらぬ。かゝる僞り者の誓言になんで眞實がかけらりようか。女は深う誓うたことさへ、その時々の情のまに〱、恥づる氣もなく、それを破るわ。ましてや、一時の情を賴みに、また幾年の年月を怒りつ、悔みつ、送らりようか、えゝ、さうまでには白痴ぬわ。

（と突放す。）

時頼 （風雨いよ〳〵烈しく、花盛に散る。）

おゝ、散るわ〳〵。おゝ最前までまだ四五日はとおもうた花の命も、もう今宵ぢや。電光の光の中に、先爭つて散り落つるわ。明日は花なき都とならうわ。瞬く間に變る世ぢや。かゝる頼みなき世に、更に頼みない女を頼みに……はて捨つるに難い世か、女か、横笛さらばぢや。此世さらばぢや。

横笛 これ、待つて……

時頼 えい、今更に何止むる……おのれは獨り世に榮えて、今宵ばかりの花の樂め……

横笛 おゝ、どうぞ免して、全くわたしが惡かつたのぢや……

時頼 えい、出離の道の妨げするな。

（と振放つて、つか〳〵と立出づる。）

横笛 これえ。

（と追ひ縋らうとして倒れ、泣伏す。）

（風雨、電光、雷鳴、落花。）

嵯峨野、瀧口入道の庵室

四十ばかりの百姓男

百姓 これ噂きいたか、都の噂を、え、恐ろしいこともあるもんぢやないか。相國さんが火の病ぢやとよ。あまり奢が長じたんで天狗さんに見込まれさしやつた、いやなことぢやのう。

（七十あまりの老僧、箒をとりて掃除しながら聴くでもなく聽かぬでもなく。）

老僧 さうかのう。

（百姓男熱心に。）

百姓 うむ、それがの、なんでもその、相國さんがはじめ、此上の願ひはたゞ長生がしたいばかりぢやつとつての、不老不死の藥たらいふものを搜さしやつたさうな。さうするとの、耆婆たらいふ唐のお醫者さんがみえての其藥を調合しようというた。相國さん大喜びで、その藥を日に三度、夜に三度のんだんぢやなあ。さあそれが事だ、實はそのお醫者さんが天狗さんが化けたんで、相國さんがあんまりおほけない望をかけさつしやる所へ、附こんで魔道へ引張りこまうとしたのぢや。その藥を呑んでからといふものは、次第に身内に熱が出て到頭火の病ぢや。それでその藥がの天狗道の喰物、鐵の熱湯といふもんぢやつたさうな、それからの、その唐人醫者かの到頭正體を顯してな、一丈ばかりもある大鳶になつて車輪のやうな翼を擴げて鞍馬の方へ飛んでいつた。

（老僧輕く。）

老僧　あはゝ、そりや噂ぢやらう。
（百姓男眞面目になり。）
百姓　いや、嘘ではない、本眞ぢや。何處でもその噂ぢや。現に一昨日のあの恐ろしい辻風な、……雲が交つてどうと小半時ほど吹いた風の、ありやその天狗さんが鞍馬へ飛んで行つた名殘を受けたんぢや。都方では大變ぢや、大木が倒れる。垣根、蔀が飛ぶ、物賣小路の物賣店が床几だふしになつた。
老僧　おゝ、あの風は悪い風ぢやつた。樂にしてゐた此庵室の裏の柿をみな落してしまうた、まだ半分はまるで青いのに。
百姓　あ、さうか、そりや氣の毒なこつちやつた。私もの、少しばかり畑に殘してゐたせんざいものをみな臺なしにしてしまうた。したが今いうた話は嘘ではない、あの風が證據ぢやないか。
老僧　あゝ、嘘でも本眞でもよいわ。……だが私には眼にみた事でなければ本眞にはおもへない。七十年來、いろいろの不思議なこともあつた樣だが、眼にみたことは一度もない、みな噂ぢや。したがあの風は憎い風ぢやつた、わしの此秋の樂を半分がだ臺なしにしてのけた……あゝ此頃の慾はあればかりぢやつたに。
百姓　おまへ、柿のことばかりいうて……相國さんの今の話、恐いこつちやともおもはんのかい。
老僧　さ、恐いてゝ、こゝにかうしてゐる身の拘りのないこつちや。だが清盛どのも年寄は年寄の樣にしてござればよいに、まだ浮世の念が絶えぬから其樣な目にもあふのぢや。
百姓　あはゝ、でもおまへも柿には大分念を殘してゐるではないか。
老僧　でも惜しいものは惜いわ、だがわしは身にかなはぬものは望まぬ。不老不死の藥なぞ欲しいともおもふ念もない。
百姓　ぢやおまへ、何時までも生きたうないか。
老僧　出來ないことに望みはない。
百姓　なるほどな。……それはさうと、遂ぞ聞いた事もなかつたが、おまへは此邊で見かけるやうになつても最う大分古いこつちやが經一つ讀むでなし、方々の庵室や寺の掃除をしたり使ひ歩きをしたりしてゐるが一體どういふ譯の發心ぢや。
（老僧緣にかけて。）
老僧　あはゝ、わしの發心かの、わしの法體はの、髮の毛が次第に無うなつて髻がとれなくなつて自から法體の姿になつたのぢやな。
百姓　自から法體の姿になつた。

老僧　そよ、形ばかりか心も行爲も自から法師になつてしまつたよ。今の身にはもう破るべき戒もないよ。此身となつて世間を立てぬ身に人の僞いはう要なし、まして得づかう心もないに人の物欲しいといふ念もない。

百姓　ぢや女子はどうぢやの。

老僧　さ、それぢやがの、情けなや、とんと夢にも見ぬやうになつた。あはゝゝは。

百姓　さてはお前もむかしは極道をしたこともあつたのかいの。

老僧　でも今は聖ぢや。

百姓　あは、そりや左樣もあろ、が、それにつけても感心なはこゝの御庵主さんぢや、まだお若うて都方でも身分のいゝお武士ぢやさうなが、どういふ上の御發心かしれぬが日毎の佛前の御勤めぶり、御心の堅固さも思はれて信心が生ずるわいの。

老僧　あはゝゝは、さう見えるかの。

百姓　え、さう見えるかのつて、初めてこゝへ御座つたときは地藏菩薩の御化身かとおもはれたやうな美僧ぢやつたに、此頃の御窶れやう、一度に十年も年をとられたやうで行ひ濟した御樣子が貴げではないか。

老僧　あはゝはさうかの。

百姓　これ、お前、何ぢやか奧のあるやうな物の言ひ樣さつしやるが、私の云ふことが違ふかいの。

老僧　さ、違ひもせぬが、唯あまり若いのでのう。

百姓　え、さ、その若いからえらいのでないか。

老僧　さ、それが左樣なりや、全く左樣ぢやがの、どうも私は今までに見た事の外信ぜぬのでのう。

百姓　ではおまへ、あの御庵主さんのことでなにか見たかえ。

老僧　さあの御庵主さんの事では未だ何にもみぬがのう、今まで見て來たことではのう。

百姓　ふうむ、だがあの貴げな顏かたち、よも御信心のもどることもあるまいと思ふがなあ……

（こゝへ上手奧より忩げに、二三人の男、笠傾けて急ぎ來懸り、庵をみて點頭き合ひ、うちの一人枝折戸の外より。）

男　卒爾ながら物問ひませう、此庵は齋藤樣の只今のお住居ではござりませぬか。

老僧　齋藤樣とは時頼法師のことでござるかの。

男　なに時頼、いかにも俗の時の御名乘は時頼、さては此庵でござりましたか、それならば御免なさりませ。

（と内に入り來り。）

男　早速ながらちと密々の用事、御庵主樣にお目に懸りたいもので……

老僧　や、それは折あしい、只今在庵いたしませぬが……

男　えゝ、それは困つたこと……さりとては急がるゝし……してこれへ年頃十六七の娘御が御訪ねなされては見えませなんだか……

老僧　いゝや、おいでにはならぬ。

男　なに、まゐりませぬと、それは大事ぢや、してあなたは……

老僧　留守居のものでござる。

（男、これにて連れの者と小聲に相談し、老僧に向ひ。）

男　それならば申し置きまするも差支へござりますまい。實は我々は齋藤樣御在俗の折に、深う云ひ交された横笛樣が家の者でござります。此春齋藤樣御發心ののち横笛樣には深草の御實家へ御歸りにて、うつら〳〵と日を送られ、御胸の中は唯齋藤樣のことばかりで、御姿がみえぬとおもへば、何時か物蔭へ入つて泣いてござられる。思が積れば眞夜中でもふと起き出でゝは御泣きなさるゝ。やがては御命も捨てかねない御樣子に、親御樣たち共に瘦せ、それとなく齋藤樣の御行方を御尋ね申しまする中、計らぬことから此里と知れましたので、後先かまはぬ御一圖からその儘に御家出なされ、それでかやうに後追うてまゐつた譯……今にも齋藤樣御歸りになりますれば此事よろしう御傳へを……あ、これへおいでがないとしたら何れに御迷ひなされてやら、心配になつてまゐつた。……ではなほ心當りの方を、急ぎますればこれれにて御免を……

（と男先きに打連れて急ぎ出てゆく。）

（百姓見送り。）

百姓　さてはこゝの御庵主さんもやつぱり戀があつたのかいの。

老僧　さうであつては愈々以ての……

百姓　御發心が遂げられぬかのう……おゝ、まだ聽かなんだが今日は御庵主さんは何の用で出さつしやれた。

老僧　や、別に用というてある樣でもないが先の程出られた。此頃は其處らあたりを用もないのにふらめき歩く癖がついた。それがどうものう……

百姓　さうかの。それは困つたことぢやが、折角の御出家ぢや。どうか遂げさせたいものぢやのう。

老僧　はて案じたとこが濟まぬこつちや。や、もう全で暗うなつたわ。

百姓　おゝ寒、暗うなつたら急に寒うなつた。や、こりや長座しました。また逢ひましよ、さようなら。

（と枝折の外へ出る。）

百姓　おゝ寒、さぶ、枝折の外へ出ると北山颪がまともぢや。おゝ寒〳〵。

（と歸る。）

老僧　御庵主はまだ歸らぬ、から暗うなつたに何處をあるかれてゐることぢや。や、もう大堰川の水音がきこえて來る。此頃は暮れると直に聞えてくる。世間が日増しに靜かになつて秋も最うぢき終るのぢやな。どれ燈火を點けておかうか。

（と燈臺へ火を點してゐる、此中枝折戸の外、心細げなる宵月となり、その光の中へ、瀧口入道の姿あらはれる、手に野菊數莖をもつ、昔の花やかな俤はなく、面痩せて剃りたてたる頭寒げに黒衣の萎えたるを纏ふ。無言のまゝに入り來り、緣先の桶へ花を入れ、腰掛けるともなく緣に腰を下し、暗い庭の面を視凝ゐる。）

（老僧心付き。）

老僧　や、これは御歸庵でござりましたか。

時頼　お、いま、歸つた。

老僧　して今日はどれからどれへ御出になりました。

（時頼投ぐるやうに。）

時頼　法輪の松のある邊を彷徊うてをつた……この程までは晝間からも聞えてゐた蟲の音もぱつたりと止んで何所も彼も靜かぢやの、それに一昨日の辻風に木立がみな葉を振ひおとして山々が一時に見隙けてきてその間に晩紅葉がちら／＼と淋しくみゆるばかり、山も野も一夜のうちに明瞭寒い姿になつたの。

老僧　さよでござるかの。お、さうぢや、も少と先方、これへお人が見えて横笛樣とやらのお行方が見えなうなつて……

（時頼事もなげに引取り。）

時頼　や、そりや其人達につい其處で行きあはせてみな聽いた、併しそりや今の此身の上には何事でもない、唯訪ねては來ぬというて別れた…　お、それよりは此野菊あの佛前へ供へて下され、此邊にはもはや見ぬ花、かの松蔭に二三本殘つたを御佛に手向けうとて取つてきたのぢや。

老僧　かしこまりました。

（と持佛へ花を持つて入る。）

（時頼あと一人、歩きながら。）

時頼　横笛が我を慕うて……我を慕うて……はゝ、それが今の身にとつて何ぢや。諦めて捨てた世でない、厭うて捨てた世ぢや、女ぢや。殘る念は少しもない……唯上求菩提の緣となつたる女、床しうは思はれるが戀しうはない。一度厭ひて捨てたる緣ぢや、再び結はう心はない………が、我を慕うて歎いて／＼、その餘りには命も捨てうもしれぬと彼の男は涙を押へて物語つた……わはゝゝはは、女は一時の情の爲には命も捨てう。併しそれが生

きて一生の眞實を貫く證據とはなぬら。誓うても、百度誓うても頼まれぬは女の心ぢや。女は片方の眼に夫を戀ひながら片方の眼に仇し男に思ひを運ぶ。女は悲しうて涙を流す中にも僞をいふものぢや。女の爲る仕業のすべては前よりは計られぬ、仕遂げたあとに眼に見てはじめて知るばかりぢや。今更女に何の執着、もし思ひ出す日もあれば愛しうてゞなく厭はしうてぢや……たゞさすが今の身になつても思ひ出さるゝは御母上ぢや。勤行の暇々、思ひ出さるゝはその御慈愛ぢや。世にも嬉しき眞底からの御慈愛ぢや。が、それも云うて返らぬ事、今は思うて詮もない事ぢや……それよりは此頃の我心、物慾の念漸く遠く、細りゆく大堰の水音の日毎に薄れゆくやうにて此晩秋の靜かさにも合ふ心地ぢや。唯一人茫漠たる原頭に煩はさるゝものもなく立つ心地ぢや。たゞ目前の冬枯野、さながらの我境地ぢや、唯何故に我心、この目前の冬景色、物足らぬげに眺めらるゝぞ。世念漸く失せ果てゝ功名もなく、望みもなく靜かなる我心に、久しく鳴らさぬ鉦盤の深夜に自づと微かなる音を立つるがやうに起りくる心はなんぢや。水盤を靜かに捧げ持つ手に動く心もないに自と波立つやうに起りくる念はなんぢや。……この靜かさはありながら、物答へなき靜かさぢや。深淵に石を投じて水音を聽かざるごとき靜かさぢや。物忘れしたるがやうな靜かさぢや。春の日長に假寐の夢より覺めたるがやうな靜かさぢや。物やすからぬ靜かさぢや。仙家の春に寐ね入りたる杣人の情のやうな靜かさぢや。却つて心を騒がす靜かさ、この靜かさの中になにがあるのぢや。……

（此時老僧持佛の內より出できて庭を透し見て）

老僧　お、それになにをなされてゞ……どうぞなされましたか、

時頼　いや、どうもせぬ、今それへまゐる。

（と上へあがり圍爐裏の側へ坐る。）

（老僧粗朶を燻べながら。）

老僧　毎日よう天氣の續くことでござりますの。

（時頼思ひ深げに。）

時頼　お、そして靜かなことぢやの。

老僧　さ、この靜かさもう直、終りでござりまする。

時頼　え、どうしてぢや。

老僧　やがて木枯が來て毎日の樣に荒れまする。遠くの方から音を立てゝ來る木枯が木立をひごいて行きまするとと地の中から風が起るやうに、木の葉を逆樣に吹きあげて物凄じい日ばかり續きまする。

時頼　ではこの靜かさもうほんのしばらくぢやの。

老僧　さよぢや……ほんの須時の休息でござりまする。

時頼　おゝ、やがて荒るゝ日の休息か……便りない靜かさぢやの。

（と思入。）

（此時遠砧突如とおこる。）

時頼　おゝ、あの音は……あゝ、砧ぢやの、心急しい音ぢやの。

老僧　都方に住はれた方達には慣れぬと喧しいものでござりまする。

時頼　おゝ、ありややがて來る冬を促る音ぢや。夜毎に忙しうなつてくる。……それに此頃は夜深うなると鹿が啼くのう。

（老僧はつとしたやうに。）

老僧　え、鹿が啼く？

時頼　さうぢや。

老僧　それがお耳につきまするかの。

時頼　お、これも夜毎に聲が殖えるやうぢや。

（老僧腹から押出すやうに。）

老僧　あはゝゝは、さてはもうお別れになりましたかの。

時頼　なに別れに……なぜぢや。

老僧　でもあなたはもう此所に長う御在はござりますまい。

時頼　えゝ、わしが此所に長う居ぬ？

老僧　どうもあの聲が耳に附いて來ると此所には長う御在になられませぬ……前住の方もさうでござりました。

時頼　なに前住の僧があの聲を聽いてからこゝに居なくなつたといふのか。

老僧　丁度あなたの樣に鹿の聲をきいて氣にかけてござられたが、それから後はなんとなくそは〳〵なされてお勤めも懈りがちになり、やがて春になると何所へか影をかくされました。

時頼　ふうん。

（と思入、やがて輕く。）

はゝ、で、わしもさうなるといふのか、が、心遣ひは無用ぢやわ。一旦思ひ立つたる發心、左樣なことでは心は亂さぬ。鹿のことは山近き里の習、たゞきこゆるといふ話だけぢや。

老僧　おゝ、それならばようござるが……前住の御庵主も隨分堅固な御僧でござつたが、あのやうな事になられた、……一夜、二夜は唯にも過さう、三夜、四夜と重りてはのう。始めは何とも思はぬことも、次第に心に滲みこんで離れなうなり、やがては捨てがたうなるが愛着の常ぢやでのう。……それに世を捨てはつるには未だお年齢が若いでのう。

時頼　はて得道の緣が齡によることか。八歳の龍女、當下

成佛の本文、所詮は機根によることぢや。

老僧　が、そりや御經の上でのことで遠い昔のことでござる。此嵯峨に年久しうゐて、多くの寺々の夥多の御僧達の御身の上をよう存じて居りまするが、幼だちからの御出家は、もとが御道心からでない故、御志は俗も同じこと、これには論もござりませぬが、中年からの御出家はみな御道心を發せられての上の事ゆゑ、此嵯峨へござつた始めにはその御修道の目覺しさ、いづれも眼を驚かすことでござるが、半年とたち、一年と立つと兎角鈍りがち、中には俗にも劣つた行跡をして、身を墮さるゝ方もある。この樣なのは寧そ御出家をなされぬ方がよかつたらうにと思はれまする。……先づ中年からの御出家で遂げられるは四十を餘程越えた御人で、浮世の念も薄らいでござらねばのう。

時賴　浮世の念が薄うなつて自と遂げた出家では利益も功德もあるまいよ。年老いて精根も無うなつて欠伸交りに念佛して半分は睡つてゐて何の出家、若うて遂げてこそ出家も貴いのぢや。

老僧　いかにも、それはさうでござるが、お年齡が若うての御出家は、始めは三昧でござつても中頃には緩みがちぢや。何れ、若うての御出家なら、深い譯がなうてはならぬこと、迚ものことに思ひたゝれた御發心なら、末遂げらるゝ樣、よく〱御用心が大事でござりまする。

時賴　えい、一念だに動かさうか、左樣に淺い發心ではない。

老僧　おゝ、さうもござらう、が、どうも私にはのう……では此頃の朝夕の勤行は缺さず御勤めなされてゞござるかの。

時賴　えゝ。

老僧　お止めなされて御在ではござらぬかの。

時賴　え、なんでそれを聽かれるのぢや。

老僧　最前御持佛へまゐつたとき、見ますれば柄香爐の灰がしめつて香の氣が久しう絶えてをりまする。ありやどうしたのでござります。

時賴　……

老僧　よもお止めなされたのではござりますまいが、兎角御用心が大事でござりまするぞ。

（といつて下へおり、阿伽桶へ水を汲んで歸つてきて阿伽棚へおく。）

（時賴、不意と。）

時賴　いゝや、止めたのぢや。が、この事の爲ではない、外に由來のあることぢや。

老僧　して、その由來と申しまするど……

時賴　私には今深い苦惱がある。佛陀の慈悲も如何ともし

がたき苦悩がある。が、そりや語るべきことではない。

老僧　さ、その苦悩といふが修道の妨げ、佛の道に苦悩はありませぬ……兎角に此が大事の處、よう御心をおつけなさりませ、最前の人達が申してゐたお方のこれへ訪ねてござられうもしれませねば。

時頼　はて、捨てたる女が訪ねて來たとて、浮世の女が訪ねてきたとて……浮世の女は戀しうないわ。

老僧　なに浮世の女は戀しうない、……

（と訝しさうに時頼を見つめてゐて）

もしや、もしやあなたはあの釋迦堂の壁に掲げた觀音菩薩の御影に焦れてゐてゞはござらぬかの。

（時頼も訝かしげに）

時頼　なにわしが觀音菩薩の御影に焦れてゐる？

老僧　おゝ、さうぢや、〳〵、さういへば面差も何所やら似てござる。あの折にはあの御僧はあなたより二つ三つ上の年齢ぢやつたが……さては此頃の苦悩とはそれでござつたか。

時頼　あゝいや、私はその觀音菩薩の御影とやら見たこともない。

老僧　なに見られたこともない……全くのことでござるか。

時頼　さうぢや……してその譯は又どういふことぢや。

老僧　さ、そりやもう十年ほども前の話でござつたがの、此嵯峨に一人の御僧が居つて朝夕觀音菩薩の御影を護持して堅固に暮してござつたが、何時となくその觀音菩薩の御影に戀慕しましたのぢや。……恐しいことぢや。

時頼　ほう、それからなんとなつたのぢや……

老僧　焦れて〳〵思ひの餘りに瘦せおとろへてゞござつた、そして日毎にたゞ、虚然として空を見て坐つてござつた。

時頼　うむ。

老僧　時にはあらうことか、御僧の身の、さめ〴〵と泣かれてござつた、また、何所ともなくふらめき歩かるゝ……

時頼　むゝ。

老僧　たうとう果ては心が狂はれた……

時頼　なに心が……心が狂はれた……觀音菩薩の御相にどんな思を懷いたか……心がくるはるゝまでも……むゝ。

老僧　で、何所ともなう迷ひ出ていつてしまはれたが、其のこして行かれた遺品が今釋迦堂の壁に掲つてある御相ぢや。此事はもう誰もよう知つた者はなく、その御相を誰も心に留める者もなく、わしも久しう忘れて居ましたが、ふと御言葉で思ひ出した、……が、もしもその樣な御心が起つたのなら思ひ捨てさつしやりませ、能はぬことに思ひをかけても不滿ぬ事ぢや……さつき人の噂にも

淸盛どのが不老不死の藥を求めて、天狗の魅で火の病にかゝつたとやら、淺ましいこと……

時頼　お、そりやわしもさつき道行く人の話にきいた、元來それは御病に託けた巷の雜說。なれども噂といふは人の心の鏡、誰しも思ふことが自づと寫るが噂ぢや、太政入道の御上ばかりか、人慾の限りなき上求の志、一概に諦め捨てるとばかりいふべきことか、出家遁世の上もただ諦めすつるばかりではないと、浮世のことは聽かじとする耳にも、思はず止めて歸つた……

老僧　お、その樣なこと云はれるので、私には氣遣はれますのぢや……この念ばかりはくれ／″＼も思ひ捨てさつしやりませえ。

時頼　はて、大丈夫ぢや。大丈夫ぢや。

老僧　はて……ではなにをそのやうに考へからで……

時頼　いや、なにともないことぢや／＼。

老僧　ではござるがのう、どうも……おゝ、もう／＼申しますまいわい、我が申して止めらるゝことなら申さずとて止まらりよう。また御自身に思ひ止まれぬこと、私が申したとて止められまい。さうぢや、迷うたとて、佛の道に遠ざかつて却つて近附く緣になることもある。つまりは成るやうにしか、ならぬが世ぢや。唯各々の果にあることぢや……あゝ大分晩うなつた、ではわしはもう御暇申しまする。

時頼　お、もう往かるゝか。

老僧　ではまた明日、さやうなら、御免なさりませ。

（と挨拶して奥へ入る、やがて枝折の外の薄月の中へ淋しき姿をみせて橫切り去る。）

時頼　おゝ觀音の御影にあこがれて心が狂うた……及ばぬ戀なりや、そりや棄てい、いや／＼棄てうとて棄てられぬ時は……世には棄てうとて棄てられぬものがあるわ……此庵に來たその始め、一圖に浮世厭はしさに、唯山林空寂の境慕はしく、良き所得たりとて、專念修行に身を傾け、塵緣やゝ斷じえて、心は漸く長閑に、境界の變つた歡喜に心浮かれ、驕慢を生じゐた時なら知らず、その歡喜にも漸く慣れ、彼岸はあなたに、狹霧の霽れゆく樣にも見え染めたる今となつて何故にかうたゆたふのぢや。因果を撥無し、生死を斷じ、涅槃に入る喜びはありながら、此方の岸の、まだ棄てがたい思ひがするのぢや。かの竹取のかぐや姫が、着れば思ひのなくなるといふ天の羽衣押しとゞめて、しばし此世を懷しんだにも似た心地、おゝ、衆緣斷じ盡きぬ前に現身ながら今一度……さりとて浮世の女、戀しうもない、埒もしだらもない戀に、今更に泣きみ、笑ひみ物に狂はれうか……さりとてはこの物足らなさ……此頃の我心、形なき煩、空虛に似たる

物思ひに惱まさるゝとおもつたも此物足らなさからであつた。身内に痛みありて始めて病のあつたを知るやうに、今こそ始めて明かになつて來たわ……おゝ、此物足らなさに、觀音の御影ぢやとて、描いたる像ぢやとて、現身ならぬものぢやとて圓滿美妙の御相に思ひを焦がすまいものか、戀うて心を狂はすまいか…… 空しい幻影、捉られぬ影を追ふとても、この追ふ心は現ぢやわ〳〵……

（此時遠く妻こふ鹿の聲きこゆる。）

や、ありや鹿の聲ぢやな、またきこえてきたな、はてあのやうな聲に今更慾念を動かさうか。だが、なぜ此頃はあれが耳に附くのぢや……

（鹿の聲やゝ近くなる。）

おゝまたきこゆる……一夜、二夜ならば耐へもならう、三夜、四夜ともなれば……えい、その樣なことがあらうか……

（鹿の聲いよ〳〵近く、數ふえる。）

おゝ、わしの遁世は戀を諦めすてた遁世でない、浮世の戀が厭はしさ故にすてた世ぢや。されば姿は僧形でも執着は俗の二倍、苦惱もまた二倍ぢやわ。――（鹿の聲）えい白痴た……その樣なことをいうて自らおのれの心に薪を添へをる奴があるか……（鹿の聲）えい、添へずとも自然とおのれで燃えたつわ、えい、白痴た、白痴た……

（鹿の聲一きは强くなる。）

（時頼思はず立上る。）

時頼　おゝ、なんで立つたのぢや。高まり來る情慾の高波に此身を浮されて、魂を洗はれた空洞木のやうに唯ふわふわと浮び出てしまうたか……えい坐れ〳〵。（鹿の聲）えい、また聽ゆる、その唆かすやうな鳴く音をやめろ、その音につれて胸先へ突掛けて來る情火、下におれ、下に下に、……（鹿の聲）おゝ、何故に振捨てた横笛ぢや、ありや私をまだ慕うてゐた、慕うてゐるほどはやつぱり我物ぢや、それをなぜ捨てた、なんとした我心ぢや……（鹿の聲）えい、その聲は何を我に促るんぢや、世にあつた日の、逢へぬ戀に悶えて明した夜の苦しさをまた思ひ出さするのか、えい、もう止めぬか、止めをらぬか。（一きは鋭き鹿の聲）おゝ、横笛！……なんで横笛の名を呼ぶんぢや、捨てたる女が戀しいか、……捨てた女がなんとした、捨てたいからこそ、捨てたんぢや、戀しいからこそ、戀するんぢや、さ、來い、横笛、この腕へ……（鹿の聲）えい、魔の誘ひでも構はぬは、佛でも魔でも、此身の苦しいまゝに任すんぢや。止めたくば止めい、諸天善神、何時にても止まらうといふ心はあるわ。止まる力を與へてくれ。今時頼入道は一切護持の經卷を魔に供養せうとしてゐるわ。さ、止めい、諸天善神、止めずば魔

に供養せう、さ、止めぬか〳〵、さては止めぬのぢやな。わはゝゝゝは、さ、横笛、この腕へ、……が、横笛はこれに居らぬわ……(鹿の聲)えい、もう、鳴くな、鹿ども奴、吠るな、心を、わが忍耐(がまん)の糸綱を切らして四肢五體を支離々々(ばら〳〵)にして、其聲ばかりに、この夜を滿しをる……えい、もう堪へぬ、横笛、横笛、横笛、横笛、横笛！

(と縁へゐざり出でゝ續け呼ぶ。)

(此時枝折の外にて)

聲　や、あの聲は時頼さまぢや。

と横笛笹折のこしらへ、たづねわびたる體、戸口へきかゝり、この聲をきゝつけ、驅込み來り時頼をみて縋りよる。)

横笛　お、時頼さまぢや〳〵、逢ひたかつた。

時頼　お、横笛かッ。

(と同じく掻き抱かうとしてふと横笛の窶れる姿に興覺め、出せし手を思はず退く。)

(横笛はなほも縋りよつて。)

横笛　えい、何から云はう、怨みからか、喜びからか、悲しみからか、えい、何れから先へいうても優り劣りはない、みんな〳〵身に泌むほどに知つた……えい、あなたは〳〵、おゝ、やつぱり怨みが一番先きに出まする……

(と泣く。)

(時頼やゝ冷かに。)

時頼　はて怨みなぞ聽きたうない。

横笛　えい、聽きたうなうても、わたしや云ひたい……ええ、なんでそんなにわたしの顏をみておいでなさるのぢや。

時頼　はて、何でもないわ。

横笛　えい、まゝ接穂(つぎほ)もない物の云ひやう、それに半年ぶりに逢うたわたしにその樣に默りかうで……

(この中時頼顏を反くる。)

(横笛心付き。)

横笛　えいなんで、そのやうな情(つれ)ない顏を、……

時頼　いや、情(つれ)なうてゞはない、此身となつて今更戀を語る身ではない……

横笛　いや、〳〵、〳〵、では今の先になぜわたしの名を續け呼になされたのぢや、私の姿を見てから急にその樣な情ない素振、さてはわたしの窶れた姿に急に愛相を盡したのぢやな。

時頼　なんの、その樣なこと、でもまあ其方は變つたのう……それにこの手の冷たさは……

横笛　お、此頃は始終身内が冷えて臥床(ふしど)がちとなつた、それもこれもみなあなたを思ひのあまりぢや、それを今更……えい、あんまりぢや〳〵。

時頼　はて姿貌に戀した私ではない、心にこそ戀したのぢや、たとへ姿が變つたとて心がかはる私ではない。
横笛　そりやほんとうでござりまするか。
時頼　おゝ、さうしてまあ此日頃どうして暮した。
（横笛見上げて。）
横笛　泣いてばかり居ました。
時頼　何んで。
横笛　え、なんでとはあんまりぢや。
時頼　ま、よい……が、何でぢや。
横笛　あひたうて……
時頼　お、私も逢ひたうて……
横笛　え、そりやまことか、
時頼　なんのいつはり、あらゆる女は虚いふが――
横笛、えゝ、まだそんな無理を……かうしてたづねてきたものを……
時頼　まことに、久しうて逢うたのぢや……横笛、都の人人はみな無事か。
横笛　さてはまだ御存知ないか、母御さまのお死去なされたのを……
時頼　なに母上が……たつた一人の私に眞實のあつた人……世にある眞實は親子の情ぢや。……怒るにつけ、悲しむにつけ……その親の情に反いて移ひ易い情に思を傾むけ……あゝもう去なれたか……不孝無頼の時頼が手向くる念佛、お受けもなさるまいが、南無阿彌陀佛々々々々々。
横笛　これ、母御ばかりが誠實の情でござりまするか。
時頼　そちにも誠實があるか。
横笛　まだ夫れを疑うて……あんまりぢや、〱。
（と泣き。）
なるほどこの春の時分にはあなたを思ふ心の一圖が足らなんだ。甘えたり、拗ねたりしてあなたに腹も立てさせた。が、それはこの横笛の本眞の心でなかつた。世に不足のない時につい募る我儘であつた。あなたに別れて、深草の里へ歸つてから、日に募るのはあなたに別れた悲しさと逢ひたさばかり、辛うて苦しうても一度あなたに逢ひたいとかうして來た今のわたしに、少しも浮いた心のないのは見ても分る筈ぢや。それをまたそんな情けない無理ばつかり……
（と泣伏す。）
時頼　おゝよい、わかつた〱。わしの疑ひ易い心に、かうわざ〱と訪ねてきたそちの心を疑うた、もうこれからは疑はぬ。
横笛　おゝ。
時頼　さ、これへこい……

（と横笛を掻抱き。）

お、母上は此顔を死ぬるまで憎まれたのぢや。子が可愛しかつた故。

横笛　え丶も、母御さまのことを今更に、

時頼　さうぢや、もう母がことは終ぢや。母上よさらばぢや。……これからはもうそちと二人ぢや。……お、そちは泣くか、心の信實がさながらに流れ出たやうなその涙に濡つて……

（と此時初夜の鐘なりはじむ。）

お、御堂の初夜の鐘ぢやな、諸行無常と響かば響け……轉生輪廻の上にあつてこれより後の幾春秋、そちと丶もに曉の鐘、一つ臥床に聽いて過さう。

横笛　お丶、うれしうござる。

（鐘しばらくにして鳴り止む。）

（時頼ふいと横笛を突退ける、横笛驚いてみる。）

時頼　えい、摑めば足りず、放てば足らぬ、何とした私の心ぢや……

横笛　え、

時頼　鐘鳴り止んだ後の寂寞、こんな戀では物足らぬわ。

横笛　え丶。

時頼　靜かな心に還つてくれば、また疑ひが萌してくる……

横笛　え丶。

時頼　さうぢや、先の分らぬ戀をしてまた人の世へ迷ひ出さうか。

横笛　え、それではまた私を振り捨て丶……

時頼　埒ない戀に心を惱さうよりかうしてをるが優であらうわ。……雑念動かすまじとすれば動く心か。……

横笛　ではまだ私を疑うて……

時頼　お、今の心は疑はぬが、これより後の長い歳月……

横笛　えい、またそれを云ひ出して……

時頼　さりとて今の心がかはらぬと誓はる丶か。

横笛　え、誓ひまする。

時頼　はて誓うたとても女の心、その時とならねば分らぬ。

横笛　では、まあどうしたらい丶のでござる……

時頼　はて、どうしやうもないわ……もう、さらばぢや。

横笛　え、ま、待つて……えい、あなたはなんといふ情しらずぢや、やつとの思ひで逢ひにきた私に過もなんにもないに、またお捨てなされてしまふ積か。

時頼　さ、それほどな情け知らず、捨てたがよからう……

横笛　捨てたがよいとてすぐ捨てらる丶戀か、いやぢや、別れるのは……

時頼　は丶、すぐ捨てずともやがては捨てう、同じ事ぢや。

横笛　い丶や、捨てぬ……

時頼　では、私がもう捨てたわ……さらばぢや。

横笛　これまつて……おゝ、さてはかう一圖に振捨つるはやつぱり苦勞の爲に面變りしたわたしの顔に愛想を盡かしたのぢやな。

時頼　えい、容貌に戀するわしではない、頼まれぬ女心を捨つるのぢや。……

横笛　いや／＼さうでない、あなたの素振にそれが見える……

時頼　はて、さうならばそれとせい。……いづれにしてももう逢はぬぞ。

（と縋る横笛を振拂ひ、つか／＼と上手の持佛へ入り内より障子を鎖す、横笛追ひゆかんとして轉びそのまゝ泣伏す。）

横笛　えい、ではどうでも此儘わたしを捨てるのか、もうよい、さうまでに情ない人に殘る念はない。……が、もう一度顔見せい……それも長うとはいはぬ、たゞこのまゝに別れては……これもう一度顔みせて下され……いやいや諦めた人の顔もう見たうもない、……いや／＼恨がいひたいのぢや、恨が／＼／＼、えい、何うでももう一目顔みすることもいやぢやと思うてか、おゝ、／＼／＼、……いや／＼泣かぬ／＼、嘆いてかなふことならば、この日頃の嘆きで足りてある。よい／＼もう愚痴ぢや。何にもいはぬ、迚も生きてはゐない身ぢや。思うた人に捨てられて苦しい辛いばかりの世に生きてゐて何の樂み、月花の樂みもあなたがあつてこそぢや。かう死れがしにされて死かねぬ女ぢやない。……女に眞實があるかないか、眞實も恨みも女心の狹さも今みな見する、死んでみな見する。……おゝ、死ぬるにしてもあんまり情なさぢや、情なさ故に死ぬる身ぢやが、あんまり一向な情なさに心が殘つて死兼ぬる。というてから情なうされても一刻も生きてはゐられぬ。……おゝわたしやこりや恨みで死ぬるのぢやない。最期の際までわたしやあなたを恨んではゐぬ。あなたが戀しい、戀しうて死ぬるのぢや／＼もうさらばぢや。これ時頼様、もうさらばぢや、もう……おゝ、別れの言葉もかけてはくだされぬ……えい、どうしてさうまでこの身一つを辛いものにするのぢや。

（と泣伏す、こゝへどや／＼と最前の横笛の家の者共入來り、横笛を見附くる。）

男　お、これにお在なされた、やつと御見つけ申した、ま、どうなされたので……親御様達の御心配は一通りならぬこと……それでも御目に懸れてまづ安心、……や、齋藤様は御在庵で、齋藤様、齋藤様々々、お、さてはお留守か、さ一先づこゝは御かへりを……なんでそのや

うにお泣きなされて……これ手助けして御起し申してくれ……親御様達は只今ごろは嘸御心配、さ、このまゝに直御歸りを……これへ重ねて御出なさるなら、私共が必ず御作をいたしますれば……さ、どうなされて……齋藤様とはかう御住居さへ知れますればまた何時なりと御逢はれになれまする……さ、さ、今日は一先づ御歸りを、え、ま、御かへりなさりませ……

（と泣き入る横笛を介抱して一同やつと枝折の外へ出てゆく。）

（この少し前より宵月隱れ、あたりは闇となり、空高く過ぎる風の音きこえはじめる。）

（時頼再び持佛のうちより影のごとくにあらはる。）

（鹿の聲また遠く風に交つて二聲三聲きこゆる。）

時頼　おゝ、また鹿の音がきこゆるな、が、もう慾念は頓に消えたわ。あの音をきくと思ひ浮んだ横笛の幻影はもう消えたわ。おゝ、といつてわが此物足らぬ情の渇きをなんとする、熱天の下の恒河の熱砂、渇きあへいで口を開いて注がぬ雨を待つやうなこの心をなんとする。……おゝ、あの觀音菩薩を慕うて心狂うた僧の心は、また我心ぢや。得らるゝほどの情には、心傾かず、得られぬ情に思を惱ます、何とした心ぢや、さりとてこの心を何ともしがたいわ。かの僧とて描いたる像に心を狂はするには、深い惱がなからうか。……おゝ、どのやうな御影であらうか、……容顏たとしへなく、この世の者とも思はれず、一目みて思はずも跪き、身をも世をも忘らするやうな御姿か……おゝ、その樣な御影には、このわしとても心を狂はすまいものか。……えい、煩惱は菩提、菩提は煩惱なりや、菩提もまた輪廻のうちぢや。その樣なものを得てなんとなる。よしまた、不退轉の果を成じ得たりとて煩惱の影もさゝぬ菩提がなんとなる。寶玉を瓦礫とするも、瓦礫を寶玉とするも唯一心ぢや。五百生轉生懊惱するとも、それを欲する心には不退轉の善果にまさるわ。刀刃に壞られず、水に溺れぬ不壞の境界も、刃や、水を厭へばこそぢや。よし水に溺るゝとも刀刃に壞らるるとも、此情の渇きを止むるを得ば足るとおもふ心にはなんぢや。……おゝ、といつて此情の滿足を何所へ向つて求むるのぢや。おゝ、辛や、苦しや……

（と打沈む。）

（こゝへ、幕開きの百姓男、松火を振り照らして枝折戸より驅込み來て）

百姓　お、御庵主さま、大變ぢや、〳〵。

（時頼顏をあげ）

時頼　なに大變ぢや。

百姓　おゝ、大變ぢやわ。さつきこれへ來られた横笛樣が

死なつしやれた。

時頼　え、横笛が死んだ……

百姓　おゝ、さうぢや、最前こゝから迎への人達につれられて往かれたが、あの千鳥が淵のそばへ通り掛ると、捆へられてた手を振放して、ほいと深みへ飛込まれた……それから迎への人達が大騒ぎをしてゐるところへ、通掛つたのがわしぢや。早速言付かつて此方へ知らせに來たのぢや。さ、直と一緒に往つて下され。

時頼　なにわしが一緒に、……なんでぢや。

百姓　でも、横笛樣か死なつしやれた。

時頼　えい、横笛が死んだのが、わしに取つてなんぢや。わしの今の此心にはなんでもないわ。

百姓　や、お前樣、こりや氣が狂はしやれたな。これ、心を確にさつしやれ。

時頼　おゝ、いつそ氣が狂うてしまへ、おゝ、堪へられぬわ。

（とうめき泣く。）

百姓　お、尤もぢや〳〵。が、嘆かつしやれてもかへられぬことぢや。さ、急いで往つて回向してやらしやれ。

時頼　えい、横笛のことで泣かうか、我涙はそのやうなことでは翻れぬ。……が、この淋しさが、……お、この苦しさが……

（ふら〳〵と歩き出す。）

（百姓驚きとめて、）

百姓　あ、これ何所へ。

時頼　え、何所へ、お、何方へゆかうところもない。

（とふら〳〵と迷ひ出ろ、百姓呆れ、見送ろ風の聲に交つて鹿の聲。）

――幕――

名月八幡祭（三幕六場）

序　幕

深川八幡二軒茶屋松本

場面や丶上手へよせて、下手へ折廻しの小座敷、續いてや丶奥深に母屋の一部を見せ、三尺の縄暖簾の出入あり。供待なぞある心、續いて下手ずつと前へ寄せて梅軒門。往還より庭續きにすぐ座敷へ通れる心。平舞臺は庭、植木、燈籠などよろしく。

小座敷の上に松本の女中、甲、乙、團扇づかひをしながら、縁先に腰をかけてゐる鳶の者、い、ろ、は、と話の體。

八幡宮の神樂の鳴物。

鳶い　やつと軒先をすつかり打つてしまつた。

鳶ろ　何しろ堀まはりから裏口まですつかり打つと大分な軒數、一寸一仕事だ。

女中甲　おや、さうかえ、今年は大相早いのだねえ。

女中乙　いつもは御祭の二三日前に打ちにくるぢやあないか。

鳶は　なにの、今年は何しろ、十何年目かの大祭で、何所もかも大張込みで、仕事が立込んでやりきれねえ。今から手廻しを附けておかねえと切迫際で大まごつきだ。

女中甲　成程ねえ、今年は大相よく出來るといふことで、私達までも何だか、物が手に附かないよ。

女中乙　一體どうしてこんなに景氣が立つたんだらうねえ。

鳶い　其處が人の氣といふもんだ。誰いふとなく氣が揃つて滅法よく出來ることになつたんだ。

鳶ろ　何しろ江戸中の評判で、もう讀賣なぞが祭番附を造へて賣つて歩いてゐるとよ。

鳶は　かうなつちやあ、いやでも立派にしにやあならねえ。どうだ、ぼつ／＼出掛けようか。

鳶い　さうよ。ぢやあ御内儀さんによろしく。

女中甲　まあい丶ぢやあないか。あつちで一杯のんでおいでな。

鳶い　何、さうしちやあゐられねえ。

鳶ろ　また今度まで御預けだ。

鳶は　さあ出掛けようぜ。

（と鳶の者三人揃ぜりふにて梅軒門より出でゆく。）

女中甲　お八重さん、今日は久し振りで、珍しく麹町の藤

岡の殿様が、美代吉さんをお連れなすつてお見えなされたねえ、ほんとにあの美代吉さんは何時みてもすつきりとしたいゝ藝者衆だねえ。

女中乙　ほんとに、あの美代吉さんも、惡足の、三さんさへ附いてゐなきあ、申分のないいゝ藝者衆だが、一つの疵はあの三さんだねえ。

女中甲　およしよ。（と下手の母屋を指さし）あすこに藤岡樣の御供さんが飲んでゐるよ。

女中乙　あ、さうだねえ。迂濶したことは云へないねえ。

（こゝへ梅軒門より船頭三次、覗きこみ、女中をみて入つてくる。）

三次　おゝ、姉さん。しばらく。

女中甲　おや、おまへは三さん。

女中乙　今噂をしてゐた所。

三次　大方よくはいやあしめえ。

女中甲　何の、久しく見えないといつてゐたのさ。

三次　そりあ船頭は八幡へは無沙汰になりがちよ。時に姉さん、こつちに美代吉さんが來てゐるだらう。

（女中達顏見合せて默つてゐる。）

何も隱すことはありあしねえ。今尾花屋できいたら八幡だといふことだから、追掛けてきた。一寸呼んでくれねえか。

女中甲　でも今御座敷ぢやあないか。

三次　そりあ分つてる。だからお前に頼むのだ。そんなことをいはずと一寸の間だ。手間は取らせねえ。呼んでおくれよ。

女中甲　仕樣がないねえ。

（と乙と顏見合せて二人立つ。あと三次煙草盆を引よせ、たばこを呑んでゐる。蔭にて。）

美代吉　ありがたう。ぢあ一寸頼みますよ。

（と聲して襖をあけて美代吉出の扮裝にて出て三次をみて。）

おゝ三さん、おめえ、出先へ困るぢやあないかねえ。

（と坐る。）

三次　何の、己だつて來たかあねえが、今朝次郎の野郎に逢つて、見つともねえ、往來中で、催促されて、いろいろ譯は話しても、あいつにあ、少し義理の惡いことをしてあるものだから、喚りたつてどうしても放しやあからねえ。何うしても、こいつは遣らざあならなくなつて、後までと約束してきたのだ。こいつは無くちやあ、己も面の立たねえ金だ。大したことぢやねえ。三兩ばかりだ。一寸用立つてくんねえ。

美代吉　へん、極りをいつてゐるよ。一昨日持つてつた五兩はどうしたのだえ。

三次　おゝ、ありあ、さう〳〵姉はんにばかりも苦勞を掛けたくねえから、屋形でいゝのが出來るときいたから、一番うけて、偶にあ、姉さんに土産を持つていかうともつて……
美代吉　よしてもおくれ。そんな嬉しがらせはきゝたくもないよ。それを取られてきたといふのかい。
三次　うむ、惡い時には惡いもので、手振編笠よ。
美代吉　ほんとに呆れもしないねえ、おい、三さん、祭はそこへ來るといふし、物前は近くなるし、わたしも人並よりあ、派手な質、押せ〳〵にしてきた無理が、こゝで一度にきて、座敷へは出てゐるが、勤めてゐる客はねえのだよ。そこへ顔せえ見りあ無心々々とお前も大概に性を附けねえかよ。
三次　さういはれると、面目ねえが、己もお前にもう無心をいふめえと、一資本造えようとした所が、今いふ通り、遣り損ひ、其處へ丁度間がわるく、避けてゐた次郎の野郎にばつたりと仲町の往來で打衝つてしまひ、何うにもかうにも仕樣がなく、それで姉はんの所へ持こんできた譯だ、本999にもう今度限り、一つ工面をしてくんねえ。
美代吉　でも私あ、出先のこと、何も持つちやあいやしないよ。
三次　だから一寸御客に借りてくれねえか。今日來てゐるのは、例の麹町の殿樣だつてこつちやあねえか。
美代吉　馬鹿あおいひな、そんな無心が殿樣へいへるものかえ。
三次　ぢやあこゝの御内儀さんに……
美代吉　猶のこと、そんな極まりの惡いことあ出來ないよ。
三次　ぢやあ、何しても借してくれねえといふのか。
美代吉　さうさ、今日はまあ出來ないよ。
三次　さうか。ぢやあいゝ。此頃聞きやあお前はあの近所まはりの縮屋を情夫にしてゐるといふことだが、それぢやあ本999だつたのだな。
美代吉　何をいふのだい。あの新助さんが何うかしたといふのかい。
三次　此頃お前の内へ一寸々々出入りをするといふ事だ。
美代吉　何だな。あれもお前の爲ぢやあねえか。大概にしな。
三次　なに、己の爲だつて？
美代吉　さうさ、あの人にもござ〳〵で二十兩ばかり借りてしまつた。滿更やつてくるものを帝なくは出來ねえぢやあないか。其外さつと積つて二百兩、この祭りと物前の入目をいれて百兩ばかり、こゝに三百兩ばかり無くつちやあ、何うにもならない羽目になつてゐるのだよ。それを何だい。呑氣な顔をして持たしてやりあ、取られて

しまひ、また取られたもねえものだ。あたしも打出の小槌はもつちやあゐねえよ。いゝ加減にするがいゝや。

三次　濟まねえ〳〵。全くおれが重々惡い。お前のそんな苦勞のある處へ、こんなことをいつてきた上、厭味まで並べたは惡かつた。姉はん、堪忍してくんねえ。……だが、今度の金ばかりは全く義理のわるい金だ。どうか、我慢して一つ造らへておくんねえ。ね、姉はん。

美代吉　知らないよ。

三次　そんなことをいはねえで、ねえ姉はん、助けるとおもつて……（と美代吉のかほをみて、怒つてゐるので間がわるく）え、へゝゝゝへ。

美代吉　何だねえ、差賣みたいな笑ひ方をおしでないよ。

三次　でも賣れるものなら、差でも賣つてみたい位だよ。

美代吉（仕方なく笑つて）馬鹿におしでないよ。

三次　あはゝゝは。ほんとに姉はん、一つ頼むよ。ほんとに今度だけだ。

美代吉　仕様がないねえ。（と後さしの簪を取つて渡し）ぢやあ、これでも持つておいでよ。

三次（受取つて）やあ、こりや有難い。いつも伊勢屋で五兩貸す簪だ。

美代吉　えゝ、人聞きの惡いことをおいひでないよ。
（此時母屋の方でごた〳〵する物音。「いやだ〳〵了見ならねえ。まあお靜かになすつて下さいまし」なぞいふ聲きこゆる。）
おや、何だか、あつちの方が騒々しいよ。こんな所をみられるのも氣障だから、早くお出よ。

三次　おゝ、ぢやあ姉はん、また後に、どうも濟まなかつた。
（と捨ぜりふよろしく梅軒門の外へ出て行く。こゝへ愈々下手騒がしく、縄暖簾の口より藤岡の仲間伍助醉つて若い者二人に止められながら出る。）

伍助　いやだ〳〵。了見ならねえ。先刻から忍耐をしてゐたが、もう了見ならねえ。えゝ、放さねえか。

若い者　まあ御靜かになすつて下さいまし。
（とよろしく止める。伍助振放して美代吉をみて。）

伍助　えゝ、あんまり馬鹿にしやあがるな。薄々おれも聽いては居たが、殿様に呼ばれて來てゐながら、その出先でまで出合をしやあがるとは餘り殿様を盲目にしやあがる。おれも一季半季の中間ぢやあねえ。子供の時分から御知行所から來てお世話になつて、その上お情けのありあまる殿様にこんな恥をかゝされちやあ了見ならねえ。さ、殿様の所へしよ引いて行つて存分におさせ申すのだ。失しやがれ。
（とまた振放して立掛る。一同止めること。美代吉ぐつと癪に障へた體にて。）

美代吉　なんだえ。奴さん、お情のありあまる殿様だとえ、そりあ年中紺看板一枚で草履を摑んでゐる奴さんには、少しの情も有難からうが、わたしには殿様ばかりが御客ぢやない。仲町藝者は少つとやそつとの金目をみせられたつて、ころ／＼嬉しがるやうなそんな安いのぢやあないのだよ。

伍助　えゝ、此奴勿體ねえことを吐しやあがる。殿様までもねえ。もうおれが了見ならねえ。

（と立騒ぐ。この時襖をあけて藤岡慶十郎大身の旗本のこしらへ。松本女房、おつた、幇間壽鶴、藝者おしめ従て出ると。）

藤岡　これ／＼伍助、何を立騒ぐのだ。

（と落着いた體。）

伍助　おゝ、殿様、だから平常から出過ぎたことながら申上げたのはこゝのことでござります。たゞニコ／＼なさつて捨てておけ／＼と仰しやつて到頭こんな大恥をおかきなすつた。この奴は口惜くつて口惜くつてなりやあしねえ。

藤岡　これ／＼何をいふ。何所でおれが大恥かいた。左様なことは迂濶にいふべき言葉でないぞ。遊所場で立騒がれてはそれこそ主人の恥、貴様も昨日今日かういふ場所の供に立つた譯でもあるまい。控へぬか。

伍助　へい。

藤岡　兎角そちの酒癖の悪いのには閉口だぞ。往け／＼。

（と和かく叱る。これにて伍助是非なくぶつ／＼云ひながら若い者に連れられて暖簾口へ入る。あと藤岡壽鶴をみて。）

これ、壽鶴、おれは美代に少し話がある。差しもちと氣が悪いから、お内儀にだけこれへ殘つて聽役になつて貰はう。手前はおしめを連れて少し脱してくれ。

壽鶴　へい、よろしうございます。それぢやあ、おしめさん。

おしめ　あい、ではあちらで御待申して居ませう。

（と壽鶴とおしめ立つ、あと。）

藤岡　これ美代、何でそんなにすくんでゐるのだ。これへこい。

美代吉　殿様、私は面目なくつてお合せ申す顔もありません。

（と俯むく。藤岡みて微笑して。）

藤岡　これ、手前は後ざしの簪をどうしたのだ。

美代吉　えつ。

（と思はず、身を起して頭へ手をやる。）

藤岡　あはゝは、手前も恨みだぞ。何故頭のものなぞ渡してやるのだ。その手間でなぜおれに無心をいはぬ。おれ

が世話してゐるといふ藝者が、頭の物も無くしてゐては餘り世話甲斐がないやうだ。おれは屋敷もので、町人のやうに金目は立たぬが、五兩、三兩の無心に事はかゝせぬぞ。(と紙入を出して員數を改め)さあ、こゝに五兩ある。これを御内儀、美代にやつてくれ。

おつた　まあ、殿樣の大樣なお捌きで、どうなることかと思つた事が丸く納まつてこんな嬉しいことはございませぬ。これ美代吉さん、私も知らないことゝは云ひながら、座敷に出てゐる藝者衆を内所で、情夫に逢せては事面倒になつた時、云譯が立たないよ。それを有難い殿樣の思召しで、無事に濟んだはなんぼうか、御禮を申さにやならぬ所、ましてやお前はその本人、餘つ程御恩に着にやあ濟まないよ。

美代吉　お内儀さん、お前にも濟みません。どうか堪忍して下さい。

おつた　さあ、こゝへ御金を戴いたから、よく御禮を申しておくれよ。

美代吉　ほんとに穴でもありあ、入りたい。今日の御恩は忘れません。

藤岡　あは、御恩もなにもありはせぬ。唯おれもかうして氣晴しにくるは内所のことだ。お互ひだ。餘りぱつ〳〵と爲てくれるな。自然話が大仰になるとおれもさすがに世間の手前、この深川へ足踏がならなくなる。さうすればおれも慰みが無くなる譯だ。よいか。分つたか。

美代吉　もうこれからは御心配はかけません。三次とは立派に切れてみせます。

藤岡　これ〳〵なにも切れろといひはせぬ。意氣を命の深川藝者、半纏着を好くは通常だ。だがあの三次はよせよ。あゝいふのは一つ間違ふと末は刄物三昧だ。手前もこれから老先の長い身、氣を附けろよ。話はこれ丈けだ。

(と立ち)

美代と二人座敷へかへるもばつが悪い。己は一足先へゆく。はて送らずともよい。

(と襖を明けて入る。おつた襖際まで送つて歸り、)

おつた　これ、美代吉さん、お前ほんとにどうしたものだえ。かういふ羽目になつては、苦がい口の一つも利く所だが、お前もこゝの家とは長い馴染、私は何にもいはないよ。だがあの三さんも出先へ無心にくる樣ぢやあ、お前の人氣にも障る道理、こゝらが切上げ時だらうよ。

美代吉　あい、私もそうはおもつてゐるが拙いことも出來ないので。それで困つてゐますのさ。

おつた　成程それもそうだらうが、こゝらで規模を立てないと、お前、あの藤岡の殿樣の思召に濟まないよ。そんなことの分らぬお前でもないのだから、よく〳〵考へて

みておくれよ。
美代吉　あい、ありがたう。其中きつとどうにかしますよ。
おつた　まあ、さう話しが分つてくれゝば私も嬉しいよ。
　ぢやあお前、御座敷へ行つたら何うだえ。
美代吉　さあお内儀さん、一寸あたしも極りが悪く、座敷
　へすぐに行き悋いから、少しこゝへおいて下さい。
おつた　あゝ、それもそうだねえ、それぢやあ私が殿樣の
　前はよく申上げておくよ。
　（と立つ。）
美代吉　ぢやあお内儀さん、濟みませんが、頼みますよ。
おつた　あい。
　（と襖をあけて入る。あと美代吉思案の體、こゝへ以
　前の船頭三次驅けつけてきた心にて急いで梅軒門より
　入り來り、すぐ美代吉を見付けて。）
三次　おゝ姉はん、お前、其處にゐたか。今、松本で美代
　吉が間違ひを起して打たれてゐるときいたから、その足
　ですぐ飛んで來たが、それぢやあ、何でもなかつたのか。
　何のことだ。
美代吉　それでもお前、實があるねえ。
三次　馬鹿にするねえ。一體全體どうしたのだ。
美代吉　實はお前の一件が藤岡さんの前で暴露(ばれ)て眞綿で首
　のやんはりと、今油をとられた所さ。さすがの私も極り
　が悪かつたよ。
三次　ふむ。それぢやあ、お前はそれで思案が變つたか。
美代吉　馬鹿におしでないよ。私あどういふものか、御轉
　婆で、お前のやうな人と馬が合ふとみえるよ。（と一寸奥
　の方をみて）あんなことは百も承知だ。通がつたつて底
　に色氣をもつてゐるのだから、却つて欺しいゝよ。
　（と笑ひ。）
おゝ、三さん、わたしも今極りが悪いから抜けて歸らう
　とした所、（とふと最前の五兩の金を見て取上げ）この物
　前に五兩、十兩有つても何の足しにもならない。……丁
　度いゝ、向ふ地の例の所で一杯やらう。
三次　そいつは旨え所へ來合せたな。
美代吉　それぢあ、私はこれから家へゆき、一寸着替へて
　舟でいかうから、お前さきへいつて待つてゝおくれよ。
三次　おゝ、そうか、それぢやあ、己は永代を廻つて先へ
　行つて待つてゐるぜ。飛んだお染久松だ。
美代吉　えゝ、お洒落でないよ。
　（と捨ぜりふにて美代吉は襖へ、三次は梅軒門へ別れ
　て入る。あと別の襖を開け、おつた出て。）
おつた　まあ、ほんとに呆れたものだねえ。濟まないとい
　ふ口の下からあれだもの、私でさへもこの通り、お客を
　だますに不思議はないねえ。

（こゝへ幇間壽鶴出る。）

壽鶴　もし、おかみさん。

おつた　おや、壽鶴さん、殿様はもうお立ちかえ。

壽鶴　今裏から舟でお立ちなすつたから、御送り申した所さ。

おつた　おや、御挨拶をし損ねたねえ。

壽鶴　もしおかみさん、ほんとに呆れたものだねえ。あんな結構な旦那を袖にして粋がつてるとは世は末だねえ。

おつた　おや、お前も今のをきいてゐたのかえ。

壽鶴　あいさ。併し美代吉さんも、今が色氣の眞つ盛り、一寸後生氣は出なからうねえ。

おつた　だが、あの子もあの氣ぢやあ、末が案じられるねえ。

壽鶴　全くあの深切にほだされなくつちやあ、仲町藝者の張もねえ。あゝ江戸は末だな。

おつた　ほゝ、相變らず、お株をいつてるよ。

壽鶴　なに今日のは眞劍だ。

（この體、道具廻る。）

濱、魚惣裏座敷

川面に向いた裏座敷、平舞臺は川、舟の往來あり。仲町より新地へ鼻を廻つて鐵砲洲へ出る通路。座敷には祭の支度と見えて金屏風を片よせ、亭主の魚惣、六十位、大あぐらで酒を飲んでゐる。大丸の若い者、祭の衣裳を屆けにきてゐる。女房お竹傍で酌をしてゐる。裏座敷、吹拂ひ、伊豫簾、風鈴なぞ。

魚惣疊紙を開けて衣裳をみて。

魚惣　うむ、よく出來た〳〵。この上りはさすが大丸だな。

若い者　へい、京へ染に廻はさせました。

魚惣　そうか、そいつは豪勢だ。どうだ、見ねえ。

お竹　ほんとに眼が覺めるやうだねえ。

魚惣　うむ、うむ、若え奴等はどうした。皆こゝへ來て見ろといへよ。

お竹　皆は今夕河岸を片付けて湯にいつたよ。

魚惣　えゝ、氣の利かねえ奴等だ。一人位殘つてゐりあいいに。極りで直ぐに飛び出しやあがらあ。ちつとも落着かねえ奴等だ。

お竹　まあ、お前さん、そんなにいつたつて仕方がない。湯から歸つたつて見られらあね。

魚惣　えゝ、仕樣のねえ奴等だ。おゝ、大丸の若い衆まあ一杯のみねえ。

若い者　へい、私は不調法で。

魚惣　そうか、お竹、大丸の若い衆に祝儀をやつてくれ。

お竹　あい。

（と金包をこしらへる。）

若い者　いえ、手前の店ではそういふものは一切戴いてまゐつては濟まないことになつて居りますので……

魚惣　えゝ、何だな。身祝ひだ。野暮をいはずに持つててくれ。

若い者　へい、では頂戴いたしまする。有難う存じまする。

（とよろしく大丸の若い者は暇乞して歸る。）

おいお竹、おめえ、蚊遣りを焚いてくれ。もうそろ〳〵出てきやあがつた。

お竹　あい。

（と臺所へ立つ。魚惣一人にこ〳〵して團扇片手に衣裳を弄つてみてゐる。前面の川へ客を送つた歸り舟の船頭、舟を漕いで出る。）

船頭　やあ親方、大層な仕度だな。金屛風は大張込みだな。

魚惣　（にこ〳〵して）そうよ。祭が近えからな。

船頭　そうか。おいらはまた逆さに立てる支度かとおもつた。

魚惣　（怒つて）この野郎、ふざけるな。この鹿の子の七枚重ねが見えねえか。

船頭　ふむ、おいらはまた掛無垢かとおもつたよ。

魚惣　（立上つて地團太踏み）えゝこの野郎、とんでもねえことをいつてけちを附けやあがる。やい、鹽を持つてこい〳〵この野郎、待ちやあがれ。

船頭　あはゝゝは。

（と船頭揶揄つて逃げてゆく。お竹、蚊いぶしを持つて出て。）

お竹　まあ何をそんなに怒鳴つてゐるの。

魚惣　なにおれが身祝ひだと喜んでゐる所へけちを附けて行きやあがつた。

お竹　だれが。

魚惣　あの長吉の野郎がよ。

お竹　なんだねえ。お前さんもあんな者のいふことを取上るといふことはないよ。第一相手になつて聞くから惡いよ。

魚惣　（獨言のやうに）えゝ、逆さに立てるのだの、掛無垢だの、碌なことをいやあがらねえ。えゝ延喜でもねえ。

（と膳へ歸つて盃を取る。途端に外面の方にて尺八の聲。）

えゝ、唯さへ氣が鬱ぐ所へ、虚無僧なぞ、來やあがつて……日暮方に忌になつてしまはあ。

お竹　何だねえ。虚無僧がくるに不思議はないやね。そう怒つたつて仕方がないよ。

魚惣　えゝ、何でもいゝから、早く遣つて行かしてしまへ。

お竹　あいよ。

(と立つ。なほ尺八の聲。)

魚惣　えゝ、まだ、やらねえのか。

(此時尺八の聲、絕えて。)

新助　御免下さいまし

(といふ聲する。)

魚惣　誰だ〳〵。そんな無氣味な聲を出して、吃驚させやあがる。

新助　はい、縮屋でござります。毎度伺ひます新助でござります。

お竹　あら新助さんかえ、何だねえ、遠慮しないでお上りな。

新助　へい、では御免を蒙ります。

(とお竹、先きに新助、葭戸をあけて出る。)

魚惣　おゝ、誰かとおもつたら、お前、新助さんだな。

(新助、荷を片よせて。)

新助　中々殘暑が酷しうございますが、御變りもございませんで……(と四邊をみて)おゝ、これは御祭りの御支度で、もう全然出來ましたな。大層御美事なことで……

魚惣　おゝ(とにこ〳〵して杯をさし)まあ見てくれ。今年は丁度おれも本卦返りで久し振りで祭りがよく出來るといふことだから、それへ持込んで此奴を着て一つ若返らうといふのだ。

お竹　それで夫ぢや無中なのだよ。

新助　それは御目出度いことでござります。

魚惣　そうしてお前もう歸るのか。

新助　へい、幸ひと方々樣で、可愛がつて戴きますので、荷も荒増し片付きましたので、明日は立たうと存じまする。から晩くなりまして上つて相濟みませんが、一寸御暇乞ひに上りました。

魚惣　そうか、ではもう明日歸るのか。お前は何時も祭前に歸るやうだが、今年は祭がよく出來て近年にねえ大祭だそうで、江戸中でさへ待つてる位、又一寸見られねえ祭だ。國への土産に一つ、見て行つたらよからう。

新助　へい、有難うは存じますが、一日でも止まりましては旅籠が勿體なうござります。

魚惣　なにもそう儲けるばかりが能ではなからう。少しは遊んでゐてもよからう。

新助　どういたしまして、迚もそんな儲けはござりませぬ。

魚惣　旨くいふぜ。甲州や越後の商人は年分にすりあ、どの位ゐ江戸の金を持つて行くか分りあしねえ。

新助　これは飛んだ事を仰ります。……時におかみ樣、何時ぞや、御覽に入れました口を一二反置いてまゐつて宜しうございますか。

お竹　あの値段で置いて行くといふのかえ。

新助　へい、丸で元價でございますが、此方樣の事故、働らいて置いてまゐります。

お竹　あの價段でいゝといふのなら二反ばかり置いておいきな。

新助　へい、有難うございます。

（と矢立と小さな帳面を出して付ける事よろしく。）

魚惣　なにが元價か分りあしねえ、新助さん、お前はほんとに商ひ上手だ。

新助　（帳面をつけながら）いえ本統でございます。歸りの荷を少しでも輕くしてまゐりたい計りでございます。

魚惣　あは、暇乞に來たといつて何時か商へ持ちかける所は田舍の人は油斷がならねえ。江戸つ子は甘がられる筈だ。

新助　御冗談を仰いまし。お江戸の御蔭で糊口を立てゝ居ります私共、御江戸の御方は氏神でございます。

魚惣　あは、途方もねえ事をいはあ。

お竹　だが新助さんは感心だよ。何をいはれても怒らない。越後の人は辛抱強いといふことだが、成程その辛抱がなくつちやあ、いゝ商人にはなれないねえ。

新助　へい、有難う存じます。……（と形を改めて）これは御忙しい時分に伺ひまして御邪魔をいたしました。又來年は早々に伺ひます。何うぞ相變らずお願ひ申します。

お竹　おや、お前もうお歸りかえ。まあいゝぢやあないか。

新助　いえ、そうしては居られませぬ。勝手がましうござりますが、これでお暇申します。

お竹　そうして今の勘定は。

新助　へい、來年でよろしうござります。

お竹　それでもお前、來年まで。

新助　いえ、それが私共の定法でございます。

お竹　さうかえ。お粗相だつたねえ。

新助　では、旦那樣、ご免下さいまし。

（と立掛ける。魚惣忙てゝ呼止め。）

魚惣　おい、待ちねえ〳〵。いくら金儲けが一心でも、そう歸りを急ぐにも當らねえ。此大祭を前にして何も急いで歸るにも當るめえ。是非みて行くがいゝ。

新助　（當惑したやうに）へい、國に一人の母樣が待つて居りますから……

魚惣　なんのお袋が待つてゐたからとて、五、十日遲れたとて何うなるものか。この祭りを見ねえで行く奴かあるものか。

新助　へい。

お竹　ほんとうだよ。新助さん、今度の祭は大變な景氣で、花車ばかりも二十幾番出るし、この町内のは龍神の花車で、龍宮の行列が出て、大きな蛤の中から、雀踊が大勢

出る趣向だそうだよ。それに仲町藝者が助に出て伊勢音頭で出るそうだよ。

新助　へえ、仲町の藝者衆がみな伊勢音頭で出ますのでございますか。……それは美事なことでございませう。

お竹　だから、お前も見ていつたら、いゝぢやあないか。

新助　へい。（といつて思ひ返したやうに）有難うは存じますが、何だか急に歸りたいやうな氣がいたしまして、それで思ひ立つて急に歸ることにいたしました。實は此間中から死んだ親父を夢にみますので、若しや國の方に變でもないかと、それで心に掛つてなりませぬ。

魚惣　ふむ、それでお前國へ便りをしたか。

新助　へい、昨日、幸ひと此間國から出てきた近所の人にあひましたら別に變ることもない樣子でございます。

魚惣　それ見ねえ、何でもありあしねえ。おれも今年は本卦返り、この衣裳を着た所もみて貰ひてえ。第一この祭をあとにして歸られちやあ、取るに足らねえ祭の樣に思はれていゝ氣持はしやしねえ。もう一そおれが頼まあ、是非見ていつてくんな。旅籠位おれが達引かあ。おゝ、それよりも今日から己の家に居るがいゝ。狹え家だが、二人や三人ゐる場席はあらあ。

新助　へい。

魚惣　へいぢやあねえ。商人は少しは愛嬌を持つものだ。まあ付合ひだとおもつておれの家にゐてくんな。

（新助當惑した體、お竹見兼ねて。）

お竹　もしお前さん、そんなに云つたつて新助さんも都合があらあね。

魚惣　えゝ默つてゐろ、この祭を後にかへられちやあ、江戸の恥だ。是非ともみていつて貰はなくちやならねえ。

お竹　お前、そんな無理をいつたつて。

魚惣　えゝ、餘計なことをいやあがるな。

お竹　だつてお前、ひとりでいくら極めたつて。……

魚惣　えゝこの阿魔め、まだ口答へをしやあがるか。

（と立ちかゝる。新助忙てゝ止めて。）

新助　あゝもし、お待ち下さいまし。夫程までに仰しやつて下さいますれば、御祭まで……

魚惣　うむ、お前、居てくれるか。そりやいゝ。

新助　へい。……それでは立歸りまして國へかへる仲間に手紙を持たせてやりまして……

（と立たうとする。）

魚惣　まあ、そう事がきまつたら、落着いてゐるがいゝ。今に若え者も歸つてくるから、それに持たせて事付けてやつても濟まあ。さあ今日から家の人だ。その積りで一杯やるがいゝ。おゝそうだ。手紙もこゝで書くがいゝ。お竹、巻紙と懸け硯を出してやれ。

お竹　あい。（と卷紙、と懸け硯を持つてくる。）

新助　へい、これは有難う存じます。（と是非なく手紙を書きかける。こゝへ前の川へ、仲町の方より美代吉、好みの着付猪牙へ乘つて出る。魚惣をみて。）

美代吉　親方あ、今晩はあ。

魚惣　おゝ美代坊か、鐵砲洲へ浮氣にいくのか。きいてるぜ。

美代吉　あれ忌だよ。おや、そこにゐるのは新助さんだねえ。

新助　おゝ、これは美代吉姉さん。（と乘出す。）

美代吉　此頃はどうしたの、ちつとも來ないぢやないか、またちつとお出掛よ。待つてるよ。（この中船通り過ぎてゆく。）

魚惣　おゝ、そういへば、お前、この頃あの美代吉の家へちよく〳〵出入するさうだな。

新助　いえ何ういたしまして商ひに時々伺ひますだけでござります。

お竹　おゝ、そうだ。お前この頃あの子の情夫だといふ噂もきいたよ。

新助　と、とんでもない。何ういたして私などが及びもないことでございます。

魚惣　あは、何も眞面目に言譯するにあ當らねえ。だが新助さん。お前も方々の家へ出入して世間の裏もみる商賣、分つてゐるやうでも、まだ若えのだから、うつかりすると飛んだ者に引掛つて非道い目にあはされるぜ。そうしてお前、あの美代吉に金なぞは貸しあしめえな。

新助　いゝえ。決してそんな事はございません。

魚惣　そんならいゝが、あいつも惡い女ぢやないが、道樂の多い女だから、金なぞあ、必らず貸さねえがいゝぜ。

新助　へい。……（といつたが、顏を上げて）もし旦那様、美代吉さんは今どちらに御出掛なすつたのでございます。

魚惣　なに、あの女は鐵砲洲の船宿で、出合をするといふことをきいたから、大方そこへ行くだらうよ。

新助　へえ、さやうでございますか。

お竹　おや、おまへ、新助さん、何うかしたかえ。

魚惣　うむ、さういやあ、顏の色が惡いやうだ。

新助　（我しらず顏を撫ぜ）いえ、どうもいたしは致しません。

魚惣　さうか、そんならいゝが……（こゝへ若い者湯から「唯今」と歸つてくる。）

お、ゝ、若え奴等が歸つてきた。それぢやあお前、手紙を

書いて、すぐ宿の方へ持たしてやれ。おい、お竹、行燈をつけねえ。
（新助うつとりと空を見上げて。）
新助　おゝ、とつぷりと暮れましたな。
（と去りげなく手欄へ出て。）
おゝ、あすこが佃、あすこが築地、あれが鐵砲洲、……よい景色でござりますなあ。
（といひながら、眼はぢつと鐵砲洲の方を見て居る體。この模樣、千鳥の聲、梶の音。）

――幕――

二幕目

仲町美代吉家

中央、上手より下手へ折廻し、土庇附の家體、正面三尺の暖簾口、臺所への通ひ。上手奥へよせて二枚の襖、奥の間との通ひ。その外すべて藝者やの飾り附。家體の上手は奥の間の心にて丸窓。下手は後へ下げて下屋の横手をみせ、いつもの所、屋根附の格子戸。御神燈を下げ、續いて下屋との間、低き屋根つきの塀、窓へ靑すだれをかける。庭先には秋草の鉢栽二つ三つ。二重に美代吉のお袋およし、吳服屋の手代重助と話の體。

およし　ねえ、お前さん。あれも心配して今朝から出て歩いて居るのだから、必つと今夜までにはお金は造へておかうから、ほんとに今夜まで待つておくれなねえ。
重助　へい、それはもう此方の姉さんのことでございますから、間違ひはございませんが、何にしても祭の衣裳、私の方は手廻してとうにお納め申してあるのに、未だにお金の方を下げて戴きませんでは、何か途中で私に啀いことでもあるやうに、店の方へ申譯が立ちません。今日は必ず戴けるといふことで伺ひましたのに、また晩に伺へとは少し御無理でせう。
およし　さあ、お前さんのいふことは一々尤で、私の方でいふことは成程無理だらけ、それは私にもよく分つてゐるから、かうしてお前さんに賴むのだよ。ほんとに後生だから、一旦歸つて晩にまた來ておくれな。
重助　へえ、それは無いものを無理に頂戴しようとは申しません。たゞ、かうして一寸延しにされて戴いては、祭と申してもう明後日、その日が來て仕舞つてはそれこそほんたうの後の祭、打明けたお話が、いたゞけるものもつい長引いてしまひます。それに先分も今度こそは御一緒にといふもので造へました今度の衣裳、それをかういふ御話しでは、私が店へ申譯がござりませぬ。據どころござりませせぬ。損をいたしても衣裳はいたゞいてまゐら

ねばなりませぬ。

およし　あれ、それをして貰つては身も蓋もない。さうなつてはあれも名の出ること、それで隨分心配もしてゐるのだから、それでお前さんに頼むのだよ。今夜までには間違ひなく必つと造へておかうから、ほんとに今夜まで待つておくれよ。

重助　へい。それほどまでに仰しやれば、今夜までは待ちますが、もし今夜伺つて出來ない節には衣裳は頂戴してまゐりまするが、それでよろしうございますか。

およし　さあ、それはもう……

重助　それではお暇いたしまする。これは御邪魔をいたしました。

およし　ほんとにお前さんには毎々濟まないねえ。

重助　どういたしまして。戴けさへすれば、足を運ぶのは苦勞とはなりませぬ。

（とよろしく捨ぜりふにて重助は歸つてゆく。）

およし　あゝ今日はあれで二人目、ほんとにほと〳〵するねえ。

（此時美代吉上手の襖をあけて）

美代吉　おつかあ、もう呉服屋はかへつたかえ。

およし　あゝ、やつとの思ひで歸したが、お前、晩には衣裳を取りにくるとよ。

美代吉　あゝ忌だ〳〵。ほんとにかうも詰るものかねえ。

（とよきところへ坐る。）

およし　お前より私の方が、餘つ程忌だよ。みす〳〵知れた云譯でつないでゐるのも切ないものだよ。一體お前どうしようといふのだい。

美代吉　何うにかなるとおもつてゐた金の工面もかうなつては何の思案も出やあしないよ。

およし　それもお前の心柄だよ。この物前をして下さる筈のあの藤岡様もあれ以來、呼ばれても顏出しせずさ。あの三公には家の物はあり從ひ、見繼いでしまふしさ。二日も三日もあんな者をつれて飲んで居て……

美代吉　えゝ、もうよしてもおくれ。今更そんな愚痴をいつても始まらねえよ。あの三さんのことを知られた藤岡さんに、いくら私が生く地がなくつても金の無心はいへねえよ。その位な意地はあらあな。又、三さんのことは私の自力ですることだよ。默つてゐておくれ。

およし　おや〳〵御大相なことをいひ出したつて深川名うての美代吉が火鉢の引出しに湯錢もないのも見得ぢやあるまい。

美代吉　何だつて、宵越しの錢はもたない美代吉が貧乏するのは當り前だ。唯さへくさ〳〵してゐる處、そんなことをもういつておくれでないよ。

およし　だつていはなきあ、どうするのだい。……おゝさうだ。おまへ、あの縮屋の新助さんに頼んでみたらどうだえ。

美代吉　なにあの新助さんに。頼んでみろとは金の工面をかえ。馬鹿をおいひな。あんな田舍の人にそんな工面が出來るものかねえ。

およし　だつてお前、あの人は夕べもこゝへ來たさうだよ。

美代吉　なんだつてさ。

およし　さつき、隣のおかみさんの話に、夕べ家の前を行きつ、戻りつしてゐる人があるから、怪しい素振りの奴だとおもつて、わざと傍へよつてみると、あの新助さんで、急いで逃げるやうにいつてしまつたとさ。お前によつぽど惚れてゐるのだよ。

美代吉　ふむ、馬鹿におしでないよ。

およし　だからさ、頼んだら隨分造へてくれまいとも限らないとおもつてさ。こゝの處はざつと百兩ありあ、一時の凌ぎは附くのぢやあないか。

美代吉　ふむ、だが、あんな田舍者を欺して金を造へたとなつちやあ、美代吉さんの沽券に障るよ。第一百兩なんて工面が出來るものかねえ。

およし　ぢやあ、お前、どうするのだい。晩には衣裳を取りに來るといふのだよ。

美代吉　えゝ、もう自棄だ。さうなりあ土地を賣りあ、濟むこつた。おつかあ、一杯つけておくれよ。

およし　おまへ、土地を賣るなんて、私あ今更田舍へ行つて苦勞なんかするのは忌だよ。

美代吉　それも時世時節で仕方がねえよ。まあ、一杯つけておくれよ。

およし　でもお前、そんなことをいつたつて……

美代吉　えゝ、うるせえ。一杯附けておくれといふに。

およし　何だな。自己（うぬ）が惡くつて己（おれ）に當る奴があるものか。

（とおよしぶつ／＼云ひながら、酒の支度をする。こゝへ前幕の縮屋新助、佃煮の曲物をさげて向ふより出て、一寸花道にて振返へり、直ぐ舞臺へきて格子戸へ手をかけ、思案の體。思ひ切つてがらりと明ける。美代吉吃驚して立かけ、見て。）

美代吉　おや、新さんかえ。私あ吃驚したよ。

新助　それはどうも相濟みません。一寸御門を通りましたから……

美代吉　何だねえ。そんな處で……ずつとお入（はい）りな。

新助　へい、有難う存じます。（と二重へきて）この中は御無沙汰をいたしました。

美代吉　何うしたい。待つてたよ。此間魚惣の座敷にゐたねえ。

新助　へい、此頃は魚物さんに御厄介になつて居ります。
美代吉　おや、さうかい。ぢやあ近くぢやあないか。ちよく〳〵お出掛けな。
新助　へい、有難う存じます。
およし　おや、新助さん。この頃はすつかり御見限りだねえ。
新助　へい、御無沙汰をいたしました。
（と曲物をおよしの前へ出し、）
お珍らしくもございませんが、召上つて下さいまし。
およし　おや、何だねえ。お前さんから貰ひ物をしては濟まないねえ。さうしてお前、今日は荷物はなし、何か御用かえ。
新助　へい、その……
（と少しもぢ〳〵してゐる。）
美代吉　何だねえ、おつかあ。新助さんは遊びに來たんだあね、まあ、ゆつくりしておいでよ。今一杯はじめようとした所。丁度いゝ、對手でもしておくれよ。
新助　へい。
美代吉　さういへば、お前にも濟まないねえ。ござ〳〵でざつと二十兩ばかりの借になるねえ。私も忘れることは無いのだけれど、こゝの處、お前だから打明けていふが、ちつと不手廻りで、困つてゐるのだから、何うか、もう少し待つておくれよ。
新助　（手を振つて）いゝえ、姉さん、飛んだことでございます。今日伺ひましたのも決して御催促に上つた譯ではございません。餘り御無沙汰になりましたので、遂から上りたいと存じて居りましたが、上ると御催促に當るやうで、つい〳〵御遠慮申して居りました。
美代吉　あはゝ、金を貸して遠慮してゐる奴があるものかねえ。世間がお前のやうな人ばかりだと苦勞はないが、私あ、今お前が入つてきた時も借金取りかと吃驚したのだよ。
新助　それは相濟みませんでした。
美代吉　おい、おつかあ、お前、新助さんも來たことだから、横町の肴屋で何か見てきておくれな。
およし　（一寸新助をみて）でもお前、あすこも唯ぢあいかれねえよ。
（新助これにて脇を向いて紙入より一兩出し、）
新助　おふくろさん。恐れいりますが、これで一つ、姉さんに御肴を上げて下さいまし。
およし　おや、これは濟みませんねえ。お前新助さんに一兩いたゞいたよ。
美代吉　何だな、お前。そんなことをしてくれては困るねえ。

およし　ぢあ、私は一寸行つてくるから、新助さん、ゆつくりして下さいよ。

（とよろしくおよしは暖簾口へ入る。）

美代吉　お前、あんなことはしなさらにやあ、いゝに。いつも濟まないねえ。

新助　いえ、何いたしまして。私は田舍者でどういたしてよいのやら、一向不案内でございます。

美代吉　どうしてお前は中々通りものだよ。

新助　どういたしまして、かうして毎年江戸へまゐりますが、遊所場なぞへはとんと參りませんので、不調法ばかりいたしまする。

美代吉　ほんとにお前位堅い人もないものだねえ。國のおかみさんは何んな人かしらないが、飛んだ仕合せ者だねえ。

新助　いえ、どういたしまして、まだ女房はございませぬ。もう一稼ぎいたしてからでございます。

美代吉　さうかい、まだ一人かえ。そりあ感心だねえ。だが雪國の女は綺麗だといふから、お前の國には定めし、いゝ女が多いだらうねえ。

新助　どういたしまして、お江戸の水で洗ひ上げた姉さんの様なお方は何所にだつてございません。

美代吉　おや、お前、中々世辭がいゝね。

新助　いえ、全くの事でございます。

美代吉　さうかえ、そりあ有難いね。新助さんは全く田舍の人に似合はない程がいゝから惚れてる女も多いだらうねえ。

新助　何ういたしまして、御冗談を仰つてはいけません。

美代吉　いゝえさ。お前のやうなおとなし作りの堅い人には、却つて女は惚れるものだよ。私でよきあ、惚れて上げてもいゝよ。

新助　御冗談を……姉さんには三さんといふ方が……

美代吉　うむ、あいつにはもう愛想がつきてしまつたよ。

新助　へえ、どうしてゞございます。

美代吉　まあ、なんでもいゝよ。さあ、ちつとお合ひでもしておくれよ。先刻から私ひとり大分飮んだよ。

（と一寸思入あつて）

考へてみりあ、堅氣ほどいゝものはありあしないね。あゝいやだ〳〵。

新助　（怪訝さうに）何か御心配でもございますか。

美代吉　なあに、いゝのだよ。お前にきかすこつちあないよ。まあ一杯おのみ。おや、お酌かい。こりあ憚りだねえ。

（と此間に美代吉大分重ねて、少し醉つた思ひいれ。新助は始終心うれしい様子。よろしく酒盛の體。）

（こゝへ向ふより船頭三次、好みのこしらへ。すぐ舞臺へきて格子戸をあけ。）

三次　姉さん、家か。……おゝ、お客か。誰だとおもつたら新助さんか。相對で一杯はじまつてる所か。悪い所へきたな。

（と二重へあがり、煙草盆を引よせて一服する。新助間のわるい様子。）

美代吉　なにをいつてゐるのだよ。さうして何か用かえ。

三次　用つていつて極つてゐらあ。毎々氣の毒だが五兩ばかり借してくんねえ。

美代吉　何だつてお前、今家にあ何も質草もありあしねえよ。

三次　なにねえといつたつて、こちとらの樣なものぢあねえ。己もあんまり氣の毒だから、もう無心にや來めえと思つたが、今おつかあに逢つたら、縮屋の新助がきて酒がはじまつてゐるから、行つちあこまるといつた。新助さんを對手に酒を飲む位なら、おれに借してくれてもいいぢやあねえか。

美代吉　なにをいつてゐるのだよ。おつかあも乙に廻すねえ。なんにしても今私はお金はないから、歸つておくれよ。

三次　ぢやあ、どうでも借す譯にあ、いかねえといふのか。それぢあ（と新助を煙管にて指し）この譯をつけてくれ。

（新助、愈々間の悪い様子にて、）

新助　もし、姉さん、私はもう御暇をいたしまする。

美代吉　あれ、いゝのだよ。居たつてかまやあしないのだよ。おい三さん（とすつかり醉の出てきた體）お前おいらがかうして苦しがつてゐる巾へ、よくもそんなことが云へてきたものだねえ。

三次　何だと。

美代吉　今私も七轉で、出の着物まで曲げちまつて、外へも出られずゐるといふことは、お前も知つてゐるだらう。祭を前へかゝへて驅落しようか、しまいの境だ。そこへお前五兩貸せとは何だい。あんまり人情がなさすぎらあ。今日といふ今日は、私はお前にほんとに愛想が盡きたよ。まさかお前に工面も頼まないが、共々心配らしい顔ぐらゐしてゐてくれたつて、餘まり義理も悪かあああまい。大げえ馬鹿におしでないよ。

三次　何だつて、今仲町の美代吉が五兩十兩の金に困るといふことがあるものか。一寸客に無心をいつたつてその位な金は出來らあ。

美代吉　なんだつて、私あ客に無心をいふのは、きつい嫌ひだよ。そんなことはお前だつて知つてる筈だあ。

三次　ふむ、どうかういつて、手前おれに愛想かつき、突

出し者にする氣だな。
美代吉　さうさ、この中へ金の無心にくる樣な人情なしなら、突出し者にしてやるよ。私あ薄情者は大嫌ひだよ。
三次　うむ、ぢやあ、いよ〳〵このおれを突出し者にしやあがつて、疾うから、こんな縮屋野郎と出來てゐやあがつたのだな。
美代吉　ふむ、乙にまはすねえ。どうとも御覽の通りだよ。
三次　此奴め、よく吐かしやあがつた。土臺こいつが癪に障らあ。乙う色男がつて濟ましやあがつて、お城の鳶ぢやあるめえし、いやにお高く棲りあがつて……えゝ、蟲唾が走らあ。
（と新助を蹴倒す。美代吉いよ〳〵ぐつとして、）
美代吉　あれ、その人を意地める奴かあるものかい。好い加減にするがいゝ。私も仲町の美代吉だよ。お前くらゐな情夫にはちつとも困らねえよ。それを逆上せて情夫がつてよくこの中へ無心がいへて來たものだ。もう〳〵私はお前の顔もみるのが忌になつた。さあ、とつとゝ歸りあがれ。
三次　（口惜しがり）えゝ、こいつ、よくもそんな事がいへやあがつた。うぬ。
（と立掛る。新助驚く。美代吉一寸身を引いて、）
美代吉　おや、お前。立掛つてどうするの。私を打たうといふのかい。お前なぞに打たれてたまるものかい。生れてから親にだつて手を上げられたことのない私だよ。おい、送りの船頭が、藝者の頭へ手を上げてそのまゝ濟むとおもふかい。大概におし、見番へ斷つたら、何所の船宿も止められて食の喰ひあげ、その腮が干上るよ。あんまりふざけた眞似をするない。
三次　むゝ。
（と口惜しがる。美代吉いひくたびれたやうに、ごろりとなり、）
美代吉　えゝ、歸れといつたら、歸りあがれ。
（と寢てしまふ。）
（三次身を揉んで口惜しがり、）
三次　えゝ、よくも耻をかゝしやあがつたな。おれも男だ。この返報は覺えてゐろ。
（と飛出し、格子戸にて、）
やい、縮屋、うぬもその分にしてはおかねえぞ。
（と一散に向ふへ入る。）
（あと新助心配してうろ〳〵する。暖簾口より、およし岡持を提げて出て、そこへおき。）
およし　まあ、新助さん、私あどうなるかとおもつて岡持をもつたまゝ、臺所に立つてたよ。お前さん、何所も怪我はしなかつたかえ。

新助　へい、何ともございません。

およし　まあ、あの三公め、何だか、變なせりふをのこして歸つたから、私は一寸これから見番へいつて廻しを頼んであいつの樣子を捜らせるから、一寸留守をみてゐて下さい。

新助　へい、よろしうございます。

およし（美代吉をみて）おや／＼この子もうたゝねをしてしまつたよ。困るねえ。

（と戸棚を明けて紅裏の半纏を出す。新助見て）

新助　もし、お袋さん、それは私がいたしませうから、早く御用をお達しなさいまし。

およし　さうですかえ。それあ濟みませんねえ。

（と船底枕と、半纏を渡し）

ぢあ、お賴み申しますよ。私は一寸行つてきますよ。

（と暖簾口へ入る。）

（あと、新助懷ろより三つ折りの手拭を出して枕へあてがひ、そつと美代吉の頭を上げて枕をさせ、半纏を取つて着せかけようとして脇へ抱へてうつとりと立つてゐる。）

（これと一杯に向ふより貸本や甚八、高荷を背負ひ、手に一册もつて近眼のこなしにて讀みながら來たり、この途端がらりと格子戸をあけ）

甚八　御免下さい。

（といふ。新助びつくりして美代吉を後ろにして）

新助　誰だ。

（と大きくいふ。甚八びつくりして）

甚八　へい、貸本やの甚八でございます。

新助　今たれも留守だ。また來て下さい。

甚八　へい、左樣でございますか。

（と近眼のこなしで、バチ／＼やりながら、よくみようとする。新助氣味の惡き思入。甚八。）

ではまた伺ひます。

（と怪訝さうに出てゆく。あと新助半纏をかけ終り、美代吉の顏へ蠅の來た思入にて、團扇にて追ひ、次第に煽ぐ。美代吉ふつと眼を覺して）

美代吉　誰だえ。おゝ、新助さんかえ。まだ居てくれたのかえ。

（といくらか醉覺めのこゝろ。）

新助　へい。

美代吉　さうしてもう何時だらうね。

新助　もう七つ下りでございませう。

美代吉　もう直に暮れるのだね。あゝ忌だ、忌だ。いよ／＼私も旅かねえ。

新助（ちつと思ひ入つた體にて）もし姉さん、あなたは

先刻から大分御心配の様子、御差支へがないのなら御話しなすつて下さいまし。

美代吉　（しんめりしたやうに）　お前に愚痴を並べても仕方がないが、今度の祭で、百兩ばかり入用の、その出所がない爲に、今夜までに金が出來なけりあ、衣裳を抑へに來るとのことさ。今日まで何うにか、かうにか、賣つてきた私。この大祭で恥をかいちやあ、もう世間へ顏も向けられない。一そ死んでしまひたいよ。（と一寸眼頭を拭き、またいら／＼したやうに）　あゝ忌だ／＼。熟々こんな派手商賣はもう忌だ。小さい時からこゝで育つて今まで意地で押してきたが、もう／＼こんな苦勞はするのは忌になつた。どんつく布子の筒つぽで草むしりをしたつても、今日の日が樂にくらせるものならば、其方が餘つ程ましだ。いつそ田舍へ引込んで新助さんの故鄕へいつて一緒に雪でもみて暮さうかねえ。

新助　姉さん、そりあ、本統のことでございますか。

美代吉　本統もうそもあるものかねえ。今日の夕方が私の生死の境目だ。もう分別もありあしないよ。

新助　さうしてその金の高は百兩でございますね。

美代吉　あゝ、さうさ。

新助　もし姉さん。あなたはあの三次さんにもう愛想が盡きたと仰しやつたのは本統のことでございますか。

美代吉　なぜさ。先刻お前もみてゐた通りさ。

新助　ぢあ、もう手を切つてお仕舞ひなさるお積りでございますか。

美代吉　さうさ。だけれどもそれも金のいること。今の所ぢやあ仕樣もないよ。

新助　もし姉さん。今こゝで百兩の金さへあれば、姉さんの御顏も立ち、三次さんとも手が切れて樂な身體になれますのですか。

美代吉　あゝ、さうさ。さうしてお前、それをきいてどうするのだい。

新助　へい。その金を私が造へませう。

美代吉　えつ、お前がその金を。

新助　へい。

美代吉　（喜んで）　えつ、お前が造へてくれるつて。……まあ、さうしてくれりあ、本統に私は助かるよ。この瀬戶さへ、越しさへすりあ、私もこれから心を入れかへて、一稼ぎすりあ、何の百兩位、今年の中に立派に利をつけて返してあげるよ。

新助　へい。

美代吉　さうしてお前、それは何時貸してくれるのだえ。

新助　へい。

美代吉　おや、お前、何うかしたのかえ。

新助（思ひ切つたやうに）もし、姉さん。その百兩は、きつと夕方にまで造へて上りまするが、その代り、どうか私のお願ひもきいて下さいまし。
美代吉　えゝ、お前のお願つて、それあ何さ。
新助　姉さん。私は、此間國へ歸つてしまはうといたしました。一つは此間中の夢見の惡かつたので國の事が氣になりましたのでもございますが、もう一つは成丈け姉さんのお顏の見えない所へ參つて仕舞ひたかつたからでございます。それを魚惣の旦那樣に祭をみてゆけと止められたその處へ、姉さんのお顏が又見えて三次さんと鐵砲洲の中宿とやらで御出合なさるのだときいて、悲しいやら、口惜しいやら、一時に胸へせまつてきて遂に歸りそびれてしまひました。……元よりこれは姉さんの御存知ないこと、私の勝手でございますが、それから後も姉さんのお顏を見れば思ひの種、どうぞして諦めよう〳〵と思つても、つい、此方の方へ足が向き、昨日も一昨日もお家の邊りをうろ〳〵と步き廻はり、どう考へても時折姉さんの仰つた御言葉が耳へのこつて思ひ切れず、今日は思ひ切つてお顏を見にまゐりました。
（と俯むいてゐる。）
（美代吉少し持て餘したやうに。）
美代吉　これはとんだことをきいてしまつたねえ。

新助　えゝ、では姉さん、私の願ひをきいては下さりませぬか。
美代吉　いえさ、そんなことはないけれど、餘り不意で喫驚したのさ。成程お前にはこれまで二十兩ばかり借もあり、こゝの凌ぎをつけてくれゝば、大恩人。まして私のやうなものをそんなにまで思つてくれるお前、それあ私も嬉しいよ。
新助　それぢあ、私の此願ひをきいて下さりまするか。え、本統に。えゝ、こんな嬉しいことはござりませぬ。
（と一寸眼を拭ふ。）
美代吉　さうしてお前、そのお金は？
新助　へい、それは丁度、國から出て來ておいでの人もございますれば、私が判さへつけば、直ぐ調ひます。
美代吉　さうかえ。それあ嬉しいねえ。ぢや一つ、お前に賴むよ。
新助　へい。
（といつたが、須臾考へてゐて。）
もし姉さん。金が出來た時には、此方の御家へ置いていたゞけまするか。
美代吉　えゝ、私の家へ、（と一寸怪訝な顏をしたが）あゝ、さうなりあ、私の情夫（いろ）、立て過しにしておかあね。
新助（嬉しさににこ〳〵して）そゝ、そりや本統でござ

いますか。（といつたが急に涙を流して）えゝま、思ひがけない廻りあはせから、迚もかなはぬ事と諦めてゐたことが、こんな仕合せにならうとは、私は夢の様でございます。あゝ、よく歸らずに居りました。

（と嬉し泣きに泣く體。）

美代吉　（少し困つて）それでは新助さん。お前すぐ行つてくれるかえ。

新助　へい、これから石町まで、つい一走りでございます。それではすぐに。

（と涙を拭つて立上り、沓脱へゆき、片足おとして思入。）

もし姉さん、もしやお欺しなさるのではございませんねえ。

美代吉　え、お前、なにをいふのだえ。

（と立つてきて一寸肩へ手をかける。）

新助　（嬉しさうにその手をそつと押へて）あゝ惡いことを申しました。……だが、私も荷を呼んで、これから必死に稼ぎますが、お家へだけは、きつと置いて下さいまし。

美代吉　あゝ、そりや、もとよりだあね。

新助　それさへきまれば、私は直ぐ行つてまゐります。

（と急いで格子戸の外へ出て、いそ〳〵として扇をつかひながら向ふへ入る。）

（美代吉思入。暖簾口よりおよし出て。）

およし　まあ、お前、今きいてゐりあ、新助さんに金の工面を頼んだのはいゝが、あんな事をいつて仕舞つて、鼻をどうつける積だい。

美代吉　でもあゝ眞劍になつてゐるものを、つい外しもならず、あゝいつたが、何といつても百兩の金、一寸縮屋には出來憎いから、この儘もう來られねえよ。

およし　でもお前、もし持つて來たら、何うするのだい。

美代吉　まさか、私が縮屋を情夫にも持てまい。譯を話して貸して貰つて、こゝの凌ぎを附けるのさ。もうかうなりあ藁でも摑む。おつかあ、水を一杯おくれよ。

およし　あいよ。

（と臺所より、水をもつてくる。美代吉のんでゐる。）

（向ふより幇間壽鶴、扇を半開きにして、夕日をよけ、一寸着物の裾を取つて出てきて、直ぐ舞臺へくる。）

壽鶴　もし、美代吉さん、お家かね。壽鶴ですよ。

（と格子戸をあけて入る。）

およし　おや、師匠、さあ、お上り下さい。

壽鶴　おつかさん。暫く。

（と二重へ上つて、）

今時分上つて濟まないが、實は今日は御上使といふ所

で、柄になく公用さ。それで一寸美代吉さんに、……いや、おつかさんにも居てもらひたい。……もし美代吉さん、實は私あ、今日は泣かされたよ。

美代吉　えゝ、何ですつてえ。

壽鶴　實はねえ。今日藤岡の殿樣に尾花屋で御目に懸つたのさ。それでいろ／＼お前の話が出て、打明けたところが、同じ商賣冥利、ま、私達の目からみてもお前の仕打ちが餘りひどいから、逆がつても、底に色氣をもつてるから、欺しいゝよとお前の言葉をそこへ全體(すつかり)打まけて讒訴の役廻り、殿樣あれはいけません。御爲になりませんと申上げたのさ。怒つてはいけない。さうおもへたからさ。いくら大腹中の殿樣でもこれには御怒りなさると思ひの外、例の通り、にこ／＼なさつて、かういふ土地へ來るもので、幾ら清爽(さつぱり)してみせても、嫌はれてくれようとて來るものは一人もない。今更色氣がどうのとは、美代吉も底を割る野暮なことをいふ奴だ。併しさう手前達の口にまでかゝる樣になつては、己ももうこの土地へは來られぬ。元より美代吉はいづれ仕舞は金でもつけて手切れ話にする女。向ふで放れてくれるとは、よい潮時だ。おれも今度愈々役付いてさう輕々しい出入もならなくなると、餘り綺麗な仰りやう。私達は腹をゑぐられて一座がしんとしてしまつた。すると殿樣はこの百兩包みをお出しなすつて、これは手切れの印だ。壽鶴、美代吉に渡してくれと仰つた。それで私は喫驚して、向ふで愛想づかしをした女に、金などを勿體ないと、人相應なことをいつて恥入つた。まあ、美代吉さん、殿樣はなんといつたとおもふえ。おれは遂々泣き出した。「これ、壽鶴、馬鹿をいへ。あの意地の張りの強い美代吉が、この祭前、きつと工面に盡きてゐる。この金が、どの位、役に立つかしれやあしねえ」とさ。何から何まで氣の付くつてあんな殿樣はありあしねえ。それから一同へも多分の御心付で賑かな別の御酒宴、氣もない顏でおかへりなされた。で、すぐその足で、「こゝへ百兩もつてきた。ねえ、美代吉さん。當世の穿ちにおくれた古風な私のいふ事なぞ聽いてもくれめえが、これを嬉しく思はなくつちや、おめえ、江戸ぢやねえぜ。

美代吉　（一寸涙を拭つて）あい、私も濟まないことをしたねえ。

およし　まあ、藤岡の御前のおぼしめしは何と御禮を申さうやら、有がたい事だねえ。

美代吉　ほんとに、殿樣ありがたうございました。

（と百兩包を一寸戴く。それをみて）

壽鶴　うむ、美代吉さん、殿樣のお心がお前に通りあ、私も何もいふことはない。日暮時分、飛んだお邪魔をしま

した。

およし　まあ、いゝぢやありませんか。

（壽鶴この中下へおりて。）

壽鶴　いゝや、これから、又一寸慾張さ。（と格子戸にて）美代吉さん、餘計なことをいふやうだが、早く座敷の方へ顔を出すやうにおしなさい。

美代吉　あい、ありがたう。

壽鶴　では、その中また。

（と壽鶴かへつてゆく。およし喜んで）

およし　まあ、何ていふのだらう。金の工面盡き果てた最中に、不意にこんなお金が湧いてくるなんて、

美代吉　だから、世の中は案じたものではねえのう。

（此時暮六つの鐘鳴る。）

おゝ、ありや、暮六つの八幡鐘、紋切形の金の刻限。出來てみりあ、乙な音だねえ。……まあ、おつかあ、行燈でも附けねえな。金が入つたといふに、暗くつて陰氣ぢやあねえか。

およし　あいよ。それから延喜棚へ一寸そのお金を。

美代吉　あゝ、そりや、私がしようよ。

（と金を延喜棚へ供へて切火を打つ。）

（この少し前より船頭三次向ふより出てきたり、一寸門口より、伺ひ、裏へまはり、此時暖簾口よりずいと出る。美代吉ふと振り向いて、）

美代吉　あれ、お前は三さん。

三次　（懐より合口を出してずいと突きつけ）さつきはよくも恥をかゝしやあがつたな。

およし　（驚いて）あれえ。

（と聲を立てる。）

美代吉　おつかあ、驚くことはねえよ。これお前、眼の色をかへて何だねえ。

三次　手前を殺しておれも死ぬのだ。

美代吉　冗談をおいひでないよ、（と手早く金包を取つて五兩とり）さあ、さつきの五兩さ。

と抛り出す。三次取上げて、）

三次　やあ、こりやあ、金。

美代吉　おい、美代吉さんもまだ、運勢は上々吉だよ。今がた藤岡さんから持たしてよこしてくれたのさ。

三次　え、それぢやあ先刻の愛想づかしは。

美代吉　私がむしやくしやしてゐる處へ、お前が餘り情しの無心をしたから、つい、積に障つたのさ。

三次　さうか、そりやあ、ちつとも知らなかつた。勘忍してくんな。已あ、さうとは知らねえから、お前を殺して……

美代吉　嘘をおいひな。お前、わたしが悸へて謝まるとお

もつて來たのだらう。

三次　（苦笑して）　えゝ、さう見えるか。姉はんにはかなはねえ。

美代吉　まあ、その耳穿りみたいなものを仕舞つておしまひよ。

三次　おいよ。

美代吉　まあ、おつかあ、お前も吃驚したらうが、何三さんは妾を斬る氣はありやしねえよ。

三次　まあ、おつかさん、嚇かして濟まなかつた。勘忍しておくんなさい。

およし　えゝもう私は知らないよ。

（とこの場の樣子に呆れてしまつて、少し腹立氣味で外へ出て行く。）

三次　おつかあは怒つて仕舞つたよ。

美代吉　なにいゝよ。近所へでも遊びに行つたんだよ。まあ、一杯やらうよ。私も一寸むかへるから。

（と膳を引寄せる。三次も傍へ行き。）

三次　おゝ、さうして先刻の縮屋は……

美代吉　何ありあ、來合せて一杯さしたゞけだあね。

三次　なあんのこつた。さうか。

美代吉　おゝ、お前、この片口へ、一寸呑口を捻つてきておくれ。

（三次おいと立つて暖簾口へ入り、すぐ出て壁際の岡持をみて。）

三次　やあ、こゝに乙たものがあらあ。

美代吉　おゝ、そりや、さつき新助さんが取つた肴だ。

三次　そいつはいゝ。ご馳走にならう。

（と刺身の皿を出して持つてくる。）

美代吉　えゝ、お前も意地きたなしだな。

（とよろしく二人酒盛になる。とこゝへ向ふより縮屋新助せか／＼と汗を拭きながら出る。すぐ舞臺へくる。）

新助　もし、姉さん、唯今歸りました。

（と格子戸を明ける。美代吉一寸ぎよつとした思入。新助はまた三次を見て吃驚する。三次聲をかけて。）

三次　おゝ、新助さんか、さあ上んなせえ。先刻は間違へて濟まなかつた。どうか勘辨して下せえ。

（新助怪訝な顏をして無言に座につき、もじ／＼しながら。）

新助　もし、姉さん、一寸お顏を……

美代吉　（もう是非ないとうなづいて）　おゝ、新助さん、お前、先刻のお金の話かい。ありがたう。あれならもう心配しておくれでない。出來たよ。

新助　えつ。

美代吉　折角だが、出來てみれば、入らないお金、お前、もし造らへて持つてきたのなら、先方へ譯を話して返しておくれな。

新助　えつ。

（と極端に驚いてしばらく口が利けなかつたが、やうやうに。）

新助　そ、そ、それぢやあ、姉さんは私を欺したのですねえ。

美代吉　え、欺したとは。

新助　さつきあんな程のいゝことを仰しやつたのは、みんな私を欺したのですね。

美代吉　あゝ、あれかい、まあ欺したといふと間違ふが、あれはお前が、あんまり眞劍なので、一寸冗談が過ぎたのさ。まあ、勘忍しておくれ。

新助　（蒜となつて）え、そ、そりや餘りでございます。今更になつてそんなことを云つたつて私は承知できませぬ。さあ、こゝへ約束通り（と百兩包を出し）百兩持つてきました。姉さんも約束通りにして下さいまし。

美代吉　まあ、お前、そんな無理をいつたつて時の拍子の話だから仕方がない。今いふ通り、先方へは多少利つけをすれば返せる金、お前に損も立たせないから、いゝぢやあないか。

新助　いゝえ〳〵、此金は姉さんが一緒になつて下さるといふから造へてきた金、今更先方へは戻されませぬ。

三次　これ〳〵新助さん、己は何ういふことがあつたか知らねえから、口も出せねえが、姉さんがお前と一緒になるなぞとは、解せねえ話し、お前なんぞ勘違ひぢやねえか。

新助　いや〳〵私の間違ひではござりませぬ。先刻たしかにお前と手を切つて私と一緒になるといひなすつた。それをかうして仲のよささうにしてござる所をみると私は欺されたのだ。……だが欺したとしたならば、何の恨みでこんな根深い計策をして私をこんな目に逢はせなすつた。

美代吉　恨みもなにもありやしないが、先刻もいふ、ほんの拍子の話だから、私も先刻から、謝まつてゐる。だから新助さん、勘忍しておくれよ。

新助　いや〳〵何ぼ何んでも、あんまり酷いひどい仕方。なんぼわしが田舎者ぢやとて切ないおもひに二つはない。それを弄り物にして笑つてやらうとは餘り酷い心だ。さうとは知らず、心の底を打明けて腸までも搔き探られ、笑ひ物にされたと思ふと私や口惜しい、口惜しうござる。……これ、なんぼ田舎者を侮るが、江戸の御人

の慣ひぢやとてあんまり酷い。あんまりひどい。これがお江戸同志の人なら、よもこの儘では濟みますまい。わしとても子供ではなし。冗談では濟みませぬ。なんぼ田舎者ぢやとてさう／＼馬鹿にはされてゐませぬ。しつかりした返事をして下さい。

（と詰よる。美代吉もぐつと癇癪を起した體にて。）

美代吉　えゝ、もういゝ加減にしねえのか。わたしの方にも悪い所があるとおもつて、默つて居れば方圖がねえ。おい、積りにも分つた話だ。誰がお前のやうなものと、私が一緒になるものか。まして金を取つたといふぢやあなし。利附の金も出さうといふもの、欺したなぞと、そんな大聲立てられちやあ近所隣りへ見つともねえ。お前の國の在とは違はあ、長え橋を渡つても江戸の中だ。それからそれと噂になつて、仲町の美代吉は、人もあらうに田舎者の、縮屋を欺して金を取つたといはれちやあ、今まで賣つてきた意地の名折だ。あんまり馬鹿にしやあがるな。

新助　ではいよ／＼欺したのだな。

（と身を慄はして口惜しき思入。）

三次　おい、さつきから聞いてゐりやあ、手前も餘まりくど過ぎらあ。姉はんの云ふ通り、手前に損のいく話ぢやなし。何もごて／＼することあねえわあ、何某が利附を貰つて歸つたらいゝぢやあねえか。この上いやあ、言掛り、その分にあしておかねえぞ。

（新助これにてぢつとなり、返事もせず、俯首く。この少し前より魚惣出てきて家の様子を伺つてゐたが、この時家へ入り。）

魚惣　おゝ、御免なせえ。魚惣だ。

（と通る。）

美代吉　おや、親方、いゝ所へ來て下すつた。私あ、今新助さんで困つてゐた所だよ。

魚惣　何の、おれも新助さんが、そは／＼として歸つてきて又そは／＼と出て行く様子が怪しいから、若しやとおもつておれも一寸思ひ當ることもあるから、夕涼みがてらぶら／＼と此方の家へ來てみると、案の定何か間違を起した様子、これ新助さん。だから、云はねえこつちやあねえ。お前もあんまり見界がねえ。何處でこせえた金かしらねえが、利附をして返すといふからは、理窟はねえ。間違は不承して、さあ歸らうぢやあねえか。

（新助なほヂツとしてゐる。）

おい、お前、それぢあ、あんまり強情だ。さあ行かうぢやあねえか。

新助　（ぢつと顔を上げて）もし、旦那様、私はもう歸る家がございません。

魚惣　え、何だつて、

新助　私の造へて來たこの金は故郷の家や田畑を賣渡してもつてきた金でございます。

魚惣　えつ。（と大きく驚いて）お前、と、とんでもねえ事をするぢやあねえか。

（美代吉も三次も顔見合せて驚く。）

新助　（次第に眼を瞬いて）急場の事故、問屋仲間へ賴む隙もなく、當座の工面に困つた所から、丁度國から上つてきてゐる高步貸の權右衛門といふ人が石町の宿にゐるのを思ひ出し、そこへ行つて家藏を抵當にして金を借りようとした所、足許へ附こまれ、金の時刻は迫つてくる、姉さんの家へ置いて下さるといふ言葉を力にして、なに家藏、田畑も、これから必死にして稼いだら、一旦放した迚、また取返せることもあると、百兩で、權右衛門へ捨賣にしてもつてきました。

魚惣　まあ、お前も呆れて物がいへねえ。いくら若え人の一圖だつて餘り過ぎらあ。

新助　へい、でも欺されたとは露しらず。姉さんの言葉を本眞にして此方の家を宿にして、國から荷を呼び、江戸にゐて、姉さんと共稼ぎにしたならば、やがて立派な世帶を持て、故鄕の母さんも此方へ呼び、今の不孝は、後の孝行と、腹で詫び、いたしたことも水の泡、取返しのつかぬことをしてしまひました。

（と頭を抱へこむ。）

三次　成程きいてみりあ、氣の毒なやうだが、みんなお前の早まつた了簡からだ。百兩ばかりの資本を下して、當時名うての姉はんの御亭になつて納まらうとはちつと押が强すぎた。

美代吉　魚惣さんのゐる手前、わたしもちつと極りがわるいが、田舍の人にあ、うつかり口もきかれねえのう。

魚惣　これ、新助さん、今更いつても出來したことは仕方がねえが、なぜ前に一寸おれに相談してくれねえ。かういふことにはさせやあしねえ。

新助　へい。みんな私が足りませぬ所から、今更旦那樣には面目もございませぬ。私もさつきはあまりのことに嚇として大聲を上げましたが、一度に夢がさめてみますと、みんな自分が白痴(たはけ)だから……悲しいも口惜しいも、我身をくやむより外ござりませぬ。思へば足らぬ我身がくやしうござります。

（と聲を吞んで泣く思入。）

魚惣　これ〳〵何もそんなに考へこむことはありはしねえ。兎に角こゝにゐちあ、思ひの種だ。一旦まあ歸るがよからう。さあ、この金を仕舞ひねえ。

（と下に置いてある百兩包を渡さうとする。新助、そ

の金へ手をかけてぢつとなり。）

新助　この金故に、故郷の田地、田畑も……あゝもう何もかも仕舞でございます。

（と魚惣の手へすがつて面を伏せて、身を慄はす。魚惣も一寸泣き。）

魚惣　うむ、尤だく、お前もまだ若えのだ。悲しい口惜しいは尤だ。だがおれも、ひでえ事をしやあがつたとおもつてもかういふ紛紏ぢやあ、縣合の仕樣もねえ。まあ、忍耐をしろよ。併しお前もこれから老先の長え身體、まだ幾何でも稼いで取返せらあ、それらのことも、また家へ行つて相談しよう。さあ、いかうよ。

新助　へい。

（としなく\として魚惣につれられて門口へ出る。）

魚惣　これは大きにおやかましう。お美代坊、いづれ詫にあその中くるよ。

（と少し當てゝいひ。新助のしよんぼりしてゐるのをみて。）

さあ、いかう。そんな樣子をして人がみらあな。さあよ。

新助　へい。

（と新助しなくとして先に立ち、魚惣ついて向ふへ入る。あと。）

三次　姉はん、飛んだこつたな。

美代吉　（向ふを見て）おもへば、罪なことをしたねえ。

三次　（不意と）おゝひでえ蚊だ。

（と脛を打つ。）

美代吉　何だね。びつくりしらあね。

三次　おゝ、知らねえ間にこんなに喰はれた。

（と脛を擦る。美代吉少し浮かぬ顏、鐵棒の音、騷ぎ唄にて。）

――幕――

大切

深川仲町裏

上手町家の家並をみせ、下手藏の横手、火の番小屋なぞ。中央斜見込みに横町を見せ、藏につゞいて材木置場の體。突當りは極幅狹に川筋をみせ、極低く川向ふの家並、後にこの上より、十五夜の大きな月が上る仕掛。すべて裏町通りをみせた道具。

いくらか祭の雜沓より遠ざかりし心にて、祭の若い衆、甲、乙、丙、捨石に腰をかけて息を入れてゐる。傍に祭見物の男女、四五人、立掛り、少しはなれて田舍侍一人拔衣紋、間の拔けた扮裝にて蹲がんで休んでゐる。始終、祭の囃子、幕開く。

祭の若い衆甲　今花車は仲町の往來だから、こゝで一息して先くゞりをして佐賀町へ廻つて居よう。

若乙　さうだ〱。まあゆつくり一息いれていかう。己あ、もうげつそり疲勞れた。

若丙　何しろ、あの人込ぢやあ、見物を押分けるだけでも大骨だ。

見物　もし、私共は女連れでもあるし、迚も表通りは通れませぬから、裏町をまゐりましたが、どこへ廻つて見物したらようございませう。

若甲　さうさの、今度の祭りは女子供を連れてゐちやあ、迚も桟敷でも借りなきあ、——見られやあしねえ。宮本の茶屋に貸桟敷が出來てゐるから、そこへいつて見るがよからう。

見物　へえ、さうでございますか、ぢあ、さういふことにしませう。有難うございました。

（と祭の見物は上手へ入る。）

田舍侍　くや〱。其處許たちは御當所の人と見受けてお尋ねいたすが、身共は昨日出府いたしたばかり、皆暮不案内ぢや、今日當所八幡の祭禮と承はつて、同役共のすすめにまかせ、同道して罷り越したが、途中ではぐれて迷惑いたす。八幡宮へまゐるにはどうまゐつてよいか。お教へに預りたい。

若甲　始めて江戸へ出てきたのぢや、道筋を教へた所で分るめえ。

若乙　なんでも構はねえから、人込に押されていつたら、自然と宮本へ出らあ。さうしなせえ。

田舍侍　いや、あの群衆の中では、刀の鞘を割られ申すと大事でござる。

若丙　そりあ、お前、まだ人込を歩くことを知らねえのだ。大小とも背中へ廻してしまひなせえ。

田舍侍　成程（とやつてみて）これは御世話でござつた。法のあるものぢや。これは忝けない。それ〱

（とよろしく挨拶して上手へ入る。）

若甲　なんだ。あの新五左は昨日江戸へ出たばかりで、この祭の中へのそ〱來る奴もあるものぢやねえ。

若乙　さうよ。全くあれが盲蛇たあ。

（こゝへ下手より、祭の番附賣尻端折、番附を手にもち。）

番附賣　お祭り番附。

（と呼びながら出てくる。）

若丙　おゝ、お前、今永代の方からきたのか。

番附賣　左樣でございます。

若丙　今あつちの方はどんな樣子だ。

番附賣　へい、今永代では、靈岸の花車が橋へかゝる所で、

大混雜でまるで人が大波を打つてゐますよ。

若甲　さうか、靈岸の花車が橋へかゝつちやあ、己達もかうしちやあゐられねえ、花車へ附かにあならねえ。

（と立上る。番附うりは呼びながら入る。引違へて魚惣の若い者一人、人を搜す體にて出てきたり。）

魚惣の若い者　おゝ、おめえ達は內の親方は見懸けねえか。

若甲　おゝ、お前は魚惣の若え衆だな。お前の內の親方にあ、己達は今日まだ出合はねえ。

魚若　さうか。何所にゐるのだか、困つたものだな。

若甲　さうしてお前、何か心配のことでも出來たのか。

魚若　何の、實はこの間から、家へおいた新助野郎、一寸した間違ひから、ぼんやり考へこんでしまつて、碌々飯もくはず、寢込んでゐるので、少し樣子がをかしいから、親方が氣を附けろといふので、みんな氣を附けてゐた所、この祭で親方はじめ、今朝から家は總出よ。その中でおれ一人貧乏鬮で新助野郎の番人についてた譯よ。いめえましいつちやありあしねえ。すると何だか、可笑しな眞似ばかりしやあがるぢやあねえか。かう顏をしかめやあがつて兩手で頭を押へて、あゝ、あの太鼓が太鼓がつて……

若乙　祭に太鼓が鳴るに不思議はねえぢやあねえか。

魚若　だから、可笑いや。その中、あつちでも此方でも賑やかな囃子だらう。野郎ぽーつとしたとみえて、突鳴裏口から飛出してしまやあがつた。おれはそれつと追駈けたが人込で皆くれ行方がしれねえ。兎に角親方に逢ひてえと思つて搜しにきたのだ。お前達ももし新助野郎をみかけたら、押へつけておいてくんねえ。

若甲　さうか。そいつは心配だらう。

魚若　うむ。

（こゝへ祭の若い者丁驅けて出て。）

若丁　おい、大變だぞ／＼知つてるか。

魚若　え、もし、何か狂人が間違でも起しましたか。

若丁　いゝや、さうぢやあねえ。今きいたら、今朝本所撞木橋に十七八のいゝ女が切られてゐるとよ。まだ引取り人が無えと見えてその儘だとよ。

魚若　さうか。おらあ又びつくりした。ほんとに親方は何所にゐるだらう。

若丁　それで今みんな見に行つたぜ。何うだ、お前達もいつて見ねえか。

（と下手へ搜す心にて入る。）

若甲　馬鹿あいひねえ。だが、祭の中で延喜でもねえな。

若丁　おゝ、さういやあ、お前達は知つてゐるか。今朝百人ばかりの輿丁が、御神輿を舁き上げようとすると、いつも輕くあがる御神輿がちつとも動かず、やつと上げる

と、あとにびつしより汗をかいておいでなすつたといふぢやあねえか。何かなけりあ好いがといふことだ。

若甲　かつぎあがるな、そりあ手前の御みこしのこつたらう。

若乙　さうだ〳〵、一杯のませてやりあいゝに。

若丁　馬鹿にするねえ。勿體ねえことをいやあがらあ。年寄手合は大喧嘩でもなきあいゝがと心配してゐるぜ。

若丙　此野郎はいつでも、そんなことばかり聞いてきやあがる。さあもう行かうぢやねえか。

若乙　さうだ〳〵出掛けよう。

（と若い者一同下手へ捨ぜりふにて入る。）

（正面の横町の奥より新助ふら〳〵として出てきて、四邊を見廻してゐる體。上手より祭見物の女房、小さな萬燈をもつた子供の手を引いて出る。新助つか〳〵と傍へゆき。）

新助　もし〳〵、あなたは美代吉は何所にゐるか、御存知ではございませんか。

女房　（氣狂ひとは知らず）いゝえ、一向存知ませんよ。

新助　さうでございますか。まあ聞いて下さい。あんな不實な奴はありませんよ。あいつはあんな綺麗な顔をしてゐたつて心は鬼です。蛇ですよ。

女房　（少し氣味の惡き思入にて）へえ、さうでございますか。私は急ぎますから、御免なさい。

（新助、行かうとする袖を掴まへ。）

新助　おや、お前さんは嘘だといふのだね。そりあ知らないからだ。お前さんも欺されるといけない。まあ聞いて下さい。（と胸を叩いて）あいつは胸の惡い奴です。あいつが困つて祭へも出られないと泣いてゐる所へ行つて、百兩といふ金をこしらへてやつたのですよ。するともう誰かを欺くらかして金が出來たものだから、もう要らないといふのさ。だが、そんなに早く金の出來る氣遣ひはない。ありあ贋金だ。（と聲をひそめて）こゝだけの話だが、あいつは贋金も使ひますよ。

（といつて突鳴。）

畜生、贋金つかひだ。

（と怒鳴る。）

小兒　母ちやん、怖いよう。

（と泣出す。女房困つてうろ〳〵して。）

女房　ほんとに仕様がないねえ。誰かきてくれゝばいゝね。

（とこゝへ、祭の若い衆、二三人、通りがゝりの體にてきかゝり、この體をみて。）

若い衆　何うした。〳〵。

（と寄つてくる。これにて女房は子をつれて急いで逃げてゆく。）

新助　（これを見て）やあ、皆さんも來た。聞いて下さい。あの美代吉は大惡黨ですよ。
若い衆　なに、あの美代吉が惡黨だつて。
新助　まあ、聽いて下さい、あいつが惚れてゐるのなんのといつたつて、みんなありあ欺すのですよ。あいつには三次といふ情夫があつてそいつと云合せては、みんな嘘を吐くのですよ。（と語調をかへて）欺して金を取らうとしたのだ。へん、取損なつたものだから、あんなことをいつてまやかすのだ。今姐妃といふのは彼奴のこつた。（といつて首を傾げ）だが、全くいゝ女だなあ、水髪の島田で、素肌へ上布をきて、褄をから取つて、切目の長い目で、他人をぢいつとみて、ニコリとした所は、全くいゝ女だなあ。（と聲を落して）だがあの眼に欺されちやあ、いけません。私は彼奴の爲に、一人の母さんが、國に待つてるのに、歸らずにゐたばかりに、田地、田畑は無くしてしまひ、其上こんな恥をかゝされては、もう國へも歸られなくなつてしまひました。（と泣ごゑになり）國には、惡い親類一家が竝んでゐる中へ、江戸でこんな目に遇はされて歸つては、それ見たことかと笑はれます。親の代までは名字帶刀の家だつた。それを親類共が寄つて集つて、取つて仕舞やあがつて、……だから私か稼ぎ溜めてもう一度母樣に樂をさせ申してえとおもつたに、情けねえ。わづか殘つた田地田畑まで無くしてしまつて……（と泣くことよろしく、又ふいと頭をあげて）こんなにだまされては、いくら田舎者だつて悔しくつてなりあしねえ。おれは彼奴を殺してしまふのだ。うむ、殺してやる。きつと殺してやる。さうだ、家へ道中差をおいてきた。
（とふら／＼と行きかける。）
若い衆一　いま魚惣の若い者の話しはこれだらう。
若二　さうだ。これだ、摑まへといてやらう。
（と若い衆摑へにかゝる。）
新助　なにをするのだ。おれは摑へられる覺えはない。ぢやあ、お前達は美代吉の廻し者だな。おれが邪魔だから、殺してくれと頼まれたな。
若一　これつまらねえことをいふもんぢやあねえ。
若二　まあいゝから此方へ來い。
新助　いやだ／＼（と振放し）ぢやあ、江戸の奴等が、みんな寄つてたかつて田舎者のおれをいぢめようとするのだな。もういぢめられるものか。江戸ッ子がなんだ、腹の底まで見てしまつたぞ。口先ばかり旨いことをいつたつて、みんな金が欲しさだ。金さへやりあ、何時でもニコ／＼するのだらう。江戸ッ子が何だ。みんな大嘘つきの大泥棒だ。

(と怒鳴る。)

若一　何を吐かしやあがる。

若二　途方もねえことをいやあがる。

若三　構はねえ。叩き伏せちまへ。

(と寄らうとする。新助懐より、百兩包を出し、封を切つて、一同へ二三十枚づつ叩きつける。)

若一　何をしやあがる。や、こりや小判だ。

(と拾ふ。)

新助　それ見ろ。金せえ、やりあ、いゝのだらう。江戸ッ子もなにもあるものか。ざまを見ろ。あはゝはゝは。

(と高笑ひして呆れてゐる一同を後にして上手へ入る。)

若一　えゝ、かう、あの氣違えめ、こんなに小判を叩きつけて行きあがつた。どうしよう。

若二　箆棒め、あんな事をいはれて抛られた小判なんか捨てつちまへ。己が拾はあ。

若三　ふざけるな。拾つといて魚惣へ返してやらにあならねえ。

(と一同小判を拾つてゐる。こゝへ下手より魚惣、鹿の子の七枚重ねの肌脱本卦返りといふ心で持物は赤いものづくめ、若い者二人に大團扇を持たせて、最前の若い者と話しながら出る。)

魚惣　さうして手前まだ捜しあてねえのか。

若者　へい。

魚惣　仕様がねえな。

若一　(氣がつき)　おゝ、親方、今こゝへお前のとこの氣狂がゐたぜ。

魚惣　さうか。さうして何方へ行つた。

若二　おれ達にこの小判を叩きつけて、あつちへ行つた。

魚惣　さうか。手前たち、行つてみろ。

魚若　おい。

(と魚惣の若い者上手へ驅けて入る。)

若一　親方いまお前のとこの氣狂に小判を打つけられて、拾つておいた。慥かに渡すぜ。

(と纏めて魚惣に渡す。)

魚惣　さうか。そりあ有難てえ。困つた奴だ。

(と受取る。こゝへ上手より、魚惣の若い者一人驅けてきて、)

魚若　親方今そこで、新助野郎を捆へたか、連れかへらうとしても、暴れて手に合はねえ。

魚惣　意氣地の無え奴等だ。ぢあ、己かいつてやらう。

魚若　だが、親方、おめえ怪我でもするとあぶねえぜ。

魚惣　馬鹿め、いくら氣が違つたつて、おれの前へ出ちあ、あばれもしめえ。お、野郎こつちへ來たこ

（とこゝへ上手より新助ふら〳〵と出る。魚惣の若い者二人後より從いて出る。魚惣つか〳〵と傍へゆき。）

魚惣　これ、新助、手前、あんまり、氣が小さ過ぎるにも程があらあ。見つともねえ。確固しろ。

（と脊中を打つ。新助ぢつと魚惣の顔をみて。）

新助　なに、この禿爺め。手前が歸るのを止めなきあ、こんな事にならねえぞ。いゝ年をして世話やきも大概にして引込んでゐろ。

（魚惣呆れて後へ下り。）

魚惣　こいつはおれでもいけねえ。それ、みんなで摑まへてくれ。

（とこれにて一同押へつけようとする。新助素早く潜りぬける立廻り、よき止まりへ、幕明きの田舍侍、脊中へ大小を廻したまゝ薄羽織を疊んで懐へ入れ、うろうろとして來り、祭の若い衆を見かけて。）

田舍侍　くや〳〵先刻の御人、また方角を失うた。八幡宮へはどうまゐる。

（と氣が付かずに新助の鼻の先へ、脊中を向ける。新助刀に目を付け、素早く、拔き放す。）

田舍侍　（始めて驚き）これ、なにいたす。

（と取支へようとする。新助刀を振まはす。一同わつと退く。新助刀を持つて向ふへ驅けて入る。）

田舍侍　これ、待て、これ。

（とこれも追つて入る。魚惣。）

魚惣　えゝ、飛んでもねえ事をしやあがる。これ、押止めてくれ。

若一　でも、刀を持つてちあ。

魚惣　えゝ、意氣地のねえ奴等だ。あゝ、えれえ者を引止めた。

（とべつたりとなる。）

仲町尾花屋前

正面一面出格子を開け放した家體、上手には門。家體には巴の紋の幔幕に軒提灯、毛氈を引つめ、屛風を立て、棧敷の體、男女の見物大勢、平舞臺には祭の練物二つ輻湊つた體、上手には、若衆、ぶち娘、（みな藝者）座頭、据ゑ大張子を縫附けたこしらへ（幇間）みな休息して茶碗酒をのみゐる。やゝ下手寄に伊勢音頭の一團（仲町藝者）踊つてゐる。美代吉同じこしらへながら一際目に立つ好みにて踊の後見にて中央にゐる。祭の警護、世話役等よろしく大賑やかの體にて道具とまる。

伊勢音頭の唄、翅角力。

『都にも住まじかりけり、角力とり、翻は翅の下りどころ。西の方には渡り鳥。東の關は明け烏▲

『拍子木たゝく啄木鳥に、續いて出たる名取もの。金鷄鳥の錦絲から、鈴懸け鳩の入れ黑子。小雀を先へ土俵入▲

『旣に角力も始まれば、行司は團扇持かへて油扇を鷄の、股立とりて鷹々と勝色名乘る聲上げて今日の出掛けは四十雀、老相撲なれど、巧者にて美事に敗けた溝鷦鷯▲

『次は今年の出來ものと鶯の名は谷渡り。我も／＼も出る中に進み過して鶺鴒が砂水浴びて逃げこめば、靑い目白の飛入りをふくら雀の腹櫓▲

『駒は挫ぐが得手の物。上手に透す翡翠が前髪解けて肩すかし。或ひは鴨の入首を、跳ね返したる勝角力。土俵の砂の働きはオクリ中入とこそ見えにけり▲

この踊りよろしく、よき頃に向ふより、魚惣の若い者一人驅けつけてくる。花道にて。

魚若　おゝ、美代吉さん。

（と美代吉を見付けて直ぐ傍へゆかうとする。祭の警護金棒で押とめて。）

警甲　おい、お前は、なんで踊りの中へ飛びこむのだ。

魚若　なに、美代吉さんに急用だ。一寸逢はしてくれ。

警甲　馬鹿をいつちやいけねえ。今踊の最中で、姉さんは後見に立つてゐる。待つてねえ。

魚若　えゝ、待つてられる用ぢあねえ。據處ない急用だ。

警甲　いけねえ／＼。用ならおれが聽いておかう。

魚若　えゝ、いへる用ぢあねえ。

（とごた／＼する。警護二三人寄つてきて。）

警乙　何だ／＼、けちでも附けに來やがつたのか。撲つてしまへ／＼。

（と「さうぢやねえ／＼」と頻に藻搔く魚惣の若い者を下手へ追込む。踊りは構はず、踊つてゐることよろしく「見えにけり」といふ切れと一緒に向ふにわつといふ人聲。一同びつくりして踊止み、向ふをみる。「何だ何だ」といふ聲。「永代が落ちたあ／＼」といふ聲、一同また驚く。こゝへ向ふより、町名主、詰合ひの家主袴、羽織にて驅つけ、花道にて。）

町名主　これ、祭はもう止めだ。／＼。今永代が落ちて、人がどし／＼落ちてゐる。

家主　若え者はみんないつてくんな／＼。

（と怒鳴つて直ぐ引返へす。群衆一同大騷ぎ、惣立ちとなる。）

若甲　そいつは大變だ。

若乙　それ、船を出して助けにゆけ。

若丙　おつと合點だ。

（と若い者がばら／＼驅出す。中には素早く着物を脱ぎ彫物緋ぢりめんの下り、懸守りをみせて驅けてゆくのもある。）

（女連はうろ／＼する。世話掛り、「幇間」、座頭、「幇間」は。）

世話　さあ、女の子は怪我あしちあ、ならねえ。

座頭　門の中へ入れ／＼。

（と頻りに聲をかける。）

（魚惣の若い者下手より出て、美代吉の傍へゆかうとして向ふへ行く若い衆連に押され、後向きに花道へゆき。）

魚若　おい、美代吉さんに用があるのだ。そつちへ通してくれ。おい／＼。おいつてば。

（と押戻されて向ふ入る。）

（平舞臺の女連は世話掛りに聲をかけられてみな門内へ入る。二重の見物も悉く立つ。あと寂となり、美代吉外二三人の伊勢音頭のこしらへの藝者のころ。美代吉鐵火に酒樽へ腰をかけて警護のおいていつた火の用心を取上げて、火打を打つて煙草をすひつけ。）

美代吉　まあ、丸で大風の吹いたあとみたいだねえ。

藝甲　ほんとに大變なことだねえ。さだめて澤山人も死ぬこつたらうねえ。

藝乙　祭をみにきて死ぬなんて、分らないものだねえ。

美代吉　人は老少不定といつて何時死ぬか分りあしねえ。思へば忌なもんだのう。

（こゝへ新助衣物の下前へ拔刀を隱して袖で上から押へ、ふら／＼出て來て伊勢音頭の裝をみて一人々々みて美代吉をみつけ。）

新助　やあ、おのれは美代吉。

美代吉　おゝ、おまへは新助さん。

新助　よくもおれを欺したな。

（と突然り隱してゐた刀を出して切り付ける。藝者二人わつと逃げる。美代吉、新助、一寸立廻り、美代吉門内へ逃げこむ。新助追つて入る。家の中にてあれえあれえといふ聲、ばた／＼人の逃げる音、しばらくして途絶える。）

（二重へ尾花屋の女中二人慄へ／＼出て。）

女中甲　まあ、何うしよう。男はみんな驅出して家には居ず。女ばかりで方々へ隱れて慄へてゐるばかりだし。

女中乙　今美代吉さんは酣部屋へ逃げこんで板戸を一生懸命押へてゐるが……誰か早く呼びたいね。お前こゝから下りられないかえ。

女中甲　足がふるへて仕樣がないよ。

（とこゝへ上手より、祭の若い衆四五人驅けて出る。）

女中甲　あゝ、お前さん。今人が殺されてゐるよ。來ておくれよ。

若い衆甲　知つてらあ。本所撞木町のだらう。今みて來たのだ。

若乙　これから永代へ駈けつけるのだ。

（と驅けてゆく。）

女中甲　あれ仕樣がないねえ。

（この中、家の中にて戸の破れる音。）

女中乙　あれ〱困つたねえ。

（こゝへ物音して美代吉逃げてきて屏風を倒す。奥一面開放した體にて打廻しの廊下、泉水をみて遠見、あとより新助、ふら〱として出る。二重にて美代吉と立廻り、女中二人隅に居すくんで慄へてゐる。美代吉一太刀切られて、下へ落ち、續いて新助飛下り立廻り追々開つけ、見付けた體にて、種々のこしらへの若い者二人、三人と得物を持つて驅つけてからむ。これを縫つて立廻り、トヾ中央で美代吉を殺す。若い者次第に大勢になり一同開いて棒を構へる。新助不意と二重へ手をかけ飛上り見えなくなる。一同それを追ふ。日暮れかゝる。

道具廻る

元の仲町裏

夕闇の體、それ、そつちだ、いや、そつちへいつたといふ聲一きりあつて途絶える。と正面川向ふの屋根より十五夜の月顔を出し、次第に上る。遠く木場の夜業の木遣り、正面材木の蔭より新助刀をいつか捨てゝ、そつと這ひ出す。こゝへ若い衆一人棒をもつて出て見付け。

若い衆　やあ、こゝに居たぞ、おゝ、刄物をもつてゐねえぞ。

（と怒鳴る。これにて上下より若い衆大勢出て。）

若　それ摑めえろ。

（と寄つて押へ、胴上にして二度廻し。）

若　それ、連れてゆけ。

（と連れてゆく、新助上にて手拍子うつて高笑ひしながら擔がれてゆく。）

――幕――

茨木屋幸齋（三幕）

一

新町揚屋茨木屋。

舞臺上手は内部より店先をみせた道具、下手は庭つゞきに離れ座敷。

はじめは午後の光景にて店内からりとして誰もゐず。やがて外より若い者喜之助陽氣に入つてくる。

喜之　やれ、暑いぞ〱。小春日和のほか〱としてちよつと急いであるくと、こんなに汗ばむ。（と脇の下を拭ひ）おや、誰もゐぬのか。おかめさん〱。

（と呼ぶ。仲居頭おかめ奥より出る。）

おかめ　お、喜之さん、もうお歸りか。

喜之　おゝさ、今歸りやした。そして旦那さんは？

おかめ　いま奥で昨日の帳を見てゐやんす。（と四邊をみて小聲になり）……そしてお前うまくあの呼狀は屆けてくださんしたか。

喜之　所が淸樣の家の前を幾度も行つたり來たり、好い首尾もなく、果ては人が見るやうなので氣が咎めて、狀はこの通り懷にまだ溫まつた儘……

（と結び文を出してみせる。）

おかめ　あれ、では屆かなんだのかえ。

喜之　あい、歩き損の草臥ぞん。その代り狀はこの通り溫まつた。これがほんとの上燗々々。

おかめ　えゝ、ま、おかんせ。それでは白妙さんが御氣の毒な、折角今日の首尾を樂みにしてゐたものを……家の旦那さんも心配してかうやつて無理な首尾まで造らへて井筒屋さんで窃と吉三樣に逢はせる手筈を……まあ、何うしたらよからうなあ。

（この時太四郎二十二三奥より出て。）

太四郎　これ、おかめ、淸樣の方の首尾が出來なかつたといふのか。

おかめ　おゝ、旦那さん、おきゝなされたかえ。

太四郎　おゝ、（と點頭いて坐り）私もあの白妙とは幼いからの遊び友達、禿立ちから始終わしと一緒に育ち、取分け優さしい彼の氣象、早く母親に死別れたわしには姉のやうに思はれて此頃の彼の心が不憫でならぬ。煩らつてゐる上に吉樣は六百兩までの工面はなつてもあと四百兩の工面がならず、親父樣に逢瀨を絶たれてあんまりな氣の毒さ。こんな無理な首尾をして白妙の客衆の中でも人のよいあの淸樣に呼狀をつけてそれを潮に井筒屋へ拔け

させ吉様に逢はせる手筈、あゝ矢張り惡いことはいけぬもの、首尾の出來ぬも當前、といつて白妙も吉様も今日は待焦れてゐるのを……あゝ、何うか思案はないものか。

（とうなだれる。おかめも喜之も氣の毒の體。こゝへ表の方より浦上與左衛門、老け扮りの浪人體、無案内さうにうそ〳〵とみまはし來て入口を覗きこむ。）

浦上　ちと內方へ申します。われらは旅の者にて當所不案內……

（といひかける。喜之振むき、身裝をみて。）

喜之　あい〳〵、道のことなら我等も不案內、外できかんせ。

（この內おかめ、氣がついたやうに窓と外して奥へゆく。）

浦上　いや〳〵道のことではござらぬ。少し御無心のことがござつて……

（と暖簾より入りかける。）

喜之　（忙てゝ）あ、これ〳〵、折角打水したその敷石へむざ〳〵と泥足踏んごんで貰ふまい……筋のない無心合力は堅い御法度斷りまする。

浦上　いや〳〵、われらも火小打帶むもの、左様な無心ではござらぬ。

（と編笠を取つて入る。）

喜之　（見て）や、おまへは先刻北側の局見世で嬲ぶられてござつた御武士。

浦上　さ、當所不案內の爲、よい氣な女子共になぶられいかい迷惑いたしまする。御宅の前も最前より兩三度通りかゝり遂に忍びかねての御無心、御自分が御亭主でござるかな。

喜之　いや（と一寸太四郎を見て）主ではござらぬが御用はなんでござります。

浦上　太夫と申すものに御近付になりたうござる。

喜之　わはゝゝゝは。こりや嬲らるゝも道理ぢや。おまへ、よい年をしてそのやうな道化、やめになされ。

浦上　ではこちらでもかなひませぬかな。

喜之　かなふもかなはぬも當家では通りがゝりの御入來はお斷り申します。

浦上　はて是非がない。（と考へ）なるほどそれが當廓のお仕來りでばござらうが、そこを貴方の御働きにてなにとかならぬでござらぬか。

喜之　はて質くどいお人ぢや、ならぬことはなりませぬ。さ、早う去んでくだされ、あ、これ、そこを其様に泥こつけにしては、はて仕様がない、えゝ去んでくだされといふに。

（といふ。浦上取つきやうなき思入。太四郎少し前よ

り頭を擧げてこの問答をきいてゐたが、浦上の樣子ありげなのを見て此時前へ出て。）

太四郎　これ、喜之助、控へぬか。手前方とお見掛けなされてお出でなされた御客樣、ましてや御武家樣に……

喜之　でもあれは袖乞の色氣違ひ。

太四郎　これ、なにをいふ。隨分御歷々の方々にはお忍びであの樣に御窶しなされてあとで落をおとりなさることがある。もし御無禮申してから御大盡であつたら何とする（とたしなめ、喜之助と入れ代り膝をつき）へえ、これは毎々御贔屓にあづかりまする。手前が亭主太四郎と申すもの、御用の程を仰せられまし。

浦上　いや、毎々御贔屓とは身に恥かしい御挨拶。（と腰かけ）われらは見らるゝ通りの田舍もの、傾城と申すもの、畵にかいたより見たことなく、寄る年波にあの世への土産がござらぬ。此度出府いたした序、一生の思出に太夫といふもの買うてみたい願ひ、（と扇をひろげて財布の金をあけて差出し）これに路金の餘りが一兩二分ござる。これを其許に御渡し申せば、これにてなにとか御取計ひはなるまいか。

太四郎　（小膝を打つて）いや、これは面白いお話し、年代記にのる傾城の買樣。ならぬ所ではござりませぬ。かういふお傾城買が私方へ御出下さるは揚屋冥利、喜んでお取持いたしまする。

浦上　（喜んで）では道知ぬ願ひ樣と御笑ひも下されず……

太四郎　はて何の御笑ひ申しませう。かう打明け仰せられるのが野暮なやうでほんとの粹、僞らぬのが傾城買の極意でござりまする……して女郎衆にお望みは？

浦上　なんの〳〵太夫でありさへすれば誰でも構はぬ。

太四郎　へえ、太夫でありさへすれば誰でも……（と不斗白妙のことに氣が付き、につこりとして）もうし、あの本統に太夫であれば誰でも構ひませぬか。

浦上　いかにも。

太四郎　（一寸考へて）えゝ、もうし御武家さま。御案内でもござりませうが、總じてこの女郎と申すものに初めての御客衆は御心の深さを試すため、大方初手は振ると申してふあしらひいたします。其處等はよく御合點でござりまするか。

浦上　はてその樣なこともとんと構ひませぬ。

太四郎　なに、あのお構ひなされませぬか。

浦上　いや御念には及び申さん。

太四郎　（喜んで）左樣でござりまするか。……（喜之助をみて）これ喜之助本家へ行つて白妙樣よんでこい。

喜之　（思はず手を打つて）成程こりやうまい。

太四郎　これ、何をいうてゐる。……早くと云へよ。

喜之　そりや申さずとも飛んで來まする。
（と浦上をみて笑ひを忍んで驅けてゆく。）
太四郎　さ、兎も角もどうぞこれへ。（と手を拍き）これ、だれもゐぬか。御客衆ぢや。お盃もつてきや。これかめはゐぬか。
（あーいと長返辭して奥よりおかめ盃臺をもつて出る。）
太四郎　これ、この御客衆、御案内しや。
おかめ　あい／＼どれへ御案内しませう。
太四郎　あの離れの小座敷が明るうてよかろ。
おかめ　ではかう御越しなされませ。
浦上　はい／＼、これは御雜作にあづかる。
太四郎　あ、もし、私御相手いたしまするのでござりまするが、ちと差しかゝりました用事ござりますれば後方御意を得まする。これかめ、今こゝへお相手に白妙さまを呼ぶことにした。私はまた先刻の用事で井筒屋までゆき、吉様に逢うてくる。用があつたら禿の横笛をよこすほどに頼みますぞ。……おゝこれは失禮いたしました。
（と有繋に氣が咎めて）はて忙しないことぢや。
（とてれかくしを云ひながら出てゆく。）
おかめ　さあ、こちらへ。
（と浦上を下手の離れ座敷へ案内する。この中仲居一人奥より重詰と銚子を持つてきて置いて入る。おかめ受取り。）
おかめ　さ、まづ太夫さま御出までにまづお一つ。
浦上　いや手前不調法でござる。
おかめ　まあ、でも御出までの御退屈凌ぎ、まあお一つ。
浦上　でござるかな。
（と盃を取り、一盃うけて下へおく。こゝへ門口より白妙やゝ病窶れのした太夫のこしらへ。引舟の肩へ摑まり禿を一人つれて前帶の女に傘さしかけさせ、靜かに出る。前帶の女はすぐ傘をたゝみかついで入る。）
引舟　（奥へ向ひ）もしたれぞゐぬかえ、太夫さんの御出ぢやわいな。
（あいーと長返辭して仲居二三人出る。）
仲居甲　おゝ、これは太夫さん、ま、聽いたよりは御惡い樣子もなく、今日はようまあ御出でなされた。
仲居乙　まあ、ほんに御顏色もよく御目出度うござります。
（白妙腰かけて。）
白妙　あい有難うござりんす。何所へも出ぬ所なれど、氣晴しにもと太四郎樣の御言葉で、座敷だけ氣儘に勤めにきました。まあ久し振りで外をみて晴ればれとしてよい氣持……（と懷紙であふぐ）
禿　でも太夫さんはいつになくせか／＼と歩かしやんし

て息ぎれがなさんせう。

白妙　（につこりして）なんのいのう。久し振りで出た嬉しさについ浮かされた……そしてかめどのはえ。

仲居　（心得て）これ、おかめさんゐてかえ。

（と呼ぶ。おかめきゝ付けて。）

おかめ　おゝ、もう太夫さまの御入來……一寸ごめんなされませ。

（と立つて白妙の傍へくる。白妙突如(いきなり)立つて思はず、）

白妙　おゝかめどの、わしや嬉しうて〳〵。

（といつて引舟、禿に氣が附き言淀む。引舟樣子ありとみて）

引舟　さあ、私等はもう往にましよ。太夫さん、かめどの、これにえ。

（と引舟、禿をつれて入る。仲居等もうなづき合つて入る。）

白妙　これ、かめどの、わしや聽くともう飛び立つ思ひ、久し振りで吉樣にあへるとおもふと何(なに)やかや一度に胸に逼つて涙がこぼれた。……これから行つて逢つたら何(なに)から云はう。先づ取縋つて泣かうわいなあ。

（とおかめの肩へすがつて咽(むせ)びなく。おかめも貰ひ泣きする。）

白妙　そして今日の客衆といふのは？

おかめ　にべもない田舍の御客、ちつとも障りのないお人、お座敷はあの離れ。

白妙　（うなづいて）では使ひがきたら賴みますぞえ。

おかめ　それに如才はありませぬ。

白妙　あゝ、いつもながら嬉しいぞえ。

（と一寸拜む。）

おかめ　さあ、御座敷へござんせ。

（と連立つて離れへあがる。かめ一寸片手を突いて、）

おかめ　白妙樣(さま)御出(いで)。

（と引合せ。）

おかめ　さあ御盃を白妙樣へ。

浦上　これは御無禮いたした。ぶしつけながら持合せを……

（と差す。白妙無言にうけて飲み、浦上へかへす。）

浦上　いや手前は全く不調法なれば……

おかめ　ほゝ、そのお盃は御受けなさるものでござります。

浦上　でござるかな。

（と受ける、かめ酌して。）

おかめ　もしこなた樣はお仕合でござります、今全盛の白妙さま、中々不意の御出(いで)はかなひませぬのを今日は折よう願へました。ようお拜みなされませ。ほゝゝゝ。では白妙さま、これにえ、あなたも御免し。

（と立つて上手の奥へゆく。白妙ゆつたりと浦上をみて。）

白妙　のう御客さんは遠國の御方とみた。ちと珍らしい話おきかせ。

浦上　いかにも我等は大和のもの、（と思ひ入あつて）もとより太夫様方を呼びまする風體の者でもなく御傾城と御言葉かはしまするも今日がはじめて。況してこの廓の何方が何方も存ぜず、此家の亭主太四郎とやらが心得て不思議にお目見えいたしまする。

白妙　（につこりして）これはまた御叮嚀な御挨拶、そのやうなことは取おいてまあくつろいだ御話しをなされませ。

浦上　いや／＼全く武骨一遍の御話一つならぬ某、今日これへまゐりしはよくせきのこと、情けある御傾城とお見かけ申して御願ひ申す。一通おきゝ下さい。

（白妙やゝ呆れて顔をみてゐる。）

浦上　我等が兄弟より親しういたすものゝ一人娘、今年十五に相成るが、當春より行方しれず。もし人買の手へでも渡りしかと京都伏見の遊女町、より／＼に尋ねてみても相分らず（と涙を抑へて）ことに母も無い奴の、父の歎きを御推量……（とまた泣き）親子の心想ひやり我等自分の身の上のやうに斯様に尋ねまする。數多い禿子供の中にもし思ひ當りの方もあるやとかく御招き申してかかることお耳にいれまする。……まことに無躾ながら思ひに餘つた御願ひ、御聽き分け下されい。

（とはら／＼落涙する。白妙次第に同情して眼を拭ひ。）

白妙　のうはじめての御客衆に涙をこぼしたはこれがはじめて……些と違ふか違はぬか、女郎の成立ちは皆それに似よつたこと。親御のおなげき、御念頃の中といへばさこそとおもはれまする。私も昔が思ひ出されて思はずも泣きました。（と鼻打ちかみ）此廓の女郎屋は禿たち多いと申しても二十人か三十人、たゞこの屋の太四郎様の父御は茨木屋幸齋とてわし等の親方、この揚やを太四郎さまに出させ、自分は別に大きな置やをなされます。太夫ばかりが五十人、天神が七十人、禿ばかりが百人あまり、もしその中に娘御がひよつと居まいものでもない。それとのう聞きあはしてあげませう。

浦上　なにお聞き合せ下さりやうとや、早速の御承知、ああ忝けない／＼（と涙を抑へ）由ない話にお傾城の涙を絞らせました段御容赦にあづかりたい。

白妙　なんのまあ、その御會釋には及びませぬ。流れの身のこぼす涙はこゝらがまことでござります。

（こゝへ横笛十五位禿姿、急がしげに暖簾口から入つ

てくる。）
横笛　もし、太夫さんはこちではござりませぬか。茨木屋の横笛でござんす。
白妙（すぐ聞耳立てゝ）あい、白妙はこゝに。（と浦上に會釋して立ちこなたへ來る）
横笛（懐より文を出し）これ太四郎様が本家へ來てお前に進ぜとおつしやんす。
白妙　これ。（と制して文を披げみて）やあ、吉三様はもう井筒屋に……では直ぐにお前と一緒に裏口から……
（一寸横笛にさゝやく、横笛うなづき笑ふ。此時座敷より浦上、何氣なく覗き、ふと横笛を見て驚き、辭を掛けようとしてためらひ、種々思入、白妙は文を仕舞ひ、奥へ向ひ、）
白妙　これかめどの、わしやちと遁れぬ用が出來た、一寸往てきますほどに、客衆の前を頼みます。さ、横笛、きや。
（と云ひ捨てゝ、一寸胸を押へてとつかはと出て行く。横笛つゞいて驅け出ようとする途端、浦上座敷より。）
浦上　これ禿衆々々。一寸これへ借りませう。
横笛　あい〳〵（と振り返りみて）や、父様かいの。
（走りより取り縋り。）
おゝ父様ぢや〳〵。

浦上　あ、これ、聲が高い〳〵。（と顔をみて）それでもようまあ無事でゐてくれたな。
横笛　あゝ、あひたうござつた。
（と互ひに抱きつき泣く。浦上涙を押へ、）
浦上　これ、みや、これへ來い〳〵。
横笛　あい、〳〵。
（とこれにて横笛上へあがる。）
浦上　はてまあ、何からいはうやら。この春より今日が日まで、尋ね餘つて最早此世に逢はれぬものと思ひ切りながら、若やと思うてこゝへ來て思ひもよらず逢へたるぞ。……だがまあ何として禿なぞとはなつたのぢや。
横笛（泣きながら）父様に御苦勞かけ、自分もこんな憂き目をみるもみんなわたしの心が足らなんだからのこと……此春花をみての戻りがけ、白髪頭の赤ら顔、浪人らしい親父めが、やあ、浦上與左右の娘か、小さい時に逢うたればわが顔は覺えまい。無事の成人目出たい〳〵。そちの親父も長々の浪人、氣の毒な。其方をさる大名の奥へわが傳手で奉公に出さう。やがては親父の立身の便りにもなる。たつた今久し振りに親父に逢うて談合きめてお主をこゝまで迎ひにきた。さあ往こと誘はれて、騙されるとは夢にも知らず、父様さへ合點ならといふたら直ぐと駕籠にのせ、この廓の茨木屋幸齋といふおきやへ

連れてきて一生を五十貫に賣りわたされた。(と泣く)

浦上　(歯がみをして)お丶憎い奴の、てつきり、そやつは人商人…… 去りながら左樣な迂論な奴より買ひとる茨木屋とやらの主は曲者、よい、これから某が懸合うて……

(と押取刀で立上る、横笛忙て丶前より縋りとめ。)

横笛　これ父樣、待つて下さんせ。その茨木屋の主といふは鬼ときこえた非道者、迚も一通りの懸合ひでは却つて理を非に云ひなされて御身の上となりまする。じつくりとした御思案どうか賴みまする。

浦上　(ぢつとなつて)　別れてからはまだ三月、子供のやうにあつた其方が、いつ、その樣に大人びた物云ひ、口上、太い苦勞をしたとみゆるの。

横笛　(堪らなくなつたやうにワッとなき)云ふまいとおもうたが父樣きいて下さりませ。私も間がな隙がなあつたら逃げて退ふと心を配つてもいつかな油斷のない親方、その根性なほさぬかと縛つて長押に釣り下げられたこともあり。

浦上　お丶。

横笛　柱を橫に渡して足に石を括り付けて、それにのせられる木馬とやらいふ仕置にあつたこともある。

浦上　え丶。

横笛　ぶち擲きは常のこと。食を止められたこともある。いつそ死なうとおもつたれど、父樣にもう一度あひたさに今まで生きてをりました。

浦上　えい、何といふ非義非道……併しかうして廻り合ふからは父がどう工夫してなりと必と取返す。必ず心を落すまいぞ。

横笛　あい〱、今こ丶で父さまにお目に懸つたれば心に力賴みがある。少しも早う取返して下され。

浦上　お丶、お丶、必らず取返す。なれどそれまでに親の名、きつと人に語るな、漏すなよ。

横笛　あい〱。

(と親子手を取り泣き居る思入。暖簾口よりやり手のなべ入りくる。)

なべ　もし、家のちびはこちらへ來てゞはござんせぬか。

(横笛きいて急に涙を拭いて下へおりる。なべ見付けて)

なべ　お丶、そこに、おのれはなにとして、今つから油賣ること覺えてなんとする。え丶も、野太い奴の。

(と横笛を打とうとする、横笛袖をくゞつて上手へにげる。なべ追ふとするを浦上飛んで出て止め。)

浦上　これ〱この禿衆、御用の隙かいたは我等があやまり、廓珍らしさに禿衆とらへて長話し、どうか御了見下されい。

なべ　はい／＼、これは御客樣の手前もお恥かしいなれど大抵では性懲りのない奴、どうぞ見捨てゝおいて下んせ、さあ失せう。

(と横笛の脇腹より手を入れて見えぬやうに捻る。横笛ぢつと痛みをこらへて親にみせぬ心、引立てられて門口を出て出格子の外を見返り／＼連れてゆかれる。あと浦上拳を握り。)

浦上　えい、落魄れたりとも武士の娘、その娘をみす／＼親の前で下司女にさいなまれ、切つても捨てられぬ淺ましさ。……おゝ、親方茨木屋幸齋とこゝの亭主太四郎とは親子とか、幸齋いかに無道の者なればとて、彼奴も子を持つたれば親子の哀れは知るべき筈、某大地に手を突いて頭を下げ膝を折つて口説くならば指したる我大小の義理にも通つて聞分けぬことはよもあるまい。……兎も角も亭主のかへり待受けて……

(と此時外にて「えい、何と致す無禮もの、放せ、／＼」なぞと人の爭ふ聲する。浦上不審と門口へゆきみて。)

浦上　やあ最前の白妙とやらいふ傾城が男と一緒に引つ立てられてくる。さてはあの法體が噂にきいた茨木屋幸齋か。うむ、何にしても忍んで樣子を……

(と離れ座敷のうしろへ小隱する。外の爭ひ一段烈しくなり、深見吉三、一木差し、若い者大勢と爭ひながら出て突かれて下にゐる。茨木屋幸齋白妙を引立てさせ、のさ／＼と出る。後より若い者大勢用心棒をもつて出る。奥よりおかめ、はじめ仲居等出てこの體に驚きながら「お歸りなさいまし／＼」と口々に挨拶して褥、たばこ盆、天目なぞ直す。幸齋むずと坐して。)

幸齋　えゝ、おのれ等太い奴の、おれの淨玻璃の眼をくらましてようも忍び合うたな。今見てゐをれ。よい目に合はせてくりよふ。

(この中おかめは吉三をみ、白妙を見、途胸をつく思入。仲居二三人と目立たぬやうにそつと白妙の傍へよりそひ介抱する。)

幸齋　やい、おのれは白妙の馴染とかいふ西國の吉といふ男か。商賈物に忍び合ふ盜賊め、いきずりめ、面上げぬか。

吉三　(詫まり入りたる體にて)　盜賊といはれても忍び合うたるは我あやまり、重々御詫び申しまする。(と頭を下げ)なれどもこゝに一つのお願ひ、身の不屆きに御腹立の最中へ申すもいかゞな事なれど致し樣なき身の切迫、たゞ其許樣の御慈悲に縋つて願ひまする。

幸齋　ふむ、その願ひとは？

吉三　さ、無躾に申しますれば兼ねて井筒屋よりも申上げ置きましたる通り、六百兩にてあの白妙、お暇下さりま

せ。

幸齋　何(なん)ぢやと。

吉三　さ斯樣に申しますれば餘り身勝手なお願ひとお蔑視(さげすみ)もありませうが、何(なに)を隱さう某は唯今養ひ親の勘當うけ、今は天地による所なき身の上、あの白妙は新造からの久しい馴染、廓にあつても夫婦同然の仲、今この破目(はめ)になつて次第に煩ひは重るばかり、何卒いたして廓の外へ出し、養生させたしと、この一腰は死にゆかれた實父の讓り、由緒正しい正宗、これだけにのこる我家の系圖、末代傳ふる品なれども賣代なして身の代とおもへども、方方主を尋ねても千兩、二千兩にも賣られぬ名劍、時も時とてやう／＼三百兩、五百兩、六百兩より上に値(ね)をつくるものもなく、千兩二千兩の金、つや／＼惜むにはなけれども、今のこの身には出來ぬ沙汰、かやうな見苦しい御無心申上ぐるもよく／＼のことと御推量おきゝ屆け下さりませ。

幸齋　（この前より腮で差圖して若い者に肩叩かせてゐたが、止めさせてえせ笑ひ）えい、何(なん)ぢや、默つてきいてゐれば大金出して抱へた奉公人、千兩といふものを負けて六百兩にしてくれいとは法外な、いかに武士(さむらひ)の算用しらずぢやとて見た所が餘り豐かさうにも見えぬ身の廻り、その體になつて世間の世智辛いことを知らぬとはよく／＼なうつそりな。それだからこそ貧乏するのぢや。わつはつゝ、は。

（と大口あいて笑ふ。白妙たまらず、仲居等を退けて出て吉三に縋がり。）

白妙　あゝ、ありがたい、吉樣、あれほど寛濶な物に堪(こら)へぬお前の氣象、それが私故にこそ手を支(つ)いてそれほどまでに言葉を下げて、えゝ、私や口惜しい。嬉しい。悲しいわいな。

吉三　（それをヂッと止め、幸齋に）いや、知つたればこそ此お願ひ、現在白妙を目の前におきながら我自由ならぬも金故と知る苦しさ。恥も作法も外聞も忘れて武士が兩手をついての御願ひ、おきゝ屆け下さりませ。

（白妙これをきいてワッと泣く。）

幸齋　やあ、ならぬ／＼。四の五のと面倒な世迷言、えゝ、此奴女郎に忍びあふからは、廓の作法、打(ぶ)ちのめした上で摘(つま)み出せ。其上で白妙はおれが折檻する。えい、なにをうぢ／＼早くしろ。

若者等　へえ。

（と立掛る。この途端太四郎騷動をきゝつけた心にて忙てゝ驅けこみ來りこの體に。）

太四郎　あゝこれ、親父さま、しばらく待つて下さりませ。（と若者等を制し幸齋に）こりやみな、吉樣と白妙が惡い

のではござりませぬ。二人を忍び合はせたのはこの私、どうぞ御了簡下さりませ。

幸齋　なんぢや、お主がした。たわけめが。(と少し拍子ぬける)

太四郎　でもあんまりな御氣の毒さ。あの樣に神妙になされて……

(この時吉三再び手を支く。)

あたまをさげたり手まで支いてござるもの、どうぞ吉樣が積むといふ六百兩の金だけで白妙が暇をば……

幸齋　やあ、おのれは何不足なく大樣に育つて金銀儲ける苦をしらず、澤山さうにつか／＼と物をいふ。頭下げるがなにめづらしい。橋臺で鐚錢一枚投げ出せば地に頭すりつけて行過ぎるまで辭儀するわ。

吉三　(屹となつて、)なに某を物乞に……

幸齋　おゝ、物乞というたがなんとした。その身裝で裏口から女郎の餘りをせゝつてあるくおのれが物乞でなうてなんとする。

吉三　(ぐつと身を起して)やあ最前より身に引目のあればこそ、己のやうな奴にかうまでも身を下して頼むにもきき入れずばもう頼まぬ。武士たるものが意地をすてたの一言は死ぬより苦しい心もしらず。物乞の、ぬすびとのとあるまゝの雜言、日頃の我なればその一言でも堪忍せぬ。えい、世が世であれば、直にも言葉をかけぬ奴にかく手を下げたとおもへば口惜しいわい。く、口惜しいわい。いつそもうおのれ。

(と刀の柄へ手をかけ、走りよろ。白妙アレーと思はず止める。幸齋あわてゝ。)

幸齋　やあ刄物に手を懸ける亂暴者、構はぬ。棒づくめにして叩き伏せろ。

(若者等一同用心棒で押つ取りまく。吉三ハッと我にかへり一人二人、棒を跳ねのけ。)

吉三　や、武士たる者を棒づくめにするだけは免るせ／＼。不淨者のおのれ等に手込にされては切死しても屍の上の恥辱。手を觸えずとも立歸る／＼。手を觸ゆるな／＼。

(と圍まれて次第に門口へゆき。)

吉三　おゝ白妙。

白妙　吉樣。

吉三　えゝ情けない。二人のざま。(と泣き)おのれ幸齋、身に過ちあれば今日はこの儘に立歸る。おゝ白妙、縁あれば又逢へる。隨分と短氣せず命大事にしてをれよ。

(と袖に顏を隱して吉三驅けゆく。)

白妙　あれ待つて、まだ云ふ事も、きく事も……今別れたら、もう逢へぬ。これ吉樣。

(と夢中になつて追縋らうとして二三度引もどされ、

思はず幸齋の顏をみてむら〳〵となり、つか〳〵と行き見据ゑて。)

白妙　これ親方さん、餘りぢや情けない。たとひ男と忍び合うたとて此永い年月お前の爲に勤めおろそかにせず。今日まで辛抱した私の心を思へばこれ程のこと大目にみたとてお前に御損もいきやすまい。子飼の時から傍におき大抵わたしの氣心もしれてあらう。それを餘りぢや。何ぼしがない私ぢやとて茨木屋の白妙と少しは人に知られた身を禿子供を折檻する樣に往來中を引立てゝ、大事な男の顏はさらされ、町内の女郎衆達の見る前で、よう囚人を追ふやうに追立てなさんしたな。あんな姿は地獄の繪よりみたことない。えゝ生きながらの地獄とはこの事、えつ口惜しい(とヒステリカルに泣き)もうがまんがならぬ。

(立上る。太四郎最前よりハラ〳〵して手出しもならずゐたるが此時止めて。)

太四郎　あ、これ親父樣に逆らうては惡い〳〵。親父さまへの詫言は己れがいふ。そなたへの詫言も己れがいふ。何が何事もわしに免じてだまつて〳〵。

白妙　(向直つて太四郎の膝に縋り)　えゝお前にはわしや濟まぬ。お前に辭をかけられてはわしや何にも云ふこと出來ぬ。何卒々々云はして下され。お前への詫はあとでする。何卒々々いはして下され、(と身を振はせ)いえ〳〵いえ何卒いはせて下され。(と幸齋の方へ向きなほり胸を抑へて)これこなさん達の眼からみたら、かういふ不運な果敢ない身、死なうとも生きようとも蟲けらほどにも思はれまいが、これこち達の身體ぢやとて撲たれや痛く、くすぐられりや笑ひまする。切ればこなさんと同じやうに赤い血が出る。辛いといふことも人並、悲しいとおもふ念もかはらぬ。それをこの樣な目にようも合せて(と泣き)人前もならぬ身にして下された。女郎には女郎の張りもあれば見得もある。それをようも〳〵、えゝ口惜しい〳〵(と身を振はせ)これ女ぢやとて〳〵一心こめた怨はとほるものか、徹らぬものか、覺えてござんせ。

(と果てはせき入り〳〵息をきらして睨みつける。)

太四郎　(介抱して)　これ、身體に障つてはわるい。そ、そ、その樣に身を揉んではなほ咳きいる。〳〵。さ、あつちへ行つてちと寢るがよい〳〵。

幸齋　えい、おのれらの分際で恨よばはり片腹いたい。病人丈に大目にみれば附け上る。あんまりな頬桁叩いて己に腹立てさするな。隨分ぶち据ゑかねまいぞ。……

白妙　(屹と顏を上げて)　え、ぶち据ゑる、えゝ打つなら打たんせ。蹈むなら蹈まんせ。えゝもういつそ蹈ころされてあの世からこなたの未來を見てゐよう。

幸齋　えゝ、こいつ、まだいふか。
（と立掛る。太四郎あわて止め。）
太四郎　これ親父さま、病人の白妙、手荒なことをして、若しものことがあつたら何となされます。
幸齋　はて死たとて已の金出して買つた奴、損すりや濟む。
白妙　（カッとして）もうそれまできけば親方でない。人鬼め、惡魔め、えゝ口惜しい。
（と夢中になつて武者振りつく。幸齋振りはなし蹴とばす。白妙ころび胸を打ち、思はず血を吐き、それを見て氣の遠くなつた思ひ入り。）
白妙　おゝ吉様、わしや死ぬる。蹈まれて死ぬる。……ええ、また云ふ事も聞くことも、おゝ吉様々々……
（といひながら氣がとほくなつて倒れる。太四郎驚いて。）
太四郎　お、こりや、氣絶ぢや、これかめ、さ、奥へつれてゐて直く醫者よんで介抱しや。わしもすぐゆく。
（いこれにてかめ、仲居等白妙を抱へて奥へ入る。太四郎幸齋をみて泣き。）
太四郎　もし、親父様！
幸齋　何ぢや。お主なんで泣く。
太四郎　えゝ、ま、あなたはこの様なことを度々なされて後の詰りはなんとなります。
幸齋　これお主、またしても氣が弱い、そんな事氣にかけるな。
太四郎　いえ〳〵氣が弱いではござりませぬ。この様なことなされたら親父さまのお成行が……
幸齋　はてまだいふか。これ、よう考へても見い。この已がこの様に骨折つて金銀たむるも誰が爲、みんな汝の爲、さう膽玉が小さうてこの身代蹈み固めて行くことがならうか。さ、もつと氣を大きう持たぬか。えゝちと確固せ。
太四郎　（是非なき思入れ）
（こゝへ母屋の手代一人狀筥をもつて忙たゞしく入り來る。）
手代　もし、親旦那様はこれにお居でゝござりましたか。一寸お顔を。
幸齋　はてなんぢや、血相かへて何が起つた。
手代　でもこの様な御奉行所からの差紙が……
太四郎　え、御奉行所から差紙が……
幸齋　あはゝゝは。年中出入の多い遊女屋稼業、差紙が珍らしいか。これへ出せ。
（と手に取つて狀筥の封印きり狀をとつてよむ。）
幸齋　「其方儀御吟味申すべき儀有之、明午の上刻奉行所へ出頭すべき事、屹度申渡し候也」ふむ、なんぢやしら

ん。

太四郎（心配して）おゝ、そりや決定あの能舞臺のこと、それだから申さぬことではござりませぬ。早速今夜中にお取毀ちなされて明日はお言ひ開きを。

幸齋　はてなにをいふ。折角の能舞臺、もう一月もしたら舞臺開き。その舞臺を今更破してなんとする。この幸齋ほどのものがそこに拔目はあるものか。大名も及ばぬほどな贅澤はしてあるが態と本式には建てゝはない。大名ぢやとて人。人がするほどのことをこの幸齋がしたとて仔細はない筈の、そこが町人の殘念な。だがその樣な心配いらぬ。こりや明日はおれは病氣というて誰ぞ袴つけて出させと喜兵衛にいへ。

手代　へ、それでは代人をお出しなされまするか。

太四郎　もし、その樣なことをなされたら重ねての御咎めが……

幸齋　はてこの幸齋、なんの利祿に今更白洲の砂に蹲踞ふか、（と手代に）これ早くせ。

手代　へい。

（と出てゆく、太四郎しよんぼりとしてゐる。）

幸齋　おゝ、おれももう往う。や、先刻すこしあがいたので脾疲うなつた。これ何奴ぞ來い。

（若い者一人へいと出る。）

幸齋　おのれは先へ往つて善哉餅いひつけておけ。但し小豆は舌に障つて心地わるい。京の龜屋の羊羹すり潰してせいといへ。

（若い者へいと先へかけてゆく。）

幸齋　では太四郎また後に。これから往て舞臺開きにする松風の稽古ぢや。

（と悠々と出てゆく。若い者も續く。太四郎も送つて出る。浦上與左右小隱を立出でて。）

浦上　所詮あの心では我等がいかに嘆きをみせて口說いたとて聞入れはよもあるまい。生中のこと云ひ出して仕損じては後日の首尾もいかゞ。こりや迚も上の威光を借りずば……何れにしても一先宿へかへつてからのこと……

（としを／＼と思案しながら歸りかける。太四郎も思案しながら歸つてきて思はず行當り雙方氣がつき。）

浦上　やあ、これはご亭主、今日は勝手も殊の外御取込みと見受けますれば長居もいかゞ、それになほ參らねばならぬ用事もござればもうこれで御暇申します。

太四郎　これは／＼もうお立で、まだしみ／＼と御挨拶も申さず……

浦上　なんの／＼……然らば御免下さりよう。

太四郎　では重ねての御出でを待ちます。

（と互ひに挨拶して浦上は外へ出てゆく。太四郎なほ

しよんぼりと立つてゐる。やゝ此前より日暮かゝる。奥より若い者一人燭臺を持つて出て表の懸行燈へ火を入れ、不審相にして奥へゆく　外は賑やかな太鼓入りの騒ぎ唄になる。太四郎柱につかまりしく／＼泣出す。）

―― 幕 ――

二

茨木屋本家幸齋の居間。

舞臺正面床つきの上段の間、平ぶたい上手は襖の出入り、下手はつゞいて下手前廊下への通ひ口、障子を開けて渡り廊の一部をみせる。すべて豪奢をきはめた好み。上段の前面の左右には銀のひげ籠、和蘭繪の壺なぞさま／＼の器にいろ／＼の名産珍菓なぞをいれ、進物臺へのせた祝儀の贈物を並べてある。

（幕あくと平ぶたいに福庵醫者のこしらへ、番頭九兵衛、羽織こしらへ、二人話の體。下手に能役者二人、麻上下後見のこしらへにて、向ひあひ、廣蓋にのせた松風の装束を調べてゐる。）

福庵　いやどうも今日はお日和と申し、お客と申し日本一の舞臺開き。それに今の熊野、あの装束の結構さ、大名衆も眞似がならぬと御評判、御座敷ではあとを松風、大待かねでございます。……さうして旦那樣は今どれにおいでゝございます。

九兵衛　唯今汗になられたとて御風呂でございます。もうやがて御上りなされます。

福庵　成程、成程、あれほどの大物、お疲れも一しほ、早うあとが見たいなぞと此方の榮耀ばかりは申されませぬな。

（この中後見二人は装束を調べをはり、袱紗をかけて上段の下手へなほす。この時奥にて「お上り」と呼ぶ。上手にて「あーい」とこたへる。）

福庵　お、もうお上りでござりまするな。

（と居住居をなほす。上手襖より禿甲乙二人出て上段の間へ脇足、紙置臺、重ねぶとんなぞ直し、襖ぎはに平伏する。茨木屋幸齋湯上の體にて縮緬浴衣、名古屋帶にて、手拭をつかひながらのさ／＼と出て重ねぶとんへどつかと直る。後より禿二人、好みの褞袍をきせかける。幸齋手拭を禿甲へわたす。甲はそれをもつて入り、すぐまた出て、二人後へ控へる。）

福庵　おゝ、これはお風呂でございましたか。いや今の熊野の結構さ、御座敷では噂とり／＼。九兵衛どのに今御話いたした所。あの「のう／＼村雨の俄かにして花を散

らし候はいかに」なぞの邊、憚りながら米をとる大夫達も跣足、この上日和に雨がほんに降つて來たやうな氣かいたした。いやとんと結構の頂上、惜しいお方にこの藝、たまさかに出さるゝ丈で仕舞つておかるゝ。福庵なぞにこの藝の半分もあつたら醫者ではをりませぬ。

幸齋 （不機嫌さうに） えい、ぺら／＼ともう止めにせ。熊野で雨がふるとはよくいうた。では次の松風では家內に波風が立つか。聞きたうもない世辭、もう饒舌るな。

福庵 （顏色をうかゞつて） こりや何か御氣にさはりましたか。

幸齋 おゝ氣にさはつた。大きにさはつたわ。水ばかりに五人も三人も係つてゐて京の水をきらして、かゝり湯に大阪の水を使はせをつて肌ざはりの惡さ、とんとねばつくやうで心地わるい。これ九兵衞、われもちと屆かぬぞ。帳面預かるばかりが役ではない。臺所にもちと氣を使へ。

九兵衞 （是非なく） へえ、恐入りました。

幸齋 あゝ、金次第で心にかなはぬことなけれど、汲み立ての京の水と嵯峨松茸の取り立て。この二種がまゝならぬ。此頃に上りたいが、道中が大儀な、船は嫌ひなり、馬はいや。駕籠はふらつきをる。……おゝ福庵、お主は地體京生れ、もし貧乏公家に近付があるなら御所車一輛かうてくれぬか。

福庵 へ、御所車、なにゝ遊ばす。

幸齋 知れたこと、乘つてあるくわ。

福庵 へえ。

（と福庵も呆れて口をとぢる。幸齋ふと祝ひものゝ品品をみて。）

幸齋 うむ、これ九兵衞、この品々、こりや何ぢや。

九兵衞 はつ、それは大夫たちの贔屓々々の御客さま方から今日の御祝儀としての御進物でござりまする。唯今お風呂でございましたので、これへ運ばせてをきました。

幸齋 （笑みを含み） うむ、祝着々々。何れもおれが好物の品をよう知つて心入れの程、忝けない、一禮いはう。大夫たち、これへよべ。

九兵衞 へえ畏まりました。

（と一禮して下手廊下口へ入る。此時後見前へ出て。）

後見甲 御裝束は整うてをりまするが、すぐお召しになりまするか。

幸齋 まあ待て、これからおれは飯をくふ。見物共、もうちつと待たせてをけ。

（この時下手奥にて鼓をしらべる音きこえる。）

幸齋 あれ、鼓をしらべをるわ。もう次ぎをはじめるか。これ一人あつちへ往ておれが案內するまで始めるなと止めてこい。

（後見甲はつと下手へ入る。）

幸齋　（今一人の後見に）お主もこの間に勝手へいつて飯にせ。福庵も呼ばれてこい。（と禿に）こりや膳出せといへ。

（禿甲これにて辭儀して立つて上手へゆき坐り、「お上の御膳」と呼ぶ。奥にて「はーい」と答へる。）

福庵　（辭儀して）では下拙も、あちらで御雜作にあづかりませう。

幸齋　お、さうせ〱。

（と福庵先きに後見乙下手廊下口へ入る。）

（上手より下髮、裲なり、緋の袴の當番の遊女、二人各金襴の袱紗をかけた懸盤を捧げて出て幸齋の前へ、据ゑ、一人は更らに入つて飯櫃を臺へのせて持つて出て、控へる。）

（幸齋袱紗はねのけ、膳の上をみて。）

幸齋　たんと世界にもう喰ふものないか。明けても暮れても鯛の鯉のと喰はれぬ物ばつかり、この二の汁の鳥はなんぢや。きいてこい。

遊女甲　いや聞いてまゐるには及びませぬ。何がな珍らしい物とて、生鶴のお汁にいたしました。

幸齋　えゝ、鶴といへば結構なものかとおもうて、脂がなうて喰はるゝものか。打明けて犬に喰はせろ。（と膳より取のけ）おゝ、こちの皿はなんぢや。

遊女乙　あい、そりや生鮭でござりんす。わざ〱若狹へ飛脚を立てゝ取りよせたと申されます。

幸齋　なに若狹へ取りにやつた。こりや出來たわ。

（と箸をとる、この時下手より大夫長門、薄雲、初紫、奥州、染物の裲、前帶にて廊下より出て、たがひに一寸會釋してよろしく居住ふ。）

長門　旦那さん、お呼びなされたは、何ぞ御用でござりんしたか。

幸齋　（にこ〱として）おゝ、大夫たち、揃うて大儀、大儀。なに用と云ふ程のことでもない。今日の進物の禮いはう爲、何れもが親方大事、客大切と勤めらるゝ故、これこの樣に客衆からも心にかけた進物、幸齋祝着いたした。

長門　これは何かと思うたら、御覧にいれた品々のこと。親方さんの御機嫌にその樣にかなうて始合、のう皆さん。

薄雲　さうでござりんす。何不自由のない旦那さん。何がな今日の御祝儀に、お氣にかなふかと、大體苦勞したことではない。

初紫　それがまあ御氣にかなうて御喜び、この事を客さん達に話したら甲斐があつたとさぞお喜びでござんせう。

奥州　それにつれては私らも喜び、嬉しいことでござりん

す。

長門　ほんに皆さんの云はんす通り、私たち勤めの身の喜びは、親方の機嫌にかなふが第一、今日の御祝儀、心から御喜び申し上げます。

幸齋（いよ〳〵にこ〳〵して）何れもの賢い口上、幸齋ます〳〵滿足した。したが勤め〳〵と思うて無理酒などして煩つて下さんすな。いや今日も先刻から客衆たちの側をつとめてさぞ氣づまり、こゝには遠慮はいらぬ。ちと足投出すなり、寢ころぶなりと心まかせに休息なされ。なんの親方の前なぞと氣兼は無用、われらが大事の金箱さまたちぢや。

（長門ら顏みあはせて思ひ入り、長門よろしくうなづき。）

長門　もし、皆さん、旦那さんのよい御機嫌、それにつけてもかの事を今御願ひ申さうではないか。

薄雲　おゝ、さうでござりんす。又とないよい折から。

初紫　ほんにわたしら一同の御願ひ。

奥州　長門さん、お前の口から旦那さんへ。

長門　あい、ではわたしから旦那さんへ申さうから、お前方も口をそへて下さんせ。

（と向きなほり。）

長門　もし旦那さん。これにゐる皆さん始め、一家中の朋輩たち一同の御願ひでござりんす。そりや外ならぬあの白妙さんのこと、旦那さんも油斷なう醫者衆もいろ〳〵取かへ、よう面倒をみて下さんすれど、次第々々に病が重り、どう手を盡しても今度はあつちのものに極まつたとどの醫者さん達の見立てもみな同じこと。そりやもう白妙さんは身の運で、力づくにも金づくにもかなはぬは壽命の沙汰、其身の時節と是非ないが、たゞ傷はしいはあの吉樣、病氣が重いと聞き知つて迚も死ぬる道ならば、一日たりとも廓の外へ出し、わが手で介抱して死なせたいとの嘆き、此頃は思ひあまつて日が暮るゝとうそ〳〵と此家のまはりを歩くげな……

幸齋（じれて）えゝ、こまだるい。皆までいふな。六百兩で白妙の暇くれいといふのか。

長門　おゝ、さうでござりんす。これ皆さんも願はんせ。

薄雲　今長門さんの云はんす通り。

初紫　これにゐるわたしらはじめ、一同の願ひ。

奥州　どうぞ御きゝ屆け下さりませ。

（と大夫ら、給仕の遊女、禿まで一同頭を下げる。）

幸齋　いやならぬ〳〵。白妙といふ奴では、なんぼうか損をする。幾月も煩うて勤めはせず、藥はくふ。人手はかけさせる。この損勘定にいれず、お主らはこの幸齋が唯取るばかりに慘いことをすると思ふか。自體この吉め、

けちな奴、おりや暇やらぬといひ切つたではなし、千兩積めば今が今でも暇とらす。

長門　さ、その千兩が積めさへすれば、このお願ひはいらぬこと。これがこれから稼がるゝ白妙さんなら、また御損といふこともある。もう旦夕に迫つた身體……

幸齋　はてそんなこと知つてゐる。損が立つとて捨て賣りにするやうな、そんなさもしい商ひ、この幸齋はせぬ。旦夕に迫つたとてあの吉めが千兩つむまでは、藥用手當立派にして持たしておく。それをあの吉の奴、このおれを無慈悲の様にいひなして、日が暮るゝとうそ〳〵と此家のまはりを這ひまはるといふことも知つてゐる。で、おれのこの居間から見ゆるあの數寄屋へ病人めをいれておく。さればあの穢箔め、浪人の娘とやら、義理ばつて賴母し立てすることもよう知つてゐる。それを大目にみておくおれがなんで無慈悲、多分今日なぞは、この混雜に附け込み、あの吉め、見物にまぎれ、入つてくる手筈もあることゝ、先刻から眼も放たぬ。今日は誰でもあの數寄屋の傍へよつたらば括しあぐるといへ。さ、客が大事、もう往け〳〵。

薄雲　（少し進み出て）こりや旦那さんとも覺えませぬ。吉様が今の身で六百兩の工面とは大抵な事でない。跡金の出來ぬ日はみえてゐる。こりやちと御無理な仰しやりやう。

幸齋　はて無理とは何が無理。六百兩の工面より出來ぬとは、まだ身の責め様が足りぬからのこと、これが一生の大事とおもへば盗みしてなりと出來すが當然ぢや。

薄雲　そりやあんまりな、盗みして金こしらへる吉様なら一同揃うてこの肝煎はいたしませぬ。あんまり惨い仰しやりやう。

幸齋　えゝ、惨いとはおれよりその吉が事。見す〳〵白妙めが死ぬると知りながら四百兩惜しむ物知らず、これが惨くはあるまいか。こゝを押張つて四百兩産み出すか、但し千兩損するか。爰らがおれの商賣誰もする商の懸引あたり前のことぢや。但しそれを兎や角いひ、情知らずの親方と拗張つて勤め鈍末にする奴は棒先で勤めさす。もういふな。默れ〳〵。

（と睨めつくる。長門ぐつと急いで進み出る。）

長門　いや、なんぼ、默れとあつてもこの長門は默らぬ。最前からのはなしは白妙どの一人の身の上、なれどこゝろは私はじめあまたの女郎の身の上、それをまあようその様な非道なことがいへたもの。（と一寸泣き）ほんにいふぢやなけれども能の囃子のとひとり榮耀榮華に誇つて、朝晩王様の上るやうな二の膳、三の膳、酸い甘いのと誰がいはす。みなわたしたちが勤めればこそ、それを

二言目には打つの突くのと、總體の女郎が氣を揃へて不勤したら、この榮耀もどこでする。この長門の采どりで隨分それもしてみする。その時になつて旦那さん。その頤がおどろいて横町へ飛ばぬやう、今からよう括つておかしやんせ。おほゝゝほ。

（とづッけりいふ。幸齋ぱり〳〵と齒がみして。）

幸齋　どいつも〳〵憎い奴、女郎のお蔭で榮耀するとはよういうた。世界の女郎屋におれの三分の一眞似の出來る奴、どこにある。みんなおれの果報でする榮耀、この頤が横へ曲るか、曲らぬか、これを見よ。

（と立上りざまに、膳を蹴とばす。長門ら驚き立たうとする。）

幸齋　（褞袍脱ぎすて）やあ一人も動くな。やり手ども男共、繩もつてこい、棒もつて來い。

（と紙置臺の上の小刀逆手に取り。）

幸齋　頭取は長門め。

（と長門を摑まへようとする。女郎たちわつと逃げる。禿二人もおびえて一緒にうづくまる。給仕の遊女も止めようと立すくむ。こゝへ太四郎、烏帽子熨斗目の着附長袴にて、素袍の袖を脱きかけた拵へ、手に小鼓をもつて走り出て、幸齋を支へる。）

太四郎　あ、これ、親父さま、高聲あげて舞臺へきこえまする。まづ御勘忍、御勘忍（と長門をにらみ）これ、おのれら、何で御機嫌を損ふ。面々のお客をすて、これへきて白妙が御訴訟、今日に限ることか。慮外ながら親父樣も親父樣、今日は御歷々の方々のお集り、もしあちらへ聞えたら、何となされます。もう御了簡なされませ。さ、そち達は早くあちへ〳〵。

（と眼で知らせる。長門はじめ皆下手へ入る。太四郎給仕の遊女をみて。）

太四郎　これ、そち達もその取散らしたもの片づけて早くあちへ。禿たちもゆけ。

（これにて給仕の遊女懷紙を出してそこらを拭ひ、膳椀を片づけ、袱紗をかけて持つて上手へ入る。禿らもつづく。）

太四郎　（幸齋をぢつとみて涙をうかべ、下にゐて）これ親父さま、家の中での我儘は誰一人、非の打ち手のないとは我身の理窟、その證據、これ御覽なされ、今我らがこの鼓を調べしに、御存じの折居の胴、打つてみればほど〳〵と桶の底を叩くやうなに驚いて皮を外せば、何者の仕業にや、これ御覽ぜ（と懷より一通の書つけを取出し）胴の中に料理の献立になぞらへてお前の惡事、一家の惡口をかきつけていれおいた。讀むも涙こぼるれど、これおききなされ。料理献立、汁の物は、世上の人を淡

噌。自慢くさい葱、面の皮牛蒡、二つに切鱈の刺身。煮物は傾城打擲の棒鱈。焼物は取沙汰魴鮄、人間の葛かけ。はてははじ蠣の吸ひもので、驕るもの久しから漬の香の物。明日はお上のおんめし。（と泣き）これ、おきゝなされたか。親父さま、かうして我らの眼にふるゝ程なれば廓はもとより町中の評判、もう外も歩かれぬ。情けないとはお思ひなされぬか。

（とかの書つけを寸々に裂き、打ちつけて口惜し泣きに泣きふす。）

幸齋　やあ、また始めたか。そりやみんな叶はぬ奴らが猜みでいふこと、捨てゝおけ〱。これ惡くいはれりやこそ、身上も殖えるのぢや。世に人にほめられ、金出來した奴、何處にある。そんな惡口いはるゝは、こりや金ぶつけてくれるのぢやとおもうてにこ〱としてゐたがよい。これまた泣くのか。見つともない。お主は此頃ぢきに涙をみする樣になつた。はてちと確固とせぬか。

太四郎　（顔ふりあげて）これ親父さま、今日は默つてはをられませぬ。今私が讀んだ料理献立「驕るもの久しから漬の香の物、明日はお上のおんめし」とあつたを何とおきゝなされた。この間の町奉行所の呼出しも病氣といひ上げて、手代ですませ、今日のこの晴々しいお催し、お上のお眼も憚りあり、このやうなことをなされては、親子諸共手錠縄目の恥をうけ、世のすたり物となる身の果、少しは私を哀れとおもひ、聞きわけて下さりませ。

（と泣く。）

幸齋　これ太四郎、他人がいへばともかくも、おのれまでが、眼を据ゑて親子諸共手錠縄目とは何のたはこと、阿呆ぬかせ。

太四郎　でも此御身持がつゞいたらさうなるは知れた果。

幸齋　えゝ、たはけ奴、まだ吐かすか。

太四郎　いえ云ひまする。この太四郎を可愛いと思し召せば、よもかうはなされまい。憚りながら御恨み申します。

幸齋　やあ親を捉へて恨むとはおのれ、不孝者め。

太四郎　おゝ、もう不孝者でも構はぬ。親父さまが、親父さまでござらねば、子も子ではをりませぬ。

幸齋　おのれ、氣でも狂つたか。もうあつちへ行け。

太四郎　いや行きませぬ。私の云分通して御身持を直して下されぬ中は動きませぬ。

幸齋　なに動かぬ。これ、このおれに疳積おこさするな。子ぢやとて打据ゑかねまいぞ。

太四郎　え、打据ゑる？　たとへ打据ゑられたとて申す言葉はかはりませぬ。恨む言葉はかはりませぬ。

幸齋　えい、おのれ、飽までも親に逆ふ、打たれたくば、打つてくれよう。

太四郎　さあ、お打ちなされませ。

幸齋　おのれつ。

（と幸齋太四郎の襟がみ掴み、はつし／＼と打つてゐたが、何思つたか、太四郎を突はなし、はら／＼と落涙する。太四郎それを見て拍子拔けする。）

幸齋（涙を拂つて）えい、おのれ、かうまで親にさからひをる。子といふものは入らぬもの、幼い時から母に別れさせ、男親の手鹽にかけ、唯さへ脾弱なおのれ奴、三日にあげず煩うて育たぬといふを苦勞して、漸に人となし、この幸齋が手助けをして苦を拔くことか、親に逆らうて睨みをる。おのれがさういふ弱い心故、行末が案じられ、親は一倍の強味をみせ、この己がない後も安う世を過させうとあがいてゐる。その深い心も知らず、おのれの勝手を云ひ募つて云ひたい放題、女郎共はともかくも、一人子のおのれまで、この幸齋に反きをる（と泣き）えゝ、おのれめは子と思はぬ。もうどうとも勝手にさらせ。

（太四郎さし俯むき、次第に聲をあげて泣く。）

太四郎　あゝ親父さま、御免なされて下さりませ、思ひ餘つていはでものこと申し出しあなたに涙をみせました。何卒おゆるし下さりませ。

（と平伏し詫びる。幸齋涙を拭き。）

幸齋　なんの／＼親子の仲になんの詫、譯がわかれば、あとは殘らぬ。

太四郎（思ひつめたやうに）もうこの上は何うならうとも親父さま、何所までも御一緒でござります。

（と泣く。）

幸齋　もうよい／＼。これ太四郎なにも心配することか。能舞臺のことも氣にするな。隨分歷々の役人といくらも膝組みで酒のむこの幸齋、まさかの時にはどうともならうわ。今からちつともびくつくな。何事も度胸が大事、この幸齋、今日になるまでには、隨分とあぶない世渡り、度胸と我慢で通してきた。度胸がなうては有る運も開かぬわ。な、分つたか。

太四郎　は、はい。

幸齋　さ、ではもう見ともない。その涙ふけ。おりやこれから松風ぢや。あはゝ、や、もう狂言ははじまつてゐる樣子。裝束つけよう。

（と紙置臺の釋鈴をふる。禿一人上手より出て。）

禿　お召しなされましたか。

幸齋　おゝ、裝束つける。後見よべ。

禿　はい。

（と下手へ入る。すぐ後見二人出て、控へる。）

幸齋　さあ裝束つける。これへよこせ。

（後見二人無言にて、上段へあがり、廣蓋をもつて、幸齋の側へすりよる。）

幸齋　おゝ。

（と立上り、これもしを〳〵と立上り、行かうとする太四郎を見て、）

幸齋　これ太四郎、まて〳〵。

太四郎（振向き片膝つき）はい。

幸齋　もう何事も心配するな。

太四郎　はい、もう何事も親父さま次第、心は決めてをりまする。

（とうつむく。）

幸齋　おうよい〳〵。今日は客を歸したあとで、久し振りで親子二人で一杯のまう。

太四郎　は、はい。

幸齋　さ、よい。早くいつて囃子をいれさせ。

（太四郎うなづき立上り、幸齋後見に手傳はせて裝束にかゝる。鼓のしらべにて道具まはる。）

――又は幕――

三

同、庭中數寄屋。

舞臺下手へよせ、數寄屋の屋體。土庇、蹴込み、このみよろしく。前面障子を立てまはす。上手に枝折戸。飛石、植こみよろしく、この枝折戸と屋體の間、廣庭の半遠見、植込ごしに能舞臺の破風をみせるもよし。

（道具とまると、又は幕あくと、蟲ぶえ。すぐ一聲になり、横笛新造のこしらへ棲を取り、下手植込よりそつと忍んで出て。）

横笛　大夫さん、お目あいてかや。

（とそつと障子をあける。中に白妙、好みのこしらへ。枕に俯伏してゐる。六枚屏風が片よせてある。この聲に顏をあげ。）

白妙　おゝ横笛どのかえ。よい女郎衆になつてぢやの。あの恐しい親方さんの目を忍んでよう見舞うて下さんす。よく〳〵心にかければこそ、年も往かぬにありがたい。忘れませぬ。さつきも暇のことを朋輩衆が身にかへての訴訟、ちぎれ〳〵に聞こえて皆さんの心ざしの嬉しさと親方の辛さとは、たとへ死んでも忘れませぬ。

横笛　まあ白妙さん、そんなことは取置いてちつとは御心持ようござんすか。

白妙　あゝ、吉様に逢ふまでは、もちつと生きたい〳〵と今日までも思うたが、物をいふにも力がなく、此胸の苦しさでは、今夜が多分もう持つまい。

横笛　え、そりや本當でござんすか。

白妙　ほゝ(と淋しく笑ひ)お前のおどろく顔はまだ子供。もう覺悟した私には悲しいこともなにもない。お前に頼みはこの抱いてゐる小袖、これはあの人の形見の袷、一緒に棺へいれて下さんせ。(と一寸眼を拭ひ)さうして死んだらすぐあのお人の回向が受けたい。井筒屋へ第一に知らせて下さんせ。

横笛　あい／＼、それはようござんすが、そんなことより心を慥かに持たしやんせ。實は私を親方さんが店へ出すといふところを、お前が長門さんに話して下され、長門さんの客衆に頼み、揚づめにして下され、親に逢ふまで無事に今日まで居られるもお前の御恩、そのうれしさに生きてゐる中、一目なりとも吉様にあはせたく、今日の能見物の紛れに吉様忍びこませ、あの枝折戸の外まで來るやうに……

(と云ひかけると、白妙がばと跳ねおき。)

白妙　あゝありがたい。そりや何所に……おゝあすこにあれ居やしやんしたか。

(と立たうとすると、横笛驚き支へ。)

横笛　これ、どこに……ありや庭の燈籠でござんす。

白妙　あゝさてはもう眼が暗んだか、(と手をかざしみて)最う死ぬるに間もあるまい。これ横笛どの、わしの顔どうぞなつたかへ。

横笛　あれ大夫さん、怖らしい。

(と顔反ける。)

白妙　さてはもう死相が出たか。逢はぬ中死にたうない。早うあはして／＼。

横笛　ま、さう急いてもあの人込みの人々の目を忍び橋懸りの床下づたひ、植込のうしろ廻らねば、あの枝折戸の所へは出られぬ。なれども、もう直きに廻つて來さんす頃、もしそれもあすこと此處。たゞ顔合はすだけのこと。必らず嬉しさの餘り、高聲たてゝ下さんすな。云ひたい事も聲低くに頼みます。見附けられては一大事、ようござんすか。

白妙　あい／＼、さうして吉様まだみえぬか。

横笛　(いくらか伸び上りみて)ほんにもう見えそなもの、や、あれ見えた、吉様が……

白妙　え、見えた、吉様が(と敷居際へゐざり出て)おゝ吉様ぢや。

横笛　あ、これ大きな聲しては……

白妙　あい／＼。

(この時吉三四邊みまはしつゝ、枝折戸の外へくる。)

白妙　(待ちかねて)これ吉様。

吉三　おゝ白妙か。

(と枝折戸押あけ、中へ入らうとする。横笛あわてゝ)

横笛　あ、これ、そこ入つては舞臺からたゞ一目、そこからお話して下さんせ。

吉三　(是非なく下にゐて)　おゝ。

(この時能の囃子また始まる。)

横笛　お、又囃子がはじまつた。あれに紛れて少しの高聲きこえまい。わしは向ふを見張つてゐる。この間にいろいろ御話しなされませ。もし人音したら吉三樣、その植込へ忍んでくださんせ。よいかえ。

(と横笛よろしく數寄屋の後ろへ入る。白妙緣より)

白妙　まあ、も一度逢ひたい／＼と思ふ念が屆いてこんな嬉しいことはない。もう思ひおく事ない。もし吉樣、私やもう死ぬるぞや。

吉三　(伸び上りて)　あ、これ、そんな事いうて折角逢うた嬉しさに、忘れてゐたこと思ひ出さするか。……それもこれも皆この己が腑甲斐ない故、其方にまで此苦をかける。六百兩よりつけえぬ吉三、よも物惜しみともおもふまいが、もそつと工面のなりそなものと、恨んでゐようと、それ計りが心懸り。この吉三も出來るだけのこと仕盡しての此態、必らず恨んでくれるなよ。

白妙　のう何の恨みませう。わし故のその御苦勞、これも私がまつはつて放れぬ故、わしを哀れとおもはねば、何御苦勞もないお前、かうなるまでに思ひ切らずにゐた私、堪忍して下され。

(と泣く。虫ぶえ。)

吉三　これ何をいふ。このさまになつて今更らしい事いふか。そなたとて此身がなければ、引手あまたの身、面々の果報により、大名貴人のおもひ人ともなることもある。世を安う過すばかりが、目的ならば、互ひに此身にはなり果てぬ。もうそんな事云ひ古るした果の身ぢや。さあ、それより一寸の間も惜しい。泣くよりもその顏みたい。見せてくれ。

白妙　あい、

(と顏をあげる、吉三見つめて。)

吉三　おゝ、やつれやつたのう。

白妙　おゝ、やつれて相好かはつたかえ。おほう。

(と泣く。)

吉三　これ白妙、何とした／＼。

白妙　あい、わしや最期のこの顏みせて、お前に嘆きをかけ度うないと、もう今生ではあはぬ覺悟、このお前の小袖を、お前とおもうて手をはなさず、死んだら一つ棺の中、それでお前と連立つ心とせめて諦めてゐましたが、今、お前を見て、又執着が萠して來た。も一度癒つてあひとげたいが、もう迚も生ることはかなはぬ。せめて最

期にお前に手取られて死に度い、これ、其處から此處へくることならぬかえ。これ。

吉三　おゝ、わしとしても其處へゆきたいは山々なれど、もし見附けられては二人の身の上構はねども、手引きしてくれた横笛が身に及んでは何となる。是非ないことゝあきらめてくれ。

白妙　えゝ、情けない。目の前にみてゐながら、……やあ。もう目が衰へたか。たゞし涙に曇つてか。お前の顔がもうよう見えぬ。もうよう見えぬ。これ傍へきてくれることならぬかいなあ。これ吉様……

吉三　おゝ白妙もう何もいうてくれるな。この胸が張り裂くる。たゞ聞け、白妙、そなたをわが小袖と連れ立たさぬ。そなたが最期ときけば直ぐ、重代の一腰わが血に汚すは恐れあれど我腹に突き立てゝ共に連れ立つ。

（この中頃より白妙うつとりとなる。）

吉三　それをせめての力草、もうあきらめて死んでくれよ。これ白妙、や、これどうぞしたか。

（この途端、今までかすめてゐた囃子ばつたり切れる。横笛すき屋の横より顔出し。）

横笛　あ、これ吉三様、そんな大きな聲、囃子が止んだ、きこえる〱。靜かに〱。

（とすぐかくれる。）

吉三　おゝ心得た。（と小聲に力をこめ）これ白妙、これ白妙、や、もう事切れたか。

白妙　（またふつと氣がつき高聲に）おゝ吉様、吉様、どこに。

吉三　あこれ、これにゐる。これにゐる。ひそかに〱。今囃子が切れて靜かになつた。聞える〱。

（此時囃子しづかなるあしらひになる。）

白妙　（うなづき、小聲に力をこめ）吉様、お前も死ぬるというた様ぢや、ほんとかえ。

吉三　おゝ、己もあと追うてすぐ死ぬる。片時一腰はなさぬは、其方の最期が耳に入るや、直ぐにその場で死ぬ覺悟。

白妙　（おなじく弱りたる小聲によろこび）え、ではお前も私と一緒に、えゝ、うれしい、私もかねてその覺悟、我口からはいひ出せなんだが、お前に一目あへたなら、それを限りに死なうとて、そつと隱して、これこのやうに。

（と蒲團の下にかくした二挺剃刀をみせる。）

吉三　おゝ、迚もこの世に望みはなし、せめては二人連立たん、最期どころはちがふとも二人連立ち、おつつけ晴れて冥途の旅路ぢや。

白妙　おゝうれしい。（と空を掴むやうな手つきをして）え

え、それにしても今一度死ぬまへに手を取りあひ、お前の顔がも一度みたい／＼。これ吉様。

（と發作的になる。吉三氣を揉み。）

吉三　あ、これ、きこゆる／＼。これ白妙、これ白妙といふに、あゝどうせう。

（とこの時物着の囃子になる。横笛後ろを見い／＼出て早目に。）

横笛　これ吉様、いま物着で旦那さんが下座へ下つて水干烏帽子をつけてゐる。この間に一寸數寄屋の內へ。

吉三　え、傍へ行つても大事ないか。

横笛（後ろを見ながら）さ、それも早く／＼。これ早くなさりませ。

（吉三はつとうろたへ、枝折戸押あけ、驅け入り、白妙の傍へよろ。白妙も縋りよつて手を取合ふ。）

吉三　おゝ、白妙あへた。傍であへた。

白妙　おゝ、吉三さま、見える。お顔がみえる。

吉三　もうかうなりや語ることも云ふ事もない。極樂でも地獄でも一緒にゆく。

白妙　うれしい／＼二人一緒に死なれるか。

（と寄り合ひ泣く。舞臺靜かなる囃子になる。）

吉三（きゝ耳たてゝ）やああの囃子はリウジンぢやな。幸齋め、どうおもうてあの松風を舞ひをるぞ。かたみの狩衣烏帽子に深き嘆きをあらはすといふ謠のこゝろを何う汲みをる。わが小袖身にそへて、片時はなさぬ白妙は取りもなほさぬ松風よ。この二人に嘆きをみせ、何のおのれが松風ぢや。

白妙　あゝ、これ吉様、わしや二人かうして逢へたからは、もうあの親方もたれも恨まぬ。たゞうれしい。この上はお前のその刀でお前の手で死にたい。たゞ返す刀で後れて下さんすな。

吉三　云ふにや及ぶ。せめて心ばかりの死用意。支度しや。

白妙　あい／＼。

（と吉三は床の間の香爐をもつてきて、焚く。白妙はしごきで、膝をしばることなぞ。）

白妙（はれ／＼とした顏をして）もし吉様、あゝわしは死ぬとはおもはれぬ。二人して遊山旅にでも立つやうな。

吉三　おゝ、われとてもその通り、さあいそがん。

（と吉三刀を拔き、屏風を立てまはす。中にてあつと白妙の聲、この途端、今迄かすめてゐたる囃子かはつて段切となる。横笛横より飛んで出て。）

横笛　やあ吉三さま、能がもう切れ果てる。すりや衣裝ぬぎに旦那さんはあの居間へ來られる。あれからはたゞ一眼、見咎められては一大事でござんす。さ、早く、早く。

吉三（屏風を少し明けてみて）おゝ横笛、そちや此處に

居てかゝりやつては一大事、早くあちへ〳〵、二人はここで死ぬ。

（とくつろげてゐた肌へぐつと突込む。）

横笛　やあお前は……

（とようとするを手で制し。）

吉三　さ、早く〳〵、（といつて引まはし）いざ白妙、諸共に。

（と白妙の方へゐざりよる心にて屏風の中へ落入る。）

横笛　（屏風の中をみてうろたへ）　えゝ、まこりやどうしよう。

（この途端囃子打きる。）

横笛　やあもう果てた。や、大變ぢや、こつちの道は人立ちがする。樂屋よりはなほならぬ。あゝ何處から、や、旦那さんが裝束のまゝ。此方へくる〳〵。

（とうろたへて下手の木蔭へかくれる。上手奥より幸齋松風の裝束のまゝにて、若い者共を大勢ひきつれ、のさ〳〵と出て。）

幸齋　これ、どいつも今の松風みたか。

若い者甲　はい、みな拜見いたしました。

幸齋　うむ、ではこれから此裝束のまゝ、こゝで直ぐ自然居士をしてみせう。あのワキの人買ひが艪櫂をもつて打据ゆるところ、「身には繩、口には綿の轡をはめ、泣けども聲のいでばこそ」（と一寸うたひ）といふ所ぢや。これどいつぞ樫の棒もつてこい。

（若い者甲はつとかけゆく。）

幸齋　今ちらと何者か、あの植込へかけ込むを見た。それどいつぞ行つて引出してこい。えい早くせぬか、早くせぬとおのれらも打据ゑるぞ。

若者ら　へい。

（と二三人下手植込のかげへゆき。）

若者ら　や、横笛さんぢや。

（といつて手をとつて引出す。）

（横笛小さくなり、ふるへてゐる。）

横齋　旦那さん、ご免なさりませ、ご免なさりませ。

（と打伏す。）

幸齋　やい、おのれ、先刻おれが何とふれた。この數寄屋へ今日たれもよること無用というた。なぜ反いた。詫びたとてその分で置かうか。待ちをれ。今棒がくる。

（こゝへ若い者樫の棒をもつてくる。）

幸齋　よし、さ、おのれ、病人めに何用あつてこれへ來た。何奴かこれへ連れてきたか。さ、それいへ。

横笛　あのわたしは何も連れては參りませぬ。たゞ白妙さんの御見舞に……

幸齋　えい、嘘ぬかせ。それその屏風取つてみろ。

（若者ら二三人「へい」と數寄屋へ立寄り、屏風を押あ

けてみて。）

若者甲　やあこりや大變た。

若者乙　白妙さんも吉様も死んでゐる。

幸齋　なに二人死んでゐる。

（とつか〱と立つてみて、かつと怒り横笛を睨み。）

幸齋　やいおのれ奴、二人を手引して、心中させ、此家にけちをつけ、己によう損をさせをつたな。もうゆるさぬ。

（と棒ふり上げる。）

横笛　あれ。

（と逃げようとする。）

幸齋　おのれ、逃ぐるな。太い奴めが……

（と追ひすがつてハッシと打つ。横笛仆れかけ、立直らうとするところを膝を拂ひ、仆れた所を疊みかけて打つ。

（横笛打たれながらその棒にすがつて。）

横笛　えゝ、お二人が氣の毒さに、たつた一日あはさうとしたばかり、いかに私に過りがあればとて、かうまで打つとは餘りな旦那どの。

幸齋　（かつとして）えい、うぬ等の分際で、このおれに向つて殿よばゝり、憎い奴め。

（とまた打据ゑる、この時長門薄雲初紫三人かけて來て。）

長門　あれそれ程の咎でもないに、そんな手荒なことなされて……

薄雲　新造の折檻なら私達の役。

初紫　その棒こつちへ下さりませ。

（と一同幸齋に取りつかうとする。）

幸齋　えい、一つ穴の狐めら、寄るな。

（と棒を振りまはす。一同恐はず、パッとどく。横笛は打たれ、ほとんど絶息する。こゝへ太四郎、素袍袴を脱いだまゝのこしらへ、駈けつけてきて）

太四郎　えゝ、親父さま、まだでござりまするか。（と横笛を抱きおこし）や、こりやもう半死半生ぢや。さあそなた達。勝手へ連れてゆき介抱々々。

（と長門等につれさせてやり。）

太四郎　今聞けば白妙はあの吉様と心中したとのこと、そりやほんまでござりまするか。

幸齋　さうぢや、そこに死んでゐる。

太四郎　（走りゆき見て）おゝこりやほんにさぞ口惜しくも悲しくもあつたであろ。ゆるしてくれ〱。

（と伏しながみこなたへ來て。）

太四郎　これ親父さま、だから申さぬ事ではござりませぬ。何時ぞは大事お出來しなさりようと案じたはこの事、かういふ事あらせまいと思へばこそ、口を酸くして申した

のでござります。

幸齋　はて、これが何の大事、廓の心中珍らしいか。さつきちらりと見ておいた腰の物、あいつが手にあつては六百兩の品、おれが持てば二千兩、三千兩の品。滿更の損でもない。これどいつぞ今の間になまくら一本持つてきて掏りかへておけ。

太四郎　えゝ。

（と呆れる。）

（この時奥の方物さわがしく、やり手のなべ、色をかへて飛んでくる。）

なべ　もし旦那さま、大變でございます。今、新造の横笛が剃刀で自害してまだ死切らねど深疵で、あたりは血がべつとり、かういふ中もあやふうございます。

太四郎　なに横笛が自害した。もし親父さま〳〵。横笛が自害しました。どうしませう〳〵、一時に三人が變死とは、こりやどうしたらよからうなあ。

幸齋　えゝ、あのちびまでが厄介かけをる。お、これ、九兵衞よんであの二人仕末つけさせろ。それから横笛は……日頃素振がをかしかつたが、たうとう氣が狂れて自害したといへ。……但し（と恐い顔をして）横笛がことはどいつらも外へいいていふな。

若者ら　へい大丈夫でございます。

幸齋　おゝ早くしろ。

（と若者甲「へい」と行かうとする出合頭に枝折戸口より九兵衞あわてゝ出てきて、これとぶつかり、搔きのけて。）

九兵衞　もし旦那さま、唯今與力衆の隼さまがお手先の衆をつれて御越しで、主人を出せとのことでござります。

幸齋　なにこの中へ與力がきた。それでどうした。

九兵衞　私出迎ひ唯今主人重病にて居間取ちらかし居りますれば暫時お控へをと表の間へお通し申しておきました。

幸齋　おゝ、そりやようした。ではすぐに居間へ寢所敷け。

（と立かゝろ。此前より枝折戸外へ與力隼兵助、手先二人つれ出て來てゐて、この時。）

隼　いや來るには及ばぬ。それに行て逢はう。

（と前へ出てくる。一同おどろく。九兵衞ふるへて。）

九兵衞　まあ、あなたさまは何うしてこれへ御出なされた。

隼　（笑ひ）そちが案內してくれたわ。大儀であつた。

（と幸齋にむかひ。）

隼　やあ上を僞る不屆き奴、いつぞやの御召し出しにも病氣と僞り、代人を差立て、唯今もまた枕もあがらぬ重病といひ立てたるが、これにても病氣なるか。

（幸齋是非なく下に居て。）

幸斎　へえ、恐れいりまする。
（この中、若い者甲、そつと数寄屋の障子を立てる。隼目早くみて素知らぬかほをして。）
隼　これ幸斎、其方能舞臺取こはしの儀承はりながら、今日の晴々しいこの興行。のみならず、今朝浦上某と名のる浪人、その方抱へ横笛の親、理不盡に娘を人買同前の手段にて奪はれ、拷問にひとしき責め苦にあひをる由、取返さんも非力にかなひがたく、おのれに一太刀恨みんと構へしも大勢の人手の中老骨の仕損じもやと御政道の行届かざる旨の鬱憤、細々と相認め、奉行所の門前にて腹きつたわ。かくては最早一刻も猶豫ならずと呼び上げに此方向つた。……して横笛はどれにをる。これ幸斎申さぬか。九兵衛どうぢや。
九兵衛　（ふるへて）へ、その、その横笛は……
隼　（鋭く）變死したか。
九兵衛　へ、もう御存知で……
隼　で、あの障子の中にをるか。
九兵衛　（あわてゝ）ありやちがひます。
隼　なにちがふと。あれにも何かあるか。それ改めろ。
（手先二人驅けゆき、障子ひきあける隼立よりみて。）
隼　うむ、こりや男女二人の變死の體。
九兵衛　へえ、それはその心中でございます。

隼　やあ、此方が問はぬことに返事はいらぬ。これ九兵衛、横笛もこの兩人も一應御檢死願へ。御取しらべはその上のことぢや。さあ幸斎立て。
幸斎　いやこの御呼びあげ不承知でござる。
隼　やあその方あらがふか。
幸斎　いやあらがひませぬが、この幸斎御呼び上げうける覺えがござりませぬ。盗みいたしたこともなければ、人を殺めたことも御座らぬ。今迄にしたこと、みな自分の分際でいたしたこと、御上といへど御差配はうけませぬ。
太四郎　これ、もしあなたはまだそんな……
幸斎　えい、默れ。
隼　これ幸斎、では強つてこの御呼びあげ、拒むか。
幸斎　はつ、拒みまする。
隼　ふむ、それ手錠かけろ。
（手先立より装束の唐織をぬがせ、手錠かける。）
幸斎　こりや理不盡な、なにをなさる。
隼　やあ、御呼びあげ拒めば、御威光で召しつれる。それ引立てい。
（太四郎みて。）
太四郎　やあ親父さまは。
（と泣く。）
幸斎　なんの手錠かけられたとて、曇りのない己、云ひ開

いて直さかへつてくる。
隼　（隔て丶）　其方の倅太四郎か。
太四郎　はい。
隼　これ、九兵衞、この太四郎其方にあづくる。またこの家の召仕ひ、抱へ遊女、道具一切明日までに書上げ、御屆けいたせ。後日御取調べもあつて相違いたすと曲事だぞ。
九兵衞　へい。
隼　それ。
（と行かうとする。）
太四郎　もし暫く、御容赦を（と幸齋に向ひ）もし親父さま、この體で町內御出なされては御恥かしうござりませぬか。
（幸齋さすがに無言。）
太四郎　（隼に）　どうぞ御慈悲に冠り物おゆるし下さりませ。
隼　うむ、よい免す。
太四郎　は、ありがたう存じます。
（と懷中の手拭出さうとする。）
幸齋　やあ、手拭、縮緬でもかぶらぬ。あの裝束の袖、脫してせ。
隼　やあ、この分になつて錦の冠りものをとは案外な奴。
太四郎　（思ひ入つた體にて）もし隼樣、これは親父めが恐らく一期の派手の仕じまひ、最後の綺羅、子の身にても一期の願ひ、どうぞ御ゆるしくださりませ。
隼　（うなづいて）　おゝ聞屆けた。
（太四郎これにて、若者に手傳はせ、裝束の袖を脫し幸齋の頭へきせかけ、幸齋の手にすがつて。）
太四郎　親父さま。
（と泣く。幸齋さすがに眼をしばだゝく。）
（隼立より、引はなし。）
隼　それ引立てろ。
（と枝折戸の外へつれてゆく。幸齋ひかれながら。）
幸齋　太四郎〳〵。
太四郎　はつ。
（とよる。）
幸齋　太四郎〳〵、おれがいたあと、しつかりせ、しつかりせ。
（といひながら引立てられてゆく。太四郎眞中に泣きふす。この體。）

――幕――

男達ばやり（一幕三場）

一

舞臺は不忍池畔、正面に辨天島がみえる。まだこれに通ずる橋がなく、行通ひは舟でするやうになつてゐる。島も松がまばらにあつて、その中に丹塗の古風な社があり、一面に白砂が敷いてあり、新しい石燈籠が一基日に耀いてみえるなぞ、宛然の土佐繪の畫趣がある。上手は忍川の水道尻、こちらからは水門の上部が半ばみえる。下手はやゝ小高くなつた土坡。その上に葉をおとした柳の老木が枝を、低く垂れてゐる。その傍に石の小さな供養塔がある。さうしてこの土坡の先は次第に低く水中へ入つてゐる。こちらからはその先をなした一部がみえる。これが眞中よりやゝ下手寄になつてゐる。この前は淺瀨でところ〴〵枯葉が生えてゐる。時は承應年間、晩秋のある日の午後のことである。幕あくと、一人の老人がしよんぼり土坡の突端に立つて水を見つめて立つてゐる。身にはみすぼらしい切繼ぎ布子、素足に藁草履を穿いてゐる。

老人はやがて兩手で眼を蔽うてしばし泣いてゐたが四邊を見まはし、水面に向つて屁つぴり腰をして手を合せたかとおもふと、はつと飛びこむ。水音。同時にその突端に近い枯葦の中から鷺を一羽、斜めに下手へ引いてとる。

と向うより、反り編笠、焦茶の天鵞絨の袖なし羽織、袖口に金襴をつけたる衣裳に、織物の袴を穿きたる武士、金ごしらへの大小をさし、急ぎ足に出てくる。つづいて奴一人袋入の長煙管に、巾着の煙草入を括りつけたるを擔ぎ、これも急ぎ足で出る。

二人すぐ舞臺へきて水面をみて。

武士　やあ、浮き上つた。權平、救へ。

權平　ねえ。

（ともぢ〳〵してゐる。）

武士　これ早くいたせ。なにを躊躇いたしをる。早くいたさぬか。

權平　ねい。殿樣の仰せなりや、火の中へとび込めとなら陸つゞき、あとへは下り申さねえが、水の中は大の不得手、こればつかりは御ゆるし下さりませう。

武士　ではそちは水心がないと申すか。不自由な奴めが：：おれが飛びこんでもよいが、昔からおれも……水は大

嫌ひだ。……はて、おれがみす〳〵見掛けた身投げ、眼の前に殺すは殘念だな。

權平　まことに殿樣のお眼の前で、飛びこむとはよく〳〵運に盡きた老耄め、もう少し待ちやあがりあいゝに。おおさうだ。殿樣しばらく御待ち下せえまし。

（とつか〳〵と下手の土坡へ上り、柳の木へ手をかけて。）

權平　やいそこな身投げ、耳かつぽぢつてよつく聽け。これへお渡りなされたは、當時男達の總本締め、吉屋組の頭領、三浦小次郎さま。助けるとなつたら、金輪際、人はおろか、天人が寺の欄間を駈落して添ひてえ若衆があるといつても、きつとお世話なさるゝ。たゞし、殿樣もこの奴も泳ぎの一手を知らざれば、木曾の棧橋、七曲り、譬はとゞいて手がとゞかぬ。うぬめ、水心があるならば、も一度岸へ戻りあがれ。きつとお助けなさるゝぞ。

三浦　えゝ何を申してをるのだ。

權平　ねい。殿樣も奴も泳ぎは知らねども、もしや身投が存じたかと……

三浦　えい、白癡づらめ。むだばかり申す奴だ。

權平　ねい、（といつてしよげたが、水面をみて）やあ、こりやならぬ。身投も泳ぎは知らぬとみえた。沈むわ〳〵。

（といふ。）

聲　（この時下手の土坡のかげにて。）
さわがつしやるな、奴どの。今助ける。

（と切繼ぎの長半纏に三尺帶、竹の子笠を冠つた男、田舟にのつて櫂で押して出る。よろしく水面をみわたすことあつてうなづき、舟を上手へ押してゆき、一つまはして舳を下手へ向ける。その前へまた浮び出た心にてさつきの老人、うつむいたまゝぽくりと出る。男すかさず、その襟がみを取つて舟へ引上げる。

（此時上手より口々に。）

聲　おゝ、助かつた〳〵。

（といひながら、往來の男二三人出て、この體をながめてゐる。）

（男はやがて舟を舞臺眞中の汀へつける。すぐに老人の兩足をもつて水中へ逆さにして水を吐かせることあつて、そのまゝ岸へ抱いてあがり、どつかと坐して膝の上へ老人を頭を下にうつ向けにして兩手で背をこき上げ。）

男　おい、爺つさん、しツかりしなせえ〳〵。

（といふ。）

（この間、權平は三浦の側へ來て、これを指し、うまく助かりましたといふこなし。三浦うなづいて編笠ごしに男の振舞にぢつと眼をつけてゐる。）

（老人はつと息をふき返し、少し水を吐くおもいれ、男抱へなほして自分の膝を枕にさせる。老人細々と眼をひらいてみて寝たまゝ。）

老人　えゝ、助けてくれたはこなたでござるか。つく〴〵浮世が厭になつて身を投げたに、助けてくれたは恨めしい。わしはこなたが恨みでござる。

（といふ。往來の男共この時側によつてみてゐて。）

往來甲　あはゝ、この爺さん、よつぽどな道知らずだ。人が命を助けてくれたに怨むとは呆れたものだ。

往來乙　さうだ。どうあらうとも先づ一通り禮をいふものだ。

往來丙　全く可笑しなぢいさんだな。あはゝゝは。

（とみな笑ふ。男笠へ手をかけて。）

男　やかましいわい。（と下手の三浦主従を一寸みて）いらざる野郎はみんな早くゆけ。この爺さんはおれがひきうけた。（とまた往來の男共に）えゝ、蚊とんぼめら、往きあがられえか。

（と一寸膝立てなほす。往來の男共、勢ひに恐れてそこ〳〵に逃げて入る。）

（權平この言葉をきいてつか〳〵とゆかうとするを三浦片手に押へて悠々と切株へ腰を下し。）

三浦　權平。

權平　ねい。

三浦　煙草一服所望ぢや。

權平　ねい。

（と袋の煙管を出し、煙草をつめて差出し、腰の胴亂から、火打を出す。三浦大様に吸ひつける。この煙管の長さ三尺ぐらゐ。）

（男思入あつて笠を取る。頭には手拭を冠つてゐる。眉のきりゝとした色白の二十五六、裝に似合はぬ男振りである。これも三浦にかまはず。）

男　あはゝゝは、おい、爺さん。たとはゞ果敢ねえ蟲けらでせえ、命のいらねえものはねえ。まして人、死ぬにやあきつと譯があらう。まづその譯をきかせなせえ。まつこと死なにあならねえなら、とてものことの世話ついで、もう一度この池の深みへ、こゝから抛りこんでやらうぢやあねえか。

（老人ぎくりとして思はず起なほる。）

男　ま、びつくりすることはねえ。まあその氣で落着いて一通り話しなせえ。

老人　へい、……わたくしは六兵衞と申しましてこの山下へ一錢茶店を出し六兵衞の店と申して次第に仕出し、繁昌をしてをりましたが、三年前のある大雪の日、店の前で倒れてゐた若い男がございました。それで私がやれ可

哀相にと家へかゝへいれ、生姜酒をこしらへてのませますとやつと口がきけるやうになり、申しますには、名は又兵衛と申して親兄弟もない一人身、身寄りをたづねてお江戸へ上り、尋ねわびて路用もなくし、腹はへる。雪にはあふ。それでたふれてゐたとのこと。不便に存じて家へおきますと、算筆は一通り料理も一寸いたし、人前はよし、ついわたくしの一時の了簡ちがひ、女の聟にいたしましたが、その女が本年はからず死にまするると、他より女房をいれ、諸式を乗つとり、わたくしを蔑ろにいたしまする。餘り口惜しさに、お上へお訴へ申しまするると、どこをどう手を廻したものか、お役人さまが御取上げがなく、わたくしが云ひがゝりに落ちて二十杖ぶたれて追ひはらはれました。……もしこれでもあなた、死なずに居られませうか。この上は冥土へゆき、お閻魔さまに申上げ聟めもよんでこの捌きをつけていたゞかにや、この胸が癒えませぬ。

（と泣く。）

男　あはゝ、爺さん。そりやあ了簡ちげえだ。この世の捌きも分らねえ世の中に、あの世の捌きもあてにはならねえ。きゝあ聟は今金があるといふぢやあねえか。たとへにもいふ地獄の沙汰も金次第、今時の鬼の了簡は、此世からぢやあわからねえ。地獄へいつて敗けたらば爺さん、お前どうする氣だ。

六兵衛　へい……。

男　こりやあ、おれの分別ぢや、お爺さんこゝは一番聟と張りあつて見かへすのだな。

六兵衛　へい……聟と張りあつて見かへしますとは……

男　どうだ、もう一軒、軒並へ店を出してはどうだ。

六兵衛　（眼をむき出し）えゝ、お前さんも大概になさりまし、こんな破れた布子をきて、食物も碌々ない身で、茶店がなんで出されませうか。……おゝ、そんなことをいはつしやる手間で、いつそ先刻いはつしやつた通り、この池の深みへ抛りこんで下さいまし。

男　まあさう急きなさんな。一體その茶店を出すといふのは、どの位ゐかゝるのだ。

六兵衛　まあ、きりつめて三十兩はかゝりませうよ。

男　さうか。大したことなら出來ねえとおもつたが、三十兩なら、どうだ、おれが拵へてやらうぢやあねえか。

六兵衛　へい……お前さんが……

（と男の身装をみてゐる。）

男　あはゝ、お前、おれの身装をみて、こんなものに出來さうもねえとおもつてゐるやうだが、なんのその位ゐの金。明日とはいはず今夜中に拵へてやる。さうだ、明日の明け六つにもう一度こゝまで來なせえ。きつとその時

持つてきてやる。

六兵衞　へい……

（とまだ疑はしさうに男の顏をみてゐる。）

男　えい。まだ疑ふのか。よく〳〵疑え深けえ爺さんだ。

（この時三浦煙管をいつか權平に渡してきいてゐたが、しづかに立上つてこなたへきて。）

三浦　こりや〳〵老人、何をうぢ〳〵いたしをる。この御人の申すことはまことぢや。必ずともに間違ひない。なほ疑ふなら身が聽手ぢや。きつと證しになつてとらさう。

（六兵衞これにて三浦をみてびつくりして辭儀して。）

六兵衞　へい……

（と呆れてゐる。）

男　どうだ、爺さん。かういふお歷々の御言葉がそはつたら滿更うそともおもはれめえ。長えことぢやあねえ、明日の明け六つまでだ。間ちがひなくこゝへ來なせえ。

（男ぐつとしたらしいのを吞みこんで。）

男　さうしてそんな濡れた衣服を着てゐちあ身の毒だ。これで身裝もさつぱりとして腹も盈くしておきなせえ。

（と懷から一兩出し。）

（とそこへ抛り出し、すぐ田舟へ飛び乘つて櫂をとり。）

男　まちがひなさんな。明け六つだよ。

（と櫂を押して上手へ去る。）

（六兵衞呆氣にとられながら一兩拾ひとり押いたゞく。）

權平　殿樣、をかしな野郎でござりまするな。

三浦　いや中々面白い奴だ。

（とそこ〳〵にゆきかける六兵衞に。）

三浦　こりや待て〳〵。

六兵衞　へい……

（と下にゐる。）

三浦　こりや、老人、明日明け六つまでには必ずこゝへまゐれよ。唯今の男が金の出來ざる節には、身がきつと立替へつかはす。必ず時刻をたがへまいぞ。

六兵衞　へい、それではあなた樣がそのお金を……

三浦　おゝさ、彼奴が變更した時には身がつかはす安心いたせ。

六兵衞　へい、それはまあ〳〵御深切に難有うぞんじます。……それでは明日この處へ……

三浦　おゝ、必ずまゐれよ。もうよい、ゆけ〳〵。

六兵衞　へい、へい、ありがたう存じます。では御暇申上げまする。又明日……

（と喜んで六兵衞は涙を拭うてさる。）

（三浦見送つて。）

三浦　權平。
權平　ねい。
三浦　身はいさゝかこれより用事がある。そちは一歩先へ立歸れ。あるひは今宵は身は立歸らぬかもしれぬが、必ずともに騷ぐこと無用と申付けよ。
權平　（不審がほで）ねい。
三浦　ゆけ〳〵。
權平　ねい。
（と不審がほ、行きかねてゐる。）
（三浦これにかまはず、上手へ行きかける。）

二

山下、又兵衞茶店。いはゆる當時の一錢茶屋、二階に女なぞもおき、料理をもする後の料理やである。店の構へは一服一錢の茶の湯の發達したらしいおもむきで、上部に二階の前側をみせた家體。上手へよせて二重、下手は土間、二重の正面は格子窓、上手へよせて梯子段をみせ、土間の突あたりは、暖簾をかけ入口となつてゐる。左右の見切はよろしく、平舞臺には長床几一二脚、やゝ下手へよせて置いてある。

二重よきところに風爐を置き、二枚折の小屛風、棚なぞを置き、亭主の又兵衞、三十位、投頭巾、小袴、懸硯を引つけ、側へ帳面をひろげ、金の勘定をして封をしてゐる。そばの小屛風の端には拂子がかけてある。

少しはなれて女房とま、立膝でたばこをのんでゐる。

とま　もしお前さん、お前さんてば、さつきから私が呼ぶになんで返事もしてくれないのだよ。
又兵衞　えゝなんだな。今勘定をしてゐるところだ。用ならあとにしろ。
とま　でも私は氣になつて仕方がないんだよ。あのぢゝいを追出したのはいゝが、どうもこのまゝぢやあ、置けないとおもつてさ……
又兵衞　だからあの時おれはまあゆつくりやるといふものをお前ががみ〳〵いつて聽かねえから……それもまあうまく御取上げにならねえやうにしたのだからいゝぢやあねえか。
とま　いゝえ、あれぢやあ又あの強情なぢゝいのことだから、どこをどう訴へ出まいものでもないと氣にかゝつてならないのだよ。
又兵衞　あゝ。（と一寸嘆息をついて）一體いやあなんといつてももとの聟舅、ちつと拙いことをしてしまつた。
とま　えゝ、（と急に顏色をかへて）お前は二言目には聟舅、やつぱり先のおかみさんが戀しいのだろ。
又兵衞　えゝまたそれをいやあがる。

とま　だからあのぢゝいにも思ひ切つた處置がとれないのだよ。一體お前の先のおかみさんが氣が利かない、なにも死ななくつたつていゝぢやあないか。さうすりあ私もこゝへ來てこんな苦勞もしずさ。……いつそあのぢいさんを呼び戾してお前はもと〳〵通りの聟舅、さうして私を追ひ出すがいゝ。

（とつんとなる。）

又兵衞　これさ、これさ。何もそんなに怒ることはねえ。おれが死んだ女房に未練のある譯もなし、ましてあんなぢゝいに未練がある譯がないぢやあねえか。

とま（慍つんとして）いゝえ、私一人が死ぬともどうともしりあいゝのだろ。もう構つておくれでないよ。……

又兵衞（立つてきて）なんだな。こりあおれがわるかつた。明日にもあのぢゝいの方はどうとか工夫もするわさ。なにも怒ることはないさ。これさ、これさ……

（となだめてゐる。）

（此時暖簾口よりぬつと三浦小次郎が入つてくる。）

三浦　ゆるせよ。

（といひながらずつと通る。）

（亭主みてよい客といふ思入、あわてゝ金包を懸硯へ片づけ、帳面を上へのせて押やり、女房に奥へゆけと目がほで知らせる。女房も少し狼狽へたが、つん〳〵して奥へ入る。）

（亭主小屛風の端にかけた拂子を取つて下へおり迎へて出る。）

又兵衞　へい、これは御歷々さまのようこそ御入らせ。まことに今日はよい御天氣で、日和もつゞきまして……さあどうぞお二階が見晴しがようござりまする。どうぞお上り下さいまし。

三浦　いや、これでよい。

（と二重の上手の端へ腰をかけ、はじめて編笠をとる。所謂吉屋風の五分月代の立茶筅、立派な男前である。）

又兵衞　へい。（とみて）もし殿樣、お茶を召上られまするか、御酒を申しつけませうか。それなれば不束ものながら、酌人の女子供も二階にをりまする。

三浦　うん、もとの一服一錢、この節は女子も二階においてあると申すか。

又兵衞　へい、殿樣方の御たはむれにも又お氣がかはつておよろしうござりませう。どうぞお上り下さりまし。……それとも御連さまを御待ちあはせでござりまするか。

三浦　いや連もない。酒ものまぬ茶を一服所望せう。

又兵衞　へい〳〵畏まりました。お茶は、上林の初昔利休ごのみの綾の森、お薄にいたしませうか。お濃い茶を差上げませうか。

三浦　おゝいづれでもよい。
又兵衛　へい、ではお濃い茶を差上げませう。
（と行きかける。）
三浦　こりやまて、亭主。そちが名は何と申す。
又兵衛　へい、又兵衛と申しまする。懸行燈をお覧うじて下さりましたか。又兵衛店とござりまする。どうぞ御贔屓を願ひ上げまする。
三浦　うん又兵衛か、呼び悪い名だな。
又兵衛　へゝゝへ。はて御呼びなさり悪くば、何なりと御意次第にお呼び下さいまし。
三浦　あはゝ、左様か、みたところ賢さうにはみえるが、女には野呂さうだな。野呂兵衛はどうだ。
又兵衛　へい……御冗談を……唯今お茶を立てゝまゐります。
三浦　いや待て野呂兵衛、もとはこの店は六兵衛店と申したが、なんで今では又兵衛店と申すのだ。
又兵衛　へい。もとは六兵衛の店でございましたのを私が讓りうけましてござりまする。
三浦　うん、六兵衛と又兵衛とは聟舅のやうにきいたが、全くさやうか。
又兵衛　殿様にはよう御存じで、それも唯今では六兵衛の娘がなくなり、別に家内を持ちましてございまする。
三浦　うむ、その女房がよくないな。聟舅で公事を爭ふやうでは、その女房がよくないな。
（これにて又兵衛默つて三浦の顔をみてゐる。）
三浦　こりや野呂兵衛、當家は家内は何人ぢや。
又兵衛　へい、私共夫婦に、抱へてござりまする女共が三人でござりまする。
三浦　うむ、大相繁昌して身代も出來たであらうな。目出度いな。
又兵衛　へい、お蔭さまでありがたう存じまする。
三浦　うむ、してその金はどこに藏つてある。
又兵衛　へ、（怪訝さうにしたが）えへゝ、これはまた御冗談を……どれお茶を立てゝまゐりませう。
（とゆきかける。）
三浦　こりや待て、野呂兵衛、最前ちらりとみかけたがここにゐたがそちの女房か。
又兵衛　へい、さやうでござりまする。
三浦　うむ福相で愛嬌もの、身上の爲になりさうな女房だ。大事にしてとらせろよ。
又兵衛　へい……
三浦　あはゝ、もうよい。早く茶を立てゝまゐれ。
又兵衛　へい〳〵、これは心付きませなんだ。唯今。
（と行きかける。）

（この時ぬつとまた一人の男が入つてくる。みれば、先刻の漁師の男であるが、頭は撥鬢の廣額、扮装もすつかり變つてゐる。身には、伊達衣裳、紺帯、銀ごしらへの大脇差、當時の町方男達の風である。默つて入り來つて下手の長床几へどつかと腰を下す。）

（又兵衛それとみると急に拂子を襟へはさんで揉手をする。）

又兵衛　これは親分さま、この節は御一向で。今日はどうした風の吹きまはし、ようこそお立寄り下さいました。

男　亭主おれは始めてきたのだ。見ちがへてくれるな。

又兵衛　へい。これは不調法を申上げました。さうしてお茶を召上られまするか、御酒を……

（といふを冠せて。）

男　うん、酒ものまぬ。また連もまたぬ。茶を一服所望せう。

又兵衛　へい、お茶は……

男　うん、上林でも松林でも、狸囃子でもなんでもいゝから持つてこい。

又兵衛　へい……

（と又兵衛氣を吞まれて行かうとすると。）

男　まて〳〵。これ亭主、手前の名は何といふのだ。

又兵衛　へい、又兵衛と申しまする。どうぞ御贔屓に。

男　うん、又兵衛、呼び惡い名だな。

又兵衛　えつ。

（と三浦と男を一寸見比べる。三浦すましてゐる。）

男　呼び惡いから一つ改めてやらうか。

又兵衛　（仕方なく）えへゝ、どうぞお願ひ申しまする。

男　さうだな。見るからに女に野呂さうだが、慾にも抜け目がなさうだな。與九郎兵衛はどうだ。

又兵衛　えへゝゝへ、どういたしまして、これは全く御見立てちがひ、手前は無慾で名代でございます。

男　さうか、慾がない……うん、では一番、慾内とつけたらどうだ。いや全くよくねえ奴だからな。

又兵衛　へえ……どれお茶を持つてまゐりませう。

（と呆れて行きかける。）

男　これ亭主待て〳〵。

又兵衛　へい。

男　もとはこの店は六兵衛店といつたやうだが、どうして又兵衛店と今ではいふのだ。

又兵衛　へい。

（と三浦の方をみながら。）

又兵衛　手前が讓りうけましてござりまする。

男　うん、六兵衛と又兵衛とは聟舅のやうにきいたが何時とつかべえにしたのだ。

又兵衛　（もううんざりして言葉少なに）　へい。
男　それも今では六兵衛の娘がなくなり、別に家内を持つたのか。
又兵衛　へい。
男　その女房がよくねえな。聟舅で公事を爭ふやうでは、その女房がよくねえな。
又兵衛　…………
男　最前ちらりとみたが女房か、うん、みたところ福相で愛嬌者で、身上の爲になりさうな女房だ。大事にしろよ。
（といつて急に言葉をかへ。）
男　……なぞとおれは餘計な世話はやかねえ。……これ亭主早く茶を立てゝこい。
又兵衛　へい。
（と驚いて二重へ上り、風爐の前へゆき、怖さうに二人を見比べてゐる。）
三浦　（悠然と）見かけたところ、最前とは身裝は變れど、おなじ町人、過刻はまことに大儀であつたな。
男　まことにさつきのお武家さま、異なところで會ひましたな。
三浦　してまたそちの名はなんと。身は三浦小次郎義也、旗本のいたづら者ぢや。
男　三浦の殿樣とは外目にそれと存じてゐました。私はまた當時男達の總本山と人にいはるゝ幡隨院、その脇寺の朝日奈三郎兵衛、どうぞお見知りおき下せえまし。
三浦　おゝ噂にきいた朝日奈三郎兵衛、さても美事な男前……してその三郎兵衛が今日はまた、なんで蓮池の田舟の中に乘つてゐたのだ。
朝日奈　それはちつと馬鹿々々しい。……天氣のよさに野がけと出掛け、この頃出來た辨天の池の景色に見惚れてゐて、こんな景色にこんな姿も釣合はねえ、こいつはいつそ一日の田舟の男となつて眺めようと、丁度見知つた百姓家で、姿をかへて粋興にのつた舟の中。思はぬことで、ざんない姿をお目にかけやした。……しかしその脱ぎかへや何やかや。こゝへも一足おそくなりやした。
（と思入あつて。）
朝日奈　さうして一體殿樣には何しにこゝへおいでなせえました。
三浦　なにしにとは事改めた尋ね樣、逍遙の歸るさに、通りかゝりに立寄つた。
朝日奈　へえ、さうでござえますか。
三浦　さうしてそちは又何しにこゝへ立寄つた。
朝日奈　へえ……私も又通りがゝり、一服のまうと立寄りやした。
三浦　おゝ、さやうか。……

朝日奈（なにか考へてゐて、不意と）もし殿様……
三浦　なんだ。
朝日奈　もしや、お前さんは……
三浦　うむ、おれは……
朝日奈（ふうと息を吐いて）いや、なんでもごぜえません。
三浦（笑みを含んで）これ朝日奈、さつき約束の明日の刻限、きつとまちがへはあるまいな。
朝日奈　え。（といつたが、ぐつと急き上げ）おゝ私も男一疋、それにまちげえはごぜえません。
三浦　今あらためて約束するぞ。
朝日奈　むゝ。
（と氣組むとき、上野の暮六つの鐘、打出す。）
（雙方無言。）
（又兵衛二重にて二人の様子を氣をつけて次第に氣味わるさうにしてゐたが、鐘の音をきいてふつと思ひついた體にて前へ出る。）
又兵衛　へい、殿様へも親分様へも申上げます。折あしく湯が沸らず、その中に唯今の暮六つ、此頃は暮六つよりはすべて手前どもの業體は御法度、まことにお殘り多うございますれど、今日のところは御容赦をねがひ、又の御出でをお待申上げまする。

朝日奈　うむ、（と三浦に思入あつて）のみたくもねえ茶一服、法制とあれば別段長居の用もねえ。（と懐より碎銀を出し）これは茶代だ。
（と抛り出し。）
朝日奈　殿様、また明日お目にかゝりやせう。
（と後目にして靜に暖簾口より出る。）
（又兵衛送つて出て。）
又兵衛　これは御多分にお茶代をありがたう存じまする。御近いおいでをお待ち申上げまする。
（と戻つてきて三浦をみて揉手をして。）
又兵衛　へえ唯今申上げました通り此中の大喧嘩より暮六つよりはきつい御制止、御立ちのほどを願ひ上げまする。
三浦　いや、おれは歸らぬ。今夜はこゝに厄介になる。
又兵衛　へゝゝへ、これはまたおたはむれを。
三浦　いや戯れでない。今夜この家へ盗賊が忍び入る。それで身がゐてとらすのだ。
又兵衛　え。（と顔色をかへたが、笑ひ出して）へゝゝへ、いや又おたはむれを、……もう御勘辨を願ひます。
三浦　いやさうでない。懸硯にも大分の金銀。
又兵衛　え。
三浦　隨分と用心いたせよ。
又兵衛　へい。

（とはじめて迂散らしさうに三浦をみる。）

（この時女房とま行燈をもつて二重へ出て、これも迂散さうに。）

とま　これ又兵衛どの、此頃は暮れては物騒、油斷はならぬ。早くお立ちを願つて、戸締をして仕舞ひなさらぬのかえ。

又兵衛　（うなづいて）おゝ、おれもさう思つてお願ひ申してゐるところだ。

三浦　あはゝゝは、そち達は身を疑うてをるやうぢやな。しからば一通り話してとらさう。これ又兵衛、そちの舅六兵衛は、今日不忍で身を投げた。

又兵衛　（さすがに驚いて）へえ。

三浦　それを助けたは今こゝへ來た朝日奈三郎兵衛、夫婦が不埒の一伍一什、みな六兵衛が口からきいた。

又兵衛　へえ、その、それは……

三浦　いやまづきけ、その朝日奈は六兵衛が身の不仕合せをあはれんで、金の工面を引うけた。明日までに三十兩、外に借りにゆくところはない。こゝへくる。

又兵衛　えゝ。（と驚いたが）と、とんでもない。私共に大枚の金なぞは……

とま　ほんとにさうでございます。私共に金なぞは。

三浦　いふな。それも六兵衛が、近頃は金貸もして内福と申してをつたぞ。

又兵衛　えゝ……

とま　まあ、あのぢゝいめ、そんなことまでも……いえ、それはあのぢゝいの嘘でございますよ。もしお前さん、よく殿様へみんな申上げてごらんよ。

又兵衛　うん、うん、全く金貸をいたすなぞと、それはみんな嘘でございます。へい、跡形もない大嘘でございます。

とま　えゝ、なにをいつてゐるんだよ。それぱつかりぢやあないよ。どんな事をあのぢゝいが殿様へ申上げたか知れないが、ほんとのことを、何もかもみんな申上げたら、いゝぢやあないか。

又兵衛　うんさうだ。……舅を追出したのは悪いやうではございますが、これにはその……いろ〳〵譯がございまして……

とま　あれ、追出したのぢやあないよ。

又兵衛　うんさうだ、追ひ出したのぢやあございません……考へてみますと、追ひ出したやうなもの、……いや、さうぢやあない……まあ申してみますと、追ひ出したやうにもみえますが……いや、さうでもない……

とま　えゝ、ぢれつたい。お前さんはなにを忙てゝゐるのだよ。ま、氣の小さいつたら……さ、私が申上げるから

お退きよ。……もし、殿樣、世の中にあんな恐しいひどい嘘つきもございません。(といつたが、急に泣出し)ああ、なんの因果で、私達はこんな目に合はなければ、ならないんでござんせう。……世の中に正直者ほど、意氣地のないものはございません。夫婦とも口不調法で、迚も口がまはりかね、何時も／＼口前の上手なものにまはされて、情けない目にばかり合はされます。……かうなつたら、一生懸命、なにもかも申上げます。一體あのぢゝいは、あの年をしてあらうことか、あるまいことか、私に……おほゝほゝ、まあ、こんなお多福のやうなものでございますが、それにいろ／＼厭らしいことを申しかけます。……宿はこの通りの氣の小さい人、私は女子のこと、風の柳にうけてをります辛さといふものは、(と一寸また涙をふき)まあ殿樣、御察し下さいまし。そればかりか、私がいふことを聽かぬといつて、その腹癒せか、近所隣りへ、私共夫婦が辛く仕向けでもいたすやうなことを申しまする。まさかにそれをさうでない、かう／＼と私共の口からはお恥かしい……

又兵衛　へい、へい、全くこれは私共の口からは申されません。

とま　まあお前さんは默つておいで。こんなことは女子の愚痴、私から申上げるよ。ま、何うあらうとも、私にもお舅、屈かぬ中から、やはらかい物の一つもと仕立てゝは着せましても、わざとぼろ／＼の着物をきて……さも私共夫婦がひどいことでもいたしますやうに……しよぼしよぼとして出歩きます……その出てゆく姿を見るたびに、まあ、私共の胸の中……宿と顔を見合せては泣いてばかりをりました。

(とよろしく泣く體。)

又兵衛　(これも澁面つくつて)おゝ／＼。

とま　一體この店ももとはしがない茶店、それを又兵衛どのが敷金もつて買入して、ま、一生懸命稼ぎ出し、どうやら今日のやうにいたしました。……それをあのぢゝいはまあ、身投の眞似までして、私共を惡者にして追ひ退けようとは、もう／＼あんまり情けない、いつそ私共が死にたうございます。

(とよゝと泣く。)

(又兵衛もこの間に思案が出來た體ですゝみ出る。)

又兵衛　へい、殿樣。私からも申上げまする。この度の一伍一什、全く私共が追出したといふのではございません。……何が腹が立ちましたやら、何時の間にやら、家を飛出し、御役向へ駈けこみまして、出放題なことを申しましたので、私も御召出しをうけまして、御調べがきびしいので、據どころなく、有の儘の十分一、申上げました

ところ、六兵衞どのは以ての外の御叱り受け、せめてはそれで心を直してくれますことゝ……へい、心頼みにいたしてをりましたに、そんな身投の狂言までして、まだも性根がなほりませぬかと思ひまするると……あゝ、男の私も、どうやら涙がこぼれてまゐりました。

（とこれも眼を拭る。）

三浦　（笑みを含んできいてゐて）　いや、仔細をきけば、みな尤も、かの六兵衞が申すことばかりもきかれぬ……したが、目前、朝日奈が今宵にもこれへまゐるが、それはなんとする。

又兵衞　へい、おいで下さいましても、最前申上げました通り、手前共に大枚の金なぞは……

三浦　はて金ばかりなら身は世話やかぬ。朝日奈は名うてのあばれ者、今宵まゐつたら二人の命もあるまいわい。

又兵衞　えゝ。

とま　えゝ。

又兵衞　そりやほんのことでござりまするか。

三浦　はてなにの爲の僞り、身は亭主が最前きく通り、三浦義也、二人の命のあはれさにこれへまゐつてとらせたのぢや。たゞしこの儘立かへらうか。

（これにて又兵衞、おとま急にびつくりして。）

又兵衞　へい、成程これは存ぜぬことゝて、とんだお疑ひを仕りました。當時名うての三浦さま、さういふ譯でおいで下されたとは露しらず、とんだ失禮を仕りました。……どうぞ今宵はこゝにおいで下されて、われ〳〵夫婦をお助け下さりませ。これ、おとま、お前からもお願ひ申せ。

とま　はい、はい、殿樣、よう御いで下さりました。ありがたう存じます。どうぞ夫婦をお助け下さいまし。

（と二人ふるへてゐる。）

三浦　よい〳〵、身はもとよりその覺悟、……これ亭主、早く戸締りしたらどうぢや。

又兵衞　はい〳〵。なるほどこれは……

（とあわてゝ、暖簾外の懸行燈を取こみ、暖簾を外して戸を下し、つゞいて格子の戸を締める。）

又兵衞　さうして殿樣、私共はどこに隱れてをりませう。

三浦　はて身がこゝにあるからは大丈夫ぢや。しかし夜長の徒然、こゝにかうしてもをられまい。そちの家には酌人共がをると申したな。これへ呼び下せ。

又兵衞　はい〳〵、これはとんと心づきませなんだ。（と二階へ向ひ）これお客さまぢや。下りてこい。

（といふ。二階より返事して酌人の女、甲、乙、丙下りてくる。）

又兵衞　これ、おとま、女どもに手傳はせて、御酒の支度

しろ。
とま　あい／＼。
（と酌人たちによろしくさゝやくことあつてつれて入ろ。又兵衛三浦の席を設けて。）
又兵衛　さあ殿様、これへお上り下さりませ、なにもございませぬが、鯛のよいのがござります。唯今手前が料理して作り身にして差上げませう。
三浦　おゝ、それは馳走ぢや。
（と二重へ上つてよろしく住ふ。）
又兵衛　では御免下さりまし。
（と入る。引ちがへて、とま銚子をもち、酌人たちに杯盤を運ばせて三浦の前へなほし。）
とま　さあ、お取上げ下さりまし。
三浦　おゝ。
（と杯を取上げ、酌人共をみて。）
三浦　おゝいづれをみても花ある姿、三浦今日まで知らずにゐたは不覺であつたな。
酌甲　ほゝゝ、丹前風呂へお通はせ、お名の高い三浦さま。
酌乙　私たちのやうなものにも、御會釋は勿體ない。
酌丙　たゞこれを御縁にこゝへもちとお運びを下さりまし。
三浦　おゝ、まゐらうとも／＼。銘々のほどのよさに信心のこゝろが開いた。……して各々の名はなんと。
酌甲　はい、私はなみと申しまする。
三浦　うむ、なみ……まことになみ／＼ならぬ容色とみた。……してそもじは……
酌乙　はい、よしと申しまする。
三浦　うむ、これもよし／＼。してそもじは……
酌丙　私はとめと申しまする。
三浦　うむ、とめ。（と一寸つまつて、ぽんと膝を打ち）とめてかへさぬ夜半の雨……わけて情けある御名とみた……あはゝ。
とま　ほゝゝゝほ、まことに御氣の輕い、もう／＼女子には罪な殿様、宿の女子供も、これからは浮はついてなりますまい。ほゝゝゝほ、どうぞこれからは、ほんに御越しを願ひまする。さあ今お一つ。
（とよろしく酒宴になる。こゝへ又兵衛爼板の上へ鯛をのせ、眞魚箸と庖丁を載せてもつて出て。）
又兵衛　もし殿さま、あちらに居りましては、どうも後ろがみられてなりませぬ。私もこゝへおゝき下さりませ。
三浦　はて心弱い……さやうの時には、一二杯、大きなもので重ねるがよい。
又兵衛　なるほど、これは左様でございます。實は勝手元

で平椀で二三杯、引かけてみましたが、へ、へ、どうもまだ異な心もちで……

三浦　はてそれはまだ足りぬのだ。もう一つ二つ重ねてみろ。

又兵衛　へ、へ、ではもう一つ、こゝで頂戴いたしませう。

（とすゝみ出て、平物の蓋を手にする。とま酌して。）

とま　まあ、お前、臆病な、殿様もおいでのこと、しつかりとしたがよい。

又兵衛（飲んで）はてなにが臆病、おれも前髪の時分には棒の一手も稽古したことがある。なんの男達の一人や、二人、まして殿さまの後立て、驚くことはなんにもねえ。へゝ、憚りながら、これは殿様へ……

三浦　いや、それは押へろ。

又兵衛　へい、ではもう一つ。（ととまに酌させて飲み、ほつと息をして）ほう、へゝ、大分こりや廻つたやうで、……だが（と急に苦しさうに息をついて）あのぢゝいめとんでもねえ目にあはせやあがる。はつつけ爺いめ。…………もし殿様、よくある世間の男達の取沙汰、大抵は男がわるいにきまつてをりまするが、とかく噂や、外から見たではちがふもの、……親なり子なり、男は七分の損、……へ、へ、これは愚痴でござりまする。

三浦　うむ、どうだ。少しは心がひらけたやうぢやな。

又兵衛　へゝ、（といつたが、急にがつくり酔つたやうに調子高になる）へゝ、渡りくらべて世の中みれば、阿波の鳴門に浪もなしと、こはいのは世渡り、その外にこはいものは何にもねえ筈だ。かういふ商賣をするからは、酒興の上の亂暴者や、無法者の押借り、それを恐れてゐた日には商賣にならねえ。へ、世渡りはもとより命懸け、おつかねえ、恐いは何もねえ。へ、一度死にあ、二度は死なねえ、死んでいゝ命は一つもねえが、死なねえ命も何處にもねえ、へ、へ、殿様左様でごぜえませう。

三浦　あはゝ、にはかにこりや強者になつたな。

又兵衛　えへゝゝへ、なに覺悟をすれば、こはいものは何もねえ……どれ、作り身をして差上げませう。

（とひよろ／＼して俎板の前へなほる。）

三浦　はてそれは大儀ぢや。……してそちは金の在所は大丈夫か。

又兵衛　は、はい、そ、それは大丈夫でござりまする。

三浦　はて、それは用心のよいことぢやの。

又兵衛　へえ……ではこゝで料理をさせて頂きませう。

（と眞魚ばしと庖丁を使つて鯛を料理する。三浦それをみて。）

三浦　はてこれは面白い夜宴のさまぢや。

（と酌人に酌をさせ。）

月はくもりて雨もよひ、さまの心も薄墨な……あはゝゝはゝ。

（と一寸小唄をうたつて笑ふ。この時火の用心の拍子木の音。）

三浦　おゝこの程は物騒と、世間もはやくひつそりしたな。

又兵衞　へい、（と料理の手をやめて）どうやら今夜はひつそりと……

三浦　こりや思の外に早く來るな。

又兵衞　えゝ。

酌甲　もし殿さま、來るとはなにがまゐりまする。

（とこの途端に村雨の音。）

酌乙　どうやら氣味のわるい有仰やう。

酌丙　もしやこゝへ盜人が……

三浦　はて靜にいたせ。いまくるのぢや。

酌人皆々　えゝつ。

（とおびえる。又兵衞ととま急に慄へ出し。）

又兵衞　殿樣、殿樣……

とま　どうぞお助け下さいまし。

（ととりすがる。）

三浦　（笑ひて）はてきついこはがり樣、……これ又兵衞、何もいはぬ、これに懲りて非道なことはいたすなよ。

又兵衞　へい〳〵、もう決していたす段ではございませぬ。明日にも六兵衞どのを呼び戻しませう。なうおとま。

とま　はい〳〵。これからは一人のお舅、きつと孝行にいたしまする。どうぞお助け下さいまし。

三浦　きつと後悔いたしたか。

又兵衞　へい〳〵後悔いたした段ではございませぬ。

とま　何事も命あつての物種、きつと今までのやうなことはいたしませぬ。どうぞお助け下さいまし。

（この時表の戸へばらりと石を打つける音。）

三浦　はゝ、來たな。靜にいたせ。ありや家の樣子を探りの石音、入らせたがよい。靜にいたせ。みな居所を必ず動くな。

（とふつと行燈を吹き消す。みな居すくむ。）

（戸を切りやぶつて朝日奈尻端折跣足、そつと入つてきて、二重へ足をかけようとする。）

（三浦居所にて。）

三浦　盜人きたか。

（と聲かける。朝日奈はつと立すくむ。）

三浦　三浦小次郎これにをる。かりにも男を立つるもの、切取夜盜はよもすまい、金の才覺、立派にいたせ。

朝日奈　えつ。

（と無念の體。思はず刀の柄へ手をかける。）

三浦　はて刀の柄へ手をかけて、夜盗となつてたふれるか。三浦はきこゆる手裏劍の手だれ。そこ一歩たりとも出づると命がないぞ。

朝日奈　むゝ。

三浦　えゝ、立去れ、立去れ、立去りをらぬか。

（と大喝する。）

（朝日奈身悶えしてひらりと身をかへして駈けいでる。）

三浦　はてよい。もうこれで安心だ。……又兵衞、又兵衞、もはや夫婦の命は助かつたぞ。

又兵衞（また居すくみながら）へ、へい。

三浦　この命の禮には、あの懸硯にも三四十兩、もらつてゆくぞ。

（と懸硯を引よせる。）

又兵衞　へえ。（と思はずその方へゆかうとして杯盤につまづきたふれ）と、とんでもない。

三浦　それも六兵衞を助ける金、喜んで出すがよいぞ。

又兵衞　えゝ、そゝ、それは御情けない……これ、たれか燈をつけぬか。燈をつけぬか。

とま　ど、どろばうぢや。近所の衆、どろばうぢや。

三浦　はて騷ぐな、後悔したとは僞りか。あのこゝな横道者めが。……

又兵衞（思はず）へ、へい……

三浦　あはゝゝは。

（と金をとつて立上り、靜に出てゆく。）

（又兵衞、おとま闇の中で呆れてゐる。）

三

舞臺はもとの不忍池畔。

六兵衞はよきところの捨石に腰を下して居睡りをしてゐる。

すぐ上手より朝日奈三郎兵衞腕組をしながら出る。ふと眼をあげて。

朝日奈　おゝ、爺さん、さぞ待くたびれたらうな。

六兵衞（眼をあいて）おゝ、昨日のお方。

（と立上り下にゐて。）

六兵衞　なんの、今山の六ツが打ちましたばかり……年を老りますとつい根氣がなく、御出でも知らず申譯がございません。（と朝日奈の裝をみて）おゝ、あなたは昨日とはお身裝もかはり……

（と云ひかけるを朝日奈冠せて。）

朝日奈　おゝ爺さん、そりあとの話しにする。早速ながら昨日の金、ちと目算がちがつて出來かねた。

六兵衞　へえ……

朝日奈　實はおれは何を隱さう朝日奈三郎兵衞、これから

爺さんが、兄弟分の唐犬權兵衞、放駒の四郎兵衞へいつて頼めばこんたの身分はどうともしてくれる……こんたへの約束の變更は、面目ねえが、この腹一つで敗けてくんねえ。

（とどつかと坐つて脇差を拔く。）

（六兵衞びつくりして縋りつき。）

六兵衞　もし・と、とんでもない。私風情のことから親分さまが、お腹をなさるなぞと、まあ待つて下さりまし。

朝日奈　いや、切るなといつても切らにあならねえ腹……こんたは早く兄弟分の唐犬か放駒のところへいつてこの譯をいつてくれ。

六兵衞　へえ、譯と申して、そ、その譯が私には分りません。

朝日奈　えゝ、面倒な。朝日奈が腹を切つたといやあいゝのだ。えゝわるくとめだて仕なさんな。

（と六兵衞を突きとばし、逆手に突立てようとする。）

（この時下手の土堤の上へ三浦小次郎編笠を手にして出てえいと金包を打ちつける。）

（これが朝日奈の小手へ當つて思はずハラリと刀を落す。）

朝日奈　えゝ、痛え、なにしやがる。

（と金包をみて。）

朝日奈　やあこりや金だ。

（と驚く。）

三浦　これ朝日奈、金は出來た。腹を切るには及ばぬわい。

朝日奈　やあ、うぬは三浦小次郎。

（と突如刀を取上げて走りかゝつてきつてかゝる。三浦身を替して無手のあしらひ。）

三浦　これ、六兵衞、早くその金もつてこゝを立され。

六兵衞　へい……

（とうろ／＼してゐたが、トゞ金を拾ひ、うなづいて一散に向うへ入る。）

（あと三浦、朝日奈立廻り、トゞ、朝日奈、小手を打たれ、刀を落し、すぐ組みつく。三浦投げのける。又組みつく。二三度。）

三浦　これ朝日奈、あだ執拗い、もう止めぬか。……また逢はう。

（と振りはなして行かうとする。朝日奈その腰へ摑まつて。）

朝日奈　いゝや、ならねえ。かう投げられては最早堪忍なりがたい。殺しておいていつてくれ。

三浦　はて無法をいふ男ぢや。この三浦、めつたに物の命をとらぬ。さ、はなせ。

朝日奈　いゝやはなさぬ。昨日からあたら男一疋を長齋坊

にされたからは、もう了簡はならねえわえ。その上ならず、二度までも投つけられては生きてはゐぬ。殺しておいて行きあがれ。

三浦　はてもて餘しものめ、三浦は人の命はとらぬといふに。

（と振りはなしてゆかうとする。）

（朝日奈仰向けにたふれ。）

朝日奈　やあ卑怯に逃げるか、三浦後を見せてゆく積りか。

三浦　（思はず歩みをとめて）なんの卑怯に逃げさらうか。

（朝日奈はれおきてまた取つき。）

朝日奈　さあ殺してゆけ、殺してゆかにやあ、いつかなこの場ははなさねえぞ。

三浦　むゝ。

（と少し困つてゐる。）

（此時向ふより、唐犬權兵衞、放駒四郎兵衞、當時の男達のこしらへ。駈けて出てきたり、この體を見てすぐと舞臺へくる。）

唐犬　これは三浦の御前さま、唯今はからずあつた六兵衞といふ老爺にきけば、仲間の朝日奈が、御武家と取合ひ最中。

放駒　きくとびつくり駈けつけてまゐりましたが、これは御前でござえましたか。……これ朝日奈、みりあ亂れ髮で、なんのざまだ。これ手前は駈けちがつてまだお目には懸らねえが、常時名うての三浦の御前、粗忽があつちやならねえぞ。

唐犬　さあ、はやくその手を放さねえか。

（と兩人すぐに朝日奈を引はなし、介抱して下手へつれてくる。）

三浦　あはゝ、丁度よいところへ、唐犬、放駒、はじめてあつた朝日奈にはおれもほとんど手を燒いた。

唐犬　これ朝日奈、どうしたものだ。あの水野どのなぞとはちがつて仁義を立てる三浦さま、己達の爲にも後立て無禮があつちやあ濟まねえぞ。

朝日奈　いゝや、なんであらうと投げられてはこの朝日奈の男が立たねえ。どうでも殺してもらふのだ。さあ、唐犬も放駒もどいてくれ。

放駒　これ、待て、どういふ譯かしらねえが、外ならぬ三浦の御前、笑つてすます法もある。まあ、下にゐねえのか。

三浦　はて朝日奈、この上はなんとしたら、その了簡がいるといふのぢや。

朝日奈　うむ、昨日からの詫狀の一札かいて、平にとおれへ詫つたら了簡のしやうもあらう。その外にはいかなこつても了簡ならねえ。かなはぬまでも幾度でもうぬが腰にとりついていつかなこの場は立たせねえ。

三浦　はてさりとては執念(しふね)い奴ぢや。
朝日奈　うぬ、さう吐かしやあ……
（とまた立かゝるを唐犬とめて。）
唐犬　これ、朝日奈、なんであらうと三浦様へ詫状なぞとは方鬪かねえ。もう大抵にするものだ。
朝日奈　えい、いやだ、同じ口で、なぜ骨を拾つてくれるとはいはねえ。
（と抑のけてゆかうとする。放駒とめて。）
放駒　これ待て、兄弟分がとめるといふに、なんで手前はきかれねえのだ。
朝日奈　おゝ、きかれねえ。兄弟分でも向ふへまはりあ三浦方。どいつこいつの容赦はねえ。
（と二人を突のけ立かゝる。）
唐犬　えゝ、いかに日頃の云ひ出したら、利かぬ氣象といひながら、義理を忘れた向ふみず、男達の面汚し三浦さまへの面晴れに兄弟分が成敗する。覺悟しろ。
（と一刀引ぬき、斬付ける。）
（朝日奈とびのき、得物はみまはしてもないので矢庭に着物を脱ぎ、素裸の下り一つになつて着物を振りまはして立廻り、トゞ唐犬の刀を着物で卷きとる途端に放駒觀念して横から裸身へ當身をいれる。）
（朝日奈うんと目をまはす。）

（唐犬と放駒膝を並べて涙を拭き。）
唐犬　もし三浦様、朝日奈は二人で唯今からうしました。これから家へ連れかへり、仲間中の成敗。
放駒　それでどうぞ御容赦下さいまし。
三浦　はてさういはるゝと面目ない。おれも少し朝日奈を揶揄ひすぎた。……この場で生かして連れかへつてくれ。強情ものも懲りたであらうよ。
唐犬　へい、ありがたう存じます。御言葉もあればなら放駒。
放駒　おゝ、こゝから生かして連れてゆかうよ。
（と二人立より、放駒は抱へて活を入れる。）
（朝日奈はつと氣がつくと、すぐ手を伸(のば)して。）
朝日奈　えゝ、詫び狀を書きあがれ。
（と立上りさうにしてばつたりなる。）
（唐犬放駒無言に顔みあはす。）
三浦　（うなづいて）天晴れ、朝日奈、いかにもこれは三浦がまけた。詫狀をかいてとらさう。
（朝日奈えつと思はずおきなほり。）
朝日奈　えゝ、もうその御言葉をきゝあもう澤山、私も今から御近附、どうぞ目をかけておくんなせえ。
三浦　あはゝ、やつと氣がすんだか、いや強情な男だな。
（と笑ふ。朝日奈太息をついてゐる。）

西鄕と豚姬（一幕）

京都三本木揚屋の中の間。舞臺上手二重、座敷の心、上手より打廻して腰襖の障子。續いて一段低く板敷上より八間を釣下げ、中央に圍爐裏。正面壁添に膳棚、欄間に定め書き。續いて繩暖簾の通ひ、臺所へ續く心。舞臺前より下手へ打廻して土間。ずつと下手に格子戸の出入。續いて奥へ障子の嵌つた出格子、この出格子と二重下手とは小壁で絡ぐ。壁はすべて赤壁。

二重座敷には小葛籠、鼓、縮緬手拭なぞ置き、舞妓四人呼ばれてきてゐる心にて二人は綾取をし、一人はお手玉を取つて遊んでゐる。別に一人少し離れてつくねんと物案じ顔でゐる。

板敷には仲居二人赤前垂にて膝立をしてゐる。下手の框に廻しの男、ぶら提灯を格子へ下げ腰を伸して圍爐裏で煙草を吸ひ附けてゐる。始終縫つて騷ぎ唄。

廻しの男　おきのはん〳〵。家の岸野はんはまだ貰はれやへんのかいな。

仲居甲　さ、さつきもいうてぢやけど承知々々とばかりでいつもの通りの大醉ぢやわいな。

廻しの男　あきやへんな。あの妓も醉はんとえゝ氣質やけど、いつもこれも弱らせられるなあ。まことに濟まんこつちやが、もう一度云うておくれんか。あと口がやい〳〵いうてぢや程に。

仲居甲　まあ、待ちいな。今忙しいによつて……

廻しの男　そないなこといはんと一寸賴みます。

仲居甲　そないにいうても今仕懸けた用があるがな。ま、も一服して待ちい。

廻しの男　あゝ仕樣ことがない。

（とまた一服する。こゝへ奥より仲居丙出てきて、舞妓達をみて。）

仲居丙　あれこの子達はまだこゝかいな。お客樣方はもう見えたがな。早う行きんかいな。（と物案じ顔の一をみて）おや雛勇はん、どないしやはつた。氣合でもわるいのかえ。

舞妓　いゝえ、さうやおへん。

仲居丙　ではどないしたの。

（雛勇默つて俯首く、舞妓の一人口を出して。）

舞妓甲　雛勇はんはな。襟かへが近々だんな。

舞妓乙　それで沈んでまんがな。私等が何かいふと直泣きまんがな。

（雛勇顏へ袖を當てる。）

仲居丙　まあこの子は、襟かへとはお目出度いことやないか。御赤飯炊いて祝ふほどの事やないか。泣くといふことがあるものかいな。……さあ、早ういきんか。

舞妓甲　座敷へ往くは面白いけれど此の頃はお武家はんのお客はみんなお刀を傍へ引つけてゐやはるによつて怖うてなあ。

舞妓乙　それで酔うてなあ昨日も菱屋はんのお座敷で劍の舞を舞うてみせうてなあ、長いお刀を拔きやはつたので私等はきやアつて逃げたがなあ、岸野姉はんは酔うて居やはつて空刀味から肱をはつて見て居やはつたらお武士はんがすうと振りなはる拍子にあぶなく首が落ちる所やつたつてなあ。

舞妓丙　あの怖。……姉はん、今日のお客はんもお武家はんやないか。

仲居丙　此頃のお座敷はお武家はんばかりで持つてゐるのやないか。お武家が怖うてはお座敷がありやへん。……それに今日のお武家はん方は御年輩の立派な方ばかりやによつて少とも心配なことはありやへん。早う往きい。

舞妓等　あい〳〵。

（と舞妓等打連れて奥へ入る。）

仲居甲　おとははん。お玉はんはどないしてゐやはる。

仲居丙　お玉はんはたゞ氣合が惡いというてまだあの小座敷に俯伏してぢやがな。

仲居甲　ほんにまあ、西郷はんが少とも見えなうなつてから、あんな氣象なお玉はんやけれど、めつきり元氣が無うなつて變つた人の樣になつたなあ。あんなものかいな。

仲居乙　ほんに他からは分らんもんやな。何ぼ自分が肥えてゐやはる云うたかてあんな太いだぶ〳〵した西郷はんが何處がいゝのやろ。

仲居丙　ほんにお玉〳〵つてお客衆に可愛がられ此處の名物になつてゐるお玉はん、どないな浮氣かて出來やはるに選りに選つて西郷はんとは可笑いな。

仲居甲　おゝ先刻もその話で大笑ひやがな。いかに豚姫さんやて、あんまり食好みが無さすぎるてゝ。

仲居等一同　おほゝゝゝほ。

廻しの男　これおきのはんも、おさわはんもそないな事いうてゐる手間があつたら一寸あの妓に知らしておくれんか。ほんに矢の催促ぢやがな。

仲居甲　あい〳〵、もう一寸ぢやがな。……だがまあ、お玉はんも餘程突き詰めてゐやはる。眼付が据つてゐやはるな。

仲居丙　さうやなあ、誰しも男に凝つてくると爭はれんもんや、みなあれや。だがまあ、それがあの、わてえ等に

意見の一つもいふお玉はんとおもふとほんに可笑いやうなお氣の毒なやうな。
仲居乙　ほんに全くさうやなあ。
仲居甲　それにこりや内密の話やがなあ、西郷はんの爲にはな、あの愼のよかつたお玉はんが、着る物も頭のものもみなくして葛籠は空ぢやといの。この移り代りもどうしやはるやらう。
廻しの男　（忍耐しかねて）もし早う頼みますに、これ、おきのはん。
仲居甲　あい／＼。
（この途端臺所にて。）
聲　お吸ひ物が上つたがな。
仲居等　あい／＼。
（と答へて膳を持つて立つ。）
廻しの男　では頼んますぜ。
仲居等　あい／＼。
（と繩暖簾の口へ入る。）
廻しの男　何のこつちや仲居等まで意地惡な。此頃は更けては往來はうか／＼と歩かれやへん。ほんに物騒な。昨夜も橋詰で斬られた奴があるがな。岸野はんも困りもんやなあ。早うしてくれんかいな。え、いつそ自分でいてよんでこうか。

（とこれも上へあがり暖簾口へ入る。此時蹄地の三味線の止り。拍子の音一しきりして、奥より仲居お玉太り肉の色白、愛くるしい顔つき、二十四五の扮、頭痛のする心にて物憂さうに出る。
お玉　おや、誰もゐやはらんの。
（と云ひながら圍爐裏へゆき、湯呑へ罐子の湯を汲み、帶の間から合藥を出してぐつと呑む。この時奥より以前の雛勇竊と出て小葛籠へ倚りかゝりしく／＼泣き出す。お玉氣がつき、ふつとみて。）
お玉　おゝお前は雛勇はんやないか。どないしなはつた。
雛勇　おゝ姉はん。私姉はんを捜してゐたんのや。
お玉　おゝ、どうしやはつた。
雛勇　私な、私な。（と泣き）明後日な襟かへで、あの嫌ひな夢はんの世話になる樣に、家の姉はんが約束しやしたの。私何うしよう。
お玉　おゝ、お前、あの夢はんの世話で、襟かへしやはるのか。まあ／＼あのさんもよい年をしてこないな者を捉へて……あゝ厭々。ま。見る事も聽くことも……（と額を押へる）
雛勇　あれ姉はん、何うしやはつた。（と立寄る）
お玉　（隔てゝ）いや、何うもしやへん／＼。
（此時奥には廻しの男の聲。）

聲　あれ、あぶない。姉はん。さ、河徳はんが矢の催促ぢやわいな。

女の聲　あれ、そないに引張つては衣服が切れるよう。引張らずとも往くわいな。

（と岸野醉ひどれた藝子の扮り、先刻の廻し男に介抱されて出る。）

岸野　（お玉を見て）あれ、姉はん、こゝにか。ま、先刻にから何處にゐやはつた。私姉はんに是非きいて貰はにやならんことがあるのや。（と坐り込む）

廻しの男　あれ、又かいな。

お玉　お、岸野はん、なんや知らんけれど。今頭痛がしてどもならん。今度にしい。

岸野　その頭痛知つてゐる。誰れも知らん姉はんの胸の中、私はよう知つてゐる。ま、姉はんもあの西はんのことでは大い苦勞しやはるの。

お玉　ほゝ、私のやうな不恰好のものが、色の戀のと、他人が笑ふにえ。

岸野　ほゝ、恰好が何うなとあらうと思ふ心に變りはあらへん。殊に姉はんの一圖な氣象では嘸ぞ辛いことやらうと察せられて私も涙が零れるにえ。（と泣く）

お玉　ほゝ、お前、醉うてぢやな。

岸野　ま、私が醉うてたてゝ、何もそないに隱しだてなはることはありやへん。では私がみんな云うて上げうかいな。西郷はんは此頃、殿樣の御首尾が惡うて蟄居してゐやはるのやろ。

お玉　え、西郷はんは蟄居してゐなはる。

岸野　え、知りやはらんのか。

お玉　何にも。……みなが私のことを西郷はんと大層譯のある樣にいはんすけれど、そりや西郷はんがお可哀相や。あのお方はほんに豪い方や。今の世に二人とない人や。そないな方が私の事など、何うなと思やはらうか。ま、でも蟄居などしてゐやはるなら、手紙なと下されたら好いに、いかにさつぱりしやはつた御人ぢやとてあんまりぢや。もうあれきりに見えぬことかと、大抵案じたこつちやない。あんまりや。

岸野　ほう、ほんにさうや、何とか直ぐ怨んで上げんかいな。

お玉　いや〳〵さうで無い。西郷はんには色々の外に大事な御苦勞がある。私らが事なぞは……。

岸野　ま、姉はんもめつきりと氣の弱い、こゝらがほんの戀ぢやな。

お玉　何の、私ももうちつと女らしい恰好もしてゐたら、云ひたい事もあるのやけれど……（ヂッとなる）

岸野　ま、また姉はんはあないな事を……肥えてゐやはる

によつて皆が、惡い名をつけて言囃すけれど、私にいはせりや、色白で柔和な所は白象はんや。それでお腹の中は普賢菩薩はんというてもえゝ。私はしみ〴〵姉さんが好や。隨分男さん達も姉はんを好きやはる人々はそりや多い。

お玉　ほゝ、岸野はんは相變らずやなあ。あゝ、私も岸野はんの樣に飲めたらまた氣の移ることもあるやろ。因果と酒の臭も厭でなあ……（と顏を顰める）

岸野　ま姉はん。私もかうみえても此胸は樂ぢやありやへんの。お、然う〳〵その事で姉はんに聽いて貰はんならんこと、あの半の字な……

（廻しの男仕方なく後向いて圍爐裏で煙草を吞んでゐたが此時。）

廻しの男　姉はん、もうえい加減にしやはれ、さ、もう往にまほ。（引立にかゝる）

岸野　（振り放して）えゝ、これからが大事な話や、まあ待ちんか。姉はん、聽いとくれなあ。又あの人は何時まで私に苦を懸けるのやろ。もう自棄や、それで吞む酒や、一寸も醉やへん。

廻しの男　でもこないに醉うてゐて……

岸野　えゝ、默りんか。でもなあ、姉はん、わてえ餘り氣にかゝるによつて先刻な祇園はんへ往て御籤を頂いてみたらなあ、末を頼めといなう。今は苦勞をしたとても先に樂みがあればなあ。で急に胸が開いたやうで心嬉しさについこないに醉うた。はゝゝゝは。

廻しの男　ま、姉さん、さ、もう往にませよ。さ。

岸野　おゝ、これをいうたら最往ぬ。最往ぬ。……姉はん、また、明日。

廻しの男　さ、さ、では姉はん、大けに。

（と仆れさうにする岸野を介抱して一寸お玉に挨拶してぶら提灯を持つて格子戸より出て行く。）

お玉　（惱まし相に見送り）あゝ、苦勞するというても笑うてすまして置ける苦勞。……

（と胸を押へる。）

雛勇　（此時まで一寸離れて案じ顏でゐたが）もし、姉はん私何うしよう。

お玉　おゝ、お前は雛勇はん、堪忍しておくれ。岸野はんに捉まへられてお前の話を途中にして……（とヂッと雛勇の顏を覗き）お前はたしか兩親とも無いのぢやな。

雛勇　えゝ。（と涙を拭く）

お玉　たよる者は誰もない。何を當ての樂みもない。（と俯伏した顏を勃然と上げ）お前、お死にんか。

雛勇　えゝ。（と逃げかゝる）

お玉　（捉へて）ほゝ、恐いかえ。さうも命は惜しいかえ。

ほゝ、まだお前は命の惜しいのも知らぬ。たゞ死ぬるといふのが怖いのや。堪忍しい。わてえが悪かつた。……だが、なあ、姉はんも何うぞして救うて上げたいが此頃は仔細かあつてそれもならん。

雛勇　でも姉はんから家の姉はんに話してくれたら。

お玉　さあ、それは先の私なら、お前の知らんこつて姉はんが私のいふことを聞く法もあつたのやけれど。今の私にはもう出來んこつちや。

雛勇　えゝ、では姉はんにも……何うせう。（と泣く）

お玉　もうお泣きでない。あゝ、私はもう泣かれると堪らん〳〵。あ、も一層此樣厭な世界に生きてゐたとて何になる。死ぬるならお前方の年のうち、厭な苦勞もしずに死ぬるが増しや。

雛勇　あれ、姉はん、免して！

お玉　ほゝ、仰山な。私が殺すといやしまいし。

雛勇　でもいつもの姉はんと違うて怖らしい。

お玉　（我に返つたやうに）おゝ、何にも知らぬお前にこんな事。堪忍しい。いゝわ、私が味じようしてやる。明日にもお前とこの姉はんに會うてよう云うてやる。夢はんの方は斷りいうてやるやうにいうてやる。

雛勇　え、ほんまに？　ま、嬉しい、……姉はん、頭痛は何うぢやわいな。

お玉　ほゝ、現金やな。

雛勇　ほゝ、でも姉さんが請合うて呉れやはつたので嬉しうて〳〵……姉はん、私あちへ往ていゝ？

お玉　ほゝ、往きい。

雛勇　あちで今、小六はんが面白い事してゐやはるよつて見たうて。え。

お玉　おゝ、往きい。

雛勇　おゝ、嬉しい。

（とばた〳〵奥へ入る。あと。）

お玉　（せぐり來る涙を抑へて）あゝ、この恰好で人を思ふのなんのてゝ、恥かしいけれど、西郷はんの事ばかりは思ひ切れん。何卒してま一度逢ひたい。ま一度……この儘では諦めうにも諦められん。……あゝ私の樣な者が、西郷はんを慕うたてゝ、迚も末の遂げらるゝこつちや無いとしれてゐて、何うしてこないな心が附いたんぢや。……というて諦めて何を樂みに生きてゐよう。……親も兄弟もない唯一人の因果な身に産れて、もう何もかも厭はしうて死なうと思ひ切つた、迚ものことにもう一度西郷はんに逢うて死にたい。たつた一目でも逢へたなら夫を名殘に死んでしまふのぢや。たゞ此儘では死切れん。死切れん。ま、せめて有所なと知れてゐたら、せめては心頼みがあるに、私のこの苦を知りやはらん方の、知らせ

て來よう譯もなし。思ひ遣りないとて恨まれぬ。所詮はこの身の拙うて、分に餘つた人を思ひつめたが過誤ぢや……というて〳〵諦められん。ま一度逢うて……逢うて……（と伏し沈む。この途端グワラリと音して頬冠りの太つた男、無恰好な尻端折して飛びこむ。お玉ワッと驚いて飛び退くのを見て）

男　おゝお玉か。己ぢや。

お玉　えツ。（と見て）あれ西郷はん。

（と土間へ飛下り、獅嚙ついて）逢ひたかつた。逢ひたかつた（と泣く）

西郷　お、久しかつたなう。いつも無事で結構ぢや。

お玉　え、無事で？　ま、（と泣き）私極りの悪いこつちやけれど、見えなうなられてからといふもの、毎日夢の樣に暮した。――でもまあ、よう尋ねて來て下された。さ、上らんせ。

（此時一寸外にて人の氣勢する。）

お、誰やら外に……お連樣があるのかいな。

西郷　いんや、ありや己を斬らうとしてゐる奴等ぢや。

お玉　えツ。（と驚いて戸口を鎖す）

西郷　いや〳〵あいつ等はかういふ明るい所へは入つて來ん。出るのを待つて斬らうとしてゐるんぢや。

お玉　まあ一體何ないしやはつた？

西郷　（框へ掛けて）おゝ、今日大久保の所まで所用で忍んでいて、その歸途から跟けられた。たゞ危險とおもうたのは三條の橋の上ぢや。あの上で掛かられたら逃場がないとおもうて急いでくると仕合せと斬懸けをらん。あれから此道へ曲つてくると不意と走り懸つて來をつた。

お玉　まあ……

西郷　すると不斗こゝの行燈が見えたによつて飛びこんで來た。

お玉　ま、それで何うしなはる。

西郷　何うするとて別に法はない。こゝを須臾借りてゐるのぢや。

お玉　ま、でもそいつ等が入つて來たら……

西郷　なに入つては來はせん。實は二日ばかり寢んのぢや。睡うてたまらん。何處ぞ貸してくれんか。寢て往なう。

お玉　ま、そないな事いうて表の奴等が何時までも待つてゐたら何ないしなはる。

西郷　うむ、それはまたその時の思案にする。

お玉　でもま、お刀を持つてゐやはらんで無用心な……此頃は御武家衆は廓でもお刀を預けやはらいで手許に引つけてゐやはるに……

西郷　でもおいは劍術は空下手ぢやからな。用のない時にこそ武士の表道具大小は差してゐれ、大事の場合には何

時も空手ぢや。

お玉　でも……斬りかけられなされたら……

西郷　逃げる。お玉、でも……

西郷　はて逃げられなんだら、斬られて死ぬるばかりぢや。

お玉　まあ。

西郷　あゝ、こゝへ掛けたら一時に睡うなつてきた……何處ぞ一寸貸してくれ。

お玉　あい／＼、ま上らんせ。

（この時表にて「えい」「やつ」と氣合、チヤリ／＼と二太刀三太刀太刀音、バツサリ二人ほど斬らるゝ音、呻り聲。舞臺の二人耳を澄ます。やがて格子戸を叩く音。）

聲　先生、先生、己共でごわす、中村でごわす。

西郷　おゝ、中村か、お玉、開けてやれ。

お玉　え、よいのかえ？

西郷　おゝ、同藩の者だ。大丈夫ぢや。

（お玉開ける。中村半次郎（後の桐野利秋）飛白の着附に小倉袴を短かく穿き、赤毛布をマントの様に着し血刀を下げてぬつと出る。）

中村　おゝ、先生、危險い所でごわしたな。

西郷　おゝ、中村か。何うして來た。

中村　先刻から先生の跡を追掛けて歩いてゐました。大久保どんの所へ行くと一歩違ひ、そいからまた跡を追うてくると先生の影をみかけた。そいで聲を掛けうとして不圖みると、怪しい奴が二人先生を附けてゐる。で、これはならんと身をひそめてくると先生はこゝへ入られた。で、二人の奴等囁き合つて家の中を窺ひ、拔き居らうとしたから、走り懸つて聲をかけて斬つた。二人ともえい氣持に斬れた。

西郷　さうか。だがさう無闇と人を斬つてはいけん。

中村　でも己が斬らなんだら、先生は斬られてゐなさろ。

西郷　（一寸返答に困つて）ふむ。

中村　先生はよく己が人を斬ると叱りなさるが、斬ろか、斬るまいかと考へては人を斬れん。斬るとおもうたら直ぐ斬らんと斬れん。

西郷　中村、用件といふのは何だ。

中村　その事でごわす。殿樣の御決心がまだ附かん。佐幕とも、勤王とも確とした仰せがなく、唯西郷は憎い奴だとばかり、繰り返し／＼お憤りぢやさうな。今日も午前から大久保どんが懇々と利害を述べ、再び先生を御採用あつて藩論を一決するが最上策と聲を嗄して申上げたのぢやさうなが、矢張り只憎い奴ぢや／＼の一點張りの御返答なさうな、畢竟西郷切腹と仰せ出されたいのである

が御先代の愛臣といふ所から御遠慮があつて、重役共に察しろと許りのお仕向けなのぢや。で、大久保どんも到頭あぐねて座を立たれたやうな譯ぢや。それで先生の所へ使が向いた。先生も大久保どんに逢ひなされたら大略聞かれたで、ごわせう。

西郷　おゝ、聽いた。

中村　それから跡ぢや。後は藩老の頑固黨の分らずやばかりお側で、到頭西郷切腹と仰せ出された。

（お玉えつと驚く。西郷が輕くうなづいて。）

西郷　ふむ。

中村　すると今まで何にもいはれなかつた新納どんが、「西郷切腹とはその意を得ん。謹愼といふならばまだ聞えてゐる。腹を切る罪はない。」と論じられて有繋の殿様も返される言葉もなく、切腹の御沙汰だけは一時中止となつたが、何せい殿様は赤間が關の事以來、自分の指揮を待たず、越權の計ひをする。今の中に仕置をせんと謀叛をする奴ぢやといふのぢや。それといふも餘り先生に衆望が集まるからの御嫉みぢや。御先代と違うて狹量で何事も先生に任せておけんからぢや。

西郷　ふむ。それで……

中村　それで？　（一寸拍子拔けして）　それで大久保どんは今、もう一度最後の嘆願をするとて支度を改めて出てゆかれた。

西郷　うむ、大久保がもう一度……さうか。

中村　大久保どんも餘程の覺悟のやうぢや。ぢや先生、其が萬一叶はんやうなら。何うしなさる。

西郷　（それに答へず）　中村、今汝が斬つたのは、ありや矢つ張り幕府の者か。

中村　慥に幕府の奴等でごわす。

西郷　おゝ己も幕府からは憎まれて附狙はれる、殿様からは御勘當、もう何處へも往く處のない身になつたな。あはゝゝは。（と淋しく笑ふ）

中村　（膝を進めて）　先生もかうなつては非常手段ぢや。薩藩の爲にも天下の爲にも藩論を一決させせんけりやいかん。若し大久保どんの嘆願が屆かんやうなら、同志を集めて御旅館へ嗷訴する積ぢや。

西郷　いかん。そんな亂暴な事はせんと、己にはまだ考へがある。

中村　えゝ考へが？

西郷　うむ、まあ、落着いてゐなされ、まだ／＼切羽にはなつてをらん。それより汝幕吏を二人まで斬つて此處等にゐてはいかん。早く歸りなされ。

中村　でも先生一人置いて……

西郷　己は二日起され通しなので睡うてたまらん。少し寐

てゆく。……よし町方の者がこゝまで取調べに來たとて己は大丈夫ぢやが、汝がゐると面倒ぢや。早く歸りなされ、えゝ早く歸りなされ。
中村　(不承々々)では歸ります。
西郷　待ちなされ。(と呼び止め)だが返すぐも慨訴なぞしちやならん。
中村　は、はい。
西郷　(お玉に)おゝお玉。この人を目立たんやうに他の出口から歸してやりなはれ。
お玉　あい、あんた、此方へ。
(と心得て中村をつれて上手の奥へ入る。中村西郷に默禮して履物をもつてのそ／＼と入る。あと西郷腕組して眼を閉ぢてゐる。やがてお玉引返してきて。)
お玉　もし、お歸し申しました。
西郷　おう、さうか。
お玉　今のお方の話の樣子ではえらい事になりましたな。
西郷　うむ。
お玉　それで何ぞよい御工夫でもありやすの。
西郷　無い。
お玉　えッ……でも今まだ切羽ではない。考へがあるといやはつたぢやありまへんか。
西郷　いや、ありや若い者は押へておかんと何んな事を仕出すか知れんから、それで云うたのぢや。
お玉　(おろ／＼聲を出し)ではま、何ないしやはる／＼。
西郷　ま、心配せんといゝ。何うかなる。ま、少との間寢かしてもらはう。
お玉　(顔を見て)まあ。
(と呆れる。此時表の方物騷しくなり、口々に罵る聲きこえる。お玉ははつとして。)
お玉　お取調べが來たと見えます。さ一寸こゝへお隱れなさりませ。私が工合ようやりますから……
西郷　さうか。
(と西郷立つて無造作に衝立の蔭へかくれる。お玉急いで西郷の履物をかくす。)
聲甲　慥に斬手はこの家へ逃げこんだやうだ。
聲乙　左樣で、一應取調べませう。
(と聲して戸口をぐわらりと開けて出役の同心二人。手先を連れて入つてくる。)
同心甲　これ、唯今これへ何者か參りはせんか。隱すと爲にならんぞ。有體にいへ。
同心乙　其奴は上役人を二人まで斬つた重罪人ぢや。どれへ往つた。早く申せ。
お玉　(落着いて)これはようお出で……(と挨拶して)唯今これへ何方もお見えなさりはしまへん。

同心甲　やあ、僞りを申せ。この方には確な證據があるぞ。隱し立てして後で後悔するな。

お玉　でも何とお云やはってもお出でにならんものはお出でにならん。

同心甲　よし、其方にはもう問はん。これ誰ぞ居らんか。これへ出い。これへ出い。

（と高聲あげて呼ぶ。暖簾口から料理番の六。洗ひ方の平など出る。）

六　（同心をみて恐れ）へ、これはお出で。なに御用でござりまする。

同心甲　こりや其方共はこれへ唯今まゐつた奴を存じてをらぬか。

六　（平と顏見合せて）へ、一向知らん。なあ平公。

平　おゝ、私も知らん。

同心乙　然らばこの女は最前よりこゝにをつたか。何うぢや。

六　（平と顏見合せ）へ、それは……

同心甲　こりや、僞ると爲にならんぞ。

六　へ、へい。確に居りましたやうにございます。

同心乙　左樣か。（と同心甲とうなづき合ひ、お玉に向ひ）其方最前からこれに居つたと申し、外の者共は知らんといふ。然らば其方一人で何處ぞへか、その者を逃がしたな。

お玉　いえ、私は全く知らんがな。

同心甲　やあ知らんと申しても最前からこれに居つたら、二人まで人の斬られたを知らんといふことはあるまい。

お玉　はい、そりや知つてまんがな……

同心乙　然らば何者が斬つた？

お玉　そりや知りまへんがな。私は女子のことぢやし、こゝで慄へてゐました。

同心甲　やあ、それで知らんとは言拔けさせぬぞ。さ、眞直に申せ。何處へ逃がした。

お玉　そりやお前、無理ぢやがな。こゝで斬合ふ音をきいた許り、誰がきつたか、誰がきられたか知りやへん。多分お互ひに斬合はしやんしたが誰も好んで斬られる人もなし、やつぱり強い方が勝つて弱い方が斬られやんしたのやろ。

同心甲　こりや何を云ふ。斬られたは御上の御用を勤むる新徵組の人達ぢや。

お玉　では相手が強すぎやしたのやろ。お前はんもまあ、こゝで私のやうな味らん譯の分らん女子を捉へてわやわやいうて居やはる手間で、早う外を捜したらよござんしよ。

同心甲　やあ、此奴、無禮な奴、一筋繩ではいかん。番屋

へ引立てゝ詮議しよう。

お玉　えゝ、どうなとさんせ女ぢやとて命をすてたら强いもの知らんものは知らんまでぢや。

同心乙　こいつ强情な奴。では番所へ引立てろ。

（手先等はつとお玉の傍へ行かうとする。料理番、洗ひ方など驚いておど／＼してゐる。此時。）

西郷　待て。

（と衝立を押退ける。お玉「アレ」と是非なき思入。）

同心甲　やあ貴公は何者ぢや。

西郷　己は薩藩の西郷吉之助ぢや。

同心甲　えへ、西郷ッ。（同心乙と顔見合せる）

西郷　いやその女は己が馴染の者ぢやが、まことに癇持でならん、そいで御無禮申したやうぢやが、何うかお免しが願ひたい。

同心甲　あゝ左樣でござるか。それでお手前には最前から其處にお出でゝございましたか。

西郷　左樣。

同心甲　ではこの門口での變事を御存じかな。

西郷　いや知らん。

同心甲　いや御存じないと云はれても下手人がこれへ入つたやうな形跡でござれば、居合はされたる不祥、番所まで御同行を願ひたい。

西郷　いや、それは斷る。

同心乙　では後日の爲め、御名刺が頂戴したい。

西郷　左樣なものは持合さん。

同心甲　では强つて番所まで御同行を願はう。

西郷　ふむ、行かんというたら……

同心甲　（擬勢して）强ひても御同行申す。

西郷　（赫と怒りて）やあ、己を强ひて同行する。强ひてとは繩かくるといふのか。薩藩の西郷吉之助と名乘つた者に繩かくるといふのか。馬鹿者が!!（と大喝して）幕府が表向きにこの西郷に繩打つて引かるゝものなら、何故刺客などを使つて闇打になぞしようとするのぢや。……門口で斬られた奴は新徴組の奴等というたな。彼等は己を斬らうとしをつた。但し彼等新徴組の奴等は內職に物取りを働くかッ。

同心等　（氣を呑まれてゐる）

西郷　物取りならば斬らるゝが當然ぢや。一體幕府の遣り口がすべて堂々としてをらん。當路の役人共に誠意がない。だから己共のやうな芋を掘つてをりやよい者にまで世話かけさせるのぢや。おのれ等小役人には分らん。歸つて上役の者に云へ。西郷を縛るなら、堂々と縛れ。卑怯な暗殺なぞせんとおけといへ、えゝ、もう歸れッ。

同心等　（身體を固くして息を切つてゐる）

西郷　但し、おのれ等、立派に薩藩の西郷吉之助縛つて牽くかッ。

同心甲　むゝ。（と詰る）

同心乙　（口を出して）いや、强ひて御同行申すと申したは同僚の申しあやまり。御身分柄のこと、歸つて一應相談を遂げ、重ねて、御藩の方へ御照會申さう。では失禮。

（と一同そこ〳〵にして出る。六と平も西郷とお玉の樣子をみてこそ〳〵と暖簾口へ入る、お玉土間へ下り戸口を鎖し。）

お玉　ま、私、待てえと衝立を開けて出てきやはつた時には何ないしようとおもつた。

西郷　あはゝ。彼等何奴も、己を斬つて返す刀で腹を斬らうといふ氣魄のある奴は一人もない。おのが命を庇ふから踏込んだ事が出來ぬ。彼等に限らず、幕府の奴はみなあれぢや。だから幕府は衰へるのぢや。

お玉　だがまあ、大夫はんは何時もに似氣なく大きな聲を出しなはれて私も吃驚した。それにあないな者を相手にしやはる方やないとおもうてゐたに。

西郷　（長大息して）あゝ、お玉、汝にそれが氣が附いたか。さういはるゝと己も恥入つた。あんな小役人共を相手に大聲を上げたとおもふと己ももう終ぢや。……有繫に今度の事には己も思案に餘つた。永らくの謹愼が免りてやつとお目見得が叶うたと思ふと、又勘氣ぢや。もう今度は駄目ぢや。迚も大久保がいかに申上げたとて御免はあるまい。……あゝ己の仕事も中途挫折ぢや。まだ時節が來んのぢや。勤王の大業も、竹內式部先生に始まつた。山縣大貳先生と、いづれも時が來んで中途挫折ぢや。今度こそは時節到來と己も幸ひな時に生れあはしてこの曠古の大業の雜兵位は勤めらるゝとおもうて喜んだが、矢張己の妄想ぢやつた。まだ時節がこん。あとは次の時代ぢや。もう己の仕事はしまひぢや。（とぢつとなる）

お玉　（はら〳〵と淚を滾して）ま、大夫はんがさういやはるのは餘つ程なことぢや。

西郷　（顏を上げて）ま、えい。この成行は翌日までぢや。睡うてならん。ま、寢てまたう。

お玉　えつ、寢やはる？　おゝ、嘸ぞお疲れたやろ。少とお横になつて手足を伸しなさるもよかろ。あちの小座敷へ一寸床をしませう。

西郷　いや、こゝでよい〳〵。

（ところりと横になり、衝立を引寄せ、身體をかくす、お玉取支へかれて。）

お玉　おゝ、さぞお腹も空いてゐやはらう。一寸飯をして持つてこよう。（と立つ）

西郷　おゝ一寸握飯(むすび)でもしてくれ。

お玉　あい〳〵。

（圍爐裏の側にあつた煙草の筒を取つて懐紙を當て、枕にあてがひ、涙を拭いて暖簾口へ入る。あと奥より寐聞きの舞妓達出る。一人は三味線を持つ。）

舞妓甲　さ、悠々わてえ等の番や。さ、こゝで當つておかん。

舞妓乙　なにしやはる。

舞妓甲　椀久やないか。雛勇はん。さ、お立ちんか。

雛勇　（以前とはかはり、にこ〳〵してゐて）あい。（と小葛籠から杖と面を出す。舞妓等鼓、三味線など合はせることよろしく）

舞妓甲　さ、よいか。

（と雛勇一寸椀久の振になる。どつと風の音、雛勇止めて。）

雛勇　おゝ怖。

（一同も三味線、鼓の手を止める。と何處ともなく豚の聲。舞妓等おびえて。）

雛勇　ありや何や。

舞妓甲　ま、豚の様やが、何處にも誰もゐやへん。ま、氣味わる。

舞妓乙　もしや、怖いもんやないか。あれ又……

舞妓甲　おゝ怖。……もしやすると蟒蛇(うはゞみ)やないか。

（一同えつとおびえる。この途端風の音、一同わつと我先に逃げようとする。出會頭にお玉握り飯に箸をそへ盆にのせ、土瓶をもつて出る。）

お玉　まあ、びつくりした、お前方はどないしたのや。

舞妓甲　でも姉はん、あれ蟒蛇(うはゞみ)が豚をかいて……

お玉　えつ。（と聽耳たて、呆れ）ま。あれ程の苦勞の中でもうあないに……（舞妓達に）これ、お前方そないなこというもんぢやありやへん。ありや私(わて)の知つたお方が其處に寢てゐやはるのや、だが彼方(あち)へいては云うてはならんぞえ。

舞妓等　あい〳〵。

（と點頭いて入る。お玉、盆を下へ置き衝立を掻いやり、西郷の寢姿をみて。）

お玉　ま、このよくお寢(よ)つたこと。全く私等(わてえら)なぞには底の知れんお方や。……此お方の御苦勞に比べたら、私の苦勞なぞ、馬鹿らしうて話にもならん。……というて、かうして御傍にゐりや何事も忘れてゐるけれど、また離れたら……あゝ、此お別離(わかれ)がもう名殘ぢや。（と聲を吞んで泣き。やがて涙を拭ひ）もし、大夫はん。おにぎりが出來ました。起きてお上りんか。もし〳〵。この儘ではお風召します。さ、お起きさんか。もし〳〵。（と揺り起す）

西郷　あゝゝゝあ。（と目覺し、お玉をみて）おゝお玉か。

（腹匍ひになつて顏を上げ）お、握飯か一つくれ。

お玉　ま、起きてお上りんか。

西郷　おゝ。

（と起きかけて握り飯を取らうとしてふとお玉の顏を見て熟とみつめる。お玉見詰められて顏を反けるやがて。）

西郷　お玉、汝は死ぬ氣ぢやな。

お玉　（極端に驚く）ひえツ、……（漸く氣を取直したやうに）いゝえ。

西郷　嘘をいへ。死ぬ氣ぢや。相に出てゐる。

お玉　えつ、相に？（と顏へ手をやる）

西郷　いや、己は人相見ぢやないが、今までいくらも死を決した男に出會つてゐる。そいで分る。何うしたんぢや。

お玉　（胸迫つて泣き出す）

西郷　これ泣いてゐちや分らん。いへ。

お玉　（泣きながら點頭き）では私いふ。私はた、九つの時から親に別れてかういふ茶屋へ奉公にやられた。母親はもうずつと小さい時に無くなられて、父やんは私が九つの時、都の世帶が張りきれず。私を奉公に出されて田舍へ引込まれた。それから十、十一、十二、十三と五年、隨分悲しい目にもあつた。それで忘れもせん十三の冬、丁度、ちら／＼と雪のふる朝、不意と父やんが私を尋ねて杖に縋つて來やはれた。久し振りで遇うた嬉しさに種々聽くと、父やんは田舍へ行て百姓をしていやはれたが、もう年を老つて出來やはらんので私を便つてきやはれたとの事、何をいふにも私はその時まだ十三、父やんを過すこともならず。家の無くなられたお家はんは隣にも立たん者、來たと白い眼で睨みやはる。でやつと貯めた三分のお金を父やんに渡してどうぞもう一度田舍へ歸つてくれなはれと泣いて頼んだら聽分けて出てゆかれた。やがてその翌日の午頃にまた、飄然と歸つてこられた。私ははつと胸を突いて何うせうかとおもうてゐると「これお玉よ。もう心配するな、おれはな、今日の檀那寺の和尚さんに遇うた。それでかう／＼いふ譯と話したらな。よし／＼飾りを下したなら、寺へ連れていておれが世話してやらう、おれはもう金はいらんことになつたから返すというてな。私の顏をぢつとみてな、これが別れにならうもしれん、達者で居ろよというて出てゆかれた。その姿が今でも眼にあり／＼。……それつきりに今に音沙汰なく。今考へれば多分その時何處ぞ遠くの河淵なと往て身を投げて死なしやれたと見える……それからは私は一人ぼち。努めて元氣にしてみせて、やれ玉は面白いの、苦がなさゝうなのとお客衆に云はれても、時時一人になると何ともいへず寂しうて／＼、と云ひ差し

て少し顔を上げ）それがふと大夫はんに逢うてから始めの中は濟まんこつちやが、取り止めもないやうなお方ぢやとおもうてゐたが、日增しにお目に懸るにつれて、大樣で底の分らん、それで懷かしい、世の中にもこんな豪いお方があるかとおもふと、お傍にゐると、物に喩へていへば、かう大きな／＼お日さんの一杯さした野邊にでもゐる樣な、醉うたやうな氣持ちになり、夫から今までの我身が顧みられて今まで賢うみえたお人も、豪うみえた容貌もみな下らん人になつて、座敷で浮いたことというてゐるのが馬鹿らしうなり、何やら、かう心に大穴でもあいた樣、それでその隙が塞らんでゐるやうな氣持がして、何もかもみな厭になつて、というて大夫はんの奥樣にはどうあがいたてならるゝ身やなし。もう何の執着もなし。もう一度お目に懸かれたら、夫れを仕舞に死んでしまはうと覺悟をきめた。……というてそりやみんな私の心の勝手、大夫はんのお知りやしたことではない。ついみな云うて仕舞うたれ、怒らんとおくれやす。（と胸迫つて泣き出す）

西郷　（ぢつと聽いてゐた首を擡げて）今まで己は何にも云はなかつたが、汝が己に蔭に日向にいろ／＼盡してくれたのもよう知つてゐる。いつか己も禮の出來る時がくるだらうと默つてゐた。

お玉　おゝ。（とたゞ泣いてゐる）

西郷　汝が身の廻りのものや、何もかも無くして己や同志のもんの爲にしてくれたこともよく知つてゐる。

お玉　（驚いて）えつ。……

西郷　しかも己にそれを隱して少しも知らせまい／＼と骨折つてゐる事もよく知つてゐる。

お玉　えつ、それまでも……私、う、うれしい。

（と感極まつて西郷の膝に打伏し、咽び泣く。西郷その肩へ手をかけ。）

西郷　己の樣な味らん者を、よくこんなにまで面倒をみてくれた。……その上に命まで……己は、う、う、うれしい／＼。（と泣き出す）

お玉　（首振り上げて）あれ、ま、大夫はんが私の樣なもんに涙を……

西郷　汝は、汝は、己に、己に、たうとう、たうとう、涙を出させてしまつた。涙を出させてしまつた。

（こみ上げておい／＼と泣き出す。）

お玉　あれ、大夫はん。そんな大きな聲をして……ま、人がきく。見ともない／＼。

（といひながら、これもしやくり上げて泣く。この時奥の間より仲居甲何の氣なしに出てこの體を見て笑ひを忍び、こそ／＼と出てゆく。やがて一同を呼んでき

た心にて仲居二三人、料理番、洗ひ方の男など押重なつてそつと覗き指さし、囁いて腹を抱へ。笑ひを堪へる心。とゞ彈みを打つて衝立を押倒し、どつと逃げて行く。二人氣が附いて見送り、心にも懸けぬ樣子。臺所の方にて一人の男の聲堪へかねたやうに。)

聲　でも肥えたのと肥えたのとが握飯を前へおいて手放しでおい／＼泣いてゐては、いつかな金佛でも笑はずにや……

他の聲　しつ。(といつて笑ひを堪へる樣子、とゞ堪へかねてどつと笑ひ崩るゝ聲)

西郷　(居住居を直してふいと)お玉、己も一緒に死なう。

お玉　えつ、ま、大夫はんとしたことが、そないな冗談いうて……

西郷　いや冗談ではない。己も死ぬる。己ももう世に用のない身體ぢや。今まではどんな難事も忍んで大業を成就しようといふ煩惱があつたが、それもふつつり絶えたれば、もう何にもない。己はよく首を斬られる奴をみたが、切られるまでは眦を釣上げ、齒を喰ひしばつて有りたけの力をみせてゐるが、太刀風と共にばつたりと何にもなくなつてしまふ。己の望の綱も切れたら、もう持扱ふほど隙な身になつた。迚も死ぬなら汝と死ぬ。

お玉　でも滅相な、私のやうな者と死にやはつたら、それこそ取り返しのならんお名の汚れぢや。

西郷　あはゝ死後の名なぞいふものは己に取つてはなんでもない。……それにつけても思ひ出すはあの月照上人のことぢや。あゝお氣の毒なことをした。元來己はあの時死ぬべき筈ぢやつた。國家の爲に死ぬるのも、汝と一緒に死ぬるのも事に輕重はあれ、己に取つては一つぢや。たゞ情に酬いるのぢや。あの月照どんと一緒に薩摩潟の水へ入つたのも同じ覺悟ぢやつた。あの時月照どんの歌は「大君の爲には何か惜しからむ、さつまの瀬戸に身は沈むとも。」己のは「ふたつなき道に此身を捨小舟、波たたばとて、風ふかばとて。」己の心はいつも變らん。なんで死なうが道一つぢや。波がたゝうが風が吹かうが。さあ往こ。

(とお玉の手を取つて立たうとする。)

お玉　(手を執られたまゝ)　往ことは何處へ。

西郷　死にゝぢや。鴨川の深みを尋ねて川傳ひにいかう。

お玉　でもまだ宵で人通りが……

(とつか／＼と下手へゆき出窓の障子を明けて見渡す。どつと風の音、八間の燈火、瞬いて消える。十日頃の月の光、流れ入り、一面窓外には黑く流るゝ鴨川と北山みえる。お玉その景色に見入りながら立戻つてきて。)

お玉　もしあの鴨川の黒い流れを……三途の川とやらもあの様であろ……（とあたりを見廻し）まあ静ぢや。死んだといふもこんな氣持やろか。

西郷　さうぢやろ。

お玉　まあ、うれしい。いゝ氣持やろ。幸ひ人通りもない。さ、往にませよ。

西郷　おゝ、往こ。

（と戸口へ懸る。この途端、けたゝましく戸口を叩く。二人一寸慌てゝ土間の隅の雑具の陰へ小隠れする。）

聲　これ、明けんか。これ明けんか。急用ぢや。たれも居らんか。これ。

（これにて奥より仲居甲出て。）

仲居甲　おやまあ、真暗や。これ、平はん。ちやと燈がきえてる。來ておくれんか。おや、お玉はんもあのお方も居やはらん様や……

聲　これ、開けんか、これ。

仲居甲　はい／＼どなたです。これ平はん、早う燈を持つてこんか。

（この中、窓口より中村半次郎覗き。）

中村　これ、早くあけんか。先生に急用ぢや。

仲居甲　はい／＼。

（とこの中、平燈を持つてきて、入間に點ずる。仲居甲は土間へ下り、戸を開ける。中村半次郎、羽織袴の大久保市助（後の利通）と共につか／＼と入つてくる。）

中村　これ先生は何處ぢや、急用ぢや。喜ばしいお知らせを持つてきたのぢや。早く知らせう。

仲居甲　へ、でも何處においでやら。

西郷　いやこゝだ／＼。

（と前へ出てくる。あとよりお玉おづ／＼出る。）

中村　お、先生、何でそんな處に居られた。……ま、それより大吉事でごわすぞ。大久保さんが御盡力で遂に復職されて藩論一決（とやゝ聲をひそめて）勤王にきまりましたぞ。

西郷　え、勤王に……

大久保　さうぢや、西郷どん、喜びなされい。直ぐに西郷どんは密使として水戸と打合せの爲め江戸へ下されることゝ決りましたぞ。

西郷　えつ、では殿様の御思召が急に變つて……あゝ有難い。大久保どん。みんな君の御厚志ぢや。

（と大久保の手を執る、大久保もその手を執つて。）

大久保　あゝ、先刻はあれまでに言葉を盡してもお聽き入れがない。もうこれまでと己を信頼してこの大事を任せた汝にも濟まんと刺違へて死なうとおもつたが今一度と

決死で上つて望みが叶うた。思へば先刻よう死なゝんだぞ……おゝこれは殿様からのお手許金、旅費として下さつた。

（と懐より百兩包を出して西郷に渡す。）

西郷　おゝ、では直ぐ立たう。

（この時おづ／＼とお玉側へゆき。）

お玉　も、もし、もし。

西郷　（振向き）お、お玉、情死はもう變更だ。

一同　えつ、情死！

（と驚く。お玉極り惡く顏を隱す。）

西郷　（百兩包の中から一兩だけ拔出し、あとをお玉の手に持たせ）さ、これは歸つて來る迄の手當だ。

（と一兩兵兒帶の間へ挾んで出ようとする。）

中村　ま、先生一兩持つて何處へ行きなさる。

西郷　何處へゆくて、二分あれば東海道は上り下り往返が出來る。……では大久保どん往てくる。あとを賴んますぞ。……おゝ、お玉ッ。

（とつか／＼と側へゆき手をかけようとして中村と大久保をみて極まり惡さうにして、こそ／＼と出て行つてしまふ。お玉呆つ氣に取られたやうに二足三足出て大久保や中村に顏見合せ、これも極り惡く、框へ後向きに俯伏してしまふ。大久保と中村とは顏見合せて、「何んだ」といふ顏。仲居甲も居合せてたゞ呆れてゐる。

――幕――

根岸の一夜（一幕）

（雨華庵軼事）

根岸大塚抱一上人の寓居。舞臺上手へよせて折廻しの二重家體、中央に敷居入りて二間となる。上手の間は正面に持佛を飾り、軒先に雨華庵の額、下手は正面暖簾口、中央に爐を切り、自在竹の釜を掛ける。よき所に流東好と題したる三味線箱、その他四五の調度類、縁先に盆栽などありてよし。又下手軒先に蟲籠十四五枚ほど縁へ通して吊しある。舞臺前と下手は庭、すべてこれも作らぬ體、枝ぶりよき松一本と折柄の山吹だけの彩色。よき所に井筒、水溢るゝ。後は低い竹垣、下手寄に竹扉の枝折戸。外は往來にて向ふは田圃の見晴し、たんぽゝ、げんげ、蓮華田の畝を色どる。

二重上手の間に抱一の妾加賀川、頭を櫛卷にしてお召の着附に同じ袖無羽織、花を生けてゐた心にて水差、剪刀などを載せた盆を片寄せ控へ、上座に阪井家の家中某甲繼上下大小にて、加賀川と談話の體。庭には竹の縁臺を置き、幇間甚八、藝者甲、乙腰かけて煙草などのみゐる。

阪井家の家中某甲（談話の終りたる體にて歸り支度して）では春條様、手前はこれで御暇仕りまする。御歸館に相成りましたれば御前體よろしう御傳へを願ひ上げます。

加賀川　ではもう主あ歸りなさんすかえ。上人さんももうぢきに歸りんせうに。まあ話してゆきなましな。

某甲　いや手前も久々にて御目通りをいたし度存じますれど、最早御門限の時刻に間もござりませねば、殘念ながら此にて御暇をたまはりまする。

加賀川　では何しても主あもう歸りなさますか。それはまあまあ殘り多い……では大手へ（阪井家の本邸）歸りなましたら殿さんによろしう御披露頼みいす。

某甲　心得ましてござりまする。……では春條様御目出度御法體御遂げ遊ばしますやう……

加賀川　（さすがは一寸眼頭を拭ひ）よういうてくれなます。忝なうおす。私のやうなものが尼になりイしても利益も功德もありんすまいが、いつそさばさばとして氣が變りイせう。

（此時下手の幇間藝者一寸驚いて顏なみあはせる。）

某甲　あはゝゝゝは、これは又御氣輕な御挨拶。……併し、愈御法體の曉には最早かやうな御言葉は伺へませんな。

加賀川　いゝえ、尼になりイしても言葉はやつぱりこの儘との上人さんの云付ざます。

茱甲　（一寸怪訝な顏をして）あゝ左樣でござりまするか。おゝ、では手前はこれで御暇いたしまする。

加賀川　これはまあ、御構ひも申しませんで……（とこれにて物陰に控へてゐた仲間草履を直し茱甲捨ぜりふにて挨拶して下へおり。幇間等に一寸會釋して枝折戸より出てゆく。幇間等あと見送りて）

幇間　もし花魁え、あなたは尼におなりなせえまして菩提の道とやらへ御入んなせえますのかえ。

加賀川　あれ、鼓八さんは氣の早い。尼になるとてたゞ頭を丸める丈のことさ。菩提の道とやら何のと、そんな難しいことぢやあありんせん。

幇間　へゝえ。だが又何でそんな飛んでもねえ思ひ付をなせえましたね。

加賀川　別段これといふこともありんせん。上人さんが飾りを附けてゐると朝夕のせつちようが傍の見る眼も五月蠅さうだから一層剃つてしまへといひなんすし、さしてもう惜しい髮でもなし、つい剃る氣になりイした。

藝者甲　花魁も思ひ切りのいゝ。

藝者乙　ほんに私等は聽いただけでも涙が出る。

加賀川　ほゝゝゝほ、私も愈今日明日となつてみるとさすがに妙な氣かしいす。先刻も大手の御用人さんが生眞面目な挨拶をさつしやると逐いまぢくなつて涙を落しイした。妙なものざますねえ。

幇間　成程此方とらは眞面目に向はれると空つきし意氣地のねえもんで、はしやいだ元氣で持つてゐる奴さ。……だがこりあ花魁、こゝは鼓八公一世一代を出しても一つ眞面目になつてお止め申したいね。

藝者甲　ほんとに花魁これぱつかりは御よしなさいましよ。

藝者乙　全くねえ。花魁なにも酒落に尼さんになつてみなくてもいゝぢやあありませんか。

加賀川　ほゝ、お前方も深切にようい うてくれなます。けれど私も滿更忌なら成りイせん。もう熟々朝夕が大儀になつた。亂れた髮で居ようよりいつそ坊主がましざます。

藝者甲　こりやあ花魁のいつもの御氣象さうもありませうが、何だか餘り短氣の樣で……

幇間　さうだ／＼。剃るのは何時でも剃られます。まあ今度はお止しなせえまし。

加賀川　ほゝ、今更止されるものかねえ。大手の殿さんへも願ひを上げて唯た今御附女中春條願之通剃髮被仰付といふ御使者まであつたもの、何うなるものかねえ。

幇間　へえ、では今の御武士はんは御使者でござえますか。それで花魁は御附女中春條といひなせえますのかね。

こりやあ初耳だ。

加賀川　あい、御屋敷さんといふものは堅いもので私に春條といふ表徳を與れいイしてお役目は御附與女中といふのさ。今度尼になるのも一々御日記とやらへ載つて後へ殘りイす。だからさう手輕によすの止めるのといふ譯にはいきイせん。……だが思へば私もいろ〳〵に名の附いたものさ。親の付けてくれた名は小兒の時によばれたきりで、廓での名が加賀川、こゝへ來ての表名が春條、無くなつた鵬齋さんや蜀山さんが唐めかして呼んだ名が小豔女史……やがて附く名が妙華尼ざます。

幇間　へゝえ、もうお名まで定つておいでなせえますか。何たかから餘り急な話で變な氣がいたしますねえ。

藝者甲　全く申し樣がありませんねえ。花魁が全盛でおいでなすつたのも此間のやうに思はれますのにお頭をお下しなさるなんてねえ。

藝者乙　私はもう先刻から涙が出てなりません。

加賀川　えゝ、もう止しなんし。何の道女は先が知れて仕舞つて味らないもの。それに私が尼になりイしたら、大事の方も受がよく、上人さんも安堵しいでせうとおもつて斬ろ髮、指を斬るよりましざます。

幇間　へゝえ、ではこれにはなにか濃い譯合がごぜえますのだね。私等にはさういふことは薩張雲上で分らねえ。

加賀川　（一寸考へ）心置のないお前方だから云ひなますが、上人さんも此頃は大手へも往來して昔の樣に御家中の人達を嫌ひなさんせんのも、みんな私の行末を思つてなせえますとおもふと御氣の毒でありんす。

幇間　成程さう伺へばあの結構な御身分にもさういふ御心遣ひがおあんなせえますと思やあ誰の身にも樂はねえ。

藝者甲　さう申しやこの四五日吉原へお見えなさいませんのも、そんなこんなで御忙がしいので御座いますね。

藝者乙　さうとはしらず。もし御加減でも惡いかと御機嫌伺ひ旁御迎へにまゐりましたが、こりや惡いことをいたしましたねえ。

加賀川　なんのお前方の來てくれるのは賑かで結構ざます。それに上人ももう歸りなます刻限まあ暫く話してゐなまし。今日はかへりに土産があるといつて出なましたから、まあどんなものを持つてくるか、まあ待つてゐなまし。

幇間　上人樣が口へ出してお土産と仰えますからは餘程御趣向でごぜえませう。こりやお樂みでごぜえますねえ。おやあの駕籠は上人樣ぢやあごぜえませんか。おゝ上人樣だ。もしおかへりでごぜえますよ。

（と一同表を見る。四つ手駕籠威勢よく枝折戸より入る。抱一僧形五十五六。無地物の羽二重の着附に地白

を重ね、黒の紋紗の信玄羽織に古代紫の長紐、緞物の帶を締め、黒骨扇、膝へ稚子輪に結つて振袖に括り袴を附けた十位の美少年を抱いて乘つてゐる。）

幇間　（口々に）　これはお歸りなさいまし。

抱一　おゝみんなよく揃つて來てゐてくれたな。

（と少年の手を引いて二重へ上り爐の側へ坐り。）

これ駕籠やに祝儀をやつてくれ。

（加賀川駕籠やに金をやる。駕籠やは禮をいつて歸ることよろしく。）

加賀川　（茶を出して不審相に）　もし上人さん、その御子はえ。

抱一　あはゝゝゝは。行く時に云つた珍しい土產とはこれだ。これは今日から手前の子だどうだ、よい子だらう。

加賀川　えつ。

抱一　これ八十丸、お母さまに御挨拶しろ。

八十丸　（溫順しく加賀川の前に手を支へて）　お母さま始めまして御目に懸りまする。不束者にござりますれど何卒御目懸け下さりませ。

（と辭儀する。加賀川狼狽へて。）

加賀川　はい／＼……（と抱一に）これはまあ、何うしたのでござりんす。

抱一　あはゝゝは、其方を尼にしたのもその子を貰つてやりたさからだ。こりや淨立寺の二男だ。利口者での、疾うから私の大氣に入りだ。其方が法體を遂げたら早速、大手へさう云つて其方の養子にして雨華庵の名跡を襲がせる積だ。それで今日から連れて來たのだ。何うだ、氣に入つたらうな。もう其方も子が樂みになる年だ。

加賀川　（はら／＼と落涙して）　では私に落髪をすゝめなんしたも、この爲ざましたか。上人さんは何故かう不意と私の心を刳るやうなことをしなんす。私は今生れてはじめてお母さまといはれイしたら何んともいへず胸が一杯になりイした。……これ八十丸さん、もう一度お母さまといつてくんなまし。

八十丸　お母さま。

加賀川　おほゝゝゝほ（とやゝヒステリカルに笑つて八十丸の肩へ手をかけ）私はかう何だか嬉しくつてなりんせん。

抱一　あはつ、もうそれで親子だ。それで先づ己の心も屆いたといふものだ。仲よく一緒にやつてくれ。さあ、八十丸を彼方へ連れて往つて菓子でも喰べさせろがいゝ。

加賀川　あい、では八十丸さん、こちらへ來なんし。

八十丸　（溫順しく）　はい。

加賀川　（心から嬉しさうに）　ま、ほんにしをらしい……さ、來なんし。

（と八十丸の手を引いて暖簾口へ入る。）

抱一　（おと見送つて）あはゝゝは。（ふと氣の付いたやうに幇間に向ひ）おゝ鼓八、今道で一寸耳へ入つたが、昨夜吉原に又心中があつたさうだな。

幇間　へえ、そのことでごせえます。例の通り淺猿しい、裸にされて菰包にして手足を縛つて葬られやしたが、あれを、あれを度々見てゐても伊張やる奴の絶えねえのは情けねえ物でこせえます。

抱一　ふむ、町内は何處だ。

幇間　京町でごせえます。それでもし、不仕合とぱつとしたものでごせえますから、小屋者が踏込んで部屋のものを挘出すやら大騷ぎでこせえました。……おゝさうた。それで御話しがごせえます。あの御存じの茶の宗匠たつた宗與ね。一昨年の寢心中を仕損ね小屋者に下げられた彼奴め。よくまあ恥かしくもなく乘込んできて尖立になつて指圖をしてゐやす。それで私の顏を見て「やあ鼓八さんしはらく。」つこねえ。あゝも身分違えになると、ナくなるものかと呆れやした。先には物腰のやはらかい、溫順しい男でしたがねえ。

抱一　ふむ、さうか。彼奴も河東節の一つもやる癖に心中をして、しかも遣りそくなふとはよく〳〵の業晒しだ。だが彼奴も昔はどつか生粹な可愛らしい所のあつた奴だが、そんなにまで變つたか。

幇間　變つた段ぢやごせえません。流石の私も驚きやしたこ

藝者甲　まあ、あの宗與さんがそんなにおなんなさいましたか。

藝者乙　ほんとに人の行末は分らないものですねえ。

抱一　うむ、彼奴許りはそんなにならうとは思はなかつた。……時にお前をつれて吉原へ行く所だが、今日は往かれぬ。これ加賀川、加賀川。（と呼ぶ。加賀川奥より返事をしながら出る）おゝ加賀川みんなに祝儀をやつてくれ。

加賀川　あい。

（と紙纏頭をやらうとする。）

抱一　これ紙纏頭なぞをやらずと、二分宛金でやれ。

加賀川　あい、でもお金がもうありんせん。

抱一　ほうもう無いか。

加賀川　あい。

抱一　さうか。（と不斗軒先の蒸籠へ眼をつけ）これ、鼓八も、おきわも、おとらも蒸籠はたきか。

鼓八　へ。大好物でごせえます。併し、この陽氣ぢやあ貴くつて迚も私共の口へは入りません。實は先刻から軒先を横目で睨んで居りました。

抱一　さうか。さすがは鼓八も喰物には意地がきたなくつて嬉しいな。全く此奴を手を汚しながら剝して喰ふのは

別なものだ。これ、加賀川、三人に分けてやれ。
幇間　これはまあ有難う存じます。
藝者　ほんたうに結構な、晩の御飯が樂みだねえ。
抱一　だが四五枚のこしておけ、今夜八十丸と三人でつッ突いて喰ふ分だ。
加賀川　あい〳〵。
（と蒸餅を取つて紙へ包み、三人へ渡す。）
幇間　これはまあ有難う存じまする。……だがかう強飯の施行でも戴くやうで、戴きつけてゐる手が出惡うござえますね。あはゝゝゝは。それではお上人樣、お近い御出を御待ち申します。大きにこれはお八釜しう。さあ御暇をしようか。
藝者乙　あい〳〵。
（と三人捨ぜりふで挨拶して枝折戸口より出てゆく。）
抱一　あはゝ、鼓八なぞは二分も貰つて世帶の足にもしたかつたらうに、蒸餅を貰つて涼しさうな顔をして歸つてゆく所は有繋は吉原の幇間だ……。
加賀川　でも丁度御金がなくつて極りが惡うござりんしたねえ。
抱一　何の、千兩あれば千兩、百兩あれば百兩、あるだけの金が要つてしまふのが廓の遊びだ。年中そこへ入浸つてゐる己が金の無いのは通例だ。……さうして八十丸はどうしてゐる。
加賀川　今、あすこに溫順しく草艸紙をみてゐイす。
抱一　おゝさうか。此處へ呼べ。
加賀川　あい〳〵。八十丸さん〳〵、上人さんが御呼びだよ。
（奥にて、はいと返事して八十丸出る。）
八十丸　（手を支いて）上人樣、何か御用でございますか。
抱一　おゝ、此處へこい〳〵。（と呼びよせて肩へ手をかけ）これ、あの伯母さんをお母さまと呼んで何故己をお父さまと呼ばぬ。
八十丸　でもお上人樣は御主君樣でございます。
抱一　なに己が御主君樣？
八十丸　はい、私は伯母さまの子になつて上人樣の御家來になるのだと申されてまゐりました。假りにもお父さまなぞと呼ぶ御無禮があつてはならぬと申されてまゐりました。
抱一　おゝ、さうか。淨立寺め、大相堅く出居つたな。併し大手へのきこえは其方がよい。又お父さまと思つてをれよ。
八十丸　はい、さう思つてをりまする。
抱一　なに、さう思つてゐる？
八十丸　はい、これもさう申されてまゐりました。

抱一　おゝ、さうか。浄立寺め、ひどく気を通したな。あはゝゝは。

加賀川　ほゝゝゝゝほ。まあ此子と話しをしてゐれば居るほど、始めて逢つた気がしイせん。ほんに利口で大様で健いゝ、こんなよい子をよくまあ捨れたものでざますねえ。私はお母さまといはれる度に前から此子を持つてゐたやうな気がしイして嬉しうてたまりイせん。

抱一　あはゝ、だがその代り、髪を切るのだ。

加賀川　ほゝ、髪なんぞもう惜しいとも思イんせん。今でも剃つてみイせう。ほんに子が可愛いといふのはこの事ざますねえ。

（と八十丸を抱きすくめる。）

抱一　あはゝ、作しさう一時に喜ぶな。……だが思へば己の生涯も一段落ついた訳だな。これからもまだ照降はある。十年ばかり前、俺が成卿の書に賛を乞はれて何の気もなく「思ふこと云ひはてたにや洞火桶」と書流したが、其句がふと心に残つて時折思ひ出されたが、到頭おれもそれに似た時がきた、……己も大名の次男に生れて家中の奴等の由ない噂から世間公の役廻り、飛んだ悪手のまきぞえにされ、面倒臭さに頭を剃れば、今度は雅楽の家王が困惑かしたほど気の毒がり、千石五十人扶持の捨扶持にさへ入れ、元より窮屈が嫌ひであつた坊主、たつた十六日で舞戻つて身を落した町絵師の境涯。世味の辛も知り、金の貰ひ様も覚えて一派の画の道も開いたと思つた程のことは先づ仕遂げて老を助ける其方はあり、子も先づ貰つた。長く不遇にしてゐた大手との仲もなほして身後のことも心残りないと思ふこと云ひはてたにや洞火桶」疾うから心の底にあつたればこそ発句にもなつたか。

加賀川　まあ、そんなことを云ひなんして私は何だか心細うざます。

抱一　はて何の心細い。寛政以来世に栄えた文人墨客もいろいろだが、おれは先づ運のいゝ方だ。きけば文晁も詩仏も、時はあれ程盛んだつたが二人とも中風で、しかも何れも娘の身持が修らんで苦労してゐるときいた。己と一番仲のよかつた鵬斎は早く死ぬ。まづ斯ういけば己なぞは上運といつていゝのだ。

加賀川　（老へ深く）成程、ほんにさうざますねえ。さういへば私も幼い時分から浮川竹へ身を沈めて、悲しい日や辛い目を見ながら育つて、色々の御客衆の僧や侍買の中で揉まれぬき、気ばかりは賢くなつて、あの人もいや、此人もいやと気儘を募らせた果、句の果が、ふと上人さんに惚れて色でもなく、欲でもなく、見得も遠慮も捨ててまで雅大山の町住居では、寂しいいたす婦人一つ、

櫺子窓から物賣りを呼ぶ氣安い暮し、それからこゝの田舍住居になつては、段々世帯の水には浸みても、鶴や雲雀を朝夕にきいて一句ありたいといふやうな屈託に、半日を暮す日もあつて、憂いといつたも、辛いといつたも過して見ればみんな昔し、思へば私も運のいゝ方ざますねえ。

抱一　あはゝ、まづさうだ。其上にそんな子は出來て行末の便りはある。唯これからは命大事にながらへて移つてゆく世を眺めるのだ。「樂みは命の外はなかりけり、長らへてみる有明の月」年を老つての樂みは淋しくともたゞ命だ。

加賀川　(ふと何か思ふが如く) だがまあ、上人さん、私は時々思ひイす。人間といふものもこれが一生なら味らぬもの、仕合せといふものも、大抵こんなことならばいつそ生れぬ方が増し。さうおもひイすとふつと忌な氣持になりイして氣が滅入り何とも云へぬ氣がしイす。

抱一　ふむ。其方はそんな氣が時々起るか。

加賀川　あい。

抱一　(と思入りたるごとく、やがて思ひかへしたやうに) いやそんなことは考へぬものだ。物は突きつめて思ふものではない。己は水でさへ深いのを見るのは嫌ひだ。あの茶の水も深く掘拔かせても、上底をして小砂利を入れてあるのはその爲だ。無くなつた龜田鵬齋が聖經の註釋をして半ばに筆を止め、餘りに深く極むれば天機を洩す懼れがあると自ら恐れてやめたとおれへの話だつた。聖經でさへその通り、穿鑿に過ぎればよくないものだ。物はぢつと見詰めたり、思ひつめたりする物でない。たゞ輕く見ておくものだ。

加賀川　成程、ほんにさうざますねえ。

(この時表の方がや／＼と物騒しき聲。)

あれ何ざませう。

抱一　(見て) おゝ、ありや今日吉原に心中があつたとかで、そこへいつた非人共が歸つてきたのだ。

(此中枝折の外を蓆を擔いだり、鬢盥、鏡臺などを持つたりして非人通る。)

非人甲　何しろ今日は旨くやつた。萬事案内をしてゐる宗哲兄が差圖で不意に横窓を脫して現場を押へ、一つ殘らず上げて來たのだからなあ。

非人乙　さうだ。早く頭の所へ擔ぎこんで祝え酒としてえもんだ。それにしても哥兄はまだ一足殘つてゐたが何をしてゐるのだ。お、來た／＼。哥兄何うした。

(宗與血染の着物を抱へて出る。)

宗與　おゝ手前達はまだこゝか。己は實は一足おくれて今日の心中は裸身で葬つたと聽いたから懸合をつけてこの

通り、着類を上げてきたのだ。

非人甲　成程行屆いたものだねえ。

宗與　おゝ、こゝは雨華庵の前だな。

非人乙　さうだよ。有名い抱一さんの家の前だよ。

宗與　うむ、久し振で、上人さまに一寸御目に懸つて行きてえな。

非人甲　成程お前は昔は知る人だな。

宗與　さうよ、おやこの着類も一つに手前持つていつてくれ。

非人甲　おい、おや、こりや大變な血がついてゐるねえ。

宗與　さうよ。不思議はねえや、人間の血だ。

非人甲　こりあやられた。ぢあ哥兄一足先へ頭のところへ行つて待つてゐるぜ。

宗與　おゝ、さうしてくれ。

（と非人逹着類を受取り、通り過ぎる。宗與思入あつて枝折戸へかゝり。）

宗與　へえ御免下せえまし。

抱一　おゝ、宗與か。おれはこゝにゐて聽いてゐた。其處から這入つてこい。

宗與　おゝ、これは上人樣。まあ御久し振りでござえます。まあ御機嫌の體を拜しまして……。

抱一　これ／＼そこでは話が届かない。さあこれへ這入つて上つてくれ。

宗與　へえ、では恐入りますが、御縁先だけ、御穢し申します。

（とおづ／＼這入つてきて加賀川を見て。）

宗與　これは花魁、いつも御達者で御目に懸も面目ござえません。

加賀川　まあ、宗匠さん。私はお噂をきゝイした時、ほんとにびつくりしイした。飛んだことをしなましたねえ。

宗與　へえ、しかもこんな生恥を曝してゐて我ながら申上やうもありません。

抱一　あはゝ、併し今更それをいつても仕方がない。これ加賀川、其方は八十丸が淋しからうから彼方へ連れていつて相手になつてやれ。

加賀川　あい／＼、では宗匠さん、御ゆつくり。

宗與　へえ、どうぞ御構ひなく。

加賀川　さ、おいで。

（と八十丸を連れて暖簾口へ入る。）

抱一　これ、宗與、あれから其方はまあ何うしたのだ。

宗與　へえ、飛んだ遣り損ねえをやらかしまして、日本橋へ三日晒されやした時にや、この上の恥の搔きやうは無えとおもつて一層舌ア嚙んで死んでしまひやせうとおもひやしたが、考へて見りや、この上に恥の搔きやうもね

えとおもへば最う何んなことも恥かしくなく、御覧の通りな業突張になりやした。

抱一　うむ、大分變つたな。さうしてあの奨弃は何うしてゐる。

宗與　へえ、此身分に下げられる時は別々の手下へ下げられましたが今ぢやまあ一緒に居りやす。だが此頃は毎日喧嘩ばかりしてをりやす。

抱一　ふむ、可哀相に、あいつも其方の爲にそれまでに墮ちたもの、何故勞はつてやらぬのだ。

宗與　へえ、でも見得のあつたは始めの中、いぼぢり卷で獅嚙ついてくる面アみると何でこんな醜婦と一緒に死にかけたかとおもふと腹が立つて堪りません。

抱一　ふむ、それもみんな足らねえ暮しのさせる業、……どうだ、昔のよしみに一肌入れてやらうか。

宗與　へえ。

抱一　こゝに二三十兩金があつたら、足を洗つて上方へでも行つて、一つ竈の尻でも炙つて二人で呑氣に暮して行く位のことは出來よう。

宗與　へえ、でもこんな裂の入つた身體ぢや今更それも始まりますめえ。

抱一　何の、隨分心中の遣り損ひも余で內濟にすんでゐるのも幾何もある。其方のは少し大仰にしてしまつたのは拙いが、それでも上方へでも行つたら話の出來ないこともあるまい。

宗與　へえ、そりあ成程さうでごぜえますが、何うもねえ。

抱一　ふむ、何が何うもだ。四五日待てば金はこしらへてやる。さうしろよ。

宗與　へえ、ですが、こりあ餘つ程考へ物だ。

（と腕をくむ。）

抱一　ふむ、可笑しな男だな。

（この少し前より日そろ／＼と暮れかゝる。枝折戶の外へ羽織着流しの手代風の男、袱紗包を持つて尋ねものをする風にて出て來たり。こゝだといふ思入にておづ／＼入り來り。）

手代　へい、一寸伺ひまするが、抱一上人樣の御住居はここで御座りますか。

抱一　おゝ、抱一の住居はこゝだが、お前は何處から來られた。

手代　（見て）これは上人樣でいらつしやいまするか。では一寸失禮を仕りまする。（と椽側近くへすゝみ）私は中村歌右衞門手代にござりまする。過日は吉原に於きまして筆を賜はりまして早速御禮に上りまする筈のところ、何分にも歸阪が差迫りましたので存じながら御無禮をいた

しまする。これはほんの御挨拶の印までにござりまする。本來御傍までは御覽に入れべきでござりまするを直きの御目通りへ差出しまして恐れいりまする。御腹立もなく御納めを願はれますれば有難う存じまする。

（と目錄包を出す。抱一みて何か心付いたやうな眼で笑ひ。）

抱一　これ〳〵己は歌右衞門の爲に染筆した覺えない。成程此程ある場所で歌右衞門と同席して染筆はしたがそれはその場の座興で落書したまで。捨てゝ歸つたのを後で歌右衞門が拾つて歸つたのであらう。それに目錄なぞとは無禮であるぞ。持つて歸れ。

手代　へえ、これはお叱りで恐入りますが、これはほんの……。

抱一　えい、なんでもよい。持つて歸れといつたら持つて歸れ。

（と目錄包をぽんと手代の前へ抛り。）

おゝ、さうだ。その節歌右衞門に祝儀を取らせるのを忘れた。……これ加賀川。

（加賀川「あい」と返事して奥より火を燈した行燈を携へて出る。）

抱一　（ひらりと信玄羽織を脱いで）これ、これを持つて遠州屋へ行つて例の通り五兩借り、この男に持たして歸せ。

加賀川　あい。

（此時八十丸出て。）

八十丸　お母さま、私も御一緒にまゐりませう。

加賀川　いえ、これはお前の行く所ではありません。

抱一　いや行きたいのなら連れてゆけ。

加賀川　あれまあ。

抱一　何の、さういふことも知らなけれや己の二代にはなれぬ、連れてゆけ。

加賀川　まあ。（と呆れたが、氣をかへて）では、お前もおいで。あなた來なんし。

（八十丸の手を引き下へおりる。）

手代　それでは兎も角も一應立歸りまして……

抱一　えい、何でもよいから、あれへ附いて行け。

手代　へえ。

（と呆氣に取られて加賀川の後へ附いて入る。）

抱一　（宗與に）これ、飛んだ邪魔が入つたが、何で直ぐ返事が出來ぬのだ。……一體全體其方達は分り切つた話だに、何もそれまで浮世の底を叩いて見るにも及ばなからうに、何うしたものだ。

宗與　へえ、それがひよいとした拍子もので、詰らねえ意地つ張りから此な事になりました。思へば世の中といふ

ものは一寸先は闇とはよく云つたもの。私もこんな身に落ちるとは思ひもかけませんでした。

抱一　ふむ、そりあ人には思はぬ事から大事を引出して取り返しの附かぬ事をしてしまふものだが、そりあ矢張覺悟が足りぬからのことだ。今更云つても仕方がないが、其方も茶人ぢやあないか。何の爲に茶をやつたのだ。

宗輿　へえ、私の茶といふものは親譲り茶商賣で別に好きといふ譯でもなく、陰氣な囲ひの茶の香よりも茶屋酒が身に染みて、本業よりも好な河東に浮身を窶して粋だとか乙だとか云はれた果が此態。よく云ふ奴だが、思へばあの音色が仇さねえ。

抱一　あはゝ、そこが其方のまだ到らぬ所だ、三味線ひいてなぜ茶をのまぬ。

宗輿　へゝえ。三味線弾いて茶をのむとは？

抱一　さあ、それが己の流儀だ。おれも其方に劣らぬ隨分な三味せん好き。あれ見ろ、三味せんは始終手近に置いてある。だが又茶も忘れない。それで今日まで失敗らず、やつて來たのだ。何うだ、三味せん弾いても茶はのめる。その茶を一服馳走しようか。

宗輿　へえ、この身になつてをかしなものだが、久し振りの御手前、拝見いたしませうか。

抱一　いや、手前は略して丁度湯もたぎつてゐる。たゞ茶だけ呑んでもらオふ。

（手輕に傍の茶碗を取つて茶巾で拭きさら／＼と立て。）

だが茶の水が自慢だ。こゝらの水は惡いので隨分深く掘り抜いて吹上げさせ、それに上底をして漉した水だ。

宗輿　へえ、さやうでございますか。この井戸でございますか。

抱一　さうだ。

（と茶碗を宗輿の前へ直す、宗輿呑む。）

宗輿　結構でございます。

抱一　どうだ、もう一服。

宗輿　へえ、何卒もう御仕舞ひ下さいまし。

抱一　さすがは宗輿だ。分つたな。

宗輿　へえ、この水は大した上水とも申し兼ねます。この井戸は掘抜ではござえますめえ。

抱一　さうだ。いかにも其井戸は掘抜ではない。本家の用人に云付けて掘らせた井戸だ。これ／＼の深さに掘り、上底をしろと云付けたに費用を惜んで淺く掘り、上底をして誤魔かした。彼奴等には水はどれでも飲めさへすりやみんな同じだ。己れもそれが分らぬとおもつてゐるから、無用の贅澤だといふのだ。だが己が呼び附けて叱つたなら、それでは莫大の御費用、御隱居の御身分には御

思し止まりをといふに極まつてゐる。云つて遂げず、彼奴等のいやな利口立てを聽かうより、まだ己を御かつて誤魔かしておく心を汲んで飲んでゐる。……これは味まらぬ述懷だが、寛政異學の禁以來、却つて町儒者、町畫工の勃興から一時の風雲に乘じて天祿を暴殄して、みな末路をよくして居ぬ。その中で己ひとり、茶を好んでも酒は好まず、酒客の間に交はつて興は共にしても一滴も咽喉は通さず。三十年來、吉原を家としてゐても廓の風情を愛して唯その時々の興を喜ぶばかり。半僧半俗の我儘ぐらし、煩はしい浮世の義理は雅にのがれ風流の寂しい所は俗に歸つて三十年の夢の生涯、これはと手を打つ喜びにもあはぬ代り、無事に今日まで過してきた。これが己の生涯で、やがて人間の一番無事な生涯だ。どうだ、宗與、今日の茶會は、あの三味線が花、この意見が幅物だ。これで今一服どうだ。

宗與　成程思へば面白い、戴きませう。

抱一　（茶を立てながら）ふむ、この味が分るなら、さあ上方へ行つたらどうだ。もう金の工面もしてある。直に持つてくる。

宗與　（怪訝顏して）へゝえ。

抱一　（それに背はず）唯上方へ行つたなら、この茶の味を忘れるな。たとひ三尺棚に住んだとて溝板を路地と心得、朝夕に掃除打水して、竈の前を釜前と心得て暮してゆけ。

宗與　（茶碗を受けて）へえ、だが、どうも其返事は出來ません。

抱一　ふむ、何故出來ない。

宗與　へえ、此身になつて自墮落な暮しをしたものが、今更几帳面な暮しが出來ますものか。

抱一　だから分らぬ男だ。その窮屈を和らげるのが茶だといふのだ。

宗與　えへゝゝへ。御話しは分つてゐますが、今更さうして退屈な娑婆をしようとはおもひません。

抱一　何だと。

宗與　へえ、から申しちやあ濟みませんが、私は元來物を中途半端で濟しておくことの出來ねえ性分で、私もふとした迷ひと云條、あんな事をやらかしたも持つて產れた意地張りからで……今更いつても仕樣もありませんが、私だつて始めから死ぬ氣があつた譯ぢやありません。丁度あの日は紋日前で、忙がしい中の居續けに染の井と色色末を考へた上、別れ話を極め、僞も眞もみな緣づく、別れて長者になるが分別だと二人で別れの酒宴して、さうときまれば暮れぬ中、止めるな、止めぬと分りも早く、丁度降り出した秋雨に番傘を借りて出る途端、段階子の

中段から見送る染の井と、たゞにつこりと笑つた切り、恐らく涼しい別れ際、まあこゝまでは豪勢粋でごぜえましたが、それから日本堤へかゝつてくると俄に降りが強くなつて、木の葉にあたる雨の音に行手の方は薄暗く、後をみると吉原は今火が入つた許りの景氣に、これから歸つてまたあの草庵で雇ひの婆あを相手にして面白くもなく暮すかとおもふと、ふと氣が變つてこれから長い世の中を思ふ女と添ふ事も出來ず儘にならねえ世を送る位ゐるなら一層のことに一思ひ、それほど未練の殘るこの世でもねえ、何の卑怯に命を惜んでどうするものだと、急にむら〳〵引返すと、女も癪を起してゐて騷ぎの最中、それから跡はもう無茶苦茶、まんまと首尾よくやり損じてこんな身になりやしたが、まだその根性が拔けやせん。かうして恥をすてゝしまやあ、世間の恥も恥ぢやあなく、義理人情もすてゝしまやあ、悲しいことも何にもなく、己が勝手の仕たい三昧、元より好んでなつた譯ぢやありませんが、後悔する氣もごぜえません。何うせ送る世の中ならこれも洒落れて居りやせう。もし上人樣、同じお情けを下せえますなら、あすこにある御祕藏の三味せん、しばらく御借しなすつて下せえまし。久し振りでいゝ三味線で一段彈いてみたうごぜえます。

抱一　(ちつとなり)　ふむ、其方もそんなことを思つてゐるのか、己も今日まで心に懸つてゐたことがあつたが、それが一先づ片付くと定めし氣も樂に、心も變ると思ひの外、不思議に寂しい氣持がする。先刻其方が云ふことに似たことを加賀川に云はれた時も、ふつと胸騷ぎがした。思へば無事に送つた五十年、振返つてみると何の事もない。たゞ邯鄲の夢の覺めた心地だ。(とつか〳〵と立つてゆき三味せん箱を開けて三味せんを出し、一寸調子を直して)これ宗輿、この三味せんの銘は孟東野、平かならざれば鳴るといふ心だ。丁度時に取つての名だ、何でも一段彈いて聽かせろ。

宗輿　(抱一の渡す三味せんをとつて)　思へばこんな晩だつた。玉菊花魁が今期の思ひが殘つてゐるといふ「反魂香」を好奇心から無理に家元に移して貰つて引きかけると半頃からぞつと凄くなつて彈止めたことあつた。

抱一　ふむ、その反魂香は享保の昔、玉菊三回忌の追善の作で、家元では封じ物、面白い彈いてきかせろ。

(この時奥より、加賀川、八十丸を連れて出る。)

加賀川　あれ、上人さん、およしなんし。

抱一　おゝ、加賀川か。何時歸つた。

加賀川　あい、もう先刻から歸つてゐイした。だが今きけば、あの「反魂香」を彈くなんど飛んでもない。あれを彈くと玉菊さんの幽靈が出るか、不思議の變があると云

ひ傳へて廓では話しにするのも怖がるもの、味らぬ事はするものではありません。

抱一　あはゝゝは。封じ物の河東がきけた上に、古の傾城の幽靈が見られたら面白い。不思議な變があるといつて餘りに無事な生涯にそれもまたよからう。其方も二三日に尼になる身、己も一層隙になる名殘、善いも惡いも今夜限りだ。面白い、彈け〳〵。

宗興　成程、私も浮世の底へ落ち、これより落ちのねえ身體、幽靈が出ようが不思議があらうが驚くことはねえ。やりませう。

加賀川　あれさ、止しなましといふに。子供がおびえいイすによ。もし。あれまあ。

（と呆れる。この中宗興撥を入れて前彈をひく。）

八十九　あれ、お母さま、怖い。

加賀川　（抱へこみ）これ、默つて〳〵。聲を上げると却つて怖い。

宗興　（唄ふ）あら惜しや、あたら夢や、ありし名殘のあで姿、一夜の夢と眺めばや、昔の朝の化粧に髪にたいたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今燒香の立つ煙り、ゝ反魂香と燻ゆるや。

（この唄につれ、いくらか風立ち心にて山吹そよぎ、枝折戸ばたり〳〵と翻る。やがてホイ、ホイ、ホイ、と駕籠やの懸聲、一挺の四つ手駕籠、垂れを下したまま、枝折戸の前へ擔いできてとまる。垂れをあげて黛、若い遊女、扮裝は文金高髷の御守殿風、金扇を持つてつい出る。駕籠やに無言で指圖して彼方へやり此方を見てする〳〵寄つてくる。一同ぞつとした思入、宗興三味せん彈止む。）

黛　上人樣、御久しうござりまする。

抱一　（その顔をちつと見て）おゝ其方は黛ではないか。

黛　あい、その黛でござります。

加賀川　（見て）まあ、ほんにお前は黛、まあ〳〵何したえ。

黛　おいらん、まあ御懷しうござりまする。

加賀川　まあ〳〵こつちへお上り〳〵。

黛　はい、では御免下さりませ。

（と二重へ上り、よき所へ住ふ。）

加賀川　まあ、お前、去年から不意と行方をくらませて大文字屋の方を聞合せてもほんとに知らない風。大抵心配したこつちやない。見ればまあ御守殿の扮裝でどうおしだえ。

黛　まあ色々御話もござりまする。私も大文字やを暇を取り、去る御邸へ上りまして一年振にこんな姿で歸つてまゐりました。まあ花魁にも上人樣にも山ほど御世話になりながら、御禮を申す暇もなく、その儘行方をくらまし

て御免なされて下さりませ。

抱一　うむ、不意と大文字やに居なくなつたので何うしたことゝ案じて居たに、今また不意と「反魂香」を彈いてゐると出てきたので幽靈かと吃驚した。

黛　おほゝゝゝほ、それも不思議はございませぬ。これから私は幽靈のとこへ嫁入します。

抱一　えつ、何だと。

加賀川　えゝ、氣味の悪い……

黛　花魁は知つての通り、私の御客衆で本町の信さんと北條さんとは兩方とも長い御馴染み、それで私は北條さんと行末を約束したといふ譯ではございませんが、呼取りなさる心なら行かうと思つてゐる所、信さんは私のやうなものを思ひ詰めて到頭氣病に死んだとのこと。それを私が氣の毒なとおもうたとて北條さんが法界悋氣から腹を立てたので、思つた程の人でもないと愛想がつきてゐる所へ、本町の親御さんが分つた御方で私を身請して北條さんへ嫁入らせようと有難い御志に、私は泣かされて大文字屋の方を暇を取り、一年の間、行儀作法見習の爲、お邸へ奉公して今日御暇をいたゞいて、これから若旦那の御位牌へ嫁入してあの舅御夫婦へ盡す積り、それで一年振りにお知合へ、御暇乞ひやら、御禮やら、こんなに晩くなつて此方へ上つた譯、これまでの御禮、たゞ一言には申されませぬが、有難う存じました。別けて花魁には子飼の時からお世話になつてこれからもいよ〳〵上つて御機嫌を伺ひたいが、さういふ譯で嫁ぐ私、家を明けることもなりますまい。今から御詫び申しておきます……上人樣にも、おいらんにもこれが當座のお別れでございます。

（と泣く。）

加賀川　まあ、お前、不意にきてそんな悲しい話、なんともいへ樣もない、併しそれがお前の身の納まりとなりや、仕合せでござりんす。

抱一　ふむ、成程な、手前は廓にゐた時分から一氣象ある面白い女だとおもつてゐたが、さういふ羽目になつたのか。

宗與　ほんとにこりやあお目出度えやうな、お目出度くねえやうな……もし、上人樣、この黛さんは廓にゐた時分あなたは一寸氣があつて私等にも冗談のやうに彼奴にやあ、一寸氣がわるいといつてゐなすつたが、かうなつてみると妙な氣かしやせうねえ。

抱一　馬鹿をいへ。昔のことはいはぬものだ。

黛　（振向いて）おや、丸つきり、姿が變つておしまひなのでお見外れ申しましたが、お前は宗匠の宗與さん、昔の高尙な風とはまた違つてすつきりとしたいなせな風になりなさんしたねえ。

宗興　へゝゝへ、黛さん、お前も人が惡い、こんた身にたつたものを冷かしちやあいけやせんせ。夫よりあ、花魁、こりあちつと氣が揉めますぜ。

加賀川　ふゝ、私はもうこの子さへありあ、上人さんがどうならうと構ひんせん。おやまあ、この子は恐いといつた儀、何時か寐入りイしたよ。まあ罪のない。

（と袖無を脫いで掛けてやる。）

黛　（見て）もし、おいらん、その子はえ。

加賀川　これは私の子さ。よく見ておくんなまし、可愛い子でござりんせう。

黛　では、おいらんは御養子をなさいましたの。それはまあ、さぞお喜びでござんせう。

加賀川　おもへばお前も私も思はない身の果になつたもの、元より女郎に賣られる身は運がよくて成るものは一人もないが、去りとて行末に望みを掛けずにゐる者も一人もない。その中でも緣の深かつたお前と私が、一人は尼、一人は若後家、別々に同じ寂しい暮しをするもよくよくざますねえ。

黛　あれ、花魁、私はこれから幸先長く先方へ行つて幸抱する身體、そんな心細いことはいはずに、幸先祝つて笑つて下さりまし。

加賀川　ほんにさうざますねえ。

二人　おほゝゝゝほ、ほゝゝゝほ。

（と二人寂しく笑ふ。）

黛　おゝ、もう私もかうしてはゐられぬ。遲くならぬ中、もうお暇。

加賀川　ではもうお行きか。隨分身體を大事にして……

黛　はい、では上人樣、宗匠さん。

（と挨拶して下へおり、駕籠の方へ行きかける。抱一返事もせずぢつとしてゐた顏を上げ。）

抱一　待て、待て、黛。

黛　はい、何か御用でござりまするか。

抱一　なに用？　用ではないが、最ちつと此處に居ろ。

黛　えゝ？

抱一　おれは先刻其方の話をきいてゐる中、其方を見るのが惜しくなつた。

黛　ほゝ、御冗談を……

抱一　いや冗談ではない、本當だ。

黛　ほゝゝゝほ、でももう參らねばなりませぬ、では御機嫌よろしう。

（つか／＼と駕籠へ行き、乘つて垂を下す。駕籠や來て舁ぎ上げる。抱一つか／＼と緣先へ出て。）

抱一　黛、黛。

宗興　（止めて）もし上人樣、あなたは何うかなせえまし

たか。

抱一　（我に返つて苦笑ひして）うふ、何うかしたかもしれぬ。

（この中加賀川默つて、八十丸を竊と下へ臥かし、持佛の間へゆき、幕明きに置いてあつた花剪刀でぶつりと髪の毛を切る。）

抱一　やあ、そちは。

加賀川　私は熟々世の中が恐しくなりイした。明後日（あさつて）までにふつと變つた氣が出まいものでなし、その場でまたどんな未練が出ようもしれぬ。もうかうして仕舞へば大丈夫と今一思ひに切りイした。

（と髪を持佛へ納め。）

もうこれからは此の子を便り、もう何事も此子に忘れて暮しイせう。

（この中宗與獨笑ひしてまた三味線を彈きはじめる。）

抱一　これ、もう止めろ、三味せんは……全く封じ物の三味せんなぞ彈くものではない。ふつと不思議な氣になつた。人の止せといふものは矢張りよしておくものだ。もう八十丸は寢てゐるか。おゝ暗い行燈だ。百匁を二本ばかり點（つ）けて三人で飯にしよう。

（この途端最前の手代、ひそ〳〵と來り家を窺ひ、金包を抛りこみ、一散に逃げて入る。この金包、宗與に當る。）

宗與　えい、何をしやあがる。（と立上りみて）や、これや金だ。どうしてこんな。

抱一　うむ、分つてゐる〳〵。歌右衞門が捨てゝいつた金だ。拾つといてやれ〳〵。だが幾何ある。

宗與　（一寸員數をあたつて）へえ、二十兩ごぜえます。

抱一　うふゝゝ。上方贅六彈みをつたな。併しさすが歌右衞門だ。資本（もと）を下してやつたらよく捨てゝいつた。彼奴下つてきて大當して江戸の金を攫（さら）て持つて行く中から、手前に世帶をもたせてやらうと二十兩呼戻してやつたのだ。

宗與　へえ、でも私（わつち）はそんな氣は……

抱一　えゝ、其方も惡黨がつても正直だな、世帶をもつ顔をして取つておけ。

宗與　へえ。

抱一　これ、宗與、宗與。

宗與　へえ。

抱一　もう、黛の駕籠は餘つ程遠くへいつたか。

宗與　（枝折戸へ行つて）へえ、もう影もみえやせん。

抱一　さうか。うふゝゝゝふ。

（と寂しく笑ふ。加賀川、これらに構はず、吊り殘してある蒸籠を脫しにかゝる。）

――幕――

師直打擲（一幕）

錦の小路足利直義の館

舞臺は正面やゝ上手へよつて小書院ともみゆる建物。つゞ下手へ廊下がつゞいてその止まりに遣戸がある。つゞいて下手には塀重門。舞臺は前栽の植木よろしく、小書院には足利直義が出座してゐる。うしろに童一人太刀を持つて控へてゐる。緣に平伏してゐるのは、直義の昵近の侍額田次郎左衞門である。

直義　（ひどく激昂してゐる）ではなにか。直師の奴め。兄上の仰せを受けて、この邸へ家さがしにくるといふのか。

額田　左樣でございます。

直義　さうしておれの邸に鹽谷判官が匿まつてあるといふのか。

額田　左樣でございます。

直義　そんな有りさうもないことを云ひ觸らした奴は何奴だ。

額田　いや隨分有りさうもないことでもございません。

直義　何だと。

額田　御前。一餘（およそ）鹽谷判官の身の上は誰にきかせても氣の毒な人でございます。執事師直權勢にまかせて、その妻を奪はうといたし、事が遂げられんとて、鹽谷判官を謀叛人と讒言し、これを追つめて路傍で腹を切らせた。こんな無態なことが、當時政道に私ないといふ足利の天下にあつてよいものにございませうか。

直義　うむ、それは自と別なことだ。その腹切つた判官を已がどうして匿まつておける。それがどうしてありさうなことなのだ。それを聽いてゐるのだ。

額田　さ、そこでございます。誰しも氣の毒なことだとおもひます。自然腹切つたはいつはり、誰か、慈悲のある都在住の大名が匿まつて、腹切つたのは僞首と誰いふとなく申しまする。これが人情でございます。さうして自然と匿まつてあるだらうと人の指さすは御當家、當將軍家の御連枝で、評判のよい御當家でございます。自體いへば、さうした方が本當でございました。

直義　馬鹿め、今更腹を切つた者がどうなる。何時も下らんことばかりいふ奴だ。

額田　いや憚りながら、何時も下らんことばかり申してをりながら、噛みしめて見ますと、みな味のあることばか

りでございます。

直義　口の減らん奴だ。戰場では非力で、いつも己の陰にばかりゐる癖に口の達者な奴だ。

額田　いかにも非力で、何時も戰場の御役には立ちません。併し口舌の戰ひには御內の强者も誰一人、私の向ふへまはる者はございません。自慢口舌の爭ひもさま〲ながら私のいたしまするは、戰ふといへども刃に血をぬらず、その爭ひや君子たりとや申して……

直義　えい、もう止めろ。汝とはなしてゐると肝心のことを忘れる。最前より申した師直がこの邸を家搜しにくるとはまことか。

額田　その儀に間違ひはございませぬ。一體御前はどう遊ばします。

直義　どうすると申して、をらぬものはをらぬばかりだ。

額田　ではあの憎い師直めに家搜しせられて無念をお堪へ遊ばしますか。

直義　むゝ。

（と齒をくひしばる。）

額田　私なら師直めを打つて打つて打据ゑて追ひ出しまする。

直義　白癡め、御敎書の御使ひをそんなことをしたら、後をどうする。

額田　それにはちやんと工夫がございます。

直義　白癡め。ではその工夫から先いへ。

額田　いえ、かやうに申さんとわたくしの細かい工夫があらはれません。

直義　もうよい分つた。まづその工夫をいへ。

額田　畏まりました。その前かどに今一つ申上げておかねばなりません。

直義　なんだ。

額田　御前はなほ私をまだ御自分の御家來だと思し召しておいでになりますか。

直義　汝は今日はどうかしてゐる。最前から突拍子もない事ばかり申しをる。心はたしかゝ。

額田　へい、御前、わたくしがなほ御前の家來であつたら、いかに小慧しくても、こんな將軍家の御前における密事をお知らせ申しにまゐる譯にはなりません。

直義　ではどうしたといふのだ。

額田　御前、唯今ではわたくしは、師直公の御推薦で將軍家の御昵近衆になりました。

直義　何だ。……今一度申せ。

（と直義はさすがに顏の色がかはる。童の持つてゐた太刀を執つて、柄へ手がかゝる。）

額田　（用心して）今一度申せば御手討でございますか。

では申し上げられません。
直義　（心付いて太刀の柄をはなし）やい。おのれは己の知行をうけた身で、假にも師直づれの膝のあたりを這ひまはつてその口入れで、將軍家へまゐつたとは、見下げ果てた奴め。道理でこの四五日見えなんだ。
額田　御前、わたくしも仰せの通り、御前の知行をいたゞいた者でございます。師直公のもとへは御緣の塵を拂ひにまゐつたも仔細がございます。
直義　その譯をいへ。其の譯を。
額田　はい、唯今申上げます。まづ師直公へ取入つたのは、事長うございますので略します。日頃のわたくし辯舌を御承知でございますれば、わたくしがいかに巧みに取入つたか御得心がまゐることゝ存じます。
直義　氣味のわるい奴だな。
額田　御前、わたくしは非力で、戰場でお役に立ちません。だがまた當世に於いて出世の道位は心得てをります。一寸いたしても將軍家の御昵近となりました。御前が二言目に仰せあそばす滿更白癡でもございません。だが御前のことを忘れず、叱られながら、かう御奉公申してゐるのはやつぱり白癡かもしれません。
直義　えゝまはりくどい奴だ。もう解つた。では汝が、師直をおびき出して、何か彼を取挫く工夫があるといふのか。
額田　こゝまで申上げたら、あとは一氣に申上げます。御前わたくしは當年二十八歲に相成ります。御承知の通りの非力で、戰場で何の手柄もございません。永らく御寵愛はうけてをりますが、夜長の徒然のお伽話のお相手が勢一杯でございます。その外に當世においては役に立つといふこともございません。しかし、わたくしも生きてをりまする上からは、何か又分相應な事もいたしてみたいと、かねて思つてをりました。そこでわたくしは、あの上（かみ）は御連枝の御前をはじめ、諸大名、下は都大路に印地打つ童までも一人も憎まぬ者なく、しかも忌み憚らるるあの師直を、面のあたりに罵つて、大路の上にその面部を打据ゑしかも禮をいはれることを思ひ立ちました。かう思ふと矢も楯もたまりません。わたくしのはかない一生の恐らく一代の晴業。是非やつてみたくてたまりません。あらかじめ、御相談を申上げれば、御叱りをうけてお止め遊ばさるゝは知れてをりますので、唯今まで極めて內密に事を運びました。鹽谷が御當家にかくれてゐると、師直に告げ口いたしたもわたくしなら、その取持ちで、將軍家へ召され、その證言をいたし、改めて御昵近衆として、御教書をかきましたのも私でございます。
直義　（呆れて）ま、何といふ奴だ、汝は。その納まりは

どうつける。

額田　ま、おきゝ下さいまし。やがて師直は、唯今にも御教書を捧げて乘りこみまする。山名伊豆守時氏どの、かの手にあつて擧げたる鹽谷の首が僞首とあつては、面霽と自ら願つて手勢引つれ、師直を警護してまゐられまする。御前は御神妙にあそばし、まづ御教書を取上げさせ詰合の衆を召させて散々に打据ゑ、追ひ出して、おしまひなされませ。

直義　ふむ、その叩き出すのは、何の角によるのだ。

額田　それは御家の重寶。御遠祖鎭西八郎爲朝公の大島の御眞影、あれをこれへおかけ遊ばせ。もとより傲慢無禮の師直、御上段を高に、よのつねの尊像に事かはつたる大島の御影ついうつかりと上座いたすに相違ございません。

直義　成程妙案だ。尊像への無禮をかどに打据ゑる。こりや近頃の一快事だ。

（と乘り出す。）

額田　たゞしこれは師直に云譯の暇を與へず、かつと遊ばさねばなりませぬ。詰合の衆にも唯今より手筈をあはせておかねばなりませぬ。

直義　こりやさうぢや。一同よべ。

額田　はつ。

（と立つて下手の廊下口へゆき。）

（詰合ひの衆。）

（と呼ぶ。諸士數人、はつと答へて出る。）

諸士　御用でございますか。

直義　こりや唯今これへ師直がまゐる。わが聲をかへると同時に立出でて打据ゑい。

諸士　はつ。

額田　あいや方々、お打据ゑなさるとも必ず面部をお打ち下さるな。身體はかりをお打ち下され。（と直義に）左樣御指圖願ひ上げまする。

直義　次郎左が申す通りにいたせ。

諸士　はつ。

（と一禮して入ると。）

直義　さて次郎左、この納りを其方の智慧でどういたすのだ。

額田　その儀はしばらく御覽を願ひまする。わたくし一身にをさまりをつけ、この度の趣旨を明かにいたし御迷惑は及ぼしませぬ。つまり御前は、師直を打据ゑたゞけお得でございます。それからわたくしは今日限りお暇たまはり、出家遁世仕りまする。

直義　な、なんといふ。

額田　かういたさねば、この度の儀は成りかねまする。そ

れから御前をも憚りながら少々悪口いたします。

直義　な、なんといふ。

額田　かういたさぬと、御前が同腹になります。日頃御前は二言目には、わたくしを白癡、白癡と仰せになりました。それを少し惡く申しまする。

直義　汝はそれが日頃不平であつたのか。

額田　いえ少しも不平ではございません。御前は御寵愛を下さいまして外に申すことがございません。それであれを申します。

直義　ふゝん。

（と變な顔をする。）

額田　もう程なう師直がまゐります。御前も御用意あそばせ。わたくしはこれにて尊像を懸けませう。

直義　おゝ、ではおれは奥へいつて寶藏から尊像を取り出さする。

（と直義は太刀持の童をつれて入る。額田は立つて床の間の三幅對の眞中の幅を外して卷きかける。）

（塀重門の外から白拍子延壽そつと入りかけ、さすがに憚つてこなたを覗き。）

延壽　もし、もし、（やゝ大きく）もうし。

（と呼ぶ。）

（額田心付いて振かへり。）

額田　やあ汝は延壽ではないか。何でこんな所へきたのだ。

（延壽立よつて。）

延壽　でもお前はこの五六日顔をみせないばかりか、先刻このお館へたづねてきても何時まで經つても、御前を下つておいでゝないので、お前の朋輩衆の情けでそつとこゝまで來て見た。お前はまあ……

額田　これ、おれは今それ所ではない。ちと大切な御用がある。彼方へ行つてをれ。

延壽　ま、お前は此頃どうぞなされたのかえ。さう二言目には怖い顔……こりや私に愛想がつきたのぢやな。

額田　これ／＼こゝでそんな泣聲を出されては困る。今すぐ己もあちへゆく。さ、ゆけ／＼。

延壽　でもお前の心のわからぬ中はこゝを動かぬ。

額田　はて、何時までゐたとて人心、表面に解らう筈はないわい。

延壽　いえ／＼分つてある。さういふお前の心はよう分つた。たゞ分らぬはお前がどうしてさういふ心にならしやんした。わしに何處か足らぬところがあるか。また惡いことでもあるか。さ、いうて下さんせ。

額田　いや、お主に足らぬ所もない。惡いところもない。

延壽　では、どうしてさう强なうなさるのぢや。

額田　はて今はちと心わるい。何事もあとにしてくれ。

延壽　え、お前は當座に云ひぬけて……さてはいよ〳〵私に愛想が盡きたのぢやな。

（ト何やら怨じかけると縋りついてさすがに聲立てずに泣く。）

（この時上から若侍が軸物の筥を持つて出てくる。）

若侍　額田どの、御軸を持參いたしました。

額田　はつ、これは。

（と延壽を押しのけ、受ける。）

（若侍は素知らぬ振りで入る。）

額田　それみろ。あんなところを見られてどうなる。それ、この通り、御用がある。さ、あちへ行つてくれ。それに今こゝへ高武藏守どのが見えられるのだ。さ、早くいつてくれ。

延壽　あい。ではきつとすぐきて下さるかえ。

額田　おゝ、すぐぢや。

延壽　でもお前の心が……

額田　はてそれもやがてわかるわ。

延壽　えゝどうわかるのぢや。

額田　さつぱりとわかるわい。さうしたらお主も恐らくさつぱりとしようわい。

延壽　え、そりや、ほんかえ。

額田　さうぢや。

（この時表にて「御上使でござる」「高の武藏の守さま」とよぶ聲する。）

額田　それ師直公がお出ぢや。早くゆけ。

延壽　あい。

（と延壽は塀重門の外へ出る。）

（額田はそれにかまはず、軸物を取出し、三幅對の中へかける。前にいふごとき鎭西八郎爲朝の大島に於ける眞影である。異風で一寸みたのでは木の葉衣の仙人の畫像のやうである。額田はこれをかけると、軸の筥をもつて逸早く姿をかくしてしまふ。）

（奥から再び直義が童をつれて出る。さうして廊下口へ出迎へると向ふから高の武藏守、五十位の年配、烏帽子、直垂、御教書を懐にして出る。つゞいて山名時氏、これも烏帽子、直垂で出る。）

直義　やあ、武藏の守、上使とは大儀、正座へ。

師直　（勿體らしげに）御挨拶は後してのこと、唯今は御上使、正座仕る。

（と上座へ通る。直義對ひあつて下座へつく。時氏はさらに下座につく。）

時氏　今日の御上使警護の役、憚りながらこれへ差控へまする。

直義　おゝ、大儀。いかやうの儀かは存せねども、直義に

於ては、將軍家の御沙汰に叛くべからず。御上使の次第はいかに。

師直　御神妙なるその仰せ、(とあざ笑つて)必ず御違背あるべからず。唯今御教書、御披露申さん。

(ト御教書を押開かうとする。)

直義　しばらく、その御教書開くに及ばず。いかなる儀なりとも、違背なき直義、そのまゝに頂戴いたさん。

師直　あのすりや此儘に、御教書の儀がいかやうな事なりとも……

直義　もとより身に暗きことなき直義申譯は仕らぬ。御教書そのまゝ頂戴仕らん。

師直　(にはかににたくと笑ひ)はてさて御神妙なるその仰せ、お使に立ちたる、師直も祝着、だが申さぬ事はわるい。この御教書そのまゝにお受けあれば、罪に伏されたるも同じ事、萬一その御教書、御咎めの御書ともあらばいかゞいたさるゝ。

直義　なんでもない事、御教書の旨に一言たりとも背くべからず、御疑ひともあらば命はもとよりまゐらするは、かねて覺悟いたしをる。

直義　ほゝう、おゝ、お涼しいそのお返答、しからば、御教書拜受あれ。

(山名時氏驚いて二人の問答をきいてゐたが、この時口を挾み。)

時氏　あいや、その儀はしばらく。御教書一通り御きゝあつて御申開きもあらば一通りは……

師直　だまらつせい。そこ許は拙者警固の役、粗忽の口出し、控へさつせへ。

時氏　でもあまりなる直義公の御神妙……

師直　ほう、ではあらかじめ、御教書の旨を私の口に、洩らさうとな。

時氏　全く以て。

師直　では控へさつせへ。(直義に)錦小路どのにはいよいよ此儘。

直義　いかにも。

師直　しからば、御手に御覽あれ。

(と渡す。直義受取つて考へてゐたが、にこりとして、そのまゝ懷中する。)

師直　やあ、直義公には、御教書を。

直義　いかにも此儘、御受けいたした。開封は後刻ゆるり、直に讀めとの御言葉でも添はつたか。

師直　やあ、左樣の御言葉はござらねども……

直義　しからば御教書しかと拜受した。御使大儀。

師直　ではござれど、大切なる御用……

直義　やあ師直、うかくと何申す。御教書の旨を私に洩

らさうや。

師直　むゝ。

（と塞がる。）

直義　（尻目にかけて）やあ、武藏守、おのれ御教書の御使ごと濟みながら、なほ上座。この直義を侮づるはまだしも。ゆるされぬは、そこに懸けたる御影こそ、御遠祖、鎭西八郎爲朝公、大島の眞影。

師直　はつ、まことにそれは思ひも懸けず……

直義　やあ、云ふな。我家の重寶と人も知つたる大島の御影、噂にもきゝつらんを、殊更に知らず顏なる增上慢。まことや、此頃人の噂に佞辯をもつて忠勤の誉を害（そこな）ひ、下剋上（げこくじやう）する曲ものと巷の雜說、あらぬ噂ときゝながせしが、目前かゝる不敵の振舞、この直義は忍ぶとするも御先祖爲朝公の照覽も憚りあり。やあ〱者共。師直めを追出せ。

（と直義、師直の襟へ手をかける。）

師直　こは理不盡なり、直義公、山名どの、身を警護の役目、なにしてござる。

時氏　はつ。

（と立たうとする。）

直義　やあ時氏、すでに御教書をわたせし師直、取支へば、不敬の同罪。

時氏　はつ。

（ためらふ。）

直義　やあ者共、はやまゐれ。

（と師直を緣より突きおとす。同時にはつと諸士大勢塀重門より出る。）

直義　打据ゑい。

諸士　はつ。

（とその通りする。）

直義　すぐ追出せ。

諸士　はつ。

（と一同師直を棒づくめにして追立てゝ入る。）

時氏　（恐る〱）はつ、師直が粗忽、元よりその罪ながら、私め心もつかず……

（といひかくるを直義冠せて。）

直義　いや時氏、直義これより唯一人、將軍家の御前へ出て、御申開き、そちも立て。

時氏　はつ。

（とそこ〱に一禮して立つ。）

直義　次郎左、次郎左。

（と呼ぶ。若侍出る。）

直義　どうぢや、御教書を取上げたは、工夫であらうが……

（と振かへり。）

直義　はて、次郎左めはどうした。呼んでまゐれ。

若侍　はつ、次郎左衛門はかねて君の仰せなりとて、我々師直どのを追出しまするところへまゐり、我らの棒を押のけ、師直どのを助けて何處ともなく落のびました。

直義　なんぢや、師直を助けて……

若侍　はつ、我々君の仰せと心得、額田どのゝために、棒を奪はれ、一兩人、わざとぶたれました。

直義　はて白癡た奴等だ。

若侍　え、では仰せではござりませんか。

直義　えゝ、次郎左めはどこへいつた。さがせ〱。

若侍　はつ。

直義　えゝ、どこへゆきをつた。（この體、道具まはる）

同じく　築地外

上手には築地塀下手奥へ折まはす。下手はずつと町家の遠見。よきところに松の大木。松の根方に、衣紋もくづれた師直を介抱してゐるのは、額田次郎左衛門である。）

額田　執事公、もう大丈夫でござる。御心たしかになされい。

師直　おゝ、次郎左か、こゝはどこぢや。

額田　はつ、直義どのゝ築地外でござる。なれどこゝまでは追ひかけてはまゐりませぬ。御安心あそばせ。それにしても幸ひのところへまゐりあはせました。ま、一體どうなされたのでございました。

師直　いや、思ひの外なる手段にかゝつて直義めに逐はれた。

額田　え、では鹽谷判官をお捉へなされませなんだのでござるか。

師直　それどころではないわい。

額田　でも御教書の御使を。

師直　その御教書をうかと渡した。

額田　えゝ、何事でござりまする。去りとては執事公にも似あはせられず……

（と胸がみする。）

師直　面目ない〱。

額田　これと申すも、執事公の御勢にあつまる人はあまたなれど、心服の人がござらぬ。

師直　おゝさういへば、時氏めはなんとした。

額田　時氏どのは手勢引きつれ。さつさと引上げられました。

師直　えゝ、さうしておれの馬はどうした。

額田　どこかへ飛んでいつてしまひました。

師直　家來共は。

額田　みな逃げてしまひました。

師直　えゝ賴みにならん奴だ。まことにおもへば、心服の者と申すは新參ながらそち一人だ。

額田　ありがたき仰せ、してこれから何とあそばす。

師直　すぐに將軍家の御前へ出て、この事を申上ぐるのぢや。

額田　憚りながら、それには、身內にどこと申して、お傷のあとがございません。これでは狼藉を申したと申上げても、證據となりませぬ。お顏に少しでも傷があればよいのでござるが……

師直　さうだ。おゝ、よう思ひついた。たゞ打たれたでは、おれにも少し越度がある。面に傷があれば、將軍家もよもお見すごしはあるまい。これはよう思ひついた。……そちそこらの石をとつてこの邊へ（と小額を指さし）傷をつけろ。

額田　飛んだことでござる。まだ御口入れの御恩も報せず。執事公を打ちまするなぞは迚もかなはぬことでござる。

師直　いや、さうでない。おれの口惜しさにもなつてみろ。顏の傷位にはかへられぬわい。さあ打て、さうしてすぐに將軍家の御前へ出るわい。

額田　でも、何といたしても私には……御覽なされ。あれに石がござる。執事公には袂を口へ御銜へなされ、御自身でおあてなされてはいかゞでござる。

師直　なに、自身でせい。……あの石か……どうもならぬわい。よい、そちうまく打つてくれ。

額田　したが憚りながら、隨分御短氣な御前、御辛抱がかなひますまい。

師直　えゝ、この期に及んでそれ程のことが辛抱なるまいか。打て〳〵。

額田　は、では打ちませう。（と立上り石を拾つて）おのれ、奸賊、師直め。

師直　（怒つて）おのれ、大膽千萬、なんでおれを奸賊なぞとは……

（と太刀へ手をかける。）

額田　あはゝゝゝは。それ御覽なされ。口で申してさへ、この通り、それを石をあてまして、萬一お氣に入りませずば……

師直　あはゝゝゝは、用心深い奴め。よい。怒らん。打つてみろ。但しあまり強くは打つなよ。

額田　は、その儀は心得てをります。が、どうやら心許ない。お太刀をあづかりませう。唯今の御恩賞にたまはりませう。

師直　あはゝ、拔目のない奴だ。さういうてこの太刀を稼ぐのか。

額田　あはゝ、これは是非にたまはりませう。なんとやら氣味がわるうござる。

師直　意氣地のない奴め。ではつかはす。

（と太刀を解いてわたす。額田うけて頂き。）

額田　この上は恐れながら打ち奉りませう。

師直　おゝ、うまく打てよ。したがだれも見てをらぬか。

額田　は、唯今は誰もみてをりませぬ。では打ちまする。

（と石を取つて立上り、やつと師直を打つ。師直、あつといつて倒れる。）

師直　あつ、おのれ憎い奴め。斯様にうつといふことがあるか。白癡め。おのれ、その太刀、還せ。

額田　それ御覧なされ。したが、もう濟んだのでござる。うまく血が流れ出ました。私めのはたらきを御賞美あそばせ。それ流れまする／＼。

師直　成程、うひ奴。うひ奴、これでよいわい。手當をしろ／＼。

額田　ではご滿足でござりまするか、では御前の爲にかく迄いたすわたくしに、御會釋がござりますまいか。

師直　おゝ、忝けない／＼。師直喜んで禮いふぞ。

額田　あはゝゝは、今天下に執事の面を打ち、禮をいはれん者、我を措いて外にあるまい。

師直　うむ、その通りぢや／＼。

額田　いかに人々、たしかにきけ。今一天下に忌みはゞからるゝ高の師直都大路にさそひ出して、天下にかはつてその面をうつ。みよや人々。

師直　やあ、次郎左、おのれ狂氣したか。

額田　かしましい、默りをらう。今日は北野の御縁日、參詣の群衆引きも切らず、しばらく歩みをとゞめてこれを見よ。いかに師直、汝、いかなる功の當代にあるとも知らず、鹽谷高貞が妻を奪はんとし、あまつさへその一門を悉く路傍に無慚の死をさせしこと、天人ともにゆるすべからず。我は鹽谷に恩怨共になく、全く道路の人にひとしけれども、公憤やる方なし。しかも天下に誰あつておのれを打ちうる者もなし。今こゝに誘ひ出しておのれを打つ。犬を打つがごとく路傍におのれをうつ。

（と師直の太刀を、鞘のまゝ振あげて散々に打つ。）

師直　（聲をあげて）やあ、近きあたりに身内の者はないか。誰にてもこの無法者を捉へれば千貫の賞を與ふるぞ。

額田　だまれ。再びいへば命がないぞ。人たれか恥を知り、義を知らざらん。この遠まきに驚き呆れて佇む人々の中に、京家衆も、武家方もあまたあらん。恥をしるもの、誰か一人おのれを助けん。おのれの打たるゝこゝろよさを千貫の賞にかへるものあらん。元來おのれは一太刀に打つてすつるはやすけれど、それにてはあまりに興なし。

智慧者の工面が拙いに似た。それゆゑにかく路傍へ引出して打つ。しばし打たれよ。命はたすくる。

（また打つ。師直、たふれ伏す。）

いかに師直、汝を打つの快よさは、たゞ一通りのことならず、骨に徹り身に徹つて快よいわい。この快よさに、わが一生を賭物（かけもの）にした。元來今の世は武邊一ぺんのあばれ者か、おのれのやうな諂諛（へつらひ）のえせ者に幅をせられて、正しい智慧者の世に出る席がないわい。このやうな未練はのこらぬ。今すてゝゆく唯今、一生の思ひ出に、おのれを打つわい。

（とこの時、延壽ころげるやうに駈け出て次郎左衞門に縋る。）

延壽　これまをし、お前は私をすてゝゆくといふのかえ。

額田　おゝ、延壽か、あはゝ、この快よさには、お主との語らひもかへたわい。

延壽　え、お前は私をおもうてはくれなんだのかえ。

（延壽泣伏す。）

額田　はて戀も情けも世にある中、生ぬるい癡話ことにもあきはてたわい。

額田　きけ、人々、もとわが主はこの築地の中の主なる直義公、これとても武將の器でない。わが非力をあざけつて我を用ゐる術をしらず、同朋か茶坊主なんぞを拔ふやうに白癡々々とつかはるゝ、あまりの心外さに、直義公を土偶につかうて師直を誘き出し、今日事をこゝに成就したわい。かくて世をすてゝゆく次郎左衞門が、一生に一度の晴業今見ろ人々、永く傳へよ。

（と太刀ぬきはなして、髻を切りはなし、散らし髮となつて、太刀ぬきかざして舞ふ。）

（この前より群衆、三三伍々遠くより次第にあつまりくる。さうしてこの時一杯になる。）

額田　師直を打ちし心のそこしらず、たゞよしとのみ眺めけん、人の心のおろかさよ。

（この時築地の上へ直義諸士とゝもに半身あらはす。）

（額田これと顏をあはせ。）

額田　あはゝゝゝ。

（と高笑して、太刀をかざし、群衆の中を押しわけ何處ともなく行末しれずとなる。延壽追ひすがらうとしてがばと伏す。師直は痛みをこらへ身を起さうとする。）

直義　けつく彼奴、おれまで馬鹿にしをつたわい。早く師直を介抱してやれ。

諸士　はつ。

（と諸士築地の中へ下りる。舞臺には群衆それぞれ呆れざわめく體。直義は遠く見送る。）

——幕——

喜劇　親友（三幕）

第一幕

晴渡つた十月のある日の午後。上州館林に近い東郷村に二三年前から出來た別莊風の住宅の庭前。建築は和洋折衷で城沼を前に臨んで對岸に花山の躑躅を望んでゐる。場面は下手に洋館の一部がみえ、その建物の後は表へ通ふ路になつてゐる。洋館には扉(ドア)の出入がある。後は元來一寸した森で幽邃な趣きがあつたのが、全然(すつかり)開墾が始まつたので取拂はれ、見切に植ゑた杉や檜が未だ育たないので掘返へされた赤土の肌がみえ、その向ふは一面の麥畑の畝ばかりに、遠く赤城の山が霞んでゐるところまでみえて、夏はさぞ暑さうだ。上手から前へかけて沼でそれに添うて曲折に展望臺用の屋根のあるプラツトホームが出來てゐて、正面に椅子卓(テーブル)が置いてある。上手の沼の中にはプラツトホームの上手の端から打廻して柵が出來てゐて家鴨を飼ふところになつてゐて、その中に小さな棧橋が突き出てゐる。沼の中には其處此處に葦が繁つてゐる。此沼は元來千年以上を經た古沼で四五年前までは清水を湛へた好箇の山中の小湖水のやうな俤を備へて蓴菜(じゆんさい)が名物であつたが、附近の開墾がはじまると同時に久しく計畫されてゐたモスリン會社が幾本かの煙突に館林の空へ景氣を添へるやうになつてから毒水が流れ込むので、さしもの清淨な沼も泥水になつて蓴菜はみな腐つてしまひ、捕れる魚も泥くさくつて喰へなくなつて、一面に濁つて鈍い光を放つて昔の清澄な俤はない。さて、この主人公といふのは近頃めき／＼仕出した實業家でかういふ結果にならうとは知らず、東京近くでこんな好風景な地はないと住宅を構へた譯で、躑躅の時分には對岸の自然の大築山に一面の躑躅を朝夕にみて古への豐公の豪奢もこれには及ぶまいと大得意であつたのは僅一年、その翌年から開墾が始まる、モスリン會社が建つ、散々なことになつたが、自分も大分モスリン會社には關係があつて率先して盡力もしたので、文句もいへぬのみか、かう云ふことまで實業上の損得同樣に考へる主人は株で大分やられた位にしか思つてならぬ。で、今は諸種の事業になぞにも單に株主關係位なことにして、極閑散に暮して骨董を愛したり、園藝に凝つてみたり、沼を利用して家鴨を飼つてみたり、西

洋趣味、日本趣味ごつちやなのは主人の半生の經歷を暗示してゐる。で、今の紳士によくある女道樂といふことはなく、先妻に死別れてから、薦める人があるままに、若い細君をもつて子供の樣に愛してゐる。所で、これ程種々なことをやつてゐるが、單に道樂といふので妙に尻拔けで、一時沼へ家鴨を百羽ばかり飼つて、があ〳〵があ〳〵毎日騷々しいこつてあつたが、その生餌に放した田螺が泥の中で腐つてしまつたのを家鴨がたべたので片端から殪れ今では二三羽になつてしまつたのを、今度は鄭重にかけて育てゝゐる。で、あひるがこんな風に失敗したので、今度は養鷄をやつてゐる。所がこれには狐がかゝるので又一苦勞してゐる。だがこれらの世話が面倒になると何時でも不意と旅行に出懸けてしまふ。で若い細君といふのは半ば空想的な昔旋風な入て構ひつけもせず、御化粧を奇麗にしてゐるのが好きだが、令孃の民子は實際的な、始終動いてゐるのが好きな娘で、進んでいろんな世話をやいてゐる。今棧橋で、家鴨に餌をやつてゐるのがそれで、多い髮の毛をぐる〳〵と束髮にしてゐる。身裝（みなり）は構はないで實踐女學校の制服を塵除けに被つてゐる。年齡に二十位、身體は屈托なく大柄に育つてゐるが、動作は敏捷である。それを見て傍に立つてゐるのは小間遣ひのお新、一つ二つ年劣り世慣れて狡つからい性、ぢきに相手を見て應對し、成丈何もしずにゐて饒舌つてゐる女、頭ばかり氣にして始終前髮や、びんの形を氣にしてゐる。頭はハイカラ風の大前髮の銀杏返しに結つてゐる。

お新　ねえ、御孃さま、貴女よくそんな汚ない眞似をなすつて平氣でいらつしやいますね。え、まあ旦那樣も旦那樣ですわ、飽きぽくつていらつしやつて。此頃は鷄の方ばかりお構ひなすつて、この方へはちつとも御構ひなさらない。何時でもあなたが後へ廻つてそんなことをなすつてゐらつしやる。ほんとなら奧樣が――

民子　（此途端餌をやり仕舞ひ立上る。あひるは棧橋の端へ首を並べてなほせがむ）あらもう無いよ。（と餌入の底を叩いて追ひ拂ひ、お新の方を向いて）いゝぢやあないか、私はこれが好きなんだから、嫌ひなことなら頼まれたつてしやあしなくつてよ。

（此中あひるはがあ〳〵いひながら遠くへ泳いでゆく。）

お新　あら、だつてあなたは奧さまとも仲よしでゐらつしやるし、旦那樣の御無理もはい〳〵つていつてらつしやるし、ですから私――

民子　だからさ、なにも好いぢやないか。それが私好きな

んだよ。

お新　(怪訝な顔をして)　へえ、だつてお孃さまだつて奥さまのやうに奇麗にしていらつしやりたいでせう。

民子　いゝえ、母さまと私とは違ふよ、――さお前。そのバケツや、金盥をあつちへ持つて行つておくれよ。

お新　はい(といつたが又饒舌りかける)ねえ御孃さま、私何時でもあなたが奥さまのことを母さまと仰有るのを伺ふと可笑うございますわ。

民子　(卓(テーブル)の傍へゆき、椅子へ腰を下して)　なぜ。

お新　だつてお孃さまと幾何(いくつ)も御違ひなさらないのでしよ、御母さまより御姉妹のやうですわ。

民子　さうさ、一緒に外へいつた時には、私も時々極が惡いとおもふことがあるわ。それにわたしの方が丈が高いからさ――

お新　それは御孃さま、學校であんまり體操をなすつたからですよ。

民子　馬鹿おいゝな。體操をして大きくなるものかね。

お新　でも、みんなさう申しますよ。

民子　それはね、學校へ行つて袴を穿いて胸を反して歩いてゐると幾何(いくら)か大女にはなるね。

お新　まあいやですこと――

民子　あらお前いやかい。

お新　えゝ、大きくなるなんて。あたし小作りで粋でゐたうござんすわ。

民子　あゝさう、お前は粋な人になりたいんだつけねえ、何時だつけ、お前、肺病になりたいつて云つたねえ、粋だから。

お新　まあ、いやですよ。あれは脚氣になるよりはと申したのですよ。

民子　まあ、いゝよ。だがお前、朝鏡の前で何時までも頭をいぢつてゐるのはおよしよ。

お新　(急に頭をいぢつてゐた手を下し)あらうそですよ。

民子　でも、お前の持つものがみんな油だらけになるよ。此間もあさづけの御香物(おかうこ)が油くさいから聽いたらお前が切つたんだとさ。

お新　あら、うそですよ。

民子　さうかい、それならいゝが。今日はまた土曜日だし、御覧、向ふの丘にもちら〳〵人出がある樣だから、また東京から御客樣が來るかもしれないから、用があるなら、今の中に片付ておゝきよ。

お新　えゝ(といひながら、なほ猶豫(ためら)つてゐて)ねえ、お孃さま、私はお孃さまのやうにして下されば、ちつとも中分はないんですが、奥樣は隨分に氣難しくつて――丸でお孃さまが奥樣のやうで、奥樣がお孃さまのやうです

わ。

民子　（直截に）え、ぢやあ母様をお孃さまだとおもつて、わたしを奥さまだと思つてゐたら、お前の方に損得はないぢやあないか。

お新　さうですけれども——

民子　どうしたの——

お新　先刻もねえ、御用を伺つていたしてゐますと、それが濟ない中に又他の御用を仰有るし、呼鈴がなつたので、御居間へかけつけると、きよとんとなすつてゐて「何だい」なんて仰有るし——

民子　分曉たよ。母さまは空想家で詩人、わたしは實際家さ。

お新　（民子の上衣を見て）あ、なるほど、お孃さまは實際女學校の卒業生でゐらつしやいましたねえ。

民子　ま、なにをいつてるんだよ。——この服は事務服がはりに着てゐるんだよ。

（此時後の二階より若い細君の彈くヴィオリンの音が洩れてくる。）

お新　あら、奥さまがヴイオリンをおはじめなさいましたわ。

民子　さう一々母さまのことを氣におしでないよ。

お新　（なにかヴィオリンの音に意味ありげに耳を傾けて）それに奥さまは鈴木さんをお孃さまより御大事になさいますのね。

民子　だつてあの人は病人ぢやあないか。

お新　え、病人、もう全然癒つてゐますのですよ。それは奥さまの前だと、さも弱さうな切なさうな顔をして。——私なんぞには「おい」だなんて大きな聲を出して。病氣であんな聲が出ますもんですか。さうすると奥樣がまた、さも／＼心配だといふ風に、そんな疳積なんぞ起して大きな聲を出すと病氣に障りますよつて仰有るのですもの。

民子　なんだよ、母さまがさう鈴木さんを大事にするのは父さまの御言ひ付なんだよ。あの人はねえ、父さまが昔大變御世話になつた方の息子さんで、父さまがよく面倒をみて上げなきあならない人なんだよ。

お新　さうでございますか。

（此中ヴイオリンの音止む。）

あら、もうヴイオリンを止めておしまひなすつたわ。奥さまは此頃どうかなすつてゐらつしやるわ。

民子　（立上り）さあ／＼もうお前はあつちへ行つて用をおしよ。それに今日は風の向きで時々モスリンの油煙がくるから、應接をもう一度氣の毒だが掃除しなければなるまいよ。

お新　（うつかりと）いゝえ、丁度まだ御掃除をしませんでしたから――

民子　え、まだ掃除をしない。呆れたねえ。

お新　（遽かに狼狽て）今朝から、御用が多かつたものですから、つい――

民子　ま、いゝからそのバケツやなにか持つてあつちへ御出よ。

お新　（さすがに悄氣て）はいく。

（とバケツや金盥を持つて行きかけ。）

民子　それご覧、今の話をきかれたら何うするの、早くお往でよ。

あ、奥さまがいらつしやいました。

（お新點頭いて建物の後へ往く。引違へて建物の中から若い細君ため子、手を帶の間へ挾みながら出て來る、二十八九、派手作りなれど、それが華美々々しくみえぬ美人、色は拔けるほどに白く何所か淋しげな顏立で脾弱さうな質が常に物腳ましげにみせ、羅綺に堪へずなどといふやうな聯想をもたせる女、頭はハイカラ風の丸髷に結つてゐる。）

爲子　（ふと民子に氣がついて）おや、民子さん。鈴木さんは此方ぢやありませんか。

民子　父さまと一緒ぢやあなくつて。

爲子　さうぢやないでせうよ。ではまた出掛けたか知らん。

民子　まあ母さま、こゝへいらつしやいませんか。（と椅子の位置をなほす）

爲子　えゝ有難う。（と歩みよつてかけ）まあ民子さん、まあひるに餌をやつて下すつたの。御苦勞さまね。父さまはもうこの頃、鷄の方ばかり夢中ですのね。

民子　（同じく椅子へかけ）えゝ、父さまのはみんな道樂だから取止めがないのですわ。まあ父さまの爲ることで秩序のあるのは旅行丈けですわ、時間經済の上手なのが御自慢よ。あれ丈に、昔敏腕に働いた癖が殘つてゐるんですわ。

爲子　ほんとにね。――また一昨日歸つておいでなすつたばかりで直ぐ四五日中に御出掛ですつて――

民子　また銃獵？

爲子　いゝえ。

民子　ぢやあ、また旅行案内のあら拾ひにですね。

爲子　それまでに狐を捕へるのですつて。

民子　ほゝ、父さまが鷄小屋へかゝる――（といひかけ、ふと爲子に同情して）母さまも、全く寂しいのね。いま何をしていらしつたの。

爲子　いえ、何にも――なんだか氣が浮かなくつてく。（と額を親指で抑へる）

民子　あら、母さまのやうに、なにもかもさう無味(つま)らなさうになさつてゐても困るわ。あ、さう。こゝに今月の貴婦人倶樂部が屆いてゐてよ。(と卓上の雜誌を取上げ)結婚の理想つていふ題で所謂諸名家の感想が集めてあつてよ。隨分馬鹿々々しいことが書いてありさうよ。御一所に讀みませうよ。

爲子　結婚の理想――(怳然(うつとり)として)あゝそんなことを云つてた時代が羨ましいわね。

民子　あら母さま、何うしたの――

爲子　いゝえ、何うも――

民子　さう、それでね、母さま、私の所へも御感想をつて端書でいつてきたの。馬鹿にしてますわねえ、理想を以て結婚する馬鹿があつて――理想つてものは絕對的よ。結婚は一人では出來ないわ。少くとも相對的よ。馬鹿馬鹿しいから、返事もしなかつた――婦人雜誌なんて馬鹿にしたものねえ。

爲子　まあ、あなたは何時も元氣ねえ。

民子　だつて母さま、別に陰氣にしてゐる譯もありませんもの――(と云ひ差し、ふと何か見つけたやうに立上り)あら、父樣、ま、大變な風ねえ――

爲子　(同じく振向いて)あら、まあ――

(主人菱田賴造、今迄の話の樣子で大凡偲ばれるやうな人柄、善良な大樣な中に苦勞もしてきたといふやうな人物、年はもう六十に手が屆くが、立派な强壯な體質、頭は奇麗に禿げ上つてゐる。中古なフランネルの寐衣を尻端折にして、西洋手拭で、頰冠りにして構はない風で、建物の裏手からつかつかと出てくる。)

民子　(二三步出迎へて)ま、何をなすつたの、父さま。

菱田　あの狐め、また鷄を覗ひにきやがつたから、穽をかけてゐたのさ。憎い奴め、晝間から來てやがる。

民子　おやおや、父さま、ぢや狐が摑まつて？

菱田　なに、まだ摑まりやしない。

民子　ほゝゝゝ、父さまは騷ぎばかり大仰で、少とも摑りやしないのね。それで以て鷄の方はどんどん取られるし、一層(いつそ)、狐を摑へるより鷄を飼ふのをよした方が早手廻しだわ。

菱田　馬鹿いふな。今に摑まへてみせる。

(此途端奥にて何か物音する。)

民子　あら來たわ！　父さま早く行つて御覽なさいよ、來てゐるかも知れないわ。

菱田　なにまだ來ないよ。

民子　あらだつて鷄の啼く聲が聞えるわ。

菱田　え、さうか――

民子　おほゝほ。

菱田　こら揶揄ふな。
僞子　（二人の話の間にぼんやり對ふ岸の景色を眺めてゐたが、不意と立つて溜息する）あゝ。
菱田　（ふつと其方へ注意を向けて）おや、どうしたい、お前は鈴木を見掛なかつたか。
僞子　いゝえ。あなたと御一緒ぢやあないかと思つてゐました。
菱田　いゝや〳〵。あの病人を少とでも外へ出してはいけないのに。何時出ていつたかしらん。（と椅子へかける）
（此時與にて。）
聲　あれ、いけねえ〳〵、そんな所から土を運んで行つては、これ駄目だよ。
他の聲　いや、一寸その、土が入るんだ。御主人は御承知だ。
聲　いゝや、嘘だ、此間から、窃と來ちやそこの土を運んでゆく、おや旦那の所へ一緒にいかう。私も、こゝの臺所を預つてゐる責任があるんだ。
他の聲　ぢあ、御主人に斷つて貰つてゆく。
（と爭ひながら、建物の後より出てくる一人は此邸の下男の平助、一人は此邸の隣に小さな家を構へてゐる四十位の痩男。）
痩男　（菱田に會釋して）えゝ、御主人、その――

菱田　（皆まで云はせぬやうに）あゝ、よろしい。其處の土は別に入らないのだから、持つてらつしやいよ。
（痩男ひよこ〳〵辭儀をして、平助を尻目にかけて入る。）
平助　（口惜しさうに）あれ、旦那、駄目ですよ。あすこの家ぢや、此間もあすこの土をあらまし持つて行つてしまひました。今に凹地になつて水溜が出來らあ。――あ、それから一昨日も如露を一寸つて持つてつてまだ返さねえ。（と後ろを向いて大聲に）あの如露は與つたのでねえ、返して下せえよ。
僞子　（顏を蹙めて）まあ、大きな聲だねえ。
菱田　（呑氣さうに）あはゝゝは。
民子　まあ、だが隨分酷い奴ねえ。
平助　（まだ、獨りでぶつ〳〵と）此邊の奴等は、みんな馬鹿にしてゐやがる。こゝの邸が出來たのを好い儲け場所が出來たやうに寄つて集つて酷い眞似ばかりしやがる。昨日植ゑた梅なんか、木を合せてかすがひで止めて赤土をなすつて誤魔かしてありますぜ。
菱田　あはゝ、道理で割合に安いとおもつた。拔目がないことをやるな。
平助　旦那、笑ひ事ぢやありません。この間の杉苗だつて馬鹿々々しい、一本五錢づゝだつて。旦那方は御存知な

くつたつて私は田舍育ちだ。馬鹿にされて口惜しくつて――

菱田　（微笑しつゝ）さうか〳〵。

平助　だが、一等癪に障るのは、隣の奴だ。この間も――

（此中何時か、お新掃除をしかけたまゝ、箒を持つて出てきて、頻りに口許をむづ〳〵させてゐたが、此時溜らず口を出す。）

お新　ほんとですよ。あの御隣の奴。この間もあたしが一寸お隣の方へ塵を捨てたら、隱居さんといふのが大きな聲で怒鳴りつけて――隱居さんもないもんだ。夏なんか、腰巻一つで、澁團扇を遣つてゐる癖に、頭丈けいやにぴか〳〵させて、遊ばせ言葉を遣つて――

菱田　あはゝゝは。

爲子　まあいゝよ。お隣づからで、そんな角突合ひをしなくつても――

平助　でも、奥さま、隣りの奴ばかりは癪にさはりますよ。いろ〳〵此方の世話になりながら、さも〳〵こちらの旦那でも悪いやうにこんな所へ地所を買つて損した〳〵と口癖のやうに云ふので――なにもこちらの旦那が進めやあしまいし、手前の勝手でこちらの旦那が此所の景色を譽めて、この家を建てたのをみて、きつと今にこゝが別莊地になると勘くつて儲ける積りで買込んだ癖に、それが當が違つたつて、此方の旦那の爲だつていふので――――

菱田　いや、それは全く氣の毒だつたな。

お新　（先刻から饒舌り出す糸口を覘つてゐて）それからあのかうなのでございますよ。何でも此方の眞似をして、此方で家鴨を飼ふと直ぐ又家鴨を飼ふし、お孃樣がブランコを御造へなさると直ぐまた變なブランコを造へまして汚ない我鬼が乘つてゐますの、あれは必然（きつと）、何處かの御稻荷樣の鳥居の破（こは）れを持つてきたのでございますよ。

爲子　まさか。

菱田　あはゝゝは。

お新　いえ、本眞（ほんと）でございますよ。其虎等に破（こは）れた物がありますと、直ぐこれは不用（いら）ないのか。勿體ないつて持つて行つてしまひますもの。

民子　お止しよ、もう人のあら拾ひは――それより早く掃除をしてお仕舞よ――つまり、お前がなんでも母樣の眞似をするのと同じなんぢやないか。柄行も考へずに――

お新　あら、うそですよ。

民子　でも母樣が丸たぼにすると、お前も直ぐに丸たぼ、母樣がハイカラ風の丸髷に結ふと直ぐお前もハイカラ風の銀杏返しにするし、母さまが薄色の無地襟をかけると、お前もすぐかけるし、母さまが翡翠の釵（かんざし）を挿（さ）すと、お前

も直ぐ買物を買つてくるぢやないか――（と一々指さして云ひ）さ、もう、あつちへお出よ。さうして早く掃除してをしまひよ。
菱田　あはゝゝは。もう分つた〳〵。さあ、あつちへ往つた〳〵、平助も鷄小屋の方を見てくれ。
（これにて平助は裏手へ行き、お新も家の方へ行きかける。）
お、お新、おまへ、鈴木を見掛けないか。家には何所にも居ないのか。
お新　えゝ、何所にも御家にはゐらつしやいません。
（と入る。）
菱田　ぢやあ癒また出掛けたのだな。それ見たことか。恢復期が最も大事だ。出ちやあいかんとあれ程云つておいたに。
民子　だつて少と位は日光に當つたつていゝぢやありませんか。
菱田　いかんよ。村木がさういつたよ。
民子　あら、村木さんは日光に當つた方がいゝつて云つてましたわ。
菱田　そんなことをいやあしまい――醫者の癖に――
民子　（皮肉に）あら、お醫者だからさういふのぢやあなくつて――
菱田　何だつて――尤もあの醫者は少し變たからな。來診に來ても脈をみながら、話ばかりしてゐる。容態をきいても獨りで承知してゐる。それにぢつと人の顏を見る惡い癖がある。
民子　それは父さま。骨相學をやつてるからですよ。
菱田　さうだ。それに此頃は姓名判斷に凝つて妙なことばかりいつてゐる。まだそれはいゝが、あの墓を集めるのは何の事た。あれの家へ往つて見ると、庭先に二三十墓が並んでゐる、人の病を治さうといふ醫者の家に。
民子　あら、父さま、どうして、さう村木さんのことを惡くいふの。先には、あんな氣作な人はないつてほめてたぢやありませんか。それに父さまだつていろ〳〵の道樂があるぢやありませんか。
菱田　いや、今の若さから、あれではいかんといふのだ。本業を怠たつて。
民子　まあ、でも父さま、呑氣に暮してゐる人が惡いの。
菱田　なに呑氣に暮す。馬鹿な！――そんな人間ばかり殖えたら何うする、日本は――
民子　そんな經濟家じみた心配はいらないわ。あんな人は殖やさうつたつて殖えはしないから。
菱田　なにをいつてゐるのだ。お前は近頃、餘程變つたな。
（と語を強めて）父さまはいくら物に構はないからつて、

娘のことには構はずにはゐられないからな。さうおもひなさい。

民子　（いくらか笑を含んで）　大丈夫、父さま。わたしは父さまの感情を蹂躙するやうなことはしませんから、たとへどんな欲求があつても、私は世の中を圓滿に暮さうとおもつてるんですから。――もしあの人と一緒にならうとおもふなら、父さまが理解するまで待ちます。それでもし理解しなかつたら――よします。

菱田　なんだ、そんな利口ぶつて。――そんなこともあの村木に習つたんだらう――第一お前とは幾何違ふ。十五も上だ。お父さんといつてもいゝ位だ――

民子　だつて――

菱田　何がだつてだ。

民子　だつて、父さまは母さまにいくつ上？　二十も上ぢやあなくつて。

爲子　（見て居られなくなり）　まあ、民子さん、もうお止しなさいよ。

菱田　（調子に乘って出損れ、著しく機先を制され）　ま、單に年齢ばかりの問題ぢやない、よく考へて見なさい。お前のことだから大丈夫だとはおもふが、あんな男に欺されてはいかん――（と立上り急に氣が付いたやうに）おゝ鈴木は、何所へ行つたのだらう。何うも心配をかける奴ばかり揃つてゐる。

（とわざとぶり／＼して家の方へ入ってゆく。）

爲子　（心配して）　まあ、民子さん、父さまを怒らせては惡くはなくつて――

民子　でも父さまが平常は打棄り放しにしておいて、急に思ひ出したやうに叱言をいふのが可笑しいから、一寸揶揄つたのよ。

爲子　まあ。（と呆れて）　だが、父さまは本眞に怒つておしまひなすつたやうよ。

民子　なに父さまは尻拔けよ。あんなに怒つたつて、ぢきに忘れたやうになるのよ。

爲子　あら酷いことを――

民子　いえ、それだから父さまは御金持になれたのよ。

爲子　まあ。（といつて、ふと語を變へて手近の椅子へかけ）　民子さん。兎に角、村木さんはいけませんよ。

民子　（眼を瞠つて）　なぜ。

爲子　なぜつて。餘り年が違ひすぎると。夫が妻を子供の樣におもつて夫婦らしい情合がもてませんよ。

民子　まあ、さうか知ら。

爲子　それは一時は仕合せだとおもつても、長い間にはねえ――つまり不幸の基よ。惡いことは云ひませんよ。

民子　（爲子の眼をみて）　ぢやあ、母さまは？

爲子　私？（强ひて笑むやうに）私は何も不足はないぢやありませんか。

（此時お新家の中より出て來て聲をかける。）

お新　お孃さま、お孃さま。旦那様が一寸いらしつて下さいと仰有います。

爲子　きつと、父さまはまだ怒つておゐでなのよ。あなた謝らなくつては惡いですよ。

民子　（急に素直に）えゝ、さうね。ぢや、一寸行つて詫つてきませう、母さまは、家の方へいらつしやらなくて。

爲子　私少し此所に居てみませう。

民子　さう、ぢやあ、また後で。

（とお新と共に身輕に家の方へ行く。爲子あとを見送つて、ふと雜誌へ眼を落して取上げ、好加減に二三枚繰つてみて、不味なさうに下へ置き、片手で腮を支へてうつとりと景色をみてゐる。この少し前、裏手の方から今まで大分噂のあつた鈴木俊一、散歩から歸つてきて此方の様子を窺つてゐたが、此時そろ〳〵と前へ出てくる。扮裝は羽二重の襦袢の襟を克明に合せて光澤のある米琉の袷の、踝へ纏らみさうなのを着て、お召の兵兒帶をだらりと結び下げ、氣取たソフト・ハットを前下りに冠り、細いステッキを持つて繻子の紺足袋にゴム裏の草履を穿いてゐる。眼のぱつちりとした鼻の高い痞ぎすな好男子。年は二十三だが、それより若くみえる。）

鈴木　奧さん――

爲子　（吃驚して振向き急に活氣づき）あら、鈴木さん。あなた、まあ、何したの。何所へ行つて？　云ふことを聽かないで、困るぢやありませんか。ま、疲れたでしよ、ま、一寸御待ちなさいよ。いゝ事をしてあげるから。（と立つて椅子を二脚よせ）さあ、この上へ長くお掛けなさいよ。

鈴木　有難う（と掛ける）

爲子　（自分も傍へ椅子を持つてきて掛け）ま、あなた逆上やしなくつて――

鈴木　えゝ、一寸――（と額へ手をやる）

爲子　ぢや咽喉も渇いてゐるでしよ。シトロンを持つてきて上げませうか。

鈴木　（物憂さうに）いえ、もう何にも入りません。

爲子　ま、何うしたの、あなた。丸で懵然してゐて――それでもよござんすわね、これまでになつて。あなたの様な柔しい方があんな病氣になつて苦しんでゐると、私も堪らない様な氣がしましてね。――わたしも身體がよわいのでね。

鈴木（感動して）あゝ、奥さん、わたしはこの御深切をどうして感謝しませう――

爲子　ま、そんなことはお止しなさいよ。

鈴木　いゝえ〳〵云はして下さい。わたしには此事の外話すことはありません。わたしの病の癒つたのもこの喜びの爲です。

爲子（笑みて）でも御醫者樣のことも御忘れなさるなよ。――折角これまでに癒つたのに、また無理なことをしてぶり返したら何うなさるの。村木さんに叱れますよ。

鈴木（爲子の顔を熟とみてしんみりと）あゝ、私はもう一度さうなつた方がいゝ。さうすれば、また貴方のお柔しい介抱が享けられる。その爲に伴ふ肉體の苦痛なんか何でもありません。

爲子（陽氣に笑ひながら）まあ、大層御叮嚀ね。二度とそんなことがあつて溜るもんですか。そんな不味ない事をいふもんぢやありませんよ。

鈴木　えゝ。（と柔しく點頭いたが、何か思ひ出したやうに急に激昂し）先刻こゝにゐたのは民子さんですね。あの人は私を好きません。私もあの人を好きません。あなたとは丸で違つて、あんな感情の粗野な人はありません。

爲子　まあ氣にお掛けなさるなよ。あの子はちつとも惡氣があるんぢやありませんから。

鈴木　ですが、私は好きません。あの人はすべてが打算的です。二二が四といふ形而上の假定を眞理だとおもつて、女の感じをなくしてゐます。中性です、ダスです。たゞ働けばよいとおもつてゐます。――奥さん、私は懶惰者でせうか。仕事をしてゐる空疎な頭と、かうぢつと靜かにしてゐるわたしの頭と――（といひ掛けて繁々と爲子の顔をみて堪へられぬやうに）あゝしかし今のわたしは懶惰者です。わたしの頭は白紙同樣ですから――あゝ生の充實〳〵！

爲子（少し解りかねたやうな顔をして）ま、あなた。さうあせつたつていけません。また病氣に障りますよ。御勉强もお身體が癒つてからのことですよ。それに民子のことなんか、お氣にお掛けなさるなよ。全くあなたと、あれとは氣象が違ふのですから。

鈴木（この平凡な語に、著しい感動をみせて）あゝ、奥さん、あなたは全くお柔しい。あなたは、さうして諦めておゐでなさる――（悶えるやうに）私はそれを思ふと御氣の毒で堪りません。

爲子（嬉しさうに）有難う。全く同情して下さるのはあなたよ。（と云つて考へ深さうに）それはねえ。世の中のことは、すべて不滿足ですわ、私も面白くはありません。私も、もと文學が好きでしたの。（と急に浮いたやうに）

わたしの名、爲子つて隨分つまらない平凡な名ね。

鈴木　（不意で、意味が分らないので驚いて）何してゞす。

爲子　だつて、さうぢやありませんか。（やゝ蓮葉に）笑つちやいけませんよ。

鈴木　（熱心に）　えゝ、笑やしません。

爲子　私、香澄子つて名になりたいの。さうして、（と夢みるやうに）こんな日にま、繁り深い木蔭で長椅子に寄りかゝつて詩集でも繙いてゐたら、何なに好い氣持でせう――私ね、學校時代には、作文は何時も先生にほめられましたの。でも、その時分里の方も不如意でしたから。も止しませう〳〵――併し縁があつて此所へまゐつて、かうして樂にしてゐられゝば、結構だとおもつてゐます。（と鈴木の方をみて急に覺めたやうに）ほゝゝゝほ、私、馬鹿ね、ま、不味(つまら)ないことをいつてしまつて。

鈴木　（熱心に）　何、馬鹿？　飛んだことを。今の貴方こそ、本質(ほんしつ)のあなたです。何時もの貴女こそ却つて――（と言葉に困つて言淀む）

爲子　（皮肉でなく、人が好さうに）　馬鹿だといふの。

鈴木　（忙てゝ）　いゝや。さ、何ていひませう。（氣取つて）あゝ、私は何て拙ない詩人でせう。表白する言葉を知らない。（と眼を伏せて鬱ぎこむ）

爲子　（その餘り眞面目なのに氣の毒になり）　あら、いゝのですよ。忌味をいつたのぢやないの。氣に掛けてはいけません。

鈴木　えゝ。（とヂツと爲子の顏をみて、何か思ひ切つたやうに）奧さん、私は――

爲子　（怪訝な顏をして）　え？

鈴木　（言そびれて、いふ事を變へたやうに）　ぢあ、奧さん。あなたはやつぱり今の境遇に滿足しておゐでなのですね。

爲子　（全然諦めた人が落着いてゐるやうに）　えゝ、滿足しないといつたつて仕様がないぢやありませんか。（と笑みて）これからの樂(たのしみ)はあなたの樣な柔しい方に、柔しい奧さんを御世話して、仲のよささうなのを竝べて見るのです。

鈴木　あ、もう、そんなことは止して下さい。頭が痛い。――（と顏をしかめて頭を押へる）

爲子　（驚いて）　ま、何したの、貴方。また、熱が出たのぢやないの。

鈴木　え、熱が。いゝえ。――（また悶えるやうに）あゝ、私はどうしてかう臆病でせう。

爲子　え、臆病？　ま、貴方、何してそんなことを急に氣に掛けるの。（慰めるやうに）ま、臆病の方がいゝのですよ。間違ひがなくつて。

鈴木　いゝえ、だめです。私は自分の藝術と生活を一致させることが出來ないからです。

爲子　（勘違ひをして）あら、さう急にそんな心配をなさつたつていけませんよ。此處にかうしてゐれば、差支へないぢやありませんか。その中には、あなたの藝術で、立派に生活をなすつてゆくことが出來ますよ。

鈴木　さうぢやあない。

爲子　え？

鈴木　（じれて）あゝ、あなたには分らない。

爲子　まあ、さうじれないでさ、口で仰有いよ。

鈴木　（愈決心して、一大事を語るやうに）では、云ひませう、奥さん。私は嘗て戀をしました。氣狂のやうに戀をしました。しかも相手の婦人は少しもそれを感じてくれませんでした。私はその人の前へ私の一切を抛げ出しました。だが、その人は私の眞情を感じてくれません。その婦人は眞情を感じてくれる力がないやうでした。戀の力を、二人の魂を一つに結ぶ戀の力を――

爲子　まあ、御氣の毒ね。それから、何して？

鈴木　（拍子拔けがしたやうに）え？――もし、ではあなたの身に、さういふことが起つたら貴女はどうします。

爲子　（平凡な調子で）さうね、それほどに思はれたら、婦人の身なら誰しも嬉しいでせう。

鈴木　（熱して）え、本眞（ほんと）ですか。

爲子　（全然（すつかり）冗談にて）ほゝ、だが今はもう駄目、夫があります。

鈴木　（いかにも情けなささうに）あ、あなたには夫がある。私には心友さへもないのです。私を慰めてくれる心友さへもないのです。

爲子　御心友もない？　それも及ばずながら、夫（うち）のがゐるぢやありませんか。

鈴木　（強く首を振つて）いゝえ、私のいふのは婦人の友達です。失戀を慰めえられるものは、獨り婦人の友情です。――私には母もないんです。姉妹（きやうだい）もないんです。そして精神も肉體も弱いんです。――詩人は地上のあらゆる力を奪はれてゐるのです。だが、たつた一つのものを得ることによつて最も力强いものとなるのです。それは――あなたのやうな優しい方の庇護（ガーヂアンシツプ）が要るのです。

爲子　え、私のやうな――

鈴木　（夢中なやうに）さうです。あなたは私の求めてゐた心友です。あなたもそれを拒まないでゐて下さい。あなたは私を心友として迎へて、心友の樣に看護して下すつた。ですから、何うかその名を享けて下さい。

爲子　（少し困つて輕く享けて）えゝえ、享けますとも享けますとも。（といつて、子供にいふやうに）ですが條件

つきですよ。あなたは此後とも、わたしの云ふことをよつくきいて病氣を癒すんですよ。

鈴木　おや、享けて下さいますか。

爲子　えゝ、えゝ。

鈴木　おゝ、ありがと。

（と突と立上つて、爲子の手を摑まうとする、爲子、びつくりして、手を退く。）

（鈴木失敗たといふ思入て、そのまゝ「あ、目が。〳〵」と氣が遠くなつた眞似をして倒れかゝる。爲子驚いて支へて）

爲子　あ、大變、々々。

（この途端奧にて。）

驛　あ、さうですか、ブラットホームの方。よろしい。行つて逢ひます。

（と醫學士村木賢急ぎ足で出てくる。年は三十五六、風采は構はぬ學者風、薄鼠の春廣に山の低い山高帽。この樣子を見て。）

村木　奧さん。どうしたんです。

爲子　お、先生でしたか。丁度いゝ所へ――ま。何うしたんですか知りませんが、鈴木さんが、急にこんな風に。

村木　は、さうですか。（と立寄つて爲子の手より椅子へ移し、一寸診て）よろしい、大丈夫――（と獨り笑む）

（鈴木唸る。）

爲子　あら、あんなに苦しがつて――

村木　えゝ大丈夫、々々。――（と手帳を一寸裂き、何か書いて爲子に渡し）憚りですが、誰か一寸宅までやつて下さい、これを渡して下さい、藥瓶を取寄せますから。

爲子　は、直やります。（と心配して）それから此所へ此まゝ置いてはいけますまい。

村木　（輕くうけて）さうですね――あ、綠色の瓶ですよ。

爲子　（なほためらつて）はい〳〵。ですがね。先生、どうも可笑しいんですよ。靜かにこゝで話してゐるといふと目を廻したんですの。まさか、またぶり返したのではございますまいね。

村木　なあにさうぢやありますまい。――瓶は藥局の右の棚にありますよ。右の。

爲子　はい〳〵。わたしはね、どうも實にね、吃驚いたしましたの――

村木　さうでせう〳〵。（と輕くうけて）早く願ひますよ。早く。

爲子　はい〳〵。おや、急いで命令ませう。

（と急いで家の方へゆく、村木落着いてポケットより卷葉入を出し、紙卷を拔取り火を點じ一服して、鈴木を流眄に見て。）

村木　さ、さ。目をあきたまへ。何方でもいゝから。右の眼から開き給へ。勝手が惡かつたら左の眼から。
鈴木　(眼を開いて)　あゝ、先生でしたか。
村木　癒つたかい。
鈴木　(大儀さうにして)　ありがたう。私は氣を失ひましたか知らん——どうしたのでせう。熱がありやしませんか。
村木　(肩を叩いて)　おいおい君、君は中々好青年だが、君の判斷力は、ある點に於てひどく缺乏してゐるね。
鈴木　え。
村木　君はドクトル村木をこゝの奧さん同樣におもつてゐるね。醫者は僞はれんもんなんだよ。
鈴木　(昂奮して)　なんですつて、私が何を僞はりました。それをいつて下さい。
村木　なるほど。(と笑みて意味ありげに鈴木の顏をみて)　君はだつて善良で清淨な青年のやうな顏をしてゐるぢやないか。
鈴木　え、それが何うしました。私は少しも恥づる所はありません。
村木　だめだよ、君。君のその眼が承知しないからね。(と指さす)
鈴木　え?　なんですつて。
村木　眼がどんよりして鼻に充血して、健康體の神經衰弱——
鈴木　そりやなんのこつてす。
村木　ま、きゝたまへ。僕の知合にね、一人の若い宣敎師があつたんだがね、信仰が堅くつて獨身で素行が立派で、婦人とは二人きりでは同席もしない位で、ひどく感心されてゐたが、——はゝ、醫者は僞はれんよ。一目見た丈けで。——それから僕は骨相學をやるが、失敬だがね君のその頭腦の戴きの低いのは口でいふほど善人でないことを證するね、靈性の活動が乏しいよ。それから、こゝが張つてゐるのは(と鈴木の鼻の脇を指て)破壞性に富んでゐるよ。
鈴木　よして下さい。
(とその手先を拂つて後を向く。村木すぐ後腦を指して。)
村木　この後腦の張つてゐるのは、情慾が壯んで、しかし分れてゐるのは、情を二三にする多情のしるしだ。
鈴木　そんな馬鹿なことを——
村木　いゝや、實驗上鷄の小腦を傷つけるとその機能がなくなるところをみると、萬更うそでもないよ。——それから君、姓名判斷からいつてもねえ、君の名前は字畫全體が、えつと——二十七か、それで土金土木だ、どうも

君は根氣がないね。それに陽陰陽々は君の性質の有頂天になりたがり自ら掀くまでに一事に心醉する質だ。しかも本氣に熱中はできない。（と冷やかに笑みて）君、熱してゐるやうにみせて中々冷靜にやるね。

鈴木　馬鹿な、そんな姓名判斷なんて下らんことを――

村木　併し君、どうだ、全然當つてゐるだろ。だからさう一概にも貶せんよ。

鈴木　なんですつて。

村木　ま、なんでもいゝさ。僕は君に少し話しておきたいことがあるんだが、今はその間がない。あ、もう奥さんが來た。さ、君もう一度病人になり給へ、早く――

（鈴木は何とか反抗したくも、この場合已を得ず、忌忌しさうに椅子へぐつたりとなる。爲子、お新を連れて、家の中より急いで出てくる。）

爲子　お、先生、あの早速御宅の方へは人を遣はしました。

村木　や、どうも、それは〱。

爲子　あの少しは快くなりましたか。

村木　え、大分もう快しい。

爲子　あ、さうでしたか、ま、私は吃驚しまして――（と鈴木の傍へより）鈴木さん、何う？　少しは快くつて？

鈴木　（村木の居る手前、擽ぐつたさうに）ありがたう。少しは快いやうです。

爲子　さう、まあよかつたわ。さ、彼方へ床を舒べておきましたよ。少し横になるといゝわ。――あなた歩けて？　さ、お新、手をお貸しよ。

（鈴木悄ましさうに立上り、爲子とお新に支へられてそろ〱入る。爲子が途中いろ〱大事に勞るのを、お新は馬鹿々々しいといふ顏をしてゐる。）

（引違へて民子後を振向きながら出てくる。）

民子　お、先生、鈴木さんが何うかしましたの。

村木　いや、一寸その目を廻したので。

民子　ぢやまた再發？

村木　なに心配したことはありません。

民子　（分つたといふ顏をして）あ、ぢやまた假病？

村木　（驚いて）え、あなた知つてますか。

民子　なあに、あの人は詰ると氣取つて手を額へやるから――

村木　（笑つて）あは、その氣取り過ぎですよ。お蔭で今日中は寢てゐなきやなりますまい。

民子　まあ、だがあの人はどうしてあゝ嘘が平氣でやれるのでせう。母さまと氣が合ふつてのも嘘よ。母さまは詩人だつて星菫派よ。あの人はデカダンぢやありませんか。母さまと氣の合ふのはつまり僞つてるのよ。――もう今日は御用は濟んだんですか。

村木　え、病家廻りはもう濟んだんですよ。だがだん〳〵厭になる、平凡な病人ばかりでね。
民子　ま、そんなことを云つてると流行なくなりますよ。
村木　所がもうなつてゐる。此間續けて町の有力な奴を二人續けて死なせて仕舞つたんです。つまり醫學士といふ看板を信用して東京の醫者にも見せなくつて殺した、あいつは喰はせものだといふことになつたんです。おまけに葬式が素晴らしく立派でね、行列が二町も三町も續いて僕が下手なことを大抵町中へ廣告しちやつたんです。——尤も其奴等は誰を連れて來た所で大概死んでしまつたんですがね。
民子　（少し呆れて）まあ。
村木　元來僕は癒らぬ奴に藥を賣るのが忌だから、駄目な奴はどん〳〵見切るので、見切醫者といふ名を頂戴してゐたんですがね。それ以來誰が云ひ出したか、東京で失敗つて此町へ流れこんだ見切もの醫者だといふことになつて、大分此頃は玄關雀羅を張つてるんですよ。
民子　（心配して）まあ、それは困りましたねえ——
村木　いえ、遊べてよござんすよ。
民子　（笑つて）先生あなたはほんとに呑氣ね。（と眞目面になり）それはさうと此頃父さまがあなたに餘り好意を表してゐませんの。

村木　（意外といふ顏をして）え、なぜです。
民子　（下眼になり）あなたが誘惑するんですすつて。
村木　え、誰れを——
民子　（鼻白んで）わたしをですつて。
村木　あはゝ、あなたをですか。これは面白い。
民子　面白かありませんわ。父さまはそれで大變に心配してゐますの。
村木　お父さんがそれが爲に心配——（とふとある事を思ひ合せてにやりとして）これは好い。いや、ちつとはお父さんに心配して貰つてもいゝ。お互ひ樣だ。
民子　え、何うして？
村木　いや、わたしも父さまのことでは隨分心配してますからね。鈴木君の病氣を癒さうとおもつてね。——そしてお父さんは何ういふのです。
民子　あなたが眞面目でないつていふのです。——つまり、あなたが餘り道樂が多過ぎるからですよ。
村木　あ、さうですか。だがどうも、この醫者はみんな道樂が多いものですよ。まあ私なぞは少ない方で罪の輕い方ですよ。骨相學と姓名判斷。蓁を集めるの位ゐ。あとは性の研究——尤もこれは專門になるが——まだ醫者によつては種々ありますよ。知つてる男に長唄に凝つて小三郎に入門して破門された男がありますよ、一オクター

ブ違つた聲を出すので――

民子　まあ――

村木　だが、これは幾何(いくら)あなたの爲でも止める譯にはいきませんよ。東京にゐると親類共が何んのかんのと蒼蠅いから、此方へ來てゐるのもこの道樂の爲なんですから。

民子　あら私も止めて戴かうとは申しませんよ。

村木　いやそれは有難う。

（この途端遠く汽笛の聲きこゆる。）

民子　（聽耳たてゝ）あら、あれは午後の下りの一番よ、誰か御客様が來るかしらん。

村木　あ、東京からですか。併し大抵この水の汚ないのとモスリンの油煙で逃げ出すでせう。

民子　え、さうなの。ですが世間は廣いものね。やつぱり知らずにやつて來ますわ。ほゝ。

村木　はゝゝは。

（此の途端家の中にて菱田の「あはゝゝゝつ」といふ高笑ひの聲がきこえる。二人びつくりする。直ぐ菱田手に漫遊案内の小册子を持つていかにも可笑くて溜らぬといふ風に笑ひながら出てくる。）

菱田　あはゝゝゝつ、どうも可笑しい。あつはゝゝゝつ。や、村木さん、お、民子、（と一寸不安な顏をして）二人限りか。お母さんは――

民子　今母さまは鈴木さんが一寸目を廻したので傍に附いておゐでゝす。

菱田　なに鈴木が目を廻した――（云はぬことかといふ顏をして）それ見ろ、だから日光に當てゝはいかんといつたんだ。おれの云つた方が間違ひはない。

（民子、村木と眼を見合せて笑ひを堪へる。）

菱田　な、村木さん、日光に當つたからだろ。

村木　え、さうです。

菱田　（もう一度民子に）それ見ろ。――どれ行つて見てこよう。（と行かうとして二人で置いてはといふ懸念から）いや民子、お前、往つてみておいで。

民子　はい。

（といつて村木に「それ御覽なさい」といふ顏をして家の方へゆく。）

村木　（菱田の一寸澁い顏を見て思ひ出して）菱田さん、今なにを笑つておゐでなすつたんです。

菱田　（思ひ出して忽ち機嫌がなほり）いやそれ〳〵、（と持つてる册子を突出し）これです。兩三日中にまた旅行しようとおもつてな。――

村木　（眼を上げて）え、また御留守になるんですか。

菱田　（氣も付かず）さうです、今度はその信州地方へ出懸る積りで案内記を少し調べてみると何うです、この本

に野尻湖の景色を譽めたあげく、(と木を開き讀む)「湖上一島嶼あり、辨天島となづけ、島中辨財天を祀る、沿岸より架するに一大長橋を以つてす」つて、馬鹿々々しい。去年行つた時に橋なんか影も形もない、尤もその時の話に古(むかし)は橋があつたさうだが、二十年も前に大嵐があつて落ちた限り出來もしないといふことだつた。よくもこんな出鱈目がかけたもんだ。

村木　成程ちと非道過ぎますな。

菱田　いや、これなぞは並の部で罪の無い方ですが非道いのになると案内どころか、迷はせてしまふのがあります。

村木　へえ？

菱田　しかも、去年です。土地もこの上州で、太田の金山から脇道へ五里入つた所に温泉があつて、案内記によると土地が幽翠で温泉淸徹多少鹹味あり、四時繁盛を極むといふことで、金山で聽いてみると此頃はあまり盛らないといふことだつたが、却つて靜かでよからうと銃獵旁旁行つてみようと五里も山道の道もないやうな所を分け入つてみると、荒屋の破れかけたのが一軒あつて戸障子も締めてないので、勿論人つ子一人見えない、遂に廢泉になつてゐるので、その時にはさすがの私も泣き出しさうになりました。

村木　成程これは本統に非道い。

菱田　いや、併し可笑なもので、この頃は出掛けた場所が案内記の通りだと却つて物足らん氣がします。間違つてるとまた一つ發見したやうな氣がして嬉しい。(と沼の方を見渡して)何うです、この赤濁つた城沼なぞも案内記の筆法でゆくと淸澄にして太古の俤ありとでもかくのでせう。いやもう書いてあるかもしれんて——さうだ、この間もかういふ——

村木　(やゝ呆れながら)　ま、菱田さん、鈴木君ですな——

菱田　(俄かに氣が付いたやうに)　おゝさう、あれの病氣はどんな鹽梅です。

村木　さやう、大きによろしいのです。一種間歇的熱病質ですから、ちと精神を轉換させたはうがよろしいのです。何うでせう、運動の爲に折々お使ひになつては、鳥小屋の世話をなすつたり、花壇の手入をなすつたりする御手傳ひをおさせなさるはうがいゝ。

菱田　まだほんとに恢復しちやゐますまい、それをそんなことをさせちやいけますまい。

村木　何の〳〵、さうしたはうが却つて頭の工合がよくなりますよ。兎に角獨ぼつちでお宅にお置きなさるのはよくない。つい熱が高ぶりますからね。

菱田　熱のある者を外へ出しちやいけますまい。宅にゐたからつて決して獨りでゐるやうなことはありません。始

終妻が傍についてゐますから。
村木　さあそれが困るので――
菱田　え？
村木　何、奥さんが附いてゐらつしやればいゝやうなものですがね――
（こゝへお新少し驚いたやうな顏をして出てくる。）
お新　旦那さま、御友達だとおつしやつてお名前はおつしやいませんが、立派な方がお見えになりました。
菱田　おれの友達だ？
お新　へえ、ご婦人と奇麗な坊つちやんをお連れなすつて――
菱田　御名前はつて聞いてこい。
お新　さういつて承はりましたら大變な御立腹で、友達だといやあ分るとおそろしい聲でおどなりになりましたので――
菱田　あゝさうか、ちやあれだ。水無瀨だ、到頭出掛けてきたな。こつちへ通せ。こつちへ。
（お新點頭いて入る。引違へて家の中より、爲子、民子出て來る。）
爲子　あ、あなた。
菱田　お、どうだ、鈴木は。
爲子　えゝ、もう大相よろしうございます。
菱田　また御客さまがあるよ。水無瀨といふ男が家内と子供を連れてきたさうだ。
爲子　おや、さうですか。
民子　また母さま見物？
爲子　およしなさいよ、民子さん！
（奥にて。）
お新　こちらでございます。
聲　分つとる、道がついてる。
村木　（驚いて）大變な人だな。
（お新に案內され、水無瀨卓爾を先に、妻じゆん子、息照雄の手を引き、車夫に荷物を持たせて出る。卓爾は年輩は四十八九、赭顏で胡麻鹽の五分刈頭、磊落がつてみせかけ、その實中々狡猾で、今は多少失意なところから、成功した友人なぞに會ふと、露骨な厭味を浴せて皮肉がつてゐる男、職業は辯護士、大島の着流しかなにかに薄地のインバネスを被つてゐる、帽子はボツクス帽。妻じゆん子は四十五六の肥り肉、やゝ拔け上つた髪を束髪にして薄い御納戸のお召の紋附に繻珍の丸帯、金の胸鎖をかけて、その上からスカーフを吹き靡かしてゐる、見るから強ものらしい扮裝、右の手にオペラ、バツクと洋傘を携へてゐる。息子の照雄は十三位な利發さうな美少年。秩父銘仙の筒袖にちゞ

みの兵兒帶をきりゝと締め、帽子は氣取つた少年帽。）

水無瀨　やあ、君。（と菱田と握手して）今一寸細かいのがないから、車夫に立替へといてくれ給へ。

菱田　あゝ、いゝとも、お新、その荷物を受取つてあつちで平助に金を拂つてくれといつてくれ。

（お新點頭いて車夫と入る。）

水無瀨　（あたりをきよろ／＼見廻はして）これかい、君の御自慢の別莊といふのは。え、水が濁つとるなあ、大川より汚いなあ。何だい、後の方は丸で新開地だなあ。電車から品川の埋立地を見るやうだな。（といつて急に菱田の袖をひき腮で）あれかい、後妻（セカンド）は？　成程若いなあ、未だ二十位だ。

菱田　あれは娘だよ。

水無瀨　あ、さうか。では丈の低い方？　おや、なほ若いぢやないか。

（菱田と督子少したじろぐ。）

じゆん子　（腮を引いて夫を上眼で睨み）あなた、何ですよ。

水無瀨　（氣が付き、一歩退いて）君、僕の奥さん——

じゆん子　（一歩すゝんで鷹揚にスカーフを取つてオペラバッグ、洋傘と一緒に卓上におき）まあ、菱田さんでゐらつしやいますか。此度は何うも揃つて上りまして御邪魔をいたします。まあ、奥さんに孃さんでゐらつしやいますか。始めまして、まあ結構な御住居でございますこと。私どもゝ別莊もと存じてをりますのですけれど、何分閑暇がございませんので、此間も鎌倉の方に恰好な地所がございましたのですがその儘にいたしてしまひますやうな譯で、ちと閑散にいたして居りたいと存じましても、何のかんのといろ／＼な事を持込んでまゐりますので、今度の帝國婦人海事協贊會なぞも是非奥さんに一枚加はつて戴きませんと物になりませんなぞと油を掛けられて、また逐々引張り出されるやうな譯で、そこへまた補缺選擧といふので牛込區の或部面は私でなければ動かないといふので、もう勘忍して貰ひたいのでございますが、せめて名前だけでもといはれますと、さうも參りませんので、遂々二人曳で飛して仕舞ひますやうな始末で、それに宅がこの通り構ひませんので、子供の教育なぞも、私が面倒を見なければなりませんので——照雄や、御挨拶をおし。（照雄母の下より臆病さうにはにかみながら默禮する）ほゝ、御覧の通りまだ一向御挨拶のしやうも存じませんので、併し外様の御子を惡口を申すのではございませんが、これと同年位な御子さん達のやうに生意氣には育てあげませんので、元來私は今の智育一點張の學校教育には反感を以てをりますので手許で教育してをり

ます。――お〻、それでゞございます。此間區役所の視學から呼出しが參つて「あなたの御子息は遂に學齡に達してゐながら何故小學へ上げないのか」と申すのです。それで私は女子高等師範を卒業してをりますので、立派に子供を教育する資格はあるといつて凹ましてやりました。まだあゝいふ學校へ上げてさへおけば、教育が出來るやうに考へてる頑冥な連中が當局にありますので――

（この少し前、お新茶器を運んできて、この雄辯に呆れながら引込む。勿論各人各種に呆れてゐる。此時爲子は茶器を按排してゐて、それ〴〵茶碗へ注ぎ、じゆん子へも出し。）

爲子　奥さん、お茶を――

じゆん子　はあ、どうも有難う。

爲子　まあ、どうぞ奥さん、御掛け遊ばして――

じゆん子　はあ、ありがたう。（と漸く氣が付いたやうに四邊を見廻し）どうも、これはおよろしい景色でございますこと。ま、あなた、そんな所へ、立ちはだかつてゐないで、御掛けなさいましよ。ま、此通りで、二人子供を抱へてをりますやうなもので――

水無瀨　はい、奥さん。

（これにて一同椅子へかける。但し村木と民子は立つてゐる。）

菱田　いや村木さん。

村木　はあ。

菱田　この方はわしの舊友で水無瀨さん――（水無瀨に向ひ）醫學士村木賢君です。（また村木に）東京で辯護士をやつてをられる。中學時代の勉強仲間さ。わはゝゝは。

水無瀨　（わざと聞咎めるやうに）勉強仲間！　はつ、聞いて呆れるね、菱田といやあ、なまけものと同語義に取られたもので、菱田ん、菱ける、菱かんといふ新らしい用語例が出來たくらゐなものさ。

菱田　さう、すつぱぬいちや困る。わつはゝゝは。――いや、併し君はその時分から勉強家でよく出來て、わしなぞよりずつと年が若かつたが同級で、却つてわしの方が坊つちやん扱ひにされたもので――

水無瀨　ふん、だが世の中は何事も運だねえ。君のやうななまけものがこんな立派な家やしきを持つやうにならうとは思ひ掛けなかつた、そら君があの蕎麥やの借りの始末に困つて――

民子　（堪へかねて、つと出て）母さま、あちらの座敷の方へ御案内したら何うです。

爲子　え、さうね。奥さまと坊つちやん丈けでも――如何でございますか。あちらへ。

じゆん子　はあ、有難う。——さう願ひませうか。
爲子　では何うぞ。
（爲子先きに、じゆん子、照雄、民子行きかける。）
菱田（呼びかける。）あ、ミツシヨン、スタイルの客室もごらんに入れな。
爲子　はい。
（と四人入る。）
水無瀨　ミツシヨン、スタイルた何だい。
菱田　いまの流行の建築だよ。
水無瀨　コムミツシヨンの類か。
菱田　馬鹿をいひ給へ。此頃セ、ツシヨンに代つて流行かけてきたのさ。大いに流行の魁といふわけさ。
水無瀨　へえ、そんな洒落た眞似をしてゐるのかい、ぢや僕も一緒に往つて、そのコンミツシヨンで出來た部屋といふのを拜見させてもらはう。
（とつか／＼と入る。）
村木（見送つて）隨分亂暴な人ですな。
菱田　いや、古からあゝいふ構はない男で——
村木　いや菱田さん——
菱田　え？
村木　さつきの鈴木君のこつてすが、どうでせう、あの人はあゝして遊ばしておいてはどうしても病氣に惡いのですが、家へ置かずに、何かかう骨の折れない一定な職業を——
菱田　いやそれは私も考へてゐないではありませんが、すべてさう急にする譯にもいかん。まあ／＼任せておいて下さい。
村木（また仕方なく）あゝ、さうですか。
（こゝへお新名刺を携へて出る。）
お新（菱田に）この名刺の方が旦那樣にお目に懸りたいつて御出です。
菱田　あゝ、泉谷がきたか。こゝへつていへ。
お新　はい。
（と引返へす。）
村木　御客樣なら、僕はあちらへまゐりませう。
菱田　いや（と村木の顏を見て）あなたはこゝに居つて下さい。
村木　何か御用で——
菱田　え？　いやその——私の話相手にな。
村木（可笑しさを堪へるやうに）あゝさうですか。
（奥にて。）
お新　こちらでございます。
聲　いや、どうもこれは恐入り——
村木　おや、今度は大層叮嚀な人がきましたな。

（お新先に泉谷藤兵衛入りきたる、お新は菱田の方を指さし會釋して入らうとする。泉谷「一寸」と猫ぢやのやうな恰好で呼びとめ、持つて來た風呂敷包を片手で擴げ水引のかゝつた大きなカステラの折を出し菱田が見てゐるかと一寸こつちへ眼をやり、見てゐるので、急に態と内密に渡すやうにひよこすかして早くあつちへ持つてゆけといふ風にみせる。お新叮嚀に禮をかへして目八分に捧げて入る。泉谷風呂敷を腮に手傳はせて仕舞ひながら此方へきたる。扮裝は高貴の袷に鐵無地の舊羽織、浮織のけば〱しい角帶に金鎖の太いのをからませて中指に印台の金指環をはめ、中折を冠つてゐる。帽子を取ると、髮を分けて油をつけ、奇麗に光澤を持たせてゐるので中央の禿が餘計目に立つ。年頃は五十位。）

泉谷　へえ、これは御無沙汰を、お變りもございませんで、そのな、今度足利の方へな、その出張店を設けましたのでな、勿論出張店と申しました所でな、私共のことでお恥しいやうなものでな、ほんの屑物（ローズ）を叩きまする店で、――その方へな、二三日まゐりましたので、序でと申しては恐れ入りますがな、兼ねて此方樣へ一度伺ひたいと存じてをりましたのでな、下車いたしましてな――（とあたりを見廻し）これは結構な御住居ですな。さすが大將のお好みですな。（伸び上つて景色をみて感心し）どうも何ともいへません景色でございますな。から氣がぢつと落着きますやうですな。

（とひとりで首を振る、尤も少しきこし召して御機嫌の體。）

菱田　相變らず、飮つてるな。

泉谷　えへゝ。一寸な、その停車場でな。何にもありませんのでな。その正宗を一本――何しろ、結構な御住居でございますな。

菱田　（やゝ得意に）まあゆつくり譽めてくれ。相當に苦心をしたものさ。――何かい、今夜宿つていつてもいゝのだろ。

泉谷　いえ。さうもいたして居られませんので。

菱田　まあ、いろ〱變つた酒を吞ませるから、緩りしたらどうだい。

泉谷　（相恰を崩して）何うもそれではあまり恐縮で――

菱田　では歸ると言ふのかい――

泉谷　何ういたしまして――御酒と伺ひましてはな、へゝへゝへ、――いやそれに此方樣では大分書畫骨董の類もお集めださうでな、私も下手の橫好で是非樂ましていただきたいと存じましてな――

菱田　あゝさうか、骨董類が好か。それは賴もしいな――

（とふと思ひ出したやうに）ぢや一寸お待ち、今見せるものがある。

（と不意と立つて急いで家の方へゆく。泉谷やゝ呆れて手持なさゝうに煙草入を取出しすぽんと云はせて村木の居るに氣がつく。村木は何時か椅子へ向ふ向きに腰かけてゐる。）

泉谷　何方樣でいらつしやいましたか。とんと心付きませんで失禮をいたしました。手前はな、菱田さまへは毎々御出入をいたして厚く御贔屓を受けます泉谷と申すもので、只今名刺を差上げまするとと御里が知れます。（と名刺を取出し、村木の前へおき）へゝ、かういふ商賣のものでな、自然御注文の品もござりましたら御記憶を願つておきましてな――

村木　いや、僕は館林の者で東京なぞへゆくことはありませんよ――

泉谷　いや、さやうでも御ざいませうが、また此御緣と申すものは何所にどうございますか知れんもんでな、願つておきますれば又――

（この時菱田二尺ばかりの立像を持つて出てくる。）

菱田　これは最近に手に入れた奴で、古銅の印度佛だよ。容易にないもんでな。

泉谷　（煙管をしまひ居住居を正して感心し）どうも結構な出來で、傑作でございますな。この氣分が何うもいはれませんな。

菱田　ほゝう、氣分？　大分黑人だな。――村木さん何うです。いゝ出來でせう。

村木　また御買ひなすつたんですか。もういゝでせう。床の間に三體の佛像は多うすぎますよ。それに違ひ棚の上は丸で古道具やの始末ぢやありませんか。

菱田　だつて墓を集めるのよりいゝよ。

村木　いや私の板碑（いたび）は三十七枚ともみな種類が違つてゐて學界に裨益を與へてゐますよ。あなたのは少し專門語でいふ採集狂ですからな。

菱田　え、醫學上？

村木　まさか、考古學上ですよ。

菱田　あはゝ、君には味が分らんのだ。この品なんか容易にない品さ。不景氣だから手に入つたのさ。景氣がよかつたら出る品ぢやない。

泉谷　（ひどく感服して）へえ、どうも、手前どもは不景氣だと溜息の時、此方さまなぞは不景氣だとかういふ品が手に入ると仰やる。まるで別な世界へ上つたやうなもんですな――

（こゝへ水無瀨手に驛鈴を持つて來て佛像をみて。）

水無瀨　おや、こゝにもあるのかい。――あつちの座敷も

佛だらけだ。君も下らん道樂をやるな。しかし一寸これはいゝ。(と驛鈴を見せ)君はあんなに幾何もあるんだ。くれ給へ。

菱田　どれだ。あゝいゝとも。

(こゝへお新出て。)

お新　いま御玄關へ山口さんと仰有る方がいらつしやいました。

菱田　なに山口がか。

お新　なんですか。御病人のやうでございますよ。

菱田　病人――それはをかしいな。兎も角もこちらへといひな。

お新　はい。

(と入る。)

菱田　山口つて誰れだらう。

(奥にて。)

お新　御あぶなうございますよ。

聲　いやどうも有難う。

(お新先に立ち山口守衞いり來る。お新會釋して直ぐ引返す。守衞はブラシュも掛けないモーニングを臺なしに着て、中古のソフト、ハット。いかにも骨立つた、淺黑い窶々しい顏に前齒が二本ないのが特に弱さうにみえる。年齡四十一二。此間まで役所勤めをしてゐたのが病氣が重くなつた爲三月ばかり賜暇を貰つて養生をするといふことになつてゐる。)

山口　(内臓に病があるやうな細い聲で)やあ菱田さんしばらく。いつも御壯健で、どうも體がよわいので息切れがして――御免を蒙ります。(と椅子へかける)

菱田　(驚いて)あ、君でしたか、何時そんなにおなんなすつた。

山口　いや私も久しう身體が惡うてな。

泉谷　(口を出して)や、あなたは今停車場でお目に懸りましたたな。

山口　は、わしは病人でな、早う車を引いてもらふと身體へ響いてならんので、そろ／＼歩くやうに引いて貰ひますのでな、かう遲うなりました。

泉谷　今何所がお惡いので。

山口　どうも心臓が惡うてな、おうさうぢや。まだ彼方に荷物が殘してあつた。(と行きかける)

菱田　いや、さうしておいでなさい。今受取らせますから。

山口　いや／＼間違ひになるといけん。わしがいつて見ませう。

菱田　まあ御體が惡いのに、さうしてお出なさい。大丈夫です、あちらに男も居ますから――

山口　(神經的な眼をして)いや／＼もし又紛失でもしま

すといけません。一寸いつて來ませう。

（山口入る。）

水無瀨　（呆れてゐる菱田の肩を叩いて）君、あの男は心臟だつていふが、ありや肺病だぜ。君迚も一緒に食事なんか出來ん。今夜宿る積りでも居るやうなら、何とか口實を設けて斷り給へ。

菱田　村木さん、ほんとに肺病かね。

村木　そりやあゝいふのは、打診してみなきや分りませんよ。

泉谷　そりや氣味が惡うごすな。

水無瀨　それ、やつて來た、やつて來た。

（山口またそろ〳〵と出てくる。）

菱田　いや山口さん今度は何うして此方の方へ御出掛で、なにか公務でもおありなすつて？

山口　いや私は身體が弱いので今賜暇を貰ふとります。それで何所か空氣のえゝ所へ、轉地療養をせいといふことですが、何うもよう深切に世話を見てくれる所もないので、ふと此方を思ひ出してな、菱田さんなら深切に面倒を見て下さらうと思うてな、それで此方へ上りました。どうか一月ほど御厄介を願ひたいのでな。

水無瀨　（思はず）え、一月！

菱田　（同情して）あゝさうでしたか、それは〳〵何卒御遠慮なく——

水無瀨　（小聲で）おい君、あの男を宿るならおれは歸るぜ。

菱田　（同じく小聲で）まあ〳〵、離れの方へ宿とくから我慢したまへ。——（一同に）やあもう夕食時分だ。さぞ御空腹でせう。——まだ食事の用意は出來ないのかな。

（この途端奧にて大鰐口の音ぼうん〳〵と鳴り渡る。菱田と村木の外びつくりする。）

山口　（慄へ聲を出して）やつ火事ですか。火事ですか、あの樣子では近いでせう。私の荷物は〳〵。

水無瀨　何だあれは。ほんとに火事か。

泉谷　（きよと〳〵して）煙も火の子も見えませんな。風があるから下を這つてるのですかしらん。

菱田　（兩手で制して）いやあれは內の食事の用意が出來た知せですよ。西洋流に鐘を叩くのですよ。

水無瀨　何だ馬鹿にしてゐる。おれはまた近所の寺へ弔が來たのかとおもつた。

山口　あゝ、わしはまだ動悸がしてゐる、はつはつ。（と息を切らして椅子へぐつたりとする）

菱田　（音に聞惚れてるやうに一同に）とうです、あの音色は、あれは自慢の大鰐口です。元曆元年甲辰正月吉日下川邊庄司兼行之れを建つといふ銘が入つてゐます。元來

關八州には古銅の鍔口が多いので、その中でも逸品です。
泉谷　（感心したやうに）成程伺ひますと好い音でございますな。
（この時不意と。）
水無瀨　や、こりや大變な油煙だ。ひどい。何處から來るのだ。
山口　（氣が付いて）お、こりやどうもわしは身體が弱いから、こりやどうも。（と腰を浮してハンケチを口へ當ててえへん〳〵と情なさうな聲を出して咳入る）
菱田　いや急に風の向きが變つて強くなつたのでまともに來るな。
水無瀨　何所から來るのだ。
村木　（下手を指さし）あすこのモスリン會社から來るのですよ。
水無瀨　え、あのモスリンから！　お、こりや、どうも益ひどくなつてくる。こりやたまらん〳〵。
泉谷　（少し怖れをなして）成程どうもこれはちと。
山口　（赤くなつて咳きいり）わしはもうたまらん。菱田さん、何所か油煙のこない所へ連れてつて下さい。
菱田　はあ〳〵、さ食堂へゆきませう。どうぞ、みなさん。
水無瀨　さうだ〳〵こゝにゐてはたまらん〳〵。
菱田　さあ〳〵。

（と菱田先きに水無瀨、山口、泉谷、物に追はれるやうに急いで家の方へゆきかける。村木ひとり超然と笑を含んで見送つてる。）

―― 幕 ――

第二幕

翌日の午後、場所は第一幕と同じ、但し第一幕とは位置反對となりて第一幕には見物席の方になりゐたる沼を正面に見渡し對岸の花山を手に取るやうにみる。一面に躑躅の繁茂した自然の大築山のやうな凹凸の上に東屋なぞ其處此處に見え、赤松の下にある碑なぞ鮮かにみえる。從つて中央のプラットホームも今度は陸つゞきに見た所になつたので、平舞臺となつて、上手で奥へ曲折(かねをり)に折れてた部分は下手で舞臺前まで突き出てきてゐる。出入も第一幕は下手ばかりだつたのが上手ばかりになつて表へ通ふ路が舞臺端になつて戶口の見えてゐた建物は側面が見えるやうになる。幕明くとお新は頻りに卓(テーブル)につや布巾をかけてゐる。照雄第一幕とは打つて變つた生意氣な恰好をして椅子によりかゝり、小形の本を讀む振りをしながら本越しにお新の貌をみてゐる。

お新　坊つちやん、あなたは何故わたしの貌をそんなに見るの——墨でもついてゐて？
照雄　うゝん。（と首を振る）
お新　ぢや、なぜ見るの。
照雄　僕ちつとも見やしないよ。僕本をみてゐるんだ。——だけど何故見ちやいけないの。
お新　だつてわたし極が惡いもの。
照雄　何故極が惡いの。
お新　何故——あら忌だ——人が惡いのね、坊つちやんは。しつぺ返しなんかして。（と傍へより）何の本讀んでるの？
照雄　これ？（と後へ隱し）いゝ本——君字がよめるの。
お新　あらひどい。私だつて尋常を卒業したんですもの、いろんなことを習つたわ。
照雄　なにを習つたの？
お新　さ、なんでもいろんなことを。だけれどね、根が嫌ひだから大抵忘れちやつたの。私それより三味線が習ひたいわ。好いわね。奈良丸くづしなんか。
照雄　さうかい。僕も嫌ひだ學校なんて。だから學校へゆかないの。
お新　おやまあ、どうして？
照雄　だつて母様が學校なんか行たつて、善いことより惡いことを餘計覺えるつて家で母様が教へてくれるの。——母様がさう云つたよ、學校で教へる日本語はまるで役に立たないつて。だから日本人は無表情なんだつて。ハタ、タコ、コマ、ドチラヘユキマスなんて節のある日本語はないつて。
お新　おほゝ、全くだわ。
照雄　だから僕は母さまが教育してくれるの。それは八釜しいの。食事はむらに喰べてはいけないの。それから僕は始終足を投出してゐるの。
お新　まあ御行儀がわるい。
照雄　あらお前知らないんだね、かしこまるのは蠻風だよ。四肢の發育を妨げるから足を投出してるの。
お新　へえ。
照雄　それから夜八時が鳴ると床へ入るの。
お新　まあ羨ましい。
照雄　でも不味（つまら）ないよ。
お新　なぜ？
照雄　でも少とも寢たかあないんだもの。
お新　まあ、私、暗くなると直ぐかう自然と睡くなるわ。あなた豪いわね。ではあなた睡くないの？
照雄　あゝ、だけど母さまが寢なきやいけないいつていふから仕方なく寢るの。——それから僕は君の顔なんか

見ちやいけないんだつて。

お新　おやまあ、なぜ？　お母さまにお目に懸つたのはきのふがはじめてぢやありませんか。

照雄　でもね、母さまは決して奇麗な娘の顔をみちやいけないつて云つたもの。

お新　まあ恐入つた、あなたほんとうにうまいことね、幾つ？

照雄　十三。

お新　あら十三、ではわたしに七つ下ね。あんまり年が違ひすぎるわね。それでもお嫁さんにしてくれて？

照雄　あゝするよ。

お新　おや、ほんと？　だがお嫁さんが年上ではをかしいわね。

照雄　をかしかないよ。

お新　おやどうして。

照雄　この頃は年下の男を持つのが流行るんだと。それが新らしい女といふんだよ。

お新　あら何うしてそんなことを知つてゐるの。

照雄　お前知らないの、間抜けだね。新聞に出てるぢやないか。

お新　まあ油斷がならない。（といつて何か笑みて照雄を覗きこむやうに）坊つちやん。あなた私の何所が氣に入つて？

照雄　え、僕？　僕はね、お前のその眼がね、心持上目にして見詰める眼付が、それからお前のその尖つた銀笛の音のやうな聲が――

お新　まあ人が惡い。私の聲が尖つてゝ？　どうせさうよ。

照雄　いえ、惡く云つたんぢやないんだよ。その聲が僕は好きなんだよ。お前の聲を先刻蔭で聽いてたら、お腹が空いた時のやうな氣がしたよ。

お新　あら何して？

照雄　咽喉が渇いてお腹がむづがゆくなつて！　僕お前にほんとにラブしてゐるんだよ。

（手に持つてる本を卓（テーブル）の上へ伏せてお新の手をとる。お新も放さうともせず照雄の顔をみて笑み。）

お新　まあ忌な。だが坊ちやん、あなた、ほんとに可愛い顔をしてゐるわねえ。

（こゝへ序幕に出た隣家の痩男きよと／＼しながら出てくる。）

痩男　お新さん。

お新　（びつくりして手を放し）あら誰れ、あらお隣りの依田さん。

依田　お新さん。一寸御主人は御宅ぢやないのかい。

お新　え、今日は御客様を御案内して會社の方へいらつし

やいましたよ。
依田　あ、お不在、ではよろしい。一寸今朝の新聞を貸して下さい。
お新　あ、いけませんよ。まだ旦那様は御覧なさらないから。
依田　うそだよ、君、もう晝過だ。そんな意地わるをしずに貸しておくれよ。
お新　だつて新聞がそんなに讀みたきや、新聞位とつたがいゝぢやありませんか。
依田　でも此方であんなに種々取るもの、無駄だよ。
お新　だつてあなたがそんなこといつちや新聞を持つてゆくから、内ぢや臺所で包み紙もなくつて困るぢやありませんか。
依田　そんな意地わるをいはずに御貸しよ。直持つてくる。
お新　それはあなたの癖よ。直ぐ持つてきたものはなにもない。
依田　まあ〳〵。
お新　あらいけませんよ。
依田　いや一寸々々。
（と、卓上の新聞紙を無理にとつて入る。）
お新　まああんないけづう〳〵しい奴はありやあしない。御主人は御在宅もないもんだ。居ないのを知つてるもんだから、こんな所までも入つてきて――
照雄　あの人新聞をとらないのかい。僕の家なんか十種も取つてゐるよ。
お新　まあ、では坊ちやんの家、御金持？
照雄　あゝさうだよ。家なんか廣いよ。
お新　御兄弟があるの？
照雄　いゝえ。一人。
お新　ま、一人つきりで御金持――ぢや坊ちやんの御嫁さんになる人は仕合せね。
照雄　だからお前ならないかい。
お新　わたし？　さうね、だがわたし嫉妬やきよ。よくつて？
照雄　あゝいゝよ。母さまも嫉妬やきだもの。
お新　まああの母さまが？　うふゝふ。
照雄　なにが可笑しいの。
お新　いえ可笑しかないわ。だが坊ちやん。何うしてそれを知つてるの？
照雄　だつて何時でも僕が寢かされたあとで、父さまは母さまに叱られてゐるんだもの。それで父さまはへい〳〵詫まつてるよ。
お新　まあ呆れた――ぢや坊つちやんもわたしにさうして？

照雄　あゝ僕ラブしてゐるんだもの。

（とお新に絡みつく。）

お新　あら！　おほゝゝゝほ。

照雄　あはゝゝは。

（この途端村木賢上手から出てきて驚いて立止まる。二人慌て逃げてゆく。）

村木　（見送って）あはゝ、あれが御自慢の息子かい。（と卓上の本へ眼をつけ取上げる）『青年男女の僞らざる告白』大層長い名の本だな、何だつて――（と開いてある所をよむ）「なつかしいふうちやんや。私はおまへが好きですよ。唯なんとなしにおまへが好きですよ。おまへの眼は一種なんとも云へない人を惹き付ける樣な鋭い力をもつてます。殊に三味線を彈く時など手を器械的に動かしながらそつと見る目付や、白く泡立つたビールに脣を當てながら心持上目にして見詰める眼付つたら、たまらなく若い人の心をそゝります。その眼付とおまへの尖つた銀笛の音のやうな調子の高い唄聲とは何うしても忘れられません。あの晩おまへが「おくりませう」と云つて月の淡く照つてゐる新道を小走りに出て來て、手を握つた時の心持！　二つの肩を竝べて歩んだ心持！　あゝなつかしいふうちやんや、私はもう一度かういつておまへを呼ばずにゐられません」あはゝ、これは面白いな。中學生が不見轉に送る手紙だな。

（民子出て來る。）

民子　あら先生、なにを讀んでゐらつしやるの面白さうねえ。

村木　えつ。（と思はず隱す）

民子　あらお隱しなさらずにお見せなさいな。

村木　困つたな。

民子　なにが――

村木　え、どうも少し――

民子　まあ御見せなさいよ。（と村木が仕方なく出すのを手にとつて）あらこんなものを讀んでゐらつしやるの。

村木　えゝ、その一寸研究の爲に――

民子　まあ何の研究の爲に？

村木　青年の心理研究の爲にですよ。中々面白いことが書いてある。（と本を受取り）「白く泡立つたビールに脣を當てながら心持上目にしてみつめる眼付――

民子　そりやなんのこつてす？

村木　若き藝者ふうちやんに與ふるの書といふ一節です。

民子　まあ不味ないことを――

村木　いや面白い？　立派なヒユマン、ドキユメントですよ。これは初戀ですね。

民子　ま、どうしてです。

村木　いや初戀といふものをひどく清淨なものゝやうに世間で普通に云ひますが、あれが最も肉感的なものなんですよ。所謂眼の戀といふ奴です。相手の人格も知らず甚だしいのは名も知らず唯見た眼だけで戀をする。清水の石段で房つきの金扇を擴げたまゝ落す奴です。若い藝者が役者に惚れるやつです。綺麗でありさへすりや誰でもいゝ。だからかういふ文句は一つ造へて印刷しておくとあらゆる若い女へ送る手紙に通用する――

民子　まあ相變らずね、先生は。

村木　だがこの戀にはさして危險性はないが、危いのは理窟のある戀ですよ。眼つきとか鼻つきとか云ふのから一歩進んで心といふ奴です。これが爲には往々に死んだり生きたりすることになる――

民子　あら先生思ひ合つて死んだりするのはありますが、生きたりするのはありませんよ。

村木　いやそんな揚足はとられませんよ。そりや昔はお何、覺悟はよいかといふのだけでしたが、近頃は「二人は生きるんだ」つて堂々と郊外へ新世帶を持つのがありますよ。

民子　まあ――ですが先生、これは冗談として戀愛にそんな生きたり死んだりする力があるのでせうか。

村木　そりやありますな。なんていつても戀愛は人間の感情のうちで最も强烈な力をもつてるものですからな。多少はその爲に純化されて一本氣になりますよ。だから冷靜な理智に明かだと云はれた人が意外な眞似をして世間を驚かします。だがその自分の振舞を肯定して豪さうなことをいふのは何うですか。やつぱり二人の不味らない男と女が廚れあつて離れぬの離れるのといつてるのと同じです。つまり戀愛といふことに關する知識の不足から來るのですね。僕の經驗によると――

民子　あら先生もラブをなすつたことがありますの。

村木　いや、ひどいことをいふ。僕だつて戀をしましたよ。學校時代に、しかも熱烈なロマンチックな奴を。それで美事に失敗しましたよ。それから僕は性慾心理に興味をもつて種々調べてみましたよ。

民子　まあほんとう。

村木　ほんとですとも。その當座の口惜しかつたのつて、自分では人生の不幸は自分一人のやうな氣がしましたが、だがその實、僕の經驗も性慾心理學の上では一個のドキユメントとして半頁しか占めるに足りないことなのでしたよ。

民子　まあ。

村木　つまり、私の經驗はかういふことです。性慾に刺擊されて自分の理想を女の中に見出して女にその通りにならんことを求めて女がそれ以下に下劣だつたといふこと

なのです。

民子　まあ相手は何所のお孃さん。

村木　知れてますよ。大學生で小遣に困まらない奴の相手は。天神下の不見轉ですよ。溝泥臭いねえ。

民子　え？

村木　蓮池が傍にありますさあ。

民子　ま、口が惡い。

村木　それでもその時は世の中はすべて眞暗なものゝやうな氣がしましたよ。世の中は何の光明もないたゞ一つの光のラブさへ――

民子　おほゝ、先生似合つてよ。

村木　いや冗談ぢやない。外から可笑くつたつて本人だけは可笑くないのが戀愛ですよ。だから危險い。

民子　でも先生のやうに考へておゐでゝしたら大丈夫ですよ。

村木　いやさうでもありませんよ。醫者だつて傳染病には罹りますよ。たゞ病氣に關する知識と豫防法を知つてゐるといふだけですよ。だが無知なのは危險い。

民子　では先生もまだ戀愛に對して可能性がおありなさるのね。

村木　いやまだは非道い。これから結婚しようとおもつてゐるのです。

民子　それで對手の方が目付つて。

村木　（笑みて意味ありげに）　さあだん／＼に。

民子　ま、だん／＼にとは可笑しな目付け法ね。霧の中からでも次第に出てくるのですか、王女が――では先生は差づめ御伽話の王子ね。まあ可愛らしい。

村木　いや冗談ぢやありませんよ。結婚は一人では出來ませんからね。相手の意嚮やなにかゞ分るのはだん／＼ですからね。

民子　ですが先生戀愛と結婚とは一つではありますまい。戀愛が無くなつても結婚は續くのでせう。それだから戀愛ばかりで成つた結婚は多く不幸をみるつていふぢやありませんか。

村木　それは所謂眼の戀で結婚するからです。成程それは揮發性を帶びた一時的なものですよ。併しもつと複雜な戀愛には Das Entwickelung が――いやデベロップメントがありますからね。「人は單調に堪へざるべからず、然らずんば一夫一婦の尊とき制度壞れん」と云つた宗教家の言葉は心理學を無視した言葉ですよ。又多くの結婚が不幸をみるのは此デベロップメントが味くいかないからですよ。

民子　（笑みて）　で先生の目付けた對手の方はそのデベロップメントが味くいきさうですか。

村木　いやその前に伺ふが、若しあなたが結婚するとなつたら旨くいきさうですか。

民子　（笑みて）それは對手の方次第——先生は？

村木　僕も對手の人次第——

民子　あら先生はもう對手の方が定つて——いや定りかけてるのぢやありませんか。何誰？

村木　いやそれは。——あはゝ、もう止しませう。

民子　なぜですの。

村木　（笑みて）いや醫者ですから豫防法を知つてますよ。

民子　おほゝ。——お、さう、もう父様が歸つてらつしやる時分だわ。又心配させては惡いから彼方へまゐりませう。また後に——

村木　あゝさうですか。何うぞ御遠慮なく——

（民子入る。）

村木　（見送つて）あゝ、おれが菱田の妻の爲に盡すのも意識下に立派に彼女が活いてゐるのだな。さういへば鈴木はほんとに何所へいつたのだらう——おや、みんな歸つて來たやうだな。

（と立つて椅子を下手の方へ持つてゆき目立たぬやうに腰掛る。水無瀬を先きに妻じゆん子、泉谷どや〳〵出て來り疲勞れたやうに椅子にかける。）

水無瀬　あゝ疲勞れた〳〵。馬鹿々々しい。あんな工場なんかぐる〳〵引張り廻して御自慢ばかりきかされて、これでは晩は大抵な馳走ぢや滿足か出來ないぞ。

じゆん子　ま、あなた何ですよ。——併し御自慢は多過ぎる樣ですね。

泉谷　へゝ、ですがどうも今朝の御酒は結構でしたな。——それに昨晩の御酒も——その私なんぞはたんとも頂戴いたしませんがな、その——

じゆん子　（相手にせず、夫に）あなた一體菱田さんは私共をこゝへ何の爲に招んだのでせう。たゞ自慢がしたい爲なんでせうか。それは餘り蹈みつけた仕方ですね。

水無瀬　さうだとも。二言目には私が〳〵だ。元來昔からあの男は自分のことばかり饒舌つて人のいふことを耳にもかけない男だつたが全然成金を生で見せたやうな男になりやがつた。あの反り工合はどうだ。結句の果に會社の娛樂機關の整つてるのをみてくれつて大蓄音機で浪華節を聽かせるとは何だ。おまけに一箇長々とおしまひまで。馬鹿々々しい。

村木　（前へ出て）皆さん御歸りでしたか。それで今菱田さんは何所にお在です。

泉谷　へえ。そこまで御一緒でしたが——その鷄小舍の方へ。

水無瀨　いや、あの男は何時もあの通り勝手だ。こゝへ茶一つも持たせてよこさない。

じゆん子　いやどうも奥さんが不行屆のやうですね。昨晩なども殆ど顏もお見せなさらない。あゝいふことが賓客に對して失禮だといふことにも御氣づきが無いやうですね。第一口の利きやうも碌には御存知ないやうですね。いくら出過ぎないがいゝといつてもあれでも困りますね。それに菱田さんがほい／＼いつて叱言を仰有らうともなさらないのは見苦しうございますね。

水無瀨　いや菱田の奴め。すつかりあの女に丸められてゐるのだ。いかに上州名物だつて嬶天下を見せつけられるのは癪く。これで空つ風にでも曝されりあ散々だ。

泉谷　(遠くより口をまた出す)　へゝ併しどうもこの年を老りまして若い女にかゝりますとな、どうもさう成りがちで。若い中は(と一寸自分の袖口を引張つてみせ)れそなぞを強請られますとな、すぐ(と肱鐵の眞似をして)これにしてしまふ氣になりますが、年を老りますとなどうもその情が出ましてな、物なぞを強請れましてもな、つい買つてやる氣になります。それに眞に恐れ入りますがな年を老りますとな若い時分と違ひましてな、その——

じゆん子　(わざと相手にせぬをみせるやうに話の先を斷つて背を向け)それにどうも丸でこゝの家には家庭といふものがない樣です。あなた氣が附きましたか。昨晩晩餐の後であの鈴木とかいふ若い男と奥さんとばかり話をしてゐて、菱田さんは淋しさうに背を向けて一人で新聞をよんでるとは何うです。それにあの娘は何うです。客待遇もしないで窓際で刺繡を始めるなんて。それにあの小間使ひまで仕附がしてないから無作法で——

水無瀨　いや併しあいつは別嬪だ。

じゆん子　あなた、別嬪だから何うしたといふのです。小間使ひが別嬪だつて何うするんです。

水無瀨　いや何うもしやしない。たゞ別嬪だつていつた丈けだ。

泉谷　いやこちらは却々別嬪揃ひで、奥樣も御孃さまもそれにあの小間使ひも一寸凹み顏で愛くるしいところがあつて——

じゆん子　(憤激して)　あんな女が何處が別嬪です。あなた、そんなことをいつて見つともないと思はないんですか。照雄にでもきかれたらどうします。少し謹んでいただきませう。——それからどうも近頃の婦人の傾向はわたしは感心しませんね。つまりこんな家庭のありさまをみるのも近頃の智育ばかり發達させた影響です。こゝの奥さんなぞが愛情も持たずに金持に片付きたがる婦人達の好例です。この頃の娘達は試に嫁にいく氣でゐます。

始めから離縁する氣で嫁にいきます。これといふのも智育一點張りで德育といふことが閑却されてゐるからです。

水無瀨　いや婚姻は民法上から見ると一種の職業のやうなものだ。妻はこれによつて生活を得るのだからな。

泉谷　なるほど婚禮は職業、これは理詰めですな。

じゆん子　あなた何です。我々の結婚をさういふ風に解釋なさるのですか。わたしはあなたから生活をえようとはおもひませんでしたよ。わたしは立派に自活していけたのです。

水無瀨　いや奥さん。あなたは別だよ。――第一これはわしの意見ぢやない。

じゆん子　さうでせう。（と村木に向ひ）わたくしの夫なぞは結婚以前には大分不品行もあつたやうですが、わたくしと一緒になつてからはさういふことが絶えて無くなりました。わたくしは自分と夫の趣味に於て大分の相違があるのを發見して極力同化することに努めましたので、今日では全く私を信じて、私共夫婦の間は先づ理想的にまゐつてをります。

村木　いやそれは結構なことで――

じゆん子　あの鹿島さん初め二三の婦人の主唱の下に議會初まつて以來何萬といふ連署者を募つては請願する姦淫に關する刑法改正ですね。いつもまじめに取扱はれないのも御氣の毒ですが、一つは法を以て夫を取締らうとするのはどうかとおもひます。妻に夫を化する力がないといふことは情けないことです。

村木　いや、そりや全くさうですな。第一あれが可決になつたら、御良人の樣なお堅い方ばかりないから、多くの連署者の御亭主や親は大概抵觸して上げられて、國難ここにみて國民兵の大動員を監獄で行つたやうになりますからな。いつそ刑法改正に骨を折るより女子解放に力を盡した方がいゝでせう。妻君が從順にきまつてゐるから亭主がいゝ氣になつて道樂をするので、妻君が亭主同樣解放されたとありあ、大面をして妻君を虐げてゐるやうな奴は大抵恐縮して妻君一人をまもるやうになりませうよ。

じゆん子　いや私はまた女子解放なぞといふ問題には不贊成です。女は女らしくありたいのです。

村木　はあ、それで奥さんは始終御化粧をなすつてゐらつしやるのですね。

じゆん子　いや全く女が身だしなみを忘れて構はなくしてゐる方を友人なぞにも見受けますが、決して見よいものではありません。わたくしはやはり女は女らしくありたい主義です。だから近頃の新らしい女の覺醒なぞといふ

ことは全く反對でございます。あれは淸い正當な愛に飢ゑた結果だとおもひます。

村木　いや、併しあれはまだ若いからいゝでせう。この頃西洋で大分問題になつてる四十女の覺醒ときたらたまりませんね。どうせやるなら若い中にやらしといたら人助です。裾短かなスカートを捨て高利貸のやうな鞄や巖丈な握太な洋傘を掀つて、煙り返つた世話女房が厚化粧を施して立つたら凄じいものでせうからな。ま、若い女の覺醒なぞ、綺麗事で結構です。息子の道樂なみに打棄つといたらいゝでせう。

泉谷　へゝえ面白うごすな、西洋には新らしい古い女が――全くな、このどうも年を老りますとな、若い時分のやうな愼みがなくあけすけになりますからな、これが迷ひ出したら凄うごすな。私の存じてをります御婦人にな。ある若い役者を可愛がりましてな、人前も憚りませんでな、桟敷でお取り膳なぞがはじまります。それで御素人衆で旦那樣もおありですがな。どうも却てそれが商賣の役者の方がはづかしがります位でな。

じゆん子　（聽いてゐられないといふやうな顏をして）あなた、あちらへまゐりませう。

水無瀨　うん。

（と二人は下手の方へ來て水無瀨は村木のもつてきた椅子へかける。）

泉谷　（村木一人を相手にしてしやべりつゞける）どうもこの色戀のことゝいふものは全く別で、學問なぞ立派におありなさる方ほど妙なことをなさいまして、私ども無學なものにはとんと分りかねますがな。ある學者さんでそれはえらい方でございますがな。家へ世話をしておいでの田舍出の女學生にはまりましてな、それが却々手練だとみえましてな、遂々奧さんも子供衆も捨てましてな、それと一緒になるやうなことになりましてな。元より山出しでれその好みなぞ丸で分らない所へ着こなしが拙いと來て、それででこ〳〵な女優巻にしましてな毛をちゞらせましてな。私なぞはこれを（と親指と人差指とで輪を造らへ）こちらへ戴いても御免でございますがな。これを連ましてな白晝つながつて歩いてをります。とんと私なぞがみましては鈴木主水でございますが、それが豪いのださうで感心なすつてゐらつしやる方もあります。どうも私なぞには分りかねます。どうも妙なものでな。えゝ私なぞも女では今日まで隨分無駄な金も遣ひましてな。甚だ恐れ入りましたことを申すやうでございますが、二十二からはじめましてな一昨年までに丁度三十年。いろ〳〵馬鹿もいたしましたが一昨年ふと感ずる所がございましてな、イエス樣の御

救ひを戴きましてな。

村木　はあ、ですが君は始終酒の氣を絶してゐないやうですがね。

泉谷　へゝ。それはな御宗旨に入りますときな。酒が飲めない様では厭だと申しましたら牧師様がなに飲んでもよろしいといふことでな。

村木　はあ、ぢや女道樂を止める爲ですか。

泉谷　いやどうもこの道樂もな金が費ると申しても、女は知れたものでございますがな。この間も十日ばかりに一寸二千五百圓！

村木　はゝあ。

泉谷　久しくやりませんでして、一寸引つかゝりますと翌日から追敷々々で、唯打築るやうなもので、いや寄附とは寄附と讀むとある方が申しましたが成程名言――

じゆん子　（このお喋舌に堪り兼ねたやうに先刻から幾度も此方を睨んでゐたが、その甲斐がないので到頭度外れな聲で）あなた。

水無瀨　（葉卷を吸つてゐたが吃驚して）何だい。

じゆん子　わたしは何うも不快でたまりません。いかに氣が附かないといつて、私共も誰もかも同じやうに待遇してゐるのは餘りです。ことに私は婦人です、先刻から閉苦しい思ひをしてをらなければならん理由は少しもありません。あなたから一つ菱田さんに御話しをして下さい。たゞ御馳走さへしさへすればいゝとおもつてゐるのは最も侮辱した話です。ことに奥さんとあの若い男との關係なんか見てゐられないぢやありませんか。私は昨晩照雄に心付かせまいと、どれほどはら／＼いたしたか知れません。あなた是非菱田さんに忠告をしておやりなさい。

水無瀨　うん、だが、いくら菱田が甘いつたつて證據のないことを云ひ出して怒られては取りかへしがつかんからな。それに職掌柄からうつかりした事はいはれんからな。

じゆん子　あなたはま、臆病ですね。なにもそんなところに職掌柄はいりませんよ。たゞ友人として注意をしろと云ふだけなのですよ。それともあなた菱田さんが恐いんですか。

水無瀨　なんの馬鹿な、あんな男。それに第一贅澤すぎるからな。さう大した富豪といふのでもないのに、一流の金持面をして下らん骨董なぞ集めて馬鹿な金を費つてゐる。同じ費ふならもつと有效な費ひやうがいくらもある。

じゆん子　ぢや、ちと仰しやつておやんなさいよ。

水無瀨　うん、云ふよ。やつ來たな。――いや違ふ。肺病先生だ。今頃起きてきたんだな。

（山口守衞今起きたといふ風で出てくる。）
山口　（やつぱり細い聲を出して）おゝ皆さん、此方でしたか。昨晩は失禮しました。（と立つてるじゆん子の側へゆき）あの菱田さんは何方においでゝ？
じゆん子　（恐いものゝ側を離れるやうに身を退き）存じませんよ。（と後を向いて口をハンケチで押へる）
山口　（仕方なく水無瀨の傍へゆき）えゝ、あなた御存知では？
水無瀨　（椅子を離れて）いやわしも知らん。
山口　（接ぎ穗もなささうに獨りごとの樣に）菱田さんはほんとに何所へ行つたのかな。
泉谷　（口を出し）えゝ、菱田さまは今鷄小屋の方でゐらつしやいますよ。
山口　（話の糸口を得たので喜んで泉谷の側へ來る）あゝ、さうでしたか。――あんたも今朝モスリン會社の方を御見物でしたかな。わしは寢坊しましてな――
泉谷　（餘り近く來られたので困り、もぢ〳〵して）は、それで御見えにならなかつたので――
山口　何うも昨晩はどうも少とも睡れませんでな――
泉谷　（上の空で）は、さやうで――一寸失禮。煙草を一服。と立上り下手へ來て、水無瀨の火をかり一服吸ひつけ、後ろの方へゆき）あゝ、どうも晴々としたいゝ景色だ、どうもよく晴れたな。あれ鳥が飛んでる――
山口　（村木をみて）あんたは？
村木　こゝへ出入してゐる醫者ですよ。
山口　あ、さやうか、私は昨晩はな一睡もなりませんでしてな――
村木　はあ、御體の工合でも惡かつたので――
山口　いゝや、あの離れ座敷は久しく使はんと見えましてな、それは〳〵蚤が居ましてな夜どほしちくり〳〵。どうにも寢つけません。
村木　あゝそれで御寢みになれなかつたんですか。そんなら今夜から充分掃除をさせて蚤取粉を充分に撒いて――
山口　いやそれ計りではありません。それからな犬が啼きたてるのでな。
村木　なるほど、あの離れの傍に犬小舍がある。
山口　（情けなさうな聲を出して）いやもう七八疋の犬が漸く寢つかうとすると耳許で猜々々又やつと寢つかうとすると猜々々と丸で寢つかせまいとして啼くやうなので――
村木　はあ、それは困りましたな。まさか撲殺も出來ないし。
山口　いやそればかりならいゝが――
村木　おやまだあるんですか。

山口　え〻、散々惱まされてやつと寢られるなと思ひますと、今度は鷄が時を作るので、一羽濟むとまた一羽、またその一羽が濟むとまた一羽、一羽づゝゆる〳〵とやるのが幾羽ゐるのやら、何時までいつても果しがつかん。鳴き止むのを待つてゐましたら、到頭夜が明けてしまひました。
村木　いやそれは御氣の毒でしたな。
山口　いやもう昨日から火事ぢやとおもつてびつくりし、その次は油煙で苦しめられ夜は蚤に犬に鷄、よう身體が續きません。これでは轉地療養どころではありません。この分では迚も辛抱がなりません。
村木　はあ、ではもう御歸りで——
山口　いやまあ折角上つたものでもあるし、菱田さんの御親切に對しても當分成りがたい辛抱もしませうと存じてゐます。
村木　（顏を見て）はあ、さやうで——
山口　だがもうあの離ればかりはどうもならん。菱田さんに御願ひして代へて戴きませう。私は病人のことでもあるし——
村木　なるほどな。
じゆん子　（先刻から山口の方を流目にみてゐたが、水無瀨に小聲で）あなた、あの病人が私共の部屋の方へまゐりたいつていつてますよ。菱田さんにさういつて承知させてはいけませんよ。
水無瀨　うん、勿論だとも。いや菱田の放任主義もこゝまで達しれば極點だ。私が昨日あれほどさう云つたのにうむ〳〵と承知して置きながら平氣で食事も一緒にさせて忌な思ひをさせをる。もう我慢がならん。お、今度來たのこそ。菱田だな。
（菱田脊廣服に中折帽、外出のまゝの服裝で出てくる。）
菱田　いや、皆さん、失禮をしました。その、留守中にまた狐がやつて來をつて、金網を破して中へ入つて、わしの一等大事にしてをつた名古屋コーチンの良い奴を三羽もしてやりをつたので——その繕ひやなにかで遂失禮をしました、併しもうすつかり設備も整ひましたからな、今夜中には彼奴、きつと殺つけてしまひます。
水無瀨　ふん、また狐かい。君の苦勞はそればかりかい。もう少し外のことに注意を向けてもらひたいね。
菱田　いや併し彼奴を殺つてしまはんと、わしの銃獵の名譽に關するからな。
水無瀨　ふん、それで外の名譽は構はんのかい。
菱田　（泉谷を見付け）や、泉谷、何したい。先刻の工場の工合は——

泉谷　いやどうも至れり盡せりでございますな。あんな大きな娯樂場までございまして――（と時計を出してみて）あゝ、もうそろ〳〵時間だ。私はもう御暇を――（と急に改まつた容を出して）へい、何うも一寸上りませうと存じて色々と御厄介に相成りまして――

菱田　まあ、君、いゝぢやないか。

泉谷　いえ併し東京にもいろ〳〵仕殘しました用事もございますので――

菱田　さうかい。だつて君が譽めたあの口の酒もまだ殘つてるぢやないか。あれをすつかりにしてから歸つたらいいだらう。

泉谷　併しどうも恐縮で――

菱田　だが用事があるのでは強ひて止められないね。

泉谷　いえ、尤も私共の用事ですから有つて無いやうなもので。

菱田　ぢやあ、ま、ゆつくりして行くがいゝぢやないか。

泉谷　へゝ、どうも恐縮でな。

菱田　おゝ山口さん。大相ごゆつくりでしたね。昨晩はよく寢られたと見えますね。

山口　いやどういたしまして一睡もなりませんでした。

菱田　はゝあ、それでは寐所が變つた故ですな。何うです、留守中に鷄小舍やなにか見て下すつたか。一寸種類が揃つてる積りですが――

山口　いやまだ拜見はしませんが、啼聲だけはいろ〳〵伺ひました。

菱田　（早合點して）ほう啼聲で種類が分りますか。それは大黒人ですな。では一つ是非御覽を。

山口　いやその私はな。その啼聲につきましてな、少々御願ひが――

菱田　へえ、何ですか。

（じゆん子水無瀨にそれつと目交ばせする。水無瀨あわてゝ横合より。）

水無瀨　おい、君、（といつたが一寸あとに塞り）一體君はなんだつてこんな所へ住宅を建てたんだい。私は昨日からいろ〳〵見てゐるのに何所に一ついゝ所もないぢやないか。

菱田　いやさういつたものでもない。躑躅が咲くと天下の奇觀だよ。

水無瀨　だつて今は咲いてゐないぢやないか。それに君が自慢してゐた山中の湖水の俤は何所にあるのだ。第一後ろがかけ拂ひになつて赤城まで見えてゐて何所が幽翠なのだ。

菱田　いや開墾が始まつたので、かうなつたので以前は隨分大木が茂り合つてゐて中々幽翠だつたよ。

水無瀨　だつて今さうでなきや仕方がないぢやないか。それに夏はさぞ暑さうだな。

菱田　いや夏は避暑にゆくからいゝよ。

水無瀨　どうも呆れたな。

菱田　でもこれでも中々いゝ所があるよ。これから寒くなると、夜の引あけ頃に鴨がいく羽となく遠くから遊びにきて下りる。それを枯葦の間へ田舟を出してゐて待受けてゐてドンとやる――それは愉快だよ。

水無瀨　ふん、鴨も愉快だらうよ。――しかし寒くなつたら、それこそ名物の空つ風で此所らは吹き曝しだから溜るまい。何の取りどころもない所だ。こんな所へ別莊を立てるなんて馬鹿さの數が知れないな。

村木　（見兼ねたやうに進みいでて）いや、さうでもありませんよ。上州は醫學上からも考古學上からも忽がせにならん土地ですよ。

水無瀨　ふん、なんで醫學上に關係のある土地だい。

村木　癩病が澤山ありますよ。

來客一同　（呆れて）へゝえ。

村木　それからかういふものがあるので（とポッケットから朝鮮土器の片(かけら)を出し）いま拾つて來たので。

泉谷　へゝえ、それはなんで。

村木　朝鮮土器の片(かけら)ですよ。二千年前の土器が大正の地上に落ちてゐることがある。どうです、味(つま)らぬあら拾ひより、かういふものを拾つたらいかゞで、少くとも悠久な感じが起つてこせ〳〵した了見は無くなりますよ。

泉谷　へゝえ、そんなにざらに昔のものが今落ちてをりますので。

村木　いやそんなに落ちてゐませんが、注意がしつかりしてくると歩いてゝ分るんですよ。これを表面採集といふんです。室內採集といふのは昨日水無瀨さんがやつた奴、尤も專門家はやりません。――菱田さん、實は私はさつきから鈴木君を待受けてゐるのですが、あなたは何所にゐるか御存知ありませんか？

菱田　いや先刻、彼方の森の方で後ろ影をみかけたと思つたが――

村木　あ、さうですか。では僕は一寸鈴木君を診たいとおもひますから失禮します。皆さん、さやうなら。

（と入る。）

水無瀨　なんだ彼奴。無作法な生意氣な奴だな。どうも。

菱田　いや君、勘忍してくれ給へ。彼の男はまことに口が惡くつて。

水無瀨　いや怪からん。自分の出入先の來客に對して、無禮千萬な――

泉谷　いや、旦那様、私はさつきから伺はうと存じてをりま

したのですが、この沼の名物、例の蓴菜を昨晩あたり頂戴が出來ることゝ存じてをりましたが、あれは一寸酒の肴におつなもので——

菱田　いや、その蓴菜はみんな腐つてしまつたよ。

泉谷　へゝえ。

菱田　どうもこのモスリンの毒水が流れこむので、水がすつかりいけなくなつて、あの通り濁つてしまつたのさ。それでこゝでは鯉も鮒もとれないよ。とれても泥くさくつて喰へないよ。

泉谷　へゝえ、それは全く御力落しですな。

山口　あゝ、それではあの埒が屢々と出來てゐて、家鴨は二三羽しかゐないのも、あれも毒水で死んでしまつたのですか。

菱田　いゝやあれは違ひます。

水無瀨　では始めつから二三羽しか飼はなかつたのかい。

菱田　いや百羽から飼つてゐた。

水無瀨　ふん、それが何うして二三羽になつた。みんな、喰つたのか？

菱田　馬鹿をいつてる。あれは生餌に放した田螺が泥の中で腐つたのを喰べたので片端から死んだのだ。はじめは何の爲に死ぬのだか分らなくつて家鴨の傳染病ぢやないかのなんのといろ〳〵心配したが、大方死んでから漸く分つた。

水無瀨　どうもほんとに呆れたな。

菱田　あはゝ、併しいゝ經驗をしたよ。

水無瀨　ふん、百羽も殺しておいていゝ經驗もないもんだ。一體何だつてあんな所へモスリンが建つたんだ。少とも抗議を申込まなかつたのか。

菱田　いや抗議どころか、あすこへ建てろと主張したのは重に私だよ。こんなことにならうとは思はなかつたからね。

水無瀨　いや、實に何うも開いた口が塞らぬといふのは君のことだ。

じゆん子　いや、菱田さん、そんなことは何うでもようござ いますがね。どうも御宅は濕氣があるやうですね。

菱田　へえ濕氣？

じゆん子　えゝ、濕氣がありますよ。——蒲團でわかります。

菱田　へえ、わしは少しも氣が附かなかつた。

水無瀨　ふん今にリユマチスで身體が利かなくなつてから分るよ。

泉谷　それは大變でございますな。

山口　ではわしのやうな體のものにも惡いでせうな。

じゆん子　えゝ、最も惡うござんすね。一體水の滸の家は不

健康です。殊に此沼のやうに濁つてゐては定めし有害だらうとおもひます。わたしはかういふ話をきゝました。信州邊のある沼で名前は忘れましたが、その附近へある西洋人の家族が家を建てゝ住居つてゐましたが、先刻の家鴨のやうに一人一人順々に病氣になつて斃れてしまつたので、始めはその原因がちつとも分らなかつたのですが、漸くその沼の瘴氣に當てられたのだと分つてその邸はその後住人もなく、幽靈屋敷と呼ばれて一軒ぽつゝりとその沼の際に殘つてゐるさうです。

泉谷　へえ、恐ろしいものでございますな。

山口　奥さん、それは本眞ですか。

じゆん子　私は虛僞は申しません。

菱田　あはゝ、奥さんおどかしちやいけませんよ。私はこゝへ住居つて五年になるがこの通り達者ですよ。

水無瀨　いや妻がいふのは脅しぢやないよ。今に次第に身體へ利いてくる。それにこんな地盤がしつかりしてゐない所へ、あんな重量のある煉瓦家屋を——

菱田　あはゝ、やもうそんな冗談は澤山々々。分つた〳〵。

（こゝへ慌しさうに下男平助入り來り菱田をみて。）

平助　旦那樣、また來たやうです。

菱田　なに又來た。よし諸君一寸失禮。

（と行かうとする。）

水無瀨　おい、君まだ話があるのだよ。

山口　あ、わしも菱田さんに少し——

菱田　いや今また狐が來たので一寸急ぎます。後で〳〵。さ平助。

（と急いで平助を連れて出てゆく。）

水無瀨　なんだ。あの男はまた我々を置去りにしをつて——

じゆん子　あなた、われ〳〵の待遇のことについて何もいひ出さなかつたのですね。

水無瀨　だつていふ暇が無かつたぢやないか。

じゆん子　いや、あなたが下らんことをいひ出して——

水無瀨　ま、いゝさ。私達もあつちへ行かうよ。

じゆん子　えゝ、さうしませう。

（と入る。）

泉谷　（山口に）えゝ山口さん、私も一寸失禮を——

山口　あ、彼方へ御出ですか。では私も御一緒に——

泉谷　いや、私は一寸その——

（と逃げる樣に入る。）

山口　いや、ま御待ちなさい。御一緒に——あれもう往つてしまつた。

（とこれも入る。）

（奥にて。）

鈴木　先生私を何所へ引張つて行くんです。
村木　ま、いゝから一寸此方へ來たまへ。
鈴木　そりや行きますよ。だからさう引張らずに下さい。
鈴木　引張らないよ。逃げさいしなきや――
鈴木　なんで逃げる要があります。立派に行きますよ。
（と問答しながら、村木と鈴木出で來る。）
村木　さ、まあそこへ掛け給へ。
鈴木　（椅子へ腰を下して）は、掛けました。何の用です。
村木　（椅子へ身を倚せかけ）いや僕は自分の職掌上君にいはねばならないことがあるんだよ。
鈴木　だから何の用です。
村木　（一寸居住居をなほして）君、すぐ荷造らへをしてこゝを發つてくれ給へ。
鈴木　（怪訝なかほをして）へえ、荷造をして――
村木　さう、東京へ。――（と時計を出してみて）最終の上り列車は一時間内に出る。
鈴木　なんであなたがそんなことを強ひる權利があるのです。
村木　いや僕は醫者で、君の健康狀態が是非ともさうしなくつてはならないから勸めるのさ。
鈴木　わたしの健康狀態――
村木　さうさ、君の身體より精神上の健康がね。僕はどうも君がみす〳〵重態におちいつて行くのを見てゐる譯にはいかないよ。ま、何うか僕の忠告をきいてこの場を避けてくれ給へ。一刻遲くつても手遲れだ。ぐつと病勢が募つてるやうだ。さ、どうだ君？
鈴木　（深く決する處あるやうに唇を嚙んで）いやです、私は。こゝは私の爲には苦しい煉獄であると同時に、また懷しい天國です。何うしても離れる譯にはいきません。
村木　何をいつてるのだ。少し眞面目な考へになつてくれなくつては困るぢやないか。
鈴木　なにがです。私はいつも眞面目です。
村木　だつてあの婦人には立派な夫があるよ。
鈴木　それがどうしたのです。夫があれば戀してはならないんですか。戀はそんな不自由なものではありません。私は寧ろあの婦人にあの夫があるから戀したのです。あゝいふ實利の外には何もしらない、しかも年を老つた、趣味に於ても何に於いても一切相違してゐる不釣合な夫をもつて、不幸な月日を送つてゐるのが見てゐられなかつたのです。しかも纎細い體であの物柔しい手荒く扱つたら碎れさうな情を持ちながら、何事も運命と觀じて諦めてゐる姿が無慘です。よくいふことだが私のは同情が戀となつたのです。
村木　では結局どうしようといふのだい。

鈴木　どうしよう？　どうしようなぞと結局を考へて戀はしません。
村木　でも君、夫婦になりたいとか――
鈴木　夫婦？　馬鹿な、そんな形式上のことなんか。私の戀といふのはもつと自由な拘束される所のないものです。二人の心が一つに結ばれてゐれば、相手の婦人に夫があらうと構ひません。
村木（笑みて）ふん、つまり砕いていへば間夫仕立でいかうといふんだね。女は旦那に世話をさせて――
鈴木（憤慨して）何ですつて――
村木　ま、理窟をつけるのとつけないの相違で、人間は下卑助だ。落ちる所はそこだね。誰しもやつてみたい粹な役さね。だが僕はいやだな。若し眞にあの婦人を愛するといふのなら、正々堂々とやつたら何うだ。これが君があの婦人の氣の毒な境遇を見るに忍びず、堂々と菱田に迫つて別れさせ立派に君が娶るといふのなら、僕も隨分次第によつては骨を折つて媒妁の勞を取る位な茶氣はある男だが、今の口吻だとさういふ決心も見えないやうだ。――さうだ。さつき君はあの婦人を可哀想だといつたね。君はどういふ氣でゐるか知れないが、もし君の目的通りにいつたとしたらあの婦人は何うなるね。これが娘だといふのならまだしも恢復の仕樣もある、世間へ立つてゆく術もあるが、あの婦人は夫がある。夫があつてといふことになると、もう一生廢れものとなつてしまふんだよ。つまり君の一時の玩弄となつて一生を過つてしまふのだ。ぢや餘り可哀想ぢやないか。
鈴木　いや私は決して玩弄になんぞはしない。
村木　ぢや君が東京で關係のあつたあの令孃はどうしたい。もう捨てゝしまつたぢやないか。
鈴木（驚いて）あなたはあの人を知つてたのですか。
村木　あゝ、それは醫者は方々歩くから知つてるよ。あの人は容貌は惡いが心立は實にいゝものだ。それを君は捨てるぢやないか。さ、もうさう罪を作るのはやめて僕のいふことを聽いてこゝを譲つてくれ給へ。
鈴木（下を向いてぢつと）いやです。私は何うしてもいやです。――あの東京で知合になつた女は二人の間に愛が無くなつたから別れたまでゝす。少しも疚しい所はない。
村木　で君はまたこゝでその同じ事を繰りかへさうとするのかい。それでは餘りひどいだらう。だから何卒直ぐこゝを譲つてくれ給へ。
鈴木　いや私は何もあなたにそんな拘束をうける譯はありません。
村木　さ、だから僕は拘束しようとはいはない。君の情に

想へてるのだ。

鈴木　（つと立上つて）　いやもう私はあなたと御話するのは御免蒙ります。私には私の考があるのですから。――失敬します。

（と行きかける。）

村木　ま、待ち給へ。ぢやあ、君は何うしてもいやといふのかい。

鈴木　（昂然と）　えゝ然うです。それでいけなかつたらどうでもして下さい。私には私の信ずる所があるのですから――

（と足早に入る。）

村木　ま、君、そんな不貞腐れをいつたつて――あ、行つてしまつた。併し彼の男が云ふことを聴かないとなると困つたな。菱田にいつたつて信用のない己のいふことを本氣にする筈もない。却つて惡意にとるだらうし。といつてあの妻君はあの通りののほゝんだし。注意した所がどの程度まで氣がつくか。――その中人の惡い奴等は澤山見張つてるし。――あ、愈昨夜考へといた最後の手段かな。だが少し滑稽だな――

（こゝへ爲子出て來る。）

爲子　おや先生――

村木　あ、奥さんでしたか。

爲子　あの鈴木さんはもう今日は御診察下すつたので？

村木　はあ、今一寸診ました。

爲子　いかゞでございました。もう案じる所はございませんか。

村木　（考へてるやうに）　さ、それですがね。

爲子　（心配相に）　ぢやまたいけない所が出來ましたので――

村木　いや、さういふ譯でもないのですがね。どうも昨日あの卒倒したのですね。あれが――

爲子　（熱心に）　えゝ、〳〵。

村木　あれがその――どうもちと御婦人の前では言ひ憎いことなのですがね。

爲子　（熱心に）　はあ、〳〵。

村木　どうも癲癇性の發作らしいので――

爲子　まあ。

村木　それがその甚だ申憎いことなのですがな、男女間のある不健康狀態から起るのと同じ兆候なので、始めはやはり神經衰弱と同じ症狀で、それが少し激しくなると痙攣を起して發作がくるので誘因は異性に對する感激で――つまり異性に對して激情を感じさせる機會があると何うもまづいので――あの狀態が續いてだん〳〵烈しくなると往々生命に――いやまさか死ぬやうなこともありま

すまいがね。

爲子　（ひどく驚いて）まあそれは大變でございますねえ。

村木　しかし油斷はならないので、まだ心臟も本眞でないし――奥さん、あなたは菱田さんの御指圖で鈴木君を始終御介抱をなさつておいでゝすが、どうもこの御婦人の柔しい介抱は男の心を激動させるもので、少とも差閊へはないやうなものでありますけれども、今の場合少し何うも――

爲子　はあ、〳〵。

村木　で、ま、出來得るならば、今病後で非常に感じ易くなつてゐるのでなるたけ精神を激動させるやうな談話やなにかは避けたいので――といつて今本人にそれを話せば神經を起すのは知れてゐますから、堅く祕密で一つ奥さんの御胸一つで――

爲子　（もうはら〳〵して）はあ、〳〵。

村木　いや甚だ申憎いことでしたけれども、申上げませんと何うも自分の職務が濟みませんので――

爲子　いえ、何ういたしまして。私も出來るだけ注意しまして――

村木　いやどうぞさう願へれば結構で――や、失禮しました。では僕はまた晩ほど――

（と出てゆく。）

爲子　まあ飛んだことになつたわ。まあ何したらいゝんだらう。

（と椅子へ考へこむ。鈴木四邊を窺ひながら出る。）

鈴木　奥さん。

爲子　（びつくりして）あゝ鈴木さん。

鈴木　今こゝにゐたのは村木さんですね。（とぢつとみて）村木さんはあなたになにかいひましたか。私の事で？

爲子　いゝえ、何にも――たゞよく看護してあげてくれつていふことでしたの。

鈴木　（不審さうに）あゝさうでしたか。

爲子　（向き直つて聲を改め）ねえ、鈴木さん。あなた昨日私はあなたの心友になるからその代り私の云ふことをよく聽くのですよといつたら、あなたは誓つて承知したでしよ。（鈴木うなづく）だからこれからはもう、たゞ私の云ふ通りになるのですよ。

鈴木　（熱して椅子へ手をかけ）元よりです。わたしはあなたの爲にはきつと命も惜みません。あなたが昔話にある樣に獅子の窟へはいれといつたつて――

爲子　（忙てゝ）あ、それがいけない。

鈴木　え、なにがいけないのです。どこか私に惡い所がありましたか？　それをいつて下さい。直します。それを――

爲子　（身を揉んで）　あ、あれまたそんなに――あ、困つた。（と立上る）

鈴木　（縋るやうに）　え、どうしました。私がいつたことが悪かつたのですか。勘忍して下さい。勘忍して下さい。わたしはあなたにそんな風にいはれると此胸が掻きむしられるやうで――あゝ。

爲子　（はら〳〵して）　あ、そんなにじれては――あ、何うしよう――お、さう〳〵、あなたは何でも私のいふことを聽くと誓つたのですよ。靜かに〳〵心を落ちつけて――

鈴木　はあ、〳〵。（と悄くなる）

爲子　（がつかりしたやうに）　まあ、よかつた。ほんとにあなたはまあ、どうしてさうじれるのでせう。どうかもうじれずに下さい。

鈴木　はい〳〵、ですが何うして私がさうじれてはいけないので――

爲子　ね、あなた、さうじれると御身體に障りますよ。だからどうか氣を落付けて――

鈴木　（また熱して）　えつ、それほどまでに私を、こんな私を。それだから私は――どうも有難う〳〵。

（と爲子の手を取らうとする。爲子飛退いて。）

爲子　（情けなさう）　あ、またいけない、またいけない。

鈴木　（頭を押へて）　あゝ奥さん、あなたはそんなにじらすやうな――あなたは私を弄ぶのですか。あ、やつぱり私は弄ばれてゐたのだ〳〵。

（と沈みこむ。爲子思はず。）

爲子　ま何うしたのです。

（と立寄る。鈴木その手を摑んで。）

鈴木　奥さん。わたしは〳〵あなたを愛してゐます。

（と突然抱へてキスしようとする。）

爲子　え、ま、あなたは！

（この途端水無瀨夫婦照雄をつれて出てきて、この體を見て驚く。じゆん子は手早く照雄にみせまいと身體で閫ふ。爲子も驚き手を振り放してにげ去る。引違へて菱田急ぎ足で入り來り、この體をみて。）

菱田　おや、いま驅けていつたのは爲子ぢやないか。何うしたのだ。

鈴木　いや、なんでもありません。

（とこれも逃げる樣に去る。）

菱田　（見送り水無瀨をみて）　お、水無瀨君どうしたのだ。

水無瀨　（怪しげに）　いや何でもないよ。

菱田　さうか。（と附穗もなく前に忘れておいた帽子を取上げ）一寸失禮――

（とつか〳〵と入る。）

じゅん子　たうとう氣が附きましたね。

水無瀬　ふん、奴、漸く氣がついた。

（と二人苦笑する。衿の下より照雄そつと樣子をうかがふ。）

――幕――

第三幕

主人が第一幕に自慢したミッション、スタイルの客室。正面はバルコニーへの出口になつてゐて上手に扉の出入二つ。奥のは庭への出口、舞臺前のは他の室への通路。下手にも腰板に嵌め込んで分らぬやうに扉が出來てゐる。マンテルピース、物置臺、大凡物の置かれる上には佛像、面樂器等の骨董品が所狭きまでに並べてある。又壁に揭げてある額は一二面の水彩畫を除くの外、すべて古い物賣やの看板、奉納額なぞ扁額軌範の挿畫にありさうなのがずらりと揭げてある。中央に卓子並に椅子。下手へよせて喫煙卓、安樂椅子なぞがある。舞臺下手前の壁に、序幕の幕切れに衆客を驚かした大鰐口が一條の紐を垂れて寂然として聲を收めてゐる。後に切れる仕掛。室の中央にはシャンデリエが光を放つてゐる。バルコニーの外は月夜にて沼を見晴らす。

幕明くと水無瀬夫婦、上手の室から後を顧みながら入つてくる。

じゅん子　あなた。到頭ほんとに氣が附いたやうですね。あの食事の間もほとんど默然でゐて食事が濟むと不意と立上つて出て行つた樣子なぞは餘程變でしたよ。

水無瀬　うん、己も樣子が可笑いから態と何か話しかけて見ても碌な返事もしをらん。そして何かに氣を取られてそは〳〵してゐる樣子がない――第一自分の妻の方を見んのが不思議だ。それからあの若い男の方も――

じゅん子　あれは見るのが辛くつて態と避けてゐるのですよ。それに心柄ですが、あの奥さんの窶れ加減も氣の毒ですねえ。併しあの若い男はまあじろり〳〵と奥さんの顏を見ては考へこんでる樣子はほんとに氣味が惡いやうですね。

水無瀬　うん、だが彼奴、あんまりおれが見るもんだから氣が差したとみえて不意に何所かへ行つてしまつた。

じゅん子　併しまあ、これから何うなりませう。あゝして菱田さんが氣が附いたとしてみると――

水無瀬　ふゝん、いづれ一騷動あるだらう。併し、菱田の奴が生地がないから泣寢入位なところがしまひの落かも知れないな。――何しろいい年をしてあんな浮氣つぽい若い女なんか妻にするからこんな事になるのだ――

じゅん子　いやそれにしても、奥さんといふ人も隨分ひどい人ですね。婦人雜誌の口繪なんかに富豪菱田氏夫人ため子なんて出てゐる所をみると、蟲も殺さないやうな顏をして濟してゐますが、ほんとに分らないものですね。

水無瀨　ふん、婦人雜誌なぞで氣取つて寫つてゐる奴等の裏をみれば大概そんなものだ。人が面であてになりあ、菱田なんざあ何所へ出しても立派な富豪面だが、あの間拔さ加減は態はない。何うしてあんな奴に金が出來たかと思ふとをかしい。――おや誰か來たやうだな。

（上手の室から泉谷、山口これも後を顧みながらやゝ忙て氣味に入り來る。）

泉谷　いや、これにおゐでゝございましたか。何うも唯今菱田さまが妙な様子で。

水無瀨　え？　妙な様子つて――

泉谷　今私達も御食事を頂戴いたして、あちらの御部屋で休息してをりますとな、菱田さまがつか〳〵と入つていらしつて突然御居間の方へ御入りになつてな――

山口　私達が居るのも氣が附かないやうにな――

泉谷　え、さやうで、宛然何時もの菱田さまとは變つた樣子でな、私共の方を見返りもせずな、つと御居間の方へな――

水無瀨　ふゝん、それで何うしたね。

泉谷　それから出ておいでなさるのを見ると驚くぢやございませんか。ピストルの箱をかう小脇に抱へて――

水無瀨　えつピストル！

じゅん子　ま、ピストル！

泉谷　え、さやうでピストルで。その箱を抱へたまゝ又直つとおいでなさらうとなさつたので――

山口　それで私が思はず菱田さんと聲を掛けると、えつと振返つた顏の怖さ、二の句が出ませんでな、私は思はずはつと詰まつてしまひました――

泉谷　それで私がな。旦那樣、何うなさいましたのでとかう申しあげますとな、あはゝゝゝとお笑ひなすつてな。

山口　いやその笑ひ方がいかにも取つて附けたやうでな――
――

泉谷　え、さやうで、いかにも取つて附けたやうにお笑ひなさつてな「いや今夜のうちには是非とも殺つてしまはなければならん」と仰つしやる。

山口　それも半分獨言のやうにな――

泉谷　さやうで、それで私が「え、何をお殺りなさるので」とかう申しますと「わしの年來の名譽の爲にだ」とたつた一言仰しやつてそのまゝついと行つておしまひなさいました。

水無瀨　えつ、名譽の爲に！　それぢやあ愈――

じゆん子　ま、大變なことになりましたねえ。だがあの菱田さんがまさかそんな思ひ切つた――

水無瀨　いや、あゝいふ男が却つて一圖になつて嚇と逆上ると――あゝこれはえらい事になつたな。今に何所かでポーンときこえたが最期だ――

泉谷　それでは何か樣子を御存知なので、一體どういたしましたので。

水無瀨　いや、何にも私も知らないがちと心當りがある。

山口　へえ、その心當りと仰しやると――

水無瀨　いや迂濶なこともいはれんよ。いまに分る。

泉谷　もしやあの鈴木さんと奥樣との一件を菱田さまがお感づきなさつたのではありませんか。

水無瀨　ふうん、君は何うして知つてゐる。

泉谷　へ、それはまことに恐れ入りますが、多年この道で苦勞してをりますので昨晩からの御樣子でな、こりや惡いなと思つてをりましたので――雙方(どちら)も若い同士で辛抱がなく、あんまりあけすけでございましたからな――何しろ大變なことになりましたな。なんといつても此家の大將なぞは御年輩でも斯道の苦勞が足りませんからな。嚇とおせきなさるも御尤で――何しろ大變なことになりましたな。

山口　（額を押へて）ほんとにあゝ私も折角轉地療養に來てえらい目にばかり遇ふ――これでは身體がたまらん。

じゆん子　今更そんな事をいつてた所で仕方がありません。だが何うしませう。

水無瀨　何うしようといつて、こりやうか〳〵して引合になつてはたまらん。寄らず障らずが上策だ。――高があの菱田が若い奴を殺して處刑を受ける丈のことだ。

じゆん子　もしあなた。（と側に人がゐると眼交ぜて注意する）

水無瀨　（氣がついて）いや併しそれはわしの友誼が免さん。兩君、兎に角――

泉谷　へえ――兎に角――何ういたしますので――

水無瀨　（詰つて）えゝ何うする、――あ、困つたな。

（こゝへ菱田、鼻目鏡の老眼鏡をかけ、夕刊新聞を持つて來る。一同わつと驚く。菱田も吃驚して。）

菱田　あ、皆さんこゝでしたか。夕刊が來ました。

（と數枚の新聞紙を卓上に置き、自分は腰を下して一枚の新聞紙を讀みはじめる。一同後を取卷いて顏見合せてゐる。菱田ふつと何か聽きつけた樣にポッケットへ手を突きこみ窓際へ馳けゆき、下を見込む。一同それつといはぬばかりに身を固くする。菱田けろりとして又卓の側へかへり新聞を讀みはじめる。）

水無瀨　（搜りを入れるやうに）何か、君、珍らしいこと

が出てゐるかい。戰爭はどうだね。
菱田　いや戰爭のことは今格段のこともないやうだが、世間に絶えないのは相變らずの血塗れ沙汰だね。
一同　（眼を險しくして）血まぶれ沙汰！
菱田　それがまたみんな色戀が本だね。
一同　色戀！
菱田　色戀がもとの切つた張つたさ。だが無理とは思はないよ。
一同　えつ！
菱田　つまり人情が深ければ、それ丈に口惜しくもあらうといふものだ。別れた女房は三百落した心地と昔からよくいふが、あれは江戸ッ子流の輕薄な考へだね。それさへ物足りない心をいつてゐる。わしはから見えても存外ハイカラでな。一旦緣あつて貰つた女房ならつまらん道樂で、餘計な心配なんか掛けさせたくない。よくわしの知つとる人なぞにも藝者に溺れたりなぞして奥さんに苦勞を掛ける人もあるが、どうもわしなぞにはそんな情のないことは出來ん。何も想ひあつて夫婦になるといふもんでもないが、そこが人情さな。よく妻がどうも愚痴ばかり並べて困るの、嫉妬を燒くのでつく〴〵厭になるのといふ人があるが、それはやつぱり亭主の仕向が惡いので、亭主が外で、眞面目で稼いでゐれば今日はまんが惡くつて三十錢しか稼げなかつたと持つて歸つたとて釜の蓋を開けて待つてた女房は「あゝさうですか」と二人で燒芋を買つて快よく晩飯を濟しておく。これが人情さ。それを亭主は外で勝手をやつて女房は家に燻ぶらしておく、女は氣が小さくつてこまかなものだから、世帶を崩すまいと儉約する。で亭主は欲いゝ氣になる。これでは遂には當然で、もとより女はよわいもので男を便りにしてゐるもの。それに苦勞させるといふは面白くない。何うです、奥さん。わしのこの說は？　わはゝゝゝは。
泉谷　（山口と眼交せして）それ、あの笑ひ聲――
じゅん子　（突然言葉をかけられどぎまぎして）えゝ。それでその今日の新聞にはどんな事が出てゐますので――
菱田　あ、今日の新聞の話ですか。あ、これです。（と新聞を示し）姦婦を木劍で撲殺せんとすといふのです。
じゅん子　へえ、木劍で撲殺！
菱田　さうです。痛快ですな、犬にも劣つた奴といふ洒落ですかな。あはゝゝは。
（一同又顏見合せてあの笑ひ方といふ顏をする。）
菱田　（讀む）「今曉相生橋の慘劇、星影暗き今曉一時京橋新佃西町相生橋の袂に一聲銳く「人殺し」とよぶ女の聲に――」いや讀んでゐては大變だ。何でも田舍の酌婦上

りに馴染を重ねてまあ料理店を開業した所が女が浮氣者で飲みにくる客と出來あつて其儘駈落をした。そこで亭主が帆前船の船乘になつて——一寸こゝは西洋だねの人情話といふとこですな——そこで方々捜して到頭居所を突きとめて連歸らうとする途中で——えゝ「怒氣心頭に發して三尺餘の木劒にて右の兇行に及びたるなり」といふ譯です。

じゅん子　ま、ほんとに憎い奴で——

菱田　いやこれなどはよくある奴ですが、どうせ浮氣にきまつた稼業の女を相手に力んだ所がはじまらぬ。こんなことになるとまたわしは妙に東洋的な豪傑流の考へでな、心の腐つた女に未練はのこらぬと潔よく與れてやるがいゝとおもひます。にくんだ所ではじまらぬ。尤も封建時代にも女仇討といつて刀の手前容赦はならぬといふやうなこともあつたやうですが、それも心ある武士は擯斥してゐたとみえます。過日(このあひだ)よんだ隨筆ものゝなかに、こんなことが出てゐましたよ。ある學老の息子が大層學問武藝が出來るので同家中の武士が家老の家へ出掛けて、まいろ〳〵に稱讃した所、その家老が「いや伜は役にも立ちませぬものですが、成長して女仇討をいたすほどの呆氣(うつけ)には育てませぬ積りでござる」と挨拶したさうです。これなぞみても、當時の武士の時代精神の一端が分ります。だが兎角さうはゆかぬと見えて無分別な出刄騷ぎや、ピストル騷ぎの絶えないとは困つたもので——

水無瀨　（いくらか語調に慄へを帶びて）君、君、そのピストルだがね。君はそのピストルを今持つてゐるといふぢやないか。

菱田　あ、ピストルか。持つてるよ、こゝに。迚ももう勘忍がならんからな。わざと五連發を撰んでもつてゐる。これなら彈道も遠く利くし。彈丸もダムダム丸的な猛獸を打つやつを詰めといた!

一同　えつ、ダムダム丸!

菱田　うん、これなら一發で致命傷を與へられる!

水無瀨　だつて、だつて君、それは餘り殘酷だらう。

菱田　なに畜生を殺(やつ)つけるのだ。構ふものか。怨みは骨髓に徹してゐるからね。あはゝゝは。

水無瀨　（驚いて和(なだ)めるやうに）君、ま、ちつと落付いて考へてみてくれんか。それでは君の立派な口前に矛盾してゐるぢやないか。

菱田　あはゝゝは。相變らず皮肉をいつてるな。所が矛盾でないかあるか、今夜のうちに必然(きつと)手腕(てなみ)を見せてやらう。

水無瀨　（びくりとして）君、怒つちやいけないよ、〳〵。僕は皮肉なんぞ云つたんぢや決してない。

菱田　それが更に皮肉なんだね。普通(あたりまへ)のことをいつてゐる

んだといふ譯だね。だが今度こそは是非やるよ。是非やらなければならない譯がある。あしたから旅行するよ。

水無瀬　えつ、では發つといて海外へか――

菱田　なにそんな遠くへ行きあしないよ。信州へだよ。何しろ日頃から機會の熟するのを待つてゐたのだからね。

水無瀬　ぢや兼てから覺悟してゐたのだね。

菱田　それは君、少しも油斷はなかつたのだよ。

水無瀬（妻と顔見合せて）さうだつたか。

菱田　や、私はかうしてはゐられなかつたのだつた。では諸君、あなた方とはもう一度御目に懸れるか知れないが――

一同（情けなさうな聲で）もう一度――

菱田　君は早く發つから或ひはお目に懸れんかも知れん。では左樣なら。

一同（情けなさうな聲で）左樣なら――

（菱田つか／＼と庭へ出てゆく。一同顔見合せてしばらく息をのむ。）

水無瀬　何うだ、あの左樣ならといつた樣子は。まるで永い別れを告げてゆくやうな云ひ方だ。ひよつとかすると旅行するとは嘘で自分もその場を去らずボーンとやる氣かも知れない。あゝえらいことになつたな。

泉谷　私はまたあの笑はれる度に、ぞく／＼つといたしまして、何ともかとも申されない氣がいたしました。

水無瀬　何しろ何かいへば疳を高ぶらしてピストルを此方へも向け兼ねない樣子だから何うすることも出來ない。

じゆん子　それにあんな口では立派な男らしい言をいふかとおもふと、又恐ろしい事を云ひ出すし――

水無瀬　いやもう餘程逆上してゐるのだ。努めて押隱さうとするのだがそれが押へきれないのだ。それにあのぺらぺらと饒舌ること。

泉谷　よほど怪しうございますな。あゝいふ風にぺら／＼饒舌る氣違がよくございます。發狂をなされたのではございませんか。

水無瀬　いゝ、ひよつとするともう本物になつてるかもしれない

山口　あゝ私は何だかかう目迷ひがしてきた――

（と椅子へくづ折れる。）

じゆん子　私はかうなんだか足がすくんで――あゝ。

（と蹲みこむ。）

水無瀬　兎に角あんなに氣が變になつてるとすると、こんな所にゐてはあぶない。どんな傍杖を喰ふかもしれない。

じゆん子　ほんとにさうですね。何うしませう。

泉谷　あゝ、私は今日晝間御酒なぞに未練を殘さず早くお暇をすればよかつた――

山口　私はもしそんなことになつたら病人だし、皆さんの

やうに早くは逃げられない。あゝ何うしよう。

水無瀨　何うだ、今のうちにあの庭の展望臺へ行つて今夜一夜明かさうぢやないか。あすこなら母屋とは離れてゐるし、萬一の場合にも足場が廣いから何うにでもなる。

じゆん子　それよりあなた、いつそ今の中にこゝを出ませう。

水無瀨　いや、そんなことをしたら大變だ。告訴しにでも行くとおもつて直ぐ後から一發だ！

一同　（ぞつとして）え！

水無瀨　だからさ、展望臺へゆかう。

じゆん子　もしあなた、照雄を何うしませう。

水無瀨　うん、照雄、何所にゐる？

じゆん子　食事後、しばらく休息をさせて直ぐ床へ入れました。

水無瀨　あ、ぢや一寸起しに行かれないな。困つたな。

じゆん子　（ハンケチで顏を押へ）飛んだ事になりました。

水無瀨　いや泣いてゝもしかたがない。多分あれの身に及ぶこともあるまい。さ、兎に角こゝに居てはいかん。さ、行かう。

じゆん子　（やはり顏を押へて）えゝ〳〵。

泉谷　どうも飛んだことで、ですが兎も角こゝに居りましてはいけますまい。

水無瀨　さうだ〳〵。さ、行かう〳〵。

（と水無瀨先きに一同入る。あとしばらく寂とする。上手の室から村木人を捜すやうに入つてくる。）

村木　なんだい。何所にも誰れも居ないな。まるで空屋のやうだ。おやつ、誰かくる――

（鈴木そつと後を見ながら庭口から入つてきてがちやり錠を下し、突然下手のパネルに嵌め込みになつてゐる扉へゆき、がちやりと錠を明ける。）

村木　おい君何をするのだ！

鈴木　（びつくりして）あ、村木さんでしたか。この戸から僕の部屋へ行かうとおもつたのです。こゝから行くのが近道です。

村木　だけれどもなにも非常の用になつてゐる戸を開けなくつてもよからう。

鈴木　いや何も非常用の扉だからつて明けて惡いといふこともないでせう。僕はこれから行つて寢ようとおもふのですから、失敬します。

（と突と扉の内へ入る。）

村木　ふむ。又何か巧んだな。併し己が附いてる間はどんなことがあつても目的は遂げさせないから――

（こゝへ上手の室より照雄寢卷姿にて胸を押へて眞青になりふら〳〵して出てばつたりと倒れる。）

村木　（驚いて立寄り）　お、どうした。〳〵。
照雄　なんだか知らないが胸が變で！
村木　どう〳〵。うん、氣が遠くなるやうか――ふむ、大丈夫、何でもない。
照雄　でもかう床がふは〳〵してだん〳〵天井へ貼付くやうで――それから吐きさうで――
村木　あゝ、おまへ、子供の癖に煙草をのんだね。
照雄　うゝん。
村木　嘘をおつき。（とポッケットより二幕目の本を出して見せ）こんなものを讀んでる位だもの、煙草位吞んでるだらう。
照雄　うゝん。
村木　ぢや飲まないといふのかい。
照雄　うゝん。
村木　ぢや、どつちなんだい。
照雄　今夜はじめて少し許り――父さまの吞みさしの葉卷を――
村木　あはゝ、さうか。それから酒は吞みあしないかい。
照雄　えゝ、少し許り――
村木　いや呆れたね。併し菱田さんも酒場の樣に棚へずらりと瓶を竝べて置くから惡いな。あの中どれを吞んだのだい。

照雄　どれもみんな少しづつ――
村木　ま何だつてそんなに種々――
照雄　五色の酒つてどんなものだと思つてゐたので――あゝ變た。小父さん、死にあしませんか。
村木　大丈夫々々々――さ、お立ち。僕がすぐ癒してやる。一寸これへ掛けて待つておいで――
（と照雄を椅子へ腰かけさせ急いで下手の扉へ入り、直ぐ出てくる。）
村木　果して部屋にゐない、あの男。――だが旨い工合に用が出來た、これにかこつけて樣子を見てゐてやる。――さ、おまへ、おれに摑まつて立つて御覽。おれがあつちへ連れていつて寢かして上げる――
（と照雄を立たせてそろ〳〵と歩み出す。照雄歩みを止める。）
村木　どうした、苦しいか〳〵。なにすぐ癒る。大丈夫死にあしない（照雄首を振る）うん、ではどうした？
照雄　あの、あの本を――
村木　うん、本をどうした。
照雄　母さまにみせないやうに――
村木　あはゝ、大丈夫々々。さ、御歩き〳〵。
（と下手の扉へ連れて入る。上手の室の戸口より爲子いゝいしよんぼりと寢衣姿の上へ紫紺縮緬の袷羽織を引被け

て出る。時々涙を拭く。)

爲子　あゝ私何うしよう。自分の心には少とも恥ぢる所はないのだけれど――あんな樣子の所を見られてしまつて何う云譯をしよう。あゝ今まであんまり心易だてにしたのが惡かつたのだつた。でもまさかあの人があんな氣でゐようとは思はなかつたから――

(とまた涙を拭く。)

(此時奥にて。)

民子　母さま、母さま、母さま、何所――

(と呼ぶ聲する。)

爲子　(心付いて上手の扉口へゆき)　此處ですよ。

民子　(奥にて)　あ、其處――

(と上手の室より外より歸りたる扮裝にて入つてくる。)

民子　まあ、此處でしたの。私今歸つて來ましたの。あゝ疲勞れた。(と椅子へかけ)　中の間で居眠りしてゐたお新にきいたら母さまは宵から御加減が惡くつて御寢つておゐでなさるつて云ふから御居間の方へ上つたのよ。それだのに御在がないから何所だと思つて方々搜しましたの。まあ此方だつたの。――さうして御客の人達や父さまは何所――

爲子　えつ、皆居ないのですか。

民子　あら母さまも知らないの。お新も知らないんですつて。家に誰れも居ませんよ。宛然がらんとして――何うしたんでせうね。――あら母さま、何したの。まだ御加減が惡いの。ではさうしてゐては御毒ですよ。

爲子　いえ、いゝのですよ。――あゝもう身體なんかは――

民子　(立上りて)　あら變ね、母さま。

爲子　(ヒステリカルに)　民子さん、あなたは私を信じて――

民子　え、なんですの。

爲子　私に、私にね、もしも詰らない疑でも掛つた時に――

民子　(呆れて)　ま、何うしましたの。(と爲子の傍へよる)

爲子　ね、民子さんは私を信じてね。日頃の私を信じてゐてねえ。

民子　ま、母さま、突然で分りませんが、私は母さまをそりや立派な方だと信じてゐますわ。

爲子　ありがたう、〳〵。私はあなたに極りが惡い。あなたの確固したのに比べて私はなんてのほゝんなんでしたらう。

民子　あら厭よ。そんなことを急に云ひだしては――

爲子　今日もあなたは町へいろ〳〵買物に行つて下すつたのでせうね。それもわたしがしなければならない務めだつたのでしたね。――つまり私はあまり幸福過ぎたので

その幸福が分らなかつたのです。

民子　ま、何をいつておいでなさるの。あさう、母さまが此間さういつた丸い瓶へ入つたスヰートピーつて香水ね。あつてよ。館林も隨分開けてきてね。

（と持つてゐた小さな香水瓶を卓上におく。）

爲子　あゝ、私もうそんなもの要(いら)ない。もつと確固(しつかり)した考へにならなくつては――（と下手の喫煙卓の椅子へきて沈みこむ）

民子　ま、母樣今夜に限つて、まあ何うしたの、私心配になつてきたわ。（と續いて傍へかける）

爲子　いえ、いゝのよ〳〵。あなたが私を信じてゐてくれさへすれば――お、さう民子さん、勘忍して下さい。

民子　（驚いて）え、何が！

爲子　一昨日、私あなたにあんまり年の違つた人を夫にするのは不幸の基たつていつたでしよ。あれは全く私の考へ違ひでしたの。たとへ見た所がどうあらうとも底に本眞の情のある人が一番いゝ夫です。了見の定まらない若い人を夫にもつよりは年は違つても情のある人を夫にする方が遙かに幸福です。村木さんはあなたには全く好い夫です――

民子　ま、母さま、あなた餘程神經が過敏になつておゐでなすつてね。一體ま何うしたのです。

爲子　今に、今にそれが分ります。

民子　今に？

爲子　（思ひ出したやうにしやくり上げて）だから何うかもう今は何にもきかずにおいて下さい。

民子　ですがまあ何うしたの、母さま。

爲子　（なほしやくり上げながら）父さまが、父さまが夕方から此方私に口もお利きなさらない。

民子　ま、父さまが！

爲子　え、それで私ゐても立つてもたまらなくなるので頭痛といつて寢てゐますと――

民子　（誘ひ出すやうに）さうすると。

爲子　さうすると父さまが私の部屋へ入つておゐでなすつたの。さうしてわたしの顏をぢつと怖い顏をしてみておゐでなさるの。私眼を開(あ)かうとおもつても怖ろしくつてどうしても明けない。その中聲もかけずにつか〳〵と出ていつておしまひなすつたの。

民子　あら母さま、それは氣の故ではないの。眼を閉いてみもしないで、何(ど)んな顏をなすつたか分りあしますまい。

爲子　いえ、〳〵、それはよく分ります。あたしは眼は塞いでゐましたが、父さまのなさつたことは何から何までまざ〳〵と見えて胸がもうわく〳〵して――

民子　だつて母さま。父さまは母さまが寢てゐるとおもつ

て聲もかけずに出ておいでになつたのではなくつて？

爲子　いえ〳〵さうではありません。父さまはもう私を見捨てゝお仕舞ひなさつたのです、あゝ、私もう――

（とハンケチをまた顏へ押あてる。）

民子　まあ母さま、それはきつと何か母さまの思ひ違ひよ。

爲子　いえ〳〵さうではありません。（と發作的に）あゝ私もう一層なにもかも父さまの前へいつて申しませう。もう構はない。私に惡いことはないのだから。

民子　あらそんなことをいつたつて父さまが果して母さまのことを何うとか思つてらつしやるか何うかといふことだつてまだよくは分つてはゐやしないぢやありませんか。

爲子　でももう私忍耐が出來ない。

民子　母さま必然思ひ過ぎですよ。

爲子　それは民子さん、あなたは何にもしらないからよ。知らないからよ。

民子　いゝえ、母さま、私も大凡分つてゐてよ。

爲子　えつ、あなた知つてゐて？

民子　ですが父さまはそんなことを疑ふ人ではなくつてよ。――まあそんな風をしてゐては母さま風邪を引きますよ。もう御休みなさつたらいゝでしよ。私ももう寢ますわ。

爲子　私寢ようつたつて寢られない。

民子　だつて母さま。あなたさう興奮なさつたつてはいけませんわ。それより緩り御寢みなさいよ。――さうして父さまは何所へいらしつたの。

爲子　何所へいらしつたか分らない。それだから私！

民子　まあ父さまはよく默つてぶらりとお出掛なさるのはいつもぢやありませんか。此間も夕方ぶらりと御出掛なさつた切り夜晩くまでも歸らないのでみんなが心配してゐたら、鷄小屋で使ふ鋸の氣に入つたのがないつて云つて館林中の金物やを一軒殘らず廻はつて歩いていらしつたていふぢやありませんか。きつとまたそんな御用ですよ。――夜があけて明日になつて何のこつたとおもふやうなことがありますよ。だから母さまももうお寢みなさいよ。

爲子　ありがたう、民子さん。――だけれど私まだ睡くないからかうして置いて下さい。

民子　あらさう、では母さま私先へ御免蒙つてよ。（と立て）ですが母さまも直ぐ御休みなさいな。

爲子　えゝ（と涙を拭いて顏を上げ）あ民子さん。あなた御飯まだね。

民子　（振返りて）いゝえ、町の牛乳店でパンと牛乳で濟してきたわ。ではお休みなさい。

（と出てゆく。あと爲子また沈みいつて。）

爲子　あゝ私はなんて馬鹿だつたらう。今の身になつてはじめて今日までの身の幸福を覺るなんて。幸福が無くなつてから昔の幸福を思ひ出すほど不幸な事はないつて全くだわ。あんな情の厚い長い間に叱言一つ云つた事もない人を物足りないやうにおもつてわたしは我儘ばかりして――わたしは口でちやほやして機嫌をとつてもらはなければ不足のやうに思つてゐたなんて――一生連添ふ夫婦がそんな馬鹿なことをいひ合つてゐてどうするのだらう。わたしは夫を戀人かなんかのやうにおもつてゐたのだつた。しかもそれを今になつてやつと氣が附くなんて。――あゝ〳〵もう私がこゝでかうやつて泣いてゐてもあの人はもう私を何とも思つてくれないんだわねえ。あゝ何うしよう〳〵。

（また卓に打伏す。下手の嵌めこみの扉を竊と明けて鈴木四邊を見廻はしながら出て爲子をみて頷き、そつと後を通りて上手の室の扉へゆき突然がちやりと錠を掛ける。爲子音に驚いて振りかへり。）

爲子　誰れ、お新？――あ、鈴木さん。

（思はず脅て立上る。）

鈴木　（手で制して）しつ。

爲子　（おど〳〵して）まあ、あなたは――

鈴木　（下手の扉を指さして）そこから入つてきたのです。（と次第に傍へ近寄つて）誰れも見やしません。――なぜそんなに脅えてゐるんです。こゝには私達二人きりです。私達は何の恐れもないんです。さつきは妨げられたが今は――

（と突と寄つて爲子の手を取らうとする。爲子驚いて身を退いて。）

爲子　まああなたは！　先刻の振舞を後悔しておゐでなさるといふのなら免してあげます。だがもうこれからは他人の居ない所の御同席は御免を蒙ります。私はもうあちらへまゐります――おやすみ。

（と出てゆかうとする、鈴木追縋つて。）

鈴木　あ、待つて下さい待つて――

爲子　放して下さい。

鈴木　あ、何うか、たつた一言私の云ふことを聞いて下さい何うか。――先刻の私の早まつた仕打はどうか勘忍して下さい。だが私の今迄の心の苦しさも察して下さい。それで今あなたのさういふ言葉を聽く私の苦しさを察して下さい。もう私にはあなたの外に世に慰められるものもない。あなたにさういはれるのは私は死ぬるより苦しいのです。奥さん。あなたは私をこの灰色な世界へつなぐ唯一の夢なのです。わたしに今その夢の衣をぬいで跣

足のまゝに現實といふ丘の岩角道を歩めといふのですか。何うして堪へられよう。私はもう一瞬もあなたが無くつてゐられません。

（と爲子の肩へ手を掛けようとする。爲子振放して息を切らし。）

爲子　あなたは、あなたはま何て恐ろしい人でせう。何うかあつちへいつて下さい。あつちへ。

鈴木　なに恐ろしい――恐ろしいなんて私はそんなことを云はれる覺えはありません。奥さんには私が惡魔のやうにみえるのですか。それはあんまりです。この胸の中には燃えるやうな戀の火とあなたの姿とがあるばかりです。あなたはあなたの姿を憎みますか？――私はたゞあなたの前へ身を擲げだしてあなたの愛を求めてゐる一人の微弱い便りない青年に過ぎないのです。しかもあなたを愛することに於ては何物にも劣らない。――何うか愍はれんで下さい。

爲子　まああなたもうそんなこと、よして下さい。わたしには夫があります。

鈴木　その夫がなんでせう。ではあなたは愛してもゐないものを夫と呼んで私のこのやるせない苦しい願ひを斥けようとするんですか。

爲子　えいもうそんなこと、知りません。

鈴木　（熟と爲子を見据ゑて）それではあなたは今まで私に示してゐた愛情を僞りだといふんですか。

爲子　えつ！　私が何時そんな――

鈴木　えい今更になつてそんな遁辭を構へるのは卑怯です。あなたは口へ出してはいはなかつたでせう。併しあなたの眼がそれを語つてゐました。

爲子　あゝもし私がそんな風にみえたらば全く私が惡るかつたのです。私にそんな積りは少しもなかつたのです。

鈴木　え、そんな積りは少しもない？　いゝえそれは僞です。私はもう覺悟が定つてゐるのですから、何うか本眞をいつて下さい。どんな名もあなたと二人なら甘んじて受ける積りです。

爲子　（慄へて）と、と、飛んでもない。

鈴木　あゝよろしい。あなたの心がさう變つてるのなら、私は一層麥田さんの前へ行つて私達二人の愛を告白して、あの人からあなたを美事に奪つてみせませう。

爲子　（絶望のあまり決心して確固と）ま、あなたは脅迫なさるなんて。もう構ひません。私も立派に夫の前で今迄の事を隱さず申して夫の判斷にまかせませう。――さ、其處を退いて下さい。私はもうあちらへ參るのですから。

鈴木　（またすつかり萎れた風になつて）あゝ勘忍して下さい。私が今の樣な亂暴な事をいつたのもあなたを思ふ

のあまりです。この胸の苦しさに何うしていゝか分らなくなつて思はず迸り出た言葉です。あゝ奥さん、一目私のこの苦しんでる姿をみて下さい。さうしたら又あなたの心も解けてもう一度先刻までのやうな柔しい言葉をかけて下さるに違ひない。

爲子　えつ、もうあなたは——私忍耐が出來なくなつた。

（と行かうとする、鈴木遮らうと寄る、爲子椅子を押し倒して逃げ。）

爲子　あれ、あなた傍へよりますね。よござんす。私人を呼びますから——

（と鍔口の傍へより紐へ手を掛ける。）

鈴木　（慌いて）あ、いけないいけない。

（とこれもまた他の椅子を押し倒しながら驅けより。）

鈴木　からすりやいゝ。

（と片手で鍔口を鳴らさせぬ様に爲子の手を抑へ、片手に紐を吊してある根元よりぶつりと引切る。）

爲子　ま、あなた、どうか離して下さい。

鈴木　（離すまいと爭ひ）いえ、私を愛してゐると云つてくれなきや厭です。

爲子　（やつと振離し逃げながらふつと思ひ附く）しつ。

鈴木　（思はず佇み）えつ？

爲子　見られた！

鈴木　そんなことが！

（爲子首を振つてバルコニーを指す。）

鈴木　バルコニー？　そんなことが——

爲子　いゝえいゝえその硝子に影が寫りました。

鈴木　えつ。

（と突とバルコニーへ出る。爲子急いで鎧戸を閉め横木を差し、中央の椅子へかへつてぐつたりとなる。この途端庭口の扉の外にてがちやりと錠を開ける音がして扉を開き菱田入つてくる。）

菱田　やあ、おまへ、此所にゐたのか。

爲子　あゝ、あなた——

（と度を失つて倒れかける。菱田支へて。）

菱田　や、びつくりさして濟まないまない。おれはおまへがまだ起きて此所にゐようとは知らなかつたものだから——何うだい。氣分は少しはいゝかい。

爲子　（おどおどして）えゝ。

菱田　さうか。それはいゝ。

（こゝへ庭口の扉よりそつと怖いものみたさにおづおづと水無瀬夫婦、泉谷山口入つてきて戸口に逃腰にて見てゐる。）

菱田　（ふと四邊を見廻して）おやおや。これはどうしたのだ。椅子がこんなに轉倒かへつて。おや、鍔口の紐が

切れてる——（と爲子に）これは何うしたのだい。

（爲子無言のまゝ眼を伏せて慄へてゐる。水無瀨その外すはこそと眼を見合ふ。）

菱田　（なほつゞけて）あ、この非常口があいてるね。これは何うしたのだ。

爲子　（絕體絕命につかく\と出て）それはかうなのです。私もう何もかも——

（と一伍一什をいひ出さうとする途端、その戶口より村木、つと出て。）

村木　しつ。

（と制する。一同意外に驚く。）

爲子　あつ先生！

村木　騷々しくしてはゐけません。いまやつと寢ついた所です。

菱田　えつ、誰が！

村木　あゝ、いけませんな、そんな大きな聲をしては。靜かにく\。

（と中央へくる。）

菱田　（怪訝なかほして後より聲を低めて）一體たれが？

村木　水無瀨さんの坊ちやんです。

じゆん子　えつ、あの照雄が、ま、何うかしましたか。

村木　いや、お父さんの吞みさしの葉卷をのんでそれから棚の上の五色の酒をのんだので、それが頭へ來て——

じゆん子　あれがまあなんだつてそんなことを——私は本眞とはおもはれない。

村木　いや、その爲に現に目が眩つたので——

じゆん子　えつ目が廻はつたのですつて——

村木　いや、もう御心配には及びません。大分よくなりました。

水無瀨　あんな子供の癖に酒や煙草をのむなんてどうも——

村木　（笑みて）いや今の世の中には一人も子供はありません。

菱田　だが村木さん、それにしてもこの戶が明いてゐるのは？

村木　あ、それはかうです。始めつから御話すると實は今夜もう一度鈴木君を診ようと思つて、少し晩くなつたが構はず出掛けてこゝへ來ると誰れもみえない。そこへあの水無瀨さんの坊ちやんがよろめいて入つてきて其處等中の椅子へ摑つては一所に倒れるので——椅子が倒れてゐるのはついまだ直す間がなかつたものですから（といひながら椅子を一々起す）私は吃驚してしまつたので遂度を失つて——いや醫者として甚だ失態で面目ない譯ですがな、そこにある鍔口を鳴らして、人を呼ばうとおも

つて餘り強く引いたので引切らしてしまつて――（と紐を取上げ）この通りで（と菱田にみせ）何うも濟みません。何うか後でお直し下さい。それからこの戸ですがな。こゝから鈴木君の部屋へ行く近道たと知つてたのですからな、こゝを叩いて鈴木君に明けて貰つて、いま二人で坊つちやんを鈴木君の部屋へ寢かした譯です。それから鈴木君は坊ちやんが夢中でしきりにお母さんと呼ぶので急いでお迎ひに上りましたが、まだお遇ひになりませんか。

じゆん子　いゝえ。――そして照雄はどこに寢てゐます。

村木　その戸口を出て廊下を曲つた角の部屋に寢ておゐでです。

じゆん子　ま、さうですか。あの子がそんなことをするなんつて――さ、あなたいらつしやい。

水無瀨　うん。

（と二人下手の扉(ドアー)へ入る。）

村木　あ、それからまだ一つ、その爲に態々寢ておゐでなすつた奧さんまでお起し申して御手傳ひを願つて恐縮でした。いや奧さん。もう大分よろしいやうで御安心をなすつて――

爲子　ま、先生、あなたは何んといふ御心切な、私もう御禮の申しやうもありません。

村木　いやこれは醫者のあたりまへです。

（爲子深く感激して思はずせぐり來る涙をハンケチで押へて片手は米噛を揉み頭痛にまぎらす。菱田みて。）

菱田　おや、おまへ。また頭痛がしてきたかい、それはいかんな。

爲子　いゝえ、大したことはありません。

村木　いや奧さんも私同樣びつくりなすつたから、その反動がきたのですよ。

菱田　あゝさうか、それにしてもこの部屋は暑過ぎるから逆上(のぼせ)もするのだ。あ、あの戸を兩方閉めなくつてもいゝのに、私が片方開けてあげよう。

（と行かうとする。爲子あつと小さな叫びを立てる、村木悟り「あすこにゐるのですか」といふ風をして爲子をみる。爲子うなづく。）

村木　あ、菱田さん、いけません。冷めたい空氣が入つてくるから――（爲子に小聲で）あすこから飛び下りはしませんか。

爲子　（同じく小聲でおど／＼と）さ、どうですか。

村木　よござんす、飛出させませう。

菱田　（此方を向いて）え、何だつて？　飛出させる。何を？

村木　（さつき民子が持つてきた卓上の香水瓶を手早く取上げ）いやこれです。このコロツプが抜けないのでそれ

で飛出させようとしてゐるのです。えゝ何かないかな。生憎小刀(ナイフ)を忘れてゐるが――

菱田　(鍵を出し)　さ、これでは何うです。

村木　結構。さ、飛び出せ。飛び出せ。(と鎧戸(シャッター)の外へきこえるやうに)　えい飛び出せ。Ein zwei drei! どうだ。

(とポンと栓を拔く。)

菱田　あはゝ、飛び出したね。

村木　(外の樣子に聽耳たて)　たしかに。(と爲子に瓶を渡し)　はい。奧さん。これでいゝでせう。

菱田　いや冷たい空氣が入つて惡いかしれないがどうもこれは蒸熱い。何うです。開けてもいゝでせう。

村木　えゝ、ではよござんす。

(菱田つか／＼とバルコニーの戸口へゆき横木を外し鎧戸を左右へ一杯にあけ。)

菱田　さあこれでよくなつたらう。

爲子　(露臺の方を怖さうにみて)　え、これで全然(すつかり)よくなつたやうです。

(とほつとする、菱田ふと又何か聽きつけたやうに。)

菱田　しつ、／＼、／＼。

(と手で制しながら露臺へ出てすぐ引返し庭口の戸を開けて馳け出る。爲子驚倒して思はず。)

爲子　あつ見られた!

(と椅子へ倒れかゝる。村木馳けより介抱して。)

村木　見られましたか。

爲子　あゝ、もうだめです／＼。私――

(と泣きふす。この途端奧にてポーンと一發ピストルの音。一同あつと驚く。)

泉谷
山口　(べたりとして)　あ、到頭殺(や)つた!

村木
爲子　え、殺(や)つたつて?

泉谷　あゝ、えらいことになりました。菱田さまが／＼殺(や)つたので／＼。

爲子　えつ、な、な、なにをです。

山口　あの鈴木、鈴木君を!

爲子　えつ、夫(うち)が鈴木を!

(下手の扉(ドアー)より水無瀨夫婦でる。)

水無瀨　到頭やつたな。殺(や)つたな。

村木　何うしてあなたそれを知つてるのです。

水無瀨　先刻から菱田君はピストルを持つて鈴木を搜してゐたのだ。

爲子　えつ、まあ何うしよう。

水無瀨　奧さん、あなたもあぶない。きつと菱田は鈴木を殺(や)つといて直ぐこゝへ來る。さ、みんな逃げなきやいけ

ない〳〵。

爲子　村木先生！　何うしませう！

（と一聲長く倒れかける。村木支へて。）

村木　あゝこんなことにしまいと骨を折つたのだに――

（こゝへ庭口の戸より寢衣姿の民子と寢惚眼のお新急いで入つてくる。爲子と村木の外一同菱田と思つて。）

一同　それ來た！

（と驚く。村木手早く爲子を圍ふ。）

民子　（眼早く村木をみて）あら先生、今のピストルの音はどうしたのです。

（村木、民子の顏をみて堪らなくなり無言に泣く。）

民子　あら先生、どうかしましたか。

（この途端また一發ポーンと聽える。一同またわつと驚く。）

民子　あらまた！

水無瀨　あ、では鈴木だけ殺つて自殺したのだな。

爲子　（突伏してゐたのが突立つて）えつ自殺！

民子　えつ、父さまが自殺！

お新　ま、旦那樣がお死になさいましたつて。

（とわつと泣き出す。）

民子　ま、先生何うしませう。

（と堪らなくこれも泣き出す。）

村木　（押靜めて）ま、兎も角樣子をみてこなくては――民子さん、母樣がひどく氣落をしてゐるから介抱して下さい。

民子　はい。

（と爲子のそばへくる。）

（爲子民子をみて縋りついてわつと泣く。）

民子　ま、母樣、々々、々々。――

（と慰めながらこれも泣く。）

村木　（一同に）では僕は一寸見てくるから、騷がずに騷がず。

（と決心したやうに身を固めて庭口へつと出てゆく。）

（水無瀨外一同おづ〳〵庭口の所へ立ち、向ふを見込んでさゝやいてゐる。この前より例の隣りの痩男依田きよときよと入りきたりて猾さうな眼をして一同を見廻してゐたが此時下手の方へお新を一寸々々と手招きする。）

依田　（小聲で）え、お新さん。今のピストルの音は旦那が自殺したんだつて――

（お新涙を拭きながら來る。）

お新　えゝ。

依田　大變なこつたね。だがお葬式たがねえ。

お新　なんですつて。

依田　ま、そんな大きな聲をしなくつたつていゝぢやないか。――（又小聲て）その葬式だがね。いづれ立派なのが出るだらうがね。私の親戚に棺桶やをやつてるのがあるんだがね。それにやらして貰ひたいもんだがね。それはきつと格安で勉强させるから。大きな葬儀舍なんぞへ賴むよりは、同じことでずつと安直にいくよ。だから一式それに請負はせる樣に奥さんに話してくれないか。

お新　（激怒して）ま、なんですつて、此中でそんなことをいひ出して。ま御覽な。奥さまもお孃さまも泣いておゐでぢやあないか。

（とまた泣き出す。）

依田　だつて早くさういはないときつと明日の朝になると聽込んでいろ／＼名刺をもつてせり込みにきて取られてしまふから。

お新　えい、私そんなことはしらないよ。

依田　ま、そんな意地惡をいはないで――それから此方は手少なの樣だから是非私も使つて下さいつて奥さんに賴んでおくれ。日當はいくらでもいゝから――

お新　えゝもうこの人は知らないよ。

（此途端奥にて。）

菱田　あつはつはつは。あつはつはつはつは。

（と高笑の聲する。）

水無瀨　や、あの聲は菱田のだ。

民子｝（同時に）｛えつ父さま！
爲子｝　　　　　｛えつ夫が！

（と戸口にゆく。）

泉谷　おや菱田さまがおいでなすつた！

じゆん子　おやまあ菱田さんが！

（と戸口にゐた一同呆れて右左へ開く。菱田手に擊止めた狐を引下げ片手にピストルをもち。）

菱田　あつはつはつは。あつはつはつは。

（と入つてくる。後より村木ついて出て微笑しながら手で民子と爲子を制する。）

菱田　あつはつはつは。遂々やつゝけてくれた。畜生。二疋でとう／＼やつゝけてくれた。畜生。

（と狐を中央へ拋り出す。）

水無瀨｝
その他｝あつ、狐！

（と顏見合せる。）

菱田　（水無瀨に）遂々殺つてやつた／＼。水無瀨さん。どうだ。わしの前言空しからずだろ。これでわしの銃獵の名譽もまづ保たれるといふものだ。

泉谷｝
山口｝えつ、銃獵の名譽！

（と顔みあはせる。）

菱田　これでわしは安心して翌日立てる――お、さう今一つ（と村木に）村木さん。

村木　は、なんです。

菱田　いや村木さん。わしは一昨日鈴木のことは私に任しておいてもらはうといつたろ。實は遂からあれの身も心配してゐたのだが、まだよい口が無かつたのでそのまゝになつてゐたのだが、昨日會社へ行つた時一寸話してみたら信州の出張店の方で極樂な仕事が――一寸事務員といつたやうなことだがね――空いてゐるといふことなのでその方へ見計ひ旁向けてみようとおもふので、幸ひ翌日私が一緒に連れてゆかうとおもふ。就てはあれの身體はもう確かに大丈夫だね。

村木　え、それは結構で――身體はたしかに大丈夫です。

菱田（笑みて）そこでだ。村木さん。もうあれが居ないとなると君も當家へはあまり來る機會がなくなるね。

村木（怪訝顔に）えゝ、さうですな。

菱田　君もお急がしい中を始終おいでを願つて御迷惑だつたらう。これからはもうさう御訪ね下さるには及ばない。幸ひにみな無病だから。

村木（漸く覺つて吹き出しさうなのを耐へて）はあ、これまでは隨分自分の家のやうにして上つてゐましたがこれからは上りますまい。

菱田　いやおいでなさるに差支へないが若い娘もあることだから――

爲子（氣の毒さに堪へかね、つと出て）まあ、あなた！

菱田　おゝ、爲子。これでみんな思つてたことが片がついた。おれは定めるときにはばた／＼決めてしまふのが好きだ。（と自慢さうに首を振り）どうだ。それに相變らず、おれのやることにそつはないな――さあ、あとは旅だ。旅だ。あつはつはつはつは。

――幕――

此作落想はサルドーの作 Nos intimes に得たるも布置結構人物の性格等すべてあづかる所なし。

南方女兒國（一幕）

第一場　街頭

この芝居の全體の意味から女は女優または女方、男は男優が扮するのが當然であるが、主役の外はかへつて男優がこの國の男すなはち女に、女優または女方が、この國の女、すなはち男に扮するがよい。つまりいろいろの髭のあることで男を表はせばいゝ。同時に男優の方は面のつくりその他にいくらか女らしいところをみせる。それが此芝居の自然である。舞臺の下手に唐風の城門、その側に高札場、細字で數百行の文字がかいてある。それから中央奥へ斜めに藁葺の民家が軒をつらねてゐる。更に高くはるかに王宮をのぞむ。上手は窓と入口をみせた民家にて見切る。ところどころに亞熱帯植物。すべて嶺南から海上數百里を隔てた小王國通稱女兒國　場面。幕あくと晝の光が一杯にさしてゐる。この王國の民、右往左往する。風俗はすべて漢民俗に準ずる。皮膚の色もおなじ。たゞ男が悉く女の風俗をし、女が悉く男の風俗をしてゐる。さうして態度もすべて女は活潑に、男はつゝましやかにしてゐる。女は物なぞ擔ひ、男は子を負ひ、小さな籠なぞ下げて通る。さうして男は概して髭がある。それも奇麗に細く整へて中にはやゝ豐かな裝ひをしてゐるのは白粉をつけてゐる。これらの人々は、城門から、奥へ、奥から城門へゆきかひ、知る者は聲をかけあふ。女が無遠慮に聲をかけると男が、はにかんでしなをするなぞ面白い。

、始終上手の家からは機音がきこえてゐる。幕あいてから少し間をおいて、上で聲高に罵る聲がする。此國の民王三（女）酒に醉ひ、女房瓊枝（實は男、鼠の尻尾のやうな細い髭髯がある。此國ではすべて男を女とよび、女を男としてゐる）の耳を左の手で引張つて出る。瓊枝は抱子をかゝへてゐる。

瓊枝　あれ、痛い／＼。勘忍して下さいよう。

王三　えゝ、何をいやあがる。亭主に逆らへば、からだ／＼。

（と右の手で打つ、瓊枝ひい／＼と泣く。通行の者とめにはいる。重に女。すなはちこの國の男である。）

市民　これ／＼王三どうしたのだ。また醉つて女房を打つのか。大抵にしろ。泣いてゐるぢやあねえか。

王三　なに、此奴がきまりで、文句をいふから、みせしめ

の爲に打つのだ。

瓊枝　でもお前が朝からお酒をのんでもう日差しも南へまはつても、山へ稼ぎにいつてくれなくては、私とこの子はどうなるとお思ひだえ。

王三　えゝ、まだいふか。だから引叩たくのだ。

市民一　これ〳〵もう分つた。よさねえか。（と瓊枝に向つて）これ、お前も亭主に逆らつてはわるい。誰も酒をのんでゐる時、そばでぐづ〳〵いはれると、男といふものは、立たなくてもいゝ腹も立つものだ。

市民二　（やゝ豐かな服裝をした町での口利らしいのが近づいてくる）どうしたのだ。又王三の夫婦喧嘩か。醉つてゐるのに口答へをしてはわるい。機嫌のいゝ時靜かにいつてもわかることだ。亭主に逆らつちやあわるい〳〵。この國の女はすなほなのが、國の自慢だ。それで南方君子國ともいはれる位だ。又王三もさうだ。何時も喰らひ醉つて女房を打つばかりが能でもなからう。

王三　（少しひるんで）へい、此奴がその口癖に愚痴をいふので……つい。

市民二　まあ、それは解つた。さあ稼ぎに出懸けたらどうだ。愚痴をいふのは女房の役、稼ぐのは男の役だ。

王三　へい。どうも皆さん、おさわがせ申しました。

（と王三は腰から斧を出して手にもつて鼻唄をうたひながら城門の外へ出てゆく。）

市民二　さあ、亭主は出ていつた。お前もさう泣いてゐずと家へおかへり。

瓊枝　はい〳〵。（と一寸鬚を撫でつけ）まああの人もひどい。髯をこんなにしてしまつて。

（と袖で涙を拭き〳〵元と來た路へかへる。）

市民二　あはゝ。あの女も愚痴をいはないと可愛いかみさんだが、あの愚痴で始終夫婦喧嘩だ。

市民一　さやうさ、あの女も腮髯の工合に一寸乙なところがあつて惚れられる女だが、あの愚痴には困りものだ。

市民二　まつたくその通りだ。（と側にゐる男の子に）これお前なぞもいゝ容貌だが、お嫁にいつたら愚痴をいふなよ。

男の子　おほゝゝ、いやな伯父さん。

（と顔をかくす。みな笑ふ。此時一人の男（無論女裝の）城門の方をみて。）

男一　あれ、まあ、あすこへ女の人が、お禁制の男の裝をしてやつてくる。まあどうしたのだらう。

市民一　どれ〳〵成程、怪しい奴だ。土地の者ではないやうだな。

市民二　どれ、おゝ、あれは中國の人達。珍らしいな。時たまに數千里の波濤を越えて貿易にくる。中國の女はえ

らいものだ。

市民一　へえ、あれが中國の女ですか。始めてみた。

市民二　わしもずつと昔一度みた限りだ。

（と一同珍らしげに城門の方をみる。城門の中から大唐の人林子洋（三十歳あまりの堂々たる美丈夫、海外貿易家、頭には布をまき裾の短い唐服、肩から角笛をかけ、腰に短劍をおびてゐる）を先きに、唐敖（四十あまり、失意の老書生、長髯、儒巾、葛衫）、多九公（七十歳あまりの老船頭、一行の水先案内、白髯長く垂れ、いくらか、腰はかゞんでゐるが、矍鑠としてゐる）、從者一人大きな包を肩にして出てくる。この一行舞臺前へ出て來て。）

林子洋　（快活に）どうも不思議な國へきたものだ。船から上つてみるものきくもの、大して變つたこともないが、男がみんな女の裝をして、女が男の風をしてゐる。おい多九公、これが噂にきいた女兒國といふのだな。

多九公　はい。さうでごす。わしもこの年になるまで、船で暮したが、つひぞ一度こゝへ上つたことはないが成程噂にきいた通りでごすな。

唐敖　いや天下にあらざるものなしと山海經でみた不思議な國土も諸國を經めぐる中にまのあたりにみたが、これはまた不思議な國土だ。

林子洋　さういへば三藏法師が天竺へ經を取りにゆくときに、捉へられてひどい目にあつたといふ所とはちがふうだな。

多九公　いや、それとは違ひます。あれは女ばかりの國、わしのやうな老人でもうつかり上れば、どんな目にあふか解りません、あはゝ。こゝは夫婦はやつぱりあるが、女が亭主の國です。何でも昔航海中にきいた話では、此國に昔、女のすばらしい豪傑が出て、國を平げ、女の權利をのべて、國の本を建てたのだといふことでごす。それもずつと大昔で今では誰もこれが人間の性來だとおもつてわしたちが男と女を怪しまぬやうに、誰も怪しむものはないさうで、だからうつかり女だとおもつて揶揄ふとそれこそ横頬を張りたふされるはまだなこと、生命もあぶないか知れません。

林子洋　おや、それはうつかり出來ないな（あたりの人々を見まはし）全く女の豪傑なぞには出てもらひたくないな。

唐敖　いや、此れはこの國ばかりでない。今わが朝は則天武后に唐の世をうばはれ、天下に一人の男子がない。此國のありさまは、やがては我朝のみる鑑だ。既に長安の少年には紅粉を粧つてゐるものもある。これが今の世の慣しかもしれぬ。

林子洋　また先生の憤慨ですか。それよりは、はる〴〵ここへ來たのも商賣。一寸これを見て下さい。

（と衣嚢から書付を出して唐敖にわたす。唐敖開いてみて。）

唐敖　おゝこれは婦人の化粧品の目錄、嶺南を出たとき、積荷の中に、紅白粉、脂、櫛なぞがあつたが何の爲かとおもつたが、今日の用意でござつたか。

林子洋　いやかねて女兒國の名をきいてゐたのでもし役に立つかと積みこませたのです。それに美人ほど足の小さいのを喜ぶのはどこも同じだ。小さな靴も澤山持つてきました。あの包の中が、そのいろ〳〵の品物です。みなこんな邊土になささうな上等品ばかりで、これで一つ何か珍らしいものと交易してゆく積りです。

唐敖　なるほど、さういへばあなたは今日滿面に紅い光を帶びてゐる。これはきつと大した吉事があるに違ひない。

林子洋　さういへば今朝帆柱の上を、二羽の仙蝶が奇麗な翅をひら〳〵させて高く低く舞ひ立てゝゐた。それに喜び蜘蛛がこれも二疋、つる〳〵とわしの足許へ下つてきた。これは女の國で吉事がある知らせだと思ひます。一つまあ土地の樣子をきいてみませう。

（と市民たちの方へ近よる。）

一寸伺ひますが、わたしは大唐の商人ですが、この國へまゐつた御挨拶に伺ひたいのですが、まづどちらの御役所へまゐつたらよいでせう。

市民二　（すゝみ出て）いやあなた方は女の癖に、はる〴〵海を越えてくるとはえらいものだ。

林子洋　へえ。

（と呆れる。市民すまして。）

市民二　さうして何といふいゝ縹緻だ。此國ではまづ御城へ御挨拶に出るのだ。わしが案內してやりませう。こなた位の縹緻なら、きつと手厚く扱つてくれる。こんな姿をさしておくのは惜しいものだ。

（と林子洋を見つめる。子洋氣味がわるくなつて下る。）

枚子洋　（唐敖を顧みて）なんだか變な氣持がする。

唐敖　（首を振つて）こりや子洋どの、ゆくのは止しになさい。陰盛んにして陽を壓してゐる。不祥の國土だ。長く居るべき所でない。これは一刻も早く立去つた方がよい。

林子洋　あはゝ、先生、諸國を歩けばさま〴〵變つたものをみる。それほどむづかしい事でもありますまい。

唐敖　いや〳〵衆陰の勝つ時は一陽もその所を得ない。王宮へゆくのなどはおよしなさい。

林子洋　何の、たかゞ女の國です。大海の波の中で鱶とも

取組みあつたことのあるわたしです。この匕首は人に試みていまだ嘗て縷を濡さず。海賊ばらに圍まれてもこれ一つで後れを取つたことのないわたしです。少とやそつとのことがあらうと大丈夫です。

唐敖　さうでござるか。（と考へなほして）では心配しますまい。併し氣をつけてお出でなさいよ。

林子洋　あはゝ、大丈夫です。一つ大儲けをしてきます。先生と多九公は町でも見て待つてゐて下さい。（と市民二に）では一つ御案内下さい。

市民二　あゝよいとも、お前さんのやうな人の案内なら。

（と男のやうに笑ふ。これにて林子洋從者に指圖して包みをもたせ、市民二に案内させてにこ〳〵しながら奥へ入る。市民の他の者も子洋をのぞきこみ、感心したやうに首をふりぞろ〳〵從いてはいる。此國の女連すなはち男達はこそ〳〵囁き、いろ〳〵林子洋の容貌を批評しながら、これも從いてはいる。）

唐敖　（苦々しげに）はて淺間しい國だ。本來の性來を忘れて、男が女のまねをして、女がその本來のやさしさを失つてゐるとは何ていふことだ。

（この時幕明の機の音また上手の家よりきこえはじめる。多九公聽耳を立てゝ上手へゆき、窓口より覗いてみて、ぷつと吹出し、急いで唐敖の方へきてその袖を引き。）

多九公　ま、先生。珍らしいものがある。一寸きて御覧なさい。

唐敖　何だ。

多九公　まあ、一寸いつて御覧なさい。

（と唐敖を連れていつて覗かせる。唐敖脅えたやうな變な顔をしてこちらをむき。）

唐敖　何ていふことだ。若い者ならまだしも、年老いて頬髯も胡麻しほまじり。鬼とも取組さうな顔をして鬢邊に珠玉を垂れ、耳に七寶の金環を嵌め、玫瑰色の長衫になよ〳〵とした腰附をしてゐるとは何だ。これこそ眞に天下の醜をあつめたものだ。

多九公　わたしもこの年まで海を好んで歩いたが、こんな化物ははじめてみた。

（とまた覗き、思はず吹出す。すると中から銅鑼聲で。）

○　誰だ。家を覗いて笑ふのは。

（とどなる。二人思はず、こなたへ逃出すと、家の中より、手に梭をもつて五十あまりの頬髯の男、前の唐敖のせりふ通りの裝をして小さい紅い靴を穿き、よたよたと出て二人をみて。）

頬鬚の男　やあ、うぬ等は男かとおもつたら、髯のあるの

は女だな。それにお禁制の男の裝をして家の中を覗くのは、女を隙見をしてあるく積りをして實は男を釣らうといふのだな。ま、何といふあつかましい奴だ。この家は久しく後家で男切れは一人もゐないぞ。まあなんといふ態だ鏡でうぬが姿をうつしてみるがいゝ。ちつとは恥かしいともおもはないのか。このふんばり奴、女中の面汚し、今わたしに見付られたからいゝが、外の者に遇つてみろ、性悪男が女を隙見をしてあるくと間違へられて半ごろしの目にあはされるぞ。まあ呆れかへつた奴だ。

（と散々罵つてまた家へはいる。さうしてまた機音がはじまる。二人呆氣にとられて。）

多九公　先生、驚きましたな。わしは身がすくんで、今にあの梭を叩きつけられるかと冷々してゐました。

唐敖　女は年老いての厚化粧の醜くいのは何處も同じだ。だがこれは二重の醜さだ。かつて見たこともない聽いたこともない醜さだ。

多九公　先生ふんばりといはれましたぜ。男でふんばりと怒鳴られたのは私たちが始めでせう。

唐敖　さうだ。大凡男あつて以來、こんな不思議な罵倒をうけたは、わしたちが始まりだ。恐らく千古第一の奇妙な罵倒だ。とても我國にあつては、いつかな思案を廻らしても思ひもつかぬ罵倒だ。あまりのことに憤る言葉も出ない。それはさうと之洋どのは事もなげに出ていつたがこんな有様では、どんな目に會はされるかもしれぬ。何やら心許なくなつた。

多九公　（うなづいて）全くさうでございますね。（といつて上手奥をみたが、顔の色をかへて）おや、あすこへ泣きながら驅けてくるのは燕兒ぢやあないか。こりやとんだ事になつたぞ。

唐敖　（も驚きみて）おゝ、さうだ。こりや何かおこつたに違ひない。

（と二人あわてる。こゝへ燕兒（さつき包をもつていつた作人）泣きながら出て二人に。）

燕兒　大變です〳〵。旦那様が御妃にされてしまひました。

唐敖　（何やら解らず）おきさき。おきさきとは何のことだ。

燕兒　え、おきさきで間違ひましたか王さんの奥様のことです。

唐敖　なに、王さんの奥さん、一體それはどうしたことだ、まあ落付いて話してきかせろ。

燕兒　へい。（と眼をこすつて）はじめ、お城へ出ますと、大層叮嚀にして品物はみな御買上げになるから、こつちへ來いと旦那を奥へつれてゆきました。するとしばらくすると、どたんばたんと奥が大騒ぎになつて旦那が逃出

してきますと、後から大勢女が追つかけてきて、旦那をつれてゆきました。旦那もはたらきましたが如何して〳〵女がどれも〳〵みんな力がつよくて苦もなく旦那は連れてゆかれました、私は吃驚して段々きいてみますと王さんは遂からお妃さんを捜してゐたので、そこへ旦那が來たので、すつかり氣にいつてお妃になさるといふことです。旦那がお妃にされたら第一どうして子を生むでせうと吃驚してそれでお知らせ申しにかけてきました。

唐敖　はて怪しからぬ。

（といつたが二の句がつげない。多九公心配して。）

多九公　先生、飛んだことになりました。何うしたらいゝでせう。

唐敖　はて私にも何の思案もない。

（と思はず見渡し、下手の高札に眼をつけ、その文言に氣がついたこゝろでつか〳〵と側へゆき手を後にして默讀する、多九公側へより。）

多九公　それに何か書いてございますか。

唐敖　うむ、この國では毎年河が開いて、あまたの人畜を損ふので、それを治める工夫をひろく天下に求めるといふのだ。

多九公　へえ、ではこの國には毎年のやうに水が出るのですか。

唐敖　さうだ。此國にこの不祥のあるのは天理の自然だ。だがわしたちの爲めには勿怪の幸ひだ。多九公、燕兒に手傳はせてその高札を脫しなさい。

多九公　へ、そんなことをしてようございますか。

唐敖　よい。わしに少し思案がある。

多九公　さうですか。では燕兒手をかせ。

（と二人で高札を脫す。すると「やあ、高札を脫した。」「高札を脫したものがあるぞ。」と口々に叫び、忽ち四方から市民たちが押よせてくる、中には得物をもつたものもある。）

市民○　やあ見なれぬ女たちだ。何所の者だ。

市民△　どうしてその高札を下したのだ。

市民□　その高札の譯を知つてゐるのか。

（とわや〳〵取りまく。唐敖制して。）

唐敖　まあ皆さん靜まつて下さい。わしは大唐の生れの者です。海を漂つて此へきたのです。大唐の者に一人も水を治める法を知らぬものはござらん。今こゝでこの高札をみれば、もし隣邦の君主にしてよくこの水を治め得れば、長く貢物を送りて臣服せん、又隣邦の住民にしてよく水を治め得れば財寶祿位擇むに任すとある。これによつて今こゝに皆さんの爲に水を治めてこの國の患を救はうといふのです。

（これをきくと市民たち、狂喜して得物を投げ出し、大地へ跪づく。）

市民○　それではあなたがこの國の水の患みを救つてくださるといふのですか。

市民△　あゝありがたい。此國を救ひに天から下つてきた女菩薩だ。どうかお救ひ下さい。

市民大勢　あゝ、お救ひ下さい〳〵。

（と口々にいふ。唐敖また制して。）

唐敖　やあ、皆さん。どうか立つて下さい。わしはよく水を治むることを知るも、財寶祿位はもとより求むる所でござらん。たゞ一つ、皆さんがわしの望みをかなへて下されば、今日にもすぐに工事にかゝりませう。

（これをきいて市民また。）

市民○　それはなんでございます。聞かせて下さい。

市民大勢　おゝ、早くきかせて下さい。なんです。どんなことです。何んなことです。

唐敖　まあお待ちなさい。なに容易いことです。あなた方がやつて下されば容易いことです。だがこの一事をきいて下さらぬとたとへ財寶は山のごとくに積んでも、わしはすぐ背を此國に向けて、故郷へかへつてゆきます。

市民○　やあそれはどんなことです。早くきかせて下さい。

市民大勢　おゝ、早くきかせて下さい。

唐敖　よろしい。ではいひませう。だがもつと町の中の廣い所へ出て、もつと多くの此國の方々にきいて戴きませう。

市民○　さあ、もつとみんなをあつめるのだ。

市民△　さあ道をひらいて、この國をすくふお方を案内しろ。

市民×　さあ、あの廣場へいつて大勢の者をあつめて早く話をきかせてもらへ。

市民大勢　さあお伴を申すのだ〳〵。

（と口々に叫き、どつと上手の方へゆく。唐敖もその方へすゝむ。多九公心配して袖をひき小聲で。）

多九公　先生、大丈夫ですか。先生は水を治めたことがあるのですか。

唐敖　いや、ない。だが焦眉の急だ。外に術もない。（と聲を大きくして）さあ案内して下さい。

（とすゝむ。多九公なほ心づかひの體、市民口々に叫ぶ。このもやう道具まはる。）

第二場　王宮

舞臺正面に唐風の宮殿、丸柱、石だゝみ。前に石階がある。（この宮殿また唐風を本にしてこの國に發達した

らしい特殊の様式を細部にみせるもよい）殿上には正面に唐風の寢臺、帳が半ば垂れてある。その側に卓。上に鏡その他の用具がのつてゐる。上手は別殿につゞき、下手は廊。舞臺前は庭、その下手は墻壁で、圓形の出入口がある。

殿上の寢臺に林子洋あまたの宮娥（いづれも八字髭を綺麗に脂で細く固めてゐる。無論女裝）に押へつけられてゐる。さうして林子洋の顏には綺麗に紅白粉がほどこされ、髮は女のやうに結ばれて、鳳釵が簪され、耳には一對の七寶の金環が下つてゐる。また身には霞帔、玉帶蟒袗、すべて王妃のきらびやかな裝束をつけてゐる。今や、あまたの宮娥は無理に小さな繡靴を穿かせてゐる所である。子洋は痛みに堪へかねて泣聲をあげてゐる。こゝの宮娥も女優または女方が扮するがいゝ。

林子洋　あゝ、みなさん、どうかもう勘忍して下さい。迚もそんな小さな靴が穿けるものですか。あゝ、痛い。（と耳を押へ）丸で錐で揉まれてゐるやうだ。これも後生ですから取つて下さい。あゝ頭がいたい。目まひがする。あゝさう足の先をしめられては、丸で炭火であぶられてゐるやうだ。迚も長い間野育ちに育つてきたわたしの足を急に締めたとてどうなるものですか。長い間したい三味をして遊びまはつてゐた道樂息子を、急に仕付をするやうなもので何うにもなるものぢやない。あいた、そんなに無理に曲げられたつて……あいたつたゝ、折れる折れる。

（と泣く。）

宮娥甲　まあ、どう遊ばしたのでございます。もう少しの御辛抱でございます。女中の仕合せを一人でお取りになつた貴女樣が、お泣き遊ばすとは、どうしたことでございます。あまりおはしたない。お愼み遊ばせ。

林子洋　あゝ、たまらん。身體中がまるで火のやうだ。目がくらんできた。もう勘忍して下さい。

宮娥乙　まあ、もう少しの御辛抱でございます。ま、これほどの御縹緻を持ちながら御み足が大きくては、それこそほんとに御恥辱でございますよ。さあ、どうやら御穿けになれますよ。さうしてぢきにお馴れになりますよ。

林子洋　あいたつた。とてもたまらんこんな拷問に生きながらあはすなら一そ一思ひに殺して下さい。頼みます。頼みます。

宮娥丙　たにを御意あそばすのです。ほれ、もう御穿けになりました。

（と宮娥一同立つ。）

林子洋　あゝ。

（と寢臺へ倒れる。一同立寄り介抱して。）

宮娥甲　さあ、しつかりと遊ばせ、もうよいのでございます。御支度はみなとゝのひました。

（と寢臺へかけさせ、傍の卓によらせ立はなれてみて。）

まあかうして御裝束を召すと、一段とお縹緻が上つてみえます。女衒の私等でも惚々といたしますよ。

宮娥乙　まあ何といふお可愛らしい。あまたある御妃の中でこなた樣に及ぶ方はございません。お上の御寵愛の程もさぞかしでございませう。

宮娥丙　さあ、御支度が出來れば私共の役目も一先づ濟みました。此由を申上げてまゐりませう。

宮娥甲　さやういたしませう。お上は定めて御待かねでおゐでゝございませう。ではしばらくこゝで御休息あそばせ、やがてお迎へにまゐります。

（と一同會釋して卓上の品々を片づけもつて入る。子洋身を起さうとして倒れ。）

林子洋　あいたゝた。とても足を踏み立てることも出來ない。（と思はず大聲で）助けてくれ、誰れか。誰も助けてくれないのか。（と身のまはりを見廻はし）なんだこのざまは。（と兩袖をひろげてみて）それに男が顏へ紅白粉をぬられて……あゝ何ともいはれぬ氣色だ。（と顏をいろいろにしかめる）頭の釵も隨分重いものだ。あゝ耳環、丸で鐵の鎖がさがつてゐるやうだ。あゝ思へば故鄕の女たちはよくこんなものを下げてゐられる。また何んでこんなものを女たちに下げさせたのだ。足が小さくつて先が反つてゐるのが、何で可愛いのだ。あゝおれも今まで可愛いと思つてゐた。それはばかりぢやあない。こんなものを賣りつけて歩いてゐた。あゝ惡いことをした。（といつたが急に顏をしかめて）あいたつた。（と兩手で足を押へ）えゝ、こんなものを穿かせやあがつて（とすり下り石だゝみへ坐わり、靴へ兩手をかけ顏をしかめて無理に脫す）えいこんな白絹をまきつけやあがつて、（と靴の下にまいてある絹を脫す。隨分長い）えゝ、まだある。こんな長いものを卷きつけやあがつて。

（と抛る。此時宮娥一人。ふと燭臺を捧げてきて入り來りこの體をみて、吃驚して引かへす。子洋心づかず。）

あゝ、これでいくらか樂になつた、（と立たうとして立てず）あゝわるいことをした。おれは故鄕の女たちをこんな目にあはせて可愛いとか、好いたとかいつてゐたのだ。それが報つておれがこんな目にあはされることになつたのか。と思へば可哀さうなのは女房だ、おれは長い間家をあけて、たまさか歸つても亦諸國を飛びまはる面白さにまた飛び出す。いつも門出の時に、眼に一杯淚をため

て默つて俯首いてゐたが、心の中はどんなに侘しかつたらう。どだいおれの國の習ひがわるい。小さい時分から男は商ひの爲に飛び出し、命がけの事をするほど人にほめられる、女房は親が留守の間に貰つておく、たまに歸つた亭主はまた飛び出す。これぢや大抵の女房は死んでしまふ。おれの女房も死んぢやつた。それにしても女は辛抱づよいものだ。こんな目にあはされて默つてゐる。あゝ己はこんな目にあはされて迚も我慢がならん。あゝ逃げるにも逃げられない。これからもつと恐ろしいことがはじまるのだ。おれの力はどうしたのだ。みんな拔け出してしまつたのか。こんな目にあひながら不思議に手足の力がぬけてしまつた。おれも海へ出て、あぶない目をして勇ましい最後を遂げるさまは、折々ふと幻にもみたが、こんな目にあはうとは寢ぼけた夢にも見なかつた。あんまり思ひも懸けないので、持前の膽玉もつぶれてしまつた。何に山なす大波に劒を束ねて打つけるやうな風に帆柱がめき〳〵と音をたてゝ折れたときにも、目ばたき一つしなかつた己だ。(と立たうとして)あいたたゝた。足がいたい。目がまふ。どうかしてしまつた。ひよつとかしたら(とぞつとした思入れ)己はもう女になりかゝつてゐるのぢやあないか知らん。えゝそんな恥晒をみて生きてゐる己ぢやあない。潔く死んでやる……(といつて身裝をみまはし)だがあんまり馬鹿々々しい。こんなざまで死ぬのがおれの最後だつたのか。あんまり馬鹿馬鹿しくありさうもないことで死ぬにも死なれぬわい。無念だわい。死ぬ張合もないほど無念だわい。馬鹿々々しいわい。あゝ涙なぞこぼれたことのない己がどうしてかう止め度もなく……あ――

(と手離しで泣き出す。こゝへ最前の宮娥甲燭を捧げて入り來り、卓上におき、跪き。)

宮娥甲　申上げます。御妃さまには、ほしいまゝにお靴をお取りあそばしたこと、お耳に達し、お咎めあり、重く二十を罰せよとの御命令でござります。

(と立上つて廊下へ合圖すると、一人の長鬚の老監察女官、手に幅三寸ばかり、長さ八尺ばかりの竹箆を持ち、四人のちよび鬚の手下の婦人をつれて出て一齊に跪づき。)

長鬚　御命令を奉じて憚りながら打ち奉りまする。

(と立かゝる。子洋わつと脅えて、逃げようとするが身が動かない。四人の手下は子洋を押へて寢臺へうつむけに押伏せ、頭と足を押へる。長鬚婦人は兩手に竹箆を揮つて子洋の尻を打つ。子洋打たるゝ度に「助けてくれ〳〵。」と叫ぶ。長鬚婦人五たびほど打ち、手をとゞめ、宮娥甲に。)

長鬚　お妃さまのおん下體のお皮はうすく、わづか五つ打ちましたら、お血がみえます。二十打ちましたら、恐らくお肉が破れ、お目出度い日が延びることになりませう。この由を貴女さまより申上げ御意をおうかゞひ下さりまし。

宮娥甲　心得ました。

（と宮娥甲は入る。長鬚婦人、子洋に。）

長鬚　憚りながら申上げます。唯今私より申上げ、これでお止め申すことにいたしませう、就てはもう必ず〳〵御靴をお取りあそばすやうなはしたないことは遊ばしますな。

林子洋　はい〳〵。もう決していたしませぬ。靴もすぐ穿きますから、勘忍して下さい。

（とあわてゝ靴を拾はうとする。長鬚とめて。）

長鬚　あれ、何事でござります。御靴をお手づから遊ばすといふことはございますまい。

林子洋　はい〳〵

（と小さくなる。こゝへ以前の宮娥たち甲をさきに、手に〳〵練薬の器、または人參湯なぞを捧げて出る。それとみて長鬚婦人は會釋して手下を引つれ、靜かに退場する。）

宮娥甲　御後悔あそばしたので、あとの十五枚は御ゆるしになりました上御膏薬と、お氣つけの人參湯をたまはりました。さあ召上りまし。

（と人參湯を出す。子洋がぶつ〳〵とのみ、少し落ついた體。）

宮娥乙　さあ、御膏薬を張つて御繃帶を申上げませう。

宮娥丙　さうしてお靴もお召しあそばせ。

（と宮娥たち、子洋のまはりによつてそれ〳〵はたらくこなし。これはあまり觀客に露骨にみえぬやうに、そのさまをすればいゝ。）

（よきころに一人の宮娥に紗燈を釣らせ、王、三十あまりの美女すなはちこの國の男、王冠、龍袍、玉帶、妃を垣間見るこなしにて出る。廊の柱のもとに立つてこなたをみる。宮娥たち心づき。）

宮娥甲　おゝ、お渡りでございます。

（と開いて敬禮する。王こなたへきて、子洋のそばへよる。子洋慄へる。王は寛々として子洋をみて。）

王　かばかりの佳人を唐朝の人々は知らず、いたづらに男の裝ひをさせ、あたら埋もるゝ美玉となしたは惜んでも餘りがある。予が一度見出してこゝに美玉もはじめて光をそへた。皆の者、なんと我眼は高からうのう。

（滿足げに笑ふ。）

宮娥甲　まことに毎度ながらお眼の高いのには恐れ入り奉

ります。

宮娥一同　たゞ〳〵恐悦に存じまする。

（王うなづき、懐より眞珠の首飾を出して子洋の首へかける。子洋身をすくめる。宮娥扶けおこして跪づかせ「萬福」をとなへさせる。王は立寄つて子洋の手をとり寢臺に腰をおろす。子洋はもう全く力がぬけて、する通りになつてゐる。王は子洋の手をとり、滿足げに身體中撫でまはす。子洋たゞ〳〵顔を反けてゐる。王はそれを恥かしがつてゐるのとみて、愈々滿足し。）

王　はて、きつい恥づかしがりやう。はて可愛ゆらしい。まあ顔をあげたがよい。

（と手をかけて顔をあげる。子洋しく〳〵泣き出す。）

はて何を歎きたまふ。今百年の契りを重ね、今より後の春秋を、花に月に、共に樂しまんとする時に、何で涙をおとし給ふぞ。御身はこの國第一の貴くまた仕合せの身となられたのぢや。今までは身にも相應ぬ男の裝をして心をあらびさせてゐたのぢや。今こそまことの女にかへつて永く榮華をたのしむのぢや。女は男にかういたはられて喜ばぬものはないわい。

（と宮娥を顧みて。）

今宵はこゝに合歡の盃をあげて、そのまゝに止まるであらう。册立の儀は表面のことぢや。あまりの愛しさに、この座が立たれぬやうになつたわい。

（といふ。宮娥らはつと立たうとする。この途端城外にわあーといふあまたの人聲起る。一同顔の色をかへる。王立上る。）

王　やあ、あの騒ぎは何事ぢや。みてまゐれ。

（といふ。宮娥ら、再びはつと立たうとする所へ、またわあつと物さわがしくきこえて、一人の宮娥、いそぎ立出でゝ。）

宮娥　はあ、申上げまする。唯今太子さまと宰相九禮さま、一大事の言上ありとあれなる御廊下の外までおいでゝござりまする。

王　なに太子に宰相九禮がついてまゐつた。はて何事ぢや。すぐ呼べ。

（はつと宮娥は引かへす。）

はて何事の騒ぎを引きおこしたのぢや。

（と驚きいぶかる。すぐと此國の世子、名は若花。十五六歳、無論この國の男であるが、本性の女らしさが勝つてゐて、擧止すべて女のやうである。すなはち此國のたつた一人の生れ損ひ。從つて國王の逆鱗にふれ勝で憂鬱てある。宰相九禮白髪無髯一寸みると老女のやうであるがやはり此國の男である。）

王　おゝ、あの騒ぎは何事ぢや。そちたちの申すこともそ

れであるか。

世子　（女のやうに一寸首をかしげ）　宰相から申上げて下さい。

宰相　はつ、（と王に一禮して）えゝ申上げます。お上には今日大唐よりまゐつたあれなる婦人を妃にあそばすといふことが知れ、右同伴の婦人、これはきはめて水理に精しく此國の水難をすくふ代りに、あれなる婦人を御釋放あそばすやう願ひをります。それを聞傳へ ました數萬の百姓共、その者の願ひをかなへさせ、國難をのがれんと、お城外へあふるゝばかりにあつまり、哀訴いたしてをりまする。

（とこの時又群衆の泣きわめく聲がきこえる。）

あれ〳〵あの聲がそれでござりまする。

王　なんぢや、この婦人を釋放せいと數萬の國民が城外にあふれて哀訴すると申すか。してそちたちは何とおもふ。

（この時世子若花ぢつと子洋の方をいたましいやうに見つめてうつとりしてゐる。王はふとそれへ眼をとめて。）

王　やあ、そちはまた病がおこつたか。妃の方をしげ〳〵と見入つてゐるは、あの裝束がうらやましいか。はて淺間しい奴の。幼けない時から、女の手わざを好み、打つても叩いても止まぬ奴め。今日は又なんでおれの前へ出た。

（世子はつと兩手で眼を蔽ひ女のやうに泣く。宰相かばひ。）

宰相　はつ、太子をお伴ひ申したは國の大事、恐れながら民命を重しとしたまひ、曲げてそれなる婦人を御釋放あそばすやうに願ひまする。

王　やあ何といふ。たとへ賤しき民たりとも一度娶りし女を故なく出さぬは我國法、まして一國の人君たるものが、一旦妃と定めしものを輕々しく出す法があらうか。

宰相　はつ、恐れながら、まだ御册立の儀もなければ、ただの婦人、彼等もそれを存じて曲げて御訴訟申しあげをります。あはれ恢涵の御仁慈を垂れたまひ、お聞濟みのほどを願上げまする。

（王、かういはれてぐつと塞つたが。）

王　よい。ではそちは唯今立ちいでゝ、彼等を和めおけ、明日ともなれば册立の儀をすぐ擧げる。しからばこの婦人はもう妃ぢや、木がすでに舟となつては、彼等は何とも出來ないわい。

（宰相あきれる。王また世子をみて。）

王　やあまだ其方はそれにをるか。この國の長子として其方を生んだを恥ぢいるわい。この國にたゞ一人の生れそこなひめ。おれは其方を見るのが辛いわい。もう下れ。

（といふ、世子しを／＼として、しかも女のやうに一禮して涙をおさへながら入る。あと一座白ける。王また宰相に。）

王　してまた其方が今申した水理に精しいといふ女にそちは出あうたか。

宰相　はつ、引見いたしてござりまするが、この者婦人にまれなる雄辯にて、かの國には水經と申す書物これあり、彼は悉くこれを暗んじ、說くところ、みな耳あたらしき事ばかり、御用にも立つものと厚く待遇し、もし御召出しもやと召連れまゐつてござりまする。

王　よい。そやつを此へよべ。まつこと、水理に精しきものならば、重く用ひて河川を治めさせ、民苦をぬかん。

宰相　はつ、それでは御釋放のことを御聞濟み下さりましたか。

王　いや、この婦人もかへさぬ。そしてその者にこの國の大患たる水を治めさすれば、一擧兩得ぢや。

宰相　でもその者は御釋放がなければ誓つて治水の業には服しますまい。

王　はて高が女ぢや。何ほどのことがあらう。よいこれへ呼べ。

宰相　はつ。（と是非なく）かの婦人を御庭前へ案内せられい。

（と宮娥に命ずる。子洋唐放がくるときいて嬉しい中に、氣づかはしい思入。王はかへりみて。）

王　妃、その女といふはそちのみよりか。

林子洋　はい。

（と小さくなる。それが大分もう女らしい。こゝへ庭前の洞門より宮娥に案内されて唐放出る。すぐ子洋と顏みあはせて。）

唐放　おゝ、子洋どの、その裝は。

（と立すくむ。）

林子洋　おゝ、先生、王へ御願ひ申してはやう救うて下されい。

（と立たうとして轉ぶ。宮娥。）

宮娥甲　御前でござります。これは何事でございます。

（と取支へる。王うなづき。）

王　妃はしばらくあなたへ。

（といふ。宮娥心得、別殿の方へ連れてはいる。唐放憤然としてその方へすゝむ。）

王　やあ、唐朝の女と申すはその方か。

唐放　（憤然と）やあ女ではござらぬ。男でござる。

王　あはゝ。なるほど氣位の高い女ぢや。そちは治水の術に精しいと申すはまことか。

唐放　いや聊かも治水の術は存知ませぬ。

（王、わけて宰相はびつくりする。）

王　何といふ。

唐放　治水の術は少しも存ぜねど。街の高札にふと思ひつき、王に近づきまゐらせ、一言申したき事あつて、あまたの百姓をいざなひ、宰相を動かし、御前に近づいたのでござる。偏にそれもわが友を救ひ、まつたこの國を救はん爲でござる。

王　してまた一言とはいかなる事ぢや。

唐放　されば我治水の術は知らねども此國の水の災を止むる手段は存じてをります。

王　うむ。それはまた何のやうな事ぢや。

唐放　されば王はじめこの國の男といふ男悉く、衣裳を脱ぎかへ、女の服にかへらるれば、立どころに水の患ひはとゞまりまする。

王　（怪訝な顔をして）それはどういふ譯ぢや。それになにか不思議があるか。

唐放　元より不思議がござりまする。天理の自然に逆らへば水も逆さに流るゝ。こなた樣をはじめこの國ではすべて天理に逆らうてゐる。

王　（はじめて勃然と憤る）やあ、予をはじめみなこの國は天理に逆らうてゐるとは、不埒の奴め。なにが天理に逆らうてゐる。

唐放　されば風俗を同じうし、文字をつたへ、おなじ禹域のうちながら中頃にして交通たえ、聖人の道傳はらず。陰陽轉倒して女子權をとり、衆陰あつまつて散ぜず、國に淫雨あり。年毎の大水はとりもなほさぬ證據でござる。

王　やあ、予をはじめ此國の男はみな女ぢやと申すのか。それにもなにか證據があるか。

唐放　いかにも、たとへ男女風俗をかふるといへど、爭はれぬ天性はかへられず、男には髭あり。此國の一人の男子も髭なく、女子にこと〴〵く髭あるこそ、天性の示現、いかにするとも換へられざる所でござる。

王　（吹出す）あはゝゝは。白痴もの奴が。それこそは天が女にたまうた世にも不思議の下されものぢや。ひげあればこそ女はいとしく男の心を牽き、天然の和合をうる。されば容貌より第一にこれを整へ、男に愛しまれうとするのぢや。取りもなほさぬ女の命ぢや。みればおのれはぼう〳〵として何時梳りたりともみえず（唐放思はずおのれの鬚をなぜる）女だてらの學問沙汰。此國にもある例ぢや。四十にあまつて男もえもたず中國の中にも居かねてさすらひ、邪説を唱へて民の心を惑はし、わが國本をゆるがさんとは不敵の奴め。この頃國内の女とも、ともすれば、不穩の取沙汰、畢竟おのれのやうな奴が、時折りに入込めばぢや。我國は高祖大雄王、國の敎へを建

てたまうてより一萬年男女の別あきらかに君臣の分定まり、國内ゆたかに治まり、隣邦の推し尊むところとなつて南方君子國の稱がある。おのれなほ批判する所があるか。

唐敖　（困惑して）　さあその、それは……

王　たゞし外におのれが男といふ證據があるか。

唐敖　さあ、それはその……

王　故もなく邪說を唱へて國土を騷がし、此國の民なれば死刑にも處すべきなれど、中國の民といひ、かつは女、とく引出して國外に追放させい。

宰相　はつ、（進みいでゝ）さて驚き入つたる彼が陰謀、かるぐしく彼が口才にまどはされ、御前へ近づけたる不肖の罪、幾重にもおゆるし下さりませう。それ引出して役人どもにおわたしなされい。

（宮娥はつと立かゝる。唐敖どつかと庭上に坐し、はらくと悲憤の涙をおとし。）

唐敖　われ、大唐の世に仕へ、則天武后に世をせばめられ、中頃徐英公のもとに、駱賓王とゝもに天下に義を唱へしも事成らず、駱賓王は行方を失ひ、われはまた嶺南にのがれ、海に漂ひ、計らずも今またかゝる不祥にあふ。今こそ男子の亡ぶる秋ぢや。近年國朝の男子、擧つて男子の氣を失ひ、媚佞して女寵を競ふ。取りもなほさぬ此國のありさまぢや。今國王惑ひ深くして、我力に及ばず。所詮は聖人の道の絕ゆる時がきたのぢや。

（と泣く。王また赫といかり。）

王　やあ女なりと免せば、なほ誹謗の口を絕たず。此上は以後のみせしめ、とく城外に引出して、鼎鑊の刑に處せい。

宰相　はつ。

（と領承する。この時氣づかはしげにしてゐた子洋轉び出て、王の裾にとり縋る。その身のこなしは全くの女である。聲もやさしく。）

林子洋　もしそれなるは妾の身寄、どうぞお助け下さりませ。はじめてお宮仕へする妾のはじめての御願ひ、どうぞ御聞屆け下さりませ。

王　（喜びて）　はて妃には、はじめて女らしうなつたな。

林子洋　（一生懸命に）　その者は水を治むる術を知らぬとは僞り、妾よりよう諭し、きつと治水のこともさせますれば、どうぞゆるして下さりまし。

王　（愈喜び）　まことにそちがはじめての願ひといひ、治水の術もさするとあれば、ゆるしてそちにあづければ、きつとよう諭すがよいぞ。その頑固の心をとれば、役に立つ者とみた。

（とこの時城外の泣きわめく聲きこゆる、王、宰相をかへりみ。）

おゝ、この上は、かなたへまゐり、自ら城外にあつまりし者共へこの旨をつたへ引とらせん。

宰相　はつ。

王　まゐれ。妃、また後にぢや。

（と王、宰相、はじめ案内せし宮娥をさきに、廊下傳ひに入る。あとにのこりし宮娥、妃を助けて寢臺にかけさせる。子洋左右をかへりみて。）

妃　みなの者しばらくかなたに。

（廊を指さす。）

宮娥一同　はーあ。

（とこれも入る。小洋あと見返りて。）

林子洋　先生。どうかこれへ來て下さい。私は足が立ちません。

唐敖（つか〳〵と立より）　えゝどうされたのぢや。

林子洋（泣聲を出して）　先生、この足をみて下さい。

唐敖　おゝ。

（と手をかけて靴を取らうとする。子洋あわてゝ。）

林子洋　あゝ、とつてはいけない。又竹篦で引つ叩かれます。

唐敖　なに竹篦で打たれたのでござるか。

林子洋（うなづき）　先生、これから何うしたらようございませう。わしはもう女になつたのぢやございませんか。

唐敖　さあ、私も何やら譯がわからなくなつてしまつた。たゞこの上は逃るゝだけは、逃れてみるばかりぢや。幸ひ城の案内も略分つた。折からの闇をさいはひ、のがるるなら今ぢや。たゞ、おみが足が立たなくては……

林子洋　いや、もうかうなつては見つけられたらそれ迄、すぐ逃げ出しませう。

（と痛みをこらへて立上る。唐敖支へる。この少し前、上手の廊下からそつと以前の貴公子若花忍び出て袖を口にあてきいてゐる。二人がゆかうとするのをみて前へ出る。二人わつと脅える若花手で制し。）

若花　あもし、お驚きなされますな。わたしは御二人をお逃し申しにきたのです。

（子洋みて。）

林子洋　おゝ、あなたはさつき御目にかゝつた此國の太子さま。

若花　はい（といつて突然二人の前に跪づき、泣いて）どうぞ御助け下さいまし。

（といふ。二人おどろき呆れる。若花つゞけて。）

わたくしは今身に迫る大難がございます。どうぞわたしの命をお救ひ下さいまし。

林子洋（そばに坐つて）　それは何うした譯でござる。

若花　わたくしは八歳のときこの國の太子となりました

が、六年前に、まことの母はなくなり、今西宮の母が、父の寵を専らにして、その生ませた次の子に世を繼がせんと、父にたびたびの讒言に、いろいろのあやふい目にもあひ、やつと逃れて今日までの命はございましたが、近頃父上はまたその讒を深く信じて、わたくしを殺さうといふお心がござります。また内外の臣僕もみな西宮の勢ひに諂り、一人も宮中にわたくしを助けるものはございませぬ。今日お目にかゝつた貴方様、この國をおのがれなさるゝなら、何卒わたくしも連れてゆき、わたくしの命を御助け下さりまし。

（とよゝと泣く。）

林子洋　（考へて）だがわしの國は、この國と風俗がちがひ、あなたをつれてゆけば、女の裝をして、髮もこのやうに結ひ、（とわが頭へ手をやり）脚も裹まねばなりますまい。

若花　おゝ、それこそはわたくしの願ひ、わたくしは生れてより、ふつと遠い昔、自分はそのやうにしてゐたやうにおもはれ、今が夢ではないかとおもはれまする。おのづと女の手術をすき、父上にも疎まるゝもその爲でござります。今朝大唐の方がみえたとき、ふと垣間みて、これこそは、此國の男とちがひ、まことの男とたゞお懷かしう存じてをりました。御伴申してあなたのお國へゆくことはわたくしの喜びでございます。

（といつて小洋をみて恥かしい思入。）

林小洋　おゝ、さうきゝますれば御連れ申しませう。

若花　（喜び）え、あのお連れ下さいまするか。ありがたう存じまする。

（とひれ伏す。）

林子洋　さうして此城をのがるゝには。

若花　それは御手びきいたしまする（とうなづき）おゝこれはあなたの御所持の品。

（と懷から、短劍を出して渡す。子洋喜び。）

林子洋　おゝ先刻は、女と遠慮して取りあげられてしまつたが、これさへあれば、たとへ幾人さまたげても……

（と拔いて手にもつ。）

さあ、先生、ゆきませう。

（と立ちまたよろける。若花と唐敖兩方よりさゝへる。城外の叫び聲。またきこえる。三人あたりをうかゞひ、子洋は靴をぬぎかける。この模樣、夜の女兒國の城市をみた書割幕をふりかぶせる。遠く海がみえてゐる。よきころより浪の音。知らせにて切つて落すと。）

第三場　船中

舞臺はすべて大洋の上、中央に艫の高い唐船、舳を下

手にして帆をあげて走つてゐる體、上空には月が皎々として照つてゐる。
船上には中央に子洋もとの姿になり、胡坐にて、臺附の盃を手にしてゐる。右に唐敖。これも盃を手にしてゐる。その間に燕兒、酒瓶を手にしてゐる。艫に多九公、腰かけて膝を抱へてゐる。

林子洋　（昂然と空を見上げ）おゝ空も晴れて一點の雲もない。風は追手ぢや。あはゝ今日はをかしかつたな。丸で夢のやうだわい。

唐敖　全く夢ぢや。恐ろしい惡夢ぢや。

多九公　全くお船主が女になられたのは見たかつたわい。

林子洋　はて、それをいふな。思うても氣色がわるいわい。……さうして太子はどうなされた。

燕兒　へい、今下の室へゆきますと、旦那の召したといふお妃さんの着物をひとりで着てゞござりました。

林子洋　はて氣のはやい。さうしてどうして又こゝへ來ぬのぢや。

燕兒　恥かしがつてござるやうです。

林子洋　おゝ、では多九公これへよんできてくれ。

多九公　おゝようござります。
（と下へはいる。すぐ。）
さあ、何も恥かしがることはない。さあ上へござれ〳〵。

（と多九公、恥かしがる若花をつれて上つて來る。）

林子洋　おゝ、よう似合うた。今までの裝とちがうて花がにはかに開いたやうぢや。おゝ髮もむすばれたな。釵もさゝれたな。はてさう恥かしがることはござらぬ。それがこなたの本來の裝ぢや。

若花　いえ〳〵（と子洋を偸見るやうに）この身の姿は嬉しいとこそおもへ、ちつとも恥かしいとはおもひませぬ。たゞ今までとちがうて何やら物が恥づかしうて（といひさし）それに何やら物悲しうて……
（とうつむく。）

林子洋　おゝ、をさすがに生れた國土すてゝ、知らぬ國へゆく門出ぢや。悲しいも道理でござる。

若花　いえ〳〵さうではござりませぬ。

林子洋　はてではなにとなされた。

若花　あのそれは（とあたりをみて）妾にもわかりませぬ。
（と袂をかむ。多九公側より。）

多九公　おゝ、それはこの年寄がいはう。はじめて女になつてみた男らしい男のお船主、焦るゝに無理はない。中國にもないこのやうな美人、この老爺の橋渡し、これは是非こなたの內方ぢや。

唐敖　（うなづき）まことに不思議の天緣ぢや。こりや老人のいふとほりぢや。

多九公　はてさうきまれば、こなたはそこへ。
（と若花を子洋の側へ押しやる。）
林子洋　はて珍らしく變つたものぢや。したが若花どの、わしはさつき女になつて懲りはてた、こなたは、そのやうなものをきて術なうはござらぬか。おゝそのやうな釵をして頭が重いことはござらぬか。おゝ、耳に金環も下げてゐる。よもあの小さな靴は穿かれまいな。
若花　いえ〳〵。あなたが御好みなされゝば、どのやうな事もいたしまする。
林子洋　えつ、ではあの靴も穿いてござるか。
若花　はい。
林子洋　足がいたみはなさらぬか。
若花　いえ、何のこともござりませぬ。（と熱意こめて）このやうなことはまだなこと。どのやうな辛い事もあなたの御傍にゐてすれば、樂みでございます。
林子洋　はて、しをらしい事をいはるゝ。わしは、はじめて女の心を知つた。まことに男女の心が合うたら、憂いも辛いも理屈はないわい。
多九公　（もとのところに腰かけてゐたが）はて、やつと舵がもどつたわい。これがまことの男らしい男と女らしい女の一對、年寄のわしでさへ見てゐて小氣味がよいほど氣持がえいわえ。先生さうぢやあございませんか。

唐敖　（沈鬱に）うむ、まことに端倪すべからざるは男女の道ぢや。私は今日のことに遇うて、全くの物識らずになつたわい。宇宙の大は、わしの淺い學問なぞには計られぬわい。たゞ男女諧和の道は、男が男らしからず、女が女らしからずなつては破れだわい。
林子洋　あはゝゝゝ、何かゝはりのない海の上にはその様な事もいらぬ。わしはまた男にかへつて女らしい妻を得た。（とふと空に眼をつけて）おゝ、仙蝶がまた來たわい。月があまりにあかるいので浮れ出たのか。おもへば今朝わしの身のまはりに舞うてゐたのは、この前兆であつたのか。
（と左の手に盃をもち、右に若花をたすけて共に立上る。大きな翅の美しい仙蝶二羽舞下りる、子洋盃をさし出す。蝶酒の香をしたつてその縁に止まり、交る〳〵飲む。さうして喜び狂ふやうに二人のまはりを高く低く舞ふ。唐敖も多九公も立つてみる。子洋のこりの酒を海へあけ。若花にもたせる。燕兒立つてきて酌する。子洋、更に蝶をみて、快よげに笑ふ。若花しとやかに酒をのむ、唐敖鬚を執り、多九公と喜ばしげにうなづく。すべてこの模樣。）

――幕――

反黃粱（五景）

小引

唐の李泌の作に枕中記といふものがある。これはかの邯鄲の一書生が夢に一代の榮華をみて、覺むれば、黃粱の飯がまだ炊けてゐなかつたといふのである。我國にも早くから傳へられて、謠曲の中にも邯鄲の作があつて有名である。唐代にはなほ李公佐の南柯記がある。共に莊列の寓意談の意を紹ぐもので、所謂人生一夢の思想を寫したものである。さうしてこの二つは後世の文人の資となつて、これらに倣つた小品は多くの筆記小說の中に散見してゐる。ことに湯顯祖のごときは、玉茗堂四夢の中にこの二つを採つて戲曲としてゐる。それでこれらの物語りが殆ど筆記小說の常套となるに及んで、いつか枕中記の方には、反黃粱といふものが出來た。枕中記、すなはち黃粱夢の反對といふのである。黃粱夢にあつては、貧賤にゐて富貴を夢みて、その一炊の夢なることを感悟するのであるが、反黃粱は、富貴にゐて貧賤の苦楚を夢みて、了得するといふところがあるといふのである。この類の作意は元より內外に類似の作意は珍しくはないが、黃粱夢から脫して來たこの反黃粱の思想にはそれらに比べて、もつと哲學的で且つは一段と深い暗示があるやうに思はれる。同時に原話の黃粱夢に比べては一層切實なものがある。それで自分はこれを戲曲化してみたのである。なほこの反黃粱にも自分の見た丈けで數篇ある。その中、淸の管世灝の影談の中にあるが、最も自分の意を惹いたので、材をこれに仰いでおいた。無論それも原文は數頁の小品で、この作の出所といふまでゝある。大段はやはり自分のまづい創作であることを併せて添へておく。

第一景

正面白きこと雪のごとき壁。
やゝ上手よりに八角形の大窓、その左右に聯、上に額。
下手は帳（とばり）を半ばしぼりたる入口。
やゝ前に蘭を植ゑた青磁の大鉢を臺の上へのせておく。上より鎖で垂れた鳥架（とまりぎ）、鸚鵡がとまつてゐる。前通りは一面に透（すか）し彫（ほり）の大欄間を下し、左右見切は大きな柱で見切る。（もし廣い舞臺ならば、その外はフレームをつける）
大窓の前には支那風の橫長の大椅子をおき、孫倘書、

五十位、一品の衣帶、寛然と腰を下してゐる。下手寄りに、門下の清客(せいかく)、（文人墨客の寄食人(かゝりうど)）甲、乙、丙、丁袖をあはせて立つてゐる。その前に賀禮の使者、さま〴〵の贈りものをのせたる壽卓を前にして、その目錄を讀んでゐる。ずつと末座に僕隷二人控へてゐる。入口にはこなたに背を向けて呼び次ぎの役人立つてゐる。

吹打の樂音。

使者　大爺(たいや)の御前に稟(まを)しあげたてまつる。門下の走狗仇鸞謹んで具(そな)ふ。綵緞十端、金絲帳一頂、金爐一座。

（と讀みあげ、一禮する。）

尙書　（輕く手をあげて）厚く賜物を喜びまする。仇公へよろしう。かなたに聊か宴を設けたれば、一獻過して下さるやう。

使者　はつ、忝けなう存じまする。

（と拳を捧げて拜して退く。僕隷二人、一禮して進みいて壽卓のまゝ、贈りものを手舁(か)きにして入る。）

呼び次ぎの役人　趙學士大人の御使者。

（と呼びあげる。）

尙書　まづ待て、（と清客甲に）あれ止めて下さい。

（といふ。清客甲一禮して、呼びつぎの者に旨をつたへる。）

（呼びつぎの者心得て去る。清客元の席へかへる。）

あゝ、最前から引きつゞいての賀禮の者共に少し疲れはてた。しばらく休息しよう。

清客甲　さやうでございます。今日の五十の御賀、かくまで盛んな朝野の御祝ひもの、御受け遊ばさるゝばかりでも、お疲れは一しほ、しばらく御休息がよろしうござりませう。

尙書　それにもうわしが自ら受くるほどの者も數あるまい。あとは子供らに受けさせよう。さう傳へて下さい。

清客甲　畏まりました。

（と一禮して入口へはひる。）

清客乙　（進み出て）まことに今日はなんと申す御目出度い日でござりませう。明公の御壽誕はもとより、しかもその日にあたつて第一の御孫が登龍門の第一日。既に五人の公子はそれ〴〵顯要の職につかせたまひ、今また初のおん孫の御立身のはじめ。必ずや第一番の御及第はまぎれござりませぬ。

尙書　（髯を撫でゝ輕く笑ひ）あはゝ、幸ひにして我家三代布衣(ほい)無官の子弟なし、併しながら、聖朝人材も數多い。第一狀元は覺束なからう。

清客丙　（進み出て）いえ〳〵和子(わこ)の才識はなか〳〵半白の老儒も及ばず。第一番の御及第にまぎれはございませ

ぬ。それにつけても御當家の福祉。ひとり三星はこの上にのみ耀き、五福ひとしくこゝに聚まると申さうか。當代に外に儔はございませぬ。

清客丁　まことに、明公の福は東海のひろきに比し、壽は南山の長しへなるに比ぶべく、これも偏へに御一代の、御積徳のなす所ともございませう。

清客乙　いかにも、あれ御覧じませ。瑶池日暖かに、柳條風輕く、軟鶯片々の金を綵へし、天も明公の此日に阿るかとばかりの好日。御賀び申すに限りはございませぬ。

尙書　（うなづいて）これも偏へに天恩の渥きのいたす所ぢや。わしはもと父の功によつて身をおこし、中ごろ南蠻を征して功あるといふも、みな忝くも時の御稜威によるところぢや。しかも幸ひにして子供らも聖朝の見捨てたまはざるところとなり、今また孫が、第一の魁元を得ることゝもならば、滿足はこの上もない。……

（この時あなたにてどつと歡聲あがり、吹打一きは盛んになる。）

や、あの騒ぎはなんぢや。にはかに歡びの聲をあげるは。

清客乙　さやうでございます。多分今日お招きの徘優どもが、滑稽な科をして、來賓の方々を笑はせてをるのでもございませう。

尙書　さやうか。いや〳〵さうでもないやうぢや。

（此時吹打また盛んに歡びの聲あがり、清客甲、入口よりはひつてくる。）

清客甲　はつ、御申付けの通り、公子方へ申上げました。

尙書　おゝ、御苦勞でござつた。さうしてあの騒ぎは何事ぢや。

清客甲　さ、その事でございます。今日の御壽宴の日が、はからずも傳臚の日にあたり、明公の御長孫、第一の魁元まぎれあるべからずと、御來賓の上席、李侍郎公、自ら杯を執つて、公子の前に賀せられ、一座は狂するがごとく喜びの聲をあげてをるのでございまする。

尙書　（莞爾として）さやうか。……それにしても、もう程なう知らせのある刻限ぢやが……

清客甲　さやうでござりまする。例の知らせの鈴の音がもうきこえてまゐることでござりませう。したが、あの通り、喧すしい宴會の樂音にまぎらされ、こゝ許までは、聴えますまい。しばらくあの樂音をとゞめさせませうか。

尙書　あはゝ。さうもなるまい。

清客甲　いや〳〵、御宴席にある方々は、時の顯官とは申せ、多くは御門下の方々、明公の仰せとあつてとゞめらるゝに、なにしに御遠慮がございませう。

清客乙　さやうでござります。しばらく樂をとゞめて、御令孫の捷を報ずる鈴の音をまつ。これ、とりもなほさず、

今日の賀宴をいやが上にもよろこばしきものとならしめまする。わたくしが申してまゐりませう。

（と戸口へゆき、手をあげて人をよぶ、呼び次ぎの役人出る。清客乙旨(むね)を含める。役人一禮して去る。吹打止む。清客乙元の席へかへる。）

尙書　いやそれ程にせずともよいに。

清客甲　いや〳〵もう刻限でござりまする。（と聞耳立てて）や、遠くきこゆるはかの知らせの鈴の音ではござりませぬか。

清客乙　（これも聞耳たてゝ）おゝ、たしかにさうぢや。いよ〳〵御知らせがまゐりました。

清客丙　なるほど御門前へ向つてまゐります。

清客丁　おゝ、いよ〳〵まゐりましたな。

（と清客たち騒ぎ立つ。これにかぶせて鈴旗の鈴の音、次第に近づいてくる。同時に歡聲盛んにおこる。）

尙書　（衷心の喜びをあらはして）あゝ、さては孫めも及第したか。

清客甲　もとよりでござりまする。（走つて入口へゆき）府中の人々、みな御門前へ馳せ出でゝまゐるとみえまする。御免くださいまし。わたくし共もいつてみてまゐりまする。

（と走り出る。つゞいて他の清客らも走り出る。歡聲また盛んにおこり、近くは廊下を馳せちがひ、「おめでたう。おあたりになりました。」「お目出度う、お中りになりました。」と挨拶を交はす聲する。尙書も立つて室の中央へすゝみこれをきいて滿足の思いれ。吹打また盛んにおこり、清客甲、乙、丙、丁喜色を滿面に漲らして入つてくる。入口には家人ら、犇(ひし)めき來れる姿みえる。）

清客甲　まことに手の舞ひ、足の蹈みどころを知らぬとは、この事でございます。わたくしは生れてこの方、かゝる喜びを覺えたることはござりませぬ。

清客乙　唯今かなたにて、お知らせを持つてまゐつたる役人どもは、旗を立て、お杯をたまはつてをりまする。

清客丙　追ひ〳〵第二、第三の御知らせをもつたる者共もあつまつてまゐりませう。

清客丁　彼等にも御挨拶をたまはりませうか。

清客甲　御奧の方々をはじめ、府中の人々、また來賓の方方にもおゆるしを蒙らば、これへまゐつて、御祝ひを申しのべようとのことでございまする。正堂へ御いでなされてお受けあそばされてはいかゞでございませう。

尙書　あゝ、これもひとへに聖恩のかぎりなきのいたすところぢや。（と感極まつて瞼(まぶた)をおさへる）まづ遙拜してお禮を申さう。

く。)

(と跪き、北の方を拜する。淸客らも感きはまつて泣

淸客甲　まだ御喜びはそれのみならず、和子の才識拔群とは申せ、まだ貢生の中の最幼年、四十八名の中の第三名とは、まことに、きゝも及ばぬことでござります。

(此時すでに立上つたる尙書、ふとこれをきゝ、顏色かはる。)

尙書　な、なにといふ。

淸客甲　(心づかず) まことに四十八名の中の第三名、御奧の方々にも、公子方もみな淚をこぼしての御喜びでございまする。

尙書　第、第三名。

淸客乙　さやうでございまする。又とない御手柄。われらはたゞ明公の御福祉のかぎりなきに、今更踴躍いたすばかりでございまする。

淸客丙　まことに今夕の御壽宴には、更に第三名の張燈を添へ、重喜の御宴、あゝ今よりその盛んな有樣が押しはかられまする。

淸客丁　まことに御目出度い限りと申さうか、われらまでも今日のこの御宴は、一生忘れえぬ日となります。

淸客甲　さ、御奧の方々にも、來賓の方々にも、みな正堂へおあつまりにて、御待うけでござります。すぐに御出座あそばしまし。

尙書　第三名……第一魁元ではないといふのか。

淸客甲　はつ、第一ではござりませねど、それにもひとしい第三名……

尙書　でもやつぱり第一名ではないわい。

淸客甲　はつ。

尙書　(息ぐるしいやうに) わが長孫のはじめての發途が第一名でない……そのやうなことがあらうか。此度の試驗官のものどもにも日頃より疎かはない筈ぢや。それに第三名……えい、第三名とするほどならば、一層、第三十名でも、第三百名でもよいわい。えい、彼奴ら、宗師學道の大任にありながら、迂拙かくのごとく、時務にも通ぜざる無用の腐儒輩、何の眼を具へて、わが孫の學術文章を第三名とは鑑定したぞ。第三名を以て、發途するほどならば、一生を空しく齷齪して、白髮にいたつて、僅に遠き州縣の知府知事をもつて終らうわい。わが長孫が、知府知事をもつて……彼奴ら、日頃の好みを忘れをつたか。別して此程よりのわが心づかひを忘れをつたか。但しわれを侮どるか。……えい、聒ましい。あの樂をやめぬか。えい。やめぬか。えい。やめぬか。

(淸客一同呆氣にとられてゐたが、此時はつと淸客甲は戸口にゆき、合圖する。戸口の人々散じ、吹打忽如

と止み、寂となる。淸客甲元の席へかへりて。）

淸客甲　（おそる〳〵）かなたには、あまたの方々がお集まりでございまするが、いかゞ申上げませう。

尙書　えい、今不快ぢやといへ。今は誰にもあひたうないわい。追々に、聞き傳へて賀禮の人々もあつまり來ようが、みな子供らにあはせい。おれは會はぬわ。會うてこの上の不快をつのらさうか。なほ今夕の宴も第三名の燈火を揭ぐることはならぬぞ。

淸客乙　えつ、御家門を燿かすべき第三名の燈火をも……

尙書　おつ、第一名たる元燈を揭げえずして、第三名の燈火を揭げえようか。のみならず、爆竹のたぐひも、すべて喜びを表すること無用。たとひ酒宴は夜を徹するも、外にかゞやく燈火はすべて揭ぐるな。壽宴の賀燈もみな片付けよ。

淸客丙　え、御壽宴の賀燈まで……それは又あまりなる遊ばし方……

尙書　やあ不快で、壽宴もなにもあらうか。すべて片付けよといへ。

淸客甲　はつ。

尙書　（前をみつめて）……せめては燈火をも揭げずば、彼奴等もわが心をしりをらうわい。（といつて顧み）やあ、お主ら、まだそこにゐるか。えゝ、みなゆけ〳〵。

（淸客一同はつと狼狽へ、そこ〳〵に一禮して入る。
尙書なほ前を睨んで立つ。）

尙書　えゝ、試驗官どもはまだしも、辛なきは聖上の御心ぢやわい。已れ南蠻を征して、炎熱蹠を焦くがごとき中に、瘴癘、蛇毒とあらそひ、山野を走ること猿のごときかの出沒自由の蠻族どもを相手に、轉戰百回、寒暑を代ふること三度、漸くその巢窟をつくし、はじめて功を收めてかへりきたれるとき、聖上には階下に出迎へたまひ、畏けれど、御淚を袖にかけ、深くもわが勞を犒ひ、わが子孫三代は見捨てたまはずと宣ひしこと、今もなほ耳底にあるに、それになんぞやわが長孫を第三名のまゝ、外に見過したまふ。かの時われ力を盡して南蠻を征せずば、この國あやふく、今君のこの中土を保ちたまふこと難し。しかるに漸く太平になれ、早くわが勞を忘れたまふ。かくては子孫のことも心もとないわい。賴むに足らざるは、君の御心ぢや。

（と激怒して拳を握りつめてゐたが、興奮の爲に、にはかに眩暈を感じて、頭へ手をあて。）

尙書　はて心わるい。にはかに目まひを覺ゆる。はて誰ぞ居らぬか。……邊りが暗むわ。

（といつたが、體を支へかねてパタリとたふれる。すると突然上手よりの大窓の障子するりとあき、白髮道

裝の老人、杖をたづさへ、忽然と半身をあらはし、窓を越えて入りきたり、侗書の傍らに立つ。侗書、ふと心付き身を起し、これをみて。）

やつ、何物ぢや。

（と咎める。）

道士　いや見らるゝとほりの老道士でござる。

侗書　何としてこゝへ入つてきた。

（と立つてきつとなる。）

道士　いや、今日は公が五十の壽宴、およろこびを申しにきました。したが、公には何やら心よからぬやうに見受けられまする。とかく世上の事はまゝならぬが常。公はもとより仙家の宿因あり。もはや浮世の榮華をすて、この上は長生をたのしみ給へ。

侗書　なに長生……

（とつくぐ＼道士の風貌をみて尊敬するこゝろ。）

さては尊道には、貴き大仙の化現におはすか。

道士　（笑みて）いやく＼さやうなものではござらねど、公のたまく＼不平のことあるをみて、機縁の熟せるをみて、まゐつたのでござる。

侗書　あゝ、（喜びの聲をあげ）元より長生は願ふところ、まことにをしへ給ふか。

（と長揖する。）

道士　いかにも、公は日頃心を勞すること多し。しばらく先づ塵外の境に遊んで、心を養ひたまへ。まづこなたへ。

（と道士再び窓口へゆき、窓の上に立ち、侗書を招く。侗書も窓口へゆき、おなじく窓の上へ立つ。同時に窓の中をみて。）

侗書　やつ、この深い坑はツ。

（と叫ぶ。道士、ぱつと侗書をつく。侗書、あつと叫んで窓の中へ落いる。）

道士　往け。さうして新たに生れよ。

（と杖をもち身を反して大笑すると、全景まつ暗になると、闇の中から赤子の生れでる初聲、つゞいて泣聲。）

第　二　景

次第に全景明るくなると、左右の柱と欄間は元のまゝ、（これは以下景のかはる毎におなじ）正面は貧家のさまと變つてゐる。上手よりに汚れた布を垂れた寢臺、下手に入口。床几二三脚と卓一つ、その外に目立つものもない。卓の上には粗末な燈盞、燈心が點してある。寢臺には、産婦が身を横へてゐる。傍には、産婆がうしろ向きで、赤子に産湯をつかはせてゐる。赤子の泣聲つゞく。外は冬の夜、時々風の音がきこゆる。

産婦　（少し首をあげて）小母さん。小母さんどうしてそ

の子はさう泣くのでせう。

産婆　さあ、私が抱いて産湯を使はせてゐても、手をもがいて、さつきから泣きつゞけてゐるよ。まるでなにか氣にいらぬことでもあるやうだよ。

産婦　どうしたんだらう。みんなはじめて生れる子は、そんなに泣くの。

産婆　なに、こんな冬の晩で、お腹の中から出て、寒いのだらうよ。今ぢきに泣き止むだらうよ。心配しないでおいで。

（と産湯をつかはせ終つて、襁褓へ包みながら。）

それ、暖たになつたぞ。暖たになつたぞ。もう泣くなよ泣くなよ。あれ、まだ泣きやまないね。まあ、だが可愛い子だよ。それごらん。

（と産婦の傍へつれてゆく。産婦みて。）

産婦　まあ、これが私の子、抱かして下さい。

産婆　さあ／＼、あんまり泣くから乳房をくゝめてやるがいゝよ。

（と抱かせる。子泣きやむ。）

産婦　まあ、この子は泣きやんだが、口をふさいで乳を含まうとはしませんよ。まあどうしたのだらう。

産婆　どれ／＼、成程、なにぢきにお腹が空いてくると吸ひつくよ。まあ本當にお前、手柄だよ。こんないゝ男の子を生んで、今に陳秀さんが歸つてくるとどんなに喜ぶか知れないよ。

産婦　小母さん。どうもこの子はへんだよ。どうしても乳房を吸はうとしない。もしか何かの生れ代りぢあやないかしら。

産婆　なんだよ。氣味のわるい。そんなことをいふものぢやあないよ。

産婦　でも小母さん。私、子供の時に、わたしの村でみたことがあるのだよ。生れ代つてきた子が、前生のことをよく知つてゐたの。その子のお父さんが、隣の村のある人に金を借りてゐたの。するとその人が死んでしまつて、その家の人も誰も知らないので、いゝ幸ひにしてゐると、その人が、貸金を促りにその子になつて生れてきたのだつて。その子がやがて死ぬときさういふと、お父つさんは、發心して、坊さんになつた。それでわたしもその人を見て知つてゐる。この子は、もしかわたしたちを困らせに生れてきたのぢやあないかね。

産婆　なにをいふのだよ。そんなことがあるものかねえ。

産婦　でもこら、こんなに口をしめてどうしても乳をのまうとしない。……小母さん、わたしほど不運なものはないのよ。四年前の大飢饉の時に、家中が困つてたうとうわたしは賣られて、悪い奴の手にわたり喰べられること

になつたの。ある旅舍の裏手で俎板の上へ載せられて、聲を上げて泣いてゐると、陳秀さんが、丁度居合せて、わたしを貰つてこの村へかへつてきたの。それでまたその歸途で强盜にあつてみんな資本をとられてしまつたの。この村へかへつて陳秀さんは日雇をしてゐるけれど、これから先、どうなるのだらう。

産婆　だれも一生の中には、いろ〳〵苦勞するものだよ。こんない丶子が生れたのにそんなことをいふものぢやあないよ。

産婦　でもこの子の運がい丶かしら、さつき產れるとき、私は夢中でゐたが、ぴゆう〳〵風の音がして、屋根の上で梟が啼いてゐた。あれは大變、緣起がわるいのだつていふぢやあないか。

産婆　そんなことはないよ。わたしにはきこえなかつたよ。

産婦　たしかに啼いてゐたよ。

（この時、風の音、一きは烈しくなる。）

あ丶、又風だねえ。陳秀さんは今夜歸つてこないだらう。

産婆　どこまでいつたのだえ。

産婦　日雇で雇はれて、三日泊りのところまでいつたのだよ。今日かへるとこなのだけれど……

産婆　もうおそいから明日かも知れないね。

産婦　あ丶、外は風が寒いからね。

産婆　それでも家に米も、薪もあつてよかつたねえ。

産婦　あ丶、わたしが生むのは知れてゐたけれど、丁度お金がなかつたので、三日泊りの用を云ひつかつて、それで、米と薪を置いて出ていつたのだよ。

産婆　うむ、さうかい。深切な人だね。

産婦　あ丶、もとはあれでも學問をした人なんだつて、やつぱり不運なのだねえ。……あ丶なんだか、眩暈がしてきた。

産婆　あ丶、おまへ、さつきから少し饒舌りすぎたからだよ。少し氣をおちつけなけりやいけないよ。

産婦　おや、この子は、乳を吸ひはじめたよ。

産婆　ほれ、ごらんな。つまらぬ氣を揉むものぢやあない。……おや、誰か、きたやうだ。あ、陳秀さんが歸つてきたのだね。

（と戸口へゆく。戸口ひらいて陳秀出る。年老いた男である。粗末な旅裝、笠をたづさへてゐる。）

おゝ、陳秀さん。よく歸つてきたね。ま、お喜び。生れたよ。〳〵。

陳秀　おつ、これは小母さん。私もさうだらうとおもつて、あんまり寒いから雪になるから、泊つていけといふのを振きつて歸つてきた。さうして何時生れました。

産婆　たつた今方だよ。さうしてお喜びよ。男の子だよ。

陳秀　え、男の子。あゝ、さうでございますか。
産婆　まあ、それになんていゝ子だらう。さ、早くいつてみてごらん。
陳秀　え、もう見てようございますか。
産婆　まあ、お前さんの子ぢやあないか。
陳秀　え、お前さんの子……あゝ、わたしはこの年になつて、はじめて子を持つたのだ。（とうれしげに笑ひ）ではみせてもらひませうか。

（と寢臺の側へよる。）

産婦　（やゝ首をあげて）あゝ、お前さん、よく歸つてこられたね。
陳秀　おゝどうした。男の子が生れたのだな。
産婦　あゝ、ごらん、この子だよ。
陳秀　どれ〳〵。（と抱きあげる）おゝ、いゝ子だ。いゝ子だ。これは小母さん、いゝ子だね。
産婆　あゝ、いゝ子だとも、額もひろいし、耳も大きい。いゝ相をしてゐる。今に出世するよ。
陳秀　あゝ、全くいゝ子だ。
産婆　しかもお前さんに、宛然だよ。ほれ、目つきといひ、鼻つきといひ。
陳秀　えゝ、似てゐますか。えへゝ、なるほど、あはゝ。これで先祖のあとも繼がる。小母さん。わたしも、貧乏な家へ生れて、自分の家を興さうと、少しは學問もしたが、運がわるくて、中年から商人になつた。それで女房も持てず、年を老つて女房を持つと、少しは蓄めてあつた資本を失つてしまつた。これ（と赤子に）お前は出世しろよ。出世しろよ。あゝ、小母さん、全く似てゐる。まつたく似てゐる。これでおれのあとも出來た。だが、おれに似たのはいゝが、大きくなつて、己のやうに人の傭になつて了るなよ。あはゝ。

（この途端、赤子またけたゝましく泣き出す。）

おゝ〳〵泣くな〳〵。おやこいつ不思議だ。もがいておれの手から飛び出さうとする。お父つさんだ、お父つさんだ。ほうれ〳〵。

（と兩手で腰をかゞめながら持ちあげる。赤子ます〳〵泣く。全景次第に暗くなる。）

第　三　景

再び明るくなると、上手に家の横をみせ、正面に窓。簾をかけてある。つゞいて下手へ正面をみせた建物中央に出入口、上に村塾の二字を横書してある。つゞいて、あとへ下げて門。門の扉は、格子になつて、外が透いてみえる。この門の側より小川、それをへだて、楊柳桃花の村をみる。下手前は、おなじく川をへ

だてゝ隣家の墻。これにも桃花が花をつけてゐる。舞臺前は庭、よきところに、梨の大木、白い花をつけて、軒を蔽うてゐる。その下には庭石の俎板のやうな卓を中にして陶器の凳が二つ三つ据ゑてある。扉口のそばに空を仰いで李龍立つてゐる。二十八九歳、儒巾、藍衫、色白く氣象高くみえる。かの孫尙書が生れ代つた姿である。

李龍　あゝ、またあの幻がみえてゐる。あの妖道人めに咒はれて、陳家へ生をかへたとき、聲を嗄らして「おれは孫尙書だ。妖道人の爲におとし入れられた。救へ、救へ。」と叫んでも、人の耳には、たゞ泣き叫ぶときこえるばかり、はじめて父の手に抱かれ、傭工の子と知つたとき、身をすてゝ死なんとあせつても、かなはず、むなしく數日をすごす中、はやわが元の骸はそこなはれたるを思ひ、京畿の地は遠くして歸るべからず。……はや二十八年、三たび父を失ひ、二たび母を代へ、今は村塾に頑童に書を敎ふ。春光の邐迤たるごとに、かの五十の壽宴の日を思へば、恍として夢のやうぢや。……あゝ、もうそのことは、忘れてゐる筈ぢやに。

（と悵然とする。この時上手の簾をあけて、妻の朱氏顏を出す。）

朱氏　もし、そこでござりまするか。

李龍　（振むいて）おゝ、なにか用か。

朱氏　いえ、用ではござりませぬが、先刻から何をなされておいでなさるやらとおもひまして。

李龍　あはゝ、あまり春の日の長閑なに、うつとりとしてゐたばかりだ。お前も用かなかつたら、こゝへ來い。

朱氏　はい。

（と簾を下し、やがて中央の扉から出てくる。二十三四の美人。手に赤子をかゝへて出る。）

まあ、今日は長閑で、風もなく、何といふよい日でござりませう。向ふの山が、眩しいほど、光つてみえまする。

（と二人立竝んで、向ふをみる。）

李龍　（赤子をみて）おゝ、坊は今ねてゐるのか。

朱氏　まあ、ようねてをりまする。

李龍　おゝ、さうか。

朱氏　まあ、（と四邊をみまはして）今日は城内の人たちは、袂をつらねて、野に山に出て、遊んでゐることでござりませう。

李龍　うむ、（と憂鬱に）お前も行つてみたいか。

朱氏　（にはかに夫の心を覺りて）いゝえ、私どもは、田舍にゐる甲斐には、この春の光りをかうして家にゐて知ることが出來まする。

李龍　（ひとりつぶやくごとく）いつまでもおれも、村夫

子ではゐぬ。お前もそれを待つてゐる。舅御もそれを待つてござる。おれにも子が生れた。今年は、せめて及第するであらう。

朱氏　まあ、さうお急きなさることはございませぬ。わたしは、かうして暮してゐますれば、仕合せでござります。貧しい中にもあなたのやうな夫をもち、かうして可愛い者も出來たのでございますもの。

李龍　あゝ、おれは、貧家に育つて、晝は餠を賣り、夜は書を讀み、時には夜讀の油に事をかいて、土地廟の常燈明のあかりを借りてゐたを、お前の舅御に見出され、やや讀書の便りをえて、お前まで妻として下された。せめては一度世に出ようと、志を勵ましてみても、度々の試驗にまだ及第することができぬ。お前も、舅御もさぞ齒がゆいことであらう。

朱氏　まあ、何でそんなことを思ひませう。隨分頭が白くなつても、なほ年をいつはつて、童年の試驗をうけてゐる人も多いとのことでございますもの。まだお若いのでございます。お急ぎなさることはございますまい。

李龍　だが、おれももう三十だ。隣の陶氏の子も、この間までは、子供であつたが、もう今年は、丁年で、おれと一緒に試驗をうけた。しかも家富み、あまたの館師を邸へ招いて、制藝にすぐれ、秀才だといふことだ。おれも城内の試驗場で出あうたが、中々に侮れん。それに城内にも今年はあまたの秀才が出た……あゝ、たつた一度、及第すればよいのだ。それからのことは、おれの伎倆にある。知事となつて治績をあげるも、台閣にすゝんで燮理の才をみせるのも……あゝ、たゞ一度の及第が、難いのだ。これを通らねば、みな畫餠だ。一介の令とさへなることが出來ぬ。

朱氏　あゝ、ほんとにそれをおもふと、あれほど、夜は更たけるまで、御勉强をなさつて御及第がないかとおもふと、たゞそれがおいとしうございます。

（とさしうつむく。）

李龍　あゝ、それも是非がない。おれは晚學で、十分な時とてもない。

（と朱氏が顧み、ぢつとその面をみて。）

あゝ、それにしても、おれはお前の舅御の世話にあづかり、お前を娶つたも、やゝ讀書の便りをえて一度世に出ようといふ心に外ならなかつた。それをやさしいお前のやうな妻を得て、おれの半生の不遇の中にも、うれしい仕合せをえた。

（とぢつとその肩へ手をかける。）

朱氏　（泣いて）なんの、わたしは先の連あひに別れて、寡婦でゐたを、緣あつてあなたのやうなお人の妻となつ

て、子までもつたは嬉しうてなりませぬ。どうぞ見すてずに下さいまし。

李龍　あはゝ、(と强ひて笑ひ)おれの母は三度夫を代へた。それも私を養ふ爲であつた。さうして育つたおれが、なんでお前を見捨てよう。お前のやさしい貞節がたゞうれしい。

(朱氏無言に泣く。李龍話頭をかへて。)

あゝ、つまらぬことをいつて、お前を泣かせたにすぎん。……さういへば、お父つさんが、この十日ばかり見えぬが、どうしたのであらう。

朱氏　さうでござります。多分急がしいのでございませう。

李龍　いや、三日に一度はみえたお父つさんだ。あとで己がいつてみよう。ま、もういゝ。今年は及第するかもしれぬ。此間もいうた朝廷からこの州へつかはされた學道は今の賢臣だといふことだ。或はおれの文章を拔かるゝかもしれないわい。

朱氏　まあ、さうなつたら嬉しいことでございませう。

李龍　おゝ。

(この時小川の向ふへ下手から、李龍の朋友、潘進、出る。やゝ態度に滑稽なところがある。手には扇を持つてゐる。すぐ李龍をみかけ川向ふから聲をかける。)

潘進　おゝ、李君、家にゐたね。やあ、奥さんも、久濶でした。

李龍　(心付いて)おゝ、潘君、よく來たねえ。

潘進　いや、今日はあまり天氣がいゝので、南郊は城内のすべた共が押出して一杯さ。それで雜沓をさけて、この北郊へ、君を訪はうと出てきたのだ。

李龍　さうか、さあ入つてくれたまへ。

潘進　ありがたう。

(と門の方へまはる。)

朱氏　(李龍に)御書齋へ御通し申しませうか。

李龍　いや、却てこゝが霽れ〴〵してよからう。

朱氏　では御茶の支度をしてまゐりませう。

(と扉口へ入る。同時に潘進門をあけて入らうとして。)

潘進　おや、この門はしまつてゐる。明けてくれたまへ。

李龍　おゝ、さうか。

(と開ける、潘進入つて。)

潘進　あはゝ、この好日に閉戸先生とは驚いたねえ。

李龍　あはゝ、おれを訪ねてくる人はない。

潘進　ところがおれがある。

李龍　まことにさうだ。よくきてくれた。さあ、かけてくれ給へ。

潘進　ありがたう。

（と二人、甕へかける。）

李龍　時に城内には、かはつたこともないか。

潘進　さあその事だ。喜びたまへ。今日あたりは、及第の進士の名が發表になりさうだといふ事だ。

李龍　なに今日あたり發表になる。……さうして君は、又どうして家にゐないのだ。

潘進　あはゝゝは、おれは落第にきまつてゐる。また落第してくれなくつては、困るのだ。今度落第したら、親父も諦めて、もう進めまい。……だが、君は今年こそ及第だ。この州の名士で、文章學術、鄉黨の冠たる君だ。それが今まで、平凡庸俗の宗師學道どもが、この州へ派遣せられてゐた。それで君も志を得なかつたのだ。それが今度は、この州の先輩で、淸廉の聽えの高い柳公だ。しかも近頃きいた所では、君の名を知つて、この州へ來ると第一に口にしてゐたといふ話しだ。今度こそこの州の第一の魁元は紛れない。それで今日は知らせ旁、祝にきたのだ。

李龍　あゝ、ありがたう。しかし今度は試驗場で、にはかの腹痛で、十分な考慮を盡すことも出來なかつた。

潘進　なに君の才識を向ふで知つてゐてくれてゐるのだ。さうして州の先輩として君は公のところへ名刺を呈したらう。

李龍　いや、しなかつた。おれは、いつもたゞ試驗をうけるだけだ。

潘進　うむ、さうか。（と一寸暗い顏をしたが）却つてその方が、淸廉な柳公にはむかへらるゝだらう。……おれは君も知つての通り商家の生れだ。それでなまじひに童子の試が通つたものだから、親父がにはかに力味だし、家門の譽れだのなんのといつて館師を雇ふやら、大さわぎをして、おれを老爺大人にしようと骨を折つてゐる。ところがおれは生れついて商ひが好きだ。南船北馬到る所で、女を買つて、金を儲ける。それなら人後に落ちないつもりだ。いつもさうして飛び出すと連れかへつて來られて、制藝の、なんのと、七むづかしいことをさせられて、泣いて賴んでもきかれない。第一おれが萬一、及第して州の令か、知事にでもなつてみろ。奸通の婦が別嬪で、乙な流眄でもしられろ。すぐにぐたぐたになつて、あべこべに亭主を罰してしまふ。家門の譽どころか。飛んでもないことだ。親父はそこへ氣がつかず、不孝の子の、親の心子知らずのと、泣いて騷ぎまはるのだ。人の子の擧つて官とならうとするのは、今の國家の通弊だ。……だが、君はちがふ。君のごとき人をしてはじめて官となすべしだ。君の雄才をこんな邊鄙な州の片田舍へ埋めておくといふことがあるものか。おれは諸州を歩い

て、多くの名士に接したが、君ほどの者はない。それで、いつも君の名を擧げて、經綸文章を話すと、みな敬を表してわが州の人あるを喜んでくれるのだ。おれは落第するのは、あたり前だが、君はどうしても今年は及第させずにはおかないのだ。

李龍　ありがたう〳〵。おれを知つてくれる者は君だ。

潘進　（はら〳〵とおちる涙を拂つて）おれみたいな我殺な奴が、どうしたことか、君の知遇を受けて友たること久しい。さうしていさゝか君を知つてるつもりだ。

（といつたが、ふと思ひ出したやうに。）

おゝ、さうだ。おれは城内で、をかしな噂をきいたが、お舅御さんのことは、本當かい。

李龍　（はつと驚く）なに、お父さんのこと。いやなにも知らない。この二三日あはぬので心配してゐたが、どうかしたのか。

潘進　なに、なにも知らない。それは可笑しい。實は……

（と身をすゝめようとする途端。朱氏、茶器をたづさへて出る。潘進にはかに口をつぐんで立つ。）

朱氏　（茶器を卓へおいて）まあ、どうぞ御下に。

潘進　ありがたうございます。では御免下さい。

（と丼びかける。）

朱氏　なにも田舍のことで、おかまひ申せませんが、どうぞ、御ゆつくり。

（といつて一禮して入る。それを見送つて何か考へてゐる。）

李龍　一體、お父つさんが、どうしたといふのだ。早くきかせ給へ。

潘進　成程、失敬だが、奥さんは美人だ。わけてこの頃は、一段と、氣高いところが出て、縹致がまされた。

李龍　潘君、なにか、妻に關することか。

潘進　うむ、（とうなづいて、聲を潜め）君も城内に兩翼虎といふ破落戸がゐるのを知つてゐるだらう。有名のあばれ者の上に、親父が巡檢の官にゐる。それで勢ひに乘じて亂暴してゐる。仇名の通り、虎に翼を添へたやうな奴だ。ところが、そいつが奥さんが、まだ家にゐた時分、妻によこせといつた。

李龍　それは知つてゐる。お父さんは、それを拒んで、わたしに添はせたのだ。

潘進　さうだ。それで、あいつもそのまゝになつてゐたが、近頃奥さんが、家へかへられたところを垣間みて舊病再發したのだ。それで、舅御をよんで、君のところから取かへして、よこせといつたらしい。無論そんなことを舅御がきかれる譯がない。すると、兩翼虎め、拳を振つて、舅御を撲つたといふのだ。

李龍　なに。
（と顔色がかはつて立上る。）
潘進　無論大したことではない。舅御も店には出てゐるやうだ。それに長者のことだから、君に知らして心配をかけまいとしてゐられるのだ。おれは無論知つてることゝ委しくきかうとして、却てわるいことをいつた。
李龍　いや、そんなことはない。……だが、妻にはきかさぬ方がいゝ、心配するから。あとで君と城内へいつて様子をみよう。……それにしてもその兩翼虎といふ奴は、父の權に倣つて不埒な奴だ。兩度までこの無禮を敢てする。……
潘進　それにつけても、君が一たび及第しさへすれば、彼奴らはもう息をひそめるのだ。文場に苦しむ豪傑の士を知らず、いたづらに落第の秀才と侮どつて、かくのごとくなのだ。それも彼奴らが思ひ知る日もこの一兩日の中なのだ。
李龍　うむ、（とやゝ快よげに）願はくはさうありたい。今年の文場には、惱みはあつたが、最も心を盡していさゝか恃む所もある。……
（この時遠く鈴の音、潘進聞耳たてゝ。）
潘進　や、鈴の音だ。やつぱり今日だつたのだ。（といつて門口へ出て）おい、いよ／＼中つた。いよ／＼中つた。このあたりに外に試驗をうけた者はない。鈴の音がこの村へ入つてくる。此方へ向つてくる。（とすぐ引返して李龍に）おい君、いよ／＼中つた／＼。
（と躍る。）
李龍　（さすがに聲に慄へを帶びて）いやこの村には、おればかりでない。隣家の陶氏の子もある。
潘進　おゝ隣りの靑二才か。あんな者、去年はじめて童子の試が通つたのだ。しかも州の勢家に請託するところがあつたといふ噂さだ。あんな奴が中るなら、君は無論のことだ。
（この中、鈴の音、烈しくいよ／＼近くなる。潘進かけまはつて、戸口へゆき。）
潘進　奥さん／＼。李君がいよ／＼中りましたよ。中りましたよ。
（と叫ぶ。戸口をひらいて朱氏出る。）
朱氏　はい、きいてをります。ほんとでございますか。
潘進　まあ、おきゝなさい。こゝへ今きます。
朱氏　おう。
（とよろめくやうに階を下りる。）
李龍　（正面をみて）あゝ愈、待つてゐた時がきたか。（と朱氏に）祝儀にやる金が、今あつたか。
朱氏　（懷より巾着を出して）はい、とうから、別にして

おきました。

（と出す。李龍それをみて思はず、二人顔みあはせて無言に落涙する。潘進それをみて、拳て涙をはらひ。）

潘進　さあ、もうそこへきた。門を一杯にひらいて、出迎へませう。

（と李龍夫婦をおして門のところへゆき、李龍夫婦は門の上手に、潘進は門を押ひらいて下手に立つ。鈴の音いよ〳〵近づき上手から「捷報貴府老爺、陶充。高中第三十二名亜元」と二行にかいた板をかつぎ、鈴を振つて三人の報喜の卒、出る。潘進は迎へようとして、思はず字をみてはつと下る。夫婦も思はず一歩出る。卒は門へ入らず、前をとほる。三人棒立して見送る。卒はこれを知らず顔に鈴を鳴らしながら、川向ふを通つて、隣家の墻へかくれる。やがて隣家にあたつてわつと喜びの聲あがる。それに交つて「おめでたう。お中りになりました。」「おめでたう。お中りになりました。」といふ男女の聲高に挨拶をかはす聲がきこえる。三人の頭は次第にうなだれる。潘進たまらず。）

潘進　なに、なに、まだ失望することはない。報告人の奴等は、澤山祝儀の貰へさうな所へ爭つて先へとび出すのだ。まだ第二報、第三報もある。まだ落第とはきまらない。さうだ。おゝ、あの報告人の奴等にきけば、わかるわ。……一寸きいてくる。

（と門の外へかけ出て、隣家の方へ入る。朱氏、李龍をみて縋つてたまらず泣く。李龍も朱氏の肩へ手をかけ、泣く。）

（又わつと家に喜びの聲あがり、潘進ひよろ〳〵として歸つてくる。さうして門内へ入ると、地へ倒れてしやくり上げて泣き出す。李龍取支へて起し。）

李龍　潘君、どうしたといふのだ。

潘進　あゝ、君、君、君（と李龍にすがり）君の名は、及第の人の中にはないといふのだ。

（とまた泣く。）

李龍　さうか。（と悲痛に）それも是非がない。まだ時がこないのだ。

（潘進大地へどうと坐して、歯がみをして。）

潘進　えいこの州の先輩で、清廉のきこえも高いといふ柳公は、何の眼を具へてゐるのだ。永く官をなして、やつぱり人なみに耄けてゞもしまつたのか。こんな粗漏な考試をして、なほ邦家の爲に、人材をあげるといふのか。後進の英雄をむなしく塵に埋めて、なほ朝野に傲つて、清廉の名をかゝぐるのか。……あゝ、李君、おれは……おれは……君の胸の中をおもふと……

（と又泣く。李龍その肩へ手をかけ。）

李龍　もうよい。もうよい。……柳公がおれを知らぬとて恨むことはない。……志を得れば誰しも、むかしの功名に苦しんだことは忘れがちだ。まして、柳公は今の大官だ。ことに一村夫子の文章に深く目力を費さうか。今年は幕僚の手にまかせず、親しくみられたといふだけでも滿足だ。まだおれの力量が、人を感せしむるに足りないのだ。又の年を待つばかりだ。さあ、もう、立ちたまへ。

（と扶け起す。）

潘進　あゝ（と李龍の顏をみて）君はさういつてこの苦しみに堪へるのか。

李龍　うむ。（と微笑をつくり）文場にいつては、たゞ快心の文をつくり、場後にあつては、慟哭せず、それが男子だ。

潘進　あゝ（と立つて）まつたく君は……

（と感じて、頭をたれる。）

李龍　（しばらく間をおいて）凡そ、われら讀書人は、人を尤むるよりは、己に克つことが大事だ。人を尤めなければ、德はます〳〵宏く、己に克てば、學はいよ〳〵進む。目前の躓きは、もとより時のいたらないのだが、また心を平らにしてみれば、まだ力量も及ばないのだ。これに激せられて、なほ勵めば、一段と又深みをますのだ。さう〳〵天下に盲目の人はない。

潘進　あゝ、何といふ立派な言葉だ。今この時に。

（とたまらぬ思入、朱氏もすゝり泣く。この時隣りでは吹打の音が盛んになる。）

えい、なんた、騷々しい。えい、止めちまへ。やめをらぬのか。

（と地たゞらを踏む。李龍制して。）

李龍　いや、あれは、隣には歡びの聲だ。

（やがてまたわつと喜びの聲して、陶家の下僕ら、俄にこしらへたらしい、種々の旗に、「新貴人、陶允老爺」または「恭喜新貴人」などとかいたのを押たて、吹打の樂隊をさきに、最前の報告の卒は以前の板をかつぎ、村内を練りまはる心にて出る。あとより、近所の老若男女つゞく。さうして口々に「おめでたう、若さまがお中りなされた。」と叫ぶ。さうして次第に李の門前を通る。三人ぢつとうなだれてゐる。吹打次第に遠くなる。）

李龍　（顏をあげ）あゝ、潘君久しぶりだに、なにも待遇がなかつた。丁度よい。さつきの祝儀の金があつたな。

朱氏　はい。

李龍　あれで酒を買つてこい。

朱氏　はい。

（と扉口の方へゆかうとする。潘進あわてゝ止めて。）

潘進　あゝ、奥さん、待つて下さい。おれがいかに無情でも、その酒はのめない。あゝ、もうおれはこゝにゐられん。重ねてまゐりまする。

（ト兩手で顏を蔽ひ、門の外へ駈けいて、一散に入る。）

（朱氏潘進の姿がみえなくなると凝立してゐる李龍に馳せよつて。）

朱氏　あゝ、あなた、御殘念でございませう。わたしは……わたしは……

李龍　いや、もう泣くな。……おれは長らく言はなんだことを、いま云うてきかせる。

朱氏　えゝ、そ、それはなんでございます。

李龍　いや、驚くな。おれの前生のことだ。

朱氏　（怖れて顏をみつめ）ま、あなた、お氣をたしかにして下さいまし。

李龍　いや、心は狂はん。信ずることも出來んほどの不思議な話だ。おれは今から五十年前、前朝の爲に南蠻を征して功があり、三公の位にあつた孫尙書といふものだ。それが、怪しい道人の爲にまじなはれて、貧家の子と生れた。

朱氏　まあ。

李龍　しかも前生のことも忘れん。出生の時のことも知つてゐる。

朱氏　まあ（と吐息して）おそろしい。

李龍　いや、怖れずにきけ。

（この時家にてけたゝましく赤子泣きたてる。）

朱氏　まあ、坊が目がさめました。

李龍　おゝ、こゝへつれてきて、おれの話をきけ。

朱氏　はい。

（といそいで家へ入り、子を抱いて、賺しながら出る。子は頻に泣く。）

（この時にはかに狂風おこり、桃花と梨花の花を飛ばし、紅白の渦をまく。空もにはかに曇つて暗くなる。）

まあ、このはやて風は。

李龍　おゝ、かういふ風の中で、おれは生れた。しかも梟は屋根の上で泣いてゐた。妖道人めは、おれの一生を呪ひをつた。

朱氏　まあ……おゝ、泣くなよ〳〵。

（とおびえながら赤子を賺す。）

李龍　（大息をついて）果しておれは、半生事志とたがひ、つねに貧困に骨をけづられ、文場に幾度か躓いた。だがおれの公明正大の氣は失せん。かの妖道人め、おれの不平の語をきいて、貧困を示して、おれの氣を挫かんとする。何の貧困、何の蹉跌、一點この天地正大の氣があらば、つひに一たび、貴かずにおかんわい。……今富貴に

貧窶して功名を圖るはたやすいも、おれも前生にはいささか恥づるところもある。ために妖道人の弄ぶところともなつた。たゞこの一片正大の氣をもつて貫くのぢや。百の貧困も、百の蹉跌も、百の妖道人もこれをいかにせんとすることは、出來ぬわい。見よや、かくのごとくにして、時至らば、やがては再び台閣に立つ日も來ようわ。孫尙書は一代の英豪、妖道人の呪などには、屈せぬわい。わはゝゝゝは。

（と次第に興奮して高らかに笑ふ。風止み、いくらか明るくなり、赤子もやうやく泣き止む。）

朱氏　（ほつと吐息して）まあ、あなたはそんなお方の生れ代りでございましたが。

朱龍　（夢のさめたるごとく）おゝ、それももう遠い夢となつた。たゞ何事も堪へ忍んで、時のくるのを待つばかりぢや。

朱氏　おゝ、何時かは一度、きつとその時がまゐりませう。

李龍　うむ。（と空を見て）あゝ、もう晩れかけた。坊に風をひかせてはならん。さ、家へ入らう。

（と二人行きかける。こゝへ、朱子の父、朱貴後ろを顧みながら、急いで出る。六十ばかりの老人、頭に繃帶をしてゐる。すぐ門へ入つて、貫木をかける。）

李龍　（ふりむいて）おゝ、お父上でございましたか。

朱貴　おゝ、聟どの。娘もゐたか。

朱氏　（繃帶をみておどろき）ま、父さん、その怪我はどうしたのでございます。

朱貴　これか、なに一寸したことだ。あとでいふ。聟どの、殘念なことでござつた。力落しもさぞと、わしは……（と一寸泣き）それよりは早急なこと、二人はこゝにゐられん。（と衣嚢から財布を出し）こゝに十兩ある。これをもつて一先づすぐに安樂縣の伯母のところへいつてくれ。

李龍　え、では、もしやあの兩翼虎めが……

朱貴　え、知つてゐるか。きいたとあらば何もいはん。實は、今日、こなたが、落第ときまつたときいて、愈々侮どり、今夜にも、こゝへきて、娘を奪ひとらうとしてゐると知らせてくれた者があつた。

李龍　（憤り）えゝ、おのれ、兩翼虎、權家の勢ひにおごつて强ひて人の妻を奪はんとは。おしよせ來たらば、目にものみせう。

朱貴　いや、いや、そりやならん。今城内の兩翼虎の勢は天のやうぢや。誰も逆らふものはない。そのやうなことをしたら禍ひは眼にみえてゐる。こなたは、これで了る人ではない。こゝは忍んで、他縣へ避け、そこで出世をして下さい。

李龍　（うなだれ）は、はい……したが、あなたはどうなされまする。

朱貴　わしは城内にかくしてもらふところもある。娘さへゐなければ、又どのやうにもなる。

（この中、次第に日暮れて、おぼろ月になる。）

おう、日も暮れた。さあ、早いがいゝ。娘も支度せぬか。

朱氏　では父さんとお別れ申すのでございますか。

（と急ぐ。朱氏事毎におどろき、おろ／＼聲で。）

朱貴　さ、それも一時のことだ。

（と急き立て、三人家へ入る。するとすぐ川向ふへ張兩翼虎、富家の子弟のこしらへ、あまたの從僕に棒をもたせてつれて出る。）

兩翼虎　これ、村學究めの家はあすこか。

從僕一　さうでございます。

兩翼虎　よい、ではすぐ蹈んごめ。高が、喰ふや喰はずの瘦せ儒者、擲り倒して、女を引つかつげ。

從僕一　へい。

（と從僕すぐ門へきて押してみて、兩翼虎に。）

戸が閉つてをります。裏へまはりませうか。

兩翼虎　なにかまはぬ。門を押しこはしてしまへ。

從僕　へい。

（と從僕、門を押しこはす。この音に、朱貴出てみて驚き。）

朱貴　や、娘、張どのがきた。早く逃げろ。

（と聲を立て立塞がる。兩翼虎入りきたり。）

兩翼虎　えゝ、親父め、邪魔するな。

（とつきのけ。）

それ、擔ぎ出せ。

（と從僕にいふ。すぐ從僕ら家へ入る。赤子の泣聲争ふ音。從僕ら再び朱氏を引立てゝ去る。つゞいて李龍奮然として劍を執つて追ひ出て、從僕らを突きのけ、朱氏を奪ひかへし。）

李龍　やあ、亂倫無慙の癡者め、理不盡にも人の門を破つてその妻をうばはんとは言語に絶えた人獸め。もう容赦せぬ。

兩翼虎　やあおのれが李龍といふ腐れ儒者か。小癪な奴だ。僕らのめしてしまへ。

（從僕ら、はつと進まうとする。朱貴、この時起かへり、あわてゝ。）

朱貴　あつ、聟どの待つて下され。

（と張の前へ跪づく。）

もし張の御前さま。娘は御意に從はせます。聟どのは助けて下さいまし。

兩翼虎　なに、娘をくれるといふのか。

朱貴　はい〳〵、どうぞ、お助け下さいまし。
兩翼虎　よい、では、連れてゆくぞ。
朱貴　いえ、どうぞしばらくお待ち下さいまし。まだ娘にはいうてきかせてございませぬ。よう得心させますで、今夜だけ待つて下さいまし。
兩翼虎　えゝ、その間に逃がすといふのか。その手にのらうか。
朱貴　いえ〳〵、そんなことはいたしませぬ。わしもかう申すからは、きつと御意には叛きませぬ。娘どのにもよう云ひきかせまする。それにはせめて今夜だけ。どうぞ唯今は、このまゝ、一旦御ひき上げ下さいまし。
（とひれ伏す。）
兩翼虎　えゝ、今更、そんなことがきかれようか。どけ。
（と蹴のけようとする。）
朱貴　どうぞ〳〵、これだけ御きゝいれ下さいましたら、この御恩は忘れません。
（と縋る。）
兩翼虎　えゝ、うるさいわい。
（と立蹴に蹴たふす。朱貴あつといつてひよろ〳〵としてバッタリとなる。）
朱氏　あれ、父さんが……
（と聲立てる。李龍躍然身ををどらし。）
李龍　やあ、貧にして賤しきはかくまでに情けなきか。（と劍をするりとぬき）おのれ、兩翼虎、もう逃さぬ。
（と走りよる。）
兩翼虎　やあ手向ひするか。引包んでぶちころせ。
といふ。從僕ら競つて棒をもつてかゝる。李龍、縱横に四五人を切りたふす。殘れる從僕ら、わつとのがれ、門外へ逃出る。兩翼虎もおどろき、逃げようとするのを門側へ追ひつめ、片手つきに突く。兩翼虎苦しむ。）
李龍　（憂憤して）えい、功名とはなに、富貴とはなに。人の情をころしてはじめてうることぢやわい。さるにても、世の富を恃み、權におごる奴ばら、貧しくして正しく、賤しくして義なるをかくのごとくに虐ぐる。貧にして身をおこすは、不正より外はない。
朱氏　（息をはずませて、ゐざりより）もし、あなたはまあ……
李龍　あゝ、功名は夢となつた。
（と劍をはなす。兩翼虎たふれる。全景次第にくらくなる。）

第四景

（次第にあかるくなると、正面聖域らしい丘が、中央

やゝ高く、上手より下手へつながつてゐる。」その裾には、雜草がしげつてゐる。やゝ高い上には雨に曝された墓表が一基たつてゐる。もとはあつたらしい石の彫刻の勾欄なぞが、華表の屋根の落ちたのと一つに、墓側によせてある。うしろはこれももと、杜があつたのを伐つたらしく、たゞ低く遠く田園の景が見える。下手は一本の老槐の下に一軒の陋屋の戸口がみえる、時は秋だが、景中には、あまりそれを明示するものもない。

陋屋の戸の前には、筵を布いて、八十ばかりの老媼、傴僂のやうにこゞまつて、絲車をまはして絲を績いでゐる。

そばに、農夫一人、鍬を下して石に腰をかけ、老媼と話してゐる。

農夫　おばあさん。息子どのは、いつもの通り水汲みに出たのかな。

老媼　はい、さうでござります。

農夫　おばあさんは、いつも達者だなう。それによう耳もきこえるなう。

老媼　はい、ようもきこえませぬわい。

農夫　もう幾つだなう。

老媼　はい、八十でございます。

農夫　あゝ。さうか。もとは身分のよい家の果だときいたが、この村にきても、もう三十年にもなるかなう。その時分には、この後ろも杜で、あつたなあ……

老媼　はいなう。その時分は杜でございましたが、次第に、賣拂ひました。

農夫　あの杜はもと、おばあさんのであつたか。

老媼　はいなう、もとはこのあたりは先祖の墓所でございました。今のこつてゐるのは槐の樹ばかりでございます。

農夫　この槐の樹は美事なことだなう。……ではおばあさんも昔は、立派な暮しをしたことだらうなう。

老媼　さうでございます。……もうそれも夢のやうでございます。（といつて絲車の手をとめ）やあ、絲がきれたわ。（とあたりをうろ〳〵とみて）もし憚りながら、絲がみえませうか。

農夫　おう、そこにある。膝のわきにある。

老媼　あゝ、ありがたうございます。どうもよう眼がみえませんでなあ。

農夫　あゝ、さうであらう。……さうしておばあさんは、息子はあれ一人だつたのか。

老媼　いえ、三人ございやしたが、みな死にました。それもみんな昔でございます。心の足りない彼れ一人のこり

ました。

農夫　あゝ、氣の毒なことぢやなう。息子が人並でないでなあ。さぞさみしいことであらう。

老媼　いえなあ、さびしいなぞといふものはまだ身體が達者な中のことでございます。

農夫　なに身體が達者な中のことだ。

老媼（わらひて）はいなう、もう墓の中にゐるやうなものでございます。（と日さしを眩しさうにみて）おゝ、もう出來ん。ほんの一時でございます。

（と絲車をもつて、家の中へゆつたりと入る。やがて、家の中から、椀へ粥を盛つて、箸をそへて持つて出て、靜に墓前へゆき、それを供へて禮拜する。）

（農夫立つてそれを見てゐる。やがて老媼禮拜を了つて向きなほる。）

農夫　おばあさん、それは誰の墓だなう。

老媼　これが御先祖の御祖父さまのお墓でございます。それは／＼えらいお方でござつたが、五十のお祝ひのときに、わしの配偶が、お上の試験で、狀元というて、一番にならなんだというてお怒りなされ、悶絶なされて、お薨れになりました。それから一家が、だん／＼に零落をいたしました。

農夫　はてなう、さうしてその御祖父さんというのは、どのやうなえらい人でござつた。

老媼　南蠻を征伐なされた孫尙書というて名高いお方でござります。

農夫　はて、南蠻を征伐した……きいたこともないわい。それはずつと昔のことであらう。

老媼　はいなう。もう七十年になりませう。

農夫　あはゝ、おれなぞは生れんとつとのとつとの昔だわえ。

老媼　はい、昔になりました。このお墓もわしが死んでは、もう粥も供へる人もありますまい。わしが生きてゐる間は、せめて供へるのでございます。

農夫　さうかなう。さういふえらい人が、氣の毒なことだなう。

李龍（この時下手奥にて）おのれ等、なにがをかしい。なにを笑ひをる。わらふおのれらがをかしいわい。

（といふ聲する。）

農夫　はて、なんだ。（とびつくりして見て）あゝ、氣狂ひのやうだわ。

老媼　氣狂ひでござりますか。

農夫　やあ、こつちへやつてくる。おばあさん、おまへあぶないから、此方へおいで。

（と農夫、老媼をつれて、傍へ避ける。下手奥より李

龍、五十位、第一榜の孫偸書の面貌を偲ばせる。たゞし、髯はみだれ、頭には、破れた大頭巾をいたゞき、身には腕もあらはになつたぼろ／＼の着物をきて、破れた竹笠を背負ひ、竹を劍のやうに佩び、出てくる。）

李龍　はてなにがをかしい。この身になつたとて、孔孟の弟子たるものが、容儀を亂さりやうかい。なに冠がない。あはゝゝゝは、その冠、みせうわい（とあわたゞしく身をかゞめて、破れ靴を脱ぎ、兩手にて頭にあて）どうぢや。なに履物ぢや。はて知らぬか、これが今の世の冠ぢや。正しきはすてられ、不正なれば、蔓こる冠履轉倒の世ぢや。これこそ、冠とすべきぢや。おのれら、おれに傚へい。うふふ、似合ふか、似合ふか。（ときよと／＼して、忽ち靴をすて、きつとなり）なに徒らに世を罵つて快とする嘲世罵俗の白徒だと、はて、しからば、問はう。今の世に時めく諸公、そのはじめ競つて志を行はんと、功名の門を敲き、一たび門を開けば、徒らに數十年、尸位徒餐の徒でないといひえらるゝ人があるか。はて、いはれな。他人は欺かるゝが、おれは欺かれん。實はおれは（と聲をひそめ、四邊をはゞかるごとく）孫偸書ぢやよ。よう公等のことは知りすぎるほど、知つてゐるわい。あはゝ、驚かれたか。あはゝゝゝは、なんぢや、揮毫をしてくれ、おれが孫ぢやときいて、すぐ字を乞ふか。よい／＼、書いてとらせよう（と文字をつくる思ひ入）それ、湛々たる青天、欺くべし。なにちがつてゐる。欺くべからずだと、ちがつてはをらん。青天は欺くべしぢや、欺くべしぢや、おれはなう、長い間苦勞して、それがほんとぢやと知つたわい。あはゝゝはは。

（と笑ひくづれたが、ふと農夫をみつけ。）

誰ぢや。園中へ立入つたは、誰かをらんか。こやつを引出せ。こら。（といつてふと、わが身裝をみて）あ、こりあ、いかん。あゝ、また李龍にかへつてしまつたわ。

農夫　をかしな氣狂ひだわい。

老媼　なにをいうてゐるのでございます。

農夫　わしにもさつぱりわからんわい。

李龍　（ふときゝつけ）なにわからん。さうぢや、分らんといふことは、情けないことぢや。彼奴ら。富んで貴ければ、つねに貧賤のことを忘れ、英雄を空しく風塵の間に埋らすわい。いかなる英雄も久しき貧賤の間にあつて、よく挫けざるものはないわい。……情けないわい。おれも到頭氣が狂うてしまうたわい。はからずもかの張翼虎めを手にかけ、官の捕ふるところとなつて、たまたま官詞に抗ひ、拷掠はつぶさに加はり、滞獄二十年の久しきに及んで妻は節に死し、子は飢にたふれ、到頭、到頭おれも心狂うてしまつたのぢやわえ。

（とたふれて泣く。）

農夫　どうやら氣の毒な人のやうぢや。

老媼　さうでござりますかいなう。

李龍（顏をあげてすわり）これ、あざけるな。決しておれを嘲けるな。今かくのごとく衰へたるは、決しておれの機能が、世の人なみに劣つたる故ではない。貧にして賤しきがゆゑぢや。かつては雄略一世を蔽ひ、位は人臣を極めたることもあるおれぢや。今かくのごとく、乞食となつても、おなじ人たるにかはりはない。今にしてはじめて知つたわい。世の人々よ、決して貧にして賤しく、顯れざるの故をもつて人をおとしむるな。そこにはむなしく雄圖をくじかれたるあまたの英雄がゐるわい。……（と氣ごんでいつたが、又氣なかへ）おゝ、さうぢや、おりやあかうしてはゐられん。河南へゆくのであつたわい。

（と立つてふら〳〵とする。）

農夫　はて、をかしいことをいふわい。河南にゐて、河南へゆくというてゐるわい。可哀さうぢや、いうてやらうわい。これ、これ、こゝは河南ぢや。

李龍　なに河南ぢや、うそぢやわい。

農夫　はて、うそなことがあらうかい。河南も金陵の都にちかい南柯村ぢやわい。

李龍　なに、南柯村、きいたやうな名ぢや。（とふと、老槐に眼をつけ）やあこれはおぼえある槐の樹ぢや、おゝ、おれの塋域と定めたる南柯村にあつた槐の木ぢや。おゝ、では、おれは南柯村まで歸つてきたのか。うゝうゝ（と喜び）これそちは孫尙書の名を知つてゐるか。

農夫　いや、知らん。そんな人はきかんわい。

李龍　なに、知らん、はて知らん筈はない。南蠻を征した孫尙書ぢや。

老媼（きゝ耳たてゝ）もし、その氣狂どのは、孫尙書というてゐるのではござりませぬか。

農夫　さうぢや、孫なんたらいうた。

老媼（すゝみ出て）もし、孫尙書をこなたはどうしてたづねなさる。

李龍　おれは孫尙書の生れかはりぢや。（といつて泣き）というてもたれも信じをらん。

老媼　なに孫尙書の生れかはりぢやと、（とよくみて）おゝ、面ざしには、なるほど、似られたところがある。ではこなたは孫尙書の血筋の人か。

李龍　いや、孫尙書ぢや。

老媼　では孫嫁の名を知つてござりまするか。

李龍　おゝ、知つてゐる。舜華ぢや。

老媼　おゝ、知つてござりますなあ。したが、そのやうな

不思議なことがあらうか。

李龍　（この間、ぢつと老媼の顔にみいり）　おゝおまへは舜華ぢや、おゝ、でも年を取つたなあ。

（と抱きかゝへようとする、老媼おどろき、身を退き。）

老媼　はて氣味のわるい。

李龍　おゝ、いぶかしいは尤もぢや。これには長い仔細がある。おれが孫尙書の生れ代りたる證據はいくらもあげられうわ。たゞ今日まで、境遠く生れて歸つてこられなんだのぢや。ようまあそちは達者でゐたわい。

老媼　さてはお前は孫尙書のまつたく生れ代りでございまするか。

李龍　おゝ、さうぢや。（老媼の姿を見て）はて、そちはなんでそんな淺猿しい姿をしてゐるのぢや。

老媼　はい。尙書公がお薨れになつてから次第に落魄(おちぶ)れて、今はかやうな姿になりました。

李龍　おゝ、では榮華街の屋敷はどうした。

老媼　四十年前に、李侍郎公におゆづり申しました。

李龍　九龍村の別墅は。

老媼　包公におゆづり申ました。

李龍　では浣花莊は。

老媼　廉御史に。

李龍　うん、さうしてあまたの田園は。

老媼　土地(ところ)の者にそれ〴〵賣りました。

李龍　（吐息ついて）　おゝ、さうか。

老媼　さうして今は、わたしと、たゞ一人の息子とが殘つてゐるばかりでございます。

李龍　あゝ、おれの心をつくした一代の富貴もつひにかくのごときであつたか。

農夫　はてお前さまは、正氣になられたやうぢやな。

李龍　あゝ、今こそ長い眠りからさめたわい。……さうしてその息子はどこにゐる。

老媼　それが（と一寸泣き）愚かしうてなあ。……（といつて下手をみて）あすこへ歸つてきます。

李龍　おゝ、孫尙書の曾孫は水汲となつたか。

（このあたりよりやゝ暗くなり、老媼の子、四十位、髮黑く、髯濃く、容貌は堂々としてゐるが、どこか愚かしい、短かき衣に、空(から)の水桶を二つ、枴(おうこ)でかついで出る。）

老媼の子　おゝ、おつかあ。今日はみんなに幾度もたのまれて、隨分澤山汲んだわい。その代り、錢をどつさり、もらつた數へてくれい。

（と手を突き出す。）

老媼　おゝ、それは骨折りであつたなあ。今數へてやりませう。

李龍（それをぢつと見て）あゝ、富貴の人を害すること、かくのごときか。三代にして、曾孫は叔麥を辯ぜざるの癡となつたるか。おゝ（とたまらぬやうに、どつかと坐し）孫嫁も、曾孫もこれへこい。久しぶりの對面をせう。

老媼　はい〳〵、これ、あれは曾祖父さまぢや。いつてお目にかゝるのぢや。

老媼の子（おとなしく）さうか。

老媼　お祖父さま。（と二人李龍の兩方より寄りすがる。）

老媼の子　曾祖父さま。

李龍（二人を抱へて）あゝ、劉阮天臺にいり、仙女にあひ、三年にしてかへり五代の孫にあふと、それとは事かはりてかゝる悲しい、不思議を見たものが外にあらうか。……でも、もう嘆く心はないわい。嘆かんにはあまりに深い悲しみぢやわい。……おゝさうぢや、今思ひ出したるがわが生前、最も愛したる、南蠻を征したる時持ちかへつたる赤玉の獅子はどうした。たれにゆづつた。

老媼　おゝ、あれは、お前さまが、一番御寵愛をなされたもの、お墓へ一つに埋めました。

李龍　おゝ、その墓はどこぢや。

老媼　お前さまの後が、もとのお墓のところでござりまする。

李龍　なに（と後を振りむき）おゝ、これが己の墓か。ああ、人は七十は稀に、墓にもまた百年の主なしと、やがて覆へされて田園とならうわい。……あゝ、おれはなにもかも見果てゝしまうたわい。

（と一聲叫んでおもはずたふれると、それが、勾欄や、華表の屋根をおいてある後ろへかくれる、すると老媼と、老媼の子は居所で下へ消え、墓表も消えて、たゞの丘になり、その後ろへは上手には城門があらはれ、つゞいて下手へは二三の人家のうしろ向きがあらはれ、遠景をかくす。老槐と、陋屋は、下手へ引く。すべて、金陵城外の景と自然にかはる。光線もあかるくなる。たゞかの農夫は立つてゐる。最前からの再會の光景をやゝ態度があらたまつてみてゐたが、いつか目立たぬやうにうしろ向きとなり、この時も一人のこつて立つてゐる。すると遠くに蹄の音。李龍は再び茫然と立上ると、第一景の一品の衣帶となつてゐる。やがて蹄の音止み、下手から一人の軍官が、鞭をもつて現れる。さうして李龍をみると地に跪く。）

李龍（會釋して）やあ、どなたでござる。

（といぶかしげに問ふ。）

軍官　はつ、某は、御忘れもござりませうが、かつて征蠻の時、いさゝかの功をたて、御拔擢にあづかりました鄭雲でござりまする。今日、明公の五十の壽宴と承り、

遠く馬をとばせて、御祝ひにまかり出ましたが、何分にも遠地のことゝて、遲參の段はおゆるしを下さいまし。
李龍　なんといはるゝ（と四邊をみて）してこゝはどこぢや。
軍官　金陵彰儀門の前でござります。
李龍　うむ、して年號は……
軍官　洪武二十八年。
李龍　四季の時候は。
軍官　春のなかば。
李龍　今の時刻は。
軍官　午の刻でござります。
李龍　うゝむ、（空をあふぎて）我心地つねならず、思はず歩むともなく、こゝへきたとみゆるわい。では、其方の馬をかりて城へ入らう。馬牽け。
軍官　はつ。
（といふ。この時奥より、わつといふ人聲、五六の市民うしろを指さしながら出る。）
李龍　何事ぢや、聞へ。
軍官　はつ。（とこたへて）これあの騷ぎはなにごとぢや。
（と市民にきく。）
市民一　はい、今日孫尙書どのが、お孫さんが第一魁元にあたらぬというて、お上を怨み誹つたといふことがわかつて、にはかに一家一門が召捕られて、この門外で斬れるのでございます。
市民二　あれ、もうそこへ引かれてまゐります。
市民三　だが、まだ肝心の本人が捕まらぬので、捕まへて、一つに梟し首にするのぢやさうでございます。
（李龍は事毎に驚き、軍官と顏み合せ、身をちゞめる途端、かの農夫つかつかとよつてその襟をつかみ。）
農夫　その謀叛人はこゝにゐる。
（といふ。みなこなたを振りむく。）
李龍　あつ。
（といつてこれもふりむくと、かの農夫は何時か第一景の白髮の道士の顏にかはつてゐる。）
おゝ、おん身は。
道士　今この時の間にみたるは、富んで貴きものに足らざるところでござる。公には必ず一場の夢としたまふな。
（と李龍をぽんとつきはなす。景くらくなる。）

第五景

あかるくなると、第一景にもどる。
たふれてゐた孫尙書、茫然と立上る。

――幕――

仲木貞一篇

柿實る村（一幕）

人物

渡四郎次　村長
八重　娘
音若　聟（實は上杉方の侍頭蛭間左近）
菊次郎　甥（北條方の武士）
ひさ　女中
庄兵衛　下男
倉藏　下僕
鷲岡主税　上杉方の旗頭
加賀見藤彌太　同　侍頭
其他軍卒、村の老人婦女子子供等

時

北條氏康が東國を支配してゐた頃

處

甲斐相模の國境に介在する極めて寂しき村

村長渡四郎次が住家

上手寄りに竹緣を廻らした平家。正面から下手寄りの庭には、眞赤な實をつけた柿の樹が澤山竝ぶ。遠景の山の端等にも多くの柿の樹が見える。初冬のうらゝかな午後。百舌鳥が賑やかに啼いてゐる。

村長四郎次は梯子に登つて、柿の實をもいでゐる。老僕倉藏が下から籠でその實を受けてゐる。

倉藏　旦那樣。お危なう御座いますから、私が登つてもぎませう。

村長　何、大事ない〳〵。俺が子供を育てるやうに、丹精して作り上げた柿の實ぢや。他人にもがれるのは、孫の腕でももがれるやうだわ。

倉藏　ハヽヽ。然う云うて、餘り大事にしてお出でなさる內に、烏が皆つゝいて了ひまするぞ。

村長　烏と云へば、何時の間にやら、上の方は、皆つゝかれて了うた。今年は烏を追ふ者も居なくなつたから、烏めはいゝ事にして、毎日荒しに來をるわ。後で一つ、大きな案山子でも樹てゝ貰はうかな。

倉藏　旦那樣。烏は最う案山子には驚きませぬぞ。村中でも、其所等中に、澤山案山子を樹てましたが、何の役にも立たぬと申してをります。——然う云うてゐる內に、

そら、最う、あのやうに、烏めが輪を作つて飛んで來ました。

村長　惡々しい奴ぢや。

倉藏　宛で上杉勢のやうで御座いまするな。

村長　戰さをする者と烏とは、何處へ行つても嫌はれるのう。ハヽヽヽ。

倉藏　全くその通りで御座います。――その上杉勢と云へば、先き手の軍勢は、最早、矢坂の砦に攻め寄せたさうに御座いまするな。

村長　あのやうな處に、砦などを作つておくから惡いのだ。砦があつて見れば、敵も素通りはなりかねる。面倒でも其處を攻め取る事になるのだ。だから、俺が何時も云ふ通り、何の備へもせずに、放つておく事だ。すれば、敵は何の仇もせずに、其處を、通り貫けて行く――。いや、然うは云ふものゝ、俺も永い間、この柿の實をもぎ取るやうに、人の命を無駄に取つては悦んだものだ。そして、寸尺計りの土地を奪ひ取つて、勳功に矜つたものだ。すると又、その土地を總て取戻されて了ふ。そこで又兵を起す。宛で將棋の駒の取りやりのやうな事してをつたものだ。その爲めに、何れだけの人をあやめたやら知れぬ。それが、何の樂しみ、何の榮達なのだ――。それよりは、斯うして柿の實を作る方が、どれだけ幸福か知れぬ。村の者も皆喜んで居るやうだな。

倉藏　喜んでをります所か、村の者達は旦那樣をば、生佛のやうに思つてをります。

村長　いや〳〵、俺が斯うした心を起したのも、皆、應善寺の和尙のお蔭だ。和尙は今時には、全く珍らしいお方ぢや。

倉藏　旦那樣。最う一杯で御座いまするぞ。

村長　さうか。やれ〳〵、骨の折れた事であつた――。（地上に下りる）では、御苦勞でも、一走り應善寺迄持つて行つてくれ。俺が手製の自慢の柿ぢやと云うてな。

倉藏　畏りました。和尙樣は、どのやうにかお悦びで御座いませう。では、行つて參ります。

村長　それから、晩には、碁を打ちにお出でなされと云うてくれ。

倉藏　畏りました。（去る）

（少し前から、室の隅で茶を入れてゐた娘八重は、この時茶を入れ終つて、茶碗を持つて緣の所に行く。）

娘　父上、嘸お勞れで御座いませう。お茶が入りましたから、一服召上りませ。

村長　む、それは有難う――。（緣に腰を下して、茶を喫みながら、遠方を眺めて）やれ〳〵、今年も柿の實は豐作ぢや。これで村中も、豐かに年が送れると云ふものだ。

娘　でも、今年は實をもぐ男の手が有りませぬから、烏の餌食になりはせぬかと、村中の女共は、皆心配を致してをります。

村長　何、男共は直きに戻つて來るよ。上杉勢は、如何に荒くれ武者許りでも、飢には勝てぬて。小田原の橫手から不意に攻立てようとして、このやうな山奥の裏道許りを進んで來をるが、肝腎の兵糧が手に入らぬから、軈て小田原に行き着く頃には、飢の爲めに、バタ／＼皆倒れようて。すれば、村の者等は、擦り傷一つ負はずに、皆無事に、小田原から歸つて來ようわ。

娘　霜の降りる前に、皆戻つて參ればよう御座いますがなア……（差俯向く）

村長　はゝア、晉若の事が氣になるか？　あれも、柿の實の熟する迄には、必ず戻つて來ると申したから、軈て、最う歸つて來ようよ。

娘　でも、途中で、この戰さの爲めに、留められてゐるのやらも知れませぬ。

村長　或は然うかも知れぬ。然し戰さが終れば、無事に戻つて來よう。土產物をたんと買うてな。まア／＼、何も案ずる事はないわ。

（女中ひさ登場。）

女中　お孃樣。此處にお出でゝ御座いましたか、おぐし上げのお仕度が出來ました。

村長　髮を結ふ前に、ひさと裏山へでも登つて見ては何うだな。村境から彼方の山は、一面に紅葉で錦のやうだ。又此方の山や谷は、柿の實に秋の日が照り映えて、宛で珊瑚の林でも見るやうぢや。まア、氣が晴々致すから、見て參れ。

女中　本に、旦那樣の仰せの通り、秋になると、この村の柿の實の美しさは、他國の者が羨む程で御座います。それと申すも、皆旦那樣の永年のお丹精で御座います。村の者達は、旦那樣をば、何(ど)のやうに、有難がつてをるか知れませぬ。

村長　ハヽヽヽ。俺は村長として、當り前の事をしただけだ。然し、その昔、この村に始めて來た時には、果物はおろか、粟一粒も出來ぬ痩土地ぢやつたが、それを、漸う丹精して、これ迄に仕上げた。然し、俺の仕事は、これからだ。何うせ、米粟の出來ぬ土地だから、儲けの多い果物を、これから、ドシ／＼植付けて、村中を最つと富ますのだ。斯うして、苗木から育て上げて、美しい實をならせて行く樂しさを思ふと、弓矢を取つて、命の取りやりをしてをつた昔の事が、つく／＼後悔されるわ。

女中　小田原のお城をお出になつてから、丁度十八年になりまするな。

村長　弓矢を折つて、この村に引込んだ時には、八重、其方はまだ漸とつかまり立ちをする幼い頃ぢやつた。駕に乗つて幾つも／＼長い峠を越した事は、まだ覺えてをらうな。

娘　道中の事は、覺えてをりませぬが、駕の中で、母樣のお乳にすがつた事は、よう覺えてをります。

女中　そのお母樣が、今日頃迄お出でなされたなら、何のやうにかお喜びなされやうものを――。

村長　本に彼女は、この柿の實の成るのも知らずに死んで了うた。あれから、五年十年十八年とたつ内に、柿の木はこのやうに大きく延びる。實は歳々に殖えて行く。そして、其方は大きく育つた。年の立つのは、本に早い物ぢやのう。――長話しをしてゐる内に、日が大分傾いて來た。（立上つて）どれ、日の暮れぬ内に、裏の柿畑を見廻つて來ようか。おう／＼、烏めが、又群を作つて、柿盜みに來をつた。ホウ／＼……。（追ひながら裏手に出て行く）

娘　本に烏が、あのやうに澤山飛んで來た。

女中　憎らしい烏で御座いまするなア。

（跛者の下男庄兵衞庭先から登場。）

庄兵衞　さサ、大變だ／＼。

女中　ま、庄兵衞殿。何を慌てゝゐなさんす？

庄兵衞　どうして／＼、大變だ。旦那樣は、おゐでなさる？

女中　旦那樣は、裏にお居でだわいな。一體、何をそのやうに慌てゝゐなさんす？

庄兵衞　戰さだ／＼。上杉方の軍勢が、今にも此處に押寄せようと云ふのだ。

女中　え、上杉勢が？

庄兵衞　隣り村から火急の使とあるからは、大方戰さの知らせに決つてゐる。したが、戰さは、この庄兵衞大の嫌ひ。お蔭で大事の片足を、かたなしにして了うたからな。

女中　それは、一かどの手柄を立てゝ、お孃樣のお聟樣にならうと思つて、根の臆病も打忘れて、この前の戰さに出たからではないかいな？

庄兵衞　やア、それを、云はれると面目ない。――どれ、急いで旦那の所へ、このお文を持つて行かうわ――。（行きかけて庭の敷石に躓づく）やれ危なや。入らぬ所に出しやばる石だ。

女中　庄兵衞殿。あのやうに木の上で、烏めが笑うてをりまするぞ。ホヽヽヽ。

庄兵衞　えゝ、おいてくれ。冗談所か、火急の用事だ。（去る）

娘　ホヽヽヽ、本に面白い男ぢやのう。

女中　臆病で、少し足らぬ所が御座いまするが、根はあの

通り、正直な面白い男で御座います。彼も片輪で無かつたら、今度の戰さに引出されたで御座いませうに。若い男で、村に殘つて居るのはあの男一人となりました。

娘　男の一人も居らぬ此の村へ、若しも敵が押寄せたら、何うなる事であらうなア？

女中　本に、そのやうな事がありましたら、何うなる事で御座いませう？

（この時烏が激しく梢で啼く。）

娘　あれ、氣味の惡い啼きやうだわいな。

女中　本に烏の啼聲許りは、何時きいても、いやな物で御座いまするなア。

（突然庭口から、一人の靑年血だらけの姿なして駈け込み來り、地上に倒れる。）

娘　あれーッ。（袖で顏を掩ふ）

女中　其方は何者ぢや？

若い男　（苦しさうにして漸く顏を擧げ）　お願で御座る。お助け下され。暫く隱まつて下され。敵に追はるゝ者で御座る。

女中　何、かくまへと？

若い男　某は北條方の者。上杉方の軍勢に追はれて、漸く此れ迄落延び參つた。何卒、助けて下され。

娘　では、味方のお方ぢや。早う介抱して上げたが可い。

（ひさに顏で知らす）

女中　まア〳〵、それは飛んだ事で御座いましたな――。（庭におりて行く）まア、この血汐の夥しい事。嘸お苦しう御座いませう――。（側に近より男の顏をよく見て）おお！　貴方は菊次郎樣では御座いませぬか？

若い男　（漸く正氣附いて）　おゝ！　おひさか。某は如何にも菊次郎ぢや――。（四邊を見廻はす）

女中　お孃樣、菊次郎樣で御座いますぞえ。

娘　まア、菊次郎樣。どうして貴方は、このやうなお姿をして――。（庭に急いで降りる）

若い男　おゝ、お八重殿。では、此處は、叔父御の家であつたか。某は只一散に驅け込み來た故、何處の屋敷とも辨へずに、飛入り申した。お八重どの。久しう御座つた。

娘　菊次郎樣。先づ座敷にお上りなさいませ。さ、ひさ。手を貸してたもれ――。（座敷に伴ひ行く）ま大變なお怪我で御座いまするなア――。して、敵に追はれたとは、この村に入つてからで御座いまするか？

若い男　杉坂村から此の村に入ると、直ぐ、敵に追はれて、この始末ぢや。某は矢坂の砦から、小田原の城に援兵をこひに參る所なのだ。この一命を棄てるのは、少しも惜しうはないが、大事の使命を果す迄は、死ぬにも死なれぬ身體なのだ。此の身の傷の癒える迄、何處ぞに隱まつて

たまはれ。

娘　（布で男の傷口を巻きながら）お案じなさる事は御座いませぬ。此處にお出でなされば、敵に知られる氣遣ひは御座いませぬ。ひさ。父上を早うお呼び申しておくれ。

女中　はい――。（裏の方に行きかける）

（村長急ぎ足に出て來る。）

女中　おゝ、旦那樣。菊次郎樣が、只今お越しで御座います。

村長　何、甥の菊次郎が？　それは珍しい。して、急に、何用ぢや？（座敷の内を見て）やゝ、怪我を致しをるな。戰さに破れたか？

若い男　いえ、戰さに破れは致しませぬ。小田原へ使者に向ふ途中、敵兵に見出されて、この始末に御座いまする。

村長　然うか、それは、危い事であつた。然し、菊次郎。矢坂の砦は、最早落ちたとの知らせだ。

若い男　えゝ！　砦が落ちましたか？

村長　今し方、隣村の長(おさ)から知らせがあつた。今朝程、遂に落ちたさうだ。

若い男　では、御主君初め、父上兄上にも討死なされたか？

村長　無くもがなの所に砦等を築くから、そのやうな事になるのだ。氣の毒ではあるが、何とも致し方のない事だ。

若い男　この上は、某一人、おめ／＼と生き存らへては居られませぬ。皆樣、御免！――（刀を取つて切腹しかける）

村長　これ、菊次郎、血迷つた眞似を致すな。砦が落ちたとて、其方が死ぬる理由(いはれ)があるか。砦の落ちたのは、其方の罪ではないわ。上杉の大軍の前には、如何やうな砦でも、叶ふ筈はないのだ。

若い男　でも、このまゝおめ／＼……。敵兵は、軈て此の村にも押寄せ參りませう――。

村長　押寄せて來てもよろしい。女子供や年寄許りのこの村に、何で手向ひ致さう。敵は素通りにして先を急ぐに相違ないのだ。

娘　菊次郎樣。敵は何の邊(ど)り迄、押寄せて居りまするか？

若い男　最早、餘程間近まで、押寄せてをる。昨夜迄は、まだ砦を遠卷きにしてをつたが、今朝程、其處を一擧に陥れて、この道へ直ぐさま進み來たものと見える。

村長　この村には、北條方の武士は一人も居らぬから、誰も刃向ふ者はないのだ。――其方は苦しうても、當分倉の内に隠れて居るが可い。その内には、敵兵は皆立ちのくであらう。――さ、見とがめられぬ内に、早う彼方へ行つて、傷の手當を致したがよい。

若い男　有難う御座います。では、暫時おかくまひ下さいませ。

村長　さ、八重、ひさ。彼方へ案内を致せ。

八重　畏りました。

ひさ　さ、菊次郎様。何卒、此方へ――。（手を引いて行きかける）

若い男　（立上りかけて）叔父上。つい忘れて居りましたが、最前、この村の入口でお八重殿の聟殿に逢ひました。

村長　何、聟に？

娘　では、旅からの歸りで御座いませう。

若い男　いやく、然うでない。敵軍の内に居つたのだ。而も、一方の侍頭になつてをつたのだ。

娘　え！　敵の侍頭に？

若い男　某が危ふく敵兵に捕へられようとした時、突然横から現はれたのは、姿形こそ變れ、確にあの音若であつた。そして、軍卒共を彼方に去らして、それとなく、某に逃げよと、手眞似で教へてくれた。

村長　はて、不思議な事があるものぢや……。然し、それはよい對手に會つて、仕合せだつたな。

若い男　ほんに然うで御座います。何時ぞや、お八重殿の事で、激しい戀爭ひをした事をも打忘れて、よくも今日、某を助けくれたと、半ば不思議に思つてをります。

娘　でも、何うして、音若様が戰さにお出でになつたのでせう？

村長　然ればさ。今度の商ひには、上野信濃から、鄉國越後にも立寄ると申してをつたが、たまく戰さの初まる所に歸り合せて、無理やりに軍勢の内に差くはへられたのかな……。さ、菊次郎、人でも來れば面倒だ。早く奥へ參れ。

若い男　御免下さいませ。

娘　何卒、此方へ――（ひさと二人で菊次郎を奥に導きゆく）

村長　（思案して）はて、音若が敵軍に加はりをるとは、不思議な事だ。然し、彼が敵軍に加はり居るとは、もつけの幸ひ。彼に頼んだら、隣り村で行つたやうな亂暴狼藉を防ぐ事が出來よう。ま、時の來る迄待つとしようわ。（鳥の聲に空を見上げて）おゝ、何かに追はれたと見えて、又澤山の鳥めが飛んで來をつた。こりや、裏の柿の實が危ふくなつて來たぞ――。（急ぎ足に裏の方に去る）

（娘登場。）

娘　父上樣、お夕飯の仕度が出來ました――。（留守なのに氣附き）又裏の柿畑にでもお出でなされたか――（隅の茶道具を片附け初める）

（庄兵衛登場。）

庄兵衛　や、お孃樣は、此處にお出でしたか。今おひさ殿から聞けば、音若様は程なく此れにお越しださうに御座

いまするな。さぞ、お嬉しい事で御座いませう。その喜ぶお顔が、早う拝みたう御座いまするな。

娘　庄兵衛とした事が、又してもそのやうなてんごう許り――。

庄兵衛　いや、まだある／＼。あのいとしいお聟樣は、敵の大將軍だと云ふ事では御座いませぬか。こりや、まア、一體、どうしたと云ふので御座います。その理由をお聞かせ下さいませ。敵方の大將と知つて、聟樣にお取りなされたか？　さ、その理由をお聞かせなさいませ。

娘（立去りつゝ）えゝ、そのやうな事は知らぬ。うるさいわいなア。（奥につと去る）

庄兵衛（頭を掻いて）これは又、怒らして了うた。飛んだ事をして了つた。（續いて奥に入る）

（上杉方の軍卒先きに立つて、蛭間左近、加賀見藤彌太、鷲岡主税等入り來る。）

軍卒　これが、村長の宅に御座いまする。

加賀見（つか／＼と庭の内に入り）やア、流石は、昔、關八州に其名を鳴した渡四郎次が成の果の住家だけあつて、小汚い百姓家の中では、とにかく目立つ家だわ。――こりや／＼、誰も居らぬか。上杉方が先手の大將鷲岡主税樣のお越しぢや。者共出迎へ／＼。

（庄兵衛奥から出て來て、この體を見て打驚く。）

加賀見　この馬鹿め？　早う村長を呼出せい。

蛭間　加賀見氏。お靜まり召され。某が呼出して參りまする。（奥に入りかける）

加賀見　これは、とんと失念致した。此處の村長は、蛭間氏の舅殿で御座つたな。序でに其所許の花嫁御も拜見致したいものぢや。豫て三國一の美人と承はり居つた。

（蛭間は鷲岡に輕く一禮して、此の言葉を聞流すやうにして入る。）

加賀見（四方を見廻はし）こりや、軍卒共。何と綺麗な柿の實ではないか、この村に入つてから、至る所柿の實が赤う熟してをるので、唾が走つてならぬわ。美味さうなのを、一つもいでくれ。此の村では、米の代りに柿を食つて生きてをると見えるわい。（軍卒の取つて渡した柿を一口食べて顏をしかめ）えゝ、澁いわ。この澁柿めが！（柿を抛り棄てる）

（村長蛭間に伴はれて出て來る。）

村長　手前はこの村の村長渡四郎次と申すふつゝか者。以後お見知りおき下されますやう――。この度びははるばると、ようこそお立寄り下されました。

加賀見　何、よう立寄つたと？

鷲岡　加賀見氏――。（たしなめる）村長であつたか。お手前の事は、豫て蛭間氏から承はりをつた。この度相模

表へ下る途中、兩三日この村に滯留致す事となつたから、何かとお世話になる事であらう。何分よろしく頼む。

村長　承知致しました。然し、御覽の通り、荒れはてた村落、とてもお氣に召すやうなおもてなしは出來兼ねませうが。御用の事は、何なりと仰せ下しおかれますやう……。

鷲岡　扨て早速ながら、此處に屯致す軍卒共の兵糧その他の事、蛭間氏から、とくと聞取つた上、手落ちないやう手配をたのみ入る。又我等上杉勢に向つて村人共が過つても手向ひ等致さぬやう、とくと云ひ聞して貰ひたい。この先きの杉坂村では、井の内に毒を入れたり、だまし討ちを致す者等があつたりした爲め、不愍ながらも、其處の村長の首をはね、村中を燒拂つて了うた。これに似た愚かな眞似を致さぬやう、とくと村人達に云ひ渡して貰ひたい。

村長　承知致しました。一同の者によく申し聞けるで御座いませう。したが御覽の如く、この村には女子供か老人しか殘つてをりませねば、そのやうな大それた事を、考へる者も御座いませぬ。

加賀見　その女子供が、とかくに云ふ事をきかぬものだて。女と云へば、飯をかしがせる女共を、早う狩り出さねばならぬ。そのやうなのんべんだらりとした問答をしてゐる内に、夜が明けて了ふわ。某一人で村中からよささうな女子共を集めて參らう。者共參れ――。（立掛ける）

鷲岡　加賀見氏。待たれい。村中を歩かれるなら、この布令を、辻々に貼出させて貰ひたい。又軍卒共が宿割も、日の暮れぬ內取計らはれい――。（布令の紙を渡す）

加賀見　承知致した。さ、者共參れ。男一疋も姿を見せぬこの村は、宛で女護の島のやうだわ。どれ、見目よき娘からからめ取つて來ようかな――。（行きかける）

（娘八重女中ひさと共に酒道具を持つて入り來る。）

村長　娘。早うこれへ持て。

娘　はい。

加賀見　（娘の姿を見附けて戻り來る）や、これが蛭間氏の花嫁御か、聞きしに優るあでやかさ。某も先づ一獻食べてから出かけると致さう――。（元の處に戻る）

村長　何はなくとも、先づ一獻――。（鷲岡に盃を差出す）

鷲岡　これは忝い。（受けて飮む）

蛭間　これは、村長が多年心を籠めて釀し出した、葡萄の酒に御座ります。

鷲岡　無類の味ぢや。

加賀見　どりや、某も一獻貰はう。最前の柿のやうな事はあるまいな――。（受けて飮む）む、これは甘露々々。さ、最う一獻ついでくりやれ。このやうな美しい嫁御が

あつては、戰さの先驅けは厭に相ならうてなア。ハ、、ハ、、。

蛭間　加賀見氏、何と申さるゝ？（氣色ばむ）

加賀見　いや、氣にさへられては迷惑致す。餘りのお美しさに、つい見惚れ申した。では、日の暮れぬ內、村中を一廻り致して來ようか。（立出る）

鷲岡　扨て、村長。村中には、男子は一人も居ぬと云ふから、弓矢飛道具の類を所持致す家はあるまいな？

村長　元々柿の賣許りで、生計を立てゝをるこの村で御座いますから、弓矢刀槍の類は、鳥追ひにも用ひては居りませぬ。

鷲岡　でも、念の爲め、家々を改めても差支へあるまいな？

村長　一向に差支へ御座いませぬ。

鷲岡　尙又、此の村の柿は、近國にも響く名產だが、その諸國との取引で、見かけに寄らず家々は裕福だと聞及ぶ。されば、軍用金兵粮等も、他の村々に比して、多分に申しつけてよからうな？

村長　いえ、その柿の收入りと申した所で――。

鷲岡　默れ！　この村の有樣は、豫て諜者として年久しく住込ませおいた、この蛭間左近から悉しく聞取つてあるわ。今更云ひのがれは許さぬぞ。

村長　これは恐れ入りまする。では、村の者等の生計の立つやうにして、お取立ての程を、お願ひ致しまする。

蛭間　父上。それは、後程とくと御相談の上取計ひませう。

鷲岡　調べ書には、まだ米の事も記してあつた。この村には、よき米が澤山貯へあるさうぢやの？

村長　いえ、何う致しまして。御覽の通り、粟一粒出來ぬ瘦土地で御座いますから、柿を諸國に賣拂つたその金で、漸く一冬を過す丈の米が買入れてあるに過ぎませぬ。

鷲岡　然し、今年は村の男は、皆戰地に出てゐるから、その分丈でも貰うて行けるな。

蛭間　（村長の何か云はうとするのを目で止めて）父上。何れ後程に、委しくお話し致しまする。最早、日も暮れかゝりましたれば、鷲岡殿を奥の座敷に御案內申上げて下さいませ。

村長　本に然うであつた。八重。奥の用意はよいか？

娘　はい、整うてをりまする。

村長　では、むさくるしい處では御座いまするが、奥の一間で御休息遊ばされませい。（先に立つて案內する）

鷲岡　では、お世話に預る事としよう。（導かれて奥に入る）

娘　（蛭間の側に寄つて）もし、吾若樣。逢ひたう御座いました。

蛭間　其方も無事で何よりであつた。

娘　柿の實の熟する迄には、必ず歸ると云はれたから、今か〳〵と、毎日お歸りを待つて居りましたが、かうして敵になつて戻られようとは、夢にも思ひかけなんだ。嬉しいのやら、悲しいのやら――。

蛭間　この仁は餘儀ない事で、上杉勢の者として戻つて參つたが、間もなく、吾々は、小田原城に馳せ向ふであらう。それで、城攻めが終り、戰ひが無事に濟んだなら、元の音若に戻つて、此處に歸つて來よう。そして、その時こそは、豫ての望み通り、武士を全く廢して、其方と二人で一生樂しく、柿の實作りでこの村に終るであらう。それ迄は、人からの借物も同然の身體、村からの取立て事等で父上とも爭はねばなるまい――。

娘　でも何卒、父樣の心を苦しめぬやう、くれ〴〵もお願ひ申します。

蛭間　それはよく承知しをる。必ず氣遣ひ致すな。

娘　そして、何時頃、此處をお立ちになりまするか？

蛭間　されば、後詰の軍が此處に來合はすのを待受けてから、此處を發足致す事にならう。今迄は數度の合戰にも、擦り手一つ負はず、此處迄は無事に來たなれども、これから向ふ小田原の城は、名にし負ふ天下の堅城。一朝一夕では陷るまいから、如何なる苦戰で、この一命を果すやらも知れぬ。この度立寄つたのも、云はゞ其方への暇乞ひだ。

娘　まア、情けない事を仰有りまする。これから小田原に向ふのを止して、この儘此處にお止りなさるわけには參りませぬか？

蛭間　はて、今も申す通り、この身體は、借物も同然なのだ。然し、この大戰が濟めば　大小を棄て木鍬を腰に挾む覺悟だ。

娘　一日も早う、然うなる日が待遠う御座いまする。

（村長入來る。）

村長　音若、此處に居つたか。今鷲岡殿からの話しを聞けば、此村からの取立ては、言語道斷な沙汰だ。それでは、村中の者は皆飢死をせねばならぬ。其方はこの村に、そのやうに貯へ多いと申立てたのか？

蛭間　いえ、某は只この村に餘計の分だけを、申したので御座います。何れ明朝、貴方と御同道で、村中の在高をとくと調べた上で、取立て高を決めませう。何卒、お氣を安め下さいませ。

村長　いや〳〵、今の樣子では、根こそぎ、この村の物を持運ばうとの肚ぢや。

蛭間　いや、それは、父上のお邪推に御座います。その取立ての役は、某で御座いますから、萬事お任せ下さいませ。彼の鷲岡殿は、一旦斯うと云ひ出したら、中々後へ

は引かぬ御仁ですから、その積りで御應對を願ひます。――それに、村中の家を悉く取調べたり致すと、如何なる北條方の落人が、忍んで居ぬとも限りませぬから、其處等の所もようお考へあつて、萬事某にお任せ下されたがよろしう御座います。

村長　成程、其方の云ふ通りだ。では、萬事其方に任すと致さう。

娘　父上。それがよろしう御座いまする。

村長　扨て、改めて其方に訊かねばならぬのは、其方の身の上ぢや。最前聞けば、其方は上杉方の諜者として、この村に住込みをつたと云ふか、全くその積りで、此處へ婿に來居つたのか？　さ、包まず云うて聞かせい。

蛭間　父上。其儀に就きましては、お訊ねなくとも、某から委細申上ぐる積りで御座いました。鷺岡殿は某を諜者と申して居られますが、決して某は、そのやうな積りで、この村に住込んだものでは御座いませぬ。成程、某が生れは越後高田の在、上杉殿の領地の者には、相違御座いませぬが、幼い頃から當地に育つて、身も心も既に當地の者となり終せて居りました。この春、縁あつてお八重殿の養子と決まり、身の振方も附きましたので、久しく音信すらも打絶え居りました親戚の者達に、此等の事も知らせたいと思うて、この度びの商ひの歸り道に、越後高田へ立寄りまするると、折柄此度の大軍の催しに、運悪く某は此邊りの地理に明るいからとて、有無を云はさず、先手の軍に差加へられた次第に御座いまする。某が軍さ戰ひを好まぬ事は、父上にもよく御存知の筈と思ひまする。

村長　それは、よう解つて居る。成程、そのやうな事情であつて見れば、致し方のない事だ。お互ひにこのやうな亂世に生れ合せたのが不仕合せなのだ。ま、早う戰さが片附いて、其方がその鎧を脱ぐ日を待つとしようよ。

蛭間　某も一日も早く、この靜かな村に戻つて、柿を作るお手傳ひが致したう御座いまする。

村長　何卒、然うしてくれ。今年は、村の男と云ふ男は、皆小田原に引取られたから、折角熟した實をもぐ事すら出來ず、むざ／＼鳥の餌食にされてをる有樣ぢや。

蛭間　今年の出來は、一段と素晴しいやうで御座いまするな？

村長　其方が丹精した裏山の柿等は、近年に稀な上出來だ。明日の朝でも、八重と一緒に見て廻つたならよからう。

娘　晉若樣、貴方の御留守中は、妾が代つて世話を致しました。

蛭間　おゝ、これは、厚くお禮を云はねばならぬな。

村長　いや、俺も禮を云うて貰はねばならぬ。其方がとて

も苗を植ゑる事は難しいと申したあの沼地を、其方の留守中に、すつかり干して、柿の苗を澤山植附けたよ。三四年したら又見事な實を結ぶであらうて。

蛭間　父上の御丹精で、この村は、段々と榮えて參ります。隣國で羨むのも尤もで御座います。

村長　いや〳〵、この村は、これから本とに榮えるのだ。今年植附けた四千本からの柿の木に、眞赤な實を附けるやうになつたら、この村は本とに裕福になつたのだ。赤い柿の實が、一つ宛殖えて行くのを見るのは、宛で孫の顏でも見るやうに嬉しいのぢや――。孫と云へば、其方も早う孫を作つて俺を安心させてくれ。

蛭間　とに角、一日も早く、この役目を果しませう。

（女中ひさ登場。）

女中　お食事が整ひました。これへお運び致しませうか？

村長　む、話に實が入つて、頓と忘れてをつた。いや、彼方へ參つて食事を致さう――。婿殿は、嘸空腹であつたらう。さ、彼方へ行かう――。

（一同緣傳ひに隣り座敷に赴く。舞臺半廻となる。月光柿の木の間を洩れて煌々と照り渡る。蟲の聲々。）

村長　何はなくとも、娘が手作りの物で、ゆるりと食べてくれ。幸ひ今宵は明月ぢや。明月の柿の木の下で、親子水入らずの酒汲み交はすも、亦一興だ。

蛭間　左樣で御座います。久し振りで、お八重の手料理を賞味致しませう。

娘　生憎今宵は、何の用意も御座いませぬ。

（女中膳部を持つて登場。）

女中　お孃樣。音若樣に、たんとお酌をしてお上げなさいませ。

村長　さ、ゆるりとくつろいで、飮んでくれ。俺も久振りに對手を致さう。

（遠くで女子の叫び聲が聞える。）

女中　あの物音は、何で御座いませう？

村長　女共の聲のやうだな。

（庄兵衞庭口から駈入る。）

庄兵衞　もし、旦那樣。大變で御座います。

村長　何事ぢや？

庄兵衞　はい。村中の娘と云ふ娘は、皆何處へやら連れて行かれます。あれ〳〵、あのやうに皆は泣き騷いでをります。

村長　（立上つて）その連れて行かうとするのは、何者だ？

庄兵衞　はい。最前、此處に居つた、あの赤面の――。（蛭間の方を見て口をつぐむ）

村長　已れ！　か弱い女子供を手ごめにするとは、憎い奴

ぢやー（口惜しき思入れ）
（女共の叫び聲一層激しくなる。）
女中　あれ〳〵、あのやうに泣き叫んで居ります。
娘　もし、菅若様。何とか救うてやる道は、ないもので御座いませうか？
蛭間　よろしい。某參つて取調べよう――。（庭に降りようとする）
（この時突然銃聲鋭く聞える。女共は耳をふさぐ。庄兵衞は打驚く。）
村長　やゝ、今の砲音は？
蛭間　はて、何者が打放したのであらう？
（軍卒一人急ぎ入來る。）
軍卒　申上げます。加賀見藤彌太様、只今何者かに鐵砲でお打たれなされて御座いまする。
蛭間　何、加賀見氏が？
軍卒　はい。彼方の裏山下の藪蔭で、何者かに、後ろから鐵砲の狙ひ打ちに合はれたので御座いまする。
蛭間　して、その下手人は？
軍卒　下手人は、まだつかまりませぬ。
蛭間　よし〳〵。某か行つて見る。早う戻つて、附近の藪中をくまなく捜せ。
軍卒　畏りました。（去る）

蛭間　父上。困つた事が出來致しましたな。この村許りは、折角無事に納まる事と思つてをりましたのに。
村長　して又、鐵砲がどうしてあつたらう？
蛭間　されば、弓矢を初め飛道具の類は、一際村中にはないと先刻父上は云はれましたが、この様子では、何處ぞに隱してあつたものかと思はれまするな。
村長　いや〳〵、この村に鐵砲等所持致す者は一人もない。又、獵師とても住んでは居らぬ村だ。事によつたら上杉方の者が過つて火蓋を切つたやらも知れぬ。
蛭間　いや〳〵、そのやうな間違ひは、毛頭御座いませぬ。いづれは、行つて取調べれば解ること。然し、父上。こりや、容易ならぬ事になりましたな。（去る）
（鷺岡軍卒共と奥から出て來る。）
鷺岡　村長。今の物音は、何事だ？
村長　はい。――加賀見殿が、鐵砲の狙ひ打ちに合はされたさうに御座います。
鷺岡　むゝ、さては、この村にも謀叛人が忍び居つたな。草を分けても、索し出さねばならぬ。者共急ぎ參つて、その四邊に居つた者は、誰彼の容赦なく、皆引捕へて、此れに引つれ參れ。一々詮議をしてくれるわ。
軍卒　はツ。（去る）
鷺岡　其方は、蛭間が舅と聞くから、油斷をしてをつたに、

計らずもこの始末を惹起した。驚き入つた事だ。この様子では、村中の者が、我が上杉方に刄向ふ物と見ねばならぬ。その下手人が現はれる迄、氣の毒ながら、村長の其方を人質として縛つて置かねばならぬ。者共、縛れ！

軍卒　はッ。（縛りかける）

娘　申し、鷺岡樣。何卒、それ許りは――。

鷺岡　いゝや、ならぬ。

村長　私はお縄を頂戴致しませう。村人が致しましたなら、取りも直さず私の落度。如何やうなおとがめ受けましても、お恨みには思ひませぬ。

鷺岡　よい覺悟だ。して、この村には飛道具が豫て藏ひあつたのか？

村長　いえ／＼、只今その音を聞くのが初めてゞ御座います。鐵砲等を所持致す者はこの村には、開闢以來一人も御座いませぬ。

鷺岡　不思議な事があるものだのう。では、北條方の者が、早くも此處に忍び入つたかな。

娘　（うろ／＼して）早う、音若樣が戻られゝばよいがなア。ひさ。早う表を見てたもれ。

女中　畏りました。（外に出る）

（軍卒入來る。）

軍卒　下手人を召取り參りました。

鷺岡　何、下手人が捕はれたか？

（衣は破れ髮も亂れた倉藏が、蹌踉として縄に引かれて入り來る。蛭間其の後に從ひ、軍卒共及び村の女子供等も後に續く。月光強く室の内に射込む。）

村長　（一見するや驚いて）おゝ、そちや倉藏ではないか？

倉藏　旦那樣！、貴方も縄目の恥をお受けなさいましたか？　一體、こりや何うした事で御座います？

鷺岡　こりや、下郎。其方は、上杉方の侍頭加賀見藤彌太を、鐵砲でだましうちに致したか？

倉藏　これは、滅相もない。私はこの村端れの應善寺と云ふお寺からの歸り道に、餘り大勢の武者達が女を引きつれて往還を歩いて居なさる故、裏山を傳うてこなたへ來る途中、突然砲音が聞えたので驚いて耳をふさぐ所へ、バラ／＼と大勢の軍卒共がやつて來て、打つやら蹴るやら、とても命があるまいと思うて居る所へ、こなたの音若樣が見えられて、軍卒共を押しのけ、漸く助けて下されたので御座います。一體、何の科で、私は縛られたので御座います？

蛭間　それは、某から申し聞かさう。其方が耳をふさいだその砲音は、上杉方の加賀見藤彌太殿を狙打した砲音なのだ。その場附近には、其方の外には誰一人も居らなんだ。いや、村の男は一人も居なかつた。だによつて、其

方が下手人と見なされたのだ。氣の毒ながら、誠の下手人が現はれる迄は其方は縛られてゐねばならぬのだ。解つたか？

倉藏　解りませぬ。一向に解りませぬ。殺しもせぬ者を殺したとは、餘りに御無理で御座います。音若樣は、私にも御主人。私が人を殺すやうな男か、どうかは、よく御存知の筈で御座います。然し、あの場合、あのやうに若い乙女達が非道い目に逢ふのを見ては、よし、その手許に鐵砲がなくても、よも平氣では見て居られますまい。

鷲岡　下郎の分際で、無禮の雜言。者共。打のめせ？

軍卒　はッ。（打ちかける）

村長　あ、お待ち下され。その下郎の代りに、私が打たれませう。この村人の科は、皆私の科。そのお罰は私が引受けまする。鷲岡殿。この下郎の代りに、何卒、私を存分にお打ち下され。

鷲岡　この村の者共は、皆この下郎のやうに、我等上杉方に敵意を挾み居ると見える。蛭間氏。こりや全く油斷はならぬな。

蛭間　左樣に御座います。して、この先き、如何取計らひませう？

鷲岡　誠の下手人の現はれる迄、草を分けても、嚴しく取調べねば成らぬ。それが判らずば、最前の布令に示した通り、氣の毒ながら、これらの者を罪に落さねばならぬ。

娘　（蛭間に）もし音若殿。父樣の繩目を解いて上げて下さいませ。

村長　こりや、娘。何を申すか。この父は、立派な下手人だ。あの鳥おどしの弓すらも得引かぬ倉藏が、鐵砲を持つて人を打つ等とは思ひもよらぬ事だ。殊に、この男は、柿作りの名人だから、この村には大事な人間だ。この男を下手人の抵當にしておく位なら、未しも俺の方が、人質には適はしいのだ。

鷲岡　夜明け迄に、誠の下手人が現はれゝばよし。さもない時には、村長の望み通り、下手人代りとして、縛り首に合はせるのだ。

倉藏　え——ッ！　旦那樣を？

鷲岡　尙その上に、この村には、最前申附けたよりも餘分な取立てを申し附けねばならぬ。その事は皆もよう含んでおくがよからう。このやうな不祥事が湧起らねばよいがと、かね〴〵案じてをつたが、遂に、この恐しい結果となつた。村長。氣の毒だのう。

村長　何とも申しわけが御座いませぬ。

鷲岡　蛭間氏。早う手配をして、下手人を搜す傍ら、弓矢の類をも、隈なく搜すがよからう、それから、加賀見が屍體は、寺に運んで懇ろに葬りつかはせ。（奧に入る）

蛭間　畏りました。

倉藏　もし、旦那樣。誠の下手人が出ぬ時には、その代りとして、旦那樣の命を召されるので御座いますか？

村長　然うだ。それが、上杉方の掟だと云ふのだ。

倉藏　一體、何處の何奴が、人殺し等をしをつたのだ？（垣根の外の群集の方を向いて）これ、村の衆。そなた達の內に誠の下手人を知つてゐる者があるなら、早う連れて來い。然うでなくば、此村長樣が、代りに命を取られて了ふのだ。村長樣が居なくなれば、この村は暗ではないか？　この村は滅びるではないか？　皆々その事はよう知つてゐる筈だ。夜の明けぬ間に、早う下手人を索して來るが可いぞ！

（村の者達は互にうなづき合ひつゝ彼方に去る。）

倉藏　（暫く考へた末）もしも、下手人が出ぬ時には、旦那樣。私の命をおとり下さいませ。私は最早この世に住み倦きた者で御座います。それに妻はなし、子はなし、この世に何の未練も、望みも御座いませぬ。永年御恩になつた旦那樣の爲めに、この一命を棄てる事が出來れば、却つて仕合せで御座います。

蛭間　こりや、者共。この老人を彼方に引連れ參れ――。（軍卒が倉藏を連れ去るのを見た後）父上。嘸お苦しう御座いましたらう――。（と繩を解きかける）

村長　こりや、其方は、何故、俺の手をゆるめるのだ？

蛭間　はて、下手人は既に決りましたから、繩をお掛けしておく事は出來ませぬ。

村長　何？　下手人が決つたと？　それは、何處に居る？

蛭間　今の倉藏で御座います。

村長　本人はあの通り、手を下した覺えはないと申してをるのではないか？

蛭間　然し、父上。ようお考へ下されい。明朝迄捜した所で、迚も誠の下手人の出よう筈は御座　ません。なまじ、時間を延ばして居る內には、家々を殘らず搜す事にならうも知れませぬ。又あの氣の短い鶯﨑殿は、一思ひに村を燒けとの難題を持ち出すやらも知れませぬ。それより、あのやうにして妻も子もない、命も惜しくないと申してをる倉藏をば、本人の望み通り、下手人にして、村の爲め、あなたの爲めに殺した方が、一番おだやかでは御座いませぬか？

村長　それはならぬ。如何やうな理由があらうとも、誠の下手人ではない者を、下手人だとして殺す事は、この村長たる俺が不承知た！

蛭間　でも、高が下男の卑しい人間。村長の貴方の身代りには、少しも惜しうは御座いますまい。

村長　下男だらうが、何だらうが、人としての價値に何の

變りがあらう？　身分の高下等(など)を云つて居る時ではない。この村の者は、皆俺が兄弟や子供等だ。その者達を、どうして、俺の身代りに立てられよう？　殊に、あの倉藏は、柿の實を作る事に掛けては、天下の名人だ。この村には無くてはならぬ人間だ。この村にとつては、俺よりも遙かに大事な人間だ。あれを殺す位なら、俺は喜んで死んで行かう。俺こそ、最早、この世には用事の濟んだ人間だ。十八年間丹精して育て上げた柿の木が、漸う皆實を附けるやうになつて、村中は、どうやら、それで、過せるやうになつた。俺の務めは最うこれで、十二分につきたと云ふものだ。俺が死んでも、俺の魂は村中に永久に殘るであらう。それで俺は滿足なのだ。只思ひ殘りなのはこの八重、これ許りは、其方に賴むぞ。

蛭間　仰せには及びませぬ。然し、あたらお命を、高が下男と取換へにお捨てなさるとは――。

村長　いや／＼、下男とは取換に致さぬ。この村の代りに、村人の過の爲に、俺は一命を棄てるのだ！

蛭間　でも、御座いませうが――。

娘　晉若殿。父上もこの村も、下男の倉藏も、皆無事に助かる道は、ないものかいな？

蛭間　さア、その道がある位なら、斯程迄に苦心は致さぬ。父上。八重迄が斯程に心を痛めてをりまする。何卒、最一度お勘考なされては如何で御座いますか？　まだ、時は十分に御座います。

村長　いや、罪ない者を殺す事は、俺にはとても出來ぬ事だ！

蛭間　と申して、父上が身代りに立たれるのも、同じく無實の罪――。

村長　いや、俺は村長としての務めを果す迄だ。又考へて見るが可い。上杉方の其方を、知らぬ事とは云ひながら、我娘の聟にした事は、村長として、村の者等に何で顏向けが出來よう。それが爲めに、村を助ける事が出來ればの事。今にも村には恐ろしい災が降つて來ようとしてゐるではないか。それを、どうして、このまゝおめ／＼と、生き存へて行かれよう。

娘　父上樣。妾とても、この儘生き存へては居られませぬ。妾も共にお伴をさせて戴きます。

蛭間　何、其方迄も？

村長　こりや、娘。何を申す。其方は何も知らぬ事だ。村人には俺から十分に詫を云はう。生先長い其方を道連れにする位なら、俺は死にはせぬわ。この村も、村の者達も、皆傷けまい許りに、この白髮首を打落すのだ。

娘　晉若殿。父上をこの村から無事にお落し申す事は出來ませぬか？

蛭間　村のまはりは、味方の軍勢が、十重二十重に取巻いて居るから、とても、叶はぬ事だ。

村長　又逃げ延びたとて、其方や村には、仕合せが向いて來ぬわ。却つて恐しい報いが來よう。

蛭間　全くその通りで御座います。

村長　さ、然うと決れば、殘るは村からの取立ての事許りだ。其方も知る通り、みいりと云うては、柿の實の賣上げ許りの貧しい村。俺に向ける情があるなら、村中を救つてやつてくれ。これが、俺の一生の願ひだ。俺が命を棄てるのも、皆村を助けようが爲めだ。俺が死んでも、村が苦しめば、俺は犬死となる許りだ。男としての舁への最後の願ひは、これ許り。序でに、上杉方の軍勢が、片時も早く此村から引上げるやう、其方からくれぐれも鷺岡殿に頼んでくれ。

蛭間　畏りました。一々お尤もなそのお言葉。音若確かにお引受け致しました。

村長　では、あの哀（あは）れな下男の繩を解いてやれ。

蛭間　承知しました。（彼方に向ひ）こりや、者共。最前の下手人を、これへ連れて參れ。

軍卒　畏りました。（去る）

（他の軍卒入り來る。）

軍卒　申上げまする。村中の家々を殘らず捜しましたが、脇差の類四五本を見出した許りで御座います。殘るは、只この家許りで御座います。

蛭間　よろしい。下れ。（軍卒去る）

村長　音若。何分後を頼むぞ――。（脇差を拔いて腹に刺す）む――。

娘　やゝ、父上には――。

蛭間　おゝ、自害をなされたか――。

村長　いや、騷ぐまい。打首に合ふよりはと思うて、自ら始末をつけたのだ。さ、鷺岡殿に申して來い。加賀見氏をだまし打ちにしたのは、この渡四郎次だと。早うく。

蛭間　お八重。御介抱を頼むぞ――。（去る）

村長　これ娘。何も案ずる事はない。これで物事の決りが附いたのだ。只氣掛りなは、倉の中のあの菊次郎。敵に知られぬやうに、介抱を頼むぞ。

娘　あい――。

（鷺岡蛭間と共に出で來る。）

鷺岡　村長が、下手人であつたと申すか？

村長　如何にも某が下手人に相違御座いませぬ。その罪を悔いて、このやうに相果てまする上は、何卒、村一同の者をお助けあるやう、偏にお願ひ申上げまする。

鷺岡　承知致した。

（倉滅その他村の者等庭から急ぎ入り來る。）

倉藏　おゝ、旦那樣！　貴方は何たる事をなされました？その下手人は、この老ぼれで御座いましたに――。

村長　何をたはけを申すか。そのやうな事を申す暇に、柿の木を育てる事に力をこめてくれ。そして來年は、最つとよい柿の實をたんと作つてくれよ。それが、俺の最後の願ひだ。賴むぞ。皆の者にもよく賴んだぞ！（がつくりとなる）

娘　おゝ、父上樣――。

倉藏　旦那樣――。（鐘の音遠く聞える）

――幕――

山賊と首（一幕）

人

柴尾源太夫　傷ける武士
お菊　その妻
初太郎　その子供
庄兵衛　商人
山賊甲
同　乙

所

尾張國洲の股城附近の曠原内

時

永祿年間の秋の末頃

見渡す限り、荒寥たる枯野原。遠くに、山々の姿が、微かに見える。中程から稍上手寄りの所に、一本の枯れた大木が聳えてる。その根元に一匹の馬が斃れてをり、その胴の下には、鎧を纏うた一人の武士が打敷かれて倒れてゐる。彼は苦しげに、殆ど無意識に呻いてゐる。——彼の苦悶を表徴するかの如く、打顫へる夕映が、力無く空を照してゐる。

一羽の大きな胡蝶が、下手から飛んで來て、次第に枯木の方に飛んで行く。それを追つて一人の小童が、下手から走り出ると、その後から、母親らしい女が小走りに出て來る。彼女は疲れた樣子をしてゐる。

小童　（蝶を追ふ目を、ふと足下の草花に移して）やア、こんな綺麗な花が咲いてゐる……（花を取らうとして前に進む）

母親　不可い〳〵。その花に觸つては不可い。その花には毒があるのだよ。

小童　母さんは、何時でも、坊やの取らうとする花には、毒があると云つて、お止めなさるのね。

母親　然うだよ。お前の取らうとする花には、何時でも毒があるのだから、それで、止めるのだよ。……さ、こんな淋しい所にゐないで、早く彼方へ行きませう。（手を取る）

小童　坊やは、先刻の蝶々を取つて行くのだ。先刻の蝶々を索すのだ。（母親の手を振放さうとする）

母親　（小童の手をしつかと握つて）不可い〳〵。お前一人で先きへ行つては不可い。母さんを置いて、何所へ行くのだよ。

小童　だつて、坊やは、あの蝶々を……

母親　否え、不可い。坊やは母さんを置いて行つては不可い。……坊やまでも、この母さんを棄てゝ行かうとするのかえ？　お頼みだから、坊やだけは、母さんの側を離れないでおくれよ。

小童　（無言で母親の顔を見上げる）

母親　よく聞き分けておくれだね。……さ、この石に腰かけて少し休んでから行きませう――（小童と共に傍らの石の上に腰を下す）

小童　母さん。坊達は、これから、何處へ行くのだえ？

母親　さア、それが解らないのだよ。お父さんが歸つてゐらつしやらないと、何うして可いか解らないのだよ。

小童　お父さんは、何所にゐるの？

母親　それが解らないのだよ。

小童　何日歸つてゐらつしやるの？

母親　さア、それも解らないのだよ。

小童　一體、何をしてゐらつしやるの？

母親　戰さをしてゐらつしやるのだよ。

小童　戰さつて、そんなに面白い事なの？

母親　さア、お父さん方には、面白い事らしいのだけれども、お前や母さん達は、そのお蔭で、斯うして、何所と云ふ宛もなく、野から山、山から町と……。あゝ考へれば、本とに、こんな情けない事はない――（さめ〴〵と泣き出す）

小童　母さん、泣かないで頂戴よ。坊やも悲しくなるから、何卒、泣かないで頂戴よ……（ふと、最前の蝶か、目の前に飛んで來たので、思はず立上る）あゝ！　蝶々が飛んで來た……（蝶の後を追つて、枯木の根方に行くと、其所に人と馬が倒れてゐるのを見て打驚く）やア！　此所に、人と馬が倒れてゐる。恐い〳〵……（母親の所に走り戻る）

母親　そら、御覧なね。その通り怖い物が居たらう。さ、此方へお出で。何でも母さんの云ふ事を聞くのだよ。

小童　（枯木の根本の方を指して）母さん。彼所に、人と馬とが、血だらけになつて倒れてゐるのだよ。

母親　それこそ、軍さ人が戰ひに敗けて倒れてゐるのだらう。氣味の惡いことだ。さ、こんな恐しい所にゐないで、早く彼方（あちら）へ行きませう。さ、早く行きませう……（小童の手を引いて、下手に入りかける）

（商人庄兵衞急ぎ足に下手から出て來て、母子と行逢ふ。）

商人　おゝ、丁度好い所で行き合つた。今お前さんの後を索して、此所までやつて來た所だ。さ、俺と一所に行かう。今日こそは、何うあつても、俺の所に連れて歸るの

だ。……これ、お菊殿。何を呆然りしてゐる――（その袂を取る）

母親 （輕く袂を振拂つて）何卒、最う暫く待つて下さい。その内には、屹度、夫が戻つて來ますから。

商人 これさ、何を云ふのだ。夫が歸る〳〵は、此三月の間隨分聞き飽きたよ。今度其方の亭主が歸つて來る時には、大方白骨の亡者になつてゞあらうよ。其方の亭主小源太の御主人齋藤龍興と云ふ人は、洲の股の城を追はれて、今では、何所ぞの山に隱れてゐるさうだ。とても、戰さに勝目は無し、城を取返す見込みもなし、小源太は主人諸共討死に決つてゐる。そんな生きて歸る見込みのない亭主に義理立てして、つまらぬ月日を送るよりは、この金のたんとある庄兵衞の女房になつて、面白可笑しくその日を送つた方が、遙かに仕合はせではないか。それが、當世向きと云ふものだ。まして亭主の小源太は、武士になりたさに、評判のよい𥡴作りの商賣を投げ棄て、然も女房小供を抵當に、この俺から金を借り受けて、戰場に驅け出して行つた大馬鹿者だ。そんな不實男に情を立てると云ふ法があるものか。さ、きつぱりとあんな男の事は諦めて、この俺の女房になるが可い。（再びお菊の手を執らうとする）

母親 ま、待つて下さい。夫の愚かさは、云はれないでも私にも能く解つてゐます。でも、私には、何うしても振棄てる氣にはなれません。これが所謂義理かも知れません。未練かも知れません。とに角、私は何うしても、夫の歸るのを待つてゐねばなりません。第一、この子供が可哀想です。

商人 いや、この子が何れだけ仕合せになるか解らない。金持の伜になれば、立身出世は、思ひの儘さ。一日後れれば一日の損だ。この間から、此方等親子を引取る用意は、ちやんと出來てゐる。さ、俺と一所に、俺の所へ行くとしよう。とや角、迷つてゐる時ではない。さア、俺と一所に――（女の手を取らうとする）

母親 （手を振切る）えゝ、厭な事です！

商人 と云つて、其方の身體は、其方の亭主が軍さに出る時に、借金の抵當に立派に入れて行つたのだぞ。

母親 譬ひ何んな約束がしてあつても、私は私です。私は私の好きな事をするだけです。第一、庄兵衞さん。お前さんは、私大嫌ひです。

商人 何、嫌ひだ？ へん、嫌ひだらうが、何だらうが、俺はこれから屹度お前を連れて行く。そして嫌ひと云つたその口から、この俺を可愛いゝと云はして見せるのだ。ハヽヽ。其方は、最早俺の物だ。一所に來い！ えゝ、面倒だ！

（無理に手を執つて引立てようとする。）
母親　えゝ、己れ！　誰が引かれて行くものか？（と云ひながら、矢張り引かれて行く）
小童（泣き出して）あれ！　母さん！（母親の後を追ひかける）
商人（小童を蹴り飛ばし）えゝ、煩さいわい！　泣いたり吠えたり、煩さい餓鬼だ！
母親（小童の傍に驅け寄つて）まア、何て非道い事を………。だから、私は貴方が嫌ひだと云ふのです。
商人　えゝ、今となつて、好きも嫌ひもあるものか！　何うあつても、連れて行くのだ！（むづとお菊の手を掴みかける）
母親　あれ！　何をするのです！（小童の手を引張つて逃げる）
商人　己れ、逃して堪るものか――（追かける）
（母子は逃げ迷うて、結局、枯木の根の人馬の倒れてゐる所へ、我知らず進み寄る。）
武士（突然物音に頭を擧げて、お菊を見る）おゝ、お前は、お菊でないか！
母親　お！　貴方は小源太様！（思はず近寄る）
武士（母子に追すがる商人をはつたと睨んで）己れ！　庄兵衛め！　己の女房を取らうとするのか？
商人　知れたことよ。約束通り、金の抵當に貰つて行くのだ。それが惜しくば、約束通り、貸した金を返してよこせ！　さ、元利揃へて、金を返せ！
武士　その金は、今は返せない。今はまだ戰爭最中だ。戰爭が濟んだら、必ず返すから、何卒、それまで待つてくれ。
商人　へん、この上待たされて堪るものか。第一、その大怪我で、命が助かると思つてゐるのか。このたはけ者め！　愚圖々々云はずに、その女を渡して了へ。然うすれば、愈々死んだ曉には、念佛の一つ位は稱へてやらうわい。
武士　そんな無慈悲な事を云はずに、最少し待つてくれ。すれば戰さには、必ず勝つて、一城の主になれるのだから、借りた金の十倍にも、廿倍にもして返す。必ず返す。
商人　ふゝん、その態で、戰さに勝つも押が太いや。一時と經たぬ内に、くたばつて了ふにきまつてゐる。目をつぶらぬ内に、女房を渡して了ふ方が、まだしも功德だ。さ、早く女房を渡して、成佛して了へ。
武士　己れ！　これ程頼んでも、また聞入れてはくれぬのか。足は立たなくても、この通り、腕はまだ達者だぞ！
（刀を拔いて振廻はす）
商人（少し遠のいて）おい／＼、白痴威しは廢してくれ。

己には、この通り、二本の足があるのだ。……さ、お菊。己と一所に來るのだ！（お菊の手を取つて急ぎ行きかける）

母親　あれ！（手を振切らうとする）

武士　えゝ、己れ！　無禮をしをるか！（追はうとして立上りかけたが、足の痛みに地上にまろぶ）あ！　痛々！

母親　もし、貴方！（心配して戻りかける）

商人　えゝ、何所へ行く！　己と一所に來るのだ。おい、小源太、いや、今では柴尾源太夫か。貴樣は柄にもない侍等にならうとしたから、この態になつたのだぞ。桶屋渡世をしてゐれば、こんな事にはならなかつたのに、なまじ藤吉郎の摸似等するから、此態なのだ。然も、女房を質に入れて、鎧を買つたり、馬を買つたりした揚句がこの態だ。何と可い氣味ではないか。これも皆罰だ。この可愛い、女房は、己が助けてやるからな、有難く思つて成佛するが可い。本來ならば、貴樣の首に引導を渡してから行くのだが、己は斬られる事が嫌ひなら、斬る事も大の嫌ひだ。御慈悲に斯うして放といてやるから、おとなしく犬や鳥の餌食となるが可い。己とお菊とは、これから、三々九度の杯を擧げるのだ。草場の蔭から、よく羨やんで拜むが可いわい！　さ、お菊。日の暮れぬ内に行かうぜ。（女を引立て行きかける）

武士　おい、庄兵衛。貴樣は、何うしても、お菊を連れて行くのか？

商人　知れたことよ。草場の蔭から、己達二人の仕合せを祈つて居れよ。

武士　あゝ、己も木下藤吉郎と一所に、織田方に附いてゐれば、こんな事にはならなかつたのだ！

商人　おい、藤吉郎とお前とは、ちつと計り人間が違ふぞ。そんな事を口にするだけ可笑しくなる。こんな馬鹿者に、このお菊を添はしておくのは、第一勿體ない事だ。……此所にゐれば益々未練を募らす許りだ。さ、行かう。日がすつかり落ちて了つた。早く行かう。（お菊を引張り、行きかける）

小童（母の手にすがつて）母さん！　坊やも連れてつておくれよ！

武士　初太郎。お前も行くか？（悲しさうに見送る）

母親　わアッ！（思はず地上に泣き伏して了ふ）

商人　おいお菊。何うしたのだ？　亭主に未練が出たのか。こんなやくざな男には、早く見切りを附けたが可いぞ。御前の友達のお萬を見ろ。猿のやうだと笑はれたあの木下藤吉郎の女房になつた計りに、今では、織田方の侍頭の奥方となつて、豪勢な暮しをしてをるわ。お前も、これから、心を入れ替へて、おとなしく己の女房になつた

なら、今迄の不運は皆取返せると云ふものだ。さ、日の暮れぬ内、早く行かうぜ。

武士　（庄兵衛の前に手を突き）　庄兵衛殿、俺が如何にも悪かつた。金も今直ぐ返す。謝りもする。何卒、その女房と子供とだけは、置いて行つてくれ。その女房や子供を仕合せにしてやらう許りに、俺は戦さにまで出かけて行つたのだ。何卒、頼むから、返してくれ。この通り頼む〱――（地上に頭を摺り附ける）

商人　えゝ、煩さいわい！（武士を足蹴にする）己は、何うでも、お菊を己の物にするのだ！

武士　何うあつても聞かぬのか――む！　己れ！（立上りかけて苦悶する）

（商人は、泣き伏してゐるお菊を引摺るやうにして、彼方に連れ行く。小童は泣き〱母親の後を追うて入る。武士は悶絶した儘、苦しさうに呻き聲を洩してゐる。軈て急に四邊暗くなり、木枯物凄く吹荒ぶ。次第に又明るくなつて、月光冷たく野原一面を照す。）

武士　（静かに頭を擡げて、四邊をきよろ〱見廻す）　おお！　今のは夢であつたかな！　夢にしては恐し過ぎる夢だつた……。待てよ、あの庄兵衛の奴は、己の留守中に、乾度あのやうな事をして、お菊や子供を意地目てゐるに違ひない……。あゝ、早く戦さに勝つて、國に歸りたいなア。（ふと足の上の馬の屍體を眺め）や！　馬が脚の上で死んでゐる！　道理で、腰から下が抜けるやうに痛いと思つた。そして、最早、氷のやうに冷たくなつてゐる。この寒さが身體に傳はつて、ぞく〱する程寒い。痛い〱。動かすと氣の遠くなる程足が痛い。（手をやつてみて）や！　血だらけだ！　兩足共、骨まで砕けてゐるやうだ。あゝ、何うしたら可いだらう？……　おゝ、寒い〱。身體中凍るやうに寒い。冷たい風が吹いてゐるな。此所は、一體、何所なのだ？　見渡す限り荒野原だ！　こりや、一體何うしたと云ふのだ？　何うして、こんな所へ、一人で來て了つたのだ？　然うだ、織田方の軍勢に斬り卷っれて、皆一散に逃げ出した。己は五十人許りの者と一散に西の方に走つた。敵は尚追掛けた。それから後は知らない。己一人でこんな所へ來て了つたのだ。……誰か居ないかな。敵でも可い。何でも可い。己のこの身體を、馬の下から引出してくれる者はないかな……。味方は全體何所へ行つたのだ？　この怪我をした己を見棄てゝ何所へ行つたのだ？　いや、己から澤山金をねだり取つた家來の軍兵共は、何處へ行つた？……月が蒼く照つてゐる。最う日が暮れたのだ。己は朝からまだ食事をしてゐないのだ。腹が脊骨に引附く程ひもじさを感ずる。脚はずき〱痛む……。あゝ、誰も人は通

らない。寒い風が嘲けるやうに吹いて通る。枯草が笑ふやうに首を振つてゐる……。あゝ、何うしたら可いだらう？　矢張り、女房の止めた時に、軍さ人になるのを廢せば可かつたのだ。いや、軍さ人になつても、藤吉郎のすゝめを聞いて、織田方に附いてゐれば可かつたのだ。齋藤方がこんな脆い負けやうをしようとは思はなかつた。己は結局藤吉郎程目先きが利かなかつたのだ。あゝ、己は馬鹿だつた〳〵。一國一城の主所か、この荒野原で馬と一所に白骨を曝すのだ。あゝ、どうしたら可いだらうな？　この儘、まご〳〵してゐたら、本とにこの命は無くなつて了ふ。女房は本とに庄兵衞に取られて了ふ。然う思ふと、傷口が一段と痛んで來た。寒い風が身に泌みて、氣が遠くなつて行くやうだ。あゝ……あゝ……（地上に伏して呻吟する）

（木枯一段と物凄い音を立てゝ吹荒む。山賊甲乙上手奥からぬつと現はれ出る。）

甲　（武士の倒れてゐる樣に目を光らせ）おい！　其所に何か光る物が見えるぞ！

乙　何、大方犬の骨の腐つたのが、月の光に光つて見えるのさ。

甲　いや、然うぢやない。確かに金光りがしてゐる。

乙　ふん、この原ぱの內に、金は落ちちやゐねえよ。さ、慾を渇かさんで早く行かうぜ。

甲　いや、確かにピカ〳〵金の光りがする。此所に待つてゐろ。見てくるから……（人馬の倒れてゐる所へ進んで來る）

乙　おい、何時かのやうに、大蛇に嚙まれても知らんぞ。

甲　（後ろを振返つて）おい！　鎧武者だ〳〵！　立派な鎧を着てゐる落武者だ！

乙　何、鎧武者だ？（前方へ思はず進み出る）

甲　確かに一かどの大將だ。可哀想に、馬に敷かれて死んでゐる。後ろから矢でやられたのだ。澤山矢が刺さつてゐる。……この樣子ぢや、五十や百の金は、持合はしてゐるだらう。（尙その側に寄る）

乙　敗け軍さの大將だ。何で纏まつた金があるものか。

甲　ま、引起して見よう。一寸、手傳つてくれ。

乙　（武士の身體に掛けた手を引いて）や！　此奴はまだ生きてゐる！

甲　何！　生きてゐる？

乙　然うよ。この通り、まだ溫い息をしてゐる。

甲　では、馬が倒れると一所に落ちて、氣を失つたのだ。

乙　兩脚が折れて、血だらけだ。どうせ、こりや、助かる見込みは無いや。

（武士ふと目を醒してきよろ〳〵四方を見廻はす。）

甲　ふん、生返つたな。……おい、侍さん。氣分は何うだい？

武士　お前等は何だ？

甲　見る通りの人間さ。

武士　此所は、何所だ？

乙　此所は洲の股に近い野原だ。此所に入つたら、出口が分らんと云ふ所だ。お前さんは戰に敗けて逃げ込んだと見えるな。

武士　敗けたのぢやない、馬が傷を負つて、狂ひのやうに走り込んだのだ。

甲　一體、御前さんは、何方の軍さ人だね？　織田勢かね、それとも、齋藤勢かね？

武士　齋藤勢だ。

甲　では、敗けた方ぢやないか。總大將の齋藤龍興は、今朝方木下藤吉郎の軍勢に首を擧げられたぞ。

武士　では、大將殿には、討死なされたか……（がつかりとなる）

乙　何だ、それも知らずにゐるのか？

甲　外の者は、皆降參して了つた。お前さんも降參して了へば、こんな事にはならなかつたのだ。

武士　（むくと顔を擧げて）おい、賴むから、この兩脚を、馬の下から引出してくれんか。

乙　藪から棒に何を云ふのだ？

甲　第一、その脚を出して何うする？

武士　洲の股の城へ歸るのだ。

乙　その城は、疾くの昔に、織田勢に取られて了つたわ。

武士　えッ！　城も落ちたか？

乙　總大將が討死したのだもの、當り前ぢやないか。

武士　では、何所か外の所へ落ちて行かう。

甲　まア、その脚ぢや、見合せたが可いだらうぜ。

武士　おい、賴むから、何卒、この脚を引出してくれ。（自ら引出しかけて）あゝ、痛い！

乙　痛むのかね？

武士　痛い……段々しびれて、物を云ふにも舌がしびれて來た。賴むから、何卒、助けてくれ。禮は屹度する。

甲　禮をするかい？

武士　する。屹度する。

乙　だが、この傷ぢや、とても、一尺と歩けまいぜ。

武士　背負つて行つて貰ふのだ。

乙　ふん、虫の良い事を云つてらア。して、その禮は、何の位くれる積りだね？

武士　五十兩やる。此所に五十兩持合はしてゐるから、それを、皆やる。（胸の中を指す）

甲　む、其所に持合はしてゐるのかい。何うだい？　お前

は、やる氣があるか？（乙と一寸顔を見合はせる）
乙　ぢや、その金で、何處までも擔いで行くとしようか？（甲と目で何かを合圖する）
武士　賴むから、何卒、然うしてくれ。一刻も早く、この死んだ馬の下から脚を引出してくれ。氷のやうな屍骸の冷たさが、此方に傳はつて、宛で凍えさうなのだ。
甲　よし〳〵、今出してやる。だが、最少し聞かせてくれ。御前樣は、齋藤方の何だね？　大將かね、何だね？　身分を聞かせておくれ。
武士　一方の旗頭だ。柴尾源太夫と云ふ旗頭だ。……金はこの通りちやんと腹卷の内に用意してある。（懷ろを叩いて見せる）
甲　よし！　では、早速引出すとしよう。（乙に向ひ）さ、手傳つてくれ。手前は、その身體の方を引張れ。己は馬の方を持上げるから――（乙に何事かを目配せしつゝ、馬の側に寄るや、傍らの地から侍の刀を取上げ、矢庭に武士　首を斬落す）えい！
乙（驚いて飛びのき）吃驚した。己の首を斬つたかと思つたよ。
甲　臆病者めが。さ、此奴の懷ろを索れ……（乙と共に武士の鎧に手を入れ金包みを取出す）むゝあつたあつた！大部重いぞ、五十兩は確かだ――（乙かまだ何か探してゐるのを見て）おい、何をまだやらかしてゐるのだ？
乙　まだ外に、金目の物があるかと思つてよ。
甲　馬鹿な！　何時もの旅人とは違ふぞ。戰さに敗けた侍だ。金の外に何があるものか。……さ、其所に落ちた首を持つて行かうぜ。
乙　この首を、何うするのだ？
甲　知れた事さ。織田方の陣所に持つて行つて、恩賞に有り附くのだ。そりや、手前にやるから、擔いで行け。
乙　財布を持つ方が餘程樂だな。空腹に生首は、可なりこたへさうだ。だが、棄てゝ行くのも勿體ない。どれ、持上げようかい――（首を取上げる）
甲　最う、夜明けに間もあるまいな。（步き出す）
乙　然うだ。東が白みかゝつて來た。
甲（步きながら）久し振りに、小判の袋を懷ろに入れて、良い氣持だ。
乙　此方や、さつぱり氣持ちがよくねえや。時に、この首は、何の位の相場かな？
甲　然うよな。何時もの首と違つて、其奴はちつと格が可さゝうだから、二三十兩にはならうぜ。
乙　何とか云ふ名の侍だつたな？
甲　柴尾源太夫と云ふ旗頭だ。
乙　聞いた事のねえ名前だな。……（急に思ひ出したやう

に立上つて）おい！　兄貴。此奴は駄目だぞ！

甲　何故さ？

乙　何故つて、御前。この男の主人の齋藤龍興は、とうに打首になつてゐるぢやねえか。戰さは濟んで了つたのだぜ。そこへ、こんな旗頭位の首を擔いで行つたつて、誰が三文にも買ふもんか。

甲　成程、然うよな。己もうつかりしてゐた。アハヽヽヽハ。

乙　おい、笑ひ事ぢやねえぜ。こんな重い物を、擔がせやがつて。

甲　氣の毒な事をした。其處いらへ打ちやらかして了へ！

乙　えゝ、馬鹿々々しい。鳥の餌食にでもなりやがれ！

（奥の草むらの内へ放り込む）

甲　ハヽヽヽ。可い音がして轉がりやがるわ。

乙　さ、兄貴。小判の方を半分持たしてくれ。

甲　煩せえ奴だな。……（懐ろから金を掴み出して）そら、これが半分だぞ。

乙　ちと、不足のやうだが……

甲　文句を云はずに歩け。

乙　む、行かう。大分遲くなつた。皆は最う待つてゐるぞ。

（歩き出す）

甲　鷄が啼き出したな……。さ、皆に仕事を荒されねえ内に、早く行かうぜ……。

（急ぎ足に二人は歩き出す。）

――幕――

喜劇

春霞墨田堤（一幕）

人物

俥夫
女裝の男
覆面の男
洋裝の男
和服の男
仙吉の女房
男女職工
下僕通行人等々

時

現代――春の夜から朝にかけて

所

墨田川上流の堤下、草むらの中

堤には爛漫と咲き亂れる櫻の木が立ち竝び、水際の草むらの中には草花が開く。堤の一部分には水門口がある。朧ろ月夜文金の高島田に結つた美裝の娘を乘せた俥が一臺來掛る。

女　ちよいと、俥屋さん。こりや、道が違やしませんか？

俥夫　何、これが近道ですよ。それに、堤の上は、下手な運轉手が、かまはず自動車をぶつ飛ばすから、危くて歩かれやしませんや。昨日も荷車を一臺引掛けて了つて……

女　あの、濟みませんが、急ぎますから、何卒、早くやつて下さいまし。

俥夫　一寸、此所ん所は、道が惡いんでね――（俥は止つたも同樣に、のろのろとなつてゐる）姐さんは、今夜の園遊會へ行きなさるんですかい？

女　えゝ。だから急いでゐるんです。

俥夫　少しおそ過ぎらアな。だが、何しろ牛山の御前の威勢と來たら、豪儀なもんでさア。大臣初めお上のお役人は、皆あゝしてお機嫌伺ひに行くんですからな。

女　何卒、早くやつて戴きます。

俥夫　（急に鋭い目をして四方を見廻はした後、突然梶棒を止めて）姐さん、濟みませんが、一寸降りておくんなせい。

女　おや、何うしたんです？

俥夫　此所に水溜りが出來てゐるんでね、この儘ぢや渡れねえ――（梶棒を下し、女を地上に立たせる）

女　本とに仕樣が無いわねえ――（足許に氣を附けながら先きに歩いて行く）

俥夫　氣を附けてお歩きなせいよ――（棍棒を持つ手を放すや否や、先きに進む女の目許へ、後ろから急いで猿ぐつわを掛けて、片手で女の身體を抱きすくめる）靜かにしろ！　じたばたすると、怪我するぞ！　己の云ふ事をよく聞いて何でもはい〳〵云つてりや、間違えねえのだ。さ、おとなしく此方へ來な――（幾分手を緩めて、彼方へ連れて行きかける）

女　やい、巫戯けた眞似をしやがるな！――（と云ひ様、俥夫の腕を肩にかついで、その大きな胴體を地上に叩き附けた女は聲と共に、その態度は、急に男子に變つて了つた。鬘を取去つて、車の蹴込みにどつかと腰を下し、急に起上り得ない俥夫の方を見下しつゝ）人か急ぎの用事を抱へてゐるから、下手に出りやつけ上り、段々邊鄙な所へ引摺り込みやがつて、とゞのつまりが朦朧屋の本色を出しやがつた。手前のやうな貧乏人意地目の弱い者泣かせは二度と惡事の出來ねえやうに、首つ骨をへし折つてやるのだが、此方は今夜大事な用事を抱へてる身だ。今夜計りは見のがしてやるから、以後は心を入換へて、人助けに宗旨を變へろよ――つと立つて行きかける）

俥夫　（地上にあぐらをかいた儘）待て、若造。手前、その儘失せやがる氣か。憚りながら仲間中ぢやちと計り顏を知られた月の輪銀次だ。切取り強盗強請り騙り、惡事と云ふ惡事は皆仕盡して、娑婆にゐるより獄舍に暮した年數の方が遙かに多いのよ。近頃は、仕事がずつと仕づらくなつて、甘え酒にも有り附けねえから、急に宗旨を變へて、この誘拐屋さ。若い女と見りや、皆此所に引摺り込んで、云ふ事を聞かした上で、遠くのだるま屋へ叩き賣るのだ。遂そ今日迄仕くじつた事はねえのに、手前の化け方が器用な計りに、この銀次も、つい、一生のへまを見た。だが、其方がすつぱり鬘を脱いだからにや、最うその儘ぢや歸しちややれねえ。損料物の衣裳鬘で化け込むからにや、何うせ只の惡黨ぢやねえ筈。仲間同志の寸法位は心得て居ようわさ。それを何でい、惡事を廢めろの御說法は聞いてあきれらい。やい、この銀次に泥を嘗めさした手前は、全體何所の何奴だ？　さ、名を名乘つてから勝負を仕直せ！

女　いや、暇な時なら幾らでも對手になつてやるのだが、生憎く今夜は急くのだ。仲間は先きで待つてゐる。いづれ、緣があつたら又逢はうよ。月の輪銀次と云つて訪ねて行かうよ――（行きかける）

俥夫　やい〳〵、待て――。手前は、一體、茶番じみた容姿をして、牛山の御殿へ何しに行くのだ？

女　聞きたくば云つて聞かさう。貧乏人や弱い者を助ける爲め、大泥棒の仕事なんだ。

倖夫　何、泥棒だ？　其奴は頗る耳寄りの話しだ。

女　馬鹿！　手前達のやうな、けちな金に手を下す泥棒ぢやねえのだ。全國何千萬人からの勞働者を仕合はせにしよう爲に、〇〇のお役人と牛山とが契約した祕密の書類を取りに行くのが目的なんだ。

倖夫　へん、馬鹿に大きく出やがつたな。萬更惡い企てぢやなさゝうだが、手前のやうな青二才に書類を易々取られるやうな、そんな、へまな牛山の御前ぢやねえのだ。さ、物は相談だが、何とその仕事に加はらしちや貰へねえかな？

女　折角の望みだが己達泥棒の仲間にや、手前のやうな監獄等に入り込んだそんな穢れた人間は、一匹も居やしねえのさ。皆世の中の手本となるやうな人間計りだ。

倖夫　へん、人がおとなしく聞いてゐりや大きなほらを吹いてゐやがる。入れてくれなきやそれ迄よ。實は、この界隈で、牛山家に仇をするやうな奴は、こつそり疊んでも可いと云ふ內密の賴みをお屋敷から受けてゐるのだ。貴樣を此所で料理つて了や、當座の飲み代は湧いて來る。それも人助けの一つだ。然うと決つたらきつぱり斷念めて、銀次の手に往生して了へ！——（短刀を拔いて切り掛る）

女　最つと痛い目が見たいと云ふのか。えゝ、ちよこ才な——（掛つて來る刄に身をかはし、遂に對手の短刀持つ腕を捕へて、強く捻ぢ上げる）

倖夫　あ、痛々！　此奴、見掛けによらず、腕節の强い男だ！　最う斯うなつたら敵はねえ、貴樣の云ふ儘になつてやるから、せめて貴樣の名を聞かしてから殺せ！

女　問はれて何の何某と、名乘る程の茶番氣は生憎く持合はさねえ。それよりも、己は、大事の用事を控へてゐる。それの濟む迄は、損料の着物は、うつかり汚されねえ。まだ、ちつとは寒からうが、手前は、ちと計り水雜炊でも喰つてゐろい——（倖夫を無理に引ぱつて、河岸へ行きかける）

（突然、正面の水門口がぬつと上る。內から覆面の男が鞄を抱いて現はれる。）

覆面の男　おい、待て！

女　貴樣は、何者だ？

覆面の男　おい、仙吉。己だよ——（覆面を取る）

女　む、貴樣は、勘藏！　又仕事の邪魔に來やがつたか？

覆面の男　邪魔所かい、今日こそ、己の方が先手を打つて、これこの通り、貴樣の狙ふ祕密の書類は、牛山の屋敷からまんまとせしめて來たわ。何と、己の手際には感心したらう。ハ、、、、。

女　えゝ、汝れにそれを渡してなるものか。何千人かの勞

働者の命にかゝはる大事の書類だ。

覆面の男　ハ、、、、そんな事は己の知つたことかい。己は、これを○○の役人に見せて、しこたま金をいたぶればそれでいゝのだ。生意氣に義賊振つた眞似をして、勞働者達の機嫌を取らうとする貴樣の根性が癪に觸るのだ。手前がそんな事したつて、勞働者や世の中の人達が決して仕合はせにはなりやしねえよ。おいらも若い時にはそんな事を考へた事もあつたが、そりや皆他愛もない屁のやうな夢だと悟つて、今ぢやすつかり宗旨を變へたのよ。手前達の仲間と緣を切つたのよ。そして己獨りの利益計りを考へてゐるのさ。ハ、、、。ちつとは、これで、溜飲の虫が納まつたと云ふものだ。おい、俥屋。その俥を此方へ持つて來て、己を挽いて行け。

女　えい、貴樣にそれを渡してなるものか。今迄の苦心が皆水の泡た。さ、おとなしく渡して了へ！——（鞄を奪はうと掛つて行く）

覆面の男　ハ、、、、折角、花見の飲代にしようと思ふ大事の代物だ。易々渡してなるものか！

女　貴樣の賣國奴に渡しちや、皆の不幸だ！　何うあつても奪つて見せるわ！——（激し　鞄の取合ひをする）

俥夫　己も一番、分け前に預からざア。（彼も鞄に向つて手を出す）

（三人もみ合ふ間、遙かの園遊會の樂隊は、賑やかに奏樂する。鞄は遂に川の内に落ちて了ふ。三人驚いて顏見合はす。軈て三人は、申合はせたやうに、急いで川の内へと飛び込む。）

（遠寺の鐘が鳴り渡る。）

（川上からけたゝましい音をさせてモーターボートが來る。二人の男は、船から重い袋を持つて陸に上る。袋を幾つも船から陸に取出して積上げる。）

和服の男　やれ／＼、漸く片附いた。

洋服の男　現金で五萬兩、運びでのあるもんだ——（煙草に火を點ける）

和服の男　間違ひなく受取りに來るのだらうな？

洋服の男　來るとも。來なけりや商賣にはならんからな。

和服の男　確かに巧く行くのだらうな？

洋服の男　正午の汽笛を合圖に、あの大工場は、一齊に仕事を廢して見せる。

和服の男　然う行けば、君への禮金は、又別に澤山旦那から出させるよ。

洋服の男　其奴を是非忘れず賴むぜ。何しろ、難しい仕事だからな。一つ間違や首物だ。

和服の男　そりや、お互だ。だが、君の腕は、凄いもんだ。あのけちん坊の主人から、易々五萬兩の金を出さしたん

だからな。——（對手の肩を叩く）

洋服の男　冗談云つちや困るよ。二萬の職工にたつた五萬の端た金だ。實は巧く行くかと危ぶんでゐるのさ。

和服の男　おい〳〵、今になつて寢返りは非道いぜ。

洋服の男　何、引受けたからにや、見事やつてみせるがね。然し、牛山と云ふ人は太い男だ。あんな惡黨は見たことがねえ。

和服の男　そりや、何しろ、一代であれだけの身上に叩き上げた人物だ。使はれてる已達でも、時々冷やりとするやうなことがたんとあるよ。

洋服の男　〇〇の役人と結托して、あの大工場のストライキをやらせ、そして、その仕事を皆自分の工場に取つて了はうとは、ちとあこぎなやり方だ。全く五萬ぢや安過ぎる仕事だよ。

和服の男　だから、君にや、別に禮金を出すと云つてゐるのさ。

洋服の男　已の禮金なざ何うだつて可いが、そんなこと迄して金儲けがしたいかと思ふと、已は情けなくなつた。

和服の男　君の考へは單純だよ。その儲けは、牛山の旦那一人の懷ろに入ると思ふのは大間違ひ。そら、例の〇〇の親玉ね、それから、あれからこれと、夫々金の行き路は分つてゐるのさ。牛山の旦那は、云はゞ道具さ。

洋服の男　番頭さん。厭にお忠義振りを見せてるね。それだけの事が云へるにや、餘程鼻藥が利いてゐるような？

和服の男　何うして〳〵、見たり聞いたりが樂しみなのさ。云はゞ矢張り道樂仕事さね。だが、毎日見慣れてゐても、冷やりとするやうな凄い話しが湧いて來るからね。

洋服の男　フン、そんな仕事は、番頭さん、大抵お前が參謀だつて云ふぢやないか？

和服の男　何、凄い參謀は、たんと附いてるよ。

洋服の男　だが、日本中を引搔き廻はすやうな惡事をたくらむのは面白からうね？

和服の男　世間の奴等が騷ぎ立てるのを、知らぬ顏して高見で見物は、まんざら惡い氣もしないね。ヒ、、、、。

洋服の男　大惡黨め！　この頃流行る强盜なんざ、宛で蚤見たいなもんだ！　それにつけても何も知らずに道具に使はれる勞働者は可哀想なものよ。

和服の男　不似合な佛心を起したね。

洋服の男　考へりや、つく〴〵厭になつて了ふ。

和服の男　おい〳〵、今更弱い心を出して貰つちや困るぞ。

洋服の男　何、大丈夫々々々。

和服の男　さて、中々皆はやつて來ないね。

洋服の男　まだ。やつと東が白みかゝつた計りだもの。蒸氣が動く頃になりややつて來るよ。

和服の男　他人(ひと)に見附かると厄介だからな。

洋服の男　何、此所は、決して人の通らねえ所だ。何なら番頭さん。私が此所に待つてるから、引上げてもよござんすよ。

和服の男　では、然う願はうか。朝迄にまだ仕事が澤山あるから。

洋服の男　安心してお歸んなせい。

和服の男　では、正午を合圖に大丈夫だらうね？

洋服の男　その代り、禮金の方を確かに頼みましたぜ。

和服の男　ヒ、、、、それを忘れるやうな私ぢやないよ。では、左様なら――（ボートに入る）

洋服の男　牛山の旦那に、何卒、よろしく。

和服の男　ぢや、仕事を頼みますぞ――（船去る）

洋服の男　フ、、、、、畜生め、行きやがつた――。どれ五萬兩の上に腰を下して見ようかな――（金の袋に腰かける）フ、、、、惡い氣持ちはしないや。――や、東は、紫色に明けて來た。鷄が鳴くな。櫻はまだ睡つてゐる。――こんな朝景色は、子供の時以來見た事がない――。だが、今日は、正午迄に一齊にストライキ。それから禮金……。早く、奴等がやつて來ればいゝな――（ブラ〳〵歩き出す）

（堤の上を『牛山家』と記した提灯を振りかざして、四五人の男が驅け出す。）

甲　泥棒だ！　泥棒だ！

乙　大事な祕密書類を持つて逃げた！

丙　旦那の鞄を持つて行かれた！

（洋服の男は、驚いて金袋の後ろに、小さく身をすくめる。急に四邊りが暗くなる……。朝風が稍強く吹いたと思ふ間に、明るい朝の景色に變る。太陽が暖かさうにきら〳〵と照り渡る。櫻の花がちら〳〵散る。）

（堤下に一人の男が睡つてゐる。）

（堤の上を、三々伍々男女の職工達が辨當箱をブラ下げて通る。）

男職工の一　（堤下の男を見附けて）やゝ、彼所に人が死んでるぞ！

女職工の一　あゝ、怖い！

男職工の二　何、睡つてるんだ。

男職工の三　おゝ、仙吉のやうだぜ。行つて起してみろ。

女職工の二　ぢや、主婦(おかみ)さんに知らして來るわ。昨夜から寢ないで心配してゐるから――（バタ〳〵と去る）

男職工の一　（睡つてる男を起しながら）おい〳〵、仙吉君何うしたんだ。早く起きねえか。

男職工の二　おい、仙吉君。醉拂つてるのか。

男職工の三　この男は、この病ひさへなければ、本とにい

い男なんだがな。

男職工の一　昨日取つた金を、皆斯うして飲んで了つたんだ。

男職工の二　でも、感心に主婦(かみ)さんへの土産に、折詰を持つてるぜ。

男職工の三　とに角、昨夜は、己と一所に、ハイカラな講談を聞きに出掛けて、途中で別れたらこの始末なんだ。己にも半分責任があるから起さう――（起しかける）

男職工の一　何うも、非道い匂ひだ。餘程飲んだと見えるな。

男職工の二　主婦(かみ)さんが又ぼやくぜ。

男職工の三　何しろ、だらしがねえからな。――おい、仙公氣がついたか？　おい、しつかりしろよ。

男職工の一　何うだ、頭が重いか？

（仙吉の主婦さん、他の女工等と急ぎ來る。）

男職工の二　まだ、この通り、正氣に歸らねんだ。

女房　ま、何つてざまだらうね？　仙ちやん／＼、しつかりおしよ。まア／＼、縫ひ立ての着物を、こんなに泥だらけにして了つてさ。本とに仕樣のない人だねえ。さ／＼、早く起きておくれよ。最う出勤の時間だよ。

男職工の三　今日は駄目だよ。

女房　本とにあきれて了ふね。昨夜は、誰が一所なんだい？――屹度財布は、空にして了つたのだよ――（懐ろの財布を索しかける）

男職工の一　さ、人がたかつて煩せいから、彼方へ連れて行かう。

女房　濟みませんが、手を貸して下さいな。

男職工の二　さ、どつこいしよ。

（皆で引ずり起す。仙吉フラ／＼と立上つて、急に目を見開き、四方を見廻はして、地上を手で索る形をする。）

男職工の三　おい／＼、何を索すんだい？　折詰は手に持つてるぜ。

仙吉　ムー、袋だ、袋だ。金の入つた袋だ……。

男職工の一　何、袋だ？　金の入つた袋だ？　そんな物は落ちやゐねえよ。

仙吉　いや、ある筈だ……。

男職工の二　何、まだ夢が醒めねえんだよ。

女房　お前さん、何を云つてるんだね。袋なんか持つて出やしないぢやないか。てれ隱しにそんな事云つてるんだね。さ、財布を出して御覧なね。屹度空にしてゐるんだらうから――（懐の財布を索しかける）

（工場の汽笛勢よく鳴り渡る。）

男職工の三　や、最う時間だ。急いで行かう。

男職工の一　主婦(おかみ)さん、大丈夫だらうね？
女房　皆様、有難う。さ、皆急いで行つて下さいよ。
女職達　ぢや、左樣なら。——
（男女職工等堤に上つて去つて行く。）
女房　さ、お前さん。しつかり歩いておくれよ——（仙吉の手を引いて堤に上りかける）
仙吉　然う急ぐなよ——（突然手を擧げて）萬歳！萬歳！
勞働者諸君萬歳！
職工達（遠方から和して）萬歳！　萬歳！
女房（仙吉の手を引張つて）お前さん、氣でも違つたのかよ。さ、早くお歩きよ。
仙吉　ハ、、、、、、。

——幕——

喜劇

首は飛ぶ（一場）

人物

主人
妻
書生
女客

安月給取りに適はしき、場末の棟割長屋の三間程のみすぼらしい家である。主人の居間であり、且つ應接室である八疊許りの室には、机だの簞笥だの本箱だのがごた〳〵置かれてある。壁には、猿芝居よろしくの、様々の衣服がぶら下げてある。――その座敷の眞中に赤子が寢かしてあつて、然も、それは、大聲を擧げて泣き喚いてゐる。

玄關の格子戸を開けて、役所から戻つて來たこの家の主人は、玄關口から座敷に首を一寸突出して、赤子の泣く様を見るや、急いで靴を脱ぎ棄てゝ座敷に入つて來る。

主人　おゝ〳〵、可哀想に、獨りで放り出されてゐたか……おい、こんなに泣かしちや蟲が起るぞ。何故、乳を飲まさんのだい。

妻の聲　飲まさん所か、乳首の痛くなる程飲ましても、寢附かんのですよ……。最少しで片附くから、一寸抱いてゐて頂戴。

主人　やれ〳〵可哀想なこつた。や、おしめがぐつしよりだぞ。

妻の聲　今皆仕變へるから、少しその儘にしておいて下さい。

主人　や、着物迄透つてゐる。こんなに濡しておくと、又腹を痛めるぞ。――何うも、衞生思想の無い者は、これだから困るて。

妻の聲　そんな事云つたつて、私の手は、二本きり無いんですからね。

主人　いや、解つてゐる〳〵。――さア、坊や、寢るんだ寢るんだ。坊やはいゝ子だ、寢んねしなア……。やれ〳〵何うしてもおとなしくならんかい。困つたなア――あゝ困つたな〳〵。

（妻手を拭きながら臺所から入つて來る。）

妻　どれ、私が見ませう――

主人　それ、その通りだ。だが、如何にも現金な奴だて――そら、月給だ。

妻　おや、最う、そんな頃ですか。

主人　月給日を忘れちや困るな。然し、その通り、己に催促する事も、皆忘れてくれるといゝのだが……

妻　あゝ忘れない内に云つておきますが、先刻家から漸く返事が來ましたよ。机の上に置いておきました。

主人　む、返事が來たか――

妻　ね、貴方、家賃は月末持つて行きませうね？

主人　何うせ拂ふもんだ。早く持つてつたつていゝだらう。

妻　だつて、貴方。地震でもあつて御覧なさいな……

主人　馬鹿。最う地震があつて堪るものか。――おい、この手紙にや、非道い事が書いてあるぞ。微祿ながら、日本帝國の政府の役人をしてる者を摑へて、田舎の人燒場の監督をしろとは何事だい？　お前の親父も、少し何うかしてゐるぞ。

妻　だつて、貴方が、何んな仕事でもいゝから、呑氣で金になる仕事を望むと仰有るから、それで、お父さんが、燒場の社長を知つてるので、折角話しを纏めてくれたのぢやありませんか……職業に高下がないと仰有つてゐる日頃の貴方にも似合はん事を仰有るわね。

主人　いくら高下が無いからつて、死人を燒く仕事ぢやないか？　所謂隱亡だぜ、昔なら非人のやる仕事だ。その親方はとても己には出來んよ。己は斷然斷わる！

妻　えゝ、お廢しなさいよ。是非やつてくれとは書いてないんですから。賴まれたから、仕方なしに父だつて捜してくれたんですから。

主人　馬鹿々々しい。人を馬鹿にしてゐる！

妻　さ、御飯を上つて下さいな。坊やが起きると、又厄介ですから。

主人　うむ。――いや、己は湯へ行つてからにしよう。

妻　今日は、廿五日だから駄目ですよ。

主人　えゝ、畜生！

妻　怒つたつて、私の勢ぢやありませんよ――

書生　今日は――

妻　おや、北野さん、貴方、國へはまだ歸らなかつたの？

書生　いや、明日歸らうと思つてね、それで、一寸伺つたのですよ。

主人　君、試驗は何うだつたい？

書生　いや、半分不可いから、又今年も落第ですよ。

主人　然う毎年失錯つては駄目だね。斷念めて、國で百姓でもやるんだね。

妻　所が、北野さんは駄目なんですよ。その百姓が厭な許りに、試驗を口實に、かうして、東京に出て來てゐるんだから。

書生　何、そんな譯でもないですがね。――何うも、試驗

は中々難しいんで……

主人　だが、北野、君は、確か長男だつたね？

書生　えゝ、長男ですよ。

主人　ぢや、結局國へ歸らなけりやならんのぢやないか？普通文官の試驗なんか、斷念めた方がいゝね。

書生　いや、僕は、家督は弟に讓つて、東京で一生暮しますよ。

主人　この東京が、そんなにいゝのかね？

妻　だつて、北野さんには、東京を何うしても離れられない事があるんですものね。ね、北野さん？

書生　何、そんな事があるもんですか……

妻　皆聞いて知つてゐますよ。

主人　然う〳〵、君は洲崎とかへ、馬鹿に行くて云ふ話しだぜ。

書生　嘘ですよ〳〵。そりや、誰かの惡口ですよ。

妻　いえ、種はちやんと上つてゐるんですからね。隱したつて駄目よ。

書生　困つたな、どうも――。一體、誰が來て云ひました？

妻　誰でも、貴方を知つてる人は、皆然う云つてゐるわ。

書生　困つたなア――

妻　そんなに困らなくたつていゝわ。北野さんの家は、お金持ちだから、少し東京へ持つて來て、ばら撒くのは世間の功德ですよ。――さ、何もありませんが、一緒に上つて下さい。

書生　いや、僕は、先刻食べた許りなんで――

主人　そりや、君晝食だらう！　何もないが、つき合ひ給へ。

書生　ぢや、御馳走になりますから――

妻　本との有り合はせですよ。

書生　この野菜料理が、僕は堪らなく嬉しいんですよ。殊にお宅は、上料理だから美味いんですよ――。下宿ぢや、どうも、野菜がまづくて……。腐つた魚許りつけるのでやりきれませんよ。

主人　そんなまづい料理を食つて、無理に東京にへばり附いてゐる理由が解らんね。國へ歸れば、君なんか、どんな贅澤だつて出來るんだらうがな。

妻　本とにいつそ、その女を受出して、國へ連れて行くといゝんですね。

主人　一體、どんな女なんだい？

書生　全く無根の事實ですよ。

妻　何時か、ちらとおのろけを聞かされましたよ。

書生　いや弱つたな――

主人　そんなに頭を掻くと、塵が落るよ。

妻　本とに、そんなに頭許り掻いてゐないで、澤山お上ん

なさいよ。まだ、此方にどつさりありますから。

書生　遠慮なく食べてゐます。矢張り、奥さんは料理がお上手ですな。

主人　君がそんな事云ふもんだから、これはつけ上つて、毎日、こんな野菜計り食はして仕方がないのだ。能率が上らんと云つて、課長にお目玉を食ふのも當然だ。

妻　おや、私の勢にするんですか？　御馳走が食べたかつたら、もつと月給を澤山取つていらつしやいよ。

主人　又始まつた……

書生　時に、役所は、緊縮だの、行政整理だので、局や課が大分廢されたんぢやありませんか？　首の飛ぶのが大分あるさうですね。

主人　あるとも〳〵、今月ぎりで首の飛ぶのは、先づ一割だらうと云ふことだ。僕の課なんか、何うしても獨立してゐなくちや仕事が出來ないつて、大臣が閣議で頻りに頑張つてゐると云ふことだが、他の課の者は、皆戰々兢兢さ。課長初め、皆靑い顏してゐるよ。內閣の代る度に課長級以上は、あれこれ置き換へられるので、動くのは慣れてゐようけれども、今度は、下の方まで、ばつさりやられるのだからね。役所ぢや、皆仕事が手に附かんのさ。

書生　そんなに減らしていゝのですかね？

主人　何しろ、今迄が多過ぎたからね。煙草を吸つて、半分は遊んでゐたのさ。體のいゝ高等遊民なんだよ。人民の稅で食はして貰つてゐる。本とに腕の揮ひたい者は、役人なんかになるもんぢやないな。君なんか、普通文官試驗なんか廢めるこつたね。

書生　けれども、その、半分ブラ〳〵遊んで暮してゐられりや、こんな結構なことはないぢやありませんか？　僕のやうな身體の弱い者にや、持つて來いの仕事だ。

主人　女郎を女房にでもしてか？

書生　いや、然うぢやありませんよ。そんな事はありませんよ。

妻　北野さんなんか、假令役人になつて首になつても、少しも心配はないでせうが、宅なんか、最うその日から困るんですからね、本とに、早く何かいゝ仕事でも見附けておかないと……

主人　所が、君いゝ仕事が見附つたのだよ。これの親父が世話してくれたんだがね、實にいゝ仕事なんだ。

書生　ほう、あの狹い土地に、何かいゝ仕事がありましたか？

主人　あつたとも、素敵なんだ。火葬場の監督と云ふ仕事だ。

書生　ほう――。

主人　何うだ、驚いたらう？

妻　人聞きは悪いかも知れませんが、いゝお金になるさうですからね。

主人　つまり、其奴は、死人の着物を剝ぐんだよ。それから金歯を剝す。それをすりや、金にはならうが、いやしくも政府の役人をしてゐた者が、そんな非人乞食の摸似は出來んと云つて鬧かしてゐるのだよ。とに角、その仕事は、隱亡のやる仕事なんだから。

書生　貴方が、その隱亡の統領をやつたら、そりや、全く観物ですよ、全くハ、、、。

主人　此奴の親父も隨分の奴だと思つて、僕は全くあきれてゐたのさ。

妻　何でもいゝから、金にさへなればいゝ等と云つてやるのが悪いのですよ――

主人　とに角、然し、役人なんて、明日が日の命が分らんのだからね。

書生　役人許りぢやない、會社だつて何だつて、今は危いでせう、何しろ、こんな不景氣になつて了つてわ。

主人　其所へ行くと、火葬場は、年中不景氣知らずか。人の死ぬのは遠慮しないからね。

書生　その意味で、矢張り、天下で一番確實な割のいゝ仕事かも知れませんよ。殊に不景氣になつて、藥代が拂へなくなると、死人が殖えるかも知れません。國の方は、猶更ら不景氣が強いと云ふから。

主人　何だい、君も隱亡になる事を奬めるのかい？

書生　いや、然ういふ譯ぢやありませんがね――

女客　御免下さい――

書生　や、西川女史の聲だな？

女客　おや、北野さん來てゐらつしやるの――（入り來る）今晩は――

主人　や、久し振りでしたね。

書生　西川さん。地方遊説は濟みましたか？

女客　えゝ、漸く濟して、昨日歸つて來た許りです――。これは、つまらない物ですけれども、お土産の印しまでに……

主人　や、そんな心配を掛けて……おい、西川さんが、お土産を下さつたぞ。お前の大好きな物だ、來てお禮を云へ。

妻　まア、お珍しい、よくいらつしやいました。何うも結構な物を有難う御座います。

女客　いゝえ、本の少し許りで――。何しろ、彼地此地飛び歩くので、荷が邪魔なものですから、少しか買つて來なくて……。

書生　何うです、國の方は、變つた事がありますか？

女客　何だか、景氣の惡いつて話し許り聞いて來ましたわ。
書生　ぢや、聽衆は少なかつた譯ですね？
女客　いゝえ、聽衆は、何所へ行つても一杯よ。
書生　あゝ、只だから。
女客　然うですとも。政談演說に金を取るなんて、そんな馬鹿なことがあるもんですか。
書生　あんな狹い國ぢや、女の政治屋だつて大騷ぎしたでせう？
女客　まア、可なりね。
主人　だが、因循な田舍の事だから、一生懸命反對した敎育者等もゐたでせう？
女客　えゝ、それが煩さくて困つたのですわ。本とに頑冥でお話しにならないですもの。
主人　だが、國の女が、皆貴女のやうに、演說使ひになつて了つては、それこそ物產も何も無くなつて了ひますからね。
女客　貴方迄がそんな事仰有るから困るのですわ。誰も彼も私達のやうに主義の宣傳に步いて許りゐては、そりや大變ですとも。一般普通の婦女子は、先づ自己を自覺する事が必要なんですよ。自分の地位天職を自覺する。其所から凡てが出立するのですよ。それを、私は說いて步いてゐたのです。

書生　む、そんな風に說いたんですな。序でに、其所で、演つて見せて欲しいな。
女客　からかふのは廢して頂戴よ。
主人　だが、そんな事話したつて、國の女共に解るのかな？
女客　それが張合ひがありませんのでね。
妻　何てつても、まだ、國の人達はねえ。
女客　でも、貴女のお父樣が聞きにゐらして下さいましたよ。
妻　おや、父が？
女客　えゝ、この節は、村の靑年團の顧問とかをしてゐらつしやるのですつて。
書生　然う〳〵、來年は、縣會議員に打つて出るつて話しでしたよ。
主人　やア、世の中は、段々物騷になつて來たぞ。
妻　何も物騷になんかなりやしませんわ。
主人　だつて、お前の親父が……
女客　あゝ、お父さんが、その赤ちやんを、早く見たいつて然う仰有つてゐましたわ。
妻　えゝ、今も、早く田舍へ歸つて來るやうにつて、手紙をよこしたんですよ。
女客　けれども、貴女方は、餘り田舍の單調なのに、直ぐ飽きてお了ひなさいますわ。何うしても、都會に長く住

んだ者にはねえ。
書生　そこ〳〵そこだ。僕なんかも、何んな苦しい仕事をしても、東京に住んでゐたいな。
女客　北野さん、貴方の噂が、お國の人達の間に出てゐましたよ。
書生　何だつて？
女客　餘り貴方が道樂をなさるから、大評判よ。
書生　そんな事誰が知るもんですか。西川さん、貴女が喋つたんだらう？
女客　私はそんな事に興味を持つてゐませんよ。色々訊かれて困りましたよ。そんな事疑はれるのなら、皆喋ればよござんしたね。
書生　いや、西川さん。僕も色々噂を聞いてゐますぜ。第一今度の貴女の地方遊說は、貴女一人ぢや無かつたでせう？
女客　おや、妙なこと仰有しやるわね。本部から三人で出掛けたのぢやありませんか。女許りで。
妻　あの、櫻井代議士が一緒ぢや無かつたのですか？　婦人參政權の演說をする筈で。
女客　それは、お止めになつたのよ。
書生　いや、誰か男が一緒に附いて步いてゐたぞ。國の新聞で、ちらとその名を見たやうだ。
妻　ぢや、あの方ぢやなくつて？
女客　叔母さん。默つてゝ頂戴よ。
書生　やア、いよ〳〵ばれたぞ。
女客　そんなに私を意地目なくつてもいゝことよ。それが、今の時勢の惡い風習よ。女と見れば、目の敵にしたがつて。
書生　や、こりや、大變だ。
女客　御覽なさいな。坊やが驚いて目を醒したぢやないの？
書生　冗談ぢやない。西川君の聲が大きいのだよ。演說で鍊上げてあるから。
女客　どら、私に抱かして頂戴――まア、暫く見ない間に大變大きくなりましたわね。お父さん、そつくりの顏になりましたこと。
書生　ほゝう、坊や、泣かないね。この髮の薄い所なんか、お父さんそつくりだ。
主人　冗談ぢやないよ。そりや、まだ毛が生えないのだ。
女客　本とにねえ、今から禿げたら大變ですわねえ。――こんなに可愛いゝんですもの。田舍のお父さんが見たがつてゐらつしやるのは、當然ですわ。
書生　だが、西川さんが子供を抱くのは、頗る不調和だな。男が人形を抱くよりも、ずつと形が惡いよ。

女客　何うして？
書生　だつて、産兒制限を稱へ、婦人參政を口にする大婦人政治家だもの。赤坊を抱くのは。全く矛盾してゐるよ。
女客　私は産兒制限は、赤坊が好きでしたわね？
妻　西川さんは、然う說きはしなくつてよ。
女客　えゝ、私大好きよ。これでも女ですもの。何日子供を生むか解りませんわ。
主人　西川さんだけは、萬年處女かと思つてゐたら、然うはいかんかな。
書生　そりや、最う疾くの昔に……
女客　いゝ加減なこと仰有いよ。
書生　所が、今度の地方遊說に一所に附いてつた男の人は？
女客　ありや、何でもないわ。戀愛關係なんか勿論ないわ。ねえ、叔母さん。
妻　えゝ、今迄は無かつたやうだけれども、今度の旅行の事は知らないわ。
女客　あら、叔母さんまで非道いわ。
書生　所が、今度の地方遊說は、實は新婚旅行なんだつてね。
女客　噓々、そんな事云つて侮辱するもんぢやないわ。第一あの方に失禮だわ。あの方には、歷とした許嫁があるんですもの。
書生　おやく、それでは、たうとう磯の鮑か。
女客　磯の鮑つて何？
書生　磯の鮑を知らないの？　それぢや、戀愛をする資格はないよ。
女客　えゝ、どうせ、私は傳統的のラブなんかしやしませんから。
書生　どんなラブをするのか、一つ拜見したいもんだな。
女客　今に見てゐらつしやい。
主人　西川さんは、旅から歸つてから、馬鹿に綺麗になつたやうだな。
妻　えゝ、私も先刻から然う思つてゐたのですよ。旅をすると、大抵日に燒けるものですがね。
書生　や、耳の後ろに白粉が附いてゐらア、何た、傳統的の化粧をしたんぢやないか？
女客　北野さん。貴方、人のあら等搜してゐないで、早く試驗に及第したらどう？　普通文官の試驗を、二度も三度も受ける人はありませんよ。みつともない。國の者の名折れですわ。
主人　所が、北野君のは、試驗に及第するのが目的でなく、東京にブラくしてゐるのが目的なんださうだ。
女客　おやく、そんな風だから、國の方ぢや、あんな騷

ぎが起きてくるんだわ。

書生　どんな騒ぎが？

女客　貴方、まだ知らないの？　貴方の家の大きな田地は、小作人が皆ストライキをしたもんだから、その儘に放り出されてあるんですわ。

書生　あゝ、ありや、餘程前からのことさ。小作人は、我儘を云ふ。税金は高い、米代は安い。手を掛けるだけ損だから、あゝしてあるのですよ。あれを見たゞけでも、如何に田舍は不愉快だか解るでせう。だから、僕は、一生田舍へは歸らないんだ。

女客　そして、洲崎のおいらんと新家庭を作るんですか？

妻　北野さん、早速敵を討たれましたね。

書生　誰が又そんな事云ひふらすのだらうな？

女客　北野さんの机の抽手は、おいらんからの手紙で一杯だと云ふ話しよ。寫眞も二三枚入つてゐるさうですわ。

書生　はてな、どいつかな、そんな事を報告する奴は。

妻　乾度一所に遊びに行くお仲間よ。

主人　ま、そんな事はいゝが、その只遊はしておく田地は勿體ないな。それを耕やしたらいゝだらう？　でなければ、その地面を賣るか？

書生　貴方は、何も知らんから、そんな呑氣なことを仰有るけれども、最う私の所のやうに、面倒になつた地面は、金でも附けなきや買手はつかんし、政府では引取つてもくれんし、全く困るのですよ。

主人　どうして、そんな事になるかな？

女客　勞資協調が巧く行かないからですよ。

書生　所が然うぢやない。百姓の生活が膨脹したからだ。彼等は段々贅澤になつたからだ。第一、彼等は、昔のやうに臭い刻み煙草なんて吸はないで、敷島を吸ふのだもの。

妻　だつて、そんな事は、皆北野さん達が、國へ歸つて敎へるのでせう？

主人　その女郎買の方法も、地方青年に傳授するんぢやないかな？

書生　然う僕許り意地目ちや殘酷ですよ。

女客　北野さん最う降參なさいよ。

書生　降參なんかするもんか。

女客　本とに仕方のないのらくら者ね。私貴方のやうな遊民は大嫌ひよ。

書生　嫌はれて仕合はせ、好かれちやあの子に申譯なし。

女客　ま、何て人でせう？　こんな人と同國に生れた事を恥るわ。

書生　私も同樣。

主人　まゝ、喧嘩は廢してくれ。子供が泣き出すから。

女客　本とに、つまらないから廢しませう。私こんな無節操な人と議論なんかしてゐる暇がないんだわ。――實は、今夜お邪魔に上つたのは、今度私達の機關雜誌を出すので、その發行所を、此所にしてお貰ひしたいと思つて、それでそのお願ひに來たのですわ。
主人　此所を雜誌の發行所に？
女客　えゝ、只名儀だけだから、決して、お迷惑はかけません。
書生　所が、今のやうな過激な論を載せると、忽ち發行禁止を食ふのでね。名儀人は、體刑も受けますぜ。
垣客　あら、そんな事なんかあるもんですか。極く穩やかな議論許り載せるのよ。精々今の政治家役人學者を攻撃するのよ。
主人　おいく一寸待つてくれ給へ。これでも、僕は役人の片割だぜ。
女客　だつて、貴方達下端の――、御免なさい、つい、口が滑つたんだから――、政權を翫弄物にしてゐる上の方の役人を攻撃するのよ。彼等は、富豪から金を絞り取つて、富豪に好都合な政治許り行つて、そして、自分達は待合の二階で、政治ゴロや幇間學者を對手に、一般國民の事や婦女子の事等は、少しも念頭に置かないで、勝手な議論を闘はして、藝者に鼻毛を讀ましてゐる、その墮落腐敗した有樣を攻撃するのですよ。
書生　ヒヤく！
主人　はゝア、そんな調子に田舍で演說するのかね？
女客　いゝえ最つと痛烈よ。
主人　ぢや、田舍の靑年や娘達は、面喰つたらうね？
女客　ま、そんな事はとに角、お宅を發行所にして下さいね。決して、御迷惑の掛るやうなことはしませんから。私今日出て來る時、もうちやんと然う約束して來たのだわ。會の人達と。
主人　手廻はしの早いこつた。然し、僕は、田舍に行つて了ふかも知れないよ。
女客　そりや何うして？
主人　つまり、その上役の役人の犧牲になつて、無職になるのさ。
女客　そんな事でもあつたら、それこそ、雜誌でうんと叩いてやりますわ。
書生　所が婦人雜誌の百や二百で攻撃したつて、蚤の喰ふ程にもこたへはしないよ。
女客　憚りながら、そんな脊弱な雜誌ぢやありませんよ。
主人　とに角、僕の首は、女の雜誌ぢやつながりさうもないて。
書生　いや、却つて、危險ですよ。

女客　貴方は默つてゐらつしやい。
妻　そして、毎日、大勢の女が此所へいらつしやるのぢやありませんか？
女客　いゝえ、月に只一度だけ、御座敷を拜借します。編輯會議をしますから。
書生　さ、それが、三四人集つて大變なんだ。西川女史でこの位なんだから、これが、それこそ…
女客　貴方は、默つてゐらつしやいよ　それこそ　貴方のやうな方さへその場にゐなければ、誰も口なんか利やしませんから。
主人　いや、利いてもいゝがね。僕は、寄席へでも行つた積りで聞いてゐるから。
書生　寄席と同格はよござんしたね。僕もその時にや、傍聽に來てやらう。
女客　貴方見たいな人格の低い人は、私達の席へは入れませんよ。
書生　無論此方からお斷わり、僕はマスターと一所に、彼方の部屋から聞いてゐるのだ。
女客　おや、最う七時ですね。これから會がありますから、これで失禮します。何れ、お禮や何かの事はこの次に伺つて決めますから――。何うも、お邪魔を致しました。何分よろしくお願ひ致します。
妻　最う、お歸り？
女客　えゝ、又來ますから――。では、左樣なら――
主人　とに角、今の問題は考へておかうね。
女客　いえ、是非お願ひしますよ。――左樣なら。北野さん、今度又悠くり會ひませうね。
書生　今度來る時にや、美人を連れて來給へよ。その會員の內の。
女客　洲崎のやうな譯には行きませんよ。左樣なら――（去る）

（間。）

書生　いやはや、驚いた女論客だ。
妻　本とに賑やかだわね。
主人　あれでも、とう〳〵、名物女になつて了つたからな。立派にあれで飯が食つて行けるわ。
書生　我村の名譽ですかな。
主人　全く君よりは　天下に名を出してゐるだけでも偉いよ。
妻　本とに、月一度此所へ集るんですか？
主人　何だか、さつさと、自分獨りで決めて歸つたぜ。
書生　うんと部屋代を取つてやるとよござんすよ。どうせ、何所からか、あぶく金を取つて來てやる仕事だから。
妻　この前にもそんな事を云つて來て、その儘になつた事

がありましたよ。
主人　然う〳〵、去年かそんな事を云つて來た事があつたな。何しろ、狐を馬に乘せたやうな女だからな。
書生　成程、然う云へば、顏附迄狐に似てゐますよ。
妻　いえ、今日は、何日もより綺麗ですよ。
書生　では、矢張り男が出來たんですよ。
妻　何しろ、陽氣な氣象ですわね。あれでは、何の苦勞もなさゝうで、羨しいわね。
書生　貴女もひとつノラのやうに、何にもかもおつぽり出して、家出をしますか？
妻　家出をしても、まさか、演說使ひにもなれないしね。矢張り食べる事に直ぐ困つて了ひますわ。竈の前に働くやうに生れて來た者は、矢張り然うするより外ありませんよ。
書生　いや、僕もその方が賛成だな。
妻　私だつて、家庭なんか持たないで、飛んで步いてゐられりや、こんな結構な事はありませんけれどもね。それでは食べて行かれませんもの。
主人　やれ〳〵、飯の爲に仕方なしに家庭におとなしくしてゐるのか。
妻　いゝえ、この子がゐるからですよ。
書生　何だか、話しが大部世話場になつて來ましたね。そろそろお暇しませう。
主人　君も歸るのか。急に淋しくなるな。
妻　まだ、いゝぢやありませんか？
書生　いや友達の所へ寄りますから。
主人　洲崎の友人かい？
書生　いや、あれは、最う昔の事ですよ。
主人　ぢや、今は變つた所かい？
書生　いや、全くそんな所へは行きませんよ。
主人　行かんがいゝね。名儀だけでも、僕は、君の家から監督を委任されてゐるんだから、忠告するよ。
書生　全く、その御心配は無用です。
主人　僕だつて萬吏不粹な人間ぢやないんだが、多少責任と云ふ事を感じるからね。
書生　それは、解つてゐます。
主人　本と云や、僕だつて、君と一所に紅燈綠酒の情調を味はひたいのさ。頭は禿けても、まだ氣持ちは若いのだからね。
書生　何、貴方なんか大いに持てますよ。
主人　ぢや、一番出懸けるかな。
書生　いゝ所へ御案內しますよ。
妻　貴方、そりや、本氣で話してゐるんですか？
書生　だつて、御主人が眞面目に仰有るから……

主人　何、君の氣を引いて見る積りさ。

書生　劍呑々々。近頃の御役人は、中々性質が惡くなつたから——。どれ、お暇しませう。

主人　ハ、、、、逃げ出すかね？

妻　又いらつしやいね。

書生　えゝ、歸つたら又伺ひます。

主人　あゝ、明日國へ歸るんだつたね。

妻　何卒、お家へよろしく——

書生　えゝ、では、左樣なら——

妻　おや、貴方、其所へ寢て了つては困りますよ。

主人　何、一寸、横になつたのだ——（欠伸をして）あゝ、くたびれた。どれ寢ようかな。

妻　お寢なさいよ。今床を敷きますから。

主人　だが、斯うして、役所から歸つて來て、子供のお守をして、飯を食つて、雜談をして、そして、寢て又朝役所に出懸けるなんて、全く無趣味極まるものだな。何の爲に生きてゐるのか解らなくなつて了ふな。

妻　今度の課長さんになつてから、大層暇になつたんですね。前の時には、毎晩十二時一時になつて、然も、ぐでんぐでん醉拂つて來て、それが役所の用の爲だと仰有つてゐましたからね。今のやうに、毎日きちんきちん歸つて來たのでは、嘸ぞ退屈でせうよ。

主人　馬鹿！　女なんかの知る事ぢやない。

妻　だつて、矢鱈に收賄して、免職になつた人が多いから、私も心配してゐたんですよ。

主人　そんな下らん事は心配しなくてもいゝ。

妻　だつて、前の課長さんは、牢屋へ迄入れられたんでせう。——何年勤めてゐたつて、お金は少しも貯らず、心配許りしてゐなけりやならんのですもの。私本とに一日も早く田舍へ引込みたいと思ひますわ。

外の聲　君ゐるかい？　一寸、此所迄顔貸してくれ給へ。

主人　（立上つて）や、桑原君か。ま、上つたらどうだい？

外の聲　いや、急ぐから、此所で失敬する。

外の聲　ま、餘り心配しないでね。何とかなるだらうとは思ふけれども……

主人の聲　いや、どうも、有難う。わざわざ有難う。——大方そんな事だらうとは思つてゐた——！

外の聲　ぢや失敬する——

主人の聲　然うか、では、左樣なら。どうも失禮したね。

外の聲　左樣なら——

妻　貴方、桑原さん、何しにいらしたの？　又何所かへ遊びにでも行かうつてのぢやありませんか？

主人　馬鹿……そんな話しぢやないわい。

妻　そいぢや、何の話しなの？

主人　（急に思ひ出したやうに）おい、最前のお前の家からの手紙は何所へ行つた？

妻　貴方がもみくちやにしたから、彼方へやりましたよ。

主人　あの手紙にや、火葬場の監督は、今現に缺員になつてると書いてあつたな？

妻　えゝ然うありましたわ。此方から返事のある迄人を入れないでおくからと。

主人　よし、では、早速返事を書かう。

妻　おや、あれ程文句を並べてゐたのに、急にあの仕事をするんですか？　隱亡の摸似を。

主人　何でもいゝ、今の月給の二倍になる仕事だ。文句なしに承諾するんだ——

妻　厭ですよ、そんな下等な仕事は、私こそ國の人達に氣まりが惡いわ。腰辨だつて、安官吏だつて、今の方がどれだけいゝか解りやしませんわ。あゝして、國の人達が、色々の事を賴みに來るのも、皆そのお蔭ですわ。

主人　所が、その安官吏も、いよ〳〵明日から免の字だ。

妻　おや本と？——桑原さんは、その事を云ひにいらしたの？

主人　今日課長の所で、そんな話しがあつたさうだ。どうも己も樣子が變だとは思つてゐたよ。何しろ、三分の一から人間を減らすんだつて云ふからな。

妻　それ許りぢやありませんよ。前の課長さんのおしようばんがたゝつたのですよ。

主人　馬鹿云へ、そんな事があつてたまるもんか。

妻　桑原さんが云つてゐらしやつたのなら、乾度それですわ。あの方は、始終心配してゐらしつたのだから……。

主人　あゝ〳〵、すまじき物は宮仕へか——。これからは、呑氣な隱亡の親方だ。

妻　情けないぢやありませんか？

主人　何をしても、一生は一生さ！

——幕——

灰野庄平篇

悲劇

秦の始皇（三部一曲）

〔I〕呂不韋

人

始皇帝　即位後十年の秦王（二十三歳）
呂不韋　相國、仲父と呼ばる（五十四歳）
朱太后　始皇の母君（四十歳）
嫪毐　後宮の宦官（三十餘歳）
季氏　御衣夫人（三十餘歳）
趙高　六宮大使
季斯　廷尉
　侍女、臣下。

時

西暦紀元前二三九年、暮春の初夜。

處

雍宮、始皇の母君朱太后の隱れて淫酒に耽る後宮。

景

寢處に隣る一室。

正面に露臺あり、亞字欄もて圍まる。後庭樹々は花既に散りて、旺鬱たる緑は悩ましき暮春の氣を含み、遙かなる空には朧なる星も仄めけり。

高き天井と壁とは、すべて朱帷をかけ列れたり。帷には球を捧ぐる龍を金繡す。その球、明月夜珠にして、闇にありても冷たき眼の如く冴えたり。

露臺より遠からず、大なる卓あり。榻も据ゑられたれど、人なし。

麒麟の形したる香爐あれど、香煙亦絶えたり。暮れんとする薄明わびしく一室にうごめく。

すべて暖かく飾られたる室なれど、人の餘溫の冷め行きし時の如く、歡樂の夢の醒め際の如く、わびしさ、薄明と共に漂ふ。

　二人の侍女、露臺の左方より轉び出で、風に追はるる落花の如く、室を橫ぎりて右方の扉に向ひて止まる。

第一の侍女（息も忙しく）朱太后殿下！　朱太后殿下！

（扉をほと／＼と叩く、その音幽かに聞ゆ）

（答なし。無音……）

第二の侍女　朱太后殿下！　朱太后殿下！　國王陛下の臨御にござりまする。

（答なし。）

第一の侍女（扉に耳をつけながら）内は湖の様にしづまつて居りますわいなあ。

第二の侍女　此の御寢處には渡らせられぬのでござりますまいか。

第一の侍女　太后殿下！　國王陛下の臨御にござります。

（答なし。）

第三の侍女（左方の扉を開け放ちたるまゝ匆惶として來り、囁く様に）申上げなされましたか。

第二の侍女　いゝえ、叩いても叩いても、何の答もござりませぬ。

第三の侍女（詰るが如く）でも申上げねばなりますまい。やがて此へお渡りなされませうぞえ。

第一の侍女（扉を稍激しく叩きながら）太后殿下！　太后殿下！

（答なし。）

第三の侍女　扉を開けて申上げませう。

第二の侍女（嘲る様に）扉を開けて？　それこそ〱、貴女のお身體が危うござりますぞえ。

第三の侍女　おゝそれ〱、李氏のやうになあ。

第一の侍女　あの方は殺されたとの噂でござりましたが、今宵のお伴の中に見える様ではござりませぬか。

第三の侍女　ほんに、さうでござりますなあ。

第二の侍女　あのお方は趙大使の方へ、身を寄せられたとの噂もござりましたゆゑ、今宵の臨御はあのお方のお告げによつてでござりませう。

第一の侍女　殿下が此の宮へお遷り遊ばされて以來、一度も臨御遊ばされぬ陛下が、今宵俄に渡らせられたのでござりませう。あのお方のお告げに違ひござりますまい、殿下が日頃の御行跡も大かたはお耳に入つたことでござりませう。ほんに、一大事でござりますなあ。

第二の侍女（憂はしげに）さうなる時は、妾達の身の上は如何なることでござりませう。

第三の侍女　如何なることでござりませうなあ……少しも早うお知らせ申さねば……

三人（とり〲に）太后殿下！　太后殿下（扉を叩く音激しく聞ゆ）

第三の侍女（後を顧みて）あれ〱、最早あれへお渡りなされましたわいなあ。

第二の侍女　如何なることでござりませう。

第三の侍女　ほんに如何なることでござりませうなあ。

（遙かなる後庭に寂しき風の音、吐息の如く聞ゆ。）

（炬火の光、開け放れたる左方の扉の奥より、ほのぼのと薄暗き室を照らし初む。）
男の聲　（右方の室の內より）　何事ぢや……夜中に御寢處を驚かし奉るは何事ぢや！
第一の侍女　（訴へる樣に）　國王陛下の臨御でござりますわいな。
男の聲　（少しく周章せるけはひ）　なに、國王陛下の臨御とな？
第二の侍女　（囁く樣に）　嫪毐樣のお聲でござりませう。
第三の侍女　（聲高く扉の內へ呼びかく）　嫪毐樣！　嫪毐樣！
（答なし。）
（沈默を刻む緩やかなる衆人の跫音……炬火を持ちし從者二人路を照らし、金の瑞草を繡せる白き法服を纏へる始皇表はる。孔雀の翅もて成れる繖をさしかざす者一人、六宮大使趙高、御衣夫人季氏、臣下六人其の後に從ひて出づ。）
（露臺を後にして席を占む。）
（帷に近く立ちたる後宮の侍女三人、恐る〳〵來りて跪く。）
趙高　（侍女に向ひ）　臨御の趣を殿下にお傳へ申したであらうのう。
（第一の侍女と第二の侍女とは只顏を見合せたるまゝ默す。）
第三の侍女　（恐る〳〵）　お傳へ申し上げましてはござりますれど……
趙高　如何いたした？
第三の侍女　更にお答がござりませぬ。
始皇　嫪毐は何れに居る。嫪毐を呼べ、嫪毐を呼べ。
趙高　畏まりました。（臣下の二人に何事をか囁く）
（臣下、侍女達に何事か問ひ、三人を先立てゝ、右方寢處に近づき、扉の內に入る。扉開きて、寢處の燈影紅く投出す。）
始皇　呂不韋は未だ參らぬか。
趙高　御意にござります。廷尉李斯やがて同道して參るでござりませう。
始皇　呂不韋が參つたらば、申しつくるまで此へ通しては相成らぬぞ。
趙高　畏りました。（一人の臣下に何事をか命ず）
（命ぜられたる臣下、左方の扉に入る。）
（狐靑裘を纏へる嫪毐、首を垂れて寢處を出て、始皇の前に跪く。臣下、侍女舊の座に復る。）
始皇　趙高、其方嫪毐の罪を裁け。
趙高　はゝッ。（嫪毐に向ひ、少し嘲りの調を以て）嫪毐、

嫪毐　卿は腐罪を受けしものと聞きつるが、確と左様か？

嫪毐　（問ひし人の心の底を測りかねし如く）　左様にござります。

趙高　（少しく苛立ちて）　確と左様か、僞りを申すな。

嫪毐　（心を靜めし如く、狡しき眼に趙高を見上げて）　なに僞りを申しませう。斯樣に鬚眉を拔きまして、宦者となり、后宮に仕へまつりまするも、偏に腐罪を受けしが故にござります。誠に禍が却つて身の幸となりました儀にござります。

趙高　（得たりと云ふが如き笑を洩して）　むゝ、却つて身の幸とな？　さればこそ、幸昂じて、幸に醉ひ、卿の胤を擁立して、陛下の後を襲はうとまで企んだであらう？

嫪毐　此は又無體な仰せではござりませぬか、下臣毛頭存じよらぬことにござります。……且は宦者たる下臣に子のあらう理のござりませうや。

趙高　いゝや、卿、如何ばかり口舌を以て爭はうとも、卿が子を預けたる季氏が訴へにより、亂行の數々悉く聖聽に達したるぞよ。季氏此へ出られえ。

季氏　はあい。（嫪毐の面前に跪く）

嫪毐　（季氏を睨みて）　はては汝、いつぞや禮儀を失せし廉を以て、叱責せしに怨を含み、虛を構へて訴へ出でしと見えるな。

季氏　何の僞りを訴へませう。見るも淺ましい日夜の御亂行、少しは心にも恥ぢられませぬか。猶其上に非望を企て、妾の洩れ聞いたを怨に思ひ……

嫪毐　あゝいや何事を申すやらん。斯樣づれの女人の訴へ、必ず御取上なき樣願はしう存じまする。

始皇　（先程よりの論爭を煩はしげに、見てありしが、眉宇に微かなる電の過ぎると見ろ、逆ろが如き聲にて）　無益なる論爭控へ居らう……嫪毐を斬罪に致せ！

趙高　はあッ。

（沈默……後庭に微かなる風の吐息。）

嫪毐　（雷に打たれし如く平伏し居たるが、絕望の中にも何物にか縋りつかんとするが如き眼色にて、趙高を見上げ）　何事も申上げますれば、何卒お聞屆け下さるやう願はしう存じまする。腐罪を受けしと僞りまして宦者となり、太后殿下の寵を辱うして、子を設けしに相違ござりませぬ。なれど、此皆相國呂侯の命に從ひましたまでのことにて、毛頭下臣の心にてはござりませねば、何卒して御宥免下し置かれますやう、御取りなしの程、願はしう存じまする。

始皇　呂不韋が命に、相違ないと申すか。

嫪毐　（少しく望を得し如く）　御意の通り、御意の通りにござります。

始皇　子を設けしことにも相違はないのう。
嫪毐　はあゝ。
（先程の臣下、左方の扉より入り來る。）
臣下　相國呂侯、廷尉李斯、只今見えられましてござります。
始皇　此へと申せ。
臣下　ははッ。
始皇　趙高、嫪毐をあれなる室（右の室を指し）に閉し、事の濟むまで、確と監視いたせ。
趙高　畏ってござります。
（嫪毐を先に立て、趙高、太后の寢處に入る。）
（行違ひに左より呂不韋、李斯と共に入り來る。）
（悄然たる呂不韋の影に壓せられて、すべての人、聲をのむ。）
呂不韋　陛下、お人拂ひが願はしう存じまする。
始皇　むゝ、李斯、皆の者を連れて、あれなる室に待て。
李斯　畏ってござります。（臣下、侍女を隨へて左方の扉より退く）
（左方の扉を指す）
（臣下の殘し置きたる炬火漸く光を失ひて、室は薄暗くなり行き、月光青く露臺を照らして、風の音わびし。）
呂不韋　（退きし者の後を見送りて）　陛下お恨みに存じまする……
始皇　李斯より何事も聞いたであらう。
呂不韋　委細承はりまして、只お恨みに存じまする。
始皇　怨みとは何が怨みぢや？　嫪毐を太后に進めしさへあるに、あまつさへその子を擁立せんなんぞとは、臣たるものゝ、假令思うても見るべきことか。
呂不韋　陛下、お恨みに存じまする、下臣に左樣なお疑ひをかけ給ふなんぞとは、存じも寄らぬ儀にござります。一日たりとも玉體の、安否を思はぬことなき此の呂不韋に、左樣なる邪念、些かなりとも萌さう理のござりませうや。
始皇　左程まで朕が身を思ふとならば、何故あつて、妄に仲父の稱號を僭し一身の權勢を張らうとするか。
呂不韋　お恨み申すは此事にござります。陛下の御身にとりまして、下臣は抑、何者ぢやと思召されまする。
始皇　何者でもない、相國ぢや、臣下ぢや。
呂不韋　臣下でござりまするか、何事もない臣下でござりまするか。
始皇　只功勞ある臣下に過ぎぬ、假令へ如何程功勞あればとて、臣下の身を以て仲父の名を僭するなんぞとは專横至極ぢや。
呂不韋　あゝ陛下には何事も御存じなき故でござります

る。何事も御存じ……

始皇（怒りて）いゝや何事も存じて居るわ。

呂不韋　御存じでござりまするか、然らばお尋ね申上げん。太后殿下は何者ぢやと思召されまする。

始皇　太后は太后ぢや。

呂不韋　太后殿下は太后殿下に相違はござりませねども、臣下にとりまして、何に當りませうやと、お尋ね申上げた儀にござりまする。

始皇（その顔に嫌惡の影一閃して）破廉恥ものめ、左樣なことが聞きたいか！

呂不韋　承はりたうござります。陛下には御存じなければこそ、斯く情無くも振舞はせ給ふかと推せられます。

始皇　いゝや、知ればこそ、李斯に申しつけ汝の罪を問はんが爲め、此まで呼び寄せたのぢや、汝、太后と密々に通じ、事露はれんことを慮り、彼の嫪毐を宦者となし、狡しくも己れが傷を覆ひしことは彼の嫪毐が悉く自白に及びしぞよ。嫪毐を此へ呼ばうか。（呂不韋の恐愕を豫想して詰め寄る。）

呂不韋　あゝあ。何事も御存じではござりませぬ。何事も御存じはござりませぬ。それも尤もにござりまする。陛下おいとをしさに、二十餘年來二人が胸に祕めて、誰人にも打明けぬ密事でござりますれば御存じなきは尤もにござりまする。

始皇（不審の爲めに、想像の緊張を覆されて、不審と少かなる驚きとを交へたる心にて）なに、二十餘年來の密事とな？

呂不韋　左樣にござりまする、よつくお聞きなされませ。陛下は下臣と朱后との間にお生れなされた身でござりまするぞ。

始皇　なに？（息を呑んで凝立す）

（沈默……兩人の間に心の暗鬪激しく來往す。）

（霹靂に女の泣聲起る。）

呂不韋（愕然として心を轉じ）何者ぢや何者ぢや。

（朱太后萎れ果てたる姿にて表はる。）

呂不韋　おゝ朱后殿下か。……何事もお聞きなされたか。

朱太后（只泣きくづるる）

呂不韋（朱太后に近よりその背を撫するやうに窺きこみ）二十餘年來二人が胸に封じた密事を、今宵は陛下に申上げたわ。何事もお聞きなされたであらう。

朱太后（泣き止んで、靜に肯づく）

呂不韋（寛ろぎたる態度にて）二十餘年來、今宵が初めてぢや、假面を脫ぎ捨てゝ親子三人顔合はすのは初めてぢや、寛ろいで語らはうではないか。四邊がいかう暗い。（左の方に向ひ、聲高く）こりや、燈をつけい。

（風の音わびしく聞ゆ。室仄暗くして庭上青き光に冴え返る。）

（侍女二人影の如く入り來り、二つの角燈を點じて音もなく去る。）

（始皇は榻に寄り、前を見つめたるまゝ、石の如く凝坐す。）

呂不韋　陛下、母后の行とても、さまで嚴しくお責めなされますな。母后は操を守らぬが正しい道と教へられた哀れなる女人でござりまする……最早二十餘年の昔のこと、先王には秦趙不和の爲め人質として邯鄲の公孫乾が館に預けられの御身、あはれ客舍の寂寥如何ばかりと察し、下臣一夕疏酌を備へて孫乾と共々招じ奉りました。其折酒を捧げて席に侍つたのは此の朱子にござります。下臣の妾として家に迎へられて、未だ三月も經ぬ程のことでござりましたが……

朱太后　あゝ其折のことならば、お話し下さるな。お話し下さ……

呂不韋　いゝえ、申上げねば陛下の御不審が霽れませぬ。……陛下お聞き下され……其折先王には朱子に眼を離さず注がれまして、「何卒、客中の不聊を憐んで彼の朱子を遣はしくれまじきや、生きては環を啣み死しては草を結んで、此恩を忘れじ。」と心こめての御望、此の時既に朱子は懷胎の身でござりました。

始皇　そりや眞實か？

呂不韋　實證にござりまする。

始皇　（痙攣せんばかり緊張せる面持にて、太后に向ひ）微塵、虛妄はござりませぬか。

朱太后　（恐るゝ如く始皇の顏を上眼に見上げながら）眞實ぢやわいのう。

呂不韋　實證にござりまする。其折下臣父に謀りましたる所、朱子に男子出生せば、呂家の子にして秦の世嗣となる理、一時の情を抑へて萬代の策を建てよとの言に、少壯の身のことなれば、風雲を望んで心頻りに勇躍し、其夜直ちに朱子に向ひ、汝誠に夫婦の情を念はゞ、殿下の望みを容れ殿下に侍きくれよ。吾に仕へる道とては只此の一筋ぞと心を籠めて說きました。陛下實證にござりまする、微塵虛妄はござりませぬ。只陛下御一身の榮達を念すればこそ、斷じ難き情を斷ち道ならぬ道を踏んでまで、謀りに謀りしことにござります。翌年甲辰の正朔に、陛下には先王の王子として御誕生遊ばされました。……先王の世嗣にならせ給ふ折にも、不韋が畫勞は語り盡されぬ程にござりました。秦宮に取入つての縱横の畫策、趙國より先王を救ひ囘す折の苦肉慘憺、憶ひ廻らしても實に吾ながらよくも成し了ほせたることかなと、夢のや

うにも覺えまする。

朱太后　女子の身のよくは知らねど、邯鄲の城を忍び出る折の恐ろしさは、今思うても、ほんに總身の慄へる程、微風も息をひそめた夏の眞夜中、寢靜つた民家の間を縫うて、轍の音を竊んで、密々と車馬を進めたが、闇の中に黑々と立つ家々が、今にも襲ひかゝりはせぬかと、息を殺して居たことはよう覺えて居るわいのう。

呂不韋　實に、彼の折とても、下臣豫め、秦廷に迎の勢を請ひ置きたればこそ、殺到したる孫乾が追手をも免れたれ。さもなくば、先王はもとより朱后もろとも、陛下！陛下の玉體とても、やはか安穩にあらせられませうや。……斯程までの盡勞も、皆誰ゆゑなりと思召す。陛下！皆陛下の御一身を思ふがゆゑにござりまするぞ。

朱太后　ほんにさうでござります。佞臣の言を用ゐて肉親の相國を疑うてはなりませぬ。

始皇（侵し難き森厳なる態度にて）　呂不韋、汝速かに相國の位を去つて、蜀に行け！

呂不韋（自らの耳を怪しむ如く）　何と仰せられます。

朱太后　肉親の父を蜀へわたさうと仰せられてか。

始皇　父ではない、

呂不韋　父ではないと仰せられますか。

始皇　父ではない。

朱太后　いゝえ、陛下は相國の子に違ひはござりませぬ。

始皇　呂不韋が子ではない。幼き折、呂不韋が子に非ずやとの疑起り、子なりとして自らを卑しみ薄なむ心と、子に非ずとして傲ぶる心との戰に、屢々苦しみ惱みしが、今こそ、今こそ、呂不韋が子でないことは明かになつたぞ。朕は呂不韋が子ではないぞよ。

呂不韋　然らば、先王莊襄王の王子ぢやと仰せられまするか。

始皇　いゝや、先王の子でもない。

呂不韋　然らば何人の子に渡らせられまする。

始皇　何人の子でもない、天の皇子ぢや。汝、先程、吾れながら此程の事をよくも、成就せたと自らの功績に不審を懷いたであらうが、誠に汝こそ、知らずして天に操られたる傀儡ぢや。只管卑しき私慾を遂げん爲め企てしことの、斯くまで整ふは唯一人の愛兒の爲めに、荊棘を開かしむる天の心ぢや。今こそ朗かなる吾が心鏡に、父の心は映れるぞよ。……私慾の奴、汝呂不韋、汝の務は畢りしぞ、去れ、速かに蜀へ去れ。

（沈默……）

（庭園の彼方遙かに整々たる人馬の跫音聞え、次第に近づき來る。炬火の反映綠樹の間より見ゆ。）

（風の吐息……。）

李斯　（慌しく入り來りて）夥しき人馬此へ押寄せて參るやうにござりますれば、（呂不韋を尻目に睥みながら）陛下には趙大使を御伴あつて、急ぎ咸陽宮へ御引上の程願はしう存じまする。下臣は臣下を率ゐ屹度彼等を防ぎ止め、說服いたす覺悟にござりまする。

始皇　うむ、恐らくは呂不韋が臣下の者共であらう。主の安否を思ひ煩ひ、後を慕うて參つたに相違あるまい。捨て置け……彼等此に參らば、彼等の面前に於て、呂不韋が貶謫を申渡してくれう。

李斯　なれど、陛下の玉體に萬一のことがござりましては……

始皇　いゝや、天の愛子に萬一はない。

（左方遙かに、騷がしき群衆の聲々聞ゆ。）

（臣下一人慌しく駈け來りて跪く。）

臣下　相國の臣下と申し、多勢の人數押寄せ、相國をお返し下され、お返し下されと犇いて居りまする。

（李斯出で行かんとす。）

呂不韋　（靜に立上りて李斯を止め）あゝ、いやお待ち下され、下臣參つて直々に取靜めまする。（沈痛なる面持にて）陛下、お暇を申上げまする。（頭を垂れて徐ろに去る）

（始皇、その後姿を見送る。）

（左方の騷擾依然として續く、李斯煩はしげに左方を見やる。）

朱太后　陛下、何卒相國の貶謫は思ひ止まつてはたもらぬか。蜀の山谷の風は嘸かし寒からう。此の都では燕も輕く飛ぶ頃に、遠い〱溪間に猿が悲しく鳴くと云ふ、年老いし相國の、廢所の毒に生命も縮まうに、思ひ止まつてはたもらぬか。

始皇　いゝや、なりませぬ。（右方に向ひ）趙高は居らぬか。

趙高　はあッ。（右方の室より出で來る）

始皇　（趙高に向ひ）嫪毐は如何いたした。

趙高　あれなる室に縛めてありまする。

始皇　うむ、彼が三族を悉く捕へ、嫪毐共々、斬罪にいたせ。

趙高　畏つてござります。

（朱太后泣きくづをる。）

（左方の騷擾止む。）

（沈默……。）

（臣下靜々と入り來り。）

臣下　相國呂不韋、只今毒を仰いで果てられましてござりまする。

李斯　相國が果てられた？

趙高　毒を仰いで……

始皇　して、呂不韋が臣下は如何いたした。
臣下　相國が、恐く取靜められましてござりまする。
始皇　臨終に初めて醒めたと見えるわ。
（沈默……。）
（朱太后の幽かなる歔欷。）
（始皇冷かなる憎惡の眼もて朱后を見下す。）

――靜かに幕――

〔II〕 荊軻

人

始皇帝　即位後二十年（三十三歳）
花陽夫人　始皇の愛姫（二十餘歳）
李斯　秦國の丞相
蒙嘉　秦王の寵臣
荊軻　燕國の大使
秦舞陽　燕國の副使
王賁　凱旋の將軍
夏無且　秦王の侍醫
蒙驁　秦國の猛將
文臣四人
武將四人
殿上の臣　數人
軍勢の聲々

時

西暦紀元二二九年。中夏の眞晝。

處

咸陽宮。

景

左右共に高き白壁を以て遮らる。左壁には出入の扉あり。

右方奧は、舞臺の四分の三を占めたる高き臺となる。臺はその左端階段となりて大床に導かれ、右端は白き帷によつて隣室に境せらる。背端は朱欄を以て圍まれ、背端と左端と交叉する處に巨大なる銅柱聳え、右端なる銅柱と相對す。

階段と左方の白壁との間は通路となりて、これより下の方なる廣庭に導く階段、彼方に降る心持。

廣庭の林樹深緑なる梢頭を僅かに露はし、遙かには驪山の影淡く横はり、深碧なせる中夏の空、聲を潛めて流れ渡れり。

人界の激しき動搖を離れて、自然は只寂寞として變ぜ

ざるなり。

幕上らんとする時、凱陣の將卒が擧げたる高き鬨の聲聞ゆ。

聲々低く續ける間に幕靜かに上る。

始皇一人臺上にあり、勾欄に近く廣庭に面し、遙かに下なる凱陣の將卒に會釋し慰勞す。

殿上の臣下數人、白壁と階段との間なる通路に立ちて手を擧げ、體を屈げて、下なる人々の鬨の聲に和す。

始皇　（臣下の方に向ひ）　こりや、こりや、凱陣の將王賁を此へ呼び上げい。

臣下等　（跪きて）　はあッ。

（臣下一人廣庭に下り行く。）

（始皇その後を見送る。）

（臣下、王賁を先立てゝ、登り來る。）

臣下の一　（王賁に向ひ）　閣下、國掟により劍をお預り申します。

（王賁劍を解きて渡す、受取りたる臣下廣庭に下りて行く。）

（王賁、臺下に跪く。）

始皇　おゝ、王賁か、軍旅の疲れさこそと、痛はしく思ふぞよ。

王賁　厚う存じまする。

始皇　趙は先王以來、秦國の恨深き仇敵なりしが、今悉く其地を擧げて臣服せしは、偏に汝等父子が勇武の致す所、誠に建國以來未曾有の功績ぞよ。

王賁　陛下、畏れ入り奉りまする。只々陛下の御稜威によりましての事でござりまする。斯かる御情厚き聖言を、父王翦が傳へ聞かば、誠に感涙に咽ぶことでござりませう。

始皇　おゝ王翦は更に兵を進めて、燕の南の界に到りしと聞きつるが、如何いたした？

王賁　さればにござりまする。軍を中山に屯して燕に臨み、直ちに易水を渡つて攻入らんとする勢にござりまするが、燕には、陛下に罪を得て走りたる將軍樊於期あつて、嘗て本國に質となり、亡げ歸つたる太子丹と共に、私に企謀を廻らして居ると承り、一擧にして燕の社稷を傾けん爲め、更に三十萬の軍勢を賜はるやう、臣下を以て願ひ出でましたる儀にござりまする。何卒御酌量あつて、此の儀御聽許下し置かれまするやう御願ひ申上げまする。

始皇　むゝ、樊於期は憎き匹夫ぢや、彼が素首提げ來らば、千金萬家に換へ遣はさんとの布令を出しつるが、未だ何の沙汰も無いわ。……さりながら、汝の父も老いたのう……今より十年前彼の楚國、趙魏韓燕の四國を合從して、函谷關に殺到したる時、汝が父王翦は三十萬の軍を領し

て馳せ向ひ、五国の兵を易々と追ひ散らせしが……多年の軍旅に痛くも老いしと見えるのう、……王翦の後を継がんものは、王賁、其方なるぞよ。………援軍のことは追つて沙汰しよう、退いて疲れを休めてくりやれ、身を大切にしてくれよ。

王賁　（涙に咽ぶ聲にて）　陛下、辱うございまする。辱うございまする。

（王賁、頭を垂れて階段を下り行く。）

（軍勢の歓呼のどよみ湧き……次第に遠ざかり行く。）

（花陽夫人、右方の帷より靜かに出て來りて、退き行く將卒を見送れる始皇の背後に立つ。）

花陽　陛下、凱陣の將卒は、仔羊のやうに罪のないものでございまするなあ。

始皇　（顧みて、莞爾として）　おゝ、花陽か、あれを見よ、喜び勇んで歸つて行くわ、彼が朕の琴の絃ぢや、其方の軍卒は琴の絃、朕が琴絃はあの將卒の輝く劍ぢや。あれ見よ、白日を射返す青い劍光、海潮をどよもすあの鬨の聲、此の滿身の血潮が唸りを打つて喜び狂ふわ……おゝもう隱れて見えぬわ……もう見えぬわ……（向き直りて）靜かに其方の琴を聽かうか。

花陽　琴でございまするか、お斷り申上げませう。

始皇　今朝より未だ一度も奏でぬやうではないか。

花陽　陛下には、幾度お聽き遊ばされても同じ事ではございませぬか。

始皇　いや、朕は殊の外琴の音を愛づるものぢやと思ひ居るが……

花陽　いゝえ、如何様に愛でられましても、鬨の聲を愛でられますと同じ御心ゆゑ琴の音の心へはお入りなされたことはございませぬ。

始皇　如何にもと肯づかるゝわ。

花陽　陛下は、一度も悲しまれたことのおはさぬゆゑ、悲しみより入つて悲しみを忘れた琴の音の心が、御心に沁みることはございますまいかと思はれまする。

始皇　むゝ、悲しみより入つて悲しみを忘れるとか。

花陽　御心を靜められて、音の奥へ忍び入られましたらば、四邊を遮るものもない和い、光の天地が開けませう、風吹いて枝葉も鳴らぬ境にございます。

始皇　むゝ、風吹いて枝葉も鳴らぬ境とあるか……是非に一曲奏でゝくりやれ。今日こそは心を澄まして聞かう程に。

花陽　左様なれば心を籠めて奏でまするでございませう。奥殿へ渡らせられまするか。

始皇　此の高殿で晴れ渡つた空を見ながら聽きたいものぢやのう。

花陽　左様なれば此へ琴を運ばせますでござりませう。（楚楚として帷の内に入る）

始皇　（驪山を眺めて逍遙しつゝ）風吹いて枝葉も鳴らぬ境……枝葉も鳴らぬ境……

（蒙嘉、左の扉より來る。）

（殿上の臣等蒙嘉に敬禮す。）

蒙嘉　（臺の下にて跪き）陛下！　陛下！

始皇　（顧みて）むゝ蒙嘉か、何事ぢや。

蒙嘉　燕より荊軻、秦舞陽の兩人使者として參着し御謁見の儀を下臣まで願ひ出でましてござります、如何取計ひませうや。

始皇　燕より使者參りしとあるか、彼の樊於期を如何いたした。其方屹度訊ねたであらうな。

蒙嘉　御意にござります。燕王、陛下の威を怖れ諸侯の列に入つて長く貢を斷たじとて、彼の樊將軍が首を斬つて函に封じ、督亢の地圖と共に獻ぜらるゝ使者にござりまする。

始皇　樊於期が首と督亢の地圖とな。（小兒の如き喜悅を顏に浮べ）兩人の者を引見せう程に、急いで呼べ。

蒙嘉　（臺下なる廣庭の彼方に指し）あれに控へさせてござりますれば直ちに召し連れますでござりませう。（廣庭の下へ降り行く）

始皇　（殿上の臣下に向ひ）李斯蒙鷔以下文武の臣に急いで此へ集まるやう申し傳へよ。

臣下　はあッ。

（彼等の中二人は殘り、その他は階段より、左方の扉より分れて退く。）

（殘りたる二人は臺下なる大床に榻を列べ整ふ。）

（花陽夫人、右の帷より、琴を携へたる侍女二人を從へて表はる。）

始皇　（顧みて）おゝ、花陽、琴を聽く約束ぢやつたのう。

花陽　最早御心變らせられてか、今の今なされたお約束ではござりせぬか。

始皇　いゝや、心移りいたした故ではない。只今此へ燕の使者參り、豫て語りし彼の憎き樊於期が首を獻ずる筈なれば、その式の終りし後にて、心靜かに聽くといたさう。

花陽　左様にござりまするか。心急ぎせらるゝ折に奏でましては、常と同じ事にござりますれば、妾は帷の後にて、式の終りますまでお待ち申すでござりませう。（侍女に向ひ）琴はそれへ置いて來や。

（帷の後へ退く。）

（侍女、始皇の席へ琴を置きて夫人の後を追ふ。）

（左壁の扉より李斯以下の文臣あらはれ、臺下より右壁に沿ひて置かれたる榻の席次によりて居竝ぶ。）

（階段より蒙嘉以下五人の武將登り來りて、臺下より左壁に沿ひて置かれたる榻の席に居並ぶ。）

（一同、始皇に向ひて長揖す。）

李斯　趙國臣服して未だ幾許ならざるに、燕國又朝貢すとの事、やがては四海悉く陛下に風靡し稜威彌天日と共に輝かん祥瑞と察し奉り、臣等一同恐悦至極にござりまする。

始皇　おゝ、朕が心を早く四海に布きたいものぢやのう。

（一同低頭す。）

（殿上の臣二人先導し、蒙嘉次で表はれ、首函を捧げたる荊軻、地圖の匣を捧げたる秦舞陽之に次ぎ、殿上の臣數人後に從ひて階段を登り來る。）

蒙嘉　燕國の大使荊軻、副使秦舞陽を此へ伴ひましてござりまする。

（殿上の臣等階段の上り口に立ち、荊軻舞陽の兩人は臺に導く階段の下に立つ。）

荊軻　（長揖して）　燕王喜、誠に大王陛下の威を仰ぎ、願はくは國を擧つて內臣となり、諸侯の列に加はつて貢を納め、郡縣の如くにして先王の宗廟を奉守する事を得んと、謹んで臣等兩人をして使とし樊於期が頭と督亢の地圖とを獻ぜしめ、只大王陛下の大命を待つ次第にござりまする。

（滿堂の視線悉く荊軻、舞陽兩人の身に集まる。）

始皇　（莞爾として）　おゝ、燕王諸侯の列に加はるとあるか、兩人の者、頭と地圖を此へ持て。

兩人　はあッ。

（荊軻恐るゝ所なく靜々と進みて函を捧ぐ。）

（始皇、函を開きて樊於期が首を檢し、滿足し喜ぶ色あり。）

（秦舞陽、四邊の晴れがましさに自ら懷く暗き後めたさに恐怖を感じ、顏色變じ、戰慄して階段を登ることを得ずして逡巡す。）

（武將、殿上の臣等、此の樣を不審し、立寄らんと意氣組む。）

荊軻　（舞陽の續かざるを怪みて、後を顧み此の樣を見て驚きしが、直ちに自らを制し、武將殿上の臣等を手にて穩かに制し、靜かに始皇に向ひ）　副使舞陽は、齡十三歲にして人を殺し、當るものなき勇士にござりますれど、蠻夷の中に人と爲り、未だ嘗て斯くの如き大儀に接したることのござりませねば、大王陛下の威儀に打たれて慄へ恐るゝ者かと存ぜられまする。何卒、陛下の允許を得まして、下臣副使に代つて地圖を獻じ度ぅ存じまする。

始皇　（樊於期が首より眼を上げて）　おゝ、汝よきに計らへ。

荊軻　はあッ。（階段を下り、秦舞陽の手より地圖の匣を受取り、密かに叱咤し勵ますが如くその眼を見入りて、靜かに階段を上りて始皇の前に匣を備ふ）

（文臣武將の視線は多く戰慄せる舞陽に集まり、此の哀れなる猛獸を憐れむが如し。）

（始皇晴れやかなる顏色にて此の匣を開き、靜かに地圖を繰り擴ぐ。）

（繰り擴げつゝ地圖を點檢して行く始皇の眼に、一閃輝けるもの映ず、軸となりて一振の匕首あり。始皇愕然として起たんとす。疾く、此時荊軻が右手は電光の如くその匕首を取り、左手に起たんとする始皇の右の袖を摑みたり。閃電一過せしが、匕首短き爲め始皇の身に達せず。）

（文臣武將、只その餘りに不意なる爲め、事態を解せずして呆然たりしが、愕然として醒めたるが如く階段の下に蒐き集まる。此の突如たる騷擾に彼の階段に戰慄せりし哀れなる猛獸は初めて處を得たるが如く勇氣を挽回して、その狹き道に立塞がりて突立ちぬ。）

始皇　（端然として）　如何に荊軻、朕既に斯く汝が虜となる上は、朕が生命は汝のものぢや、朕に片時の暇をとらせよ。（荊軻匕首を始皇の胸に擬して始皇を睥みたるまゝ待つ）朕平生琴を聽くことを愛して、日々怠ることなかりしが、今日は汝等が參內によつて未だ一度も琴を聽かぬ。特に今は最後なれば、一曲を聽いて淸流の如く死に行かんと思ふが如何に。

荊軻　片時の暇とあるか。秦舞陽は如何に思ふぞ？（顧みずして背後に問を放つて、謀る）

秦舞陽　（階下に向ひたるまゝにて）　片時の暇とならば……

……なれど階下の群臣立騷がば、後れ給ふな。

荊軻　片時の暇ならばまゐらせん。

始皇　花陽は其にあるか。

花陽　（帷の內より。悲しき聲にて）　はあッ。（悄然として立出づ。）

始皇　花陽、其方と約したる箏曲を今こそ心靜かに聽くであらうぞ。（荊軻に）花陽と呼んで、朕が後宮第一の箏の名手ぢや。

荊軻　（始皇の袖を摑み匕首を擬したるまゝ、萎れたる花陽の姿を見やり）あゝ、吾にも高漸離とて、能く筑を撃つ友のありしが、彼の易水の畔にて、復還らじと分れ來し吾に餞して筑を撃ち、君去つて誰か能く聽かんとて、其儘絃を斷ちました。……あゝ同じ身の上でございますな。

（遙かなる友を懷うて涙下る。）

（花陽夫人は始皇に向ひて箏に座し、淑やかに箏を彈

じ初む。)

(始皇は眼を閉ぢ荊軻は口を緘し、階下に集まれる群臣すべて聲なのみたれば、高樓寂寞として、箏曲の嫋かなる音色、香煙の如く、鮮かに澄み渡れる碧空を燻り行くに似たり。)

(その底に銀鈴の響を潜めたる花陽の箏曲は聞えぬ。)

——箏曲——

〽赫耀ふ春の調には、
陽炎燃ゆる空の綾
綾揺れ渡り消えて行く。

秋澄めば
雁がね遠く反響して
月夜を渡る風のこゑ。
琴柱にかゝる聲々も
月の光と沁みて行く。

(以上、絃樂と肉聲と縒れ絡みて諧調を織り出し、以下肉聲の歌詞主となりて絃樂は伴奏となる。)

君きけや、君目を閉け、
七尺の屛風は、
躍らばやがて越えつべし。
羅縠の御袂、
引かば直ちに切れなんを。
君きけや、君眼を開け。

(眼を瞑して、靜かに箏曲を聽き居たる始皇は「月の光と沁みて行く」の曲終る時、肯づくが如くして眼を見開きて、荊軻を見る。)

(荊軻は箏曲の中に沈み行きて、悲しみに醉へるが如し。)

(「引かば直ちに切れなんを」の曲終る時、始皇は突如起ち上りて荊軻の手を逃れ、飛鳥の如く、右方なる銅柱に走る。)

(荊軻愕然として夢より醒め、起ち上りて後を追ふ。)

(侍醫夏無且右方帷の内より表はれて、荊軻に藥嚢を抛つ、荊軻ひるむ。秦王劍を拔いて荊軻が左の股を打つ。荊軻あせつて秦王を打たんとして銅柱に匕首を中つ。此の間に階下の武臣、秦舞陽を捻ぢ伏せ、臺上に馳せ登り、折り重なつて荊軻を捕ふ。)

(荊軻、秦舞陽の兩人は臺下の大床に引据ゑらる。秦舞陽は首も擧げず。)

荊軻　(嘲笑の調子をもて)　天下を仇敵とする秦王なれば斯程の卑怯はあるまいと心許したが不覺ぢやわい。

始皇　いゝや卑怯ではないぞよ。

荊軻　樂を樂しむ淸き心の虛を伺つて、生命を盜み出だすが卑怯でないか?

始皇　むゝ、匹夫にあつては卑怯ともならむ。なれど、四海の內に天の心を布かねばならぬ朕が身に、生命は何よりも大切ぢや。盜んでなりと取らねばならぬ……汝一人に樂を樂しむ心を許さば、萬民に此の心を布くことがならぬぞよ。

荊軻　左程迄高き心のありとならば、何故あつて濫りに干戈を動かし四隣を冒し良民を惱ますぞ。

始皇　匹夫匹夫が割據して干戈の絕ゆる時のあらうと思ふか。所詮干戈の絕えぬとならば、武を以て四海を一にし威を以て天の心を布かねばならぬわ。

荊軻　何故あつて德を以て靡くを待たぬ?

始皇　德を以て靡き來るは只德ある者のみぢや。百年黃河の澄むを待たうや。

(荊軻默してありしが、舌を嚙んで死す。)

蒙鶩　舌を嚙んで相果てましてござります。

始皇　むゝ、惜しい勇夫ぢや。……おゝ、花陽。今日初めて箏の音の心が、よう沁み渡つたぞよ。其方が箏の音の心は天の心ぢや。……四海の內に布ねばならぬは此の心ぢや。

蒙鶩　陛下、秦舞陽は如何取計ひませう?

始皇　おゝ憎き太子丹が刺客ぢや。汝、秦舞陽を出陣の血祭に斬つて捨て、三十萬の軍兵を率ゐ、彼の山中に屯せる王翦と力を協せ燕の都に攻め入つて、彼の匹夫丹が首を提げて歸れ。(荊軻の持來れる匕首を蒙鶩に與ふ)

蒙鶩　ははッ。畏まつてござりまする。直ちに出陣の用意いたしまするでごりませう。(秦舞陽を引きて廣庭に下る階段に至り、秦舞陽の首を階下遥かに斬り落す)

(廣庭より鬨の聲湧く。)

蒙鶩　(下の方に向ひ大聲にて)　陛下の玉體は安泰なるぞよ。

(始皇靜かに歩みて高臺より廣庭に面して立つ。)

(歡聲高く亂次として湧く。)

――幕――

〔Ⅲ〕徐　福

(上)　夢　幻

人

始　皇　帝

紅衣の童子
青衣の童子
金甲の武人（數十人）

疾風と迅雷と戰へるが如き恐ろしき騷音の蜒蜿起伏を以て幕は上る。

一物も見えざる闇、闇の中を騷音は掻き亂すが如くうねり廻る。……

騷音は漸く遠ざかり行きて、何時しか洞簫の如き悲しき旋律靜かに……いと靜かに歩み來る。

洞簫の旋律と共に闇は徐ろに薄明し來り、薄明の底に朧にして遙かなる萬里の長城の形顫動しつゝ表れ來る。形の判明せる時洞簫の顫律は消え行きて、其餘韻の如く薄明は微に微に搖曳す。薄明は次第に明け行くにつれ紅き光を帶び來る……其光益々明くして紅き太陽宙天より靜々と降り來り、長城の影青黑き色を陰らす。紅陽地に沈むと見る。沈みたる地點に、白衣を着て、紅陽を附けたる冠を戴き、恐怖に瘦せたる人の姿立てり、秦の始皇に似たり。長城の青黑き影は顫動しつゝ迫り來て、徐に始皇の姿を圍み行く……始皇は延び上り延び上り戰慄す。長城の形棺の如く此の人を内に封じ籠めたる刹那、冠せる紅陽地に轉び落つ。……同時に寂寞を破りて角の音突如として起り、左右の闇黑の中より青衣を纏へる童子と紅衣を纏へる童子轉び出て、落ちたる紅陽を拾はんとして相互に爭ふ。角の音は銅鑼を交へて次第に高く次第に遠く鳴り響く、兩人の童子これにつれて轉び合ひ、追ひ合ひ、激しく挑み鬪ふ。角と銅鑼とは折々撥止と休みて遙かなる方にて多勢のあぐる鬨の聲幽かに反響す。

紅衣の童子終に青衣の童子を倒して紅陽を奪ひ取り、微笑める顏をあげ、紅陽を高くさし扛ぐ。銅鑼の響止み角の音獨り朗かに高まり、單調なる拍節を刻む……金甲の武人數十人歩武を整へて肅々と進み寄り、紅衣の童子を先に立てゝ慘として進み去る。金甲の武人隱るゝと共に闇は舊に復して、暗黑にして寂寞たる虛空に風の颯々と吹き去る音殘る。

幕下る。

(下) 災異

人

始皇帝　崩御の二年前（四十七歲）
花陽夫人　秦王の愛妃
扶蘇　秦王の長子
芙蓉　花陽の侍女、扶蘇の愛姬
李斯　秦廷の相國

徐　　福　方士
宗　無　忌　始皇の近臣
李斯の臣下　二　人
宿衛臣下　四　人
鳳輦の馭者　二　人
侍　　女　數　人

時

西暦紀元前二百十三年、秋の一日の黎明。

處

阿房宮內。

景

左に高く一字の樓閣聳え、朱柱粉壁、斜に右奥に渡りてその正面を示す、左端に近く入口あり、階段によつて扉に達す。梨花夫人の住ふ後宮なり、後宮夢未だ濃かなるにや扉は冷たく鎖されたり。

右にも高く一字の樓閣聳立す。花陽夫人の後宮なり。梨花夫人の後宮に對せるは此の側面にして窗牖悉く鎖されたり。側面は奥深く連りて右に折れ曲る。

折れ曲りたる右の樓閣の左端と左の樓閣の右端との間に秋の黎明の空細き一線を表はし、傾きたる冷たき孤月僅かにその間隙より仲見せり。道は白く兩閣の間を登りて、左の樓閣の後に隱れ去る。

黄色の羽蓋を有する鳳輦、左の樓閣の扉に近き處に止まり、扉に近き階段の上には、金甲を裝ひたる宿衛の臣二人立像の如く左右に立てり。

秋の明けやらぬ彼誰(かはたれ)の薄闇、霧・溶け合ひて重くかゝり、何處ともなく秋曉の冷氣漂ふ。

沓の音肅々と聞えて、白き路の上を紫の法服を纏へる李斯、臣下二人を伴ひて下り來り、鳳輦を見て立止り、臣下に耳語す。

臣下の一　(宿衛の臣に向ひ)　陛下には此の後宮に渡らせ給ふか。

宿衛の一　御諚なれば、その儀は御答(おんいら)へ申上げ兼ねまする。

宿衛の二　陛下には、日々夜々に玉座を動かされ、何人にも知らせ給はぬ旨、堅く仰せ渡されましてござりますれば……

臣下の二　その儀は存じ罷りある。なれど鳳輦此(これ)に御座あれば……

宿衛の一　あゝいや、宮殿より宮殿へ四通八達の隧道を設けありとのことにござれば、假令へ鳳輦此(これ)に止まるとも……

臣下の一　あゝいや宿衛の方々、火急の事なればこそ、吾

君には斯く拂曉に御座所を探り來る仕儀、何卒曲げて、此の旨お達し賴み入る。

宿衛の二　でも　諚にござりますれば……

臣下の二　汝等徒に御諚に拘泥つて、天下政道の亂れを助けん所存なるか。

李斯　（臣下を制し）　あゝこりや、卒爾あつては相成らぬぞ。

（綠の衣服を纏へる徐福、何時しか李斯の傍に立てり。）

徐福　（李斯に向ひ）　李大人には未明よりの御出仕、何か火急の奏上でもござりましてか？

李斯　さればにござりまする。彼の盧生候生が輩について御裁斷を仰ぎ度ことあつて斯く、拂曉に伺候せし次第にござりまするが、陛下には此の後宮に渡らせられるでござりませうか。

徐福　されば近頃の御寵愛偏に梨花夫人に集まり給ふと承はれば、恐らく御座所は此の後宮でござりませう。下臣も密々に裁許を經たき願あつて伺候致しゝことなるが、して大人の火急の奏上とは如何なる仔細でござりまするな。

（此時、右なる樓閣の窗牖徐ろに開きて、花陽夫人の姿仄見ゆ。落ち行く曉の月を見るが如し。）

李斯　（これに心附かず徐福との話を運ぶ）　されば、彼の雲氣の歌と云ふをお聽きなされたことがござりまするか。

徐福　いや、未だ一度も耳にしたことはござりませぬが、民間の童謠が近頃人目を忍んで謠ひますとやら……

李斯　そ、その歌にござります。陛下隴西御巡狩の砌、鷄頭山の巓より望み給ひしと云ふ、彼の五色の光隱々たる雲氣に諷せ、陛下の無道を恨み御衰運を謳ひし歌でござりまするが、陛下には此の由を洩れ聽かせられて嚴しく詮議せよとの御諚ゆゑ、檢索いたせしに、彼の盧生候生がなせる業と知れしゆゑ……

徐福　盧生がなせる業？　して、御奏上なさるゝは其事にござりまするか。

李斯　されば、火急に奏上したる上、裁斷を仰がねば……

（此の時窗牖は開きたるまゝにて、花陽夫人の姿消ゆ。）

徐福　斯樣なことを奏上せられたらんには如何なり行くことか、御靜慮なされましたか。

李斯　さ、天下の方士、道家の徒は悉く慘刑に處せられんやも計り難しとは察しましたれど、秦朝の安否には代へ難しと存じまして……

徐福　方士、道家の生命を盡すは、事小さけれど陛下の慘虐、四民の怨恨を買はゞ、それこそ誠に秦朝の一大事でござりませぬか。さらでだに彼の長城を築き、此の阿房

宮殿を建てし爲め、男は召されて田園徒らに荒れ果て、女は愁ひて織機に痿堆かく、父子相分れ、夫婦離れ、私かに涙をのむものありとやらん……。

李斯 （詰責の調子を帶びて） そりや卿も陛下の政道を難じ奉る所存か？

徐福 いゝや、陛下の朗かなる大聖心は、下臣深く感佩罷り在れば、毛頭難じ奉らん心はござらねど。（李斯の眼を見入りて）只、李大人には、天下の政道に與りながら、猶此の上に四民の怨恨を買はんとし給ふは、陛下の御一身に怨恨を集めん策を廻らし給ふにかと、お訊ね申すまでのことでござります。

李斯 （自らの疚しき心の傷をつかれて驚き、此の驚きを糊塗せんとして、もの和かにこぶるが如く）此は又嚴しきお訊ねではござりませぬか、下臣は只、大聖心を萬民の内に布き天下の統一を計らんとの誠意を以て陛下に仕へ奉るもの、何條、さる疚しい心のありませうや。……よし又、方士道家の生命は悉くなきものにせよとの劇しき勅命下りませうとも、君寵厚き卿に災の及ぼうことのござりませうや。

徐福 李大人には下臣が一身の安否を思つて、盧生等がことを辯疏するかに思召さるゝ様なれど、下臣決して然る私心を挿んでもの申す卑しき者ではござりませぬ。只社稷を泰山の安きに置かんと存ずればこそ申上げしまでのこと……（聞ける李斯が心の卑しさを思ひて、暗き心になり）大人の心を以て測られましては、何事も……何事も私心に出でしやうにも見えませう……最早何事も申上げますまい。

（寂しく微笑む。）

李斯 （周章して宥めんとする心にて） 左樣にお怒りあつては、下臣甚だ當惑仕る。下臣とても、天下に陛下の稜威を遍く布き萬民に大聖心を傳へんと存ずればこそ、斯く昧爽に、努めて出仕して、國事に焦慮いたすものではござりませぬか……

徐福 （默してあらんかと思ひしが口を開きて） なれど、春風柔かに渡つてこそ、芳蘭も微かに薫り、桃李も雲と靡くためし、秋風霜を吹き送りましては、野も山も只白く枯れ果て、青草の影も失せようかと存じまするが……

李斯 さ、下臣とても然思はぬにはあらねども、力及ばぬを慨く外に道とてはござりませぬ。

（二人は相互の心を伺ふが如く默して立つ。）

（左の樓閣の扉、内より開く。）

（李斯、徐福、その他戸外に立てるもの、すべて扉の方を見る。鳳輦の馭者二人何事もなげに立ち出づ……内は暗くして、暗き奥に殘燈微かに見ゆ。）

李斯　(蹌けるが如く階段の上に立止まれる馭者に向ひ)陛下には此より何れへか臨御遊ばさるゝ仰出であつてか？

馭者の一　(此時初めて禮を施し)　左様にござりまする。今朝惡夢を御覧ぜられしとの御事にて、鬱々として沈ませられしが、只今御苑の逍遥を仰出でられましてござります。

李斯　むゝ然らば臨御に先づて御伺候申上げねば相成らぬ。(徐福に向ひ)御免下され。

(二人の臣下を促し、開かれし扉より急ぎ入り行く。)

(扉は閉づ。)

(馭者鳳輦に近づきて、轍の塵を拂ひ、蓐を淸めなどす。)

(徐福も亦靜かに階段を上り行かんとす。)

(太子扶蘇、花陽夫人と共に白き道を下り來る。)

扶蘇　暫く……暫くお待ち下されい。

(徐福、階段より下りて、二人を迎へて揖す。)

扶蘇　母君より密々にお賴み申度きことのある由なれば、暫くお待ち下されい。(馭者、竝に宿衞の臣に向ひ)其方達、暫時此より遠慮いたせ。

(馭者頭を垂れて白き路より左の樓閣の陰に隱れ、宿衞の臣亦階段を下りて、その後に從ふ。)

花陽　(徐福に近づき)　種々の心勞厚う思ひますぞよ。先程聰より仄かに洩れ聞けば、李斯が昧爽よりの出仕は、彼の雲氣の歌を盧生等がなせる業なりとし、之を奏上せん爲めとやら、誠に盧生等がなせる業であらうかのう？

徐福　さればにござりまする。盧生侯生が不死の靈藥を求めんとて、太岳の山中に分け入りしも、もと〳〵、下臣が奉りし上書によつて、功を衒はんとせしものにござりますれば、望を果し得よう理はござりませぬ。さすれば、その非を覆はん爲め、流言蜚語を放ちしものか、とも存ぜられます。彼の盜竊をなせる輩がその罪を蔽はん爲め、盜める家に火を放つと同じ心かと推せられます。

花陽　さればのう、東華の頂にて會ひし仙人より得し仙書なりとて、天籙祕訣とやらんを獻りしまゝ、又も靈藥を求めんとて行方知れずなりしが……。

扶蘇　父君の寵を受けながら、如何なれば斯くばかり仇をなすものでござりませう。四民の怨嗟を買へる長城の修築とて、「天籙祕訣」に「亡秦者胡也」とありしより起りしこと。

徐福　さ、その文字を釋きたる者は何人なりと思召す。

扶蘇　悉く蝌蚪の文字を以て記し、隱語を以て封ぜられたれば、文字に明ある李斯に命じて釋かせられた。

徐福　左様でござりませう、「天籙祕訣」を讀んで長城の修

築の工を起したものは李斯でござりまするぞ。その李斯が又もや、流言蜚語について、此度の奏上。

花陽　如何なり行くことであらうのう。

徐福　さればにござりまする、盧生等が行方知れずなりてより、早や年を閲しまするに、未だ何の音信もなければ、陛下には頻りに聖心を苛立たせ給ふ折なれば、斯かる忌はしきことを君聴に達しなば定めし、流言蜚語を放ちし輩の餘類を捉へ根を斷てよとの劇しき勅令は下りませう。

扶蘇　さすれば盧生侯生と交りを結びしもの、方士道家はもとより、災は儒家にまで及ばう。

徐福　さればにござりまする、陛下の御一身に怨恨を集めん策を廻らす彼の李斯が上奏にござりますれば、災は何處まで及ばうやも測られませぬ。……彼等書を學ぶ者共が動もすれば、先王の道を伺ぶ餘り、當今の政令を批議する傾きもござりますれば　或は書籍を悉く燒き棄てよとの勅命下りもせずやと、私に憂慮罷りある儀にござりまする。

花陽　書籍を燒けと？……先賢が思を凝して竹簡に漆もて止めし心を……

徐福　さればにござります。陛下の齡、萬歳に亙り給ひ、大聖心の、萬民の心に悉く布かれなば、新しき道は榮え行く理にござりますれば、古き先賢の道の亡びませうとも、何の憂ふる所もござりませねど……

花陽　不死の靈藥も手に入らずば、帝に百年の齡さへ望まれず、先賢の道も亡び行かば、末代の子々孫々は、何の光によつて道を求めようぞ。のう徐福、陛下をお諫め申すに手は盡さうとも、若しお許しなくば、如何いたさう。卿に何ぞよい謀はないかや。

徐福　さればにござりまする、別に謀とてはござりませねど、先年上書を以てお願ひ申上げし蓬萊山へ御遣はしの儀、御聽許お執成し下されなば、道の萬分一は之によつて殘りませうかと存ぜられますが……

花陽　卿、不死の靈藥を求め歸る心にか？

徐福　御意にござりまする、屹度不老の練丹を得て立還る所存にござりまする。

花陽　卿さへ靈藥を齎し歸りなば、帝の御齡は萬歳に亙り、新しき道は四海の內に布かるゝ理……

徐福　あゝいや、假令へ靈藥を齎しませうとも、陛下には恐らく效なきものかと存ぜられまする。

（右の樓閣の開きたる闌牖に芙蓉の姿仄見ゆ、私に扶蘇の顏を見んが爲めなるべし。下なる三人は之に心附かず。）

（月の影旣に隱れて、淡き日影照らし來る。）

花陽　そりや又何故に……？

徐福　さればにござりまする。赤子は終日號けども喉の嗄れぬものにござりまするが、之即ち一人にして、その內和するが故にござりまする。不老の練丹は此の一人の完き和を保たん靈藥にござります。然るに長じて、男女相互に戀着するは二を以て和せんとするものにござりまして、既にその內傾けるが故でござります。斯して子は生れ、二にして完うし得ざりし和を完うする務をその內に繼ぐものにござりまする。此の道によるものは子々孫々によつて不老を期するものにござりますれば、一人によつて壽を保つ練丹も何の效なきものにござりまする。陛下には三千の宮女を置かせられ、扶蘇殿下を初め、胡亥殿下その他王子王女も在らせらるゝ事なれば、子々孫々によつて不老を期せる道を踏み給ふ御方、不老の練丹を求められまするは、矛と楯との兩全を求めらるゝものにござります。

花陽　さ、陛下には世に優れたる御身なれば、御親らに等しき子を數多く設けんとて、數多の宮女を置き給へるが、……斯くては靈藥もその效ないとか。

徐福　なれど、扶蘇殿下には未だ御一人にて渡らせらるゝことなれば、下臣何卒して彼の靈藥を竊し獻り度う存じまするが、此の儀偏にお執成しの儀願はしう存じまする。

（芙蓉は、扶蘇が此の願を容るれば卽ち之れ、自らの顧みられずして、捨てらるゝことなれば、扶蘇の答如何にと心を焦ちて隠より顏を出して耳を傾く。）

花陽　おゝ、ほんに太子の齡を延べて、道の光を傳へなば、國は平に民安らけく、琴の音に聞く境も開かう。

徐福　何卒陛下にお執成しの程を……

扶蘇　母君。（花陽夫人の袖を曳く）

花陽　……？

扶蘇　母君、扶蘇は千歳の齡より……

花陽　おゝ、芙蓉のことか、ほんに其方には芙蓉と云ふ齡に代へ難い寶があつたわいのう。

（芙蓉、二人の後より拜す。）

徐福　最早御一人にてはござりませぬか。

花陽　いゝえ、未だ一人は一人なれど……

徐福　御心傾かせられしは、殘念にござりまする……なれど玉體清淨に渡らせ給へば、仙丹效なきことはござりませぬ。御賢慮如何にござりまする。

（花陽は扶蘇を瞻り、扶蘇は首を垂れて答なし。）

（芙蓉頻りに焦心す。）

徐福　猶彼の仙丹を求めん爲め、童男童女各々五百人を召連れ大船十艘を以て東海に赴く心算にござりますれば、（聲を潜め）下臣の集め置きたる先賢の遺訓は、私に船に

て救ひ出し、彼の童男童女によりまして、長く末代に傳へん所存にござりまするが、御賢慮如何にござりまする？

花陽　先賢の遺訓を？　船にて救ひ出すとか？

徐福　御賢慮如何にござりまする。

花陽　扶蘇、如何いたしたものであらうのう？

徐福　（扶蘇に向ひ）　殿下、御賢慮如何にござりまする？

（芙蓉は焦心して身を忘れ、上より聲を放つ。）

芙蓉　殿下、妾のことは思ひ斷めて下さりませ？

（三人等しく驚きて上を見あぐ。）

芙蓉　（昂奮して、青白く痙攣せるが如き顔にて）　殿下、妾のことは思ひ斷めて下さりませ。

扶蘇　おゝ、思ひ斷たるゝ程ならば、天下の大事、潔く返答申上ぐる筈なれど……

芙蓉　忝うござります。其の御心の測りかねたればこそ、日夜に心も惱ましたのでござります。其の御言葉を聞きますれば、此の上の望みはござりませぬ。厚いお情を身にしめて、潔う果てまする、何卒百年も千歳も御存らへ下さりませ。

（芙蓉、窓に凭りて、白刃もて喉を突きて死す。）

（下なる三人止めんとして焦躁す。）

徐福　最早、相果てしやうにござります。

花陽　芙蓉が健氣なる志、快う受けねばなるまい。なう扶蘇、これより直ちに徐福をあれへ伴ひ、陛下の齡を萬歳に保たん爲め、徐福を蓬萊へお遣はし下さるやうにと、其方より御願ひ申上げたがよいであらう。

扶蘇　（悲痛の調にて）　父君の御齡にござりまするか？

花陽　さればよ、陛下の御齡と申し上げずば、御聽許の程如何かと思ひまする。

扶蘇　御尤もにござりまする。

徐福　辱うござりまする。

扶蘇　（立去りかねて躊躇しつゝ）　母君……

花陽　おゝよう存じて居りますわい、妾は直に參りて介抱しよう程に心置きなく參るがよいぞよ。

（白き道を登りて、右の樓閣の入口へ急ぐ。）

扶蘇　（花陽の後より）　芙蓉の介抱、宜しう御願ひ申上げまする。

花陽　（顧みずして）　心置きなう參るがよいぞよ。

（扶蘇は憂はしげに蘭牕を見上ぐ、蘭牕より美しき衣袖こぼれ寂しく風に搖ぐ。）

（徐福は首を垂れて階段に向ふ。）

（遠く、微かに、兒童等の諸聲にて謠ふ『雲氣の歌』聞え來る。）

――雲氣の歌――

隴西の、山々暗く、
風もなき、空深く、
隠々と、雲ともならで、
かゞよへる、五色の雲氣。

見よ見よ、黒雲渦巻き起り、
日輪蝕し、雷はためき、
長城の影掻き暮れて
世は闇となる、闇となる。

（『見よ、見よ』より『雷はためき』までの聲は近く、『闇となる、闇となる』は幽かに消えて行く。）

（徐福等立止りて聞く。歌終る時、始皇の聲聞ゆ。）

始皇の聲　（扉の内より）　宿衛の者は居らぬか。宿衛の者は居らぬか。

（沈默……。）

（扉開き、少しく憔悴せる顔にて始皇表はる。續いて李斯、臣下二人、侍女數人、其の後に從ふ。）

（扉の奥既に明るし。）

始皇　（階段の上に立ちたるまゝ）　宿衛の者を呼べ！

侍女達　はあッ。

（侍女の二人立ちて奥に入る。）

始皇　（李斯の臣に向ひ）　汝等、宗無忌を呼び出し盧生侯生に交あるものは、方士と道家と儒者とを問はず悉く檢擧し土坑を穿つて一人も殘らず生きながら埋めよと申しつけよ。

臣下　ははあッ。

始皇　李斯、卿は天下郡縣の吏に布令を發し、秦室の記録を除き、詩經書經を初め諸子百家の書を藏するものは悉く差出させ、斷簡に至るまで悉皆灰燼と燒き棄てさせい。

扶蘇　父上暫くお待下さるべし。彼の盧生侯生の輩には、流言蜚語を放つて陛下を誹謗せし罪もあれ、彼の儒家に至りましては、天地の理に則りし道を説く者にござりますれば、何卒御宥免下し置かれまするやう願はしう存じます。

始皇　愚や扶蘇、彼等儒者とやらん云へる奴輩、口に天地の理を説くとも、心鏡に天地の心鮮かに感銘するもの一人なりともありと思ふか。彼等徒に往古を範とし、動もすれば、當代の政令に批議を加ふるを見ても、眼あつて、天地を視るの眼なきこと明かなるわ。徒らに小さき私心を逞しうして天下民心を迷はす醜族、土を嚙んでその頤を叩き居れ。

扶蘇　父上、然らば、せめては、先賢の心を止めし書籍ばかりは……

始皇　默れ、扶蘇！　先賢の道は腐儒が民心を迷はす呪文ならずや。先賢に何の道があると思ふか、天下の道は始皇に始まるのぢや。

（沈默……幽かに童兒等の歌聞ゆ。）

（侍女に導かれて宿衞の臣二人出て來り、階下に下りて跪く。）

宿衞　お召しにござりまするか。

始皇　おゝ汝等咸陽の市に馳せ向ひ、彼の雲氣の歌を謠ふ童男童女を引捕へ、立處に死罪に行ひ街頭に晒らせ！

宿衞　畏つてござりまする。（退場）

扶蘇　あゝ。罪もなく無心に謠ふ童男童女を……

（簾隱よりは、花陽夫人憂はしげに目をしばたゝきて見下ろす。）

始皇　汝、如何なれば、斯く朕が意に逆ふぞ。中国にあつては、朕が政令の妨げぢや。……今北の方上郡に、蒙恬(もうてん)八十萬の軍を率ゐて、彼の胡賊を擊ち拂ひ居る筈なれば、汝上郡に赴いて、蒙恬が軍を監せよ。卽刻に北へ立て！

（扶蘇首を垂れつゝ、右の樓閣の入口に向ふ。徐福悲しく扶蘇の後姿を見送る。）

（扶蘇と行交ひに宗無忌、李斯の臣下二人を後に從へて階を下り來る。）

宗無忌　（階下に跪き）　勅命の趣、委細承りましてござります。下臣(それがし)、彼等が密々に門人徒黨を集むる處を採り置きましたれば、屹度檢擧して悉く捕へまするでござりませう。

始皇　おゝ早く行け！

宗無忌　はゝッ、身に餘る重任を辱うせし喜びとも存じ、畏多くはござりますれど、下臣(それがし)只今手に入りました璧を獻上いたし度うござります。

始皇　あゝ璧とあるか、此(これ)へもて！

（宗無忌、懷より璧を取出し、恭しく捧げて、始皇に獻じ、階段を下る。）

始皇　おゝ珍らしい璧ぢや、汝如何にして斯かる璧を手に入れしぞ。

宗無忌　さればにござりまする。下臣(それがし)、邯鄲に遣はしたる使者、都への歸途、日も暮れかゝりましたる森陰にて異形なる者に出會ひましたさうにござりまする。異形の者此の璧を使者に授けて、近年祖龍沙丘に終らん程に、汝此の璧を滈池の君に送りくれよ、と云ふかと思へば、早姿は消えたさうにござりまする、珍らしき璧と存じ陛下に獻上いたしましたる儀、何卒御納の程願はしう存じまする。

始皇　おゝ、定めし、方士の惡戯でがなあらうぞ。納め置くぞよ。早く行け！

宗無忌　ははあッ。（白き道より隱れ行く）

始皇　李斯！　卿も布令を急いでくりやれ。

李斯　畏つてござりまする。（階下を促して白道を靜かに登り行く）

（花陽夫人、李斯と行交ひに下り來る。李斯、夫人に禮して去る。）

（閣牕は既に鎖さる。）

始皇　（鳳蓋の陰に寂しく隱れ居たる徐福を認め）おゝ徐福か、卿、何時此（これ）へ參つた。

徐福　先程より伺候いたして居りまする。

始皇　（侍女共他の者共に向ひ）其方達は奥へ參れ、扉を鎖して遠慮いたせ！

侍女達　はあッ。（扉を鎖して去る）

始皇　（階段を降り、鳳蓋に近づき）徐福、卿は彼の宗無忌が申せし言を何と聞きやつた？

徐福　祖龍沙丘に倒れむとか申しましたやうにござりまするが……

始皇　左樣ぢや。卿は此の言を何と釋くぞ。

徐福　……（躊躇す）

始皇　遠慮いたすな！

徐福　畏れながら、龍は天子、祖は始原の意にござりますれば、陛下の御齡（おんよはひ）を諷せしものかと推察仕りまする。

花陽　（始皇の背後より）陛下！

始皇　おゝ花陽か。

花陽　（寂しげなる態度にて）陛下、徐福を蓬萊へお遣はしの儀、願はしう存じまする。

始皇　おゝ、朕も然（しか）思ひ居つた所ぢや。今曉惡夢に襲はれてより、生れて知らぬ物寂しさを覺え、先年徐福が納めたる上書を思ひ出で、即刻呼び出さんと思ひ居つた所なりしぞ。

徐福　辱う存じまする。年來の宿望漸く遂げられまする仕儀、誠に喜ばしう存じまする。

始皇　卿（おみ）ならば、盧生が如き過（あやまち）はあるまい。

徐福　盧生は全く無知の徒にござりますれば、太岳に長生の仙丹を求むるが如き愚を致しまするものにござりまする。不老の靈藥は東方に求むべきものにござりまする。東方には木德あり、人にしては仁德盛大に、色に配すれば、黄にして望洋々たる相にござりまする。又四季に配すれば、春にして萬物鬱勃として生育するの氣に充ちて居りまする。彼の東海に蓬萊、方丈、瀛洲と云ふ三つの仙山あり。八節春の如く、四時清朗にして寒暑を覺えず。多くの仙人鶴に乘りて、悠々と逍遙し、草を集めて丹を練る。之ぞ即ち長生不老の靈藥にござりまする。

始皇　（寂しげに）おゝ早く用意をいだせ。

徐福　何卒、彼の三山に分け入りまする爲め、心身淸淨なる童男、童女、各々五百人、之を乘せて東海に漕ぎ出でまする大船十艘を下し置かれまするやう願はしう存じまする。

始皇　おゝ、汝それ〲宜しきやうに、申し付けてよからうぞ！

徐福　辱う存じまする。然らば即刻御暇申上げまする。

始皇　早く立歸つてくれよ！

徐福　ははッ、殿下にも、暫くの程御暇をお願ひ申上げまする。

花陽　（徐福の眼を見入る樣にして）幼い者伴うての海路。よう賴むぞよ！

徐福　ようつく心得て居りまする。

（徐福靜かに白き道を上り行く……。）

（始皇、寂しく見送る。その後姿に淡き秋の日影寂しく注ぐ。）

（花陽夫人、悲しげに始皇の姿を見やる。）

（遠く、幽かに『雲氣の歌』響き來る。）

長城の影、かき暮れて、
世は闇となる、闇となる……

――靜かに幕下る――

ザヴィエーの晴着（一幕三場）

人

サン・フランソアー・ザヴイエー　日本へ最初に來た天主教の傳道師。

エヅーアル・ド・ガマ　葡萄牙商船々長。

大友義鎭（おほともよししげ）　豐後を根據として居た群雄の一人、其時二十三歲。

お八重の方　義鎭の愛妾。

戸次道雪（へつぎ）　義鎭の重臣。

臨名左馬　義鎭の扈從。

ザヴイエーの徒弟

葡萄牙人

俗博照

大友の一族、家臣、侍女。

時

西曆一五五一年（天文二十年）九月中旬。

處

豐後國日出（ひぢ）が中心になつて居る。

第一場　義鎭居城の天主閣

未だ天主閣と名づける程に形式は整つて居なかつたかも知れないが、望樓になつたり、城主の宴樂に用ゐられたりした城の最上層の室である。晴れ渡つた秋の午後の日光が暖くさしこんで居る。義鎭は愛妾お八重の方を話對手に酒を飮んで居る。幼い侍女が一人侍つて居るだけだ。戰國時代かと思はれる位閑寂だ。空中で話す二人の話がはつきり聽きとれる。

義鎭　あの猿は如何いたしたかのう。

八重　相變らず元氣でござります。

義鎭　左樣か、相變らずかな。

八重　少し元氣過ぎまして、困つて居りまする。

義鎭　なに困る、其方（そち）が困るなぞは面白い、如何したのぢや。

八重　少し戲れ樣（ざれやう）が過ぎまするので、人に嫌はれます。

義鎭　嫌はれてもよいではないか、其方一人が可愛がつてやつたら、猿も本望であらうが。

八重　いゝえ、それが可愛がられぬのでござります。もともとあの猿は妾の連れて參りましたものゆゑ、あの樣に

人も無げに振舞ふとの噂を聞きまして、不慾ながら松の間へ閉ぢ籠めて置きますると、又腰元共がからかひに參ります。猿は寂しい處へ誰か參りますゆゑ、人懷こく寄らうとする。腰元共は驚いて逃げようとする。猿もあわててひつかきます、とそれ、着物が裂かれた。猿も赤い着物が欲しいと見えると、ぱつと噂が立ちまする。

義鎭　はゝ……他愛のない。その樣なことを氣にして居ては、はゝ……氣の弱い奴ぢや、猿に着物を裂かれたと腰元が泣いたら、着物を調へて遣はしたらよいではないか。其方も欲しいか、ほしさうぢや、恰度今、此沖へ葡萄牙の船が來て居る。南蠻の織物でも調へて遣はさうか。（不圖何か重大な事を思ひ出した樣子で）お、大切な事を思ひ出した。道雪を呼ばねばならぬ。（幼い侍女に）これ、此の階下に道雪が居る筈ぢや、呼んで參れ。

（幼い侍女、默禮して降りて行く。）

八重　あの、道雪どのを何でお召になられます。道雪どのが猿を殺してやらうと、いきまいて居ることをお耳になされましたか。

義鎭　なに道雪が猿を、はゝゝゝ。一國の老臣が猿を相手にいきまくなぞと――はゝゝ。

八重　いゝえ、笑ひ事ではございませぬ、あの方の事ゆゑ、殺さぬものでもございません。

義鎭　あゝ、よいわ、よいわ、今これへ參らば聞いて遣はさう。

八重　ではその事でお召になられたのではございませぬか。

義鎭　いや、ちと密々の話があつてな。

八重　では遠慮いたしませうか。

義鎭　いや、其方には何を聞かせても差閊ない。（盃をとる。お八重の方、接穗なさに酌をする）

（其處へ道雪が上つて來る。）

道雪　（それへ手をつかへ）お召でございましたか。

義鎭　道雪、其方や、あの猿を殺さうといきまいて居るさうぢやの。

道雪　（斜にお八重の方を睨みながら）早お耳に達しましたか。

義鎭　では噂は誠かな。今も一國の老臣が猿をあひ手にしようかと笑つて居つた所ぢやが……

道雪　いゝや、殿、一國の老臣なればこそ、あの猿めを殺さうと申しまするのぢや。

義鎭　腹を立てるな、對手が猿ぢやよ。

道雪　いゝや、殿、人を玩べば、（お八重の方を尻眼に見て）德を失ひ、物を弄べば、志を失ふと申します。筑前の秋月、肥後の菊地、薩摩の島津と數へますると、九州

一圓を統べまするにも、一通りの事ではござりませぬぞ、此をわが根城と堅め中國に打つて出まするのは、更に強敵毛利と双を交へねばなりませぬ。内には德を布き外に双を磨ぐに片時も惜まにやならぬ時、秋の日向に盃手にして、猿の話とは何事でござります。

義鎭　道雪、實はその事ぢやよ。其方の樣につきつめてばかり居ては、よい智慧も出ぬであらうが。此の晴々とした秋の空を見ながら不圖思ひついたはあの葡萄牙の船のことぢやよ。

道雪　船が如何いたしましたか。

義鎭　八重、見張を申しつけい。

（お八重の方、下りて行く。）

道雪　先年鳥打の小銃を種子島に傳へたのはあの葡萄牙人であらうが、又あの商船には大砲を備へてある。あれこそ弓矢刀劍に優る屈竟の軍器ぢや、何とぞしてあれを諸國に先つて手に入れなば、これまでの軍法を以て如何程堅く備へようと、一壘一城を拔くは瞬く間のことぢや。道雪、如何ぢやな。

道雪　神策と存じまする。したが、軍法といたしましては、ちと卑怯の譏を受けませうかと存じまするが。

義鎭　なに、卑怯。なにが卑怯。刀劍のみの戰に慣れた時には、弓矢を用ゐたことさへ、こりや卑怯と譏られもしようではないか。旣に弓矢を用ゐる上は、小銃大銃を用ゐるに何の顧慮が要らうか。よし又われに於て、卑怯かと案じて躊躇ふ中に、島津は曲者、逸早く手に入れたら、何とならう。

道雪　御尤も、したが、如何して手に入れまする。先づ葡萄牙商船の船長に誼を結んで密にわが國へのみ、大砲小銃を傳へる樣に堅い契約をいたさねばなりませぬが、先づそれ程の深い誼が結ばれませうか。

義鎭　その義に當惑いたす次第ぢやが、……

道雪　最初南蠻の船が着きましたのは、薩摩の港でござりましたが、その商船がやがて鹿兒島には影も見せずなつて、平戶に入港する。平戶にもやがて跡を斷つて此別府の灣へ現はれた次第でござりますれば、長く誼を結ぶのは、こりや一通りのことでは參りますまいかと存じまする。

義鎭　その薩摩に着かずなり、平戶にも着かずなつたは何の爲めか、其方は探らせたことがあるか。

道雪　未だ其處までに思ひ及びませなんだが、此の商船のことならば、鹽名左馬と申す若侍が多少は心得のある樣に存じます。

義鎭　むゝ、扈從の左馬か。左馬を呼べ。

（道雪、柱の紐を引く、鈴鳴る。お八重の方顏を出す。）

義鎭　左馬をこれへ。

（お八重の方、默禮して下りる。）

義鎭　左馬も、下に居る筈ぢやのう。

道雪　御意にござります。見張は左馬でござりませう。

義鎭　あれは左門の遺子ぢやつたのう。

道雪　入田親眞謀反の討手に命を落しました左門のひとり兒にござります。

（左馬上つて來て、下座に控へる。）

左馬　お召にござりまするか。

道雪　お召ぢや、南蠻船のことで、お尋ねがあるのぢや。

義鎭　むゝ、左馬。あの南蠻船ぢやな。あれが、薩摩に入港して長續きせず、又平戶の入港も續かず、此の別府の灣へ參つたのは何が原因ぢやな。

左馬　詳かには存じませぬが、薩摩が、天主敎の傳道師を逐ひまして以來、ふつと南蠻船は姿を見せなくなつたさうでござります。

義鎭　平戶の際は如何ぢやつたな。

左馬　平戶も同樣に傳道師を逐うて以來、南蠻の船は入港せぬやうになつたとのことにござります。

道雪　むゝ、さては、南蠻船は傳道師の後を追ふものと見えまするな。天主敎の傳道師は南蠻船の細作でがなござりませう。

左馬　細作ではござりますまい。葡萄牙人はおほかた、此の天主敎の信者なやうにござりますれば、その敎の傳道師を助け度い心掛はござりませう、傳道師も亦商船の爲めを思ひ、互に扶け合ひますものかと察しまする。

義鎭　左馬の申す通りであらう。してその傳道師が、鹿兒島を追はれ、平戶を追はれたは、何か企みでも致した爲めかな。

左馬　いゝや、左樣ではござりませぬ。佛敎の僧侶が、天主敎の用ゐられまする爲め、自づと疎ぜられます仕儀となり、敎の敵と、そねみ激しく、彼の天主敎を重く用ゐるに於ては、徒黨を結んで不逞を企てまじき勢に、國內の亂を賭けて、天主敎を保護するまでもあるまいと、傳道師を追ふことになりましたやうに聞き及びまする。

義鎭　むゝ、よく分つた。盃を遣はさう。

（左馬謹んで受ける、道雪が酌をする。乾して默禮をする。）

義鎭　下つてよからう。

（左馬默禮して下りる。）

義鎭　（左馬の後姿を見送つた後）したが、道雪、傳道師を用ゐるときは、僧侶のすねるは、こりや知れてあるが、僧侶の騷ぎを賭けてまで、傳道師を手に入れたものであらうか。

道雪　左様にござります。僧侶が謀反を企てるといたしまして、その兵力は……恐れるに當りませぬが、只恐れまするは、佛徒を虐げたとあらば、民心に安からぬ波が立ちませうかと存じまする。

義鎭　兵力は恐るゝに當らぬか、それならば案ずるに及ばぬわい。民心の動搖は佛敎に代る天主敎の敎を以て靜められう。

（階下より引きし繩にて、鈴が鳴る。）

（道雪立つて階下を覗く。）

道雪　お八重の方でござります。（義鎭に報告する意味で云ふ）

義鎭　呼び上げい。

（道雪、下に向つて合圖をする。）

（お八重の方、遠眼鏡を持つて上つて來る。）

八重　御覧なされませ、門前は人の山でござります。

義鎭　なに、人の山。（立つて、左手の窓から見下ろす）何にさま夥しい群衆ぢやのう。何事であらう。

（お八重の方が近づいて、遠眼鏡を渡す。義鎭取つて、下を見おろす。）

八重　黑い着物を着た乞食のやうな男が、大勢を前にして何か說き諭して居るげにござりまするが、何者でござりませう。

義鎭　何さま、みぐるしい姿をした男ぢやのう、坊主の大道說法かな。道雪、見やれ。

道雪　（一人坐つて居たが、促されて、漸く立つて來て、同じ方向を見る）なか〱の多勢にござりまするな。

義鎭　遠眼鏡をつかはさうか。

道雪　いや、齡（よはひ）のせゐか、よく見えまする。

義鎭　何さま。あの黑い着物を着た男は何者かの。なにか手をあげたり、振つたりする所はちと、常の人とは違つて居るやうぢやが……

道雪　狂人（きちがひ）でござりまするかな。兎に角御門前を騷かせまするは不屆な奴でござりまする。

八重　道雪どの、殺されては如何でござります。

道雪　あれは人間でござります。

八重　人間ゆゑ、お殺しなされませぬか、猿ならば、今頃はお殺しなされたことでござりませうな。

道雪　殺せとの仰せでござりますか。

八重　殺せとは申しませぬ、なれど、猿よりむさくるしいあの人間を、何故（なぜ）あのまゝになされます。猿が、人を騷がせたとて、殺さうといきまく道雪さま、何故あの、むさくるしい人をそのまゝになされまする。今にも、あの人なだれが打つて、門を破つて流れこみませうぞ。

義鎭　（遠眼鏡を取りて二人の爭を見て居たが）道雪。あ

のむさくるしい男を追ひのけい。

道雪　畏つてござります。（そゝくさと、降りて行く）

八重　（その後姿を見送つて）とう〳〵參りました。堅くるしいお人でござりまするな。堅くるしい人が、むさくるしい男を追ひのけます。……日ざしが少し淸らかになつて參りました。

義鎭　おゝよい日よりぢやなあ。其方(そち)には絶えず會ひながら、まだ沁々と會はぬ心がいたす。……其方(そち)の眼を見て居ると、うるんだ樣なその瞳が、絶えず搖がぬ樣に見えながら、動いて居るのは何の爲めぢやな。

八重　それは、あなた樣のお心が、動かぬ樣で、絶えず動いて居ろ爲めでござりまする。

義鎭　動いて居るか。只一筋を指しながら、何故斯ゥ搖ることぢややら。（盃を取る、お八重の方、酌をする）せめて、其方(そち)に會うて居る時、吾にかへつたやうな心地がいたす。

八重　わらはは貴方樣のお前に居ります時、心が激しく搖れまする。あなたについて搖れまする。

義鎭　（驚いた樣に）むゝ、さうぢや、……さうであらう。水と舟ぢや、水は搖れながら舟は靜かに動かぬと思うて居ようが、はゝゝゝ、舟は搖いで居たのぢやのう。

（遠く火砲の音、同じ間を置いて四つ。）

義鎭　（二つ目に）何の音ぢや。（三つ目に）葡萄牙の船ぢやな。左馬は居るか。左馬を呼べ。

（お八重の方、立つて綱を引く。鈴が鳴る。）

左馬　（駈け上つて來て）お召にござりますか。

義鎭　今の物音を聞いたか。

八重　あの狂人(きちがひ)の乞食どのが、――。

左馬　葡萄牙船より打つた大砲の響かと存じまする。

義鎭　さもあらう。して、葡萄牙の商船は何故大砲を打つたのであらう。其方は如何(どう)思ふ。

左馬　お聞及びにござりませう。近頃八幡船と申す海賊の輩、諸方を劫略致す由にござりますれば、彼の南蠻船を脅やかしたるにはあらざるかと、憚り乍ら存じます。

義鎭　むゝ、さもあらん。……其方、精兵を率ゐて、彼の葡萄牙船に漕ぎつけ、八幡船の者共ならば、其方が智略にまかせ、追拂ふべし。若し又八幡船ならざる際は、其方の才覺に任せ、如何樣にも取計へよ。先程の話は聞いたであらうな。其方の胸に任せ置くぞよ。

左馬　（感激して涙ながらに立つ）

八重　左馬どの。

左馬　（平伏し、平靜な態度を取りて立ち上り、靜かに下りて行く）

（義鎭、遠眼鏡をとりて立つ。）

（お八重の方、遠眼鏡を添ふ。）

義鎮（見下ろして）門前は靜かになつたやうぢやのう。

八重（奥の方を遠眼鏡にて見ながら）船は靜かでござりまする。

第二場　葡萄牙船の船室

舞臺を狹く劃つた船内の一室で、天井も之に釣り合つて低い。正面の壁は柔かく明るい色の布片で張つてゐる。二つの方形の窓を通して日の明るくさした海が見える。窓と窓との間に大きい金の十字架がかゝつて居る。左手の壁にある扉は船内の通路に開き、右手の壁の扉は他の船室に通じて居る。眞中に大きな卓子があつて、これだけ先づ目につく程派手な色の、厚く重い織物が床まで一ぱいにかゝつて居る。對ひ合つて椅子が二つ。正面の壁に沿うて右手の隅に寄る樣に長椅子が一つ。壁も天井も壁と同じ色。

左手の奥で多勢の唱歌の合唱が聞える。

イスラエルを率ゐて埃及人の中より出したまへるものにかんしやせよ。

其憐みは永久に絶ゆる事なければ也。

臂をのばし强き御手をもてこれをひき出し給へるものにかんしやせよ。

其憐憫は永久に絶ゆる事なければ也。

此合唱の續いて居る間に聖師ザヴイエーと船長エッツーアル・ド・ガマとが左手の扉から入つて來る。聖師は古びた黑い長い法服を纏うて居る。その髮はもう白い。船長は鄭重に右手の椅子をすゝめ、自分もかける。

聖師　種々と鄭重な迎のお催し嬉しう存じまする。

船長　羅馬法王の使節に對する儀式として至らぬことを恥ぢまする。實は海路よりお越しあることゝ存じ、海上にのみ氣を配らせて置きました所、マルチュー、ローラン、ベルナルの三人が見えられて、聖師には只今日出へお着きとの事に、取敢へずお出迎に及びました始末、心ありながら、及ばざりし仕儀ゆゑ、お宥しを願ひまする。

聖師　海路は遙か捷徑でもありますことゆゑ、船でとは存じましたが、もはや印度へ出立と定つた上は、日本に種を蒔く折は又あるまいと存じまして、陸路をとつて、路路傳道をして參つた次第でござります。

船長　それは殊勝なことでござります。先程も此城下で御説法のやうに承りましたが……

聖師　はゝ、追はれました。府内城の前に立つて説法をして居りますると、集まつた群衆の中で、妖術師、惡魔

めと罵つて石を投げるものがござります。佛教の僧侶が、先だつて觸れ廻つたものと見えまする。此の難には度々遭つて居ります事ゆゑ、ひるまず說法を續けて居りまするると、罵る聲はなか〳〵絕えず、一人ならず二人ならず石を抛つ。瓦を打つ。折から城內より城主の家來と見えまして、十人程の侍が表はれて、門前を騷がす不屆者と呼んで、群衆を追拂ひました。說法をする對手を失つて、已むことを得ず、引き上げました。海へ近づいて、大小の旗の飜る船の姿の見えました時は、故鄕へ辿り着いた時のやうに、心弱く淚が湧きました。したがあの時、大砲の音が聞えましたが、あれは……？

船長　あれは聖師をお迎の禮砲でござります。

聖師　おゝ、（船長の手を握つて）重ね〴〵のお志辱う存じまする。

（沈默。波の音幽かに聞ゆ。）

（波の音を聞耽る樣にして）したが、もはや盛大な儀式は御無用になされませ。手をとり合へば心へ心が流れまする。その上何の儀式がありませうぞ。

船長　御尤もでござりまする。聖師にはもはや儀式は無用でござりませうが、信仰の薄いものには中々儀式が大切でござりまする。アヴェ・マリアの鐘が莊嚴になつかしく鳴り響きまするので信徒には御膝に縋る心がしみ〴〵湧いて、祈禱に急ぎまする。あの鐘が儀式かと存じまする。信徒は祈らねばなりませぬ。祈らねば祈る心が起りませぬ。祈りも儀式でござります。盛大な儀式を行はねば聖師に對しまする感謝の心が至りませぬ。

聖師　デオスに對し奉る儀式は嚴肅の極を盡さねばなりませぬ。嚴肅な儀式によつて、信徒は淸らかな恭儉な心に入つてデオスの御光に浴することが出來まする。信者が此の儀式を自分に求めるやうになりましては、恭儉な心を失つて、デオスの御光に浴することが出來ませぬ。デオスを忘れて、儀式を求めては、此の世の榮華を求めるも同じ心でござりませう。

船長　もとより、デオスを忘れての儀式ではござりませぬが、信徒が祈る爲めに儀式がなくてはならぬものでござりますれば、デオスの光を受けて道を說く傳道の聖師には又道を說く儀式がなうてはと存じまする。聖師はあまり貧しき姿で、道に立つて說かれまするゆゑ、瓦石に打たれ、又は追ひ立てられますものかと、お痛はしう存じまする。

聖師　いや、恭儉、貧窶、忍耐は、デオスの光を身に浴びられた基督の三德でござります。此の三德を說く道師は、又貧しき姿をし、恭儉な心を行ひ、瓦石にも耐へるのが、說くと共に身を以て行ふものでござります。傳道

の儀式はこれでなければなりませぬ。

船長　でも追はれましては傳道の便もござりますまい。道に立つて說法をなされうより、此の豐後の城主にお會ひなされ、城主の心を導きなされましたら、上に倣ふが此の國の風習でござりますゆゑ、堤を切つて水を流す樣に、臣下の間に信徒は一時に增して、敎は波の樣に擴がらうかと存じまするが、……

聖師　一國の主は心の急しく散ります者ゆゑ、中々誠の信仰には入りませぬ。それ故、道に立つて貧しき者の間に、誠の信仰を植ゑつけようと努めましたが、信徒を增し、敎を弘めまするには城主を說くが、誠に捷徑でござります。したが、城主に近づく便がござりませうか。

船長　ござります。先程打つた禮砲が、聖師を城主に近づけます儀式の鐘でござりまする。

聖師　それは又思もよらぬお說ぢやが……

船長　もと〳〵此の豐後の城主に限りませず、此の島の城主達は葡萄牙船に誼を求めて居りまする。それは城主と城主と互に爭うて居りますゆゑ、葡萄牙より自國を富まし、自國を强うするものを得て、敵に勝たうと、絕えず此の商船へも近づく折を求めて居りまする。此の禮砲を聞いて必ず好き折と近づき來るに相違ござりませぬ。其時、先程の大砲は、聖師を迎ふる爲めの禮砲と說きますれば、始めて聖師の尊嚴を知つて、聖師を城へ招待するは火をみるよりも明らかでござります。

聖師　重ね〳〵のお心遣ひ辱う存じまする。したが、城主より使の者が參りませうか。

船長　必ず參りませう。若し又使の者が參りませずとも、此の禮砲に驚いて、不審をたゞす爲めに近づき、此を機に誼を求めるに違ひござりませぬ。聖師招待は定まつた運にござりまする、が此の招待についてお願ひがござります。その古びたる法服の代りに華麗な服裝をお召しあるやうお望み申上げまする。

聖師　そのお勸めは容れられませぬ。十二使徒も王者の門に入りましたが、王者の門に入る爲めに綠の衣を纏うた例はござりませぬ。使徒が若し十字架より他の具を用ひて傳道いたしましたら、世界各國の民を悉くその信徒としました時、その敎は、敎の本を失ひませう。基督は貧しき者は幸なりと宣うて、貧しさを基として敎を開かれた。心に我のなきことを根元として經を造られた。日本に於て敎を弘むるに當つても、此の本を失つて何となりませうや。

船長　御尤もの御說にござりまする。御尤もではござりまするが、日本の人は心の尊さよりは、先づその外見によつて人を判じまする。若し聖師そのまゝの姿でお越しな

されましたらば、城主の周圍の人々が、一向に鄙しめましう。引いてその宗教までも卑しいものと思ひ謬らうかと恐れまする。

聖師　その心を矯めねばなりませぬ。

船長　それは近づいてお說きなされまする時のことでござりまする。只管に世界の財寶と、盛大とのみ求めて居りまする日本人の前に、乞食と代らぬ姿にて、何物も持たずに立ちましたらば、日本の人は、自分の心を以て、此の鄙しい姿した人は金銀財寶を求めに參つたもの、宗教は人の財寶を捨てさせて、わが物にしよう爲めの敎と思ひ計るかも存じませぬ。

聖師　それは、日本の人が金銀財寶が欲しさに參つたと疑はうとも、金銀財寶を捧げた時に拒んで受取らねば、その疑は忽ち晴れませう。

船長　それは近づいての後のこと、近づくまでの尊敬を先づ得ねばならぬかと存じまする。禮砲を打たねば、日本の人は近づきますまいかと存じます。

（聖師は默して、迷ふが如く、立ちて、靜かに歩み廻つて居る。）

（波の音が耳立つ。）

（船手の從者が左手の扉から入つて來る。）

從者　只今、豐後の城主より使の者が來りました。

船長　城主より使の者。

（聖師立止りて、船長を見る。船長聖師を見やりて微笑す。）

從者　先程、大砲の音が聞えましたので、海賊の類でも此の商船を襲うた爲めではあるまいかと、多勢の侍を連れて見舞に參つたと申して居りまする。

船長　して、その使に、先程申しましたやうに、聖師お迎の爲めの禮砲と解いて聞かせたか。

從者　聞かせました。使の者は驚いた樣子でございましたが、何か考へました後、その聖師に紹介が願ひ度いと申し出でましてござります。

船長　むゝ。さうあらう。その人をこれへ御案內いたせ。

（從者左手の扉より退く。）

船長　聖師、豫定いたしました通り、參りました。

聖師　御計畫に敬服いたしまする。

船長　では計畫をお用ゐ下さりませうか。

（聖師默つて居る。）

船長　兎に角、只今此室で、お會ひなされましては、計畫が無になりまする。暫く（右手の扉を指し）次の室でお休み下さいまするやうお願ひいたします。

聖師　でも、その使の者が紹介を賴んだとやら承りましたが……。

船長　いや、今、その者にお會ひなされましては、すべて水の泡になりまする。何卒暫く次の室へ、御案内申上げます。

（船長手を執りて、右手の扉を開いて、聖師を導く。）

（舞臺空虚、波の音。）

（從者、鹽名左馬を案内して左手の扉より入つて來る。誰も居ないので、一寸不審する。默つて、左馬に椅子をすゝめる。左馬、頭をさげて禮を云ふ。）

（船長、右手の扉から出る。）

（船長、晴れやかな笑ひ顏して、左馬の手を執りて握手をする。）

船長　船長エヅーアル・ド・ガマでござります。

左馬　豐後日出の城主大友義鎭の使者鹽名左馬と申します。

船長　鹽名左馬？

左馬　左樣にござりまする。

船長　御丁寧うござりまする。

左馬　お恥かしう存じまする。海賊の襲來かと存じまして、却つて御船中を騷がせましたる罪　平にお宥しの程を願ひまする。承りますれば先程の大砲は禮砲とやら、さ程尊き聖師の城下をお過ぎなされたことも知らず、お出迎も致しませず、失禮に過ぎましてござりまする。

船長　（微笑しながら）御存じなければ、失禮にも當りますまい。

左馬　聖師はやがて印度へ御出立とやらに承りまするが、聖師御出立の後は、御船も此の灣へお立寄り下さらぬことゝなりませうや。

船長　何故左樣なことをお尋ねになりまする。

左馬　實は、聖師の鹿兒島にて御説法の折は御船も鹿兒島へ立寄り、平戶に御説法の折は平戶へ立寄られ、聖師の御出なき處には御船も立寄られぬかに察しましたれば、斯樣にお尋ね申上げました譯でござりまする。

船長　その事でござりまするか。吾々は異國人にて、日本の國法も詳しくは知らず、又道德も知りませぬ。若し此の天主敎を信ずる人々ならば安んじて取引が出來まするが、此の天主敎を追ひ退けまする土地では、如何なる無法に會はうも測り兼ねまするゆゑ、船も自ら立寄らぬ次第でござりまする。

左馬　では天主敎を信じまする土地ならば、安んじて御取引なされまするか。

船長　左樣でござりまする。

左馬　（深く決心した樣子で）主人大友義鎭に於きましては、豫ねてより天主敎の敎に眼を注ぎ、如何にもして、その敎を受けたき望を抱きながら、未だ良き導師を得ぬ

を憫みに存じ居りましたが、此度、ザヴイエーの聖師のお立寄りこそ誠に又なき機會と存じますれば、即刻にも御來城下されまして、御傳道のほど願はしう存じまする。直々聖師に見えて御願ひ申上げ度う存じまするが、御紹介下さるまいか。

船長　聖師には山口より遙々の御着にて、只今御休息でござりますれば、後刻お達し申し上げませう。

左馬　御來城下されませうか。

船長　傳道の爲めでござりますれば、喜んで參られませう。

左馬　何日御來城下されませうか。

船長　今日にても參られませう。

左馬　ならば、御同船仕り度う存じまするが。御取計の程願はしう存じまする。

船長　先程の處にて暫くお待ち下さりませ。直ちに御返事を申上げませう。

（左馬、一禮して左の扉を出る。）

（長椅子にかけて居た從者、ついて出ようとする。）

（船長、手で呼び止める。）

船長　（從者に向つて）聖師の晴着の用意をいたせ。黒羅紗の法衣、綠の天鵞絨の頸飾。金總つきの袈裟、肩にかける帶形の金鎖、羽飾のついたる僧帽、落ちなく用意いたせ。次に五人の船の者に各美服を纏はせ、一人は聖書の入りたる白緞子の袋を持つこと、一人は聖母の像を包みたる緋綸子の袋を持つこと。一人は金林檎の附いたるベンカラの杖、一人は黒天鵞絨の靴、一人は涼傘を持つやう申しつけい、更に先程迎に立つた三十人の者には美服を纏うて待たせよ。猶、喇叭と笛とを忘るなよ。

（從者默して、一禮し左手の扉から出る。）

（船長、右手の扉に近づき、開いて一禮する。）

（聖師が靜かに出て來る。）

船長　聖師、晴着をお着け下されまするか。豐後の城主は喜んでお越しを待受けて居りまする。

聖師　御厚志辱う存じまする。

船長　晴着をお着け下されまするか。

聖師　（苦悶の色を表はした後、十字架の前に跪く）

（船長左手の扉を開けて右手を高くあげる。同時に喇叭と笛との音樂が起る。）

第三場　豐後日出城内の書院

西本願寺の書院に似た造りの書院で、右手の廊下の外は橙樹園になつて居て、之を透いて月影が室へさしこんで居る。橙樹園の奧の燈の見える室の方では多勢の人のけはひがするが、此の書院は靜かで暗い。

暫くすると、十人程の侍女達が燭臺を手にして入って

來る。お八重の方が、それを指圖して、程よく置かせ、左手に牀几を立てさせる。其處へ僧博照が入つて來る。

博照　お八重の方樣、ちと折入つてお願ひがござりまする。

八重　(忙しさうに) 見られます通り、不意の客來にて、上を下への騷ぎでござりまするが、又の折に……

博照　その客來についてのお願ひでござりまするが……

八重　(侍女達に) 其方達二人はこれに殘つて、餘のものはお手傳に立て。

(侍女達の中二人殘りて坐し、他の者は退く。)

博照　あのデオスめの說法に、大友氏にはいたく魅られたやうに見受けましたが、あれは國を危くする原因でござりまするぞ。デオス奴、魔魅の類と交通して親しく語を交へ、幻術を以て愚人を惑はし、財寶を棄てしめ、終には城壘を毀ち、國を亡ぼすに至ると承つて居ります。

八重　でも先程の說法は、わらはなどにも、ひし／＼思ひ當る程、理深う思はれましたが……

博照　それが彼のデオス奴の幻術でござりまする。あの妖辯を以て人の心を蕩かし、次第に近づいて財寶を棄てさせ、侍妾を追はせ、驕奢の風を戒めて次第に權勢を殺がせませう。さて權勢を殺ぎ、侍妾を追はせ、財寶を棄てさせ、浮世の榮華を悉く離脫させて、自ら次第々々に之に代つて捨てたる財寶を積み上げ、抛ちたる權勢を集め、自ら王者の力を摑まうとする惡心でござりまする。御覽ぜられたか、口に榮華を戒めながら、あの身に纏ふ美服は何事で、ござりまする。口に驕を戒めながら、あのものものしい行列は何事でござりまする。今近づかうとする始めに警められずば、お八重の方には、やがて追はるる憂きめを見ませうぞ。

(お八重の方思に沈む。)

(笛と喇叭の音。)

侍女　やがてこれへお渡りでござりませう。

博照　お八重の方。必ず、主君に申上げ、彼のデオス奴を近づけぬやう、なされませ。

(蔭に身を潜ませる。)

(左馬の案内で、ザヴイエー聖師、船長ガマ、聖師の弟子、葡萄牙人從者多勢、靜に出て來て、牀几にかける。)

(大友義鎭、社祚姿、道雪、其他の侍臣、葡萄牙人と同じ數、附添うて出る。)

(お八重の方、侍女迎へて、座につく。)

義鎭　(聖師の前へすゝみ、疊へ手をついて一禮し) 聖師今日の御說法、誠に心にしみて辱う思はれました。義鎭生れて二十餘年、支那聖人の儒敎、又印度聖者の佛敎については、幾百度聞きましたが、今日聽聞いたしました御說法の加く高大にして、道理に合ひました說はござり

ませぬ。實に聖師の一言一語、朝の露の樣に爽かに心に落ちて、心の華がほの〴〵と覺めて行く樣に思はれました。既往幾百年この國人を、光もない暗い中に、何故に沈ませてお置きなされたかと、デオスの御神にお問ひ申上げ度い程でござりまする。

聖師 （兩手をあげて）全世界の創造主、デオス上帝よ、冀くは此の城主上帝の在すことを知つて、上帝を尊崇し、理法を守り、他日天堂に生れて、上帝の御許に至りまするやう、御眼を注がせ給へ。

義鎭 辱うござります。辱うござります。……（左馬を顧み）左馬、今は聖師をお招ぎ申した其方の智慮、若年に珍らしき拔群の働き、追つて恩賞の沙汰に及ばうぞ。

左馬 はゝ、辱うござりまする。

八重 左馬どの、先程出立の折は、血の雨降ることと案じましたに、穩やかに濟みまして、お芽出度う存じまする。

左馬 辱う存じまする。これ皆、これに渡らせらるゝ船長殿の御親切なる取計ひによつてゞござりまする。

船長 城主の御望、聖師の御望、すべて望が落ち合ひましたので、圓かに事が纏りました。誠に喜ばしう存じまする。上帝の御思召に添うたのでござりませう。此の上は、聖師には、印度へ御出發まで、度々お越しあつて、御說法なされまするやうおすゝめ申上げまする。

義鎭 此方よりもお願ひ申上げまする。

（潜んで居た博照、憤懣を抑へかねて此の席へ表れる。）

博照 お八重の方樣。先程お願ひの趣、何卒お聞に達し下さるやうお願ひ申上げまする。

八重 其方より直々主君へ。

博照 何卒、お聞きに……

義鎭 何事ぢや？

博照 主君、憚り多けれど、信教の義は何卒僧侶に取計ひを仰せつけられ度う存じまする。

（すべての視線、僧博照に集る。）

義鎭 いゝや、此方の腑に落ちるによつて、その敎を受けるまでぢや、其方達の指圖を待たうや。

博照 あゝいや、主君、恐れながら、國を治められまするは主君の職分かと存じまするが、宗教の一大事を議するはこれ佛弟子の職分と存じまする。

義鎭 なりや、予に宗教を論じ事を斷する才がないと申すか。

博照 恐れながら、主君には宗教を論ずる才を備へさせられうとも、宗教に關る事は、僧侶に計つて後、決定なされまするが、過の少なからうかと存じまする。

義鎭 （怒氣を含んで）なに、予を文盲なりと申すか。

道雪 主君、お靜まりなされませ。これに聖師も渡らせら

れまする、船長も渡らせられまする。な、斯様な人を對手にお腹立ちめされては主君の品格を傷つけまする。

（義鎭、聖師を見、船長を見て、怒を鎭める。）

八重　博照どの、左程に仰せられまするなら、聖師と直々に問答なされては如何でござりまする。

博照　願うてもなきこと。（聖師の前に進んで、つゝ立つたまゝ）先程よりの生ぬるき説法聞き飽きた。物蔭より見れば、上帝を呼ぶごとに、手をあげられた樣ぢやが、上帝デオスとやらは、青空にでも居られまするか。

聖師　佛道の神は何處に居られまする。

博照　（少し焦れて）即身即佛、汝の眼前にあり。

聖師　佛道の神は、猿の樣に歯をむき出して怒り狂ふものと見えまするな。

博照　（急所をつかれた樣に怒つて）愚物奴！（聖師の顏に唾を吐きかける）

（葡萄牙人皆立つ。）

義鎭　（腹に据ゑかねて）左馬、あの坊主奴を引出せ。

（左馬、他の侍臣に目配せし、共に立ちて、博照を引出す。）

（義鎭、お八重の方、道雪も附添うて聖師の前に進み、疊へ手をつく。）

義鎭　初めてのお招ぎに、斯樣な無禮を働かせまして、お詫びの言葉もござりませぬ。屹度彼奴を成敗いたしまする。

八重　直々に問答などとすゝめましたが、過のもと……

道雪　誠に重々の不行屆、罪は手前にござりまする。命を棄てゝも御詫を……

聖師　いや〳〵、左樣にお詫びなされては、却つて痛み入りまする。傳道には斯程のことは度々ござりまする。

道雪　寛仁大度の御德、只々恐入つてござりまする。

八重　（聖師が腹立ちたる樣子もなく、袖で顏をおし拭つて居るのを見上げる）別にお腹立ちの御氣色もなく……

聖師　惡に敵することなかれ、人、汝の右の頬をうたば、左の頬をもこれに向けよ、と基督は訓へられて居りまする。

義鎭　日本に數ある武將の中にも斯程の德を備ふる人はあるまい。堪忍の德でござりませうか。

聖師　忍耐と申しませうか、忍耐は基督の三德の一つでござります。

八重　あり難い御教でござりまする。佛教では、女は罪深いものとして、卑められて居りまするが、天主教では如何でござりませう。

聖師　信心篤ければ、女も決して卑むるやうなことはござりませぬ。

八重　女も？

聖師　左樣でござりまする。

八重　有難い御教でございます。女も信者になることが出來まするか、……罪深い女も信者になられまするか。何ぞ、その證(しるし)を頂き度う存じまする。

聖師　それが、此の國の習俗(ならはし)でござりまするか。

八重　習俗ではござりませねど、證(しるし)がござりますれば、御證(みしるし)があれば、猶々堅く信ずることが出來まする。

聖師　さらば、此の袈裟をまゐらせませう。

八重　（袈裟を受け取り）　辱うござりまする。

聖師　これは、此方(こなた)へまゐらせませう。（肩にかけた金鎖を取つて義鎭に差出す）

義鎭　（受取つて）　辱う存じまする。

（道雪は頻りに葡萄牙船長と話をして居る。）

八重　恐れながら、獸も、御教の光に觸れることが出來ませうか。

聖師　獸(けもの)？

八重　わらはの飼ひ置きまする猿がござりまする。腰元の美しい着物を見ては縋りつきまする哀なものでござりまする。御教の光に觸れることが出來ませうなら……

聖師　教は禽獸にも及び度いと存じまする。

八重　何かお遣し下さりませうか。

聖師　おゝ此の頸飾(くびかざり)を進ぜませう。

（頸飾をとりてお八重の方に渡す。）

（其處へ左馬が歸つて來て跪く。）

左馬　彼者は囚獄(ひとや)に繋(つな)ぎましてござります。

義鎭　おゝ大儀であつた。

聖師　おゝ左馬どの。（何か與へようと身のまはりを探す）

船長　（道雪と小聲で話して居たが、聖師が次第に身のまはりの飾を剝いで居るのに、氣づいて驚き）　聖師。ザヴイエー聖師。

聖師　（冠つて居た美しい羽飾のついた帽子を脫つて）　左馬どのこれをまゐらせう。

（飾を剝いで門前に立つて說法した時と同じ姿となつた聖師を見て、並み居る侍臣等の間に、『乞食』『門前の說法師』『デオス』などの低い聲がざわめく。）

道雪　（船長が聖師に氣をとられて居るのに氣づいて、聖師を見上げて、はつとおどろき）　門前で說法した乞食……

義鎭 八重　（驚いて）　先程遠眼鏡で見た門前の？

（聖師、左馬に帽子をとらせようとすゝみ出たが、此の聲に驚いてはつとしてわが身のまはりを見まはし呆然と佇む。）

（葡萄牙船長苦々しい顏をして聖師を見る。）

――靜かに幕が下る――

（大正八年十二月作）

林和篇

三右衞門の賣出し（一幕二場）

人　物

白輿三右衞門　　敵をもつ俠客
深見重左衞門　　同夜泊り合せた客
安井數右衞門　　三右衞門の敵
同　廣右衞門　　同
湯　女　おはつ、おさだ、とみ、りん、あやめ
　湯の內儀其他

場　所

赤坂氷川の丹前風呂あやめ湯

時　代

寬文年間の或夏の夕ぐれ

一

舞臺は赤坂の氷川に名高かつたあやめ風呂の上り場で大きな座敷を二つに仕切り、中に廊下を隔てゝあり、浮世繪風の屛風など取廻はして宛然靑樓の如き感じを與へる造りである。

幕初から湯女とか比丘尼とか呼ぶものがあつて、これは風呂屋ではあるが、一種の遊女屋稼業であつた。あやめ風呂は卽ちそれで、夕刻からは風呂場を閉ぢて、湯女は皆脂粉を粧ひ、美しい衣服を着飾つて客をあしらつた。座敷はやゝ高目の二重屋體で、前面は庭になつてゐる。

時は寬文年間、或る夏の夕ぐれで、靑簾の影にはもうとくに灯がちらついてゐる刻限、上手の座敷には膳に向つて靑髯の重左といふ武家出の俠客が、異形な風俗でチビリ〳〵と杯をかたむけてゐる。

重左　おい、こら、――（と手を拍ち）誰も酌の女はをらんのか。

（と、呼び立てる。奧から「はい――」と長く返辭を引いて湯女おりん（十六七）が急ぎ出て來る。）

りん　なんぞ御用で――。

重左　なんぞ御用どころではない。銚子がみんな輕くなつた。それに、灯が暗い。おつと待つた、それから膳の上の皿も椀も、日照りの沼で目高一疋見當らぬわ。

りん　はい、はい、かしこまりました。（と立たうとする）

重左　待て、待て。もう大抵のものでは腹の蟲がムカ〳〵して承知せない。此上の獻立には土龍の汁か、蟇の膾か、さなくば蛇鼠の蒲燒、蚯蚓の鹽辛、蜈蚣の吸物、なんで

もよいから變つたものをもつて來いと早く云へ。

りん　は、はい。

（と、小女は驚きの眼を見張つてあたふたと去る。）

（下手の座敷には白輿三右衛門と云ふ色の生白い神經質たちの町奴が、湯上りの浴衣のまゝで蒔繪の立鏡の前に坐り込み、これもおりんと同じ年輩の小をんなおさだに髪を梳らせてゐる。）

白輿　いやも、とてつもねえ御託を並べやがる。あれはいつも來る客か。

さだ　はい、毎晩のやうに見えてゐます。

白輿　なんといふ男だ。

さだ　青髯の重右衛門とも云ひまた一口に髯の重で通つた武家出の伊達衆、一寸見ると强らしい面をしてゐますが、弱いものをいぢめたことはありません。

白輿　うむ、あれが聞き及んだ髯の重か。では、このごろお初に馴染みをかさねて來るのだな。

さだ　さ、お前には言ひかねるが、……

白輿　なんの遠慮があるものか。お初は俺一人の女といふ譯ぢやねえし、云はゞ此のあやめ風呂の一枚看板だ。（と、一寸暗い顏をする。）

さだ　（慰め顏に）　さ、そのお初ねえさんが、お前のお越しゆゑ、今日はちよつとも重さんのお座敷へ出ないので——。

白輿　それで、あの客が不機嫌だとでも云ふのか。然ういふお初女郎は、俺の座敷へもさつぱり天降らねえぢやアねえか。

さだ　あら親分、そんなことを云ふものぢやアありませんよ。もう先刻の拍子木で上り場の客衆は皆んな歸つた筈ですから、おツつけ此處へまゐりますよ。

白輿　とか何とか云つて焦慮される奴さねえ、（と、後ろを振向きながら）いや、どうも世話になつた。

さだ　親分、髪梳きも手がかはるとお氣味が惡いでしよ。

白輿　なあに、お蔭でさつぱりしたよ。これは落し紙のおしるしだ。

（と、纒頭を與へて、立上り座敷の外部を不安な眼附でギョロ／＼と見廻はす流し場で若衆の聲が一寸かすれて、幽かな歌三味線になる。）

白輿　隣りの客はいつの間にか寢たと見えて、白河夜舟の大いびきだ。

さだ　ほんとに罪のないお人だわ。

白輿　（何となく落つかない態度で、）おれも一日でいゝから、あんなのんびりとした氣になつて此の世の中が暮して見てえ。

さだ　え、何か有仰つて？

白輿　なあに、こつちのことだよ。
さだ　では御免下さい。直ぐお初ねえさんに然う云ひますわ。
白輿　まあ、早く酒をつけてくんな。
（と、四邊を片付けておさだ去る。夕暮から催してゐた空合が妙に濕ぽくなつて蛙の聲が徐かに聞え出す。三右衞門は敵のことを心中に描いて、柱に凭り深い溜息と共に沈み込む。そこへ、足音を竊むやうに徐かにお初が入つて來る。この時代の浮世繪に見る一種のエロテイツクな面貌、容姿。これを見もせずに、三右衞門は空想から驚きさめて矢庭に身構へる。）
はつ　まあ、仰山な！　ほゝゝゝ、わしの姿が敵のやうにでも見えたかえ、お前はこの頃よつぽど氣が焦立つてゐると見える。
白輿　あゝお初か。（と初めて吐息をつき）全く我ながら愛想がつきる。假りにも白輿三右衞門といふ男を賣る身が、寢ても起きても物の怪に憑かれたやうに氣の落ちつかねえのが情ねえ。
はつ　お前さんとの馴染も、思つて見ればもう隨分古い話だが、今夜は悠くりそれを聞かうぢやアないか。
白輿　おゝ落ついてそれを聞いて吳れるか。實は俺もいつか一度は何も斯も打明けて、心のわだかまりを解きてえ、肩の重荷をお前にも半分背負つて貰ひてえと思つてゐたのだ。（と、一寸隣室に氣を配り）だが、さつきから妙にあいつが氣がかりでならねえ。
はつ　なあに、あの人は大丈夫だよ。それに、好い心持に寢込んで了つた樣子だから。
（と、これより先き、隣り座敷へは、おりんが入つて來て、よろしき時屛風を立て廻はし薄い夜具をかけて行くことあり。）
白輿　然うか、それならいゝが……（思入れあつて）だが、お初、お前あいつとはよつぽど深い馴染のやうだなあ。
はつ　まあ、何を云つてるんだねえ、こんな商賣をしてゐるうちはお客樣の垢を落したり髮を洗つたりもしなきやアならないわさ。あツいゝ處へ酒が來た。
（と、小をんなの運んで來た酒肴を受取つて、盃を相手にさしながら。）
はつ　さあ、一つ！　酒でも吞んで浮々さんせ、氣から苦勞がわくわいな。ほゝゝゝ。
白輿　お初、俺はお前に斯して會つてゐる時だけは救はれる。實はこんな人出入のはげしい場所へ每日每晩通ふのは、あんまり氣味のいゝ話ぢやねえ。と云つて、一日でも手前の顏を見ねえぢやア寂しくつてゐられねえのだ。
はつ　（輕蔑するやうな寧ろ憫むやうな眼光で）　それがお

互ひの因果かも知れないよ。丹前姿、六法者、風呂屋岡場所ところ嫌はず男を見せたい世の中に、女と生れてお前のやうな弱いものに獅嚙みつかれて……三右衛門さん、わたしの身にもなつてお呉れな。

（と、さゝれて盃をクッと飲み干す。）

白輿　それア尤もだ。お前がおれのやうな男をもつて肩身の狭い思ひをするのは尤もだ。だが、俺が斯うして白輿の三右衛門とか男達とか町奴とか云はれる境界に身を落したのは、實は敵に巡り合ひたくねえからだ。

はつ　と云ふのは、一體どういふ譯なんだえ。

白輿　耻を話さなくッちや解らねえが、おれの兄貴は根が侍でありながら有つて生れた氣早の性分から、町六法の早桶半右衛門と身をやつし、よせばいゝ他の助太刀に恨みを買つて、到頭酒井雅樂頭の邸内に大矢數のあつた時、安井兄弟と云ふものにつけ狙はれて命を落した。その安井兄弟の顏は知らぬ弟が、緣につながる兄貴の死から、仕返し流行の世間の手前、實はいつまで浪人の身でもゐられず、その時武家の住居を棄てゝ町奴の群に投じ、その名も白輿三右衛門とは改めたが、どうかして一生敵に巡り會ひたくねえのが俺の望み、話といふのはざつと斯うだ。

はつ　なんだねえ、打たれるよりは打つ方に廻るのがお前の敵、それを、そんなに青くなつてビクシヤクすることはないぢやないか。（と笑ふ）

白輿　と、ところが然うは行かねえんだ。噂に聞けば安井兄弟は早桶半右衛門の弟河合權太夫――それは以前の俺の名だが――あいつが町奴に身をやつしたのは、てつきり敵を打つ覺悟と、どこかで俺の人相は、見知つてゐると仲間の評判だ、若しもの事で、俺も此儘、返り討になつて死にたくねえ。な、お初、金は懷に放さず用意してあるんだ、どうか俺と一緒に人里離れた處へ身を隱しては呉れねえか。

はつ　まあ〳〵お待ちよ。（と握られた手をはなして）そんな夢見たいなことはさらりと忘れて、度胸で最一つお重さねよ。

白輿　夢？　夢ならこんな怖ろしい夢は早く覺めて呉れ、俺は敵なんぞ持つ身でありたくねえ。（と、不安な表情）

はつ　なんだねえ。しつかりとお持ちよ。

（と、此の時、隣り座敷の重左衛門ムックリ起きて聞耳を立てゝゐる。庭先の蛙の聲突然啼き歇む。）

白輿　あつ、今迄あんなに啼いてゐた蛙の聲がパッタリと歇んだやうだが……。

はつ　何んでもありやしないよ。

（と、此時、さだは腰をぬかさんばかりに慌てゝ入り

來る。重左は灯を吹き消す。）

白輿　な、な、なんだ？

さだ　は、はい、今し方三四人のお侍らしい風體の人達が風呂場の脇の露路口から庭の方へ廻つたといふことです。押込夜盗かも知れませんから、親分、用心なすつて下さいまし。

（と、三右衛門は物をも云はず突如逃げ出さうとするお初に縋りつくお初は度胸を据ゑて何事か彼に囁く。）

（庭の隅からバラ〳〵と三四人姿をあらはし、物をも云はずに飛び蒐らうとする。）

白輿　おい、待つた。待つてくれ。お前達は何者だ？　名を名のれ。

男一　名なんぞ名告らなくともいゝ。

男二　俺達はお前の敵に頼まれたんだ。

男三　お前の命を取れば金になるんだ。

白輿　なに、おれの命を取れば金になる？　頼まれた？　おれの敵から頼まれた？……そ、それは酷い。理不盡た。

男一　理不盡も糞もあるものか。

男二　お前を返り討にすればいゝんだ。

男三　さあ、覺悟して立向へ。

白輿　そ、それは慘酷た。まあ、待て。待つて呉れ。お前達は金で頼まれたと云つたな。金で頼まれたのなら、俺も金で頼む。金はいくらでも出す。さあ、持つて行け！それ、拾つて行け。それ、それ、それ。

（と、三右衛門は懐から胴卷の小判を思ひ切つてバラバラと庭へ撒き散らしてやる。初めはさすがに躊躇したが、次の瞬間にはその小判を攫むやうに拾つて、皆こそ〳〵と其場を立ち去る。白輿三右衛門は暫く顏をあげようともしない。）

はつ　もう大丈夫だ、もう誰もゐやしないよ。

白輿　水を――水を一ぱい呑ませてくれ。

はつ　しつかりおしよ。人が來ると見ッともないやねえ。

（と、お初は三右衛門に水を與へながらたしなめるやうに云ふ。そこへおさだに案内された内儀おしまと湯女とみ、さだ、りん等騷を聞きつけた形で入り來る。）

内儀　それでもまあ、相手が親分だつたんで、何の苦もなく事がをさまり、ほんとに大幸せでございました。

とみ　おかみさんの御仰るとほり、これといふのも白輿親分の御威光ですわ。

さだ　氷川の丹前風呂と名高いあやめの湯へ、宵の口から夜盗が入つて、お客が迷惑をしたと噂が立つては――。

りん　ほんとに稼業にかゝはることだと思つて、何の役にも立たないわたし達まで、どんなに心配したか知れやしません。

内儀　お初さんも鼻が高いよ、白輿親分のやうな金ばなれのいゝ方に御贔屓をうけてゐるのだから、あしたは屹度こゝら界隈ばかりでない、江戸市中の大評判にのぼりますよ。男はやつぱり金つぱなれが第一でさあ。

白輿　なあに、そ、そんな事もあるまいが、相手が向不見の無頼漢だから、一寸平日(いつも)とは違つた手を見せたまでさ。褒められちやア冷汗ものだ。飛んだ猿芝居のお大盡さまさねえ。

（と、空嘯いて煙草を燻らす。隣から立上つて覗いてゐた重左衛門はこれを聞いてモロに噴き出す。）

重左　ふん、それもありようは命が惜しいからよ。當節の男達は骨が折れるなあ。

白輿　な、なんだと――。

はつ　まあ、默つて何とでも云はせてお置きよ。お隣りのお客は當時江戸で名うての天邪鬼(あまのじやく)、土龍の汁が欲しいの、蛇鼠の蒲焼が食べたいのと、さつきからさんざツぱら人を困らせてゐるんだからさ。

白輿　道理で無氣味な聲を出すと思つた……イヤ、そんなことは如何でもいゝ、座敷をかへて陽氣に一ぱい飲み直さう。さあ皆來い。

内儀　お大盡さまには、先づ入らせられませう。おほゝゝほ。

（と、聲色の眞似で笑ふ。）

（皆々捨臺詞よろしくついて入る。お初一人あとに殘る。奥は賑やかな歌三味線になる。お初四邊を見廻しながら、灯をもつて隣座敷へ入る。）

はつ　重さん、お前も飛んだ惡戯者(いたづらもの)だねえ。

重左　いや、それと云ふのもお安くねえところを見せつけられたからのことさ。

はつ　それぢやアお前は、いまだにあれを眞劍だと思つておいでかえ。

重左　眞劍であるかないか知らねえが、まんざらでもねえと見たは僻目か、わつはゝゝゝ。

はつ　まあ、止しておくれ。あの態を……（と噴出しながら）思ひ出しても可笑しくなる。町奴の侠のと鳥おどしの案山子にもならねえ、アノ唐變木を……重さん、お前も隨分だねえ。（と寄添ひながら抓れる。）

重左　あ、いてえツ、それぢやアおはつ、お前があの野郎を卯の毛でつくほども思つてゐねえといふ證據を見せて貰ひてえものだ。

はつ　その證據は――あッ、然うだ。今夜の八ツ半過ぎ奥の座敷で――（と、何か耳元に囁く。）

重左　あいつを、おれに殺せといふのか。

はつ　然うよ。あんなものに獅嚙みついてゐられちやアい

つ何時間違で傍杖に、二つとない大切な命を取られないとも限らない。わたしが可哀さうだと思つたら扶けると思つて、あいつを一息に殺してお呉れな。（と、しなだれかゝる。）

重左　いや、折角の頼みだがそれは駄目だ。何故と云ひねえ、物の數にもならねえあんな腰拔けを、苟も女出入で殺したとあつちやア此の深見の顏はどこで立つ、イヤサ男を磨く青髯の重左が廣い額は天道様に向けられねえわさ。

はつ　それぢやア白刄で嚇して置いて……それだけでいゝからさ。（と再び耳元に囁きながら）ね、ね、お髯の重さん、男よりや女を扶けるのが、結句伊達衆の……。

重左　えい蒼蠅えなあ、それぢやアお前の合圖を待つて……。

はつ　しツ、靜かに……。

（と、お初は重左衞を制して、ふツと灯を吹消す。四邊黑闇々として幽かな雨の音、蛙の聲。）

――舞臺は徐ろに廻る。

二

舞臺は同じくあやめ風呂の他の一部、欄干のついた廊下を傳はつて池に面した瀟洒な座敷がある。

池の中には折からあやめが咲きみだれ、座上には杯盤が狼藉たる有様で、白輿三右衞門は湯女達に圍まれて大酩酊の體である。それは恰度賑やかな歌三味線に乘つて騷ぎが一渡り濟んだあとで、當の三右衞門は何となく物足らない不安な顏付で生欠伸を噛み殺してゐる。

内儀　あら親分、お氣持でもお惡いのぢやアございませんか。

白輿　なあに、別に氣分は惡くないが……もゝ出鱈目に騷ぐのはやめて呉れ。俺はなんだか氣が滅入つてならねえ。騷げば騷ぐほど地獄のどん底へでも沈んでゆくやうだ。

内儀　それは不可ませんねえ――（と四邊を見廻はして）あら、お初さんはどうしたの、先刻から見えないぢやないか。

りん　たぶん青髯の旦那がまた何か天邪鬼を云つてゐるのかもしれませんわ。

さだ　一寸、わたしが行つて見てまゐりませう。

内儀　ほんとに仕様のない女だねえ。早く然う云つて連れておいでよ。

白輿　なあに、打棄てゝ置くがいゝ。（と、不平さうな顏をして）俺はもう、頭がふら〳〵して眞直ぐになつちやアゐられねえ。（と、そのまゝゴロリと寢轉ぶ）

内儀　あれ、そんなところへおよつて寢冷えをするといけませんよ。親分、親分ッたら――（と、搖ぶられても三右衛門は狸寢入りをしてゐる。）おい、誰か早くお初さんを……まあ、氣が利かないね、早く夜着でも持つておいでッたらねえ。（と、よろしく眼附をして見せる。）

（湯女等は慌てゝ「はい、はい。」と差圖されるまゝに皆々入る。入れ違ひにお初入り來る。）

はつ　おかみさん、濟みません。髷の重さんがいろ／＼八釜しいことを云ふものですから……あら三右衛門さん、どうなすつたの、もし、白輿の親分、ほんとにどうなすつたのよう。

（と、寄り添つて搖り動かす。）

白輿　う、う、う、蒼蠅えな、（と、態と氣がついた如く眼を擦りつゝ）漸つといゝ心持に寢込んだものを、何も態態起すことはねえぢやアねえか。

はつ　おや／＼、これはどうも濟みませんでしたわねえ。（と、態とツンとして）どうせ、わたしなんどが起しちやア御機嫌にやア入りますまいからね。

白輿　いや、そ、そ、そう云ふ譯ぢやアねえが……。（と、聊かテレてゐるこなし）

（内儀はその様子を見て取つて。）

内儀　ぢやアお初さん、わたしは一寸御免を蒙るから……親分にお風邪でも引かせないやうに、さ。

（と、矢張り言外に意を含ませて入る。）

（お初はいつまでもツンと澄ましてゐる。）

白輿　おい、お初、おい……何もそんなにつれなく當ることはねえぢやアねえか。

はつ　でもお前、今の先き何と云つたか覺えておいでかい。ヒトおもしろくもない。

白輿　まあさ、まあさ、そんなに怒るものぢやねえッてことさ。今夜こそお前の腹を聞かなくちやならねえと思つてゐるんだが、どうだい先刻の話は……思案がついたか。

はつ　先刻の話？……藪から棒にそんなことを云つたつて……。

白輿　な、なんだな、お初、白ばツくれて……それ、あの、駈落の話よ。俺はもう、繁華な場所にや一日も落ついちやアゐられねえ。

はつ　なんだねえ三右衛門さん、お前さんだつて町奴の仲間に籍を置きながら、そんな心細い氣ぢやア女のわたしが、どんなに頼りないか知れやしないやね。

白輿　だからさ、だから俺の云ふことを訊いて、一刻も早く安穩な處へ落ち延びて呉れろと云ふことさ。え、解つたか、解つたら何とか返事をして呉れ。（と、女の手に縋りついて頼む）

はつ　だつてお前、それはお前が無理ぢやアないか。わたしだつて今の若さで人里離れたところへなんぞ行かれやしない。これでもまだ〳〵し殘した歡樂が江戸一ぱい殘つてゐるんだものねえ。
白輿　そんな事を云ふものぢやアねえ。そんな人困せを……その替りお前にやどんな氣儘も贅澤もさせて置くから。
はつ　串戲云つちや不可ないよ、山猿ぢやアあるまいし、人里離れて氣儘も贅澤もあつたものぢやアないやね。
白輿　うむ、ぢやア俺がこれ程口を酸くして頼んでも、手前はそれを聞くことは出來ねえと云ふんだな？（と、威嚇氣味に）よし、厭なら止せ。俺も男達の端くれだ。白輿の云ふ事を聞かねえ女を只その儘に生かして置くと思ふか奴ぬ！
（と、刀の柄に手をかけて敦圉く。）
はつ　な、な、なにをするんだねえ。
白輿　なにをするも糞もあるものか。それぢやア俺の云ふ事を素直に聞くか。
はつ　だつて、それはゝお前が無理ぢやアないか。
白輿　俺よりは男の云ふことに從はねえ手前が無理だ。覺悟をしろ。
（と、とど三右衞門は拔身をもつてお初をおどしにかかる。此の時、深見重左衞門は、ぬッと三右衞門の前に姿をあらはして立ちはだかる。）
重左　三ぴんめ、女を捕へて此の態はなんのこつた。町奴の男達のと鳥おどしの案山子ほどの度胸もねえ癖に、巫山戲た眞似をしやアがるな。
（と、一握みにその利腕を捻ぢあげる。）
白輿　あいたゝゝゝ。息がとまる、息がとまる、何とか腕をゆるめてくだせえ。
重左　女郎の風上にも置けねえ野郎だ。
（と、刀をもぎ取つて押離す。）
白輿　まッ恐ろしい力の男だ。（と關節を撫でながら）さう云ふ貴方は何の誰だ。
重左　何の誰も凄まじい。知らぬとあれば名告つて聞かせる耳をかぽッじつて聞きアがれ、上は梵天帝釋から地は金輪奈落の底まで音に聞えた天邪鬼、町奴でも旗本でも強いと見れば龍に水、弱きを扶ける旋毛曲り、それを見る奴樣々に義俠のなんのと云ふのが第一癪に障る。當時武家出のその中で、關東流の自慢者、情も深見重左衞門生れて腮鬚の深いところから、靑鬚の重左とも、又鬚の重とも呼ばれてゐるわ。三ぴん、眞近く寄つて面相拜み奉つて置きやアがれ。（と、怒鳴る）
白輿　では、貴方が、あの、聞及んだ深見重左衞門……さ

まか。

（と、慄へあがつて平蜘蛛の如くなる。）

（此の途端に奥の方からバタ／＼といふ足音につゞいて大聲に怒鳴る聲聞える。）

聲甲　さあ、神妙に案内しろ。

聲乙　たつて邪魔立すると、その方どもの首も胴へはついて居らんぞ。

白輿　あツ、また何か恐ろしいことがやつて來た。

（と、突如入口の一方から覆面したる黒装束の侍が拔刀のまゝあらはれる。）

白輿　（慄へ聲を絞つて）な、なに者だ。

侍甲　やア、何者とは無禮な奴！

侍乙　臆病者、うかつ者の其方は夢にも知るまい。

侍甲　某こそは其方が多年兄の敵とつけ狙ふ根來獨身流の達人安井數右衛門。

侍乙　同苗廣右衛門。汝のやうなへナ／＼武士でも、町奴に身をやつして、吾等兄弟を附け狙ふと聞いては一日でも枕を高くは眠られぬわい。

數右　さあ、尋常に立向つて勝負せい。

廣右　最前はわれ等兄弟の加擔人を、よくも金銀をもつてたぶらかし居つたな。

數右　さあ、立て。只一刀の下に返り討にして吳れるわ。

（と、威猛高に左右から詰め寄る。白輿は歯の音も合はぬほど胴慄ひをして。）

白輿　いえ、それは違ひます。拙者は、拙者はそんなものではありません。

廣右　やア、此の期に及んで卑怯な奴め、如何につゝみ隱しても、其方が吾等兄弟の手にかゝつた俠客早桶半右衛門の實弟白輿三右衛門なることは、特に此方で見知つて置いたわ。

數右　しかも以前は浪人河合權太夫、さあ、尋常に立上れ。

白輿　いえ、それを——その名を然うでないとは申しません。確かに手前は、河合權太夫、又の名を白輿三右衛門と申す町奴でございます。ではございますが……。たゞその假りに町奴に姿をやつしたばかりのもので……他意あるものではございません。（と、熱心にあやまる）

數右　やあ、ほざくな。他意なきものが何んで士分から町奴などと身を下し、姿を替へて、遊里、岡場所、さては斯のやうな丹前風呂などへ出入いたす用がある？

白輿　そ、それは、その……違ひます。貴方のお目がねが失禮ながら違ひ申すぞ。拙者は敵など討つ存念は毛頭ござらぬ。敵などをもつてゐるといふことすら、何の譯か拙者にはわかり申さぬ。あゝ裂けるものなら、此の清淨潔白な腹をかッさばいて、その腸をお二人の前に出して

お見せ申したい。

廣右　巫山戯るな、白痴め、必定こんな場所で遊蕩をいたし居る如く體よく世間を欺いて、とゞの結局は安々と敵を討たん巧みに違ひない。

數右　畢竟腕ッぷしでは協はぬゆゑ、生來の弱味を一層弱味と見せかけて、相手の敵に油斷をさせ置き、最後に勝を制するためしは當世柄に間々あるやつだ。

白輿　（煩悶して）あゝ困つた。拙者の此の心持がどう致したら貴方達に通じるものか。（と、キヨロ／＼と見廻はし、後ろの方に小さくなつてゐるお初を見て）あゝお初、お前は平素から俺の心の底を知つてゐる。どうぞお二方に俺の心の底の底まで申し上げて呉れ。

はつ　なんだねえ三右衞門さん、今になつて引腰のない……敵になつてゐる方が、こんなに男らしく名告つて出て來て下さつてるものを。お前さんも元はお侍の端くれぢやアないか。一かバチかやつて見るがいゝに。

白輿　と、と、とんでもない事を云ふ女だ。

數右　これはお前の女房か。

はつ　（さすがに愕き）いえ、違ひます。違ひます。

（と、突如深見重左衞門の姿を見せぬやうにしてゐる他の方へかけ出さうとする。）

廣右　逃げれば一打ちにぶッぱなすぞ。

（と、追はれてお初はさすがに膽を冷して重左衞門に縋りつかうとする。安井兄弟は重左衞門の姿を見て初めてギヨッとして直ぐ身構へる。）

廣右　うむ、兄貴、意外な奴がかくれてゐた。

數右　お前も油斷するな。（と、重左衞門の方に向つて）お前は何者だ、名を名告れ。

重左　それは此方から云ふことだ。生いきなことほざいて後悔するな。

廣右　うむ、助太刀だな。

數右　卑怯者、助太刀なら男らしく名を名告つて出ろ。

重左　いゝや、俺は助太刀ぢやアない。お前達が此處を引上げるまで、默つて見てゐてやらうかと思つてゐたのだ。

廣右　嘘をつけ。

重左　己れも男だ。嘘はつかないぞ。

はつ　いゝえ、嘘なんぞつくものですか。此のお客樣はなんの關係もない人です。

數右　お前は默つてゐろ。それではこの女はお前の女か。

重左　餘計な穿鑿は措け、俺に向つて僭上なことを云ふ奴等だ。

廣右　何を！

數右　まあ、待て！

白輿　（進み出て）いゝえ、此の女はわたしの女でござい

ます。

はつ　いゝえ、違ひます。違ひます。（と憎さげに男を睨んで）共死なんか厭なこつた。

重左　まあ、お前は何も云ふことはねえ。

（と、お初が重左衞門にかばはれるのを見て、白輿は殆んど本能的に同じく彼の脚下に身を投げ出す。）

白輿　然うだ、此上は……どうぞ……どうぞ。

（と、慄へながら手を合せて重左衞門に扶けてくれと頼む。重左衞門思入れ。）

重左　どうだ、安井兄弟、誰しも命の欲しいのは同じことだ。敵を討ちたくねえと云ふのだから、男らしくさつばりと水に流してやつたらどうだ。

廣右　なに？　さつぱりと水に流せ？　そ、そんな甘い手には乘らないぞ。

數右　貴樣は豪らさうなことを云つて存外臆病者だな。助太刀が怖くなつたのか。

廣右　イヤ急に命が惜しくなつたに違ひない。

重左　男を磨く俺見損くなつちやアならねえぞ。（と睨みつけ云ふ）

白輿　どうぞ……どうぞ……扶けて下せえ。

數右　フン（と嘲笑して）男を磨くなんぞと云つて、存外こいつ小判を磨く奴かも知れねえぞ。

重左　なんだと?!　（と憤怒する）

廣右　口惜しけれア刀を拔け。見れば人並より長さうな刀を差してゐやアがる癖に、田舍浪人の故か兄貴、氣も長いな。（と罵詈する）

重左　（怒髮天をついて）ウム、その頰桁おさへてゐろ、でなくば、今、三里八町飛ばして與れるぞ。しかも大江戸の八百八町、喧嘩好きで人に知られた深見重左衞門、白輿三右衞門の助太刀してくれる。如何にも貴樣の云ふ通り長い方が三尺八寸、差添へが二尺六寸、大小ともに銘は豐州貞行の業物、何の飾りもねえ。白柄の鐵鍔だが、眞赤な朱鞘は伊達にはさゝぬぞ。が、待てよ、此の弱蟲三右衞門をさへ怖ぢ恐れて、つけつ廻はしつ卑怯にも返り討にしようといふ人非人、武士の風上には置けねえ奴等だ。貞行の刀は穢れになる、（と、そこに投げ棄てゝあつた三右衞門の拔身を取上げ）此の生くらで澤山だ。そッちが根來の獨身流なら、こつちは關東流の隨一番、腕は金鐵、水も溜らぬ手練の刄先を、さッ、見ン事受けて見ろ。

廣右　何をッ！

數右　弟、ぬかるな。

（と、三人はしばらく激しい大格鬪、その凄まじい白刄の間を、臆病者の三右衞門は、他の見る眼も可笑しいほど恐れおのゝいて逃げ廻はる。お初も逃げ廻はる。）

逃げ廻はりながらも三右衛門はお初の方に身を寄せる。お初は殊更にそれを嫌つて逃げ廻はることなど。とゞ三右衛門は池の深身へ刎ね飛ばされる。お初は氣絕する。）

（廣右衛門がまづ一太刀先きにあびせかけられ、次いで兄の數右衛門が肩先から袈裟切りに見事に斬り斃される。）

重左　なんのこつた。口ほどにねえ奴等だ。

（と、此の時池の中から泥まみれになつた三右衛門はのこ〳〵とあがつて來る。）

白與　あツ、助かつた。俺はまだ生きてゐた。（とよろこびながら重左に）髯の旦那、お前は此の三右衛門が命の親でございます。それにしてもお初は……（と心づき彼女に取つく。お初が重左の手で喚び生けられたので再びよろこびの聲を發し）おうお初も生きてゐる。

はつ　（初めて眼をひらき泥まみれの彼の顏を見て）あれいツ！

（と、驚き且つ氣味惡い表情にて、重左衛門に身を寄せる。重左衛門は思はずお初を抱へ込む。雨やみ、月やゝ雲をいづ。）

白與　（重左に再び叮嚀に）此の上は慾得は申しません、金子は殘らずさしあげますから、どうぞこれで一先づ江戸を離れて下さいまし。（胴卷の金を殘らず出す）

重左　それでお前はどうするつもりだ。

白與　なあに、御心配下さることはありません、此の身は全然町奴から足を洗つて、此の敵討の出來たのを手柄にして、再び舊主に歸參を願ひ、お初を女房にするつもりでございます。なあおはつ。

はつ　まあ、此の人はどこまでお目出度く出來てゐるんだらう。もう〳〵ふつ〳〵厭なこつたよ。（と刎ねる）

白與　ねえ旦那、旦那の肝煎でどうか然うなるやうにもう一度骨を折つて下さいまし。

重左　命が助かれア女がほしいと、よくも然うぬけ〳〵と云はれたものだ。

白與　その替り、此の大金は……。

重左　（ムツとして）おい〳〵人を見損ふと、助かつた命がまたねえぞ。

（と、威嚇される。おはつは舌打する。）

はつ　重さん、ついでにやつておしまひよ。

重左　しかし、どうも弱い奴は殺せねえ。えゝつもう一度水風呂にでもつかるがいゝや。

（と、池の中へ再び投げ込まれる。時の鐘、月影雲を破つて光りを投げる。）

はつ　（凝視めて）もうこれつきり浮ばぬといゝがねえ。

重左　苦しいから然うも行くまい。が、しかし思へば果報過ぎる。夜が明けて見ろ、此の風呂は敵討の評判で大變だ。嘘ぢやねえ八百八町、鴉が鳴いたら白輿三右衞門の名は江戸名物のやうに云ひ囃されるに違えねえ。その時あの意氣地なしが、どんな大きな面をして威張り散らすか、それが一番見てやりてえ氣がするなあ。（と笑ふ）

はつ　ほんとにねえ。思へばあの男は江戸中での當り者だねえ。

（と、再び顔を見合せて笑ふ。三右衞門、泥水を吹きながら、今度は全く眼も鼻も見えないやうな眞黒な顔をあげて見廻はす。）

――幕――

鼠小僧旅枕（二幕）

人物

鼠小僧次郎吉
銀蠅の久太　胡麻の蠅
定十　次郎吉の父
權六　馬方
仁兵衞　德利龜屋主人
おしま　同娘
與九郎　同番頭
清七　田島屋手代
お千代　田島屋娘
金藏　目明し手先
まつ、きく　女中
店の若衆　二人
乞食　三人
役人　一人
其他、捕手、旅客　大勢

時代　天保十一年師走

第一幕　小佛峠の辻堂前

甲州路の駒木野から小佛峠にかゝらうとする山道の一部。正面、木立の間に破れたる辻堂、堂の上下は物凄い藪疊でその奧は恐ろしき絶壁になり居る。追ひ詰つた師走（しはす）の日の、しかも重苦しく曇つた七つ下りの空合で、今にも白いものが落ちて來さうである。やゝ遠い馬鈴の音と馬子唄で幕明く。下手寄の道端で、乞食の甲乙丙が焚火をかき立てゝ酒を呑んでゐる。

乞甲　どうだい兄い、もう一つ行かうか。
乞乙　有難てえ――やつとこれであつたまつた。順に廻すとすべえか。
乞丙　濟まねえな。
乞甲　なあに――物貰ひはあひみ互えだ。
乞丙　おありがたう御座います、――かね。はゝゝゝ。
乞丙　情ねえことにや、直ぐそこへもつてきやがる。
乞乙　おい〳〵、靜かにしろよ。
乞甲　あゝ本統にお客様だぜ。
乞乙　そいつは不可ねえ。

（此時、上手坂路より旅裝の田嶋屋手代淸七（二十五歲）娘お千代（十九歲）の二人が通りかゝる。）

乞丙　足腰の立たないものでございます。

乞甲　目の見えない片輪者でございます。

乞丙　どうぞお惠みを……。

乞甲　お施しを……。

乞乙　う、う、う、う。（と、啞の振で拜む。）

（と、お千代は淸七にさゝやいて、十文ばかりの錢を出して與へる。）

乞甲　おありがたう樣でございます。

乞丙　お惠みさまでございます。

乞乙　ひ、ひ、ひ、ひ。

（と、乞食等は猶も二人の傍に近寄る）

お千代　まあ、氣味の惡い。（と、淸七に寄り添ふ）

淸七　つけ上つて餘り(あんま)な眞似をすると承知しないぞ。

（と、お千代をかばひながら淸七は息まく。）

乞甲　でも今朝からまだ、食物(たべもの)にありつけないのでございます。

乞丙　まだ粥一杯も咽喉(のど)の管(くだ)を通つては居ません。

淸七　それを、わたし達が知つた事かい。

（二人が乞食等に迫られて辻堂の緣先へ立竦んだ時、その中に寢込んでゐた旅裝の鼠小僧次郎吉が眼を覺ました態で扉を開ける。）

次郎吉　おい、おい、なんぼ非人乞食だからつて、そんなのさばつた事をするものぢやアねえ。

乞乙　う、う、う、う、――こいつは相手が惡いや。おい兄弟行かうせ。

（と、急に足が立ち、目が明いて、普通の無賴漢になつて上手の方へ逃げ込む。）

淸七　有難うぞんじました。

お千代　お蔭樣で五月蠅いところを脫れました。

次郎吉　まあ、よかつたが、見れば樣子のある旅さうな――一體、これから何處までお出でなさいます。

淸七　はい、行く先はあの甲府でございますが――。

お千代　旅馴れないものですから、（と、躊躇らひながら）あの、旅宿までは、まだ餘程の道程(みちのり)でございませうか。

次郎吉　なアに、小佛も此處まで來りや此の先の峠の峰から然うさ、凡そ一里もテクつたら、武藏相模の境になる小原と云ふところへ出ますから、日のあるうちに急ぎなせえ。

お千代　御親切にいろ／＼有難うございました。

淸七　では。旅のお方、足弱(あしよわ)を連れて居りますから、一足お先きへ――。

次郎吉　わツしも一緒に行つてあげてえが、ちいツと天日(てんぴ)

を嫌ふ身の上――いやさ、身延まで心願があつて行くんだが、どうも勞れてならねえから、幸ひの辻堂でもう一休みして、おツつけ後から參りますよ。氣をつけておいでなせえ。

清七　有難うぞんじます。

お千代　では、御免下さいまし。

（と、二人は下手木立の間を縫つて行く。次郎吉は見送る。）

治郎吉　同じ世間をかくれる旅でも、同行二人笠の中から竊と顔を見合せては、互ひに樂しく笑ひ合ふこともあるだらうが、こつちは野郎の一人道中、氣樂と云ふのは負惜しみ重なる惡事に江戸を賣つて、さらでも寒い甲州路を、鐺の詰つた師走の空、身延詣りと誤魔化しても、生恥晒す心願が、叶つて若しも一人の親爺に、ひよつと何處ぞで出會つたら、まともに顔向けは出來ねえ身體だ。生命はもとより惜しくはねえが――。

（と、此の時突然、けたゝましく山鳥が鳴き過ぎ、木の葉がばら〳〵と散る。）

次郎吉　えゝ驚かしやがる。然う思ふと、急に襟元の風が冷たく首にこたへて來た。

（と、辻堂の中へ再び身を入れようとして、ふと下手を見込み、駭く表情。）

次郎吉　えゝッ、こいつは愚圖ついちやア居られねえわい。

（ト、四邊を見廻はし、如何にして身を隱さうかと苦心し、とゞ地藏尊に眼をつけ）濟まねえが人扶けだ。暫く横になつてゐて下ツし。

（と、次郎吉は地藏尊を隅の方に倒し、自分が笠にて面を隱し代りに蓮臺の上に濟まして立つてゐる。）

（下手、他の道より、捕物の役人に三下らしい男がついて來る。その男は、次郎吉に一寸氣がついたが、近寄ると突如小判を握らせられ、思惑あつて辻堂の扉を外から閉める。）

役人　おい、金藏、堂の中はよく見たか。

金藏　えゝ見やした。此の中にや笠を冠つた地藏樣がゐるツ切りで、他に何も怪しいものは見當りません。

役人　然うか、確かに厚木街道の獲物だと睨んで來たのだがなあ。

金藏　此の邊にやア、よくねえ古狐が巢を喰つてゐますからね。

役人　そんな事がないとも限らない。が、急いで日野宿あたりまで追ひ詰めて見るとしよう。

金藏　へい。

（と、役人と共に金藏は上手へ入る。）

次郎吉　えゝ、冷汗をかゝせやがる。だが、あの三下の野

郎はまんざらの田舍者ぢやアねえ。はゝゝゝ。

（と、下手前の街道筋から、銀蠅の久太といふ胡麻の蠅が急ぎ足にこゝへかゝる。その後から清七とお千代の二人が、追ひ縋るやうにして出て來る。）

清七　申し、申し、旅のお方、一寸お待ちなすつて下さいまし。

久太　蒼蠅い男だな、何か用か。

清七　用と云ふのも可笑しな話でございますが、此の女がお預け申した金包を、どうぞお返しなすつて下さいまし。

久太　おい、おい、串談云つちやア不可ねえぜ。俺だつて江戸のお店に奉公してゐる時分、此のお孃さんとは、些とばかり事情があつてお拂箱にされたものだ。納得づくで金包を預つたからつて、滿更憎いこともねえ筈た。ねえお孃さん。

お千代　まあ、滅相な。清七さんが百姓家へ貰ひ水に行つた後で、白刄で脅されたばつかりに――。

久太　おい、おい、默つて聞いてゐればいゝ氣になつて、――それぢや俺が、無理無體にお前を瞞した事に當るぢやアねえか。

清七　何を云ふにも、旅馴れない私達、これから甲府まで落ちて行くのに――いえ、落つく先々も金が頼りでございます。どうぞ、それればかりは――。（と、懷中に手を入れようとする）

久太　えゝ、仕太い眞似をしやアがるな、一旦こつちへ巻き上げた此金を、手前達に素直に返して如何なるものだ。甲州街道、中仙道、行く先々を股にかけて、銀蠅の久太といふ綽名通りの巾着切り、胡麻の蠅のその中で、ヤレ兄イの、銀蠅のと、よばれるだけ、ちつとは面の光つた方だ。四の五の拔かすと承知しねえぞ。

お千代　では、あの、お前は――。（と、呆れる）

久太　どうだい？　また惚れ直す氣はねえか。

清七　えゝツ、いま／＼しい、只此の儘では――。（と、久太に組みかゝる）

久太　生意氣な眞似をしやアがるな。

（と、二人は足蹴にされる。辻堂の中から次郎吉が扉を開けようとした氣勢に、久太は慌てゝ冷笑を殘したまゝ一散に上手へ入る。）

（清七とお千代の二人は、抱き合つたまゝで暫く途方に暮れる。）

お千代　清七さん如何しよう／＼。（と、男の膝に泣き崩れる）

清七　二人とも旅馴れない上に、持つた金を殘らず攫はれて了つては、木から落された猿も同様で、思案のしようもありません。

お千代　これも親を欺した罰か。
清七　御主筋のお前様を、唆かして連れ出した――これが罪科に違ひない。
お千代　これ清七さん。
清七　お千代さま。
お千代　お前に此の上どんないゝ思案があるか知らないが、わたしや寧そ死んで了ひたい。
清七　飛んだことを――それでは親御へ猶更不孝、決してそんな短氣を起して下さいますな。
お千代　と、云つて何處に身寄り頼りがあるではなし。（間）お前は、今となつて、わしと一緒に死ぬのが厭になつたのか。
清七　いゝえ、夢更然うではありませんが、處もあらうに甲州路のこんな山奥まで連れ込んで、二人で情死したとあつては、親御の嘆きが、思ひ遣られます。
お千代　と云つて他にいゝ思案があるではなし、わたしや此上、惡漢や狼の餌食になるのが猶怖ろしい。それでお前と一思ひに死んで了ひたい。（と、お千代、劇しく泣き縋る）
清七　わかりました、わかりました。（と、勸めながら決心の思入れあつて）お前さまが、それほど心を決めておいでなさるなら、すんでの事にあの時江戸で、大川へ投げ込んだ二人の生命――。
お千代　死んだ姿を親の目にかけないのが、思ひ様では不孝の孝、わたしや他に思ひ殘すことはない。
清七　それでは、一思ひに此崖から――（と、物凄い崖下を見下ろし）さ、お千代さま、目をつぶつて、しつかりと私に取付いてお出でなさいまし。あの世へ行つても必ず一つぢや。
お千代　その一言が、わしには何より嬉しい。さ、早う。
清七　まあ、せめて落ついて唱名を――南無阿彌陀佛。
お千代　南無阿彌陀佛。
（と、二人が抱き合つて口の内に唱名を繰り返した時、次郎吉は素早く後に廻つてゐて、彼等を抱止める。）
次郎吉　おつと待つた。串談ぢやねえ、然う容易く生命を棄てゝ如何なるものだ。ま、お待ちなせえ。
（と、突如後ろへ二人を引きもどす。）
清七　や、や、お前はやつぱりあの旅のお方――。
お千代　それでは、あの、先刻から――。
次郎吉　お、殘らずお堂で聞いてゐました。が、何もそんなに氣を狹く持ちなさることはねえ、高が金包を取られた位で、死ぬの生きるのとは狂氣の沙汰だ。まあ、氣を落ち付けておいでなせえ。
清七　と、云つて、これといふ當てもないので――。

お千代　覺悟を極めたものでございます。どうぞお情けに見遁して殺ろして下さいまし。

次郎吉　串談云つちやア不可ねえぜ。俺も江戸ッ子だ。僅かの金で人間二人を見殺しにする譯にや行かねえ。一體その金子は幾らばかり持つて居なすつたんだ。

お千代　恰度小判で五十兩、虎の子のやうにして匹田毘の子の服紗にくるんでありました。

次郎吉　なに五十兩？

清七　それもお店から、斷りなしの拜借金でございます。

次郎吉　はゝゝ、なにも、そこまで云ふにや當らねえ。(間)ぢやア斯うしませう、その五十兩の金を俺が、今、融通してあげやせう。

清七　え、では、五十兩といふ大金を！

お千代　見ず知らずのわたくし達に？

次郎吉　なアに、金は天下の廻りものだ。見ず知らずでも他人でも、苦しんでゐる味に變りはねえ。これが親類緣者だつて、まともの根性を持つてゐなけりやア、鐚一文だつて遣りやアしねえ、つむじの曲つたおれが根性、死んだ金を藏から出して、生かして貰ふのが道樂なんだ。

(と、懷中から取出して與へる)

清七　え、では此のお金を下さると有仰いますか。

(と、二人は顏を見合せて驚く。)

次郎吉　何もそんなに驚くことはねえ、五十兩玆にあるから此のまゝ持つておいでなせえ。

お千代　何とお禮を申していゝやら、まるで夢のやうでございます。

清七　地獄で佛と申しますが、旦那樣は私共の命の親でございます。江戸のお方とお見受け申しますが、どうぞ御住所御姓名を、お聞かせなすつて下さいまし。

次郎吉　おッと、そいつは謝らう、なんにも云はずに路用に費つてお吳んなせえ。その代り二人とも隨分身體を大切にして、親御に泣きを見せねえやうに、な。

清七　有難うぞんじます。御意見はきつと守ります。

お千代　死んでも此の御恩は忘れませぬ。

次郎吉　なにもそんなに恩に被なさることはねえ。今も云ふ通り金は世界の融通だ、それは然うとかたられた金包の中にやア何となにを入れて置きなすつた？

お千代　五十兩のお金の外に、下り藤の紋のついた手鏡と、肌身離さず持つてゐた水天宮樣のお守と――。

次郎吉　山の道中に水天宮樣のお守は入らなかつたらうに、はゝゝ。

お千代　あの、それに――。

次郎吉　魔よけのものでも入れて置きなすつたのか。

お千代　いゝえ、あの――(と、思入れ)清七といふ男か

らお千代といふ女に宛てた、起請が一枚入れてありました。

次郎吉　それア出來過ぎた話だが、その文句は、どんな事を書いて置きなすつた?

清七　さあ、それは、あの――。

次郎吉　まあ、用があるから野暮な事を聞いてゐるんだ。その起請の文句を隱さずに聞かせて下せえ。

お千代　それは、あの、――此の樣に書いてありました。一筆、一旦言ひかはし候お前樣とは、何なる義理に迫り候とも、夫婦になるかさなくば生死をとも〴〵にいたし申すべく、神々樣を誓ひに立て、夢更僞りは申すまじく――。

次郎吉　おッと、それで何も斯も腹に入つた。俺はこれから一番小戻りして、あの胡麻の蠅に追ひ付かなくちやアならねえ。

清七　では、これがお別れでございますか。

お千代　お名殘惜しう思はれます。

（と、暮六ッの遠い、鐘が聞えて來る。）

次郎吉　おゝ――もう暮六つか。詰り詰まつた冬の日に、これから先きの長い旅、二人の衆、おさらばだ。

（と、次郎吉は氣を替へて上手へ一散に入る。二人は思入あつて見送る。鐘寂しく鳴り續き、幽かな時雨の音。）

――幕――

第二幕　八王子の德利龜屋

小佛から四里二十六町ほど小戻りした八王子の旅籠屋、德利龜屋の店先。

下手二枚障子、德利を一筆書きの繪にして龜屋といふ暖簾の看板である。

舞臺は廣い店先の土間で、上手は上框より帳場、そこに番頭與九郎が何か頻りに勘定をしたり、帳面をあらためてゐる。その奧の方に二階へ通ずる階子段が見え、上り下りが出來る。

上手は可成り廣い座敷。階子段の裏から、下座敷へ行く廊下がある心。（出入）

上り框の奧、よき邊に黑光りのする大きな角柱、それから下手へ寄せて縁臺の如き長方形の腰掛、これは旅人の中食をする者や、一杯呑の客のかけるに備へてある。平面奧は繩暖簾て、風呂場や臺所に通ずる入口になり居る。

下手寄りに土間を切つた大圍爐裡、自在鍵で鐵瓶をさげ寒氣を凌ぐ爲めに常に焚火を絶やさない。天井の中

央に八間（掛行燈）を吊し、入口の廣く取つた土間を照すやうにしてある。

幕あくと、腰掛には横山宿の權六といふ鬚面の馬方が酒をあふつてゐる。

圍爐裡の前には、定爺と呼ばれてゐる定十が焚火をしながら店番をしてゐる心で、權六と話してゐる。

權六　それぢやア定爺、お前はもう餘程いゝ年だな。

定十　然うよ、もう疾に死んでもいゝ年だよ。

權六　串談云つちやア不可ねえ。人間幾つになつたつて、死んでいゝ年と云ふことがあるものけえな。

定十　だが、もう、つくゞゝ浮世にもあきたからの。（と笑ひながら火を焚きかき立てる）

權六　はゝあ、それで、お前、こんげな宿で往生する氣になつたのだな。

定十　まあ、まあ、そんなもんだ。俺がむかし堺町の中村座に木戸番をしてゐた時分、江戸の千兩役者が謡つた唄の文句に「渡りくらべて世の中見れば阿波の鳴戸の波がしら」と、いふのが如何した拍子か莫迦に若いものゝ血を湧かしての、つい口癖においらも謡つたもんだが、渡りくらべて見りやア、浮世の浪の荒いとこよりは、結句山の方が御所樂でいゝからの。

權六　だがな爺さん、お前のやうに若い時分繁華な所で暮らしたものが、よくもはあ、此麼ところで老い朽ちる氣になつたものだんべえと思ふよ。（間）どうだ、一ぺい飲まねえか。

定十　いゝや、俺や酒は禁物だ。

權六　如何して？

定十　如何してツてこともねえが、そればかりは眞平御免だ。

權六　寒い國へ來て、酒でも飲まなきや凌ぎ切れめえにな。

定十　だが俺ア心願があつて一滴もやらねえのだ。第一酒は苦くて不可ねえ。

權六　然うかな――（と、德利を振りながら）おや、こいつは不可ねえ。おい、誰かもう一本つけて吳れねえか。

（と、番頭與九郎は始めて氣がついた様に顏をあげる。）

番頭　へ――い。おい、お松どん、おきくどん、――誰か居ねえか。

定十　なアに番頭さん、俺が燗をつけて遣るからいゝよ。

（と、立つて繩暖簾へ入る）

番頭　宿の口から始末に負へない女共だ。（と、呟きつゝ）どうも相濟みません。

權六　定爺もいゝが、矢張り酒は、どんな阿魔ッ子でも阿魔ッ子に世話して貰つた方が飲めるだからな。番頭さん。

番頭　へゝゝ、御尤もさまで――。
定十　（德利に酒をつめて出て來り）　え、なんだッて？
權六　おッと、聞えたか、はゝゝ。あやまりだ、あやまりだ。また肴に江戸の芝居の話でも聞かして貰ふべえよ。
定十　なあに、それにや及ばねえ。
權六　はゝゝ、これは大しくじりだ。だがな定爺、此の八王子の德利龜屋にやア、お前のやうな店番がゐるから、胡麻の蠅一疋やつて來やしねえ、本統にお客様が安心だと、お關所を越えて甲府の先きまで響いてゐるだアよ。
定十　そんな胡麻は聞きたくねえの。
權六　いゝや胡麻ぢやアねえ、此頃の街道の評判のよくねえ事と云つたら――やれ、日野宿で枕さがしがあつたの、やれ小佛で追ひ剝が出たのなんざアお茶の子だ。府中から先きへ來ちやア旅籠へついても迂濶に居睡りも出來ねえといふ評判だからな。
番頭　そんな物騷な評判が立つと、ほんとうに街道筋は淋れるばかりで困りものですよ。
定十　（燗の具合を見て）　さあ、ちいッと是はつき過ぎたかもしれねえが。
權六　や、これは有難てえ、（と、あついのを一杯飲んで）キューッと腸に滲み込むやうな熱燗だ。酒飲みはこれでなくちやア嬉しくねえだ。
定十　番頭さん、今夜はもう遲いお客はなさゝうだから、そろ〳〵店のしまりをすべえかの。
權六　フム、もうそんな刻限かなあ。
番頭　いえ、まだ刻限は早うございますが、物騷な話を聞くと氣味が惡うございます。
權六　なアに、そんげな弱い事で旅籠渡世が出來るもんでねえ、胡麻の蠅はさて置いて、どんな惡黨がやつて來たからッて、横山宿の權六が、憚りながら、店に頑張つてゐる間は心配しなさることはねえぞ。（と、頻りに酒を煽る。）
（そこへ正面繩暖簾の出入から、娘のおしま（十八歲）襷をはづしながら出る。）
おしま　おや、權六さん、大相な御機嫌ですことねえ。
權六　イヨウ、おしま坊か、お前さんはまた何時見ても別嬪だなあ。髯むしやの權六も、お前の顏を一日でも拜まねえぢや歸れねえだから困つたもんだて。
おしま　あら、冷かすのは止して下さいよ。それは然うと權六さん、お前今夜はお泊りかい？
權六　おしまさんが泊れと云ふなら、嬶にたゝき出されても泊つて行きてえなあ。
おしま　串談はおいて、此の寒空に、裏口でお馬がひいひい云つてゐますからさ。

權六　違えねえ、俺ばかりいゝ心持になつて酒を喰つてゐちや今日樣に濟まねえ。愛馬のことを全然忘れてゐた――(と、立上り)おしまさん、お前のやうな愛嬌者の親切な看板娘があるから、此の龜屋は繁昌するんだよ。

おしま　あら、厭なをぢさん。(と。取られた手を拂ふ)

權六　なんぼ八王子小町だからッて、厭なをぢさんは御挨拶だな。あはッはゝゝ。

(と、よろめきながら繩暖簾から裏口へ入って行く。)

定十　あれだから酒飲みはだらしがねえ。

おしま　でも爺や、横山宿の權六さんは、顏の割にはほんとうに上人だよ。

定十　あれがまた、顏の割に上人でなかつたら飛んだことだ。

(と、愛想もなく云ひ放つて煙草をふかしてゐる。此時、外に人の來た氣勢がする。)

おしま　あゝお客樣のやうだね。

定十　(障子を開けて)――さあ、どうぞこちらへ――。

客の聲　御免よ。

(と、銀蠅の久太と鼠小僧次郎吉が旅連れの商人風で入つて來る。)

おしま　入らッしやいまし。

番頭　へい、入らッしやいまし。お早いおつきさまで――。

次郎吉　二人連れだが御厄介になられますか。

番頭　へい、畏まりました。――女中達は如何したんだな。おまつさん、お客樣だよ。

(と、おまつと呼ばれた山出しの女中が、上手の下座敷から出て來る。)

おまつ　入らッしやいまし。あの、奥の六疊にしませうね。番頭さん。

番頭　いや、それよりもお二階の八疊の方が廣くていゝだらう。

定十　どれ、俺がお濯ぎを持つて來てやるべえか。(と、裏へ入る。)

次郎吉　いや。構はないで下さい。どんな處でも、雨露さへ凌げれば私達は結構だ。

久太　おいおい、幾ら旅馴れねえからと云つて旅籠へついてまでそんなに遠慮をする奴があるものかな。

番頭　左樣でございますとも、ではおまつどん、お二階へ御案内を。

おまつ　へーい、(と、長く引いた返事をして)――お荷物はわしらが持つてまゐりますべえ。

(と、おまつは先きに二階へあがる。)

おしま　お序でにお風呂は如何でございます。そのうち御夕飯のお支度をいたしますから――。

久太　そいつは有難えな。どうだい同行、おぬしは入らねえか。

次郎吉　どうぞ、お前さんからお先きへお入りなすつて下さい。

久太　ぢやア、古いやつだが湯の辭儀は水になるといふから御免よ。（と、おしまに向ひ）ねえさん、濟まねえが風呂場は何處だい。

おしま　どうぞ此方へ入らッしやいまし。

（と、繩暖簾の奥へ案内する。入れ違ひに定十が濯ぎ湯を持つて來る。）

定十　さあ、これで足をお洗ひなせえ。（間）こちらのお客樣はお湯へ入らッしやらねえか。

次郎吉　私は一寸風邪加減だから止しませう。江戸を出る時お袋がそれを氣にかけて、呉々氣をつけろと云はれてまゐりましたのさ。

定十　それぢや止しなさるがいゝ。まあ此方へ來て少しおあつたまりなせえ。

（と、圍爐裡へ焚木を投げ込みながらいふ。）

次郎吉　へい、有難う存じます。寒い方へ旅に出ては何より焚火が馳走でございますよ。

定十　さあずッと此方へお寄んなせえ。

次郎吉　御免下さい。（と、火に袖を翳しながら）さつき日野宿の出はづれでパラ〱と霙まじりの時雨に會ひましてな、すつかり身體が冷え切つて了ひました。

定十　まあ、よくお溫まりなせえな。（間）お客樣はまだお若えやうだが、感心に親孝行だなあ。

次郎吉　え？

定十　親御さんの言葉が、旅へ出ても耳の底に殘つてゐるだけ當節のお若い方にや珍らしいよ。お前さんのやうな、實直な孝行な子をもちなすつた親御樣はお幸せだ。

次郎吉　ハヽヽ、（と、輕く誤魔化し笑ひを漏らしながら）お爺さんにそんな事を云はれると、私はなんだか耻かしいやうな氣がしてなりませんよ。

定十　なあに、然うでねえ、親孝行は眞似でも譽めてやれといふお上から御改革の御布令が出たといふぢやアねえか。當節の若い奴等は七六ヶ敷しさうな御託をつきやアがるが、眞實の人間らしい心持をもつ奴はありやしねえ、皆んな獸見てえなものだ。それを思ふとお前さんなんざ感心なことをいふよ。惡いことは云はねえから身體を大切にしなせえよ。それが何より親に孝行だ。

次郎吉　ありがたう存じます。お他人樣の有仰つて下さるお言葉とは思はれません。

定十　これが世にいふ、佛心のついた老ぼれほど蒼蠅いことをいふものはねえといふ奴さ、耳に障つたら御免なせ

えよ。はゝゝゝ。
（と、おまつ此時二階から下りて來て臺所の方へ行かうとする。縄暖簾の方から、權六は湯あがりの心で女中のおきくにつかまりながら出て來る。）
權六　だつて、おきくどん、お前のやうな飲相手があつちやア、只此儘は寢つかれねえからな。
おきく　まあ、兎に角、座敷へ行つてまた飲み直しませうツたらさ。だらしがないねえ。
權六　然うか。よし、よし。（と、おまつに行きあたり）おお、おまつ、宵の口からお前のやうに、好きなお客の座敷へばかりへバり付いてゐちやア駄目ぢやアねえか。
（と、醉態をあらはして云ふ）
おまつ　わしらは、お客樣でいそがしいんだよ。
（と、權六を押し除けて臺所の方へ入る。）
權六　へん、厭にツン／＼してやがる。
おきく　そんなことを云つて管を捲いてゐるから、女の子に嫌はれるんだよ。さ、早くおいでツたら。
權六　あいよ、御免よ、あツはゝゝゝ。
（と、上手の下座敷へ、おきく權六入る。）
次郎吉　大した機嫌上戸でございますな。世の中があんな風に送られたら、嘸氣樂で面白うございませうねえ。
定十　馬方なんてものは皆んなあんなものさ。晝のうちは牛か馬のやうに働いて、夜になれば酒でおのが命を吹き返すのだからの。
（と、おしまが縄暖簾から顔を出す。）
おしま　あの、お客樣、御酒をおつけいたしませうか。
次郎吉　然うですねえ、連れの男もいける口らしいから、お膳の上へ一本つけて下さい。
おしま　畏まりました。（と、顔かくれる）
定十　だが、お客樣え、あんまりお若えうちから深酒をなすつちや不可ませんぜ。それが癖になつて、終ひにや飛んだ間違えを仕出來すことがありますからな。喜びも酒、泣きも酒、俺なんざ、その酒の爲めに云はゞ一生を棒に振つて了つたんでさあ。
次郎吉　お爺さんは、江戸の生れでございませうねえ。
定十　扇の的ぢやアねえが、一本矢で當てられましたよ。今ぢやア甲州街道でこんな山猿同樣な暮しをしてゐるがこれでも昔は——。
次郎吉　昔は嘸いろ／＼なことがありませうねえ。
定十　なあに、したみ酒で頬ぺたをたゝいた、ホンノ江戸ツ子の面汚しでさあ。はゝゝゝ。
次郎吉　串談ばツかり有仰います。
（と、銀蠅の久太、風呂上りの心で大立縞の褞袍に着變へて出て來る。）

久太　お丶同行はまだ此處に居なすつたのか。
次郎吉　焚火で身內を溫めながら、旅へ來て昔の江戸の話でも聞かうと思つてゐましたのさ。
久太　成程爺さんは江戸の者らしいねえ。
（と、此の時おまつが膳を二階へ運ぶ。）
次郎吉　あれ、お膳が出たやうですよ。丹波屋さん、お前さんは行ける口らしいから一杯引ッかけて、ほんとうの身內からお溫まりなさるがいゝ。
久太　役者がいゝと見えて、よくお先きへ使はれる奴さねえ、ヂヤア待つて居るよ。
（と、久太は先きへ二階へあがる。）
定十　時に、お客樣え、江戸はどちらのお住居で御座います。
次郎吉　江戸かね――江戸は神田の三河町だ。
定十　神田の三河町？　へえー、それで御商賣は何をなすつて入つしやいますな。
次郎吉　商賣かね――商賣は――織物渡世だ。吳服店だよ。堅くはしてゐるが、ほんの小さな新店でございます。
（と、少しく狼狽の氣味合）
定十　へえー然うでございますかねえ。
次郎吉　可笑しなことを云ふぢやアないか。それに違えはありアしない。（と、やゝムキになる。）

定十　いゝえ、そんな積りで申したのぢやアございません。あの貧乏人ばかりが巢を喰つてゐた神田の三河町に――すると江戸は、大した開け樣でございますねえ。
次郎吉　それア、江戸は、開けたが、イヤ、こッちの渡世はケチなものさ、實は隱さうと思つたが、吳服店と云つたのは名ばかりで、その實貧乏人相手の古着屋ですよ。
定十　へい、然うでございますか。
次郎吉　フム、飛んだ旅籠屋のお白洲に坐り込んで了つたもんだ。はゝゝ。
定十　いや、根掘り、葉掘り、失禮なことを伺つて相濟みませんでした。これといふのも、つい生れ故鄕の江戸が戀しいものですからの。
次郎吉　それは御尤もですよ。
（と、此時帳場の番頭がいきなり話しかける。）
番頭　お話中を甚だ失禮ですが、お客樣は今日はどちらの方からお出ましでございました。
次郎吉　私かね、私は、府中の方から來ましたよ。それで、明日は身延山の方へ行くつもりですがね――。
番頭　お連れ樣は江戸からの御同伴で入らつしやいますか。
次郎吉　いゝえ、然うぢやありません。下高井戸から上石原にかゝらうとする――あのそれ、道はづれの處で連れ

になつたんですよ。

番頭　おや、左様で入らッしやいますか。では、お後で御一緒にお宿帳をどうぞ――。

次郎吉　承知しました。あの人は、なんでも深川の木場だとか云つてゐましたが。

定十　それぢやア甲府あたりへ、木材の仕入れにでも行くのでせうが、なにしろお客様方のやうに、旅から旅へと歩いてゐたら、嘸氣散じなことがありませうねえ。

次郎吉　なあに、他で見るほど樂しみなものぢやアありませんよ。――番頭さん、宿帳は後で二階へやつて置いて下さい。二人で一緒に書きつけて置きますから。

番頭　へい、どうぞよろしく。

（と、番頭は帳場の邊りを片付けて、その儘、上手奥へ入る。）

定十　お客様、お溫まりになつたら、そろ／＼お二階へ入らッしやつては如何でございます。それにお連樣もお待ち遠でせうからね――。

次郎吉　いや、旅は道づれ世は情、話相手がないので仕樣事なしに近づきにはなつたものゝ、實は、お前さんの方が江戸前で話しが合ふよ。

（と、二人きりになつて、自然に親しみのある調子になる。）

定十　お客様え、お前さんも只の鼠ぢやアありませんねえ。

次郎吉　え！

定十　なにさ、お若えに似合はねえ御苦勞人だといふことさ。

次郎吉　おい父さん、若い者だと思つて冷かしちや不可ねえ。（と、がらりと調子を崩して笑ひながら）お前こそ隅へは置けねえ代物だが、餘ッ程前に江戸を賣りなすつたのかい。

定十　然うよなあ、もう彼是十年あまりにもならうかの。

次郎吉　それで、もう、一生江戸へは歸らねえつもりで居なさるのかい。

定十　此の年になつて、何のコケ未練に娑婆ッ氣を出しますものかい。だが、こんな處へ埋もれても、朝に晩に思ひ出すのは只つた一人の悴のことだ――今でも此の世に生きてゐれア、寬政七年の生れだから恰度お客樣位にやアなりませうな。

次郎吉　すると今年、三十二になりなさるんだねえ！　へーえ、不思議なこともあるものだ。して何時頃別れなすつたのだ。

定十　別れたのはまだ孩の上だが、その悴を棄てるまでにやアいろ／＼な懺悔がありますのさ。

次郎吉　チヤア棄兒をなすつたのか。ふーむ。

（と、次郎吉は何物にか打たれた如く、腕を組み片唾を呑んで定十の顔を凝視する。）

定十　なんの、人の親として子の可愛いのに變りはねえが如何した事にかまだ生若え時分から酒が好きで、一杯入ると氣が變り、博奕はござれ、女はござれ、人の道は横道と放蕩に身を持ち崩し、押がり、ゆすり、厭がらせ、ほんに思へば人の物を、斷らずに取らねえばかり。揚句の果てが義理の悪い、他の女と出來合つて、出來た餓鬼が子年の生れ、しかも腹に宿つた其時を、繰つて見れば庚申の、時も寢夜中子時の九ッ、あゝ行先き碌な事はあるまいと、女はそれを苦に病んで、生み落したのがまた或る夜の子の時、九ッ半には血をあげて死んで行つたはまだしも極樂、後は地獄の世話場つゞき、ガンドウ返しに運が悪く、迚も我手で育てゝは、血に染つて赤くなるとも正路の人にはなるめえと、無慈悲の慈悲で棄兒をしました。が、お客樣え、悪いことは出來ねえものさねえ。

次郎吉　成程な、聞くも涙の懺悔話、父さんの忰に一目會はせて、今の仔細を聞かしてやりてえが、その棄兒に何か見覺えの證據でもつけて置きなすつたかえ。

定十　證據と云ふのは、帝釋天樣のお守と、生れた時の臍緒書、淺草の住人定十忰次郎吉と記して置きました筈。

次郎吉　え、次郎吉？

定十　お客樣のお知合に、若しやそんな名の野郎が、ありやしませんでしたかの。

次郎吉　次郎吉といふ名は世間に幾らもあるが、まさか和泉屋の次郎吉ぢやアあるめえな。

定十　和泉屋の次郎吉と云ひますと？

次郎吉　大名や金持の有り餘る藏の中は荒しても、貧乏人や弱い者には黄金の花を撒き散らす、當時義賊と名の高い鼠小僧次郎吉さ。

定十　同じ賊でもそのやうな立派な賊が忰で欲しい。お客樣お察しなすつて下さいまし。（と、思はず涙を拭く）

次郎吉　それぢやア父さん、お前はそんな忰をもつたのを悔みもせず、眞實然う思つておいでなさるのかい。

定十　何の、嘘に涙を流しますものか。竈河岸に住んでゐるとは風の便りに聞きましたが、もしもそれが忰であつたら、よろしく傳へて下さいまし。

次郎吉　その一言を聞かせたら、その野郎も、どんなに喜ぶか知れやしねえ。

（と、感情が迫つて、二人は暗涙に咽び泣く。）

（此の時二階の客（久太）がポン〳〵柏手を鳴らしながら。）

久太　おい、酒を持つて來い、酒を――。

（と、怒鳴る。娘のおしま、縄暖簾から顔を出して。）

おしま　へーい。（と、調子よく答へる）

おまつ　（と、おまつが直ぐ階子段を下りて来る）

おまつ　本統に厭な客だよ、わしが傍について酌をしてやつてるのにさ。

おしま　なんだねえおまつや、何を有仰つたッてお客様ぢやアないかねえ。

おまつ　でも餘りですもの、お前はお多福だから話せねえのなんのかのッて――。わしやもう、あんな客の傍へは行きましねえ。

おしま　仕様のない女だねえ。

久太　おい／＼、どうしたんだ。（と、再び喚ぶ）

おしま　へーい。

（と、おまつは臺所へ入る。おしまは仕方なく二階へ銚子を運んで行かうとする。次郎吉は之を呼び止める。）

次郎吉　もし、もし、ねえさん、そのお銚子はわたしが持つてッてあげませう。

おしま　だッてお客様、あなたに持つて行つて頂いては…………。（と、躊躇する）

次郎吉　なあに、そんな遠慮は入りませんよ。酒癖の善くない男ですから、まア私にまかせて置きなさるがいゝ。

定十　此のお客様だつて御一緒に召し上るんだらうから、然うして頂く方がようがすべえよ。（と、傍から口を添へてやる）

おしま　では、済みませんが、お頼み申します。（と、徳利を次郎吉に渡す）

次郎吉　なんの、お易い御用だ。（と、立上り）ぢやア父さん！

定十　え？（と、思はず顔を見上げる）

次郎吉　なにさ、お蔭で身内がぽか／＼して來ましたと云ふことさ。（と、此の時また二階で手を鳴らすので）ええ、うるせえ極樂蜻蛉だ。

（と、次郎吉は二人を見て笑ひながら二階へ上つてゆく。おしまは好いたらしく見送りながら。）

おしま　ねえ爺や、おなじお泊りのお客様でも、いろ／＼なお方があるわねえ。

定十　全くでございますよ。だが、一々それを氣にしてゐたら旅籠屋稼業は出來ませんよ。

おしま　（茫乎と思入れをつゞけながら）でも、あんな、江戸のお客様は……。

定十　飛、飛んでもねえことだ。おしまさん、ませたやうでもお前はまだおぼこだ。表面はどんな好い男でも、腹の中は反對にどんな惡黨だか知れたものぢやアねえ。決して／＼旅の若い客なんぞに惚れちやア不可ませんぜ。

おしま　あら厭な定爺だ、……誰もそんなことを云やしな

いのに……。（と、愧かしき樣子）
定十　はゝゝ、そんなら爺やも安心でございますがね。
（と、此の時夜番が鳴らして歩く鳴子の音聞え、街道の夜は靜かに更ける。定十は四邊を片付けながら。）
定十　もう聞えるものと云つては火の番の鳴子ばかり、斯う更けちやアお客のこぼれもありますまい。（と、大戸をおろしながら）ヨオウ、寒い／＼と思つたら、到頭白いものがちらついて來ましたよ。
おしま　まあ、然うかい……（と、心そこにあらざる如き氣のない返事をする）
定十　これ、おしまさん、何を茫乎してゐるんだな。さあ、さあ、裏の戸緊りを見て、今夜は早寢にしますべえよ。
（と、おしまは定十に伴はれて、殘り惜しさうに奥へ入る。舞臺空虚、吹雪の中を夜番の鳴子の音だん／＼遠ざかつて暫く犬の遠吠えのみ聞ゆ。）
――（時の進行を見せる爲めに舞臺を暗黑にして直ぐまた明るくするがよし）――
（暫くすると此寂寞を破つて、二階の座敷でけたゝましい物音が聞えて來る。）
久太　此の野郎は太え野郎だ。枕さがしだ、泥棒た。
次郎吉　どツちが枕さがしだ、どツちが泥棒だ。あべこべなことをぬかしやがるな。
久太　なにを――。
次郎吉　四の五の拔かすと、その頬桁を擲き挫くぞ。此の胡麻の蠅の出來星野郎め！
（と、二人は爭ひながら、階子段を引摺るやうに轉げ落ちる。互ひに攫み合つた揚句、次郎吉は久太の利腕をいきなり逆に掴まへて捻りあげる。）
久太　ア、痛え！　ひ、ひ、人殺しだ！
次郎吉　意氣地のねえ事をほざくねえ――此の唐變木め！
（と、此時は、その物音に駭いた番頭與九郎を初め、女中達泊り客の男女等大勢立合ふ。皆々不意の騒ぎに周章狼狽して口々に「泥棒だとよ。」「人殺しだつて。」と、慄へ且つ呟きながら、或者は荷物をかつぎ、或者は、枕行燈などもつて來る等雜景あるべし。亭主仁兵衞は人を掻き分けて、次郎吉の前に進み出る。）
亭主　これは／＼、飛んだ御災難で、何とも申譯がございません。手前が此の龜屋の主人仁兵衞と申す者でございます。
次郎吉　おゝお前さんが宿の御亭主か。いや、飛んだ蚤にたかられての、よる夜中に人騒せをして濟まない譯さ。
亭主　いゝえ、それどころでは御座いません。が、どうぞ

御紛失物をお調べなすつて下さいまし。（と、揉み手をしつゝ膝をすゝめる）

次郎吉　それがの、恥を話さなくツちや解らないが、路用の金はたつた五十兩、譯を云つて頼めば利いて遣らねえこともねえのだが、勘忍のならねえのは街道荒しの枕さがし――胡麻の蠅と睨んだからは――。

久太　そ、そんな事があるものか。嘘をつくのにも程があらあ。

番頭　まあ、まあ、默つて聞いてゐろ。おい權六さん、そいつを緊乎(しつかり)と頼みますよ。

權六　大丈夫だ、おれも横山宿の權六だ。俺がついてゐるからは、こんなやくざ野郎にじたばたさせる事ぢやアねえだ。

（と、權六が久太を後手に抑へてゐる。皆々よろしく捨臺詞にて雷同する。）

亭主　では其路用のお金の他に――なにか御大切な品でも――。

次郎吉　實はその、さつき恥を話さねえぢやア解らないと云つたのはその事さ。まあ、私の弟に清七といふお店者があると思ひなせえ、その清七が不圖したはずみでお千代といふ主人の娘と出來合つて、意見されたその後が若い者の向ふ見ずに、甲府在の身寄りを頼つて、お定まりの駈落ちさね。實は私は商賣用に事寄せて、その駈落者をさがしに旅へ出たものでございます。

亭主　それは。まあ、嘸御心配なことでございませう。

久太　默つて聞いて居りやア、あんな出鱈目の、見て來たやうな嘘ツぱちをぬかしやがる。

次郎吉　まあ、默つて居ろと云ふにさ、手前こそ、赤恥を掻かない用心しろ。實は御亭主、斯うなれば何もかもぶちまけて了ひますが、此の胡麻の蠅にしてやられた金包の中には、下り藤の紋のついた手鏡と、その娘が肌身離さず持つてゐた水天宮樣のお守と――それから、その清七といふ私の弟から、女にあてた起請が一枚入つてゐるんでございますよ。

久太　あッ、と、とんでもねえ事をぬかしやアがる。

權六　此の野郎、神妙にしてゐねえと、おらが此の拳骨でどしようッ骨を一つぶッ喰はせるぜ。（と、威嚇されて久太は默る）

亭主　權六さん、そいつの懷中を探して見ておくんなさい。

權六　おッと承知だ。さあ、野郎、素直に出さねえか。

久太　いや、全く、そ、そんな物は持つちやアゐねえ。

權六　なんと、往生際のよくねえ唐變木だんべえ、此の野郎は――。あッ、もう褌の中へ捩ぢ込んでしまやがつた。

（と、番頭等手傳ひ、久太のじたばたするのを壓へつ

けて、懐中から金包を引出す。亭主が手に取つて調べて見ると、そつくり其儘の金包である。皆々驚き且つ呆れる。）

次郎吉　御亭主、恥ついでに起請の文句を――。

亭主　いえ、飛んでもない。失禮ながら私が殘らず拜見いたしました。どうぞ此の品々は此儘お手元へお收め下さいまし。そして手前どもの行屆きませんところは、幾重にも御勘辨下さいますやうに。

次郎吉　なにさ、胡麻の蠅とも知らねえで、道づれになつたのは此方の落度だ、これを何も德利龜屋の亭主が、そんなに頭をさげて謝罪(あやま)りなさる事はねえのさ。

亭主　然う砕けて有仰られては却つて痛み入ります。どこもお怪我はございませんか。

次郎吉　なあに、どこも怪我なんぞしやアしませんよ。（と、受取つた金包を懐中に收め、更に他の財布から若干の金を出し）これアほんのぽツちりだが世話になつた店の若え衆や女中さん達に、溫え蕎麥の一杯づつも振まつてやつておくんなせえ。

亭主　いゝえ、此の上そんな御心配になりましては――。

次郎吉　まあさ、まあさ、そんな事を云つて私に恥をかゝせるものぢやアねえ。

亭主　では折角でございますから――これ、皆んな、旦那様にお禮を申上げなよ。

皆々　へい、どうも有難うございます。

（と、番頭女中達叮嚀に禮を述べる。）

久太　いやはや、（と、靑息太息）渡る世間とは云ひながら飛んだ厄日があつたものだ。鳶(とんび)のさらつた油揚を、鷹にせしめられるとは此の事か。埋らねえのは俺一人だ。

權六　當前だい、罰當りめ！　鳶ならまだいゝが、手前のやうな胡麻の蠅のつッついた油揚を、街道筋で名の高い此の横山宿の權六様と云ふ鷹が、あんでその儘にさせて置くべえ。

おまつ　ほんとにいゝ氣味だよ、わしら先きの文句ではア、碌な客ぢやアねえと思つてたよ。

おしま　おまつ、お前は餘計なことを云はずに默つておいで。ほんとに皆さん、飛んでもないお騒がせをいたして相濟みません。

客一　なアに、木戸錢なしで見世物を見てゐる樣なものだ。

客二、それにしても、胡麻の蠅なんてものは生圖々しいものだなあ。

次郎吉　泊り合せたお客さん方には、私からお詫びを申上げます。どうぞ皆さん、お部屋へお引取下せえ。

亭主　まあ、それよりは旦那様、あなたこそお二階でもう一休みなすつて下さいまし。これ、おしまや御案内を申

上げな。

おしま　はい。(と、返事よく行きかゝる)

次郎吉　いや、私はどうせ早立ちで立たなければアならないから、寧そ迷惑でも店先で夜明けを待たせて貰ひませうよ。それ、もう何處そで一番鷄が鳴いてゐまさあ。

亭主　それぢやア下の奥座敷で一休みなすつたがよろしうございます。

定十　(此時隅の方から出て來て)　もし、旅のお客樣、折角こゝの旦那のお言葉ですから然うなすつたがようございます。夜の明けるまでにや未だ間がある。それまで此の店先でべん／＼と、面を――いえさ、それアつらう御座いますて。(と、意味をふくめて云ふ)

次郎吉　成程な、然うまで云はれて店の邪魔をするでもあるめえ。では、七つになつたら知らせて下せえ。

定十　御氣遣ひなさいますな、萬事は老爺が合點でござえまさあ。追つて此の胡麻の蠅も夜の明け次第、早速お役人へ引渡すことにいたしますから――。

亭主　では、定爺頼んだぞ――さあ、お客樣御出でなさいませ。

(と、亭主は次郎吉を案内して奥の座敷へ入る。おしまも從ふ。)

番頭　どうぞ皆さんも、お座敷へ――おい、おまつどん、おきくどん、早く御案内をしないかえ。

(と、他の客達も捨臺詞で女中に案内されて入る。勿論權六と定十と、他に番頭を初め若い者が二人ばかり殘る。繩で角柱に括られてゐる久太は、次郎吉が入つて了ふと急に廣い土間に大あぐらを掻いて威張り出す。)

久太　おい、番頭、あの猫冠りのまやかし野郎をなぜ隱した。斯う見えても俺は銀蠅の久太といふ、街道筋で鳴り響いたお兄いさんだ。たゞ生血を吸はれたまゝで、役人の手なんぞへ渡されておたまり拳があるものけえ。

(と、思ひ出したやうに暴れ廻らうとする。しかし繋がれた猿の如く自由にならない。權六は心張棒で矢庭に一つ喰はせる。)

權六　まだ懲りねえか、此の唐變木め!

久太　あツ、痛え。

權六　だから、いたけりやア辛抱してゐろてえことよ。手前も名告るなら俺も名告るが、斯う見えても此の秋の大暴風雨に、街道二十四ヶ村で誰一人手をつける事の出來ねえ雷獸樣を、先知らずの大藪で生捕りにした、向ふ見ずの權六を知らねえか。

久太　そ、そんな、向ふ見ずの馬鹿々々しい野郎を、誰が知るものけえ。

權六　骨なしの癖に、口の減らねえ海鼠野郎だぞ、此の野

郎は――。（と、再び擲りつける）

番頭　ほんとによ、こんな頭ばかりテラ〳〵させた胡麻の蠅でも、だん〳〵に甲羅を經て見さつせ、今に江戸で評判の鼠小僧そこのけの大泥棒になるかも知れねえぞ。

若者一　そんな事にでもなつたら、お蔭で街道筋の旅籠屋はあがつたりでさあ。

若者二　その事を思や今の中に、縊り殺してでも了つたが安心ぢやねえか、なあ權六さん。

權六　違えねえ。（と、つく〴〵彼の顏を覗き込んで噴き出しながら）だが、此の水洟を垂らして戰慄へてる面附を見なせえ、色は厭に生白いがどこか間延びがしてけつかる。お前さん達も商賣に似あはねえ、當て事もねえ言を言つたもんだ。どうして、こんな間拔ッ面に鼠小僧の大役が勤まるべえ。なア定爺、然うぢやねえか。

定十　然うさ、その面を見たばかりでも知れべえわさ。鼠小僧はさて置いて、土鼠小僧か螻蛄小僧が精一ぱいの役どこだアな。

（と、定十は澄まし込んで、以前の場所で再び焚火をつづけてゐる。）

番頭　然う云や此の野郎、螻蛄が手を廣げるやうな格構をしやあがつて、さつきも金を褌へくるみ込んだ手際は呆れたもんだ。

定十　だがの、只くるんだゞけで、卽座にその場で捲きあげられりや埒口はねえやつさ。

番頭　手前のやうな土鼠もちは、下手な道中稼ぎなんざ止しにして、鳥棹の先きへ黐でゝくッけて鎭守様のお賽錢箱でも覘ふが分相應だぞ。

權六　あゝに、それよりや俺が稻田の畔につッ立つて、鳥おどしの案山子がよかんべえぞ。

若者達　ざまア見やがれだ。

（と、皆が寄りたかつて嘲り物にしながら、とゞ若い者が火吹竹を腮の下にあてがつてグイと面をあげさせる。と、彼は急に思入れあつて、今度は先刻と全然別な調子で卷舌になり痰呵を切り初める。）

久太　やい、やい、やい、おいらが身狀を隱す爲めに、態と意氣地なしに見せかけて、さつきから默つてゐりや好い氣になりやがつて、つけ上るにも程があらあ。

權六　な、なんだと――！

久太　なんだも糞もあるものか、此髯むじやの土百姓め！おれを誰だと思つてゐるんだ。いやさ、何誰様たと心得てあんな譫言をこきやがッたんだ。斯う見えてもな、東海道から中仙道、憚りながら日本中を股にかけて面を賣つたお兄いさんだ。こんな蚯蚓のたくるやうな甲州街道に野垂れ込んで、手前達のやうな土百姓にとことんま

で馬鹿にされて溜るものけえ。コウ、たゞの胡麻の蠅とは胡麻の蠅か違ふと云ふことを知らねえんだな。

權六　ど、ど、どんな胡麻の蠅か釜の灰か知るものけえ。（と、やゝ以前と違ふ權幕にのまれたが、更に勇氣を鼓して）やい、俺がさつきから向ふ見ずの權六だとあれ程名告をあげてゐても、命知らずの手前にや解らねえだな。街道二十四ヶ村で——。

久太　また雷獸樣を生捕つた復習か。おきやがれ、ヘン（と、鼻にかけてせゝら笑つて）かんかんのうが頭からお土沙をかけられてグニヤ／＼になりやしめえし、手前つちにおどかされて芝居の引込がつくと思ふけえ、やい、摘むじや野郎！

權六　な、なんだ。

久太　火吹竹をもつた土偶の坊も、何奴も此奴も睡氣ざましにや勿體ねえが耳をかつぽじつて聞きやアがれ。（と、思はず水ッ洟をすゝりあげて）うぬらはまだ俺の本態を知らねえが、銀蠅の久太たあ、云はずと知れた批を胡麻化す、胡麻の蠅の假の名だ位は、いくら血のめぐりの惡い手前達にも解るだらう。おい、たゞの胡麻の蠅だと思ふと相手が違ふぞ。去年の春から此の暮へかけて、街道筋に夜盜火附の風說が絕えねえのは、誰の仕業だと思ふんだ。

權六　えッ、ぢやア、あのうぬが——？

久太　然うよ、日野宿の居直夜盜も、つい此の間此の宿の正福寺へ忍び込んで、寶物の目ぼしいものをせしめた上、あの本堂へ火をかけて祠堂金を殘らず掻つ渫つて逃げたのも、有りやうは此のお泥棒の隱し藝だ。

番頭　あの、お寺を燒いたのも汝が業か。

（と、彼等は顏を見合せて、やゝたじろぐ。）

久太　フン、そんな事で驚くやうぢやア、まだ／＼手前達は砂糖づけだ。（と、益々得意になつて）コウ、能く聞けよ、つい此の中の二十日闇、ほんの宵の手間稼ぎに、大名の金飛脚を小佛峠の頂邊でたゝき斬つたのも俺が腕なら、小原へ通ふ森の中で巡禮の女をかどわかし、揚句の果に首を吊つたやうに見せかけて、殺してのけたのも此の俺の仕事だ。いぬ目、野田尻、與瀨、よし野、中の關所を十日にあげず、府中をかけて甲府から、土藏破りは三十六度、重なる惡事を聞いただけでも、ちッとは膽が冷えたらうな。

權六　ふうむ！（と、すつかり調子に卷き込まれて）成程な、お前といふ人間は、生れついて惡黨の神樣だ。

久太　それと云ふのも元を糺せば、江戶を賣つた旅がらすが、仕樣事なしのこそ／＼仕事、郷に入つては何とやらで、小さくなつた膽ッ玉、イヤハヤ、我ながら語るも耻

かしい位なものだ。

（と、彼の氣焔に若い者二人は勿論、番頭も權六も今度はすつかり感心して、寧ろ一種の渇仰心をさへ牽き起した。）

番頭　はて、それで、すつかり解せたわい。（と、横手を打つて）あの大名や旗本の屋敷へ忍び込んで御納戸金とやらをせしめる江戸の大泥棒、鼠小僧といふのは、さてはおぬしの綽名に違えねえな。

久太　（グッと反身になつて、思入れ）隱すよりあらはれるのが身の素性と、辻講釋で聞いちやゐたが、此の一本槍は受け切れねえ。如何にも江戸で名の高い、鼠小僧とはおれのことだ。（と、横柄面てせゝら笑ふ）

權六　俺も疾から可怪しいとは思つてゐた。イヤ、親方、お前をそんな大泥棒樣とも氣がつかねえで、好きな御託を竝べたことは、どうか大目に見遁して下せえよ。

番頭　だから俺は、初めから大泥棒になる相好をそなへて居ると云つたんだ。然う思つて見直せば見直すほど、只の惡黨ぢやねえわさ。

（と、同時に若い者二人も頻りに囁きながら怖れをなして遠く尻込む。）

久太　おい、おい、若えの（ますます圖に乘つた調子で）こんなしがねえ宿場に住んで、生きてる俺の面を拜むといふのは、何といふ運の强い奴等だ。また此の德利鍋屋も然うだ、一生に一度鼠小僧のお宿をするとは、末代まで旅籠渡世の冥利に叶つてゐると云ふものだ。おい、あんまり饒舌らせられたんで、もう咽喉が乾いて來た。水でもいゝから冷たいのを一杯もつて來て呉れ。

番頭　いや、冷でよければ酒を一杯あげやせう。おい定爺や枡でいゝから一ぱい賴むよ。

權六　だが、八王寺の地酒ぢや此の人の口にやあふめえが――。

定十　やれ、やれ、何の譯だか俺にや解らねえことばかりだ。（と、大欠伸をして徐かに立上り）人間生れてどうせ盜人になるのなら、大盜人にはなりてえものだてのう。

（と、大きな枡で酒を與へる。久太は喉をゴクゴク云はせて呷る。遠近で再び鷄の聲が頻りに啼き出す。）

定十　どれ、もうかれこれ七つに間が無さゝうだ。約束通り奥のお客樣に知らせてやるべえか。（と、彼が上框の方へ近づいた時、次郎吉は姿をあらはす）おゝお早いお目覺めでございます。

次郎吉　おい、番頭さん、勘定を賴むよ。

（と、腰をかけて支度を初める。定十が草鞋を直すので、彼はその手を頂く。）

次郎吉　いや、年寄にそんなことをさせちや罰があたる。

（と、紐を結びながら）今與から來しなに、聞くともなく小耳に挾んだが、此の胡麻の蠅が、なにか滅法氣焔を吐いてゐたやうだが、當時江戸で評判になつてゐる鼠小僧とかいふ野郎ださうだの。

（と、此の間に次郎吉の後からついて來たおしまは、定十の持つて來た次郎吉の笠や合羽を其傍に揃へる。）

番頭　へい左樣ださうで――（と、パチ／＼算盤をすませ）へい、お待遠樣でございました。（と、次郎吉の前に勘定書を出す）

（やがて次郎吉は、それを濟ませて赤鰯のやうな醉眼を反らしてゐる彼に近寄つて、覗き込み、思はず臍の底から込みあげて來る冷笑と憫笑とをもつて。）

次郎吉　おい、丹波屋さん、いやさ銀蠅の久太兄哥、いくら御神酒（おみき）がまはつても、假初ながら一里半道、同行になつた男の親切だ、今俺の云ふことを、ようく耳の中へ入れて置くがいゝぜ。聞けばお前が鼠小僧だと云ふことだが、何を當てにそんな法螺を吹きなさるんだ。一分か二分の端た錢がありや地酒の一杯ぐれえは咽喉（のど）へも通るわさ。なんぼ田舍廻りのこけおどしだからと云つて、大切な首を賭けるにや當るめえが。

久太　な、な、なんだと？　おれが鼠小僧の首をかたツたとでも手前は云ふのか。おい、豪氣におぬしは物知りだの。が、俺はその物知りが氣に喰はねえ。うんにやさ、その物知り面が氣に喰はねえ。豪さうな面をしやがつて、折角おれの懷ろに入つた五十と云ふ大金を――。

次郎吉　これさ、鼠小僧ともあらうものが、五十や百の端た金を、そんな大きな聲で我鳴りや地金が出るわな。折角御用心なせえましだ。此處に斯うしてゐる馬方や若え衆が、正直一圖なのも時に取つては好し惡しだ。まアさ、默つて聞きなせえと云ふ事よ。それあお前が咽喉をからして鼠小僧だと云張るから、人の好い田舍者は然う思ふのが尤もだ。また、然う思はれるお前は鼠小僧によもや違えねえのだらう。が、おれも人間だ、情もあれば涙もあらあ、だからよ、だから俺は今ぢやアつく／＼お前が不憫になつた。何故と云ひねえ、當人のお前が頑張る（がんば）のだから、役人もお前を鼠小僧だと思はねえ譯には行かねえ。

久太　行かねえのが、如何したと云ふんだ。誰が何と云つても俺は正眞正銘の鼠小僧だ。

次郎吉　あツはゝゝゝ（と、初めて高く笑つて）お前の身の心配を俺がするのも可笑しなものだ。それぢや云つて聞かせるが、鼠小僧は天下のおたづね者だ、縛にかゝつたその時は、輕くて死罪、獄門首、逆磔（さかはりつけ）は脱れねえぜ。

久太　えツ、ぢやア、鼠小僧は涜礫か！　あゝおれは知らなかつた。そんなことゝは知らなかつた。（間）先つきならべた事は皆んな嘘だ。おれはまだ、生れて人殺しなんぞをしたことはねえ。嘘だ〳〵。

次郎吉　おツと、それは不可ねえ、今更そんな泣事を並べても、今の今まで横手を打つて感心させられた――此の皆様方が承知なさるめえ。あツはゝゝゝ。

（久太は泣いてるのか笑つてるのか、まだ酒に酔つてるのか解らない表情をしてゐる。此の時、外から劇しく大戸を敲く音が息苦しきまで續いて聞える。）

定十　ど、どなた様でございます。

外の聲　尋ねたいことがあるから、一寸此處を開けて下さい。

（猶も外から敲きつゞけるので、定十は次郎吉に目くばせをして置いて矢庭に大戸を開く。先づ、三下の金藏が躍り込むやうに這入つて來る。そして突如定十に耳打ちすると、定十は默して捕縛されてゐる久太を指さす。）

（次郎吉と金藏とは、土間の眞中に一瞬間睨み合ひの如く相對して立ち竦んだ。が、次の瞬間には金藏が、知らぬ振りで久太の傍へ歩み寄る。そして彼が、呼子を取り出して吹き立てると、再び大戸から大勢の捕手がバラ〳〵と雪崩の如く流れ込む。そして金藏の差圖で久太の周圍にあつまる、此時までピツタリと大戸の傍にくつゝいて居た次郎吉は、擦れ違ひに外に飛び出る。）

おしま　あツ、もし――。

（と、彼女は笠をしつかりと次郎吉に手渡しする。此時は只吹雪の中に立つた男の手首だけが僅かに見える。）

定十　もし〳〵、早立のお客様、お忘れ物のないやうに……氣をつけて行かつし……。

吹雪は用捨なく劇しく大戸から吹き入る。おしまと定十とは折重るやうに立ち盡して見送る。暗い夜は雪明りに白み初める。

――幕――

樽屋おせん（二幕四場）

人物

樽屋與七
その妻おせん
麴屋長左衛門
内儀おちか
夫婦池の媼
麴屋の老僕久助
近隣の女房きよ
同　ふみ
同　さだ
その他、下女お杉、客、働きの人々大勢。

時代

貞享年間のこと

場所

大阪、天滿

第一幕　麴屋納戸の場

貞享元年師走十六日の夜。麴屋長左衛門宅では、先々代の五十年忌の法事が別室で催されてゐる。まだ六ッ半時頃のこゝろ。たゝき鉦、唱名の聲は寧ろ陽氣なほどに賑やかに聞えてゐる。

幕明くと、納戸の間へちよつと息を入れに來た内儀のおちかに向つて、近所の女房たちが諸道具の取さばき一々の布巾がけをしながらお世辭たら〳〵に話しかけてゐるこゝろ。

女房一　まあ、おえさま、ゆるりと一服おつけなされませ。

女房二　これほどのお立派な御法事は近ごろ此の天滿では聞いたことも見たこともござんせぬ。

女房三　それにつけても、おえさまのお勞れは大抵なことではござんすまいに、ようまあ、おからだが續きますなあ。

おちか　もう〳〵、立ち草臥れと氣勞れとで、ちやつと踞んだが最後、立ちあがるのも氣だるうなりますわ。

女房三　然うでござんせうともな。まあ、ゆるりと此處で油をお賣りなされたがようございます。

おちか　然ういふ皆さんも、嘸お草臥れであろ、どうぞ休み〳〵働いて下さりませや。

女房一　なんのまあ、わたし達のからだは、おえさまのおからだとは生れだちからつくりが違ひます。

女房二　ほんに、別詫ひのやくざ者とはこちとらの身のことかいな。はゝゝ。

（皆々口をあいて大笑ひをする。）

女房三　まあ、まあ、はしたない、御法事のお手傳ひに、こんな大口あいて笑ふものがあらうかいな。御免なさりませ。

おちか　なんの、法事と云うて先々代樣の五十年忌ぢやもの悲しいの愁嘆のといふ法事ではない。云はゞ麴屋長左衞門の家の運かようて斯うして出來るのが目度出いくらゐのもの、決して遠慮は入らぬわいな。

女房二　それ聞いてほッとしました。

女房一　ほんにおえさまは、御大家のお生れ、わしらは長屋育ち、然う仰有られると近いところに住んでゐても、斯うしてしみ〴〵とお言葉をかはされるのも、御法事があればこそでございます。

女房三　皆んな、こゝろから有難いと存じてをります。

おちか　ほゝゝ、まあ、皆んな揃うてお世辭のよい。わしぢやとてむかしは麴屋の聟取娘、隨分と氣儘には育てられたが、また今の長左衞門殿の代になつてからはいろいろ味な苦勞もしてゐますほどに、同じ近所の女房と思うて交き合ひを賴みますぞえ。

女房二　そのお言葉では恐れ入ります。何ぞの時には斯うして働きに寄せていたゞく事の出來ますのも、ふだん裏横町で御厄介になつてゐるお蔭でございます。

おちか　（ちよつと聽耳を立てゝ）おゝいつの間にか年寄衆の百萬遍も濟んださうな。どれ、わしは斯うして油を賣つてはゐられませんわ。

（と、立退らうとする途端に、主人長左衞門が上手奧の方から入り來る。）

長左　おゝどこへ行つたことかと思つたら、おちか、お前はこゝに居たのか。もうお寺樣もお歸り、客人も大抵は揃つたのに、お前が顏を見せねばどうもなりませぬ。

おちか　はて、せはしないこと〳〵。どちら向いても樂は出來ぬ。いつになつても聟取娘は血の淚かいな。ほゝゝゝ。

女房一　おえさまの戲談（じやうだん）ばッかり……ほゝゝゝ。

（と、皆々顏を見合せて再び笑ふ。）

長左　ふむ、いつまで娘の氣でゐるのぢや。阿呆云はずと、早うあちへ行て客膳の差圖でもして與れぬかい。

おちか　はて、氣忙はしい旦那どの、もう一服吸うて直ぐ立ちますわいな。

（と、此の時、下手廊下傳ひに障子をあけて、椊屋のおせんが顏を出し、丁寧に辭儀をする。）

おせん　御免なされませ。

長左　おゝ樽屋のおせんさんか、二日も三日もつゞいて手傳うて貰うては濟まぬなあ。
おちか　ほんに手ずくなの處を、節季師走に嘸與七どのがお困りであらう。今宵はもう來て下されいでもよかつたに……。(と、じろ〳〵見ながらいふ)
おせん　いえ〳〵、それでは平素お出入りをさせて戴く御恩返しがなりませぬ。與七もあがらねばならぬ筈でございますが、稼ぐに追ひつく貧乏で、相も變らず夜仕事に追はれつゞけ、具々もよろしう申しました。
長左　いや、その志ばかりでも忝けない。さあ、ずッとこッちへ入つて下さい。
おせん　はい――(と、他の女房達に)どうも遲うなつて濟みませぬ。どなたも御苦勞さま。
女房二　どういたしまして。忙しい時はお互ひのことゆゑ、遠慮しないがようござんす。
女房三　おせんさん、お前も御苦勞さま。
長左　(思ひついた樣に)あゝ、では斯うしませう。おちかは臺所のものを差圖して、皆さんに膳部を座敷へ運んで貰ふがよからう。
おちか　何事も旦那どのゝ云ひつけを守るのが家内安全。では、おきよどの皆さんは然うお賴みいたします。
女房連　はい、はい、畏まりました。

(と、三人はその儘下手の方へ入る。)
おせん　では、わたしも勝手の方へでも廻つてお手傳ひを申します。(と、袂をさぐり襷を出しながら立かゝる)
長左　いや、おせんさんには、此の納戸で菓子の取り合せを賴みませう。なあ、おちか、それがよいではないか。
おちか　然うでござんす。おせんさんは此の天滿に名高い難波屋で久しう奥づとめをせられてゐたゆゑ、何をさせても才覺者ぢやと世間の評判、不味い品々も美しう色模樣の取合せがかんじんぢや。では、これを賴みます。
おせん　まあ、おえさまのおだて上手な。そんなことを申されては、不恙者の羞しうござんすけれど――。(と、躊躇しつゝいふ)
おちか　いえ〳〵嘘ぢやない。うちの旦那どのは、何かにつけてお前をほめものにしておいでなさる。嘘と思ふなら今玆にゐるうち直に聞いて見なさるがよいわいの。はゝ。戯談はさておいて、此のお重の中が饅頭、これが御所柿、此の中が唐くるみ、落雁、人數に合せて此の緣高に程よく盛り合せて下さんせ。
おせん　はい、はい、畏まりました。
(と、俯向いていろ〳〵に組合せを初めようとする。おちか覗き込むやうに見る。)
おちか　まあ、今に初まつたことではないが、おせんさん

の艶々とした此の髮の黑いこと、美しいこと。それにまあ、今日は一だんと結び具合が氣に入つた。心憎いほどよい形ぢや。女でさへ然う思ふもの、男が見たらどのやうであらう。なう旦那どの。
長左　樽屋の與七どのは果報者、おのが女房にまた惚れ直しをするであらうよ。
おせん　あれ、旦那さままでがその樣な、お口の惡いことを――。（と、面を赧めて含羞む）
長左　なんの惡口ではない、譽めてゐるのぢや、はゝゝ。
おちか　ほゝゝ、眞實のことぢや。それを思ふと、わしも早う持病の血の道を癒して、もう一度おせんさんのやうな若々しい元氣になつて、好き次第に日髮でも結うて暮して見たう思ひますわいな。（と、長左衞門を見つゝいふ）
おせん　おえさまがそんな事を云はれたら、京大阪はおいて日本中たづねても、他に羨ましいとは思はれる身柄の女子は無うなりませうぞえ。
長左　兎角、儘にならぬので浮世もおもしろ可笑しいものぢやと――先きにもお住寺樣が有仰られたよ。
おちか　ほんに、そんなものかいな。
長左　人のよいことを羨むこゝろが煩惱の初めぢやさうな。そして此の婆婆では善行を積んで、生れ變る世を待つのが悟りのどん詰めぢやさうな。
おせん　では、わたしらのやうな賤しい身柄で、及びもつかぬ結構づくめな御身分を羨むといふ不心得は、ふつふつ今宵かぎりにいたしませうわいな。ほゝゝ。
（と、輕く笑つた時、女中のお杉が『おえさま。旦那樣。』とよびながら出る。）
おちか　おゝ杉か、何ぢやぞいな、そんなところから騷がしう呼び立てゝ――。
女中　なんぢやどころではござりませぬ。おえさまが早うおいで下さらねば、折角火にかけたものを下したり、また火にかけたり、とんと埒が明きませんといな。
おちか　おゝそれはわたしが惡かつた。もし、旦那どのもあちへ來て扶けて下され。
長左　では、さうせうか。
（と、二人は立かゝる。おせんは再び菓子を盛り初める。）
女中　いえ〳〵、旦那さまにはまだ納戸から出して戴くものがございます。久助爺の云ふには、なんでも棚のどこぞに七つ組合せになつた錦手の立派な入子鉢がある筈ぢやが、旦那さまにお探し申して頂けとのことで、入釜しう云うてゐます。
おちか　では、わたしはちやつと先きにまゐります。

女中　さあ、さあ、おえさまは急いでお勝手の方へおいで下さりませ。
おちか　お前がその様に追ひ立てていでも、もう直ぐ行くわいな。
（と、内儀は急ぎ足でつぶやきつゝ退場する。長左衞門は棚の上をいろいろに延びあがりて探して見る。）
長左　はて、どれへ置いたものであらう。祭りの時に出したぎりゆゑ。とんと見當がつかぬてな。（と、お杉を振向いて見て）おゝそこに立つて待つてゐられては氣が急いてならぬ。お杉、お前はその間に此の椀と此の壺類を運んで置いてたもれ。（と、傍のを渡す）
女中　はい、はい。では、旦那さま後から直ぐに今の品お頼み申します。
長左　えゝ氣短いやつの、今探し當てゝゐるところぢやないか。
（と、しかり氣味に云はれたので、頰ふくらせてお杉は立去る。）
おせん　ほんにせはしない。御大家のことゆゑ、無菜の御齋と申されても斯うしてお客さまをなさるのは、大抵のことではござんせぬな。
長左　いや、何もかも皆んな町衆のお世話にあづかるばかり、なんの雜作もありませぬが、囘忌も五十年になれば朝は精進しても、晩は魚類を出して歌酒宴に、皆さまにもお口を濕らして頂かねば濟みませぬのでな。
おせん　ほんに最後の御法事ゆゑ、大抵のお物入りではござんすまい。こんな時を考へますと、平素しがない樽屋風情が結句氣樂でようございます。
長左　どうして〳〵お宅などは、女夫さし向ひの樂しいお暮し、與七どのは正直一圖、またおせんさんは、良人大事に家を守つて、朝から一日縞物など織つて活計をたすけられるとの噂、從つて少からず小金も溜つたらうと、町内で誰一人夫婦の仲を羨まぬものはないほど。――世の中にこんな幸福なことはございますまい。
おせん　さう有仰られるとお耻かしい。夫はあの通り世間氣のない人で、丸い世の中を時には態と四角にしても渡らうといふ性質、他の見るほど樂なものぢやござんせぬ。
長左　だが、好きで一緒になつたのが――斯う申しては失禮かもしれぬが、何より羨ましいと思ひますよ。
おせん　ほんに、緣は異なものと申しますが、時々われながら不思議に思はないことのないでもござんせぬ。
長左　それを思ふと、此の家へ聟養子になつたわたしなどは――。
おせん　え？
長左　いゝえ、なアに――有仰るとほり、緣ほど不思議な

ものはありませんと思ひますのさ。

（と、此の時まで、いろ〳〵話のうちに、女は菓子を鉢にうつし、男は頻りに棚の上を探しまはしてゐたが、漸くさがし當てゝ取下さうと爪立ちする途端、過つて器は結び立てのおせんが髮に落ち、髮の結目がぷッつり切れる。）

長左　やッ、これは、と、とんだ粗相しました。どこも痛めはしませぬか。

おせん　いゝえ、どこも痛めはいたしませぬ。

（と、利かぬ氣性の態と顏にもあらはさず我慢して亂れた髮をおさへる。）

長左　おゝ、折角よう結うた髮を――これは、まあ、飛んだことをしましたな。

（と、近づいて心から詫びる。）

おせん　いゝえ、何ういたしまして、旦那さま、決して御心配下さいますな。（と、さもない事のやうに笑つて見せ）おえさまは、大變よう出來たと譽めて下さんしたが、あり樣は今朝夫婦池のこさんといふ産婆の媼がやつて來てついちやつと氣輕るに結びあげてくれた髮、またして貰うたとて、なんの手間隙も、錢かねも入つたものぢやありませぬに――ほゝゝゝ。

（と、語りつゝおせんは、何んの仔細もなくグル〳〵と卷き直して了ふ。）

長左　それでもまあ、どこも傷めずに濟んでよかつた。法事の時ではあり、家へ働きに來て吳れたこなたに怪我をさせたとあつては、與七どのにも申譯がないと思うて、大ていい氣をいためた事ではなかつたわい。

おせん　心なくこんな處にをつたばかりに、飛んだ御心配をかけて濟みませなんだ。

長左　それどころではない。わしが粗相を重々詫びねばなりませぬわ。

おせん　わたしの髮のこはれより、何一つお粗末なものゝない大切な器に、もしや割れでも……。

長左　なんの、よしんばどの樣な貴重な器にしてからが、人間のからだとは比べられませぬ。

おせん　でも、勿體ない。飛んだことをいたしましたなあ。

長左　こゝで破れるも、此の器の壽命でがなあらうよ。はゝゝゝ。

（と、急ぎ破片を拾つて箱に入れ、他の品をよろしく見分けてゐる。）

（その途端、廊下の方からおちかの聲が聞える。）

おちか　もし、旦那どの、旦那どの！　お前はまあ、いつまで此處になにしてぢや。久助爺がさつきの入子鉢を待ちかねてゐますわいな。

長左　まあ、あわたゞしい。その樣に云うてもこれ程の品の中ぢやもの、然う／＼は見當らぬわい。

（と、ちよつと思入れ、態とその事を妻に話さず、その場をつくろふふりにて七つ組合せの入子鉢の箱をかゝへて直ぐ入れ違ひに出て行く。）

（その場合の妙な調子をおちかはやゝ疑ひの眼で見送る。）

おちか　おせんどの、御苦勞ながら、それも盛合せが濟んだらあちらへ運んで置いて下され。

おせん　はい。ようはまゐりませぬが、こんな事でよろしう御座いませうか。

おちか　まあ、結構に、美しう……。（と、云ひつゝおちかの眼は髮のこはれたおせんの頭に注がれる）

おせん　では、あちらへ持つてまゐりませう。

（と、おせんが立上らうとした時には、おちかは先きの長左衞門の素振りと、彼女の髮の具合から心中あらぬ事を想像に描いて、忽ち嫉妬の念を起すに至る。）

おちか　おや、おせんさん、お前その髮はどうしました。さつきまであんなに綺麗に結つておいでゝあつたものを……。

おせん　あゝこれでござんすか。これは只つた今、旦那さんが、そこの棚から器をお下しなさるとき、つい粗相でお手を滑らせなさんしたのが、心なくお邪魔なところに居たわたしの髷にあたり、生憎元結が切れて了ひましたゆゑ、ついグル／＼と束ねて置きました。（と、態と輕く笑ひを含み）お家樣のやうな御身分とは違うて、朝から晩までやつさもつさ立働いてゐる身柄のものには、寧そこの方が輕々と氣持ようござんすわいな。

おちか　それはまあ、ひよんなこと――嘸痛うござんしたらうに――（と、猶も底から見るやうな目つきを光らせながら）旦那どのも旦那どの、近くにこなたがゐると思つたら氣をつけてなさればよいになあ。

おせん　いゝえ時のはずみは妙なもので、ちツとも痛みはしませぬし、髮がほぐれたゞけでどこに一つかすり傷もいたしませなんだ。

おちか　まあ、まあ、然うかいな。それで濟んでよかつたが、わしからも、ほんに詫びをせねばならぬことぢや。（間）それを旦那どのは氣振りにも知らせず、つんけんと小言まじりで出て行かれた――（と、今更のやうに後を見直し、心の焦つ表情。）ほんに、おせんさん、こなたには氣の毒なことであつた。

おせん　飛んでもないことを有仰います。このやうな態がお家樣のお目にとまり、そのお言葉では却つてわたしが痛み入ります。

おちか　したが、おせんさん、（と、稍皮肉に蔑むやうな思入をして）あれは今日結うたばかりの髮であらうが、たつた一晩保たせずにこはして了つては、家へ歸つて與七どのになじられたらお前なんと云ひ譯をしますぞえ。

おせん　ほゝゝ。まあ、御寮人さまのお身ではその樣なことまでお氣を揉まれますかいな。なんの、これしきの事を心づくほどの氣ばたらきある男ではございませぬ。それに、なんのかのと面倒なこと云はうより女の口でついちよぼくさ云つてのければ、それで事は濟んで了ひますわいな。

おちか　まあ、その樣なことが——なんぼこなたの連合ひが職人ぢやとて、ついちよぼくさと——まあ、まあ、然うかいな。

（と、煙草の煙を高く天井に向つて燻らせつゝ皮肉に云ふ彼女の面は全く青褪め且つ顫へてゐる。）

（おせんは寧ろ驚いておちかの面を覗き込み、何か云はうとする。その途端に長左衛門入り來る。）

長左　おゝ、おちか、お前こそどうしたものぢや。他を急がせて置きながら、べん〳〵と坐り込んで、納戸で煙草ふかして落ついてゐる奴があるものか。これ、今夜のお客をどうするつもりぢや。

おちか　まあ、何がその樣に積に障るか知らぬが、急に物云ひの惡いこと！　まあお前も此處へ坐りなさんせ。

長左　えゝ、此の忙しいさなかに、なんで坐つてなぞゐられるものか。（と、おせんに向ひ）おせんどの、こなたは憚りながら、その菓子が出來たら、早うあちへ運んで下さい。

おせん　はい、はい。

（と、おせんはこれを潮に行かうとする。おちか猶むらむらとして來る。）

おちか　いや、おせんさん、ちやッとお待ち。

おせん　え、まだなんぞ、此處に御用が——。

おちか　まあ、お坐り、お前を贔屓のこちの旦那どのが見えたのに、然う急いで逃げることもあるまい。また、旦那どのも止めたがよいではないか。

長左　えゝ、つべこべと下らぬことを——これ、日頃とは譯が違ふぞ。先々代樣の五十年忌、町衆の客が大勢ある仲で、また何ぞ下らぬ事を楯にこだはる氣か。なんぼ家附の娘でも十九や二十のものではなし、もう大槪に世間が飲み込めさうなものぢや。

おちか　いゝえ、飲み込めぬ。わたしや生得鈍な生れつきぢやによつて、はつきり云うて與れねば何事も飲み込めませぬ。（と、ヒステリックにたかぶッた語調）

長左　なんぢやと——（と、凝視して）ふむ、また何か些

細なことに氣を立てゝ、顏の色まで變へて騷ぐ奴があるものか。ちッとたしなむがよいわ。

おちか　何もせぬものにたしなめとは――ふむ、それは誰に云ふ言葉ぢや。以前は兎もあれ、今は麹屋長左衞門といふ大店の主人、お前こそ……お前こそ……（と、昂奮して）大恩受けた祖父樣の法事をするといふその晩に………。

長左　一體わしがどうしたといふのぢや。

おちか　どうしたも、斯うしたも、……えゝ目の前で馬鹿にされゐるかと思へば腹が立つ。

長左　えゝ、なにを世迷言を云つてゐるのぢや。お前を馬鹿にするとは――一體、何を、その樣に腹が立つのぢや。

おちか　フン、白ばくれるにも程がある。これ、此の髮は――鉢が落ちたぐらゐのことで、あのやうに堅く結んであつたおせんどのゝ此髮が、然うも造作なく解けますかよ。

（と、益々云ひ募つて、險しい眼になつて二人に當てつけるやうに云ふ。おせんは玆まで眤と默り込んで聞いてゐたが、此の一語にギョッとして冷水をでも浴せかけられた如く驚く。そして思はず長左衞門と面を見合せる。）

長左　（思はず膝をすゝめ）これ、これ、おちか！　おせんどのゝゐる前で……その物の云ひやうは……日頃は病身ぢやと思うてゆるして置けばつけあがつて……これ、いくら氣まゝでも宥せることゝ宥せぬことがあるぞよ。おせんどの、決して氣を悪くして下さるな。

おちか　……（冷かな流し眼で聞き流してゐる）

おせん　……（默つて、うつ向いてゐたが、負け嫌ひな彼女は忽ち耐へられなくなつて、）もし、お家さま、それは……それは、あまりと云へば言葉過ぎた邪推、わたしゃお前に疑られる覺えはござんせぬ。

（と、キッとなつて息まく。）

おちか　ふん、疑られる覺えはないかあるか、その場に居合せたものは、たつた二人ぎり……さ、なにがあつたか知れたものかい。然うでなくば、そのふしだらな態でよう羞かしくもなく、ぺら／＼と嘘が云はれたもの、そんな事で云ひくるめられるわたしぢやと思つてか。

おせん　え、嘘を云ふたとえ？――。

長左　えゝ、恥を知れ。おのが心の僻み妬みから出てゐることを、あゝ云へば斯う云ふと……何も知らぬ町衆に聞かれたら麹屋長左衞門が外聞にもかゝはることぢや。殊におせんさんは女のこと、えゝ大抵につゝしまぬか。

おちか　それほど恥外聞を氣にするお前が、こんなことがよう出來たな。

長左　こんなことゝは……つい、過ちで落したものを、どうしようにも仕様がない。若し、與七どのになじられたら詫證文かいてなりとあやまるより是非がないわ。

おちか　えゝお前までが言葉を合せて……それほどおのが女房を馬鹿にしたいものか。それなら、さつきわたしが納戸へ戻つて來たとき、つい斯う／＼となぜ云はれぬ。ほじり出されて聞きながら、まだ云ひくるめようとする心の底がわたしや憎い。

（と、再び激しく云ひ募る。此の少し以前、廊下へ來かかつた女中の一人が様子を聞きつけ急ぎ入る。一方には客一方には近所の働きの女房達が二人三人づゝ立聞きをはじめ、此あたりになつて大勢姿をあらはし立聽きする。長左衛門はさすがに嚇と癇癪をおこさずにはゐられなかつた。）

長左　えゝ、おのれ、憎いとはどつちで云ふことぢや。耻外聞を思へばこそ、さつきから顫へる拳を握りしめて、我慢してゐればよいことにして、よくも、よくも……。

（と、擲りにかゝらうとする。その手を、おせんがしつかりと抑へる。）

おせん　もし、旦那さま、此の上に言葉を荒立てゝ云へば云ふほど、ない耻を世間に云ひ立てするやうなもの、どうぞ我慢して……な、もし、何と云ひ曲げられても、わしさへ耐へれば此の場は濟みます。（と、口惜し涙を絞りながら勝氣をあらはして止める。）

長左　とさ、わしも思はぬではないが、餘まりに無茶な物の云ひやう、第一おせんさん、お前に濟みませぬ。

おちか　ふん、おのが女を庇ふためには、非をあげらるゝ女房を打ちたゝきする亭主は世間にいくらもある。長左衛門どの、さツ、どうなとするがよい。

長左　えゝ、まだぬかし居るか。

おせん　これ、旦那さま、今夜だけは何も云はずに……。

（と、再び止める。）

（そこへ久助爺が飛込んで來て、おちかをなだめる。）

久助　まゝ何事も今夜は折が悪い。さ、氣をしづめて、あちへお出でなされませ。御法事の晩に御夫婦のいさかひは、たとひ如何やうな間違ひがあるにもせよ、譽められた話ではございませぬ。

おちか　おゝ久助爺か、でも、旦那どのがあんまりなお仕打ちをなさるゆゑ、わしや腹が立つて……

長左　えゝ悋氣も時によるわい。久助、この氣狂ひめには、ほと／＼弱り切つたわい。

久助　まゝゝ、お二人とも、その事は、この爺におあづけなされ。さ、おえさま、早うあちへまゐつてお客様の前をよいやうに繕うて下さりませ。――では、旦那様。

おせんどのも耐へて下され。

(と、言外に意をふくめ二人に思入をして、おちかをなだめながら連れ去る。近所の女房達も共にいたはりながらおせんの事をさゝやき合ひつゝ立去る。)

おせん　生れてまだ、これほどの恥を掻いたことがない。

(おせんは唇を嚙みしめて、おちかを見送つたが、女房達のさゝやくのを聞くと恥よりも口惜しくなつた。そして涙がぽろ〱とこぼれるのを、長左衞門はちらと見て取つた。)

長左　おせんさん、申譯がない。が何事も能う耐へて下された。これ、此の通りぢや。

(と、手を合せて拜む。おせんはそれを打消す。)

おせん　なんの、お前様には濟まぬ。が、思へば世間に面出しのならぬほどの生恥をかゝされた。えゝ恥よりは寧そ口惜しい。……口惜しい……口惜しい。

(と、勝氣から今迄恥を忍んでゐたのが、初めて玆に突發して、怒りに燃え立ち、口惜し泣きに泣き崩れる。)

(長左衞門はこれをなだめる。)

——幕——

第二幕　樽屋内の場

麹屋の近邊にある裏屋、樽屋與七の住居である。舞臺はその内部。茶の間が中心になつて、奥の座敷と仕事場がある。

時は翌貞享二年、正月二十二日の夜、まだ暮六ツの時刻、近所の稽古三味線で幕明く。

與七はたつた一人、悄乎として長火鉢の前に顔をうづめて屈託に耽つてゐる。そこへ夫婦池の産婆の老嫗が門口からおとづれる。

老嫗　おせんさん……おせんさんはお留守かいな。(と、門口をあけて透かし覗る)

與七　おせんは留守ぢやが、どなたでございます。

老嫗　わしぢやわいな。夫婦池の産婆の嫗ぢやが——おゝ與七さん、日の暮れるのに、ぼんやりと何をしてゐなさるのぢや。

與七　あゝ夫婦池のおばゞか。ようおいでぢやな。まあずッと此方へおあがり。

老嫗　では御免——(と、内へ入り)斯のやうに暗うなつても灯をともさんのかいな。

與七　おせんが居ぬので、とんと忘れてのけた。ほんに何時の間にか暮れてしまうたな。(と、行燈を出して火をともす)

老嫗　與七さん、お前また此頃物案じを初めさしつたな。

與七　いゝえ、なに、そんなことがあるものかぺと、やゝ狼狽氣味で）暮のうちから急かれた仕事を、正月になつてからも碌々かたづけぬので、つい思案をしてゐましたわ。

老媼　いゝえ、それは嘘ぢや。嘘であらう、その仕事のはかのゆかぬのも、あり様はおせんさんのあのことを、まだいろいろに思ひ惱んでゐるのであらうが。

與七　おせんのあのこと？　あの事とは一體何のことぢや。

老媼　白ばくれるにも程がある。それ、去年の師走の十六日表の麴屋に法事のあつた晩のことさ。

與七　うむ、それではおばゞ、お前までがあの晩のことを聞き知つてゐなさるか。

老媼　さ、今までは聞いて聞かぬ振をしてゐましたが、廣いと云うても天滿へは毎日のやうに通つて來るわしぢや。そこ此處にお産のある度にどんな大店の奥へも行けば、また貧乏人の裏長屋へも出入りする商賣ゆゑ、どんな世間話でも不思議なほど此の耳には早う入つて來る。實はおせんさんのことも暮のうちに聞いてはゐたが、お前がこれほどに氣にかけてゐなさるとは知らなんだからちよいちよい來てもまるで聞かぬ振りをしてゐましたのぢや。

與七　おゝ然うであつたか。然うとは知らずわしもお前に世話して貰つた女房、樽屋風情の身分に過ぎたいゝ嫁を取つた、心から有難い、嬉しいと云うてゐたその舌で、こなたに愚痴めいたことを聞かせ、男の癖に意氣地なしだと蔑まれるのもむやくしいと、實は今日まで獨りで頭を惱めてゐました。おばゝ、樽屋の與七たとて、職人ながら男の端くれ、其後ちといふものは、世間の口と女房の素振りが氣になつて、碌々商賣も手につきませぬのぢや。

老媼　おゝその切ないこゝろは察してゐる。察してはゐるがなんの、それほどに氣にかける事でもなんでもない。云はゞ麴屋の内儀の悋氣から起つたことぢや。

與七　わしも然うは思つてゐる。が、二人で納戸にゐたところへ、鉢が落ちて結ひ立ての髮がこはれたと云ふことだけで、……たゞそれだけの事で亭主の耻にもなることを、客の耳へ入るやうに騷ぎ出したと云ふことが、どうも俺には飲み込めないのぢや。

老媼　然う云うてお前が、おせんさんを疑るこゝろが一ばんよくない。それでは何んのこともない夫婦の仲に、態態溝を穿るやうなものではないか。

與七　だが、おばゞ！　その後おせんの落着かぬ樣子と云ひ以前とは打つて變つて只焦々と氣が短かく、一言云へ

ばニ言で強くあたり、家を外に出歩くので、わしもともども氣が落ちつかぬ。（と、思はず溜息をもらす。）

老媼　さゝそれと云ふのも、お前がおせんさんを信ぜぬのが根になつていろ／＼に花が咲くのぢや。その仇花が咲くやうでは、家内の面白う暮せる筈がない。

與七　俺もそれが口惜しいとは思ふが、つい顏を合せると愚痴にもなれば、また偶々は女のつゝしみ、たしなみも云ひたくなる。おばゝ、それは俺の無理であらうか。

老媼　いや、無理ではない、云ふことがあれば亭主ぢやもの何を云うても段ないが、今のところ餘まりそれを責めるは惡い。

與七　なぜ、惡い？

老媼　さ、なぜと云うて……總じて女は、氣の狹いところから兎角一圖に物を思ひつめるものぢや。わけておせんさんのやうな勝氣な人は、口には出さずに、ひよツと心の反れることがあつてはならぬと思うて……な。

與七　おのれが過ちを出來した癖に、それを云はれて拗ねる奴があるものか。そんな惡い性根では行末が思はれるわい。

老媼　然し一概に、お前の云ふやうに女の心はゆかぬものぢや。まゝ能う考へ直して、何事につけても優しうしてやるが肝腎ぢやがな。

與七　これまでは俺も、女房の尻に敷かれる亭主と世間から笑はれるほどおせんには優しうして來た筈。今ではそれが惡かつたやうにも思はれて來た。

老媼　なんの、それが惡いものかいな。

（と、再び與七が默り込んで溜息をついた時、門口におせんが歸つて來る。）

老媼　おゝおせんさんか。恰度よいところへ歸つて來た。與七さんもお前の歸りが遲いと云うて大變案じてゐなされたところぢや。

おせん　まあ、然うかいな。遲うなつて濟みませなんだ。

與七　えゝ、たゞ口で詫びさへすればよいと思うて……夕飯の仕度もせいで、どこを今ごろまでほツつき歩いてゐるのぢや。

老媼　これ、與七さん、然うぽん／＼物を云ふものではない。

おせん　いゝえ、おばゝ、此の頃わたしや與七さんにあかれたと見え、出るにも入るにも苦い顏せねば口小言ばかり喰うてゐますわいな。寧そ媒介（なかうど）のお前に頼んで隙貰うてもらひ、北野の不動樣へあがつて、お弟子にでもなつて了ひたい。その方が浮世離れがしてサツパリするかも知れませぬわ。ほゝゝゝ。

老媼　まあ、おせんさん、お前も氣儘は云うても、その樣

な言を嘘にも口へ出すことではない……さツ、早う飯(まゝ)の仕度をするがよい。

おせん　膳拵へだけは、あれ、あの通りして置いたに。

與七　いや／＼咽喉(のど)がつまつた。今はたべたうもない。

老嫗　ほんに、そのやうなことでは夫婦の仲も自然水臭くなりますわい。互ひに面白うないことのある時は、さつぱりと云うて了へば胸が晴れるに、二人で同じやうな探り合ひばかりしてゐては如何もならぬ。與七さんも、おせんさんも、どツちも嫌ひでなつた仲でなし、あのお伊勢様に抜け詣りしたころの氣持になつて互ひに親切にしあつたがよいではないか。

與七　（思入れあつて）ほんに然うであつた。恩に被ると喜んで、正月に染木綿、盆に奈良晒しの中ぐらゐの品なら四季施も心得た、おばゝが達者なうち一代の小遣錢に事はかゝせぬなどゝ誓つたことが嘘になりました。俺はなんとかしてもう一度あの時分の心持になつて見たい。

（と、急にしんみりして、老嫗に詫びる如く云つて俯向く、おせんもさすがに涙ぐましい心持になる。）

老嫗　然うともな、然うともな。清浄な神參りにかこつけて下向には京廻りしたのを覺えてゐなさるか、高尾の紅葉、嵯峨の松茸狩よりは、三條の宿で、おせんに惚れくさつて何時までも離れぬ同行の番頭めをまいて、まんまと首尾よう……はゝゝゝ、二人ともあの時のことを忘れて了うたのかいな。

おせん　おばゞ、暮の事があつてからは、殊にいろ／＼と心配をかけて濟まなんだ。與七さんもわしの心を察して悪く思うて下さるな。

老嫗　おゝそれでこそ正眞正銘の惚れ合つて一緒になつた夫婦といふもの、態々わしが出掛けて來て話した效があつて嬉しい。おせんさんは勝氣を出さぬこと。また與七さんは少し氣を大きうもつことぢや。はゝゝゝ。

與七　おせん、何はなくとも、おばゝに一ぱいさしあげたがよいではないか。

おせん　ほんに、此の通り氣のまはらぬことではな。（と、自らたしなめる如く云つて、立ち上つて膳の布巾を取り、急ぎ運んで來る。）

老嫗　いや／＼、話がわかればわしは最う然うしては居られぬ。今宵は二十日正月の三日目の晩、產婆(とりあげ)の節くれ立つた手で、寶引の繩を引けの、老の眼で歌がるた取れのと嫗もまだ女のうちと見えて、春のなぐさみに遊びの約束がたんとあるのぢや。勝手ぢやがこれで今夜はお暇(いとま)させて貰ひます。今度はおせんさん、お腹に胎兒(やゝ)の出來た時でもなくば老婆(ばゝ)を引張り出しに來ては下さるなや。はゝゝゝ。

（と、もう饒舌りながら門口へ出る。）

與七　これは、飛んだお粗末をしましたな。

おせん　有難うござんした。お氣をつけておいでなされませ。（と、見送りつゝいふ。）

與七　おせん、おばゞはもう歸られたか。（間）何をぼんやり其隙ところに突立つてゐるのぢや。これへ來て酌して與れ。

おせん　あい。

與七　お前も一ぱいやれ。家は二人ぎりで二十日正月を祝はうとしよう。

おせん　あい。

與七　さ、一ぱいやらう。（と、自分が飮んだ盃をおせんに差す。）おせん、お前の眼からは涙が流れてゐるな。これ、何に流す涙ぢや。わしは、わしはお前の心の臓を、眞二つに裂いて見たいと思うてゐる。

おせん　心の臓を、眞二つに――え？

與七　然うぢや。恥かしい話だが、俺は……俺はお前の心が知りつくしたい。

おせん　けれど、お前には今のわたしの此の心持はわかるまい。與七さん、わたしや口惜しい。麴屋の女房づれに疑られて、廣い世間をせばめるほど恥をかゝされたのがどう思ひなほして見ても、口惜しうなつてならぬのぢや。

與七　だが、おせん、お前がその口惜しさに泣いてゐるを尤もだとは思はれいで、不思議なせつなさに此の胸がふさがれる。

おせん　そのせつなさは知つてゐる。知つてゐるがその爲めに、わたしの口惜しい此の思ひは、いやが上に燃え立つばかりぢや。

與七　それが……その勝氣を出すまいと、先刻もおばゝに云はれたではないか。世間が何と蔭口を利かうとも、おのれの身さへ潔白ならそのやうに口惜しがることはあるまい。

おせん　いゝえ、それを口で云つても行ひ濟ましてゐることとは、阿呆か馬鹿でなくば出來ないこと。なあ、與七さん、此の敵此の腹いせ、どこぞで晴させて與れるやう、お前がはからうて下さりませ。

與七　これ、取り騰せてなに云ふのぢや。麴屋のお店へはわしも昔から出入りして、旦那さまもおえさまも、此の與七に情をかけられて下さることは、お前も能う知つての筈ぢや。忘れてもその樣な無茶は云はぬもの……。

おせん　無茶とえ？　なにが無茶ぢや、あの麴屋のおちかといふ女子ほど、世に無茶を云ふものがまたと二人あらうか。わしやどうでもそれは聞かぬ。

與七　えゝ、それがお前の惡い性分、思ひつめたら思ひか

へせぬといふ負け嫌ひ。これ、何事も身分違ひとあきらめてその欝憤を棄てたがよい。

おせん　もし、身分違ひゆゑ、恥かゝされても默つて居いとお前は云ふのか。麹屋がなに!!　あのおちかといふ女子からが、どれほどの身分のものぢや。やれ、おえさまの御寮人さまのと、他におだてられるをよい事にして……あの高慢面!　あの氣狂ひ沙汰!　思ひ出しても身の毛が慄立つ、あの恥の仕返しをどこぞで屹度してやらねば、腹の蟲がいえぬのぢや。(と、いきり立つて罵りわめく。)

與七　えゝ。それほどの意地があるなら、なぜ長左衛門さまと疑られるやうな破目をつくつた。わしやおのれの女房ばかりがよいとは世間に云はれぬ。

おせん　(唇をふるはして凝視しながら)　では、お前までが現在の女房に疑ひをかけてゐるのぢやな?　(と、思入れ)

與七　疑ひをかける譯ではないが、その様な破目に落ちたが不祥とあきらめて、それほど世間に顔向けがならぬと思ひつめたのなら、大阪の天滿ばかりが人の住むところでもない。俺も幸ひの樽屋職人、どこへ引移つても世過ぎは出來る。どうぞ、然うして溫和しう俺の云ふ事を聞いて呉れ。

おせん　(眼を光らせて)　いゝえ、厭ぢや。わしや此の天滿を自分から一寸も動くことは厭ぢや。

與七　(疑惑の眼で)　なぜ厭ぢや?　それを云へ。

おせん　そんな追はれものゝやうなさもしい日蔭者になつて、此の世間を渡るくらゐなら、寧そのことに……。

與七　なに、寧そのことに……どうすると?

おせん　お前に離縁を貰うても、疑られるまゝに見事非を遂げて、憎い、憎いあの内儀に鼻あかしてやるが復讐ぢや。

與七　おせん、氣でも狂うたのか、これ、恐ろしい棄鉢を云ふにも程がある。お前は身を果してまで復讐をするつもりか。

おせん　えゝ、お前は身が欲しさに泣き寢入りする女子を女房に持ちたいか。正直一圖も溫和しいも、時によつては賴母しくも思ふけれど、今のお前は意氣地なしぢや。

與七　なに、意氣地なし?　よくも、その口でほざいたな。

おせん　それが癇癪に障るなら、立派に女房をさるがよい。

與七　いゝや、さらぬ、離別はしない。

おせん　えゝ、どうなりとお前の女房、お前の勝手にするがよい。あゝくさ〳〵として氣持がわるうなつた。わしや以前の御主人筋の難波屋へ行て、せめて麹屋のおちかからあやまり證文なりと取つて貰ひましよう。

（と、云ひつゝ門口を開けて出る。與七は思ひなほす事あつて、直ぐ後を追ひながら。）

與七　おせん！　おせん！

（と、呼び立てたが、もう後影が見えなかつた。與七はしよんぼりと隣の前に戻つて、思ひ惱む如く首垂れる。）

（やがて、女房おせんの出て行くのを知つてか麴屋の内儀おちかが、樽屋の内を覗き込みながら。）

おちか　もし、與七どの、與七どの。

與七　え、どなたぢや？

おちか　わたしぢや。麴屋のおちかぢや。

與七　おゝ、思ひがけない麴屋のお家さま、どうぞ此方へお入り下さいまし。

おちか　お前一人なら、免して貰ひましよ。

與七　まあ、むさい處へ能うおいでなされました。（と、座布團をすゝめる。）

おちか　實は去年の暮れのうちから、一度お前にゆるりと會つて話したいと思うてはゐたが……。

與七　俺も伺ひたいとは心で思ひながら、つい、御存じの敷居が高くなりまして……な。

おちか　それはお互ひのこと。わしも實は我慢せねばならぬところであつたが、あまりの事に嚇となつて、與七どの、お前には氣の毒で氣の毒でなりませぬ。

與七　いえ、どういたしまして。それは俺から申さねばならぬことかも知れませぬ。

おちか　（眼に涙を浮め）　したが、與七どの、わしは斯うしてお前の面を凝視てゐると、家の長左どのと引較べて、律氣一圖に實直なお前が羨ましくも、不愍にも思はれてなりませぬ。

與七　（眼の色をうごかし）　では、お家さま、あの晩のことは……。眞實ありのまゝに聞かせて下さい。

おちか　まゝ、然う聞かれては、わしも困り果てる。そこはわしとお前が我慢のしどころ、それについて談合しようと實は斯うして隙を見てお邪魔にやつて來ました。與七さん默つて此の包みを受取つて、それからわたしの話を聞いて下さい。

與七　と、有仰る此の包みは……（と、持つて見て驚き）これは小判ぢやございませぬか。

おちか　さ、申し憎いことではあるが、一つにはわたしが事を荒立てた謝罪のしるしの金、一つにはお前に此の天滿からどこへなり噂の立たない處へ引移つて貰ひたい……それがお互ひの身の爲だと、思案にあまつて來ましたのさ。

與七　成程、さすがは御大家の御内儀ほどあつて、恐れ入

つたおさばきではございますが、この金だけはいたゞく譯にはまゐりませぬ。
おちか　では決心して此の土地を立退くことは……。
與七　さ、それも能う思案して見ませう。
おちか　なあ與七さん、決して悪いことは云はぬ。此の上互ひに顔を見合せるところにあつては、どんな間違ひを引起さぬともかぎりませぬゆゑなあ。（と、言外に意をふくめて云ふ。）
與七　わかりました。わかりました。
おちか　此の上ともにおせんどのの様子にも、能う氣を配つてゐて下さい。
與七　はい。（と、溜息と共に考へ込む。）
（此の時、犬の遠吠えの聲仄かに聽え出す。おちかは驚いて聞耳立てる。）
與七　なあに驚くことはありませぬ。犬の遠吠えでございますよ。
（と、おせんの歸りの遲いのが心にかゝる思ひ入れ。おちかは近寄つて囁くこなし。猶も劇しく犬の聲。）
（暗轉。道具替る。）

第二場　樽屋露路の場

舞臺は細く板塀の迫つた露路のこゝろ。よきあたりに長屋共用の井戸に柳の太いのが枝を垂れてゐる。犬の聲と火の番の音に夜は更けてゆく。二十日過ぎた月魄の光りが漸くほんのりと闇を見分けさせる刻限。おせん、下手から急ぎ足で難波屋の提灯をさげて歸りを急いで來る。あとから長左衛門ついて出る。
長左　もし、もし、おせんさん……。
おせん　え、わたしを喚ぶのは……。
長左　わしぢや。長左衛門ぢや。
おせん　あゝお前は……まあ、此の夜更けにどうして……？
長左　わしも今夜はちよつと他所で飲み過し、歸りにあの天滿の橋をわたる時、ちらりとお前の後ろ姿に氣がついたがその露路口まで、小僧どのがついてゐるゆゑ聲もかけられず……思はずこゝまで追うて來たのぢや。
おせん　それはまあ、御苦勞な。して麹屋の旦那さまともあらうお方が、此の樽屋のおせんに何の御用で……。
長左　別に用と云ふではないが、いつぞやの詫びをしようと思うて、な。
おせん　ふむ、そのことなれば、今更お前に詫びされてもわしの腹はいえませぬわ。
長左　それは尤もぢや。ありもせぬことを噂さ誹謗（ひばう）に唄はれたお前の口惜しさは察してゐる。一度あうて能う事譯

を立てうと思うても、人目があるので、それもならず……。

おせん　なに、人目？　人目がなんぢや。長いものには卷かれろと、身分あるものには追從(ついしよう)たら／＼の厭な世の中、わたしやもう、こんなつまらぬ世間を怖れる氣では一日なりと暮したうない。命さへ惜しいと思はねば……はゝはどんなことでも出來ますわいな。

（と、ほろ醉ひ加減のおせんは、思ひあがつたやうに痛快さうに笑ふ。）

長左　これ、おせんさん、そんな高聲をして……こゝは道端ぢや。お前今夜は、大分に醉うてゐなさるな。

おせん　なんの、醉うてゐようとゐまいと、此の舌をうごしたらその言葉に變替へはない。（間）わたしや麴屋の家には深い恨みがある。人の前で恥かゝされたお內儀(さいぎ)には……。それを云うてからがはじまらぬ。

長左　それでもお前が、どこまでも能う耐へて呉れてゐると思ふと……此の長左が胸には何とも云へぬ苦しい思ひが、日に新しうかさなるばかりぢや。（と、心が決して）今迄は此の胸一つに祕めてゐたが、おせんさん聞いて呉れ、實はわしは、無理往生で麴屋の養子に直されたその時まで、お前を……また難波屋に奉公住みしてゐるお前を思ひつめて居たものぢや。

おせん　え……？

長左　さア、生きてゐるうちは、もう、夢の中でもこんな事を懺悔することはあるまいと思うてゐたが、ふつ／＼おもへば、あの事から、女房が悋氣で燃やす火を煽つて、今の面白うもない事だらけの境界を考へると、むかしの心弱かつた己れが悔まれる。おせんさん、世の中といふものには不思議な緣が、目に見えぬ絲のやうにつながつて居るものぢや。

おせん　（涙ぐみつゝ）　まあ、どッち向いても思ひがけぬことだらけ、わたしなども自分から求めて嫁いだ家ではないがまんざら憎うもなかつた仲、それも去年の暮れからは、互ひの心持に龜裂(ひゞ)が入つて、目くしり立てた喧嘩の果は、なにを云ふのも懶(ものう)いほど、醒めたやうな、淋しいつまらぬ氣持がつゞいて、生きる張りさへなくなります。

長左　それも、これも、原因(もと)を糺せばあの女から起つたことぢや。ほんに世間といふ人垣がなかつたら、どんなところへ連れて逃げても無理心中をしようものと……心でばかりは思つて暮した。おせんさん、實はわしが心からの懺悔をして、詫びようと思つたのはこのことぢや。

おせん　では、お內儀(さいぎ)はそれを覺つて……。

長左　悋氣のはじめはそれかも知れぬが、惡い心は毛頭な

かつた。だが、人の思ひはかくせぬもの、罪は皆んなわしにあるのぢや。

おせん　いゝえ、然うばかりではない。――斯うして懺悔を聞くのも、實はわたしが誘ひをかけたやうにも感じられる。と云ふのは、今夜も今夜、もとの御主人から意見をされて歸る途中、「もどうせ恥をかいた身體ぢや。」と、このことばかりが心に烙きつき、呪はしいまでに思ひ返しがつきませせなんだ。

長左　ではお前は――おせんさん、いまだに其麼こゝろを……。

おせん　あい、どうせ斯うなつたのも因縁づく、出來ることなら死ぬ際まで腐れついても生きて見たい……。

（と、思はず口走つたおせんの眸は、昵と闇の中にかがやいて、果ては麴屋の家庭を破壞して見ても惡くはない――斯う云つた復讐的な惡魔の心にさへ唳かされた。彼女の樣子が男の心を牽くに充分であつたのはそれ故である。長左衞門は殆んど衝動的に思はずおせんの手を握りしめる。）

長左　おせんさん、その、その一言でおそろしい煩惱が生きて救はれる。お前も今云つた一言を、墓の中から世間を覗いて喚ぶまでは忘れて具れるな。わしも生命にかけてきツと覺えてゐますぞ。

おせん　あい。

（と、おせんは絞るやうな返事を一言かへす。言葉の帶びた強い熱の調子とは全く別な明眸の冷たい光りが、夜目にもそれと見える。）

（一方から麴屋の內儀おちか出て來り覗ふ。二人は耳語して、これを避けようとする。偶々月明りになる。）

おちか　やツ、お前は旦那どの、長左衞門どのぢやないか。然うぢや、旦那どのぢや。

（と、衣物の袖をしツかりと握る。）

長左　これ、靜かにせい。

おちか　靜かにせいとは、何んぞ惡いことでもしてゐたか。（と、上手に向つて）樽屋のおせんどのらしい女がゐる。與七さん、與七さん、早う連れて行て油斷すまい。――旦那どの何をその樣にうろついてゐなさるのぢや。家へ歸つて云ふことがたんとある、早うござんせ。

長左　えゝ騒がずとも直ぐ歸るわい。

おちか　女も女、此のやうな露路口まで相手を連出して出會はうとは……あんまりな圖々しさ。また、その手に乘つてのめ〳〵と來るお前もお前ぢやわいな。

（と、他の方へ連れ戾る。犬再び劇しくなき出す。そこへ樽屋の與七が飛び出して來る。近所のものも一寸覗きに來たが、「なんぢや、樽屋のおせんぢや。」「また、

あの麹屋の内儀と喧嘩してゐるのぢや。」などといろいろ呟きながらとゞ「寒い〳〵。」と引込む。

與七　おせん、お前はなんでそんなところに突立つてゐるのぢや。

おせん　まあ、與七さんか。(と、初めて氣がついて振回り)はゝゝ。(と、突然笑ひ出し)あれを御覽、あの麹屋の内儀があの氣狂ひのやうな態(ざま)を……あれまた犬めが吠えついてゐる。はゝゝ。

(と、おせんは腹を抱へて冷嘲的に笑ひこける。與七は手を取る。)

與七　えゝ、人の沙汰かい。おのれこそ他(はた)から見たら氣狂ひとも醉ひどれ女とも見えるわい。えゝ大抵にせぬか………。

おせん　だが、お前もあれを能う御覽と云ふに――あゝ、まア、今夜といふ今夜は、幾分なりと虫がをさまつた。これからもあの悋氣ものゝ内儀を思ふさまやきもちやかせて、其度に笑つてやらねば……はゝゝゝ、あの麹屋一家を女の念ひで祟るほど、揉ませてやらねば腹がいえぬ。

與七　えゝ、まだ言ひをるか。來い。

(と、再び手を引く。犬の鳴聲。道具再び樽屋内へ戻る。)(暗轉がよろし)

(「火の用心さッしやりませう。」といふ火の番の聲。拍子木の音。)

(樽屋の座敷。上手の隅に寢床を延べて、中には與七が睡りについてゐる。屏風で圍つてあるが、時々何か魘される如く苦しげな聲を立てる。)

おせん　もし、與七さん、どうぞしたか。お前、また夢を見て魘されてゐるぞえ。

(おせんはまた二人で飮んだらしい酒德利の載つてゐる膳を一寸傍へ片寄せたまゝて、眠られぬまゝに内職の縫物をひろげてゐる。)

與七　おせん、お前はまだ起きてゐるのか。

おせん　わたしや今夜はどうしても眠られさうもないゆゑ仕事をしようと思うて、今出して見たところぢや。

與七　えゝ氣まぐれにもほどがある。怠けものゝ節句働き……早うやめて、早う寢ぬか。

おせん　あい、今直ぐ寢るわいな。

與七　あゝ！（と、唸るやうな聲を出して）では矢張り夢か。あゝ苦しかつた。

(と、寢返りを打つて再び睡眠に入る。)

おせん　お冷水(ひや)でもあげうかい……寒うはないかい　…もし、もし、與七さん。

與七　えゝ、蒼蠅い。

おせん　飲めもせぬ酒を飲み過したせえか、また直ぐスヤスヤと睡こけてゐる。（と、つく〴〵寢顔を眺め入つて）人に佛と云はれるほど人の好い職人氣質、つい知つてゐても氣まゝが出る。與七さん、わたしや濟まない……濟まない。

（と、呟くやうに良人に詫びて、また元の座にもどる。深い溜息をつく。）

おせん　うちの人のあの和かい氣質に引替へて……あゝ今夜も久振りで大旦那さまが、「お前はその勝氣をなほさぬと、飛んだことで身を果す」……と、あの御親切なお言葉を聞いて歸りに、もうあのやうな恐ろしい惡戯ごゝろ……。あゝ、つゝしみませうと心では思ふけれど、その場になれば身ぶるひの出るほど、口惜しいが先きに立つて……前後の次第も、身も世もなく、あの内儀めがたゞ憎く、鼻明かしてやりたいばツかりの一念に……あゝ濟まなんだ。

（と、縫ひ物に顔を埋めて、忍び音に涙を絞る。八ツの時を知らせる太鼓の音と拍子木が幽かに遠く響いて來る。おせんが耳を濟まして聞くと、門口を細かに敲く人聲がする。）

（おせんは或る直覺によつて、見るから血の氣のない程に色青褪め、足も不覺になつて門口へ出てあける。）

おせん　ヤツ、お前は長左衛門さま……。

（と、驚愕に打たれて、再び座敷に戻り、與七の寢息を覗ひ、上の屋臺の障子をそツとしめ切る、そしてガタガタと慄へながら長左衛門の傍へ戻る。長左衛門は表てを氣にする爲めに、自然に家の内へ入る。）

おせん　ど、どうなされたのぢや。此の夜更けに……お前は一體、なんと思うて……？

長左　もう、もう云ふに云はれぬ……あさましい刃物三昧、今夜といふ今夜はふつ〳〵家にゐるのが厭になつた。委しい話はあとでするが、おせんどの、お前、さつきのことが嘘でなくば、さツ、これからわしと一緒に……。

おせん　いゝえ……それは……。（と、ためらふ）

長左　（キツとなつて）おせんどの、まさかにお前は、男一疋を……むごたらしくなぶりものにしたのではあるまいな。

おせん　いゝえ、なんの、然うではないが……と、云うてもこれはまた、あんまり早急な爲されやうぢや。なあ、長左衛門さま、もう一度とつくりと考へさせて下さいませ。あす……あさつてまで……。（始終氣を配りつゝ云ふこなし）

長左　えゝ！　そのその言譯見ぐるしい。だましたならだ

ましたと……その舌の根をこゝで噛み切れ。(と、つけ廻しながら)おせんどの、わしも男ぢや。それでも命が惜しいのなら、嘘ついたのぢやとこゝで云へば、助けてやらぬものでもないが……。(と、物凄い態で迫る)

おせん　いゝえ、なんの、今更嘘とは云ひはせぬが、たつた一日まつて下さい。覺悟をきめて立派に退きたい。

長左　なんの、これが一日や二日まつたところで、立派に退けることではない。寧そのことに、夜の明けぬうち此處を脫れて……行くところまで行つて見れば、死ぬる時にも立派に死なれる。

おせん　あゝ……われと我身で棄てる命、今となつては……命を惜しいとは思はぬけれど……。

長左　あとの世まで未練が殘るか。

おせん　いゝえ、厭な世間に未練は猶更殘りはせぬ。が、たゞ此のまゝで落ちて行くのは……。

(と、しめ泣きに身を悶えて泣いた時、門口にはもう人の來た氣勢がする。久助爺に提灯をもたせたおちかは早くも耳打ちをして、久助を裏口の方へまはらせる。)

おちか　もし、樽ゃさん、樽屋さん、……與七さんは？　…おせんさんは家にゐますか。もし、ちやツとこゝを開けて下さい。家の旦那どのが來てゐる筈ぢや。

(と、劇しく戸をたゝく。その一語を發しかけた時、おせんは逸早く行燈の火をふツと吹き消す。そして暗闇の中で手さぐりで耳打ちをする。かたく手を握る。(次の瞬間には、與七がもくと起上つて屛風を蹴る。)

おちか　もし、こゝを開けて……もし。

(と、表では氣立たましく戸をたゝきつゞける。內では沈默をもつておの／＼手さぐりで樣子を覗つてゐる。)

與七　おのれ、いたづらものめ！

(と、やがて仕事場から鑿を探し求めて、此の時門口を開けて脫れ出ようとしたおせんの髮を攫んで引戻す。(長左衞門はその手を放させようといろ／＼激しく暗闘。とゞおせんの手に鑿は捥ぎ取られたと思ふと、彼女は力を籠めておちかを一突き突く。おちかタヂ／＼となつて後ろに倒れ絕息する。)

(おせんが表へ飛び出すのを再び追つて、與七、長左衞門はよろ／＼とつかみ合ひをしながら戸外へ出る。)

(月光は青白く霜の上を照らしてゐる。)

(舞臺半廻りになる。前の露路口の場が斜めに奧深く見える。此の情景の下に物凄い暗闘をつゞけて、長左衞門は井戸の際へ抑しつけられる。)

長左　與七さん、たつた一言、賴みたいことがある。この手をゆるめて……咽喉(のど)をゆるめて……。

(と、悶(もが)きながら賴む。)

與七　えゝ、今になつて卑怯なことを……。
長左　卑怯ではない。たゞおせんさんだけは……宥してやつて……宥してやつて……。
與七　えゝ！
（と、耐へられない憤怒の色をあらはし、長左衛門を非戸の中へ蹴込む。これを見たおせんは矢庭に後を追つて、同じく飛び込まうとする。與七は激しくこれを突き放す。おせん、よろ〳〵として轉がるとき、その手に鑿をつかみ、それで一突き咽喉をつき絶息して斃れる。
與七　あゝ、おせん！……おせん！
（と、與七は抱きあげて、月の光りに青白く血を失つたおせんの顏を凝視め、その場へ男泣きに泣き崩れる。）

——幕——

田之助色懺悔（一幕）

人物

三代目澤村田之助
柳橋藝者小静
同　千代吉
同　妹　おきち
瓢亭の内儀おぎん
田之助の男衆岩吉
・觀照院の住職浩雲
其他、女中、若い者等

時代

慶應二年秋の日の午後

舞臺は淺草田圃にあつた瓢亭（ひさごてい）の一ばん奥の座敷。上手には飛石づたひに粋な離れの小座敷があつて、本舞臺の座敷はやゝ廣く下手の廻り縁からは他の座敷に通じ正面襖の出入りあり。床の間には抱一の掛物、竹籠に時節の秋草、總て洒落なる好みの裝飾。

下手の植込みには萩が多く繁り、一寸した垣につゞいて、竹材に蔦をからませて自然に出來あがつた出入りの庭の枝折戸がある。本家の路次から下駄を脱がずに來られる心。

何か音締めのいゝ三味線の落ついた音で幕があくと、おきちといふ小娘は如露で庭草に水を撒いてゐる。座敷の中央には當時中村座で賣出しの立女形澤村田之助がまだ立つたまゝで、下手に瓢亭の内儀おぎんが挨拶してゐる、

ぎん　まあ、太夫、それでも田圃の道をお忘れにはならなかつたと見えますね。ほゝゝ。

田之助　いや、おぎんさん、そんな皮肉なことを云つてお呉れでない。いつも口の惡い此の田之助も、お前さんに然うあべこべに遣られちやア顏がないね。

ぎん　いゝえ、そんな氣で申したのではありませんが、太夫、あんまりお前さんがお出で下さらないので、家（うち）ではほんとに氣にかけて居たんですよ。

田之助　それはまあ、濟まなかつた。だが、嘘でもお世辭でも然う大騷ぎをされるうちが藝人は花さねえ。

ぎん　まあ、嘘やお世辭でこんな事は申されはしやしません。太夫とは昔からの馴染だもんですから、つい、お心安立てにお顏を見るが早いか、碌々御挨拶も申上げないうちに、こんな失禮なことばかり……ほんとにお氣にさ

へて下すつちやア困りますよ。

田之助　何の、何の、それはお互ひのことさねえ。だが、わたしが斯うして中村座の立女形になつて、世間から人氣者のやうに騷がれるのも、有様は皆んなお前さん方のお蔭だよ。(と、庭を見廻しながら座につく)

ぎん　まあ、太夫、そのお言葉ぢやア恐れ入ります。當時猿若町の三芝居で、飛ぶ鳥を落す人氣者の三代目さんがこんな田圃の瓢亭なんぞへお越し下さるのもお馴染の一德だと思つてゐますよ。それに興行毎にどの役にも大當りで、藝者が來ても幇間が來ても、太夫のお噂だけは、どなたのお座敷でも大評判でございますよ。

田之助　いや、實はお前さんも知つてる通り、世間の評判とは大きな相違で、わたしは根が生れついての皮肉者だから、實はどんな破目から自分の性質があらはれて、舞臺に躓きが出やしないかと、これでも内心ぢやア我と我身を顧みることもある譯さ。

(と、思はずシンミリとした暗い表情になつて、女持のやうな煙草入から細い銀煙管を出して一ぷく吸込み云はゞ餘韻嫋々たる自嘲の笑ひをその美しい豐かな頬の邊りに表はす。内儀は一寸その言葉に心を牽かれたが、次の瞬間には却つてそれを打消す如く口を開く。)

ぎん　あら、太夫、それはお前さんの思ひ過しと云ふものですよ。どんな惡い運も盛んな人は避けて通ると云ふぢやアありませんか。

田之助　いや、然うばかりは行かないよ。(と、一寸眉根にひそみを見せて)此の間も秋興行の本讀みに、稽古場で地内の師匠が、人盛んなれば天に克つと云ふ講釋をしてゐたが、それも當らなかつた、とゞのつまりは師匠の云ふこともわたしの考へた通り太夫元への氣休めになつたからねえ。

ぎん　へえ、そんなことが……何か座の方に紛糾でも出來たんですか。

田之助　いゝや(と、庭に娘のおきちがゐるのに氣がつき、急に調子をかへて)そんな紛糾なんぞが出來た譯でもないが……(と、後ろ向きに草をいぢつてゐるおきちに)きいちやん、暫く見ないうちに、ほんとに大きくおなりだねえ。後ろから見ると、もうどこの藝者衆かと思ふほど粹な姿になつたよ。

きち　あら、太夫さん、あんなことを……。

(と、おきちは小娘の羞恥を感じて眞赤になる。おきちは内儀おぎんの妹である。)

ぎん　ほんとに身體ばかり大きくなつてもカラ仕樣がありません。きいちやん、太夫さんに御挨拶をしましたか。

田之助　先刻しましたねえ。(と、愛嬌笑ひをたゝへて)

え、きいちやん、ほんとにお前さんは可愛いお子だ、今日はわたしはきいちやんと御祝言の話に來たんですよ。

きち　太夫さんは、あたしの顏を見ると、あんなことばかり有仰つてあたしを調戯(からか)ふんですもの……。

田之助　はゝゝゝ。

ぎん　ほゝゝゝ。

田之助　嘘なら姉さんに聞いて御覽なさい。なんで調戯(からか)ひなんぞするものですか。

きち　あら、厭な太夫さん……。

（と、おきちはさも羞かしげに如露を投げ棄てゝ走り去らうとする。）

ぎん　あゝきいちやん、一寸、お待ちよ。いゝえ、御用ですよ。（と、おきちの振り向くのを見て）あの番の女中さんに、早くお銚子を云つてお呉れ、急いでゝすよ。

きち　はい。（と、庭から去る。）

田之助　はゝゝ、罪のない好いお子だ。

ぎん　あんな子どもまで、暫く太夫さんが見えないので、明けても暮れてもお噂ばかりでございました。ほんとに人を惹きつける太夫の人氣と評判は素晴しいものですよ。

田之助　いやおだてゝ下さるなと云ふに。さつきから云ふ通り、わたしはそれに怯氣(おぢけ)が出て來てゐるのだからさ。と云ふのは、傳馬町でやつてゐる佐の松の首振り芝居で、岩井粂之助が政岡の着付に葵の御紋をつけたと云ふのが原因(もと)で、公儀の御達しが猶更に嚴しくなり、その飛ばつちりでやれ役者が分に過ぎた驕りをするの、やれ自儘増長が世間の目にあまるのと、重箱の隅を楊枝でつゝくやうな氣の狹いお役人の考へから、此の田之助なんざ、舞臺があんまり色つぽく艶めかしいから人を迷はせないやうに、精々控へ目にしろと云ふ年代記にも見たことのないトテツもねえお布令にあづかつた譯なんだ。

ぎん　おや、然うですか、そんな噂を聞かないことはありませんでしたが、それほど迄とは思ひませんでした。

田之助　實はその御達しは世間の噂よりは嚴しいので、皆んな弱り込んでゐる譯さ。此の間も同業の者殘らず公儀へ呼ばれてお目玉を頂戴した。中村座からは成駒屋、仲藏、薪車に斯く云ふ田之助、市村座からは音羽屋、阪彥、半四郎、九藏、團十郎、守田座からは三津五郎、高島屋、菊次郎、しかも三代目の田之助はどうかすれア舞臺を差し止めると云ふ第一番の睨まれ者さ。

ぎん　だが、なんぼ公儀だからつて、江戸一ぱいが生命(いのち)のやうに樂しみにしてゐるものを、差し止めるなんて、あんまり甚い話ぢやアありませんか。

田之助　そこが世に云ふ泣く子と地頭にはかたれねえ。（と

さすがに溜息をもらして）おぎんさん、察してお吳んなはい。斯うして芝居を休んでゐると、づく〳〵浮世がはかなまれて、時々は生きてゐるのが厭になつて來ますよ。

ぎん　おや、ぢやアそれで太夫は舞臺を退いておいでなのか。（と、意外におどろき）まあ、そんなことは今聞くのが初耳ですよ。

田之助　藝に色氣を出しちやア不可ねえなんて、それぢやア役者は死んで舞臺に出るのも同じことだ。そんな無理なことを云ふ位なら、寧ろ鬪鷄をしめるやうに、此の三代目田之助の咽喉首を一思ひにしめあげるがいゝぢやねえか、のう。

ぎん　然うですともさ。なんぼ末の世になつたからッて、たいした亂暴な御時勢がやつて來たものですねえ。

田之助　おゝ誰か來たやうだ。（と、手で制す）

（そこへ女中のおかれが、膳拵への上に銚子を添へて運んで來る。）

かれ　お待たせをして相濟みませんでした。

ぎん　ほんとに濟まないよ。お客樣をお見かけしてからお魚を見に行つた譯ぢやあるまい。江戸のお客樣は痺れをきらして歸つて了ふと料理番に然う云つてお吳れ。

田之助　まゝ、そんなに仰有らずに措いて下さい。いや、なあに、お内儀さんがお相手をして下すつたので、そんなに待つた氣もしやしませんよ。（と。笑ひにまぎらせておぎんの差す猪口を受取り）これは憚りさま。

（と、女中は直ぐ去らうとする。田之助はそれを呼び止める。）

田之助　あゝちよつと……家の岩吉が見えたら直ぐにこゝへ通して下さいよ。

かれ　はい、畏まりました。

ぎん　（庭の四邊を見廻はして）何と云つても秋ですねえ、日の短かくなつたこと……。然う云へば太夫、此のお座敷で斯うしてゐると、あの女とあつた去年の今頃のことが思ひ出されやしませんか。

田之助　あの女と……？

ぎん　あら、太夫は白ばくれて……柳橋の小靜さんさ。此のごろも逢つておあげなさるでせうねえ。

田之助　それは偶には逢はないこともないが……

ぎん　氣のない物の云ひ樣をなさるのねえ、あれほどに思ひ詰めた小靜さんに不實をすると、太夫、ほんとに罪ですよ。

田之助　だが、わたしも先刻から話す通りいろ〳〵の屈託があるのでねえ。

ぎん　それはお察しいたしますが、實はさつき太夫が見えた時、小靜さんも一緒かと思つたほどですのに……今日

はほんとに御一緒ぢやアありませんの。

田之助　あゝ岩が來たやうだ。

（と、此の時田之助の男衆岩吉が庭先から姿をあらはし緣近く來る。）

岩吉　大變遲くなつて了ひました。嘸お待遠うでございましたらう。

田之助　いや、久振りで内儀さんと話がはずみ、つい時刻のたつのを忘れた程だ。

岩吉　それはよろしう御座いました。これはお内儀さん、御機嫌よろしう。

ぎん　お前さんもいつも丈夫で結構だね。

岩吉　有難うございます。

ぎん　あゝ然うだ。（と、その場を察して思ひ出した如く立上り）それぢやア太夫さん、ごゆつくりして下さいよ。また後程伺ひます。

田之助　まあ、いゝぢやアありませんか。（と、入るのを見送り）岩や、もつと此方へ來い。それでお前は、あの千代吉にあつて來たのかい、まさか小靜に勘づかれるやうなことはしまいな。

岩吉　太夫さん、岩吉もそんなドヂな眞似はいたしませんから、まあ御安心なさいまし。

田之助　然うかい、それは御苦勞だつた。

岩吉　小靜ねえさんが留守でしたから何かの話も落ついて出來ました。わッちは、もう疾くに千代吉さんが見えてゐるかと思つて來ました。

田之助　ぢやアお前は、それから何處かへ廻つて來たのかい。

岩吉　いゝえ、實は、太夫さんにお聞かせしまいと思つたんですが……（と、思はず聲を潜めて）あの觀照院がまたやつて來たものですから……。

田之助　なに觀照院が？　なにしに執拗く度々やつて來るんだらう。留守だと云つてキッパリと斷わればいゝぢやないか。

岩吉　ところが向ふはのぼせあがつて居るんですから、留守も留守でないも聞きやアしません、今日といふ今日はあッしもすッかり手古摺りましたよ。

田之助　あいつは以前からしつこい質だつた。おいらが家にゐたら逢つて此方から赤恥をかゝせてやるんだつたに。

岩吉　と、とんでもねえ、そんなんぢやアありませんよ。頰はすッこけて、髮は芝居でする清玄のやうに蓬々と延びてゐるし、その上に眼ばかりがギョロついて、まるで乞食坊主か氣狂ひ坊主と云つた態ですぜ。

田之助　それぢやア半歲前の觀照院の面影は……。

（と、思はず感傷的な追憶に耽る思入れ。）
岩吉　どこを探したつて思ひ浮べることも出來やしません。太夫が見たら膽をつぶしますよ。
田之助（溜息をもらして）あゝ厭だ〳〵……それでも岩吉、なんとか巧くけりをつけてお呉れかい。（と、獨酌で酒をあほる。）
岩吉　直ぐけりをつけるといふ譯にも行きませんでしたが太夫、此の岩吉といふ奴淀平がついてゐるからは、決して御心配なさることはありませんよ。
田之助　それでも何んだか氣味が悪いね。向ふも今ぢやア零落れて、どんな因縁をつけようといふのか知らないが、そんな見る影もない墮落姿で、人氣商賣の紀之國家の閾をまたがうなんて、耻を知らないにも程がある、大抵にして人に姿を隱すのが人間の道ぢやアないか。
岩吉　そこが業のつきねえところでさあ。（と、田之助の焦燥さを察し）まあ、太夫、そんなことなんざあサラリと忘れて、今日は千代吉さんと浮世ばなれをしてお樂しみなさるがようございますよ。さッ、もう一つお酌を……。
田之助　岩吉、浮世ばなれとは能く云つた。おいら一日でいゝから、今の田之助の身を忘れて遊んで見てえよ、はゝゝ。（と、苦いものでも嘗めたやうな舌打をして、嘲るが如く笑ふ。）

（と、此の時襖があいて、娘のおきちが藝者千代吉を案内して來る。）
きち　太夫さん、お客さま。
岩吉　おゝ千代吉さんだ。隨分太夫がお待ちかねでしたよ。さあ、ずッと此方へ……。
千代吉　御免なさい。太夫さん、どうも遲くなつて濟みません。出會ひ頭に生憎姐さんが歸つて來たもんですから……。
田之助　小靜がかい？（と、一寸暗い顏をして）うむ、それでもよく內氣なお前が姐さんの前を誤魔化して、こんなとこまで出て來て呉れた。わたしは嬉しく思ふよ。
千代吉　あら、太夫さん、それア水臭いぢやアありませんか。あたしこそ、態々呼び出しをかけて下さるお前の御親切を、なんとお禮を云つていゝか知れやしません。
田之助　まゝそんな初心らしいことばかり云はないで、さッ、一つ遣らう。
千代吉　ありがたう。（と、杯をうける）
（田之助は眤と相手の顏を凝視しながら酌をしてやる。千代吉は赤くなる。）
岩吉　千代吉さん、今日はお前さんのその生娘のやうな初初しさで、太夫さんをさんざ醉はしてあげて下さいよ、太夫さんは、此のごろはすッかりお前さんに心を牽かれ

て、一日逢はねば何とやら、夕霧の文句ぢやないが、妙に氣が鬱いでならないと有仰るからさ。

千代吉　あら、岩さんは、また巧いことを云つて、あたしを嬲るのでしよ。

岩吉　なあに、明け暮れ太夫の女房役をつとめてゐる此の岩さんの云ふことだもの、間違ひはありやしません。

田之助　これ、岩吉、いくら口に税金がかゝらないと云つて、ぺら／＼と……好い加減にして措かねえか。はゝゝは。

岩吉　おツと、此奴は出ツ尻岩の失敗か。御用があつたら呼んで下せえ。わツちも獨酌で一ぱい頂戴いたしてゐます（と、膝を上げ）千代吉さん、あばよ。

（と、岩吉は下手庭から奥へ入る。）

千代吉　いつも陽氣でおもしろい岩さん、ほゝゝゝ。

（と、千代吉が後を見送つて笑つた時、田之助は默つて女の杯にまた一ぱい注いでやらうとする。千代吉は猪口をあげる。）

千代吉　あら、太夫さん、此のお盃はお返ししますわ。

田之助　まあ、然う云はずにおかさねよ。

（と、二人がちよつと爭ふ。そのはずみに指先が觸れるので初めて手を握る。）

千代吉　ねえ、太夫さん、お前と斯うして二人ぎりで樂しい逢瀬をかさねてゐるのが、まるで夢のやうに思はれてなりません。

田之助　夢のやうに思はれるとは？

千代吉　姐さんを差し措いて、太夫さんと斯うしてゐるのが、嬉しさあまつて怖ろしいやうな……。

田之助　はゝゝ、お前もまだねんねえだねえ。そんな度胸のないことで、他の情夫が取れるものか。況して相手は柳橋はさて措いて、小靜と云へば江戸中きつての大姐さん、お前も餘ツぽどしつかりしなきやアならないよ。

千代吉　その妹分と云はれるわたしが、ついしたはずみで此樣ことになつて了ひ、太夫さんお前のことを思ふと嬉しいけれど、姐さんのことを思ひ出すと、寢てゐるときでも魘されて眼が醒めます。

田之助　なんのこつたな、意氣地のねえ。

千代吉　それぢやア太夫さん、きつと何時までも見棄てないで……。

田之助　大丈夫だよ。あの川開きの夜あんな因緣をつくつたのも、元はと云へば酒に性根を奪はれたわたしが惡かつたんだ。

千代吉　それぢやア太夫さんは、やつぱり酒の上で、心にもなくわたしを詐戲つて見たのですわねえ。

田之助　なあに、然う云ふ譯ぢやアねえ。が、落ついてわ

たしの話も聞いてお呉れ、あの日は珍らしく身體があいてゐて、いろ〳〵むしやくしやすることがあつたものだから、涼みがてら氣散じに花火でも見ようと思つて、かねて賴んで置いた船宿へ行つては見たが、何の譯かいくら待つても約束の小靜は姿も見せず、半分は自棄も手傳つて、獨りで船頭を急き立てゝ青柳樓の下まで流して行つたのが不思議な緣さねえ。

千代吉　あの時、わたしは越後屋の旦那のお座敷にゐて、なんの氣もなく太夫さんを見つけて呼びかけましたが、今ぢやア迚もあんな大膽な氣にはなれません。

田之助　それから座敷へ呼びあげられての大騷ぎ、醉ひも醉つたり川風が、簾を吹きあげて灯を消したのさへ知らなかつた。

千代吉　あゝ思へばあの時、闇の中で太夫さんと手を握り合つたのがもつれの初め、やつぱり妾のつゝしみが足りなかつたと後ではつく〴〵悔んでゐました。

田之助　その悔んでゐるところをあべこべに喚び出したのはわたしが惡いが、元はと云へば約束を破つた小靜が二人に罪をつくらせたんだ。何の、おれ達ばかりが惡い譯ぢやアない。

千代吉　（聽耳を立てゝ）　太夫さん、あの絃の音を聽いてゐると、わたしは姐さんに義理が惡いも濟まないも忘れてお前に逢ひ遂げたい。

田之助　それアわたしも同じことだ。花火が終つた淋しさから、越後屋の旦那が場所をかへて騷ぎついでに吉原へでも繰り込まうと、船を仕立てゝ山谷堀を漕ぎ上つて行つた時、何處からともなく聞えて來た……あの獨吟は忘れられまい、わたしも生涯忘れはしない。

千代吉　太夫さん、此の先きどんな怖ろしい目にあつてもわたしは屹度別れませんよ。

田之助　またしても、今更となつて、そんなことを諄く云ふ奴があるものかな。

（と、蔭の獨吟で二人が抱き合つて誓ひを交はした時、下手庭の木蔭で騷がしい聲が聞えて來る。それは女中のかれと觀照院淨雲の相爭ふ聲である。）

かれ　いゝえ、不可ませんよ、太夫さんなんぞ家にゐやアしませんたら。

淨雲　なあに居ないことがあるものか、俺はチヤンと突きとめて來てゐるんだ。

かれ　でも、奥へ行かれちやア困りますよ。

淨雲　困るも糞もあるものか。

（と、これを聞きつけた田之助は、慌てゝ立上りながら尠からず狼狽する。）

田之助　誰かこゝへ來る奴があるに違ひないから、お前は

暫くあの離れへかくれておいで。

千代吉　はい。(と、色を失つて上手へ入る。)

(そこへ浄雲がつか／＼と女中を突き退けて庭口から出て來る。)

かね　あれ、いけませんてはッ。

浄雲　そうれ、嘘をつけ。これでも太夫がゐないと云ふのか。

(田之助と浄雲は暫く無言のまゝで睨み合ふ。そこへ内儀おぎんが男衆の岩吉を引張つて來る。)

ぎん　ほんとに岩さん、早く來てお呉れよ。

岩吉　目の離されねえ乞食坊主だ、またこんな處へ來やアがつたな。

浄雲　來たのがどうした？　此の恩知らずめ。

岩吉　何を！　此の斃り損ね。

(と、岩吉が取つて蒐らうとするのを田之助は徐ろに制す。)

田之助　これ、岩吉、まあ待て！

岩吉　だつて、こんな解らねえ坊主はありアしません。默つてゐると癖になりますよ。

田之助　まあ、可いからわたしに任かしてお置き。

ぎん　太夫さんがあんなに有仰るんだから、岩さん默つて此方へ來ておいでよ。

岩吉　癪に障る氣狂ひ坊主だ、家の太夫に耻をかゝせるつもりで態々こんなところまで押しかけて來やがつたんだな。

浄雲　それが如何したと云ふんだ。

岩吉　なんだと？

田之助　まあ、待てと云ふのに、岩吉、手前はおれの云ふことを聞かれねえのか。觀照院もお静かに願ひたいものだ。

浄雲　こいつが静かにさへすれば俺も静かにするよ。だが、田之助、お前も暫く逢はないうちに、豪氣に立派な役者になつたな。

田之助　これも皆んな、おれのお蔭だとでもお前さんは云ひたいのかい。觀照院、つもりにも物を考へて御覧、お前さんだつて自分が樂しみだからこそ人の世話もする、贔屓にする、面倒を見る。云はゞ翫具扱ひにされた此方でこそ今ぢやア文句が云ひたいところだよ。それをなんだい、押込みかゆすりのやうに出先きへまでやつて來るなんて……。

浄雲　いや、お前の云ふことにも一理はある、しかし、俺が零落れて今の身になつたからと云つて、何も袖なく振りつけるにやア當るまいと思ふからさ。

田之助　なにも振りつける譯ぢやアないが、此方だつて人

氣稼業をしてゐる藝人だよ、出先きまでつけられちやアどんな事情があつても迷惑だ。大抵にしてお呉れな。相手に恩義を賣りつけて置いて、それを後で強ひる位なら始めッから手出しをしなけれアいゝぢやないか。

淨雲　えゝッ、今になつてよくも、そんなことを云はれた義理だ。

田之助　義理？　あとになつて自分の樂しみのお剩りに義理々々と云ふのはよくある奴だが、散々腹人を遊んで置いて、義理の押賣はお前さんもあんまり慾張り過ぎた云ひ分だよ。

淨雲　だがおれの云ふ事も聞いて呉れ。俺はお前に迷ひさへしなけれア觀照院の住職はさて置いて、上野の學頭にもなつてゐられた。どんな我儘も氣儘もしてゐられた。その地位や金には目も呉れずにお前の爲めにはありとあらゆる大膽な犠牲をしてのけたものだ。

田之助　だから其禮は云ひますよ。三代目田之助が十六の春中村座の立女形に昇進して、自分にもわからない程江戸中の人氣をあつめたのも、先きには五代目の瀬川菊之丞があるばかり、これアなんぼ自惚れの強いわたしでも自分が有つて生れた藝の力、優れた技能の力とばかりは思つちやアゐませんよ。

淨雲　あッ、お前の心は全然むかしとは變つてゐる。まるで人間が生れ變つたやうだ。俺はあの時分のやさしい心の田之助が戀しい。（間）あゝ俺はお前に欺されたんだ。

田之助　串戯云つちやア不可ないよ、此方こそお前に欺されたんだアね。その時分の觀照院が世間を怖れ憚る樣子と云つたら……今更こんな迷惑を受けようとは、夢にもわたしは氣かつかなかつただ。

岩吉　おい〳〵、もう大抵にして歸らねえか。

ぎん　ほんとにさ、太夫さんだつてどんなに御迷惑しなさるか知れやしない。さッ、そんな所につッ伏してゐちやア果しがないから、さ、あたしと一緒に臺所の方へでもお廻はりよ、おいしい物をあげるからさ。

淨雲　えゝッ、馬鹿にするな！（と、キッと睨みつめて）俺はこれでも物乞ひや非人ではないぞ。上野の山內に觀照院といふ名高い寺のあるのを知らないか、罰當りめ！

ぎん　知つてるともさ、だから早くそこへ歸らうぢやアないか。

淨雲　何を云ひやがるんだ、今更そこへ歸つて行けると思ふのか物知らずめ！

岩吉　ぢやア一體どうすれアいゝんだ。

淨雲　斯うすれアいゝんだ、恩知らず！

（と、淨雲は突如岩吉の頭ァ擲りつける。）

岩吉　うぬ！　なんぼ氣狂ひでも承知しねえぞ。

淨雲　はゝゝゝ。
（と、素早く飛び退いて、ふと離れの方から姿を現はした千代吉の方へ寄つて行く。千代吉は呪とその顏を凝視める。）

淨雲　いゝ女だな。だが、お前はあの田之助に惚れてるね。（と、眞顏になつて）そいつが不可ない。田之助と云ふ奴は恐ろしい奴だ。凄いほどいゝ男だが恐ろしい奴だ。あんな男に引懸つたら、今にお前も酷い目にあひますぜ。世の中にあいつほど心變りをする奴はない。あいつは猫の目だ。恩知らずの畜生だ。姐さん御用心なさいましだよ、あいつは獸だ。鬼だ、嘘つきの薄情者だよ。決してあんな奴に人間は近寄つちやア不可ねえ。今に見ろ、公儀へ訴へ出て、その儘に生かしちや置かねえから。

田之助　おい、おい、おい岩吉！（と、怺へかねるほど身を顫はして）此の坊主をどうかして吳んねえ。これを見てゐるとおれも氣が狂ひさうだ。（と、俯向いて甚しく煩悶する。）

岩吉　へい。（と、下手を見て）おい若衆達、お前達もそんな處で見てゐねえで、一寸手を貸して下せえな。
（と、云ふ聲で、印の絆纏を着た若衆が二三人來て、棄て臺詞で淨雲を下手へ連れて入る。岩吉、內儀、等も去る。）

淨雲　はゝゝゝ、やつぱり俺が怖ろしいんだな。それで俺を邪魔にしやアがるんだな。
（と、云ふ淨雲の濁聲のみが聞えて來る。この態を見送つてゐた千代吉は、やがて矢庭に田之助の膝に縋りついて泣く。）

千代吉　太夫さん、あたし……あたし……ほんとに如何したらいゝんでせうねえ。

田之助　どうしたと云ふんだ？　え、なにもそんなに泣くことはありアしない。お前はあの乞食坊主の慘めな姿を見てすツかり熱がさめた譯ぢやあるまい。まさかにそんな初心でもない筈だ。

千代吉　あたしは……太夫さん、頭の上から水を浴せかけられたやうな氣がしました。あの坊さんが太夫の一生を呪ふやうな氣がして怖ろしさに身內が慄へあがりました。

田之助　なあに、人間といふ奴は生きてる間は迷つていろいろなことをするものだ。ほんとに飛んだ興醒めな庵室の淸玄さねえ。（と、態と落ついて見せる。）

千代吉　ですけれど……あれが……あの坊さんが……もしか、ひよつと……（と、何か考へながら譫語のやうに口走る。）

田之助　え、もしか、ひよつと……？　どうしたと云ふん

だよ。

千代吉　ねえ太夫、（と、再び縋りついて）あの坊さんが、若しひよつとあたしを阿母さんのお腹の中にゐるうちから棄てゝ了つた眞實の親だつたら……。

田之助　え、親？　あの觀照院がお前の親だつたらと云ふのか。（と、さすがに色を失つて暫く息を嚥んでゐたが）はゝゝゝ、串戲も休み〳〵云はなくツちや不可ないよ。廣い世の中だ、な、なんでそんな馬鹿げたことがあるものかな。

千代吉　ですけれど、廣いやうでまた狹いのも世の中ですわ。ねえ太夫さん、あたしは今迄羞かしいから自分の素性を靠隱しに祕してゐましたが、あたしの死んだ實の阿母といふ人は、あの觀照院の門前にしがない暮しをしてゐた花屋の獨り娘だつたんですもの。

田之助　ぢやアお前の阿母さんが……（と、さすがに妙な廻り合せに駭いて）ふむ、全く因縁のやうな……妙に絡んだ不思議が世の中にはあるものだな。

千代吉　だからわたしも驚いたんです。が、太夫さん、どんな賤しい素性だからつて、愛想をつかして下すつちやア厭ですよ。わたしはそれが氣にかゝつてならないのですから……。（と、顔をうづめて潸々と泣く。）

田之助　なんでそんな事があつていゝものか。大丈夫だよ。花屋の娘はさて置いて、たとひ墓掘り隱亡の子だからつて同じ生きてる人間だ、此の田之助はそんな差別はしやアしないよ。成田屋のおやぢが、錦着て疊の上の乞食かなとはよくよんだ。そんなことを云やア、おいらこそ大きな面をする奴等の目からは、編笠を冠つて歩く小屋者だアな。（と、持前の皮肉な自嘲の笑ひをその豐かな美しい頰に浮べて云ふ。）

千代吉　太夫さん、ありがたうござんす。

田之助　なんだな、そんなにいつまでも泣くもんぢやアねえ。（と、聽耳を立てゝ）あゝ女の聲がするやうだ。おい千代吉、さツ、人に見られると見ツともねえから……。おい誰だ。

（と、云つて田之助は千代吉を抱くやうにして起きあがらせる。その途端、正面の襖が突如開いて柳橋の小靜があらはれる。）

小靜　なんだねお内儀さん、太夫はこゝにゐやアんとゐるぢやありませんか。（と、美しい眼に凄い色をあらはして）まあ、ぶしつけに御免なさいよ。誰でもないあたしですよ。まあ、太夫、折角のおたのしみの邪魔をしちやア濟みませんねえ。

田之助　はゝゝ、なんだい、誰かと思つたら小靜か。（と、態とおちついてゐる。）

小靜　然うよ、あたしですよ。（と、暫くつッ立つたまゝ睨と二人の樣子を凝視めてゐたが）太夫さん、これぢやアあんまりぢやありませんか。（と、坐りながら怺へかねて泣く。）

田之助　な、なにがあんまりだ。

小靜　まあ、お前さんといふ人は……。

（と、默つたまゝ小靜は田之助の顏を見つめてゐたが暫く何にも云へなくなつた、で、千代吉の方をヂロリと尻目にかけて口惜しまぎれに疊みかける。）

小靜　千代吉、こッちへおいで。もつと此方へおいでッたらね。なんだい、その顏は……生意氣も大抵にしてお置きよ。お前は駈け出しだから知るまいが、いくら水商賣をしてゐてもいゝ、藝者には藝者の意氣地といふものがあるんだよ。それをお前は知つておいでかい。

千代吉　……（初めは默つて俯向いてゐる。）

小靜　お前も子供ぢやアないんだから、人が物を云つたら何とか返事をおしなねえ。

田之助　これ、小靜、そんなにムキになるものぢやアねえ、相手がお前千代吉ぢやアないか。

小靜　ふむ、相手が千代吉ならあたしがこんなことを云つちやア惡いんですかい。

田之助　いや、然うぢやアねえが、千代吉だつて惡いと思ふから默つてゐるんぢやアねえか。

小靜　だが、あたしも柳橋の小靜か紀の國家の小靜かと云はれるほど、今ぢやア世間に浮名を立てられてゐるんだもの、疳積の蟲が承知しませんよ。千代吉、お前は、あたしといふものをさし措いて、ふざけた眞似をするぢやアないか。

千代吉　姐さん、わたしはそんなつもりぢやアありません。

小靜　なんの、ないことがあるものかい。それなら一體ここへは何しにお出でだい。

千代吉　姐さん！（と、かッとして膝前を直し）何しに來たなんて、姐さんらしくもないことを仰有るぢやアありませんか。柳橋の藝者が田圃の瓢亭（ひさごてい）へ來るに何の不思議がありますものか。口さへかゝれば、何處のお座敷へでも稼業ですからまゐりますさアね。

小靜　えゝッ、つべこべとお云ひでない。やつと此の頃一人でお座敷がどうにか誤魔化せるやうになつたと思つて大それた眞似をおしでないよ。

千代吉　いゝえ、それは皆んな姐さんの邪推と云ふものです。

小靜　なに、皆んなあたしの邪推だつて？　お前も藝者のはしくれぢやアないか。よくも白々しくそんなことが眞面（まとも）で云はれたものだねえ。千代吉、あたしの眼だつて伊

達についてゐるんぢやアないよ。

千代吉 ……（默つて涙を拭く。）

小靜 なんでもないならお前、顏色を變へたり、泣いて見せたりなんぞすることはないぢやアないか。

田之助 なんだね、小靜、手前もそこまで云つて了はなくてもいゝぢやねえか。實は、これにはちよつと譯があつて、おいらが呼び出しをかけたんだよ。

小靜 へえ、ちよつと譯があつて？ 太夫さん、その譯をこゝで聞かしてくださいよ。

田之助 そんなにムキになることはないぢやないか。まあ、氣を落ちつけてくれ、見ッともないからさ。（と、和かになだめる。）

小靜 見ともないと云ふことを御存じなら、太夫さん、お前も今賣出しの三代目澤村田之助ぢやアありませんか。あたしに赤耻をかゝせないで下さいよ。

田之助 判つた、判つたよ。小靜、なにもかも今日のことはわたしが惡かつたんだ。どうか素直に勘辨してお呉れ。さ、千代吉、お前はもうお歸り。

千代吉 はい。（と、しづかに立ちかゝる。）

小靜 いゝえ、まだ此の儘ぢやア歸さないよ、太夫さん。なんとか此の妓に判きりと手をきつてやつて下さいな。

田之助 ぢやア一體どうすればいゝんだ。千代吉がさつきから心の底であきらめて、何事もないむかしにして話をしてゐるぢやアねえか。それを根掘り葉掘り、小靜、お前らしくもねえ。よッぽど如何かしてゐるぜ。

小靜 いゝえ、太夫、今日といふ今日は、あたしはもう、その欺し文句にや乘りませんよ。

田之助 うむ、然うか。（と、深い太息をもらし）おれも此頃は公儀からの差止めで、飯より好きな舞臺へは出られず、ついした心のむしやくしやから小靜、お前には惡いことをしたと思つてゐるので、實はさつきからいろいろに云つてゐる譯だが、聞かれなけれア仕方がねえ。わたしも旋毛曲りの皮肉屋で賣込んだ三代目の田之助だ。どこまでも横車を押したいところだが、色道の違つてゐることは出來ねえから、小靜、お前の云ふ通りに、玆でキッパリとかたをつけてやらう。

小靜 それぢやア太夫、お前は千代吉と綺麗に手を切つてお呉れかい。

田之助 千代吉、決して惡い心からぢやアねえが、わたしは今日限りお前とはあはれないよ。

千代吉 え！ では太夫さんとは、もうこれッきり……あはれないんですつて？……（と、歔欷あげて、忍び泣く。）

田之助 然うだ、これッきりだ。深いなにかの因緣たつたとあきらめてお呉れ。その代りそのかたがついたら小靜

にも話すことがあるんだ。

小靜　え、あたしにもですツて？……。

田之助　うむ。小靜、長い間のいゝ仲だつたが、お前とも
　これツきり別れて貰ひたいのだ。

小靜　え、太夫、なんだツて、これツきりあたしにも別れ
ろツて？　それぢやアお前、あんまりお前が薄情ぢやア
ないか。太夫、お前がなんと云つても、あたしはそれを
承知しないよ。

田之助　まあさ、まあさ、そんなに騒ぐことはねえ。實は
おれも、いつか一度は自分の手で蒔いた種の收穫れをし
なくツちやアなるまいとは思つてゐたんだ。思つてはゐ
たんだが、今日あす、こんな苦しい破目に落ちて、役者
が生命の舞臺の上まで縛目にあはうとは思はなかつた。
それやこれやで今といふ今、つく〴〵人の世の中がうる
さくなつたよ。

小靜　だつて、太夫、今の若さでそんなことを云つたつて
それア一時のことですよ。これから先きの長い一生を：
…そんな無理なことを云つたつて、あたしや決して別れ
やしません。

田之助　そんな事を云つたつて、それは己れの知らないこ
とだ。小靜、勘忍して吳れ、今の此のおいらの心持は眞
劍なんだ。まだ二十二の生涯で、生意氣を云ふやうだが
色の戀のと云ふことがふつ〱厭になつたんだ。

小靜　そんな無茶なことを云つて、これから先きお前はど
うするつもりだえ。

田之助　それアおれにも解らないが、此の上の一つの望み
は、いづれ舞臺の縛目がとけたら、むき出した眞人間の
藝の力で、たつた一度江戸中の湧きあがるやうな人氣が
取つて見てえ。

千代吉　太夫さん、わたしが惡かつた、姐さんもどうぞ勘
忍して下さい。わたしのやうなものが太夫さんを……大
それたことをしたのが惡かつたんです。そこから起つた
間違ひですから、どうぞ今迄通り姐さんと仲よくして下
さいな。

田之助　なあに、そんな事ぢやアねえ、おれは人間といふ
奴に愛想がつきたんだ、此の上うるさく附き纏へば、お
前達も地獄の鬼と同じことだ。此の田之助を責めさいな
んで、舞臺の上で狂ひ死にでもさせようと思つてゐるに
違ひないんだ。

小靜　まあ、太夫さん、何を云ふの……お前はどうかして
ゐるんだ。まあ、靜かに物を考へて下さいよ。

田之助　えゝツ、蒼蠅い！　お前達はあの觀照院の乞食坊
　主と同じことだ。おれを責め殺さうとする奴等だ。

小靜　え、觀照院の……？

千代吉　あツ、姐さん、勘忍して下さい。（と、縋りついて泣く）

田之助　あゝ！　あの觀照院の奴を……然うだ、岩吉に然う云つて、あいつを今のうちに如何かして了はなくちやアならねえ。

（と、田之助は空間に物を凝視るやうな表情で、ふらふらと座敷を出て行く。）

千代吉　あゝ太夫さん、どこへ行くんです？　太夫さん、……太夫さん……。

（と、振絞るやうな聲で後を追ひかけてゆく。）

小靜　あゝ！やツぱり太夫はどうかして了つたんだ。

（小靜は髪も裳裾も振り亂して座敷の眞中へ泣き崩れる。）

（蟲の聲、日暮れかゝる。）

――幕――

心中兩國橋（三幕五場）

おつま
八郎兵衞

登場人物

銀猫の女主人　おつま
その情夫　彌兵衞
お妻の兄　長兵衞
お妻の妹　お柳
伊勢屋手代　八郎兵衞
その叔父　總右衞門
伊勢屋主人　庄兵衞
同女房　お嶋
同姉娘　お藤
その妹　お千代
桂庵婆　お熊
その他、無頼漢、抱女、職人、若僧、小僧、百姓、女中、通行人大勢。

時代
文化の末頃

序幕

第一場　回向院の境內

上手斜めに奧へかけて見世物小屋がつゞき、橫向きに木戶番の番臺が見えてゐる。正面からはやゝ斜めに下手奧へ遠く回向院の本堂、よき邊に燈籠、花の立木、掛茶屋の手拭が折からの春風に陽氣らしく吹かれてゐる。下手門に續く石塀の隅に葭簾が立て掛けあり、その蔭の中で、遊び人風の無頼漢五人ほど、莚の上で賽くなつて勝負を爭つてゐる。麗かな春光の輝り渡つた日。見世物小屋の賑やかな囃子、番臺の呼聲で幕開く。

番臺　さあ、入らつしやい〳〵〳〵。今が本藝の變り目、あゝ評判ぢや〳〵。

（と、呼び聲につれて、奧の方から續いて種々のツケ聲聞える。）

ツケ聲一　あゝ入らつしやい！　代は見てのお戻り。日本一の力持、馬を板に乘せて手足でさしあげる女の力業(ちからわざ)！あゝ評判々々！

ツケ聲二　あゝ評判々々！　今取れたばかりの河童々々！

(と、各の小屋競争の形で板をたゝきながら客を呼ぶ。ドンチャンといふ騷ぎの物音、拍子木など賑やかに聞える。大勢の通行人のうちに、職人風の男三人、(留吉、仁三郎、勘七)通りかゝる。)

留吉　どうだい仁三、手前もしばらく旅にゐたが、江戸へ來ちやア目がさめるやうだらう。

仁三郎　本統によ、さすがは江戸の兩國だ。兄イおいら何だか田舍者になつたやうな氣がするよ。

勘七　大きな聲をするねえ、ポン引にねらはれるせ。

仁三郎　違えねえ。はゝゝゝ。

(と、三人大笑ひをする。評判ぢや〳〵といふ聲がこゝへ又大きく入る。)

留吉　そうれ見ねえ。田舍者と見られたぜ。まご〳〵しねえで八人藝でも見るとしようか。

勘七　いや、おいら、あの大きな腹へ立臼を載けて搗かせる女の力持が見てえんだが――

仁三郎　それよりも久振りで俺の見てえのは、矢張り女の藝にや違えねえが、たんぽ槍で突いてかゝる、あれが一番忘れられねえ。

勘七　厭な野郎だなあ、おいらあんな藝當は大嫌ひだ。

仁三郎　何を云つてやがるんでえ、「嘘つけ、チクつけ、三寸舌出せ、地獄で閻魔た。」なあおい兄イ。

留吉　違えねえ。まア何が面白いか丼の錢をはたいて見ようぢやねえか。

(と、三人は上手奥へ入る。評判々々の聲。職人と入れ違ひに上手より伊勢庄の夫婦、隱居とお千代の手を引き出て來る。)

お千代　母さん、もツと何か見たいよう。よう母さん、あの鼻から鉛の水鐵砲が、もツと見たいよう。

お嶋　困つた子ではある。もう婆さんが草臥れたと云うてゐるではないか。

隱居　ほんにお千代坊はよい子だのう、あした又淺草の觀世音樣へ行つて、豆と德利でお手玉をする、あの德藏手品を見せてあげる。

お千代　厭だ〳〵、豆と德利厭だ！

お嶋　これ！

庄兵衞　何をぐづ〳〵云つてゐるのだ。こんなに土產も買つて來たではないか。さア早く歸りませう。

お千代　父さんおんぶがしたいよう。

お嶋　おゝ草臥れて眠くなつたか。お藤と長吉はまだ見えませぬか。

庄兵衞　間もなく八郎兵衞を聟に直さう思つてゐるのに、容姿ばかり大きくても……ほんとに困つたものだの。(と踞んで脊を見せ)さあ父がおんぶしてやりませう。

お千代　厭だ〳〵。姉さんがゐなくては厭だ〳〵。
隱居　おゝ、よい子だ、よい子だ。
お嶋　さあ、そろ〳〵、先へまゐりませう。
（と、皆々行きかゝろ。小僧の長吉先きに姉娘お藤、（十九）急ぎ足に後より追ひ來る。）
長吉　おうい、評判々々！　今捕れたばかりの河童々々！
庄兵衞　これ、人通りの多い往來を、巫山戲て歩くにも程がある。
お嶋　お藤もお藤ぢや。大抵案じさせることではない。
庄兵衞　一體二人で何を見て來ました？
長吉　あの、今取れたばかりの河童々々！　といふのをお孃樣が見たいと申しますから、木戸錢を拂つて入つて見ましたら、濡れた合羽がズラリと掛けてありましたよ。
お嶋　それがほんとに河童にお尻をぬかれたと云ふのですよ。
庄兵衞　ほんとに河童野郎と云ふのは、長吉、お前のやうな者の事を云ふのだ。
長吉　これは恐れ入りました。だがわたしが河童野郎ならお孃さんも……
庄兵衞　えゝ、生意氣を云はずに早く來なさい。
隱居　さあ早くお家へ歸りませう。
（と、皆々下手へ入る。下手寄の葭簾の中から遊び人風の無頼漢二人、大きな脊伸びをしながら出て彼等を見送る。）
漢甲　どうだ兄弟、あれが日本橋きつての大しんだい、伊勢庄の家内中揃つてのお出ましとは一寸誰も氣がつくめい。
漢乙　金を殘す人といふものは違つたもんだ。元はと云へば柳原で、古着を賣つた野天商人だ。
漢甲　葭簾の中で遊びをしてゐる、此方人等よりもまだしがねえ、筵の上の三文商ひ、それが今では江戸中に聞え渡つた伊勢屋の大店さ。
漢乙　何不足のねえ身分になつたら、嘸お天道樣は暖かいだらうなあ。
漢甲　お天道樣が暖かいよりも、あんな綺麗な娘の聟になる――その野郎がおいらア羨ましいよ。
漢乙　ほんとにの、男妙利に叶つた奴た。しかし他の事を羨んでゐても始まらねえ、どうだい、いゝ鴨がゐるかもしれねえから、境內を一廻りして來ようぢやアねえか。
漢甲　おゝそれがよからう。
（と、二人は上手奥の方へ入る。木戸番の呼聲から直ぐ水嚢の囃子唄になる。花道より伊勢屋の手代八郎兵衞（二十五）縞物の堅い風采に雪駄穿きで出て來る。）
八郎兵衞　もうめッきりと春陽氣になつた、花もちらほら

咲くであらうが、兩國の賑はひは流行物が多いので江戸一番、お蔭で此方の商賣も繁昌するとは、ほんとに何が幸せになるか知れぬものだ。

（と、本舞臺にかゝる。これより先き田舍者三人、在郷風の小娘一人をつれて見世物小屋の方から高調子に話しながら出てくる。）

田舍者一　なア總左衞門、さすがお江戸だ。あんな綺麗な面をして、あんな力のある女ッ子があるものかなあ。

總左衞門　然うだ。何を見ても人間業ぢやア出來ねえこんだ。

（と、八郎兵衞は此の田舍者と行き違ふ。小娘が目敏く認める。）

小娘　あれ、父さま、あそこへ本家の兄さまが――

田舍者二　なに本家の？

總左衞門　おゝほんに、おぬしは八郎兵衞ぢやねえか。

八郎兵衞　おゝお前は新田の叔父樣、まアしばらくで御座いました。

田舍者一　やア八郎兵衞か、まア見違へるほど立派な男になつたなあ。

田舍者二　此の女が氣がつかねえと、俺らにやさつぱり解らねえだあ。

八郎兵衞　どなたも御機嫌よろしうございます。して皆さまお揃ひで、これから何方へまゐるのでございます。

總左衞門　どこへ行く處があるものか。お前の阿母が案じ暮してゐるだから、斯うして重兵衞と助左衞門の來るのを好い道連れに、お前の方の極りをつけに來たアのだ。

田舍者一　それぢやア總左衞門、わしらは他に用事もあるだから――。

田舍者二　八郎兵衞に會つたのを幸ひに、一先づこれで別れるとするべえ。

總左衞門　では各自の用が片づいたら、馬喰町の定宿でまた落合ふとすべえか。

田舍者一　然うだ、さうすべえ。

田舍者二　さあお霜、早く來ねえか。

八郎兵衞　ではどなたもお出でなさいまし。

（と、皆々下手へ入る。）

總左衞門　ほんのことだ下總から武州へ入つて、まだ兩國橋も渡らねえのに、見世物でもあるめえと、俺はなんだか厭だつたが、あのお霜が芝の奉公先きへ行つて了へばまた出られねえと、子供に引かれた回向院で、お前に會はうとは思はなかつたよ。

八郎兵衞　わたくしもこんな場所で叔父樣に、お目にかゝらうとは夢にも存じませんでした。

總左衞門　今見た手品早業のやうだ。あッはゝゝゝ。（と、

つくづく八郎兵衞の樣子を見つめ）だが、お前もよくこんなに立派になつて呉れたなあ。只つた一人の阿母が佐倉在でお前の出世を祈つてゐる甲斐があつて、降つて湧いた養子の話も、八郎兵衞、お前の辛抱が强いからた。

八郎兵衞　いゝえ、これは皆んな阿母樣や叔父樣の手堅い信用があるからでございます。

總左衞門　おゝよく云つて呉れた。八郎兵衞も以前は立派なお代官たが、時よ時節で仕方がない。十にもならないうち江戶へ奉公に出されたのも、思ひやうでは塞翁が馬だ。なう八郎兵衞これからは、どんな幸せな事が向いて來るか知れたものぢやアねえ。

八郎兵衞　ほんとに叔父樣の有仰る通りでございます。阿母樣にも長生きさせて必ず末はよいやうに安心をいたさせます。

總左衞門　おゝそれを聞いて、俺も何より喜ばしい。

（と、何やら懷中から出してゐる處へ、下手より銀猫のお妻の妹お柳（十八）來かゝる。）

お柳　あれ八さん、こんな處に何しておいで？

八郎兵衞　まアお柳ちやん……今、田舍の、叔父樣にひよツと出會つて、こゝで立話をしてゐましたのさ。

お柳　然う、御用が濟んだらお寄りなさいな、姉さんが待つてゐますから。

八郎兵衞　なにかよいお拂ひ物でもございますかね。後程伺ひますから、宜しく有仰つて下さい。

（と、お柳はうなづいて上手へ入る。總左衞門はお柳の後を見送りながら。）

總左衞門　八郎兵衞、なんぢやい？　あれは？

八郎兵衞　あれは銀猫といふ家の、姐さんの、妹でございます。

總左衞門　それは姐さんなら、妹には違ひなからうが、大切な處たから氣をつけにやならねえだぞ。

八郎兵衞　なんの、お前樣（と、微笑を含みながら）お店のお得意でございますよ。

總左衞門　おゝそれならよいが――之はのう宗吾樣のお守だから、必ず肌身を離さぬやうと、阿母からの言傳てだ。

八郎兵衞　それは有難うぞんじました。

總左衞門　あゝ一寸待つて呉れ、此の叔父も土產を持つて來ねえだから――。（と、橫を向きながら財布を取出して金を數へ初める。）

八郎兵衞　なんの、そのやうな心配が入りますものか。

總左衞門　いや然うでない――

八郎兵衞　あれ叔父さま、往來のものが見ると笑ひませう。此の八郎兵衞をまだ小僧の時のやうに思つておいでなされますなあ。

（と、八郎兵衞は思はず苦笑する。これより先き以前の無頼漢の甲乙、來かゝりゐて態と總左衞門の財布へ突當る。）

總左衞門　あれ、此の人達は何をするだ。

漢甲　何をするとは何のこッた。

漢乙　突當つたのは手前ぢやアねえか。

總左衞門　でも他の持物へ手をかけなさるから――。

八郎兵衞　これ、叔父さま。（と、制する）

漢甲　おれを掏摸だとでもぬかすのか。

漢乙　太い野郎だ。只此儘にやならねえぞ。

八郎兵衞　どうぞ御勘辨なすつて下さい。御覽の通りの田舍人で、決して惡氣があつて申したのではござい ません。

漢甲　おい〳〵若いの、惡氣がなくて云ふんだから、他を掏摸と云つても泥棒と云つても構はねえと云ふのか。

八郎兵衞　飛んでもない、決してそんな譯ぢやございませんお詫はどのやうにでも致します。

漢乙　何を云ひやがるんでえ、痛い目をさせなくちやア承知が出來ねえ。

（と、二人をなぐりにかゝる。此の時、下手葭簾の蔭より同じ無頼漢の丙、丁、姿をあらはす。）

漢丙　何んだ〳〵。

漢甲　こいつらを疊んぢまふんだ。

漢乙　皆んな手をかして吳れ。

漢丙、丁　おッと承知だ。

（と、皆々蒐らうとする。銀猫の彌兵衞は無頼漢の仲間であるが、一番後からぬッと姿をあらはして八郎兵衞に目をつけ、思入あつて。）

彌兵衞　おい〳〵〳〵。皆んな待て！

漢甲　待てとはなんだ。

漢乙　兄貴、なんで止めなさるんだ。

彌兵衞　まあいゝから、おれにまかせて手荒なことをするなといふ事よ。

漢丙　だつて仲間のつきあひもあるぢやアねえか。

漢丁　兄イとか蜂の頭とか云はれるお前が、あんまり意氣地がねえぢやアねえか。

彌兵衞　わからねえ野郎共だな。おれにまかせて、そんなゆすりがましい事は止せと云ふ事よ。（と、目顏で知らせる）

漢甲　それぢやア彌兵衞、おれッちは泥棒と云はれても掏摸と云はれても我慢しろと云ふのか。

漢乙　そんなコケな事が出來るものかい。

彌兵衞　出來なきやア勝手にしろ！

漢甲　なんだと？

漢乙　此の野郎、立てゝやりやア好い氣になりやアがつて。

彌兵衞　何をぬかしやがるんでえ、さあおれが相手だ來や

あがれ！

（と、皆々大立廻はりになる。往來の彌次馬連「喧嘩だ〳〵。」と大勢寄り集まる。見世物小屋からは客を呼ぶ聲が一層大きく聞える。しばらく大混雜。此時、群衆の中から村松町の小頭長兵衞（お妻の實兄）あらはれ、中に入る。四人は逃げ去る。彌兵衞一寸テレる。）

彌兵衞　おゝお前は兄貴――。

長兵衞　彌兵衞、相變らず手前碌なことはしねえなあ。

八郎兵衞　いゝえ頭、よくお禮を申上げて下さいましよ。

長兵衞　おゝ、お店の番頭さんか、これは又どうした譯です。

八郎兵衞　今、わたくしの叔父さまが、因縁をつけられて飛んだ難儀にかゝるところを、此の方が救つて下すつたのでございます。

長兵衞　なに、救つて下すツた？（と、思入あつて）救つて下すつたその裏にやあ――。

彌兵衞　えゝ？

長兵衞　なにさ、正直なものにやァ天道樣がついてゐて下さると云ふことよ。

彌兵衞　ふむ、人の難儀を救つてやつても、そのおうつりに皮肉を聞くとは、飛んだ薄情な世の中になつたもんだ。

（と、毒口を殘して悠々と立去る）

八郎兵衞　ありがたう存じました。

總左衞門　ほんとに有難うごせえましたゞあ。

（と、後を追ふやうにして禮を云ふ。長兵衞は遮り止める。）

長兵衞　まあ〳〵番頭さん、あんなものに關はるものぢやあねえ、終ひにやァ飛んだ間違ひが起りますぜ。

八郎兵衞　でも危いところを救つて下さつた云はゞ恩人でございます。

長兵衞　それも人によりけりだ。決してあんな者に近づいて末のいゝ事はありやしません。世にいふ魔がさすといふ事もありますから、よく〳〵災難除けをしなくちやァいけませんぜ。ねえ叔父ごさまとやら、然うぢやァございませんか。

總左衞門　えゝ然うでごせえますとも。お江戸は賑やかで好い處だと思つて浮々してゐると、ほんとに怖いところでごぜえますだ。

八郎兵衞　いろ〳〵有難う存じます。ですが、どうやら頭にも緣故のある方のやうでございますし、（と、一寸考へ）どこぞでお目にかゝつたやうにも思はれるし――。

長兵衞　まあ〳〵そんな事はどうでも好い。時に叔父御さまはこれから、どちらへお出でなさいます。

八郎兵衞　叔父はお店へ伺ふ筈ですが、生憎わたくしが一

三軒得意廻りをせねばならないので――。

長兵衛　なあに、お店なら私(わたし)がお供をしてあげませう。

八郎兵衛　それは何より安心です。

長兵衛　では、叔父御さま、私と一緒に一歩先きへまゐりませう。

總左衛門　では、何分お願ひ申しますだあ。

八郎兵衛　どうぞお願ひ申します。――わたくしも追付直ぐに戻りますから――。

（と、長兵衛、總左衛門は花道より入る。八郎兵衛、見返り思入れあつて。）

八郎兵衛　あゝ、やツとの事で思ひ出した。（と、輕くポンと横手を打ち）あれは確かに銀猫の――すれば頭はお妻さんの兄さんに違ひない。廣いやうで狹い世間とは能く云ふが、此の恩返しは――（と、思入れ）どれ、お得意を廻つて來ようか。

（と、木の頭、賑やかな囃子にて廻る。）

第二場　銀猫の女部屋

回向院の一部に出來た色町の草分は此の銀猫といふ賣女屋である。その女部屋の内部が舞臺。

上手奥に椽側を隔てゝ茶の間のある心、（それが觀客に見えるやうに工夫出來れば尙よろし）室内の壁に三味線が二挺かけてあり、衣桁にはだらしなく着物がたゝまずに引掛けてある。

女の一人は腹這になつて草双紙を讀んでゐると一人は爪の垢を掃除し、一人は入れ髷の痕を痛さうに撫でてゐる。

稽古三味線の端唄で道具をさまると、皆一樣にだらしのない風をして、まるで自墮落に身を崩したといふ恰好、時々見世物小屋の呼聲が遠く聞える。

女の一　禔(ふう)ちやん、それから米八ねえさんは相手の男にあつたのかい。

女の二　極まつてらアねえ。逢つたのさ。

女の三　まアよかつたわねえ。――あゝあたしも逢ひたい。

女の一　おや、お前さん、一體何をおごつてからにしようといふのさ。

女の二　然うさ、江戸の名物ならなんでも驕つてあげるよ。それともお前さんにやア四ツ目屋の齒なしでも驕つてあげようか。

女の一　ひとツ、御殿(ごてん)もんぢやあるまいし。

（と、皆々明け放した調子で笑ひ出す。）

女の一　擦れ辛しになつたわね、此の人は――だがねお前さん根が水性だから直きにあきるよ。

女の二　然うかも知れない。妾や水性で薄情なんだからね、

男にかけると――。
女の一　女にかけたつて薄情だよお前さんは。
女の二　うるさいねえ。
女の三　ほんとにさ、こんな薄情者に惚れて通ふ男があるかと思ふと、江戸は廣いねえ。
女の一　お前さんは默つて爪の垢を取つておいでよ。
女の三　ヘン、お前さんだつて稀にはかゝとの荒れたのでも擦るといゝや、江戸に西鶴のやうな作者が生れると一番先きに惡口を書かれるのはお前さんだよ。
女の二　まア靜かにおしよ、また奥から怒鳴られるからさ。
（と、皆な一緒に奥の茶の間の方を見込む。）
女の一　日も暮れないうちから、もうやつてるかい。（と、盃を口へつける手眞似をする）
女の三　たまらないね、あたしやねえさんが可哀さうでならないよ。
女の一　お前はどう思ふか知らないけれど、ねえさんは今ぢやア拇指に惚れちやアゐないね。
女の三　そんな事はないよ、好いて一緒になつた仲だものさ。
女の二　でも、あれぢやア大抵厭にもなるだらうよ、酒と女と博奕の三拍子ぢやア耐らないねえ。
女の一　それが皆んな男の本性さ。家のねえさんは拇指かまだ深川で船頭をしてゐた時分、無理往生に手籠めにされたんだと云ふぢやアないか。
女の三　然う云へばそんな事を、あたしも聞いたことはあるがね。まアあんな男を亭主に持つたら、女は一生うだつがあがらないねえ。
女の二　そんなことは如何でもいゝさ、あたしやあたしの男がやさしくツて甲斐性があればそれでいゝんだよ。
女の一　また薄情が初まつたよ。
（と、露路口から突然「厭だわよう〳〵。」といふ女の聲が聞える。そして慌立しく追はれて來たのはお妻の妹お柳である。すると若い坊主良圓がぬツと下手垣根の處から上半身を見せる。手には庭帚を持つてゐる。）
良圓　お柳ちやん、なんにもしやアしないぢやアないか。
お柳　でも良圓さんは、惡巫山戲をすると怖いから厭だわよう。
良圓　意氣地なしだなあ。（と、薄氣味わるく笑つてゐる）
女の一　どうしたのさお柳ちやん。
女の二　また、あの助平坊主がお柳ちやんをからかひやがつたんだね。
お柳　あたしをつかまへると目を据ゑて離さないんだものあたし怖いわよう。
女の三　ほんとに戲談もいゝ加減にしないと承知しない

よ、此の生臭坊主め！
良圓　うふゝゝ、何もそんなにムキになつて怒らなくッてもいゝぢやアないか。
女の一　さッ、早くお歸りよ、薄氣味の惡い奴だねえ。
女の二　え早く歸らないと、水をぶッかけるよ。
良圓　人を犬だと思つてやがらア、猫どもめ！　金を持つて來ないと馬鹿にしやがるんだな。
女の三　金なんぞ持つて來たッても駄目だよ、さッさと歸りやアがれ。
女の一　歸らないと——
（と、女の一が水を持つて來て打かける眞似をする。坊主は薄氣味惡く笑ふ。）
女の一　本統にぶつかけるよ。
良圓　うふゝゝかけてもいゝよ。
女の二　まアあきれた、色氣狂ひだよ。
（と、此の時裏口の方に「御免下さい、御免下さい。」といふ聲が聞える。）
女の三　おや、誰か來たやうだよ。（と、下手奥の方の障子をあける）
女の一　それ、またお寺から來たんだよ。（と、威嚇する）
良圓　——ぢやあ、また來らあ。
女の二　をとゝひおいでだ。

女の一　お柳ちやん、ほんとに厭だつたでせう。
女の三　まあ、誰かと思つたら伊勢庄さん。（と、蔭で大きな聲がする）
女の一　え、誰？
女の二　伊勢庄の番頭さんよ。
お柳　え、八さん？
女の三　えゝ、八さん、お前の大好きな八郎兵衛さんですよ、お柳ちやん。
（と、出て來て戲談らしくいふ。お柳は顏を赧らめる。）
（皆々捨臺詞よろしく障子際に立揃つて八郎兵衛を内へ誘ひ入れる。）
八郎兵衛　御免下さい。これはまア、ねえさん方お揃ひでございますねえ。
女の一　まア相變らずお世辭のいゝ。
女の二　もッと此方へお入りなさいよ。
女の三　皆んな揃つて八さんお前をお待ちかねのところさ。
女の二　うまく云つてるよ、此の人は——それはお柳ちやんの胸の中でさアねえ。
お柳　あら、厭な人。——（と、はにかむ）
女の一　ヨウ／＼、八さま／＼色男さまといふところだね、はゝゝ。

八郎兵衛　それは嬉しうござんすよ。戯談にも然う云はれると男冥利でございますよ。はゝゝ（と、愛嬌よく笑つて）時に皆さん、よい流れものがありますが、お揃ひのところで一寸御覽下さいませぬか。

女の二　まア、八さんの相變らずな商賣上手、そんなことは後にして、お柳ちやんが何か驕ると云つてゐたところ、ずつと此方へお寄りなさいよ。

八郎兵衛　へい〳〵、それは有難う存じます。

お柳　あれ、八さん嘘ですよ。

八郎兵衛　それでは私がかつがれたのでございますね。

お柳　皆んな揃つて、いつもあんな事ばかり云つてあたしを嬲るのですわ。

八郎兵衛　おや然うでございますか、それは善くない事ですねえ。

女の三　でもお柳ちやんは八郎兵衛さんに惚れぬいてゐると云つた癖に――。

お柳　あれ、またあのやうなことを――八さん、決して惡く思つて呉れては厭ですよ。

八郎兵衛　なんでそんなことを思ひませう、決して〳〵そんなことは思ひません。

女の一　まア八さん、もちツと此方へお寄りなさいと云ふのにねえ。

八郎兵衛　へい〳〵、有難う存じます。

女の二　まア、行儀のいゝのを通り越して、何といふ堅苦しい――。

八郎兵衛　どういたしまして、お店者は皆んなこれでなくつては勤まりませぬのさ。

女の三　だが八さん、折角女の驕るものを食べないといふのは男の恥でござんすよ。

八郎兵衛　へい、然うと極まれば何なりと御馳走にあづかりませうかな、はゝゝ。それはさうと、今日は、ねえさんはお留守でございますか。

お柳　いゝえ、家にゐます。私が然う云つてあげませう。

（と、立ちかゝる）

八郎兵衛　いえ〳〵、なに、別に大して急ぎは致しませんが、今日はお極まりの晦日ですから、お勘定の殘りを――お願ひ申すのは兎も角も、移り替への御註文でもして置いて頂かうかと思ひましてな――。

女の一　まア、お前はあたし達では相手にならないと思つて……ねえさんに直談とは人の惡いにも程がありますよ。

八郎兵衛　いえ飛んでもない。決してそんな譯ぢやありませんが――。

お柳　では、あたしが然う云つてあげませう。

八郎兵衞　それは濟みませんねえ、お柳ちやん。

（と、お柳立つて茶の間へ行く。）

女の二　兎に角今日は駄目ですよ。拇指が此の頃ずツからかんに負けつゞけてゐる揚句、けふは日の暮れないうちから、もう自棄酒を煽つてゐる始末だから――。

八郎兵衞　おや〳〵それでは是非がない。どれ、また出直すといたしませうか。

女の三　まあ現金な人ねえ――ちよつと位、あたし達と附合してもいゝぢやアないの。

女の一　本統にさ、まア〳〵八さん、お待ちなさいッたら。

女の二　此儘素直にやア歸しやしませんよ。

（と、皆なわい〳〵云ひながら、八郎兵衞の周圍に寄り集まり、風呂敷包を奪ひ取つて無理に引留めようとして騷ぐ。突然奥から彌兵衞の疳癪聲が響く。）

彌兵衞　えゝ、いけ騷々しい、靜かにしねえか！

（と、此の一聲に女達は一齊にひつそりとなる。お妻が直ぐ座を立つて來る。）

お妻　まあ、仕樣のない人達だねえ、もちッと靜かにしてお呉れでないか。

（と、女部屋の障子をガラリと開ける。八郎兵衞は恐縮して挨拶の言葉もなくお辭儀をする。）

お妻　おや、まあ、伊勢屋の番頭さん、お前さんがおいでだつたのかい。道理であんまり賑やか過ぎると思つてゐましたよ。

八郎兵衞　どうも飛んだお邪魔をいたして相濟みませんでした。

お妻　いゝえね、（と、後ろを振返つて一寸調子を落し。）今、酒がまはつた處だから、いゝきつかけにされたのさ。（と、女達に向ひ）一體お前さん達が惡いやね、ちッと氣をつけてお呉れよ。

（と、お妻は女達を嗜めて、八郎兵衞に恐い顏を見せまいとする。）

（色白の小粋な中年增で、以前は深川の妻吉といふ藝者で鳴らした女である。）

お妻　實はね伊勢屋さん、お前さんには濟まないけれど正月を遣繰りでした後が霜枯二月、ちらほら花の噂もあらうといふ今日だから、少しは何とかしなけれアならないんだが、どうも少しばかり都合があつてねえ――。

（と、お妻は八郎兵衞の傍にピッタリと坐り込む。八郎兵衞はモジ〳〵しながら其言葉を受けて。）

八郎兵衞　いゝえ、それは、またなんぞお拂物でゝも埋め合せをして頂くとして、どうでせう、恰度、今移り替へのお恰好なものがあるのですが――。

お妻　と云つて、いつも先きがつかへて居ちやア、見せて

下さいとも言ひ難い譯さねえ。

八郎兵衛　なアにねえさん、そんな御遠慮にゃア及びませんよ、へい。

（と、八郎兵衛は風呂敷包からいろ〳〵攫げ出して見せる。）

お妻　まア、いゝ柄だことねえ。（と、褒めながらかざして見る）

女の一　ほんとにねえさん、よく似合ひますよ。

お妻　何年こんなものを手にしないだらうねえ、これでも昔は――。（と、云ひかける）

女の二　縹緻の美い人は、どんな柄でも能く似合ふわねえ、ねえさんなどはまだ〳〵どんな派手なものでも構やしませんよ。本統に羨ましうござんすこと。

お妻　何を戯談お云ひだねえ。もう五つ六つ若ければ、それこそお柳の岡惚れを横取りして、八郎兵衛さんのやうないゝ男と、道行きをしまいものでもないがね。

（と、お妻は酒加減かホッといふ息をつきながら戯れ口を利く。女達は一寸顔を見合せる。お妻は笑ふ。）

（その途端に再び障子がガラリと開く。そして彌兵衛の鋭い眼がギラリと光つて見える。）

彌兵衛　おいお妻、手前豪氣にしやれたことをぬかすぢやアねえか。

お妻　あら、お前さん、今、伊勢庄の番頭さんに借金の云ひ譯をしてゐたところぢやアありませんか。

彌兵衛　なに借金の？（と、ニッタリ笑つて）然うか、それア大きに御苦勞様だ。

（と、空嘯いて八郎兵衛とお妻の顔を再びジロリと見る。）

八郎兵衛　あゝ、矢張り先刻の――。

彌兵衛　えゝ。

（と、彌兵衛は惡いことでもしたやうに急いでピタリと障子を閉める。）

お妻　どうかしたので御座んすか。

八郎兵衛　いゝえ、先刻から飛んだお邪魔をしたと申しましたのさ。どれ、また其内にお伺ひいたしませう。

（と、八郎兵衛、風呂敷を包み初める。）

お妻　あれ、まア、いゝぢやアありませんか。

八郎兵衛　いゝえ、また、いづれ其内に伺ひます。

お妻　おや、然うですか。（と、茶の間へ引返して彌兵衛の樣子を覗きながら）今日は生憎、不漁つゞきの祟りだから、ほんとに氣にかけないで下さいよ。

八郎兵衛　何の、それ處ぢやアありません。私はまた、そんな事とは知らないものですから、お察しもなく騒々しい聲を出したりなんかして、本統に申譯がありません、

どうぞねえさんから、よろしく申して下さいまし、その内お詫びにあがります。
女の一　なアに、八さんを無理に引留めたのはあたし達なんですよ。本統に濟まなかつたわね。
女の二　それだから、あたしはお止しなさいと云つたのだけれど。——
女の三　おや、お前さん、またいゝ子になつて巧いことを云つてるねえ、八さんを一番大騒ぎするのはお前さんぢやアないか。
女の一　ほんとにさ。そんな白々しいことを云ふと承知しないよ。
お妻　まア濟んだことは好いぢやアないかね、それよりも皆んなそろ〳〵錢湯へでも出掛けたらどうだい？　福ちやん、お前さんは大層髮がこはれたねえ。
女の三　ほんとに寢ざうがいゝからねえ。
女の二　餘計な口を——。
お妻　まア好いから髮結さんへ行つてお出で。
女の二　ぢやア、それから錢湯へまはつて來ます。
お妻　あゝ然うおしよ。
女の一　あたし達もそろ〳〵出掛けようよ。
（と、皆それ〳〵用意をして出掛ける。）
女の二　八さん、ごゆつくりね。
女の三　直ぐ歸つて來ますからね。
女の一　ほんとに直ぐ歸りますよ。
（と、挨拶もそこ〳〵出て行く。八郎兵衞も荷物を殘らずしまつて立ち寛ろ。お妻はザッと沈默、何か屈託に耽つてゐる。）
八郎兵衞　いゝえ、わたくしも然うしては居られません。ではねえさんまたお伺ひいたします。
お妻　あゝ八さん、一寸待つて下さいな。
八郎兵衞　何か御用でございますか。
お妻　えゝ——あの一寸——。
八郎兵衞　でもまた、奧で旦那が御機嫌をそんじると不可ませんから、御註文のことや御勘定のことなら、またいづれ近日、きつとお伺ひをいたします。
お妻　いゝえ、そのことなら、また來て頂けばいゝんですが、實はねえ八さん、お前さんのお出でを心待ちに待つてゐました。と云ふのは、此の間中から——稼業が隙であの通りの不機嫌たから、どうしても最う少し、無い工面もしなければなりませんのさ。
八郎兵衞　おや、然うでございましたか。それなら早く然う有仰つて頂けば——なにもこんな逃げッ尻をいたすんぢアございませんでした。（と、腰をおろす。）
お妻　いつも御存じの通りの始末だから、（と、さも云ひ憎

くさうに）拂ひものと言つても、ほんとにおはづかしいので――、

八郎兵衞　いえ、どう致しまして。では、一寸拜見をいたしませう。わたくしの方も商賣のことですから、どんなお拂物でも結構でございます。精々勉强をいたすつもりでございます。

お妻　え丶それはもう、八さんにはお氣の毒でなりません。もう碌な品もありませんが――では、濟みませんが一寸見て下さいねえ。

（と、お妻は他の障子を開けて入る。八郎兵衞はその開いた拍子に思はず奥を見ながら煙草に火をつける。）

八郎兵衞　以前を云へば深川の仲町で、羽織者で鳴らしたねえさんだと云ふことだが、今でもあんな小粹な年增ぶりは、江戸中歩いてもありやアしない。（と、奥に思入れ）それを思ふと觀音菩薩も、附きものゆゑに氣の毒だ。これやア頭の案じるのも無理はない譯さねえ。

（と、お妻は姿をあらはして。）

お妻　え丶、八さん、何か有仰つて？

八郎兵衞　い丶え、なに、煙管がつまつて仕方がないと、思はず獨り語を申しました。

（と、ポンと吸殼をはたく。）

お妻　おや、然う、どうぞ御遠慮なく、そこらのを遣つて下さいな。

（と、お妻は包みにした衣類を蔭から持ち出して來る。八郎兵衞はテレ隱しに「有難う存じます。」と云ふ。）

お妻　八さん、拂ひ物といふのはこれなんですが、どうか見て下さいな。

八郎兵衞　拜見いたします。これは結構なもので――（と、順々に見ながら）お品は申分ございませんが、ちつと柄ゆきが流行いたしませんな。此の路考茶も最うそろ〳〵今日はスタリ氣味でございます。それにどうも景氣が引立ちませんでな。（と、次から次へと見ながら云ふ。）

お妻　それぢやア家ばかりぢやアないんですねえ、いつになつたら本景氣になる事やら本統に困つたことですねえ。

八郎兵衞　それに手前どもの稼業などは、商賣はなくつても贅澤品だとあつてお上の租税が嚴しいので、迚も溜つたものぢやアございませんよ。（と、話をしながら品物の相場を踏んでゐる心。）

お妻　どうして〳〵租税の嚴しいのでは、やつぱり岡場所や女の稼業がいぢめられますよ。これは世の中が驕りになり切つたから、自然質素にしろといふお布令かも知れませんねえ。（と、調子を合して話をする。）

八郎兵衞　これでねえさん、何程位お入用でございます。

「實は品物の値段が大分下落してをりますので、申上げるのもお氣の毒なほどでございますよ。

お妻　實のところ、此の品物ではなんぼ素人のわたしでも迚も金の工面はならないと知つてゐますが、欲しいお金は三十兩なんでございます。（

八郎兵衞　え丶、三十兩？

お妻　なんとか工面はなりますまいか。然うでなくても借錢のあるところを、此のやうな無理をお願ひしては濟みませんが、わたしやつく〴〵途方に暮れて了ひます。（と、沈み込んで考へる）

八郎兵衞　それはお氣の毒でございますなあ。（と、心に決する思入れあつて）ねえさん、よろしうございます。伊勢屋の手代には少し荷の勝つた時貸でございますが、恰度此處に此の金を持合せて居ますから、困るのはお互ひの事、わたくしが御用立をいたしませう。（と、三十兩を財布から出して前へ置く）

お妻　い丶え、そんな事を――それを皆んな貸して頂かうと思つて申したのではありませんから――それではわたしが濟みませんから――。（と、態と押し戻す）

八郎兵衞　まア、そんなことを有仰らずに、どうぞ御用に立て丶下さい。こちらはまた如何ともなることでございますから――。

お妻　それぢやア誠に濟みませんが――斯うして置いて下さいな。此處に惡いものでも妾の櫛笄がありますから、證文代りにこれを預つて置いて下さいまし。

八郎兵衞　なアに、そんな御心配はありませんよ。

お妻　でも、それでは妾の心持が濟みませんから。どうぞこれは預つて置いて下さいな。

八郎兵衞　だが、これは商賣違ひの品物ですから――。

お妻　でも、妾の心が濟みませんからさ。

（と、無理に二人が押合ふ拍子に思はず互ひの手先が觸れ合ふ。沈默の間。）

お妻　八さん、お前の御親切は決して忘れはいたしません。

八郎兵衞　何を有仰るんですねえ、わたくしも出來る事なら致さねばならぬ譯があるんでございますから――。

お妻　え、なんですッて？

八郎兵衞　いや、それは此處では申しますまい。どうぞ御遠慮なく用に立て丶下さいまし。

お妻　有難うぞんじます。

八郎兵衞　では、わたくしはこれで――。

（と、八郎兵衞は歸り支度をする。お妻は慌て丶近寄り再び引止める。）

お妻　あ丶申し。

八郎兵衞　まだ何んぞ御用がおありでございますか。

お妻　八さん、御迷惑でも最う一つ、是非聞いて頂かなければならないことがあるんですよ。
八郎兵衛　え、それは如何やうな事でございます。
お妻　さア、それは――申しにくい事ではありますが、お前も御存じの妹のお柳のことなんですがねえ。
八郎兵衛　へい、お柳ちやんがどうかなさいましたか。
お妻　どうもしや致しませんが、八郎兵衛さん、あの子をお前が貰つて呉れる譯には行きますまいか。
八郎兵衛　え、何と有仰います？
お妻　嘸ぶしつけな奴とお思ひなさるか知れませんが、御覽の通りの娘たから、こんな水稼業には皆目向かず、意氣地がないとあの人には日々毎日小言を云はれ、モ、碌なことはありません。それもいゝが終ひには、飛んだ不幸せな破目にでもなりはしないかと、泣きは身寄りと申しましてそれが案じられてならぬところ、幸ひに心の底を聞いて見ると、八さん、お前ならばと思ひ詰めてゐる樣子、抱けばおんぶと云ふやうで大抵云ひ難いことではあるが、話は當つて砕けろと、恥を掻くのは承知して、妹の爲に頼みますのさ。
八郎兵衛　左樣でございましたか。それはもう、わたくしの樣な不忠者でも然う有仰つて頂くのは、何より有難うぞんじますが、實はその、義理責めのところから、是非にと縁談が湧いてゐる上に、田舍にはまた律氣な母がありまして、それにも相談をせねばならず、兎に角、わたくしの一存にもまゐりませぬゆゑ、どうぞ暫くの間此の話は御猶豫なすつて下さいまし。
お妻　それはもう、お前のやうな辛抱の強い器量持ち、どんな大家のお孃樣でも、決して不似合ではありませんが、妹可愛さに盲目になつての無理な頼み、必ず厚釜しい奴と惡くとつてお呉れでない。
八郎兵衛　なんの〳〵、そんな事を思ひませう。わたくしは大きな身代のお孃樣よりは、寧そ苦勞知りの人柄が本位で、お互ひに貧乏世帯から成り上る方が末が樂しみでよいとは思ひますが――。
お妻　何を云つても田舍に親御樣があつてはなあ。わたしにも妹のお柳にも腹こそ異つてをれ正直律氣な兄さんもありますが、こんな商賣の娘とあつては、堅氣の方の御承知はあるまいし――。
（と、此の時奥でポン〳〵と手を鳴らす音聞える。）
八郎兵衛　あれ、また奥でお呼びになつてゐるではありませんか。どれまたお伺ひいたします。
お妻　それではまた近い内にゆつくりお出で下さいましな。
八郎兵衛　へい、有難うございます。

お妻　長くお引止めをして濟みませんでした。どうぞ呉々も惡く思つて下さいませんやうに。

八郎兵衞　どう致しまして。では御免下さいまし。

（と、八郎兵衞は裏口へ出て行く。お妻は夕闇にそれを見送る。すると障子際でお柳が忍び泣きに泣く聲が聞える。）

お妻　なんだねえ。（と、障子を開けて見て）お前そんな處に立聞きをして居たのかい。

お柳　ねえさん、あたし如何しよう／＼。あたしは八さんに嫌はれたのに違ひない。（と、一層はげしく泣き沈む）

お妻　なんだねえ、まだ然うと判然定まつた譯ぢやアなし――。

（と、また二つ三つ劇しく手が鳴る。）

お妻　あれ、また、あんなに呼んでゐるから――。（と、奥に向ひ）はい／＼、今、行きますよ。

お柳　兄さんには無理を云つて苛められるし、姉さん、あたし如何しよう／＼。（と、再び身悶えして泣く）

彌兵衞　（奥から）おい、誰か居ねえか、おい、おい、おい。

お妻　はい／＼、直ぐ行きますと云つたらねえ。（と、恨めしさうな思入あつて）あんなやさしい佛心の八さんを――それを思へば鬼のやうな此方の心――。

お柳　ねえさん。（と、縋りつく）

お妻　あゝア、つく／＼浮世が厭になるわねえ。

（と、妹の脊を撫でながら縞と涙をふく。兩國の見世物小屋のはねの太鼓聞ゆ。）

二幕目　中村樓離座敷の場

向兩國の料理屋中村樓の離座敷にて、庭に面したる八疊。下手は廊下傳ひに本屋に續き、上手は庭先、よき處に燈籠あり。飛石傳ひに下手奥は隅田川の青割を眺め、岸の垣根より石段を二三段降れば、直ぐ船にて大川へ浮べる心の道具。五月の夕暮頃。鼻歌の如く低き船頭唄にて幕開く。と、女中が客を案内して來る。

女中　さあ、どうぞ斯うおいで下さいませ。

（と、伊勢屋の内儀お嶋、娘お藤、頭の長兵衞がついて現はれる。）

お嶋　まア、何時來ても清々としたいゝ眺め、つい近くに住みながら、こゝへ來るとまるで旅へでも出たやうな氣がします。

女中　皆樣が然う有仰つて下さいますが、それも御贔屓の慾目と申すものでございませう。

長兵衞　なアに、向ふ河岸の萬八と此の中村樓は、兩國橋を泉水の橋に取入れて造つたやうなものだ。

女中　まアお世辭のよいので、お布團をおすゝめするのさへ忘れて了ひました。どうぞお當て下さいまし。どうぞお孃樣。(と、よろしく薦める。)

長兵衞　ねえさん、あつしも江戸ッ子だ。然う空々しいお世辭は大嫌ひだ。(と、お藤に)それ、お孃さん、御覽なせえ、大川の眞中に都鳥が幾つも浮いて居りませうがな。

お藤　あゝほんに――。(と、上手寄りの柱から延びあがるやうにして眺める)

お嶋　お世辭どころではない。花火の時に一度此の座敷から見たいと毎年のやうに思つてゐましたが、年寄と小さいのを連れて人混みへ出るでもないと――。

お藤　母さん、あの千代坊に、わたしも一度花火を見せてやりたいと思ひました。

女中　おや、ではお小さいお孃樣は、どうなすつたのでございますか。

長兵衞　お可哀さうにお亡なりなすつたんだ。

女中　それはお氣の毒なことを致しました。

お嶋　おばあ樣も、せめて此の夏まで生かして置いてあげたかつた。

お藤　然うしたら嘸喜ぶことでしたらう。

長兵衞　僅かの間にお二人のお墓まゐりを致さうとは、全く夢にも思ひませんでしたよ。

女中　では御隱居樣も――。

(と、皆々思はず愁ひに沈むこなし。お嶋は涙を拭ひながら思ひかへして)

お嶋　おや、ねえさん濟みませんでした。どうぞよいものを見つくろつて、夕飯を頂かして下さいな。

女中　はい、かしこまりました。(と、立上る)

お嶋　あゝ申し、それから頭(かしら)に一本つけてあげて下さいな。

長兵衞　いゝえ、どうぞ――あつしも今日は頂きますまい。

お嶋　なんですよ頭、遠慮をされちやア佛が却つて喜びませんよ。

長兵衞　へい、ぢやアお言葉に甘えて――。

お嶋　では、どうぞ賴みますよ。

女中　はい、かしこまりました。

(と、女中は退場する。三人は一寸默り込む。お嶋と長兵衞は、俯向いて目頭を拭いてゐるお藤を中にして、煙草の火をつけながら目配せして、二人ともさも話し出し難さうに躊躇する。間。)

長兵衞　ねえ、お孃樣、あなたのおなげきは御尤もではございますが、お體にでも障ると大事ですから、もうそんなによく／＼なさらないが能うございますよ。

お嶋　ほんとに然うですともね。幾ら悔んで見ても追付かないのだから、もう薩張りと思ひ切らねばなりません。

それにしても家の後目が猶更肝腎、お前はその事をどう思つておいでなのだえ?

お藤　どう思つてゐるとは、母さんなんのことを有仰るのでございます。

長兵衞　いゝえねえお孃樣、實は斯ういふ折ですから、あなた樣のお心も伺つて置かなければなりませぬ。あなたはまだよく御存知ないか知れませぬが既に御祝言迄もと話の進んだ八郎兵衞さんが、何の譯か餘程前からふら〳〵し出して、此頃ではもう碌々お店にも落着かず、とんと人間が變つてしまひました。

お嶋　それに父さんは、あのやうな律氣一圖の堅いお方、あの男の辛抱氣を見込んでゐただけ猶更に腹立で、もう聟養子どころの騷ぎではない、店の帳尻、得意先の勘定に大穴でもあけぬうち、一思ひに追ひ出して了へと疳積にふるへるほどの——あの權幕。

お藤　………(默つてしく〳〵泣き出す)

お嶋　これ、何にもそなたが泣くことはない。わたしとてもそなたの心が案じられて、今までは何も打明けなんだが、此處が思案のしどころ、此の廣い江戸に八郎兵衞を措いてよい聟がないと云ふではなし。とッくりと此の母にそなたの心の底を聞かせてたもれ。

長兵衞　然うでございますとも。必ずあなたがく〳〵お思ひなさることはございませぬ。あゝならあゝ斯うなら斯うと、はッきり有仰つたがようございます。御新造樣も決して惡いやうには致しませぬ。

お藤　………

お嶋　したが、此の事ばかりは、ない昔だと思ひあきらめて、伊勢屋の暖簾に疵のつかぬやうにするが、父さんにも何より孝行だと此の母は思ひます。と云ふのは、此の大掃除にふと見付け出されたのは、あの八郎兵衞の懸先の覺帳と、約束にでも取つたか女の髮の物、あのやうな惡性根では、迚も行先きの見所がないゆゑ、今の内ふッつりと諦めたが、いつちよい分別かも知れぬ。

(と、お藤は思ひ迫つてわッと泣き伏す。お嶋と長兵衞とは顏を見合せて困り切る。)

長兵衞　お孃樣、これは結句親御樣があなたの行末をお案じなされてのお言葉、決して〳〵仇や愚かにお思ひなされてはなりませぬぞ。

お藤　でも、八郎兵衞を聟にすると云つたのは父さんぢや。母さんも喜んで、是非に然うせねばならぬやうに有仰られた。それでわしやその氣になつたばかりぢや。(と、再び劇しく泣き沈む)

お嶋　もう解りました。そなたがその氣なら、泣かずともそれでよい。また父さんとも能う談合しませうほどに—

―それ、誰か來る樣子ぢや、もう默つたがよい。

長兵衛　さあ／＼機嫌をお直しなされませ。それ、女中の聲がする、お孃樣。

（と、此の時蔭にて「でも知らぬので、お通し申したのですもの。」「知らぬ筈はない、帳場へは通つてゐました。」「それは惡うござんしたねえ。」と二三語あつて以前の女中あらはれる。）

女中　どうもお客樣には申譯がございません。

お島　何ぞ間違ひでもありましたか。

女中　いゝえ、此のお座敷は、先きにお客樣のお約束があつたので、それがお帳場へも通つてゐたのださうでございます。

お島　それは濟みませんでしたねえ。

女中　どう致しまして、こちらこそ粗忽で誠に濟みませんことを致しました。

お島　いゝえ、こッちは何處のお座敷でも構ひませんから――。

女中　濟みません、ではどうぞ此方(こちら)へ。

長兵衛　戲談ぢやねえ、ほんとに氣を付けなくちやア不可ねえぜ。

お島　まア頭――。（と、長兵衛の怒るのを打消しつゝ立上る）

長兵衛　ぢやアお孃さん、さあ、さあ、緣起の惡い座敷は引越しに致しやせうぜ。はゝゝゝ。

（と、三人は女中に案內されて上手奧へ入る。他の女中來り、座敷を一寸直して去る。そこへ銀猫の彌兵衛と桂庵婆お熊とが登場する。）

彌兵衛　何を云つてやがるんでえ。人を見そくなふと承知しねえぞ。

お熊　貌の彌兵衛としやぐまの女衒(ぜげん)婆と云ふことは眞逆(まさか)に知るまいが、人相のよくねえ奴等が來やアがつたと思つたに違えねえ。

彌兵衛　お約束のお客樣に、突如(いきなり)木戸(きど)をつかなくツてもいいぢやアねえか。

（と、女中がまた顏を見せる。）

彌兵衛　おい、どうしたんだい。

女中　あのこちら樣は、銀猫のお客樣のおつれ樣でございますか。

彌兵衛　あゝ、然うだよ、おつれ樣だよ。

女中　左樣でございますか。（と、直ぐ立上る）

彌兵衛　おい／＼ねえさん、一寸待ちねえ。序でに抓(つま)みもので一ぺい付けて吳んな。早くの。

女中　かしこまりました。（と、退場する）

お熊　客種が惡いと睨んで、さんざ素性を洗ひやがるぢや

アねえか、下つちや怕いよ。

彌兵衛　柳のお化か、はゝゝゝ、違えねえ、處が向ふ兩國だけにいろ／＼な見世物があるからの。

お熊　だからさ、百軒床へ寄つて溫和しく頭でも、圓めて來るとよかつたんだアね。

彌兵衛　お布施を貰ひに來やアしめえし。だが、そいつも囘向院だけに名物だの。時に、名物と云やア、銀猫といふ草分の名物も、此頃ぢやア上手を越えた金猫なんてえ商賣敵が出來たんで、抱女は逃げる、客は上つたり、いやもうらちくちはねえ。お前といふ女軍士の力を借りて何とか繪圖を書き直してえものだ。

お熊　だからさ、云はない事ぢやアねえ、早く今日の計略に取蒐ればよかつたんだアね。第一あのお柳なんて子を遊ばして置くのは惜しいものだねえ。

彌兵衛　他で見るほど然う巧くは行かねえ奴さ。しかし今日はしつかり賴むぜ。

お熊　引請けたよ、此のお熊婆さんが引請けたからは、乾度絞り出して見せるから安心しておいで。だがね、物は相談たが、せしめた金は山分けだらうねえ。

彌兵衛　山分けはちつと酷からうぜ。

お熊　なに酷いことがあるものかね。蝮の功よりは熊の膏だ。だが、ほんとに此の家へ來るのかい。

彌兵衛　それに間違ひはありやアしねえよ。

お熊　然うかね、然うと定つてゐるなら早く來りやアいゝねえ。

彌兵衛　年寄は氣が短くて不可ねえ。

お熊　ヘン、御挨拶だ。

（と、此の時女中酒肴を運んで來る。）

女中　どうも御待遠樣。

お熊　何より先きに御馳走が來るとは、時にとつてのいゝ辻占だねえ。

彌兵衛　違えねえ、さ、前祝ひに一杯――。

（と、お熊に差す。お熊飲んで返杯する。）

彌兵衛　こいつは有難てえ、何んだかう、特別腸にしみ込むやうだ。

女中　さ、もう一つお重ねなさいまし。

彌兵衛　ねえさんに然う云はれると遠慮は無沙汰だ。濟まねえが波々と賴むよ。

お熊　お世辭だと思つても惡い氣はしないだらうねえ。自惚氣と梅毒氣のない男はないと云ふからね。

彌兵衛　あ、痛てえ、先づ當らずと雖も遠からずだ。

女中　まあ御戲談ばつかり――。

（と、顏を見合せて三人一緒に笑ふ。）

彌兵衛　そのつもりで、ねえさんもう一杯だ。

お熊　圀々しいよ、直ぐこれだから男は厭になるわねえ、ねえさん。

（と、再び笑ふ。此の時大川の方より賑やかな船の騒ぎが聞えて來る。）

〽吹けよ川風、あがれよ簾、中のお客の顔見たやー。

彌兵衞　馬鹿にいゝ景氣ぢやアねえか。もうそろ〳〵水の上の時節だの。

お熊　此の間の地震から、少し時候があつ過ぎるやうだねえ。

女中　おや銀猫さんのお客様かもしれませんよ。船が河岸についたやうですから。

お熊　では、此處から船を出して貰つたのかい。

彌兵衞　遲晝を濟まして舟で花菖蒲を御見物さ。

女中　あゝ矢張り然うでございますよ。大層お早いお歸りでございますこと。

（と、女中は庭下駄をつッかけて河岸の方へ出迎に行く。彌兵衞とお熊はなにか頻りに示し合せる。）

お熊　それぢアお妻さんは、含んでゐる話なんだね。

彌兵衞　うむ、然うだ。なにしろ野郎は人のいゝお店者の若造だし、隨分おもしろい芝居が打てるといふものだ。此處は一番お前の見世場だ、しつかり頼むぜ。

お熊　舊いやつだが羽織の紐で、胸にあるよ。

（と、此のうちに捨臺詞よろしくお妻は八郎兵衞とお柳とに扶けられて船から上へあがる。大分酒に醉つてゐる足取である。）

お妻　皆んな船で一杯やつてゝお吳れな――。なにお運様が待つてるツて？　姐さん、待てるものならいつまでも待たせて置けばいゝぢやアないか。ヘン、をとゝひお出でだ。

八郎兵衞　あれ、あぶない。（と、お妻のよろめくのを扶けながら。）ねえお妻さん、きつとあの話の――それ、お柳ちやんのことに、違ひないから――。

お妻　お柳のことつて？　お柳がどうかしましたかい、ええ八郎兵衞さん。（と、態と酒に醉つて管を捲く樣に）さ、承はりませう。

八郎兵衞　でも、今日はお柳ちやんのことで桂庵が來ると云つて、あんなに心配をしてゐなすつたぢやあないか。

お妻　なんでそれしきの事を心配なんぞするものですか、御戯談でせう。

（と、女中は先きに座敷へあがつて「やつぱりお歸りでございましたよ。」と知らせて退場する。お柳は姉と

八郎兵衞の後ろからついて來て心配しながら。）

お柳　ねえさんは此處に醉つてるし、八さん本統にお願ひです。妾はどこへも行かなくつて濟むやうにお願ひします。

八郎兵衞　大丈夫だよ。いざと云つたら私がどうかしてあげるから——。ねえお妻さん、お柳ちやんがこんなに心配してゐるぢやアないかね。

お妻　この子は、なんて苦勞性だらうねえ、ほゝゝゝ。まアお待ちッたらさ、心配なんぞしなくッてもいゝやねえ。

（と、飛石傳ひに座敷へあがる。八郎兵衞とお柳は庭先に佇みて待つ。）

お妻　おやお熊さん、お待たせして濟みませんでしたねえ。

お熊　どう致しまして。お前さんはまた大層いゝ御機嫌ですことねえ。

彌兵衞　ほんとによ、こつちの苦勞も知らねえで、なにも其麼に酒なんぞくらはなくつても可いぢやアねえか。

お妻　おや、惡かつたね、酒だつてお客樣の飮ませて下さる酒ぢやアないか。お前に兎や角云はれることはない筈だよ。

彌兵衞　聞いた風なことを云ひやがると承知しねえぞ。もう一度ぬかして見ろ、そのぶんには仕て置かねえから。

お妻　おや、おや、おや、大層御立腹だね。はゝゝゝ。

彌兵衞　何だと！（と、立ちかゝる）

お熊　まアさ、まアさ、（と、彌兵衞を抑へて）なにもそんなに怒ることはないぢやアないか。それに此處は家ぢやアないんだから、夫婦喧嘩はみッともないよ。

彌兵衞　だつて、あんまり口答へをしやがるから——。

お熊　まア、そんなことよりも先きに、此方の型をつけて貰はうぢやアないか。顏を見るなり云ひ合ひぢやア、まアあたしだからいゝやうなものゝ、犬も喰はない夫婦喧嘩をおッぱじめて、こつちの約束をはぐらかすのぢやアあるまいか——とさ、人によつたら氣を廻すまいものでもなからうぢやアないかねえ。氣をつけてお呉れよ。

彌兵衞　これは大きに濟まなかつた。なアお妻、今お熊さんの云ふ通り、お柳をやるか金を返すか、今日が約束の日なんだから、金が出來なきあ仕方がねえ、此處であの子を渡してやつて呉んねえな。

お熊　ねえお妻さん、年寄に氣を揉ませないで、早くどうとか型をつけて下さいな。

お妻　お氣の毒だが、あの子を渡す譯にはいきませんのさ。

彌兵衞　ぢやア手前、金の工面が出來たのか。

お妻　いゝえ。

彌兵衞　金の工面が出來ねえで、あの子を渡すこともならねえぢやア、お熊さんを瞞したやうに當るぢやアねえか。

お妻　それはあたしの知つたことぢやアないやねえ。

お熊　うむ、それぢやアなんだね。(と、思入れあつて)夫婦馴れ合ひで、あたいを瞞さうと企んだんだね？

お妻　そんなことはありやしませんよ。

お熊　なんでない事があるものか、企んだ仕事に違えねえ。

彌兵衛　そ。そんな事があるものか。

お熊　いゝや然うだ、然うに違えねえ。お妻さん、お前も餘程度胸が太くおなりだねえ。(と、毒づく)

お妻　まアお熊さん、外聞が悪いからそんな大きな聲をするのは止してお呉れ。あたしだつて元をあらへば、義理も情も深川の仲町で、花川屋の妻吉と、氣性で人にも立てられた、藝者仲間の利かずもの、今ぢやア所も兩國の橋の袂で袖乞ひをするやうな、隱し賣女屋を稼業にはしてゐるが、馴れ合ひで人の金を蹈倒したと云はれちやア女の顔が立たないぢやアないか。

お熊　だからさ。立たなきやア立つやうにしてお呉れなねえ。(と、煙草の煙を輪に空嘯く)

お妻　と云つて、何も知らないあのおぼ子に、まさか泥水稼業もさせたくなし。

彌兵衛　誰だつてすき好んでそんな中へ入れたくはねえが脊に腹は代へられねえ。おいお妻、コッちの苦しいところも察して呉れろ。

お妻　彌兵衛さん、お前でも苦しいといふことを知つておいでかい？

彌兵衛　それを知らずにどうするものだ。どたい此の世が苦の娑婆たアな。

お妻　ほんとにお前は諦めの好いことを云つてゐるが、あきらめやうにもあきらめられない、苦しいあたしの胸の中を、ちッとは酌んでお呉れでないか。

お熊　酌むも酌まないも二人が仲、お前さん達だつて滿更厭でなつた夫婦でもなからうにさ、いくら日が長くなつたと云つたからッて——彌兵衛さん、年寄は氣が短かいよ。

彌兵衛　どうも濟まねえ。な、おい、お妻、あとで話はゆつくりするから、早くお熊さんの方の型をつけて呉れろ。の、頼みだ、おいお妻——(返事がないので)うむ、こんなに俺が口を酸くして頼んでも手前は返事が出來ねえのだな！　よし、出來なきやア勝手にしろ、おい、お柳の阿魔を此處へ出せ、出さなきやア俺が引摺つて來るぞ。

(と、彌兵衛は立上る。お妻はその前に立ふさがりながら。)

お妻　いゝえ、ならない。此の事ばかりはお前の自由にはさせないから——お柳をそんなにいぢめないで、賣るならあたしを賣つてお呉れ。あの子はあたしの大切な妹だよ。

彌兵衞　妹も糞もあるものか。惡く剛情を張りやがると、生かしちやア置かねえぞ。

お妻　さ、どうとも勝手にしてお吳れ。

彌兵衞　うぬ、よくも拔かしやがつたな。

お妻　はゝゝ、それが惡けれあ、殺さうと、生かさうと、お前の勝手にならうわさ。

お熊　まア、二人とも靜かにおしよ。

（と、二人の爭ふのを、お熊は不精々々に止める。お柳は蔭から飛んで出て二人の間へ入る。）

お柳　姉さん、姉さん、——兄さん、どうぞ勘辨して下さいよ。

（と、泣きながらうろ〳〵する。）

お妻　お前はそつちへ引込んでおいで。何もそんなに心配することはありやアしない。

彌兵衞　おゝお柳か、お前さへ早く出て來りやア、何もいざこざ云ふことはねえんだ。さ、此方へ來い。

（と、お柳をお熊の方へ引寄せる。此の時八郎兵衞が飛んで出て仲へ入る。）

八郎兵衞　まゝ待つて下さい、此の場はどうぞ私におまかせなすつて下さいまし。

お妻　あれ八さん、お前さんの出る幕ぢやアありませんよ。

八郎兵衞　まア、いゝから私にまかせて——。（と、お妻をなだめる）

彌兵衞　へえ、お前さんにまかせれア、一體どうしてお吳んなさるんだえ？

お熊　仲に入れば、纏まつた金が入ることは、先刻御存じなんでございませうねえ。

八郎兵衞　シテ、その纏まつた金と云ふのは、一體なにほど入るのでございますか。

彌兵衞　そこは古手屋の番頭さんだから、仲間の符丁は知つてゐようが、本金十枚七十五兩——。

お熊　おッと待つた、利息が七兩二分になるよ。（と、懷中から證文を出して見せる）

彌兵衞　違えねえ、飛んだ間男制配だの。

お熊　町内で知らぬは亭主ばかりなり、さ。

（と。お熊と顏見合せて彌兵衞は苦笑する。八郎兵衞は懷中の財布をさぐりつゝ前へ膝をすゝめる。）

八郎兵衞　では百兩あれば、兎も角も此の場のいざこざはなくなる譯でございますね。

彌兵衞　いざこざどころか、あまりの十二兩二分が宙返りをしてお手許へかへりまさあ。

お熊　然うなる時はぬれ手で粟の——いえさ、あはないのは、仲裁人でございますと云ふことさ。

八郎兵衞　しかし、お柳ちやんは、奉公に出ないでも濟む

のでございませうね？　よろしうございます。ではこれが五十兩、それ、合せて百兩、私が用達てますからどうぞ受取つて下さいまし。

（と、八郎兵衞は金包を前へ突き出す。彌兵衞とお熊は驚いて顏を見合せる。）

彌兵衞　え、では此の百兩を！　いや、これはどうも――何と御禮を申していゝのか、つぶれかゝつた銀猫がお蔭で如何にか助かります。おい、お妻お禮を云はねえか。旦那どうも相濟みませんねえ。ほんとうに。

お熊　あたしも是でやつと安心しましたよ。

お柳　八さんの御親切で、あたしは何處へも行かなくツて濟むんだから、ねえさん、お前よく禮を云つて下さいよ。

（と、お柳はお妻のうなだれて居る顏を覗き込む。お妻はそツと涙を拭く。）

お妻　あいよ。――と云つて、こゝまで八郎兵衞さんのお世話になつちやア、何の顏さげてお禮の申しやうがないぢやないか。

彌兵衞　なんだなアお妻、手前がそんな厭な顏をしてゐちやア、折角の御親切が無になると云ふものだ。なアお熊さん。

お熊　然うですともさ。（と、金を受取つてしらべながら）ぢやアあたしは、遠慮なく頂いて置きますよ。

彌兵衞　餘つた金はあとで山分け――いえさ、山々、譯はあるんだが此の御親切な御裁きにやア、全く恐れ入りやしたよ。

お熊　それぢやアお妻さん、此の證文はお前さんの方へさし上げて置きますよ。

お妻　こんなものは見るのも汚れ。（と、證文を癇癪まぎれに寸斷々々にさきながら）金さへ持つたら用はない筈、早く引上げて貰ひませうねえ。

彌兵衞　なんだなあお妻、そんな皮肉を云ふもんぢやアねえ、却つてこなたへ失禮にあたるぢやアねえか。

お妻　うるさいねえ、さつさと行つてお呉れでないか。

彌兵衞　こいつは御挨拶だなあ、おいお熊さん、仕方がねえからおとなしく御神輿を持上げると仕ようかねえ。

お熊　我慢おしよ、二つ好い事はないからさ。

彌兵衞　だが、斯う事が落着すると、また落ついて一杯いたゞきてえやうな氣もするな。

お熊　なんだねえ、未練らしいことを云ふのはおよしツたらさ。

（と、此の時下手奥の障子の內で、ポン／＼と大きく手を鳴らす。直ぐ「へーい。」と長く尾を引いた女の返事つゞいて「七番さん、お立ちですよう。」といふ他の座敷の女中の聲が廊下の方から聞える。）

お熊　それ、御催促た。

彌兵衞　こいつは恐れ入つたなあ。

（と、二人が煙草入れの筒へ煙管を入れなどしてゐると、上手奥の庭先から、飛石の上を身輕に一人の幇間があらはれる。）

幇間　へい〳〵、館の內へ物申さう。只今恰度水も隅田の川原へ、待ちに待つたまんまるなでッかいお月樣が出ましたれば、御用のお濟み次第、早々御船へ引上げ給へ。と幇間の甚孝ホヽ敬まつて白す。チョン。チョン、チョ、チョ、チョ、チョーン。

（と、滑稽な振にて再び入る。女中行燈を持ち來り、よき處に置く。座敷急に明るくなる。）

（お妻は思入れあつて、矢庭に八郎兵衞の手を執り、立上る。）

お妻　あゝ厭なことで氣が滅入つた。さ、八さん、何も斯も濟んだのだから、船へ行つてまた一騷ぎしませうよう。（と、力を入れてポン〳〵と手を強く鳴らしながら）ねえさん、酒と肴の用意を賴みますよう。今夜は夜明し船の中の遊びをするんだから。ま、八さん早くおいでなさいつたらねえ。

（と、八郎兵衞立上つた時、上手の離れ座敷から障子を開けて、伊勢屋の內儀が顏を見せる。八郎兵衞はこれに氣付いて。）

八郎兵衞　やッ。（と、云つたまゝ立竦む）

（障子はピシャリと再び內から緊まる。）

（お妻が、八郎兵衞の手を再び執つて緣から庭先きへ嬌めかしく轉び落ちるのをキッカケに木の頭。）

お柳　あれ、あぶない！

（と、お柳が走り寄つて介抱する。）

（彌兵衞は此の樣を見て、舌打ちしながら嫉妬の思入れ、それをお熊が支へる。賑やかな歌の囃子になり、八郎兵衞は不安の胸を抱きながら引ずられる樣子。お妻は彌兵衞に當付けるのかと思はれるやうに、醉ひにまぎらせて聲りあげる如くに高く笑ひつゞける。此の模樣よろしく。）

――幕――

三　幕　目

第一場　銀猫の茶の間

二幕目から幾日か經つた或る夜のこと。舞臺は銀猫の茶の間、正面右手に緣起棚をかざり、小提灯と小蠟燭がともされてゐる。その左一間は唐紙の出入りで、裏口……即ち女部屋から臺所へ通ずる心である。

下手障子を隔てゝ、店先の心、裏から見た形であるが、そこには大きな招きの銀猫が飾りつけられてある。上手は他の座敷につゞき、そこからはすぐ隣家になりをり、騒ぎの三味線と唄の聲はその方から洩れて手に取る様に聞える。誂ひの唄で幕開くと、お妻とお柳とは長火鉢を挾んで話してゐたつもりで。

お柳　では姉さん、此の手紙を兄さんに見せれば、それで何も斯もわかりますねえ？

お妻　あゝ吳々もよろしくと云つてお吳れ。村松町の源兵衞棚と云へば直ぐに知れる筈なんだよ。

お柳　それでは、これで暫くねえさんにも會ふことは出來ませんねえ。

お妻　なんだねえお前、橋一つ越した處へ行くのぢやアないか。また、そのうち、姉さんが是非たづねて悉しく話しますからと云つてお吳れよ。

お柳　デモ、こゝの兄さんが、あんな人でなかつたら、あたしや何時までもお前の側を離れて暮したくはないのだもの。

お妻　それもほんの一時の事で、こつちの始末をつけて了つたら、直ぐに手元へ呼んであげるよ。あたしだつてお前が傍にゐてくれなければ、どんなに淋しいか知れやしない。

（と、そッと涙を拭ふ。お柳も泣く。）

お妻　さア、それぢやアまた歸つて來て、難題でも云はれないうちに、早くおいでな。

お柳　では姉さん、行つてまゐります。（と、小さな包を抱いて立上る）

お妻　身體を氣をつけてお吳れよ。（と、帶の間をさぐつて）これで虎屋のお菓子でも買つておいで。あッちの姉さんによろしくね。

お柳　あい。（と、正面の唐紙を開けようとする）

お妻　お店の方に下駄を廻はして置いたよ。

（と、お柳の店先へ出て行くのを、お妻は眤と見送つて涙を拭く。）

（再び長火鉢の前へ戻つて來て、茫乎と頻りに何か屈託してゐる。唄の切れ目に思ひ出したやうに顏をあげて溜息をつく。そして仕様事なしに朱羅宇の煙管を取上げて掃除を初める。よき程に白首の女が一人、唐紙をあけて入つて來る。）

女の一　あら、ねえさん、あんまり靜かだから家にゐないのかと思つたら——。

お妻　なんだねがらッぱちな、一寸そこを緊めてお坐りなねえ。

女の一　いえね、今裏口から村松町の長兵衞さんといふ方

が見えましたから――。

お妻　おや兄さんが？　然う、それぢや一寸此處へ通してお吳れな。（と、何か考へる樣な表情をして）あの、一人かい。

女の一　えゝお一人で。

お妻　まア珍らしいねえ。――こんなに取散らかしてあるけれど、他の人ぢやないから我慢して貰はうよ。

（と、女は引込む。お妻は夕飯の膳などを、その儘片隅に寄せて座布團を布く。）

お妻　あたしがあの人と一緒になつてから、つひぞ來たことのない兄さんが――（と、一寸思入れをして）あゝテツキリあの事に違ひない。

（と、獨語を云ひつゝ坐ると、實兄の長兵衞が入つて來る。）

お妻　まア、兄さん珍らしいぢやありませんか。どうぞ此方へ――取散らかしたところへ濟みませんねえ。

長兵衞　なアに、構はねえでおいて吳れ。

お妻　まア、ほんとに暫くでしたねえ。いつも御達者で――。（と、叮嚀に挨拶をする）

長兵衞　お妻、まア〳〵お前も丈夫で何よりだ。兄弟は他人の初まりだと能く云ふやつだが、おれがお前の家へ足踏をしねえのは、そんな薄情な心からぢやアねえ。お妻、お前にはその譯がよく解つてゐるだらうな。

お妻　兄さんにそんな事を云はれると、あたしや穴へでも入りたうござんす。小さい時火事場で親に死別れた兄さんが、腕一本脛一本で、村松町の頭とか顏役とか人に立てられる迄には、それや並大抵の事ぢや出來やしません。それに引替へ妾や深川へ行く時も、また落籍されたその後でも、兄さんの意見は少しも聞かずに。……

長兵衞　まゝその愚痴を云ひ出すと長い話だ。が、どうだ、彌兵衞の身持も少しは直つたらうな。

お妻　それが直つた位なら、久振りで逢つた兄さんに、愚痴をこぼすことなんぞありやしません――。

長兵衞　ぢやア、なにか、相變らずの不身持か。成程な、手前も身から出た錆とは云ひながら、それぢア寸時も心の休まる時はあるめえ。

お妻　これと云ふのも兄さんの意見につかなかつた、皆んな罰だと思つてゐます。（と、思はず襦袢の袖口を濡らしながら）兄さん、どうぞ勘忍して下さいな。

長兵衞　なアに詫びる事はねえ。が、蛇の道は蛇と云つて、俺も若い時にや道樂もした揚句、そこや彼處の賭場にもごろついてた事もあつたので、どうか手前と末始終一緒にしたくはなかつたからだ。

お妻　ほんとにあたしも若い身の過失ですが、落籍された

木場の旦那があんな厭味な人でなかつたら意地にもならず神妙にお妾奉公をしてゐる氣にもなつたらうが、ついした事から魔がさして、（と、氣がついて笑ひに紛らせ）兄さん、つい此の頃は愚痴が出ますよ。

長兵衛　これも何かの因緣だらう。それでも久振であつた手前が、俺の言葉を今になつて、遲いと氣がつきながらも、噛みしめて味はつて吳れるのが、どんなに嬉しいか知れやしねえ。

お妻　ほんとに兄さん、四五年早く眼がさめたらと、つくづく此頃思ひますよ。（と、ホロリとなつて）それに此の商賣に取附くまで、あんな無頼漢の惡脚を持つてゐるばかりに、どんなに苦勞を見たか知れやしません。

長兵衛　然うだらうな。それでもまア、此の頃は商賣も大分繁昌すると見えて、何處へ行つても向兩國の銀猫と云やア通つてゐるが、商賣が商賣だけに、あれア俺の妹だ兄妹だとは、いざと云へば町内で、やれ頭の顏役のと人に立てられるだけ自慢も出來ねえ。お妻、俺の心も察して吳れろ。

お妻　それア兄さんの氣質ぢやア、どんなに苦しい厭な思ひを忍んでゐたか知れますまい。連れ添ふ男が男なら、女の身は情無いもの、隱し賣女屋の姐御にやア、あたしだつてすきでなつたのぢやアありません。兄さん、罰當りだと笑つて下さい。

長兵衛　何のつけに笑つていゝものか、だがの、厭な商賣だと思つたら景氣のいゝ處を二三年たゝいて、一日も早く足を洗ふが好いぜ。

お妻　有難うござんす。親身なればこそ然う云つて吳れるのは兄さんお前ばかりだ。あたしや身に沁みて嬉しく思ひますよ。（と、怺へかねて忍び音に泣く）

長兵衛　（困つたといふ風にもぢ／＼して）いや、飛んだ詰らねえ話で隙を缺かせたが、それでも商賣は繁昌してゐるのか。

お妻　あい、（と、眼頭を拭き乍ら）お蔭樣で一頃りは大分繁昌しましたが、あの男のことですから、好ければ好いで飮んだりぶつたり、此頃ぢやアまたやけだと云つちやア散々腹やりぬいて、借金の不行跡の仕度い三昧、それやこれやで不景氣の上に猶商賣も曲り初め、あれ御覽なさい、後から出來た隣りの金猫に、その殘つた繁昌も根こそぎ取られてしまひました。

長兵衛　然うか、あの三味線は家かとばかり思つてゐたらあれア隣りの金猫か。

お妻　商賣敵は、隣りの家でも不景氣でもありやしません。皆んなあの男の不行跡から——今ぢや馴染の客も一日毎に落ちるばかり、稼いで吳れる女たつて、一人減り二人

減り、此の一月ばかりのうちにも、三人ぞろりと減つて了つて、もう碌々客も來て呉れやしません。

長兵衛　なるほどな。客にしたところが隱れて遊ぶことだから、亭主がそんな無頼漢と知れて來ちやア、それア商賣も寂びれるだらう。思へばあの彌兵衛と同棲になつたのが、お妻、手前にやア一生涯の不作だつたのう。

お妻　ほんとに如何したら可からうと、思案にあまつた揚句には、寧て死んでゝも終はうかと自棄な心も起ります。

長兵衛　それア無理はねえ。無理はねえが、まア然う一圖に物は思はねえものだ。唄の文句にもある通り死んで花實が咲くものか、そのうちにやアまた善い事も廻つて來よう。まアさ、然うくよくよ思ひなさんな、彌兵衛がテツコにおへなきやア、おれだつて血を分けた兄妹だ。親は泣寄りと云ふからには、俺がきつと引取つて世話もしてやるから、大きな氣になつてゐるがいゝさ。

お妻　兄さん、その言葉たけで澤山だ。お前には詫びのいひ樣もありません。（と、堪へかねて遂に其場に泣き伏す）

長兵衛　（子供を勦はるやうになだめ慰めて）　これさ、商賣屋で女が泣いてゐちやア見ッともねえ。いや、實はなお妻（と、思はず聲音を替へて）俺が斯うして一生足踏をしねえとまで云つた手前の家を尋ねるに就いちやア、のつぴきならねえ譯があるんだが、どうだい。商賣を離れて俺の云ふことを聞いて呉れるか。

お妻　聞くも聞かないも、兄さん、今のあたしがそんな事の云はれる義理ぢやありません。

長兵衛　おゝ能く云つて呉れた。それで俺が態々來た甲斐があると云ふものだ。實はのお妻、足繁く此處へ通つて來る若いお客をおはきものにして貰ひたい。

お妻　え？

長兵衛　いや、云ひにくからうがきッぱりと斷つて貰ひてえのだ。今の今、お前の口から店の寂れの話を聞いて、その口の下からこんな事を賴むのは、如何にも人情のねえ話のやうだが、此方にや人一人ぢやア濟まねえ深い事情があるんだ。と、藪から棒ぢやア解るめえが、其若い客といふのは、村松町の伊勢庄で堅いを見込んで店一切の事を任せて置いた手代なんだ。

お妻　…………（只默つて俯向いてゐる）

長兵衛　手代と云つても內實は、跡取り娘のお藤さんと、疾から許嫁になつてゐる八郎兵衛さんだ。その八郎兵衛さんがどんな拍子でどう魔がさしたと云ふものか――まア、此の先は云はぬが花、そつちも聞かぬが花たらうが、さつき云つた商賣離れてとは此處のことだ。何とか俺の顏を立てゝ相談相手になつてくんねえ。

お妻　…………（まだ默つて考へ込んでゐる）

長兵衛　それぢやアなにか、おれがこんなに賴んでゐるのに、默つてゐるのは不承知か。

お妻　いゝえ、なんで不承知だなんて、そんな事を――。

長兵衛　それぢやア快く諾いて吳れるか。どんな女に凝つてゐるか知らねえが、出來ることならその女を、どうか他所へ鞍替させて吳れろ。商賣になる賣物を、此方の都合で他所へやれとは甚い話だが、久振りで尋ねて來た俺の賴みだ、聞いて吳れ。その代り內證の相談があるならそれにも乘らう。これ、此の通りに俺が手をさげて賴む。

お妻　まア。勿體ない、兄さん――。

長兵衛　それぢやア俺の云ふ事を聞いて吳れるんだな。

（と、お妻の手をしつかり握る）

お妻　あい。（と、思はずハラ〳〵と淚を飜す）

長兵衛　有難てえ、これで俺の男も立つ。今迄お世話になつた旦那筋へ初めて御恩返しも出來ると云ふものだ。

お妻　今迄はお前が旦那筋の人とも知らずに――兄さん、今迄の事はかんにんして下さい。

長兵衛　何の、何の、知らねえで爲た事を此の兄貴が、いくらお前分らずやだからつて咎めるものか。それに手前の店から云やア商賣づくだ。それを知つて野暮をいふ俺の方が餘つ程濟まねえ。

お妻　いゝえ、兄さんあたしが濟まない、あたしがほんとに濟まなかつた。

長兵衛　なアに、無理を云つて此の事ばかりは俺が濟まねえ。

お妻　いゝえ妾が――兄さん、勘忍して下さい。（と、兄の膝にもたれて泣きながら）それに、これから先き可哀さうなのは妹のお柳ですから、どうぞあの子を可愛がつてやつて下さいねえ。

長兵衛　手前が心配するまでもねえ。おれにも可愛い妹だ。今日は家に居ねえのか。

お妻　此の家へ置くと、どんな目に合はされるか知れないから、たつた今手紙を持たせて兄さんの家へやつたところでござんした。

長兵衛　村松町へか？　然うか――それなら猶更案じることはありやしねえ。

（と、此の時、店先の往來で、ピシヤ〳〵と人の擲り合ふ物音がして、彌兵衛のわめく醉どれ聲が聞えて來る。）

彌兵衛　何をぬかしやがるんでえ、斯う見えたつて此の家は――此の銀猫は、此の俺樣のものなんでえ、素見の文無しの――素町人め、さあ來い、さあ來やアがれ！

（と、怒鳴る聲に應じて、往來から大勢の立騷ぐ聲、石を投げる音など聞える。）

長兵衞　あれあ一體、何の騷ぎだ。

お妻　うちの醉漢が、また店先で客を相手に喧嘩をしてゐるんですよ。

彌兵衞　成程困つたもんだなあ。それぢやアお妻、俺が此處で會ふと面倒だから——おまけにあんな醉ぱらひを相手にも出來ねえからの。（と、立ちかゝりつゝいふ）

お妻　追ひ立てるやうで濟みません。それでは姉さんにも吳々よろしく。

長兵衞　是非一度俺の家へも尋ねて來て吳れ。伊勢庄の二つ目の横町を曲つた角だ。（と、懷中から紙包を取出して）これアほんの手土産の代りだ。（と、渡さうとする）

お妻　いゝえ、兄さん——そんなことを——。

長兵衞　まアさ、これだけは取つて置いて吳れ。

（と、無理にお妻の懷中へ捩ぢ込むやうにして唐紙を開けて去る。）

彌兵衞　そうれ見ろ、何をぬかしやがるんでえ、あはゝゝゝ、おいらにやア、此の銀猫樣がついてらあな。

（と、店飾りの大きな銀猫を抱へる如く持つて、障子を手荒くあけて長火鉢の方へ步いて來る。お妻を見る。）

彌兵衞　何をうろ〳〵して立つてゐやがるんでえ。（と、四邊を見廻して）おや、誰かゐたのか、何も俺が歸つて來たからつて、お膳なんぞを片付けなくても可いぢやアねえか。（と、今迄長兵衞の坐つてゐた布團に坐らうとして）おや〳〵此奴驚いた。誰か今迄此處に坐つてゐやアがつたんだな。

お妻　…………

彌兵衞　おい、な、なぜ返事をしねえんだ。空惚氣やアがつて！（と、銀猫を投り出す）

お妻　あたしが何時空惚氣ました。

彌兵衞　そ、そうれ、その顏が空惚氣てゐるぢやねえか。此の布團の溫味はなんだ。なんぼ看板が銀猫でも、生きた猫が茶の間へ來た譯ぢやアあるめえ。

お妻　それぢやアお前、それが人間だつたら、女房のあたしに因緣をつけようとでも云ふのかい。

彌兵衞　人間にもいろ〳〵あらあな。男もありや女もあらあ。

お妻　ぢやア男であつたらさ。それでも文句を並べようと云ふのかい。

彌兵衞　それア男にもよりけりさ。

お妻　懷の重味を引いてからにしろとでも云ふのかい？

お前もいゝ惡黨になつたねえ。

彌兵衞　ヘン、聞きたくもねえ、おれの惡黨を今知つたのか。笑はせるねえ。

お妻　それほど妾に氣がまはるんなら、お前さんだつて男

だらう、難癖のある女はいつでも擲き出せばいゝぢやあ
ないかね。

彌兵衞　ぢやア手前は擲き出されるのを承知で、男を引摺り込んだと云ふんだな。

お妻　いゝえ、お前さんが云つてゐるんぢやないか。あたしや今迄お前さんに乘せられて、神佛にや目をつぶつてどれだけ心にもない事をしたか知れやしないよ。その揚句の果が、留守の間に不義をするのなんのと難癖をつけられちやア、死んでも死にきれやしないぢやないか。あたしやお前に縛をかけられて、獄門首なり火焙りなり、出る處へ出て處刑を受けようから、妾をさんざ苛めておくれよ。

彌兵衞　おい、おい、そんな自棄に大きい聲をしねえでも聞えるぢやアねえか。（と、四隣に氣を置きながら態とらしい大膽さで）誰は何處にもゐやアしねえよ。

お妻　ほんとにお前さんも心細い男ぢやないか。いくら金につまつたからつて、時と場合によつちやア女房に惡い事をすゝめて置いて、自分に面白くない事でもあつて歸つて來りやア手證もつかまへずに人を不義扱ひするなんて、惡黨にしても小さ過ぎるぢやアないか。あたしやつく〴〵愛想がつきたよ。

彌兵衞　なに愛想がつきたと？　愛想がつきたら出て行きやがれ。此の畜生め、よくもそんなへらず口をたゝきやがつたな。

お妻　出て行けと云ふんなら、出て行くのは造作もないが、ほんとに今迄引摺られて來て、つい〳〵斯うして濟ましたのが、あたしの意氣地がなかつたんだ。それにしてもお前のやうな鬼心の人はありやアしない。（と、思はず涙ぐんで愚痴になる）

彌兵衞　なにを世迷言をぬかしやがるんでえ、さア出て行け！　出て行きやがれ！

お妻　そんなに出したいんなら、直ぐにでも出て行くからさツ、離縁狀を書いてお呉れ！

彌兵衞　離縁狀も糞もあるものけえ、うぬ、どうするか覺えてゐろ。

（と、彌兵衞は突如立上つてお妻にかゝる。）

（「喧嘩だ〳〵夫婦喧嘩だ。」「面白い〳〵。」「あの亭主は太い野郎なんだ。」などと店先から素見の客の聲が聞える。）

（店にゐた女の一人は耐りかねて茶の間に飛び入り、二人を止めにかゝる。暫く組んずほぐれつする。女の二、また一人來る。）

女の一　まア〳〵、あぶないから――兄さん。

彌兵衞　邪魔をしやがると何奴だつて利かねえぞ。

女の二　まア、靜にして下さいよ、見つともないから――。
お妻　いゝえ、どうか放つてといておくれ。あたしやもう、寧そ手にかゝつて殺される方が増しなんだからさ。
彌兵衞　なにを生剛情なことをぬかしやがるんでえ。（と、銀猫をふり廻して暴れる）
お妻　寧そ息の根を止めておくれ。
（と、暫く爭鬪をつゞける。女の二が恐々仲に入つて漸く二人を左右に引分ける。）
彌兵衞　さあ來い、欲しくねえ命なら、たゝき殺してやるから。
女の二　まア、少し靜かにして下さいよ。
お妻　いゝえお前達はほッといてお呉れ。あたしや寧そ一思ひに殺されてしまふ方がましなんだからさ。
女の二　だつてそんなことを云つたつて――まアねえさん此處におちついて入らつしやいッたら。
（と、なだめられてお妻は長火鉢の縁に顏を埋めて忍び音に泣く。）
（彌兵衞は女の一人がつけて呉れた燗德利を見て、急にお膳に向き直る。そして饑ゑた狼の如くがぶ〳〵と酒をあふる。）
彌兵衞　あッはゝゝ。（と、俄に笑ひ出し乍ら）いくら俺が喧嘩好きでも、酒で咽喉を擽られちやアこてえられねえや。おい、もう一本つけてくんねえな。
女の一　だからさ兄さん、早く酒にすれやアよござんしたにさ。
彌兵衞　違えねえ、喧嘩よりや酒の方がうめえからの、はゝゝ。
女の一　まア正直な兄さん。
彌兵衞　本統によ、亭主をいやに惡黨呼ばはりしやがるが、おらア斯う見えても大のお人好しさ。
（と、白々しく戯談をいふ。お妻は顏をあげてジロリと彌兵衞を睨む。）
彌兵衞　な、なんでそんなに睨むんでえ、亭主を睨むと平目になるといふ御託宣があるぢやねえか、はゝゝゝ、おい、もういゝだらう？
女の一　まだ些と早いかもしれませんよ。
（と、酌をしてやる。彌兵衞は大きな茶碗に受けて飲みながら舌鼓を打つ。）
彌兵衞　いや、腹の減つたせゐか豪氣にうめえ酒だ。おいお妻、手前もいける口ぢやねえか。あんまりブン〳〵してゐねえで、仲直りに一杯やらうよ。
（と、盜む如く猾しい笑ひをする。お妻は振向かうともしない。）
彌兵衞　おい、な、なせ返事をしねえんだ。

女の一　ねえ姐さん、折角兄さんがあんなに云つてるんぢやありませんか。
お妻　いゝえ、あたしや氣持が悪いんだから、今夜は御免を蒙りませうよ。
（と、朱羅宇の煙管を取上げる。彌兵衛は舌なめづりをしながら。）
彌兵衛　厭なら止しにしねえ、一豬口だつて緣なき衆生にや飲まされねえやな。
女の一　どつちへついたら、抱女の引込みがつくんだか。兎角仲人は宵の口と云ふからねえ。
女の二　然うだ、あたし達はお詣りながら境内へ行つて、うまく行つたら客でも引いて來ようよ。
彌兵衛　風でも引くねえ。
女の二　おや、兄さん御挨拶ねえ。
女の一　大きに御邪魔さま、さア行かうよ。
（と、二人は示し合せて出て行く。彌兵衛はグビリ／＼と酒をあふり、お妻は煙草をふかす。暫く沈默。）
彌兵衛　おいお妻、どうだあの伊勢庄の若えのは、どう〆木にかけてもモウ絞れねえか。
お妻　だつてお前、なんぼなんでも今の騒ぎの口も乾かないうちに、それアあんまり酷過ぎるぢやないか。
彌兵衛　なにが酷過ぎるんでえ、脊に腹は代へられねえやな。（間）どうだ、色になつて見せても脉はもうあがつたりか。
お妻　もう駄目だよ。（と、煙草の煙を吹き乍ら）なんぼなんだつてお前、此の上そんな馬鹿なことが――。
彌兵衛　出來ねえといふんだな？
お妻　だつて積つても御覽なねえ。今ぢやあたしや八さんの身がお氣の毒でならないよ。
彌兵衛　おい、おい、よして呉れ。あの野郎が可哀さうか、此の野郎が可哀さうか――いえさ、銀猫の此の看板はつぶれて了つても惜しくはねえのだな？
お妻　いゝえ、あたしだつてお前自分の家だもの、なんでつぶれて惜しくないことがあるものかね。だがなんぼ口に税金がかゝらないからと云つて、戯談も休み／＼云ふものだアね。
彌兵衛　ぢやア何故、おれの云ふことを聞かれねえんだ？
お妻　だつてお前、此の上にみす／＼馴れ合ひでそんなことが――。
彌兵衛　シッ、靜にしねえな。隣りは近いぢやアねえか。
お妻　そんなに他に聞かれるのが厭だつたら、お前もそんなことを云ふのは止してお呉れな。いくら神様が見てるない世の中だからッて、お前末が怖しいとは思はないかい？

彌兵衞　世の中に改心しかけた惡黨ほど廢り者はありやしねえ。手前だつてまだ若い身空ぢやねえか、やらうとさへ思へばどんな榮耀だつて餅の皮だつて出來るんだぜ。

お妻　あたしや厭だよ。それに八さんだつて今迄に、どれだけ損を見越しで商賣の品を心配してくれてるか解らないぢやないか。その借金だつて一文も拂ひもしない癖にさ。

彌兵衞　おい、默つて聞いてゐれア乙な事を云ふぢやねえか。何のツケに商人が、色でもなけれア戀でもなく、損してまで商賣をする奴があるものかな。おい、だてに此の二つの眼はつけちやアゐねえぜ。（と、冷笑を浮べながら、鋭い疑ひの眼でお妻の顏かぢッと睨む）

お妻　まアお前さんと云ふ人は（と、云ひかけて太い吐息を漏らしながら）實は今迄一々委しいことも云はなかつたけれど、あの人にはどれほど義理の惡い無理な借金をしてゐるか知れやしないんだよ。

彌兵衞　あの人？　あの人とは誰の事だ？

お妻　知れてるぢやないか。あの伊勢庄の八さんの事さ。あんなに人情づくで盡してくれた人を――今迄あんなにしたのでさへ濟まないと思つてゐるのに、なんでお前、このうへ人間として、そんな太い言懸りが出來るかねえ。

彌兵衞　毒を食へば皿までさ。どうだお妻、これほど頼んでも手前は俺の云ふことを聞かれねえと云ふんだな。

お妻　（と、不思議なほど冷靜な落着いた調子になつて）だがね彌兵衞さん、お前の惡性に連れ添ふあたしだから、もしかして嘘から出た眞にならないとも限らないよ。お前それを承知かい？

（と、いつもにない薄笑が自然に彼女の頬にあらはれる。彌兵衞は心にむら〳〵と發した嫉妬をおさへながら。）

彌兵衞　馬鹿を云へ、そんなコケ未練なことを云つて、馴れ合ひ仕事が出來るものけえ。

お妻　それを聞いて置けば、あたしだつて安心だからねえ。（と、お妻は笑ふ。その笑ひには一種の哀調と凄味とを帶びてゐる）

彌兵衞　心が變れば百年目だ。重ねて置いて四つにするまでのことよ。

お妻　ふん、そんな威喝文句を恐がつてゐるあたしだとお思ひかい、馬鹿らしい。さあ、これをあげるから何處へでも好きなところへ行つておいでよ。（と、懷中から長兵衞に貰つた金包を其儘投げ出してやる）

彌兵衞　（ニタリと笑顏をしてそれを拾ひ上げて）えッ、これあ金ぢやねえか。さうれ見ねえな、云ふ目が出ると云ふものだ。はゝゝゝゝ。

お妻　その代りあたしも一杯貰はう、さッ勢ひよくお酌をしてお呉れなねえ。

彌兵衞　よしきた、それ。

お妻　厭に現金だねえ――こんな小つぽけなものぢやア仕樣がないよ、さ、此の湯呑へ波々とついでお呉れ。

彌兵衞　大層やけなことを云ふぢやアねえか。

お妻　お前さん見たいな無頼者を亭主にしてゐるんだもの、業腹酒でも呑まなきやあ合はないやね。

彌兵衞　こいつは一番、厭といふ程極めつけられたな。――それはさうと金のお顔を拜んだら愚圖ついてゐるのが厭になつた。どれ、御船藏前の賭場へでもしかけて行つて、見事敵を取つてやらうかな。（と、思ひ出したやうに立上る）

お妻　お前さんも、そんな處は豪勢江戸ッ子だねえ。

彌兵衞　氣が短けえと云ふ洒落か――笑かすねえ。（と、出て行かうとする）

お妻　（呼び止めて）　おい／＼、お前さん一寸――。

彌兵衞　うるせえな、何か用か。

お妻　（屹と顔を見て）――　返り討にならないやうにおしと云ふことさ。

彌兵衞　態々人を呼び止めてケチをつける奴があるけえ？　罰當り！

（と、舌打ちをしてふいと出て行く。お妻はあとを見送りもせず、空間を屹と凝視めて物思ひをつゞけて又思ひ返して湯呑の酒を一二杯かぶつて、とゞお膳の上に絶望的にやけに泣き崩れる。）

（隣りからは富本か何か淋しい江戸淨瑠璃が聞えて來る。ばら／＼と雨の音。）

（しばらくすると、八郎兵衞裏口から氣を失つたものの如く、悄然として家の内を覗き込む。お妻は振りかへり見て驚く。）

お妻　おや、前は八さん、いつの間に――。

八郎兵衞　これ、靜かに――（と、氣づかひ乍ら）いつの間に來ろともなく、つい足がむいてふら／＼と裏口へ來て見れば、内には話聲さへも聞えないので、斯うしてぶしつけにあがつて來ました。

お妻　ま、何と思つて、今頃お前は――では、あたしがあれほど事情云つて、お店大事と思つた言葉も、お前は聞いて呉れない氣かえ。

八郎兵衞　お妻さん、それはよく解つてゐる。また聞かないつもりではないけれど、わしはもう大きな顔してお店へは歸られない。一旦はお前の兄さんが詫びをして呉れ、これからが大事のところと、自分で自分を戒めながらも、もう心にも身體にも、拔けないほどの汚點が出來て、お

前もよく知つての通り、今日はよい、明日からこそは眞面目にかへると、ついした心で遊びほうけてゐる間に、それを附目に惡い奴等がよつてたかつて、お店の帳尻は誤魔化し放題、元より大きい己れが穴もあるところへ、折重つた不始末だらけ、それもこれも責を一つにまかされてゐた私の過失、生きてゐては面目の立てやうがないほどの、大きな事がもちあがつて來ましたわい。

お妻　まア、ひよんな事になつたもの――一體それはどのやうなことでござんす。

八郎兵衞　いつの間にか、わしが預つてゐる間に主人庄兵衞の謀判をされて、伊勢屋の家屋敷は知らぬ間に人手に渡つてゐたのが知れた。

お妻　え！　それはほんの事かえ。

八郎兵衞　なんの嘘を云ひますものか。お妻さん、私はもう思案にあぐねてしまひました。

お妻　ではもうお前の身は、どうしようにもなりませんのか。

八郎兵衞　石の上で敲きみじいた、茶碗の破片同然になつてしまつた！

お妻　ではつぎはぎさへも及ばないのか。恰度今夜も宵の口に、村松町の兄さんがひよッくりとたづねて來て、情理つくして頼むやうな意見、さすが此の身も穴があつたら入りたいと思ひました。八郎兵衞さん、お前にはほんとに、濟まぬ事をしました。

八郎兵衞　何の、わしはその言葉を聞かうと思つて來たのではないが、ふら〳〵と外へ出て歩くうちに、つい〳〵此の家へたどりついて了つた。わしはもう今度こそは店へも歸られず、世間へは顏向けがならず、寧そ一思ひにと――。

お妻　え、一思ひに――とは？

八郎兵衞　はゝゝ、（と、態と笑ひに紛らし）一旦因へ戻らうと、腹で覺悟は極めてゐても、もう一度お前にあつて見たら、又いゝ分別が湧きはせぬかと、矢張り迷つて來ましたのさ。惡く思つて下さるな。

お妻　なんの惡く思ふどころか、よく來てくれました。實はあたしもふつ〳〵厭な氣になつて、どこへか獨りで身を隱さうと思案してゐたところ、お前が來ての切ない話を聞かされても、今はもう泣く氣持にさへなれません。

八郎兵衞　身を隱すと云つて、お妻さん、お前はどこへ行くつもりか。

お妻　それは自分にさへ定めがない。したが、八さん、お前がこんな破目になつたのも原因はと云へば妾から起つたこと、出來ることなら何處までもあたしを一緒に、一緒につれて行つて下さいな。（と、思はず身を寄せて縋る

やうに哀訴する）

八郎兵衛（一寸驚いて後ずさりする）と、とんでもない。そ、そんなことを云はれては後々までの噂、誹謗が恐ろしい。どう考へても、人の道にかけるのが忌はしい。知りながら犯す罪が深すぎる。

お妻　いえ／＼罪の深いのは此方のこと、八さん、どうぞして今の苦しみから、此の身を救ひ出して下さい。

八郎兵衛　そ、そ、それは、それはかりは――。

お妻　頼みます、お前が死ぬところまで、どうぞ一緒につれて行つてお呉れと云ふに。

八郎兵衛　えツ、死ぬところまで？

お妻　あい。八郎兵衛さん、お前は疾から死ぬ覺悟を……。

八郎兵衛　これツ……。

（と、お妻は酒の爲ばかりでなく、殆んど惱亂したものゝ如く八郎兵衛の袖に獅噛みつくやうに取縋る。八郎兵衛は覺悟をきめる。パラ／＼と雨の音、凄い沈默の間。）

（此の時、唐紙が突然ガラリと開いて、彌兵衛の嫉妬に燃えた眼光がギラリと光る。二人は殆んど無意識に飛び除き、同時に離れる。一層物凄い間。）

彌兵衛　おい、おい、おい。なにもそんなにじたばたする事はねえやな。手前達だつて覺悟の上のことだらう？

（と、鋭く皮肉に突込んでいふ）

お妻　あい、お前にしろと云はれた通り、さうだよ、もとより覺悟の上のことさ。

（と、お妻が驚いたのは瞬間のことで、心機一轉して茲でガラリと度胸を据ゑる。八郎兵衛はお妻ほどにはまだ落着かない。）

彌兵衛　あまめ、ぬかしやがつたな。さあ野郎、手前も覺悟はいゝか。

（と、内懐から匕首の鞘を拂つて、いきなり疊の上へズブリと立てゝ見せる。）

八郎兵衛　わしも命は惜しくはないが、彌兵衛さん、お前も人の亭主として、これまで苦勞を一緒にしたお妻さんを、これンばかりでも不憫だと思つたら、死んでも浮ばれるやうにしてやるのが、せめてものお前が罪ほろぼしぢやアありませんか。わしの頼みだから、もう一度、お妻さんを救つて上げて下さいよ。

彌兵衛　なに、せめてもの罪滅したと？　巫山戲たことをこきやがるな、泥棒にも三分の理と、間男をして置きやがつて、よくもそんな太えことが云れたものだ。

八郎兵衛　だからさ、その腹癒にはわしが身體を、切るとも裂くともお前さんのいゝやうに料理して下さいな。

お妻　いゝえ、お前ばかりを殺させてあたしや生きちやア

みられない。
八郎兵衛　と云つて、お前を此處で殺させては、あまりと云へば――
彌兵衛　えゝ、つべこべと措きやがれ！　男の面に泥を塗られた、此の仕返しは手前達を、重ねて置いて四つにしてやる。
お妻　大きなことをお云ひでない。それでもお前は男かい？　重る惡事に蝮と呼ばれ、ゆすり、かたり、ぶつたくり、終ひの果ては馴れ合で女房までも唆かして罪の深いことをさせて置きながらその言草はなんのことだい。いゝえ、それでもお前は男かと云ふんだよ。
彌兵衛　何を――。
お妻　あたしだつて女の意地、お前が大きな事を云へば、どんな事でもして見せるよ。操はもとより命まで、一度はお前にあげたものだ。それでも不足があるのなら、出る處へ出て爭はうか。
彌兵衛　えツ！
お妻　どッちの身體へ繩がつくか、どつちの首がしばり首か、傳馬町の牢屋へ行つて、どつちが先きに牢死するか。砂利の上で勝負をしようよ。
八郎兵衛　まア、お妻さん、お前もそんなにやけになつて、つきつめた事を云はないで――。

お妻　いゝえ。あたしに云はせて下さい。こんな男にみこまれたばッかりに、女の一生を棒に振つて、取返しのつかない今のからだ、いつの世までのいゝ笑ひ草に、あたしや獄門にかゝる氣だ。さあ、殺すなり突き出すなり、お前の腹の蟲がをさまる樣にしておくれよ。
彌兵衛　聞いた風なことをぬかすねえ。此の罰當りめ！
お妻　それア此方で云ふ臺詞だ。さあ、どうとも早くしてお呉れ。
彌兵衛　しねえで如何するものか。
（と、匕首を手に取上げて、左の手でお妻の髮の毛を取つて切つてかゝる、八郎兵衛は一所懸命に二人を引分けようとする。）
彌兵衛　うぬ、飽まで邪魔をしやがるな。
（と、八郎兵衛にかゝり大暗鬪、とゞ彌兵衛は八郎兵衛を組み伏せ、刺さうとする。お妻はその右手を兩手で抑へて止めるが力及ばず、危く振り飛ばされようとするので、今度は噛みつき、匕首を奪ひ取つて、彌兵衛の肋骨を一息に刺し貫く。彌兵衛絶息する。）
（二人は今更の如くさすがに驚き、つかれた態で聲さへも出ない。雨はげしく降り出す。）
（女の一が何氣なく外より歸り來り此の樣を見て「あれい！」と叫び立竦む。）

（八郎兵衛が默つて手眞似で靜かにしろといふ樣に見せ、お妻の手を取つて引起すのをキツカケに木の頭。）

（道具廻る）

第二場　兩國橋袂の場

その夜の兩國橋。上手より正面にかけて大きく橋が懸り、向兩國から大川を見渡す背景、五月雨の夜ふけて靜かに柳の木蔭が暗くだらりと枝を垂れてゐる。時の鐘にて道具をさまる。

淨瑠璃

〽五月雨るゝ、冥府に通ふ夜の道、もしやと心をちこちの、岸の灯影も疎らなり。

（と、お妻と八郎兵衛とは手を取つて、揚幕から急ぎ心に出る。）

八郎兵衛　こゝまで來ればもう安心、落着いて死場所も選ばれる。

お妻　とんな無頼漢にもせよ、假りにも亭主と立てたものを、殺めて置いて心中沙汰、死んだあとでも江戸中の口の端にかゝると思へば、八さん、お前の名がいとしまれてなりません。

〽下總と武藏の國にかけられし、橋の名さへも兩國の、女心のあさましや、契りも深き隅田川。

八郎兵衛　流れる水にも運命はある。何の卑怯に此の身ばかり、罪ない顏が出來ようか。お前とわしとは前の世の心中者の片割れか、添へ遂げなんだ戀人同志か、いづれは果敢ない人の命。三分五厘と棄てゝ見せよう。

お妻　おゝよく思ひ切つてその樣に云つてお吳れだ。あたしや、その一言を恩に着る。恩に着ます。

八郎兵衛　それは此方も同じ心、とは云へ人の女房と一緒に死んだと聞いた時の、あの阿母の歎の樣が見るやうな。

〽云うて返らぬことながら、せめて一日早かつたら、千日も萬日も淺草寺に願かけて、四萬八千日の世も何の長かろぞ、夢の泡沫。

お妻　馬鹿者よ不義者と世間から、笑はれても嘲られても、二人が心中立てとほし、あの世へ行つたら阿母樣を蓮の臺でよろこばせる。濟まぬことではあるけれど、どうぞ此の世は宥して下され。（と、拜む科）

八郎兵衛　その一言が百の孝行、下總は此のあたり、お前も共に詫びて吳れるか。

お妻　あい。
〽二人手を取り欄干の、橋の下ゆく水心、魚心さへ
仇浪の流れてつきぬ奇縁かや。
（と、二人は欄干から水の面を指して共に心を決した
る思入よろしく。）
お妻　あれ／＼、水主はゐぬのか船頭は眠つてか、纜の切
れた舟が一艘、思ひのまゝに流れて行く。
八郎兵衛　あれをその儘、二人が身の上。
〽廣い世界に只一筋の、きづな解けても添はれぬ仲
どうした果敢ない縁ぢややら、ほんに思へば因果
同志。
八郎兵衛　いつまで云つても名殘はつきまい。
お妻　猶それよりも、怨み殘さずさつぱりと、笑つて一緒
に死にたい願ひ。
八郎兵衛　お前も然うか。
お妻　あい。
〽死んで生きよう、生きようために、死ぬも主ゆ
ゑ、お前ゆゑ。
八郎兵衛　思ひ殘すことはない。
お妻　嬉しうござんす。
〽此の世の縁は薄衣、雨にしいとゞ、濡衣、互ひに
顏を見合せて、既に斯うよとあるところ。
（と、此の時、橋を渡りて提灯を持つ長兵衛と傘をさ
しかけるお柳とが急ぎ足でやつて來るので、此方の二
人は見咎められまいと柳の木蔭に姿を隱す。）
長兵衛　少しは雨もやんで雲ぎれがしたやうだ。
お柳　兄さん、早く歩いて。あたしや姉さんがもう家には
ゐないやうな氣がしてならない。
長兵衛　俺がもう少し早くお店から歸つて手紙を見たら、
こんなに心配をせずに濟んだものをなあ。俺もなんだか
胸騷ぎがしてならねえ。
お柳　もう直きだから、兄さん急いで。
長兵衛　あいよ。それ、足元に氣をつけな。
〽心も闇に暗まぎれ、互ひに姿水鳥の。ざんぶとこ
そは――。

（と、お妻と八郎兵衛は遣過ごして木蔭を離れ、合掌して大川へ飛び込む。水の音。）

お柳　あれい！

長兵衛　なんだ！

お柳　兄さん、身投げぢやアないかしら？

長兵衛　然うだ、身投げだ！

（と、兄妹は欄干の方に駈け寄つて川の面を見廻はす、折から雲ぎれがして薄月になる。お柳は何物をか見つけた心で。）

お柳　兄さん、あれ、あそこに人が浮いて見える。

長兵衛　どれ、どれ、どこに。

（と、見入つて「あッ」といふを木の頭。）

〽後の噂となりにけり。

（と、杜鵑の聲聞え、長兵衛とお柳とは不安に襲はれて默つて顏を見合はす。此模樣よろしく。）

――幕――

荻江露友（五幕）

序　幕　柳島津輕侯下屋敷

舞臺は津輕侯下屋敷の大廣間で、風流なうちに何處となく優雅な造り、正面は低い二重で上段の間、その前面は幕摺りまで平舞臺の大きな座敷で、上下は光琳模樣の如き綺模樣の襖の出入り、上段の間上手は矢張り襖の開閉あり。下手は翠簾越しに、一面庭園の背景が月光に溶け込んでゐる。

折しも寶曆二年八月十五夜の月見の宴を催すべき酒肴の仕度が調うてある。長うた「つき見」の曲で幕明くと、侍女四人座敷の落度ないやうに立働いてゐる。長唄はつゞいてゐる心。

唄へ……このもかのもの戀の仲の町、仰せ〳〵に替らじな（なげぶし）しるも知らぬも秋の夜の月待つほどのこよひしも、かくす拍子でおばしまの、よるべ〳〵の契りかな。

侍女一　まア、なんといふよい節廻しでござんしよう。森樣はあんな凜々しいお顔をなされて、あのやうな能いお聲がどこから出るのでござんせうな。

侍女二　ほんに、男前は家中での評判もの、厭味はなし、氣性はよし、その上どこで何時習はれたものか、あの長唄の聲のよさ。

侍女三　全く素人離れがしてゐると、お出入りの横綱町の唄の師匠坂田仙四郎も、舌を卷いてゐるとは聞きましたが、今宵は何誰のおすゝめやら、ほんに晴がましいことでござんせうなあ。

侍女四　誰しも聞くのは今宵が初めてゞござんすが、江戸見坂の御殿樣奧方樣御夫婦をおもてなしにはよいお慰み森庄五郎樣が晴れがましいよりも、こちの殿樣御夫婦の鼻の高いが思ひやられます。

侍女一　あれ、あの延びやかに品のいゝ節廻しは、藝人にもない味はひでござんすわいな。

侍女二　まア、少し靜かに默つてお聞き遊ばせ。

侍友三　あれ、然ういふ貴女のお聲が一番高いわいな。

唄へ揚屋のともし火かず照りて、もやにかさねしをりひめこ、しのぶ心のあやにくや、曇れと月をかこつらん。

侍女四　（暫く默つて聞惚れながら）まア、人思はせな庄五郎様ではある。
侍女三　それにつけても、あの河野のおかのさまと婚約が整うてゐると聞きましたが、羨ましいことではござんせぬか。
侍女二　また、おすみさまのはしたない岡焼き半分、及ぶことなら月の前の邪魔雲になりたいやうなお顔をして……。
侍女三　あれ、まア、そのやうな思ひもつかぬことを云うて。
侍女二　なんの思ひもつかぬことがあるものか。それ、その顔に書いてある、それ、……ほゝゝゝ。
（と、指して調戯ひ半分に高く笑ふ。）
侍女一　しッ、あなたこそお靜かにお聞き遊ばせ。他のことばかりは云はれませぬわいな。
侍女二　ぢやと云うて、わたし一人が高聲を出した譯ではなし……。
侍女四　まア、まア、蒼蠅いこと〳〵。
侍女三　はて、どなたも靜かにして……わたしが惡うござんした。それ、（と、急に物音を聞きつけた表情）どなたかこれへ見える様子ぢやわいな。
（と、これにて皆々廣間の仕度をする振りにて各々座を立つ。そこへ上手を開き、福永忠之丞と池邊小藤太が入り來る。）
福永　これ、侍女達、廣間の御用意は落ちなく整ひましたかな。
侍女一　はい、御覽の通りにござります。
福永　うむ、では勝手ながら御饗應とは申せ、我等主人大和侯御夫婦には、實はあの唄には飽々してござる、早うあちへまゐつて、此の由お側係りへ傳へて下されい。何を悠長に話して居られたな。
侍女二　妾達はまた、庄五郎様があまりお唄のお上手なに。
侍女三　皆々感心して。
侍女四　思はずお噂をいたしてをりました。
福永　えゝ入らざる噂を……（と、頗る機嫌わるく）あれは庄五郎殿が巧いのではない。三味線彈の仙四郎が、さすがに商賣人だけにツボを心得て、榮えるやうに調子を合せてやつてゐるからぢや。えゝッ、早々賴み申すと云ふに。
侍女達　はい。
（と、一同目顏で知らせ直ちに入る。此の間も構はず長唄はつゞいてゐる。）
唄へ二丁目あたりにすがゝき絶えて、ぬしは來るや

ら來ぬのやら、身あがり暗き女郎の、あだめにかゝる夜這星、やくそくなしのうかれ人、ともの浮かれにうかれ來て、どれでも〳〵、ふりよに呼ばれししんざうの、髮そこ〳〵にゆひなして、やこへに近き揚屋入り、枕とるまも明けぬべし、あくびがちなる閨もあり。

福永　時に池邊氏、貴殿を森庄五郎の親友と承知の上、折入つてお話いたしたい儀がござる。

池邊　なんと有仰います?

福永　まづ下においでなされ。(と、座につき) 實は當津輕家と我等主家松平家とは親戚の間柄、兩家共に前途有爲の若い侍がないではござらぬが、中にも貴殿の如き心からなる友をもつ森庄五郎をつく〴〵羨ましく思ふ折柄、今日よりは枉げて斯く云ふ福永忠之丞を、彼れ庄五郎と乘替へて親友にいたしては下されぬか。

池邊　これはまた、恐れ入つた御懇のお言葉、彼の庄五郎と拙者とは同藩なり、また身分の替らぬ百石取りの小身者、幼きより手習の師匠もおなじ、武術の稽古も一緒なり、親友と申せば親友でござるが、追つては松平藩御重役の列にも加はるべき、千石取りの貴方樣とは比べものには相成りませぬ。その儀は折あらば此の方よりこそ懇願いたし、先輩ともまた畏友とも……。

福永　いや〳〵、その御謙遜では却つて疎隔、拙者の賴みはその千石も百石も氣にとめず、互の腹の底までも心から打明けて親友になつて貰ひたいのぢや。と申すは、お察しのありし如く、身不肖ながら拙者も、いづれ十五萬石の松平家に重役たる父忠太夫隱退の後は、自然重き役柄をも承はらねばならぬ。然るに今日まで未だに心をゆるすべき友もなく、失禮ながら貴殿を見込んでの賴みでござる。

池邊　(野心に眼の色を動かしながら) その御一言こそは知己のお言葉、愚昧なれども池邊小藤太、決しておろそかには感じませぬ。及ばずながら將來ともに貴方樣の片腕と相成つて、いづくまでもお力添へをいたしませう。

福永　早速の快諾、拙者も少からず滿足に思ひます。就ては當津輕家の重臣、拙者の爲には叔父にあたる笠原主膳へ折入つて貴殿が昇身の儀をはかり、何かに心をつけるでござらう。

池邊　御厚志、忝けなく御禮を申上げます。

福永　それ、そのやうに堅苦しい辭儀は、今日限り捨てゝ貰ひたい。さて、早速ながら一つの相談、貴殿も日頃から見らるゝ通り、當津輕家の藩主越中守信寧侯は未だ御年若にて御氣性も御柔弱、さればこそ森庄五郎の如き、

武家に生れながら藝事にのみ浮身を窶す輩を、いたくお氣に入りとは、はてさて困つた事ぢや。斯くてはお家の末よからずと竊かに心を痛むるは我が叔父笠原主膳、折を見て諫言を申上げ、何卒して彼の小才かしき森庄五郎輩を放逐いたさん所存いろ〳〵に肝膽を砕いてござれば小磯太殿。必ず一臂の力を致して下されたい。

池邊　その儀は當家の爲に拙者も同感、必ず蔭に日和にお力になるやう確と御誓言申あげます。

福永　その代りには庄五郎に替へて、貴殿の身の立身出世と相成るやう、諄いことを申す樣なれども拙者其儀は引受けました。

池邊　それは忝けない。では何事につけ心を配つて……。（と、氣込みを見せる）

福永　しツ！（と、制す）

（此の時、下手襖より薄茶の茶碗を紫の袱紗にて持ち添へたる河野の娘かの、侍女の拵へにて急ぎ通り過ぎる。）

福永　もし〳〵、それへまゐるは河野家の御息女おかの殿ではござらぬか。

かの　はい、左樣でございます。して然う有仰る貴方樣は……？

福永　かねて聞き及ばれたこともござらう、拙者こそは江戸見坂松平家の重臣福永忠太夫の伜忠之丞、甚だ卒爾ながらお手前の一服、枉げて所望いたしたい。

かの　（思ひ入れあつて）折角のお言葉を失禮ではございますが、これなる一服は、殿樣の仰せにより、庄五郎どのが、唄を謠ひ終るまでに持つてまゐれとたてました。どうぞおゆるされて……。

福永　では、あの庄五郎……殿に……。

かの　はい、……御免遊ばしませ。

（と、おかのは澄まして上手へ入る。福永は嫉妬の思入れ。池邊は鋭くこの表情を觀破る。ちよつと沈默、唄の聲、三味の音色いよ〳〵佳し。拍手の音輕くおこる。）

福永　イヤ、どうも積に障る事だわい。今宵の月見を幸ひに態と御前で唄を謠はせ、その失策を相待つて滿座の中で物笑ひにいたして遣はさうと、これは叔父の計略でござつたが、まんまと裏をかゝれた上は……。

池邊　（思入れあつて）うむ、では福永樣には彼女をば……。

福永　いや、實は親友の間柄となつて見ればかくすは却つて隔てと相成るゆゑ、何事も包まず申すが、拙者實はあれなるおかの殿を執心、また娘の親父河野殿も小身者の庄五郎との婚約は破棄いたしても是非に貰ひ受けて呉れ

いとの懇望、何とか貴殿にも良策はござるまいか。

池邊　左樣でございましたか。では、寧そ斯樣な手段をもつて……（と、耳元に囁き）武道に事寄せ、恥面かゝせ、その上にて庄五郎めを……。

福永　うむ、成程それはよい分別。おゝ恰度あれへ河野殿と叔父がまゐつた。（と、上手を見て）今度こそは、萬事手ぬかりのないやうに打合せて……。

池邊　それがよろしう御座います。

（と、此の時、上手より重役笠原主膳、おかのの父河野六郎出で來る。）

笠原　おゝ忠之丞、これに居つたか。

福永　たゞ今、池邊氏と親交を誓うて何かの打合せ、叔父上にも今後これなる小藤太どのを庄五郎めに代へてお取立ての程頼み入ります。

笠原　その儀は某が何事も心得居るわい。

池邊　何分よろしう……。（と、かしこまる）

笠原　はて、末頼母しい小藤太どの、今日より後は何かにつけて忠之丞の語り相手となつておやり下され。

河野　それはさて、意外なるは素人の癖に庄五郎めが惡く据わつた糞度胸、これでは却つて彼れの勝目、娘に愛想をつかさすやう、何とかよい手段を御思案下さるまいか。

福永　いや、その儀なれば、たゞ今小藤太どのが天晴れ名案、一寸お耳をお貸し下されい。な、な、……（と、河野と叔父に囁き）何んと名案ではござるまいか。

笠原　なるほど、遊藝には多少の心得があつても、武道にかけては——。

河野　恐らくこれは上分別。おゝ恰度唄も果てた樣子ぢや。

（と、この時、一層高く拍手起る。）

福永　えゝ、忌々しいあのもてやうは……。

笠原　はて、間もなう殿のお渡りぢや。今度こそは不覺を取るまいぞ。

福永　萬事は心得てをります。

（と、笠原は河野に何か頻りにさゝやく。そこへ主人役の當津輕藩主岩松信寧侯、同奧方悅子夫人、賓客として松平大和侯、同奧方貞子夫人、お案内して出で來り上段の間、褥の上によろしく着座。津輕家の臣として笠原主膳、河野六郎、添田義右衞門、月島五郎左衞門、近侍若侍等大勢。また松平側の人々として福永忠太夫、忠之丞親子を初め早川左中、甲田主水、春日惣右衞門等重臣の面々附き從ひ、左右に居流れて順次席につく。

その他中老、お側、小姓、侍女等大勢よろしく座間に侍る。）

津輕　誰ぞ簾を捲け。一天淸く晴れ渡つて、暗雲その影ををさめたる今宵の明月、何の御饗應もござらねど、ゆるりと一獻過されたい。

松平　いや〱、江戸見坂の余が邸などとは事替つて、萬づ風流を好まるゝ下屋敷の月見の宴、今に初めぬことではあるが、柳島の風物何一つとして秋の心を唆り立てぬものとてはなく、大和殆んど滿悅に存じ申す。

貞子　殊に今宵は、森庄五郎とやらが優にやさしい唄の調べ、月見の曲を聞きまして殆んど感心いたしました。武邊に似合はぬ風流の嗜みは、奥床しくも、また羨ましく、まこと人の心を和げるには遊藝に如くものはないと、耻かしながら初めて感じ入りました。

悅子　これはまた、思ひもかけぬお褒めのお言葉、よしない事が興を添へて、存じよらぬ面目を施しました。さア、お姉上樣、これからは打寬ろいで……。

津輕　何はなくとも心のまゝに、月を肴の無禮講……重役の面々も遠慮なう過されい。

松平　さらば早速に頂戴いたす。(と、盃に酌を受けて呑み)時に、森庄五郎は如何いたした。身が一獻遣はしたいが……。

笠原　いや、庄五郎儀は未だ小身者、かゝるお席へは恐れ多うござりますれば……。

松平　いや〱、それは苦しうない。何事も無禮講と、只今信寧殿の仰せ出されぢや。

津輕　うむ、折角のお言葉ぢや。主膳、庄五郎をこれへ呼んで遣はせ。

笠原　ではござりまするが、庄五郎は……。

津輕　はて苦しうないと申すに。(と、河野に向ひ)あゝ河野六郎、其方の娘かのと庄五郎は豫て婚約の中と聞いたが、それならば其方の聟も同然ではないか。早くこれへ呼んでやれ。

河野　いえ、恐れながら……その儀は、未だ、確と左樣な譯では……(と、云ひ澁る)

悅子　かの、そち早うまゐつて、庄五郎に殿のお召しぢやと傳へてやつたがよい。

かの　はい、畏まりました。

(と、おかのは喜び急ぎ入る。福永忠太夫は悴の忠之丞と顏を見合せ、苦々しき思入れあつて。)

忠太夫　なんのことぢや。今宵の月見は、まるで森庄五郎の遊藝で持ち切りぢやが、如何に太平の世の中でも武士たるものは、遊藝では食祿を頂戴いたす譯にはまゐりますまい。

河野　これは福永殿の仰せの通り、今時の若いものは得て武藝を嫌ひ、柔弱な藝人の眞似などを致したがる輩が多

うござるが、小身者の癖に庄五郎なども困つたものでござりまするて。

津輕　いや、六郎、然う手駭しく申すな。一藝に達する者は萬能に通ずと申して、長唄でも庄五郎ほどに出來ればまた何んぞの爲めになるであらうぞ。

（と、そこへ森庄五郎は恐る〳〵出て來て平伏する。おかのは後について出る。）

津輕　おゝ庄五郎、御苦勞であつた。今日の饗宴には相應はしい月見の曲、江戸見坂殿も殊の外のお喜びで、余もこんな嬉しいことはない。

庄五郎　その仰せでは耻ぢ入ります。

松平　いや、然うでない。其方の長唄は、憖じ藝人の巧みを離れて、武骨の武士のいたすところに一種の風格があつて面白かつた。

庄五郎　然うお褒めのお言葉を頂戴いたしましては、猶々赤面の至りでございます。重役の方々の折角の仰せ否みがたく拙い藝にお耳を穢しましたる段は、幾重にもお詫びを申上げます。

早川　兩家の殿が格外なるお褒め言葉を下されても、寸毫の自慢氣ないのみならず。

甲田　却つて身を耻ぢ赤面いたすと、飽まで謙讓を旨とする庄五郎殿の態度こそは。

春日　まことに武士の生きたる手本と、お供ゆるされし家中のわれ〳〵。

皆々　一同感服仕つてござります。

松平　遠慮なう、もそつと近うすゝめ。身が盃を遣はしたい。

庄五郎　はゝツ、お流れ忝なく頂戴仕ります。

（と、盃を受けて飮む。）

悦子　これ、庄五郎とやら、聞きますところ唄の節は細いところまで坂田仙四郎の三味線に能く合うてゐるやうぢやが、餘程年少から習ひ覺えましたか。

庄五郎　はい、恐れ入ります。生來藝事は何にいたせ嫌ひではございませぬが、師匠につきましたのは中年から、つい兩三年ほどにございます。

悦子　生れつき惠まれた才能とは云ひながら、それはまア器用なことでござるなう。

貞子　して幼少の時分には、まるで致したことはなかつたか。

庄五郎　奥方さまのそのお尋ねでは祕されませぬが、實は拙者めは早くより兩親に死別れ、老婆一人の手に育ちましたので、絲道だけは七八つより聞き覺えに聞いて居りました。斯く申せば武家に育つて優柔極まる藝事にのみ身を入れたやうで耻ぢ入りますが、有樣はその一人の老

婆が老いの心を慰めの爲めに習ひ覺えていたしました業、今日はからずもお役に立ちましたは、是も育ての親の老婆が情け、嘸飛立つほどに喜んで呉れるであらうと思はず不覺の涙を流しました。

悅子　なべての藝事は、その優しい心根からこそ、淸水のやうにも湧き出づるものとは聞きましたが、かゝる孝心深い御家來をお持ち遊ばされたは、津輕の御藩のお幸せとお羨ましう存じます。

貞子　それにつけても、庄五郎と許嫁になつてゐる河野の娘かのは、藩中一の幸せ者なり羨みもの、これ、かの、今日は特にそなたに喜びを言ひますぞ。

かの　あれ、奧方さま……（と、恥しさうに仰向いて）恐れ入りました。

忠太夫　（生欠伸を嚙みながら）いやはや、長々しい庄五郎殿が長唄の御由來話で、われら武骨一ぺんの武士は、殆んど足に痺れを覺え申した。河野殿、なにか面白いお催しはござるまいかな。

河野　いや、これは御尤も千萬の儀、はてお客樣方の爲に何んぞ面白いお催しは……（と、笠原主膳に向つて、氣味合ひにて知らせる。笠原はうなづく）

忠之丞　しかしながら父上、然う一圖に物を仰せられるものではござらぬ。拙者思ふに、森氏もあれほどに遊藝のお心得があるからは、武藝にかけても必ず腕にお心得があるに相違ござりますまい。

河野　おゝこれは能いところへお氣がつかれた。（と、思はず膝をすゝめる態で）庄五郎儀、百石の小身者とは云ひながら、御前に於て遊藝のみをお聽きに入れましたのみでは、成程これは耻入る儀でございます。願はくは武士の持前、武藝を御覽に入れたらば如何の儀でございませうか。（と、意を含ませる）

笠原　成程、河野殿の御進言面白い。（と、態と膝をたゝき）就いてはお客樣のお供にまゐられた方々の中では、恰度年頃と云ひ格服と申し、福永忠之丞ならばコリヤ似合ひの立合ひと存ずるが、忠之丞、その方は試合に立つ所存はないか。

忠之丞　叔父上の仰せと申し、相手が森庄五郎殿とあらば不肖忠之丞、望んでも此の試合仕りたう存じます。

笠原　只今お聞きに達した通りの仕宜、忠之丞と庄五郎が立合ひの儀、お慰みにも相成りませうかと存じますが、御賢慮如何にござりませう。

津輕　イヤ、それは至極面白さうぢやが、身よりも江戸見坂殿のお考へは……。

松平　それは却つて宜しからうと存じます。津輕藩も松平藩も云はゞ一家の間柄、從つて兩藩の家來は兄弟も同然、

武藝を錬るには至極面白い相手でござらう。

笠原　殿の仰せ、忠之丞用意いたせ。庄五郎、その方も勿論異存はあるまいな。

庄五郎　イヤ、その儀は平に……何卒御免しを願はしう存じます。

河野（聲を勵まして）コレサ、それは不可ん、遊藝ばかりで武藝がなければ富家の恥、外聞でござる。武門に生れてこれを辭退いたすなどと一生の恥辱と相成るぞ。さツ上意ぢや、取急いで支度をなさい。

庄五郎（心に覺悟をしてうなづき）はツ、では何事も……承知いたしました。

笠原　此の勝負の審判役は、森庄五郎の親友と聞き及ぶ池邊小藤太に仰せ付けるぞ。

池邊　恐れながら斯る晴れの場所の審判役を拙者如き小身者に。

笠原　遠慮に及ばぬ、勝負は時の拍子と申せば、機に應じて誤りなく審判を致せ。

池邊（氣味合ひにて）委細承はりました。

（と、雙方身支度をする間に、近侍のものが木劍など運び來る。廣間に居並んでゐた人々は左右に片寄つて試合の座席を廣くするやうに座を改める。）

（やがて支度を整へた忠之丞と庄五郎とは、恭々しく上段の間に向つて一禮をなし、互ひに太刀先きを合せて立上る。）

忠之丞　隙があつたら遠慮なく打込んでまみれ。

庄五郎　御免を……いざ！

（と、雙方劇しく二三合渡り合つて忠之丞が勢ひよくヤアッと聲をかけて上段に構へると庄五郎はピタリと正眼につける。やゝ暫く睨み合ひの後、再び劇しく相搏つ。忠之丞の太刀先きが一寸鈍つて、庄五郎の鋭い打込みが一撃の下に相手の木劍を柄元からたゝき落さうとした時、審判役の池邊が矢庭に聲を掛る。）

池邊　待つた！

庄五郎　小藤太、何の爲めに聲を入れた。試合の邪魔立ていたせば審判役とは云はさぬぞ。

池邊　袴の紐がゆるんだからぢや。

河野　アイヤ、庄五郎、審判に向つての文言は見苦しいぞ。神妙に勝負せい。

庄五郎　はツ。（と、またも劇しく打込む）

（雙方撃ち合ふ間、始終池邊は忠之丞の爲めに庄五郎が不利の位置に立つやうに邪魔立てをする。此の樣を見てゐたおかのは、見兼る儘に思はず立上つて、將に勝負が極まらうとした瞬間、平骨の女扇をもつて矢庭に池邊を制し、反對に福永忠之丞の肩先きあたりを打ち

据ゑたので、ハッと思ふ隙に乘じて森庄五郎は逸早く勝を利する。）

笠原　いゝや、只今の試合忠之丞が負けを取つたのではござらん。彼の如く横合ひから邪魔に出た女の爲めに、庄五郎は思はず隙をねらつて打据ゑたのでござるぞ、審判役、なんと致した。

池邊　まことに恐れ入りました。

笠原　いや、恐れ入りましたではない。（と、怒りながら）今の立合ひは勝負には相成らぬぞ。

松平　（癇癖の筋を額にあらはし）まことに主膳が申す通りぢや。かのとやら申す女が、血迷うて邪魔立ていたしたばかりに忠之丞が敗を取つたと見たは僻目か。

津輕　これ、河野、何故邪魔を入れた娘を叱らぬぞ。そちに任せる、確と申聞けい。

河野　はッ、何とも恐れ入りました。コリヤかの、これへ參れ。何を躊躇、早うこれへまゐらぬか。

かの　はい……（と、膝をすゝめ涙を一ぱいにためて、恨めしげに父の顏を見上げる）

河野　これ、今日の立合ひはお客樣のお供仕る御重役福永忠太夫殿御子息と當家の家來森庄五郎との大切な試合。何んで邪魔を入れた。殊に其方は女の身の上、お目障りになつて御不興至極、恐れ入つた儀であるぞ。さッ、返答いたせ、何故邪魔を入れた？

かの　今日のお立合ひに邪魔を入れましたは、江戸見坂樣のお爲、また御當家の御爲、延いては忠之丞と庄五郎兩人の爲と心得まして邪魔を入れましたに相違ござりません。が、興をお醒まし申した儀は幾重にもお詫び仕ります。

河野　なに、御兩家樣のお爲と心得、また兩人の爲に邪魔を入れたと？……

かの　はい、忠之丞が負けを取りますと江戸見坂樣の御恥辱になり、また庄五郎が後れを取りますと御當家樣のお恥に相成りませうかと存じます。御緣合のお間柄で、奥方樣はどちらに勝を取らせようと思召すことも出來ぬやうな場合に迫り、嘸御心配であらせられませうと心得、また御兩家互ひに負け勝ちの遺恨が殘らぬやうに、邪魔を入れましたに相違ございません。

笠原　かの、只今承はれば、一應は尤もぢや。が、左樣なれば何故森庄五郎の方を打たぬ。今日お客來のお供を仰せ付けられてまゐつた忠之丞をなぜ打つた。

かの　（落ついた調子）左樣でござります。元よりお客樣のお供の方を打ちましては相濟みませんが、主膳樣、あなたも御重役ならばお目がござりませう。審判役の池邊小藤太が何かの拍子には庄五郎に向つて居りますのと、

また一つには庄五郎は餘程劍術には心得があると見えて聊かの隙もございませんので、是非なく忠之丞を打つて試合の邪魔をいたしました儀にござります。

忠太夫　では悴忠之丞は隙だらけであつたとでも申すのか。

かの　いゝえ、左樣ではございません。が、女の手で打たれたところを見ますれば聊か隙があつたのかとも存じられます。

池邊　その上審判役に、何か不正があつたとでも申されるのか。

かの　いゝえ、その儀も申すのではござりませぬ。が、私の申すことが噓と思召すなれば、いづれも樣のお目通りにて、忠之丞でも小籐太でも私と長刀の立合ひを仰せ付け下されば、何より分明と存じあげます。

松平　いや、それには及ばぬ。何事も相わかつた。（と、思入れあつて）はて、女ながらかのは立派なものぢや、年もゆかぬに感服いたした。河野六郎、其方はよい娘をもつて幸せ者、庄五郎とは似合ひの夫婦ぢや。心せぬと鳶が鷹を生んだなどと世間の口の端にかゝらうぞよ。はゝはゝ。

河野　恐れ入りました。

貞子　妾も大抵案じたことではなかつたが、かの、兩家の爲、兩人の爲に能う邪魔を入れて呉れました。いづれ褒美を遣はさうぞよ。

かの　そのお言葉では恐れ入ります。

津輕　これで、何事もなく目出度う納まつた。あれ、折から明月も高く中天にかゝつたさうな。此の上は庭内の四阿に座を替へて……。

松平　心ゆくまゝに談笑するも亦一興ぢや。皆も來い……（と、森々溫顏にて見返りながら）庄五郎、其方もまゐれ。

庄五郎　はゝッ、お供仕るでござりませう。

（と、笠原宇膳、福永親子等は一寸癪に障る思入れにて目を交はす。松平、津輕兩家の夫妻は徐ろに立上つて奥へ入る。皆々思入れ、此の模樣よろしく。）

――幕――

返し

第二場　本所錦糸堀道端

前面は錦糸堀で、岸はやゝ高目に往來になり居り、花道より上手につゞく一路あり。土手の如くなりゐる。向ふ背景には、屋敷窓が漏れて仄かに灯火が見ゆ。これは紀伊守屋敷で、それを離れると二軒御家人衆（澤井正司、古小路數右衛門）の軒先きが並んで見える。

門口には出入りあり。夜更けてゐるが澤井正司宅には客ありと見え、門口はその儘燈火が洩れて締切つては居ないのである。

上手よろしきあたりに大きな柳の立木、そこに饂飩屋が荷を置いてゐる。その前に立つて二人の仲間が話しながら饂飩を食つてゐる。饂飩屋は頻りに火を煽つてゐる。

森の下男　それぢやア、おぬしも主人のお迎ひか。

山村の中間　然うよ、おいらの旦那は碁が好きでの、あそこの御家人衆の家へ來ちやア夜明けまでは時知らずさ。これから冬になると耐らねえやつよ。

森の下男　然うか御苦勞だな。おいらは又柳島の津輕樣のお下屋敷まで行かなきやアならねえ。おい、とッさん、もう一ぱいだ。

饂飩屋　へい、かしこまりました。

山村の中間　（食ひ終つて）おい、勘定はこゝへ置くよ。（と、森の下男に向ひ）お先きへあばよ。

（と、山村の中間は提灯をさげて默つて、向ふ屋敷の潜りを開けて入つて了ふ。下手から按摩の笛が聞え、直ぐ一人の子按摩が饂飩屋臺に杖を突當てる。）

饂飩屋　おい、おい、小僧、目を開いて歩かねえか、屋臺へ突き當る奴があるかい。

按摩　おいらが盲目（めくら）といふ事に氣がつかねえとは、あんまりうどんな老爺（おやぢ）だな。（と、通り過ぎて笛を吹く）

饂飩屋　餓鬼の癖に生（なま）ぎきなことを云つてやがる。

森の下男　眼の利かねえ替りに、口の方で埋め合せをつけてやがるんだ。おい、こゝへ置くよ。

饂飩屋　へい、有難うございい。ぢやア大切に……（大きな聲で）うどん！　うどん！

森の下男　秋の空だ。また、ぽつ〳〵やつて來やアがつた。

（と、饂飩屋が上手へかつぎ去つた後、森の下男は獨語ちつゝ下手へ行きかゝる。）

（花道から福永忠之丞出で來る。萠黄の長合羽に柄袋を掛けた大小、宗十郎頭巾を目深に冠つて蛇の目の傘をさして行き過ぎ鶴の紋の提灯を見て森の下男を呼び止める。）

忠之丞　これ〳〵小者、氣の毒ながらそこへ脱げた爪掛（つまがけ）をかけて呉れんか。

森の下男　へい、へい、畏まりました。（と、直してやる）

忠之丞　思ひがけない事を頼んだ、これは少いが取つて置け。（と、二朱ばかり與へる）

森の下男　どちらのお軍役樣か存じませんが、こんなに頂戴いたしましては……。

忠之丞　なアに構はぬ取つて置け、その提灯の紋は鶴の丸

だが……もしや森庄五郎の小者ではないか。

森の下男 へい、その森庄五郎の家來傳藏と申します。旦那樣は御存じで……。

忠之丞 知つてゐるとも、森とは同じ藩に勤めるものだ。もう追ッ付け歸る筈だ。

森の下男 左樣でございますか。實は今夜は都一濱さんと云ふ一中節のお師匠さんから、急ぎの書面を……へゝゝへ、なアに、別に大した用事ぢやアなさゝうでございますがね。

忠之丞 然うか、もう間もなくこれへ見える筈だ。これこれ、その赤合羽と饅頭笠を一寸貸せ。

森の下男 へい……どう遊ばす？

忠之丞 實はナ、これへ森がまゐると拙者が貴樣のつもりで迎ひに出てからかふのだ、はゝゝゝ。

森の下男 惡い洒落をなさいますな、へゝゝゝ。

（と、下男が捨臺詞よろしく、忠之丞に提灯を持つて貰ひ、赤合羽を脱いだところを、突如肩先から拔き切りに斬り下げる、忠之丞は懷中から書面を引出し、死骸を片付け、裏頭窗の下駄を脱ぎ棄てゝ下男になり澄ます。花道からバタ〱と池邊小藤太が走り來る。雨やゝあがり薄明りになる。）

忠之丞 おゝ池邊氏か（と、袖にかくした提灯を翳す）

小藤太 いつの間に……變つたお姿……（と、訝る）

忠之丞 只今此の場で……（と、耳元に囁き件の書面を渡し）して、庄五郎めは？

小藤太 おッつけこれへ……さッお忍び召され。

（と、忠之丞は上手の柳の蔭へかくれる。）

（同じく花道より森庄五郎やゝ醉態に出で來る。小藤太はこれを迎へるやうに小戻りして聲をかける。）

小藤太 おゝそれへまゐつたは矢張り森であつたか。

庄五郎 然う云ふおぬしは……うむ、池邊小藤太だな。これ池邊、今日の貴樣の審判役はあれはなんだ？ 貴樣は卑怯な奴だな。

小藤太 いや、それについて、おれは一言、おぬしに詫をしなければ濟まないと思つてゐた。何しろ、相手は重役の甥ではあり、お客樣のお供のこと、いやはや、飛んだ役目を仰せ付かつて迷惑したよ。

庄五郎 しかし、俺はまた、親友の貴樣がなんであんなにおど〱して、相手に遠慮するのか譯がわからなんだ。貴樣も矢張りへつらひ武士だな。貴樣にはどうかすると小さい時からその卑怯な根性があつていかん。

小藤太 いや、そこだ、然う一圖に俺を責めないで……まつたく俺は氣が弱いので……あんな場合には、すッかり氣負けがして了ふ性質だ。それは、俺が審判として惡か

つたことは知つてゐる。知つてはゐるが……。

庄五郎　はゝゝ、何しろおぬしは頼母しくない朋友だよ。

（と、語りながら二人は爪先上りに花道から本舞臺へかゝる。同時に上手より一中節の女師匠都一濱、順講の歸りといふ風、幇間和八は傘をさしかけ乍ら一緒に出て來る。）

和八　ねえ、若師匠、一濱さん、今夜はもう遲いんだから、早く歸つた方がようがすぜ。またあした阿母さんが八釜しいからねえ。

一濱　厭ですよ、あたしや今夜どうでも庄五郎さまに會はなきやア寢たつて寢つかれやアしないんだからねえ。

和八　だと云つて、森の旦那だつて、柳島のお下屋敷においでなさるんだから、なんぼ今日は唄の順講にお見えなさらねえからツて、それアお前さんが無理と云ふものだよ。

一濱　だから夜更け、…　夜が明けたツて構やしない。あたしの方からお迎ひに行くんだアねえ。

和八　串談ぢやアねえ。お前さんと相合傘で夜が明けたら、狐に憑かされたやうなもんでさ。

一濱　オヤ和八さん、大きに濟まなかつたねえ。あたしだつて、すき好んでお前さんなんぞと相合傘の道行もしたくないよ。（と、けつまづく）

和八　おツと、あぶねえ、さ、お氣をつけなせえ。

（と、此の時月が雲にかくれて、再びバラバラと雨になる。此の途端、福永忠之丞は柳の木蔭から提灯をつきつけて『へい、お迎ひ！』と云ひさま、下男と見せかけて長いのを引拔いて斬りかゝる。）

庄五郎　何者だ！（と、飛び下つて構へる）

小藤太　森！　氣を付けろ！

（と、言葉とは反對の心持で、小藤太はこれも矢庭に後ろで引拔いてゐる。これより先、森庄五郎には、見えかくれに三四人覆面の武士が尾行して來てゐた。それが小藤太の相圖で一齊に拔いてかゝる。一濱と和八はこれにからんで暫くさぐり合ふ。二三合する。その瞬間、御家人屋敷の潜りから、先きの中間提灯をもちて出て、つゞいて山村半左衛門姿をあらはし、此の場の様子を凝と見極はめる。小藤太は中間の提灯を突如切落す、山村赫となつて叫ぶ。中間、堀に落込む。）

山村　夜更けの往還に、何事の爭鬪、一人を相手に此の態は意趣か、夜盗か、割下水に住む旗下山村半左衛門、お助太刀いたすぞ。

（と、多勢に圍まれた森に助勢して劇しく切り結ぶ。庄五郎は和八にかばはれてゐる一濱を背後にして柳の立木を小楯に身構へつゝ鬪ふ。池邊は仲間の提灯を切

り落すと共にそれに斬りつけようとする途端、山村は彼の利腕を逆に取つて仲間の落ちた前面の錦糸堀へ投げ込む。）

（福永は加勢が出たのに驚き、下手（中の橋）の方へ遁げ去る。他の三四人の覆面の武士もバラ〱と姿なくらます。）

山村　卑怯な奴め。（と、逃去る後を見送りながら刀を鞘に納め）お武家にはどこも、お怪我はなかつたか。

庄五郎　御助力によつて……幸ひに無事でござつた。いや千萬忝けない。手前は津軽藩にて森庄五郎と云ふ小祿を食む者、御尊名だけでも承知いたしたうございます。

山村　イヤ、拙者は御藩の邸から二つ手前の横町で旗本山村半左衛門と申すもの、以後は御昵懇に願ひたう存ずる。

庄五郎　恐れ入ります。いづれお屋敷へ罷り出ましてお禮を申上げます。

山村　いや、態々では困りますて。ちとお隙の節には……。

（と、此の時、月雲間を漏れ、和八が這ひながら近づいて庄五郎に縋りつき。）

和八　お〻森の旦那……助けて……助けて下さい。

庄五郎　は〻〻〻、和八か、もう怖る〻ことはない、安心せい〱。

和八　（口の利けない態て）い〻え、い〻えあツしぢやアございません……せ、せ、せ、先代師匠の一人娘……。

庄五郎　一濱どのか。（と、愕き四邊を見廻しながら）はて堀へでも落ちたのではあるまいな。

山村　（思ひ出して）これは、とんと失念いたした。先程は手足纏ひと存じたゆゑ、此の門内へ隱し申した。（と、潜りから連れ出して）さあ、確にお手渡し申しまするぞ。

庄五郎　お〻やつぱり一濱……。（と、抱へる）

一濱　庄五郎様、あなたも御無事で……こんな嬉しいことはござんせん。（と、喜ぶ）

山村　やツ、（と、氣がつき）拙者の家來も顔を見せぬ。（と、聲をあげて）これ彌助！　彌助！

中間　はい。（と、堀の中から延びあがる）

山村　はて何處に居るのぢや。

仲間　はい、溝の中に居ります。

山村　なんの態だ。

庄五郎　然う云へば敵も確かに……。

仲間　彼奴は泳ぎが出來ると見えて、向ふ岸へ這上つて逃げ失せました。

庄五郎　え〻、惜しいことをして了うた。

（と、猶も月光に透して見る。此の態よろしく。）

――幕――

二幕目　女師匠都一濱宅

舞臺は乘物町伏見屋といふ一中節の女師匠の住居。下手前の方に青竹の格子の出窓、その奥の方門の出入りで入り口になり居る。

座敷は平舞臺の疊敷、正面は南蠻更紗の暖簾にて出入り。正面の上手に緣起棚あり、よき處に三味線を二挺ほどかけ、その他飾附すべて一中節の女師匠の粹な好みよろしく。

三坪ばかりの庭には無造作な鉢植の草花、植木などあり。緣側傳ひに障子を建て廻した附屋臺——この一間が奥座敷になり居る。

平舞臺上手寄りに長火鉢が据ゑてあり、柱には古い網籠づくりの掛花生に櫻の枝の無造作なるを投げ込み、花見に用ひたらしい目鬘など吊してある。

時は翌寶暦三年の春三月十五日。

幕明くと、稽古三味線のめりやすが奥から聞えて來る。合の手を幾度となく彈き直してゐる。

〽色見えで、うつろふものは世の中の——。

一濱は初め凝と長火鉢に凭れてゐたが、思ひ返して人を待つ心で、出窓の處へ行き往來を見て暫くそこへ腰をかけてゐたが、また焦れたやうな思ひ入れで緣側の處へ戻り、心にもなく草花をいぢり初める。奥座敷からは手が鳴る。最初一濱が返事をしなかつたので、今度はいよいよ劇しく手を鳴らすのが聞える。

一濱　はいはい。(と、返事をして呟くやうに)まあ、料理茶屋へでも行きやしまいし、蒼蠅いねえ。

(と、繼母のお傳が待ち切れずに障子をあけて顏を出す。)

お傳　まア、誰もゐないのかと思つたよ。燗がついたらもう一つ御馳走してお呉れよ。

一濱　あら阿母さん、そんなことを……。

お傳　いゝえ、濟まないねえ。(と、やゝ皮肉)どれ、ついたらこッちへお呉れ。

一濱　いえ、まだ一寸ぬるさうですから……ついたら直ぐおせんちやんに持たせてやります。

お傳　なんぼ商賣でも、時嫌はず三味線ばかり彈いてる内弟子もうるさいねえ。

一濱　でもお稽古の好きな子に小言は云はれませんからね。

お傳　だッて、用の手間を缺いちやア困りもんだよ。

(と、そのまゝ姿をかくす。一濱溜息をつき、待人を

かけて見る。花道から幇間和八、花見歸りの態、手にさくら餅の土産をさげて出る。）

和八　はい、ごめん……（と、直ぐ格子をあける）

一濱　あゝおせんちやん、どなたかお客樣だよ。

おせん　はい。（と、直ぐ暖簾から出て來て）どなた？（と、障子をあける）

和八　へい。こなた。（と、見て）やアおせん坊か、いつ見ても綺麗だなア。

おせん　厭な和八さん、まアお上んなさいよ……お師匠さん、和八さん。

一濱　おや和八さん、おいでなさい。

和八　師匠、今日は……どうも御無沙汰をいたしました。それでもまア、いつも御機嫌よくツて結構でげすな。

一濱　いゝえ、ところが餘り結構でもないんだよ、和八さん。

和八　と、仰有ると……何か、その、御機嫌に叶はないツてなことでも……。

一濱　大有りさ。お前さんらしくもない、大抵は察してお吳れよ……これさ。

和八　はてね、……と、云つて、どう己惚れてもこつちが師匠に待人をかけられる子柄ぢやアごわせんからねえ。

おせん　（茶を出しながら）あら、厭な和八さん、お門が違ひますツてば。ほゝゝゝ。

和八　あはゝゝ、あツしも先刻然う思ふにやア思つたがね。（と、ポンと手を打つて膝を乘り出し）師匠、今日はどうしても、お前さんに驕ツて貰はなくツちやアならない吉報をもたらして來やしたよ。

おせん　あら、どんなことを……（と、自分の事かの如く喜んで思はず膝を乘り出す）

一濱　さア、おせんちやん、お前濟まないがこれを奥へもつてつてお吳れ。（と、燗を見て徳利を出す）

おせん　あらお師匠さん、あたしにも聞かせて下さいよ、お師匠さんの心を察して、あたしだツて共に待ち焦れてゐたんですもの。

一濱　まア、何のことだかまだ解りもしないのに……お燗をさますとまた叱られるから、さツそくもつてツてお吳れな。

おせん　まア、惜しいわ……和八さん、後でね。

和八　あいよ。

（と、おせん輕く愛嬌を見せて奥へ入る。）

一濱　それぢやアお前さん、どこかでお目にかゝツたのかい。

和八　えゝ。しかも、さつき向島で……まだ逢ひたてのほやほやさ。

一濱　まアそんなことを云つて談ましがらせずに、早く話して聞かせてお呉れな。それぢやア矢張りお花見に……。

和八　なアに、そんな浮いたお心からぢやアない。けふは三月十五日で梅若様の涙雨といふ日だが、朝から近年にない珍らしい天氣、あたしも木場の贔屓客に連れられて俗な人中へ何も商賣だと思つて双盤念佛供養まゐり。その甲斐あつて、木母寺の門前で、ぱツたりと出會つたのが暫くお目にかゝらない森の旦那。

一濱　庄五郎さまは、女の人でもお連れ申しちやア居なかつたかえ。

和八　そんなどころか、去年の暮御隱居様が亡なられた忌服で餘程お力を落された御様子、月代はまだ生えたまゝ剃りもなさらず、看病づかれでお體が惡かつたが、漸く此頃忌も明けて、氣も晴れるかと思つて木母寺へお詣りなさるとの話、師匠、あの御孝心深い森さまを恨んぢやアお前さんが惡うございますぜ。

一濱　それぢやア浮いたお心もなく……あたしはまた、美しいお許嫁のあのおかの様とやらに見かへられたかと思つて……假初めにも恨んでゐたのは、あたしが淺い心から……庄五郎さま、どうぞ勘忍して下さい。

和八　それにね、師匠、何を思つたか、あたしの耳に口を寄せて俺の敵も同然な、あの小藤太めが此のごろでも出入るかと……。

一濱　しツ、靜かにおしよ。今日も朝から二人で小酒盛りさ。（と、目顔で知らせる）

和八　それぢやア繁々お袋さんと……（と、一濱の心を察して）師匠、お前も心の休まる時があるまい。先代の師匠都和中とも云はれるほどの後添へが、死んだ跡のふしだらは……ねえ師匠、あたしも世過ぎ身過ぎに幇間こそしてゐるが、まだ心までは腐らねえつもりだ。女の細腕一本で、あんなお荷物を抱へてゐるお前さんが不愍でならねえ。（と、思はず涙をこぼす）

一濱　なんの、それでも庄五郎さまといふ心の中で命と思ふお方さへしツかりさへしてゐて下さりやア、和八さんあたしや浮世の苦勞は苦勞とも思やアしないよ。（と、これも誘はれて目頭を拭きながら笑つて見せる）

和八　うむ、それでこそ女ながらも、名人和中の二代目一濱、何があつても藝道に身を打込んで都の流派を榮えさせておくんなさい。

一濱　和八さん、お前の心はあたしや嬉しいと思つてゐるよ。

お傳（奥から）なんだツて和八さんが見えたツて……（と、醉ひ加減で出て來り）おや、珍らしい和八師匠、花時の風は妙に吹廻すものだねえ。

和八　へヽヽヽ、どうも敷居が高くツて……阿母さん、いつもお達者で結構ですねえ。花時と云へば、おツと忘れてゐた。（と、土產のさくら餅を出し）これはほんの手土產のしるしで……。
お傳　おや、これはさくら餅かい。お前さん梅若へ行つたんだね、これは有難う。だが、此のうん氣に餅なんか食べたらもたれた上に胸が燒けておあいにくだよ。
和八　へい、どうも相濟みません。
お傳　矢張り先代師匠の一人娘に食べさせようと思へばこそ……あたしなんぞは、どうせ後添への穀つぶしだからねえ。
和八　へヽヽ、そんな皮肉を有仰られちやア和八公甚だ當惑の態ですよ、阿母さん。
お傳　いくらお世辭でもお前さんのやうな年寄に阿母さん〳〵ツて云はれるのは、餘まりぞツとしないねえ。
おせん（突如奧から）あら、旦那、御串談をなすツちやア厭ですよ。
（と、おせん急ぎ出て來る。池邊小藤太、直ぐついてこれも出て來る。）
小藤太　はヽヽ、おせんはまだ子供だなア。
お傳　旦那、こんなものに手を出すと承知しませんよ。
小藤太　いや、串談だ、串談だ、（と、和八を見て）おヽ和八か、暫く見なかつたな。
和八　これは池邊の旦那、どうもお久しうございます。いつもお元氣で。
小藤太　ないものは金ばかりか、はヽヽ。
和八　時に、森の旦那は御機嫌よろしうございますか。（と、態と白ばくれて聞く）
小藤太　それらの處は、此の一濱に聞けばよくわかる筈だ。
一濱　あら、あんなことを有仰つて、あなたが御存じの通り、此の頃はとんと鼬の道ですよ。
お傳　それも誰を恨むことはない、皆んなお前さんが意氣地がないからさ。素人ぢやアあるまいし、藝人が二十にもなつて、そんなことでいけるものか、己なんぞは二十の時は旦那の四五人もあつた。
小藤太　え？
お傳　なにさ、四五人も持つ積りで、あつたと云ふことさ。（と、おせんを見て）なにを、お前は茫乎して立つてゐるんだね。奧から早くお膳でも持つておいでよ。ねえ旦那またこヽで一杯飲み直すとしませうよ。
（と、おせんは奧へ膳を取りに行く。）
小藤太　いや、實は俺も、森には折入つて會ひたいのだが引籠つてゐるので暫く會へない。
和八　へい、左樣でございますか。いや、二本指さんでも

森様ぐらゐ柔和で通なお方はたんとは御座いませんね、ねえ師匠、素人などを可愛がつて下さる其様子てえのはありませんよ。
小藤太　おい／＼、俺の前でそんな面當てがましいことは云ふな。お前も思つたよりは皮肉で口の悪い奴だ。口塞げに一ぱいやらう。
和八　へい、これは、どうも……持つて來たついでに、おせん坊お酌を一つ。
おせん　はい。(と、銚子を手に取つて注ぐ)
和八　おとゝゝゝ、矢張りお酌はいくつになつても若い女の子に限りやすて。はゝゝゝ。
お傳　和八さん。こゝには若い女はかりだからねえ。
和八　おツと、また失策か。はゝゝゝ。
(と、お傳、小藤太等互ひに差し差されて酒を酌むと、ころへ、森庄五郎門口へ來ておとづれる。)
庄五郎　御免！……一濱は在宅か。
一濱　はい。(と、聞きつけて急に元氣になり)おせんちやん、お客様だよ。(と、思はず中腰になる)
おせん　お客様？……どなた？……あゝ屹度森様に違ひない。
小藤太　なに森が……？
おせん　(飛んで行き)まあ、入らッしやいまし、お師匠さん、森様が……森様がおいでなさいましたよ。
一濱　えツ、庄五郎さまが！　まあ／＼能くお出で下さつたねえ。
お傳　(ヂロリと見て)他愛なく騒ぎ立てるばかりでなく……ほんとにしッかりおしよ。(と、忽ち手を離すやうに)おや、入らッしやいまし、誠に御久振りでございます。まア、思ひながら御無沙汰ばかり……それに、御隠居様がお逝れなさつてからは、よい氣になつて御屋敷へは出られませんので、濱と毎日のやうに怨み申し暮して居りました。能く入らッしやいました。
庄五郎　何となく拍子抜けがしたとでも云はうか、一生懸命になつて勤めるのも張合がなくなつてな……喜んで貰ふ人がないといふのは恐ろしいものだ。
和八　ほんとにお察し申します。師匠はそのことばかりを氣に病みましてねえ、へい。
一濱　あれ、和八さんは、また、誇大なことばツかり。
おせん　いゝえ嘘ぢやアありません、お師匠さんのお心持は、朝晩一緒に暮してゐる私がようく察してゐました。
お傳　あれさ、また、つべこべとお前さんなんぞの口を出すところぢやアないよ。さア、臺所へ行つて片口へ酒でも注いでおいで。
おせん　あい。(と、無精不精な顔で入る)

お傳　ほんとに斯うして女師匠なんかしてゐながら、まだ、からッきし意氣地がないんでございますよ、ほゝゝゝ。

庄五郎　それは濟まなかつた。武家の窮屈さは忌服のあけるまでは、いくら好きな道でも、順講などへ聞きに行きたくても出られないでな。今日は濱がゐたら氣晴しに一段聞かせて貰はうと、ふッと思ひ出して出掛けて來ました。

小藤太　(杯の手をやめて)　それは能く出掛けて來た。實は俺もいつからか逢ひたくつて、毎日のやうに貴公の來るのを待つてゐたよ。

庄五郎　おゝ誰かと思つたら池邊か。(と、よろしく思入れあつて)これは久振りに、妙なところで逢つたものだな。

小藤太　いや、別に妙なところで逢つた譯でもなからう。貴公が一濱を贔屓と云ふことは、今われ〳〵の仲間ぢやア誰知らぬものもない位だ。全く、色男にやアなりたいものさねえ。

庄五郎　そんなことを云つて、池邊、貴樣なんぞは先に立つて餘計なことを云ひ觸らして歩くのだらう。

小藤太　いや、それは飛んでもない寃罪だ。はゝゝゝ。(と、誤魔化し笑ひをして)なア和八、女の子にもてるのも程があるな。

和八　えゝえゝその程ッてえのが六ケ敷いもので　してねえ。あなた樣なんぞは……。

小藤太　これ〳〵、俺の棚おろしは澤山だ。

お傳　和八さんは、これで隨分チク〳〵やるよ。

和八　チク〳〵やるなんて、まるで蜂のやうにお云ひなさるが、太皷に附物はばちでげすよ。はゝゝゝ。

小藤太　いやはや、お年を召すと洒落までが廻りッ諄くなるものだな。(杯を乾して)どうだ、森！　久振りで一ぱい受けてくれ。

庄五郎　うむ、今日は、まア……止しにしよう。

小藤太　(さぐる如き眼附で)　それぢやア矢張り、貴公は何か俺を誤解してゐるな。

庄五郎　いゝや、そんなことはないが……。

小藤太　なアに、ないことがあるものか。おまけにどうして、そんな浮かぬ顏をしてゐるのだ。それ、その眼が……俺を見る眼の底に、何か厭な疑ひの雲がかゝつてゐる。でないなら、淸くこれを受けて吳れ。

庄五郎　だと云つて、それは貴樣が無理ぢやアないか。

小藤太　無理であらうが何んであらうが、友達同志が久濶を叙す杯だ。淸く一ぱい飲んで吳れ。

庄五郎　うむ、(と、思入れに覺悟をきめて)よし、それぢやア貰はう、一濱ついでくれ。

(と、これより先きよき程におせんの運んで來た片口

から一濱は德利について燗をつけてゐた――それを取上げて注ぐ。）

お傳　さ、お濱、こゝが森さまに敵の打ちどころ、そんなことでいけるものか。さ、兩手に花のもう一ぱい……さ、重ねて三つ。

庄五郎　いや、然うはいけぬ。久方振りの一ぱいが腸を掻き捩るやうに廻るわい。さッ、池邊、返盃する。（と、一つを乾して差す）

小藤太　もう一ぱい重ねてから貰はう、こッちは朝からやつてゐるのだからな。

庄五郎　池邊、貴樣はどうも卑怯でいかん。貴樣の遣口はいつも刀を拔いて、竊と後ろから廻はるやつでな。

小藤太　えッ？

庄五郎　はゝゝ、どうだ、まだ覺えてゐるか。ゐるなら少しは胸にこたへるだらう。

小藤太　妙なことを云ふなア……なあに、これしきの酒で胸にこたへるの、なんのと云ふことはないが……さ、もう一ぱい行かう。

庄五郎　うむ、斯うなればいくらでも飲むが、池邊、貴樣もなか／＼白ばッくれるのは上手だな。

小藤太　これ、そんなことを云はれては困る。（と、皆に氣兼ねをしながら）久しく逢はないうちに、貴公は少し酒癖が惡くなつたやうだな。

庄五郎　自分は根性がよくない癖に……はゝゝ。

（と、池邊はギックリして思はずお傳と顏を見合せる。和八は座を見て立上る。）

和八　いや、お侍衆のお親しい仲といふものは、あまりにお話が眞劍で、兎角無筆者の手前どもには、ちんぷん、かんぷんでわかり兼ねまするて。ところで、此の間をお次ぎへ下つて、春の大渫ひの番組でも拵へるといたしやしようか。師匠、一寸お耳を拜借。

一濱　あいさ。（と、是も立上る）

庄五郎　和八、野暮な話で濟まないな。まア一ぱい飲つてからにするがいゝ。

和八　へい、有難うございます。（と、聲色もどきで）後刻ゆるりと御意得やせう。あッはゝゝゝ。それぢやア暫くお見逃しを……。

（と、和八、一濱を伴ひ暖簾から入る。）

お傳　まア、お二方とも御親しい間柄で入らッしやるんですからサラリとしてお重ねなさいましよ。さ、森樣もう一つ。

庄五郎　いや、もう大分酩酊した。（と、醉ひにまぎらして）思へば暫く酒にも唄にも遠ざかつてゐた。お庇ですッかり浮世ばなれがして了つたよ。

小藤太　だが、それ位まはり氣が強くなれば澤山だ。
庄五郎　なにまはり氣が……？
小藤太　然うだ、貴公はまだ去年の秋十五夜の晩に錦絲堀で狼藉者に斬りかけられた時のことを根にもつて、あらぬ疑ひを俺に着せかけてゐるに違ひない。
庄五郎　なに、あらぬ疑ひを？
小藤太　いつかは悠くり貴公に逢つて、云ひ說きたいと思つてゐたのはその事だ。
庄五郎　（思ひ入れあつて）ウム、そつちから然う云ひ出したのなら改めて聞いて置きたいが、俺の前から下男に裝うて突然一人の狼藉者が斬りかけた時、貴公は何の爲めに刀を引拔いた？
小藤太　それは正面から狼藉者がまゐつたから、助太刀をいたさうと心得て……。
庄五郎　うむ、その助太刀がなんでまた、此方を助けて吳れようとしてゐる山村の家來の提灯を暗雲に切落したのだ。
小藤太　それは、その、貴公の上を大切だと思つて構へてゐると突然鼻の先きへ明りがヌツと出たので思はずハツと思ひ惑ひ、狼藉者と心得て切落したのだ。
庄五郎　はゝゝ、貴公はなか〳〵口賢い。それでは、その儘濡鼠になつて向ふ岸へ逃げて了つたのはどういふ譯だ。はゝゝ妙な助太刀もあつたものだな。

（と、醉ひが廻つたので片肱をついてごろりとなる。此の隙を見て、小藤太は懷中から藥袋の包みを取出して窃とお傳に渡し、何か目顏で囁く。お傳はそれを手早く德利の中へ入れる。そしてその德利を振る。その樣子を暖簾口から一濟が覗いてゐる。）

小藤太　イヤナニ、庄五郎、貴公と俺とは祖父母の親交から兄弟同樣に育てられて來た間柄だ。俺が惡いなら今迄のことはどんなにでも謝罪する。これからはまた昔通りに舊交を溫めて親しく交際つて吳れ。
庄五郎　それぢやア小藤太、貴樣は人間らしい心になつたと云ふのだな。
小藤太　何もかも默つて宥して吳れ。おれは貴樣と絕交同樣にいがみ合つて暮してゐるのが苦しくてならないのだ。さツ、今改めて仲直りの杯を一ぱい手に取つて吳れ。
庄五郎　うむ、俺は貴樣の口からそんなことを聞かうとは今の今迄思つてゐなかつたが、然ういふ杯なら改めて一つ受取らうよ。

（と、盃を手に取る。お傳がつぐ。それを口へもつて來ようとした瞬間一濟が飛んで出る。）

一濟　まア〳〵待つて下さい。そ、そ、そんなに飮むのは止めて下さい。

お傳　これ、お濱、お二人さんが仲直りの大切な盃、それをお前はなんで止めるのだえ。

一濱　だつて阿母さん、森さまはこんなに醉つて入らッしやるぢやアありませんか。

小藤太　餘計な心配をせんでもよい。手前が酌をするのだ女の酌なんどとは違ふ……さッ一つ。

庄五郞　……（默つて考へる表情よろしく）

一濱　いゝえ、不可ません、森さまお止し遊ばせ、毒ですよ。

小藤太　な、なに、毒だと……。

一濱　だつて、醉つてゐるのに無理にすゝめれば毒ぢやアありませんか。

お傳　おせつかいなことをおしでない。

小藤太　是非池邊が飲んで貰ひたい酒だ。さッ……。

庄五郞　いや折角だが一濱が心配して呉れるから今日はもう酒は止めにしよう。

（と、飲ませよう、飲ませまいと爭ふ拍子に德利を轉がして酒は殘らず疊へこぼれる。）

小藤太　あッ、餘計なことをする奴だ。（と、赫となつて）平素は贔屓で戯けたことも云つてゐるが、今日ばかりは勘忍ならない。

一濱　まア、御免なすつて下さい。なにも此の酒をこぼしたからッて、そんなにお怒りにならなくてもいゝぢやアありませんか。あれ、おッ母さん、お前からもお詫びをして下さいな。

お傳　いゝえ、あたしは知らないよ。

一濱　兎に角、こんな緣起の惡い酒は止しにしませうねえ。

（と、德利を庭先へ捨てる）

小藤太　いよ／＼武士を嘲弄するに極まつた。さ、そこへ直れ。（と、刀の柄へ手をかける）

庄五郞　小藤太、何をするんだ。

小藤太　眞二ッにぶッ放す。

（と、一濱は森の後ろへ支へられる。そこへ和八飛んで出て、双方へ引分ける。）

和八　まゝゝ、どうぞ手前に免じて、御量見をなすつて下さいまし。師匠もお詫びを……。

小藤太　えゝッ、小癪に障る女郎め！（と、睨めつけて置いて）お傳、どこぞで一ぱい飲み直さうか。

お傳　此の儘ぢやア腹の蟲がをさまらないからね。

小藤太　和八、賴みたい話があるからお前も來い。

和八　へい、へい、わッちで宜しけりやア、どこまでゝも一緒にお供をいたしやす。

（と、和八は一濱に目顏で呑込ませながら、口と腹とは反對について出る。）

小藤太　だが、折角うまく行つたところを……。
庄五郎　えツ？　何か云つたか。
小藤太　なアに、仲直りの杯は、また改めてゆつくりしようと云ふことさ。
庄五郎　おい池邊、もうその御心配にやア及ばないよ。
小藤太　えゝツ、勝手にさらせ！　さ、お傳、和八、行かう。
（と、格子をはげしく締めて入る。お傳、和八ついて入る。）
一濱　おせんちやん、おせんちやんは居るかい。早く浪の花をもつて來て門口へ撒いておくれ。
おせん　あい。（と、返事と共に小笊に鹽の入つたのを持來り、まき散らしながら）あんな憎らしい人達ツてありやアしない。これでやつと清々しましたねえ。（と、直ぐまた暖簾から入る）
庄五郎　一濱！
一濱　庄五郎さま！
（二人は思はず顏を見合せて微笑する。暫く沈默。直ぐめいりやすになる。）
〽色見えで、うつろふものは世の中の、知るもよしなや身の上を――

庄五郎　今日といふ今日、お前の心の奥底まで……。
一濱　すつかりあなたの心もわかつて、わたしや此麼うれしいことはありませぬ。が、それにつけても、此の先々、案じられるはあなたのお身……。
庄五郎　取るに足らぬ小人輩の謀計とは思つても、何かにつけて兩刀たばさむ武士の身がつく〴〵煩はしうなつて來た。
一濱　それでもあなたは親重代、二本差の家に生れ、しかも河野のおかの樣といふ、世に羨しいお許嫁までできまつてあるに。
〽あかし兼ねたる春の夜の、草にも憂きを忘れじと――。
庄五郎　なんの、そんなことは夢のうたかた、さらりと棄てゝ見せもするが、武士はやめても現世には、强く生きたい俺が望みだ。
一濱　そんならあなたは命にかけても……。
庄五郎　必ず生きる道があらうよ。それを命に二人はきツと……。
一濱　きつと見棄てゝ下さいますな。
庄五郎　おゝ。そちこそ俺が命の親。

（と、二人は互ひに強く抱き合ふ。）

おせん　お師匠さん……お師匠さん。

（と、おせんは思はず暖簾から半身をあらはす。二人は離れる。おせんは再びゐッと消える。此の模樣よろしく。）

——幕——

三幕目　河野六郎邸宅

庭に面した河野家の離れ座敷、折から春の夜の朧ろ月が櫻の花の盛りあがつた立木にかゝつてゐる。下手から前面は總て庭先の心よろしく。

その奥の方より上手にかけて板塀がめぐらされ、下手よろしき邊りに三尺の開きがついて出入りになり居る。舞臺の上手は濡れ縁を廻した座敷にて、床の間は高砂の細い二幅對の掛物、花生には時節の桃の花。よろしき邊に娘おかのゝ寢てゐる八丈の二重蒲團、黄八丈の掻卷の上へ唐更紗の中夜着をかけて萠黄天鵞絨の括り枕、おかのはそれに寄りかゝつて惱まし氣な樣子をしてゐる。

違ひ棚には手筥（てばこ）や小引出しのついてゐる針箱などが載せてあり、いくらかの書物も慰めの道具として置いてある。しかしそれもほんの飾り物になつてゐる。よき程に塗骨の行燈があり、それに照らされて目につくのは、塀のあたりから立木を透して太白の絲で繋がれた鞠が緣の端に轉がつてゐることである。

琴唄——古曲の『薄ころも』にて幕明く。

〽あこがれて、おもひねの、枕にかはすおもかげ、
それかとも、かたらんと思へば、夢はさめたり。

おかのが眼をさましたとき、母親のおていは近寄り介抱してやる。

おてい　うと／＼としてゐるやうであつたが、些とは睡られましたか。

おかの　母樣（かゝさま）、もう何時でございませうね。

おてい　まだ六つ半ごろでもあらうか。ほんに待つといふは長いもの、かの、お前も嘸待ち久しからうねえ。

おかの　はい、母樣、ほんとうに庄五郎さまは今宵お見えになつて下さいませうか。

おてい　はて、何のあのお方が嘘を有仰るものではありません。お前が斯う／＼して病（わづ）らうてゐるからと、きんを態々使ひにやつての御返事ですもの、もう間もなう見えるであらう。

おかの　七つのお約束でございましたね。

おてい　今宵は父上がお泊り番ではあり、別に表からの御訪ねでも差支へないとは思つたが、あれ、あの通り太白の絲に鞠をつないでの合圖、それならば森さまも人目にかゝる氣遣ひはなし……したが、かのや、必ずあのそれ鞠の轉がるのを見落してはなりませぬぞ。時は入江町の七つの鐘を合圖に……ほゝゝ、かの、お前が嬉しいのは尤も、此の母でさへ心が浮き／＼するほど待たれてならぬものを……ほゝゝ。

おかの　あれ、そのやうに笑うて見せて下さるのも……皆んな此の身を可愛がつて下さればこそ……そのお心根が身にしみて嬉しうございます。（と、泣く）

おてい　あれ、またしても氣の弱い、泣くことがありますものか。男勝りとまで人に褒めものにされたお前が、こんな大切な時に涙で顏を汚すといふことがあるものか。涙は不吉と云ひますぞえ。

おかの　母樣。濟みません。何事もわたくしが至らないからの事お前の半年あまりの御心勞を思ひ合すれば、もつと／＼確かりとせねばなりません。

おてい　お前の身になつたら、なんの千石取りの福永づれに……と思ふのは尤も、父上が慾心から義理ある許嫁の庄五郎さまを破談にしてもと、あの方へ對しての今迄のなされ方は、お前ばかりではない、此の母も能う承知してゐます。必ずくよ／＼物を案じてはなりません。

おかの　はい、母樣、これまでお前に御苦勞をかけた此の身の不孝は、どうぞ宥して下さいませ。

おてい　なんの、子の苦勞は親の苦勞、それは當然のことではないか。（と、下手を見て）あれ、きんの足音がするやうぢや。あれも自分のことのやうに心から嬉んでゐるところゆゑ、お前が泣顏など見せてはなりません。

おかの　はい。（と、涙を拭き泣顏を直す）

（と、女中のきんが出て來る。）

きん　御新造さま、お孃さま、今日は入江町の鐘がどうして斯うも遲いのでございませう。

おかの　きんや、お前にはいろ／＼御苦勞をかけて濟まなかつたねえ。

きん　なんの、お孃樣、きんはたゞモウ七つの鐘さへ鳴るのを聞けば、それでよろしいのでございます。

おてい　あの庭の閘は明けて置いて呉れたであらうねえ。

きん　はい、それにぬかりがありますものか。したがお孃樣、あなたは此の緣の鞠の轉がるのを見落すと事でございますぞえ。（と、故とからかひ半分に）あれ、お孃樣御覽遊ばせ、鞠がちよつと動いたやうではございませんか。あれ、あれ。

おかの　何のちよつとも動きませぬ。風が吹いたせゐであらう。
きん　あれ、それは櫻の花でございますよ。では、お孃様あなたのお心の思ひで、きんには動いたやうに見えたのでございませう。ほゝゝゝ。
おてい　まあ、きんはほんに人の悪い……ほゝゝゝ。
おかの　あれ、モウ知らぬわいな。
（と、おかのは袖で恥しさに顏をかくす。）
きん　それは然うと、お孃樣、この樣なことをお耳に入れたくはございませんが、庄五郎樣は此の頃都一濱とやら申す一中節の女師匠のもとへ通ひつめてお出でなされるとの事、お目にかゝつたら確かりと申しておやり遊ばしませ。
おてい　これ、きんとしたことが、そんな悪い智惠をつけるものではありません。
きん　いゝえ、御新造さま、あなたまでがその樣にお人をよく遊ばして居ては、大切なお聟樣を賤しい藝人づれに奪られて了ひますわいな。
おかの　いえ〳〵、あの庄五郎さまに限つて決してその樣な浮いたお心をもつてはゐぬ。それにはなんぞ深い譯があるのであらう。
きん　それは、あるに定まつて居ります。殊には誰が見ても、好いたらしい庄五郎さま、浮かうかとお交際ひ遊ばすうち、朱にまじはれば赤くなると、つい、それに心を動かすまいものでもない。
おかの　まア、人を疑ふにもほどがある。きん、忘れてもその樣なことを云ふものではない。（と、此の時七つの鐘鳴る）あゝ、あの鐘は……。
おてい　ほんに入江町の七つの鐘。
きん　さア、こんどこそは嘘ではございませぬぞえ、お孃樣、モウ程なく庄五郎さまがお見えになつて外からあの絲を引くほどに、此の鞠の轉がるのをお見逃しなさいますな。
おかの　あゝ母樣、わたしやどうしよう。（と、顏を掩くす）
おてい　なんの、恥しいことも何んにもない。どれ、ほつれ毛を掻き上げてやりませう。
（と、後ろへまはつて一寸鬢を掻きあげてやる。鐘鳴りつゞく。鞠轉がる。）
おかの　あれ、あれ、母樣、鞠が……（と、乘出す）
おてい　さう動いてはならぬ。お、お、今度こそは庄五郎樣がお見えなされたぞえ。
きん　どれ、早う開きをあけてまゐりませう。
（と、きんは庭へ下り立ち開きを明ける。森庄五郎入る。山岡頭巾、無地の羽織、細かい縞の小袖に脇差は

一本。)

おてい　これは、森様、嘸御迷惑でございませうに、能う早速にお出まし下さいました。

庄五郎　暫くでお庭を拝見いたしますが、咲き滿ちた花の上に春の朧月がかゝつた風情は、何とも申されませぬな。

きん　まあ、どうぞお上り下さいませ。

庄五郎　おゝきん、先程は大儀であつた。(と、座につき) ふとした事より御無沙汰ばかり、(と、思ひ入れ) どうぞ悪う思召して下さいますな。

おてい　その御挨拶では痛み入ります。それはこちらからこそ申さねばなりませぬ。が、日頃主人の無禮をもお怨みなく能うこそお聞き屆け下さいました。

おかの　(丁寧に辭儀をして) 庄五郎様、おなつかしう存じます。

庄五郎　おゝおかの殿、聞きますれば御病ひとの事、此の頃は如何でございます。手前も始終お見舞にあがりたいとは存じますれど……(と、氣を變へて) イヤ、病ひは氣からと申しますれば、何よりも氣を強うお持ちなされませ。庄五郎心からそれを祈つて居ります。

おかの　有難う存じます。(と、さし俯向く)

おてい　これ、きん、何はなくともお仕度を……。

庄五郎　いや、お構ひ下さるな。

きん　あなた様が構ふなと有仰られても、こちらは捨てゝは置かれませぬ。が、森様、この頃は乘物町の伏見屋で一中節にお凝り遊ばしておいでとの評判、いつもお孃様とその事ばかりお噂申し上げて案じてをります。

おかの　これ、きん、……失禮なことを……。

きん　いゝえ、わたくしが申し上げるに何の差支へがございませう。森様は御器量人ではあり、藝事はお出來遊ばす、どちらへ參つてもお羨しい方様が、たゞその儘には……。

おてい　これ、きん、早う仕度を……。

きん　はい。(と、おかのに目顔で) お孃様、よろしうございますか。(と、念をおして入る)

おてい　つい、お心易立てを申上げて……失禮の段はお氣にさへて下さりますな。

庄五郎　いや、いや、決して左様なことは……きんはなかなか忠義ものでござりまするて。

おてい　庄五郎様、何からお詫びいたしてよいやら、貴方には何とも申譯がございません。

庄五郎　これはまた、改まつてのお言葉、實はお約束いたしたは亡き老婆と貴女との云はゞ女の口約束、結納を取替したと申すではなし、六郎殿のお氣に入らぬ緣を結びましても、末始終よいことはございません。何うか他に

良緣の御仁があれば、そこへ御緣づきは下さるまいか。さすれば庄五郎の身の上も安泰、又おかの殿の孝道も立たうかと存じます。

おてい　あなた樣のそのお言葉は能う解つては居りますが、いつぞやの大洪水に娘もわたくしも一命をお助け下された貴方の御恩、その節は主人六郎も承知の上で取結んだ約束でございますから、今更否應申すは云はゞ此方の勝手と申すもの、主人は何と申しましても、娘もわたくしと亡き祖母樣へ堅く誓へたお約束は此の儘反古にはいたされませぬ。

おかの　申し、庄五郎樣、此の上貴方の御身の上に御災難がかゝらなければ、かのは一生奉公いたしてなりと、必ず操は立て徹す決心をいたしました。

おてい　娘の心を不愍と思召して下さつたら、主人の變替へをお咎めなく、縱令此の先き貴方樣は御新造をお迎へ遊ばしても、せめて心の中だけでも、かのを女房と思召してやつて下さいませ。

おかの　それも御無理にとは申されませぬが、その替り先刻きんがはしたなく申上げた一濱さんとやら云ふお方を奧樣にお迎へ遊ばして……。

庄五郎　いや、それはまた別儀の譯、都一濱と申すものは手前が目を懸けますゆゑ、何か不品行とも思召すかは知れませぬが、あれは仔細あつて拙者が命を救はれた女、今となつて無碍に見棄てる譯にはまゐりませねど、おかの樣がその御決心で奉公をしてまでも貞操を立てゝ下されば、私も生涯女房は持ちません、亡き老婆に對しても他から貰つては濟まぬことでございます。

おかの　庄五郎樣、よう有仰つて下さいました。お嬉しうございます。

おてい　これでかのも、縱令病ひが重つても決して思ひ置くことはございますまい。わたくしは其お言葉だけでも有難いことゝ存じます。

庄五郎　何の、庄五郎も男の意地、あなたが然う有仰つて下されば、おかの樣を福永づれの女房にさせたうはございません。

おかの　では、こんな不恙者でも女房と思召して、生涯離れて暮しても……。

庄五郎　心に刻んで忘れませぬ。

おてい　おゝ恰度よいとこへ、きんが銚子を持つてまゐりました。(と、此時おきんの運んできた銚子を把りあげ)さ、何はなくとも一寸お盃の眞似ごとを……かのからお受け遊ばして……さ、かの、頂いて庄五郎さまへ。

おかの　あい。これがあの世までも……夫婦のかための。

庄五郎　では、おかのさまから頂きませう。

おてい　心ばかりの三々九度、母の勸めはこれで濟み、こんな嬉しいことはございません。

きん　ほんにお目出度いことでございますな。

(と、よろこぶ處へバタ／＼と不意に下女のおりきが慌てゝ出て來る。庄五郎は逸早く二枚屛風の蔭へかくされる。)

おてい　これ、りき、此處へは今宵きんの他はまゐることはならぬと申付けて置いたに……慌しいその樣は……何事か起つたのか。

りき　はい、まゐつてならぬことは能う存じて居りますが只今若黨の勘藏どのがお歸りで、樣子を聞けばお泊り番の旦那樣が、直ぐ後からお客樣をお連れ申して御歸宅とのことでございます。それで、一寸、お知らせ申しにまゐりました。

(と、云ひ棄てゝ下女は直ぐ去る。あとで皆々大狼狽の態。殊にきんはお膳部を慌てゝ片付くることなどよろしく。)

おかの　おゝ母樣、何よりも先づ庄五郎さまの御難儀にならぬやう……。

おてい　然うぢや、きん、それよりも早う森樣を最前の開きから御案内申しや。

庄五郎　いや、それには及びませぬ。勝手はよく存じて居ります。では、いづれその内御緣もあらば、また重ねて……(と、立上り庭口へ出る)

おかの　あゝもし、庄五郎さま……。

おてい　またの日首尾してお知らせ申せば、ゆるりとお出で下さりませ。

庄五郎　では御機嫌よろしう……。

(と、開きを明けて出て行く。皆々見送り、安心するかしないうちに、塀の外で物々しい騷ぎが起る。聲は主人の河野六郎である。あとからは池邊小藤太と若黨勘藏がつゞく。)

六郎　狼藉者だ、取押へろ。

庄五郎　いゝえ、左樣なものではございません。

小藤太　何者だ！

六郎　勘藏、よく馳せつけた。庭の内へ引き据ゑろ。(と、森庄五郎再び引戻される)

庄五郎　いゝや、河野氏、拙者でござる。怪しい者ではござらん。森庄五郎でござる。

六郎　なに、森？

小藤太　うむ、貴樣は庄五郎だな。

庄五郎　いや河野氏、飛んだ所でお目にかゝり面目次第もござらん、どうぞお見逃しを願ひたい。(と、小藤太には目も呉れずにいふ)

六郎　（思ひ入れあつて）　拙者は森氏とは存せん。貴公も弱年ながら役柄をも勤める身で、何ういふ譯で手前邸宅の庭口から忍んでお出なされた。その上假令お屋敷中と雖も一刀でまゐるとは何事ぢや。さア、役所へお出でなさい、そしてその上で申譯をするがよい。

小藤太　成程、これは河野氏のお說が尤も千萬ぢや。森なれば武士ゆゑ帶刀をしてゐる筈、左樣なことを申して此奴名をかたる賊かもしれませぬ。（と、態と罪に落さうとする）

おてい　いゝえ、それは違ひます。森樣は今宵、かのの病氣見舞に來て下すつたのでございますが、庭口の方が近道と申して只今お出し申したので……これ勘藏、森樣を押へて何とする。お放しなさい。

勘藏　へい。（と、へどもどする）

六郎　いゝや、放してはならぬ。

勘藏　へい。（と、また手に力を入れる）

おてい　失禮な、お放しなさい。

勘藏　へい。

六郎　主人の云ひつけだ。放してはならぬぞ。

勘藏　へい。エ、どつちに致したらよろしいのでございます。森さま、何とか有仰らぬか。

庄五郎　いや、實は手前通りかゝり、お庭の櫻があまり見事に咲き滿ちて居りますので思はずお立寄りいたしました處、開きの掛金が外れて居るのを見て是は無用心と存じ、一寸お知らせ申さうと……。

六郎　お默りなさい。前町の町人共の云ふやうな言譯は聞きませぬ。どうでも賊として役所まで引立てる。さツ、おいでなさい。

おかの　（前へ出て）　まあ、お父樣お待ち遊ばせ。只今承はれば森樣を賊だとか役所へ引いて表向きにするとか御意遊ばすが、情けないことを有仰るではございませんか。森樣が妾の病氣見舞にお出で下さつたことは、母樣と妾とが證人でございます。

六郎　それならば何故表玄關から出入をせぬ。

庄五郎　いゝえ、全く、庭中の櫻を拜見に……まゐりましたので……よろしい、お引き下さい。

六郎　えゝ云ふまでもなく引立てる。

おかの　あれ、お父樣、あなたがそんな事を有仰れば、妾も一緒に引かれてお役所へまゐり、立派に申開きをいたします。實は婚姻のお約束も延々になつて居りますゆゑ、妾が母樣に無理にお願申して、森樣をお招び申して戴いたのでございます。

六郎　そ、そんな詰らぬことを云つては困るではないか。森氏と婚姻の約束などいたした覺えは毛頭ござらん。

おてい　またあゝいふ白々しい事を有仰る。忘れもせぬ寛延二年巳年秋九月の大洪水に、貴方は恰度御歸國中、わたくしと娘は庄五郎樣の手に辛くも助けられ、それが御緣で森樣のお祖母樣とお約束をなすつたのをお忘れでございますか。それでは餘り義理知らずでございます。

おかの　お父樣、あなたはなんで其樣に森樣をお憎み遊ばします。

六郎　いや、別に、そちとの關係さへ蹉張りいたせば、好んで憎む譯ではない。有樣は百石ばかりの痩せ細つた小祿者よりは、千石取りの立派な聟金をそちの爲めに選んでやりたいばかりぢや。慾を知らぬは當世でない。

庄五郎　いや、河野氏のお言葉は拙者にもよく解つてをります。(と、男らしく覺悟を示す)

おかの　したがお父樣、情けと義理を知らぬものは誠の武士とは申されますまい。(と、涙を呑んで)さ、森樣に能くお詫びを有仰つて下さいまし。

六郎　いや、詫びなど申す譯はない。

おかの　いゝえ、ない事はございません。それなら妾が森樣と御一緒にお役所へ出ませうか。

六郎　そんなことを言つて、病氣屆けがしてあるではないか。

おかの　そんなら、森樣にお詫びをなさるか。

六郎　いや、困るね、お前にも……はい、申しますよ。イヤナニ森氏……誠に然ういふこととは心付かず、全く家事不取締にならぬやうといふので……娘が病氣につき、殊に夜中お見舞下され有難く、またあらぬ咎め立ての段は幾重にもお詫び申す。(と、皮肉を含みて詫びる)

庄五郎　いや如何いたしまして……その御挨拶では、甚だ恐縮仕ります。

六郎　さ、その代り今夜限り、河野の閾は一切踏んで貰ひますまい。(と、きつぱり云ひ渡す)

庄五郎　はい。(と、思入れあつて)その義は改めて有仰られるまでもなく、不肖ながら森庄五郎、能く心得て居ります。

小藤太　と、口では覺悟のよさうな事を云つてゐるが百石足らずのふち米も、此の間市村座の狂曾我といふ中幕狂言へ頼まれて、出語りを勸めたとやらの一件で、涓付け津輕家は追つ拂はれることに極まつてゐるのだ。そうして可哀やおかの樣は福永忠之丞樣へお嫁入り、及びもつかぬ高嶺の花、見れば見るほど不憫な面だ。

庄五郎　これ、小藤太、己れの尺度で他をはかるとは貴樣のこと、足らずのふち米に離れたら無驚くと思ふだらうが、もとより此方は覺悟の浪人、望みは天下晴れての自由、さればこそ屋敷内を今宵も無腰で歩いたのだ。それ

に引替へ百石はさて置いて、五十石でも慾を道づれ、朋友(ともだち)を賣る諂(へつら)ひ武士、口を利くのも穢はしいわい。

小藤太　えゝツ、追放されゝば素町人、その分際でよくもよくも……。（と、口惜しき思入れ）

庄五郎　はゝゝそれでも貴様は人間並みに、口惜しいと云ふことを知つてゐるのか。いくら拳を固めても、恥を知らぬは武士ではないぞ。

小藤太　うぬ、何を……。（と、意氣込むを六郎押へる）

六郎　はて、引かれ者の小唄も同然、まことの武士が相手にいたすところでない。

庄五郎（獨語の如き調子で）まことの武士も今宵限り、もうお目にはかゝりませぬ。おかのさま……いづれもさらばでございます。

（と、思ひ入れよろしく入る。皆々名殘り惜しき表情にて見送る。おかのは其場に泣き崩折れる。母とおきんは介抱する。）

六郎　これで此方も隆張りいたした。勘藏、その開きを堅くしめて、猶要心を怠るな。

勘藏　はい、かしこまりました。

小藤太　さア、此の上はおかの樣、三國一の聟金何不足ない福永忠之丞樣と、早速結納のお取交せをなされたがようございます。

六郎　それこそ望んでもない良緣、これ、かの、喜べ、庄五郎との約束が破談となれば、もう誰憚るものもない。そなたは日ならず重役樣の御家內樣、日本一の果報者とはそなたのことぢや。

（と、此時まで、母やおきんに勦はられて床の上に戻つたおかのは括り枕に額をつけて、打伏になつてほろほろと泣いてゐる。池邊は彼女に近づいて。）

小藤太　おかの樣え……お孃樣え、今日といふ日は何といふお目出度い日でございませう。實は拙者、御重役笠原主膳樣並びに忠之丞樣の親御忠太夫樣のお頼みで、河野氏とあなたの御婚姻の段取萬端を御相談にあがつたのでございます。もしおかの樣、一寸お起き遊ばせ、もし………。

おかの　はいッ！

（と、勢ひよく矢庭に起直つて、膝の上に手をつき池邊小藤太の顏を穴のあく程見詰めてゐる。）

小藤太　もし、おかのさま、どうか遊ばしましたか。

おかの　はゝゝ、（と、急に笑ひ出して）此の人は……此の人はまア武士の癖に、なんといふ諂ひ者だ。（氣を替へて）それでも、男前は立派に見えるねえ……あッは……。

小藤太　これは驚いた。どうも怪しからん。武士たるものを面罵嘲弄いたすとは……。

おかの　おや〳〵急に怒り出した……お前は誰だえ、えゝお前は誰だえ？　隱さずに云つてお了ひと云ふに……。
小藤太　手前は……エ、池邊小藤太……いやはや、どうも怪しからん女があつたものだ。
おてい　これおかの、確かりしなくてはなりません。お前は池邊樣が分りませんか。これおかのどうしたのだえ。
おかの　いゝえ、わたくしの身の上については、誰方が何と有仰つても……（と、急に悲しさうに欷歔て）あゝ、あゝ、モウ〳〵取りかへしがつかない。すつかり脫殼になつて了ひました。（と、とゞ聲を振り絞つて泣く）
きん　これ、お孃樣、確かり遊ばせ。あなたの好きなきんでございます。お孃樣……。
おかの　おゝお前はきんか……（と、ニタ〳〵と急に微笑をふくむ）ねえ、きん！　聞いてお吳れ。
きん　はい、はい、何んでもお聞き申しますとも、嬉しやきんがお分りでございますか。御新造樣、お孃樣がお氣がつきました。
おかの　（徐ろに立上り）　その時よしつね、少しもさわがず――（と、仕舞のやうな素振りで）何と云つても唄を謠つては庄五郞くらゐの者はありません。わたくしが庄五郞に緣付いて……鹿毛の馬に乘り、緋をどしの鎧を着て、あツ、さうだ、奧方樣から御拜領の蒔繪の柄の長刀を……（と、長押からそれをおろして小脇にかゝへて、前方を睨みつゝ意氣込む）
六郞　（驚いて）　あツ困つたものだ、氣が狂つたと見える、これ、おかの、何とするのだ。これ……。
（と、抑へようとするとその方を切り拂ふ。）
おてい　これ、きん、早く醫者を呼んで來ておくれ。おかのは、おかのは……氣が狂つて了つた。
おかの　あゝ此の人は泣いてゐる、あゝ泣いてゐる……（と、母の顏を見詰めながら）わたしも、また泣きたくなつた。おほゝゝゝ。（と、泣く眞似をして再び歔欷る）
六郞　池邊氏、いやはや困つたことになつて了うたわい。
小藤太　これでは如何に忠之丞殿が御懇望でも、當分御婚姻は運ばれさうにも思はれませぬな。（と、囁き合ふ）
おかの　あゝまたひそ〳〵と惡いことをたくらむに違ひない。えゝ、おのれ、おのれ、思ひ知れ。
（と、長刀を振り廻し暴れ廻る。皆々弱り果てる。）
おかの　あツ、はツ、あはゝゝゝは侍の癖に弱蟲ばかりが……はゝゝゝ。
（と、とゞ長刀を投げ出し腹をかゝへて笑ひこける。）
此の模樣よろしく。）

――幕――

四日幕　萩江露友侘住居

舞臺は瀧河岸なる萩江露友（森庄五郎が藝人になつた名）の侘しい假寓で、下手寄りの奥に向つて格子戸の出入口があり、框をあがると小間を中にして下手は道具類すべて取散らした所謂世話場模様の臺所、上手本舞臺は八疊位の座敷、殆んどこれが一間きりかと思はれるやうな拵への家で、座敷の上手に小さい長火鉢、出入口の側の茶壁のところに三味線がかけてあり、見臺も稽古臺も臺所道具のお膳までが混雜にそこらへ置いてある。その他には上手前面に小さな附屋臺があるが、ガランとして何の飾りもない貧しい態があらはれてゐる。初め幕の明いた時附屋臺の前面には、伊豫簾がおりてゐる。

時は寳暦七年初秋の或る日、まだ殘暑で團扇づかひをせずにはゐられない時候である。

長火鉢の前にはお傳、下手には幇間の和八が話してゐる體で幕明く。

お傳　まア、そんなことをしてゐたつて、ほんとに終ひにや首でも縊らなきやアならないやな。

和八　だから、あッしも心配はしてゐるんでげすがね……

……。

お傳　ゐるんでげすがね……が聞いて呆れるよ。和八さん、お濱は兎も角も、お前さんだつて然うぢやアないか。いい年をしてさ、萩江露友だなんて云つたところが、ほんの道樂から駒の出た……云はゞ素人あがりの藝人を、お師匠さんだの太夫さんだのと云つてさ、よくも此麼貧乏世帶に居候がしてゐられたものだわねえ。

和八　居候はひどいぢやアありませんか。あッしだつて滿更お濱さんや太夫の脛ばかりを嚙つちやアゐやアしませんよ。

お傳　だからさ、だから猶お前さん、馬鹿々々しいぢやないかね。先代の數あるお弟子の中でも、それやア運のいい富士田吉次なんてえ人は芝居小屋の藝人になつて羽振りを利かしちやアゐるさ。けれども、順序から云やアお前なんざ、古參の中の古參で通る面ぢやアないか。

和八　そ、そんなことを云つたつて時勢だから不可ませんよ。師匠だから云ふんぢやねえが、それア先代の名人和中と云つちやア、唄うたひの仲間ぢやア飛ぶ鳥も落す腕をもつてゐたが、今時の奴等にやア、どういふものか、あッしやア頭を下げる氣にならねえのさ。

お傳　ぢやア何うして素人見たやうな露友にやアお辭儀が出來るんだい。長い間幇間なんぞをしてゐると、藝人も根性が腐ると見えるねえ。

和八　え、な、なんですツて……？　もう一ぺん云つて御覧なせえ、先代のおかみさんとは云はせませんぜ。

お傳　おや、おや、おや……和八さん、お前さん、御大層なことをお云ひだねえ。

和八　云はねえでどうするものだ。先代師匠がどれほどお前さんの爲めに藝人の壽命をけづられたか、また一濱さんだつて然うだ。お前さんのやうな碌でなしの繼母をもつたばかりに、どんなに泣きを見たか知れやアしねえ。

お傳　だがね、あの子の手足をあれだけに大きく延ばしたのは、誰のお蔭だかお前さん知つておいでかい。弟子の癖に大きなことを云ふと承知しないよ。

（と、お傳は、煙草の吹殼を自暴に灰吹へたゝきつける。その騷ぎの物音に一濱は附屋臺から飛び出して來て二人を止める。）

一濱　まア、なんだねえ阿母さん、こゝはあたしの家ぢやアない、荻江露友さんのお住居ですよ。

お傳　荻江露友さんのお住居……？　ヘン、大した藝人のお住居だ。江戸も廣くなつたもんだねえ。（と、煙草の烟を輪に吹いて空嘯く）

一濱　それに、和八さんも和八さんぢやアないか。然うでなくともお師匠さんの氣分の勝れないのを知つてゐながらさ。

和八　へい、どうも濟みません。あツしも此の頃妙に氣が短かくなつて……むしやくしやしたものですから、へい……。（と、氣を和げて頭を搔く）

お傳　和八さん、お前さんもお年のせえで、モウそろ／＼燒きが廻つて來たんぢやアないかえ。

和八　なんだと……。

一濱　まアさ、いゝから默つておいでと云ふに……。また阿母さんも阿母さん、いくら口に稅金がかゝらないと云つて、些とは謹んで異れるがいゝぢやアありませんかね、え、用があるんなら家へ歸つて聞きますよ。

お傳　お濱よくお前そんなことが云へたねえ、あたしに孝行が出來ないから、此の鎧河岸に露友さんを住まはせると、口前だけは體のいゝことを並べて置いて、今ぢやア私一人を乘物町へ置いてけぼりも同じこと……これぢやアお前旦那衆の人氣も落ちる筈だよ。いゝえさ、一中節も廢る譯だ。愚圖々々してゐりやアロが干上つて了はアね。

一濱　まア、そんなにガミ／＼云はないで……靜かに話しても譯は分りますよ。

お傳　ところが分らないから偶にやア斯うして大きな聲も出したくなるのさ。森庄五郎と云つて縱令百石足らずでも、ふち米のついてゐた時は時で旦那筋だが今はなんだ

い云はゞ藝人の出來そくない。お前が引かれて出入をしてゐれば、大なり小なり注ぎ込むばかり、埋つた話ぢやアありやアしないよ。それでもお前に腕があつて、たつた一人の此の親を左團扇で立過してお呉れなら、わたしや何んにも云やアしないがねえ。

一濱　まあ、阿母さん、お前の云ひ方は一體どうしろと云ふのですねえ。

お傳　然うさ、まア、お前がこんな貧乏くさい露友さんなんぞとはスッパリ切れて、いゝ旦那取りでもして樂をさせて貰はにやアねえ。

和八　えゝッ、忌々しい、これが都和中とも云はれた人の女房かと思ふと此の腸が煮えくり返るやうだ。一濱さんお前があんまり温和し過ぎるからだ。

一濱　まア／＼、和八さん、お前さんはあつちへ行つて……お師匠さんがお目を覺ましてゐるかどうか……また御用があつたら伺つておくれ。

和八　だと云つて、此のまゝぢやア……。

一濱　まア、いゝからさ、然うしてお呉れと云ふにさ。（と、和八を目顏でなだめる）

（和八は癪に障つた表情で上手へ入る。）

一濱（手を合せて）ねえ、阿母さん、どうぞあたしを助けると思つて……今更露友さんに不人情の出來ないあたしなんだからさ。

（と、聲をひそめて賴む如く云ふ。これを聞いてお傳は初めて向き直つて語調を落しながら。）

お傳　だから私の云ふ通り、あんなに御親切な鐵砲洲の親分があれ程云つて呉れてゐるんだからね……。

一濱　あの上總屋文藏といふ元締の……。

お傳　然うさ、お前が默つて云ふことを聞かなきやア、伏見屋の家は立ちはしないよ。

一濱　……（默つて俯向いたまゝホロ／＼と涙をこぼす）

お傳　なんだねえ、お前だつてもう十七や十八の子供ぢやアなし、そんなことで藝人の情夫の一人も持たうなんて、お前世間を知らないにも程があるよ。

一濱（決心をして）阿母さん、お前の云ふことは能くわかりました。

お傳　それぢやアお前、文藏親分の云ふことを聞いて呉れると云ふんだね。

一濱　まア、しづかにして下さいな。（と、始終氣をくばつて）その替り阿母さん、あたしの氣儘もさせて下さい。

お傳　あゝいゝともさ、それ位の氣前がなくつて、藝人がお前いけるものかねえ。（と、打つて變つてやさしく輕薄に云ふ）さ、こんな事に泣いて騒いでどうするんだね、氣の弱い子だよ。それに間もなく親分が見えることにな

つてゐるんだ。……まだ殘暑がはげしいから、どこか涼しい處で、御飯を御馳走して下さるんだとよ。

一濱　（驚いて）それぢやア今日これから……いゝえ阿母さん、それだけは宥して下さいな、まだ師匠だつて氣分が惡いと云つてゐるんですからさ。

お傳　なアに、お前そんなことが……なんだねえ、あたしはまたそれ程ねんねえだとも思つちやアゐなかつたよ、ほゝゝゝ。

（と、これより先き一濱とお傳がシンミリと語り合ふあたりから上手の部屋で、爪彈きかと思はれるやうな寂びた唄三味線が聞える。それは露友が工夫を凝らしてゐる『おもひ寢』といふ新曲である。）

〽かぎりある身のかぎりを知らで、かひもなき世をうちなげきなんの因果に娑婆へ來て、生きて添はるゝ身ではなし、とは恨みかくは云ふものおもひ寢の……。

一濱　まア、阿母さんの騷々しい……。（と、聽耳を欹つ）

お傳　あれは露友さんかい。

一濱　よつぽど機嫌が直つたと見える……あれが此の節何もかも忘れたやうに、工夫を凝らしてつけてゐる『おもひ寢』といふ新曲ですよ。

〽たゞすの水のおゝそれよ、戀せじものといふだすき、かけぬ日もなき神いのり。

お傳　うむ、あれがかい。成程ね、おつに澁い節はついてゐるが、まだ／＼あんな弱い調子ぢやア江戸中の人氣はむづかしからうねえ。それにつけても男一疋の藝人が世に出るまで、お前獨りの細腕ぢやア……。

一濱　あれ、しづかにしてお呉れッつてば。

お傳　あいさ。（と、氣のない風で煙草をふかす）

〽うけばと神の、心まかせと捨て言葉、浮氣も實のよそごとに、つじつまあはぬ氣がねより、れいの合の手、かざし木のはし、通ふなら夜のしんきぼし。

（と、唄のうちに表にて案內の聲がする。先刻からお傳の話の鐵砲洲の上總屋文藏といふ元締が三芝居の森田座の太夫元倅若太夫と立唄の富士田吉次を伴ひ訪れたのである。）

お傳　あゝきつと、文藏親分に違ひないよ。

（と、お傳は立つて門口へ行く。一濱は浮かない苦い表情で猶も唄に聞惚れてゐる。皆々捨臺詞よろしくあがる。）

お傳　ほんとに親分でしたねえ。まア、づッとこちらへ……お濱もお噂をしてお待ちしてゐたんですよ。お濱や、鐵砲洲の元締さんだ。御挨拶を申しあげないかね。

文藏　なアに、そんな改まつたことは入らねえ。だがね一濱さん、今日はお前さんがこちらにお出でだらうと察して、珍らしいお客をお連れ申したんだ。こちらは芝居町で名高い森田座の若旦那で若太夫さん……これが名人和中の一人娘で一濱さん。これが阿母さん。

若太夫　何分よろしうお願ひ申します。

一濱　これは〳〵お初にお目にかゝります。能うお出で下さいました。

お傳　まア、どうぞ、ずッと此方へ……。

若太夫　今日は元締さんが是非にと有仰つて下さるものですから遠慮もなくお邪魔にあがりました。どうぞ、お構ひなく。

文藏　そこで、そッちの方に恐れ入つてお辭儀をしてゐる人は……はゝゝゝこれは馴染も馴染、先代から緣故の深い……。

お傳　おや、お前さんは吉次さんぢやアないか。まアお珍らしい。ほんとに黒い羽織の着られる立派な藝人衆におなりだから、すつかり見違へて仕舞ひましたよ。さ、ずつとお進みなさいな。

吉次　いえ、もう、然う有仰られると……何ともはや、顏から火が出るやうでございます。それでも一濱さんもお立派に御成人で、こんな喜ばしいことはございませんよ。

一濱　お初にお目にかゝります。妾が都一濱といふ家元ではありますが、ほんの名ばかりのしがないものでございます。何分よろしくお頼み申します。

吉次　いや、お孃さん、あなたに然うきちやうめんに御挨拶をされちやア……わたしは先代師匠の一方ならぬ御厄介に預つた吉次と申すものでございますが、平素は思ひながら御無沙汰ばかりで、まことに閾が高うございますよ。（と、揉手をする）

一濱　いえ、そんなことは妾は些とも存じませんので……父は父、わたくしはわたくし、未熟者ですからどうぞよろしくお願ひします。

若太夫　いや、有繫（さすが）は女ながらも名人和中さんの後つぎだけあつてお生れがらが違つてゐる。元締さん、能く連れて來て下すつた。

文藏　然う云はれると何だか斯うおつう鼻が高くなるが、阿母、今日は露友さんはお家に居なさるかね。

吉次　元締さん、留守と有仰つてもあの唄三味線が承知しませんよ。
若太夫　まだ聞いたことのない新しい節附けだが、吉次さん、お前さんが睨んだゝけあつてなか〳〵御熱心なものですねえ。
文藏・實はね、今日は是非その露友さんに逢ひたくッて斯うして三人がやつて來たんだが、何とお前が橋渡しをしてお呉んなさるめえかな。
一滴　いゝえ、それは駄目でせう。師匠は此の頃引籠つて新曲を附けてゐなさるので、決して商賣仲間の方にはお目にかゝりませんから。
吉次　それぢやア此の儘歸れと有仰るんでございますか。
露友　（伊豫簾の中から）いゝや、荻江露友、折角お出で下すつた皆樣に是非お目にかゝりたう存じますよ。
（と、三味線を抱へたまゝ伊豫簾捲きあがる。和八が露友の傍により囁く。）
和八　だが太夫、あの富士田吉次はよくない事があつて先代から破門された男ですから、あんまり親しくなされねえがようがすぜ。
露友　まア、そんなに心配しないがいゝと云ふに。
（と、露友座敷へ來る。和八もつゞく。）
露友　これはお初にお目にかゝります。手前が露友、まだ嘴の黄ろい、ほんの駈け出しの藝人でございます。以後よろしくお引きまはしを願ひます。
吉次　これは丁寧な……手前が長唄の富士田吉次。
若太夫　わたくしが森田座の太夫元でございます。
和八　へい、若旦那、お久し振りで御機嫌よろしう。
若太夫　おや、和八さん、お前さん暫く劇場の方に見えないが、いつも丈夫で結構ですね。
文藏　時に露友さん、早速だが、お前さんだつていつまで斯うやつてくすぶつて居たつて、云はゞ寶の持ち腐れ、どうだ一番改めて芝居小屋へ出なさる氣はあるまいかねえ。
吉次　憚りながら、手前が立てを唄つてゐますが、決して惡いやうには致しませんから、お前さんにわきへ坐つて貰ひたくッてやつて來ましたのさ。
若太夫　實はわたくしどもの劇場も此の秋はがらりと顔ぶれを變へて、高麗屋の親方松本幸四郎が三代目團十郎を襲名して、幸藏が幸四郎に名前替へをしようといふ大切なかき入れ興行、それにつき何と云つても當節では唄がしつかりしてゐませんぢやアどうも思はしくないので、吉次さんとも相談の上當つて砕けろでやつて來ましたがどうか花々しく出てやつては下さいませんか。
文藏　露友さん、聞けばお前さんも、武士から藝人に身を

落したのも、初めは芝居小屋で頼まれて唄を謡つたのが原因でよくない讒言にあつたとやら、その復讐に今度は一番江戸中の人氣を湧き立たせて見ちやア どうだね。

（と、煽り立てゝすゝめる）

露友 ……（たゞ眤と默り込んで考へてゐる）

和八 いゝえ、それア不可ますまい。うちの太夫は藝人に身を落したとは云ふものの腹の底はどこまでも武士、それに今まで一濱さんの世話にもなつて斯うして零落た生活はしてゐるものの、荻江節の一派を開く決心でゐなさるところだ。然う申しちやアなんだけれど、富士田を名乘る吉次さんのわきにやどツち道坐り難うございませうよ、ねえ一濱さん、そんなものぢやアございませんか。

一濱 とは思ひますが、そこは師匠のお考へで、あたしなんぞの口を入れる幕ぢやアなからうと思ひますよ。

和八 だが、これ迄の苦心を思へば、今更になつて腹にあげ底の多い藝人仲間へ、この儘頭をさげてもねえ。（と、言外に意をふくめて言ふ）

露友 （憤然と眼を開いて）いや、然うでない。大小カラリと投げ棄てゝ藝人仲間へ入つたからは、もとより苦勞は覺悟の上、和八、一旦の意地を棄てゝも意地を立てるが眞實の藝人といふものぢやアなからうか。

和八 へい。ぢやア師匠お前さんは、皆んなのすゝめる言葉について……あの吉次さんのわきにたつて……。

露友 然うだ、わきは扨て置きながれへでも坐つて修業をするつもりだ。

一濱 えツ、では今迄夜の目も寢ずに、荻江の一派を開くといふ、あの決心も打棄つて……。

露友 いや、打棄るのぢやアない道筋だ。默つて考へる時も過ぎた。これからは實際の力で踏み開くのだ。

和八 でも折角の今までを……此の儘に中折れするのは惜しいものだ。太夫、あツしも今迄浮世の義理で身過ぎに笑つて幇間はして來たが……お前さんばかりにやア……エ、こんな口惜しいことはねえ。（と、涙を絞り出して泣く）

露友 いや、和八、お前の意は嬉しいが……いくら自由の身になつても、藝人だつて蟲けらぢやない。飯を喰はずに生きちやア行かれなかつたのだ。はゝゝ。

若太夫 これは立派な師匠の御決心だ。

吉次 やつとわたしも、大安心をいたしましたよ。

文藏 然うと定まれば、俺もいゝ面役になつたといふものだ。なア阿母、これでお前も娘の肩から重荷をおろした氣がするだらう。

お傳 ほんとに元締さんには厚く御禮を申さなくツちやアなりませんねえ。それでも露友さんが然う覺悟をつけて

下さりやア私も大安心でさアね。當節の藝人衆はなんぼ腕がいゝからつて、くすぶッてゐちやア人氣か引立ちませんよ、ねえ。へゝゝゝ。

若太夫　（吉次が目顏で知らせるので）　時に露友さん、手前劇場へ御出勤も快よく受けて下さつたお約束の證しにほんの手附としてこれをお納め下さいまし。（と、懐中から若干の金包を出して渡す）

露友　では、遠慮なく頂戴いたします。和八、矢立でも持つて來てお吳れ。一寸受取のお證しを……。

若太夫　いや／＼、それには及びません。生證文がこんなに大勢ございますから。

露友　左樣でございますか。（と、受取つて、直ぐにお傳の前へ置き）阿母さん、改めて此の金子はあなたのお手元へ……。

お傳　うむ、ぢやア露友さん、これを此の儘わたしの方へ……まア、それは濟まないねえ。お濱や、お前からもよくお禮を云つて下さいよ。

一濱　あれ、でも、そのお金は……（と、もじ／＼する）

お傳　なんだねえお濱、そんなことを云つちやア水臭くなるぢやアないかねえ。（と、追從笑ひする）

露友　これからも荻江露友が今迄世話をかけた御恩返し、身體で生み出す金子だけは必ずこなた親子に進ぜますから、甚だ我儘のやうで云ひ難いが、暫く一濱も此の假住居へは足を遠退いて貰ひたい。

一濱　え、何と有仰います。

和八　あの一濱さんに……それアあんまり没義道と云ふものでございますよ。

露友　いや、此の儘切れろのなんのと云ふではない。が、ちと感ずるところあつて、今日より藝道に精進する荻江露友、煩はしいことは一切耳にしたくないからだ。一濱わしが勝手は宥してくれ。

一濱　でも、それは、あんまり……お氣の強い、阿母さん……お前は……お前はあんまりな人だ。

（と、母に向ひ恨みを云ひながら打伏して泣く。）

お傳　なんだねえ、それが何も、わたしの知つたことぢやアなし……罪を此方に……まア厭な女だねえ。

和八　お師匠さんは優しい方だが、一旦斯うとお心を決したらなか／＼堅うございますから、また折を見てわたしも能くお願ひ申して置きますからね……（と、一濱を勸はり慰める）

文藏　しかし、露友さんが潔く出勤して吳れることに極まつて、こんな大喜びはありやアしない。その上お濱さんまで斯う早く……。

一濱　え？（と、うらめしさうな表情で面をあげる）

文藏　なにさ、廣い世間だ。然うくよ〳〵しなさるもんぢやアねえと云ふ事さ。どれ、それぢやアお暇といたしやせうかね。
吉次　ほんに然ういたしませう。いや、一寸伺つて……。
若太夫　飛んだお邪魔をいたしました。
露友　これは、お粗忽をいたしました。
文藏　それぢやア阿母……（と目顏で知らせ）晩にやア夕涼ながらどこかへ行つて、御飯でも喰べようぢやアねえか。
お傳　そこで何かと相談を……イヤ私もこれでお暇しよう。お濱、後から直ぐお歸りよ。
（と、皆々挨拶よろしく花道へ入る。門口へ出た時、揚幕から河野の下女おきん、包みものを持ち出て來る。花道附際にて皆々と擦れ違ひ、「森庄五郎のお宅はあれでございませうか。」と聞く「森庄五郎と云へば露友さんの昔の名だ、あゝあの家だよ。」と敎へられ、門口へ來て伺ふ）
和八　もし、師匠、一濱さんツてば！　いつまでそんなにしてゐたつて仕樣がねえ、さ、誰か人でも來ると見ツともないよ。
一濱　だつて、和八さん、意氣地なしだから仕方もないが……あたしや露友さんに愛想をつかされたんだ。（と、思ひ迫つて激しく泣き出す）
和八　仕樣がねえなア……ね、もし、師匠、一濱さんの此の心根をお察しなすつて、何とか今一度思直して下さる譯にやア行きませんかえ。
露友　和八、お前に然う云はれるまでもなく、私もあんまり心持のいゝ話ぢやアないんだが、今度ばかりは聞き分けて俺の意地も立てさせて吳れ、今迄でさへ澤山なところへ、またこれから先き一濱に苦勞をかけちやア、第一先代の親御和中さんの跡式を潰して了ひ、女師匠とは云ひながら一中節都派の根を絕ち葉までも枯すやうなものそれぢやア武士を棄てゝ藝人になつた俺だけに猶濟まない。今迄これに氣のつかないぢやアなかつたが、今日阿母の愚痴を蔭で聞かされ、つく〴〵悟るところがあつた。まだ此の上にも俺が女の細腕で仕送りを受けて居ちやア世間は兎も角、石にかぶりついてなりと荻江の流派を開かうといふ露友の名前に銹がつく。どうか俺が黑い羽織の一枚も引張つて、誰が眼からも第一流の藝人で威張つて通れるその時まで、賴むから此の露友を見逃して吳れ。よ、解つたか。
和八　成程なア、窪んでゐても此の眼で、行く先き立派な藝人になるだらうと、睨んで惚れ込んだ人だけあつて、その決心を聞いて見れば、頭こそは圓めないが、世を茶

化して世を棄てた、幇間の和八が目からも熱い涙はこぼれて來る。また、こッちを見れば先代の忘れ形見……ええまゝよ女の身だ、藝などは棄てゝ了つて戀に生きろと云ひたいが、家元だけにつぶされない。ねえ一濱さん、わッしやお前が誰より可愛いんで、モウどうすりやアいいんだか、さつぱり譯が解らなくなつて了つたよ。（と、男泣きに泣きながら勸はる）

一濱　いゝえ、和八さん、あたしが惡い。師匠、勘忍して下さい。こんな至らないあたしですから嫌はれるのは自分が惡いと思つてゐます。

（と、一濱は半ば自ら恥ぢ半ばは女の感情でまた新しい涙を振絞つて泣く。）

露友　（聽耳立て）　これ、誰か表てに案内があるやうだ。和八、一濱をあッちへ……。

和八　へい。これ、そんな風をしてちやア見ッともねえ。さアあッちへお出でなせえ。（と、上手の小間へ追ひ立てるやうに押し遣り）　はい〳〵、どなたで入らッしやいます。

きん　あの、河野の屋敷から伺ひましたきんと申すもの、こちらが森庄五郎さまのお住居でございませうか。

和八　へい、左樣でございます。

露友　おゝきんどのか、能う來て吳れた。さア、これへ。

和八　ずッとこちらへお出でなさいまし。

きん　（座について）　お久振りでございます。お孃は何も斯も伺つて居りました。いつもお健かでお嬉しう存じます。

露友　きんどの、そなたも替りがなうて結構。和八、濟まぬが茶を一つ……。

和八　へい。（と、きんをヂロ〳〵見て茶を出し、上手へ入る）

きん　昔と變つて風流なお暮し、日頃のあなたのお氣性では却つてお氣樂でございませう。

露友　自ら知りつゝ罠にかゝつて、今は藝人の身になり下つた庄五郎、和八と云つてあの仁とたつた二人の男世帶の氣樂さは、また格別で面白い。

きん　では、あの、たつたお二人の男世帶……（と、思入れあつて）それはまア、何より結構でございます。その由お孃樣に告げましたら嘸々お欣び遊ばすでございませう。

露友　さて早速ながら、お孃樣と申せばあのおかの殿は氣が狂うてその後は座敷牢と聞きましたが、一切お屋敷内へ立廻つてはならぬと嚴しいお叱りを受けて追放になつた手前、たゞ〳〵蔭ながら案じ過して居りましたわい。

きん　その儀なれば御安心遊ばしませ。委しくは此のお手紙に……（と、懷中から出して渡しながら）猶此のお小

袖とお羽織はお嬢様が手づからお縫ひあげ遊ばした品、どうぞ御納め下さいませ。（と、右の品々を前へ出す）

露友　ふむ、（と、讀み終り）さては狂氣と見せたのは、忠之丞の緣談を斷る手段であつたのか。（間）またこれなる小袖、羽織黑地に荻の葉を染め出しにしてあるからは荻江露友が今の身をば……。

きん　何もかも御存じで、前月からお屋敷奉公にあがつてをります。

露友　して、その御奉公先きのお屋敷は？

きん　神田小川町のお大名屋敷、御主人様は備後福山の城主、阿部伊豫守様でございます。

露友　スリヤ、それほどまでに……天晴れ世間に謡はれる藝人ともなりましたら、お志の小袖羽織は身につけて、しかも心入れの荻の模様は、一生肌身をはなしませぬとよろしう傳へて下されい。

きん　彼方様（あなたさま）の爲めには救ひの神のそのお言葉、確かにお傳へ申し上げます。

（と、露友が小袖を抱きあげるやうに取り上げて身に秘めた戀心に恍惚とした時、上手の座敷から一濱が思はず見込んで嫉妬の思入れ。和八これを止める。皆々思ひ入れよろしく。）

――幕――

第五幕

第一場　芝居茶屋川島奥座敷

舞臺は森田座前の大茶屋川島の離れのやうになつた奥座敷。苔の蒸した庭には萩、桔梗など垣も埋めるばかりに茂り、青竹垣をめぐらしたうちには、手入れの届いた立木、石燈籠、稲荷を祭つた小さな祠などよろしくあり。座敷は可成り粋な離れ座敷の如き濡れ緣附きで、茶の味はひある造り、銀地の風爐先屏風、衣桁、總て浮世繪風の華車（きやしや）な道具、床の間には光淋派の絹かけもの、上手に美しい座布團、蒔繪の脇息、同じく眞盆正面に寄りたる下手の方に同じく座布團（これは普通の客布團）が二つ竝べ敷いてゐる。此の三つの布團の前には茶で用ひる簡單な膳拵へがして銀の知呂利が出てゐる。すべてその頃の芝居茶屋で御殿者などが來て藝人を呼んで座を共にする時の支度が整つてゐるのである。

下手は橋がかりの如き長廊下にて、座敷に通ずる出入りあり、二階へも行かれ、また他の座敷へも行かれる心に出來てゐる。大切所作事「今様道成寺」にて幕が切れると打出しになる。その最後の唄の囃子にて幕明く。茶屋の若衆や女中、役者の男衆、留湯の若い者等

が大切に近いので忙はしく話しながら廊下を行つたり來たりしてゐる情景。

茶屋の女一　ねえ直吉さん、もう打出しかい。

留場の若者　お前さん、何年芝居茶屋に奉公してゐなさるんだえ、芝居か打出しやア太鼓が鳴るぢやアねえか。

茶屋の女一　まア、いゝよ、お前さんに聞いてるんぢやアないから……ねえ直さんッたら。

男衆直吉　えゝもう直ぐですよ。あの囃子になると直ぐかい、ぶりますよ。

茶屋の女一　然う、有難う。(と、右手へ入る)

若衆久助　おい／＼、おきくさん、奥のお座敷はもう全然(すつかり)差支へないやうになつてゐるねえ。御殿者だから不行届きがあつちやアいけねえよ。

茶屋の女二　大丈夫ですよ。(と、行き過ぎる)

茶屋の內儀　(下手から出て來て)　なんだね久さん、御殿者だなんてそんな大きな聲をおしでないよ。聞えると大變ぢやアないか。

久助　へえ、どうも濟みません。あの方は阿部様のお奥にお勤めの方ですね。

內儀　お奥でもなか／＼重いお役柄ですとさ。まだ若いし、それに滅法お美しい方だねえ。

久助　あんな、錦繪から拔け出したやうな尾上役者は、當時太夫衆でどなたが較べられても及びませんねえ。

留場の若者　仕様がねえな。(と、通りかゝり)お內儀さん一寸御免なさい。おい、おい、高麗屋さんの送りの男(ひと)はこつちにゐるのかい。樂屋から今表へたづねに來ましたぜ。

奥の方の聲　へえ、ありがたう。わかりました。

(と、此の時、舞臺の方からは幕の拍子木が聞え、直ぐ打出しになる。)

內儀　おや、今日はちつと早いやうだね。

久助　だが、こんどの狂言と來たら終ひまで觀客(けんぶつ)が立ちませんからねえ。

內儀　やつぱり唄は露友さんの人氣だね。(と、此時、蔭から「おかみさん……おかみさん」と呼ぶ)あいよ、今直ぐ行きますよ。(と、下手へ入る)

久助　さあ、此等(こちとら)もこんなことをしちやあ居られねえ。

(と、これも慌てゝ上の奥へ入る)

(暫らくの間、打出しと共に見物の男女が通り過ぎる。)

見物の男　どうだい、ふるひ付きたいやうな咽喉ぢやあねえか。

見物の女　ほんとに能うござんしたねえ。今度の狂言は高麗屋の三代目になつた名前替へもありますけれど、唄が

人氣を呼びましたねえ。

他の女　立ての吉次さんも惡くはありませんが、矢張り露友さんの聲は甲(かん)も立つし呂(りよ)も利くし……。

見物の男　それで節廻しが滅法いゝと來てゐれあ三拍子ものだ。(と、話しながら通る)

(と、また暫らく二三人づつ廊下を通る。茶屋の女、番頭などお世辭を言ひながら案内したり禮を言つたりする。紫の綿帽子をつけた女形など二人位通り過ぎる。)

內儀　(案内の心にて)さあ、どうぞあれへお越しなされませ。(と、丁寧に腰をかゞめる)

(直ぐ下手から裾模樣の品のいゝ、色彩美々しく金緞子の帶をしめ、筥せこを懷中した奧女中野川を先きに、これもお供の女中の扮裝にておきん出て來る。內儀の後に幇間和八つゞく。と、座敷へ來り皆々よろしくすまふ。)

內儀　今日はお早いうちから御見物で、嘸おつかれでございませう。

野川　好きな道と云ひ、別して今日はおもしろう……さしたる勞れも覺えません。

きん　旦那さまにはお宿下りのお樂しみゆゑ、御遠慮をなされずと、ゆる／＼おくつろぎ遊ばしませ。

和八　(丁寧に辭儀をして)お召しによつて荻江露友、間もなくこれへお目通りいたします。

野川　何かとお世話になりました。わけて和八どのとやら、そなたの丹精が凝つて今度の大當り、荻江露友は名人だと世間の評判を取りましたも、始終お側で勵まされたのが力綱になつたものと思ひます。

和八　へい、手前風情には身にあまるそのお言葉、有難うぞんじます。憚りながら和八めはおのれが世に出たよりも、どんなに嬉しいかぞんじません。(と、老の眼には言葉と共に涙が浮び出る)

內儀　憚りながら、あれへ富士田吉次、荻江露友の兩太夫が見えたやうでございます。

(と、此の時兩人、盛裝して恭々しく手をつき平身低頭してまかり出る。)

きん　お二人ともに遠慮なうそれなる座へおつきなされませ。

吉次　さらば御免を蒙りまして……露友…さッ…。

露友　どうぞ、御順におすゝみを……。

(と、兩人は恐縮しながら座につく。)

野川　今度びの仕組み、わけて新曲の唄は大評判で、心にしみ／＼と拜聽しました。さ、祝ひに一つ此の盃を……。

(と、きんに目配ばせする)

吉次　（汗を拭きながら）いや、これはどうも……まことに恐縮至極な次第で……。（と、受ける）
露友　やつ、あなたは……。（と、氣がついて驚く）
吉次　では、露友は、御存じの……？
露友　い…え、左樣ではございませんが……（と、思入れあつて）どこぞでお見受け申したまで。
吉次　いや、これは失禮なことを……おつゝしみなさい。
野川　ほゝゝ、藝人衆と云ふものは、思つたより禮儀の堅いもの、一獻過されたらそれを露友さんにお廻し下さい。
內儀　わたくしがお酌をつかまつりませう。
吉次　（頻りに額を撫でながら）いやもう、たゞ〳〵有難いことでございます。なら露友、斯うしてお屋敷樣方にお目にかゝるばかりでなく、お流れまで頂きますことは餘りに恐れある幸せ事と申すものだ。（と、杯をまはす）
きん　まあ、吉次樣のお世辭のよい。荒事を得意な團十郎の舞臺よりも優にやさしい太夫方のお聲に、夢心地で聞惚れたとの仰せでございました。
吉次　これはます〳〵恐縮な次第で……（と、すつかり内心自惚れて了ひ）團十郎の舞臺よりも……手前どもが未熟な唄を御贔屓に遊ばして……（と、思はず乘出して）へ…いや、どうもこれは……手前もとは京都で佐野川萬菊の弟子でございましたが、當江戸へまかり越し、死んだ都和中の門弟となつて修業、此度御意に叶つて富士田吉次と改名「今樣道成寺」の立唄を……これに控へました露友のわきで目出度く大入りの御人氣を贏ち得ましたも、これ偏へにいづれも樣の御引立があればこそでございます。
（と、ペラ〳〵とキザに饒舌りまくる。野川はおきんに目配せして祝儀のことを云ひふくめる。と、內儀の手で「御師匠さん、これを…」と吉次の前へ目錄を出す。吉次頭をさげる。）
きん　旦那樣からほんのおしるしで……。
吉次　これは何とも恐れ入りました。露友、お禮を申上げな。では御遠慮なく頂戴いたします。
露友　……（默禮をする）
きん　あの、甚だ申しかねましたが、吉次さんに折入つて少しお願ひが……。
吉次　（早速自惚れの早飮込みで）あのわたくしには、露友を一足先きに歸しまして、あとで悠々御酒のお相手でもいたしますことに……で
きん　おほゝゝゝ、まあ、あなた樣はお氣の早いこと……（と、さすがに云ひかねて）ねえ和八さん、あなたから一寸申上げては下さいませんか。
和八　へい、へい、承知いたしました。お易いことで……

いやなに吉次さん、實は旦那樣は手前師匠の露友を大の御贔屓で、これから先きの事についても、いろ〳〵お力添へをなされて下さるとのことで、まことに失禮だが、あなたは一足お先きへ……。

吉次　なに、一足先きへ……？

和八　どうぞ御自由にお引取りを……ねえ。わたしも御一緒にお供いたしますよ。

吉次　（呆氣に取られて）へい、それぢやあ、あの……左樣でございましたか。（と、さすがてれ加減で）早くさう有仰つて下されば、その……いや、それでは、御免を蒙ります。

内儀　あれ、わたくし達もお供をいたしますよ。（と、内儀和八、きん、後を追ふ）

野川　（思ひ迫つて）あゝ庄五郎さま、よくまあ御壯健で……（と、滑るやうにして露友の傍ににじり寄る）しかも江戸一ぱいの此の人氣を、湧立たせる今までの御苦心は……。妾は嬉しい……妾はたゞもう、嬉しい。（と、思はず熱涙をこぼしてよろこぶ）

露友　おゝおかの殿……能く今の身になつて見物に來て下された。わしも嬉しい、千人萬人の見物も大切には違ひないが、こなた一人の胸に響いた欣びは……あゝその欣びは、何に譬へよう言葉もない。

（と、二人は初めて互ひに一つ呼吸になつて喜びながら。）

野川　よくまあ、それでもわたくしのやうな不粹なものはお忘れ遊ばしたと存じてゐましたが、そのお言葉で、何より嬉しうぞんじます。

露友　それにつけても芝居の唄うたひにまで成り果てた身をお蔑みもなく、ずゐぶん重いお役柄を勤められると見え、斯うして立派にしてお目にかゝる今日の喜ばしさは俺にとつても思ひがけない。

野川　なんで暮すも一生、思へばあなた樣もよくこゝまで御苦勞をなされましたな。生涯離れて暮しても、かのを女房だと有仰つて下されたお言葉を思ふと……その一言が心のはげみで、今の身になつたのでございます。

露友　俺はまた、いつぞや竈河岸へきんをもつて屆けて下された此の小袖を、身の晴れ心のかたみと思うて肌身につけて着てをります。

野川　庄五郎さま、ほんにお嬉しう存じます。

（と、互ひに手を取らんばかりに喜び合つて語る處へ茶屋の內儀入り來る。）

内儀　御免下さいまし。もし露友さん、池邊さまとか有仰るお侍さまが、なにか是非お詫の筋があるとか申してさき程からお待ち申してをりますが……。

露友　なに、池邊が……。

内儀　はい、ちとお病ひのやうですが、今日は芝居を御見物いたされて……。

露友　うむ……。（と、思入れ）はてな、何にしても油斷はならぬが……いや、後で一寸お目にかゝりませう。

（と、道具廻る。）

第二場　同川島二階座敷

舞臺は同じく川島の二階座敷、正面はまだ障子が開け放たれて、そこから月光に描き出された劇場の上半身が見え、卽ち正面の屋根に櫓、かたばみの紋を染めぬいた幕をめぐらし、その兩方には梵天、櫓鑓、物眞似札、櫓下の看板など飾りあり。座敷の中には酒の道具が取散らしてあり、衝立には俳優の似顏繪、繪番附など張り混ぜてある。軒先きには「川島」としるした提灯、かけ行燈などまだ消さずにつけてある情景よろしく。

鐵砲洲の上總屋文藏を中心に上手には都一濱、繼母お傳。下手には乾分の重太、銀次、萬藏の三人が酒を飲んでゐる。

文藏　ねえ阿母、それぢやあちつと話が違やしねえかえ。

お傳　ほんとに困りもんですよ。唄の師匠もしてゐれば、なんぼ若くても生娘ぢやあなしさ、たゞ氣儘を云つてゐちやあわたしが困る位のことは察して吳れてもいゝんでさねえ。

一濱　だつて阿母さん、それあ初めつからの約束が違ひますよ。藝で喚んで下さると思へばこそ、あたしも元締さんの御座敷は、どこへ出てゐても充分勤めてゐましたのさ。今日だつて、芝居を見るんだと云ふからおつき合ひに來たまでのことで、それを兎や角云はれちやあ、なんぼあたしが客商賣で溫和しくしてゐるからつて、然う然う我慢は出來ませんよ。（と、知らず〳〵盃を手にしながら呑む）

文藏　しかし富士田の師匠が、萬事阿母(おふくろ)に話しをつけて極まりはついてゐる筈だつたんだ。

お傳　えゝそれやあ、まあ、一寸話がつくことはついたやうな譯で……。

重太　なんだ、ついたやうな譯で……おい〳〵阿母、ついたやうな譯で……はひでえぢやあねえか。然うとは知らねえから。

銀次　俺達は船の用意をして、斯うして見たくもねえ芝居まで見てさ。

萬藏　のんべんだらりと待つて居たのも、皆んなお前さんが、鐵砲洲の家まで連れてく手筈がついてるといふから

だ。

文藏　吉次のあのおつちよこちよい奴、御殿女中の座敷があると云つてゐたが、確かにまだこの茶屋にゐる筈なんだ。

お傳　おい〳〵、ねえさん、（と、手をたゝきながら）ほんとに困つちまふねえ。（と、喚びたてる）

（此の時、富士田吉次があがつて來る。）

吉次　へい、上總屋の親分今晩は……どうも何んとも申譯がありやせん。

文藏　おい〳〵、どうしたんだな吉次さん、まるで話が違つてるところへお前がちつとも顏を見せて呉れねえもんだから……大手古摺りに手古摺つたよ。

次吉　へーえ、そんなに話が違つてゐますか。いや、どうも今晩は、なんだか話の違ふ晩で……濱ちやん困るぢやあないかね、阿母さんも承知の上で……それで萬事はわたしが仲で引受けたわけになつてゐるんだ。

一濱　（少し醉ひ加減で）だが、お師匠さん、お前さんだつて餘りぢやあないか。わたしに一口話をして、それから阿母に話をしてもいゝに……二人でいゝ加減に極めて了ふなんて。

吉次　うむ、ぢやあ矢張り、あの荻江露友に義理をたてゝゐるんだね。

一濱　立てゝ居ようとゐまいと大きな御世話ぢやあないか。お前さんの御心配にやあなりませんよ。

吉次　なんだと……（と、むつとした胸をおさへて）ねえ濱ちやん、お前さんはその氣だから不可ないよ、わたしも一旦はお父さんの和中さんにお世話になつた身體だから、お前さんを好い立派な藝人にしたいと思ふのは當然の人情で……それでもお前が末始終露友の女房になれるんならいゝがね、あの男たつて云ひ交した女はあるんだからねえ。

一濱　えゝ蒼蠅いねえ……なんだつていゝのさ。

吉次　實はね、元締さんの前だがね、今夜此の家の下座敷へ御殿女中が來てゐるんだ。滅法いゝ女で、そのいちやつきやうつたら見ちやあゐられねえのさ。吉次さんは濟まないが先きへお歸り——などと、あんまり剛腹だから立聞きをしてやつたがね、其御殿ものが、生涯離れて暮しても心は女房だなどとほざいてよ、その上一濱がついてゐるからお前さんは幸せだと嫌味にからむと、またあの露友の奴め、なあに一濱はほんの一時の浮氣だつたんで、末始終は女房にはしない、あんな女を女房にする氣狂ひはないと、お前さんに聞かして遣りたいと思ふほどの惡口さ。

お傳　お濱、馬鹿々々しいぢやないか。お前が露友なんぞ

に引絡まつてゐればこそ馬鹿にされるんだあね。それよりか元締さんの處へ行けば大威張りで姐御ちやあないか。あんな荻江露友なんて駈出しの藝人なんぞ、好きに招んで祝儀の一つも投げてやれる御身分だよ。

文藏　どうだお濱、どんな仕たい三昧の贅澤でもさせるから、お前も量見を入れ替へる氣はねえか。

（と、此の間、一濱は知らず〳〵焦々して、下座敷に對する嫉妬の氣持きざす。）

一濱　ほゝゝまあ、元締さん戲談は止して下さいよ。（と、だいぶ酒に醉つたこなし）また、吉次さんも然うだ、立派な看板の立謡ひが桂庵口を利いて商賣にしなくつてもいゝぢやアないか。富士田の家の名が廢るよ。死んだ親父も泣くだらうから止してお呉れ。

重太　まあ、然う云はずと此方へ寄つて……。

銀次　親分の傍へでも坐るがいゝ。

萬藏　姐御、お酌はおいらがしてあげるよ。

一濱　（痛癪聲で）いゝえ、澤山……自分の坐りたいところならお差圖なしに坐りますよ。

（と、ふら〳〵と立つて、階子の下を氣にしながら覗くこなしをする。）

お傳　おい、お濱、どこへ行くんだい？

一濱　どこへも行きやあしないよ……（と、囁くやうに）あたしの足であたしが歩くのに大きなお世話だ。

（と、階子段を降りて行く、吉次は思入れで文藏に向つて何か囁き。）

吉次　親方、あのお濱を手に入れるためにやあ、どうでも一思ひに露友めを……。

文藏　うむ、忌々しい野郎だ。寧そのこと……。

（と、三人の乾分に何か囁く。皆々うなづく。）

（道具廻る）

第三場　第一場と同じ奥座敷

舞臺は第一場の座敷へ戻る。

前面には青簾がおろしてあり、行燈の灯のゆらめく中に、露友と池邊が相對してゐる。月の光はやゝ薄く、蟲の聲聞ゆ。

露友　なるほど昔の恨みは恨み、貴公がその言葉に對しては今の露友はたゞ藝人として何事も過ぎ去つた昔話しと承りませう。

小藤太　いや、昔は兎もあれ、今は立派な唄うたひの荻江露友どの、能く早速逢うて下された、まことに千萬忝けない。

露友　それにしても、その息づかひ、池邊氏、よほどの重病と相見えるが……。

小藤太　いや、手前の命はもう遠くはござらぬ。今夜こそ貴公にあつて、生前にたゞ一言の懺悔がしたい爲めに……。

露友　なに、懺悔とは？

小藤太　竹馬の友でありながら、ふとした事より節を枉へて、貴公の敵(かたき)の手について、何かと惡企みを圖るうち、手前の口から露見すれば己(おの)れ等の身の上と心得てか手前に手を廻はして、いつの程にか毒を盛つたに違ひない。

露友　うむ、すりや卑怯にも一旦欺いて味方につけて置きながら……。

小藤太　いや／＼、それも皆な此の小藤太が身から出た錆、因果は應報、一旦貴公に盛らうと企てた毒藥が却つて此身を殺すといふも、これ皆な天の處罰、笠原や福永親子を恨んでも及ばぬことだが、たつた一言貴公にお詫びをせずに死んで行つては、罪の亡びる時はあるまい……と思へば死んでも死に切れず、病苦を押してそれとなく、露友が晴れの唄も聞き、評判(うはさ)も聞いた。此の上はたゞ一言、貴公の口から宥してやると、引導替りにそれが聞きたい。

露友　おゝ池邊氏、よく云つた。大小棄てた今の森には、むかしの恨みは毛頭殘らぬ。(と、かたく手を握り)どうか心安く思つてくれ。

小藤太　あゝ貴公なればこそ、心よく宥してくれる。おれの命は今日が日絶えても、もう惜しいとは思はぬ。

(と、劇しく咳嗽(せきい)入る。薄い風音をかすめて、蟲の聲。上下庭口から人の忍び寄る物音、露友と小藤太が氣がついてはつとする瞬間、奥の暖簾口から覆面の文藏が姿をあらはす、上手から乾分重太、下手から銀次萬藏覗ひ寄る。)

露友　何者だ！（と、一喝する）

(と、一齊に座敷へ踏み込む。行燈を倒し、灯を消し四邊黑暗々となる。手さぐりで大暗闘、とゞ露友は思はず武士であつた腕前をあらはし、乾分三人を斬り倒して上總屋文藏を摑ちあげる。)

(此の物音を聞きつけ、手燭に灯をともして供のきん、野川、内儀續いて急ぎかけつける。あたり明るくなる。)

きん　露友樣にもお怪我がなく……。

内儀　御無事で何よりでございました。

野川　(文藏を見て)おゝ其方は上總屋文藏ではないか。

きん　(近づき)神妙にいたせ、こなたは御中老野川樣ぢや……。

文藏　へい、恐れ入りました。人違ひで意恨に思ひ誤り、何とも申譯ございません。

野川　文藏、その方はお屋敷の御用をも達す身でありなが

ら兎角素行がをさまらず、市中で亂暴をいたすこと屋敷にも聞えてゐる。ちと愼まねば其方身分にも係はらうぞ。

文藏　へい、返すべきお言葉もございません。

露友　（思ひ入れあつて）しかし、以前は兎もあれ、今は町家住居に身を落したる此の露友、斯く數人の命をあやめました上は、藝人として世渡りも如何なもの、寧そ屑く自訴してせめては名を淸ういたすより是非ないと覺悟を決めました。

小藤太　いや、その覺悟はまだ早い。

露友　なに早いとは……？

小藤太　あゝ貴公へのお詫び、またおかの殿へのお詫びのしるし、且つはこれ迄の罪ほろぼしに、人を殺めたその罪を此の小藤太に讓つてくれ、それでこそ快よく死んで行かれる。

露友　おゝ親友の志、池邊氏、忝く思ふ。（と、相抱き泣く）

文藏　その證人はこの上總屋文藏がいたします。

野川　文藏そちにもたのみましたぞ。

小藤太　それぢやあ、今別れるのが此の世の別れだ。むかしの友の庄五郎、どうか貴公は此上藝道に魂を打込んで天晴れ立派な藝をつくり出してくれ。

露友　おゝ親友なればこそ池邊小藤太、庄五郎心から嬉しく思ふ。

文藏　池邊樣とやらのお供はわたしが致してまゐります。

野川　どうか然うして下され。

（と、池邊は文藏に助けられて立上る。）

小藤太　森氏、貴公の出世を墓の下から祈つてゐるぞ。（と、涙を嚥んで別れ行く）

（此の時下手から和八に留められて一濱が出て來る。）

和八　まあ、お濱さん、そんなことを言つたところで如何なるものか。まゝ、待ちなせえよ、待ちなせえと云つたら……玉屋の旦那のお座敷へ呼び込まれて、あんなに意見をされてもお前にはわからねえのか。

一濱　あゝわからないよ。わたしやわからずやだからねえ。

（と、引留めるのを振り拂つて構はず座敷に跳り込むやうに入つて來る。）

露友　やつ、お前は一濱……。

野川　では、あの……此の方が……。

（暫らくは三人が立竦んだまゝ無言にて思ひ入れ。）

一濱　はい、お初にお目にかゝります。わたしが一濱と申す不束者、どうぞ見知つて置いて下さいましな。

野川　（丁寧に）これは〳〵、お噂にはいつも承はつてをりましたが……森樣の一方ならぬ御世話をなされて……それでもまあ、御丹精で今度の大評判、わたくしも蔭ながらこんな欣ばしいことはございませぬ。

一濱　どういたしまして……あなたのやうなお立派な……いゝえ、そのお座敷樣のおうしろ立てがなくつちやあ、藝人衆も人氣か立たず、また幅も利きませんのさ、あたしや今夜といふ今夜ばかりは、つく〴〵自分の身の程が胸にこたへて口惜しうございんすよ。

露友　これ、何を云ふのだ。いつになく醉つてゐるやうだが、決して惡うとつて吳れてはならぬ。

一濱　えゝえゝ、なんで惡くなんぞとるものですか。なんぼわたしがわからずやだからつて、押掛け女房にならうとは云やあしませんよ。

野川　承はれば、どちらにも深い事情(わけ)があるやうに存じますが、わたくしと庄五郎さまの仲なれば、憚りながら一濱さま、聊かお思ひ過しをなされてお出での樣にも存じられます。

露友　これ一濱、おかの殿が云はるゝ通り、今夜のことから然う思ふは、それはそなたのひがみといふものだ。

和八　ほんとに一濱さん、お前がなにもそんなに氣を揉むことはありやあしない。

一濱　いゝえあたしや今夜はかりは納らないよ。露友さんがお互の苦勞はよく知つてる筈だ。愛想づかしに事を缺いで、あの富士田吉次なんかに、何のかの噂の種を蒔かせるやうな事をして吳れなくツてもいゝぢやあないか。

和八　うむ、ぢやあの、吉次の奴め……（と、思ひ入れ）また能くねえ仲口を利きやあがつたんだな。

露友　あとで悠くり云ひ聞かせれば解る話だ。

一濱　いゝえ、厭ですよ、あたしだつて痩(や)せても枯(か)れても藝人の端くれだよ。此の大茶屋の川島で、そんなに馬鹿にされて耐るものか。

和八　なんだな一濱さん、そ、そんな大口を利くといふことがあるものかな。こなたは阿部伊豫守樣のお奧にお勤めなさる御中老野川樣と有仰ることを御存じないのかよ。

一濱　いゝえ存じません、なんにも存じませんが、あたしだつて江戸つ子だよ、今夜こそなんにも云はずに綺麗さつぱり露友さんとは切れてさしあげますから……（と、泣く）

（そこへ吉原の玉屋山三郎出て來る。）

和八　あれ、吉原(なか)の旦那がおみえなされた。

露友　これは玉屋の旦那さま、けふはようこそ御見物下さいました。

玉屋　いや、露友さん、なにかごた〳〵があつたさうだがそれでも無事に納まつて結構だ、それに今度の素晴しい人氣、日頃からお前さんの唄が大好きなわたしは、涙がこぼれるほど嬉しい。ところで一濱さんだが、わしもさつきつかまへて意見をして見たが、これにはなにか一濱

さんの腹の中に考へがありさうだ。ところで太夫、どうでも別れると云ふなら仕方がない。どつちも贔屓の己の顔をたてゝ、何事もさらりと水へ流して、これから先は實の妹同様に美しく交際つて貰ひたい。

野川　いえ〱、それよりは今の野川でなく庄五郎様の許嫁であつたおかのが一生のお願ひ、一濱さんと露友さんとは藝人同志、一對の似合ひの御夫婦、どうぞ末長う一緒にお暮しなされて下さるやう、玉屋様とやら何分お骨折りを願ひます。

一濱　もうし、然う有仰られては此方からこそ申上げる言葉がなくなつて了ひます。露友様、どうぞ、おかの様と幾久しう。態と愛想をつかされようと思つて云つたことは勘忍して下さい。（と、本心を打ちあける）

露友　（思入れあつて）兩人が互ひにゆづり合ふ志は忝けないが、あらぬことから武士を棄て、斯く唄うたひとまで身を落した荻江露友、いろ〱の世の態人の心にも觸れて來た。その揚句の果てが藝道への精進ともなつて劇場へも出てみたが、矢張り世の中の煩はしさからは逃れられぬ。玉屋さま、わたくしはふと世相に感ずるところがあつて、再び芝居を退き、生涯妻も持たねば友もつくらず、何とかして此の儘世を遁れたう思ひ立ちました。

玉屋　うむ、では、芝居を退かれるか。（と、一寸考へ）吉原へ身を棄てる氣はないか。

露友　なに吉原へ……。

玉屋　然うだ、そして荻江節をもつと細かく四疊半でも唄へるやうに工夫して、廓内の藝者にうつしてやつてはくれられまいか。

和八　なるほど、（と、輕く横手を打ち）さすがは粋と名代の玉屋の旦那さま、藝人の果てが、色里へ身を棄てゝ住むといふ御趣向はこりや年代記ものでございます。太夫さん、早速に然うなされませ。

露友　うむ、それも變つた浮世の棄てやう……（と、蟲の音の冴えるのを聞き）あれ、あの露草に命をつなぐ蟲でさへ、おのが聲の枯れるまでは鳴きつゞける。露友もこれから解脱發心、おのが身を棄て、人をも棄て、一層藝道に悟りを開くでございませう。

玉屋　では、早速その氣になつて呉れたか。

露友　はい。（と、兩人の女に充分思入れ）

玉屋　これは忝けない。……いや〱目出度い、目出度い。

（と、露友は萬感交々胸に迫つた表情、皆々顔見合はせてよろしく思ひ入れ。）

茶屋の女　（出て來て）池邊様から御手紙でございます。

露友　（その手紙を讀み）では池邊は壽命も待たずに……

（と、思はず手を振はして手紙を取落し合掌する。月、雲間をもれて蟲の音いよ〱冴える。）

―― 幕 ――

清見陸郎篇

坂崎出羽（二幕）

人物

坂崎出羽守成正
弟 小七郎
側室 松波
家老牧野勘兵衞
柳生但馬守宗矩
村越左門
本庄五助
倉田傳内
渡邊半左衞門
腰元 梅野
同 楓
醫師 寺澤了齋
その他近侍の士、足輕、小姓、腰元など多勢

第一幕 石州津和野城内裏門口

平舞臺、上手寄に城門を内側より見たる光景。門扉には門を卸す。左右に城壁連なる。上手に高き石垣。下手に土手。その頂に數本の松樹あり、城壁の上に蔽ふやうに枝を伸ばす。

元和二年九月下旬の或深更の事。幕明くと城主出羽守の家臣村越左門、本庄五助、野袴、草鞋掛、覆面にて足輕多勢を指揮してゐる。足輕は薙にて包みし鐵砲を持つ。

左門 （四邊へ忍ぶやうにして足輕等に）豫て申渡せし通り、今度の御出立は家中一統の者にさへ内密の御企、道中すがらも心を用ひて、構へて人目に立たぬやうに致さうぞ。

五助 若し、あれこそ坂崎出羽守が手の者、隊伍を組んでいづくに行くなどと疑はれなば、その事忽ち江戸に傳はり、殿が必死の御企も水の泡となる。

左門 我等が目ざすは伊勢の桑名ぢや。桑名に達するまではいかなる困難も唯忍べ。

足輕一 殿樣のお見出しにあづかり、卑しき身ながら重きお役目仰せつかりしわれらが面目。

足輕二 固より一命は始めから捨てる覺悟でをりまする。

五助 よくぞ申せし。最早子の刻、殿の御用意も調うたであらう。それ、見咎められぬうちこの裏門より……

足輕三 心得ました。

（足輕二三人、城門の閂を拔きにかゝる。家老牧野勘兵衞下手より駈け出る。）

勘兵衞　待て。誰が許して開門するぞ。（足輕等を突きのける）

左門　（ぎよつとして）御家老にはどうして今頃……

勘兵衞　それはこの方よりこそ聞くべき事。草木も眠る眞夜中に、多勢の者人知れず城を忍び出でんとは奇怪千萬。仔細を語りやれ。

左門　それ明したら事が破れ申す。何事も知らぬ振にて………

勘兵衞　いゝや、ならぬ。假にも坂崎家の老臣たる牧野勘兵衞、掟に背きし今夜のしだらを、知らぬ顔で見逃されうや。云開き立たば好し、さもなくば、門外へ一歩も出る事罷りならぬ。

五助　ぢやと申して今に及び、折角の企中止されませうや。枉げてこの場はお見赦し下され。

勘兵衞　四の五のと詞を濁す程猶怪しい。その菰包は何ぢや。（足輕の手より鐵砲の包を奪はうとする）

五助　それ見られては。（留める）

勘兵衞　えい、見せいと申すに。（留める手を突きのけて菰包を開く。中から火繩銃が出る）や、こりや鐵砲。それでは此間中よりの諫言もお聞入なく、殿にはやつぱり千姬君の御輿入を……

左門　牧野殿、闇に紛れて我等が城を出ようと致すのは、ひとへに主君の面目を立てんが爲。何にも云はずに桑名までおやり下され。

勘兵衞　それ聞いては猶の事、門より出る事ふつにならぬ。いかに主君のお言付なればとて、今度の企がどのやうな事であるかは、御身達にもよう分つてゐる筈ぢや。殿の面を犯してお諫め申上げしそれがしが詞、御兩所とて忘れはされまい。

左門　お家のお爲を思うての御家老のお詞、我等とて御尤とは存ずれど、殿の御胸中を察し上ぐれば、今度の御企に御加擔するより外はなかつたのでござる。

五助　我等を股肱と賴み給へばこそ、殿には隱す隈なく大事の祕密をお明し下された。その有難い思召に免じても、躊躇すべき場合でないと考へ申した。

勘兵衞　それこそ一を知つて二を知らぬと申すもの。忝くも千姬君には將軍家の御息女として、播州姬路の城主本多中務大輔殿へ御降嫁遊ばす大切の御方。その途中を待ちうけて御輿を奪はうなどとは、上を恐れぬ大不敬の所業ぢや。その恐ろしい陷穽に主君を陷れるやうな事をしても、御身達に悔いはないのか。

左門　さあ、それは……

勘兵衛　まこと殿の爲に捨てる命があらば、なぜその命を投げ出して、どこまでも殿を諫めうとはせぬぞ。津和野三萬石、高が一婦女子の爲に粉微塵にせらるゝは、餘りに言甲斐なき事ならずや。さ、その鐵砲を捨てゝしまへ。さうして打揃うて殿の前に出て、お手打になる覺悟で天魔に魅入られ給うた殿のお心を飜すのぢや。

（坂崎出羽守成正、上手よりつか〳〵出る。羅紗の羽織、野袴、草鞋掛。左の小鬢に火傷の痕あり。）

出羽　天魔に魅入られたとはどの口で申した。成正あれにて聞いてゐたぞよ。

勘兵衛（情なさゝうに出羽の服裝を見て）恐れながらそのお姿こそ、即ち天魔に魅入られ給ひし何よりの證據。今頃お鷹野でもござりますまい。野袴、草鞋を召して、これからいづれへお越し遊ばす。

出羽　問ふまでもない事。廢れた武士の面目を立てる爲にぢや。

勘兵衛　又しても武士々々と、根が一婦人から起つた事ではござりませぬか。潔う忘れてしまふのが、却つて武士らしいとは思召さぬか。

出羽　根が一婦人と云ふ口で、そちこそ姫の松波を側室に薦め、わが心をたぶらかさんと力むるならずや。

勘兵衛　こは殿のお詞とも覺えず。愚かなれども松波は心優しき生れつき、朝夕お側に附きそひ參らせて御用を承るならば、少しは殿の御心を和らげ奉るよすがにもと存じて……それより他に意はござらぬ。

出羽　成正が忘れ難きは千姫君の色香ではない。去年大阪夏の陣の砌、茶臼山の御陣所にて大御所のなされた御誓言ぢや。並ゐる家の子諸大名の前で、孫千姫を糒倉の火中より救ひ來るに於ては、誰に限らず姫をその者の妻に與へんと明らかに云はれた御誓言ぢや。

勘兵衛　したがその大御所樣にも、大阪が落ちて一年とは立たぬこの春の頃、御他界遊ばされました。

出羽　たとへ大御所は御他界ありしにもせよ。千姫君の御父上たる將軍家には彌榮えに渡らせ給ふ。まつたあの折席に連なりし本多佐渡守殿を始め、譜代の老臣皆息災。成正が云ふ事の正しきか正しからぬかは世間萬人の知る所ぢや。

勘兵衛　いかやうとも世間は思へ、將軍家に於て殿に千姫君を下し賜はる事を好ませられず、既に姫路の本多家に御降嫁と事定まるに於ては、最早致し方がないではござりませぬか。何事もお家が大事。平地に波瀾を起すやうな事して、後の悔を殘し給ふな。

出羽　將軍家は好んで武士の面に泥を塗られた。所詮成正が執るべき手だては唯一つ。江戸表より播州に下る姫君

の頭を桑名に待ち受け、唯一刀に姫を刺殺し、われもその場で腹切るばかりぢや。諫め立てする汝をまで加擔人にとは頼まぬ。主の身を思ふなら、せめては本望遂ぐるまで、この大事をば人に語るな。出羽が最後の頼みぢや。

勘兵衞　なりませぬ。いかに主命なればとて、田夫野人の爭ひにも劣る亂暴狼藉、このまゝ默して過されませうや。

出羽　では成正がこれ程事を分けて頼んでも、飽くまで邪魔だて致す所存か。

勘兵衞　强つてお止まり遊ばさぬに於ては、江戸表へ飛脚を立てゝも、きつとお留め申しまする。

出羽　云はして置けば方圖のない無禮過言。（大刀を拔いて斬らうとする）

左門　殿、お待ちなされませ。（留める）

出羽　門出の血祭ぢや。離せ。

五助　かゝる夜陰に家中の寢耳を騷がしましては、猶更事を仕損ずる恐れ。先づお鎭まり下さりませ。

（兩人一生懸命に出羽を抑へる。下手より小姓一人出て來る。）

小姓　申上げます。

勘兵衞　何事ぢや。

小姓　柳生但馬守樣、江戸表より俄の御入來にござります。

出羽　なに但馬守が……（きつと勘兵衞を睨んで）さては汝先廻りして、この成正を訴へをつたな。

勘兵衞　いかやうともお取りあれ。江戸表よりのお使者とあらば、何にもせよお出迎ひ。（急いで行きかける）

出羽　待て。われは會はぬぞ。

勘兵衞　とは又、なぜに。

出羽　江戸よりわざ〳〵下りしとあるからは用向は問はいでも知れてある。そのやうな事に心動かさるゝ出羽か。

勘兵衞　したが今御對面なきに於ては、愈々江戸表の疑ひを招ぐ道理。是非にお出迎ひなされませ。

出羽　えゝ、汝等の手に乘せらるゝ出羽でないわ。（上手に行きかける）

（柳生但馬守宗矩、坂崎家の家臣に案內されて下手から出て來る。）

但馬　珍らしや出羽守、その後は變る事もなうて重疊ぢや。

（出羽無言で行きかける。）

但馬　（袂を抑へて）昔馴染が遙々江戸から訪ねて來たと云ふに、一言の挨拶もなしに行くのか。

出羽　今の出羽には友もない……家もない。あるのは世を呪ひ人を憤る瞋恚の炎ばかりぢや。

但馬　その炎を消さう爲、但馬わざ〳〵江戸より下つた。心を鎭めてわが云ふ事をよつく聞かれよ。

勘兵衞　恐れながら但馬守樣には遠路御苦勞に存じます

る。大切の御諚こゝにて承るは恐れあり。何はともあれ、先づ奥殿へ……

但馬　おゝ牧野か。去年の夏の陣以來ぢやのう。（ぢつと見て）この中よりの心遣ひ、われもさこそと察し入る。したが但馬が今度下りしは、表向の使者でない。互に心を許し合うた昔の友として腹藏なき談合を遂げん爲。（勘兵衞に何事をか眼顔で知らせ）灯影まばゆき城内の廣間よりは、裏門口の夜の闇、却つて話に都合がよからう。汝等は暫く彼方へ……

勘兵衞　後刻お目通り願ふでござりませう。

（但馬と出羽とを除き皆々上下へ別れて入る。足輕の一人うつかりして菰包の鐵砲を取落す。一同はつとする。）

但馬　（わざとさりげなく）大分重さうな包ぢやのう。ははゝゝゝ。

（一同そこ／＼に退場。）

但馬　（四邊を見廻して出羽に近づき）この度の企、洩れ聞いて驚き入つた。

出羽　勘兵衞めが告げ知らせたのであらう。主の寢首を掻く不屆奴め。

但馬　それは御身の思ひ違ひ。牧野はそのやうな不忠の臣ではない。主の爲、家の爲、日夜心を碎く彼が心を少しは察してやるものぞ。

出羽　勘兵衞の爲に辯ずるこそ胡散臭けれ。したが臣下の思惑を憚つて、折角の企、思ひ止まるわれか。

但馬　それではどうでも桑名まで押し出し、千姬君の御輿を奪はん所存か。

出羽　云はいでもの事。これよりすぐに出立の手筈も殘らず調うてゐるわ。

但馬　大御所があの折の御誓言。それを思へば御身がこの度の企も、萬更無理とは存じ申さぬ。したが世の中の事は理詰ばかりでは行かぬもの。殊更、お約束の主たる大御所にはこの春既に薨去あり、千姬君が本多家へ御降嫁の儀も、數日のうちに差迫つた今となつては……

出羽　時遲れしと云はるゝか。その緣組は誰が許して定められた。千姬君が命全うせしと同時に、姬は出羽が妻になつたも同然なのぢや。

但馬　先づ聞け。それに就いては老中土井大炊頭殿なども心を惱まし、何とぞして御身の心を慰めんと、さてこそ友垣たる我を選び、わざ／＼江戸より差し向けた次第ぢや。

出羽　わが心を慰めんとは……本多家との御緣組を破談にせうとか。

但馬　さうではなけれど……現在の知行三萬石、新知を加

へて十萬石に取立てうとの御內意ぢや。どうぢや、これなら不足はあるまいの。

出羽　（無言）

但馬　姬君の御輿を奪はんとの取沙汰もお聞流しの上、世に有難き御計らひ、頑な御身の心もこれで名殘なう解けたであらうの。

出羽　いゝや解けぬ。出羽が望むは唯大御所の御誓言に實證を立てゝ賜はる事のみぢや。その外には祿も要らぬ。知行も欲しうない。

但馬　おぞましや出羽守。さばかり物の辨へなき男子にはいつの間になりをつたぞ。叶はぬ望に心を焦し、われとわが身で破滅の淵に沈む所存か。思うても見よ、あなたは勿體なくも當將軍家一の御息女、右大臣秀賴公が先の御臺所。こなたは津和野三萬石、小城の主。この緣組の破るゝは始めから知れてあつたのぢや。

出羽　いゝや、いかに小身なればとて、あの折大御所には、並ゐる士卒の面前にて、明かにこの出羽に誓言遊ばされた。猛火に包まれし糒倉の中より孫千姬を救ひ來るに於ては、必ず汝の妻として與ふべしと、堅く詞を交はせられた。御身もあの場に居合せたれば、よも忘れは致されまい。

但馬　何の忘れうぞ。たとへ眼の前に泰山は崩れうとも微塵動じ給はぬ大御所も、肉親の愛には心亂れ、面の色をさへ變へ給うて、「千姬殺すな、孫を助けよ」と叫ばせられたあの折の聲音は、今も但馬が耳元にあるわ。

出羽　その御身が我に望を捨てさせうとは、遠い江戶より下り來て、强ひてもわが手に枷掛けうとは。

但馬　せくな。心を鎭めてあの折の大御所の御心をも察し見よ。千姬君は大御所が初孫。御誕生ありしその折には、天下の寶もこれには如かじとまで御寵愛遊ばされたものぢや。その最愛の初孫を、まだ御七歲の折、德川豐臣兩家和親の爲大阪に遣はし給ひ、それより歲霜十二年、兩家端なく矛盾となつて、千姬君には今にも淀の御方、秀賴公と共に、糒倉の火に燒かれんとし給ふ。あの折大御所が、恙なく姬君を救ひ參らせし者には、知行恩賞、望のまゝに宛て行ふべしと仰せられたは、骨肉の情として御無理があらうか。

出羽　したが、天をも焦がす焰の勢ひに恐れて、誰一人進み出る者はなかつた。「姬を助けた者には姬をくれう。」大御所には物狂ほしく叫ばせられた。その時末座から出たのがこの出羽ぢや。「そのお詞にしかと相違はござりませぬか。」からこなたは念を押した。「出羽が救はゞ出羽の物ぢや。」大御所にははつきりとさう仰せられた。

但馬　あのお詞は、恐らく大御所のお口を衝いて自然と出

たのであらう。火急の場合、後の事などを御思案遊ばす隙はなかつたのであらう。

出羽　いかに火急の場合にもせよ、大御所こそ取も直さず、この世の光、荒人神(あらひとがみ)ぢや。その御方の御誓言に詐りがあつたで濟まされうや。大御所のお詞が信じられずば、世の中は闇ぢや。出羽どうあつてもその暗闇(くらやみ)に輝く燈火(あかし)をつけねば置かぬ。

但馬　但馬がこれ程事を分けて説いてもか。

出羽　（突然左の小鬢を示し）この痕を何と見るぞ。

但馬　うむ。（凝視）

出羽　千姫君を被衣(かつぎ)に包んで小脇に掻い抱(だ)き、猛火を冐して櫓倉より躍り出でし刹那、垂木が焼け落ちて受けし傷ぢや。そればかりか、その時打ちし右の肩背、今に折々うづいてならぬ。この瘢痕、この痛みの癒えぬ限り、出羽はいつまでも大御所の御誓言を忘れまじいぞ。

但馬　（憤然として）おのれ、さうまで執念(しふね)く將軍家をお恨み申すか。この上は是非に及ばぬ。事の次第を具(つぶさ)に江戸表に申し達し、但馬改めて坂崎誅伐の討手を願ふばかりぢや。

出羽　坂崎出羽、甘んじて天下の敵とならう。城を枕にいさぎよく討死するばかりぢや。（つか／＼上手へ入る）

（但馬慨然としてその後影を見送りしが、心づきて立ちかける。）

（下手より勘兵衛出で、但馬の前に平伏する。）

但馬　牧野か。

勘兵衛　様子如何でござりましたな。

但馬　十萬石に加増せうと説いても、汝が主人の心は解けぬわ。

勘兵衛　すりやさばかりの恩命受けても……

但馬　傷けられし武士の面目……出羽が胸中を思ひやれば、氣の毒の節(ふし)もあれど、餘りと云へば分を辨へぬ剛情、我慢。どうぢやな、その方出羽に切腹を勸めて見ぬかな。

勘兵衛　何と仰せらるゝ。

但馬　德川家の御爲に一度は忠節をぬきん出し坂崎出羽、見す／＼跡目を斷絶さすも無殘ぢや。彼さへ得心して切腹致さば、將軍家の御前へは我等よりよしなに取繕ひ、家督は出羽の弟小七郎に取らせ、家の祀(まつりごと)永く斷たすまじ。

勘兵衛　御厚志、忝う存じまする。さりながら、臣下の身として主に對し切腹を勸めまするは……

但馬　このまゝに打捨て置かば、出羽は天下の逆賊とならう。家の爲を思ひなば、心を鬼にせねばならぬぞ。

勘兵衛　（きつと思案して）牧野勘兵衛、一命投げ出して主人を說くでござりませう。

但馬　それ聞いて我も安堵ぢや。
（この時四邊少しづつ明るくなる。）
（どこかで鷄の聲がする。）
但馬　おゝ、最早鷄鳴。我はこれにて退出の上、事落着に及ぶまで、城外の紫雲院にて見張致さう。必ずともにぬかるまいぞ。
勘兵衛　はつ。
（雙方顏を見合せて頷き合ふ。又鷄の聲。）

――幕――

第二幕　津和野城内大廣間

平舞臺一面に高麗縁の疊敷。正面上の方は上段の間。下の方は襖口。すべて欄間にも襖にも、華麗なる桃山式極彩色の花鳥を描く。
前場より三日を經過せし後の夜。賑やかな笛鼓の音にて幕明くと、上段の間には坂崎出羽脇息に凭れて酒盃を傾け、側室松波と、小姓一人とが左右に侍す。平舞臺では腰元梅野、楓の兩人舞を舞ひ、家臣村越左門、本庄五助、倉田傳內、渡邊半左衛門その他の若侍、腰元等、上下に居流れて見物の體。席何となく亂れる。舞漸くにして終る。梅野、楓、末坐に下りて平伏する。
皆々喝采。
梅野　拙き手振にお目を汚し――
楓　お恥かしう存じまする。
出羽　見事であつたぞ。それ、二人の者に盃取らせい。
腰元　はあ。
（腰元二人、銚子を捧げて、梅野と楓とに盃を賜はる事あり。）
出羽　この上は無禮講。夜と共に酒くらべせん。こりや傳內、この大盃を受けて見よ。（傍にありし大きな朱塗の盃を差しつける）
傳內　（呂律も廻らず）恐れながら、先刻より頂戴仕りし御酒が體中に充ち溢れて、もう一滴もいけませぬ。平に……平に……（手を振る）
出羽　弱い奴の。然らば左門は。
左門　私とても同樣にござりまする。
出羽　五助、そちに遣はさう。
五助　私が御酒のいけませぬ事は、殿にもよう御存じではござりませぬか。
出羽　誰も彼も意氣地のない事を（苛立たしげに臣下を見やり）おゝ、半左衛門、そちや聞えた豪の者ぢや。汝ならで出羽の相手になる者はない。さ、この盃を見事に乾してくれ。

牛左衛門　これはしたり。いかに大酒のそれがしでも、そのやうな大きな物であふつては、それこそ正氣を失うてしまひませう。もう夜も更けまする。又明日(あす)の日の樂みに、今夜は一先づこの邊にて……

出羽　酒をやめいと云ひをるか。

牛左衛門　昨日も今日も酒びたり。このやうな日が續きましては、お體の程も氣遣はれまする。

五助　殊には柳生殿の手前もござれば……

松波　どうぞ今宵はこのまゝに、早う御寢(ぎょし)なされませ。

出羽　酒なくて一刻も生きてゐらるゝ今のわれか。相手がならずば汝等には勸めぬ。出羽一人飮んでくれう。松波、つげ。（大盃を松波の前に差しつける）

松波　でも、それは……

出羽　えゝ、つぎをらぬか。

（松波やむを得ず銚子を取上げる。）

（上段の間の襖を開き、出羽の弟小七郎（十六歳）出る。）

小七郎　兄上……（盃を持ちし出羽の手に縋る）

出羽　汝は弟小七郎ならずや。弱年者の出る場所でない。下(さが)りをれ。

小七郎　いかに弱年の私でも、現在の兄上がこの御亂行を、よそに見過してはをられませぬ。柳生但馬守殿御下向以來は、兄上には閉門同樣の御身分。謹愼の上にも謹愼して、上のお疑ひを解かねばなりますまい。

出羽　出羽の心がそち達に分らうや。猪口才な事を申すな。

松波　いえ〳〵、左樣ではござりませぬ。その事に就きましては叔父勘兵衛も心を痛め、どうぞそなたより御前(ごぜん)へ宜しく申し上ぐるやうにと、今朝もくれ〴〵申してゞござりました。

左門　お二方が心を盡しての今のお詞。

牛左衛門　どうぞ今宵の御酒宴は——

五助　これにてお引けになされませ。

松波　このやうな處を叔父にでも見られましたら、何かと口喧ましう申されませう。さ、腰元衆も氣を利かして、早うこのお席を片付きやいの。

腰元　はあ。（立上りて銚子盃を始末しかける）

出羽　待て。誰が許して酒宴をやめいとは云うた。

松波　でも、この間の夜以來、殿樣には御謹愼の御身……

出羽　それとても勘兵衛めが、よしなき事を江戸へ密告せしばかりに。（何か云はうとする松波を抑へて）いゝや、さうぢや。出羽が明らかな眼にて睨んでゐるわ。勘兵衛は但馬と心を合せ、生きながら主の自由を奪ひをつた。そちは彼が實の姪。檻に入れられた獸に等しき今のわが姿を見て、心では叔父同樣、手を打つて喜びをらうな。

松波　（泣聲て）殿樣、それはあんまりお情ない。いかに愚な女子の身でも、勿體ない、お主樣に對しそのやうな事夢にも思うてよいものか。御殿へ上つてこゝ半年、叔父勘兵衞に申し含められました事を心に締め、不束な身ながらも、何とぞして殿樣のお心が柔らぎますやうと、それのみ祈つてをりまする。

出羽　問ふに落ちず、語るに落ちると、叔父に云含められたと云ふが何よりの證據。汝等二人心を合せ、どうでもこの出羽を腰抜武士にせうと計るに違ひはない。

松波　殿樣。（取縋らうとする）

出羽　えゝ、寄るな。（松波を突き離し）酒だ、酒だ。腰元共、酒を持ちをらぬか。（盃を持つて立ち上り、ふらふらと上段の間を降りかけて撞と腰を落す）

（腰元等はどうしていゝのか、唯おろ〳〵。）

（この時牧野勘兵衞、近侍二三人に支へられながら下手の襖口から出て來る。）

勘兵衞　いゝや、留めだてされな。いかに御酒宴最中なりとて、申上ぐべき事は申上げねばならぬ。（近侍を突き退けてつか〳〵と進み出で）殿。

出羽　（きつと見すゑて）勘兵衞か。何と思うてこゝへは參つたぞ。

勘兵衞　杯盤狼藉たるこの場の有樣、これは一體何事でござりまするな。

出羽　問ふまでもない事。臣下を集めて夜と共に酒汲み交すのぢや。

勘兵衞　唯今の御境涯にて、殿にはよくもそのやうな事が平氣で仰せられまするな。城外の紫雲院に御滯留の柳生殿に對しても、かゝる無禮講はお愼み遊ばさねばならぬ御身ではござりませぬか。

出羽　二言目には柳生々々と、それ程恐ろしい但馬守か。

勘兵衞　したが、あなたは江戸よりのお目附役。その御行が巨細に御老中方のお耳に傳はるに於ては、當家の爲、由々しき大事に相成りまする。

出羽　その忠義面見たうないわ。家よ名よと云ふ口の下から、汝こそ但馬に取入つて、この出羽を押込めの身となし、坂崎の家を計らはうとたくらむならずや。

勘兵衞　（きつとなり）こは餘りの御仰せ。何を證據に左樣な事は申されまする。主君のお詞とて聞捨てにはなりませぬぞ。

出羽　證據呼ばはり片腹痛い。千姫君を奪ひ奉らん企を江戸に密告して、但馬守を迎へ來りしが何よりの證據。その上但馬と心を合せ、生きながらに我を葬らんとのたくみ。これでも汝は覺えなしと云張るか。

勘兵衞　さうまで仰せあるからは何事も包み隱しは致しま

すまい。いかにも勘兵衛、殿の御身を思ふの餘り、豫々御入魂の間柄なる柳生殿のお手許まで密々に書狀を差上げ、然るべき御配慮をお願ひ申したに違ひはござりませぬ。したがそれも皆、お家の爲を思ふの餘り、露些か他意あつての事にあらず。

出羽　云ふな、云ふな。主の身に手械足枷をはませるやうな事をして、それでも主に盡すとなら、世の中に不忠の臣は一人もない筈ぢや。弟小七郎は弱年なり、姪の松波をわが側室に薦めし時より、汝の心は早くも坂崎家を已が氣儘になさんと決してゐたのぢや。

勘兵衛　いかにお心に御不平がおはせばとて、餘りと申せば餘りのお云懸り。柳生殿お下りあつてよりこゝ幾日、勘兵衛が身も痩せ細る苦みを、殿には少しもお汲取り遊ばされぬか。

出羽　苦しむなら勝手に苦しめ。出羽の知つた事か。（ころりと肘枕）

勘兵衛　殿。（躙りかねて間近く寄る）

出羽　まだ申さうとか。よい加減に下りをらうぞ。

勘兵衛　それがし一人心を碎いても、殿がその御性根では何にもなりませぬ。この上は明ら様に申上げませう。

出羽　云ひたくば勝手に申せ。寢ながら聞いて遣はさうぞ。

勘兵衛　殿にはそのやうな太平樂をお吐き遊ばせど、殿のお命はこの勘兵衛がお預り申してをるのでござりまするぞ。

出羽　何と。（きつとなつて半身を起す）

勘兵衛　殿には御心を靜めて、それがしが申上ぐる事、よつくお聞き遊ばされませう。先夜柳生殿にはお歸りの節それがしに向はせられ、分を辨へぬ出羽守が剛情、我慢、なれども將軍家の御爲に一度は忠節をぬきん出し坂崎の家を、このまゝ斷絶さすも不憫故、汝主を說いて切腹させよ、さすれば我江戶に歸つて御前へよしなに取做し、家督は弟小七郎に繼がせて、家の榮を長く計るべしとの御諚。否みもならずお受けは申上げしものゝ、臣下の身として重代の御主君に、どうして御腹召せとお勸め致されませう。唯この上は、殿には御身を愼み給ひて、假初にも人の口の端にかゝるやうなる御事を遊ばさで在せかし。さすればそれを云立てに、いかにもして柳生殿を賺し參らせ、江戶表の御不興を和らげんと心を碎きし事も水の泡。さばかり人の誠を疑ひ給うて、する事なす事、皆惡し樣にのみお取り遊ばされては、勘兵衛最早策に盡き果て申した。

出羽　それ故但馬に智慧を附けられし通り、我に切腹を勸めうと云ふのであらう。汝の心は、出羽聞かいでも存じてをるわ。

勘兵衞　（涙聲て）いかにも御推諒の通り、今改めてそれがよしり、殿に御切腹をお願ひ申上げまする。坂崎のお家を大事と思召さば、どうぞこの場で御生害下さりませ。

（席に並ゐる面々、驚いて顏を見合す。）

出羽　さすれば豫ての本望通り、坂崎の家は汝が思ひのまゝとなる故にの。

勘兵衞　これ程理を盡して申上げても、殿にはやつぱりそのやうに、それがしをお疑ひ遊ばさるゝか。

出羽　えい、最後まで主をたばかる心か。（手にした大盃を勘兵衞に投げつける）

松波　あれ、お危うござりまする。

（松波や小七郎は驚いて出羽を支へる。勘兵衞は額に盃を當てられてうつ伏しになる。皆々介抱する。勘兵衞面を上げろ。額からたら〳〵血が流れてゐる。）

勘兵衞　殿。（身を顫はせて出羽に詰め寄る）

出羽　主を討る報いを知りをつたか。汝に打たれぬ先に、我より汝を打つてくれるわ。（小姓の手より佩刀を奪つて、拔きにかゝる）

（皆々留める。）

勘兵衞　諫言耳に逆らうてのお手打となら、固より臣として望む處。さ、見事お斬り遊ばされよ。

出羽　おゝ、斬らいでか。留めだて致すな。放せ。放しをらう。

左門　御家老の方よりそのやうな事を仰せられては、猶の事お氣が昂ぶらせられます。

半左衞門　後はよしなに我々より申し繕ひますれば、早くこゝをば……（勘兵衞を立たせようとする）

出羽　えゝ、逃げうとて逃がさうや。それへ直れ。それへ直れ。

小七郎　兄上の御立腹も御尤ではござりますれど、それとても皆、お家を思うての餘りでござりますれば……

松波　どうぞ今宵の處だけは、お赦しなされて下さりませ。

（荒れ狂ふ出羽を、人々は無理に宥め賺して奥に連れ行く。廣間には勘兵衞一人殘る。額を抑へて彼は暫く無念のこなし。軈て何事をか決する所あるが如く、立上つて下手に行きかける。）

（上手の襖口から松波出て來る。）

松波　叔父上。

勘兵衞　（振向いて）松波か……殿には何となされたぞ。

松波　漸々御寢所までお連れ申しました。今方の事などは忘れたかのやうに、すや〳〵と御寢なつてゞござります。

勘兵衞　武士の額に疵を負はせながら、お心にも留めいでか……

松波　（痛ましげに）疵はお痛みなされまするか。

勘兵衛　額の疵は癒えもせう。心に受けしこの痛手は……

松波　どうぞ殿樣を恨まずに下さりませ。殿樣の今のなされ方は、私とて餘りなとは思ひました。したが殿樣の此頃のお心を思ひ遣れば、氣荒におなり遊ばすのも御無理ではござりませぬ。

勘兵衛　松波、わしはそなたに濟まぬと思うてをるぞ。

松波　叔父上とした事が……なぜでござります。

勘兵衛　そなたを殿に薦めしばかりに、させいでもよい苦勞をさする。

松波　あれ、何かと思へばそのやうな事でござんすか。殿樣の爲に心を使ふなら、わしや本望でござります。

勘兵衛　それ故に猶の事、わしはそなたが不憫なのぢや。そなたがその心盡しも……勘兵衛がこの苦衷も……殿には少しも汲み分け給はず、只管邪推の御眼を以て眺め給ふ。我等の立つ瀬がどこにあらう。

松波　御疳癖強いだけに、折れるのも早い殿樣の事、醉が醒めたら惡い事をしたとあなたからお詫びなさるは定。その時こそ今一度私からお諫め申して、きつとお愼み遊ばすやうに致しませう。御切腹の何のと、今方のやうな恐ろしい事は、嘘にも云うて下さりますな。

勘兵衛　心配致すな。わしには決する所があるのぢや。

松波　その御決心とやらが氣懸りな。叔父上、お願ひでござります。どうぞ殿樣を恨まずに下さりませ。

勘兵衛　殿の御身をそなたはそれ程にお氣遣ひ申すか。（ちつと松波の顔を視つめて眼を瞬いたが、すぐに氣を變へて）はゝゝ、勘兵衛はそなたの叔父ぢやぞ。血を引いた實の姪に泣きを見せるやうな事をしてよいものか。殿がお目を醒まされうも知れぬ。早うあちらへ。

松波　でも……

勘兵衛　えい、參れと申すに。

松波　は……い。（後に心を殘しつゝ上手へ入る）

勘兵衛　（ちつと見送つて）あのやうに慕ひ參らするものを……歎きの程も不憫なれど、お家の行末には替へられぬ……

（この時遠くにて夜警の拍子木の音。勘兵衛四邊を見廻し、急ぎ足に下手へ入る。）

（道具廻る）

同　出羽守寢所

本綠附の二重家體。正面の上の方は床の間、違ひ棚、下の方は綸襖。上手折廻して廊下。平舞臺の下手奥の方は一面の植込にて、家體に接して袖垣などあり。床の間の前に金屛風を廻らし、その蔭に坂崎出羽うたた寢をなしゐる。枕元に燈臺一つ。

下手寄の縁側近く、松波琴を彈じてゐる。蒼白き月光斜に屋内を照らし、植込に蟀の聲頻りなり。

出羽　（むつくりと半身を起し）うと〳〵とまどろむ隙に、夢としもなく聞き入りし微妙の音樂……松波が彈く琴の音であつたか。

松波　お目醒めでござりまするか。（琴を措いて傍へ來ようとする）

出羽　構はずと續けてくれ。久し振に聞くそちが爪音、何とはなしに心が和むわ。

（松波再び琴を彈じ出す。出羽は暫くそれに聞き恍れてゐたが、次第に苦痛に堪へざる如き表情となる。）

出羽　やめてくれ。彈くのはやめてくれ。

松波　（驚いて手を留め）たつた今方は彈けと仰しやつたに……何ぞお氣にさへられる事でも……

出羽　何の氣になど觸らうぞ。美しい糸の音を聞いてあれば、亂れし頭も鎭まりて、水のやうに心が澄むわ。したが、その澄み渡る心の底から湧き上るは、堪へ難き寂寞の思ひ……

松波　――

出羽　骨に食入るこの寂しさは何ぢや。消えも入りたきこの頼りなさは何ぢや。死にかゝつた蟀の聲。そちの耳にはあれが何と聞ゆるぞ。明日をも知れぬあの蟲の音こそ、取も直さず出羽が今の心を唄うてゐるのぢや。

松波　今宵に限つて殿樣には、なぜそのやうに心細い事ばかり仰しやります。悲しい唄がいけずば、何ぞ陽氣な曲を彈じませう。

出羽　いや〳〵、琴の音は徒らにわが心を痛むるばかりぢや。彈いてくれるな。

松波　そんなら酒なと持つて參りませう。醉醒は誰も心寂しいものとか申しまする。（立ちかける）

出羽　酒……いや、それも飲むまい。醉へば又しても心が荒まう。

（松波默つて何事をか考へてゐる。）

出羽　今宵もわしはそち達に、いかい迷惑を掛けたやうぢやの。

松波　（はつとしたやうに）いゝえ、それ程でもござりませなんだ。

出羽　いや〳〵、わしにも思ひ出さるゝぞよ。わしはそちの叔父を捉へて劇しく云罵つたやうであつたな。血汐したゝる額を向けて、わしを睨んだ勘兵衞が眼ざし……おお、わしが盃を投げつけて、彼の眉間を割つたのぢやな。

松波　それとても叔父の詞が過ぎし故。殿樣のお怒りは御尤でござります。

出羽　勘兵衞めは主に腹切れと云ひ居つた。（一度は激し

たが、すぐに弱々しい調子になつて）それも道理か。生き存へたりとて、所詮は望なき成正。徒らに世を恨み、人を罵つて臣下の憂ひを増さんより、潔う腹切る方がましであらうも知れぬ。

松波　滅相な。大事の御身に御切腹の何のと、そのやうな忌はしい事は、忘れてもお口へは出さぬもの。それだけのお心が在しまさば、どうぞこれからは御身を愼み……

出羽　その事なら云はずにくれ。千姫君を飽くまでわが物にと云張るのは武士の意地ぢや。その意地を立て通さう爲、わしはどれだけ多くの牲を捧げてゐる事であらう。出羽一人の命と食祿とを擲つのみか、亂酒に總てを忘れては、罪なき家臣に堪へ難き恥辱をまで與へる。然も、酒醒めて胸を打つものはこの侘びしさ……賴りなさ……

松波　――

出羽　勘兵衞とわしとは氣質が違ふ。わしのする事を勘兵衞は好まぬ。勘兵衞のする事をわしも好まぬ。したが勘兵衞が出羽の身を氣遣ひ、坂崎家の行末を憂ふる誠に詐りはない。それだけはわしも疑はぬ。家中の諸士が並居る前で、先刻のやうな恥辱を彼に與へたは、皆酒のさせる業ぢや。出羽心より詫び入ると、どうぞそちより傳へてくれ。

松波　は……はい。

出羽　勘兵衞ばかりか、わしはそちにも詫びねばならぬ。側仕に參つてより早半年。我儘氣隨の我に侍して、遂に一度の厭ひもなく、蔭日向なく盡しくるゝ眞心の程、出羽仇には思はぬぞよ。

（松波、答も得せずすゝり泣く。）

出羽　そちや泣いてをるな。何で泣くぞ。

松波　有難い今のお詞を承つて、どうして泣かずにゐられませう。たとへこのまゝ死にませうと、わたくしは……もう本望でござります。

出羽　出羽に云はれた今の一言が、そちやそれ程に嬉しいか。……優しい女心よのう。ならう事ならわしも頑固な武士の意地などは捨てゝ、さうした優しい、和らいだ心持になりたい。

松波　（思はず摺り寄って）殿樣、どうぞその和らいだお心持におなり下さりませ。津和野三萬石の御城主として、いつまでもお家の榮をお樂しみ遊ばしませ。

出羽　さうしてそちと手を取つて、餘生を安穩に送らうか。（優しく松波を引寄せたが、軈て緣端に立つて行つて）おゝ、月も大分傾いたな。……蟲が鳴く。雨より繁く蟲が鳴く。絶え入るやうなあの聲を聞いてゐれば、唯今生の寂しさのみ身に沁みて、恨みも、呪ひも、憤りも、幻影のやうに消えて行くわ。

（庭には頻りと蛼の聲。良あつて出羽、右肩を抑へて苦痛のこなし。その苦痛次第に昂まりて呻きの聲を立てる。）

松波　どうぞなされましたか。（驚いて介抱）

出羽　この肩骨が疼いてならぬ。千姫君を掻い抱いて糒倉より出でんとせし折、燒け落ちし垂木にて打ちし疵痕が……（次第に心が狂暴になる）

松波　夜風が沁みては猶悪うござりませう。早う御寝なされませ。

出羽　骨の髓からきり〳〵と揉まれるやうなこの痛み……それにつけても思ひ出さるゝはあの折の事。あの時出羽が身を挺して猛火の中に躍り入らずば、姫の御體は糒倉の灰となつたは必定。さすれば今日、播州の本多家と御緣組を結ぶ目出度き日にも逢ひ給はぬ道理……（益々苦吟する）

松波（おろ〳〵聲で）あれ、誰ぞ來て下さりませ。殿樣が大變でござります。

出羽　この痛みの癒えぬ限り、姫の事は思ひ切らぬ。大御所の御誓言を忘れはせぬ……

松波　そのやうにお昂り遊はしては、猶と痛みが重うなりませう。唯今……唯今お醫者さんを呼んで參りますれば、暫くこれにてお休みを……（無理に出羽を屏風の蔭に寢かしつけて、あたふた上手の廊下口へ駈け入る）

（後暫くは屏風の中にて出羽が苦吟の聲。）

（月雲に隠れしと覺しく、舞臺急に暗くなり、蟲の音もやむ。）

（植込の蔭より勘兵衛、覆面、拔刀にて忍び出づ。）

出羽（聲のみにて）家が何ぢや……家來が何ぢや。廢れし武士の面目、立ていで置かうか……（苦吟）

（勘兵衛その聲を頼りに土足のまゝ二重に上り、いきなり枕元の燈臺を吹き消す。四邊暗黑。）

出羽（物音を聞き咎め）何者ぢや。（身を起す）

勘兵衛　殿、御免。（出羽の右肩へ斬りつける）

出羽（斬られながら身を構へ）何奴なれば名のりも上げず、寢込を襲ふとは卑怯千萬。

勘兵衛　いか程御生害をお勸め申しても、お聞入なき是非なさに、やむなくきたなき振舞致した。

出羽　さういふ聲は勘兵衛ぢやな。さては今宵の事を根に持つて、主をあやむる心になつたか。さうとは知らず今の今まで、汝に詫びんと思ひし事の愚さよ。

勘兵衛（覆面をかなぐり捨て）主君を斬るもお家の爲、唯お命を下さりませ。（斬つてかゝる）

出羽　などかおめ〳〵汝に打たれう。斬れるものなら斬つて見よ。（痛手を忍びつゝ、手當り次第に室内の調度を

投げつける）

（松波、雪洞をかざし、醫師寺澤了齋を案内して廊下口から出て來る。）

松波　まあ眞暗な。どうしたと云ふのであろ。

了齋　その上、唯ならぬあの物音。

（二人急ぎ足に寢所に入りかけ、闇にきらめく白刃の光を見てびつくり。）

了齋　ひやあ、大變ぢや。御寢所へ曲者が忍び入りました。お出會ひなされ。お出會ひなされ。（消魂しく叫んで廊下口へ逃げ行く）

松波　殿の御身を窺ふ慮外者、わしが相手ぢや。（雪洞投げ捨て、懐劍抜いて勘兵衛に切つてかゝる）

（勘兵衛輕くあしらふ。その時月光再び雲間を洩れ、四邊明るくなる。）

松波　（月影に勘兵衛を見咎めて）や、こなたは叔父上……

勘兵衛　これまでぢや。（松波を斬り捨てる）

（この時了齋を案内に、村越左門その他前場の侍多勢出で來り、ばら／＼と勘兵衛を取卷く。）

左門　主君の御身に刄を當てし痴れ者、御家老なりとて容赦はならぬ。引括つて縛り首にせよ。

一同　云ふにや及ぶ。（一齊に打つてかゝる）

勘兵衛　殿の御首賜はらぬうちは、などか御邊等の繩目を受けうや。

五助　何を小癪な。

（勘兵衛諸士を相手に奮鬪したが、とゞ多勢の爲に刀を打ち落され、繩にかゝる。その間に了齋は、白刃の下をびく／＼もので、手負の出羽と松波とを介抱する。）

半左衛門　（出羽の耳元に口を寄せ）御安心あれ、殿を害せんと企てし勘兵衛には、まつその如く繩かけましたぞ。

左門　この上は城外の紫雲院に御座ある柳生殿に訴へ出で、然るべきお捌きを受けるでござらう。

五助　それぞ誠に上分別。牧野殿、立ちませい。

（この時植込の方より柳生但馬守、近侍二人を從へ出て來る。）

但馬　いや、それには及ばぬ。知らせに依つて但馬ぢきぢき検分に參つた。

（一同はつと平伏する。）

但馬　（つか／＼勘兵衛に近づき）えらい事をやつたものぢやの。

勘兵衛　いか程理を盡して御生害をお勸め申しても、耳にも入れ給はぬ殿の御亂行。臣下の身として主君の肌に刄を當てる切なさ、苦しさ……御推諒下さりませ。

但馬　家の榮えを願ひなば、主人を說いて切腹させよと云ひし但馬の詞が、かくも痛ましき果を見るか。さりなが

ら彼程の大事引起せしからは、汝にも覺悟があらうな。

勘兵衛　仰せまでも候はず、命は始めより投げ出しての事。唯心懸りは弟小七郎君の御身の上……まつた坂崎家の御行末……

但馬　心配致すな。その事なら但馬よう心得てゐるわ。（二重に上つて）心を慥に出羽守。柳生ぢや。但馬ぢやぞ。

出羽　なに、但馬とな……（苦しい息の下よりきつとなり）ようも汝は勘兵衛を唆かして、わが一命を奪はうとはたくらんだな。

但馬　この期に及んでまだ疑ひ。勘兵衛は坂崎家を全うせん爲に、御身の命を牲にした忠臣ぢやぞ。

出羽　えい、見え透いた詐り聞きたうないわ。

（廊下口より小七郎駈け出づ。）

小七郎　兄上、淺ましいお姿におなりなされましたなあ。（取縋る）

勘兵衛　殿のお憎しみは、勘兵衛七生までも受けませう。唯、お家の行末を思ひ給はゞ、御息のあるうち一言なりと、弟君の御事を柳生殿にお頼みなされませ。

出羽　曾ては御主君たる大御所に欺かれ、今又臣下たる汝の手にかゝる。その我に何の家ぞ。弟ぞ。坂崎出羽はあらゆる物に欺かれた。人も信ぜぬ。道も信ぜぬ。神も信ぜぬ。あらゆる物を疑ふのぢや。あらゆる物を呪ふのぢや。

但馬　こりや、出羽守。

出羽　（恐ろしい眼をして）汝は友を賣つた恥知らずぢや。

勘兵衛　それこそ殿の御邪推と申すもの。

出羽　默れ、汝こそ主を斬つた大惡臣ぢや。盡未來まで呪ひを掛けうぞ。

松波　（息も絶え〴〵に）殿樣、わたくしばかりは……（縋り寄る）

出羽　おゝ、そちも手を負つたか。（痛ましさうに松波の顔を眺めたが、急に荒々しく突きのけて）えい、寄るな。何物をも出羽は信ぜぬ。何物をも出羽は疑ふ。

勘兵衛　それがしこそ殿の呪ひを受けませう。松波が誠を疑ひ給ふとは、餘りに酷きおん心。

出羽　世をも呪はう。人をも呪はう。生ける千姫君を呪ふばかりか、死して地獄の苦艱を舐め給ふ大御所をも、永劫の果まで呪ひ盡さうぞ。（物狂ほしく叫びつゝ、段々息絶え行く。）

但馬　上を恐れぬ大不敬の詞。この上は勘兵衛が苦心も水の泡。坂崎家は今日限り斷絶ぢやぞ。

（勘兵衛、小七郎を始め、皆々水を浴びせられたやうにはつとして平伏する。絶え入るやうな呻の聲。）

――幕――

（大正八年十一月作）

故國の家（一幕）

人物

狹山晉吉

淸元延多津　その妻

英一　その子

お光

村井良太

舞臺は東京の下町によく見かけるやうな稽古所の內部。上手が六疊の茶の間で、下手が三疊の取附の間。三疊の正面は中硝子の二枚障子を立て、その向ふは往來に面した格子口になつてゐる。茶の間の上手は臺所口で、そこに障子が閉まつて居る。それに接した正面が二階へあがる階段口になつてゐるのだが、襖がぴたりと閉されてゐるので梯子は見えない。それに接した壁には三四挺の三味線が懸けられ、その下あたりに稽古臺や小机が置かれてある。よき處に茶簞笥、長火鉢。

幕明くと延多津、外出の服裝、氣せはしなさうに中腰で眞を呑んでゐる。玄關口でお光が下駄を出してゐる。

延多津は四十三になるのだが、ひどく若作りなのでちよつと見には三十五六にも見える。お光は十八九。

お光　お師匠さん、お履物はどちらになさいます。吾妻下駄。それとも小町。

延多津　さうさね、やつぱり吾妻下駄にしようよ。（烟管を措いて立ちかける）

（梯子を降りる人音がして正面の襖口から英一が出て來る。二十二歲。おとなしやかな書生風。古い江戸趣味がまだ多分に名殘を止めてゐるやうなかうした稽古所の周圍には甚だふさはしからぬ姿形である。）

英一　（母の姿を見て）出かけるんですか。

延多津　今日は五日ぢやないか。松田さんのお宅へ稽古をつけに行くんだあね。

英一　さうでしたね、すつかり忘れてゐた。ぢや行つて入らしやい。（長火鉢の傍にあつた新聞を取上げる）

延多津　（立ちかけた腰を又元へ戻して）それにしてもお父さんはどうしたと云ふのだらうね。昨日出たつきり鐵砲玉になつてしまつて。十九や二十の若い者ぢやあるまいし、だらしがないにも程があるよ。

（英一無言。ぢつと眼を新聞の上に走らせる）

延多津　英ちやん、本當にお父さんはお前に何とも云つて行かなかつたのかい。

英一　お母さんも疑り深いな。久し振で淺草へでも行つて見るかなつてぶらりと出て行つたんだつて。あんなに云つてゐるぢやありませんか。お父さんの事だ、どつかで飲み潰れて動けなくなつたんでせう。心配しないでも今日ぢうには歸つて來ますよ。

延多津　心配はしないが、あんまり人を踏みつけにしてゐるからさ。考へて御覽、あの人が滿洲から歸つて來て今日で幾日になるとお思ひだい。もう彼此三月だよ。その間勤め口一つ探して見るぢやなし、唯うか〳〵と日を立てゝ、家にゐれば朝から酒びたり。こんな事をしてゐたら、末には私達まで干乾にされてしまふよ。

英一　まあそんなに云つたものでもありませんさ。お父さんだつてあれでなか〳〵考へてゐるんですよ。だが八年も日本を離れてゐたんだ。今急に歸つて來て見ると、世の中の事情はすつかり變つてしまつてゐる。昔懇意にした人達も赤の他人のやうに疎遠になつてゐる。その上年を取つて體は弱る。新しい仕事に手を出すだけの元氣がなくなつてしまつたのですよ。もう少し休養させて上げなければ氣の毒だ。

延多津　お前は此頃何かと云ふとお父さんの肩をお持ちだが、ぢやあの人ばかり氣の毒で、このおつ母さんは何ともないとお思ひなのかい。十四の年にお前を捨てゝ遠い他國へ行つてしまつたお父さんの方が、女の手一つで今日の年までお前を育つて來たおつ母さんより大事だと云ふのかい。

英一　何を云つてるんだな。僕だつておつ母さんが僕の爲にどの位苦勞をしてゐるかといふ事はよく知つてゐる積りです。だから僕も……

延多津　いゝよ、いゝよ、お父さんが歸つて來てからお前の心はすつかり變つてしまつたんだからね。お前がさういふ心なら私にだつて覺悟がありますよ。

英一　おつ母さん。

延多津　その話はもうやめにしよう。私は出稽古に行かなけりやならない體なんだからね。（つか〳〵玄關口へ行く）

（お光がそれを見送る。延多津は手荒に格子を開けて出て行く。）

お光　（英一を顧て）兄さん、お師匠さん隨分ぷり〳〵して入らしつたわね。

英一　此頃おつ母さんはどうしてあゝ感情がこじれてしまつたんだらう。全く厭になつてちまふ。

お光　でも、私はお師匠さんの方が無理はないと思ふわ。あれぢやお父さん全く我儘過ぎるんですもの。歸つてらしたら兄さんから何とか云つた方がいゝわ。

英一　僕等が彼此云はないでも、自分の缺點はお父さん自身がよく知つてゐるのだ。それを傍(はた)からうるさく云ふのは却つてお父さんを苦しめるやうなものだよ。
お光　でも云はずにゐたら、お父さんはいつまでだつてああしてゐるでせう。それぢやお師匠さんの立瀬がないぢやありませんか。
英一　お前もおつ母さんもお父さんを誤解してゐるから駄目だ。お父さんが初めて滿洲へ行つた時は僕もまだ少さかつたから、本當にお父さんがどういふ人だか分らなかつたけれど、今度歸つて來たので僕も大いに覺る所があつたよ。長い間おつ母さんから聞かされてゐたお父さんと、現實のお父さんとは、まるで人柄が違つてゐる。おつ母さんの口癖の大山師でもなけりや、箸にも棒にも懸らない道樂者でもありやしないよ。
お光　ぢや小父さんはどういふ人なの。
英一　さうさな、云つて見れば一個の空想家さ。常に夢を追つてゐる人さ。
お光　兄さんの云ふ事は私にはちつとも分らないわ。
英一　分らうと力めないからさ。軟らいだ溫い心でお父さんに對して御覽。お父さんの眞實の姿が自然とそこに見えて來るよ。
お光　愈々分らなくなつて來たわ。（話をはぐらかすやうに）そんな事より村井さんどうしたんでせう。此頃ちつとも見えないわね。
英一　（急に不愉快な表情になつて）來なけりやどうしたと云ふんだ。あんな男、來ないでちやうどいゝ。
お光　あら隨分ね。村井さんの事と云ふと兄さんはきまつて厭な顔をするけれど、でもお師匠さんはどんなにあの方を力にしてゐるか知れなくつてよ。唯のお弟子さんぢやなくつて、まるで弟か悴のやうに思つてゐるのよ。お師匠さんが此頃機嫌の惡いのは、お父さんの事もあるけれど、一つは村井さんが顔を見せないせゐかも知れなくつてよ。
英一　（顔色まで變つて）馬鹿な。そんな事があつて溜るものか。
お光　だつて本當にお師匠さんは村井さんが贔屓なんですもの。だからほかのお弟子さん達の間ぢやいろんな噂が立つてゐるやうよ。
英一　噂とは、どんな噂だ。
お光　厭、そんな怖い顔しちや。私もう何にも云はないわ。
英一　（唇を嚙んで）どうせ下らない事だらう。聞かないでも分つてゐる。兎に角、今後村井が家へ來るやうな事があつたら、僕は強く云つて二度と家の閾(しきゐ)を跨がせないやうにしてやる。

お光　あら、そんな事をしちやいけないわ。それぢやあんまり失禮だわ。
英一　何が失禮だ。村井こそ僕達にこの上もない侮辱を與へてゐるのぢやないか。そんな噂まで立てられるやうになつて、お前は殘念とは思はないのか。
お光　だつて、それはほんの蔭口ぢやありませんか。お師匠さんだつてまさか……それにお父さんも歸つて見えたんですから……
英一　それだから猶の事僕は氣が揉めてならないんだ。もしそんな事がひよつとかしてお父さんの耳へでも入つて見ろ……
お光　（門口を見て）おや、唯か格子を開けたやうよ。（立つて行つて玄關の格子を内から開く）まあ、お父さん。
英一　（同じく急いで立つて行き）どうしたんです、お父さん、今まで……
（玄關先に力なく立つた父晋吉の姿が見える。年は五十七だが、深く刻まれた額の皺にも、げつそりと痩せ細つた肩のあたりにも、長い間の放浪生活の慘苦があり／＼と現れて、年よりは三つ四つ老けて見える。）
晋吉　（英一の問には答へず、家の中を覗くやうにして小聲で）おつ母さんは。
英一　さつき出稽古に行きました。そんな處に立つてゐないで早く上つたらいゝぢやありませんか。
晋吉　やれ／＼、それでもおたつがゐないと聞いて安心したよ。（ほつとしたやうに内に上つて、うそ／＼長火鉢の方へ來る）
英一　一體どこへ行つてゐたんです。おつ母さんが大分ぶつ／＼云つてゐましたぜ。
晋吉　さうだらうと思つたんだ。己だつて何も初めつから泊つて來る積りぢやなかつたんだが……實は昨日淺草で思ひもかけない人に逢つてな。
英一　思ひもかけないつて、誰です。
晋吉　お前は知らないがな、己が大連にゐる時分商賣の方で懇意にした男よ。いや、こりや珍らしい、いつこちらへ歸つて來たんです、兎に角そこらで御飯でも食べようぢやありませんかつてな事が始まりで、ついだら／＼に泊るやうな事になつてしまつたのさ。今朝は早く歸る積りだつたんだが、明るいお天道樣の顏を見ると、何だかそのまゝのこ／＼歸つて來るのが氣が咎めて、友達と別れると、又晝席なんかへ入つてしまつた。はゝゝゝ、年甲斐もない、お前に對しても面目ない話よ。
英一　それにしても、ひどく顏の色が冴えないぢやありませんか。心持でも惡いんぢやありませんか。
晋吉　ゆうべの酒が利き過ぎたんだらう。何だか厭に頭が

重い。大して飲みもしないのに、からもう意氣地がねえや。はゝゝゝ。（てれかくしのやうに寂しく笑ふ）
英一　光ちやん、お酒がまだあつた筈だな。
お光　さあ、どうでしたか知ら。
英一　をとゝひのがまだ殘つてゐる筈だ。お父さんに一本つけて來てお上げよ。
晉吉　折角だがまあ止しにして置かう。おたつでも歸つて來るとうるさいからな。
英一　大丈夫、まだ歸つて來やしませんよ。まあ迎へ酒に一杯やつて御覽なさい。少しは頭が輕くなるでせうから。（この間にお光は立つて臺所口に入つたが、ぢきに盆の上に銚子、杯を据ゑて出て來る。）
お光　兄さん、これつきりよ。
英一　それでもないよりましだからな。（徳利を銅壺の中に漬けて）それから、何か肴になるやうな物はないかな。
お光　さうですね、お晝の時みんなにしちまつたから……
晉吉　いゝやな、それだけ酒がありや澤山だ。肴なんかいるものかな。
英一　さうだ、海苔があつたけ。これで我慢しといて下さい。（茶箪笥の上に置かれたブリキの箱から海苔を取出し、火に炙る）
（お光は默つてこの様子を眺めてゐたが、不意に襖を開けて、とん〳〵二階へあがつて行く。）
英一　（銚子を銅壺から取出して）どうです、もういゝやうですぜ。
晉吉　ぢや遠慮なしに頂戴するかな。何だかどうも濟まないやうな氣がするな。（嬉しさうに英一に酌をして貰つて飲み）あゝ、いゝ氣持だ。やつぱり酒はうまいな。
英一　二三杯立て續けに引懸けた方がようござんすよ。
晉吉　己一人でやつてゐるのも氣がさすなあ。どうだい。お前も一杯。
英一　僕はまあよしにしておきませう。お酒は成るべく飲み習ふ癖をつけないやうにしてゐるんですから。
晉吉　それもさうだ。あんまり飲んでお父さんのやうな人間になつちまつても困るからな。（暗い顏をしてちびりちびり盃を舐める）
（二階から三味線の音が聞えて來る。お光が「みちとせ」を浚つてゐるのである。）
〽あとには二人差合も、涙拭うて三千歳が、恨めしさうに顏を見て……
晉吉　（ぢつと耳を澄まして）お光だな。なか〳〵よくやるぢやないか。

英一　え丶、藝の筋はい丶んですつて、おつ母さんも讃めてゐます。

晋吉　（だん／＼醉が廻ると共に、いくらか冷かし氣味で）己が滿洲へ行つてゐる間も、あんな子が家へ來てゐる事は一邊だつて書いてよこさないので、不意に歸つて來てあの子の顏を見た時にや、己は本當にびつくりしたぜ。おや／＼、内の忰はいつお嫁さんを貰つたか知らと思つてな。おつ母さんもうまい子を目つけたものだ、やつぱり親は親だけの事があると感心したよ。

英一　からかふのはよして下さい。お光の事に就いちや僕は眞面目に心を痛めてゐるんですよ。

晋吉　心を痛めてゐるつて……ぢや何か、お前お光に對して何か氣に入らない事でもあるのか。をかしいな、そんな筈はないと思ふがな。器量は十人並すぐれてゐるし、少しおきやんぢやあるが氣さくなたちだし、その上藝の筋がい丶と來てゐるんだから、先づ將來美術家として立たうとしてゐるお前の妻として申分がなからうぢやないか。

英一　お父さんはさう思ひますかね。僕にはどうもさう思はれないんですよ。そりやあの子は器用です。不幸な境遇に育つて來てゐるだけによく物事に氣もつきます。だが、何だか心持に冷つこい處がある。とても僕の仕事なぞを理解してくれさうには思へません。

晋吉　併し、まだ十八か十九の小娘だ。お前の教育の仕樣一つでどうにでもなると思ふがな。

英一　僕もさう思ふから、一生懸命になつてあの子の性格を矯めなほさうと力めてゐるんですけれど、僕の云ふ事なんかてんで耳に留めないんだから仕方がありません。口では兄さん兄さんて云つてゐますけど、腹の中ぢや、何のこの小僧つ子がぐらゐに考へてゐるのかも知れませんよ。

晋吉　己がおたつの事で苦しんだやうに、お前もあの子の事で苦しんでゐるんだな。（ぢつと何事をか考へるやうにしたが）お光の親爺は大工だつて。

英一　え丶さうなんです。その親爺さんが藝事が好きなもんですから、お光を家へ稽古によこすやうになつたんです。おつ母さんから聞いたかも知れませんが、その親爺さんが或時の工事に足場から落ちて大怪我をしましてね、それが元で大患ひをして死んでしまつたのです。後にはお光を頭に三人も子供があるんでせう。暫く近所の子供目當に駄菓子屋のやうな事をやつてゐましたが、それも思はしくありませんでしてね、とう／＼田舍の里方へ引取られて行く事になつたんです。ところが、お光が田舍へ行く事を厭がりましてね、どうでも自分だけは東京に

残つて、みつしり清元が習ひたいと云ふんです。そこでまあおつ母さんが何も彼も引受ける事になつたんです。

晋吉　あの子の氣象ぢや田舍なんぞへ引込むのは厭だらうさ。それで何かい、あの子のお袋もゆく末お前と何するといふ事を得心してゐるのかい。

英一　さあ、どうですか知ら。おつ母さんは、その事をお袋に話したら、大喜びで田舍へ立つて行つたと云つてゐますがね。何しろ肝心の本人の心が僕には充分に信頼する事が出來ないんですから……

〽一日逢はねば千日の、思ひに私や患うて、針や藥のしるしさへ、泣きの涙に紙濡らし、枕に結ぶ夢覺めて、いとゞ思ひの増鏡……

晋吉　（なまめかしい三味の音に引入れられるやうな眼つきをして）あゝいふ唄を聞いてゐると、己は思ひ出すまいとしても若い時分の事を思ひ出さずにはゐられない。もう二十四五年にもなる。あれからこの年まで己は一體何をしてゐたんだらう。

英一　何を云つてるんです。何が二十四五年なんです。

晋吉　己とおたつと一緒になつてからこつちよ。その時分はこれでも己はれつきとした雜貨屋の主人だつたんだぜ。

英一　おつ母さんから聞いた事がありますよ。その時分お父さんは大變清元に凝つてゐたんですつてね。

晋吉　うむ、馬鹿なのぼせ方よ。今日はどこのお浚ひ、明日はそこの名披露目と、てんで店になんぞに落付いてゐた事がなかつたくらゐさ。そんな風だから商賣の方がうまく行かう筈はなく、店はとう〳〵人手に渡つてしまつた。おたつと懇意になつてたのもその間の事でな、いつとはなしにずる〳〵べつたり長火鉢の前に坐るやうな身分になつちまつたんだ。――いや、うつかり口が滑つて、下らない事まで聞かせてしまつた。はゝゝゝ。

英一　（眞面目に）ですがお父さんは、雜貨店を出す前にはどこか學校へ行つてゐたといふぢやありませんか。一體どこの學校なんです。

晋吉　早稻田の專門學校よ。己はそこで法律を研究して、將來は辯護士にでもなる考でゐたんだ。處が途中でそれも厭になつて、半途で退學すると、今云つた雜貨店さ。友達に誘はれて遊びの味なんぞを覺えた爲に、早く金を摑む事ばかり考へるやうになつたのだな。せめてあの時分早稻田でも卒業して置いたら、今頃になつてまご〳〵する事もなかつたらう。あの時分一緒に講義を聞いた友達の中で、隨分出世してゐるのがあるからな。博士にな

つたのもある。知事になつたのもある。實業界で雄飛してゐるのもある。そんな事を考へると己はつく〴〵自分の移り氣が情なくなるよ。

英一　でも、滿洲へ出かけて行く時には餘程大きな抱負があつたんでせう。僕は子供だつたからよくあの時の事情は分らないけれど、おつ母さんはいつでもさう云つてゐますぜ。

晋吉　新しい仕事に取懸る時には、己はいつでも恐ろしい熱心で始めるんだ。併しその熱心が己にはどうも長續きがしない。自分ぢや決して投げる積りはないんだけれど、途中まで行くときまつて故障が起つて來るんだ。そこを遮二無二押し通せばいゝのかも知れないが、さういふ時にはきつと持つて生れた移り氣が頭を持上げて來てな、えゝ、こんな馬鹿々々しい事につかまつてゐないだつて、ほかにもつとうまい事があるに違ひないつて氣が起るんだ。滿洲へ行つたんだつて、今になつて考へりや、何の爲に行つたのか譯が分らなくなる。

（初めのうち晋吉は成るべくちびり〳〵と飲むやうにしてゐたのだが、話に實が入つてつい盃を乾すのが早くなる。銚子はいつの間にか空になつてゐる。それに氣がついて晋吉は何とも云へない寂しさうな顏をする。）

英一　（氣の毒さうに）おや、みんなになつたやうですね。折角の處でいけなかつたなあ。ぢや、お光にさう云つて少し取つて來させませうか。（腰を浮かせる）

晋吉　いゝよ、いゝよ。そんな事をしちや却つていけないよ。ゆうべの酒がいくらか殘つてゐるせゐかして、すつかり己は醉つちまつたぜ。あゝ、いゝえ氣持だ。滿洲から歸つて以來、今日ぐらゐ己はしんみりした氣持で飲んだ事はない。みんなお前のお蔭だ。有難い。本當に有難いと思ふぜ。

英一　何を云つてゐるんだな。はゝゝゝ、本當にお父さん醉つたやうですね。

晋吉　だが、もうそろ〳〵おたつが歸つて來る時刻ぢやないか。

英一　まだですよ。歸つて來たつていゝぢやありませんか。

晋吉　そりやさうだけれど、少しばつが惡いからな。お前達にやどう見えるか知れないが、これでも己は心のうちぢや本當におたつに濟まないと思つてゐるんだぜ。彼奴にはこの年まで己は全く苦勞のかけ通しだからな。八年も家をほつたらかして置いて、何か大儲けでもして歸つて來る事か、十圓の蓄へも持たずに乞食同然の體で轉がり込んで來たのだ。何と云はれても己には返す詞がない。心から恥入るばかりだ。

英一　まあ〳〵、そんなに弱い氣を出しちやいけませんよ。お父さんだつて何も失敗しようと思つて失敗した譯ぢやないんでせう。みんな廻り合せで已むを得ないんだ。

晉吉　（きつとなつて）英一、己はもう一遍内地を離れようかと思ふ。

英一　何ですつて。内地を離れてどこへ行くんです。

晉吉　上海へ行かうと思ふんだ。昨日逢つた友達が今度そつちで商買を始めるので、頻りと來ないかと勸めてゐたから。

英一　だつて、まだ歸つて來たばかりぢやありませんか。

晉吉　併しこつちにゐても、己にはとてもうだつの上りさうな見込がないからな。決心するなら今のうちだ。

英一　お父さん、あなたがさういふ風に考へるやうになつた氣持は僕にもよく分つてゐます。ですが、もう暫く我慢して下さい。この不愉快な内の空氣だつていつまで續くものぢやありません。そのうちにはおつ母さんにだつてお父さんの氣持が分るやうになるに違ひありませんよ。それに、こんな事を云つちや何ですが、僕といふ者も附いてゐます。僕だつてもう二三年すりや、お父さんやおつ母さんぐらゐきつと立派に養つて行けるやうになつて見せます。お父さんはあんまり苦しみ過ぎた。お父さんに今最も必要なものは、肉體的にも精神的にも絶對の安靜といふ事です。上海へ行くなんて、忘れても考へるものぢやありませんよ。

晉吉　さう云つてくれるのはお前ばかりだ。己は嬉しい。（下を向いてほろ〳〵泣く）

英一　（その樣子を見て思はず胸が一杯になり）何だなお父さんは。ゆうべからの疲れですつかり感傷的になつちまつたんですね。少し寢た方がいゝでせう。

晉吉　濟まない。實に濟まない。

英一　おつ母さんが歸つて來ないうちに一寢入りした方がよござんすよ。（梯子の下まで行つて上を見上げ）光ちやん、そこへお父さんの床を敷いて上げてくれ。（二階でお光の返辭がする）……、二階へ行きませう。（晉吉の手を取るやうにする）

晉吉　（ひよろ〳〵立上つて）何とも云へない氣持だ……嬉しいやうな悲しいやうな……何とも云へない氣持だ。

英一　いゝです、いゝです、お父さんの心持は僕にはよく分つてゐます。（晉吉の腰を押すやうにして二階へ昇つて行く）

（舞臺暫く空虚。部屋の内が少しづゝ暗くなる。やがて英一が二階から降りて來る。火鉢の傍に坐つてぢつと考へ込む。間もなくお光も降りて來る。）

お光　涙なんか零して、本當にをかしな小父さんね。（蓮葉

に云つたが、英一の樣子に心づいて）おや、兄さんまで默に考へ込んでしまつたのね。

英一　お父さんは實に氣の毒な人だ。もう少し勞はつて上げるものだよ。

お光　兄さんは私が小父さんの事を笑つたものだから、それで氣持を惡くしてゐるのね。でも、お酒を飲んで泣くなんて何だか變なんですもの。（格子の開く音がする）どなた。（つか〳〵玄關の方へ行つて内から障子を開ける。びつくりしたやうに）まあ、村井さん。

（玄關に立つた村井良太の姿が見える。年頃は三十二三。髮を綺麗に分け、ぞろりとしたなりをしてゐる。）

村井　どうだい、驚いたらう。もう僕なんぞ來やしまいと思つてゐたらう。

お光　あら、そんな事はありませんけど。でもあんまりお見えにならないので、どうなすつたのかと心配してゐましたわ。もうお師匠さんもお歸りになりませうから、お上んなさいましよ。

村井　何だ、留守なのかい。

お光　松田さんだけへ行つたんですからさう手間は取らない筈ですの。さあ、お上んなさいつたら。（村井の手を取るやうにして内へ上げる）

村井　（無遠慮にずつと通つて）英一君、暫く御不沙汰しましたね。

（英一はわざと返辭をせずそつぽを向いてゐる。村井はその樣子を苦々しげに眺めたが、つと眼を反らしてお光の方を見る。お光も同じく村井の方を見る。二人の眼が意味ありげににやりと笑ふ。）

（突然英一が立上つて壁に懸つてゐる帽子を取る。）

お光　兄さん、どこへ入らつしやるの。

英一　繪具を買ひに行くんだ。（振返りもせずに格子口から出て行く）

村井　相變らず先生はひねくれてゐるな。

お光　本當よ。さつきもあなたの事で兄さんと云合ひをしたんですわ。

村井　へえ、何だつてさ。あの人が僕の惡口でも云つたのかい。

お光　まあよしませう、あなたが氣持を惡くするといけないから。それよりも村井さん、どうしてこんなに長いこと入らつしやらなかつたの。お師匠さんが心配してゐたわ。

（茶の間の眞中に下つてゐた電燈がこの時ぱつとつく。室内が一時に明るくなる。）

村井　いよう、お光ちやん今日は素敵に綺麗だな。

お光　厭よ、冷かしちや。

村井　冷かすものか、本當の事を云つてるんだ。だがこんな綺麗な人も、遠からず人の持物になるのかと思ふと寂しくなるな。
お光　何を云つてるのよ。私人の持物なんかになりやしないわ。
村井　隱したつて駄目さ。光ちやんは今に英一君の奥さんになるんだらう。僕は師匠から聞いてちやんと知つてゐるんだぜ。
お光　噓よ、噓よ。お師匠さんが何と云つたつて、私兄さんなんぞの奥さんになるのはまつぴらだわ。
村井　なんかんて口ぢやうまい事を云つてゐるけれど、腹ん中ぢや早く結婚式が來ますようにつてお禱りしてゐるんぢやないかい。
お光　厭ですつたら。あんな偏屈な人は私大嫌ひだわ。
村井　本當かい。全くその詞に違ひはないんだね。
お光　村井さんも隨分疑り深いのね。男はもつとさつぱりするものよ。
村井　さつぱりしたいんだけれど、惚れた弱身で、つい何かと氣が廻るのさ。
お光　まあ厭だ、あんな事云つて。
村井　いや本當だ。僕は心から光ちやんの事を思つてゐるんだぜ。（急に眞顔になり、つと傍へ寄つてお光の手を取らうとする）
お光　あらいけないわ、そんな事なすつちや。（驚いて身をのけようとする）
村井　さう云はずにまあ僕の云ふ事を聞いておくれよ。僕がこれまで毎日缺かさず此の家へ稽古に來たのは、みんなこゝに光ちやんといふ人がゐればこそだぜ。でもその光ちやんには旣にきまつた主があるんだ。いくら僕の方で思つて見たからつて、とても及ばぬ高嶺の花だ。いつそ諦めて顏も見ない事にしよう。聲も聞かない事にしよう。さう思つて、出來ない處を我慢して僕は暫く足を遠退いてゐたんだ。併したうとうその我慢がし切れなくなつて、かうして意氣地なくやつて來ちまつた。ねえ、光ちやん、今云つた事が噓でないなら、どうか僕の心を可哀想だと思つて……
お光　（耳の附根まで眞赤になつて）私のやうな者の事をそんなにまで云つて下すつて……でも、でももしかお師匠さんの耳へでも入ると……
村井　大丈夫だよ。そんなへまな事はしやしないから。僕と師匠との事を光ちやんは何か變にでも思つてゐるのかも知れないが、馬鹿々々しい、そんな事はこれつぱかりもありやしないんだぜ。本當だとも。誓つて僕は斷言するよ。光ちやんさへ僕の云ふ事を聞いてくれゝば、どん

な事でもして上げる。都合によつちやこの家から出して、どこかへ一軒家を持たしてやつてもいゝ。ね、ね、そんならいゝだらう。うんと云つてくれるだらう。

（村井の手はいつの間にかお光の肩にかゝつてゐる。お光はもうその手を拂ひのけようともせず、男の甘い詞に醉はされたやうになつてなり／＼小さく頷くばかり。）

（この少し前に表の格子がそつと開いたのであつた。さうしてそこに玄關の障子の中硝子越に延多津の姿が透いて見えたのだが、延多津が出來るだけ物音を偷んでゐたのと、感情の昂奮との爲に、村井もお光もまるでそれに氣がつかずにゐる。延多津は硝子越に暫く内の様子を窺つてゐたが、溜らなくなつてがらりと障子を開けて入る。村井とお光とはぎよつとして兩方に別れる。）

村井　何だ、師匠か。いきなりがらりとやられたんでびつくりしたぜ。はゝゝゝ。（てれ隱しに變な笑ひ方をする）

延多津　お樂みの所を濟みませんでしたね。だが私の方だつて、この夜風の寒いなかをやつとこさと歸つて來たんですよ。いつ迄玄關で顫へてゐる譯にも行きませんからね。

村井　おつな物云ひをするぢやありませんか。私達が何をしてゐたといふんです。

延多津　ごまかしても駄目ですよ。私はあすこでちやんと見てゐたんですからね。

（石のやうに堅くなつて俯いてゐたお光が、そつと立上つて玄關の方へ行きかける。）

延多津　（見咎めて）どこへ行くんだい。

お光　（はつとしたが）あの、ちよいと横町の……お君ちやんの所まで……

延多津　どんな用か知らないが、私には少し云ひたい事があるんだよ。そこへお坐りつたら。

村井　まあいゝぢあないか。用があるならやつたらいゝでせう。光ちやん、心配しないで早く行つておいで。

延多津　お光の事といふとお前さんは厭に庇いだてをするんだね。

村井　まあいゝさ。話せば分る事なんだから。（目顏でお光に早く行けと知らせる）

（お光は格子を開けてしな／＼出て行く。）

村井　（英一が讀み捨ての新聞を引寄せてぢつとその上に眼を落す）何だ、株の大暴落と來たな……末恐るべき少年、短刀を以て伯母を脅迫すか。

延多津　（新聞を引つたくつて激しく）村井さん。

村井　何だな、讀みかけてゐるのに。

延多津　いゝ加減人を馬鹿にするもんだよ。さつきのざまはありや一體何事だい。

村井　厭んなつちまふな。あんな事を師匠は眞面目に取つてゐるのかな。みんな冗談だあな。面白半分ちよいと光ちやんをからかつて見たんだあな。師匠さへ早く歸つてくれりや、僕だつて何も……（にや〱厭らしく笑ひかけようとする）

延多津　えゝ、ぬけ〱とよくもそんなしらが切れたもんだね。物事には冗談で濟む事と濟まされない事とありますよ。これまでもお前さんのあの子への素振がどうもをかしいとは思つたけれど、行く〱は英一とこれ〱だつて事も話してあるんだし、まさかにと心を許してゐたのに……お前さんと私との仲を考へたら、どんな事があらうとあんな事は出來ない筈ぢやないか。それだのにお前さんといふ人は、現在同じこの家のなかで……あゝくやしい、こんな口惜しい思ひをした事はないよ。

村井　（取亂した延多津の姿を冷やかに眺めて）ひどくお冠を曲げたものだな。だが、師匠がそんな事を云ふんなら、僕の方にだつて云ひたい事があるんですぜ。

延多津　お云ひなさいとも。泥棒にも三分の道理つていふから、何でも勝手な事を云ふがいゝや。

村井　ぢや云はう。一體僕がこの二三箇月、ぱつたりこゝへ足踏しなくなつたのは何の爲ですい。

延多津　私のやうなお婆さんが鼻に附いたからさ。

村井　鼻に附いたのはそちら樣でせう。ねえ師匠、八年振で旦那樣が歸つて入らしつて、さぞ毎晩口説が多い事でせうね。ひと面白くもない。そのでれついてる樣子を見せつけられるのが厭さに、僕は今日まで遠退いてゐたんだ。

延多津　何といふ口の聞き方だらう。あの人が歸つて來て嬉しいくらゐなら、私は毎日家にゐてこんなにぢれ込んでゐやしませんよ。そんな厭がらせを云つてお前さんは、わざと私と切れようつていふんだらう。それぢやお前さんあんまりだ。えゝ、あんまりだ。（我を忘れて武者振りつく）

村井　冗談ぢやないぜ。いゝ加減にして置かないか。（延多津の手を拂ひのけ、つか〱玄關の方へ行きかける）

延多津　歸るのかい。それぢや愈々お前さんは本當に私を捨てる氣になつたんだね。（追縋つて村井の裾を抑へる）

村井　何をする。離せつたら。

延多津　いゝえ離さない。死んでもこの手は離しやしないよ。

（突然正面の襖が開く。梯子の中程で樣子を聞いてゐた晋吉が、恐ろしい形相で二人の前に躍り出る。彼は

いきなり延多津の襟髮を取つて引倒す。)

延多津 (はつとして)おゝ、お前さんは……いつの間に。

晋吉 (怒の爲に吐く息も荒く) 疾うに歸つて二階で聞いてゐたんだ。久し振で戻つた亭主の面によくも貴樣は泥を塗つてくれたな。おい、そこにゐる若いの、これだけの事を仕出來したからにや、お前にも覺悟があるだらうな。

村井 (晋吉のけんまくに怯氣づいて) そんな事は僕は知らない。元々僕はあなたのやうな人のゐる事さへ知らなかつたんだ。あなたがこんなに早く歸つて來ると知つたら、僕は……

晋吉 しらじらしい云拔はよしてくれ。この家へ出入してゐたらおたつに亭主があるかないかぐらゐすぐ分る筈だ。うぬ、どうするか見ろ。(野獸の如く村井に躍りかかつて喉元を締めつける)

(村井はその手を離さうとして身を揉むが、晋吉の必死の力にどうする事も出來ず、苦しがつて眼を白黑させる。延多津は傍ではらはらするのだが、さすがに手出しもなりかねてゐる。)

(格子が開いて英一が驅け込んで來る。)

英一 (買物の紙包を投げ捨てゝ二人の間に割つて入り) お父さん、どうしたといふんです。

晋吉 打還つておいてくれ。此奴はぶち殺しても懷らん奴だ。

英一 (打ちのめされたやうにそこに坐つてゐる母の樣子で早くもこの場の次第を呑込んで) 尤もです。だが、近所へ知れてもあんまり見つともいゝ事ぢやないんですから。村井君、すぐこゝから出て行つて貰はう。

晋吉 いや、そりやならん。此奴にはどうしても思ひ知らさずにはおかんぞ。

英一 いゝから僕に任して下さい。(無理に二人を引分けて)さあ、歸り給へつたら。さつき君の顏を見た時に、今日限りこの家へ足踏してくれるなと云ふ積りだつたのだが、二階にはお父さんもゐる事だし、ひよつとかして變に思はれちやならないと思つて堪へてゐたんだ。皈れ、

村井 皈るとも。賴まれたつて二度とこんな家へ來るものか。(つかつか玄關の方へ行つて障子を開けかける)

延多津 (こらへかねて) 村井さん。(村井無言で振向く。一瞬間延多津と視線が合ふ。延多津は聲を顫はせて)お前さんは……お前さんはさう云ふ人だつたのかい。

(村井遂に答へず、ぴしやりと背後に障子を閉めてどんどん外へ出て行く。あとには三人一語もない。暫くは死のやうな沈默が續く。)

英一 (靜に延多津の前に行く) おつ母さん、事情は聞か

ないでも僕には何も彼も分つてゐます。こんな事になりはしまいかと思つて、僕は今日までどんなに心を使つたか知れないんですよ。知るまいとお思ひでせうが、おつ母さんと村井との關係は僕は疾うから知つてゐたんだ。人もあらうにあんな男と……僕は實に情ないと思つた。淺ましいと思つた。これまでだつて幾度それを口へ出しておつ母さんの反省を促さうと考へたか知れません。でも現在子として、それを母の前で云ふに忍びなかつたんだ。おつ母さんが恥かしいより、僕自身が恥かしい。おつ母さん、あなたが迷つてゐた村井といふ男は、あの通りの人間なんですぜ。おつ母さんを今夜のやうな切ない破滅に落しておきながら、濟まなかつたといふ顏一つしずに、さつさと行つてしまふやうな男なんですぜ。いゝ加減夢を醒まして下さい。昔のおつ母さんに皈つて下さい。（延多津答なく俯いたまゝほろ〳〵と泣く）おつ母さん、泣いてゐるんですか。なぜ泣くんです。瞞されたのがくやしいんですか。それとも……

延多津　英一、濟まない。（犇と我が子の手を取る）

英一　ぢやおつ母さんはこれまでの罪を悔悟したと云ふんですか。

延多津　（おろ〳〵聲で）お前にも濟まない。お父さんにも申譯がありません。

英一　（强く動かされて）よく云つて下すつた。それで僕も安心が出來ます。お父さんだつてあなたの誠意さへ分れば、いつまで既往の過ちを追窮しようとはなさいますまい。僕も共々にお詫をして上げませう。

晋吉　（じつと妻の樣子を眺めてゐたが、突然）いや、詫には及ばん。己れも一時はかつとしたが、おたつがこんな不しだらを仕出來したに就いちや、己の方にも責任がないとは云へないのだ。己が滿洲へ出かけて行く時には、お前達二人をほつたらかしとくといふ約束ぢやなかつた。月々の入用も充分に送らう。お前を中學へ入れるやうにもしてやらう。さう堅く詞をつがへて立つて行つたのに、己は果してそれを實行したらうか。成程、初めの半年や一年は眞面目になつて仕送りもした。併しだんだん月日が經つに從つて、己の心は次第に家といふものから遠退いて行つた。仕送りどころか仕舞には手紙さへ出さなくなつてしまつた。目前の事業や快樂に心を奪はれて、己は全く故鄕を忘れてしまつたのだ。一時はお前達は己が生きてるか死んでるかさへ分らずにゐた事もあつたらう。その己が突然皈つて來たんだ。かういふ目を見なけりやならないのも、みんな天罰た。

延多津　さう云はれると猶の事私は自分の犯した咎が恐ろしくて、穴へでも入りたいやうです。後生ですから赦す

と云つて下さい。

晋吉　赦すも赦さないもあるもんか。己の飯つて來たのが間違つてゐたのだ。八年も女房子をほつたらかして置きながら、いかに失敗に失敗が續いて氣が弱くなつたとは云へ、のめ〳〵飯つて來るとは何事だ。ぢや左樣なら。（つか〳〵玄關の方へ行きかける）

英一　（驚いて袂を抑へ）どこへ行くんです。

晋吉　己はやつぱり上海へ行く。さつき話した友達の店へな。

延多津　（涙聲で）それぢやお前さんはやつぱり私を怨んでゐるんですね。

晋吉　怨まれるのは己の方だ。だがおたつ、お前と己とは夫婦になんぞならなかつた方がよかつたかも知れないな。英一、おつ母さんは氣の毒な人だ。大切にして上げろよ。

英一　お父さん。

晋吉　體を大事にするんだぞ。（留めようとする英一を突きのけてすた〳〵表へ出て行つてしまふ）

（英一はその跡を追ひかける勇氣もなく茫然として立ち盡す。延多津がふら〳〵と立ちかける。）

英一　おつ母さん。（留める）

延多津　（ヒステリツクに）私はお父さんを留めなければならない。このまゝ別れてしまふ事はとても出來ない。

英一　おつ母さんがさう思ふのは無理もありません。ですが今無理にお父さんを引留めて見た處で、これまでのやうな明るい心でお父さんがこゝにゐられると思ひますか。それを考へたらお父さんの自由にまかす方が、せめてもお父さんの苦みを輕くする事になるんですよ。

延多津　みんな私から起つた事だ。英一、勘忍しておくれ、

英一　おつ母さん。

延多津　お前一人だよ。お前より外に私は力にする者がなくなつてしまつたんだよ。

（親子は手を取合つたまゝ絕望の涙に浸る。）

―― 幕 ――

（大正十一年三月作）

裏切り

人物

杉山伊太郎
女房 おとき
伜 精一
岡田勇作
西村宗吉
醫士 小原
米屋

東京から餘り離れてゐない工場町。そこにある或る大きな鐵工場の職工杉山伊太郎の家。六疊の茶の間。下手は土間で、そこに腰障子の出入口がある。茶の間の正面と上手とには破れ障子がはまつてをり、上手の方のはそれが半分程開かれて、その向ふが臺所になつてゐる事が分る。部屋には縁の取れた貧乏臭い角火鉢以外殆ど調度らしい調度もない。初冬の午後。臺所で水音がする。やがて髪も髭も蓬々にさせた伊太郎が、ブリキの藥罐をぶら下げて出て來る。火箸で角火鉢の灰を掻き起して見る。

伊太郎　ちえつ、不景氣な火だな。（藥罐を火鉢に懸ける）

（女房のおときが外から歸つて來る。がつかりしたやうに上り框へ腰を卸す。）

伊太郎　どうだつた。

おとき　やつぱり駄目。精坊は？

伊太郎　寢てゐる。

おとき　まあよかつた。さつきの樣子ぢやどうなる事かと、お醫者樣へ行つてる間も氣が氣ぢやなかつたんだけれど。（茶の間へあがり、正面の障子を細目に明けて中を覗く）すや〳〵眠つてますね。

伊太郎　うむ、苦しんだ後は疲れるからな。だが、どうして小原はいけねえつてえんだ。

おとき　少し遠い處へ回診に出かけたから、歸りの程が分らないんですとさ。

伊太郎　この前もおんなじやうな事を云つてやがつたぢやねえか。うまく逃げてるんだらう。

おとき　えゝ、さうですとも。確に內にゐたに違ひないんです。それが證據にや、「ちよと待つて下さい。」つて看護婦が奥へ引込んで行つて、暫く手間取つてゐたと思ふと、やがての事にその口上なんです。やつぱり藥代を溜めてゐるからなんですね。

伊太郎　いくら溜めてゐるからつて、人の子供が死ぬか生きるかの瀬戸際に立つてゐるのに。一體あの小原つて奴は、不斷から重役連の御機嫌取りにばかり浮身をやつしてやがつて、こちとら職工にや涙も引つかけねえつて野郎だ。あんな野郎の處へ頭を下げて頼みに行くのは業腹だが、ほかに醫者らしい醫者もゐねえこのちつぽけな町ぢやどうにもならずよ。

おとき　それにつけても今度の騷ぎは、一體いつになつたらやむんだらうね。

伊太郎　そりや分らねえ。半月先か、一月先か、まあこつちの言分が通る時まではこのまゝよ。

おとき　でも、それぢや困るぢやありませんか。半月はおろか明日のお米にさへ、私達はもう差支へる身の上なんですよ。

伊太郎　分つてるよ。だが今度のストライキは、我々三百何人といふ職工全體の利益を守る爲に始めた事だ。どんなに苦しくたつて、目的を達するまでは我慢しなけりや仕方がねえ。まあもう少し辛抱しろつたら。

おとき　いくら辛抱しろつたつて、食べる物も食べずに辛抱ができますか。それも仲間の人達、一人殘らず内のやうに困つてゐるのなら諦めもつくけれど、中には暢氣な獨り者もあるし、さうでなく女房子はあつても、内のやうに病氣に罹られたりしなければ、割合に苦しまずに行けるんですからね。

伊太郎　そんな事云つたつて仕方がねえやな。こんな時に病氣になんぞなられたのが己達の不運なんだから。

おとき　（じり／＼して）ぢやお前さんはこのまゝ手を束ねて、親子三人干乾しになる積りなんですね。私は厭だ。何ぼ何んでもそんなみじめな死に方をするのは厭だ。

伊太郎　ぢやどうすればいゝつてえんだ。

おとき　かうなつたら仕方がない。工場の云ふなりになるんですね。

伊太郎　賃銀二割べらしを承知するのか。

おとき　諸色の高い今日、二割なんて減らされちややり切れないけれど、でもこのまゝ遊んでりや一文だつて入つて來るんぢやなし、まだしもその方がいゝぢやありませんか。

伊太郎　馬鹿。冗談も休み／＼云はねえか。今になつてそれをするくらゐなら、一月近くも食ふや食はずの苦しい我慢をつゞけて來るけえ。そんな事をして見ろ、それこそ足元を見られて、この先まだどんな難題を持ちかけて來られるか知れねえぞ。そのくらゐの事が分らねえのかな。

おとき　そりや分つてますさ。でも明日から食べる物かな

いとなりや、さうでもするより仕方がないぢやありませんか。

伊太郎　（強く）三日や五日食はねえたつて人間は死ぬものぢやねえんだ。意氣地のねえ事を云ふなつたら。

（おときは何か云はうとしてそのまゝ默つてしまふ。氣まづい沈默。）

（工場監督の岡田勇作が訪ねて來る。）

岡田　今日は。しばらくだつたね。

伊太郎　（答へはなく、じろりと相手の顏を見る）

岡田　（にや〱笑ひかけて）厭な顏をしなさんなよ、せつかくやつて來たんだあな。子供が惡いんだつてね。

伊太郎　誰から聞いたんです。

岡田　小原君からさ。寢冷えでもやつたのかね。

おとき　そんならいゝんですけれど、少し質（たち）の惡い腹膜炎でしてね。不斷からあんまり丈夫でない方ですし、若しもの事でもあつた日にはと、もう心配で心配で……

伊太郎　（女房の詞を押っ伏せるやうに）處でと、監督さんは工場側の人でしたつけね。して見りや、今度の事件の解決がつかない間は、云はゞ敵の片割れだ。そのあんたがどういふ積りであつしの家へなんかやつて來たんです。

岡田　はゝゝゝゝゝ、大分手嚴しく突込んで來るね。

伊太郎　だつて、物の道理がさうでせう。

岡田　さう云へばそんなものだが、併し君方もつい此間までは、私の下でおとなしく働いてゐてくれた仲ぢやないか。何も永久に敵同志になつてしまつたと云ふぢやなし、まあ穩やかに話をしようよ。（上り框へ腰を卸し、ポケツトから卷莨の袋を取出す）

おとき　（重い角火鉢を岡田の前へ押し遣る）火鉢が一つしかないものですから。

岡田　いや、こりや憚りさま。（莨に火をつけて一吸ひ吸ふ）實は今日かうしてやつて來たのは、今度のストライキの一件なんだがね……かう事がこじれてしまはうとは、實の處思はなかつたよ。

伊太郎　こじらせたのはあんた方のせゐでせう。あんた方の方でさへ今まで通りにしてゐてくれりや、何を好んであつし達がこんな事をするものですか。

岡田　そこだよ。いつぞやも云つた通り、工場としては全くこの際あゝするより外はなかつたのだからな。何しろ此頃の不景氣で、我々鐵工場の打擊と云つたらないんだ。いくら骨折つて生産して見ても、肝腎の世間の需用力が減退してしまつたのだからどうにもあがきがつかない。この苦境を切拔ける唯一の方法としては、この際出來るだけ生産費を輕減して、どうにかしてこれまで通り

の販路を維持して行くやうに力めるより外はないんだ。

伊太郎　そこで職工の賃銀をへらせつて事になつたんですね。有難い仕合せさね。だが、あつし達はこれまでだつて決してあり餘る金を貰つてゐた譯ぢやないんですぜ。あり餘るどころか、いつも〳〵足りねえがちで、かつかつ命だけ繋いで來たんだ。その上二割からの收入がへつたら、一體どうして生きて行くんです。

岡田　そりあ君方の苦しいのは同情するよ。併し今云つたやうな事情なのだから、そこはお互に我慢し合つて……

伊太郎　お互にですつて。あんた方のお互につて詞は、苦しい時だけに使ふんでせう。いや、さうです。それが證據にや、どんな景氣のいゝ時代にだつて、鐚一文の割增しだつてあつし達によこした事がありますか。

岡田　そんな事を云つたつて、そりや工場の規約にないんだから。

伊太郎　さう來るだらうと思つたんだ。ぢやその事はまあ云はないとして、あつし達にはどうしても工場がそんなにまで窮境に陷つてゐようとは思へないんだ。成程、そりや四五年前のやうに、四割五割の方外な配當なんざあできないでせうさ。併し今年の上半期の決算報告を見ても、二割近くの株主配當をやつてる事は分つてますぜ。いくら隱したつて、これだけは印刷した物が口を利くんだから仕方がないでせう。それだのに此頃になつて急にあつし達の賃銀をどうのかうのと云ふのは、詰りあんた方は、自分達の取る物はどこまでも元々通りにしておかう。若しそれがむづかしい場合には、職工の食ふ物は取上げても、自分達は相變らずうめえ物を食ひ續けて行かうといふ了簡なんだ。そんな沒義道な事をしておきながら、お互に我慢しようもねえもんだ。

岡田　困るな、さう僻んでしまつちや。成程君の云ふ通り、そりや今年の上半期は二割に近い配當もやつたさ。併しかうすべてが行詰まつて來ちや、とてもこの下半期はそんな譯には行かないんだ。それどころかうか〳〵してゐると、工場を閉鎖しなければならないやうな事にも立至りさうなんだ。

伊太郎　何だか當てになるものか。こちとら職工を嚇かすにはその手が一番いゝからね。

岡田　いや、威しなものか。實際その通りの狀態なんだよ。そこで物は相談だがな、どうだらう君、この際一つ我々の爲に一肌脫いでくれないか。さうすりや工場も立ち行くし、從つて君方の爲にもならうといふものだが。

伊太郎　どんな事なんです、一體？

岡田　別にむづかしい事ぢやないんだ。唯君の辯口で、今云つたやうな工場の內情をみんなに話してくれりやいゝ

んだ。さうしてこの際はやむを得ないから、賃銀二割減を承知しようぢやないかといふやうに持ちかけてくれりやいゝんだ。君は内の工場ぢや古参の方だし、それに人望もあるんだから、君の云ふ事ならみんなきつと承知するに違ひないんだ。どうだ、一つ骨を折つてくれないか。

伊太郎　（苦い顏をして默り込んでゐる）

岡田　そりや君方としては今更屈伏するのは殘念だらうさ。併し工場としては、どうしたつてさうして貰ふより外仕方がないんだからな。その代り君の盡力でみんなを得心させてくれりや、それだけの報酬はきつとするよ。二百圓でも、三百圓でも、何なら今こゝで君に手渡ししてもいゝぜ。

伊太郎　（やつぱり無言）

岡田　賃銀は減らされても、それだけ纏まつた金が入りや、結局君は得する譯ぢやないか。どうだね、うんと云つてくれないかね。さうして子供も病氣だといふのだし、ここらで淸く承知した方が君の爲にもなりやしないかね。

おとき　お前さん。（そつと伊太郎の袖を引いて承知してしまへといふ意を通はせる）

伊太郎　（邪險にそれを振拂つて、きつと岡田を見据ゑる）詰り何ですね、金であつしを買はうつてんですね。

岡田　惡く取りやさうさ。併し、結局さうした方がみんなの爲にもよかあないかね。何もこれが未來永劫賃銀をへらしつぱなしと云ふのぢやなし、景氣さへ恢復すればすぐに元々通りにして上げるんだから。どうだねお上さん、私の云ふ事はさう無理ではない積りだがね。

おとき　左樣でございますとも、いくら工場だからつて無い袖は振れませんからね。ですから私もさつきからその事をこの人に云つてるんですけれど……

伊太郎　手前は引込んでろつたら。（おときを押しのけるやうにして）せつかくだが、そのお話はお斷わりしませう。

岡田　斷る？

伊太郎　蔭で金を掴まされながら、心にもないお爲ごかしを仲間に云ふなざあ、男の出來るこつちやありませんからね。

岡田　すると君方は飽くまでも工場に反抗して、賃銀維持を主張する積りなんだな。

伊太郎　當り前でさ。今になつて兜を脫ぐくらゐなら、始めつから今度のやうな事は起しやしませんよ。

岡田　成程、立派な覺悟さね。だが、世の中は君のやうな人間ばかりだと思つたら大きな間違ひだぜ。口ぢや綺麗な事を云つてゐながら、腹へ入ると自分だけ得をしよう

としてゐるのが當世だからな。
伊太郎　ぢや何ですか、あつし等の仲間うちで、金に眼をくれた者があるとでも云ふんですか。
岡田　まあさう云つたやうな見當さ。
伊太郎　誰です、一體それは。
岡田　それを聞きたかつたら、君もその中の一人になる事だね。
伊太郎　ふん、人の氣を引かうと思つていゝ加減な出ためを云つてゐるんだ。誰がその手に乘るものかい。あんたのやうな人にや、もう一刻もこゝにゐて貰ひたくない。歸つて下さい。
おとき　まあ、そんな失禮な事を云つて。
伊太郎　どつちが失禮だい。子供の病氣になられて困つてゐる弱味に附け込んで、人をまるめ込まうとは卑怯な仕方だ。
岡田　何だと。困つてるから可哀想だと思つて、親切に云つてやりや附け上りやがつて、剛情張るならいくらでも剛情張つてろ。その代りお前達三百幾人の職工達が、一人殘らず干乾しになつたからつてこつちの知つた事ぢやないからな、その積りでゐるがいゝ。（歸つて行かうとする）
おとき　（慌てゝその手に取縋り）まあ監督さん、お腹もお立ちでせうが、どうぞ御勘辨なすつて、內は御存じの通りの一こく者で、くわつとなつたが最後、誰彼の見境もなくなつてしまふんですから。
岡田　そりや私も知つてゐるさ。だから出來るだけ下手に出て話をしてゐるんぢやないか。まあいゝ。私の云つた事を後で猶よく考へて見るがいゝ。さうして私の云ふ通りにしてもいゝといふ決心がついたら、すぐにでもやつて來るさ。私だつて何も喧嘩をする爲にこゝへ來た譯ぢやないんだからな。ぢや、左樣なら。（出て行く。間）
おとき　お前さん、何だつて監督さんにあんなひどい事を云つたのさ。
伊太郎　當り前ぢやねえか。僅かの眼くされ金で人の面をはらうとしやがつて。
おとき　でも、その僅かのお金の爲に、私達はこんな苦みをしてゐるんぢやありませんか。せつかく耳よりな話を持ちこんで來たのを斷つてしまつて、この先一體どうする積りなんです。
伊太郎　どうするものかな。石に噛りついてもこつちの言分を通して見せるばかりよ。
おとき　そんな事を云つたつてお前さん……
（正面の障子の向ふで苦しさうな子供の呻き聲がする。）

伊太郎　精坊が苦しさうだ。見てやれよ。
（おとき急ぎ立つて行つて正面の障子を明ける。そこは薄暗い二疊間で、痩せ細つた悴の精一がきたない蒲團にくるまつて寢てゐるのが見える。）
おとき　どうおしだい、又お腹が痛むかい。
精一　苦しいよ。母ちやん、苦しいよ。
おとき　おゝ／＼。可哀想にね。今すぐに樂にさせて上げるよ。（一生懸命に胸や腹を撫でる。精一いくらか苦痛が鎭まる。おとき再び伊太郎の方へ來る。きつとした語氣で）お前さん、いつまで精坊をあゝしておく積りなんです。あんなにまで苦しんでゐるのを見てもお前さんは平氣でゐられるんですか。
伊太郎　誰が平氣でゐるものかな。でも今の場合、どうにも仕樣はなからうぢやねえか。
おとき　仕樣がない事はありません。お前さんさへその氣になれば、あの子の病氣はきつと直るんです。さ、ぐづぐづ云つてゐずと、監督さんの處へ行つてお金を貰つて來て下さい。さうしてその足ですぐ小原さんを呼んで來て下さい。
伊太郎　馬鹿云へ。そんな事が出來るものか。
おとき　出來ない事はありません。子供一人が生きるか死ぬかの瀬戸際です。どうでもお前さん行けないと云ふなら、私が行つて頼んで來ます。（立ちかける）
伊太郎　下らねえ事をするなつたら。（おときを支へて）さつきからあんなに云つてゐるのが、手前にやまだ分らねえのかな。いくら子供が可愛いからつて、已にや友達と約束した事があるんだ。今となつてそれが反古になるものか。
おとき　いゝえ。反古にするんです。子供一人を助ける爲なら、そんな約束ぐらゐ反古にしたつてちつとも構はないと思ひます。（間）それともお前さんには、精坊よりも友達の方が大事なんですか。たつた一人の子供の生き死にの間際に、藥さへ碌々飮ませないで殺してしまつても、友達の爲に盡せば本望なんですか。（間）默つてゐる處を見るとさうなんですね。（突然ヒステリツクに）あゝ、お前さんのお蔭で殺さなくつてもいゝ精坊を殺してしまふんだ。私は怨むよ。死んでもお前さんを怨み通すからその積りでゐるがいゝ。
伊太郎　（ぢつと考へてゐたが、急に決心したやうに立ち上る）仕方がねえ。
おとき　お前さん、行つてくれるの。
伊太郎　こんな時に病氣になんぞなられたのがこつちの不運だ。（出て行く）
（おとき茫然と見送る。精一が又苦しみ出す。おとき

慌てゝその方に行き、介抱する。長い間。）
（仲間の職工西村宗吉が來る。）
西村　今日は。
おとき　おや、おいでなさい。（慌てゝ涙を隱して出迎へる。）
西村　大將は？
おとき　ちよつと出かけたんですけれど。
西村　そいつはまづかつたな。どこへ？
おとき　あの、ちよつとそこまで。何か御用でも？
西村　えゝ、少し急ぎの用があるんでね。行つた先が分つてりや追駈けてもいゝんだが。
おとき　（もぢ〳〵しながら）それがよく分らないでしてね。何だかくさ〳〵するから、町を一廻りして來るつて出かけて行つたんですが。
西村　ぢや、ぢきに歸つて來るでせう。
おとき　ぢきに歸るだらうと思ふんですけれど。何なら、その御用といふのを聞かせて下さいな。歸つたら話しときますから。
西村　それがぢかに話さなけりや拙い事なんでね。少し待つてゝ見ませう。
おとき　さうですか。ぢやさうなすつて。
西村　（遠慮なく上へあがる。病室の方を見て）どうです。精ちやん？
おとき　お蔭樣でと云ひたいんですが、やつぱり思はしくないんです。その筈でさあね、醫者にも碌すつぽ診て貰へず、精分の附くやうな食べ物さへやれないんですからね。本當に西村さんのやうな獨り者は氣樂で羨ましい。
西村　でも、まるで稼ぎがないんだから困る事はおんなじでさ。この二三日など莨錢にさへ差支へるつてみじめなざまで。
おとき　莨錢に差支へるぐらゐなら結構ですよ。私達と來たら明日のお米をどうしたものかと心配してゐるんですからね。
西村　いや、全くかうなると泣かされるのは女さね。でも、それももう少しの辛抱だ。
おとき　さうですか。
西村　ひどく賴りのない顏をしますね。
おとき　だつて、考へると心細くなるんですもの。今度のいざこざが起つてからもう一月近くにもなるでせう。それだのに今以てどうかたが附きさうにも見えず、このまま兩方でいつまでも意地つ張り續けてゐたら、向ふはいくらでもお金があるんだし、こつちはその日の御飯にも差支へる連中ばかりでせう。仕舞には剛情が張り切れなくなつて、こつちから頭を下げて賴みに行かなければな

らなくなるに極つてゐますよ。

西村　今日に限つて厭に心細い事を云ひますね。ぢや、お上さんの考へはどうしようつてえんです。

おとき　どうしようて、別にいゝ考もありませんけれども……（決心して）ね、西村さん、剛情を張るのはもういい加減にして、どうでせう、工場の云ふなりになつたら……

西村　工場の云ふなりに？

おとき　今さらとなつて出來にくい事かも知れませんけれど、病氣の子供を抱へた私達の身にもなつてね。

西村　そりやお上さんの辛いのは察してゐるさ。――で、大將ももうその氣になつたんですか。

おとき　えゝ……いゝえ、内の人にはまだ何にも云はないんですけれど、今にも歸つて來たらとつくり話して見ようと思つてますの。私ばかりぢやない、よそのお上さんにだつて、きつと私とおんなじやうな考を持つてゐる人があるに違ひありませんよ。どうか西村さん、後生ですからこの事を皆さんにも話してね……

西村　お上さんにそんなに云はれると、あつしもどう返辭をしていゝか困つてしまふけれど。――併し考へても御覽なさい。これまで我々の方でいくら強硬に工場へ談判を持込んで見ても、一向に受け附けないのは、拋つておいたら先へ行つて泣きを入れて來るに違ひないと向ふで高をくゝつてゐやがるからだ。それを今になつてこちらから兜を脫いで行きや、見す〳〵奴等の思ふ壺に嵌る譯で、あんまりくやしいぢやありませんか。なあに、工場の方だつて確にこの頃は弱つてゐるんだ。だからもう一踏んばり踏んばつたら、きつと我々の勝になるに違ひないんだ。

おとき　さうでせうか。

西村　又さうでせうかゝ。厭んなつちまふな。どうしてお上さんはさう人の云ふ事が信用できないのかな。

おとき　あらさう云ふ譯ぢやないんですけれどね。

（ちよつと氣まづい沈默。）

（米屋が米袋を擔いで來る。）

米屋　今日は。お米を持つて參りました。

おとき　おや、内ぢやさう云つて行きはしませんがねえ。

米屋　今し方お宅の旦那がお寄りになりましたんで。

おとき　（それと察して）あゝ、さうでしたか。ぢや、ちよつと上つてあけて下さい。（臺所へ立つ）

米屋　畏りました。（上へあがり、同じく臺所の方へ行く。半ば姿が見えなくなり、米櫃へ米をあける音だけさせる）

おとき　いくらです、今度は？

米屋　升五十一錢で。（袋を疊みながら臺所から出て來る）

おとき　この前は確かちやうどだつたぢやありませんか。
米屋　へえ、こゝん處上る一方でござんして。
おとき　意地の悪い、こんな時といふとね。お金は？
米屋　旦那から頂きました。ぢや又おすきになりましたら。どうも毎度有難う存じます。（歸つて行く）
西村　（いくらか訝るやうな語調で）米屋へ行つたんですか。
おとき　（どぎまぎして）いゝえ、さうぢやないんですけれど……あんまり私がやいく云ふもんだから、どつかで工面してお米の金だけ拵へたんでせう。
西村　さうですか。だが、大將大分ゆつくりだな。
おとき　一體御用つていふのはどんな事なんです。どうしてもあの人でなきや分らない事なんですか。
西村　いや、さういふ譯でもないんだが……ぢやお上さんに話しといて、後から大將に來て貰ふかな。まだ二三軒廻らなけりやならない家もあるんだから。實は、やつぱり今度の一件に就いてなんですがね……
（伊太郎が外から戻つて來る。牛乳壜を三本藁繩で括つたのをぶら下げてゐる。）
西村　やあお歸り。
伊太郎　西村か。（ちよつと困惑の色が面に浮ぶ）
西村　暫く待つてゐたんだけれど、手間が取れるやうだから歸らうかと思つてゐた處だ。
伊太郎　そりや濟まなかつた。（牛乳壜をおときに渡し）あとで温めてやつてくれ。
おとき　まあ、牛乳ですね。
伊太郎　可哀想に、三日も飲ませなかつたからな。
おとき　小原さんへは寄らなかつたの。
伊太郎　寄つて來た。奴さんやつぱりゐやがつたんだ。
おとき　さうでせう。きつとさうに違ひないと思つたんだ。何と云つてゝ。
伊太郎　ぢきに伺ひますとよ。
おとき　まあ、現金な。それから、今米屋が來ましたつけ。
伊太郎　（西村の方を氣にしながら）そんな事より、早くあつちへ持つてけつたら。
（おときは牛乳壜を臺所へもつて行く。）
西村　大分景氣がいゝぢやないか。
伊太郎　何がよ。
西村　だつて米屋が來たり、牛乳を買つて戻つたり、さつきお上さんの云つたのとは大分樣子が違ふからよ。
伊太郎　（辯解がましく）精一は牛乳より外喉へ通らない病人だ。身の皮を剝いでもこれだけは買つて來ずにやゐられねえやな。（うとく眠りかけてる精一の傍へ行つ

てぢつとその様子を見る）

西村　處で、早速だが、すぐと君に來て貰ひたい事が起つたんだ。

伊太郎　何が起つたんだ。

西村　みんなしてこれから事務所へ押しかけて行かうといふ事になつたんだ。

伊太郎　どうしたんだ、急に又？　工場の方から何か回答でもあつたのか。

西村　いや、さういふ譯ぢやないが、いつまで今のやうにぐづ／＼としてゐた日にや、みんなの元氣を衰へさしてしまふばかりだから、一つ三百人一塊りになつて事務所へ押しかけて行つて、支配人を掴まへて膝詰の談判をしようといふ事に相談が一決したんだ。工場でも此頃は我我の結束の堅いのに大分恐れをなして來たやうだし、きつと利き目があるに違ひないんだ。

伊太郎　つまり示威運動だな。

西村　さうよ。一度で目的を達するかどうかは分らないが、景氣を附けるだけでもやらないよりはましだらう。さ、行かうぢやないか。

伊太郎　（默然として答へがない）

西村　どうしたんだ、厭に考へこんじまつて。君は不賛成なのか。

伊太郎　いや。さういふ譯ぢやないが……

西村　ぢや行つたらいゝぢやないか。さつきから手別けしてみんなの處へさう云ひに行つてあるんだから、もう大抵集まつた筈だ。

伊太郎　困つたな、今日はどうも精一が惡いんでね。

西村　精ちやんの惡いのは今日に限つた譯ぢやないんだらう。それに何もさう時間のかゝる事でなし……

伊太郎　君、西村、頼むから今日だけは赦してくれないか。どうも氣が進まないんだ。

西村　をかしいな。いつもはこんな事だと云ふと、眞先に飛び出す君の癖に。（ぢつと相手の顔を探るやうに見て）何かあつたんぢやないのか。

伊太郎　いや、何にもありやしない。

西村　だつて、變だぜ。君と云ひ、お上さんと云ひ、今日に限つて妙な事ばかり云ふぜ。

伊太郎　（おどろきながら）そんな事があるものか。そんな事があるものか。

（遠くで多人數の喚聲が聞える。）

西村　おゝ、みんな待かねて動き出したらしい。ぢや、どうあつても君は來られないと云ふんだな。

伊太郎　（切なさうに）濟まないが君からみんなによく話してなあ。

西村　ぢや勝手にするがいゝ。無理に來てくれとは賴まねえんだ。（脊然として出て行く）
伊太郎　西、西村……（跡を追はうとして力なく又座に復する）
おとき（臺所から出て來る）お前さん、何だつてあの話をしなかつたのさ。
伊太郎　あの話とは？
おとき　監督さんから賴まれた事をさ。今云ひ出すか云ひ出すかと思つて、私はじり〳〵してゐたんだよ。
伊太郎　氣負ひ立つてゐるあの男を摑まへて何であんな話が出來るものかな。それでなくてもこつちに引け目があるので、あの男の云ふ事が一々胸を刺しやがるんだ。
おとき　でも、お金は貰つて來たんでせう。いくらくれて？
伊太郎　もうそんな事を聞いてくれるな。探るやうにぢつと己の顏を見つめた西村の眼つきを思ひ出したゞけでも、溜らない氣持になつて來る。
おとき　男らしくもない、まだそんな思ひ切りの惡い事を。精一さへ丈夫になつてくれりやほかの事はどうだつていいぢやありませんか。
（精一が二聲ばかり鋭い苦悶の聲を立てる。おとき驚いてその方へ行く。）
おとき（ふるへ聲で）何だか變ですよ。お前さん。
伊太郎（飛んで行つて介抱する）こいつあいけねえ。しつかりしろ。精一、精一。
おとき　精一や、精一や。あゝ、どうしたらいゝだらうね。（おろ〳〵聲になる）
伊太郎　小原の奴何をぐづ〳〵してゐやがるんだ。もう一遍行つて引張つて來る。（外へ駈け出ようとする）
（出會ひ頭に醫士小原、鞄を下げて入つて來る。）
小原　遲くなつて濟まなかつた。いや、どうも大變だよ。君方の仲間が事務所を包圍して、今にもぶち壞し騷ぎが始まりさうなんだ。目付かつちや面倒だと思つて、裏手の方から遠廻りしてやつて來た。
伊太郎　そんな事より早く病人を診てやつて下さい。何だか變なんです。
小原　どれ〳〵。（靴を脫いで上へあがり、精一を診察する。面に難色が浮ぶ）
おとき（せき込んで）大丈夫でせうか。
小原　殘念ながら、どうもな。
おとき　いけないんですか。
小原　どうも少し手遲れでな。
おとき　手遲れですつて。（おろ〳〵聲になり）そんなことを云はないで、何とかして下さいな　今になつてこの

子に逝かれたんぢや、私達の立つ瀬がありやしない。ね、お願ひですから、どうにかして命だけ取り留めるやうにして下さいな。

小原　そんな事を云つたつてそりや無理だよ。心臓痲痺を起して、もう脈搏が不能になつてしまつたものを。

おとき　（ヒステリックに）だから私がさつきあんなに頼んだぢやありませんか。あの時にさへすぐ來てくれゝば、こんな事にならないでも濟んだものを。この子はお前さんが殺したも同然だ。

小原　ば、馬鹿な事を。いくら早く來たつて、駄目なものはどうしたつて駄目なんだ。それにあの時は實際回診に出かけてゐて、來たいにも來られなかつたんだから。

おとき　あゝ、精坊に逝かれてしまつて私はどうしたらいいだらう。精一や、精一や、後生だからもう一度息を吹き返しておくれ。（精一の骸に取縋つて激しく泣く）

小原　（さすがに座に堪へないと云つた樣子で）いや、全くお氣の毒な譯だよ。だが死んでしまつたものは、今さらどうにもならないぢやないか。なあに、まだ君方は若いんだ。これから先いくらも代りは出來るさ。さう氣を落したもんでもないよ。（鞄を持つて立上る）ぢや君、死亡診斷書を書いておくからな、後で取りにおいで。（靴を履きかける）

伊太郎　（口重に）えゝ、伺ひます。（戸外で喚聲がしきりにする）

小原　ぢや左樣なら。（腰障子を明けて半身を外へ出し）まだやつてるな。大事にならなきやあいゝがな。（去る）

おとき　お前さん。（ひしと伊太郎に縋りつく）

伊太郎　どうして己達はかう不仕合せなんだらう。（落涙する）

おとき　こんな事になると知つたら、厭がるお前さんを無理に勸めて、監督さんの處へなんかやるんぢやなかつたけ。勘忍して下さい。（泣く）

伊太郎　さうだ、行つて來る。（急におときの手を拂ひ退けて立上る）

おとき　小原へですか。そんなら後だつていゝぢやありませんか。

伊太郎　いや、己の行くのは皆の集まつてゐる處へだ。そこで何も彼もぶちまけて、潔く裁きを受けようと思ふんだ。

おとき　何も彼もとは？

伊太郎　監督から金を貰つて、工場の利益を計らうとした事をだ。

おとき　まあ、お前さん氣でも狂つたんぢやないんですか。それでなくてもみんな氣の立つてゐる最中です。そんな

事をおくびにでも出して御覧なさい。それこそ半殺しの目に會はされますよ。

伊太郎　精一が死んだのも仲間を裏切つた罰かも知れねえ。もう命なんかどうでもいゝんだ。（おときを突きのけて出て行く）

おとき　お待ちなさいつたら、お前さん。（追ひ縋らうとして何かに躓き倒れる。戸外の喚聲は愈々高く激しくなつて來る）

――幕――

（大正十三年十一月作）

小寺融吉篇

人の世の嘆き（三幕六場）

人

乙彦
志賀彦
比良男
竹男
伊香のおぢ
神官
およらッ兒
同じく余吾湖畔の里人　男女多勢
旅人甲
旅人乙
三上山の山神
伊吹山の山神
天女
天女と乙彥の子供

處

近江、余吾の湖畔

時

古代

第一幕

第一場　湖畔

余吾の湖畔、上手に黑木の質素な鳥居が、湖水に面して汀に立つてゐる。陽春。

下手から狩人の志賀彥、二十幾歲の年の頃、矢を背負ひ、弓を肩にかけ、腰に山鳥の死んだのを結び下げ、疲れた足取りで出る。

志賀　（上手を見て）およらッ兒……おい、およらッ兒、聞えない振りをしてるな、そんなところでなにをしてるかよ、氣を持たせるなよつてば。（ふと腰の鳥を探つておどろく）ハテナ、をかしいぞ、をかしいぞよ、たしか今日は四羽射止めた筈だが、こりや三羽だ、どうも分らないぞ、道で落した覺えもなし、取つたは、たしかに四羽だつたが、（考へる、突然くやしさうに）では、またあいつにやられたな、あ、あいつにしてやられたかッ。（と殘念がる）

（とたんに下手にイヒヽヽヽと、物すごい笑ひ聲がして、半人半獸の伊吹の山神がとんで來る、一種ふしぎ

な聲である。）

志賀　さてこそウヌだつたか。

（志賀彦一つかみに卜大手をひろげて下手にくると、山神くゞりぬけて上手にくる。）

伊吹　イヒ、、、このあひだア、よくも弓でおいらをぶつたア。

志賀　やい、また悪さをしアがつたな。

伊吹　おいらア伊吹の山の主だア、伊吹の鳥けものは、おいらの物だア。

志賀　その返報だとぬかすのかい。

志賀　胸くそ悪い面がまへのウヌがな、伊吹の主てことは三ッ兒も知つてるわい、だが、それがどうした、伊吹の鳥けものは、おいらのものだア？　云つたな、狩人はどの鳥でもけものでも、一目見たら逃がさねえのだ、ぜんたい。ウヌも一矢でやつつけたいと思ふくらゐだ、苦勞性の年よりどもが、ウヌを殺せば祟りがあるなぞと、なまじ止めるから、命が助かつてゐアがるのだ。

伊吹　山の神ア不死身だア、ウヌの祖父の祖父より、先きの先きから生きてゐるだア、鳥や獸と一つにしアがつて、そ、その矢が、お、おいらに、當つて耐るものかア。

志賀　云つたな。此の節は、どこの主でも人間が怖がらないとかいふことで、やけくそに暴れ出すと聞いたが、ウヌ、そのお先きまつくらの化物め、え、不死身なら、こいつを受けろ。（卜弓に矢を番へる）

伊吹　（食ひちらした鳥を出す）これにあたるかア、イヒヒ、、、、。

志賀　（思はず弓を落し）や、それは——。

伊吹　さつき腰からふんだくつたア。

（志賀彦あわてゝ弓矢を拾ひ、覗ひをつけて追ひまはすが山神いろ〳〵にとびまはり、トヾ上手に走り去るので、志賀彦憤然弓矢を下に叩きつける、ワアッと多勢の人の聲、すぐ下手から多勢の男女の里人がくる、一番陽氣なのは比良男、陰氣なのは乙彦。）

比良　志賀よ〳〵、見てゐたぞ〳〵。

男一　伊吹がなにしたのだえ。

志賀　せつかく取つた山鳥を、まんまと、一羽せしめられた。

（一同ドッと笑ふ、志賀彦佛頂面をして弓矢を拾ふ、その拾ひ方が可笑しくて、また笑はれる。）

比良　さういへば、おれも覺えがあることよ。笑はずに聞いてくれい。狩人の獲物の横取りは、昔から伊吹の自慢でな、おれから取つた猪をよ、あの齒をムキ出してガリガリ囓るのを見た時は、流石にびつくりおどろかしたなあ。

志賀　きやつこそ心から骨から悪神だ。

男二　あたゝかになると、獣も穴から出てくるが、あいつも近頃は、ろく／＼山に落ちつかずに、里ばかりをうろついてゐる。女をなめるのが好きだからな。

娘達　まアいやだ／＼。（ト口々に）

男三　いつも口の中で、何かぶつ／＼云つてるなあ。

比良　おれたちには分らないが、あれはひとりごとらしい。

娘一　あたし此の間、三上のぬしがねえ、筑摩のお社のすぐそばで、お宮の太鼓に合せて踊を踊つてるのを、通りがゝりに見たものさ、面白くつてねえ。

一同　ほう、ほう。（ト口々に）

比良　そりやエライ見ものだつたらう、伊吹に比べると三上のぬしは、なか／＼愛嬌もあり、どこか、しやれた氣性だ、人間でいふと、こつちが、いくらか利口さうだ。

男一　伊香のおぢいなんか若い時、よく三上のぬしと賭をして、取つたり取られたりしたさうだ。

男二　山の神と賭をしたのかい、へーえ。

志賀　だが、今日はみんなどこに行つたのだ？

比良　鍋を冠る祭りも近くなつたで、その噂さで持ち切りだ。

（とたんに上手より、およらッ兒アレッと叫び出てくる。續いて男甲乙、竹男追つてくる。男一とびついて、およらを抑へろ、一同笑ふ。）

比良　いぢめられたな、およらッ兒。

およ　みんなが、みんなが……

男一　おい、こいつは鍋をいくら冠るだらう。

およ　誰が、一つだつて冠るものか。

男甲　おぬしに聞きはしないぞ。

男三　ところで此の筑摩の祠神祭だが。里の女たちが思ひ思ひに鍋を頭からかぶつて、明神様にお參りする、その習はしさへ、よそにない珍らしい事ださうだが、とりわけて、その鍋の數が、一人一人にちがふのが面白いと、わざ／＼遠くから見にくる物好きも、近頃めつきりふえたなア、

男一　なにが、常に並み／＼のめうと仲から、こつそり、いとしがつた男の數を、祭りの日までは隱しても、明神様の神前では、うそ僞りのならぬ鍋祭りだ、二人のものを一人にすれば、立ちどころに罰が當るから、ふしぎだなア。

男甲　だから、およらッ兒の鍋がいくつか。早く見たいと云ふことよ。

一同　ウハ、、、、。（ト笑ふ）

比良　おれは、こんな習はしが、いつの昔から始まつたものかと、伊香のおぢいに聞いたことがあつた。

男一　ほう。
比良　おぢいも知らんといふ、子供の時からあつたことぢやといふばかりよ、ではそれなら、またなんのためにするのかえ、と聞いてみた。
志賀　ふむ。
比良　旨いことを話してくれた。
男二　旨いこと？
比良　人間に何よりの禁物は、僞をつくことぢやと思ふ、できたものはできたものぢや、時には心も善い男女も、くさ〴〵の罪ごとをあやまち犯す時がくる、が、神樣は水無月の晦日に、サラリと拂ひ淨めて下さる。神樣は何事も見通しなさる、隱して隱しおほせはせぬ。そこで人間は隱さぬがいゝ、では隱したがる、包みたがる一番のものはなんぢや、いろごとぢや、分けて女は男より隱したがる、これを戒しめての筑摩の鍋祭りが、昔からあるのぢやらう、おぢいは、かう考へてゐた……と云つた。
一同　ほう、ほう。（ト口々に）
志賀　なるほどなア、なんでも古い事を知つてるぢいさんだけに、旨いことを云ふわい。
男二　なんでおぬし一人、さうふさぎこんでゐるのだ。おぬし一人浮かぬ面だぞ。乙彥ッ。（ト乙彥へ）
男一　全くだ、乙彥、狐にでもつまゝれたといふ風だ。
乙彥　うむ、狐には逢はないが、夢に夢を見るやうだ。
竹男　ハテな、おい、ぬしは狩に行つて、何かに取つゝかれたな、山よりも高いと思ふ大男が、だしぬけに目の前に出てこなかつたかい、でなければ、瀧壺を覗いたとき、めつぽうきれいな顏の女が、水の底で笑ひはしなかつたか。
（一同ドッと笑ふ、乙彥答へず、鳥居に凭れて、ぢつと水を見つめる。）
志賀　乙、どうして仲間に入らないのだい。
竹男　おい、向ふに行かう、乙もこい。
（一同打つれて上手に入る、乙彥もなにとなく後に續く。間、下手より老いたる神官、幣束を二つ持ち來り、一つを鳥居のそばの汀に突き、拍手を打ち、辭儀する、殘りの一つを持ち上手に入る、鳥の聲、上手より前の伊吹のぬし、古き破れ鍋を抱へて出で、人なきを見て、鍋を下におく、鍋のまはりを飛んだり跳ねたり、「アーアーウンウン、ヒヤンダラリ〳〵」とおめきつゝ、膝を打ち尻を打ち踊りまはる。下手の汀、水中より三上の山神、水藻を頭にかぶり這ひ上る、藻をかなぐりすてると、伊吹に似て半人半獸である。）
（這ひよりて頰杖ついて伊吹の有樣を見る、やがてこらへ切れず、異樣の聲で噴き出して笑ふので、伊吹の山

神、鍋につまづいてころぶ、三上のぬし腹這ひて近づく。）

伊吹（すばやく起上り）びつくりしたア、おぬしだつたか。

三上　珍らしいまじなひをやつてるナ。

伊吹（腹立たしげに全身の毛をむしる）なんと大きな聲で笑ひあがつたい。

三上　そのまじなひはかうだらう、あの白い鳥を取つて食ふ氣だ。

伊吹　白い鳥だと……（苦笑ひ）感づいたなア。

三上　えへゝゝゝ。（ころがり笑ふ）

伊吹　イヒヽヽイヒヽヽ。（ころがり笑ふ、やがて）さうだア、おぬしが感づかねえこたアねえ。けれど今どき此の湖に、天女が水を浴びにくるとは、思アなかつた。昔アよくあることだつたが、今どきだから、珍らしい、おいらア、初手は、山からたゞ見てたア、もうこらへ切れねえ、下りてきただア。

三上（笑ふ）へつへつへ。人間もだん／＼陰氣になつてつまらねえと思つたところだ、天女も以前は珍らしかねえが、やつぱり人間とちがつて身體つきから何から何まで、みつちり御馳走だ、全く長いこと奴らの顏を見なかつたなア。（トあぐらをかく）

伊吹（同じくあぐらをかく）ところが、おいらア此の事は人間野郎も感づいて、邪ま立てしねえかと疑ぐるのだ。野郎共の此の頃の惡智慧は忌々しい、なア三上、きやつらは、ぬしたちみんなのかたきだぞ。

三上　やい／＼白ばくれて、人間野郎の惡口ばかり、くそをくらへ、それでおいらを油斷させる氣た、邪まになるのは、おいらと知つて……氣の利かねえ眞似は止せ。

伊吹　やかましい。

（伊吹の主、面ふくらして立上り、鍋を前後左右に振りまはし「アーアーウンウン、ヒヤンダラリ／＼」とわめき叫ぶ、踊り狂ふ。）

三上　へゝゝゝゝ、うふゝゝゝ。（ト冷笑）

（伊吹の主は冷笑に目もくれず、一心不亂に呪文を唱へた末、一聲おめき叫んで、鍋を踏みつぶす、へと／＼につかれる。）

伊吹　もう、もうおいらの手のうちだ、七人が七人でなくつても、たんまりせしめてやつつけるだア。（昂奮して）やア、美濃と近江を踏んづけた、伊吹の山のぬしの神が、精限り根限り呪つたぞ、あらん限りの通力を叩きだしたぞ、空とぶ天女も落ちてこい、下界の魔道に落ちてこいやい。

三上（ヌク／＼と立ち）まじなひの利き目があつたのは、

昔の昔だ、世の中が、かはつたのに氣がつかないかい、ぬしがなめるか、おいらが三上にさらひこむか、あとで口惜しがるな。

伊吹　ウヌこそあとで……えゝ野郎。

（伊吹の主、三上の主に打つてかゝる、疲れてゐるのでひよろつく。）

三上　こゝで今から負けるつもりか。

（伊吹の主、ころりころがされる、三上の主これを尻目にかけて下手に入る。）

伊吹　ウーウークシヤ〳〵、おいらは人間野郎が氣になるのに、三上の奴は、三上の奴は友達げえもねえ、アアこれだから、クシヤ〳〵山のぬしは人間野郎にも甘く見られるだア、（につこり）だがイヒヽヽ、今夜は天女を七人なめられるのか、イヒヽヽ。

（伊吹の主、上手にゆきかけたが、苦い顔をして下手にゆく、上手より乙彦、前の神官（幣束はなし）とつれ立つてくる。）

乙彦　おれはまだ伊香のおぢいより、ほかに誰にも話してない、おぬしにいふのは二人目だ、なにしろゆうべも一昨日の晩も、此の目でまざ〳〵見たことで、おれが人を欺すなぞとは、おぬしも疑ぐりはしなからう。どこからか、七羽の白い鳥がとんでくる、音もなく汀に下りる、下りるとそれが女の神の姿になる、話に聞いた天女といふものにちがひない、そしてさも面白さうに水につかつて遊ぶのだよ。

神官　ふしぎぢやなあ。

乙彦　ふしぎだ、ふしぎだが、ほんとの話だ。おぬしは信じてくれん積りかい、アヽ向ふからおぢいがきた。

（下手から伊香のおぢい、古風な櫂をかついでくる。）

おぢ　（神官に）ほう、四五日あはなんだな、（鳥居の前の幣束を見て）やツ、これは〳〵（近づき櫂を下におき柏手を打つ、立つて）さういへば、祭りが近うなつたのぢやな。

神官　むゝ吉日ぢやから、こちらへも廻つてきた。もう社へ歸るところぢや。

おぢ　おれも此の年になるまで、舟を渡して暮らしてゐるが、おぬしも長いこと御幣を持つてゐるなア。

神官　ハヽヽヽ。

おぢ　子供の時の友だちも、たつた二人きりになつてしまつた。おぬしにあふとなつかしいわい。

神官　ハヽヽヽ、いやおれもな、死ぬなら、おぬしの先きに死にたいと思ふわ。一人殘つては淋しからう。ハヽハヽ。

乙彦　そこでおぢい、今もこゝで話してゐるところだが、白い鳥が七羽とんできて、天女の姿にかはるのを、たゞ

それは不思議ぢやといふばかり、とんと信じてはくれんのだ。
おぢ　きのふ聞いた、あの事かな。
乙彦　おれは、乙彦は、余吾の里きつてのあはれな男で、二親にも死に別れ、だれ一人たよりと思ふ者もない。おまけに近頃は狩に行つても獲物もなし、此の冬の、近年めづらしい寒さには、全く身のおきどころがなくて、泣いて、ふるへて夜を明してゐたことは、おぢいもよつく知つてる筈だ。（おぢが何か云ひかけるのに冠せて）そして春になつたとて、他人ほど心も浮きたゝず、世の中は住み甲斐もない、樂しみもないと恨む氣が出た、尤もそれも生れつき、不仕合せが續いての、ひがみからかも知れんが……
おぢ　な、なんのおぬしにひがみがあらうかい。世辭ではないぞ、おぬしは正直者ぢや。素直な若者ぢや。
乙彦　（おぢの手を取つて泣く）そこで、おれは生きてゐるのも恥かしく、一昨日の晩、ねむられぬまゝに家を出て、汀にきたので……これを見た、七人の天女の美しい姿を見ては、今まで胸の中にもやもやした恨みも妬みも悲しさも忘れ、たゞ自分も神の一人になつた氣がした。
神官　（小首を傾けて聞いてゐたが）乙彦、おぬし少し本性でないぞ、おれと一所に社へきなされ、神前でお祈りをして進ぜるから。何か物につかれたのぢや。
乙彦　（これに耳も假さず）見てはならぬものを見たゝめに、仕合せが反つて不仕合せになり、禍を招くといふことは、かねがねおれも聞いてゐる、然し此の幻を見た上は、どのやうな禍も苦にならぬ、あゝ忘れようにも忘れられぬ。
（乙彦夢みる如く云ひつゞける、二人の老人慰さめかねてあはれむ心あり。）

―― 幕 ――

第二場　夜の湖畔

正面に黒幕が背景代りに垂れてゐる。上手に三上の主が腹這ひ、伊吹の主があぐらをかき、共に下手を見つめてゐる。
三上　（低い聲で）鳥がとんできたぞ。
伊吹　二羽……五羽……今夜も七羽だア。
三上　天の神が鳥の姿に化けやがるのは、昔から白鳥が多いやうだな。
伊吹　（にこにこして）うふゝゝ、もう天女になつてしまつたア。裸になる、裸になる。
三上　いゝ肉つきだ。へゝ旨さうだ。（ソロリソロリと中央に向ひ這ひ出す）

伊吹　（三上に負けぬやう、同じ所まで出る、此の二人は先を越されまい〳〵と氣をつけあつてゐる。間）身體の匂ひがこゝまで匂つてくるなア。

三上　なにしろ七人もゐアがるからよ……どいつも〳〵別品だな。あいつ達を見るのも久し振りだ。長いこと、ここに下りてこなかつた。

伊吹　うふゝゝゝ、嬉しさうに水につかつてゐるわい。あれを見ろ〳〵。

三上　やつぱり天の神だ、人間のあまッ子とは大したちがひだ。

伊吹　（愕然として伸び上り四方を見まはす）人間野郎はゐねえだらうな。

三上　さうだしぬけに立上るな。天女の奴に感づかれるぞ。逃げられたら、どうする氣だ。（ソロリ〳〵と下手に這ふ）

伊吹　（不安げに及び腰で下手を見てゐたが、頓狂な聲で）やつ、ゐるぞ。ゐるぞ。

三上　聲を立てるな、（立上り）ドレ、どこに……あッ、たしかに人間だ。見てやがるな。シッ天女が此方を見た。しやがめ〳〵。

伊吹　（いらつて）うゝん、邪魔しあがると。（ト大聲でどなる）

三上　（立上つて伊吹の口に手をあてる、二人もみあふ）おッ、うぬの聲で……うぬの聲で……（三上の主、驅けださうとする、伊吹の主先きにならうとして同士討をする）

伊吹　おいらが先きだア……（トもみあふ）　わア逃げた、鳥になつた。

（伊吹の主、三上の主を突きとばして下手にかけこむ、三上の主もあとを追つて入る。）

（間。黒幕切つて落す、第三場となる。）

第三場　夜の湖畔

湖畔、春のおぼろ月、星、中央上手よりに樹がある。樹のかたはらに天女がたゞずんでゐる。下手に乙彦が羽衣を持ち、立つてゐる。羽衣は特殊のあつらへを要する。樹は松でない方がいゝ。

天女　（ふしぎさうに乙彦を見てゐたが、やがて）こちらへ下さいまし。それは此の樹へ、わたくしが、かけておきました。（乙彦茫然として、羽衣を返さうとしたが、發作的に拒む、天女意外の思入れありて）こちらへ下さいまし。六人の方々は、もう天へ昇られて、わたくしひとり、おくれました。この羽衣がなくては歸ることができません。

乙彦　きのふまでは考へも及ばなかつたことだ。けふまで生きてゐたのは無駄でない。（天女に）さあすぐにも道しるべを……

天女（ふしぎさうに）道しるべ、とは？

乙彦　おぬしが歸る、天への道の道しるべを……わたしは此の余吾の里に、名を乙彦とよばれる者だ。住みなれた舊里（ふるさと）を今夜限り、おぬしをたのみに天に昇りたい。

天女　いゝえ、地に住む方には昇れません。

乙彦　此の羽衣（きれ）を身につけて……

天女　どうしてそれが身につきませう。

乙彦　つかない？　あゝそれならばあの天には、あの神々しい空の国には、人間は一生かゝつても昇れないのか……（ぐつたりなつて俯伏す）いつまで、呪はれた地に暮らすことだ。

天女　此の美しい余吾のみづうみが、どうして呪はれたところでございませう。山や水の淸らかさは、天も地もかはりません。

乙彦（フト）おゝ天も地もかはりがないといふのなら、おぬしはこゝに住んでくれるか。

天女　天は天の者の住むところ、地は地の者の住むところでございます。魚が水に住みますやうに。お持ちになつて甲斐のない羽衣は、どうぞ返して下さいまし。

乙彦　淺ましい。人間は鳥にも劣る、あゝ思ふまゝに空がとべる身なら……（羽衣を抱きしめて）この羽衣（きれ）には天の匂ひがする、ひし〳〵と、おれの心を責めてくる。

天女（急に近づき羽衣に手をかけ）どうぞ……

乙彦（ぢつと天女を見つめる。表情がだん〳〵變つてくる、天女はハツとして立ちのく。乙彦しづかに半分獨語（ひとりごと）的に）おれは此の世を怨んだ、呪つた、それが一昨日（おとゝひ）、ふとおぬしを見た時から、その苦しさをまぬがれた。然し、今となつては、今となつては、前にもまして……（ヌツクと立ち上る、天女避けて乙彦の下手にまはる）

天女（一度恐怖におそはれて取りみだしたが、こゝで形を改め端然と）そのきれは、羽衣と申して大事な寶でございます。それをつけませんと天に昇れません。お返し下さい。おいとまをいたします。

乙彦（一種の思入れあり、やがて喜悅溢る）うむ、おぬしを天にも返す返へさないも、此のきれ一つだ。乙彦の心一つだ。はゝゝ（と物凄く笑ふ）人間が神に勝つた。（天女に迫る、天女心あり）うつくしい女（そなた）だなあ……おぬしはけふから、おれの女（そなた）……

天女（力なく仆れかゝる、空を仰いで）あゝ思はず下界の春にさそはれて、天上の事をわすれました。歸る時をおくらせて、大事な〳〵羽衣は人手に渡ります、どうし

て天女がこゝに住めませう、わざはひは、もう身にふりかゝりました。(天冠に附着せるえうらく及び首かざりの珠おのづから下に落つ、天女下を見つめて思ひ入れあり)

乙彦 (空を見て) 六羽の白鳥が羽ばたゝきをして、同じところをとんでゐる。おぬし一人だけでもよく殘したものだ。

天女 (同じく空を見て) みなさま、とこしへのお別れでございます。わたくしは、ひとりはなされて、こゝに留ることになりました。けれども、たつた今までは、たつた今までは、わたくしも御一所にをりましたものを……

(云ひ終つて天女は天冠をかなぐりすてゝ仆れる、髪がみだれる、乙彦ぢつと思ひ入れ)

――幕――

――此の第三場は音樂を用ひるもよし。必らずしも要せず。――

第二幕

乙彦の家の門前の往來

舞臺の上手寄りに一段高くなつた生け垣、これがつゝじと椿で出來てゐて、今その花ざかりである。中央上手よりに古風な、どことなく優美な門、段々を昇つてくゞるやうになつてゐる。門の中につゝじや他の樹木があつて、乙彦の家の屋根その他が隱見する、門の下手にも生け垣がつゞく。その下手は湖畔。晴れた日。

幕があくと、家の中から一種異樣の微妙な音色が聞えてくる。里の娘一二三下手から出てくる。門前を通りすぎようとして、微妙な音色に耳傾ける。やがて。

娘一 天女さんのはたおりの音が聞えるよ。

娘二 頸飾りの珠のもつれあふ音までも……なんといふ神神しい音だらう。あれだもの。美事な機がおれる筈さ。

娘三 わたし、ずゐぶん眞似をしてるのだけれど、とても手があんなに動かないの。

娘二 そりやさうさ。

娘一 (間) 天女さんがこゝへきてから、この村はなんだか夜が明けたやうね。

娘二 天女さんといふよりも、きれいな、おねえさんと云ひたいのね。

娘三 もつたいない。わたし、あの人のそばにゐるのが大好き、一寸寄つていかない?

(娘達三人うなづきあつて門内に入る。)

(間。)

(門から伴香のおぢ默々と出てくる。上手に行きかけたがふと下手を見て、そのまゝ佇ずむ。すると下手か

ら旅人の甲と乙が元氣の好い足取りで出てくる。甲はやゝ若く、乙はやゝ甲より年を取つてゐるが、ちがふ國の者であることは姿を一見して分る。）

旅乙　こんな長閑な景色はよそにありませんな。かういふところに住んでゐたら、定めし長生きすることだらう。

旅甲　のんびりした、あたゝかな在所です。旅をしてゐる氣がしません。さて船頭さんが話の、椿の咲いた家といふのは……（ト云ひかけ、伊香のおぢに氣づき、肩の荷を下して）こちらの在所の方とお見受けしましたが、一寸物をおたづねいたします。

おぢ　はい、はい、この里の者でございます。遠方からおいでなされたかな。

旅乙　わしは、おとなりの美濃の國だが、美濃もずつと東の果ての村からきました。

旅甲　わたしは又、信濃の山間から、此の方とは、途中で道づれとなりました、實は二人とも、この余吾の里が目あて、この湖に天降られた天女どのが織られるといふ、名高い織物が欲しさにまゐりました。（下手を見て）今、向ふで、なんでも此のあたり、つゝじ椿の咲いてゐる家と敎へてくれましたが……

おぢ　はい、はい、それは此の家でございます、こゝの家でございます。毎日ひにち、一人は必らず、そのやうな遠方から、わざ／＼たづねて見えられまする。

（二人の旅人は顏見合せて喜ぶ。乙も肩の荷を下す。）

旅乙　たうとうたどりついたか、道々どんなに樂しみにしたかしれません。めつたに手に入らぬ貴い織物は、あとあとの世までの語り草だ、孫子の代まで家の寶になります、値は高くともいとひません。せめてきれはしなりともと思ひました。

旅甲　織物も織物だが、なによりも、その天女どのを一目見たい。誰の口からともなく、信濃路の奧までも、天女どのの噂がつたはりました。この世の中にそんな事があるものか……たいていの人はさういひます。然しわたしは、その噂を聞いた時から、堅く信じてしまつたのですよ。人に笑はれ、止められたのを振り切つて旅の仕度もそこ／＼に、草深い木曾の山家、わたしの在所を氣もそぞろにとび出してきたのです。

おぢ　まことに、ここの者でもふしぎがります。遠くの人達が信じなさらんのも無理はない。

旅甲　や、さつきから聞えてくる、あの音は……時はづれの鈴蟲、松蟲の啼く聲のやうに……

おぢ　はい、お珍らしく聞える筈ぢや。あれは、天女どのが、前かた、あの空の、天の川原とやらに暮してござつたとき、習ひおぼえた機織の祕術をつくされる音でござ

いいます。お聞きなされ、きりはつたり、きりはつたり、といふをさの音の面白さ、だれでも思はず聞きほれます。それが元で、つれあひの名を、いつの間にやら、はい、きりはた太夫、きりはた太夫と呼ぶやうになりました。又、松蟲、鈴蟲の啼く聲と、お聞きなされたは、天女どのの身につけた飾りの玉がもつれあふ響きでございます。

旅乙　はてさて、けつこうづくめのことだ。

おぢ　はい、けつこうづくめでございます。それに此のきりはた太夫、前の名は乙彦と申しました、その乙彦が天女どのとめうとにならうなぞとは、冥加にあまつて空恐ろしいと、まあ、わたしどもも止めましたが、なんの、罰があたりますどころか、天女どのが、つい先だつて、玉のやうなお子を生まつしやりました。

旅乙　重ね〳〵おめでたい。

おぢ　織物は賣れまする、余吾の里一番のまづしい乙彦が今は近江名うての長者のきりはた太夫、奇特なことでございませぬか。ま、こちらへお入りなされませ。

旅乙　では、どうぞ、御案内を。

（二人の旅人いそ〳〵と、伊香のおぢの後に従ひ門内に入る。機織の音止む。）

（三上の主が上手から頭をかゝへてよろめいて出る。よき所にとまり、見物席を見まはし、見物に話しかけるやうに獨語をいふ。）

三上　（ムシヤクシヤした佛頂面で）どんなもんだらう。人間でも年を取つた奴は、子供の時の方が今より戀しいものださうだが、おいらは、昔を考へると、もう馬鹿々々しくて話にならねえ。人間並みに數へると、何千年といふ昔だつた、はゝん、草も木も山も川も、口をきいた、しやべつたよ。（俄に機嫌よく）ずゐぶんこゝいらでも、多勢の神達が集つて、面白可笑しく遊んだものだて。好い聲で歌を唄ふ。草の葉で笛を吹く、舞を舞ふ、踊り狂ふ、有頂天だ。（喜んで調子づいてしまふ）さうだ。富士權現とか云つた神が、とてつもなく高い山をこしらへるんだといふんで、こゝいらの土を掘つて、もつこに入れてかついだ。その姿の可笑しいつたら、大笑ひだつたなあ。今どきの人間どもは知らねえが、そのおかげで湖が一つ湧いて出たんだ。琵琶の湖よ。高い山といふのは駿河の富士山よ。一晩で土を盛りあげたから豪勢だよ。（にや〳〵と思ひだし笑ひをする。もう陽氣で浮き〳〵と獨り言に自ら醉つてゐる）さうだつたなあ。あつちこつちの川なんぞには、やつぱり今どきには見られねえくらゐ、顔のいゝ、ふつくらとした娘達が、桶を下げて水を汲みにくる。そいつに惚れこんだ神達は、早速白羽の矢に化けて、川上から流れて行つて、水を汲んでゐるところへ、

ふふん、旨く當りをつけたつけ。木の精や水の精も默つてゐないで、緑色の着物なんかを澄ましてきて、見とれるやうな綺麗な若者に化けあがつた。引つぱる、戻す、すねる、欺したり、持ちかけたり、あゝ面白かつたんだ。（ト大聲で調子づいて息もつかずしやべりちらしたので、息が苦しくなる、すると元の佛頂面になる。打つて、かはつて苦々しく腹立たしく）ところで、やい、ところで今はどうだい。天の神は、うぬばかり樂しみな事をしはうだいのくせに、おいら達、地の神を、永劫魔道に沈めあがつた。鳥や、獸とどこがちがふんだい。なにが地の神だ。人間野郎にまで見くびられる。久し振りで下界に下りてきた天女も手に入れ損なふ。あゝ死ねる人間がいつそ得だ…

（下手に、伊吹の主が、しよんぼり、いつの間にか、のろ〳〵出てくる。）

三上　（頓狂な聲で）やい。

伊吹　（びつくりして）えれえ聲だ。あゝうるせえなあ。

三上　（冷笑する）いやはや、おぬしも執念深く、間がな隙がな、こゝをうろついてけつかるが、どうして奴めを手に入れたものかなあ。

伊吹　もう意地づくだあ、根氣づくだあ。

三上　その意地だて。根氣だて、馬鹿々々しく力んでみたところで、相手は、おいら達より一枚上の天女だ。なんで乙彦の人間野郎に山の神が出しぬかれたい。羽衣に目をつけねえのが拙かつたんだ。

伊吹　さうだあ、羽衣さへかつぱらへば取つちめたんだ。

三上　かんじんかなめて物を狙はなけりやいけねえ。そこで今度はどうすればいゝ。

伊吹　羽衣を盜むんだが、在りどころがなあ。

三上　今度は他の物に目をつけるか。然しそれより奴と乙彦とを仲たがひさせて……

伊吹　では、おいらは、まじなひをしよう。

三上　（笑ふ）うツふ。まじなひは止せよ。御當世にまじなひは利きつこなしだ。まあ止せ。

伊吹　いや、こんどこそは利かしてみせる。

三上　まあさ、考へてみろ、元々天女は天の神だ、乙は人間野郎だ、なあ、この仲が長續きするか、しないか。

伊吹　うるせえ、おぬしのおしやべりを聞いてる位なら、おいらはいつそ……

（伊吹思はず家の方へ驅けよらうとする、三上冷笑する、折から人の足音、二人ともびつくりして上手に入る。すぐ門内から前の二人の旅人が織物を抱へて、いそ〳〵と出る。佇ずんで、嬉しげな思入れあり、やがて打ち返し〳〵織物をひろげて眺め入る。）

旅甲　いくたびくり返して見たら、あきるだらう。有難涙がこぼれます。

旅乙　仰しやるとほりだ。ごらんなさい。どうです。

旅甲　とても人間業ぢやありません。なんと云つても神業です。思ひだしました。秋になつて、あの山姫と云ふ女の神とかゞ、山々谷々に洩れなく紅葉の錦を織りだす、私の故郷の木曾の村々の神代ながらの風情た、そつくりこれですよ。

旅乙　さう聞くと私も國自慢のやうだが、こちらの方の織物は、美濃の廣々とした、春の若草が萌えだした丘や野原の面影があります。年を取つても、子供の時を思ひだす、あの若葉時の國の景色だ。

（二人は飽かず見てゐたが、やがて包みの中に收めて、杖を持つて立上る。）

旅乙　さて出かけるとしようか。

旅甲　後ろ髮を引かれますが……

旅乙　御同様だ、（二人笑ふ）全く珍らしい事もあればある。羨しい。

旅甲　いや、私は少し恐ろしくなりました。

旅乙　あはゝゝなにしろ、きりはた太夫殿は日本一の果報者さ。

（二人下手に入る。幼兒の泣き聲。門の中から、幕あきに出た三人の娘と、幼兒を抱いた天女と伊香のおちが出てくる。皆々上手を一寸見る。）

おち　まだ歸らつしやらん。道草食つてかまだ見えん。ぼんのとゝさまはまだ見えん。（幼兒に）ぼんよ。ぼんのとゝさに歸ろとせん。（三人の娘達笑ふ、おちも笑ひつゝ幼兒を抱かうとしたが）はゝあ。誰よりもおかゝさまが好いかな。親子ぢやなあ。神様のお子でもかはりはない。その筈、いとしがりなされ方が並みの女子とちがひまするから……（娘達に）のう、余吾の里で天女殿にもまして我子をいとしがるおかゝさまはないわな。（娘達肯づく）

天女　何から何までわたくしは、夢に夢みる心でございます。住みなれた天の暮しも、此の子を生んでからといふものは、そんな事もあつたのかと、時をり人にたづねられて、おぼろに思ひだすほどになりました。そして身に始めて覺えた氣苦勞も、やつぱり此の子が生れてから……けれど、それは反つて嬉しい苦勞でございます。

おち　俗に子だからと申すくらゐ、我子は寶ぢや。（娘達に）今のお話を忘れずにおかつしやい。おぬし達もおつつけやゝを生むのぢや。（天女に）然し天女殿が、よくまあ人間界の習はしに馴れて下された。

天女　それはさうと、太夫様は……道が險しいのでございますか。

おぢ　お案じさつしやるな。朝の内はけふな空合ぢやつたが、から晴れては、舟で行つたがましであつた。その方が小半時早い。然し、おかげさまで、太夫も此の節はよい若者となりました。あれは、子供の時に兩親に別れて、氣の毒な、不運つゞきの者ぢやつたが、今はおかげさまでなあ。

天女　まあ何より、どなたも〳〵、ほんによいお方ばかりで、仕合せな事でございます。

娘一　(ふと上手を見て)　あれ、戻らつしやつた。

(乙彦、今の名はきりはた太夫、立派な服裝で、前幕とは正反對に晴れ〳〵として上手より出づ。)

天女　お歸りなさいませ。道が惡うございましたか。

乙彦　うむ、ゆうべの雨で、ことのほか、ぬかるみであつた。(幼兒を覗いて)ぼん、待つてゐたか。

天女　あ、いつの間にやら、うと〳〵と……これ、とう樣のお迎へをしないのかえ。

乙彦　(制して)　目はさまさせん方がよい。罪のない寢顏だ。ひとりでに醒めるまで、眠らせておくがよい。そこで今、福麻呂殿にお目にかゝつた、これからすぐ二人づれで來てもらへまいかと云はれた。

おぢ　まあ戻つたばかりぢや、ちと休んでは。

乙彦　なんの……おぬしも早速仕度して……

天女　畏りました。

(三人の娘に會釋し、幼兒を抱いたまゝ門内に入る。三人の娘うなづきあひ、上手に去る。乙彦とおぢと殘る。)

乙彦　(ためらひ勝ちに、然し、やがて、しみ〳〵と語る)おぢい。おれは此の間からいろ〳〵と思ふことがある。打ち明けて聞いてもらへるのは、おぢい一人なのだが…………つく〳〵おれは自分ながら、自分が他人のやうに思はれだしてきた。あれと夫婦(めうと)仲になる、子供まで生れた。今は、乙彦と呼ばれずに、きりはた太夫と人に呼ばれる、そして天下の仕合せ者と噂される、誠に仕合せ者だ、然しその仕合せの中に、喜びの中に、なんといふか、一寸口に云へん或る物足りなさをおぼえるのだ。

おぢ　物足らぬ……欲が深いな。その身分で、何が不足ぢや。

乙彦　不足というては言葉が當らん。おれを羨ましいといふ誰でもが、持つてゐて、そのくせ羨まれる、おれに欠けてゐるものだ。なにせい、他人から見れば、正しくおれは仕合せかも知れん、然し自分から見れば、どうもそれが我が物に似て、我が物でない……

おぢ　(にこ〳〵して)　おぬしは正直者ぢやに依つて、果報すぎると、へりくだる氣が起きるんぢや。なんの、遠

慮に及ぶものか、正直の報いが、やう〳〵めぐつてきたんぢやよ。

乙彦　さうではない。おぢい、實はかうだ、あの天女が…………（ト云ひかけて止める）

おぢ　（不安げに）天女殿がどうかされたか。

乙彦　おれにはあんまり美し過ぎる、立派過ぎる、眩し過ぎる……（おぢの何か云はんとするを制し）こ、これは他人には察せられん、乙彦の身になつて見なければ分らん……あれと夫婦になつて以來、つい先ごろまでは、なんとなく、自分も神の境涯に近づいてゆくやうな氣になつた……（おぢ首肯く、乙彦それを見て失望し）然し人間は、人間の分にゐた方が（ト云ひかける）

おぢ　（ふと上手を見たので、乙彦を制し）しいつ。（上手を指し、ニヤリと笑ひ）はづさつしやれ〳〵。こゝにゐては二人が恥しがらう。

（乙彦上手を見る、ハツとなる、おぢに促されて、門内の椿の蔭に隱れる。上手から竹男、およら兒、しどけなく寄りそひて出づ。）

竹男　疑ぐりぶかい奴だなあ。おぬしと、おれの仲といへば、もう誰にだつて、知られてるほどだ。

およ　だつて、さつきの歌はありやなんだい。

竹男　みんなが歌ふから、おれだつて歌ふ、おれが作つたんぢやないぞ、昔からある歌だ。草を刈りながら歌ふ歌だ、五月雨ほどこひしのばれて、いまは秋田の落し水よ。子供だつて知つてるぢやないか。

およ　けど、私と一所に歩いてる時に、なにも歌はなくたつていゝよ。

竹男　馬鹿だなあ。おや、太夫の家まで來てしまつた。見ろ、おぬしの頰つぺたのやうな椿が咲いてるぞ。

およ　（氣取つて）紅いのが？　白いのが？

竹男　紅いのは、この頰つぺたが、食ひつきたいほど旨さうに見える時よ。さうだな、白いのは、おぬしをこゝの天女かと間違へるほど、奇麗に見える時よ。

およ　（恐悦して）まあ、私を天女だつて。

竹男　おれはおぬしの太夫たらう。

（二人機嫌よく下手より入る。伊香のおぢ、乙彦門内より出てくる。）

おぢ　（笑ひつゝ）古い手だが、奴め、うまいものだ。

乙彦　いや、竹男も、およら兒も、おれより世の中が面白からう。

おぢ　（呆れたやうに）なんと云はつしやつたな。

乙彦　おぢい、あれが毎日機を織る、その織物が、たとへ世にたぐひなく美しからうとも、數限りなく盡きまいとも、おれの身につける分はいかほどもない、しよせんは、

旅人達を喜ばすためにすぎんではないか……すると、そのかはり織物が金子となるといふだらう。〟なるほど、おれは近江一番の長者になつたかもしれん、然し、あの夥しい金子を何に使ふ？

おぢ　と、とんでもない、おぬし魔がさしたな、あんまり結構な身柄になつたで……魔、魔がさしたな……明神様へ參詣さつしやい、お百度を踏まつしやい……と、とんでもない。

（伊香のおぢ、早足で上手に入る、乙彦茫然と下手を見送る。門の所に三上の主と伊吹の主と現はれ、乙彦を指さし、下手を指さし、耳語しあひ、うなづきあふ。伊吹の主、祈禱の身がまへをして、突然ものすごく、おめき叫ぶ、乙彦發作的に身をふるはす、三上の主、異樣の聲を發する、乙彦仰天して胸をなで下す、三上の主、紅白の椿の花を取つて乙彦に投げつける、乙彦拾ひ取り、下手を見て思入れ、ト急に門内に幼兒の泣き聲、二人の山神あわてゝ、上手に逃げこむ。乙彦愕然と我に返る、花はおのづから下に落ちる、天女衣服を改めて幼兒を抱いて門口に現れる。）

乙彦　（振返る、思入れ、さりげなく）　仕度はできたか。

天女　おそくなりました。

乙彦　（幼兒を抱いて、思ひ入れあり）　光の輝くやうな顏をしてる、氣高い顏だ、大きくなつて、どんな者になる、（調子を沈めて）　どんな事を思ふやうになるだらう。

天女　伊香のおぢ樣が、子寶といふ言葉があるやうに、子供はほんに貴い寶ぢやと、さつきも仰しやいました、それにちがひございません。

乙彦　（ふと氣が變る）　子寶……うむ、世間ではいろ／＼な事をいふ、黃金をこそ寶とも云へば、おぬしの事をも、太夫の寶だと噂してゐる……おぬしに取つては、この子が眞實寶なのだ、なるほど、村の者が、おぬしを母親の鏡といふ筈だ、おぬしは、この子に取つての母親だ……おれはおぬしの子に生れたかつた……（天女ふしぎさうな顏をするのに冠せて）まあそれも好い、たゞたのむから、もう羽衣の在りどころを、しつこくは聞いてくれるな。おぬしがおれを捨てゝ、天に歸る氣ではないかと……

天女　（さへぎつて）　めつさうなことでございます。なんで今さら天に歸りませうか。こんなにまで、よのつねの女子とかはりはてましたのに……たゞ每日肌身につけてをりました形見の品ゆゑ、なつかしくて……

乙彦　よのつねの女子に……（苦笑）　さうか、天に歸る氣ではないのか。

天女　なぜ又そんなことを。（幼兒が急に泣き出したので、乙彦から受取つてあやす、忽ち泣き止む、乙彦苦々し

く門口の段に腰を下す、天女その下に坐つて、心配さうに)もしや何か、御心配なことでもございませんか。

乙彦　(心からホツとして)　いゝや、おぬしが、かうしてそばにゐてくれるのに、なんの心配な事があるだらう。始めて、おぬしに會つた時を思ひだす、七羽の白鳥が空をとんできた時を思ひだす……(天女思入れあり)　あれ以來、白鳥もとんではこぬ。

天女　(沈んで)　もう二度とは參りますまい。

乙彦　(再び苦々しく)　さうだらう、又、うつかりして羽衣を取られないとも限らん。

天女　もうその羽衣の事は仰しやらずにおいて下さいまし。私も決しておたづねいたしません。

乙彦　(勝ち誇つて)　ではいよ〳〵末長くこゝにゐるのか。

天女　居りませんで、どうなりませう。

乙彦　あのわづかな薄衣(うすぎぬ)一つで、神ともなれば人間ともなる……

天女　もう福麻呂様がお待ちかねではございませんか。

乙彦　さうだ。おぬし、一足先きに行つてくれ。すぐあとからゆく。

(天女辭儀して幼兒をあやしつゝ上手に入る。)

乙彦　(あと見送つて)　見あきせぬ美しさだ、玉のやうに美しいといふが、あれにまさる玉がどこにあらう……然し玉は玉だ、つめたい石だ、人間の血のぬくもりはない。

(下手から、およら兒がぷん〳〵怒つて早足で出てくる、竹男が續いて出てつかまへる。)

およ　はなしておくれ、はなして。

竹男　怒るな、それこそ根も葉もない事だ。

およ　ぬしの心は分つたよ。

竹男　もうそれでいゝ、さあ首つ玉を嚙るから。

およ　(あわてゝ竹男を突きとばし)　まあ、首つ玉を嚙るなんて。分相應たねえ。いつのまにか、山のぬし達の兄弟になつたんだもの。

竹男　前から兄弟ぢやないか。おぬしも奴らになめられたのかい。

およ　三上のいたづら者に引つかゝれたよ。(竹男が手を取らうとするので)おや、手をかじるの。

竹男　どこだつてもよ。

およ　ぢや、足がいゝだらう。(片足あげる)

竹男　足でもいゝとも。(ト足を取らうとする)

乙彦　(少し以前から二人に氣づいてゐたが、此の時はじめて)おい、おい……(竹男とおよら兒はびつくりする。竹男に)全く山のぬし達とおれ達は兄弟だな。

およ　(呆れて)　あんな化物と?

乙彦　なんの屈托もなく、思ふまゝのことができるあいつらは、人間よりえらいものだ。

竹男　だが伊吹の野郎のおかげで、又身持ちになつた女ができたぞ。太い奴が。

乙彦　なにが太いのだ。おぬしも、そいつの足を本氣に嚙つてみてはどうだい。

およ　（憤慨して）なんだつて……

乙彦　（笑ふ）うはゝゝゝゝゝゝ。

（乙彦かまはず笑ひこける。竹男とおよら兒、あつけに取られる。）

――幕――

第三幕

第一場　乙彦の家

正面上手寄りに乙彦（きりはた太夫）の家、間口二間半の中、上手よりの二間は二重舞臺で板じき、中央に爐があり、ソダの燃えさしがある、爐の三方に、ゴザがしいてある。下手奥に、機を織る筬がある。正面は幾枚も菰を下げて、壁代として、奥の室に通ずる、二重中央に上り段があるは勿論。二重の下手は三尺の土間で農具をおき、奥は菰て見切る。屋根は原始的な、神明造りのわらぶきである。さて家の外に出ては、上手に柿の木があり、實が熟してる。下手に井戸があり、芒一むら生ひ茂り、下手奥にかけて落葉した桐の木、その他。雜木林の向ふに他の百姓家の屋根が隱見する。

幕あくと、上手の柿の木に三上山の主がよぢ登り、鼻唄を唄ひつゝ、柿の實を取つて嚙つてゐる、木の下に天女の子供がゐる。

三上　つらは澁いが、しやぶれば旨い、ヤンレ、しをらしや、なんのはなそか、またしやぶる、フン惜いぞ。（ト唄ひつつ柿を選ぶ）つらは綺麗で、しやぶれば澁い、ヤンレ、腹が立つ、むいたばかりで、すてゝやる。

子供　おうい、一つおくれツてば。

三上　おつとヨシ／＼、どいつも見かけほど熟してなくてなあ、や、こいつは旨い。

子供　アレ、自分ばかりでしやぶらないでよう。

三上　それではこれだ、ソラツ。（ト上から實を落す）

子供　（拾つて嚙り、吐きだす）ウワーイ、澁いよう。

三上　えつ澁い？　それは／＼。奴め、見かけほど熟してゐなかつたのかい、あまつちよと一つことだな。や、これは旨さうだ、いゝかい、そら。（また落す、子供拾ふ、子供の頂上へポン／＼わざと落す）

子供　痛い、痛いてば。

三上　(笑ふ)　へゝゝ、痛い目にあはなくて、旨いことがあるかよ。今になるほどゝ思ふんだ。(木からとび下りる、柿をかじる子供の頭をなで)なあ、おぬしも年を取つて好い若い者になる、おつかあの悴だから目に立つ顏になる。ヤンヤと云はれるぜ、その時だて、澁くても甘くても、とにかく一つづゝしやぶつて見るんだ。(子供の有樣を見て、つく〱感心したらしく)大人の野郎でさへ、おいらをこはがらない奴は少ねえが、此の小僧は度胸がいゝなあ、ビク〱しねえや。

子供　山の主なんか、こはいものかい。

三上　さう吐かすところがえらい、なにしろ、人間には出ない智慧をたつぷり、おつかあから、もらつてるんだ。神の血筋だ、めづらしい利口者だ、だから、おいらあ可愛いゝんだよ、さ、いつもの所に遊びに行かう、こゝにゐると、おつかあに見つかる。

子供　なぜ、そんなにおかあさんがこはいのだい？

三上　生意氣を云ふな小僧、そのおつかあを今に大仲よしにしてしまふんだ。さ、おんぶしろ、(ト子供を負ふ)堅い奴を手に入れるには、こつちも堅氣に見せることだ、(家の中を見こみ、あざけるやうに)　とう〱おいらが睨んだとほりだ、天女と人間の仲が續くものかい、もう空にとんでゆく通力も衰へたらう、見あがれ、おつとゞ小僧、さ、行かう、行かう。

(三上の主、子供を負ひて下手奥に入る。間。上手より伊香のおぢ杖つきつゝ出てくる。)

おぢ　はい、今日はよい秋日和でございます。はい、今日は……はて、留守かな。

(歸りかける、土間の方の奥から天女が出てくる、もう大分見すぼらしい髮形、衣裳も前の幕に引きかへて、つゞれの錦のあはれさを見せる。伊香のおぢも白髮だらけになつた。)

天女　おゝこれは、よう、お出でなされました。さ、どうぞ。

(招ずる、二人とも上に上り、爐をかこんで坐る。)

天女　よい秋日和となりました。

おぢ　はい、柿が見事になあ。

天女　よう出來ました、取つてさし上げませう(ト立ちかかる)

おぢ　(止めて)　いや〱自分で取ります、歸りに土産にもらうてゆきませう。(天女うなづいて元に直る)　此の中は、つい他出して無沙汰しましたが、乙どのはお留守かな。

天女　(愁を含み)　はい、一月あまり戻られません。

おぢ　（呆れて）えゝつ、出たつきりに……そりや誰と出てゆきました。

天女　比良男どの、志賀彦どのとつれだつて。

おぢ　あの衆と、一月前から……あゝでは狩だ、狩にきまつた（苦々しく）一度はこなたにすゝめられて、狩だけは、ふつと思ひとまつたにのう。

天女　思ひ切れぬのでございました。

おぢ　（静かに）世をわたるたつきには、何事にまれ、せいで叶はんこともある、ぢやが、じたい、あれは殺生でな、前の乙どのなら知らぬこと、こちらで機織が始つてからは、なんの殺生することがあらう、つまりは慰さみぢや、慰さみなりや、一層罪が深い、血を見て喜ぶやうになつては、自然、心も荒々しうなる、推量いたしますぞ。

天女　これも私が宿世拙い故でござりませう。永く天に住んだ身が、今はかうして人里の暮し（ト井戸の方を見やり）秋のあはれが、胸にしむほど、落ちぶれはてました。（氣をかへて）けれども元はと云へば、これも私の心から、誰に怨みもございません。姿も心も、いつそ昔を忘れて、下界の者とならうと決心はいたしましたが、それも、何から何まで思ひちがへました。なまじ機織糸つむぎ、長者となつたのが、反つて災ひとなつた始め、此の世は住みがたうございます。（ト面を曇らす）

おぢ　（やゝ語氣荒く）人間の根性は淺ましいものぢや。まづしい折には、まづしいとて人を妬たむ、さて長者となつても善人とはならん、いゝや長者と云はれるほどの者で、反つて人に賤しめられん者は少ない。（氣の毒げに）こなたの前では云ひにくいが、乙どのゝ近頃のみだらな仕打ちは、おぢも、あまりのことゝ存じてゐましたのぢや。

天女　（室内を見まはし）ごらん下さいまし、これが、あの今までの、この家とは思はれませうか。

おぢ　（とつくりと見まはし）きりはた太夫と名を立てられたひと頃とは、ほんに大きなちがひになつた。

天女　わたくしが始めて、こゝにまゐつた時より、一段と荒れはてゝをりまする。

おぢ　まことに。

天女　たゞ子供がいとしうございます。あれのゆく末はかりが案ぜられます。（おぢの方にすりより）何をお隠し申しませう。お頼み申しますは、あなた様お一人、どうぞあの子を……（ト云ひながら泣いてしまふ）

おぢ　ど、どうさつしやりました。

天女　天には天の掟がございます。羽衣を人手に渡した懈怠の罪に責められて、此の秋が命の終り、木の葉と一所

に枯れまする。

おぢ（びつくりして）天の掟？　と申して今は下界の人間とおなりなされたに……

天女　いゝえ、人間にはなれませぬ、それ故にこそ乙彥どのも……

おぢ（俄然立上り）あゝこれと云ふのも、乙どのゝふしだらからぢや。えゝ強意見して進ぜますとも、もう默つてはをられません。

（おぢ、天女がとめるを聞かず、袖ふり切つて上手に早足て入る。天女しづかに立ち、下に下り左右を見まはす。）

天女　あの子はどこに行つたかしら。

（天女二重に上り、機を前にして坐つて織る、カラッ、カラッと音するばかり、苦しげに吐息つき、腕をさすり俯れる。間。上手より旅人が出る、妙な頭巾を冠り、杖をつく、怪しげな容貌、落ちつかぬ足取り、濁つた聲。）

旅人　今日は。遠い在所の者だあ、冬の仕度に、こちらの名高い織物をもらひたいのだあ。

天女（上りかまちに來て恭しく會釋し）お氣の毒さまでございます。さし上げますものは何一つございません。

（ト悲しげに俯れる）

旅人（薄氣味惡くうなづき）いや、たくさんはいらんのだ。

天女　ごらん遊ばしますとほりで。

旅人（ジロリ眺めて）はゝあ、そんならわざ〳〵たづねてきた甲斐がないのかえ。

天女　此の間から旅の方を、お三人まで、すげなくお歸しいたしました。申しわけございません。

旅人　やれ〳〵、せめてしばらく休ませてもらはう、くたびれたでな。（ぶゑんりよに緣に腰かけて足を伸ばす、天女少し退いてしとやかに坐る。やゝありて）いや、これはお見それ申した。おぬしが噂に名高い天女どのか。あゝさうであつたか、はゝゝゝ（ト氣味惡く笑ふ）ふしぎな緣で下界に下つてこられたなあ。聞けば子供衆まであるさうな。世に珍らしい話だて。さればこそ、珍らしい者好きの手合どもが、おぬしの美しい顏も見たし、織物も手に入れたしで、美濃や尾張の近在は云ふに及ばず、北は越路、南は熊野、我も〳〵と此の家をしたうてたづねてくる。心も浮き〳〵とした旅人達が、東西南北から舟をいそがせ、山道こえて、此の余吾の湖の浪にゆられて、ひとしきりの賑かさ、まづお話だ、面白い。（調子をかへて）きりはた太夫どのは仕合せ者、あやかり者、だが、あんまり仕合せがよすぎたのか、なんと思うてか、

此の頃は……聞けば、こなたに愛想をつかして、およらッ兒とかいふ娘ばかりか……（ト云ひかけて天女を横目で見る。此の前から天女は思入れあつて旅人を見詰つめてゐたが、視線が合ふ。旅人ハッとして杖を落す、テレ隱しに笑ふ）ハ、、、、人のおかさまで……

天女　（ツト立上り）山へお歸り、山の古巣へ。（靜かに、強く、然し神々しく云ふ）

旅人　（仰天して下に轉がり落ち、急に凄い聲）なんだ。山の古巣だあ。

天女　伊吹の山の谷間へお歸り。

（旅人遮二無二著物をぬぎ、頭巾をぬぐ。例の伊吹の山神の正體となる。髮は逆立つ。）

伊吹　ウヌ、やい、よくもおいらを見ぬきあがつたな。

天女　身のほど知らずの邪神たち、いつまでも呪はれてゐるがいゝ。（しづかに坐る）

（伊吹の主憤然と拳を固め、幾度も段に上つて迫らうとしたが身がすくむ。遂に著物と杖を抱へたまゝ仁王立に突立つて、肩で息する。）

伊吹　ウーム。ウーム。おのれ、二度と天に昇り損ねた阿魔め。うーむ。地に住む神の執念は深いぞ。おのれ、今に太夫がおぬしに倦きて叩きだすのだ。今日のおぬしに引きかへて、道ばたにゆき倒れ、神通力を失つたら、その時こそは、責めに責めに、責めぬいてやるンだ。踏むわ。蹴るわ。えゝくたばれ、くたばれ。

（伊吹の主殘念の思入れよろしく、憤然と上手に入る。天女しづかに立上り、下に下り、歩くともなく下手にきて、たま〳〵井戸にさはる。しづかに井戸を覗く。）

天女　（しんみり）身も世も狹うなりつくした。（胸を抑へて）心のおちつきもなく、どこにゐても氣の休まることもない。水にうつせば、きのふの色香も失せはて、ふたつの眼はまたゝいて、これこそつたへ聞いた天に住む者にも五つの衰への兆、かうも早く、身にふりかゝつたか。天女の通力も亡びはてたか……おゝあの子は、あの子は……

（足もしどろに下手に入る。間。上手から志賀彦と比良男が、血の滴るやうな、猪を棒にくゝりつけて、かついで出る。續いて乙彦が弓矢を持つて傲然と出る。比良男等も弓矢、刀を身につける。段の下手、よき所に猪をおく。）

志賀　あーあ、重かつた。重かつた。

比良　よく肩がぬけなかつた。

乙彦　御苦勞々々、さぞ重かつたらう。久しぶりの獲物だつたな。さ、一休みしてくれ。

（乙彦は二重に上り、弓矢を下において、奥に入る。

志賀彦と比良男は井の水を汲んで、ガブ〳〵呑む。水は長い竿の先きに小桶を結びつけたもので汲むのである。その中に、乙彦腹を立てゝ奥から出てくる。)

乙彦　家の中には誰もゐない。どこに行きをつた。はたもいつから織つてない。

比良　へい、機が織つてない？　そ、それはたいへんだ。(ト水を呑みつゝ)　此の家に機がなくては、どうもならん。

志賀　あのまめ〳〵しい天女どんに似合はんな。なんのこと、おほかた、旅の者がきて、残らず貰つて行つたのよ。(乙彦あわてゝ奥に入る。二人水を呑み終る。乙彦更に腹を立てゝ出てくる。)

乙彦　貰つたのではない。金もなんにもない。あいつ近頃氣ずゐになりをつた。おれが留守の間、なにをして暮らした、機もおらずに、どこに失せた。(下に坐る)

志賀　(井戸がはに腰かけ)　それはさうと太夫、約束の金はたつぷりだぞ。

比良　(二重上手の椽に寝そべり)　おんでもない。相手はきりはた太夫様だ。念を押すな。

志賀　(忌々しげに)　へつ、こいつが昔の乙彦かよ。笑はせらア、あの貧乏者の、間抜けなおとかよ。

比良　これ、なにをぬかす。だが太夫、ではない乙彦。おぬしは運の好い男だなあ。天女が白鳥になつて、余吾の湖邊に下りてくるなぞといつても、誰も相手にしなかつたのだ。そこでマンマと一人じめだ。いや、決して何事も疑ふまい。おれ達に何が分るものか。

志賀　(口惜しさうに)　全く旨くしてやられたなあ。惜しいことだ。もう一度あんなことがないものかなあ。

乙彦　(苦笑ひ、但し得意に)　また愚癡。

志賀　愚癡も出るだらうて。なあ比良。

比良　もう止めろ。

乙彦　さうだ。早く猪をあそこへ持つて行つてくれ。そして戻りに酒を貰うてこい。

志賀　(思はず立上る)　え、酒をおごるか。

比良　(コロ〳〵と起上る)　尤もだ尤もだ。(比良男と志賀彦と再び猪をかつぐ。)

志賀　重いなあ。

比良　默つてかつげ、褒美の金も重いとよ。

乙彦　(いら〳〵して)　えゝ早く戻つてきてくれ。(志賀彦等上手に入る。乙彦うたゝねする。間。下手奥より天女子供の手を引いて出る。二重に上り、乙彦を見、思入れあり、と弓矢を拾ひ、下手よき所におく。子供乙彦をゆり起す。乙彦起上る。天女、子供よきに坐る。)

乙彦　（子供に）どこに行つてた。
子供　湖に行つて遊んでたの。
乙彦　（天女に）機織もせず、長い留守中、なにをして暮らしてゐた。
天女　たゞお歸りになる時を、お待ちしてばかり……（ト俯れる）
乙彦　（苦笑）フム。おれをまだ忘れなかつたのか。然しおぬしに待たれて歸つてきた家が、この有様か。筬の音もひゞかず、織物も見えず。これが、きりはた太夫の住家か。
天女　あの昔のことは、あれは見果てぬ夢でございます。
乙彦　見果てぬ夢？　夢か知らんが、またゝく間に近江一番の長者となつて、おれは大滿足で、明けくれ酒を呑んでゐた。おゝ今日からは、おぬしも呑め、今に、比良や志賀が買うてくる。
天女　いゝえ、いつも申しますとほり、此の世の酒は頂きませぬ。
乙彦　それではいゝを……なんの酒を……
天女　天のこんづを……
乙彦　ハテ、天のこんづとは？
天女　不老不死の藥の水、神仙が手づからかもされる靈酒でございます。

乙彦　神仙が手づからかもす、靈酒だと……そして不老不死、年も取らず、死にもせず。はゝあ、それは、おれも呑みたい。
天女　下界では手に入りませぬ。
乙彦　（やゝあつて）なるほど。如何にもおぬしは天女だつた。おぬしから、いろ〳〵と、おれは天の話を聞かされた。そして子供らしくも、それを信じた。が、みんな、おぬしに欺されたのだ。おれもやつぱり見果てぬ夢を見たのだらう。もう夢は見たくない。
（天女、子供に私語して奥に入らせる。）
乙彦　おれは、おぬしが天から下りてきたことも、今は疑つてる。そんなことが有る筈はない。どこからか、暗に紛れて、舟に乘つて來たのではなかつたかな。然しそれはどうでもいゝ。おれは此の近江の國の、こゝの在所に生れあはせた、一通りの人間だ。おぬしはなんだ。（だん〳〵聲が和らいでくる。但し皮肉に）
天女　私は、羽衣を失つた天女でございました。
乙彦　ウム、羽衣一つのことで、空をとぶことが出來なくなつた。神の娘ともあらうものが、おれのものになつてしまつた。情けない神もあるものだ。
天女　太夫さま、今は私のお役目も、すみましたでございませう。（しづかに、然し力強く云ふ）

乙彦　役目だと？（不審げにキッとなる）

天女　二人の間がかうなりますのは、たゞ時の早い遲いばかり、始めから定まつた約束ごとでございました。あの子が生れました頃は、あなたもやさしい方でゐらつしやいました。けれどもやがて私は、此の機織の筬同樣と、お思ひになるやうになりました。晝も夜も休むひまなく、働らけ〳〵と仰しやります。そしてその出來た織物は右から左へ酒とかはりました。

乙彦　さうだ。おぬしが、そこで機をおる。おれは、こゝで酒を呑む。一生の面白い時だつた。

天女　しかし、それでは私の通力も、日増しに衰へなくてなんといたしませう。もう、筬による氣力もつきました。

乙彦　（驚いて聲荒く）なに？　もう、機がおれなくなつたと？　そ、それで役目がすんだと云ふのか。

天女　短い間のめうと仲でございます。

乙彦　（背いて）フム、おぬしは、おれに取つて、まことに筬同樣だ、女としてのおぬしは、おれには用がないのだ。

天女　でも私は、あの子の母親でございます。あの子が可愛うございます。

乙彦　それはどうとも思ふがいゝ。可愛がるがいゝ。

天女　（一層しづかに、而も強く）けれどもそれも身に叶ひませぬ。もう命の終りが近づきました。（乙彦、色を失ふ。間、しとやかに）誰も恨みませぬ。天にこそ住む者が、地上の美しさに心惹かれましたのが、我から招いた因果でございました。とも〴〵湯あみに下りました六人の者は、つれ立つて再び天に歸りましたのに、一人だけ殘つたのが淺ましい。太夫さま。（ガックリして、兩手を下に突き）もう死にまする。せつかくの我子さへ、長く育てることが叶ひませぬ。羽衣をとられて、娘は妻となりました。長者にせいとのお望みから、妻は機おる筬となりもしました。そして、そしてとう〳〵今死ぬほどの衰へやう、母としての樂しみも、短い月日と過ぎました。太夫さま。神樣により、手を合せましたことのない私が、かうして拜みます、お願ひ申しまする。せめてこれまでのめうとの情に、どうか羽衣をお返し下さいまし。生れ故郷の天で死なせて下さいまし。たつた一つのあはれな、お願ひでございます。（伏し沈む）

（乙彦はさも意外だといふ風に聞いてゐたが、漸次その表情が野性的になつてくる。天女の言葉が終るや否や、ガバと突立つ、天女びつくりして起上る。）

乙彦　（興奮して息も切れ〳〵に）な、なんだと？　死ぬ？　死ぬと？　おのれ、まだおれを欺す氣か。なるほど、おぬしは瘦せ衰へた、色香も失せた、然し、然し、天女が

死んでたまるものかッ、えゝ根限り精限り、七日七夜織りたてろッ、羽、羽衣を、なんでおのれに返すものか。

（乙彦ヅカ／＼と下に下りて、荒々しく上手に入る。天女段の所まで這ひよつたが、振切られる。聲なくして、泣き沈む。下手奥から三上山の主、上半身を現はして此の樣を見、會心の笑を洩らして引込む。二重の奥から子供が出て天女に取りすがる。）

子供　おかあさん。おかあさん。

天女　（起きて）おゝ……（口が利けない、やがて氣をはげまして、とぎれ／＼いふ）お前は、お前は、あの、とうさまの隱していらつしやる、羽衣のありかを知らないかえ。

子供　羽衣……なあに？

天女　それ、いつか、お話しした、かあさまが天から下りた時、身につけてゐた……

子供　あのきれいな……此の間、とうさんがひろげて見てゐたもの？

天女　（ハッとして）えつ、そ、それはどこに？

（子供奥に入つて、羽衣を持つてくる。天女わな／＼ふるへつゝひろげて見る。）

天女　（狂喜して）おゝ……昔のまゝに、昔のまゝに……これさへあれば天に昇れる。これさへあれば……

（天女羽衣をかいこみバタ／＼と段を下りて、井戸まできて、キッと空を見上げる。子供あとを追ひて下り、袖を引く。）

子供　わたしも一所に天に昇るの？

天女　（子供をヂッと見て、しづかに）いぢらしい……人間の血を受けた者は、天に住むことはできません。それがいとしさに、今日までこらへてゐたものを……（ト面をおほひ）けれども、もう別れる時がきた。親子の縁が切れる時がきた。お前もたゞの子供ではない。よく聞き分けて下さいよ。（子供うなづく、天女空を見上げながら腕や肩をさすつてゐたが、ハッとして）あゝ此の肩、この足の力なさ、せつかく羽衣は取り戻しても、下界に住んだ長い月日、馴れぬ雲路がとべようか。

（天女身をふるはせ、羽衣をすて、井戸に凭れて泣き沈む、子供羽衣を拾つて、後からきせかける、井戸の蔭に宙のりの仕掛けをしくみておく。）

天女　（羽衣をきせられたに氣づき）教へもしない羽衣のつけ方、まあどうして知つてゐました。（ト子供を抱き）ありがたう。流石にお前は天女の子供。ありがたう。たとへ休み休みでも、どうかして天にゆきつきたい。無事に大きく育つのですよ。もしひよつとすると、まだ／＼かあさまは死にません。そして夜毎々々の天の川から、

こゝの家を見下してゐますよ、わづかの間の親子だつたねえ。(ト子供をおろす)

子供　(天女にとりつき)　かあさま、けれど、いつまた下りていらつしやるの？　あした？

天女　(ためらひがちに)いゝえ、一年にたつた一度きり。

子供　たつた……

天女　(しんみりと)　年に一度の七夕には、天女が下界に水を浴びにくるのが定めです。その時、かあさまは、この余吾の湖に下りてきますよ。どうか忘れず、迎へにおいで。

子供　(考へて)　七夕といふのはいつなの？

天女　(やさしく)　春になつて桃や櫻の花がさく。お前の好きな霞が山々にかゝる。花もちつて春がすぎる。それから、ほとゝぎすの鳴く聲が聞えたら、夏がきたかと思ふのです。

子供　(ある事を思ひだし)　あのほとゝぎすが鳴いたらば？

天女　さう。そのうち、朝夕に涼しい風が立つ。毎晩蟲が啼きあかす。あの、此の里の小さい娘達が、歌を歌つて踊りまはる、その初秋の七月七日、二人はやつと逢へるのですよ。(ト子供の手を握りしめる)

子供　決してもう忘れません。(ト云ひて泣く、また天女の泣くのを見て)　かあさまも、わたしのやうに泣いてるのね？

天女　えゝいつまでも泣いてゐたい。なんと云つて、お別れをしませう。いゝえ、なんにも云はなくたつて、よう分つてゐるのねえ。(子供うなづく、氣をかへて花やかに)あゝだん/\氣が引き立つた。力がついてくる。羽衣が風をはらむ、さあ、これが名殘りに。(ト抱いて頰ずりし、下して)　では七夕をおぼえておいで、さよなら、さよなら。

(これより宙のりになる。子供手を打つて喜ぶ。)

子供　おゝ上手、上手。

天女　昔のとほり、昔のとほり、さよなら。

子供　さよなら、かあさま。

(天女は上に上つて見えなくなる。とたんに上手から三上の主が忍び足に出る。天女がゐないので不審の思ひ入れ、やがてふと空を仰ぎ、仰天して奇聲を發し呆れる。)

―幕―

第二場　余吾の湖畔

湖畔に村の男女多勢がヤ/\いひつゝ空を見あげてゐる。中に伊香のおぢもゐる。上手から、志賀彦と比良

男の二人(弓矢なし)。乙彦の手を取り走り出づ。

志賀　あゝあれ、あれ、あれ。

(一同乙彦を取りかこむ。)

一同　おゝ、おゝ……

比良　えらいものだなあ。みんな見たか、二度とこんなことが見られるかなあ。

おぢ　あれは光ぢや。闇を照らす光ぢや。この人の世に、余吾の里に、かりそめにも天下りなされた、忝けなさを、なんとお禮を申し述べよう。輝くばかりの神々しいお美しさは、世にたぐひない、まのあたり、拝み申しました。天女さま……めでたく天にお昇りなさいまし、尊いお住居にお歸りなさいまし、天女さま……

村人一同　(口々に)天女さま……天女さま……

おぢ　天女さま……

村人一同　天女さま……

(村人一同地に跪づき伏し拜む。乙彦一人默然と天を仰いでゐたが、突然腰の刀をぬき放ち兩眼をゑぐる、一同びつくりし、袖をちぎつて疵口をおほはせ、乙彦を助け起す。)

志賀　乙彦、氣がちがつたな。

乙彦　いゝや、氣はちがはぬ、狂ひもせん。おぢい。おぬしの今の言葉で……おれは始めて分つたのだ。

おぢ　な、なにを……

乙彦　おれは今こそ天女の誠の姿を見た。これまでは見て見ることができなかつた。もう遠い空の向ふに消えてしまつて、影も形も見えなくなつたらう、然し此のおれの心の目には、いつまでもあり〳〵と見えてゐる。みんなはおれを、愚かな者と、笑ふなら笑へ。自分では、自分では、仕合せ者だ。あの珍らしい、ふしぎに樂しかつた思ひ出が、いつまでも胸に殘る。おれがめしひになつたのは、もうなんにも他に見たくないからだ、たゞこの思ひ出一つに生きてゐたいからなのだ。

村人一同　おゝ、むゝ。(ト各々嘆聲を發す)

―― 幕 ――

久米の仙人（一幕）

人

村の娘　たゝら
同　　　まり兒
同　　　まとり
同　　　さゝら
同　　　あきつ
村の男　加伊太
同　　　戸部
同　　　宇賀
久米の仙人
修行者　甲
同　　　乙

處

大和、吉野川のほとり

時

都の大和に在りし頃

平舞臺にて五月頃の野、草青く、立木ところ〴〵、奥に土手斜面あり、その向ふ吉野川流れゐる。幕あくと下手にて村の男加伊太、あぐらかきつゝ土器の壺より酒くみて呑みつゝあり、時々しらみを取りては潰す。斜面の向ふに村の娘五人布をさらしてゐる。しやがみて上半身より見えぬ者、全身近く見える者あり、いづれも水中に入る故、脛をあらはし出してあり。

たゝら　久しく雨がふらないので、これほど布をさらしても、水もにごらず、すきとほつて、ほんにしほらしい。つい口をつけたいくらゐになあ。

さゝら　山の雪がとける頃とちがつて、うとましい物も流れてこず、鳥の聲もさわがしくなくなつて、しづかに春がすぎてゆく、桃が咲いた時に生れたばかりの牛の子が大きくなつたよう。

あきつ　しづかと云へば、夜が明けかゝる時分、こゝにゐると、水の音がそりやあ静かだつた。

たゝら　わたしは一度この川の水上を見にゆきたくてねえ。

さゝら　流れの末もさ。なにも紀伊の國までゆかなくとも、二日や三日は川に沿つて、どんなところを流れてゆくのか一目見たいものだねえ。

（上手より戸部、古風な魚籠と釣竿を持つて出てくる、加伊太を見て近づき。）

戸部　なんだ〳〵、しらみが酒の中に落ちやしねえか。汚ねえなア。（ト云ひつゝ魚籠を下におく）

加伊太　落ちて中にしみこんだら、酒の味もよくなるだらう。

戸部　コレだ　吉野一番の負けずぎらひの云ひさうなことだ。然しそれでは桑酒でなくて、しらみ酒だ。もうだいぶやつてるナ。まアおれにも一口。

加伊太　しらみが三疋死んでるだ。

戸部　威すない（ト呑む）ア、うめえ。

加伊太　加伊太が手づくりのお酒だ。

戸部　全くぬしの云ふとほり命取りだ。ハヽヽ。（ト高らかに笑ふ）

まり兒　早いのねえ。もう上つたの？

戸部　おゝまだつかつてゐるのかい。みんな上つたらどうだい。なにも布をさらしにたのまれて、生れてきたといふんぢやなからう。さつきから、よく長いこと水の中にゐられたものだ。なにをしても女てものは、アッサリしねなア。

まり兒　鮎はとれたの？

戸部　こゝにきて見てくれ。

あきつ　取れないものだから、止めたんだよ。

戸部　（怒つて）あきつだな。おらア仕合せと、ぬし達にはくどかれねえが、魚にはいつもほれられるンだ。上つてこい、魚籠をのぞいてびつくりするな。川下の野郎どものやうに鵜を使つてとる鮎ぢやねえ。

まり兒　魚でなくて、だれがぬしを追ひまはす者か。

さゝら　では見にゆくよ。

あきつ　行つてもいゝかい。

戸部　えゝ早くきアがれ。ほかの魚は知らねえが、鮎を取らしちやあ、おらア神様と張りあつても負けねえつもりだ。

（五人の女ぞろ〳〵出てくる。中に布を抱へて土手の上においてくる者もある。）

まり兒　ドレ何匹とつたのよ。

さゝら　口ばかりさ。

（五人笑ひながら魚籠を取りまく、魚籠ひつくり返るので、大騒ぎして魚をつかまへる。）

戸部　おゝ引つくり返す奴があるか。

たゝら　アレ私の足にくひついた。えゝコノにくい。（ト足についた魚を取つてなげる）

加伊太　へゝゝ、鮎のやつ、たゝらにほれたな。

たゝら　鮎に見こまれてどうするものか。

まり兒　よく取つたねえ、こんなにまで。

あきつ　ふしぎだねえ。

戸部　ふしぎだと？　この野郎……

加伊太　ア、おらア酒だ。ほかのことはどうともなれ。

まり兒　アレ汚ない。しらみをつぶし〳〵呑んでるよ。

さゝら　（たゝらに）然し蛇に見こまれることが時々あるくらゐだから、魚にだつてゆだんはできないかもしれないね。

加伊太　馬が女にほれて、をかしな聲を出すことは珍らしかあねえ。

あきつ　氣味が惡いよウ。

戸部　魚だつて雄の奴は、女にほれるとも。なにしろ、ぬし達が一寸水に入つても、女の足が見えだすと、魚の奴、必らず遠くからよつてくるからな。（あきつ、足にからんだ藻を取るのを見て）ソラ藻だつてまきついてはなれねえ。

加伊太　鮎が大きくなつてくるにつれ、ぬし達の足も太つてくるのだな、これなら魚も氣が起きるだらう。

戸部　白いと云へば、大根の白いのも氣持がいゝが、女の足の白い方がいゝ。よしんば大根は食ふことはできてもよ。

まり兒　へ、女の足だつてなめるくせに。

加伊太　そりや癲氣があるからよ。

戸部　ところが此の間、山へ行つてびつくりした。まつしろな骸骨があつた。肝をつぶしたが、雨にしたゝか洗はれたと見えてまつ白だ。然し骸骨に惚れる氣は起きるまい。どんな惚れつぽい男でも女でもなア。生きた人間に限るよ。大根はやつぱり大根だ。

まり兒　私たちを大根に比べるなら、男はなんだらう。

さゝら　そんなことより、その骸骨は男だつたの、女だつたの？

加伊太　馬鹿な。吉野の奥に女が登るためしがねえ。行者達が冬の寒さに、凍えてオッ死(ち)んだなれの果てよ。年々あるやつだ。

戸部　どういふつもりで山ごもりなんぞしあがるか。

たゝら　そりやきつと私たちの知らない樂しみがあるンだよ。

戸部　女てものは珍らしいことを見たり聞いたりしたがるなあ。

まり兒　これがたゝらさんの癖だよ。

加伊太　（ヒョロ〳〵立上り）山にゆく奴は山にゆけ、ハテ今年になつて在所で七人オッ死(ち)んだ。その中には川に落ちた子供もゐたが、五人までは、自分がいくつか覺えきれねえといふ年よりばかりだつた。百まではやつと勘定してゐたが……といふぢゝい、ばゝあ。それに引きかへ水々しい子供の數はドッとふえた。世の中はどん〳〵

新しくかはつてゆくンだ。冬枯れのあとで芽をだした草が、もうこんなにのびてきた。おらア此の青々としたところを見るとたゞもう胸が一ぱいになるンで、命取りの桑酒を抱いて、日がな一日こゝへきて……

まり兒　醉つぱらつて……何をくど／＼云つてるのよ。

戸部　その中、ぬし達のだれかゞ餓鬼をひりだすだらうとよ。

五人の女　アハヽヽヽ。

加伊太　女は子供を生まなけりやいけねえ。全く子供を生まなけりやいけねえ。

五人の女　アハヽヽヽ。

（だしぬけに下手から村の男宇賀走つてくる。）

宇賀　オイ／＼アレはなんだ／＼。（ト天を指す）

戸部　（見上げて）ヤア／＼妙な鳥がとんでくるぞ。

宇賀　どうやら人間らしいのだ。

たゝら　でも人間が空をとぶなんて。

宇賀　アンな鳥があるものか。こつちへとんでくる、氣をつけろ。

まり兒　アレエ、人が天からふつてきた。

女一同　アレエ、アレエ。

戸部　アリヤ雷が戸惑ひして落ちてきたのかもしれねえぞ。へそを出すな。

（一同口々に罵りさわぎ逃げまどふ中、上手に木の枝が折れるエライ音がしたかと思ふと、久米の仙人がコロ／＼ころがり出て氣絶する。一同顏見合はせ、こはごは近づく。やがて宇賀が「こいつは氣絶した。」と手眞似で知らせるので、一同安心する。「人間だ。」と各自眼と眼で云ひあふ。宇賀手眞似で女に水を持つてこいと云ふ。加伊太は土器の壺から殘りの酒を仙人の口に押しこむ。女達は布をしめしてきて絞つて水を呑ます。そして左右の手、左右の足を頰で五人でさすつてやる。その中仙人目をさまし、此の有樣におどろき、自分の手足をさする女に思はずしがみつく、一同おどろいて、とびのく、仙人手あたり次第に女を追はんとして男にさへぎられる。女たち青くなる。）

宇賀　（やつと口を切る）ぜ、ぜんたい、ぬしはなんだ、鳥か、けものか、化物か。

久米　化物？

たゝら　ア、口を利いた。

久米　口を利いた？　利くとも、わしは人間だ。（トたゝらに迫る、男に突きのめされる）

宇賀　な、なにをしようとするのだえ。

久米　（女達を見まはし）ぬし達がいとしいばつかりに、

天からとんで下りてきた、なぜ、そんなにつれないのだ。
まり兒　ほんに人間にちがひないのかえ。
久米　人間でなくて、ほかになに。
さゝら　でも鳥のやうにとんだりして。
久米　アヽぬしもいとしい。ぬしもかあいゝ。（ト女達につきまとはうとする）
戸部　えゝ人間に空がとべるものか、おのれ鳥の化物にちがひない。（釣竿をふり上げ）かうか〳〵。（ト打ちのめす）
久米　痛い、アイタ、アイタ。
（仙人を打つて追ひまはす、いろ〳〵可笑味あり、トド三人の男達にさん〳〵打たれる。ト下手より修行者甲乙とんできて仲に入り、仙人を扶け起す。）
甲　待つた〳〵、えゝ危ない、なにをする。（ト仙人をかばひ）コレこの着物が目につかぬか、俗人ではないぞ。理不盡な事するな。
乙　佛に仕へる者と知らぬか。見るも無殘な。
久米　アヽよい所にきて下された。とても打つやら蹴るやら、すんでに息が絶えるほど。
宇賀　ウヌ化物の。
乙　ナニ化物？
宇賀　へえ、コリヤ人間ではなうて、天からふつた鳥の化物め。空をとんで……
甲　天からふつた？
乙　空をとんだ……
加伊太　ゆだんさつしやるな。
久米　空をとぶのが、なんのふしぎ、おどろくおぬしだちこそ反つてふしぎだ。
（甲と乙と茫然。やがてハッと氣づき。）
甲　僧體の姿で空をとぶとは……さては、こなたはアノ久米のお聖(ひじり)ではございませぬか。
久米　よう知つてゐる。それはわしの名だ。
乙　ではこなたが、久米の……（村人らに）な、なんたる勿體ないことをしでかした。（村人一同びつくり、久米に向ひ）シテどこも、お怪我はございませぬか。
戸部　そんなら此の仁(じん)は化物ではなうて？
甲　とんでもない。尊い方だ。
（村人一同平伏する。）
甲　わざ〳〵お出で下されましたのを、忝いとも思はず、逆まなお迎へ方で、イヤ無智文盲のやからほど度し難い者はございませぬ。何卒お腹も立ちませうが。
久米　イヤ〳〵なんの腹を立てませぬ。
乙　御らんのとほり我々は未熟な修行の者、御尊名は兼ね兼ね渇仰いたし、折を得て親しく御教化に預りたいと、

心にかけてをりましたところ、今日計らず此の在所で御目どほり、これも佛のお引合せと存じます。

甲　かやうなところで御說法を聽聞させて頂きますことは、いかめしい佛のみ寺の中とは趣もかはり、かへって古への聖をしのぶたよりと、なつかしうござります。幸ひ愚昧な里人をも敎化遊ばされて下さりませ。

乙　殊に前代未聞の、飛行自在の神通力を會得なされた顚末、お聞かせ下さりませ。コリヤ（ト村人に）人間のお身でな、鳥のやうに空をとぶ術をお究め遊ばされた物語を、お話し下さるのだ。

村人一同　ホウ……（ト讃嘆する）

久米　ハヽヽヽ。空をとぶことを、大層六づかしいやうに心得て、わしを聖の仙人のと噂をするが、たかゞ鳥でさへ空をとぶ。圖體の大きな人間にとべぬ事はない筈、魚同樣、水の中さへ泳ぐではないか。

甲　それはあまり御謙遜かと存じます。道を究められた高德の善智識のほかに、たれが神仙の境涯に達せられませう。

久米　サその道だよ。わしは元來は、その道を究めたさに、こゝから程遠からぬ宇陀の龍門寺で髮を下し、袈裟衣を身につけて朝夕殊勝の念佛三昧に日を送つた。元々わしは先祖代々、劒をとつて帝に仕へまつる久米の一族に生れた、日本のいくさ人の中でのいくさびとだ。それが世の中が淺ましう、いとはしうなつて、家を捨て世をすてたわけで、今から思へば實に無益の至りだつたが、もろこし婆羅門の面倒な經論を、頭を痛めて讀み耽つたわい。

甲　所は宇陀の龍門寺、義淵法師の御靈場でござります故、定めて珍らしい敎への卷々も祕藏してござりませう。

久米　イヤその珍らしい卷々を讀んでも、わしには悟りの道に入り切れぬ。大空に雲が悠々ととぶのを見て、空にあくがれる心が起きた。やがて、ある日、ふと佛法僧の啼く聲を聞き、ム、鳥になつて空にのぼりたい、と思つた刹那、身はひとりでに地をはなれて、フハ〳〵と、宙に浮んだその面白さ、アレヨ〳〵と一山の坊主共、目をまはしておどろきをつた。ワハヽヽヽヽ。（ト大笑）

村人一同　ホウ、ホウ。（ト三嘆）

乙　さては生身のまゝ、み佛になられたのでござりますか、眞言祕密の深奧に、もしや飛行の術を說いてをるかと思ひましたは我等の淺はかでござりました。

甲　誠に前代未聞、神變奇特に存じまする。

たゝら　そしてその空をとんだときには、どのやうに面白かつたことかえ。

あきつ　ほんに私だちも一寸かりに……

甲　アヽコレどうしてぬし達に。

乙　靜かに。(ト制して)そこで……

久米　昇つてみれば、いつかうに面白くなかつたよ。始めの中はたゞとぶだけでも珍らしかつたが……

乙　ハハツ。

久米　その筈。天は鳥の住むところ、人間の住むところではない。始めわしは、都の者どもの有様が呪はしく、嵩じて地の上がいとはしうなり、厭離穢土の一念發起して佛門に入つたが、今日に至つて始めて、人間の住むべき誠の地の上を知つたのだ。欣求淨土とは卽ちこゝだ。

乙　こゝと仰しりまするは。

久米　今日はじめて、こゝの空を飛行する中、たま〳〵下を見下すと、此の仁たちが、あゝ、人間本來の邪念のない姿で、たはむれ遊ぶ樂しさ、まして、そこらのをなごどもの脛の白さのゆかしさ、なつかしさ。

甲　えゝつ。

久米　そのいとしさ、かあゆらしさ、高いところから見るばかりには耐へられず、一氣に空からとびおりて……

甲　で、では此の女子どもの白い脛に目がくれて……

久米　わしは自分が世に生れた因緣を悟つた。萬物流轉の大因緣を悟つた。イヤ人間といふものは……

乙　おだまりなさい。それがなんの悟りだ。

甲　言語道斷。なるほど里人が天からふつたといふも道理、みだりがはしい煩惱故に神通力を失つて、下界に落ちたに相違ない。

久米　落ちたのではない。下りたのだ。女子どもの手を取ると、鳥の化物と云ひくさる。男共は荒々しく……

甲　えゝだまれ。あゝせつかく神仙の境遇に半ば至り得た仕合せ者も、女子の色に心迷つて、憂き名を末代につたへるのか。見下げ果てた、他人ごとながら、殘念でならぬ。(ト悲憤の涙をぬぐふ)

久米　見下げ果てた? 昨日までは龍門で見上げられ、今日は見下げられるのか、まだ悟りをひらかぬ者は、これだから氣の毒だ。

甲　えゝかやうな奴に頭を下げて、思へば口惜しい。(ト久米の仙人を打たんとする、乙がとめる、蹴らんとする、乙がとめる)ブツ、酒くさい。おのれ飲酒戒まで犯したなあ、足蹴にするも足のけがれだ。

乙　立去らう。物言ふことも口のけがれだ。

甲　然しあまりと云へば……

乙　流石末世は爭はれぬ、雲のあいまから仙人が、女子の白い脛を見て、足踏み外して下界に落ちるとは……

久米　落ちたのではない、下りたのだ。

甲　えゝまだつべこべ……

乙　ハヽヽ笑止千萬だ。笑つてゆかう。ハヽヽ……。

甲　バヽバカな奴が……

（甲と乙と下手に入る。村人ども狐につまゝれた心、仙人は立上り、あうむがへしに。）

久米　フン、バカな奴め……ハヽヽヽヽ。（ト快活に笑ひ）さて鳥でもない、化物でもない、たゞの男と合點できたな、ぬし達はみな美しい、目元に鹽のこぼれるやさしさ、口つきのふくよかさ、わしも今日からこゝで暮さう、ぬし達のうち、たれでもよい、わしと一所に此の在所で……

宇賀　ナヽナニを、よしんば人間にせよ、半分鳥の化物だ、いつなんどき、どんな恐ろしい事をしようもしれん。（女達に）ウツカリそばに近よると、宙に引き上げられてしまふだよ。

加伊太　早くこゝを出てゆけ。

戸部　さうとも、こんな危ない奴がゐては、女ばかりか、おれたちまでも。

宇賀　全くだ、早く追ひだして。（ト前の竿ふりあげる）

久米　（哀れな聲で）ま、まつてくれ、さつきさんざん打たれたので、肩も痛し、腰も痛し、立つに立たれん、まつてくれ。

宇賀　と云つてウヌは……

久米　修行者共には、わしは少しもおどろかぬが、ぬし達には、言葉を返す力もない。ハテサテなまじい空なぞとべたのが災ひだつた。イヤ宇陀の龍門で、無益の學問をしたことが、そもそも一生の誤りだ。都をすてたアノ時は、なぜその足でこゝにはこなかつたか。今に至つて鳥にもなれず、人にもなれず、天上天下東西南北、身のおきどころない三界のすたれ者、返らぬ昔がうらめしい、徒らに年を取つた。

戸部　なにを一人で云つてるのだ。

久米　（氣をかへて）然し思へば、わしよりあはれな者もゐるわゐるわ、まづ都方の役人どもの、名聞利欲の奴となつてみづから欺いて暮す者に比べれば、わしはよつぽど仕合せだ。また龍門の坊主どもの、ヤレ聖の仙人のと、このすたれ者を禮拜する馬鹿の骨頂もゐる世の中だ、イヤまだすてたものではない。ハヽヽヽ。鳥の化物と怪しむぬし達の質朴さが尊い、その素直な心なら、せめて五人の中には一人でも、わしをいとしう思うてもよかりさうだが。

戸部　どんでもねえ、こりやみんなおれ達の大事な女どもだ。

加伊太　なんでウヌに食はせるものか。

久米　めつさうな、なにも食ふのではない。

宇賀　えゝ出てゆけ、行かないか。

戸部　まあ、もう一度とんで見せろ。
久米　とぶのは二度と御免蒙るよ。
たゝら　もうとべなくなつたのねえ。
さゝら　きつとさうだよ。
久米　ナニ、ぬしたちがとんで見せいといふのなら、いつでもとんで見せようとも、それりやもう、ぬしたちの望みたい。
戸部　(大喝一聲)いらんわい。まだそこを立たぬか。
久米　まゝ。(ト制し)仕方がない、こゝにおいてくれぬとあれば、出てゆかう。(立上る)サテ東へゆくか、西にするか、ヤ、鮎を取つたな。(ト魚籠をのぞき)旨さうな……ナルホド此の川で、然しよくまアこんなに。
戸部　おれが取つたんだよ。
久米　へえ、よくぬしなぞに……
戸部　この野郎。
久米　(布を見て)ハ、ア、これがさらしをつた布であつたか、流石女子(をなご)の手わざだけに、雪のやうに滑らかなのもしほらしい。
まり兒　アレさはつては。
久米　さはらぬ〳〵。(トしやがみつゝ)然しようこれほどまでに……この布はぬしのかえ。
おきつ　(たゝらを指し)此の人のだよ。

久米　ホウ、如何にもぬしのものらしい。ならうことなら、わしも此の布になつて、やさしい手にさはり。(ト云ふと宇賀が竿をふりあげるので立上り)ヤレ出てゆくとせう。それならこれがお別れだ、さらば〳〵。(ト一同に辭儀するト破けた袖がヒラ〳〵する)ハ、ア、こりやさつき天から下りた時、木の枝にぶつかつて引き裂いたのだな。たつた一枚の着物だつたが……とう〳〵なにからなにまで裸になつた。サッパリした〳〵。(ト袖をまくると血がついてゐる)
宇賀　ヤ、その怪我は、おれがつけた疵か。
久米　木の枝に突かれたのだ。なんの木の上に落ちたのだらう。ヤさらば〳〵。
たゝら　ア、あの私のさらした布が入り用なら、持つて行つてもいゝのだよ。
久米　……
たゝら　ねえ、ぬしは自分でとぶばかりでなく、人もつれて空に昇れるのかえ。
久米　わけのない。
たゝら　では、私も一寸昇りたいのよ。
久米　望むところだ。
たゝら　ア、嬉しい。
久米　ア痛い、生爪を……

（ト久米の仙人尻餅をつく、たゝら驅けより介抱する、一同啞然。）

――幕――

額田六福篇

史劇

出陣（三幕五場）

登場人名

二階堂信濃守の息女　渚
秋田城之介の嫡男　小太郎清澄
二階堂信濃守範長
秋田城之介入道淨心
北條相模守時宗
僧　日　蓮
同　日　朗（日蓮の弟子）
宇都宮下野守貞綱
信濃守妻　初瀬
同娘　小百合（渚の妹）
侍女　若　菜
百姓　與次兵衞
渚の乳母　お里（與次兵衞の娘、若菜の母）
その娘　お袖（若菜の妹）

他に、北條武藏守義政、文章博士源兼章（かねあきら）、二階堂の家來友平、秋田の家來幸兵衞、百姓與作、諸大名、武士、軍兵、巫女、侍女、村の者、町の者、旅人等。

場面

第一幕　第一場　鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の社頭
同　第二場　二階堂ヶ谷（やつ）、信濃守の邸
第二幕　名越（なごや）の里の農家
第三幕　第一場　鎌倉幕府評定所
同　第二場　鎌倉由比ヶ濱

時

弘安四年春二月より、同じく五月初旬まで

第一幕

第一場

登場人物

秋田小太郎清澄
僧日朗
信濃守妹娘小百合
侍女　若菜

他に、八幡宮の巫子錦木、小太郎の家來幸兵衞、金賣、往來の老若男女、武士等。

場面

鎌倉鶴ヶ岡八幡社頭の往還。

上手奥斜めに大なる石の鳥居。折り廻して玉垣。下手は社家の築泥。正面は杉の並木の梢を透かして野と山とを望む。

弘安四年春二月。野の處々に梅花。上手鳥居の中、下手築泥の上よりも同じ花の一枝二枝春を魁けたり。

暮近き頃。思ひ〳〵の服裝をしたる老若男女、思ひ思ひの用事に忙し氣に行き交ふ。やがて其中の一人が立佇って不安氣に空を仰ぐ。と、一人二人三人四人……吸ひ寄せられる樣にして立佇り、同じく空を仰ぐ。鳩の音淋し。

男　もう見えるか喃。

老爺　いや、まだ見えぬ。しかし、もうかれこれ申の刻下りぢや。每日の樣に光の强さが增す故、今日あたりは日が落ち切らぬ先に見えるかも知れぬ。

女　星月夜の井戸では、晝も見えると云ふ事でござります。

老爺　あゝ。やがてこゝらでも見え出すであらう。（溜息をして）恐しい事になつた喃。

男の二　ほんに恐しい事ぢや。俺は死んだ魚の鱗の樣なあの彗星の鈍い光を見ると、體中の血汐が一度に凍てついて仕舞ふ樣に思はれる。

男の一　俺の心はあの長い蒼い尾の中へ吸ひ込まれて仕舞ひさうぢや。

男の二　それでゐて夜每にあの彗星を見ねば氣が濟まぬのぢや。

男の一　あゝ、日の暮れから夜明けまで、鳥渡の間も目を放さずに見詰めて居ねば猶おそろしいのぢや。

老爺　何の前兆ぢややら——心がゝりな事ぢや。恐しい事ぢや。

皆々　あゝ。

（沈默。鳩の鳴く音。やがてけたゝましき羽音と共に梢の鳩一時に下手へ飛び行く。）

皆々　おゝ——。

（驚く。やがて肩や手に纏ひ付く鳩を優しく追ひながら、八幡宮の巫女錦木、（下げ髮、白の狩衣、緋の切袴）にて出づ。續いて二階堂信濃守の妹娘小百合、（十六歲、被衣、壺裝束）侍女若菜、（十九歲）出づ。）

錦木　（笑ひながら鳩を追うて）ホヽ、これ御覽じませ。朝夕姿を見知つてゐて、私が參れば、この樣に何時も馴れ親しむのでござります。

小百合　（首肯く）深山の猛き獸も、馴らせば馴るゝ世の敎へ、鳥も獸も眞の心は一つと見えまする。

若菜　さ、その眞のお願が首尾好うとゞいて、お禮詣にお

出でなされるお供がかなうた、若菜もほんに幸福な生れでござりました。

小百合　其幸福を自らと比べようとてか。――願うてかなはぬ縁とは思はねど、寸善尺魔の世の喩、日頃の勝氣も、戀故愚に還へらせられた姉様の心を推しては、妹ぢやもの、三七日は愚か百日でも千日でも、詣り續けようと思うてゐました。

錦木　其御志が神様へ通じいで何としませう。互ひのお家の血統なり家柄なり、比べ様もない良い縁と、神様へお取次する私の心も、共にお幸福を祈つてをりました。

若菜　武藝なり學問なり、鎌倉一と云はれた小太郎様と、名高い縮師の縮絹から脫け出た樣なお姬様と、一緒にお添ひなされたら、鎌倉の春はもそつと明るうなりませう。

錦木　花も香を濟しませう。結んで落ちた情の露は、やがて黃金にも玉にも勝つて尊く輝きませう。

若菜　それにつけても小百合様のお志の優しさ豐かさ、姉様の爲めなら千日でも詣り續けようと仰有つた今のお言葉、伊豆の山々に湧く湯泉でも、斯う溫り澄みきつてはをりますまい。

小百合　（押へて）あこれ、心ある人も聞いて居ようぞ、目のあたりに其人を稱へるは、正しい道ではないと云ふに、

若菜　ぢやと申して――。

小百合　（遮って）何の〱、こればかりの事をその様に云うたなら、賞めると云ふ言葉が腹を立てよう。父上、母様、姉様のお爲めなりや、こればかりか、身も命も捧げ盡さうぞ。――（錦木に）錦木どの、いつもの様に神前へ案內して下さりませ。

若菜　おゝ、思はぬ無駄に時を過しました。さあお出でなされませ。

（錦木を初め皆々上手鳥居の奥へ入る。）

男の一　（見送つて）二階堂様のお娘御ぢや喃。

男の二　今の話の模様では、愈々秋田様の御總領と縁組が定つたと見える。

男の一　巫女殿が云うた様に、ほんに良い縁組ぢや。北條様も一汐と安心であらう。

男の二　あゝ、あべこべにあの兩家が睨み合ひでもしたら大變ぢや。雙方名に負ふ大名ぢやで、どの樣な穴が幕府の礎の下に明かうかも知れぬ。

男の一　あゝ。

女　それにしても、縁組は一生の大事、首尾好うかなうたお人は此の上もない幸福な事でござんせう。

老爺　（重く）あゝ、幸福な人には何もかも幸福に見えるのぢや。

皆々　え。

老爺　あの人達にはどの樣な星が現はれようと苦にはならぬのぢや。

皆々　あゝ――。

（暫し忘れてゐた彗星の事が又人々の頭に返る。短い間。上手より金賣風の男、旅姿にて足早に出て來る。）

金賣　（空を仰いで）おゝ、今宵も亦現はれたな。

皆々　えつ。

（思はず後へ振り返る。正面杉の梢を透かした空に薄く彗星の影現はる。）

金賣　今日は昨日よりも亦早いな。明日は一層と早からう。次第に延びる春の日とは反對ぢや。やがて日の光を奪ふかも知れぬ。

老爺　（その方を見て）お前は金賣殿ぢやな。

金賣　如何にも、諸國を廻つて歩く金商人でござります。

老爺　して今度はどこを廻つてござつたぞ。

金賣　陸奥から今戻りました。

老爺　え、陸奥から――。そしてあの、陸奥でもこの彗星が見えまするか喃。

金賣　白河の關を越す頃から見え初めました。

老爺　すりやそこでも同じ樣な不思議が――。

金賣　そればかりか、俺はもつと不思議な、もつと恐しいものを見て來ました。

老爺　えゝ、あの彗星よりも外にな。

金賣　さうぢや。俺も小さい時からの金商人で、何十年となく諸國を遍歴つて、樣々な不思議を見たが、あの樣な事は初めてゞあつた。

（棄石に腰を掛けて靜かに語り出す。皆々其周圍に蹲つて聞く。）

金賣　（指を折つて）もう三月と半になる。霜月の末ぢや。丁度商賣をしながら、奥州の果、外ヶ濱まで行きかゝつた雪垂の灰色の夕暮ぢや。道が山間から急に濱邊へ出ると、其處に黒山の樣な人が寄り集つて、何やら口々に罵り騷いでゐた。

皆々　――。

金賣　何事かと、何氣なく立寄つて不圖足元を見ると血ぢや――。

皆々　えッ。

金賣　血汐ぢや。何萬樽の茜をとかしてもさうはなるまい。何千萬人の人の血汐を流したらあの樣になるかも知れぬ。海の波は燃える樣に赤かつた。

皆々　おゝ――。

金賣　思ひなしか腥い風が面をかすめる。人の輪の中には、二間餘の大きな魚の死骸が横つてゐたそれが喃――。（息

を呑んで人々を見る）目も無ければ口もない奇怪な姿ぢや。そして大きな鰭と尾とがあつて、錆びた銀色の鱗には何やら文字らしいものが浮んでゐた——。

（下手より若き男出づ。立つて聞く。）

金賣　けれども、何と云ふ事やら讀む事は出來なんだ。何と云ふ魚ぢやと聞いたが、濱の者も見た事も聞いた事も無いと云ふ——。果ては問ふ者もなく答へる者も無く、縛られた樣に身動きもせずに立ち盡した——。

若者（突然と）話はそれ丈けか。

金賣（チラと其方を見て）いや、それではすまぬ。又、それ丈けの不思議があつて無事に濟まう道理はなかつた。（語氣を早めて）果して其夜から得體の知れぬ恐しい病が流行り始めた。

皆々　おゝ。

金賣　先づ第一に其魚を見つけて濱へ引き上げた男が死んだ。其野邊送りの用意をする間に其女房が死んだ、子が斃れた。それからは風が朽木の林を倒す樣に、其處にも此處にも眞赤に血を吹いた人の死骸が横つた——。

老爺　え、血を吹いて——。

金賣　おゝ、手も足も、毛穴と云ふ毛穴からは悉く血を吹いた。激しい苦しみは僅の間ぢやがどうする事も出來ぬ。そこらの人は只狂者の樣に走り廻つた。俺も品物も馬も其まゝに、これ此通り身一つで命から〴〵と逃げて來た。今頃はもう其邊等の人は死に絕えてゐるかも知れぬ。あの海の波はどうでも人の血ぢや。（空を見て）あの彗星の蒼い尾はその人達の浮ばれぬ魂の集りかもしれぬ——。

皆々　——。

（短い間。）

若者（冷笑ふ樣に）話はそれ丈けか。人の恐怖につけ込んでいゝ加減な嘘は云はぬものぢや。

金賣　何ぢや。（立ち上る）目の前に見て來た事を嘘ぢやと云ふのか。話したとて話さぬとて自分の益にも儲けにもならぬ事でも、こなたは嘘ぢやと云ふのか。

若者　おゝ、世には只人を騷がして喜ぶ手合も多いでな。ふん、何處の國に赤い潮がさすものか。

金賣（カッとして）よし、作り事なら作り事にしておけ。俺は日本中を跨にかける金賣ぢや。

（いきなり打つて掛る。皆々驚きながら支へる。上手より僧日朗、三十二三歲、質素なる衣、網代笠を冠る、靜かに步み出づ。）

老爺　あゝ、よい處へ坊樣が見えた。その樣な事があるか無いか聞いて見よう。（呼ぶ）もし、もし——。

日朗　おゝ、愚僧の事かな。（笠を取る）

老爺　や、お前は名越の——。

日朗　（少しく意外の面持。皆々喜ばぬ風に私話き合ふ。）

日朗　（微笑んで）　ほう、名越の日朗なら御用はござらぬかの。

老爺　はい、いえその――。

日朗　しかし、お身達に用が無うても、日朗はお身達に用があるのぢや。耳を塞つても說ききかせる。この日朗はお身達を地獄に見棄てゝおく事は出來ぬ。

皆々　――。

日朗　（儼然と）　念佛無間禪天魔――。邪法に惑はされて何時まで儚い迷を續けるのぢや。法華經を輕んじ奉りたるため、今眼前に逼りたる國と人との大難は何によつて防ぐのぢや。

若者　ハ、、、。又一人狂者が來た。何時もの說法は聞き倦きた。聞き足つた。（去らんとす）

日朗　（呼び止めて）　先づ待たれい。狂者もよし、賣僧と呼ぶも御許が儘ぢや。さりながら（天を指して）あの彗星は何の爲めに現はれたと思はるゝぞ。

若者　――。（思はず空を仰ぐ）

日朗　（やゝ靜かに）　國土亂れんとする時は先づ鬼神現はると仁王經に說かれてあるのはこの事ぢや。鬼神とは諸の不思議の事ぢや。去んぬる正嘉の大地震、大饑饉、今又あの彗星の現れし事等、引き續いたる天變地異は、そも何のために起りしと思はるゝぞ。

皆々　――。

日朗　佛罰の前兆ぢや。皆之れ邪法を信じて、今眼前一時の樂しみに久遠の法樂を忘れたる人々の上に、やがて落ち來る恐しい佛罰の前兆ぢや。

老爺　（進み出て）　すりや、金賣殿が云はれた樣に、あの恐しい病がこゝらへも流行つて來るのでござりますか。

日朗　それもあらう。が、そればかりか、今法華經を信じて、上下心を一つにして防ぎ守らずば、此の二つと無き尊き日の本は、異國の敵に奪ひ取られようぞ。

若者　エツ、その異國とやらは――。

日朗　云ふまでも無い彼の蒙古ぢや。文永以來已に二度までも筑紫を襲うた。又其中に襲うて來よう、しかも度々の敗戰に怒つて、海を覆ふ程の大軍をもつて押し寄せようぞ。

皆々　あゝ。（云ひ知れぬ恐怖に打たれる）

日朗　即ちこれが他國侵逼難ぢや。釋迦牟尼世尊は二千年の前に已にこの事を知つて藥師經に說き戒められた。然るに彼の相州殿を初めとして、武家諸人に至るまで、今にそれを信ぜず悟らず、居ながらに國の亡ぶるを待たんとするは何事ぢや、（叫ぶ）　あはれ人は無きや。眞この國を憂ふる者はなきや。法華經の功力を信ぜよ。今此の

敵を追ひ拂ふは、この尊き御經の力に依るより外に手段はない。

（上手より秋田小太郎清澄（二十三歳、烏帽子、直垂）つか／＼と出で來る。）

小太郎　措かれい御坊。人も無げなる其廣言、まこと國を思ふ者は法華經の行者ばかりか。

日朗　なか／＼。

小太郎　亡び果つる國とは何事ぢや、蒙古がそれまでに恐しいか。鎌倉武士の腕は鐵ぢや。

日朗　（靜かに）　ほう——。

小太郎　相模鍛冶の打つた刀は千人の首を切つても刄こぼれ一つせぬわ。何とて法師の力を借らうや。

日朗　なか／＼、目に見える敵は斬り拂ひ得ても、目に見えぬ心の敵は何を以つて薙ぎ伏せらるゝぞ。

小太郎　——。

日朗　蒙古今は國の名を元と改めて、勢日に益々盛んぢや。國は廣く人も多く物資も豐ぢや。一度二度の敗戰に鉾を納める筈はない。三度大擧して來らば何と召さるゝ。

小太郎　云んでも無い事、三度一人も殘らず打ち拂ふまでぢや。

日朗　四度來らば。

小太郎　望む處ぢや。

日朗　五度來らば。

小太郎　我より彼の國へ逆寄せん。

日朗　六度、七度、十度、百度、千度襲はゞなんと召さるる。

小太郎　（憤然として）　措かれい。此の劍は血汐に飢ゑてゐる。沙門と雖も容赦はせぬぞ。

日朗　（泰然として）　いゝや、日朗決して御身を愚弄は致さぬ。さりながら、かばかりの事に忍び得で、國家百年の計が立てられ申さうか。

小太郎　む——。

日朗　百度千度の最後まで堪へ忍んでこそ眞の勇者ぢや。法華經を信ぜられい。外面の力と內面の力と一つに成つて、初めて其眞の力、眞の勇氣が湧いて出るのぢや。

小太郎　おゝ——。

日朗　祖師日蓮上人が命を賭けて立正安國論を書かれたのもそれが爲めぢや。然も龍の口にては首の座に直り給ひ、佐渡ヶ島にては雪に埋められ給うても、猶今に失せぬあの大元氣は何の故と思召さるゝ。皆法華經信仰の功力ぢや。日朗が今御身の怒の刄の前に立ち得たも其給物ぢや。

小太郎　（語なく深くうなだれたり）

日朗　喃、蒙古は必ず押し寄せる。今までの何十倍と云ふ軍勢で押し寄せる。此の鎌倉は海邊、明日にでも將今に

でも、筑紫へもよらずして直ぐ様こゝへ押し寄せんも計り知られず、其機に臨んで露驚かぬ心を積まれよ。南無妙法蓮華經――。

（靜かに下手へ去る。二三人の者それに從ふ。小太郎は默然として猶深き思ひに耽る。間。鳩の鳴く音。やがて下手よりバラ〳〵と四五人の町の者が走り來る。）

町の者一　大變ぢや。大變ぢや。

同二　今に戰爭が初まるに違ひない。とても斯うしてはゐられぬ。

（口々に罵りながら行き過ぐ。小太郎キッと成る。）

老爺　戰ぢやとい。

金賣　今の蒙古とやらが早や押寄せたのではあるまいか。

男の一　それはあんまり不意ぢや。

男の二　何にせい斯うしてはをられぬ。

（上下思ひ〳〵に走り去る。小太郎一人殘る。遠くより法螺の音きこゆ。）

小太郎　はて、あやしき法螺の音ぢや。戰ならでは用ひぬに――。

（訝る。又取亂したる人々。其中には鎧等を着けかけたる武士も交りたり。）

小太郎　おゝ、愈々物々しき人の氣配、何にもせよ只事にてはあるまじ。

（身拵へす。下手より其家來幸兵衞拔身を提げて出づ。）

幸兵衞　おゝ若殿、これにゐさせられたか。一大事にござります。

小太郎　幸兵衞か、何事なるぞ。

幸兵衞　戰ぢや。早御用意遊ばされませい。

小太郎　何、戰ぢや。すりや蒙古が押し寄せたるか。

幸兵衞　いや〳〵、問注所での手違でござります。いやもう、雙方の親類緣者が、思ひ〳〵に獲物を持つて馳せつけますれば、雪の下大倉ヶ谷あたりの大路小路は、早や戰同樣の騷ぎでござります。

小太郎　待て幸兵衞、心を落つけて仔細を申せ。問注所で誰と誰とが爭うたのぢや。

幸兵衞　そりやあの二階堂樣と――。

小太郎　や、あの二階堂殿が。して〳〵その相手は――。

幸兵衞　こちらの殿樣でござります。

小太郎　何、お父上ッ――。（叱る樣に）幸兵衞、逆上せたな。身が家來とも覺えぬぞ。

幸兵衞　え、これは又異なお言葉、何しに左樣な――。

小太郎　はて、思うても見い。この小太郎と二階堂の娘渚とは、早や緣組の結納まで濟んだ仲ぢや。

幸兵衞　さ、それは誰知らぬ者はござりませぬ。なれども

早や刄傷にも及ばれしとの取沙汰――。
小太郎　よし、何はともあれ急いで戻らう。目のあたりに見れば何事もよく判らう。
（行きかける。小百合走り出でて其袖に縋る。）
小百合　小太郎樣。
小太郎　や、そなたは――。
小百合　渚の妹でござります。
小太郎　おゝ、小百合殿か。
小百合　あい。したが心もとない今の通知、若し父樣と父樣と爭うてなら、お前は何と遊ばすぞ。
小太郎　何とする――はて、武士の行く道は只一筋ぢや。
小百合　すりや姉樣との緣を切つて――。
小太郎　あいや、せかれな。理も非も今は分明ならず。但し父の非道を見て諫め得ぬ小太郎でもござらぬ。日暮るゝ迄には仔細も判らう。それまでは緣も續かう。幸兵衞つゞけ。
（云ひ棄てゝ下手へ走り去る。）
小百合　（ぢつと其後を見送つて）日が暮れるまでには仔細が知れよう――其日が暮れたなら――暮れたなら――あゝ、いつそ今が何時までも續けばよい。
（愁然と胸を抱いて立つ。若菜と錦木も無言に憂の顏を見合はす。）

第二場

登場人名

二階堂信濃守
秋田入道淨心
宇都宮貞綱
信濃守妻　初瀨
息女　渚
小太郎淸澄
他に、小百合、若菜、家來友平、奧女中等

場面

二階堂ヶ谷なる信濃守の邸

上手斜めに中門。塀。正面廻り緣付きの客殿。下手は折れ曲つて別間へ續く廊下。客殿には婚禮に用ゆる衣服調度を美しく飾り立てたり。中門際に紅梅一枝。
前場より半時程の後。日暮れて庭前には篝火を焚く。
（奧女中二人（禪、鉢卷）中門の左右に居合腰に小刀をもつて向ふを見る。庭に今一人（同じ裝）長卷を持つて立つ。法螺の音。やがて下手より信濃守の妻初瀨（四十歲餘、裲を脫ぎ長卷を持つ）出づ。）

初瀨　花の井。遠見の者は戻らぬか。
奥女中の一　はい、まだ誰も戻りませぬ。
初瀨　小百合の迎ひは——。
奥女中の一　それもまだでござります。
初瀨　はて步み馴れぬ女の足でも、急げば早や戻りつく頃ぢやに、あれと云ひこれと云ひ、心懸りな事ぢや喃。
（憂はし氣に表を見る。奥女渚（十八歲、常の姿のままに襷を着る）下手より力なく步み出づ。）
渚　（人々の姿を見てハッとする）や、母樣——。この張り裂ける樣な渚の心を、何故汲み取つては下さりませぬ。
初瀨　何の〳〵、止めらるゝ迄もなく、今の今と成つて何の爭を好まうぞ。
渚　すりや、その樣な物々しいお姿は——。
初瀨　さ、爭は好まねど、良人の留守を預るは妻が役目ぢや。仔細の程は判らねど、今の問注所よりの注進にては、如何なる大事とならんも知られず、まさかの時に、只一人にても邸へ入れて狼藉させなば、信濃守の妻と云ふ名も、これまでゝ盡きようぞ。
渚　あゝ。
初瀨　さう云ふ中に和女(そなた)は何故身仕度をしやらぬぞ。武士の家に育つ身は、劍(つるぎ)の中に寢ね、劍の中に起きる身ぞとは、豫ねての覺悟。日頃習(なら)んだ長卷の手練は何のためぢや。常々勝氣と云はれたに引き替へて、うろたへた不覺者の名を取りやんな。
渚　（恨めし氣に見上げて）そりや母樣のお言葉とも覺えませぬ。これが他(ほか)との爭なら、其仰せまでも無く、留守は見事にこの身で守つて見せませう。とは云へ父上と淨心樣との爭ひには、どちらがお勝ちなされても、怨に怨が殘る道理——（ヂッと飾物を見て）妾の願は悉皆(みんな)泡沫(うたかた)。
（泣き伏す。）
初瀨　あゝ。
渚　（やるせ無く）勝たせとも無い勝ちとも無い、この爭を誰がさせたぞ。仇に解け行く緣をば、誰がいたづらに結んだぞ。——後れたりとも卑怯ぞとも、輕蔑(さげすみ)は人の心委せ、今宵ばかりは其長卷の影を見てさへも、渚の心は風に揉まるゝ木の葉と共に、甲斐もなう戰きまする。
初瀨　（淚を誘はれて）おゝ、道理ぢや。道理ぢや。無情(つれな)う叱つたは母が誤り、姫御前の身で良人と思ふは只つた一人、傅(かしづ)き仕へる男も一人。この母までが指折り數へて嫁入する日を待つてゐた今日ぢやもの、さう思やるも無理はない。
渚　あゝ——。
初瀨　今問注所へはかなはねど、互ひの御身に怪我さへ無くば、この母が命に代へて、身を粉に碎いても目出度う

元へ納めて見よう。

諸　あい。忝うござります。そのお言葉で少しは胸のつかへも霽れました。

初瀨　おゝ、吹き立てゝゐた法螺の音も止んだ樣ぢや。思ひの外事なう納つたのかもしれぬ。(女中共に) 何はともあれ、そち達も暫く其處で休息しや。

女中共　畏りました。

(皆々下手へ寄りて憩ふ。と又法螺の音聞ゆ。)

初瀨　(キット) やゝ、又あの異樣な法螺の音は――。

(長卷を取り直す。上手より若菜に手を曳かれて小百合が息急きと走り戻る。)

小百合　姉樣――おゝ母上――。

(其儘氣を失ひて倒れんとす。)

若菜　(抱き抱へて) あもし、氣を確かにお持ち遊ばせ。母樣も姉樣も御無事でござりまする。

初瀨　小百合戻りやつたか。不意の事故驚きやつたも無理ならねど――さゝ、氣を鎭めて――。

(座敷へ抱き上げて介抱す。小百合は猶も夢心地。)

諸　(搖り動かして) これ小百合、氣を確かにもつてたも。姉ぢや、渚ぢや。

小百合　おゝ。(やう〳〵に正氣づいて姉の顏を繁々と見てわつと泣き出す) 姉樣、どうせう、どうせう、どうせうぞいなう。

諸　おゝ。

小百合　御籤は凶ぢや。引き直しても引き直しても――凶ぢやとい喃。

諸　えツ。

若菜　(引き取つて) こちらの殿樣と秋田の殿樣と仲違ひが出來たと云ふ噂をきいて、戻りかけた道を引き返して、又一心に願ひをかけました。おそなはつたもそれが爲めでござります。

初瀨　むゝ、そんなら迎ひの者には逢ひやらぬか。

若菜　あい。見も逢ひも致しませぬ。騷動の噂はあの小太郎樣の御家來からきゝました。

諸　(思はず膝を進めて) えツ、小太郎樣に逢やつたと――何處でどうして――そしてあの何と仰せられたぞ。

若菜　八幡樣の馬場先で――。

小百合　父に非分あらば、それを諫め得ぬ小太郎では無いと――。

諸　すりやさう仰有つたか。父に非分あらば諫めると仰有つたか。(ホッとして) それを聞いて蘇つた。(母に) 母樣。父上を諫めて下さりませ。

初瀨　おゝ、先程も云ふ通り、これが丸う納まれば、鎌倉一の良緣ぢや。

皆々　おゝ。

（顔を見合せて少しく眉を開く。上手より家來友平走り出づ。）

友平　殿様お歸館でござります。

初瀬　えッ。して御無事か。

友平　何事もござりませぬ。

諸　そしてあの入道様も――。

友平　雙方とも御無事でござります。馳せ集まつた緣者の方々も殘らず引取られましてござります。

初瀬　すりやほんの一時の通り魔か。何にもせよ、皆お出迎へ申しやいの。

（若菜與より初瀬と小百合の襠を持つて出づ。皆々程よく居住ふ。やがて上手より信濃守（五十四歳、烏帽子直垂）腕を組みて靜かに歩み出づ。）

皆々　お歸り遊ばしませ。

初瀬　どうあらうかと案じ過してゐましたが、何事も無いお下りは祝着に存じまする。

信濃　（座につく）むゝ、皆にも心懸けさせた喃。

諸　（心を急く）そしてあの、爭とやらの様子をきかせて下さりませ。

信濃　（情濃やかに）その心せきは尤もぢや。云うて益なき事ながら、さりとて云はでもかなはぬ事故語つて聞かせん。（少しく居住居を直して）そち達も知る通り、去る文永以來彼の蒙古我國を亡さんとて、已に早や二度までも筑紫の浦に押し寄せた。其時は鎌倉より打ち向ふまでも無く、筑紫の武士が追ひ拂うたが、對手は名にし負ふ大國ぢや。何時三度兵を集めて押しよせんも計り知れぬ。其時の用意にとて今度お上より田文を取調べようとの御沙汰が下つたのぢや。

諸　（止めて）父上、その田文とやら云ふ事は――。

信濃　むゝ、田文とは讀んで文字の如く、田や畑についての書物ぢや。卽ち人々の領地の廣さや、そこから上る貢の收入などを調べて出せとの御諚なのぢや。

諸　あゝ。

信濃　其御心は萬一の時に其知行高に應じて兵粮及び軍兵を召し出さるゝ思召ぢや。それ故忠義を存ずる者共は直ぐ様殘らず斯う斯うと明ら様に申立てた。それがはしなく爭の元となつた。

初瀬　すりや、我家の領地を彼の家に所領ぞとも――。

信濃　さうぢや。武藏の川越の莊園ぢや。我もさうと書けば、秋田入道も自分の領地と書いて差し出した。

初瀬　あゝ。

信濃　さり乍ら、一つの地所を兩家にて持つ可き筈はない。すりや有るを無いと隱し立てした不忠の譏は免れても、

人の物を我物とした横道者の名は、二人の一人が受けねばならぬ。それ故日頃の親好(よしみ)も棄てゝ互ひの名譽(ほまれ)のために命を的に云ひ爭うたのぢや。

渚　とは云へ無事でお歸り遊ばしたは、遂にはお心とお心とが溶け合うて——。

信濃　（重く）いゝや、心は解けぬ。

渚　えツ。

信濃　只お上の御前を恐れたのぢや。入道前非を悔ゆるまでは、兩家の好(よしみ)もそれまでぢや。

渚　すりや妾との縁組も。

信濃　云(お)んでも無い事、不義者の子に與れようとて育てはせぬ。

渚　あゝ。

信濃　若菜、料紙硯を持て。

若菜　畏りました。

（有合ふ料紙硯等を前に置く。信濃守は手早く何か認めて封をする。）

信濃　友平、秋田の邸へ持參致せ。

友平　はつ。

信濃　常とは違ふぞ。心を据ゑて參れ。

友平　はゝツ。（走り出さんとす）

初瀨　（止めて）あこれ、友平待ちや。（良人に）秋田の邸へお文とは、何の御用でござります。

信濃　問ふまでも無い。縁組破談の知らせぢや。

初瀨　えツ、すりやどうあつても——。

信濃　おゝ重ねて云ふな。武士の尊む可きは信義の二字ぢや。

初瀨　とは云へこの可憐(いぢら)しい娘の姿——。（泣き入る娘を見ながら奧に飾つた亂れ箱を取つて見せる）今日は明日はと、嫁入する日を樂しみ待つたに引替へて、望みも絕えて身も心も消え入る樣なこの姿を、露哀れとは思召されませぬか。

信濃　はて、何を申す。世に子をいつくしまぬ親があらうか。

初瀨　なりやお心を飜して、あなたと和睦して下さりませ。何の知行所の一ヶ所や二ヶ所、失うたとて事缺く身ではなし、婿引出に與つたとも思うて、娘の願をかなへてやつて下さりませ。

信濃　（語氣あらく）默れ初瀨、金銀を惜む商人の心で僅かな土地を爭ふと思ふかッ。（やゝ穩やかに）そりや、和女(そなた)が願ふまでもなく、次第によれば今の所領の半を裂いても、婿引出に與へまいものではなけれど、それは互ひの道を正しての上の事、さも無い中はたとひ一寸の地でも血汐と共に爭はねばならぬ。

初瀨　あゝ――。

信濃　今改めて云ひ聞かすまでも無く、我等の領地は皆御先祖重綱殿の軍功の給物ぢや。――軍と云へば當の敵ばかりか、雨も風も皆敵ぢや。霜も氷も皆劒ぢや。矢傷刀傷、其御身から流れた血汐は、打死した多くの家來の血汐と共に、野末の草葉を唐紅に染め出した。

皆々　――。

信濃　即ち我が家の領地は其尊い先祖の血汐と、大勢の家來の又とない命との結晶（かたまり）ぢや。其家來の一人々々には妻もあつたであらう、子もあらう、老いたる父母もあつたであらう。取りも直さず、すりや、親を失ひ子を先立て、良人に離（わか）れた人々の悲歎の涙の固（かたま）りとも云へやう。かくまで（立ち上る。力を入れて）かくまでの思ひを積んで殘された地を、無殘（むざ）と人手に渡して先祖へ何と云ひわけするぞ。

渚　おゝ、父上ッ――。（堪へ兼ねて縋りつく）

信濃　（優しく其脊を撫でながら、奥の調度を振返つて）斯程までに用意が整うた今と成つて、不緣にさせるのは不憫ぢや。和女故には武士の意地も棄てゝやりたい。なれども、今和女を思ふこの父の心と同じ心で、重綱殿は孫子の爲めに戰に出られたのぢや。

渚　あゝ。

信濃　そして殘された家の名譽（ほまれ）ぢや。喃、わかつたか。

渚　――（幽かに首肯く）

信濃　友平急いで參れ。

友平　畏りましたッ。

（急ぎ中門外へ走り去る。）

信濃　（初瀨に）餘の事は重ねて、先づ衣服を改めようぞ。

（下手へ行きかゝる。と、俄かに門外にて聲高く罵り騷ぐ聲きこゆ。）

信濃　はて、何事ならん。

（耳を聳つ。友平走り歸る。）

友平　殿、一大事にござります。

信濃　友平か。何事が出來したぞ。

友平　秋田の入道樣がお越しでござります。

信濃　何、秋田の入道が押しよせた――して人數は何程と見ゆるぞ。

友平　いや、供をも連れず常のお姿でござります。

信濃　ふむ、只一人か。（思案す）

友平　入（はい）る入れぬと、今表門で仲間共が立ち騷いで居ります。

信濃　（決心して）よし、これへ通せと申せ。奥、渚、皆の者は間を隔てゝ遠慮せい。

渚　とは云へそれは――。

信濃（押へて）はて、よいわ。何事も心得てゐる。入道一人で參つたは、我が思ひ違ひを悟つて來たのであらう。

（皆々下手へ入る。入れ違うて上手より友平の案内にて秋田城之介入道淨心（丸めたる頭に烏帽子、直垂、六十歳餘）出づ。）

信濃（他意なき風に）入道か、ようぞ參られた。先づ此處へ進ませられい。友平其方は暫く遠慮致せ。

友平　はゝッ。御免。

（門の外へ退く。）

信濃　さ、邪魔は拂うた。何なりとも仰せられい。じたいあれは地續き故、それで思ひ違はれたのでござらうがの。

淨心（突き放す樣に）思ひ違ひは致さぬ。

信濃　や。

淨心　淨心は左程までに耄碌は致さぬ。

信濃　すりや何のために參られたぞ。

淨心　御許（おこと）が思ひ違ひを正さう爲めぢや。

信濃（キッと）むゝ、又晝の爭を續けようでな。

淨心　如何にも、互の胸に落ちるまでは何度でも爭ふのぢや。（懷中から書類を取出して）これ見られい、この書付にもある通り、正しく我家の領地に相違ない。

信濃　云はれな入道、最前も繰返せし如く、全く我家の莊園にまぎれなし。

淨心　さ、それが御許（おこと）の思ひ違ひぢや。喃、聖人にも過はある、過つて改むるに何の恥づる事がござらう。

信濃　いゝや、そりや此の方より云ふ可き事ぢや。然るにいまだに己の非を悟らず、反つて我意をつのられるとは、見下げ果てたる心底ぢや。

淨心（赫として）默れ信濃、我が非を飾り我意をつのるとは誰が事ぢや。君の御前ならねば、刀を拔くに憚る者はないぞ。（やゝ聲を和らげて）邸へ戻り直ちに暇もくれず、斯く態々尋ね來りしも日頃の親好（よしみ）、まつた小太郎の縁につながる好（よしみ）故とは思はれぬか。

信濃　おゝ、其好も縁も早やそれまで。その約束は今を限りに破談に致す。

淨心　すりや、倦くまでもこの淨心を非とするのぢやな。

信濃　問ふまでもない。犬猫に吳れようとて、不義者の子に大事な娘はやられぬ。

淨心　むゝ、面白き其一言、他の事にて破談とする法もあれ、不義者と縁組まぬとあれば、不義でない證據に腕づくでも連れて行く。

信濃　何とッ。

淨心　兩家の慶事は鎌倉中に早や誰れ知らぬ者もない。それを今故なく破られて身が武士道、又小太郎の武士道が立つと思ふか。

信濃　ハヽヽヽ。面白し〳〵。二階堂信濃守と云へば少しは心置かるゝ身ぞ。ならば手柄に奪うて見よ。

淨心　何をッ、おのれッ。

（刀を拔いて斬つてかゝる、信濃も拔き合はせて激しく爭ふ。やがて淨心は一太刀受け損じて撞と轉ぶ。直ぐに止めと驅け寄るを、渚が走り出でて遮る。）

渚　これ父樣――まあ〳〵待つて――。

信濃　えゝ危い。退け〳〵。

（拂ひ退ける。其隙に淨心再び立ち直つて刀を合はす。止むる渚……。上手より支ふる友平を突き退けて小太郎一散に走り出づ。此の有樣を見て驚き仲へ割つて入る。）

小太郎　父上ッ、こりや何事――（手傷を見て）やッ、傷を負はせられたな。

淨心　おゝ小太郎か。無念ぢや。放せ。

小太郎　おゝ、（崩るゝ如く）かくあらんと存ぜし故、宇都宮貞綱殿を頼み參らせしに、時後れたる殘念さよ。――さりながら善惡邪正は知られぬ今、目前の親の仇は見脫がし難し。信濃殿、御免。

（斬つてかゝる。）

信濃　おゝ、天晴れ孝子ぞ。

（二三合打ち合ふ。小太郎信濃守の肩を斬る。信濃思はず後へたじ〳〵となる。）

渚　（抱き止めて）や、父上をッ。

（思はず懷劍に手をかけしが、拔き兼ねて恨めし氣に、又懷し氣に小太郎を見詰む。下手より初瀨を初め女中共、皆十分に身支度して出づ。）

初瀨　やあ、狼藉なり小太郎殿、かくなる上は是非に及ばず、親子ながら此處一寸も立たせはせじ御覺悟あれ。

小太郎　おゝ、共に先の世の宿命を呪ひ申さん。いざ――。

（詰めよる）

渚　（驅け隔てゝ）あもし――すりやどうあつても此の場の事は。

信濃　おゝ問答無益。

淨心　刀を拔けば己が身が死ぬか、對手を殺すまでぢや。

渚　あゝ、（百年の苦悶を一時に集めて）寶の玉も碎けては、道の邊に敷く瓦同然――どうせかなはぬ緣なら、いつそ、斯うして――。

（懷劍を拔いて小太郎に斬つてかゝる。）

小太郎　や、何とッ。

（不審ながら引脫して確と其手を摑む。）

渚　（其手を持ち添へて）小太郎樣、おさらばッ。

（自害せんとす。）

小太郎　や、自害か。おゝ、其苦しみは和女はかりか――。

（黯然となる。）

淨心　未練なり小太郎。今と成つて何の繰言。信濃殿、いざ改めて勝負〳〵。

信濃　云ふにや及ぶ――。

（再び斬り結ばんとす。中門外より宇都宮貞綱（四十歳、烏帽子、直垂）走り出づ。）

貞綱　上意、上意に候ぞ。信濃守はあらぬか入道淨心――上意。

二人　はゝッ。

（思はず刄を納める。）

貞綱　（中に立つて）執權時宗公の御仰ぢや。武州川越の地に限り、向後一切の田文無用に致せ。

二人　む。

貞綱　（碎けて）今度兩家の爭はお上でも殊の外御心痛ぢや。先づ刀を納められい。一合一句の地も多く申し上げて、御用に立てんとせられし御許等が誠心は、心ある者は皆感じ入り申した。貞綱かく罷り越すからは、誓つて兩家の名は傷つけ申すまじ。

二人　むゝ――。

貞綱　それとも上意に背き私の意地を立て通さるゝか。貞綱のあつかひを不服と思召さるゝか。

二人　さあ――。

貞綱　小太郎殿、ともあれ父御を邸に伴ひ介抱せられよ。初瀬殿は信濃守の御看護、さゝ、時後れては悔むも詮なし、早やく〳〵。

（促がす。）

皆々　はゝッ。

淨心　（小太郎の肩に依つて）云ふ可き仔細は猶盡きねど、上意とあれば詮方なし。信濃殿さらば――。

信濃　おゝ、後日〳〵。貞綱殿、御免。

（小太郎は上手へ。信濃守等は下手へ。跡には渚と貞綱とのみ殘る。渚は恍惚と小太郎の後影を見送る。）

貞綱　（呼ぶ）渚殿、渚殿、はて渚殿――。

渚　（ハッとして）おゝ――。（恥しきこなし）

貞綱　（微笑んで）鎌倉一の氣丈者と云はれた和女も、戀には同じ弱い女ぢや喃。

渚　とは云へ解けても解けぬお二人の顏色は――。

貞綱　はて、お案じ召さるな。（刀の柄を丁と打つて）貞綱改めて仲人に立ち申さうわ。

――幕――

第二幕

登場人名

渚

小太郎清澄
百姓　與次兵衞
乳母　お　里
娘　お　袖
僧　日　朗
　他に、小百合、若菜、近所の若者與作、村の者等

場　面

鎌倉名越の里なる農家、與次兵衞の宅。二重屋體、正面上手より、佛間、灰色の壁、奥への出入口の繩暖簾。其前に爐を切りて自在に湯釜を掛けたり。上手は簾を懸けたる一間の別屋體。下手は形ばかりの門、若葉した槇の木。卯の花の垣根、其外は名越の切通の方へ行く往還。前幕より凡そ二月程の後。弘安四年四月下旬。卯の花下しの晴れ間。

與次兵衞の孫娘お袖（十七歲）と近所の若者與作（十八歲）とが、槇の木に脊中合せに依りかゝつてゐる。やがて女は兩手の袖で顏を覆うたまゝバタ／＼と下手へ駈け出す。男は遑てゝ追ひ縋る。

與作　これ、どうする、何とするのぢや。

お袖　かまうて下さんすな。どうせ嫌はれた私ぢやもの、死なうが生きようがお前に係り合ひはござんせぬ。

與作　はて、何を云ふのぢや。何で和女(そなた)を嫌はうぞ。

お袖　なりや、何故父樣(とゝさん)に打ち明けて下さんせぬ。思ひ出すさへ氣もそゞろな、あの雛祭の宵の事を覺えてゞござんすか。

與作　おゝ、何の忘れよう。忘れてよいものか。盡未來變らぬ女夫と云うた。

お袖　さ、その約束は僞りでござんしたか。其時の嬉しい言葉の一つ／＼も、身にしみて嬉しう、片時も忘れた暇も無いものを、口と心とは反對(うらはら)な、只父樣に打ち明ける位な事に、とやかうと云はしやんすは、やつぱり一時の慰にされたのぢや。積られた、謀られた。その恨は水の底から云ひますぞや。

（振り切つて駈け出す。）

與作　（抱き止めて）これ待ちやそれはあんまり氣短な――。

お袖　ぢやと云うて――。

與作　はて、いつそ思ひ切つて云うて見よう。

お袖　すりやあの父樣に――。

與作　おゝ、それから和女(そなた)の爺樣(ぢい)に話して貰はう。吉凶ともに必ず短氣を出してたもるなや。

お袖　そんなら與作さん。
與作　あゝ、人に見られぬ中に行かう。宵になつたら又何時もの場所で――。
お袖　あい／＼、待つてゐますぞえ。
（與作下手へ行く。）
お袖　（思はず呼び止める）あもし――。
與作　何ぢや。
お袖　（走り寄つて）いえ／＼何の事でもないけれども――いつそ其處まで――。
與作　はて、人が見よう。たしなみや。
お袖　何の、見て笑うたら、今にこちらから笑ひかへしてやるのぢや。
（睦じく私語き合ひながら去る。此の間に面やつれのした渚が羨し氣に上手の簾を上げて見送る。奥の暖簾の下から乳母のお里（四十歳位）も覗く。）
（やがて二人の目がハタと、行き合ふと渚は遽てゝ簾を下す。乳母は傷し氣に其方を見、又下手を見てホッと溜息をして、何やら心に首肯く。下手奥より與次兵衛（六十歳あまり）出づ。）
與次　（空を仰いで）あゝ、丁度よい樣に晴れたな。槇の若葉が今の雨で一入と延びた樣ぢや。
お里　おゝ親父樣――そして畑の方はどうでございました。
與次　上首尾ぢや。しかしどうも人手が足らぬで喃。――お前の亭主が生きてゐるか、二人の娘の中が一人でも男だつたら大助りぢやが――。
お里　（すりよつて）おゝ、それで思ひついた。お袖に聟を取る氣はございませぬか。
與次　え、（驚いた樣に）何を又不意に云ひ出すのぢや。
お里　さあ、不意の樣で不意でない、あれも最う十七でございます。
與次　さうか、とんと忘れてゐた。早いものぢや喃。
お里　それで、姉の若菜はお邸へ奉公すればあちらの御家來とでも縁があらう。妹のお袖は野育ち故こゝらの衆を聟にしたい。（聲を秘める樣にして）氣性なり年頃なりよく似合うた、あの多左衞門殿の弟息子はどうでございませう。
與次　（激しく頭を振る）えゝ、そりやいけぬ。
お里　え、そりや何故に――。
與次　（突き放す樣に）彼奴の家は日蓮坊主の宗旨ぢや。
お里　おゝ。
與次　あの坊主は御大師樣を國賊ぢやと云ひをつた。あの樣な奴がこの名越に住んでゐたと思ふと其事さへも腹が立つ。今は其處に日朗と云ふ弟子坊主が來てゐるさうな

が、托鉢に來ても門へも立たせる事でない。

お里　さあ、それはさうでも、お袖とあの與作とは、どうやら言ひ約束もした樣子——。

與次　何ぢや。内證事をしてゐる——そ、それを知つてゐて何故默つてゐるのぢや。

お里　でも似合ひらしい仲と思うた故——。(思ひ入つて)喃親父樣。云うては濟まぬ事ながら、お前なり私なりは、彼等(あれら)二人よりは早やう死ぬ體、少しは心にかなはぬ事があらうとも、末長う生き殘る者の幸福(しあはせ)を思うてやつて下され。

與次　いゝや、お道に背いては幸福は續かぬ。

お里　とは云へ切つても切れぬ其時は——(上手を見て聲を祕(ひそ)め)なそれ、與に來てござるお姫樣と同じ事。

與次　む——。

お里　お姫樣は親御同志の御不和から、日取りまで定つてゐた緣が破れたりやこそあの樣に、若い身空で念佛三昧。髮こそ下され尼のつもりと仰有つたを、お前は御不憫とは思はれぬか。

與次　(にべなく)　思はぬ。じたい餘りに我儘ぢや。

お里　えッ。

與次　親に從ひ良人に從ひ子に從ふのが女の道ぢや。それに何ぢや、それが親御達の故(せゐ)でゝもあるかの樣に、面あてがましう我家を脫け出して來るとは、化粧坂(けはひざか)あたりの遊女等(など)のする事ぢや。

お里　しッ(抑へて)聲が高い。聞えては惡い。

與次　いゝや、聞えても構はぬ。それでなうても俺(わし)は云はう〱と思うてゐた處ぢや。お前が乳を上げました爲めに、その樣なお心になられたのであつたら猶更ぢや。

(起ち上る。)

お里　あこれ、それはあんまり——。

(止める。下手からお袖が走つて來る。)

お袖　母樣、姉樣が見えた。

お里　え、若菜が來たと——あの一人かえ。

お袖　いえ〱小百合樣のお供ぢや。

お里　あゝ、小百合樣が——。

(思ひ惑ふ。)

與次　それ見よ、お邸からお迎が見えた。然も妹御樣のお使とは行き屆いたなされ方ぢや。

(小百合、若菜出づ。市女笠(いちめがさ)を戴く。)

若菜　母樣、小百合樣のお供をして來ました。

小百合　爺や久しい喃。變る事もないか。

與次　はい〱有難うござります。

小百合　そして姉樣は何處にぢや。早やう逢はせてたも。

お里　はい〱今これへお連れ申しまする。

（二人は座敷へ上る。與次兵衞は下手の縁に腰をかける。）

お里（簾を上げて呼ぶ）渚様、渚様。

渚（靜かに振り返つて）乳母か。

お里　はい。あの小百合様がお越しでござります。

渚　それは洩れて聞きました。なれども今は逢ひ度う無い。志は嬉しけれども、そのまゝ何も問はずに歸つてたもと傳へてたべ。

お里　さ、さう思召すは無理ならねど、折角の事故、先づこちらへお越しなされませ。

（無理に手を取って連れ出す。）

小百合（それと見て兩手をついて）姉様、おなつかしう存じまする。

渚　おゝ、小百合か。よう來てたもつた喃。――さりながら今も乳母に云ふ通り、これまでの約束事とあきらめて、何も云はずに歸つてたも。

小百合　――。（默つて頭を横に振る）

渚　さ、其志は忘れねど、所詮望は絶えたこの身、只この儘に見棄てゝたも。

小百合　あゝ。

若菜（堪へ兼ねて膝を進める）そ、そりやあんまりでござります。差し出て云ふは畏れあれど、お邸を出でさせられて後の、小百合様の御心配は、どれ程ぢやと思召しますぞ。

渚　おゝ。

若菜　餘所目にも痛々しう、姉様々々と朝夕問はせらるゝ度毎に、貰ひ泣きせぬ者は一人もござりませぬ。

渚　――。

若菜　そればかりか母御様の御心勞（と持ちたる文箱を出して）厚いお情はこの文に罩めて、私に代つて連れて戻れとの御言葉でござりました。

渚　すりや母様のお文まで――。（押し戴いて封を切る。やがて讀みさしてハラ／＼と泣く）あゝ、何時に初めぬお情深い仰有りやう。母様ッ。（兩手を突いて）渚はこれからお禮を申し上げまする。

與次　おゝ、よう仰有つた、よう仰有つた、そこにお心がつけば重疊ぢや。さ、若菜お供の用意せい。

渚（止めて）いや、そりや無用ぢや。妾は矢張戻るまい。

與次　え、何と仰有ります。

渚（やるせ無く）歸つたとて、戻つたとて、この淋しさが何で失せよう、この苦しさが何で去らう。――そりやも母様のお文では、宇都宮様のお骨折で、再び元に結ばれまいものでも無いと仰有つたれど、表面は解けても心の底は解けぬ武士の意地、所詮この思ひは棄つたわい喃。

與次　はて、わつけも無い。如何にお娘御の聞きわけが無いとて、現在の親御を斬つた仇を慕ふとは、たとへ樣も無い御不孝なお方ぢや。

渚　不孝者——不孝者——おゝ、その名が恐しい、其名が戀しい。眞親兄弟がこの心から思ひ棄てらるゝなら、只一筋に死をも急がう。母樣の日頃の庭訓が、あとかたも無く洗ひ出されるなら、あなたの邸へ逃げても行かう。

與次　えゝ、そりや——。

渚　（押へて）それも得せず、これも果さず、只おめ〳〵と生き永らへてゐる心は、若しや今一度其人に、逢はれる事もあらうかと、儚い中にも儚い幻の影があればこそ——。火を噴く山のそれにも似た、張り裂けるやうなこの心、少しは察してたもい喃。

與次　（首肯いて）如何樣、一應は御尤もぢや。しかし矢張それもお前樣の我儘ぢや。

渚　えツ。

與次　お歸りなされ。萬に一つの僥倖をお待ちなされるのなら、何故邸にお出でなされぬ。

渚　さりとては頑な心。邸の室には嫁入の衣服調度が置いてある。戀の形見の中に身を埋めて、思ひの緒が亂れいでゐられようか。

與次　はてお弱いお心、それ程の事がなんぢや。それでも信濃守樣のお娘御と云はれますするか。武家のお生れでもない御未練な。

渚　おゝ、未練ぢや。氣強い女とは誰が事ぢや。武士の娘とは何故生れたぞ。泣きたい、泣きたい泣いて涙の泉が盡きたなら、少しは幸福な女の數にも入れよう。

與次　——。

渚　（若菜に）御返事を認めようにも胸が塞つて筆も運ぶまい、體ばかりは無事ぢやと傳へてたもれ。（立ち上る）小百合、折角來やつたに笑顔も見せず、睦じい語らひもせず、このまゝ歸す切ない姉の心を推してどうぞ邸へいんでたも。

小百合　（泣く〳〵）ああ、あい——。

お里　すりや、どうあつてもお邸へは——。

渚　乳母、許してこのまゝ置いてたも。

（上手へ行かんとす。）

小百合　（思はず縋る）姉樣。

渚　おゝ。（ぢつと其手を執つて顏を見詰める。やがて思ひ切つて）さ、さらばぢや。

（上手の屋體へ駈け込み簾を下す。）

お里　あゝ。（泣き伏す）

小百合　（抱き起して）悲しいはお道理ながら、斯うまで思ひ詰め遊ばしたは、よく〳〵の事でござりませう程に、

今日の處はお氣に逆らはぬ様に、このまゝ歸つて下さりませ、萬事はこの乳母がよう心得てをりまする。

小百合　さう云やるなら戻らうわいの。必らず〳〵姉様の事を頼むぞや。

お里　はい〳〵、仰有るまでもござりませぬ。若菜、氣をつけてお供しや。

若菜　あい、母様(かゝさま)お前も氣をつけて――。お袖、和女は私に代つて何かの御介抱を頼むぞや。

お袖　あい〳〵よう得心してをりまする。

（小百合、若菜下手へ出る。）

與次　（默然としたが立ち上つて）小百合様お歸りか、俺も一所にお供をしよう。

お里　え、何處へ。

與次　知れてゐる。二階堂ヶ谷(やつ)のお邸へぢや。俺(わし)はどう仰有つてもお姫様を此處へ泊め申す事は不得心ぢや。と云うて孫子を叱る様に手籠にもなるまい。殿様に申し上げて連れていんで貰ふのぢや。

お里　さゝ、常々物を枉げぬ氣質故、その言葉は尤もなれど、最前も云うた通り、日頃考へ深い渚様が、あゝおなりなされたのも、よく〳〵思ひ迫られたればこそ――。

若菜　お迎ひに來た私等が、このまゝに歸るのも、其お心を汲んでの事。（顏を覗いて）もし、共々に慰めて上げて下さりませ。

小百合　自らも頼まう程に、邸へは來てたもるな。

與次　むゝ――。（默つて立つてゐたが）あゝ、長生はせぬものぢや。（其儘フイと出て下手奥へ去る）

若菜　あゝ、何處へやら行かれた。

お里　氣に添はぬ時のいつもの癖ぢや。（改つて）左様なれば小百合様――。

小百合　あゝ、又逢ひませうぞ。

若菜　母様無事でゐて下さりませ。

（兩人下手に去る。）

お里　これお袖、その邊までお見送りしや。

お袖　あい〳〵。

（跡を追ふ。）

お里　（見送つて後、上手を見て）渚様、渚様――。

（と呼ぶ。返事なし。不安氣にそつと窺ひ又安心して奥の暖簾の影へ入る。間。やがてそつと簾を上げて渚が忍ぶ様にして出る。門に立つて「すまぬ」と云ふ心持で見送る。やがて何物かを見つけた様子でハッとする。猶よく〳〵見定める。）

渚　おゝ、矢張それぢや。

（サッと顏を赤らめて、扨て初々しく何處へ身を隱さうかと思ひ煩ふ様にして、槇の木の下に身を寄せて、

ザッと其方を見詰める。下手より小太郎清澄、何か求むる風情にて出て來る。）

小太郎（門に立つて）頼まう、頼まう。名越の里にあると云ふ、日朗法師の庵はいづれぢや、案内頼む。

渚　——。

小太郎　はてな——人は無きや。頼まう、頼まう。

渚　——。

小太郎　あゝ、誰も居ぬと見える。田舎人はさて〳〵心安い事ぢや。

（行き過ぎんとす。）

渚（走り出づ）小太郎樣——。

小太郎　や、何と、我が名を呼ぶは——。

（立ち戻る。）

渚　渚でござります。お懐しう存じます。

小太郎　おゝ、渚殿か。（思はず二三歩其方へ歩みよりしが、すぐ思ひ返して）いや、何でもない。

（其儘に立ち去らんとす。）

渚（追ひ縋つて）あもし——。

小太郎（振返つて）御用のばしござるか。我等は急ぎの身ぢや。

渚　して、その御用とは——。

小太郎　日朗法師の庵まで尋ねて參る。何時ぞや鶴ヶ岡にて問答せしが、其時の彼の法師の一言が、深う耳に殘つて、何となく慕はしう思はれる。今一度親しう逢うて猶深く問ひ正して見たい。（不圖思ひついて）おゝ、御身は其庵を御存じないか。

渚　はい、この名越は妾が乳母の里故、小さい時から度々來て、其庵へ行く道もよう知つては居りますれど、今それをお教へ申したら、お前はすぐ樣其處へお出で遊ばすか。

小太郎　如何にも。

渚　あのこの儘妾を棄てておいて——。

小太郎　や。

渚（恨めし氣に）その庵を尋ねる前に、何故こゝに妾が住むかと問うては下さりませぬ。法師に許り用あつて、この渚はどうならうとも、御心にはさへられませぬか。

小太郎　え——。

渚　花は梢を離れても、又咲く春は廻りくる。卑怯と罵られて死にもせず、未練と笑はれても此の黒髪を得切らなんだは、斯うした折もあらうかと、儚くかけた願故——。

小太郎　——。

渚　その願は今かなうた。とは云へ變らせられた其の御心——。（ヂッと見上げて）もし、其樣に默つてゐずと、可愛くなくば憎いと云うて下され。憎くければいつそ死ね

と仰有りませ。

小太郎　（感動して）よくぞ申された。其志は小太郎仇には聞き申さぬ。なれども、今更繰返すまでも無き兩家の不和。父と父とが互に受けた手傷は癒(い)えても、憎(にくしみ)は其傷跡と共に消え去らである今、願へばとて許さるゝ緣とも覺えず。皆宿世(すくせ)よりの運命(さだめ)とあきらめられよ。

渚　あい、あきらめます。あきらめまする其前に、その御心の奥を聞かせて下さりませ。

小太郎　えッ。

渚　浮世の義理に隔てられて、餘儀なく無情(つれな)う遊ばすのか、但しは又——。

小太郎　むゝ——。

渚　さ、それをきかせて下さりませ。その一言で千萬年の後までも、一人で居ても露淋しいとは思ひませぬ。

小太郎　おゝ、（ハッとせしが、すぐ思ひ返して）そりや無駄ぢや。世に無き人の齡を數ふるも同然。法師の庵は他にて聞き申さん。

（振り切らんとす。）

渚　（確と袖を捉へて）すりやどうあつてもお心は——。

小太郎　おゝ。（列然と）小太郎も武士ぢや。戀に溺れて親に背く不義者の群には入り得申さぬわ。

渚　あゝ——。

小太郎　戀も棄てた。命もやがて攻め來る蒙古の戰に棄てるのぢや。

（云ひ棄てゝ下手奥へ走り去る。）

渚　おゝ。

（追はんとするも能はず、垣根に依りかゝつて泣く。下手よりお袖出て來り其有樣を見て驚き走りよる。）

お袖　渚樣、渚樣、どう遊ばされました。

渚　おゝお袖か。（涙を拭うて）よしない事がつい戀しうて喃。（緣へ腰を下して）和女の幸福に引きかへて、思ふお方にも棄てられた儚いこの身ぢや。

お袖　え、この私が幸福とは——。

渚　隱しやるな。皆知つてゐる。

お袖　（ハッと顏を染めて）すりや先程の話をば——。

渚　おゝ皆あちらで聞いてゐた。

お袖　お恥しうござります。（顏を覆ふ）

渚　いや／＼、何の恥しからう。年頃と云ひ似合ひな夫婦(めうと)ぢや。末長う睦じう添ひ遂げたがよいぞや。

お袖　あい／＼有難うござります。したが、（少し顏を曇らせて）爺樣(ぢいさま)に云うて見ねば何となるやら氣がかりでなりませぬ。

渚　それもさうぢや。然し命を投げ出しての戀には恐れる者はあるまい。

お袖　あい。

渚　この渚は命をもと思ひながら、猶も棄て兼ねて苦しむでゐる。戀に死ぬ女から見りや、笑止とも愚かとも見ゆるであらう。

お袖　（引き取る樣に）何の〳〵、誰がその樣な事を思ひませうぞ。何も知らぬ身も蔭ながらお氣の毒に思うて居りまする。

渚　おゝ、優しう云うてたもる。同じ乳に育てられたれば妹の樣にも思はれる。（懷中より錦の袋に包んだ香箱を取り出して）棄てられた身には用も無いこの香箱、そなた持つて嫁入してたも。

お袖　（辭退する）いえ〳〵勿體無い。その樣な立派な品は私の身には過ぎまする。

渚　はて、身のたしなみぢや。男の心はさうもして引き止めねばならぬ。

（無理に持たせる。）

お袖　あい、それでは遠慮なしに戴きまする。

（嬉し氣に懷へ入れる。雨蛙の鳴く音。）

渚　（起つ）あ、蛙が鳴く。又雨を誘ふのか――。

（軒を見上げて呟く。間。下手より與次兵衛が怒氣を含んで、何やら口の中に罵り乍ら出づ。お袖を見るとイキナリ其黑髮を取つて捻ぢ上げる。）

渚　（驚いて支へる）あこれ、年甲斐もない手荒な。理由も云はずに何としやるぞ。

與次　えゝ、お止めなされますな。恩義を知らぬ人畜生は、片時も此處へは置かれませぬのぢや。

渚　え、すりや自らを――

與次　いや、此の女奴でござります。（引立てる）さあ失せい。何處へなりとも出て失せい。

お袖　（漸々顏を上げて）出いとは何處へ――何の咎がござります。

與次　その咎はおのれの心に問へ。仔細は太左衛門から皆聞いたぞ。

お袖　あッ。

與次　與作の話ではお袖御とは早うから云ひ交はした仲との事、改めて嫁に呉れるか聟に取つて呉れるかと云ひ居つたが、何のあの樣な外道と緣組をするものか。

お袖　あゝ――。

與次　武士ばかりか百姓でも、不義淫をようしたと賞める者はあるまい。それに加へてあの樣な者の子と約束するとは何事ぢや。親の心子知らずとは、ほんにおのれの事ぢや。（渚と二人へ宛てゝ云ふ）

お袖　――。

與次　さ、出て失せい。今を限りに爺とも家とも思ふなよ。

お袖　（思ひ入つて）　申し爺樣、お氣に負いてこれまで隱した咎は、どの樣にもお詫び申しまする程に一生の願ひ初めの願ひ納め、與作樣と夫婦にして下さりませ。

與次　いや、ならぬ。今此處で思切るか、さも無ければ家を出て行け。

お袖　あ、あい――。

渚　（見兼ねて）　あこれ、その樣な無情い事は云はぬもの。緣あればこそ思ひ思はれもした仲ぢや。妾も共に賴まう程に、二人を添はせてやつてたも。

與次　措いて下され。こりやこちらの事でござります。俺の家の事は俺が思ふ儘にしますのぢや。

（無理に引立てんとす。奧よりお里が走り出る。娘を引ッ退けてキッと父親をふり仰ぐ。）

お里　樣子は殘らず聞きました。餘と云へば頑な其お心、追ひ出すと云はれても、お袖のためにも世界に只た一つの生れた此の家、明日からどうして暮らして行けるでござりませう。

與次　む――。

お里　最前云うたはこゝの事、娘氣の一圖に突き詰めて、若しもの事があつたなら。勿體無いが父樣、お前をお恨みしますぞえ。

與次　いや〱、俺の云ふ事に負く奴は、死なうが泣かうが可愛いとも不憫なとも思はぬ。

お里　えゝ、邪慳な心、直い道を行くばかりが人の習か。

與次　おゝ、俺はそれで今まで日を送つて來たのぢや。（お袖に）さ、思ひ切るか。

お里　あ――。

與次　出て行くか。

お里　（犇と娘を抱いて）　いや〱、やらぬ〱。何處へもやらぬ。お袖は私が娘ぢや。

與次　何をッ。

（爭ふ。渚が止めに入る。下手より日朗が出て二人を支へる。此次ぎの問答の間に何時ともなくお袖は暖簾の奧へ消える。）

日朗　これ〱、親子の仲で淺間しい爭は何事ぢや。

與次　おゝ、お前は日朗――。

日朗　如何にも其日朗ぢや。同じ里に住めば朝夕顏ばかりは見知つてゐる。計らず通りかゝつたのも盡させぬ御佛の御導ぢや。仔細を悉と聞かせられい。

お里　（進み出でて）　はい〱、よう仰有つて下さります。その仔細と申しますは――。

與次　（押し退けて）　えゝ、何を誰に云ふのぢや。（日朗に）お前の樣な惡僧に云うて聞かせる仔細は無いわい。

日朗　ほう、この日朗は惡僧かの。

與次　大悪人ぢや。おのれの師匠はお大師様の宗旨を國賊ぢやと云うたであらうが。
日朗　如何にもさう申された。今もさう云うてゐられる。
與次　さ、その様な外道に何を聞かせてよいものか。さつさといんで呉れ。（打つて掛る如き氣配）
日朗　（靜かに制して）云はぬとあれば强ひてもきくまい。なれども其方が信ずるお大師様の教では親子淺間しう爭へよと敎へられてあるかな。
與次　むゝ。（詰る）
日朗　其方は何の爲めに佛様を祀るのぢや。お大師様を信仰するのぢや。卽ち、斯様な事に出逢うた時、善惡の眞の判定を我が心につけようが爲めではないか。
與次　――。
日朗　それが、思ひ惑うて今の様な爭が起るのは、そりや此方の罪ではなく、其教の根本が惡いのぢや。親も子も主も家來も赴く道は只一つぢや。正法を信じて、押せども突けども少しも搖がぬ大磐石の様な安心が、誰の心にも作られてゐたら、この爭は起らぬ筈ぢや。
お里　はいく、よう仰有つて下さりました。（與次兵衞に）もし、きかねば教へも判らぬ道理、今の有難いお言葉を何とお聞きなされたぞ。
與次　（猶も强情に）はて、口利根なは僞せ者の常ぢや。何であらうと早やういんで呉れ。
日朗　いや、戻るまい。如何なる人にも我正法を押し廣めて、國の憂を除かねばならぬ。さり乍ら今はこれより鎌倉の大路へ說法に行く道故、後刻重ねて參るであらう。生前の佛緣があつたればこそかく問答も致したのぢや。猶も愍と考へられい。
（去らんとす。）
渚　（呼び止めて）暫く――
日朗　（振返つて）御用でござるかな。
渚　その搖がぬ巖の様な安心とやらに入る道は――。
日朗　勇猛直前ぢや。
渚　勇猛直前とは――。
日朗　我が志す正しき道に傍目も振らずに突き進むのぢや。さすれば必ず求むる道は得られる。
（下手へ去る。）
渚　（見送つて呟く）只一筋の道を辿らば――
與次　（吐き出す樣に）勝手な坊主ぢや。自分の云ふ事丈けを云うたら直ぎに往に居る。こりやお袖――（振返つて）や、お袖は何處へ行たぞ。
お里　（心付いて）おゝ、ほんに表へ出た樣子も無し――。
（考へてフトある恐怖に襲はれて色を失ふ）もしや――。
（急いで奥へ入る。間。バラく と雨が降り出す。）

與次　おゝ、又雨が來た。――ふん、乞食坊主めが――

（呟き乍ら干してある物等を片づける。下手奥より扇を翳して小太郎が急ぎ足に出て來る。）

小太郎　（垣根に立つて）日朗法師が此方に御入ありしと聞く、對面したし取次を賴む。

渚　（夢から醒めた樣に）あゝ、さう云ふお聲は――。

（走り出てんとす。與次兵衞は驚いて驅け隔てる。）

與次　はて、何處へお出でなされます。

渚　えゝ、退いてたも。たつた一言逢うて云ひたい事がある――。

與次　め、滅相な、お袖の事にもかこつけて、あれ程に申上げたがまだお耳には入りませぬか。（小太郎を睨んで）ありや現在親御樣を斬つた仇ではござりませぬか。

渚　（氣を急く）仇でも鬼でも魔王でも、最前聞き殘した言葉に思ひが殘る。さ、其處退いて――。

與次　いや／＼、滅多に退きはしませぬ。

小太郎　渚殿、日朗法師は何處にぢや。

（門の中へ入る。）

與次　おのれッ。

（打つてかゝる。）

小太郎　（其手を執へて）確かにこれに御入りありしとの人の言葉ぢや。取次を賴み入る。

渚　あゝ、矢張(やつぱり)あの法師の事か――。（チツト見上げて）云はう／＼と思うた恨も、目の當りに見ては萬分の一も盡せぬ。（思ひ入つて）小太郎樣、どの樣に申してもこの渚との緣は――。

小太郎　（キツパリと）おゝ、絕つた。絕ち申した。

渚　すりやこの渚がどの樣にならうとも。

小太郎　や。

渚　（懷劍に手をかけて）さ、今(ま)一度(いちど)仰有つて下さりませ。其一言が生死の境。

小太郎　むゝ――。

渚　さあ。

與次　おのれッ。

（振り解(ほど)いて又打つてかゝる。あしらふ。其處へ表からお里が髮を振り亂して息も絕え／＼に走り戾る。）

お里　（與次兵衞に縋りついて）これ父樣(おとつさま)、どうせう、どうせう、何とせうぞい喃。

與次　（驚く）えゝ、何ぢや。

お里　お袖が――お袖が死んだわい喃。

與次　えゝゝゝ（よろ／＼として）あのお袖がッ。

お里　かなはぬ戀に身を投げたのぢや。村の衆の情で今こゝへ死骸が來る。（恨めし氣に）不孝者、不孝者と、千度も繰返して叱つたがよい。

與次　おゝ。

（化石した様に立ち竦む。雨やゝ强し。下手奥より百姓三人戸板にお袖の死骸を乘せて來る。）

百姓の一　お里殿、やう／＼來ました。顔を覆ふものがないので、卯の花を折つて來ました。

同二　人好きのするよい娘であつたが、可哀い事に成つた喃。

同三　ほんにその卯の花がすぐに手向ぢや。

同一　（空を仰いで）たうとう空も泣き出して仕舞うた。晩方又何かの手傳に來ますぞや。

（程よき處へ死骸を置きしな／＼として去る。）

お里　（なじる様に）さ、ちやつと此の死骸に逢うてやつて下され、（渚に）渚様も泣いてやつて下さりませ。

（顔の覆ひの卯花を取る。）

渚　おゝ、（さし覗いて）お袖――お袖――、もう物は云ひやらぬか。最前の香箱はまだもつてゐやるか。その時の笑顔は何處にぢや。（與次兵衛を見て）蕾の花はもう元の枝には還らぬ。さりとては情ない嵐よ喃。

皆々　――。

渚　さりながら、思ふ道をたゞ一筋に辿つて行つた和女は幸福者ぢや。――（フト他の思ひにかき亂さる）あ、いや／＼死出の山路は遥々ぢやに、連もなう一人でお行きやるか。（小太郎を見上げて）淋しからうに心細からうに――。

小太郎　（ぢつと死骸を見詰めてゐたりしが、此の時崩るゝ如く）おゝ、不憫ぢや。今その哀れ深い死顔を見るにつけ、此の小太郎の心の楯も、思ひの焰に燒き盡されるわい。

渚　えツ。

小太郎　（其手を執りて）渚殿、二人して心ゆくまで問ひ弔うて得させ申さん。

與次　おゝ。（轉び寄つて）よう仰有つて下さりました。（死骸に縋つて）これお袖、爺が悪かつた。赦せ、赦せ、赦して吳れい。

（初めて潸然と泣いて兩手を合はす。雨愈々激し、杜鵑、一聲。二聲……。）

（皆々愁然として死骸を見守る。）

――幕――

第三幕

第一場

登場人名

北條相模守時宗

同　武藏守義政
二階堂信濃守
秋田入道淨心
宇都宮貞綱
文章博士　源兼章
他に、諸大名、近侍等

場面

鎌倉幕府評定所。

平舞臺、正面一尺高く執權の席に美しき簾を懸けたり。左右襖。廊下遠侍に續く。

弘安四年五月初旬。前幕より四五日の後夜三更過ぎ。上手に四五人の宿直の侍緊張したる面持にて坐す。上下兩方とも人の行き交ふ風情物々しく、この深夜、常ならぬ異變の起りたるを先づ思はしむ。

侍の一　（下手より出て來る）秋田入道殿御到着でござる。

侍の二　むゝ、何時も乍ら氣の早い仁ぢや喃。

侍の三　しかし今日が最後ぢや。其心得のある者は時を移さず駈けつけらるゝでござらう。

侍の四　如何にも、十年來待ちに待つた今日ぢや。今度こそは我々の日頃の腕並を見する事が出來申さう。

侍の一　仰せの通りぢや、これまで二度の戰には、皆西海筑紫の武士ばかりに功名を恣にさしたが、十萬の兵と申せば少しは斬り甲斐もござらう。ハヽヽヽ。

侍の二　おゝ、侍冥利には名ある首の五つ六つは取り度いものぢや。

侍の五　（下手より出づ）二階堂信濃守殿御入でござる。

侍の一　おゝ、二階堂殿が御入あつたか。（眉を寄せる）はて、入道殿と惡う前後して參られた喃。

侍の二　如何樣、彼の田文の爭より以來、一と云へば二、二とあれば三と、事毎に結んで解けぬ御兩所、今宵の評定も穩やかには納り申すまい。

侍の三　しッ、默らせられい。早やあれへ見えた。

（下手より入道淨心と信濃守とが先を爭ふ樣にして出づ。信濃守は直垂の下に腹卷を締めたり。やゝ暫く無言に向ひ合うて坐す。）

淨心　（皮肉に）信濃殿、お早い御出仕でござるよの。心掛のある武士はさて／＼違うたものぢや。

信濃　ふむ、僅かに馬に鞍を置かせる間の遲刻を嘲らうてか。たとひ時早く出仕せばとて、事に當つて其用意がなければ、田を守る案山子同然ぢや。

淨心　や、云はれな信濃、一大事の御評定と承つたればこそ、取る者も取り敢へず斯く最先に駈けつけたのぢや。

信濃　さ、其大事とは何を云ふのぢや。愈々蒙古押し寄せ

たりとの注進ありし爲めならずや。さすれば、今より直ちに征伐に馳せ向へよとの仰せを受けたら、其腹卷ざへもせぬ姿で出陣がなり申すか。

淨心　むゝ。

信濃　御身こそ眞の不覺人ぢや。腹卷も締め鎧も持たせ、馬に飼料を與れて、直ぐ樣出陣の用意を整へたまでの、僅かな遲刻が不忠とならうか。

淨心　それこそ〳〵、上よりの御仰は承らねども、身が嫡子小太郎は、萬一の變に備へる爲め、此の程より夜毎に濱邊の警護を致し居るわ。此の期に及んで初めて馬に水飼ふとは不覺千萬ぢや。

信濃　よし、其不覺者の刄の斬れ味には覺があらう。

淨心　何をッ。

（立ち上る。途端、上手より宇都宮貞綱出づ。）

貞綱　あいや御兩所、執權の御出座でござるぞ。

兩人　ははッ。

（平伏す。正面の簾を卷く。執權北條相模守時宗（三十一歲、立烏帽子、狩衣）武威四邊を拂つて着座す。下手に執權連署武藏守義政（二十五六歲、烏帽子、直垂）近侍、後に太刀持等控へたり。同時に左右の襖を開けて諸大名、文章博士、源兼章（四十歲餘）等出づ。）

時宗　（見渡して莊重に）夜中ながら火急の出仕、今に初めぬ方々の忠節、時宗滿足に存ずる。

皆々　はゝッ。

時宗　仔細は廻文にも申せし通り、先刻筑紫の探題よりの注進にては、彼の蒙古いよ〳〵最後の大軍を送りて、早や壹岐對馬の海邊まで押し寄せしと云ふ。（力を込めて）國の興るも今、亡ぶるも今、先づ命を投げ出す前、眞國を憂ふる覺悟の程を、時宗改めて承らうぞ。

皆々　はッ。

義政　文永以來、家人の土地の賣買を禁じ、田文を取り正し、武を練り、馬を養ひ、弓を張り矢を矧いだは、皆今日に備へる爲めであつた。軍の手配、戰場にての駈引等、思ふ仔細のあらん者は、身分老若の別なく憚らず申立てられい。

皆々　はッ。

時宗　彼の國書を退け、其使を先づ由比ヶ濱に斬り、再び博多の浦に斬り棄てし時の覺悟を、目前に試すは今ぢや、相模武士の膽の太さを見するは今ぢや。

貞綱　はゝッ、其御仰までもなく、斯くある可しとは豫ねての覺悟、明くるを待たで今これより、筑紫へ馳せ下る軍の先鋒は、この貞綱最先に承るでござらう。

信濃　信濃とても其通り、御諚と共に出陣の用意を整へ、家來殘らず門前まで引き連れ申した。

淨心　年老いてもこの淨心の勇氣は昔の儘、老の寢覺の徒然に、彼の軍勢を蹴散らし申さん。

大名の一　千歳存生ふ命より、唯一時の名こそ惜しけれ。

同二　武士の彌猛心は梓弓。

同三　引きは返へさじ。

皆々　由比ヶ濱より出で立ち申さん。

（凛然と云ひ放つ。）

兼章　（席末より進む）あいや暫く――暫く――。

時宗　兼章か。何事ぢや。

兼章　憚り乍ら御意見申上げたく――。

時宗　むゝ聞かう。其方は學者ぢや、昔八幡殿は大江匡房に兵法を習ばれしと聞く。時宗も思ひ至らざる事あらば改めん。何事ぢや云うて見い。

兼章　餘の儀ではござりませぬ。戰を止めさせられませ。

時宗　や、何とッ。

兼章　まだ時期が後れてはをりませぬ。速かに和睦させられませい。左も無くば此の國は眞に亡び果つるでござりませう。

時宗　（キッと）やあ奇怪なり兼章、和睦せよとはどの國を指して云ふぞ。

兼章　昔の蒙古、今の元でござります。

時宗　默れッ、血迷うたか兼章。彼の國より初めて使を遣はしたる時、何と返事を認めたるぞ。我いまだ蒙古と稱する國あるを聞かず好を通ずる所謂なしと、御許自ら認めたではないか。

兼章　さ、其時はまことに彼の國の樣子を知らざりし故なれど――。

時宗　云ふな、其後に何と書いたぞ。我が神國は智を以つて競ふ可からず、力を持つて爭ふ可しと云ひ切つたではないか。すりや詩歌を弄ぶに等しく、唯心なく文字を連ねたに過ぎぬか。

兼章　神もつて左には候らはず。とは云へ、其後數度の來寇、まつた筑紫の者なぞの話を總べて見まするに、中々思ひの外なる大國、人智もおさ／＼我に劣らず、軍船、楯鎧、弓矢の作り樣も遙かに我に勝り、特に石火矢と云ふ恐しい得物まで工夫してゐるとの事、二度の敗戰に憤り、四百餘州を舉つて押し寄せなば、この國の運命は積み重ねたる卵同然――。

時宗　默れ／＼、百萬の軍勢よりも唯一つの心の眞ぢや。得物よりも人の力ぢや。我等が遠き祖先より傳はる、他に類なき尊き血潮の流れを知らぬか。

兼章　なれども人の力には限があるもの、心は彌猛にはやれども終に及ばず、空しく其の下に踏み躙らるゝを待たんより、何程かの土地を讓り、速かに和睦させられたが、

反つて國の爲めかとも——。

時宗　（奮然として）國賊ッ、國創つて千五百年、いまだ一度も他國より侵されざる此の國の名譽を永久に棄てよと云ふか。一身の安きを偸んで此の尊き神の國を夷の手に渡せと云ふか。國賊ッ、斬れい。

侍の一　はヽッ。

時宗　軍神への血祭ぢや。徒らに我が智を衒ふ似而非學者を斬れ。

侍の二　はヽッ。

（雜卒を連れ去る。入れ違うて下手より一人の侍出づ。）

侍の三　勘文にございます。

時宗　ふむ、何者ぢや。

侍の三　法華經の行者日蓮にござります。

時宗　之へ持て。

侍の三　はヽッ。

（にじり寄つて渡す。時宗暫し默讀す。）

義政　（覗く樣にして）何事でござるな。

時宗　（靜かに卷き納めて）立正安國論ぢや。

義政　すりや豫て來つたる——。

時宗　おゝ、教ふる道の善惡は措き、如何なる艱難にも堪へ了せたは、彼も亦勇士ぢや。

義政　おゝ。

時宗　彼弓馬の家に生れなば、共に國の大事を謀る可きに。（惜む如く呟きて扱て）や、思はぬ事に時を移した。早速戰の手配致せ。貞綱。

貞綱　はヽッ。

時宗　御許は都に上り、諸事六波羅の指圖によつて筑紫へ向へ、信濃守は直ちにこれより出發の用意せい。

二人　はヽ、委細承知。

時宗　急げ。

二人　はッ。

（立ちかける。）

淨心　（それを止める樣に）あいや執權、この淨心は何處へ向ひ申さうぞ。

時宗　あゝ、御許は止つて鎌倉の警固に勤められい。

淨心　えッ、何とッ。鎌倉の警固とな——。

時宗　如何にも、老體大儀乍ら國の爲めぢや。

淨心　いや、そりや不承知でござる。

時宗　何とッ。

淨心　淨心いまだ左程までに耄碌は仕らぬ。まして今は國を擧げての戰ぢや。信濃守に代つて先陣を仰せつけ下されい。

信濃　云はれな淨心、上よりの台命ぢや、先陣は身共ぢや。

淨心　いや、どうあつても――たとひ軍律に觸れても――。
信濃　むゝ、美事御許が――。
（爭ふ。）
貞綱　（止めて）あいや御兩所、御前でござるぞ。
二人　はゝ。
貞綱　又しても其爭ひ――。今を如何なる秋と心得らるゝぞ。私の意地を立て、私の小さき心に先陣の譽なぞを望む可き秋か。
二人　や。
貞綱　入道自らも申されし如く、國を擧げての戰ぢや。退いて守るも進んで戰ふも等しく皆御國の爲めぢや。それ程の事に氣付かれぬ御身達か。
二人　おゝ。
貞綱　その御身達を斯くまでに隔てた彼の田文の取調は何の爲めでござつたぞ。又御身達は何故一寸一合の地も多く申立てんとせられたぞ。即ち皆今日の御用に立てんためぢや。されば其時の爭さへ無益なりしに、今に及んでそれと悟らず、互ひに由なく爭ひ續けて鎌倉に人ありと許された御身達と云はれようか。
二人　――。
貞綱　彌が上にも心を合せ、たとひ倶に天を戴かざる父の讐なりとも、手に手を携へ、楯に楯を並べて國難に赴く可き秋ぢや、入道殿――。
淨心　おゝ。
貞綱　信濃殿、じたいどうした事でござるぞ。
信濃　おゝ、（ほつとして）肝に銘じたる其言葉、信濃はとく／＼恥入り申した。淨心殿日頃の無禮は平に御赦あれ。
（手を突く）
淨心　（遮てゝそれを止めて）いや／＼、其言ひ譯は淨心より先に申す。先づお手を上げられい。留守は確と預り申さん。心おき無く出陣あれ。
時宗　（欣然と）貞綱、兩人共に好くぞ申した。斯くてこそ我が頼みし甲斐もあれ、今改めて副將として淨心が嫡子小太郎を信濃守と同道させるぞ。
三人　はゝッ。
時宗　小太郎は初陣ぢや。信濃守諸事心をつけて得させよ。
信濃　はゝッ。信濃身に及ぶ限りは――。
時宗　むゝ、滿足ぢや。淨心ッ。
淨心　はッ。
時宗　信濃守の出陣を祝うて得させい。御許は聞えた舞の名手ぢや。貞綱手鼓を打て。
二人　はゝ。
（入道立つて舞ふ。）

歌　梓弓、手に取りもちて、つるぎ太刀、腰にとり佩き、朝まもり夕の護りに、天皇の、御門の護り、われをおきて、また人はあらじと、いや立てゝ、思ひしまさる、天皇の、御言のさきぞ、きけばたふとみ。（大作の家持の歌の一節）

（勇しく目出度く舞ひ終る。下手より以前の侍兼章の首を持ちて出づ。）

侍の一　兼章の仕置を終りました。

時宗　よし、（立ち上る）これで日本國中一人の臆病者も居ぬ樣に成つた。戰は勝利ぢや。この國の亡ぶる時とは、此の國の人一人も無く絶え果てた時ぢや。其日は永久に來らぬ。（佩刀を執つて）信濃、首途の餞ぢや、やがて此の劍に映ゆる旭の影を、國の光と共に輝かせい。

（衛次の意氣。信濃守は跪いて欽々しく受取る。）

第　二　場

登場人名

渚

小太郎清澄

僧　日　蓮

同　日　朗

與　次　兵　衞

二階堂信濃守

入　道　淨　心

小　百　合

若　　　栄

他に、秋田の家來幸兵衞、出征の武士、軍兵等。

場　面

鎌倉由比ケ濱。

正面水平線。渚の沙濱は上手へ延び曲つて稻村ケ崎へ續く。其手前は大小數個の磯岩及び磯馴松の數株、下手にも同じく磯馴松、中央に一隻の漁船引き上げられたり。處々に篝火を焚く。

前場と殆ど同じ時刻。

小太郎清澄（直垂、紫の腹卷）小舟に腰を下して默然として差し俯く。其前に僧日朗念珠を手にして立つ。間。靜かなる波の音きこゆ。

日朗　（やがて促す樣に）どうぢや、まだ悟られぬか喃。

小太郎　――。

日朗　すべての迷は物の本末を誤るに依つて生ずるのぢや。此の程もお敎へ申したが人の此の世に生れ出でたる恩は、何を以つて最も尊しとせらるゝぞ。

小太郎 （顏を上げて） 云ふまでも無き事、恩は天地を以つて第一とすとの敎、父母よりも我身よりも父母を生みたる國の恩こそ尊しと存ずれ。

日朗 然らば何を以つて悶え、何を以つて迷はるゝぞ。何故その重き道に傍目もふらずに突き進まれぬぞ、我が身よりも父母よりも我家よりも猶尊き此の祖先の國に、他國侵逼の大難が迫つた今、僅かな戀のもつれに心を惱すが眞の男子か。

小太郎 ――。

日朗 眞の武士か。何時ぞや鶴ヶ岡にて逢うた時何と仰せられたぞ。此國を救ふ者は法華經の行者ばかりかと云はれたではござらぬか。其時の意氣は早や失なはれたか。

小太郎 いや、其心は今も失せ申さぬ。又、その爲めには見事我が情に打ち勝つて、一度は戀も棄て申した。なれども、我と我が心に湧き出づる泉ながら、言葉にも形にも云ひ盡せぬ不思議の思は、その世の敎に從ひ行く我等が行く手を、ハタと黑布もて遮り申した。

日朗 むゝ。

小太郎 名越に住はせらるれば、定めて聞きも及ばれつらんが、過ぎし日御僧を尋ねて空しく戻りし道すがら、世にも哀れ深き乙女の死骸を弔ひ申した。

日朗 むゝ、あのお袖御の事か。

小太郎 されば、（其時の思ひ出に浸つて） 入水せし者の髮の毛は乾く時が無いと云ふ――透き通るばかりに蒼ざめた顏に、其黑髮がまつはつた樣を見た刹那、この身とこの心とは、電光の如く今まで住馴れし國の外に走り出で申した。

日朗 あゝ、それで――。

小太郎 我等は暫し幸福でござつた。其處には二人の他に住む者もなく、天も地も皆我等のものとのみ思はれ申した。その時御身が尋ねて見えた。

日朗 態々名越まで道を求めて參られたと後で聞いて喃。

小太郎 斯くて御僧は大義名分を說き、犧牲の尊さを說いて、我等を彼の夢の國から元のこの世界に引き戻された。我等が新しき幸福は御僧の言葉で微塵に打ち碎かれた。我等が父と父とは盡きせぬ怨に爭ひ、この國には空前の大難が逼つてゐた。前の樂は反つて骨を削る苦と變り申した。

日朗 （重く） それぢや。それが解脫に入る第一の門ぢや。其苦に打ち勝つてこそ眞の大丈夫ぢや。

小太郎 なれども――。

日朗 （抑へて） 苦まれい。苦は眞の勇氣を作る源ぢや。迷は眞の道に入る道しるべぢや、彼の頑な老人が正法に歸依する事が出來たのも、あの娘が死んだ爲めぢや。

小太郎　とは云へこの心を何と致さう。小太郎父母も忘れぬ。家も忘れぬ。又國も忘れ申さぬ。さり乍ら戀も又忘れ得申さぬ。かく夜毎にこの濱へ出て警固するも、一つは寢られぬ夜の時を消さうがため――。

日朗　（眉をよせて）ほう、深うも迷はせられたな。日朗不德にして今直ちに御身をその迷より救ひ出す事の出來ぬは殘念の至りぢや。（懷中より法華經一卷を取り出して）さりながら、この一卷は釋迦牟尼世尊が、一代の力を罩めて說かれ、我師日蓮上人が命を的に弘められた法華經ぢや。日朗に御身を救ふ力は無くとも、法華經には草木をも解脫させる力がある。後刻再びお目にかゝらん時までに心靜かに讀み續けられい。

小太郎　（敬々しく受けて）はゝ、これは有難き御仰せ、まことの道を悟るを得なば――。

日朗　お身一人の幸福のみか。さらば。

（上手へ去る。）

小太郎　――。

（立つて二三歩見送る。やがて其卷物を開いて篝火の影に文字を辿る。上手より渚、被衣目深に忍び出づ。）

小太郎　（足音を聞きつけて）誰ぢや。誰ぢや。（透し見て）むゝ、女と見ゆるな。一人で此の夜更にかゝる濱邊をさ迷ふは何者ぢや。

渚　おゝ、そのお聲は小太郎樣か。（走りよる）渚でござります。

小太郎　（ハッとして）むゝ、渚殿か。この夜更に、何しに何處へ赴かるゝぞ。

渚　何處へとは無情いお言葉、忍んで來たは此方に逢ひ度いためばつかり――。

小太郎　やッ。――すりやどうして此處にゐる事を知られたぞ。

渚　命を賭けた戀の力で。

小太郎　むゝ。

渚　親と親とは不仲でも、浮世の隔ては思の焰で燒き盡すと仰有つた、其お言葉を力草に、邸を脫けて參りました。

小太郎　（何も忘れて）過分ぢや。斯くてこそ世に生れたる甲斐もあるなれ。（四方を見廻して）廣々とした濱邊ぢや。周圍に人も無い、月影も無い。消え殘る篝火と空に瞬く星とは、斯る景色には相應しうもあれ、邪魔にはならぬ。

（手を取つて船端に腰をかけさせる。靜なる波の音。間。波の音。）

渚　（聞き惚れて）物靜かなる波の私語き――。（思ひ出して）おゝ、それよ、この濱よ。忘れもせじ、この濱で初めて御身を見參らせた――。

小太郎　むゝ、そりや何時の程にか。

渚　去年の正月、この濱での流鏑馬の御催を忘れさせられたか。

小太郎　（目を輝かす）おゝ、其時は此の小太郎、比類なき働きをして、將軍家の御感に入つた。

渚　さ、其時竹垣の外の人群に、初めて覺えた心の高鳴をヂッと押へて、こなたの勝を祈つてゐた、この姿はお目には止まらざりしか。

小太郎　はて、神ならねば唯的の方にばかり氣を取られて喃。——和女を初めて見知つたは、その年の上巳の吉日、奥殿にて長卷の試合があつた折からぢや。

渚　（恥しく）や、すりやあの時の荒々しいこの身の姿を——。

小太郎　おゝ、この上も無く勇しう垣間見た。月、雪、花、雨風の朝に夕に、そゞろに思ひ浮ぶ其姿に、戀とは斯うと初めて知つた。

渚　其心は妾とても同じ事、祕めた思はいつしかに、氣に現はれて妹にまで、それと星をさゝれた時の嬉しさ恥しさ。人知れず神に願ひをかけたも戀故。

小太郎　（恍然と）思ひ思はれた戀の眞は天にも通じた。思ひもよらず父と父との仲に二人の緣が結ばれた。

渚　（悲しく）さ、さは左り乍ら、由ない事故皆仇と、消え果てた時のその悲しさ。

小太郎　（強く）いや、仇にはせぬ。二人の心に結ばれた緣は、他からは解く事は出來ぬ。

渚　すりや、倦くまでも今の思を續けて——。

小太郎　おゝ、二人は二人の國に生きるのぢや。妨げる者があれば打ち碎くまで。未來永劫一つ道を步むのぢや。

渚　あゝ。

（嬉し氣に寄り添ふ。途端小太郎の懷より以前の經卷が音たてゝ落ちる。）

渚　あッ、何やら——。（拾ひ上げて星影に透かす）

小太郎　（愕然として色を失ふ）あゝ。（奪ふ樣にして取る）法華經ぢや。日朗法師はこの身を卑怯者と嘲つた——。

渚　えッ。

小太郎　いつそ裂き棄てゝ——。（起つてその通りにせんとして躊躇ふ）いや〳〵、たとひ經文は裂き棄てゝも、此の心の矛盾は抉り去る事は出來ぬ。あゝ。

（撞と舟端に腰を下す。）

渚　（おろ〳〵しながら）こりや何とせられたぞ。その經文には何が書いてござります。

小太郎　名のために戀を棄てよと書いてあるのであらう。日朗法師はさう云はれた。（呻く樣に）國も大事ぢや。家も大事ぢや。さり乍ら此の心より和女を除いて片時も

生きてゐられようとは思はれぬ。
渚　――。
小太郎　戰に行くも、功名手柄を望むも、花々しい打死さへも望むのは、一つは身の譽のためぢや。その譽は何の爲めぢや。若き命の戀人のためにならでか――。
渚　あゝ。
小太郎　それを無下に棄てよとは、我が命を絶てよと云ふも同じ理ぢや。斯くては太刀を執る手も物憂く、戰場に急ぐ足も自然と重く覺ゆるわ。
渚　おゝ。（すり寄つて）まづその通りにこの渚も、父母も家も目のあたりには棄て兼ねまする。所詮此の世で添はれぬ縁なら、死んでの後の先の世が慕はしい。（思ひ入つて）小太郎樣、死んで下さりませ。
小太郎　おゝ、戀を棄てゝも生きられず、又戀の爲めにのみ生きられぬ二人は、死を急ぐより外に逃れる道は無い。覺悟ツ。
（刀を拔いて胸に當てる。最前より物影に窺ひし與次兵衞、その時一散に走り出てゝ其手に縋る。）
與次　お待ちなされませ。まゝ、お待ちなされませ。
渚　與次兵衞か。止めたとて止められぬこの心、只そこに見てゐてたも。
與次　さゝ、さう思召すは無理ならねど、世の喩にもある通り、死んで花實は咲きませぬ。ま、先づお待ちなされませ。
（やう〳〵二人を押し隔てる。）
與次　仔細はあれで聞きました。（しんみりとして）お袖が死んだのもそれが爲め――。生きてゐる間には老の一徹から、手荒な事もしましたが、死んだ後に殘るのは可愛さばつかり――（涙を拭うて）片羽もがれた鴛鴦の樣にしよんぼりとしたあの與作の姿を見ると、これが人の力にかなふ事なら、老先き短い命に代へて、一日でも半時でも、冥途から呼び戻して添はせてやり度いと思ひまする。
二人　――。
與次　お二人樣にも親御がある。その親御樣達は、どの樣に云ひ爭うて御座つても、このまゝ止めずに御死なせ申した後で、與次兵衞よう見逃がして呉れたとは仰有るまい。
二人　あゝ――。
與次　武士も、町人も、百姓も、鳥獸の末までも、子をいとしまぬ親はない。口にこそ出して仰有るまいが、まさかの時の親御樣達のお歎は、腸も肉もとろける樣でござりませうぞ。
二人　あゝ。
與次　喃、必ず死んで下さりますな。身延のお山からのお使で、龍口の方へ行かれたと云ふ日朗樣のお跡を尋ねて、

はからずこゝへ來合せたのも、不幸なお袖の魂が導いたのでござりませう。

小太郎　我身に引き比べての志、與次兵衞、過分ぢや。さりながら死なで赴く可き道は無い。

與次　いや〳〵何處へなりとも身を御隱しなされませ。やがて時が來ればお和睦なされる事もござりませう。よし又、お和睦の日は何時までも無うても、心の奧の奧では何處かでお二人が生きてお出でなされるのを、必ずお喜びなされませう。

二人　――。

與次　可哀やお袖は死にましたが、殘された者の心では、生きてゐるなら身の皮を剝いでも支度をして、與作は扨て措き、どの樣な處へでも、あれの望むがまゝに嫁入させたいと思ひまする。そればかりか猶其上の愚痴ながら、たとひ此の頭に手を擧げる樣な不孝者にならうとも、生きてゐてさへ吳れたなら、どの樣に――どの樣に嬉しからうにと思ひまする。

渚　（止めて）あゝ、もう――もう云やるな。只さへ悲しい此の心にその樣な事を云ひ出して、此の上泣かせてたもりやるな。

與次　はい〳〵、いやもう何度云うても返へらぬ事でござります。しかし斯うしてあれの事を云うて泣くのがせめても心の詫事ぢやと思ひまする。――淋せと云うても答へる者は松風の音ばかり、墓は言を云ひませぬ。日每にお經を唱へても、立ち迷ふは香の烟ばかり、あれの笑顏は又と見られませぬ――。

渚　あゝ。

（間。波の音。）

與次　（やゝあつて促す樣に）喃、何處へなりとも落ちて行て下され、この爺を不憫と思召すならどうぞ、生き存へて下さりませ。お袖に死なれ、今又同じ樣に渚樣にも死なれたなら、乳母も生きてはをりますまい。

小太郎　あゝ。

（彼に心を決し兼ねて、步むともなく步む。波の音に紛れて幽かなる法螺の音聞ゆ。）

小太郎　（キッと成つて）はてな――幽かに聞ゆる法螺の音は、正しく軍の首途の調ぢや。

（耳を聳つ。上手に螢火の如き松火の光現はる。やがて一つは二つとなり、二つは三つ四つ五つとなつて、續き續きて稻村ヶ崎の方へ曲りゆく。）

小太郎　むゝ、夥しき松火の光り――何事の起りしやらん。

（篝手を翳す。下手より小百合と若菜とが轉ぶ樣にして走り出づ。）

小百合　姉樣――姉樣――おゝ、此處にか。（縋りつく）

渚　（支へて）おゝ、小百合か。何事が起りしぞ。

小百合　何事とはなう、これ姉樣――何事とは喃――。（口籠りて云はれぬ科）

渚　えゝ、氣遣はしや、若菜そなた代つて樣子を語りや。

若菜　あい。申しお喜びなされませ。（小太郎を見て）あなたとの御緣はかなひました。

二人　えッ。

與次　すりや御和睦が調うたか。

若菜　おゝ、お前は爺樣――。さいな。雨降つて地固るとやら、火急のお召しで評定所へ上られたが、今睦じう肩を並べてお歸り遊ばしました。

渚　すりや。それまでに御心がとけ合うたか。小太郎樣ッ。

小太郎　おゝ。

渚　小百合。

小百合　あい。

（皆々喜び合ふ。法螺の音、幽かなる人馬の物音。上手より日朗急ぎ出づ。）

日朗　小太郎殿、蒙古はいよ／＼押し寄せ申した。祖師日蓮上人は身延の山を下られた。

與次　え、すりや最早お逢ひなされましたか。

日朗　おゝ、出陣の人々を見送る爲めに今こゝへお出でなされう。小太郎殿、覺悟の程は――。

（と尋ねる折りしも下手より小太郎の家來幸兵衞（胴丸小手、脛當）走り出づ。）

幸兵衞　若殿、御出陣でござりまするぞ。

小太郎　むゝ。

幸兵衞　總大將は二階堂信濃守樣、お前樣は父御に代つて其副將でござります。

小太郎　何ッ、此の身が副將となッ。（欣然として）弓矢取る身の本懷ぢや。（日朗に）御坊、小太郎名譽も得申した。戀も得た。殘るは國のために棄つる命ばかりぢや。

日朗　おゝ。

小太郎　いで出陣の用意せん。渚殿、さらばッ。（云ひ棄てゝ下手へ走り去る）

渚　あもし、（追ひ縋らんとして能はず）あゝ、もう行かれた。――長い思が今かなうて、嬉しいと思うたのも束の間――戀の運命はそれ程までに儚いか。それ程までつれないか。（決心して）おゝ。

與次　（立ち塞つて）えゝ、何處へおいでなされまするぞ。

渚　何處へとは――戀の運命に反抗ふのぢや。

（押し退けて下手へ去る。與次兵衞も其後を追うて行く。入れ違うて花道の方より二階堂信濃守（澤瀉縅の鎧引立烏帽子、冑は態と冠らず脊に負ふ）弓矢を携へ栗毛の駒の太くたくましきに乘つて出づ。其後に入道

淨心（直垂、紺の腹巻）武者軍兵等出づ。上手より日蓮上人（六十歳）出づ。この處の鎧武者及び軍兵は出來得る限り多くある可し。）

日蓮（莊重に）打手の大將信濃守は何處に候ぞ。法華經の行者日蓮餞別の言葉を傳へに參つた。

信濃 はゝッ。（威に打たれて馬より下る）こは有難き御志、戰場に赴くからは命は無き者とこそ存ずれ。後世の導に聽聞致すでござらう。

（坐す。上手には日朗、小百合、若菜等、下手には武者、軍兵等粛々と居並ぶ。）

信濃（容を正して）いざ、何なりとも仰せられい。

日蓮 おう、ようぞ申された。その御身の今の覺悟で今度の勝利は早や見えた。さりながら、我等が望む勝利は、今蒙古に打ち勝つのみでなく、幾萬年の後々までも、世界のあらゆる國々に打ち勝つ久遠の勝利ぢや。

信濃 おゝ。

日蓮 それ故に改めてお問ひ申す。御身達が今筑紫へ赴く其覺悟はな。

信濃（キッと見て）云んでも無い事。尊き君の爲め、祖先の國を守る爲め。

日蓮 よし、然らばこの國の盡す可き務はな。

信濃 や、それは――。

日蓮 正しき道を世界に廣めるのぢや。此の日の本の國を建つるに當つて、『正しき道を廣めん』と仰せられた皇大神の大御心を繼ぎ奉るのぢや。

信濃 ――。

日蓮 我が法華經の力で諸々の惡、穢、不義不德を此の世界から滅し盡すのぢや。末法末世の濁り江の、塗炭に苦しむ人々を救ふのぢや。さればこそ釋尊も二千年の前に於て、東海の島國に正法の國起らんと仰せ殘された。

信濃 ――。

日蓮（儼然と）時は今ぢや。内に諸々の邪法を棄て、外に此の國を犯す者を斬り從へ、此の日の本をして三千大世界の淨土の中心とするのは今ぢや。

皆々 ――。

日蓮 斯くてこそ國のために命を塵芥と擲つ甲斐はあれ。法華經を信ぜよ、日蓮を信ぜよ。日蓮は日本の大忠臣ぢや。

信濃 はゝッ。驚き入つたる御訓戒、信濃初めて心より戰に赴く道を知り申した。

日蓮 よし、その悟が鐵の楯ぢや。（七字の題目を記したる曼陀羅を與へる）妙法蓮華の題目の向ふ處草木と雖も靡かぬはない。これを陣頭に立てゝ押し進まば、戰はずして敵は亡びん。

信濃　（手に受けて）はゝッ、重々の御芳志御禮は重ねて凱陣の折。時移れば御免候らへ。誰かある馬引けッ。

軍兵　はゝッ。

（信濃守馬に跨る。）

小百合　（驅け寄つて鐙に縋る）父様（とゝさま）――。

信濃　小百合か。（優しく）堅固で暮せよ。我が失き跡は入道殿を父とも思ひ、母への孝養をおこたるまいぞ。

小百合　あい。

信濃　淨心殿、留守はよしなに。

淨心　おゝ、確と頼まれ申した。陣中小太郎が事は幾重にも。

信濃　心得申した。方々、さらばッ。

（駒を早めて上手へ去る。武者共殘らず續く。）

日蓮　はて、見事な武者振ぢや。北條殿もよい家來を持たれた喃。（空を仰いで）むゝ東が白んだ。やがて旭（ひ）も出づるであらう。（人々を見て）殘つた者は殘つた務を盡さねばならぬ。我も敵國調伏（てうぶく）の祈禱（いのり）を捧げん。日朗參れ。

日朗　はッ。

（皆々靜かに別れ行かんとす。と、亂れたる駒の蹄の音聞ゆ。）

日蓮　や。――。

（皆々立ち止る。下手より連錢葦毛の駒に貝鞍置かせて、緋縅の鎧美々しく装うたる小太郎急ぎ出づ。其轡に縋つて渚。後ろ鉢巻に玉襷、裾高々と取り上げて、右手に長卷を持つて出づ。後より與次兵衛。）

小太郎　卑怯ぞ。未練ぞ。そこ放されい。

渚　いや／＼、何處までも御供申す。

小太郎　はて何しに――。

與次　あこれ、危い／＼。

（爭ひ乍ら人々の前まで來る。）

淨心　（キッと睨んで）小太郎、何事ぢや。

小太郎　おゝ、父上か。（駒を止める）

淨心　渚殿ッ。

渚　あい。（ハッとせしが、哀願する樣に）止めずにやつて下さりませ。

淨心　むゝ――。

小太郎　（靜かに）喃、渚殿、その心根は察すれども、陣中へは女はかなはぬ。二人の願は思ふまゝにかなうた今、何の思ひ殘す事がござらうぞ。小太郎は敵に潔う命を投げ出す事が出來るのぢや。

渚　さ、それは男の事、男は戀の礎（いしずゑ）の上に名譽（ほまれ）を建つる事も出來よう。とは云へ女は戀が命ぢや。戀の上には戀は無い。戰となれば生死も知られず、又逢ふ時は何時の日か。そのいつ知れぬ日の果てを一人で待てと仰有るか。

小太郎　むゝ――。
渚　日頃習ひ覺えた長巻の一手は今日のため、昔の巴板額ばかりが勇しい女か。馬の轡をとつて何處までものお供を願ふ心を無理ぢやと思召すか。
小太郎　むゝ。
渚　さあ――。
日蓮　（軍兵共が棄て行きたる松火を執りて渚の前に進みゆく）渚殿とやら、此の松火は何の故に燃ゆるぞ。
渚　えツ。（驚いて目を見張る）
日蓮　な、夜の暗を照らすためぢや。
渚　あゝ。
日蓮　今度の戰は何のためぢや。國の光輝を輝す戰ぢや。
渚　おゝ。
日蓮　夜の暗を照らす爲めには、此の松火はやがて影も形も燃えて無くなるのぢや、此の國の光輝を增すためには、戰に死ぬ者も、亦斷ち難き愛着の絆を斷つ尊い犧牲もいるのぢや。
渚　あゝ。
日蓮　（松火を消して）火を消せば松火は無事に殘らう。その代りに光は無い。この樣な醜い木ぢや。しかも幾百年も殘るのではない。やがて無用に雨風に洒されて朽ち果てるのぢや。人間の命とても其通り、百年無用に生きるよりは、只一日志す道に生きる方が遙に尊い。
渚　――。
日蓮　（篝火にて再び松火を點じ）松火は形を失うても光と成つて輝く。人は死すれども國の名譽と成つて殘る。今若し和女が足手纏に成つて、立てらるゝ可き功も立てられざる其時は、宮に止めた和女ばかりの耻辱か。
渚　や。
日蓮　和女の貞女はそれで立つか。行くも止るも心は一つ。靈は千里も通ふ。此處に止つてゐて、遙かに誠を運ぶ事の出來ぬぢやまで弱い心か。
渚　おゝ。（忙しく鉢卷を取りすてゝ）止まりませう。渚はこゝに止まりませう。（懷劍でプッツリと黑髮を斷つ）しかし、心は何處までも、片時お傍をはなれずにお供を致しまする。
（黑髮を差し出す。）
小太郎　（受取つて）滿足ぢや。何處までも供ひ申すぞ。（確と懷に入れて、更に以前の法華經を取り出し）日朗法師より賜つた――暫し肌につけたれば我が片身ぞとも思はれよ。武運拙く打死せしと聞き給はゞ、其經を開きて回向の程を賴み參らす――。
（流石に聲曇る。）
渚　おゝ――。

（佬かず見上げる。）

小太郎　（長く見下して後、凛然として）いや、勝利だや。何の蒙古の戦なんぞに打死す可き。やがて吉左右御待ちあれ、さらばッ。

（駒を早めて上手へ去る。）

渚　おゝ。

（思はず二三歩その方へ引かれる。與次兵衛が後より支へる。旭出づ。夥しき鳩の群下手より上手へ飛び行く。）

日蓮　おゝ、夥しき鳩の群の西へ飛び行くは、扨は八幡殿も軍に出られたか。旭も終に昇つたわ。（荘厳に）あはれ今此旭の照す如く、東より西の國々へ遍く正法の道を傳へん。一天四海皆歸妙法——。

渚　（上手へ伸び上つて）おゝ、朝霧の晴れ間にも最うお姿は見えぬ。——行かせられい。行かせられい、世界の果てまでも行かせられい。渚はそなたを大事に思ふのぢや。そなたを生んだこの國を大事に思ふのぢや。

（高く強く叫ぶ。）

日蓮　南無妙法蓮華經——。

（巖の如くに立つ。人々は靜かに跪く。）

——幕——

眞 如（一幕）

人物

後藤源治郎（十九歳）浪人
磯貝數馬（十九歳）浪人
お節（四十位）數馬の母
曾平太（三十位）源治郎の若黨
お靜（十七歳）庄屋の娘、數馬の戀人

時

江戸時代の初期、晩秋

處

駿州大宮の傍

舞臺

磯貝數馬の浪宅

藁葺の百姓家を寺子屋風に造作せる體。小やかなれど居心地よく造る。前は庭にて上手の隅に自然生に近き菊の花壇を作る。下手は粗末な竹垣。柴折門の傍には大きな柿の木があつて、赤い實をつけてゐる。門の外は往還。家の裏は一體に黄葉した雜木林。遠く晴れた空に不二ケ根を仰ぐ。小春日の風無き午後。母のお節柿の木へ立てかけた張板の布を剝してゐる。質素ながら、何處となく昔床しい氣品が溢れてゐる。數馬は花鋏を持つて上手で菊を切つてゐる。細前髮の美男子。

數馬（好き程に切つて）母上、これ程でよろしう御座りますか。

お節（布を剝し終へてその方へ來る）おゝ、それでよう御座ります。御苦勞でござりました。（手に受けて）斯うして色々と集めて見まするると、又一段と見事ぢや。今日御命日の父上樣も、さぞかしお喜びなされませう。

數馬（或敬虔な心持で）私はまだやう〳〵八つか九つで、その頃の事は判然と覺えて居りませぬが、父上はその樣に菊なぞがお好きで御座りましたか。

お節（ニコヤかに）菊ばかりではありませぬ。花の類は總じてお好きでありました。氣高いお生れつきであつたので――。

數馬（益々敬虔に）さうでございましたか。さう承ると、私も何だかその樣な事も思ひ出される樣な氣も致します。來年はもつと澤山に造りませう。お靜殿も野菊を澤山折つて來ると申して居りました。

お節　お靜どのが。（一寸ある表情を見せて直ぐに押し隱

す）それは優しう氣のついた事、父上も一入と思召されませう。父御の重兵衛殿を初め、お靜殿にも、何かと常常お世話になる上、この中からは又お前の羽織の仕立を頼んで居りまする。今にもこれへ見えたなら、たんとお禮を云はねばなりますまい。（下手を見て呟く樣に）ほんによい娘ぢや。器量と云ひ氣だてと云ひ、百石取の侍の嫁にしても恥しうはあるまい。

數馬　え。

お節　（ハッとして）いえ、あの――私は奥でお墓參の支度をしまする程に、お靜どのが見えたならよい樣にもてなして置いて下され。

（菊を手水鉢にさして、布を持つて靜かに奥へ這入る。數馬は凝つと見送つて、先刻の母の言葉を味ふ樣に竹緣の上に腰を下す。そして、其處に置いてあつた物語の草紙を取上げて、見るでも無く弄る。下手よりお靜少し悄れた樣子で出て來る。鄙びてはゐるが、美しい初々しい娘。仕立上りの羽織を包んだ風呂敷包と野菊の花とを持つ。）

お靜　（柴折い外て）數馬樣、參りました。

數馬　お靜殿か。（起つ）お入りなされ。今日は何故その樣な處に立つてゐるのぢや。

お靜　（淋しく）でも――何とやら恥しうて――。

數馬　恥しい？（その方へ行く。小聲で）では父樣にあの事を云うたのか。

お靜　あい。そして、昨夕小母樣がお風呂にお出でなされた時、父さんが奥の間へ呼んで話しました。

數馬　（心急く）むゝ、そして母上は何と仰せなされた。

お靜　（ホロリとして）何ぞと云うて――私やお目鏡に叶はなんだのでござります。

數馬　えツ、そりや――。

お靜　キッパリと斷られたのでござります。たとひ御浪人なされても元は歷々のお侍。一つ里に住み馴れたとて、同じ樣に思うたのが私の思ひ違ひでござんした。私や、私や矢張行儀知らずの田舍者でござりました。（聲を忍びて泣く）

數馬　（女の言葉を信ぜぬ樣に）えゝ、何を云ふのやら埒も無い。行儀作法は小さい時から我娘の樣にしつけてある。今も今、この俺に聞えよがしに、百石取の嫁にしても恥しうない器量ぢやと仰せられた。それはそなたの聞間違ひぢや。

お靜　いえ〳〵、間違ひではござりませぬ。二人の心を打割つて頼んだ時、父樣は叱りもせずに此の上もなう喜んで、かま〳〵と細々と頼んで下されたに、こちの小母樣は、仔細あつて數馬には嫁は持たせぬと、キッパリと仰

有つたとやら——。

數馬　むゝ。（眉を寄せる）

お靜　（堪へ切れぬ樣に泣く音を立てる）な、何んの仔細が外にあらう。わ、私や小母樣に嫌はれたのぢや。

數馬　（宥めて）靜かに、靜かに。併し、その話は俺にはどうも腑に落ちぬ。その樣にお氣に召さぬ和女を今の樣に云はれる筈はない。これまでの樣に可愛がられる筈もない。それに元の侍に歸參するまで待てと云はれるのなら、その樣な返事もあらうに、嫁は持たせぬと一筋に云ひ切られたとは——。（深く考へる。ある疑惑が雲の樣に湧いて來る。やがて決心する）よいわ、徒らに考へるよりその仔細と云ふのを母上に問うて見よう。その上は又その上の事、それまでは必ず力を落さぬがよい。

（しめし合せて椽の方へ來る。お節が奥から衣服を着替へて出る。お靜を見て微笑む。）

お節　お靜殿、ようお出でなされました。

お靜　あい。（悲しげに會釋する）やう〳〵に縫ひ上りました。

お節　（いぢらしいと云ふ表情）おゝ、何時ながらお早い事でござりました。お禮は又重ねて。（數馬に）それでは留守を頼みますぞや。

（出て行かうとする。數馬思はずその袖を控へる。）

數馬　母上。

お節　（ハッとして）え。

數馬　お尋ね申したい事がござります。暫く下にゐて下さりませ。（座敷へ坐らせ、自分も上へ上つて下手に兩手を突く）何一つ隔てのない筈の親子の仲に、他人の口を借りて昨夕の樣な事を申しました卑怯と不信實とは改めてお詫び申します。併し、何故この數馬には女房が持たれぬのでござります。私の身勝手からかは知れませぬが、お靜どのがお氣に入らぬとは、どうしても考へられませぬ。いや、私より母上の方が先に、それを望んでゐられた樣にさへ思ひます。母上はよく幼い二人を竝べて、斯うした仲のよい樣を何時までも眺めてゐられるなら、この上の幸福はないと口ぐせの樣に仰有つてゞ御座りました。そして、それがいつ知らず二人の心の中に成長して、今その望通りになる時が來たのに、何故今更の樣にそれを拒まうとなさるのです。あの樣に仰有つたのは、みんなうはべ許りの噓でござりましたか。

お節　（答へず。苦悶の表情）

數馬　（疊みかけて）いゝや噓ではありませぬ。それが噓でない事は數馬はよく知つて居りまする。それなのに、その昔からの望を無理に心の中で押潰して、二人の仲を許すまいとなさるのは、どうした理由からでござります。

どう云ふ事情が俄かにさうさせる樣に成つたのです。それとも――(凝視して) 母上、それとも長い祕密を持つてお出でなされましたか。

お節　(急所を突かれた樣に)祕密――まあ、何で私が――。

數馬　(顏色を窺つて。) いや〱、さうです。その顏色が貴女の心を悉皆語つてゐます。さもなければ昨夕あの樣なむごい事を云はれる筈がござりませぬ。(思ひ詰めて) 母上、父上は何でお亡くなりなされたのでござります。

お節　(意外の表情) え、それは――

數馬　(迫る樣に) どの樣な御病氣でござりました。(小聲になり) 若しや恐しい天刑病ではござりませぬか。手も足も節々から腐れて落ちると云ふ、癩病ではござりませなんだか。

お節　まあ。(意外の問に驚く。そしてやゝ安心する) 何ぞと思へばその樣な事――何で父上がその樣な忌しい血統でありませう。それはお靜どのゝ父樣もよう御存じの筈ぢや。

數馬　では、何故御浪人なされたのですか。浪人なされる樣な惡人だつたのでござりますか。

お節　(嶮しい顏で) 數馬、お前は――(罵らうとして急に感情を消す) そなたは惡人計りが浪人する者と思ひまするか。水清ければ魚住まずと云ふ喩もある。

數馬　でも母上は、いつでも父上御在世の時の事や、故鄕の話なぞを聞くと、何となう嫌はしい樣な樣子をなされます。それに又それ程淸廉な人であつたなら、たとひ國遠なされても、風を慕うて一人や二人は便をよこす人もありませうし、參覲の道すがらそつと立寄つて行く人もありさうに思ひます。それが、私が物心ついてから、一度も誰一人尋ねて來る者もなかつたのはどうした事でござりませう。私は、今までそれが淋しいより不思議でならなかつたのでござりますが、それも今思ひ合はせますと、人に明かされない業病を恥ぢてか、それとも思ひもそめぬ大罪でも犯して――。

お節　(激しく止める) これ、又してもその樣な事――。かりそめにもせよ子として親を譏つて不孝とは思ひませぬか。

數馬　では私は今の事をどう考へればよいのです。父上に纏る災でもなく、又我々も知らぬ事なら何故二人を許して下さりませぬ。

お節　――。

數馬　それとも、やつぱりお靜どのが心に叶ひませぬか。さ、それを敎へて下さりませ。その理由を明して下さりませ。

お節　(思ひ入つて) 明しませう。併しそれには自な機

がある。その時が來れば問はれずとも明かしもし、又晴れて添はせられる事もあらう。それまでは何事も知らぬ體で今までの樣に兄妹と思うて仲よく暮して下され。

數馬　兄妹と思うて――。

お節　それが只つた一つの母の志ぢや。若しその垣を越したなら、つい足下から、上る事の出來ぬ涙の淵が口を開かうも知れませぬ。

（戒める樣に云つて、お靜から菊を受取つて柴折戸の外へ去る。二人は起つて見送る。やがてお靜は數馬に縋る。）

お靜　數馬樣。

數馬　お靜どの。

お靜　二人は、二人はどうなるのでござりませう。越すなと云はれた垣も、とうの昔に越してゐるに。

數馬　さあ。（腕を組む）俺にも判らぬ。只その時の來るのを待つより外はあるまい。

お靜　（詰寄る）では、その時になつて所詮添はれぬと極つたら、お前は私を棄てる心で御座んすか。

數馬　思ひもよらぬ。俺はどの樣な事があらうと和女を見棄てはせぬ。（凝と考へて決心する）さうぢや、見棄てはせぬ。奪はれもせぬ。母上の祕密は母上一人の事、俺は俺ぢや。今思ひがけなさに狼狽へて、何かと母上に問ひ迫つたのが恥しうなつた。しかし、もうこの上は搖ぎはせぬ。和女も私の心の勇氣を信じてゐて呉れ。そして、何もかも私に委せて呉れ。喃、判つたか。

お靜　あい、それでも――。

數馬　まだ云ふのか。さう覺悟すれば何も云ふ事はあるまい。（縁へ呼んで）さ、こゝへ來やれ。母上のお歸りまでは、何の邪魔もあるまい。（肩を抱く）

お靜　あい。（眩しげに傍を向いて草紙を見る）その本は――昨日の繪草紙でござりますか。

數馬　さうぢや。美しい喃。今日はいよ／＼千鳥と三左衞門とが廻りあふのぢや。

（二人肩を並べて餘念なく草紙を見入る。時々顏を見合はす。樂しげに笑ふ。平和な小鳥の聲。間。やがて向ふより後藤源治郎と若黨の倉平太とが出て來る。二人共旅姿、それも最う可成長旅を續けたと見えて、笠、衣服、手甲、脚絆など、皆黃色な塵にまみれて傷々しげに見える。殊に源治郎は病苦に惱む體で、數馬に劣らぬ美しい顏も蒼ざめて吐く息も苦しさうである。時時立停つて下腹を押へる。倉平太はそれを優しう介抱する。しかし餘り度重なると、苦々しげに勵ます。）

倉平太　さ、確りなされませ。貴郎も後藤源左衞門樣の御子息ではござりませぬか。これしきの事に弱つてどうな

されます。

源治郎　(怒る樣に)　ぢやと云うて、如何な勇士も病には勝てぬわい。

倉平太　しかし心の持樣一つで少しはどうにかなるものでございます。その樣子では、今の今仇に出逢うたら何となされます。

源治郎　その時は自然と其時の心になれよう。しかし今は(腹を押へる)あいたゝゝゝゝ。これ、咽が燒ける樣ぢや。どこぞそこらに湯でも茶でも貰ふ家はあるまいか。

倉平太　(數馬の家を見て)あゝ、丁度一軒ございます。ではあれへ行て湯を貰うてお藥を差上げませう。さ、少しの間我慢なされませ。

(源治郎を肩にかけて本舞臺へ來て垣の外から呼びかける。)

倉平太　もし／＼、ちと御無心でございます。これは旅の者でございまするが、伴が俄の食當りで難澁致して居りまする。どうぞご緣の端なりとお貸し下さりまする譯には參りますまいか。

數馬　何、俄病ぢやと――。(起つて來る源治郎の樣子を見て直ぐ同情する)それはさぞお困りで御座りませう。むさくるしけれど夜の物の一二枚はございます。ゆつくりとお休みなされませ。(戸を明けてやる)

倉平太　はい／＼、有難うございます。

(倉平太は源治郎を伴うて家へ這入る。お靜は心得て奥から夜具を出して來る。數馬は草鞋の紐を解いてやる。源治郎はそれを見て無言で涙ぐんでゐる。お靜は更に湯を汲んで來る。倉平夫は印籠の中から道中藥を出して飲ませる。源治郎は暫く落付いた樣に見えたが、直ぐに又苦しみ出す。倉平太は當惑する。)

倉平太　若し、失禮ながらお家に何ぞお藥の用意はござりますまいか。

數馬　(これも當惑して)　さあ、富山の置藥の外に藥と云うても御座りませぬ。大宮までは十四五丁の道程、一走り行て買うて進せませうか。(起つ)

倉平太　(止めて)　いや／＼それは勿體ない。十四五丁ならつい私が一走り行て參じまする。お手數ながらその間の處、どうぞ宜しう御願ひ申しまする。

數馬　よろしうござる。諸事御引受申した。

倉平太　御免。

(二人に會釋して一散に下手奥へ走り去る。)

數馬　(傷しげに呟く)　食あたりさうな。

お靜　お可哀想に、丁度お前樣と同じ年頃ぢや。一倍いとしうござんす。

數馬　見れば遊山の旅でもなささうな。どうして街道筋で

もないこの片田舍へ來たのであらう。

（介抱しながら囁き合ふ、源治郎又一層と苦しみ出す。）

お靜　どうせう、どうしませう。

數馬　あ、こりや又ひどうなつた。

（オロ／＼する。お節下手より歸り來る。この體を見て急いで駈け上る。）

お節　數馬、こりやどうしたお人ぢや。

數馬　旅の侍でござります。水あたりらしい故休ませて呉れと頼まれたので、家へ入れたらこの通りでござります。若黨が今藥を買ひに行てをりまする。

お節　それはまあよい功德をしました。そしてあの、家にある熊の胃もさし上げましたか。

數馬　熊の胃――いゝえ。（不審氣に）その樣なものが貯へてあるのでござりますか。

お節　ほんに、お前にはつい云ひ忘れてゐましたが、一昨日大澤の治郎作殿に分けて貰ひました。萬病に利く尊い藥ぢやが、とりわけて熱と腹痛とには卽座に驗が見える。

（起つて押入の中から竹の皮包に入つた熊の胃を持つて來る。お靜は心得て水を汲んで來る。お節は源治郎の口を割つて藥を含ませ、水を與へる。源治郎は夢中に飮み下す。暫く靜かな間。病苦が次第に遠退いて行く樣子。）

お節　（顏を覗きこんで）如何でござります。少しは胸が開きましたか。

源治郎　（漸く口が利けかける。そして刎起き樣として悶える）あ、有難うござります。再生の御厚恩、い、一生忘却仕りませぬ。

お節　（抑へて）あれ、お靜かになされませ。何のお禮に及びませう。早やう落付けたのはお前樣の運が强かつたのでござります。今に御家來衆が戻られたら、緩くりと相談して今宵はこゝに一宿して、ゆる／＼御養生なされませ。

源治郎　有難うござります。併し、それでは餘りお言葉に甘え過ぎます。（やう／＼起き上る）この分なれば日暮頃までには次の宿まで踏み出せませう。

數馬　併し、無理はなされぬがよい。前申した通り、風も渡る、月も渡るあばら家なれど、お構ひなく今宵はこゝで御休みなされい。

お靜　吊瓶落しの秋の日は、もう長うも御座りますまい。

源治郎　（感激して泣く）御芳志、千萬忝う存じます。この樣に尾羽打枯しては、客商賣の旅籠屋でも快うはもてなして呉れませぬに、見ず知らずの身に給つた過分の御志、改めてお禮を申しまする。

お節　なんの〳〵、世の中はいつも相見互見、それに今日は志す佛の命日、御介抱させて戴くのも佛への供養でござります。お靜どの。(とお靜に奥へ床を取る樣に敎へて)それにしても其處は端近、奥へ行てお休みなされませ。

源治郎　(感謝を續けて)いや〳〵、それでは冥加に盡きます。倖に痛も去つて、もう旅の勞が殘つてゐる計りでござります故、こゝで温い日を浴びながら、何かとお物語いたしたう存じます。

お節　それでは御自儘になされませ。お靜どのはその仕立物を。

(お靜に仕立物を持たせて奥へ去る。)

數馬　(顏色を見て)併し、本當にもうよろしう御座りますか。

源治郎　はい、もう何とも御座りませぬ。長の道中で、體中が勞れ切つてゐますので、ほんの僅かの事が思はぬ障となつたのでござりませう。お恥しい事でござりました。

數馬　いや〳〵、誰にしても病には勝てませぬ。併し、何御用でいづれからいづれへお越しなされます。

源治郎　はい、それは——。(云ひ差して思はず口を噤む。そして心苦しい樣にうつむく)

數馬　(恥ぢて)いや、これは心にもない事をお尋ね申しました。まだお逢ひ申してから半時も經ちませぬのに、この樣な問は愼まねばならぬ事でござりました。

源治郎　(手を振つて)いや〳〵、さうでは御座りませぬ。再生の御恩に比べても、束の間でも云ひ澁つたのが恥しうござります。實は——。

數馬　(强ひて止めて)いや、伺ひますまい。それを伺ふ程の用意も出來て居りませぬ。しかしこの樣な山里に住み侘びてゐますと、つい人懷しう思ふ事が多いのでござります。誰にでも問ひかけ、話しかけて見たい樣な氣が致します。殊にこの樣な長閑な小春日和には、心の合うた同じ年頃の友達と、一日倦かずに語り暮したい樣に思ひます。

源治郎　私もその樣な氣がしてゐます。或る願のために國を出てから、もう四五年になりますが、その間絶えずその事計りに心を注いで、只それからそれへと遽しう移り步く計りで、名高い名所や繁華な都も、上の空で見すごして來ました。今でも其願を成就させようとする心は張詰めてゐますけれど、矢張、この樣な日には何もかも忘れて、靜かな日を浴びて無心に暮したうござります。

數馬　(喜ぶ)さうなされい、さうなされい。私も何となう昔の友達に廻り合うた樣な氣になりました。今日初め

て逢うた人ではなく、遠い遠い昔にどつかで親しみ合うた仲の樣な心地がします。（空を仰いで） 見られい、空には白い雲の影さへなく、不二があの樣に晴れ渡つて居りまする。

源治郎 （向ふを仰ぐ） ほんに、よう晴れてをりまする。この駿河の國に差しかゝるとから、毎日の樣に眺めて來ましたが、今日の樣な晴れやかな姿はつひぞ見ませなんだ。氣高い姿でござります喃。

數馬 十幾年見馴れても、やつぱり見倦かぬ眺めでござります。

（二人肩を並べて不二を仰ぐ。間。やがて倉平太が汗みどろになつて戻つて來る。）

倉平太 もし、只今戻りました。（源治郎を見て） おや、最うおよろしいので御座りますか。

源治郎 むゝ、喜んで吳れ。こゝの御一家の御親切で、もうこの樣に快くなつた。

倉平太 （安心する） さうで御座りますか。それは何よりでござりました。實は向ふの宿にも藥らしい藥はなく、一つ二つ買ふには買ひましたが、どうしようかと案じながら戻りました。（數馬に） 有難うござります。有難うござります。（源治郎に） ではそろ／＼と參りませうか。まだ日も高う御座りますれば、一里や二里は先へ行かれませう。

源治郎 （物憂く） いや、今日は最う行くまい。行くにしてもせめて一時程は斯うして休んで行きたい。

倉平太 これはしたり、何と云ふ事を仰有います。私共が旅をするのは、遊山や物見の爲めではござりませぬ。病が治れば片時も一つ處にはゐられますまい。じたいお前樣は――。（何か云ひつのらうとする）

源治郎 （怒つた樣に遮る） 最うよい。行かう。行けばそれでよいのぢや。その上の事は云ふまいぞ。（數馬に） 聞かるゝ通りの始末故、折角ながらこれにてお暇申します。

數馬 （名殘惜し氣に） では最うお行きなさるか。折角半日ほど樂しう暮さうと思うたに、それも仇でござりましたな。（奧へ向つて呼ぶ） 母上、々々、客人はもう行かれるさうでござります。

お節 （立ち出でゝ）それは餘り急な事、諄う申す樣なれど、せめて今宵許りはお宿りなされたら――（云ひつゝ倉平太を見る。倉平太も見る。視線が合ふと二人ともハッと驚く） おやッ。

倉平太 おゝ、お前樣はッ。（イキナリ走つて源治郎の手を執つて表へ引き出す） さ、御用意なされませ、御用意なされませ。仇はとう／＼見つけましたぞ。

源治郎 何、仇が見えたッ、何處にぢや。（身構へする）

曾平太　（これも身拵へしつゝ）何處にでも御座りませぬ、この家の中で御座ります。

源治郎　（驚く）えッ、この家にッ。

曾平太　さうで御座ります。（化石した樣に一方を凝視してゐるお節の方に詰寄る）もし、磯貝の御新造樣、今になつてよも見知らぬとは云はれまい。後藤の若黨曾平太が若旦那のお供をして參つた。尋常に兵馬奴をこれへお出しなされい。（源治郎に）若旦那、裏口へお氣をお付けなされませ。

源治郎　承知した。（本能的に走つて行かうとする）

數馬　（事件の急激の變化に暫く放心してゐたが、やう／＼我に歸る）待たれい。さりとては不思議な事を聞くものぢや。餘人はともあれ、父上に限つてその樣な事があつてならうか。人違ひに相違ない。

曾平太　云ふな、云ふな、この期に及んで人違ひなぞとは卑怯千萬。今より十二年前、筑前福岡の松並木で、出世爭ひに後れたを遺恨に思ひ、これなる源治郎樣の御父御(おんちゝご)、源右衞門樣を暗打ちにして立退いたは、誰あつて知らぬ者もない事ぢや。脱れぬ事に云ひ爭うて卑怯の名を穢さうより尋常の勝負をお進めなされ。

數馬　すりやどうあつても父上(ちゝうへ)を——。

曾平太　云んでもない事。但しは證據の片袖、紋所は丸に下り藤、つい目の前に持ち出さうか。

數馬　むゝ。（激しき苦悶。母の前に跪いて訴へる樣に叫ぶ）母上、そりや眞實でござりまするか。今奴(やつ)が申したは眞でござりますか。

お節　（幽かに）は、はい——。

數馬　（我耳を疑ふ樣に）や、はいと仰せられたな。では矢張り——さうであつたのか。（激しい幻滅を感じてよろよろと後へ倒れかゝる。先刻(さきほど)から覗いてゐたお靜は驅け寄つて支へる）母上、怨めしうござります。そ、その樣な惡人を、何故世にも類の無い氣高い人ぢやと私の心に植ゑつけようとなされましたぞ。

お節　（苦しげに）その怨は尤もぢや。併し何一つ穢を知らぬ幼子(をさなご)の耳に、その樣な忌(いまは)しい話を聞かせ樣とする母親は一人もあるまい。扨て五年經ち七年經つて、物心ついてからは猶更ぢや。所詮何時かは云はで叶はぬ事と覺悟してゐながら、一日送りに日を延したのも、せめて其間際まで其方(そなた)の心を曇らせたう無かつた許りぢや。あれこれと、今まで其方(そなた)に敎へた父上の事は、唯その樣な父上を持たせたいと思うた、私の儚い願ひであつた。

數馬　さりとて今の今まで父上こそ眞の武士と、心に誇つてゐた數馬の怨は薄らぎませぬ。お靜どのにも恥しい。母上——。

曾平太（遮る）えゝ、その樣な詮議は措いて吳れ。どうあらうとこつちの知つた事では無い。早やう兵馬奴をこれへ出せ。

數馬（煽られた樣に）ハ、、、、打たるれば打て。父上は最うこの世には御座らぬぞ。

二人 やッ。

數馬 父上は十年前にお果てなされた。卽ち今日が御命日ぢや。

曾平太 すりやあの兵馬奴は病うて失せたかッ。

（思はず張詰めた氣がゆるんで後へ撞となる。源治郎もホッとする。併し、それは曾平太と違つて、兵馬の死によつて數馬と仇同志で無くなつたのを喜ぶ心が强くその內心を支配してゐる。曾平太は足ずりして悔む。）

曾平太 まだやう／＼十五の遊び盛りの若旦那を無理に他國へ連れ出し、下郎の身であらう事か主人顏にそこここと引廻し、一日は愚か半時の骨休もおさせ申さなんだのも、何でも早やう仇打を仕終せ元の知行にお直し申さうと思うた爲め計であつたに、さりとては神佛も聞えぬ。同じ罪のある身なら何故今日まで生けおいて、孝行の子の無念を霽らさせようとはなされませぬぞ。後藤の家も半知のまゝ、源左衞門樣の修羅の妄執も何時晴れる事もあるまい。さりとては殘念ぢや。（拳を叩いて歎く）

お節（慰める樣に）曾平太どの、その悔みは尤もながら、兵馬には子がござります。その子の數馬は父に代つて勝負せまいものでも御座りますまい。

曾平太 えッ、何と仰有ります。（數馬、源治郎驚く。曾平太は打と膝を打つ）成る程さうぢや。父親が亡くなれば子を打つまでぢや。（源治郎に）さ、勝負なされませ。太刀先も丁度似合ぢや。

源治郎（拒む）いや、そりやなるまい。仇は礒貝兵馬一人、數馬殿に何の係り合ひがあらうか。（親しみを持つて數馬に）天晴御身が兵馬なら、目釘の續く限り戰うて、父上の怨を霽らし申さうが、數馬殿には怨は無い。

曾平太 すりや勝負はせぬと仰有りますか。

源治郎 さうぢや。このまゝに立歸らう。

曾平太 知行半地のまゝで、一生暮しても構はれませぬか。

源治郎 それも天運ぢや。あきらめるより外は無い。

曾平太 さりとて仇打も仕遂げ得ぬ卑怯者と、殿の御勘氣に觸れて、知行を召上げられても。

源治郎 親類一同から義絶されたとて、仇でない人を仇と思ふ事は出來ぬ。

曾平太 いゝや、仇でござります。子も孫も殘らず仇でござります。（泣く樣に憤る樣に） 若旦那お前樣はその時

の事を少しも覺えてお出でなされぬ故、その樣な事を仰有るのでござります。あの時の事が一日でも思ひ出されたら、體中の血汐が逆に流れて、子であらうと、孫であらうと、容赦はないと仰有るに違ひありませぬ。私はその時十九で、親旦那樣のお草履を摑んで毎日お供をして歩きました。御變事のその際も一足違ひで行き合はせて、まざ／＼と御無念の樣子を拜みました。卑怯の竹槍故、唯一突には叶はいで、手傷は四ヶ所五ヶ所、胸手足のきらひなく血汐の亂れ、蒼ざめた顏に氷の樣な瞳をカッと見開いてお出でなされたのを見た刹那、仇もその通り寸分違はずに斬り刻まねばならぬと心に誓ひました。もし、若旦那この樣に申しても矢張刀は拔かぬと仰有りまするか。

源治郎　む丶、拔くまいぞ。成る程、まざ／＼と父上の御臨終に行き合はせたお前はさう思ふかも知れぬ。その時私も物心ついてゐたなら、矢張その樣に思うたかも知れぬ。しかし、幸か不幸か俺はそれを見てゐぬ。知つてゐる事は唯お前や母上なぞから聞かされた事ばかりぢや。それも嘗の兵馬に廻り合うたのなら、自然に憎も湧いて出て斬刻む程の心にもなるかも知れぬが、數馬殿には今の親切な介抱のお禮を云ふより外に何が仕向けられようぞ。僅か半時にも足らぬ緣ながら、二人は不思議に永い昔からの友達の樣に睦じう思うた。これから先、艱難を一つにして世に出る道があれば、少しも躊躇ふ心もなく、肩を並べて、助け助けられて歩み出されようとまで思うた。仇を打てとは他から教へられた事、睦じう思うたは自然の心から湧いて出た思ひぢや。俺は兵馬殿が死なれたと聞いて、限りない重荷を下した樣な氣がした。卑怯と云はれても構はぬ。半地の祿で終らうとも儘ぢや。この心を、母上とてもよも不孝とばかりはお叱りなされまい。

曾平太　（強く拒む）いゝや、以つての外で御座ります。君父の仇は倶に天を戴かずとやら、その仇の一家にどれ程の世話にならうと、怨は怨ぢや。さ、御用意なされませ。御用意を――。（源治郎の用意をせぬのを憤る）よう御座ります。お前樣がお嫌なら、私一人で勝負します。私に取つても主人の仇、謂無いとは申されまい。（數馬に）さ、御用意なされい。

數馬　（拒む）いゝや、私もすまい。父上は父上、俺は俺ぢや。源左衞門殿とやらの事は今聞くが始めてぢや。仇と呼ばれる覺えはない。

お節　（詰る樣に）すりや其方も勝負せぬと云ひまするか。

數馬　（反對に詰寄つて）母上は何故それをお慫めなされまするか。

お節　慫めたうは無けれど、それが人間の因果ぢや。父上

の悪業が其方に報うて來たのぢや。

數馬　では、この年月打たれて死ねよとお育てなされましたか。

お節　（泣く）怨んでたもれ。しかし、それより外に父上の悪業を消し、其方の名を淸うする手段は無いのぢや。一旦は勿體無けれどこの身の手にかけて、父上の御命を戴かうと思うたれど、それでは私の義は立つても、源治郎殿の武士道が立つまいと思ひ、泣く〳〵この里へ伴はれて來た心には、唯源治郎樣が一日も早く成人して、仇を尋ねて見えるのを待つより外に生きる甲斐はなかつた――（闇然として）其甲斐もなう、僅か一年も經たぬ間に、不圖した風邪が源になつて、父上は明日も知られぬ御大病、このまゝにお果てなされては、罪もそのまゝ、源治郎殿の無念の晴るゝ日もあるまいと心を砕く御臨終に、やう〳〵本心に立ち歸られた父上は、自分の代りに數馬を打たせてと、切れ〳〵に御遺言なされた――。

數馬　えッ、すりや父上が――。

お節　（血を吐く樣に）あい――あいと御返事申上げた母の心はどうあらう。良人に先立たれて後は賴みに思ふは我子ばかり、その一人子を、一人子を、傾ふな、怪我するな、長生せよと祀る代りに、潔よう死んで與れ、打たれてと、心に泣いて育てゝゐました。

皆々　――。

お節　（お靜の手を執つて）お靜どの、そなたの心も數馬の心も、とうから推量してをりました。未練な心では、私一人自害して果てたなら、見知られた者もなく、行末安穩にすごされるにと、何ぼう思ひ惑うたか知れませぬ。まして先刻の樣に打ち破つて迫られた時の切なさ、苦しさはどうあらう。私は嘘は云ひませぬ。お靜どの、和女をとうから數馬の嫁にと願うてをりました。（涙をふるつて）とは云へ人間の義は缺かれませぬ。折角本心に歸られた父上の遺言も反古にはならぬ。仇にする嫁は猶更取られぬ。無情い人と怨んで下され。（數馬に）さ、數馬、今と云ふ今、十二年の母の祕密を明かす時が來ました。潔よう勝負してたもれ。母が此處で、け、見物しまする。

數馬　（興奮して）いゝや、それはなりませぬ。母上のお言葉は道理に似て道理でござりませぬ。父上の罪は父上一人の罪で、父上がお失くなりなされたら消えて仕舞ふ筈です。消えずとも、其子にまで殘るとは思はれませぬ。――私は生れてから何一つ罪を犯した事もありませぬ。不義をした事もありませぬ。それが思ひも寄らぬ人の悪業に、戀も名も希望もみんな中途で投げ棄てゝ仕舞はなければならぬとは、何と云ふ不條理な事でござりませう。私は否でござります。死ぬのは否でござります。

お節 （呆れて卑む樣に） さりとて淺間しい。其方はこの期に及んでも命を惜みまするか。

數馬 殊更に惜みは致しませぬ。併し道理で無い事には從へませぬ。諄い樣なれど、私には罪も咎もありませぬ。その罪の無い者を殺した源治郎殿やその奴は、矢張罰を受けねばなりますまい。仇とねらはれねばなりますまい。（お靜を見て） もし私の子があり妻があれば、その妻や子は私のためにもう一度仇討に出ねばなりますまい。そして其仇を殺して戻れば、又そちから仇を尋ねて來るでせう。すれば人種が絶え果てるまで爭ひ續けても盡きますまい。それが果して人間の義でござりませうか。天地の道理でござりませうか。

お節 いゝや、それは違ひまする。罪の元は父上故、磯貝の家こそ亡ぶるが定。又仇は天下でも御法度ぢや。

數馬 ではどうあつても勝負せよと仰せられますか。

お節 （顔を背けて） あい、唯侍らしうに。

數馬 そして私が斬られて死ぬのをお靜どのに見物させなされますか。（興奮し切つて） 勝負しませう。勝負しよう。（鋭く皮肉に） 母上、返り討にしたら何となされます。

お節 え。

數馬 どうでも私を仇ぢやと仰せられますれば、仇になりませう。そして二人共返り討にしてこゝを立退きます。二人の兄弟や親類がその上仇とねらうて來たら、それも殘らず殺して仕舞ひます。（惡魔的に） 人種の盡きるまで殺してやります。（手早く用意して） さあ、參るぞ。

（矢庭に源治郎に打つてかゝる。源治郎は驚いて飛びしさり、手を振つて何か云はうとするが、數馬が激しく斬込んで來るので、止むを得ず拔合せて戰ふ。しかし源治郎の本心はどうしても數馬を打つ氣がせぬので自然太刀先が弱く受太刀ばかりである。三人は息を殺して見守る。その中何かの拍子で源治郎の刀の目釘が拔けて白刃が先へ飛ぶ、數馬は得たりと一太刀に斬らうとする。途端にお節が鋭く止める。）

お節 數馬待ちや、卑怯ぢや。（數馬思はず太刀を引く。）
源治郎に） さ、目釘をお打ちなされませ。

（館平太ホッとして目釘を拾うて打つ。お靜は手水鉢の水を汲んで數馬に飮ませる。）

數馬 さあこい。

源治郎 いざ。

（再び戰ひ初める。數馬の太刀先は先にも增して鋭くなる。源治郎は矢張氣の進まぬ體でゐたが、對手の激しさに釣り込まれて段々に激しくなる。やがて本能的に身をかばふ樣になる。暫く必死の爭ひ勢は互角であ

るがやがて數馬が後へ斬り立てられる。あわやと思ふ時又盛りかへす。そして源治郎が斬立てられる。次第に後へ下る。跪いて倒れる。數馬打下す。その途端、源治郎が棄身に横に拂つた切先が數馬の脇腹へ深く切り込む。數馬二言となく倒れる。お靜かけよつて抱き起す。お節は凡てに心を動かすまいと努力する。源治郎は倒れたまゝ放心する。曾平太一人躍り上つて喜ぶ。）

曾平太　やあ、お出來しなされた、お出來しなされた。さ、早やう止めをお刺しなされ。

源治郎（我に歸る。曾平太の言葉に憤る樣に）何、止めぢやと――何でそれが――俺は今爭うたのさへ心苦しい。友を斬つたその刀は、もう二度と取るまいぞ。（鞘まで投げ出す）

曾平太（平然と）ハ、、、。心弱い事を仰有りますな。止めを刺すのは仇討の作法でござります。貴郎がお嫌なら私が代つて刺しませう。

（源治郎の刀を拾うて數馬の側に寄りお靜を手荒く引き退けて止めを刺す。皆々顔を覆ふ。曾平太續いて數馬の髻を斬り血刀を拭うて鞘に納め、源治郎に渡す。源治郎餘儀なく受取る。）

曾平太（塵を拂うて）さ、これで何もかも仕終せました。御父君源左衞門樣も、さぞかし御喜びでござりませう。殿樣にも御滿足でござりませう。では一刻も早やう本國へ引き返すとしませう。

（身支度をする。源治郎は餘儀なく悄然として起つ。そして力無く歩んで木戸のあたりまで行つた時見送つてゐたお節思はず聲をかける。）

お節　あもし。

二人　え。（振返る）

お節（呼びかけたが何も云ふ言葉が無い。とかう考へた末、フト奥を見ると、先刻の數馬の羽織が目に入る）ああ、さうぢや。お待ちなされませ。（羽織を出して庭に下りて）目出度う御本望をお遂げなされたに、本國へお出でなされるには、そのお姿はあまり見すぼらしう御座ります。失禮乍らこの羽織は數馬の仕立下し、お靜どのが丹精して下さりました。まだ一度も手を通さねば、仇の品とも申されますまい。故郷へ飾る錦にはなりますまいが、折から冬も近し、せめて道中でなりとお召しなされて下さりませ。

源治郎　ではその羽織を私に――（涙ぐみ）有難う存じまする。無二の友達の形見と思うて、末長う戴いて參りまする。（頂いて着る）

お節　あれ、躾糸か――（凝つと袖を捉へて）お靜どの、

まあ御覧なされませ。丁度あつらへた様ぢや。衣紋つきから髪の結ひ様、ほんに數馬と瓜二つぢや。數馬が旅へ行く様ぢや。お、お目出度う存じまする。

（顏を背ける。お靜は懐しげに見て何か云はうとして、叶はずワツと聲を立てゝ泣き倒れる。この思ひも寄らぬ光景に見惚れてゐた曾平太は、この時人間的な感情に打たれてハラ／＼と落涙する。そして荷物を投棄てゝお節の前に兩手を突く。）

曾平太　詫ります、詫ります。何と云ふ氣高いお心でござりませう。それに比べて十二年の間憎いと計り思ひ暮したこの心が恥しう御座ります。若旦那を無理に連れ出したのも私で御座ります。無理に勝負をおさせ申したのも私でござります。そして大事な人のお子を殺さして、それが忠義ぢやと誇つてをりました。何と云ふ淺間しい心で御座りませう。せめてそのお詫のしるしに、この儘頭を丸めて、數馬様並びに源左衛門様兵馬様の御菩提を弔ひたうござります。どうぞお傍にお置き下さりませ。

お節　いゑ／＼、その志は忝なけれど、福岡まではまだ二百餘里の海山、源治郎様にもお供か入りまする。

源治郎　でも、お前様はこの後お一人で――。

お節　その御心配には及びませぬ。今日の事は豫ねての覺悟、身を立てるよすがもとうから思ひ定めてをりまする。

左様なればお二人様。

二人　（餘儀なく）御健固で――。

（涙を飮んで起つ。山寺の鐘の音、夕風俄かに騷ぐ。曾平太跪いて死骸に合掌する。皆々默然として。）

――幕――

冬木心中（二幕三場）

人物

大和屋　平太郎　材木屋の若主人（二十七歳）
その母　おとく（五十歳）
その叔母　お政（四十二歳）
お政の娘　お菊　平太郎の許嫁（十七歳）
荷足（にたり）の船頭（せんどう）（實は賭博打）藤兵衞（四十位）
その情婦　お仙　元平太郎の情婦（三十歳位）
その子分　早太
同　　源六
大和屋の番頭善兵衞
同　　若い者　新七、同　萬吉、同　留藏
　他に近所の材木屋の主人、相模屋利右衞門、同山田屋淸兵衞、仕立屋の老婆おげん、その娘おしん、女中お淺。

第一幕

第一場

時
天保の頃。春。夕ぐれ前より夜半まで。

舞臺
深川冬木、大和屋裏材木河岸。平舞臺中央は細い掘割の心。それを覆ふ樣にして上下兩方に材木庫ありて幾棟となく向ふへ續く。下手の河岸はやゝ廣目に作り、一番手前の倉の破風下の板壁に山にトの印を大きく打つけてある。その眞下に出入口、周圍に大小の角材木丸太杉板等を積んである。やゝ遠くに青い芽を吹いた柳。上手河岸には手前によせて一本の古い松の木。幹が面白さうに曲つて、殆ど掘割の中央まで伸びてゐる。第一の庫と第二の庫との間に、細い出入道。掘割には、上手の岸に着けて大きな丸木の筏を幾本となく竝べて浮かせ、それにつゞいて上手河岸に寄せて材木を積んだ大きな荷足（にたり）船が舳を見せて繫いである。この舟と筏とで、掘割の殆ど全部を占めてゐる。遠くに太鼓形の橋。舟からは上手の河岸へ、筏からは下手へ、それ／＼に歩板（あゆみ）を架ける。
天保の初年、ある春の日の午後。大和屋の店の若い者。新七、萬吉、留藏の三人、舟から上げる材木を庫の中へ擔ぎこんでゐる。舟の中には、早太と源六が船頭の

捽て、材木を上げてゐる。暫く無言の潑剌とした勞働が續く。やがて、早太と源六は顏を見合せて、船端へ上る。

早太　（新七等に）から、皆んな。ちつとばかり休まうぢやあねえか。

源六　隨分はかが行たぜ。あとはもう『貫』計りだ。六つまでにやあ大丈夫だ。（煙草入を取り出す）

新七　（船の中を覗いて）だが、もうそれつぽつちなら、一層一思ひに上げて仕舞はうぢやないか。

萬吉　だしぬけにやつて來て、定り文句を聞かされるのも嫌だからな。

早太　べらぼうめえ。石や鐵で捽へた體ぢやあ無し、さう無遠慮にコキ使はれて溜るもんかい。

源六　おいらは此の庫へは初めてだが、一體どんな亡者がそんなご託をつきやあがるんだ。番州か。

新七　違ふ。

早太　ぢやあ旦つくだな。措きやあがれ。金のある奴は、貧乏人を使滅りのしねえ道具だと思つてゐやあがる。業つくばりッ。全體幾ら溜りあ氣が濟むんだい。

源六　いゝ加減にしとかねえと、向ふ脛を鳶口でかつぱらはれると云つてやれ。

新七　處がそれが見當違ひなんだ。何處の店でも、鳴つたり光つたりするなあ、大旦那か番頭の禿頭に定つてゐるが、こゝばかりやあ、お天道樣が違つてゐなさるんだ。

早太　へーん、（鼻を鳴らす）そいつあ聞きもんだ。ぢやあ、どんな化物がそんな目玉を引んむくんだ。

萬吉　若旦那だよ。

早太　何だと。

留藏　若旦那が喧しいんだよ。まかり間違やあ、自分で材木を擔ぎ兼ねないんだ。

早太　ふーん、成る程、こいつあ少し陽氣違ひだ。（煙管をはたく）老爺が雷で、若いのが色男たあ昔からの御定法なんだが、どうしてそんなあべこべが出來上つたのか。

源六、矢張世間は廣いなあ。（ゴロリと苫の上に横になる）併しいゝ天氣だ。もうやがて六つだらうが、こんなに暖かだ。花見にでも行きやあ格別、こんな日に本氣で仕事が出來るもんかい。

（手足を伸ばす。皆々もうなづいて、思ひ〳〵に煙草を出して吸ふ。遠くで幽かに眠さうな馬鹿囃子がきこえて來る。間。やがて、下手から平太郎が矢立と帳面とを持つて出る。地味な、殆ど盲縞の樣な袷を着て、角帶に紺の厚い前垂をかけてゐる。それは極めて野暮にならうと努めてゐる樣子であるが、ものごし恰好にどこと無く遊び盡した男らしい粋な樣子が着纒うてゐる。皆を見て眉をよせる。）

平太　あゝ、皆そこにゐたのか。道理で一向に影が見えないと思つた。（河岸から船の中を覗いて）もう少しだらう。早く上げて仕舞つて呉れ。明日は小石川の大久保様の御用で朝が早いから、今日の中にすつかり木口を揃へて置かなけりやならぬ。お屋敷方は何にしても矢かましいからな。

新七　へえ。（澁々と起つ）

平太　それから、石町の棟梁も見えるかもしれぬ。（早太に）舟の衆、まことに濟みませんが、どうか一つお願ひ申します。

早太　へーイ。

（據所無く起ち上る。そして、鈍い仕草で貫を上げる。新七等も棄臺詞でやはりのろ〳〵と擔いでゆく。平太郎はそれを見て、ムッとした様子で、何か云はうとして唇を動かしかけたが、思ひ止つてその邊にある材木を調べながら下手へ去る。）

早太　（あとを見送つて）行きやあがつたな。成る程、大分變つてゐやあがるな。

源六　しかし、いゝ男ぢやあねえか。ひどく野暮な様子をしてゐるが、内々はさうぢやあ無ささうだ。店を閉めてから、こつそり櫓下あたりへ時化込むんぢやあねえか。

新七　目が高けえな。ありやあすつかり猫だよ。

早太　猫か。

萬吉　猫も猫もドラ猫だよ。ついこの後まで勘當同様の宿無しだつたんだ。

新七　十六の時から道樂の味を覺えて、先づ手近の櫓下を振出しに、向ふ河岸の芳町柳橋を泳ぎ廻り、あげくの果にやあ家を飛び出して仕舞つたんだ。矢場や水茶屋は云ふまでもない、そこいらの河岸ぷちにも馴染があるんだ。賭博も打つ、凄い喧嘩も二度や三度ぢやあ無ささうだ。

早太　ふむ、そいつあ飛んだ贋金だつたな。しかし、そんな三拍子揃つた奴が、どうして家へ戻つて來たんだ。

新七　（親指を出して）レコが大病でもう危いんだ。

源六　成る程、よくある筋だ。それでホロリとなつて、すつかり改心したと云ふんだな。

新七　表面はまあさうだが、あんまり受合はれないな。お袋様も番頭さんも内々ぢやあちつとも氣を許してはゐなさらぬのだ。

早太　だけれど、隨分固さうに見えるぢやあないか。

萬吉　それが手だよ。今云ふ通り大旦那は去年越しの煩ひで、とてもこの梅雨は越せさうにないんだ。明日にでもコロリと參つて見ねえ、この大身代は誰の者になると思ふ。さう考へりやあ誰にだつて一年や半年の辛抱は出來ようと云ふものだ。

源六　成る程、甘く棹を入れてゐやあがるな。利口な奴にやあ叶はない。しかし、その猫が尻尾を出したら、こゝの身代も長持ちやあしめえなあ。

新七　さあ、先づ二年か三年かな。悪くすりやあ一週忌の法事だつて危いかもしれぬ。それにしちやあ惜しい身代だなあ。

（皆々流石に思入あつて、下手の方を見る。そこから下女のお淺が前垂で手を拭きながら出る。）

お淺　あの――新どん、皆さん、お茶が入りましたから上つて下さい。

新七　何だお茶か。番茶に鹽煎餅ぢやあ、あんまり氣かないな。

早太　でもまあ氣は心だ。御馳走にならうか。

源六　大きな事を云つても、哥兒も意地が穢ねえな。

早太　さう云ふ手前も半分御輿を上げてゐるぢやあねえか。（材木を引出して）おう、ついでにこれを上げて仕舞はう。

新七　よし來た。

（皆々一把づゝ肩に乘せて下手へ行かうとする。上手の庫の間から、近所の材木屋の主人、相模屋の利右衞門と山田屋の清兵衞が出て來る。清兵衞はやゝ年配、利右衞門は稍や年若で少し酒に醉つてゐる。新七等を見て呼びかける。）

清兵　あ、もし／＼大和屋の若いの。

新七　（振返つて）あッ、こりやあ相模屋に山田屋の旦那ですか。

清兵　若大將は家だらうな。

新七　へい。めつたに何處へも出かけはしません。

清兵　ぢやあ。私達が逢ひに來たと云つて下せえ。何に、大した用ぢやあないんだ。店の方へ廻るといゝんだが、橋を越して行くと遠廻りだからな。

新七　承知しました。

（皆々下手へ這入る。清兵衞と利右衞門とは步板を渡つて筏の方へ來る。）

清兵　丁度いゝ工合だつた。（船端を踏んで）これが着いてゐないと、四五丁遠廻りをさせられる處だつた。

利右　どつから上つた船だらう。大和屋も近頃はよく捌く樣だな。

清兵　平太郎さんが眞黑に成つてやつてゐるからな。人間も變れば變るものだ。昔は賴まれて意見の一度や二度はしたもんだが今頃はこつちが意見をされさうだ。

利右　しかし。まさか明日來ないとは云ふまいな。仲間の長いしきたりなんだから。

清兵　當り前だ。だが、一應は渡つておかないとな。（下

手から平太郎が出ろ）おゝ、大和屋さん。
平太（大人しく）お待たせ申しました。何か御用ださうで――。
清兵　飛んだ處からお呼び立てをして濟みません。實は知つての通り、明日は組合の參會を兼ねて花見船を出す事になつてゐるんで、一寸それを誘ひに來ましたのさ。
利右　今年やあ一つ趣向をかへてウンと賑やかにやらうと思つてゐます。別に差つかへはございますまいね。
平太　はい。（考へて）有難うございます。しかし、御存じの通り親父が煩つてをりますので、甚だ勝手ながら、今年は御免を蒙りたいと、實はこれから小僧を使に出さうと思つてゐた樣なわけで――。
清兵　判つてゐます。判つてゐます。阿父さんの長病の中を、花見に出かけると云ふなあ、近所の手前も、家の手前も、氣の置ける事もありませう。しかし、そこは又裏の表で、何も長旅へ出ると云ふわけぢやあなし、ほんの仲間の交際と云やあ、それで通して與れる世間。ちつとは息拔きをせねば體がたまりませんよ。
利右　お前さんから云ひ出し憎けりやあ、私共からお袋さんにでも誰にでも逢つて、甘く木口を合せようぢやありませんか。實はそれでかうして二人でわざ／＼出て來ましたのさ。
平太　有難うございます。色々と御親切に仰有つて頂きますのにこの樣な事を申しては濟みませぬが、親父の事ばかりでなく近頃はフッツリと禁酒をしてをりますので、大勢の中に、白面な者が交つてをりましては、反つて興の妨げになりませうから、まあ、どうぞ其儘になすつておいて下さいまし。
利右　ハヽヽ。それが表向の口上、何ぼ禁酒したと云つても、男一疋が一生盃を持たずに過せるものぢやあなし、世間が本當に聞く譯もございますまい。何も深味へ連れ込まうと云ふのではなしほんのあつさり付合つて下さい。さうすりやあ、今年は一人も缺けなしで、一層目出度いと云ふわけなんです。
平太　はい――。
清兵　どうです。それともそんな處へは一切付合はぬとお云ひなさるのか。
平太　はい。一々お言葉をかへす樣ではございますが、どなたも御承知の樣な以前の私の身持、皆樣とは違ひ、遊びが遊びにならず、どの樣なはずみで又元の深味へ落ち込むまいにも限りませぬ故、まあ、見ざる聞かざるで通さうと思つてをります。
利右　（ムッとした樣子で）成る程お見上げ申しました。惡うございました。そんな潔白なお前さんに惡い遊びを

勸めたのは惡うございました、詫ります。したがねえ、平太郎さん。人間はいゝ加減に人の云ふ事を通して置くもんですよ。でないと、云ふまいと思つてゐた事も、つい云ひ出したくなりますからねえ。

平太　（少し氣色ばんで）何と仰有ります。それでは私が何か暗い事でもしてゐると仰有りますか。

利右　暗いか明るいか判らないが一昨日の雨の晩、山淸の材木置場の隅で、私やあお前さんを見かけましたよ。

平太　（ハッとして）え、あの晩に。

利右　夜目ぢやあるし、後向きなので、樣子は判然わからないが、まだ肩上げも取れてゐない小娘、流石はお前さんだと、あとでつく／＼感心しましたよ。

平太　（逡て丶）そ、そりあ違ひます。實はあれは――。

利右　（耳にかけず）さうでせう。お前さんだから、惡い事たあしてゐなさらぬ筈だ。ぢや淸兵衞さん、そろ／＼行きやせうか。

淸兵　（半信半疑で）ふん、とんだ話を聞いたもんだが、お前さんもどうも怪しいからなあ。

利右　どうして／＼、こればつかりやあ正眞正銘なんで――。云ふまいと思つてゐたんだが、あんまり白を切りすぎるんで――。

（二人は仕方話をしながら上手へ去る。平太郎はそれを追うて行て何か云ひかけようとしたが又思ひ止つて立停る。そして心外さうに凝つとうつむく。間。靜かな鐘の音。やう／＼に顏を上げる。）

平太　もう六つか。

（淋しさうに云つて、强ひて心を押へつけてトボ／＼と下手へ步み去る。鐘の音。鈍い蛙の鳴く音。間。やがて上手の舟の苫が音も無く上つて、お仙が艷めいた半身を現す。矢場女か水茶屋の女上りらしい樣子。束ね髮、荒い棒縞の袷に黑繻子の帶をダラリと結んでゐる。粋と云ふよりは野暮に近い太り肉の肉に爛れ切つた無反省の女。）

お仙　（平太郎の後影を見送つて）どうやらよく似た聲だと思つたら、それぢやあ矢張り――。

（船端へ上る。そして尙疑の殘つてゐる樣子で後影を見送る。鐘の音。上手河岸からその情夫の藤兵衞が、あとをふりかへり乍ら出る。四十恰好の赭顏のデップリと太つた男。船頭らしい着付、しかも純粋な船頭とも見えぬ。さりとて大親分らしい寛濶な程も窺はれぬ。ほんの一寸とした賭博打の頭。）

藤兵　（步板に片足をかけて）えゝ、措きやあがれ。びつくりさせやあがつた。（お仙を見て）お仙、お前何んだつて晝中そんな處へ出てゐるんだ。

お仙　（向ふへ向いた儘）　餘りむし〳〵するからさ。
藤兵　そんなら何故その支度をしないんだ。今更云ふわけぢやあねえが、早太と源六に掴ませて俺もこんな風をしてこの船へ這入こんでゐるのも、近頃陸の張込みが嚴しいからぢやあないか。
お仙　（やう〳〵に振返る）　それぢあ何かい、船頭の內儀さんそつくりで、向ふ鉢卷に尻はしよりで、逆になつて棹につかまるのかい。嫌なこつた。（ツンとする）
藤兵　（驚いて機嫌を取る樣に）　冗、冗談ぢやあねえ、誰がお前にそんな事をさせるもんかい。（あたりを見て）　何あに、さうしてゐたけりやそのまゝでゐるさ。どうせもう日暮だ。兩方は材木庫、めつたな奴も來ねえだらう。
お仙　來たつて、お前さんさへ逃げりやあいゝんだからね。私やほんのおつき合ひだ。
藤兵　（舌打をして）　又初めやあがつた。何あに、いつまでもこんな處に燻らして置きやあしねえ、今にまとまつた目が出たら、それを草鞋に履いて、上方へでも奧州へでも、好きな處へつれて行つてやらあ。
お仙　（態とぢらす）　いやなこつた。誰がそんな田舍なんぞへ行くもんか。かう見えても私や江戸ッ子だよ。
藤兵　うそを吐きやあがれ。上總生れと云つたぢやないか。
お仙　それが惡いかい。惡けりやあどうともしてお呉れ。
藤兵　（機嫌をとる樣に）　だつてお前――。
お仙　うるさいね。默つてゐてお呉れ、私や考へてゐる事があるんだから。
藤兵　考へてゐる。（傍へよる）そりやあどんなこつたい。
お仙　昔の情夫の事だよ。
藤兵　昔の情夫――（顏色を變へる）　と、とんでもないこつた。
お仙　（からかふ樣に）　考へちやあ惡いかい。
藤兵　惡いとも、一體お前は――。
お仙　（引取つて）　押潰されさうでゐた借金を拂つて、自由の身にしてやつたなあ、誰のお庇だと云ふんだらう。そりやお前さんのお庇さ。だから斯うして一緒に暮してゐるんぢやないか。
藤兵　して見りやあ、他の男の事なんぞ、思つていゝか惡いか、判りきつてゐるぢやあねえか。
お仙　だつて自然に思出されるんだから仕方がないぢやないか。
藤兵　（嫉妬深く）　どんな奴だい。其奴は。
お仙　いゝ男さ。
藤兵　え。
お仙　粹な男だよ。ちよいと小柄だが、小肥りに太つてゐてね。第一お前さんよりは年が若いや。

藤兵　べら棒め、本當の男の味は四十にならにやあ判るもんか。

お仙　いやだねえ、何もそんなにむきにならなくつてもいいぢやないか。斯う云つたからつてお前さんの事を忘れてると云ふわけぢやあないしさ。（甘垂れて膝によ る）ねえ、チヤンとお前さんの思ひ通りになつてるぢやあないか。

藤兵　措きあがれ。そんな氣休めをきくものか。

お仙　甚助。ぢやあ勝手におしよ。（とんと筏の上に下りる。何處からとも無しに櫻の花が散つて來る。それを見守つて）おや、花が散つて來る。（あたりを見て）かう見た處、どつこにも櫻らしい木はないけれど、やつぱり春もやがてお仕舞ひなんだねえ。（つまらなさうに）あゝ、何時まで上籠見たいにしてゐりやあいゝだらう。何でもいゝから世の中がひつくりかへる様な事が出來て見りやいゝ。

（呟いて凝つと下手を見る。そこから早太と源六とが酒に醉つて出て來る。）

早太　や、もう澤山、澤山。

源六　何だかそれぢやあ勝手が違つちやつて――（云ひつつお仙を見る）やあ、姐さん。そんな處にゐなすつたか。

お仙　いゝ機嫌だね。お店の御馳走かい。

早太　うん、お茶を飲ませると云ふから、尾いて行つたんだが、土瓶についであつたなあお酒よ。

源六　さすがは苦勞人だ。やつぱりどつか違つてゐやあがる。

お仙　ぢやあ、二人ともさつきの若旦那に酒で殺されたんだね。

源六　殺される程飲めもしねえがやつぱり醉つちやつたんだ。話せる。話せる。

早太　（少し險を見せて）だが、あいつ俺達ばかりにしやべらせて、自分ぢやあ一口も飲まねえで默つて聞いてばかりゐやあがつた。

お仙　一口もやらない――（考へて）ぢやあ、ほんとに堅氣になつたのかしら。

源六　え、何だつて。

お仙　何でもないんだよ。

早太　だつてお前――（藤兵衛を見て）おゝ、哥兄。そこにゐなすつたか。（傍へよる）

藤兵　喧しい、しつこんで居ろ。

（横面をはり飛ばす。早太頰を抱へて轉る。お仙凝つと下手を見る。藤兵衛と源六は様子あり氣にそれを伺ふ。かすかに馬鹿囃子を聞かせて、道具廻る。）

第二場

舞臺

大和屋の奥座敷。廻り縁つきの八疊と六疊、木口を充分に選んだ、ガッシリとした普請。八疊は客間にて正面奥に床、違ひ棚。下手の六疊は縁の方へ向いて障子。八疊との境は地味な模樣の襖。その下手は店の間及び臺所へ續く。上手、廻り縁を奥へ突き當つた處から曲尺の手に更に奥へ行く廊下。しかしそれは半ば壁にかくされて上の方に一半間の障子がはまつてゐる。その手前の空地は庭の心地になつてゐて、大きな松の樹の下に苔のむした小さい雪見燈籠がある。

上手側面は板塀。中央に五尺の潜戸。そこから庫の方へ通じてゐる。塀の外及び内側には邪魔にならぬ樣に色々な材木を積む。その上に先刻早太等の飲んで行つた土瓶と湯呑が載つてゐる。そのあたりに程宜く細い柳と櫻とが抱き合ふ樣にして生えてゐる。

前場より少しあと。平太郎は柱によつて物思はしげに蛙の聲を聞いてゐる。間。やがて下手障子の中から、平太郎の許嫁のお菊が行燈をさげて出て來る。初々しい、すべてを善意に解釋しようとする樣な純な娘。平太郎は靜かに振返つてそれを見る。

平太　お菊さんか。

お菊　はい。(行燈を程よく置いて下手へ兩手をつく) 夕飯のお支度が出來ました。

平太　(目醒めたやうに) もうそんな時か。(物憂く) 併し、私は欲しくない。誰れでも先へ仕舞つて下さい。

お菊　でも、お前樣がすまねば――(凝つと見て) もし、何處ぞ氣合でも惡いのでございまするか。

平太　いゝや。どうもせぬ。

お菊　でも、お顏の色が惡い樣に見えまする――。

平太　さう見えるか。實は陽氣の故か頭の中がもや／＼して、何もかも叩き潰して仕舞ひたい樣な氣がするんだ。

お菊　え。(驚く)

平太　(ハッとして) いや、何でもない。(氣を鎭へる樣に) お前は今日藏前の實家へ行て來ると云つてゐたが、いつ歸んなすつた。

お菊　あい。つい半時程前に戻りました。

平太　叔母樣にも叔父樣にも變つた事はなかつたか。

お菊　あい。別にこれと云つて――阿母さんは、今夜か明日、叔父樣のお見舞に來ると云つて居りました。

平太　(懷しさうに) 叔母さんが來て下さるのか。それはよい話を土産にしてくれた。俺も逢ひたい逢ひたいと思ひながら、つい行きそびれてゐた。そして、それからま

つすぐにこつちへ戻つたのか。

お菊　いゝえ。序と云つては濟みませぬが、觀音様へお參りして、叔父様の事をお願ひ申して戻りました。

平太　それはいゝ事をした。（淋しい様な表情で）　今日頃は花盛りゆゑ、奥山から向島あたりへかけては、定めし大勢の人出であつたらうな。

お菊　黒山の様でござりました。百眼をつけたり、酒樽を提げたり、それは〳〵賑やかでございました。

平太　（思はず恍惚として）　上野や飛鳥山も定めて賑やかだらうなあ。

お菊　（無邪氣に）　ほんに、叔父様が御病氣でなかつたら、お前も一度お出でなさるとよいに。

平太　（急に氣づく）　いや、さうはしてゐられぬ。親父様が煩うてお出でなさるのに、そんな事を云つては罰が當る。（奥をふりかへつて）　店の用が立てこんで、午からは一度もお見舞ひせなんだが別に變つた様子はあるまいな。

お菊　あい。（急にしなれて）　これぞと云ふ事はございませぬが、やつはり――。

平太　快い方へは向はぬかなあ。（自分でうなづく）　では俺はこれから一寸御見舞申して來る。阿母さんに代つてゐる間、皆先へご飯を仕舞つて下さい。

お菊　あい〳〵。

（平太郎上手奥へ這入る。お菊は行燈の灯を掻き立てて少し思入あつて下手へ去る。入れ違うて、廊下の方から番頭の善兵衞が色を變へて出て來る。）

善兵　どうも不思議だ。確かにあすこへ置いたに違ひないが――。

（呟きつゝ其處此處を見廻はす。奥より母親のおとく出づ。五十歳位の平凡な女。）

善兵　おゝ、お袋様。

おとく　善兵衞どのか。遽しい何事でございます。

善兵　た、大變なので――か、金が失くなりました。

おとく　え、金がッ、そりやどれ程。

善兵　七十五兩程でござります。

おとく　（驚く）　まあ、そんな大金が――。

善兵　石町の棟梁から五十兩と、大久保様の内金二十五兩と、確かに私が受取つて、一つに纒めて掛硯の引出しに仕舞つて置いたのでござります。

おとく　それが失くなつたとお云ひなさるのか。外へ置き忘れたのではありませぬか。

善兵　いえ、確かでございます。つい今しがたちやんと仕舞つたに違ひありません。

おとく　それが急に見えなくなつたとは――。（小聲にな

り）若しや誰れかゞ盜み出したのではあるまいか。

善兵　さあ、私もさう思ひますが、店の者はみんな表へ出てゐて、帳場へ來た者は若旦那より外にはございません。

おとく　（奥をふりかへつて）ぢやあ、若しや平太郎が――。

善兵　（小聲で）さあ、實は私もさうではないかと思つてをります。何しろあんな事のあつた人ですから、どんな事で又氣が狂ひ出さぬとも限りません。現に今日も（すり寄つて囁く。おとく驚く）な、そんな事もあるのでございますから。

おとく　仕樣がないねえ。家へ歸つて來て呉れて、やれ一安心と思ふとすぐにこれだ。阿父(おとつ)さんに若しもの事があつたら、私やどうしたらいゝだらう。（泣く）

善兵　お察し申します。まあ、みつちりと御意見をするより外に仕樣はありますまい。併し、さしあたつては、七十五兩を持出してお仕舞ひなされぬ中に、見つけ出したいものでございます。

おとく　と云つて、あちらへ持つて行た樣子はなし――。

善兵　表へ出なすつた樣子もなし、どこぞこゝらに隱してあるかも知れませぬ。

（起つて庭へ下りて、そこゝと探す。おとくは室の中を改める。その中善兵衞は、そこにある土瓶を見つけて不審氣に取上げて、一寸振つて見て蓋を明けて中を覗く。酒の香が鼻をつく。ハッとして殘りの滴(しづく)を掌(て)に滴(たら)して味うて見て首肯(うなづ)き、小聲でおとくを呼びかける。）

善兵　お袋樣。ありましたよ。

おとく　え、どこに。

善兵　金ではありません。まあ、これを嗅いで御覽なさいまし。

おとく　（手に取つて）おや、こりやあお酒ぢやあないかい。

善兵　先刻(さつき)船の者まで呼び込んでおゐでなさいましたが、お茶にしちやああんまり賑かすぎると思つてをりました。これで手品(てじな)の種がちやんと出ました。七十五兩の行方も大方見當がついたと云ふ樣なものですよ。

おとく　困つたねえ。お政さんにつれられて戻つて來て、本當に改心したと云ふから、どんなによろこんで居たか知れないんだけれど、矢張り一旦浸みこんだ泥は、なかなかに拔け切らないものと見えるねえ。

（顏を見合せて溜息をつく。奥から平太郎が何氣なく出て來る。）

平太　阿母(おつか)さん。

おとく　おゝ、平さんかい。どんな樣子だつたい。

平太　眠(ね)られさうだから、あつちへ行つてゐて呉れと仰有

いました。

おとく　そりや丁度よかつたね（居ずまひを直して）それはさうと平太郎や、私やお前に少し聞きたい事があるんだよ。

平太　はい。（下手に居る）どんな事でございます。

おとく　外ぢやあないんだがね、お前お店のお金をどうにかしやあしなかつたかい。

平太　えツ、店の金を――。

おとく　掛硯の引出に仕舞つて置いたのが、急に見えなくなつたと云ふんだよ。お前別に外へ仕舞直しはしなかつたらうね。

平太　いゝえ、知りません。一體何處からそんな金が廻つて來たんです。

善兵　石町の棟梁と、大久保様の内金でございます。ぢや、別に仕舞ひかへて下すつたと云ふわけぢやあございませんか。

平太　（ムツとして）番頭さん、お前さんは變な言の云ひ方をしなさるね。知りもしない金を私がどうするものか。

善兵　でも、それから帳場へ來なすつたのは、若旦那お一人でしたから。

平太　ぢやあ何かい。私がその金を盗み出したと云ふのかい。

おとく　しツ、大きな聲をお出しでない。外へ聞えたら誰の恥になるのです。

平太　だつてそりやあ餘りな疑り様です。（哀願する様に）阿母さん、阿母さんにはまだ私の心持が判らないのですか。

おとく　だつて、こんな事があつちやあ、信用したくてもし切れないぢやないか。昔は始終だつたからね。

平太　昔ですか――。（急に爭ふ力が拔けた様にグツタリとなる）

おとく　まあいゝ、まあいゝ、大方そりやあ番頭さんが外へでも仕舞ひ忘れたのだらうが（土瓶を出して）こりやあ一體どうおしなのだ。

平太　はい――。

おとく　酒の匂がする様だね。誰がこんな事をさしたのだらう。

平太　はい。それは餘り店の者が勞れた様でしたから。

おとく　そんならそれで、何故ちやんとした道具で飲しておやりなさらぬ。何だか私達がそんなものまで惜んでゐる様に見えるぢやないか。それでなくつてさへ、お前かあんな事をしてお呉れなもんだから、世間ぢやあ、やれ繼子だの、外で出來た子で折合が悪いのと、飛んでもない噂までしてゐると云ふぢやないかね。――でも、私や

本當にお前の阿母さんなんだよ。腹を痛めた親なんですよ。他に子供はなし、もう何もかもお前の云ひなりにして來てやつたのに、何が不足でそんなに私にまで分け隔てをするのだらう。(涙を拭ふ) お前ももう主人代り、多寡が御酒の一升や二升、飲ませたいと思へば、私が何と云ひませう。仲間の衆への交際も、私から一度も出し澁つた事はないぢやないか何故そんな可怪しな事をしてお吳れなのだい。

平太 ――。

善兵 若旦那、お袋樣の後口に付く樣ではございますが、お前樣も折角斯うして心を入れ替へてお歸りなすつたのですから、どうかこの上皆に心配させない樣にして下さいまし。高い聲ぢやあ云はれませんが、大旦那ももう長い事はない樣子、そのあとの杖柱はお前樣お一人。お袋樣のお心もちつとは察して上げて下さいまし。(泌々と) 私も十四の年から御奉公に上つて、お前樣も襁褓の中からお守をいたしました。口はゞつたい事を申す樣ではございますが、侍で申さうなら譜代の家老とでも云ふ樣なもの、明け暮れお家のためを思つてをりまする。さぞ、聞き倦きなすつたでございませうが、どうぞこれ限りと思つて、こんな事はすつぱりとお止めなすつて下さいまし。

平太 (涙を拭いて) 惡かつた。惡うございました。詫ります。これからはキッと愼みますから、どうぞ御勘辨下さいまし。

おとく (心を安めて) よう云つて下すつた。それほどに云ふ事でもないが、何もかもみんなお前のためだからね。それぢやあ、あの娘の事もすつかり片をつけてお吳れだらうね。

平太 (不審氣に) え、あの娘と仰有いますと――。

おとく (ハラ／＼と泣く) まだお前――そ、そんな事まで一つ一つ云はせなけりやあ判らないのかね。知れまいと思つても、何もかも知れてゐるんだよ。現に今日その掛合に來たと云ふぢやあないか。

平太 (益々呆れて) 一向に判りませぬ。それこそ何ぞのお間違ひでございませう。

善兵 (とめて) 若旦那、もうようございます。私が何もかも話をつけますから、唯委せたと一言仰有つて下さいまし。

平太 判らないねえ。一體どうしたと云ふんだ。歯に衣を着せないですつぱりと云つて仕舞つてお吳れ。

善兵 それぢやあ申しますが、若旦那は、あの大和町の仕立屋の娘をどうにかなさいましたでせう。

平太 (驚く) え、あの娘が――。

善兵 どうでございます。どんなにお隱しなすつても、見

たといふ者も一人や二人ぢやあないいんでもう一杯の噂でございますよ。

平太　（憤るより呆れて）馬鹿な、ありやあ唯それ丈けの事ぢやあないか。

善兵　だつて――。

平太　いえ、阿母さん、それは斯うなのです。この朔日の夜に、八幡様へお参りに行つて山清さんの角まで戻りますと、ふいとすれ違つた娘が、どうしたはずみか鼻緒を踏み切つて、横たふしに倒れたので、びつくりして抱き起すと、雨の中ゆゑ手にも着物にもベツトリ泥がついてゐて、どうにも仕様がありませんから、そつと林木置場の影へつれて行つて、持合せの鼻紙や手拭で泥を落して家へ送つてやつた丈けでございます。

おとく　成る程、さう聞けばそれも本當らしいが、それ位の事を恩に着て、何も二遍も三遍も店を尋ねて來ないでもいゝぢやないかね。

平太　へえ、そんなに幾度も來たのですか。

善兵　日暮れから二度も來ましたよ。仰有る樣に、それ丈けのお禮なら、私に云つてもすむ筈なのに、是非若旦那に逢はせて呉れと云ふのは、あんまり叮嚀すぎるぢやあありませんか。あの親娘にも、近頃よくない噂もありますからな。

（と云ふ時、下手庭の方から若い者新七が出る。）

新七　番頭さん、又來ましたよ。

善兵　シツ、大きな聲を出しなさんな、何が來ましたのぢや。

新七　（小聲で）先刻の娘が――こんどはお袋も一緒ですよ。

善兵　お袋も――。（考へて）よし〱俺が行て逢ふから、表から隙見の出來ない處へ待たせておいておくれ。

新七　承知しました。（去る）

善兵　（しんみりと）若旦那、表の事は私が何もかも引受けて、いゝ樣にして歸しますから、先刻云つた樣に、どうぞこれから間違ひの無い樣にして下さいまし。それぢやあお袋樣――。

おとく　たのみました。

（善兵衛一人合點して下手へ立去る。）

おとく　どれ、私も――。

（と、母も起ちかゝる。そこへ下手から襖を開けてお菊が出る。續いて其母のお政が出る。四十位の勝氣ではあるが情知りらしい、確とした町風の內儀。）

お菊　藏前の阿母さんが見えました。

お政　今晩は。

おとく　おゝ、お政さん。

平太　（なつかし氣に）　叔母さん。

お政　嫂さん、暫くでしたねえ。始終こよう來ようとは思つてゐるんですが、やつぱり仲々出られないもんですから、すつかり御無沙汰しちやつて――でも今日はお菊も來て呉れましたので思ひ切つて出て來たんですよ。（包物を出して）これはほんのお見舞のしるしですよ。兄さんは上られないのでせうが、まあ皆んなで召食つて下さいまし。

おとく　まあ、いつも／＼戴いてばかり相すみません。

お政　あら、そんなに戴かれる様な品ぢやありませんよ。それはさうと、兄さんはどんな様子でございます。お菊の話では、やつぱり同じ様だと云ふ事ですけれど――。

おとく　（眉をよせる）さあ、それで困つてゐるんですよ。お醫者様の方角でも變へて見たらと云つて下さるお方もありますが、まさか今までお世話になつてゐて、そんな失禮な事も出來ませんしねえ。

お政　そりやあさうですとも。でも立會つて戴くと云ふ事なら構ひますまい。それで少しでもいゝ様だつたら、私もお菊の事をちやんとしてお貰ひ申したいと思つてゐるんでございますよ。（お菊顔を覆ふ。平太郎も思入）どうせ昔から定つてゐる事なんですけれど、矢張りそれ／＼にして置かないことにはねえ。

おとく　そりやあ、私の方でも、斯うして手傳ひに來て貰つてゐれば、別段にそれと變りは無い様なもの、やつぱり何かなしに遠慮もあつてねえ。（フト氣づいた様に）ホ、、、どうしませう。當人達のゐる前で、とんでもない事を。ハ、、、。

（低く笑ふ。下手から善兵衞がブリ／＼して出る。）

善兵　怪しからん、實に怪しからん――お袋様。

おとく　おゝ、番頭さん、話はどうなりました。

善兵　どうも斯うも、すつかり無茶苦茶なんで――（云ひ差してお政を見る）おや、藏前のお内儀さん、お出でなさいまし。

お政　暫くでしたね。いつもいろ／＼と娘がお世話になります。

善兵　いや、私こそ――。

おとく　それで今の話は。

善兵　こゝで申上げてもよろしうございますか。

おとく　あゝ、どうせ一度は聞いて貰はねばなりますまい。幸だから、こゝで話してしまひませう。お菊さん、お前丈けはあちらへ。

お菊　はい。（下手へ去る）

お政　（見送つて）　嫂さん、何ぞ又心配事でも起きたのでございますか。

おとく　えゝ。又平太郎がひよんな事を仕出來してね。
お政　ひよんな事を――（思はず平太郎を見る。平太郎顔を上げて辯明する樣に見る。うなづいて）それは一體どうした事でございます。
善兵　をかしな娘が若旦那に逢ひたいと尋ねて來てゐるのでございます。
平太　（遮ぎつて）それが何でも無いんです。つい通りかゝつて轉んだのを助けて宅へつれて行てやつた丈けです。
お政　ぢやあ、そのお禮に來たのでせう。その樣な親切は何時でも心がけてゐたいものではございませんか。
善兵　さあ、それ丈けなら、私に言づけして置いた丈けでも得心が行きさうなものなのに、歸れと云つてもしつこく何やら云つてゐますのは、どうでも若旦那に逢はねばならぬ理由があるのではございますまいか。
お政　そりやあ人の性分の思ひ／＼で、それ位の事でも、人傳に云つては氣のすまぬ人もあるのでせう、さう云へば先刻チラリ店先で見た樣に思ひます。白いか黒いか、外に樣子があるか無いかいつそこゝへ呼び入れて、尋ねて見ようではございませぬか。
おとく　成程、それが近道かも知れませぬ。番頭さん、ではこゝへ二人をよんで下さい。
善兵　（不承々々に）畏りました。

（下手へ入る。緊張した間。下女が茶道具を運んで來て去る。やがて庭から善兵衛が仕立屋の老婆おげん、娘おしんの二人をつれて來る。二人とも貧しい身なり乍ら、何處となく上品で、善兵衛等の心配する樣な者とは思はれぬ。）
善兵　さあ／＼、云ふ通りに連れて來て上げた。若旦那も、お袋樣も叔母御樣もみんなおそろひぢや。思ふ程お禮を云つたがよい。ほんに世話の燒ける人達ぢや。
おげん　はい／＼。（前へ進んで）若旦那樣、この間は娘が大層お世話になりまして、有難たう存じました。すぐにお禮に出るつもりでございましたけれど、貧乏暇無しで、つい／＼失禮申しました。（袂から小さな菓子包を出して）これはほんの僅かでございますけれど、お納めなすつて下さいまし。
お政　まあ、どれ程の事をいたしましたか知りませぬが、そんなにして戴いては困ります。
おげん　いえ／＼貴女、ほんのしるしでございます。（娘に）さ、お前もよくお禮を申上げなさい。
おしん　あい／＼。若旦那樣、いつぞやは有難うございました。
おげん　では、これでごめんを蒙ります。
お政　（止めて）あもし、たつたそれ丈けの御用でお出で

なすつたのでございますか。
おげん　はい。外に仔細はございませぬが、(怨めしさうに善兵衞を見て）貧すれば鈍するとやらで何やら云ひがかりでもつけに來た樣に云はれましたので、その云ひ譯についい長居をいたしました。(涙を拭うて）貧乏はしたくないものでございます。正直に暮してゐるつもりでも、人樣からとや斯うと後指を指されたり疑られたり、むごい目に計り逢はされます。
お政　濟みません。店の者の不肖は私からお詫び申しまする。では、それで本當に何も云ふ事はござんせぬか。
おげん　はい若旦那にお目にかゝれば、私の心持もそれで濟みます。もう二度とは參りませぬ。さあおしん。
おしん　あい／＼。みな樣ごめんなさいませ。
（娘を連れて、丁寧に挨拶をして下手へ去る。）
お政　（見送つて）正直さうな人達ぢやあありませんか。
善兵　でも――。
お政　（抑へて）まあ、どうぞ。そんなに人を疑つてゐたら、一日も安心して暮しては行けますまい。（おとくに）嫂さん、何とさうではございますまいか。
おとく　併し、まだ外にも色々な事があるもんだから――。
お政　（話を打ち切る樣に）あとでゆつくり伺ひませう。どうせ今夜は泊めて戴くつもりで來ましたから。（起つ）では、一寸兄さんに逢つて來ませう。
おとく　寢てゐるかも知れませんよ。
お政　起さない樣にします。（思ひやり深く）平さん、後にゆつくりお話しませう。
（奥へ行く。おとくも仕方なしについて行く。善兵衞は下手へ去る。平太郎は化石した樣に一人居殘る。長い間。やがて突然次の襖の影で若い女の泣き聲が聞える。平太郎驚いて起つて行つて襖を明ける。お菊が顏を覆うて泣き倒れてゐる。）
平太　おゝ、お菊さん。そんな處でどうしたのだ。
お菊　どうしたと云つて――餘まりぢや。餘りでござんす。
平太　さあ、それ故譯を尋ねてゐるのぢや。又店の者にでも弄られたのか。
お菊　でも、あんまりひどい――私、兄さんがいとしうござんす。
平太　そんなら先刻の話をみんな聞いてゐたのか。
お菊　あい。何やらもつれた樣子故、一旦あちらへ行つたれど、そつと引返して殘らず聞きました。（縋る）兄さん、お察し申します。
平太　では、お前は私を信用して呉れるのか。
お菊　あい、とうからさう思つてをります。叔母樣や番頭さんは邪推でございます。

平太　（涙ぐむ）有難う。お禮を云ふよ。世界中にその樣に思つて呉れるのは、お前一人かも知れぬ。（やゝ反抗する樣に）併しさう思はれるのも無理は無い。私の心も體も穢れ切つてゐるのだ。ついこの前までは寐る家もなかつたのだ。

お菊　でも――いえ〳〵、たとひ昔はどうあらうと、今の兄樣は澤田でございます。立派でございます。あゝして每日まつくろになつて働いておゐでなさるのを見ると、私はいつも淚がこぼれてなりませぬ。

平太　併し、淺間しい昔の私の姿を見たら、矢張外の者の樣に私を下げすむ樣になるだらう。千に一つ昔噺をしても、お前は私の女房にならうとは思ふまい。

お菊　まあ、どうしてその樣な言の云ひ方をなされます。僻心はすてゝ下さいませ。私は何もかも阿母さんから聞いてをりまする。

平太　むゝ、それでゐて、この家に私と一緒にゐると云ふのか。

お菊　でもそれはとうから定まつてをりましたもの。（甘える樣に）私や、それをたのしんでをりました。

平太　有難う。よく云つて呉れた。それ一つで、私はどんな苦勞でもこらへられる樣な氣がする。

（强いと抱きしめる。恍惚とした間。上手潜戶からお仙か案内もなしに入つて來る。手に火打箱を持つてゐる。）

お仙　ごめんなさいまし。

二人　え。（ハッとして飛び退く）

お仙　（知らぬ顏で）あの船方の者ですが、つい火口を切らして困つてをります。少しばかり分けて戴く譯には參りますまいか。

平太　火口でございますか（云ひつゝお仙を見て、キッとなる。やがてうなづく）お菊さん、お淺にさう云つて持たせて上げて下さい。

お菊　あい――。

（何の氣も無しに立去る。）

平太　どれ、私も――。（起ちかゝる）

お仙　（止めて）ちょ、ゝ、待つてお呉れ。平さん私だよ。とんだお邪魔をしましたねえ。

平太　（間を置いて）お仙か――。

お仙　色氣の無い躄だね。まあ下にゐてお呉れ。まだ喰ひ付きやあしないから。（平太郞止むなく下へ坐る）でも久しぶりだつたね。二度目の出逢がこんな處にならうたあ、思ひがけが無かつたよ。

平太　しッ。（止めて）お前はどうしてこんな處へ來たんだ。

お仙　先刻名乘つた通りさ。可哀想に荷足の船頭の內儀さ

んになつてしまうたんだよ。

平太　ぢやあお前、今日來た船の。

お仙　さうなんだよ。蛙の樣に苫(とま)の下で丸くなつてゐると、お前さんの聲が聞えたからそつと覗いて見たんだよ。つきない御緣だと云ふわけでね。

平太　ふん、どんなもんだか。（碎けた調子で云つてハツとする）いや、何しろ驚いたよ。

お仙　本當にとんだ濡場(ぬれば)へとびこんで來てね。オホヽヽホ。ごめんなさいな。それ程惡黨ぢやあ無いんだが、つい何の氣なしにぶつつかつたと云ふわけなんだから。

平太　（顏を背けて）ば、馬鹿な。

お仙　隱さなくつたつていゝぢやあ無いか。私がどうしようと云ふんぢやあ無しさ。――だが、一寸いゝ娘だね。食ひ荒らしのお前さんにやあ勿體ない位だ。幾つだい。

平太　（思はず釣り込まれて）十七だ。

お仙　若いね。それぢやあこれからどんなにでも仕込めるわけだね。

平太　冗談云つちやいけねえ。あんな小娘を――。

お仙　へん、どんなもんだか。お前さんの手際はあざやかだからね。

平太　だが――。

（何か續けようとする時、お菊が出る。それを見てハツとして元の謹嚴な樣子に返る。）

お菊　お待遠樣。あのぽつちりしかありませんけれど――。

お仙　（別人の樣に叮嚀に）いゝえ、御面倒を申しまして濟みません。何あに、これ丈けありやあ澤山でございます。

お菊　さうでございますか。――では。（早々行つて貰ひたい樣な思入）

お仙　（一寸てれる。箱をもつてもぢ〳〵する）あの――何でしたね。オホヽヽヽ。

お菊　（二人の樣子を見て、朧氣に推量する）兄樣(にいさん)、私はお先へ仕舞ひます。（下手へ下る）

お仙　（輕い嫉妬を感じて）ほんとに好い娘(こ)だね。あんなのがあつちやあ、私の事なんか思ひ出しても呉れなかつたんだらう。

平太　（充分に警戒して）まあいゝ。そんな事はどうでもいゝから――。

お仙　おや、出て行けと云ふのかい。そりやお前さん酷(ひど)いよ。たとひ別れたつてあれ程の仲だつたんぢや無いか。そんなに薄情にしないでもいゝぢやないの。

平太　ぢやあどうしろと云ふのだ。お前は何を云ひに來たんだ。どんな用があるんだ。

お仙　まる三年ぶりで逢つたのに、出て行けがしに扱ふ樣

な薄情な男に、用なんかあるもんかい。だがね、どんな樣子だか一寸お前さんの樣子を見に來たのよ。大層堅氣になつたと云ふからね。それに舟に許りゐちやあ氣が腐つて仕舞ふからねえ。

平太　それぢやあ退屈凌ぎに――。

お仙　まあ、さうなんだよ。手が廻つたと云ふ程豪氣な譯ぢやあないんだけれど、陸は少し煙たいから、當分あんな處へ潜り込んでゐるんだが、この陽氣ぢあ、いくら何でも少しうんざりしてゐた處へ、ちよいとお前さんの事を聞いたもんだから、急に色々な事を思ひ出したのさ。火口が切れたとはあんまりいゝ智慧でもなかつたけれど、外に仕樣もないしねえ。(自墮落に横になつて手を出す)何しろ、久しぶりだ、まあ一服よんでお呉れ。

平太　(仕方なしに)　煙草か。粉になつてゐるかも知れないよ。(そこへ投げ出す)

お仙　邪慳だねえ。序の事に吸ひつけて貰ひたいね。お前さんの吸付煙草も忘れちやつた。(投げかへす)

平太　(困惑し切つて)　そ、そんな無理な事を云はないで――私も今は昔とは違ふんだから――。

お仙　だから何も昔の樣になつて呉れと云つてゐるんぢやあ無いだらう、私にだつて亭主があるんだからね。

平太　ぢやあ猶更こんな處でも見られては困るではないか。

お仙　いゝんだよ、何と思つたつて構やあしない。(煙草盆を引きよせて)　仕方がないお手盛だ。(のんきな樣子で白い輪を吹く)

平太　(凝つとそれを見てゐたが、何か首肯いて起つて棚の硯箱を下して、その中から銅製の水入を出して紙に包んでもつて來る)　話はあとで着けるから、とにかくこれを以つて歸つて呉れ。

お仙　おや、異な品を呉れたんですね。何だらう。(明けて見て)　水入か。ハ、、、。とんだ梅忠だね。折角だが返しますよ。私やゆすりに來たんぢや無いんだからね。

平太　えッ。

お仙　幾らに引換へて呉れるつもりだか知らないけれど、どうせ店の金をくすねて來るんぢやあ知れたもんだ。私も一本の二本のと稼ぐつもりなら、こんな形で一人で裏口からやつて來はしない。もつと役者を揃へて、表から大びらに乘込んで來らあな。(ポイと投げ戻す)　それにね、今の亭主は男は野暮たけれど、金はお前さんより明るいから、小遣に不自由はしないよ。憚乍ら金は小判と云ふものを、たんと持つて居りまするだ。何なら貸してやつてもいゝよ。ほら。(懷中から小判を一枚取出して投げる)　まだあるよ。

平太　いや、そ、そんな事を――。
お仙　だつて、前頃はかうしてよくせびつて行つたぢや無いか。ハヽヽヽ。
（笑ひ乍ら小判を手主に取つてゐる。上手から以前の藤兵衛が出て來る。二人を見てハッとする同時に怒氣をふくむ。）
藤兵　お仙、お前こんな處にゐたのか。隨分方々探したぜ。
お仙　（ふりかへつて）おや藤さん、何か用かい。
藤兵　べらぼうめツ、用があるから探しに來たんだ。手前こんな處で何をしてゐたんだ。
お仙　火口がしめつたから貰ひに來たんだよ。
藤兵　（鼻で笑ふ）ふゝ、とんだ燒木杭だ。巫山戯た眞似をしやあがると、その分ぢやおかねえぞ。
お仙　威張つたつて駄目だよ。（平太郎を敎へる樣に）若旦那だよ。挨拶ぐらゐはするもんだよ。
藤兵　（初めて氣がついた樣に）さうかい。そりやあとんだ失禮をしやした。（お仙に）これでいゝだらう。ぢや、行かう。（手を執る）
お仙　（振切つて）およしよ、見つともない。
藤兵　へん、そんな柄かい。
（巫山戯乍ら上手へ去る。平太郎は凝つとそれを見送る。影が見えなくなつた時、ドッと二人が笑ふ聲がする。平太郎はハッかれた樣に起つ。しかし、すぐ理性で押へつけようとする。奥の廊下の障子が明いて、おとくが顏を出して、樣子を窺ふ。二人の視線がパッタリと合ふ。おとくは急いで障子を閉め切る。平太郎はハッとして、その方を凝視してゐたが、何か決心したらしく、急いで下手の方へ行きかける。奥からお政が足早に追うて出る。）
お政　これ、平さん。
平太　叔母さん。（崩折れる樣に兩手をつく）殘念でございます。
お政　察してゐます。先刻から又嫂さんに色々の事を聞きました。思ひの外の廻り氣でお前もさぞ心外だらうが、こゝが男の辛抱の仕處だと思ひますよ。
平太　はい。
お政　失くなつた金と云ふのも、私の考へでは、番頭さんの仕舞忘れだらうと思ふけれど、難ケしければ私がそつと立替へておいても濟む事。お酒の事もあり中の話、私からよく嫂さんに話しておきました。いつも云ふ通り、惡くなるのはたつた一時、善く思はれるのは十年。一年に一人づゝなつとくさせる程のつもりで、氣ながく暮して下さい。
平太　はい。私もさう思つて、今日まで堪へられる丈けは

堪へて來ました。どんな横目で見られても、私は私のつとめ丈けは果さうと、この心を押へつけられる丈は押へつけてきました。けれどももう駄目でございます。(思入つて）叔母樣、私をもう一度この家から出して下さい。

お政　さ、さう云ふのは無理ではないが、今云ふ通り、丁度こゝらが頂上ぢや。こゝを一つ踏みこたへたら、あとは自然に下り坂、手も足も輕くなるでせう。

平太　でも、私には其一息が上れさうに思はれませぬ。どうぞ見逃して下さいまし。

お政　と云つてお前が出て仕舞つたら、この家はどうなるのです。お父さんはどうなるのです。どう思ひかへしても心もとない御樣子、若しお前が又出て行つたなら、すぐに變が來ようも知れませぬ。お前は親の死骸を足蹴にしても、自分の意地を立て通さうとお云ひなのか。

平太　いゝや、意地ではありません。ひがむのでもありませぬ。世間とならまだ爭つて行ける樣な氣がします。土に食ひついても行ける樣な氣かします。私は自分の心に負けさうになつたのです。所詮このまゝでは過されぬ身だつたのです。

お政　では、この前の約束はどうなるのだ。去年の秋、お前から私の家を尋ねて來て、今までの樣な實の無い暮が恐しうなつた、これからはどんな苦勞をしても人間らしい暮がしたいと、しみ〴〵と云つたのは當座のがれの嘘でしたか。

平太　いゝえ、嘘ではありませぬ。眞實さう思つてをりました。――二十四の年家を脫け出してから、野良犬の樣に、あつちこつちとうろつき步きました。誰も自分を責める者もなし、叱るものもなし、仕たい放題、云ひたい三昧、喧嘩もする賭博も打つ、女は元より。それでもどうにか斯うにか生きて行かれ、樂も出來るので、同じ一生ならと、すつかりそれで立て通す氣でゐましたが、その時、肝を食ひ合ふ樣にしてゐた男が、惡病でコロリと死んでしまつたのです。(深い追憶に耽つて）さうなると世間は薄情なもの、誰一人かまつて與れるものも無いので、私一人で、そいつをぐる〳〵卷きに莚に卷き込んで、荒繩でしばりつけて、桐ヶ谷の燒場までしよつて行きました。(段々言葉がぞんざいになる）しかし、隱坊にやる金も無えんで、隅つこの方で燃え殘りの槇や藁を拾ひあつめて念佛を云つて火をつけると、仕方がねえと云つた風に靑い火がチョロ〳〵と燃え出して、野郎ヂク〳〵と油をたらし初めた。これで綺麗さつぱり片がつくと、デツとかう見つめてゐると、フイとそいつの一生の事を考へ出したんで――こいつあ、この世の中へ何をもつて來て、何を殘して行くんだらう――何にもねえ――さう思

ふと、ヅッと寒氣がして私ちあ逃げて歸りたくなつた。そりあ外の男ぢやあねえ、あつしなんで、あつしが赤の他人に燃え殘りの槇を拾つて燒かれてゐるんで――。

お政　さ、それで本當に目が醒めて、家へ戻る氣になつたお前が、何故自分の心を疑ぐるのです。

平太　疑ひたくはありませんが、叔母樣、私の星がさうきまつてゐたのです。（膝を進めて）叔母樣、私が先刻店の者に內所で酒を飲ませてやつたのは、仕事がきびしかつたのを可哀想だと思つた許りぢやあなかつたのです。

お政　え。

平太　酒を飲ませて浮いた話を聞かうと思ふ下心があつたのです。お菊さんが淺草へ行つた話をすれば、すぐにそこらにゐた頃を思ひ出します。あの仕立屋の娘でも、親切ばかりで介抱してやつたとは思はれませぬ。

お政　ではお前は、どの樣にしても浮いた心が拔けないとお云ひなのだね。

平太　さうです。それが私の生れつきだと思ひます、繼子繼親と云ふわけでもなし、兩親はそろつてゐるし、家もちやんとしてゐるのに、何の譯もなしに狂ひ出した私の體の中には、生れつき道樂者の血が一杯つまつてゐるのです。一時はかうして押へつけてゐても、いつしか吹き切らないではゐますまい。その時は、今も昔も同じ事です。それよりか今の中にお菊さんに婿でも取つて、この家の跡の立つ樣にしておくのが、阿父さんへの本當の孝行だと思ひます。叔母さん、どうぞさうなすつて下さいまし。

お政　（頭をふつて）いゝえ、折角だけれど、それはお斷りします。

平太　え。

お政　お菊はお前の許嫁にはしました。そして今はかうして家の者同樣になつてゐれど、元々一人でこの家をつぐ身ではありませぬ。私もつがせはしますまい。

平太　有難うございます。そのご親切は一生忘れませぬが、私はもうあきらめました。叔母樣もどうぞあきらめて下さいまし。

お政　いゝえ、私はあきらめませぬ。お前がさうして自分で自分の心を責めてゐる間は決してあきらめはしませぬ。（膝を進めて）ねえ平さん、生れながら善人か善人で一生をすごすのは易い事。惡人が善人とならうと苦しんで生きて行く方が、どれ丈け尊いか判りませぬ。高い聲では云はれねど、私の姑御は、昔は若狹屋の鬼姑と綽名をされて、三人までも嫁をいびり出したお人。それを承知で嫁入した私だけれど、時には居たゝまれない日もあつて、世間の評判を味方にして、逃げて戻らうと思つた

事も二度や三度では無かつたが、その都度にぢつと心を食ひしめて、死身になつて辛抱した故、今ではまことの親子仲より睦じう暮して居りまする。
平太　では、この平太郎の心も、奥の奥からゆるがぬ様になれる日があると仰有いますか。
お政　なられませいでか。お前が十年の夢のさめた時の心持は、だれの心持よりも尊いと思ひます。
平太　私をお見抜き下さいますか。
お政　疑ふ程なら、大事な一人娘をこゝへよこしはしませぬ。この上どの様な事があらうとも、両親は云ふまでも無く、世界中の人がみんなお前を疑つても、私達親子はいつまでも今日の通りぢやと思つてゐて下さい。
平太　有難うございます。有難うございます。（平伏して泣く）そのお言葉が萬人力です。私はそれ一筋に縋つてこの上ともに出精いたします。有難うございます。私はやつと明るい世界へ出た様な氣がいたします。
（涙を流して喜ぶ、下手より番頭の善兵衛が金包を持つて來る。二人を見ると恐縮した様に両手をつく。）
善兵　若旦那、相済みません。
お政　善兵衛どの、どうなされました。
善兵　お金がございました。私がつい用心して神棚へ上げて忘れてをりました。色々な事を申しましたのは、どうぞご勘辨下さいまし。（前へ出す）
お政　それぢやあ矢張思つた通りでしたね。（平太郎に）平さん、御覧なさい。神樣はいつも御見通しだから。（金を持つて起つ）さ、奥へ行つて皆にこの話をしてよろこばせませう。
（行きかゝる。上手からお仙が水桶を提げて出る。）
お政　おや、お前さんは。
お仙　水をお貰ひ申しに參りました。
（何氣なく云ふ。平太郎ハッと脅える。二人は不審氣にそれを見る。）

――幕――

第二幕

舞臺

元の材木河岸

前幕より直ぐあと。朧月夜の筏の上で、源六、新七、萬吉、留藏等、細い棒を持出して來て、棒押しをしてゐる。程よき處に腰掛になる樣な材木を出してある。初めは新七と源六とが勝負をする。新七負ける。萬吉代る。仲々に勝負がつかない。あとの二人は棄臺詞で應援する。結局萬吉が負ける。皆々ワッとはやす。や

がて下手からお仙が空の儘の水桶をさげて出る。

源六　おゝ、姐さん。

お仙　見つとも無いねえ。色氣の無い事をしてゐるぢやあ無いか。

源六　だつてお前さんの樣に有り過ぎても困らあ。（向ふを顎で指して）又行きなすつたね。

お仙　水を貰ひに行つたんだよ。

源六　へえ、どんな水を――（桶を覗いて）何んだ、空つぽぢや無いか。お前さんがそんな殊勝な事をする筈は無いと思つた。

お仙　ご挨拶だね。さう見くびられちやあ、お前さんの女房にやあなれないね。

源六　（首をすくめて）ふ、又お株だ。そんな事を聞かれようもんなら、親方に擲られらあ。

お仙　意氣地が無いねえ。擲られる位が恐くつて色が出來るもんか。（船の方を見て）それはさうと藤さんも早太も見えないが、何處かへ出かけたのかい。

源六　（指で丸を作つて目の前に出す）これだ。

お仙　怒つたのかい。

源六　お前さんがあんまりわい／＼騷ぐもんだから、氣を惡くして哥兄をつれて行つちやつたんだ。どつかで冑をきめてゐるんだらう。

お仙　ふん、又醉ばらつて何とか云はうと云ふんだね。甚助。

源六　だつてお前さんの樣に手ばなしで惚けられちやあ、誰だつてあんまりいゝ氣持はしませんよ。

お仙　でも、あの人がそんなに燒餅を燒く程私は若旦那に惚れてゐるんぢやあ無いよ。

源六　それぢやあ何故ちよい／＼用を拵へて見に行きなさるんだ。あんまり判らなさすぎるぢやあありませんか。

お仙　さうだねえ。さう云やあ不思議だ。私にだつて判らないんだから――。

源六　心細いなあ。

お仙　（うつとりとして）だけれども、昔を思やあ深い仲だつたんだからねえ。（胸を押へて）こゝん處に、ぽつちりそれが殘つてゐるのかも知れないよ。

新七　へえ、そんないゝ仲だつたんですかい。

お仙　心中までしかけたんだよ。ハヽヽヽ、お互に若かつたねえ。

源六　（進みよる）そいつあ初耳だ。どうだい、退屈しのぎに話して聞かしてお呉んなさい。

お仙　それこそご挨拶だ。だけれども、退屈しのぎ位の話かもしれないねえ。（船端に寄りかゝつて一層艶めかしく）面倒臭い枕は拔きにするがねえ、私が之の神明の矢

場で羽根を伸してゐた頃よ。あの人が尾羽打枯して轉り込んで來たのさ。年は若いが、一寸様子がいゝんで、まあ、こつちから先にポーとなつちやつたんだね。

源六　（よろこぶ）　よう〳〵。

お仙　黙つてお居で。ところが向ふでも萬更でも無いと見えて同じ様にこつちを見てゐるのさ。さうなりやあ素人同志たあ違つて分りは早いやね。二月三月はまるで夢中で暮したんだよ。

新七　（のり出す）　成る程、それから。

お仙　あとは定まりの借金の山よ。身うごきも出來やあしない。抱主は喧しく云ひ出す。お客はよりつか無くなる。とゞのつまりがこれもお約束の道行さ。四月の末で、おあつらへ向きに小糠雨が降つてゐる中を、白手拭の吹き流しで、素跣足さ。ちよいと誰かに見せたい様な粋な様子だつたよ。

萬吉　だつて見つけられちやあそれきりぢやあないか。

お仙　口を出すんぢや無いよ。——そこでいゝ工合に逃げ出すには逃げ出したものゝ、二人とも文無しだらう。とても遠走りなんざあ出來やあしない。たうとう芝濱まで行つたのがおしまひよ。

留藏　そこでドブンとやりなすつたかね。

お仙　せつかちだね。それぢやあ今まで生きちやあ居られないぢやあ無いか。

源六　ぢやあ、そこへいゝ役者が出て來たんだな。

お仙　ところがお生憎様だ。誰も來やあしない。泳ぎもしらず、船も漕げず、思案の果てが、やつぱり死ぬより外は無いときまつて、小石を拾つて袂へ押しこみ、しごきを解いて體と體とをしつかり縛りつけて、南無阿彌陀佛てなわけで、いざ飛び込まうとする段になつて、何だかつまらなくなつたんだよ。

源六　つまら無くなつた——どうして。

お仙　判らないかねえ。そら、死んだらそれつきりどうする事も出來ないぢやあ無いか。

源六　へえ。

お仙　ね、判つたらう。それからさつさと止めにして、そつと家へ歸つて裏口から上つて、足を洗つて、濡れた着物も着かへて、知らん顔をしてゐたのさ。

新七　そして、それからも矢張逢つたんですかい。

お仙　それつきりよ。あとで二三度來たけれど、何だか馬鹿々々しくて逢つてゐられやあしない。それから思ひ出しもしなかつたよ。

源六　頼み無いなあ。それが今日初めて逢つたと云ふわけなんだね。

お仙　まあそんな事さ。それがお前、何にも知らない顔で、

堅氣の若旦那で納まつてゐるんだから、一寸位なんとか云つてやりたくなるぢやあ無いか。

源六　それでとんだ雪駄直しの長五郎と云ふわけだね。

お仙　馬鹿におしで無い。私や小屋者ぢやあ無いんだから。どうせあしたはどつかへ漕いで行く舟だ。未練なんかありやしないよ。

（この邊にて藤兵衛と早太上手に一寸顏を出して引込む。）

源六　だが、その未練の無いものが、何でそんなに――。

お仙　うるさいね。（一寸考へて）あゝ判つた。お前藤さんに頼まれたんだね。

源六　（ドギマギして）いや、そ、そんな事たあ――。

お仙　隱したつてちやんと知れてゐるよ。（懷から金を出す）ぢやあ、私も上げよう。お惚け賃だよ。どつかで遊んでおいで。

源六　（煙に卷かれて）へえ――。

お仙　（新七等に）お前さん達も一緒に行つてお出でよ。（聞えよがしに）なあに、みんな若旦那に戴いたんだから、遠慮は入らないよ。

新七　（萬吉等に）おい、どうしよう。

萬吉　行つてお出でよ。庫の戸は開けておいてやるから。

新七　お前は――。

留藏　俺等か。俺等はまあ止さう。

源六　ぢやあ、お前と二人で行かう。姐さん留守を頼みますよ。

お仙　なんにも盜られる樣な品はありやしないだらう。

（源六、新七、上手へ、他は下手へ去る。入れ違うて上手から藤兵衛と早太とが出て來る。）

藤兵　（怒氣を含んで）おいお仙、手前本當に太い女だな。

お仙　藤さんかい。まだ何とか云つてゐるのかい。見つとも無いぢや無いか。

藤兵　（船へ移つて）手前又あいつの處へ行きあがつたな。

お仙　うるさいね。それがどうしたと云ふんだい。

藤兵　どうも斯うもねえ、斯してやる。（摑みかゝらうとする）

お仙　（逃げて）おや、お前さん私を手籠にする氣かい。

藤兵　動かれねえ樣にフン縛つておくんだ。（手をねぢ上げて）やい早太、繩をかして呉れ。

早太　（ためらふ）だが――姐さん、いゝ加減に詫つてしまひなせえ。

お仙　詫れ。何もあやまる樣な事をした覺えはないよ。

藤兵　白ばツくれるな。こゝの若旦那つて奴は何だい。

お仙　昔の情夫さ。

藤兵　昔ばかりぢやあるめえ。

お仙　（疊鉢に）どうだか、勝手のいゝ樣に思ふがいゝや。だが、縊つたつて殺したつて、私や斯うと思つたら、キッと思ふ樣にして見せる。
藤兵　ぢやあ、まだ逢はうと云ふんだな。
お仙　御推量の通りさ。
藤兵　よし、さう聞きやあ俺にも考へがある。（突き放して）おい、早太、先刻云つた樣に、あいつをこゝへしよぴき出して見れ。
早太　矢張やるのかい。
藤兵　あたり前だ。こんなに踏みつけられて指を啣へてゐられるもんかい。
早太　だが何と云つて來よう。
藤兵　判取が間違つたとか、他所の木を上げたとか、何とか誤魔化して來ねえ。幸に庫の戸が明いてゐる樣だ。
早太　ぢやあ一番行てかうか。その代り、あの方はいゝだらうな。
藤兵　大丈夫だ。前金まで渡したぢやあねえか。
早太　よし來た。（下手へ去る）
お仙　お前さん、喧嘩を賣るつもりかい。
藤兵　むゝ、加勢しやあがると、手前から先へいはせるぞ。
お仙　大丈夫、大人しく見物してゐますよ。だがね。あれも唯の鼠ぢやあないんだから、氣をつけないと反つてこつちが食ひつかれるよ。
藤兵　そんな事で脅かされるもんかい。器用にお前を渡すと云やあよし、四の五のぬかしやあ、首根子を押へつけて、鼻柱を壁へこすりつけてやらあ。（下手を見て）野郎來やあがつたな。
（下手から早太を先に平太郎が何氣なく出て來る。お仙を見てハッとするがすぐ元の樣子にかへる。）
平太　間違つてゐると云つて、どんな工合でございます。
早太　へえ。（藤兵衞と目交して）その先刻申しました樣に、新材木町の山サの店へ行く、並物の杉板がまぎれこんだので——。
平太　杉板が。（そこいらを見て）一向そんな物はない樣ぢやありませんか。
早太　ぢやあまだ舟に殘つてゐたのかな。すみませんが一寸見てやつて下せえまし。
平太　舟へ——（ためらつたが餘儀なく）見ませう。
（筏の上へ下りて來る、それをやり過しておいて後から藤兵衞が呼びかける。お仙は傍を向いて知らぬ顏をしてゐる。）
藤兵　もし、若旦那へ。
平太　はい。
藤兵　先刻はどうも濟まん事をしやした。こんながさつな

野郎ですから、どうか勘辨してお呉んなさい。
平太　はい。
藤兵　ところで若旦那、ちよつと御無心があるんだが、どんな事でも聞いて下せえますか。
平太　はい。事と品によれば御得心の行く様にいたしませう。
藤兵　そいつあ有難てえ。（ガラリと調子をかへて）お前、それぢやあ、この女を知つてゐなさるかえ。
平太　あの女を——（凝ッと見る。そして凡てを推して）はい。知つてをります。
藤兵　（膽をぬかれて）え。
平太　昔は隨分馬鹿を盡した仲ですが、今ぢやあ全くの他人、どんなにでもなすつて下さいまし。
藤兵　え、それぢやあお前は——。
お仙　ハ、、、。やられやあがつた。だから云はない事つちやあ無いよ。お前さんたあ段違ひだよ。
藤兵　（赫つとして）喧しい、默つてゐろ。（平太郎に）巽に器用な挨拶をしなすつたが、本當にお前他人なんですかい。
平太　（一層丁寧に）はい、嘘を云つたつて仕様がありません。（早太に）それが御用だつたのでしたら、もう御免を蒙ります。（行きかける）
早太　（遮る）おつと〻〻待ちねえ。その他人の女を家へ引き入れたり、金まで呉れたのはどこの誰だい。
平太　金をッ。（はッとしてお仙を見る）い〻や、そんなものを渡した覺えはありません。
藤兵　だつて現在こ〻に持つてゐたぢやねえか。お仙、何とか云ひねえ。
お仙　ぢやあ先刻の話をかげで聞いてゐたんだね。いけ好かない。源六にやつた金はお前さんが私に小遣に呉れたんぢやあ無いか。しつかりおしよ。そんなに燒が廻つてどうするんだい。
藤兵　何をッ。（女に嘲笑された怒を平太郎に移して來る）もう文句はねえ、どうせこ〻へ誘び出したなあ、お前と出入をするつもりだ。お前も萬更素人ぢやあねえだらう。思ひきりよく支度をするがい〻。
平太　だつてそりやあ——どうぞ御勘辨なすつて——。
（あくまでも爭を避けて、隙を見て家へ逃げて行かうとする。藤兵衞と早太とそれを追ふ。と〻平太郎後の上から下手河岸へ飛び上る。早太が後からムヅと組みつく。）
早太　さあ、うごいて見やがれ。
平太　む〻。（限り無き悲痛の顏色で）ぢや、どうでも喧嘩を賣ると云ふのか。

藤兵　さうだよ。お前か俺か、勝つた奴が女を自由にするのだ。

平太　ぢやあ、どこまでもついて來るのか。（良心の激しい苦悶。やがて爆發した樣に叫ぶ）よし、もうこれまでだッ。

（パッと早太をふり拂ふ。早太はずみを食つて筏の上に落ちる。その拍子に平太郎の襟を掴んで引く。肩が脱げて眞白な肌に美しい上り龍の彫物が現はれる。）

平太　さあ、ついて來るなら來て見やあがれ。

藤兵　何をッ。（合口をキラリと拔く）早太、いゝかい。

早太　合點だ。（之も短刀を拔く）覺悟しやあがれ。

（斬つてかゝる。平太郎かい潜つて捻ぢ伏せ、短刀をもぎ取る。その間に藤兵衞が突いて來る。引つぱづして起つ。早太が無手で組ついて來る。平太郎一太刀それを斬る。早太ワッと聲を立てゝ上手へ逃げかけて、歩板(あゆみ)から水の中へ落ちて姿を消す。）

藤兵　やりやがつたな。

平太　何をッ。

（二人は必死に爭ふ。お仙はどちらが勝つてもいゝ樣に腹をきめて、芝居でも見る樣に面白さうに見てゐる。やがて藤兵衞が一太刀斬られる。ひるむ處をつけ入つて横腹を抉る。藤兵衞虚空を掴んで絶息する。平太郎ホッとして、失心した樣に茫然として立つ。時の鐘。お仙は思ひの外の成行に恐怖に捕はれてゐたが、すぐと娼婦らしい本性をとり戻す。）

お仙　お目出度う。甘(うま)くやつたねえ。

平太　――。（無言）

お仙　（死骸のそばをそつと通りぬけて平太郎の傍へ來る）だから私が止めてやつたんだよ。（甘える樣に）だがお前さん、これからどうする積りなの。まさか駈け込みなんかしやしないだらうね。

平太　――。

お仙　（あたりを窺うて）見てゐるなあお月樣だけだ。（益益甘つ垂れて）ね、私と一緒にどつかへ行かうぢや無いか。私や本當にお前に惚れ直しちやつたよ。

平太　――。（尚も無言）

お仙　（肩を抱いて）ねえ、ほんとに盡きない御緣だつたのさ。もう一度道行をしたつて、まだ笑はれる程の年でも無いよ。ねえ。（肩越しに覗き込む）

平太　――。（無言に頭を横に振る）

お仙　いやだとお云ひなのか。

平太　――。（うなづく。刀を上げて上手を示す）

お仙　おや、私に行けとお云ひなのか。

平太　（うなづく）一人で――一人で置いて呉れ。

お仙　だつて今更になつて私を棄てるなんてひどい。（しつかりと手を執つて）放しやしない。離れやしない。（グイ／＼と押しつける）

平太　む〻。

（平太郎それを凝つと見る。その目が段々と凄味を帶びて來る。お仙はギヨツとして飛び退く。）

お仙　まあ凄い顔だね。まさかお前私も殺すんぢやあるまいね。

平太　――。（無言、猶も鋭く見詰める）

お仙　ねえ、平さん、平さんてば――（忍びよつて、短刀を持つた手を摑む）

平太　何をするツ。

お仙　どうするものか。藤さんの仇だ。（斬つてかゝる）

平太　何だとツ。

（極度の憎惡を感じて、すぐに刀を奪ひ取つて一太刀斬る。お仙倒れる。すぐに止めを刺さうとする。その手に縋つて叫ぶ。）

お仙　待つてお吳れ。平さん、私やつぱりお前を思つてゐるんだよ。お前一人を殺す氣ぢやあなかつたんだ。二人で、二人で死ぬつもりだつたんだ。

平太　え〻、口から出委せの事を云ふな。手前が來たばつかりに、俺の一生を棒にふつて仕舞つたんだ。

お仙　そ、そりや私だつて同じだ。私や殺される覺えはない。

平太　やかましい。おのれはこの體についてゐた惡靈だ。今にそれを叩き落してやるのだ。

お仙　ぢやどうでも殺す氣か、畜生ツ、誰か來てツ。（死力を盡して刎れかへして上手へ逃げて行きかける）ひ、人殺し――。

平太　うぬツ。

（飛びかゝつて襟髮をとつて引き戻す。お仙は激しく抵抗するが、とゞ切り倒されて仕舞ふ。）

平太　（上吊つた音聲で）ハ、、、、ざ、ざまあ見やがれ。もうどうする事も出來めえ。

（ホツとする。と、急に息切れがして摚と其處へ倒れる。短い間。下手からお菊が足袋跣足で一散に走つて來る。）

お菊　兄さん。（取りつく）

平太　（我に返る）お菊さんか。（死骸を指して）み、見たか。

お菊　あい――。

平太　（悔いる樣に）や、やつちやつた。お前や叔母樣にあんなに云はれたが、俺はやつぱりこんな者に生れついてゐるんだ。

お菊　いえ〳〵違ひます。兄さんが悪いんぢやありません。みんなその人達が悪いのです。

平太　ぢやあお前は、こんなになつても私を信じて呉れるのか。

お菊　あい。いつまでも〳〵、潔白だと思つてをります。

平太　（引きよせて）よく云つて呉れた。廣い世間の中で、私を人間らしう思つて呉れたのは、お前と叔母さんとたつた二人だつた。（泣く）有難う。有難う。叔母さんにもよくお禮を云つておくれ。平太郎は死ぬまでお志を喜んでゐましたと傳へてくれ。

お菊　では、お前は今から――。

平太　さあ、よかれ悪しかれ、二人三人人を害めた平太郎、もうこの世の中には生きてゐられぬ。これが別れだ。

（起つて筏の方へ行きかゝる。）

お菊　（縋つて）あれ、待つて下さんせ。とても叶はぬ事なら、私も一緒につれて行て下さりませ。

平太　え、お前がこの私と一緒に――

お菊　あい。

平太　（感激しながらも猶）いや、そりやならぬ。私の道づれには、そこに居る二人が相應しい。何一つ穢を知らぬお前をつれるは勿體ない。祝言したと言ふではなし、どうぞ長生して、私の代りにお二人に孝行をして下され。

お菊　（怨めし氣に）では、その長い年月を一人で淋しう送れと云ひなさんすか。

平太　え。

お菊　小さい時から許嫁と知つてゐて、好いも悪いも只一筋に縋つて來た、お前に別れて何の生甲斐がござんせう。邪魔となるなら、いつそ私から。

（走つてゆかうとする。平太郎抱きとめる。）

平太　待つておくれ。せめてお前丈けは殘したいと思つたが。斯うなるのも因縁づく。それではお前と一つ道に。

お菊　あい。うれしうござんす。

平太　したが、その曇らぬお前の心に比べてこの身の穢が恥しい。せめて表面丈けでも堅氣にして夜更けぬ中に、洲崎まで。

お菊　あい。

（平太郎帯を解いて、肌を入れる。お菊は初めて女房らしく帯をしめてやる。上手より源六と新七が出て來る。死骸を見て仰天して腰をぬかす。源六はそのまゝ上手へ、新七は匍ひ乍らそつと下手へ來る。その間に平太郎は着物を直して仕舞ふ。と、新七は急に立つて下手へ入る。二人はそれと氣づく。）

お菊　今の物音は――。

平太　後影はたしかに店の者、邪魔の無い中に早く、早

く――。
お菊　あい。（上手へ行きかけてためらふ）
平太　や、後れたのか。
お菊　いゝえ、もう一度そのお顔が――。
平太　むゝ。（抱き寄せて）もう云ふ事はないか。
お菊　あい。私や、うれしい、うれしうございます。
平太　私も満足ぢや。さ、その笑顔の消えぬ中に。
お菊　あい。
　（二人は下手へ手を合せて、ふりかへり勝ちに上手へ去る。途端に、おとく、お政、善兵衞の三人走り出づ。）
おとく　今のは確か――。
お政　（止めて）あこれ、もう何も仰有りますな。このまゝが二人の幸福でござりませう。
　（上手へ向いて合掌する。おとく激しく泣き出す。）
――幕――

天一坊（三幕）

人物

感應院の弟子　寶澤（後に天一坊）
竹内伊賀亮
赤川大膳
老婆おさん
その姪お光
馬方藤六（後に天一坊家來、溝尾藤六）
古着買七右衛門（同　山崎七右衛門）
畑番庄藏（同　平野庄藏）
所司代與力堀三十郎
同　片岡逸平
庄屋の息子甚五郎
　他に天一坊の家來大勢

時

享保の末年

處

紀州名草郡平野村及び京都三條西の洞院天一坊宿所

第一幕

紀州平野村感應院。

二間程の床の低い庵室風の草屋。上手の室の正面に須彌壇を飾る。その前に古びた佛具二三。下手は鼠壁、程よき處へ奥への出入口、凡て何の手入もせぬと見えて茅の屋根は勿論、疊建具の類は悉く破れ果てゝ、殆ど無住同様に荒廢してゐる。庵の前は狭い庭。上手は下枝の上つた要垣を透かして卵塔場、下手は低い四ッ目垣。中央に型ばかりの柴折戸。そこもこゝも一面の雑草と落葉とで埋れてゐる。初秋の頃。百舌鳥の聲が頻りに聞えて幕が明くと下手の垣の處で感應院の寶澤とおさん婆の姪のお光とが何やら手眞似で話し合つてゐる。庵の中では馬方の藤六と古着買の七右衛門と畑番の庄藏とが古い經机を膳の代りにして差向ひで酒を飲んでゐる。横に七輪があつて、鶏の肉がジク／＼と煮え立つてゐる。寶澤は二十歳位、三分髪に薄穢い白木綿の着物に、色の褪せた墨染の腰衣を着けてゐる。打ち見た處頗る振はない風采であるが、眉目秀でて何處となく高貴の相が見られる。お光は十七で村の小娘らしい

貧素な樣子。啞で口がきかれぬが、籬に咲く野菊の樣な可憐の風姿をしてゐる。中の三人は三十前後いづれも貧乏な無頼漢らしい樣子。

お光は「叔母さんは此頃方々でお産の手傳に行つてゐる。」と云ふ意味の事を手眞似で話す。賓澤は「そんなら私達も亦何か貰へるだらう。お前の丈長でも買つてやらう。」と云ふ意味の事を云ふ。お光は無邪氣に嬉しさうに寄添ふ。默つてそれを見てゐた藤六はその時聲をかける。

藤七　おい〳〵、いゝ加減にして呉れ。俺等あ盲馬ぢやあねえんだぜ。

七右　幾らお前の奢でも、それまぢやあ咽を越し兼ねるよ。

賓澤　喧しい。默つて居ろよ。手前達が燒餠を燒く柄かよ。

藤六　(首をすくめる)　ふツ、云ふ事が大きいや。幾ら何でも啞に金鍔ぢやあ死んだ蛤で燒き甲斐がねえや。

賓澤　そんな洒落があるもんかい。愚圖々々云はないで其處で大人しく拜見して居ろ。もつと甘え酒を飲ませる算段をしてゐるんだ。

庄藏　又お婆をせびるのかい。何でもこのあとから隣村の方でいゝお産が二つ三つあつたと云ふ事だ。

賓澤　耳の早え奴だな。俺も今聞いたんだ。だがそんな端金より、もつと大きな山があるんだ。

藤六　(拳て頭を叩く眞似をする)　例の一件かい。

賓澤　む、それも今云つた通りだが、まだ外にも種があるんだ。まあ、仕事を見せてから話さう。

(お光に誰か呼んで來いと云ふ樣子をする。お光は首肯いて向ふへ走り去る。)

藤六　むゝ、何だか常もとは仕掛が違ふ樣だな。

賓澤　細工は流々だ。(床へ上つて三人の中央に胡坐を組む)　まあ前祝に一杯。

庄藏　おつと來た。(鍋を見て)　丁度煮え立つたよ。

賓澤　お毒見か。(喰ふ)　むゝ、こりあいゝ。近頃にねえ柔けえ肉だ。

庄藏　お前に賞められ樣と思つて、いゝ處を選つて來たんだ。

七右　ハ、、、。こいつめ、自分の處にでも飼つてゐる樣な事を云つてゐやあがる。

庄藏　(平然と)　何處のだつて同じだあ。しかし、若い奴はすばやくつて、つかまへるのに骨だ。變な聲を立てられて冷々した。

賓澤　何しろ正直な番人だ。村の奴は安心して寢られるだらうよ。

藤六　違えねえ。お前の引導で成佛する輩だからな。ハ、ハ、。

三人　ハヽヽヽ。
庄藏　だがあの子は全くいゝ子だなあ。あんな片輪でなけりやあ、俺も棄てちやあ置かねえんだが――。
七右　嘘をつけ。此間小當りに當つて、ひどくドシンとやつゝけられたぢやあねえか。
庄藏　兄貴の前だ。詰らねえ事を云ふなよ。
寶澤　心配しなさんな。お前と俺ぢやあお人柄が違はあな。
藤六　さう云やあお前は山伏坊主にしちやあ勿體ねえ器量だ。そんな穢え衣を脱がして少し小ざつぱりとした風でもさせたら、何の守様の御落胤と云つても大手を振つて通られさうだぜ。
寶澤　嫌てるない。御落胤が聞いて呆れらあ。（急に淋しさうに）尤も木の股から生れた譯ぢやあねえんだから、どなた様かの御落胤にやあ違えねえんだがね。（うつむく）
庄藏　だつてお前、おさん婆さんの身寄ぢやあねえのかい。
寶澤　あゝ、お婆が隣の平澤村にゐた頃、信州から來たと云ふ千ヶ寺詣が預けつぱなしにして行つたのを、お婆が五つ六つまで育てゝ、こゝの先住に呉れたんださうだ。
藤六　ふむ、それぢやあお前は本當の孤兒なのかい。
寶澤　お前の處にゐる赤斑の野良犬と同じよ。拾ひ食をしながらでも育つて來たのが不思議な位だ。（ホロリとして）だけれども其處は人情だ。時々俺はどうして兩親に棄てられたんだかと思ふと。淋しくつてやり切れねえ。（茶碗を出す）
藤六　（驚く）え、お前、それで飲むのかい。
寶澤　心配しなさんな。お前の體まで吞まうたあ云はねえから。
藤六　だけんど――。
寶澤　（鋭く）溢れる程注ぐんだ。元々てめえが詰らねえ事を云ひだしたんぢやあねえか。ぼんやりしずとさつさと酌をしろい。巫山戯た面だが我慢してやらあ。
藤六　（ムツとして）何だとッ……。
寶澤　（向ふを見て）おつと……。待つて呉れ。一件物の御入來だ。
藤六　え。（氣を抜かれて其方を見る）ありやあ庄屋の小旦那ぢやあねえか。
寶澤　さうだよ。これから一芝居打たうと云ふ譯よ。お前達がこゝにゐると調子が惡いから、暫く奥へ消えてゐて呉れ。
藤六　合點だ。庄藏、七、ついでにそこいらの雜物を片づけて置かう。
庄藏　あい來た。
（三人は何かの道具を奥へ運んで去る。向ふから、お光に手を曳かれた庄屋の息子の甚五郎が出て來る。二

十四五の優男。)

甚五　おい、どうしたんだ、何處へ連れて行かうと云ふんだ。

お光　――。(手眞似で庵を指す)

甚五　矢張こゝか。一體何の用なんだらう。

(呟き乍ら木戸を排して庭へ來る。寶澤はそれを見て庭へ下りて出迎へる。)

寶澤　若旦那、御苦勞樣でございました、よくお早くお出で下さいました。

甚五　(横柄に) 何だか知らないが、この娘が無闇に引張るんでな。――一體何の用なのだ。

寶澤　なあに、御心配なさる樣な事ぢやあございません。まあともかくお上んなすつて。

(座敷へ招じる。甚五郎は困つた樣子で餘儀なく上へ上る。お光は下手の緣に腰をかけて空を見つめてゐる。)

甚五　(坐り乍ら) それで一體用と云ふのはどんな事なんだい。

寶澤　(叮嚀に) 御無心でございます。

甚五　(キツとなる) 無心と云ふと――お金の事かえ。

寶澤　お恥しうございます。

甚五　(考へて) 近頃お前さんも評判がよくない樣だからな。――一體幾らあればいゝのだい。

寶澤　五十兩貸して戴きたいんで――。

甚五　五十兩ッ。(驚く)

寶澤　(押しかぶせて) それも譯を云はにやあ理が通じませんが、御覽の通り屋根も疊もボロ〳〵なんで、これを直すにやあ、どう下端に見積つてもそれ位の金は入用だと思ひます。

甚五　(やゝ安心して) ぢやあお前さんは、こゝの庵の修復のために金を貸せと云ふんだね。

寶澤　本當にお恥しうございます。先代の感應院があんな不意死をしましてから、どうぞして跡目丈けは立てゝ行かうと思ひましたが、年も若く修業も淺い故か、一向お參も絕えて、たうとうこんな狐の巢にして仕舞ひました。併し此院も京の聖護院の宮樣の御支配で、山伏と云ふものゝ、元々天台宗の別れで坊主同樣、この平野村一圓の法事や葬式萬端引き受けてゐます、云はゞ檀那寺とでも云ふ樣なもの――。

甚五　(引取つて) 判つてゐる。判つてゐる。併し、それなら何も俺に相談せずとも、親父なり五人組の年寄なりに相談して、それ〴〵に寄附を割りつけたらいゝぢや無いか。

寶澤　仰有るまでも有りませんが、若旦那の前ですが、ど

うも庄屋だの年寄だのつて奴は氣が長くて、若い者たあ肌が合ひません。まあ、行く〳〵は寄附を募つて戻す事にして、一時の處をどうでございませう。別にお困りになる身代でもございますまい。

甚五　と、飛んでも無い。庄屋こそしてをれ、こんな痩村に、どうして五十兩なんて大金が轉がつてゐるものか。

寶澤　ぢやあ貴方のお口繼ぎで、どつかからか借りる譯には參りますまいか。（口調を早めて）尤も、只貸せと云つても私の證文ぢやあ唾も引つかけて與れますまい。百貫の抵當に編笠とやら、兎も角引當ての品を渡したらよからうと思ひます。

甚五　（煙に卷かれて）何かそんな寶物でもあるのかい。

寶澤　寶物――。（ニヤリと笑ふ）まあそんな品でせうか。
（懷から帛紗包を取出す）一寸目きゝを願ひませうか。
（中を開く）

甚五　（凝つと見て驚く）や、そりやあ――。（取りにかゝる）

寶澤　（支へて）おつと……。そんなにぞんざいにしちやあ罰が當ります。（叮嚀ながら鋭く）どうでせう。五十兩の引當にやあ無理でせうか。

甚五　（赤くなり蒼くなる）そ、そりやあ――成る、成るだらうよ。

寶澤　（聲を大きく）成りますか。有難うございます。有難うございます。それで凡そ何時頃までに話を纒めて戴けませうか。

甚五　さあ、何時頃と云つて當は無けれど、四五日の中にはキッと話をつけるから。（包を取らうとする）

寶澤　（手早く懷へ捻ぢこんで）いけない、〳〵、こりやあ五十兩と引換だ。

甚五　（あきらめて）それぢやあ、その時まで誰にも云つて下さるなよ。

寶澤　（首肯く）云ふ位ならこゝまでお出は願ひません。ぢやあ何分お賴み申します。大水で道が壞れてゐますから、氣をつけてお出でなさいまし。

（甚五郎無言でトボ〳〵と下手へ去る。寶澤は棄臺詞で禮を云ひながら、してやつたと云ふ思入で、座敷の方へ來かゝつてお光をみる。）

寶澤　あゝ、お前こゝにゐたのか。うつちやつといて淋しかつたらうな。（お光默つてゐる）チヨツ、仕樣がないなあ。（肩をつゝいて上れと云ふ。お光ニッコリ笑つて上へ上つて寶澤により添ふ）庄藏の云ひ草ぢやあねえが、本當に惜しい女だ。（凝つと橫顏を見詰める。奥から先刻の三人が首を出す）

藤六　兄貴。

賓澤　（ハッとして）　何だ、手前達はまだそこにゐたのか。

藤六　當り前だ。まだ酒が半分すぎ殘つてゐらあ。

賓澤　意地穢え奴だな。

藤六　ふん。（お光を、顎で指して）どつちがどうだか。

賓澤　（テレて）　馬鹿ッ。まだ果蕉にならねえのか。（構はずお光の手を執る）

七右　（見ぬふりで）　併し、何だかちつとも判らねえ掛合だが、あれでいゝのかい。

賓澤　いゝも山の芋も、確かに五十兩持つて來ると云つたぢやあねえか。

七右　そいつあ地獄耳だが、その寶物つて何だい。

賓澤　水垢離（みづごり）でも取つて來なきやあ目が潰れるぞ。（ポンと庄藏の前へ擲り出す）

庄藏　脅（おど）しつこなしだ。（恐々と明けて見る）　何んだ。鼻紙入ぢやあねえか。

藤六　紙入だ。（取つて見る。やがてポンと膝を打つ）　甘え處を見つけたな。いづれ主のある女房だらうが、どこの誰だい。

賓澤　五反田の佐五平の女房よ。

七右　ふん、あいつあ只（た）つたこねえだ嫁に來た許りぢやあねえか。

庄藏　さう云やあ昔から譯があつたと云ふ噂だ。

賓澤　そんな詮議は井戸端の嚊共に委しておくさ。朧月夜なら見違ひもしようが、三里向ふの山の峰の、女郎の胸毛でも判然見えさうな十五夜だ。考へて見ると奴等もちつと馬鹿だなあ。これが俺だからいゝ様なものゝ、他の奴に見つかつて見ねえ、てつきり首物だ。五十兩ぢやあ恩の字だぜ。

庄藏　成る程、理窟のつけ様はあるもんだな。

七右　道理で、何にも譯を聞かねえで呑みこんで歸つたんだな。

賓澤　どの道いけねえと思つて、早く往生した處は、お前達よりやあ利口だよ。しかし、何しろ五十兩だ。大きく吹いて見たものゝ、恥しながら俺はまだそんな大金を持つた事はねえぜ。

七右　お互様だ。

庄藏　俺だつてよ。

藤六　詰らねえ事を威張るなよ。ハヽヽヽ。

賓澤　しかし、金の話をした故か、懐がぞく／＼して來た。先刻（さつき）の殘りで一杯やらうか。

藤六　待つてゐました。幸だ。お光坊にお酌を頼まう。どんなにしても娘（なほ）は娘だ。

（手眞似で燗をする様に話す。お光は首肯いて、いぢらしい程可憐に笑つて奥へ入る。庄藏はそれを見て思

はずホロリとなる。)
庄藏　だが全く可哀想だ。寶澤、お前先刻の五十兩をせしめたら、せめて着物の一枚でも買つてやれよ。
寶澤　お光にか。冗談云ふない。五十兩も金が手に入つて、あんな片輪者が構つてゐられるかい。なあ、藤六。
藤六　ふん、それが世間並だ。
庄藏　思ひ切つて薄情たなあ。しかし、いゝにしろ惡いにしろ、かうやつて一つ鍋をつゝき合つた仲だ。この後どんなに出世をしても知らぬ顏丈けはしめえなあ。
寶澤　笑はせるない。どこを押しやあそんな音が出るんだい。この寶澤が出世する――ば、馬鹿も休み／＼云へ。
(笑ふ。奥からお光が德利を提げて來て、フト何氣なく下手を見ると仰天して、イキナリ藤六と七右衞門の腕を掴んで上手へ引張つて行かうとする。)
藤六　あいたゝゝ。何をするんだ。腕が拔ける。
七右　袖が千切れる。これ、どうしたと云ふんだ。
お光　――。(下手を指して早く逃げろと云ふ身振をする)
藤六　何だか判らねえ。寶澤、お前通辭になつて吳れ。
寶澤　むゝ。(下手を見て驚く)あ、婆が來るんだ。
藤六　婆が來た。(同じく見て首肯く)おあつらへ向きだ。ぢやあそろ／＼初めようか。
寶澤　甘くやつて吳れろ。

藤六　合點だ。(急に尻をまくつて坐る)やい寶澤、どうしようと云ふんだ。何とか返事をしろい。
寶澤　巫山戲るない。賭場の金やあ十萬兩借りよつと、その場限りの御定法だ。
七右　ぢやあ、手前達やあどうしても返さねえと云ふんだな。
庄藏　さうよ。たつてほしけりやあこの足でも首でも拔いて行け。
藤六　ぬかしたな番太め。
寶澤　なんだ馬泥棒。
(四人は二つに分れて掴み合ふ。お光はうろ／＼とする。下手からおさん、急いで來る。六十餘りの氣丈なる婆。この態を見て仰天して奥から箒を持ち出して來て手あたり次第になぐりつける。)
藤六　あ痛てえ。何をしやあがる。
寶澤　おれが知るもんかい。
(尚も爭ふ。その中藤六は寶澤を、七右衞門は庄藏を組み敷く。)
藤六　さあ、うごいて見やがれ。
七右　五十兩今の中に耳を揃へてけえすか。
寶澤　糞でも食らへッ。百萬兩あつたつて鐚一文もけえさねえからさう思へ。

庄藏　さ、殺せ、殺せッ。

（呼ぶ。おさんは暫く見てゐたが何と思つたかお光の手を曳いて。）

おさん　お前は危い。

（と下手へ走り去る。賽澤はやがて聲をかける。調子はすつかり變つてゐる。）

賽澤　おい。婆はもういいんだかい。

藤六　（同様に）むゝ、畑の中を狂犬の様に走つてゐる。

賽澤　ぢやあそこをどいて呉れ。（起き上つて）御苦勞御苦勞。お禮にやあうんと奢るせ。

七右　何だか知らねえが、婆の居る前で摑合をして呉れと云ふんでやつて見たが、どうも馴合の喧嘩は氣が合はなくていけねえ。

賽澤　どうして〳〵。すつかり本物だよ。

藤六　みんな下地があるからな。

賽澤　笑はせるない。しかし、婆に小つぴどくやられたにやあ弱つたな。

藤六　あゝ、年寄のくせに途方もねえ力だ。見ねえ、こんなだ。（腕を捲つて見せる）併し、こんな事で本當に金が引き出せるのかい。

賽澤　さうよ。さつき云つた様に、婆は何處に隱してゐるのか、時々目の潰れる様な小判を呉れる事があるんだ。三月目に一つ呉れたり半年に二つか位だが、それでも彼れこれ二十兩も貰つた様だ。しかし、醫者や田地持の後家ぢやあ無し、こんな瘦せ村の取上げ婆にそんな大金が授る筈はねえ。てつきり若い時に何とかした奴を、何處かへ隱してゐるに違ひないと思ふんだ。それも三十や四十ぢやあ無さゝうだ。

三人　むゝ。

賽澤　そこで、どうかして跡の奴も殘らず卷き上げようと思ふんだが、この頃は用心をして、いつもの泣き落しも何んにもちつともきかなくなつたんで、チヨイと新手を工夫して見たんだ。

七右　しかし、甘く註文通りに持つて來りやあいゝがな。

賽澤　大丈夫だ。婆は俺が可愛くて仕方がないんだ。目の前で摑み合つて、生かすの殺すのと云やあ、摷へ上つて持つて來るに極つてゐる。

庄藏　しかし、さうだとすりやあ、それを欺すなあ可哀想だな。

賽澤　又初めやあがつた。手前もやつぱり灰汁が拔けねえな。婆は俺に呉れたくつて仕様がないんだ。早く使つてやる方が功德だよ。

七右　まさか——。それで俺等はどうしよう。婆が引つかへして來るまでゐるのも拙かあねえか。

寳澤　むゝ。（考へる）婆はあれで仲々しつかり者だから、へまをやつて尻尾でも捕へられちやあ形無しだ。それぢやあ今の中に歸つて呉れ。

藤六　ぢやあさうしよう。だが、約束の方はいゝだらうな。

寳澤　むゝ、晩に出直して來いよ。（三人下手へ行きかける）おつとゝゝゝ。そつちへ行つて途中で出くわしちやあ拙い。道を替へていんで呉れ。

七右　大きにさうだ。ぢやあ墓場を拔けて行かう。（中を覗いて）穢ねえ墓ばかりだなあ。どなたも眞平御免なさいましだ。

（三人棄臺詞で上手の垣を壞して去る。）

寳澤　（見送つて伸びをする）どりや俺も支度をして置かうか。

（呟きながら奥へ入る。間。百舌鳥の聲。向ふから九條家の浪人、竹内伊賀亮が出て來る。四十歳前後、五分月代、一癖有り氣な面魂。殆ど色の褪せ切つた黑羽二重の小袖の着流し。塗の剝げた大小を落差にして、破れ扇で夕日を避けながら、やゝ醉うた足どりで謠を謠ひながら出る。）

伊賀　花咲かば、告げんと云ひし山里の、使は來たり馬に鞍……浪人には付きものゝ鞍馬天狗も謠ひ倦きたなあ。切つてはめた樣な公卿奉公が嫌になつて、九條家を追ん出てからもう四五年、日本六十餘州の半分程も遍歴したが、案外世の中は詰らないものだ。千里の名馬も伯樂に逢はなけりやあ、只の駄馬か。――しかし、ひどく咽が渇いて來た。せめて水ぐらゐは飼つて貰ひたいな。（本舞臺へ來て庵の中へ呼びかける）賴む、賴む。（返事なし）なんだ空巣か。だが、井戸位はあるだらう。

（と、裏手へ廻つて去る。入れ違うて奥から寳澤が出て來る。さも仰山な怪我をした樣に手足を白布で卷き立てゝ片足を引きずつてゐる。）

寳澤　（四方を見て）はてな。誰か來た樣だと思つたが、空耳だつたかな。（見廻して）あゝ、やつて來やがつた。年寄にしちやあ馬鹿に早え足だ。あ、何だか風呂敷包を持つてゐる。しめ〳〵。

（と、緣側にゴロリと横になつてさも苦しさうに呻き出す。下手から以前のおさんが一尺程の長さの風呂敷包を大事さうに抱へて急ぎ足に出て來る。寳澤は呻きつゞける。）

おさん　（暫く立つてゐる。やがて平然として）寳澤さん、もう判つたから起きてお呉れ。

寳澤　（ギョッとして）え。

おさん　その大怪我も私がいんだらすぐ治るのだらう。

寳澤　（半分起き上つて）それぢやあ、何もかも知つてゐ

たのかい。
おさん　三年この方、お前の云うた事は一つも眞はないと知つてゐる。
寶澤　だつてお前はいつも泣いてゐたらう。
おさん　お前の嘘には欺されぬが、お前の淺間しい心に泣かされたのぢや。併し、今日と云ふ今日はもう甘やかしては居られぬ。今まではこの村の衆へも誰にも云はずにゐた、私の只つた一つの寶物を見せる故、それを見た上、とつくりと思案をきめて下され。
（と例の包を明けて八代將軍直筆のお墨附と葵の定紋の短刀とを取出す。）
寶澤　（締めたと云ふ思入）いや、今日までの事は本當に詫の仕様も無いが、さう云はれりやあ全くこゝらが了見の切り替へ時かも知れない。ともかく其寶物と云ふのを拜見しようぢやないか。（何氣なく短刀を取上げてギヨツとする）や、こりやあ葵の御定紋付だ。
おさん　お前は字が讀めるだらう。その書付を讀んで見なされ。
寶澤　むゝ、（中音で讀む）其方懷姙の由、我等血統に相違なし。若男子出生に於ては時節を以つて呼出す可し。女子ならば其方の勝手に致す可し。後日證據のため我等身に添へ大切に致候短刀相添へ遺置く者也。仍而如件。

寶永二申年十月。徳太郎信房澤の井女へ。（繰返す）徳太郎信房——むゝ。（凝つと腕を組んで考へる。やがてホッとして）それがどうしたと云ふんだい。
おさん　（膝を進めて）話せば長い事ぢやが、前の平澤村に住んでゐた頃、夫の平右衞門どのとの間に一人の娘の子が授かつてゐた。一人娘の事ではあり、近所の衆もよい器量ぢや、鳶が鷹を生んだと賞めて下さるので、生ひ先を樂しんで、育てゝゐたが、その中に親父どのには死なれる、娘は年頃になる、こんな村にほつて置いて惡い蟲でも付いてはと、世話をする人のあつたのを幸に、和歌山の御城下のお侍、加納將監様のお邸に腰元奉公に上げたと思やれ。
寶澤　むゝ。
おさん　名も澤の井と改めて、末の出世を祈つてゐると、俄かに奉公がなり兼ねると、出代りでもない霜月に戻つたお腹を見ると、女ならすぐ知れる。もう五月の身重ぢや。
寶澤　（一人言の様に）ふむ、寶永二年なら俺と同い年だ。
おさん　（首肯く）それで、仲間小者對手のいたづら事かと、びつくりしながら様子を聞くと、まあ、この様な幸が又とあらうか。その對手と云ふのは、仔細あつて將監様のお邸にお出でなされた、大納言様の御總領徳太郎信

房様だつた。そして、その信房様は今では江戸へお乗込み遊ばして、八代目の公方様におなりなされたとやら――。

寶澤　(苛々として)　判つてゐる。判つてゐる。それよりかその腹の子はどうなつたんだい。

おさん　(ホク／＼して)　御平産だつたよ。

寶澤　男かい、女かい。

おさん　私が叮嚀に取上げたが、それは／＼玉の様な和子様だつた。

寶澤　男か。(詰らなさうに)　それから。

おさん　(急に涙を催す)　可哀想に澤の井は、産後の熱でその晩の中に死んでしまうた――。

寶澤　やれ／＼、詰らねえ事をしたな。それで赤ん坊はどうしたい。

おさん　和子様かえ。

寶澤　あゝ。

おさん　それは喃。(一寸云ひ澱む。そしてやがて思ひ切つて)　それがお前ぢや。

寶澤　え。

おさん　お前ぢや。

寶澤　俺だッ。(目を見張る。そして急に思ひ出す)　ハ、ヽ、冗、冗談ぢやあねえ。とんだ鳴物入ですつかり吊られてしまつた。お婆、お前も隨分人が惡いぜ。それ一つですつかりこれまでの仕返しをされてしまつた。

おさん　(眞面目に)　ではお前はその二品の證據まで作り事ぢやと云ふのかえ。

寶澤　だつて俺は信州の千ヶ寺詣の棄兒だつて、お前口癖の樣に云つたぢやあねえか。俺らあその度にどんなに淋しいと思つたか知れねえぜ。

おさん　その怨は尤もぢやが、それには深い譯があるのぢや。お宗旨故、忌が明けるとすぐお前を連れて高野のお山へ骨を納めに登ると、女人堂の處で行き逢うた上人様が、フトお前の顏を覗きこんで、驚いた樣に立どまり、この子には劍難の相がある。

寶澤　え。劍難の相が――。

おさん　併し、又と見られぬ高貴の相も備つてゐる。今の家を出て出家させれば、長命出世疑なしと、大地を見抜く樣に仰せられた。それで村へ戻るとすぐにそこを引拂つてこの村へ移つて來て、感應院樣のお弟子に上げたのぢや。

寶澤　むゝ。

おさん　しかし、それでも人のそねみを受けてはと、誰にでもかくして、その途中で連になつた千ヶ寺詣に賴んで、一旦その子にして俺が拾うたのぢやが、どう異見しても治らぬお前の身持ゆゑ、思ひ切つて明かすのぢや。(泌々

と）この樣な身になつて仕舞うては、元の侍にも戻られまいが、身分から云うても聖護院の宮樣のすぐ次に坐られるお前、どうぞ身持を改めて、天晴今の世の役の行者樣とも云はれる樣な聖になつてたも。この通り婆が手を合せて頼みまする。

寶澤（ホッとする）　ふむ、さう云やあ生れ年も一つだし、先刻も藤六が御落胤だと云つたのも、萬更お世辭ぢやあねえのかしら。

おさん　何のお世辭なものか。お前の素性が自然に現はれたのぢや。それで無うて勿體ない御定紋付の短刀や、お墨附がこの婆の手にあるものか。

寶澤　むゝ。（次第に信じて來る）

おさん　さ、から打明けて仕舞へば、この二品も、使ひ殘りの五十兩も悉皆お前にやる故に、父御の御形身と大事にかけるがよい。

寶澤　ではその二品をこの俺に――矢張り矢張りさうだつたのか。（急に氣づいて本能的に飛び退って兩手を突く）恐入りました。左樣な身の上とは露いさゝかも存じませず、いとしがられるまゝに今日までの我儘放埓、何卒お赦し下さりませ。この上はお言葉通りに一心不亂に勉強して、天晴の善智識となり、これまでの御恩返しをいたしまするでござりませう。

おさん（喜ぶ）　おゝ、それではこの婆の言葉を聞け分けて改心して下さるか。

寶澤　はい。今までは氏も素性も知れぬ、野良犬同樣の孤兒とばかり思うてゐました故、何の張合もありませなんだが、さう聞くと急に心に勵みが出て來ました。いゝえ、別に名乘り合はなくともよいのです。一生このまゝ暮して行かれゝば仕合せです。嬉しうございます。嬉しうございます。

（感極つて泣く。おさんも泣く。と、下手奥から先刻の伊賀亮が出て來て、兩刀をそれへ投げ出して平伏する。おさんは驚いて起つ。）

おさん　や、お前樣は――。

伊賀　はゝア。拙者事は元京都九條關白殿下の御直參、竹內伊賀亮と申す者、高貴の御方に御拜謁申したく、お取なしの儀願ひ奉る。

おさん　え、高貴の御方とは――。

伊賀　されば、拙者事はいさゝか天文易學に志ある者。仔細あつて九條家を浪人なし、よき主取もがなと六十餘國を遍歴いたす中に、昨夜はからず紀の川の傍にて天文を伺ふに、南に當つて一條の白氣棚引き、將星俄かに光りを增すを見極め申した。白氣は即ち王者の象、將星俄かに輝を增せるは、やがて天下の主となる可き御方の、こ

のあたりに隠れ住はせ給ふ兆に相違なしと、明くるを待たでこの里へ立越し、家毎軒毎に伺ふ處、計らず御庵主の相を拜し奉るに、眼水晶の如く、眉青柳に似て威あつて猛からぬ御顏、正しく居ながら三公の位に備る君と相し奉つた。何卒家來の端々にも加へられ、粉骨碎身の誠忠を致さしめ給はらば、身の面目、子孫の譽、よもこの上には過ぎじと存じ申す。

おさん　（半ば茫然として）では、お前樣はこの寳澤の家來になりたいと云はつしやりまするか。

伊賀　如何にも。御老婆のお取なし偏に願ひ奉る。（おさん當惑する。伊賀亮前へ進んで）恐れながら直々のお言葉頂戴いたしたく存じまする。

寳澤　（事件の急激の變化に暫く放心してゐる。やがて氣を取直す。しかし尚幾分か慄へ聲で）むゝ、伊賀亮とやら苦しうない。赦す、近う。

伊賀　はゝッ。

寳澤　近う。

伊賀　はッ。

（伊賀亮小腰をかゞめて前へ進む。下手からお光が走つて來て思はぬ光景に呆れて立ち盡す。）

――幕

第二幕

京都三條通西の洞院にある天一坊宿所の廣間。平舞臺。正面奥、やゝ上手寄に二間々口の上段の間を設く。天一坊の接見所。常は青簾を下す。上手は折れ曲つて金の給襖。下手同じく。凡ての調度は及ぶ限り壯麗に作る。

前幕より半年程の後。春の午後。幕明くと前幕の藤六以下二人が廊上下を窮屈さうに着けて大胡坐を組んで車座になつて雜談をしてゐる。彼等は俄かに寳澤改め天一坊の家來となつたのであるが、生れもつかぬ侍業に、自然な滑稽が絶えず起つて來る。

庄藏　それでどうしたい。

藤六　どうのかうのつて手も足も出やあしない。後で大膳に聞くと茶の湯とか何とか云ふんださうだが、お互にまだそんな物に出くわした事はねえだらう。勿體ぶつた樣子をして、穢らしい茶碗にブク／＼泡を立てゝ出されたつて、舐めるんだか嚙るんだか判りやあしない。

七右　おまけに酌がタボと來ちやあ餘計に嚇つと來たらう。

藤六　全くだ。それに前置が長いんで、しびれが切れて仕舞ふ。背や脇の下から冷汗が浸み出る。何も獻金をする

ならすぞでサッサと金丈け寄越しやあいゝのに、俺ああの藤屋の禿頭が一生忘れられねえ程怨めしかつた。
庄藏　それで、其納りをどうつけたい。
藤六　仕方なしに、拙者今日腹痛でござる――とやつたね。
七右　腹痛か。そいつはお前にしちやあ大出來だつたな。
藤六　處が徇いけねえ。御腹痛なら針醫か御藥湯をと來やがつた。
七右　ハ、、。お前の顏が見える樣だ。
藤六　思ひやりのねえ奴だ。もう〳〵御使者丈けはこりこりだ。
七右　お前がこりる位だから、よく〳〵だつたらうよ。ハ、、、。
（聲を忍んで笑ふ。正面より襖を明けて赤川大膳が出て來る。三十三四の立派な侍。）
大膳　溝尾氏――溝尾氏――（三人を見て）あゝこれ〳〵其許達は又その樣に無作法千萬な――それが侍の行儀でござるか。
皆々　へい。（驚いて坐り直す）
大膳　溝尾氏、その袴の着樣は何でござる。お起ち召されい。某が結び直して進んぜる。
藤六　（しよげて）どうぞ宜しうお願ひ申します。どうやつてもずるつこけるんで――。
大膳　ずるつこける――それが侍の言葉でござるか。（結び乍ら）今更申すまでも御座らぬが、元は如何樣ともあれ、今は將軍家の御連枝、やがて西の丸へも入らせらるる天一坊樣御身內の侍が、左樣な不行儀で何と召さるゝぞ。これでは今宵もキッと申し開けねばなるまい。御用濟み次第に拙者の室へ參られい。
皆々　へい。
大膳　さ、溝尾氏は早く奥へ。何を猶豫。
藤六　へい。（悄然として上手へ去る）
大膳　（見送つて）斯くもあらうかと存じて、表向きよりの用向は必ず襖の外より案內さす樣に申しつけてはあれど、所詮は御邊達の修業のためぢや。よく〳〵心をつけられい。
（云ひすてゝ上手へ去る。あとの二人は又ホッとして胡坐を組む。）
七右　よくがみ〳〵云ふ奴だなあ。
庄藏　併し、根が三州の浪人と云ふ丈けあつて、流石に灰汁がぬけてゐるな。それに比べちやあこつちと等は骨灰ぢや。あの藤六のとぼけた樣子はどうだらう。
七右　名うての氣の早い奴だつたが、頭からがみ〳〵やられるんで、この頃はポッとして仕舞つたらしいな。
庄藏　いや、人事ぢやねえ。俺も何だか里心がついて來た。

出世するなあ樂ぢやあないもんだな。

七右　しかし、寶澤――ぢやあない天一坊樣は流石に偉いもんだなあ。昔やあの通りの道樂者だつたが、今頃は毎日々々伊賀亮や大膳を對手に學問や禮儀の稽古だ。倦もしなけりやあ、膝一つ崩さねえぜ。

庄藏　そりやあ矢張生れ付だ。氏より育ちと云ふがやつぱり血統は爭はれねえもんだ。

七右　いや、それよりか嬉しいのは、昔友達の俺達を斯うやつて家來にして下すつた事だ。重役の話ぢやあ、これで無事に江戸までお供をして行つたら、二千石や三千石の御直參に取立てゝ貰へると云ふ事だ。何と云ふ有難い事だらう。

庄藏　その情深けえのも矢張り血統だよ。聞けば紀州へも御使が行つて、おさん婆さんにお光坊に、庄屋の小旦那までもお呼び出しになつたと云ふ事だ。定めて何とか御褒美が出る事だらうよ。

七右　何しろあの寶澤――さんが御落胤たあ、ほんたうに夢の樣だ。

庄藏　俺達の侍ぶりも夢の樣だ。

（顏な見合はす。下手襖の外で人の呼ぶ聲がする。二人はハツとして坐り直す。）

七右　（侍らしく）誰人ぢや。お入り召されい。

侍一　御免。

（侍一襖を明けて獻上臺を目八分に捧げて出で來る。）

侍一　東の洞院五條の米商、近江屋傳右衞門より、金子五百兩、時服一重、御獻納の願ひ出にござります。

七右　承知仕つた。いづれ西の丸御入城の上格別の御沙汰があるでござらう。左樣申し聞けられい。

侍一　畏りました。（去る）

七右　（低く）どうだい。この掛合は甘からう。こいつは大阪でも度々やつたからなあ。

庄藏　むゝ、大阪ぢや隨分集まつたなあ。

七右　名代の鴻池を初め、天滿屋、八幡屋みんな來たよ、凡そ五六萬兩も有つたかなあ。算盤づくぢやあやつぱり大阪の奴が一番拔目がねえな。

（下手より又人の聲がする。）

侍二　申上げます。

庄藏　又來たな。お入り召されい。

侍二　（入り來る）只今所司代より役向の與力御出役、天一坊樣御重役に直々にお目にかゝりたいとの事でござります。

七右　何、所司代の與力が參つたと。（困る）ともかく重役に申し傳へるでござらう。これへお通し下されい。

侍二　畏りました。（去る）

庄藏（不安氣に）默つて通していゝのかい。
七右　あゝ、何でも難ケしさうな事は悉皆重役に云へと云ふ事だ。おや知らせて來よう。お前も――いや、貴殿も參られい。
（二人しびれ足を引きずつて上手へ去る。すぐ入れ違うて下手より所司代の與力、堀三十郎と片岡逸平の二人が侍に案內されて出る。上手より竹內伊賀亮が keeping 下で前とは打つて變つた爽かな樣子で出て來る。）
伊賀（ジロリと見て）所司代の御使とは御許違でござるか。
堀　如何にも。拙者は與力堀三十郎。
片岡　拙者は片岡逸平、御用の筋で罷越した。して貴殿の御姓名は。
伊賀　天一坊樣御傍役、竹內伊賀亮と申す。元九條家の浪人、所司代牧野丹波守にも、或は御承知かとも存じます。
堀（威壓されて）すりや、御身が伊賀亮殿か。
伊賀（首肯く）して御使の御口上は。所司代より天一坊樣御着京の御祝儀申上ぐるため、御饗應の日取の御伺ひのためでござるか。
堀（勇氣を起して）いや、それは重ねて。ともかく一應は御吟味のため――。
伊賀　む――。
堀　たとひ如何なるご身分にもせよ、町旅館遊ばさるゝ節は、當所支配の奉行まで御屆け出であつて然る可き儀ながら――。
伊賀　默れ。
堀（屈せず）其御屆出も之無く、あまつさへ德川の御表札に御紋付の御幕は其意を得ざる儀――。
伊賀（大喝する）默らつしやい。各々方は如何なる身分で天一坊樣のご身分をあげつらはるゝぞ。まして不淨の白洲へなぞとは何の譫言。上樣御身分は、二品の御證據拜見も相濟み、已に御落胤に相違なき旨大阪表御城代、堀田相模守より江戶へ御內進ありし由は、所司代にも豫ねて心得ある筈。しかるにわづかな役儀を笠に再吟味なぞとは無禮至極。强ひて御伺ひ申上げたき儀もあらば、所司代自ら參上致す可きぢや。この上は問答無益、すみやかに立ち歸られい。
二人　は――。
伊賀（調子をゆるめて）但し、牧野殿にはあづかり存ぜず、其方共兩人私の存意とあらば、役儀に免じて御忘れつかはさるゝ樣、とりなし申すでござらう。
片岡　はゝッ。有難き仕合に存じ奉りまする。全く以て拙者共兩人の心得違ひ、所司代にはかつて存ぜぬ儀故、何卒左樣御とりなしの程願ひ奉る。

伊賀　むゝ。
片岡　就きましては、兩人心得のため其許樣まで御伺ひ申しまする。天一坊樣已に大阪表にて御落胤と御決定遊ばされし上は、直ちに江戸表へ御下向の儀と存じ申せしに、わざ〳〵この京都へ御立越遊ばされしは、如何樣の御用向きでござりませうや。（キッと云ふ）
伊賀　（流石だと云ふ思入）　尤もなる心づけ、上樣は元聖護院の宮御支配下にて御修行遊ばされし者故、その宮へ御挨拶のため、まつた已に西の丸御入城の後は、御自儘の御入洛も難ケしければ、後學のため諸方御見學の思召立ちぢや。
片岡　（あきらめて）　篤と承知致しました。ではいづれ所司代にも申し開け、後刻改めて御迎に參るでござりませう。御免。
（起ちかゝる奥から赤川大膳が出る。）
大膳　あいや所司代の御使暫く。上樣直々御目通りさし許さるゝとの御諚ぢや。
二人　はゝッ。（思はず平伏する）
大膳　御出座ッ。
（と呼ぶ。正面の御簾が音もなく上る。寶澤改め天一坊が撫で髮美々しい裝ひで厚い褥の上に端然として坐つてゐる。前幕の無頼漢らしい面影は露程もない。如何にも高貴の胤らしい品位が具つてゐる。）
伊賀　當所支配、所司代組下の與力、堀三十郎、片岡一平、お言葉下しおかれますれば有難く存じ奉ります。
天一坊　（悠然と首肯く）　何かは知らず大儀である。丹波守にもよしなに傳へて參りやれ。
二人　はゝッ。
天一坊　大膳、用意の品を――。
大膳　はゝはッ。
（大膳は白木の臺へ二包の金子を入れて帛紗を掛けたのを取り出して二人の前に置く。）
大膳　上樣格別の御思召。時服の料ぢや。頂戴致されい。
二人　は――。（躊躇ふ）
大膳　猶豫は反つて御無禮でござらう。
二人　はゝッ。（二人は我となくその金子を押し戴く）
大膳　重ねて御兩所に申し入れる。天一坊樣御生母御追善のため、金子二千兩窮民救助のために下げ渡さるゝ。洛中洛外とも大凡の人數、御兩所の手にて御取調べ願ひたい。
堀　すりや、左樣までの御憐愍を――。（心服する）　有難う存じまする。早速取調べ御報告いたしまする。（片岡を見て）左樣なればこれにて御暇――。
片岡　御前よしなに。

大膳　御苦勞に存じ申す。（手を拍く）これよ。
侍二　（下手より出る）はゝ。
大膳　お客人のお立ちぢや。御案内申せ。
侍二　畏りました。（二人を伴うて去る）
天一坊　（見送つて）伊賀亮、何しに參つたのぢや。
伊賀　御身分を伺ひに參つたのでございます。
天一坊　余が身分を――（不快氣に）何故その樣に度々問ひ正すのであらう。子が父を尋ねるが何故その樣に疑はしいのであらう。
伊賀　いや、穴勝にお疑をかけると申すではござりませぬが、何分にも年月を經た上、思ひも寄らぬ儀につき、所司代共も己が功に何かと伺ひ奉るのでござりませう。
天一坊　（首肯く）それにしても、故鄕を出てから、美濃大阪で五月あまりも滯在の上、この京都にてもそれ程の日數はかゝると申すが、何故その樣に手間取るのぢや。
伊賀　それは昨夜も申上げました通り、江戸表の御旅館の準備が整はぬためでござります。尤も、常樂院天忠、藤井左京の兩人支配いたしますれば、程なう落着仕る事と存じまする。
天一坊　さ、それが余には判らぬのぢや。何故自ら宿を設けねばならぬのぢや。直ちに登城もなり兼ねるとあらば、紀州家は云ふまでも無く、尾張家、水戸家、さも無くば然る可き譜代の大名の屋敷を明け渡しても假の住居にはなる筈ぢや。
伊賀　一應は御尤もでござりまする。しかし、諄くも申す樣に、何分先例とてもなき事故、江戸表諸役人も何かと心を痛めてゐる事と推察されます。今暫くの御辛抱が御肝要でござりまする。
天一坊　其方がさう申せば無理にとは申すまいが、一時も早くお父上に御拜顏したいものぢや喃。この樣な身の上と初めて知つた時は、只、そればかりで滿足してゐる心であつたが、段々と其方達の慫めで美濃國へ行き、それから大阪へ立ち越し、この京へ來る樣になつて、一入とお懷しう思はれ出して來た。何の儀式も入らぬ、作法もいらぬ。一飛びに江戸へ行きたいと思うてゐる。（しみじみと）お懷しい父上。昨夕もまざまざと夢でお逢ひ申した――。
（憧れる樣に云ふ。上手の襖を明けて藤六が出る。）
藤六　申し上げます。
大膳　何事でござる。
藤六　（そんざいに）紀州から庄屋の小旦那に婆さんに、お光つ子が――。
大膳　控へられい。紀州表より御招の人々が到着いたしたと申さるゝか。

藤六　さ、左樣で――。その到着いたしました。
大膳　むゝ。（天一坊に）お聞かせの通り、如何とりはからひ申しませうや。
天一坊　すぐに逢ひたい。これへ連れて參れ。
藤六　畏りました。
（上手へ行つておさん、お光、甚五郎の三人を連れて來る。）
藤六　さあ、こゝに御座るのぢや。
おさん　（懐しさが先に立つて）おゝ、寶澤さん――。
大膳　しつ。頭が高い。
おさん　へい。
（三人小さくなる。）
天一坊　（懐しげに）おさん、よう參つた喃。身がためには眞の祖母ぢやが、凡て高貴の生れは母方の血統は問はぬとある故、言葉も改め、斯樣に高居も致す。赦して呉りやれ。
おさん　はい〳〵、そりあもう――。
天一坊　甚五郎、在國のみぎりは何かと無體を申したが、寶澤は死んだと思うて忘れて呉れ。仔細は書面にて申せし通り、望みとあらば藤六その他と同樣に江戸表へ供を申しつけ、行く〳〵は士分にも取立て得させようぞ。
甚五　有難う存じまする。
おさん　（驚く）それでは、お前は愈々あのお江戸へ――。
天一坊　（嬉し氣に）品川の旅宿が出來上り次第にこゝを立つのぢや。そちも一つに伴うて大事に孝養を盡さすであらう。お光、そちも連れて參るぞ。
お光　――。（無言でキョロ〳〵してゐる）
藤六　おい、お光坊、（後から肩をついて天一坊を指して一所に連れて行つてやると云ふ意を傳へる。お光は喜んでつか〳〵とその方へ寄らうとして、人々を見ていぢらしげに躊躇ふ。）
天一坊　（涙を催す）嬉しいか。西の丸へ入つたら大事にかしづかせて遣はす。天下の名醫をあつめて、治るものなら治してやりたい喃。しかし、それは重ねて。長の道中でさぞ勞れたであらう。皆次へ下つて休息するがよい。
甚五　畏りました。さ、お光坊、婆さん――。
おさん　いゝや、俺は一寸寶澤さんに話がある。先へ行つて下され。
甚五　では――。
（甚五郎とお光と藤六と上手へ去る。）
大膳　おさん殿、この上何か申し上げらるゝことがござるか。
おさん　さいな。（天一坊に）お前は今愈々江戸へ下ると云うたが、本間の事でござるかえ。

天一坊　如何にも。今申し聞かした通り、江戸表の旅館が出來上り次第に引き移る所存ぢや。
おさん　そして、それからは――何處ぞのお寺へでも入るのでござるか。
天一坊　それは判らぬ。しかし、大方は還俗して西の丸へ入る事になるであらう。
おさん　え、西の丸へ――あのお世繼にッ。（仰天して叫ぶ）あ、飛んだ事になつた。どうせう、どうせう。どうせうぞい喃。
（とうろ〳〵する。）
伊賀　しッ。（止めて）大膳殿、（襖の上下に氣をつけさせろ、大膳起つて行つて四方を見廻す）靜かに。じたいどうしたと云ふのぢや。
おさん　（初めて氣がついた樣に）おゝ、お前もこゝにゐなされたか。（縋る樣に）どうぞ止めて下され。江戸へ行くのを止めて下され。お願ひでござります。
伊賀　はて、不思議な事を。何故に江戸へ行つては惡いのぢや。
おさん　何故と云うて、――それが知れたら命が無いのぢや。うかと名乘つて出たらすぐ殺されるのぢや。劍難の相があるのぢや。
伊賀　何を他愛のない。天一坊樣は正しく御落胤ぢや。誰を憚り、誰を恐れる事があらうぞ。
おさん　え、御落胤――そりや誰の事ぢや。
伊賀　天一坊樣ぢや。
おさん　あの寶澤が――（凝視して叫ぶ）そりや噓ぢや。
三人　え。
おさん　噓ぢや。（寶澤に）お前はやつぱり名も知れぬ千ヶ寺詣の棄て子ぢや。
天一坊　ハヽヽヽ。何を云ふのぢや。そなたは嬉しさに氣が上つたのか。そなたが余に與へたお墨附は、紛ふ方の無い上樣の御直筆、短刀は紀州家重代の寶劍と、大阪の城代も確かに見極めたのぢや。
おさん　さあ、その二品は確かに德太郞樣の御片身に相違なけれど、それを持つてゐるお前は僞せ者ぢや。
天一坊　（やゝせき込んで）しかし、何も知らぬこの身に二品を渡して、忘れ片身ぢやと敎へたのは其方ではなかつたか。
おさん　それが噓なのぢや。和子樣はその夜の引き明けに泣き死にゝ死んで仕舞はれた。娘もそれを苦にして血が上つたのぢや。
天一坊　むゝ。（極度の驚愕とそれに伴ふ絕望から生れる憤怒とが交錯（かうさく）した異樣に物凄い表情で犇（ひし）めく）それぢやお前は俺を吊つてゐたんだな。（鋭く睨む）

おさん（恐れ乍ら）勘忍して下され。それも悉皆お前のためを思うた許りぢや。丁度二七日の晩に門口へ棄てゝあつたお前の襟に縫ひつけた書付を見ると、生れた年月も一つ故、和子様の身代りと思うて育て上げたが、生れついてあり餘る智慧を好い方へは使はず、毎日々々放埒ばかり募るので、高野の上人様のお言葉を思ひ出し、どうぞして眞人間に戻したいと、あの二品が殘つてゐたのを幸に、高貴のお胤と云ひ聞かせたら、少しは身持も直らうかと、思ひついたのも年寄の淺智慧からぢや。

三人　――。

おさん（伊賀亮に）そこへお前様がやつて來て、口を合せて下されたので、俄に身持も改り、やれ嬉しやと思ふ間もなく、大阪へ出て大勢の人を集め、天下の胤と名乘つて京へ上つたとやら、江戸へ下るとやら――やれ一大事と思うても年寄りの事、それに元はと云へばこの口から湧いて出た事、誰に打割つて話す事もならず、心一杯で案じてゐる矢先にお前からの迎ひの駕籠が出たので、天の助けと飛んで來たのぢや。（天一坊を見詰めて）これ、さぞ腹も立たうがその様な恐い顔をせずと、昔通りに機嫌を直して下され。そして江戸行をやめて、今の姿のまゝ名僧智識になつて下され。頼みまする。（にじり寄る）

天一坊（突き退ける）うるさいッ。それぢや本當に手前が擔ぎやあがつたんだな。

（蛇の様に掴みかゝらうとする。）

おさん　さあ、それもこれも皆お前が可愛いと思うた故ぢや。

天一坊　何が可愛いんだい。悉皆手前一人の勝手ぢやあねえか。何處の馬の骨だか知らねえ者を、公方の御落胤だの何だのと祭り上げておいて、いざこれからと云ふ處で素天邊から眞逆様に突き落して何がお情だ。（自分の衣裝を見て）見ろ、こんな巫山戯たなりで、世間へどの面が出せるんだい。

おさん　と云うて西の丸へ乘込まうとは、お前の大それた企てぢや。

天一坊　當り前だ。本當の親子と思やあ、逢ひ度くなるのが人情ぢやあねえか。

おさん　さ、それも尤も。惡いのは私一人ぢや。どうぞ勘辨して――。

天一坊　勘辨しろ。（極度の憤怒から言葉がとぎれ〳〵になる）ふ、巫山戯るない。そ、そのひん曲つた爪で、こ、この腸をずた〳〵に引掻き廻しておきやあがつて――ね、猫又婆めッ。（猛然と掴みかゝる）

おさん　あれッ。何をするのぢや。

天一坊　（口を塞いで）て。手前も、お、俺と同じにしてやるんだ――。

（散々に打つ。おさんは暫く爭うたがやがてグツタリとなる。天一坊はその襟首を摑んだまゝ、囈言を云ひながらずる／＼と自分の居間の方へ引きずつて行く。伊賀亮と大膳とは默つてそれを見詰めてゐたがやがてホツとする。）

伊賀　大膳どの――。

（目で行つて見ろと云ふ。大膳はうなづいて天一坊の跡を追ふ。日が次第に暮れかゝる。凄慘な間。やがて大膳が色を變へて戻つて來る。）

伊賀　如何でござつた。

大膳　（眉を寄せる）まるで子供が人形でも壞す樣に――。

（手眞似をする）

伊賀　むゝ。（凝つと考へる。そして又大膳を呼ぶ）大膳どの。

大膳　はい。（傍へよる。伊賀亮は何か囁く）ではあの二人を――。

伊賀　隱密の上にも隱密にな。

大膳　承知仕つた。

（上手へ去る。伊賀亮は尙も端然と坐つてゐる。やがて奥から天一坊が兩の指を蟹の足の樣に曲げて、よろよろ、よろ／＼と、精も根も盡き果てた樣にして出る。室の中央まで來て、ヘタ／＼と崩折れる。間。伊賀亮はやがてジロリと見て聲をかける。）

伊賀　（低く）おい、どうした。確りしろ。

天一坊　伊賀亮か。

伊賀　見つともない聲を出すな。男ぢやないか。

天一坊　久米仙ぢやあねえが、天上から地獄の底へ落こつたんだ。男でも侍でも大抵な奴は肝を抜かれるよ。だが伊賀亮、手前の天文も怪しいもんだな。

伊賀　天文――おゝ、あれか。ありやあ出鱈目だよ。

天一坊　何だとツ。

伊賀　（胡坐を組んで）そんな事が判りやあ今までこんな貧乏をしてゐるものかね。醉醒の水が欲しさに裏の井戸端へ廻つてゐると、お前と婆との面白さうな話が聞えたので、山かんで一役買つて出た丈けよ。しかし、思つたよりやあ大仕事だつたよ。

天一坊　（怒る）ぢやあ手前も俺を擔ぎやがつたんだな。そんな事たあ知らねえで、泣いたり笑つたりしてゐた。體のいゝ山猿だ。

伊賀　そんなに怒るなよ、猿曳だつて大夫の猿が甘く踊つて吳れなきやあ商賣にやならねえ譯だ。

天一坊　どつちだつて馬鹿々々しさは同じだ。（傍を向く）

伊賀　氣が短いな。そこで手前はこれからどうするつもりだ。

天一坊　どうするたつて俺は僞せ者だ。

伊賀　だつてあの短刀と墨附は本物だぜ。（手眞似をして）婆はやつて仕舞つたんだらう。

天一坊　（首肯く）ぢやあこのまゝ白ばくれて江戸へ乘り込まうと云ふのか。

伊賀　さうよ。他の邪魔物は大膳が甘く片づけて吳れた筈だ。大阪もよし、京も上首尾、あとは江戸一つだ。江戸にや名代の大岡越前守に松平伊豆守の二人が居るが、痩せても枯れても九條家の諸大夫竹內伊賀亮だ。九分九厘まぢやあ云ひ伏せる目算はとうからついてゐるんだ。

天一坊　だがね――（頭を横に振る）よさう。折角だが止さうよ。

伊賀　何故だい。

天一坊　だつて俺にやあそのあとの一厘があぶなかしくつていけねえんだ。

伊賀　足腰のねえ。そんな事で男の仕事が出來るかい。

天一坊　何とでも云へ。俺あ今のドシンでこり〳〵だ。もう二度とあんなに驚きたかあねえ。それにだ。今だから云ふんだが、婆に擬がれてから妙な氣になつて、お前や大膳に云はれるまでもなく、あんなに行儀をよくしてゐたが、僞せ者だと聞いちやあとてもそんな辛抱は出來ねえ。朝から晩まで左樣然らばぢやあ、半年の壽命も難ケしい。やつぱり昔の感應院の贅澤の方が氣樂でいゝや。

伊賀　さう云やあさうだが、それも甘く乘込むまでの辛抱よ。何處にだつて裏と表があらあ。公方だつて將軍だつて、年が年中奴凧みたいにしやちこ張つてゐられるものか。

天一坊　さうかも知れねえ。しかし、どの道あんなにのんきぢやあるめえからな。（何氣なく起つ）馬は馬づれ牛は牛づれだ。（下手へ歩みかける）

伊賀　手前、何處へ行くんだい。

天一坊　それまで考へてゐるもんかい。

伊賀　馬鹿ッ。

天一坊　え。

伊賀　馬鹿ッ。

天一坊　何だとッ。

伊賀　手前も面に似合はねえ馬鹿な奴だと云ふ事よ。子供のまゝ事の內裏遊びたあ違ふ、これまで大業に賣り込んで置いて、間違ひましたから止めますで世間が通すものか通さぬ者か、考へて見ても知れた事だ。

天一坊　成る程、こいつあ詫つた。公方の名前を騙る大惡人だ。好く行つて縛首、御定法なら磔付だ。惡くすりや

五右衛門の二の舞か。鋸引か。（揺と坐す）おい、馴染甲斐だ。痛くない樣にやつて呉れ。（背を向ける）
伊賀　む丶。（思入）こ丶でさつぱりすると云ふのか。仕方がねえ、これまでのお話だつたんだらうよ。
（刀を拔いて目の前に突き出す。天一坊は平然としてゐる。）
伊賀　いゝかい。今だよ。
天一坊　よし來た。
伊賀　やツ。
（パツと打ち下す刀を急に飜して吞打にする。天一坊はハツとして思はず前へ手を突いたが、不思議さうに二三度首を振つて見て、それから兩手で持上げて見る。そして伊賀亮を見て冷笑する。）
天一坊　ふん、古い手をやるな。
伊賀　いゝや、古かあ無い。確かにお前の首は斬つたんだ。
天一坊　む丶。（思入）ぢやあ、あのはッとした氣持丈けが死ぬ事なのかい。（凝つと空を見詰める。そして突然爆發した樣に笑ひ出す）ハ、、、。何んだくだらねえ。おい伊賀亮、それぢや思ひ切つてやつて見ようか。
伊賀　む丶、やるか。
天一坊　百年も生きやしめえ。丁と出るか半と出るか。
伊賀　天下を對手の大賭博。

天一坊　どう轉んだつて元々だあ。
（二人顏を見合せて微笑む。と、急に下手の襖を叩く音がする。）
侍の聲　申上げます。申上げます。
伊賀　（ハツとして）何事ぢや。
侍の聲　（襖の外で）所司代より御饗應のお迎ひとして丹波守殿御自身でお出向きでござりまする。
伊賀　すりや丹波守が直々に參つたとな。（天一坊に合圖をして上段の間へ上げる）御用意は整つてゐる。直樣供の用意を申しつけい。
侍の聲　はツ。
大膳　（上手より入り來る）伊賀亮殿、諸事首尾でござる。
伊賀　む丶。（下手へ向いて）お立ち。
（と呼ぶ。聲に應じて下手の襖を取拂ふ。銀燭煌々として目の屆く限り火ぜいの侍が平伏してゐる。）
伊賀　上樣には、先づ、先づ。
天一坊　む丶。
（悠然として下手へ歩みかける。）

――幕――

（大正十三年六月二十一日）

山本勘助（一幕）

人物

山本勘助
その母
近所の女房おせつ
その妹お松
庄屋作兵衛
越後の侍
甲斐の侍大將馬場美濃守
近所の百姓太郎兵衛
同　權十
同　平藏
其他、美濃守の家來、百姓、小兒、旅人等大勢

處

信州、諏訪の傍

時

戰國時代、秋

舞臺

或る峠道の頂に近き處。正面中央山路を切開いて斜めに下手へ向けて小やかなる藁葺の百姓家あり。半ば茶店風にしつらへて、下手半分は土間、二三脚の床几を置く。土間の奥は、鈎の手に一尺ばかりの床になつて居り、爐を切り、自在に煤けたる土瓶をかけたり。粗末な茶道具、駄菓子等置く。

上手の半分は、奥の納戸。これも煤けたる障子を閉てあり。店の土間よりは名ばかりの四ツ目垣を建てゝ仕切る。垣の下には野菊亂れて咲く。

家の前には、道祖神が一基、やはり秋草に埋れてある。そこからは道は二筋に分れてゐる心にて、一筋は、舞臺の前面を上手へ行く村道、一筋は、家の後を廻つて行く坂道の往還。下手へかけて杉並木二三本。上の方には黄葉したる銀杏の大樹、外に色々の紅葉。これ等の凡てを包む遠景は、丘陵の起伏せる澄み渡りたる高原の秋景色、繪心地に廣がる。晴れたる日の午後。勘助の母一人。店の床几の上に糸車を持ち出して靜かに糸を紡ぎゐる。小やかなる小鳥の囀き、落葉の音……靜かなる間。

やがて下手より何事か騷しく罵る人聲聞ゆ。老母ハツとしたる體にて糸車の手を止め、延び上る樣にして其方を見る。しかし、何事も見當て得なんだ風に、それ

丈け不安氣に元へ坐る。正面坂道より旅人らしき若き夫婦、いたはり合ひ乍ら出る。一寸茶店の方を見て、休まうか休むまいか躊躇ふ樣にしたが、そのまゝ下手へ行き過ぎて仕舞ふ。と、又下手にて人聲聞ゆ。老母は驚いて起つて下手を望む。向ふより山本勘助、やゝ疲れたる體に怒氣を含んで歸り來る。侍らしき小袖、袴、大小をつけたれど、皆古びて塵にまみれて、いとどみすぼらしき上に、片目盲ひ、片足痿えたれば、形容凡て悲慘なる滑稽に滿さる。

勘助　（侍らしく）　母者、今戻つた。

母　（いそ〳〵と）　おゝ。最う戻りやつたか。今日は常になう早かつたの。

勘助　（沈痛に）　朝出る時には、辰野飯田あたりまでと思うたが、何處の邸を尋ねても狂者か乞食の樣にあつかはるゝ忌々しさに、中途から引返した。（嘲る樣に）　この姿を一目見ては、呼び入れて一言聞き試して見ようと云ふ心も起らぬと見える。（床几に腰を下して）　春淺い故郷へ歸つてから最う半年になる。山國の秋は早い。天晴れ天下一の名馬を、何時まで廐に繫いで置かうと云ふのか。

母　（慰めて）　それはお前、目明き千人、盲目千人の喩ぢや。今日明日には無うても、やがてよい主人が見つかるに極つてゐる。

勘助　（怒る）　措かれい。其樣な一時遁れの慰め言は聞き倦いた。さう云ふ口の下からにも、腹の中では世間の奴等と同じ樣に、役立たずの片輪者と笑うてゐるのであらう。

母　（驚く）　まあ、滅相な。他人はともあれ、何のわしがその樣な事を思うてゐようぞ。お前が五年の間京都で學問をして來た事は疑ひもない事ぢや。

勘助　（苛々として）　それが判つてゐるならつべこべ云はずと默つてゐなされ。

母　ぢやと云うて——。

勘助　（怒鳴る）　矢かましい。入らぬ愚痴をこぼす間に湯でも茶でも汲んで下され。この疲れた樣が見えぬのか。

母　（初めはムツとしたがすぐ笑顏になる）　おゝ、こりやとんと忘れてゐた。勘忍しなされ。ほんにいかい勞れた事であらう。

（自在の土瓶を取つて茶を汲んで來る。）

勘助　（憎々しげに）　やつと氣がついたのか。（飲む。熱いと云ふ思入れ）　熱ツ。この樣なものが飲まれるかツ。（茶碗を床几に叩きつける）　總じて勞れの激しい者の湯茶の所望には、初めは水同然のぬるま湯を出し、それから漸次熱うして出すのが心得のある者の業ぢや。こなたも勘助程の者の母者ならそれ位の事は工夫召されい。

母　（逆らはず）あい〳〵。今度からは氣をつけまする。

（又汲んで來る）

勘助　（心地よく飮んで）上々吉、上々吉。さて茶が濟んだら、これぢや、これぢや。（足を踏んで見せる）

母　あゝ、草鞋を取るのかえ。

勘助　序に脚絆もとつて下され。（足を踏みのばし懐から本を出して讀む）

母　（云ふ樣にする）これでよいか。

勘助　むゝ。しかしこの泥足でも上られまい。洗足を下され。

母　えツ、洗足。（又ムッとしたのを強ひて押へて）あいあい、今取つてやるぞえ。

（盥に水を汲んで來る。勘助それに足を入れて飛び上る。）

勘助　冷いッ。何ぢや、こりや水か。これ母者人、秋と云うても木の葉があの樣に舞うて落ちる頃ぢや。何故溫湯を下されぬ。

母　（流石に堪へ兼ねて）ぢやと云うて、年寄子供の身ではなし、これがどれ程身にしみようぞ。

勘助　ええい、措いて下され。その理窟が判らずにする我儘ではないわい。

（片足を擧げて盥を蹴かへし、急いで奥の室へ入つて障子を閉て切る。母は思はず後へよろ〳〵となりしが、やつと立上り、腹立しげに見送りしが、やがてそつと涙を拭うて、盥や草鞋等を片づける。と下手より近所の百姓太郎兵衞、權十、平藏、子供二人、その他大勢口々に罵り乍ら出て來る。その中には向ふ鉢卷をして竹槍樣の獲物を携へたるもあり。）

太郎　さあ〳〵、ござれ〳〵。今日と云ふ今日はもう勘辨がならぬぞ。

權十　さうとも〳〵。皆かうして來たからには、確りと掛合うておかねばならぬ。

（口々に棄臺詞ありて小家の前に來る。）

母　（ハッとしたる體にて）おゝ、これは太郎兵衞さんに權十どの、大勢揃うてどこへ行きなさる。まだ猪の出る頃でもござるまい。

太郎　おゝ、猪には早いが、近頃狂犬が暴れ廻るので揃うて退治にやつて來たのぢや。

母　えツ、狂犬がッ。

權十　それも常の狂犬ぢやあ無い。跛に偏目の狂犬ぢや。

（強く）おい、母さん、勘助はどこにゐる。

母　（ドギマギして）あい、あの——悴は今朝出たぎりまだ戻らぬ。

太郎　房らぬ。噓をつけ。今の今この坂を上るのを俺の黒

い目でチャンと睨んで來たのぢや。

母　でも――戻るには戻つたれど、すぐに裏の方へ出て行つてしまうた。

太郎　何、出て行つた――。

母　したが、お前達は勘助に何の用がござるのぢや。

太郎　白痴め、用事なぞがあるものか、見つけ出して仕置にするのぢや。

母　えツ、仕置に――そりや又どうして。

太郎　こゝに居る權十が證人ぢや。あの勘助奴が家の悴をいかいどえらい目に逢はせたのぢや。

母　えツ。

權十　證人は俺ぢや。あの太郎兵衞どんの悴が向ふの藪際で遊んでゐると、いきなりあいつが來て石をぶつつけたのぢや。

太郎　命には別狀はないものゝ、若し當り處が惡かつたら、片輪になるか何になるか知れたものぢやない。

權十　それに今日許りぢやない。一昨日は池尻の市助の伜を溝へ突き落したさうぢやし、その前の日はおらく後家の一人子を川へはめかけたさうぢや。誰れ彼の差別なしに食ひつくとはまるで狂犬ぢや。今日と云ふ今日は皆揃うて掛合に來たのぢや。さあ、勘助をこゝへ出して具れ。出て行つたと云ふのは嘘にきまつてゐる。

皆々　出して具れ。出せやい。

母　（押隔てゝ）いえ〳〵正ぢや。勘助は家には居ぬ。したが、あれも十や十五の子供ではなし、科の無い子をその樣な目に逢はす筈はござるまい。（菓子を取つて子供等の方へ行く）これ、お前達は何ぞ惡口でも云うたのだらう。

子供の一　いゝんね。俺、なんにも云はねえ。

母　さあ、お前は云はいでも、あの子は云うたであらう。さ、これをやる程に早う婆に敎へてたも。（菓子をやる）

子供の一　（菓子に釣られて）おゝ、俺は云はねど、太郎吉は偏目の氣違ひと云うた。

子供の二　うそぢや〳〵。あいつが跛の乞食野郞と云うたのぢや。婆樣、菓子を下され。

子供の一　いゝや、俺は云はぬ。お前はさう云うて石を投げたのぢや。

子供の二　お前も投げた――。

子供の一　お前も――。

（爭ひかける。母は引き離す。）

母　もうよい〳〵。（二人に菓子を分けて）何と皆さん、片聞では何とやら。今のを聞かしやれたか。

太郎　むゝ。（言句に詰りしが）しかし、子供は正直ぢや。何もない事を云うたのではない。眞偏目ぢやによつて偏

目ぢやと云うたが何で悪い。

権十　さうとも〳〵。跛ぢやによつて跛ぢやと云うたのぢや。まともな體を片輪ぢやと云うたら腹も立ていぢやが、片輪を片輪と云うたのが何ぢや。

平蔵　それにあの身なりは何うぢや。鋤鍬さへも満足にもてぬ身で、侍めかして大小をさし、我物顔にこゝらあたりをのさばり歩く。狂人(きちがひ)と云うたが無理か。

太郎　皆あたり前の事を云うてゐるのぢや。それに相手は子供ぢや。笑うて通しても事が済むのに、その石を拾うて打ちかへすとは、呆れかへつた和郎(わろ)ぢや。

権十　今にあの顔を見て笑うたと云うて、村中に火をつけるかもしれぬ。その様な物騒な男は、今日限りこの村には住はせぬのぢや。(立ちかゝる)

母　(止めて)さ、さ、それはさうでも、あれの身になれば云ふに云はれぬ切ない事もござらう。あとでよう云ひきかせる程に、どうぞ手荒な事はこらへて下され。

太郎　いんにや。今日と云ふ今日は両手を突いてあやまらせずには歸らぬのぢや。(奥へ向ひて)かう大勢で來たからには、内搦脅(にいおど)しの刀には恐れぬぞよ。

母　さゝ、それはさうでも――。

(爭ふ。奥より勘助雷の如く叫ぶ。一同驚く。)

勘助の聲　やかましい。だまれ蛆蟲。

一同　やツ。

聲　泥中の蟲は自ら其臭きを知らずとは、偏におのれ等が事ぢや。此の日本一の大賢人を敬(うやま)ふ業(すべ)は知らぬまでも、立騒いで書見の妨げは致すな。

太郎　(呆れて)あ、あれぢや。先刻からの話が聞えてゐれば、飛び出して來て詫云ふが當り前ぢやに、のめ〳〵とあの云草ぢや。何ぢややら云ふ事は判らぬが、いづれこちの悪口に違ひない。いよ〳〵堪忍がならぬ。

(皆々奥へ行かうとする。母は懸命に止める。)

母　どうぞ待つて下され。さう腹の立つのは尤も、皆勘助やこの婆が云ひすごしぢや。したが皆の衆も知つての通りあの勘助も五年の間都へ出て、何やらむづかしい學問とやらを仕上げ、どの様な處へでも奉公はなると、飛び立つ様にして戻つて來たに、どうした譯やら今まで一度も主取りが出來す、(ホロリとなる)あれの身になつて見れば、心外にもあらう、口惜しうも御座らう。それがつい結ぼれて、自分にもあたり、人様にも當る様になつたのであらう程になあ。

権十　(遮つて)それが云ひわけになるものか。そつちの主取りが出來ぬのは、こつちの知つた事ぢやないわ。

母　さ、それぢやによつてこの様に両手を下げて居りますのぢや。親父(おやぢ)どのにも死なれ、他に身寄りはなし、今こ

こを追立てられたら、何處へ行かうやうもない二人ぢや。

太郎　さゝ、ぢやによつて俺が前にそなたに意見したのぢや。あの樣な一人前の野良仕事さへも出來ぬ不具者(かたわもの)を京へやるとて、有り丈けの田畑を賣つて仕舞ふと云ふたはけがどこにあるものぞ。あれさへあれば人手に小作さしても安々と過せる程の收入(みいり)もある。勘助にも乞食同樣のなりをさせいでもすんだのぢや。

母　しかし、それもあれのたつての望みで喃。(怨めしげに)京は日本中の名人の集る處、そこへ行つたらどの樣にも身を立てる手蔓があらう。どうぞ行かして下されと賴まれたその時は、身の皮を剝いでもやらずにはをられなんだ。

平藏　(やゝ同情して)しかし、それにしても家倉殘らず賣らずとも仕樣はあつたに。

母　さあ、それも生れ付きの片輪なら神業(かみわざ)とでもあきらめさす法もあらうが、わしと親父どのとが、つい一寸した油斷からあの樣にして退けたと思ふと、何の後生の願ひどころか、この白髮を一筋づゝ引拔いても、あれの望を叶へたかつた。

平藏　ふむ、何でも谷へ落したのぢやと喃。

母　(首肯く)仕事の休みに、親父どのと二人で、つい話に實が入つてゐる間に喃。(顏を赤らめ)でも。二人とも若い身空ぢやもの喃。

太郎　ワハ、、、。こりや出來た。とんだ處で昔噺をきいてのけた。

平藏　(尙同情して)しかし、その樣にまでして出した者が、あの樣になつて戾つてはそなたも心細かろ。一體何を習うて戾つたのぢや。

母　兵法(へいはふ)とやら云うて軍(いくさ)の學問ぢや。

平藏　やれやれ、それこそ飛んでもない事ぢや。あの樣な體でなんの軍の役に立たう。主取りの出來ぬのも尤ぢや。及ばぬ事を望んで腹を立てようより、あきらめさつしやれ、あきらめさせなされ。

母　はいはい。何もかも皆樣まかせにしまする程に、どうぞ今日の處は――。

平藏　あゝ、仕樣がない。その代りこれから氣をつけさつしやれ。

權十　この次にこんな事でもすると、もう此の村へはおかぬからさう思へ。

太郎　おかげで妙な噺(はなし)をきいた。二人とも若かつたで喃。ハヽヽヽ。

皆々　ハヽヽヽ。

(皆々笑ひ乍ら下手へ去る。)

母　(見送つて)何が笑ひ草ぢや。親父どののもそれ一つを

苦にして死なれたのぢや。僅か小石一つが當つたとて、村中空(から)にする程押よせて來ても、他人(ひと)の子が片輪になつた話は可笑しいと見える。

（淋しく黙る。奥より勘助一枚の白紙に「命のうりもの」と書きたるを持つて出る。）

母　おゝ、勘助か。今のを聞いてはお前もさぞ腹が立たうが、多勢に無勢ぢや。よい主人が見つかるまでは、何も云はぬがよい。

勘助　――。（答へず、紙を持つて何處へ張らうかと思案の體）

母　（覗うて）何やら紙に書いて――張りつけてゞも置かうと云ふのかい。

勘助　――。（矢はり無言。やがて軒の柱の程よき處へ張りつける）

母　（案じる様に）矢張さうするのぢやな。これ、何と書いてあるのぢや。又、村の衆の惡口でも云うてあるのではないか。

勘助　（怒る）やかましい。默つてござれ。そなた達の知らぬ事ぢや。

母　でも、今の様な騒ぎにでもなると、困るのは私ばかりぢや。

勘助　それも滿足に育てゝ下されたら、この様にはならぬのぢや。今も親父どのゝ位牌に怨を云うた。

母　――。（淋しく口を噤む）

勘助　（やゝ氣の毒に）有様(ありやう)はな、最う方々と歩き廻るのは大儀になつた故、こゝに坐つてゐて通りかゝつた侍に身を賣る事にきめたのぢや。これから侍と見たら、居眠なぞせずと、隨分氣を入れて引止めさつしやれ。（下手を見て）おゝ、待つ間に莫蓙をしけぢや。あすこから侍が一人上つて來る。肩をいからして大手をふつて道一杯に跋(はび)こつて來る。どうやら頭は鈍さうなが、まあ店出しの初めぢや。呼び込んで下され。

母　あい／＼。

（勘助は奥へ入つて、態と障子をあけて後向きに本を讀み初める。母は道端へ出る。向ふから六兵の見るから強さうな虎髯の侍が旅姿にて出て來る。）

母　（無器用な調子で）お寄りなされませ。峠はこれからでござります。

侍　（無愛想に）いや、湯も水も欲しうはない。これ程の坂道で勞れる程の柔弱者ではないわい。

母　は、はい。ではござりませうが、お情に縋つて生きて行く年寄でござります。どうぞお休みなされて下さりませ。

侍　さうか。さう聞けば無下にも歩まれまい。一休みいた

してつかはさうか。（床几に腰を下す）

母　（いそ〳〵と）はい〳〵、有難うござります。あの旦那様はいづれへお越しでござります。

侍　これより諏訪明神へ參詣して、越後路へ立歸るのぢや。

母　それは〳〵長い御道中でござりまする。したがお日和つづきで何よりでござりまする。百姓共もよい秋ぢやとよろこんでをりまする。

侍　むゝ、草もよい程に枯れた。戰も今からぢや喃。（云ひつゝ不圖張紙を見る）や妙な事がある。（讀む）命のうりもの——（考へて）はて、何者の惡戲ぢや。

母　（湯を汲んで）いえ惡戲ではござりませぬ。侍になりたいのでござります。

侍　ふむ、奉公の望か。成る程それで命の賣物か。讀めた。讀めた。して、その者はこのあたりの者か。

母　はい、實は私の悴奴でござります。五年前から京へ上つて、日本一の師匠とやらについて、戰の學問を仕遂げて戻りました。

侍　（眞面目になる）ふむ、五年の間京で兵法の奧義（あうぎ）を極めたと申すか。それは定めて名譽の勇士であらう。（威儀を正して）何を隱さう、拙者は越後の上杉家の家臣にて、長尾景信と云へば少しは人に知られし者ぢや。かゝる亂世には、一人にても多くの勇士を召抱へられたき主人謙信公の命によつて、密かに諸國を遍歴いたす歸り途ぢや。かゝる大勇士に廻り逢ふも一向（ひたすら）念じ申した諏訪明神の御引合と存ずる。是非とも謙信公へ御推擧いたす。

母　有難うござります。有難い事でござります。どうぞ旗持になりともお使ひ下されたら、あれの年頃の望が叶ひまする。

侍　いや〳〵、左樣な勇士を旗持なぞとは思ひもよらぬ。必ず然る可き士分に御推擧いたす。してその御子息はいづれに御座あるな。

母　つい奧にをりまする。すぐに連れて參じまする。（奧へ行きて、勘助を呼ぶ。勘助は勿體ぶつた返事をして起ち上る。越後の侍はどの樣な勇士が現はれるかと固唾を飲んで控へて居る。しかし思の外の勘助を見て驚く。）

勘助　（表へ出る）これは越後の長尾氏とやら、仔細はあれにて承つた。上杉公へ御推擧下されようとか、先づもつて忝う存ずる。

侍　えッ、すりや矢張りお身が——あの兵法の達人と云はるゝかッ。（全く驚く。そしてしげ〳〵と見てすぐに輕蔑の念を起す）ハ、、、。さうで御座るか。如何にも御推擧いたさうが、先づ御身の系圖を承りたい。凡そ何氏の御末孫でござるか。

勘助　（平然として）　されば、百姓勘左衞門の倅でござる。

侍　いや、今は百姓郷士となられても、その昔は名高き侍大將或は公家の流れでござつたであらう。

勘助　いゝや、親代々百姓に相違ござらん。

侍　（明らかに輕蔑して）　すりや系圖はござらぬか。

勘助　生憎と系圖作りに知合がござらぬによつてな。親代代百姓、この樣に山の麓近くに住んでゐますれば、山の麓、卽ち山本勘助と名乘り申す。

侍　（笑をこらへて）　すりや全く氏も系圖もござらぬか。

勘助　なか／＼、系圖の一卷が身を守る矢玉の楯にはなり申すまい。

侍　（やゝ感心して）　なる程、餘程の心得と見申す。して知行のお望はござるか。

勘助　先づ五百貫は安からうと心得まする。

侍　五百貫――ほう。（驚く。そして狂人と思うて仕舞ふ）いや、それも承知仕つた。いづれ後日主人とも相談の上。お迎ひに參るでござらう。（起ち上る。そして二三歩行きかけて不圖思ひつく）あゝ、とんと失念仕つた。主人への土産話に、どうぞ一本お立合ひを願ひたい。

勘助　（驚く）　えツ、あの試合をせよと仰せらるゝか。

侍　如何にも、五百貫目の知行取のお腕前を拜見いたす。

勘助　（頭を掻く）　それはどうも迷惑千萬ぢや。見るから雲をつく樣な其許と拙者とでは、中々及びも申さぬ。（碎けて）何とこれで試合は濟した體にして下されぬか。

侍　いや、そりやなり申さぬ。又その樣に御謙遜めされずとも、勝負は時の運でござる。

母　さうとも／＼、今こそ出世の掛橋ぢや。日頃の手練を御目にかけや。私もこゝで一生懸命に明神樣を拜んでゐる。

勘助　（詮方なしに）　では、御相手仕らう。

侍　御手柔かに、獲物はそこの垣根の竹がようござらう。（侍は自分で竹を拔いて手頃な獲物を二つ作つて一つを勘助に渡す。勘助は奇妙な體つきで身構へる。母は十間の隔で一生懸命に神に祈る。）

侍　御用意よくば參らう。いざ。

勘助　いざ。（左右に分れて身構へる。侍はすぐに隙を見出して打込んで來る。勘助は一二合は本能的に受止めたが、すぐにたじ／＼と成つて強く肩先を打たれて倒れる。急には起き上られぬ。母は茫然自失す。）

勘助　ま、參つた。

侍　ワハヽヽヽ。たはけ奴ッ。最前から怪しい怪しいと思うたに、果してこいつ大衒ぢや。小兒同然のその腕に、どこに五百貫の値があるぞ。

勘助　有るとも、有るとも。この身一つを五百貫は安いものぢや。アイタ、、、。安いものぢや。

侍　おのれ、まだその様にへらず口をきゝ居るか。むゝ、案ずる處おのれ等母子は武士を嘲弄いたす所存であらう。以後の見せしめ、思ひ知れ。

（先刻の竹を取つて散々に打つ。母が駈け寄ると、これも打たれて倒れる。）

侍　どうぢや、骨身に堪(こた)へたか。

勘助　堪へた。アイタ、、、。途方もない馬鹿力ぢや。

侍　何ッ。

勘助　いや、何も申さぬ。しかし、勘助決して嘘は申さぬ。五百貫目の値打はこの胸にある。（やう／＼起き上る）先づ聞かれい。如何にも今日までの一騎駈けの戰爭では、尊公の様な力の強いもの、武藝のすぐれた者がいつも勝利を占めて來たが、時世はいつまでも一つ處には止まつてはゐぬ。戰の仕樣も、陣の備方もガラリと夢の様に變る時が來てゐるのぢや。

侍　ふむ——。（輕蔑し乍ら聞く）

勘助　（熱心に）　御身達はまだ知るまいが、この程都には南蠻から鐵砲と云ふ恐ろしい道具が渡來してゐる。これは鐵の細い筒の先に鐵の玉をこめ、根本に煙硝と云ふ強(つよ)藥(くすり)を詰め、一度に火をつけて放す時は、玉は目にもとまらぬ早さで飛んで行き、二百間先の厚い楯も吉野紙同然に打ち抜いて仕舞ふ。弓矢と違うて、鎧でも冑でも一たまりもない。されば、いざ戰場となつた時、この鐵砲を用ゆれば、如何なる強力の名將も名も知れぬ足輕の手で一打ぢや。斯く申す勘助でも尊公なぞは一打ぢや。

侍　むゝ。（思はず胸を押へる）

勘助　（雄辯に）さすれば力ばかりでは勝たれぬ様になる。一人々々の戰より百人二百人千人と大勢一致して戰はねばならぬ。その時の駈引は皆兵法に詳しい軍師の教をまたねばならぬ。勘助はその兵法の奥義を學んだのぢや。

侍　（吊り込まれて）成る程、弓矢よりも強い飛道具が現はれては、先陣の功名も危いものぢや。しかし、その鐵砲とやらを御邊は唯今所持召さるゝか。

勘助　いや、まだ極めて高價のもの故、拙者如き貧生には求められなんだ。しかし、その取扱ひ及び煙硝の製法は手練いたした。

侍　ではこゝには無いのでござるか。

勘助　如何にも。

侍　ハ、、、、大方その様な事であらうと思うた。持つてゐるもせぬ道具に手練(てだ)れたとはよう云はれた。鐵の筒に玉をこめ、それに火をつけると目にもとまらぬ早さで飛んで行く——ハ、、、。その様なものがどこにあらうぞ。

信州の山猿ならそれでも脅されようが、日本無雙の謙信公の家來ぢや。その樣なあざとい手は食はぬによつてさう思へ。あゝ馬鹿々々しい。とんだ狂人に出逢うてあたら隙を潰してのけた。どりや出かけようか。(起つ)

勘助　ではどうあつてもその樣な武器はないと仰せらるゝか。

侍　有ると思はれたいなら、目の前に持ち出して來るがよい。

母　ではあの御推擧は。

侍　おんでもない事ぢや。この樣な狂人が何で連れて行かれようぞ。旗持にも兵粮人足にもなりはせぬわ。

母　では、どの樣に申しても。

侍　諄い。

(袖を拂うて行きかゝる。勘助フト何か思ひついて止める。)

勘助　あもし、一寸お待ちなされませ。

(手早く先刻の張紙を剝いで、奥から筆を持出すと達筆でその裏に「井底之痴蛙不知大海」と書いて出す。)

侍　何ぢや。これは。(意味のとれぬ科)

勘助　(皮肉に)お讀めなされませぬか。

侍　(狼狽を隱して)いや。讀める。よく判る。

勘助　でござりませう。それは謙信公へのお土産に進上申す。それを見せて、今日の事をお話しなされたら、尊公のお手柄がよく判りませう。

侍　(煙に卷かれて)むゝ、それは千萬忝い。しからば頂戴いたして參らう。

(叮嚀に押戴いて懷中し、大手を振つて奥の方へ去る。勘助は態々表へ出て見えなくなるまで其跡を見送つて狂人の樣に笑ひ出す。)

勘助　ワハヽヽヽ。あの侍奴文字が讀めぬと見えて、自分の惡口を書かれて喜んで持つて行つたわ。井底の痴蛙大海を知らずか、ワハヽヽヽ。ワハヽヽヽ。

(心の行くまで笑ふ。と、その中不圖自分の笑ひ聲の空虛なるに氣づきて淋し氣に口を噤む。母はそつと涙を拭うて背戸の方へ去る。)

勘助　今笑うたのは誰ぢや。笑はれたのは誰ぢや。勘助が習うた事も、勘助が考へついた兵法も、まだ時世に早すぎたのか。それとも末代までも用ひられぬまことの狂人か。

(悲痛に叫んで奥へ駈け入り、山なす兵書を引き出して心の安心を求める樣に遽しく讀む。しかし、そのいづれにも慰められぬと見えて叩きつける樣に床几の上に置き、深い溜息をついて鋭く空を見詰める。と、上手より近所の女房おせつ、他所行の拵へにて手に小さ

き包を持ち、いそ／＼として出て來り、フト勘助を見る。勘助も足音をきいてその方へ目を移す。二人の瞳が思はず重つた時おせつはハッとして包を取落し、わな／＼と戰く。やがて無理に勇氣を起して勘助の方へ來る。）

おせつ　これ勘助どの。何故その樣に恐しい顏をして私を見るのぢや。お前はまだあの時の事を怨んでゐてか。

勘助　――。（無言で女を見詰めてゐる）

おせつ　おゝ、矢張さうぢや。お前は私を怨んでぢや。聞けばこの頃は村中の人を仇にして、亂暴ばかりしてぢやとやら、そして私も一所に憎むのかえ。さりとては餘りぢや。こゝこの心が何故にお前に通じぬぞ。（傍へすり寄らうとして、恐し氣にためらふ）私や、私や、とうからお前をいとしいと思うてゐた。（顏を覆ふ）

勘助　――。

おせつ　（顏を上げて）したが、娘氣の恐い許りが先に立つて、お前のやさしい手紙の返事さへも、今日書かうか、明日書かうかと思ふ中、お前はどこへやら行て仕舞はれた。後でさうときいた時私やこの弱い心を叱り通して、三日三夜泣き明かしたわい喃。

勘助　――。（何も無言。併し、やゝ心のうごいた體）

おせつ　とは云へ、立てた操は變へまいと、心に固い誓を立て、降る樣な緣談も一つ一つ無下に斷つてゐたなれど、親の高祖、二つには母さんの涙にほだされて、つい心にも染まぬ良人を持ち、子まで持つたれど、心の奥に燃える火は、桔梗ヶ原の狐火の樣に絕えた事はないに、無情い村の衆と一つに怨まるゝとは情ない。（泣く）

勘助　――。（胸にこたへた樣に面を伏せる）

おせつ　これ、どうぞ返事をして下され。この樣に云うてもまだ心がとけませぬか。（凝つと思案して）お、お、さうぢや。この身はとても元へは歸られぬが、知つての通り妹のお松は丁度今が娘盛、私の心もよう知つてゐる筈故、身替りにそなたへ嫁入らせよう程に、私ぢやと思うていとしがつて下され。や、頼みまする。では一走りいて談合せう。さらばでござんす。

（ふりかへり／＼さも恐しげに元來し方へ引き返す。勘助は茫然として見送る。手にもつた木が自ら地に落ちる。）

勘助　眞と思うた俺の修業には實がなく、實の無いと思ひ暮した女には眞があつた。何といはれようと儘、いつそ望をすてゝ、元の百姓に歸つて、おせつ殿の志に生きようか。

（木の表紙を引裂いて棄て、腰から刀を拔き取り袴の紐を半分ほどほどく。下手から庄屋の作兵衛が火急で

走つて來る。勘助を見付けると無言にその手を掴んで上手へつれて行かうとする。勘助は危く轉りかけて立止る。）

勘助　あこれ。何とするのぢや。

作兵衛　（一人合點して）逃げるのぢや、逃げるのぢや。

勘助　逃げる、とは何故に。

作兵衛　何故も糸瓜もない、お前が平生人も無げな廣言を吐くによつて、とう／＼この樣な事になつたのぢや。今な、この村境まで甲斐の武田信玄樣がお出でなされて、この村に山本勘助と云ふ者が居るかッ、と、火の出る樣に云はれた。そこに居合せた者は平素は平素ぢやが、かうなればどうぞして隱してやりたいと思うたが、あのでかい目で睨まれたので、とう／＼本當の事を云うて了うた。そこで馬場美濃守と云ふ大將がお前を捕へに來る事になつた。どうせお前の事ぢやでよい事はあるまい。早やう逃げるがよい。

勘助　（動ぜず）はてな、信玄公が直々に見えたとは、近頃間者ぢや。（捨てた木を拾ふ）

作兵衛　これ／＼、落ついて考へてゐる處ではない。いつも作門つた奴ぢや。これ、婆樣、婆樣。

母　（奥より出る）あい／＼、皆聞いてをりました。こりやどうなる事であらうな。

作兵衛　（伸び上って）あ、さう云ふ中にもうぢきそこぢや。こんな處にゐて飛んだ傍杖を食うてはならぬ。（遽てて上手へ行きかけて恐い者見たさに銀杏の下で樣子を伺うてゐる。母は腰の拔けた樣にベッタリとなる。向ふより武田家の侍大將馬場美濃守、優美なる旅姿にて、家來二三人に進物臺を捧げさして歩み出づ。あとより先刻の百姓等おづ／＼と伺ひ來る）

美濃守　（本舞臺へ來て）卒爾乍ら問ひ申す。山本勘助大先生のお館はこれで御座るか。

勘助　（吊込まれて）如何にも山本の邸はこちらでござる。

美濃守　して、勘助先生には御在宅でござるか。

勘助　むゝ、在宅いたしまする。

美濃守　しからば武田の家來、馬場美濃守主命に依つて御意得たしと御取次下されたい。

勘助　承知仕つた。（たちかけてフト心づき挾いた刀を差し、袴の紐を締め直す）いや、この方がその勘助でござる。

美濃守　（驚く）えッ、あの其許が大軍師でござるか。（呆れる。百姓共皆笑ふ）

勘助　如何にも正眞正銘、まがひなしの勘助でござる。（百姓笑ふ）

美濃守　（流石にすぐ心を引締めて）いや、これは／＼存

ぜぬ事とて失禮仕つた。拙者事は武田家の家臣――。

勘助　（世話に止めて）いや、それは最前承りました。して、この勘助に御用と仰せらるゝは。

美濃守　餘の儀ではござらん。主人信玄、御邊の英名を承知致されて、軍師として御招聘申したき存念、何と御承引は下さるまいか。

勘助　えッ、私めをあの武田家の軍師にとな。（驚く、皆々驚く。軍師々々と私語く）

美濃守　如何にも。知行の儀は當分の間一千貫、それも御不足とあれば拙者一存にて如何樣とも御計ひ申す。

母　えッ、一千貫……

皆々　千貫、千貫……。（囁く。勘助は腕をくむ）

美濃守　それとも他にお望みがござりまするかな。

勘助　いや、その不足は御座らねど、じたい何者の口から拙者の事がお耳に入りましたな。

美濃守　御身の師匠、井上新左衞門殿の推擧でござる。（懷中より書狀を出して見せる）主人信玄京へ一人の使者を使はし、當時軍學の泰斗、井上殿を親しく御招き申さんと申し入れし處、お身の隣國信州に山本勘助と云へる者あり、年いまだ若けれど、身が奥儀を悉く傳へし天晴の達人、この程歸國いたしていまだ主取りせし便りもなければ、その者を召抱へられよ、さすれば武田家の武名は天下一となり申さうとの返し文でござつた。かゝれば即ち、信玄公御自らこの里まで御迎の馬を進められたのでござる。

勘助　すりやあの拙者奴を召抱へんため態々駕を枉げられしとな。（大地に平伏する）古の黄石公の靴にも優る御知遇、士は己を知る者のために死す、勘助只今より御味方に參り、粉骨の御奉公申すでござらう。憚乍ら御前よしなにおとりなし願ひ入る。

美濃守　いや、早速の御領承、拙者奴も滿足に存ずる。さ、お手を上げられい。お手を上げられい。就ては當座の御料として、時服一重信玄公より下さるゝ。御受納ありて然る可し。

勘助　（やう／＼に起つ）はゝッ、何から何までの御心添有難う存じ申す。

美濃守　扨て、使者の表はこれ限り（起つて近くの床几に坐し）今日よりは拙者も御邊の采配の下に働く身でござるが、心得のためにお尋ね申す。そも武田家唯一の强敵はいづれでござらうな。

勘助　（考へるまでもなく）されば、當國村上は弱少、北條、今川は內訌に苦しめば兵を外へ出す力なし、織田、德川、今は倚語るに足らず、只尋常の勝負の出來るは、越後の上杉家ばかりでござらう。

美濃守　（思はず手を打つ）至極の御明察、憚乍ら流石と存じ申す。して、兩軍兵を合せるその場所は。

勘助　されば、進んで戰はゞ信州川中島、退いて天險を守らば、上下諏訪、鹽尻あたりが究竟の絶所ぢや。

皆々　えッ。（驚き顔を見合はす）

勘助　併し、戰は出でゝ攻むる者に利あり、いづれは川中島が決戰の地となり申さう。左樣心得られてよからう。

美濃守　仔細承知仕つた。如何にも掌中のものを指す如き御明答、信玄公の御滿悦もさこそと存じ申す。然らば後刻改めて行列を整へお迎ひに參上せん。御用意然る可う御願ひ申す。

勘助　心得申した。

美濃守　御免。

（美濃守は悠然として向ふへ歸り行く。勘助は暫く見送つて落散つた木を集め、信玄の贈物を抱へて奥へ這入る。皆々ほつとして顔を見合せる。作兵衞は何か首肯いて一散に上手へ去る。餘の者は木舞臺へ來る。）

太郎　さあ／＼事ぢや事ぢや、狐を馬に乘せたと云はうか、山の芋が天上したと云はうか、あの勘助の牢人前が千貫目の知行取になるとは、どうした世の廻合せだらう。

權十　俺はな、お諏訪樣のお使番（つかはしめ）にちよいとやられたんぢやないかと、何遍も頬を抓つて見たが、やつぱり痛い處を見ると、正眞正銘ぢや。

平藏　さあそれが正眞正銘ならいよ／＼事ぢや。お主たちも定めて聞いたであらうが、あのお侍との話に、遠ければ川中島、近ければ上下諏訪鹽尻あたりが戰場（いくさば）になると云ひ居つた。あいつの事ぢやで、これまでの怨に態とこゝらで戰をする樣に仕向けるかも知れぬぞよ。

太郎　成る程、軍師ならそれも儘になるのであらう。思ふさま暴れられたら、家も田地も骨灰ぢや。こりやえらい事になつて來たぞ。

權十　それ故俺は初めからあまり勘助を馬鹿にするなと云うたのぢや。この村中が燒野になつたら、それこそお前達の故ぢや。

太郎　何をぬかすぞい。お前こそ一番先に押しかけた仲間ぢやないか、燒殺されるのはお前からぢや。

權十　何をツ。（摑みかゝる）

平藏　（止めて）まゝ、待たつしやれ。今になつて咎を塗り合うても初まらぬ。この上は勘助に——いや勘助樣に何とか上手に詫を云うて、堪へて貰ふより外はあるまい。

太郎　さうぢや／＼。誰彼れと云ふよりは皆一所に賴んで見よう。

（家の方へ來る。そこにしよんぼりと立つてゐる母親を見付け出す。）

平藏　おゝ、こりや勘助の母樣か。さてもよい處にござつた。はてお目出度うござる。お目出度うござる。これと云ふのもこなたが丹精して育てしやつた甲斐が現はれたと云ふものぢや。ほんにお前は日本一の果報者ぢや。ああ、目出度い、目出度い――。

權十　（引きのけて）これ〳〵お前ばかり言を云ふ法があるか。はい母樣、かう見えても俺は仲々の親切者ぢや。お前は知るまいが、元のお前の田と俺の田とは上下ぢや。俺はよう畦を切つて水を落してやつたものぢや。身延參りに甲府へ尋ねて行ても、知らぬ顏はすまい喃。

太郎　（子供の手を曳いて）さゝ、こつちはその樣な蟲のよい事は申しませぬ。せめてこの子を養ひとつて、旗持になりとも使うて下され。（子供に）これ、ちやつとお願ひするのぢや。

子供　いやぢや〳〵、誰が狂人の母樣におじぎをするものか。

太郎　えゝ何をぬかすぞい。その樣な失禮な事を云ふと、これぢや。（拳で頭を撲る）

子供の一　アイタ、、、。これ父さん、そんな事をすると、あたり處が惡うて、片輪になつても知らぬぞえ。

太郎　糞を食へッ。おのれ等の樣な奴は片輪にでもなりくされ。そして勘助どのに肖るのぢや。

平藏　何にしても目出度い。

權十　目出度い。

（交る〳〵に諂ふ樣に母の顏を窺き込む。母はそれまで默つてゐたが、この時堪へ兼ねた樣にワッと聲を立てゝ泣き出す。皆々驚く。）

太郎　こりやどうぢや、目出度い日になんでその樣に泣かつしやるのぢや。

權十　いつの間に泣上戸になられた。

母　おゝ、泣上戸ぢや。これが泣かずにゐられるものか。こなた達は出世々々と云はしやるけれど、何のあれが出世か。死神に付かれて行くのぢや。

太郎　これ〳〵、何を云ふのぢや。うれしさまぎれに氣が上つたのも無理はないが、信玄樣へ千貫目で抱へられる約束の出來た事はちやんと俺等もきいてゐたのぢや。

母　さ、それぢやによつて尚悲しいのぢや。俺は約束が止めになる樣に、心の中で祈つてゐた。あの侍はあれを地獄へつれて行く牛頭馬頭ぢや。

權十　えッ。

母　何のあれにその樣な器量があらう。有樣は俺もつい今までは、あれ程に云ふ者故少しは腕も立つと思うてゐたし、さうあつて呉れとも願うてゐたが、今と云ふ今の先、何もかもあれの思ひ上つた心ばかりぢやと知れた。

權十　ふむ、こりや可笑しい、どうしてそれが判つたぞ。

母　さあ、つい今の先こゝへ越後のお侍が通りかゝつたと思はしやれ。勘助奴は又いつもの様に廣言切つて奉公を願うた處、色々の話の末にそれでは試に立合うて見る事になつたのぢやが、その果てがどうなつたと思ふ。

平藏　定めて勘助殿が美事に勝つたのであらう。

母　それがあべこべぢや。向ふは雲をつく様な大男ぢやが、負けるにしてもせめて立合らしい立合もあらうかと思ふ間もなく、たつた一打ちで起き上られもせぬ程打ちのめされた。わしのたつた一つの頼みの綱はそれぎり切れて仕舞うた。

平藏　（不審氣に）しかし、それは不思議な話ぢや。その様なうつけ者を、どうして甲斐の國から抱へに來たのであらう。

母　さ、それが間違ぢや。でなければ人傳にあれの廣言を眞に受けしやれたのぢや。

權十　すると、若し甲斐へ行つてその化の皮が剝がれたらどうなるのであらう。

母　不屆者と、つい斬られるは知れた事ぢや。せめてもの情に助けられたとて、あの様に思ひ上つてゐるもの、つい氣が違ふに極つてゐる。どの道無事ではゐられまい。泣くのが無理か、何のそれが出世ぞい喃。

太郎　成る程、さう云へば俺もどうも腑に落ちぬと思うた。やつぱり勘助は木偶か。

權十　やれ〳〵、とんだ暇つぶしぢや。なる程、だまされでもせねばあの片輪者を千貫目で買うては行くまい。（考へて）それとも向ふへつれていんで、笛吹川とやらの堤の人柱にするのではあるまいか。

母　えッ、人柱――。さうぢや、その様な事にきまつてゐる。喃、皆の衆、どうぞあれを止めて下され。縛りつけてゞも止めて下され。片輪の子ほど可愛いものはない。この上非業な死目には逢ひたうござらぬ。もし、頼みまする、頼みまする。

（人々の間を駈け廻つて嘆願する。皆々つれなくもて餘ます。上手より作兵衞、おせつ、お松、轉る様に走り出づ。お松は嫁入の様に盛裝してゐる。）

作兵衞　さあ〳〵、早う來い、早うこい。何を恥しがる事があらうかい。

お松　（しなをして）でも私は――。

作兵衞　えい、措いて吳れ。今日からは千貫目取の侍の女房ぢや。も少しはき〳〵するがよい。喃、おせつ。

おせつ　さいな、この幸福も元はと云へば私が讓つてやつたのぢや。必ず姉を粗末にしやんな。（奥へ向いて）勘助どの、約束の通りに妹を連れて來ました。表向の披露

はあとにならうと、立つ前に盃丈けしておいて下さんせ。甲斐の女に魁はさせられぬ。
權十　（怒つた樣に）　ふむ、そんならこなた衆はお松女郎を勘助の嫁にする氣か。
おせつ　あいな、とうから約束かしてござんした。私の目きゝを見て下され。
權十　ハ、、、、。いやとんだ目きゝだ。これ庄屋殿。勘助の一件は皆嘘ぢや。
三人　えッ。
太郎　何もかも間に合はせの嘘八百ぢや。その實人柱に買はれて行くのぢや。
お松　えッ。
平藏　人柱は判らぬが、とても千貫目は愚か旗持にもなれまい。その證人は現在の母樣ぢや。あゝとんだ男と約束さつしやつた喃。
お松　えッ、そりや本間でござるかな。
平藏　嘘でない證據は、母樣があすこで泣いてゐる。
お松　ほんに泣いてぢや。うれしうて泣きはすまい。（憤然と姉に迫る）これ姉樣、三國一のよい婿どのとは誰の事ぢや。お前の一人合點で、跛の偏目の嫁にならうとした、たんとお禮を云ひますぞや。
おせつ　あこれ、それは口が過ぎるぞや。權十と云ふいとしい男もあれど、千貫目の知行取の女房になるのなら古袷同樣に棄てゝしまふと云うたのは誰ぢや。（權十驚く）
お松　いえ／＼、それよりかお前こそ表裏者ぢや。勘助にすげなう當つた故、若し怨まれて酷い目に逢ひはせぬかと、私を身代りにつれて來たのぢや。お前は何時も勘助の惡口ばつかり云うてぢやつた。
おせつ　何のおのれが。
お松　何のお前が。
（爭ふ。）
作兵衞　（制して）　これ／＼はしたない。たしなみや／＼。第一お前なぞがこの樣な處に來るものではない。
お松　ぢやと云うて、轉る程に突き立てゝおき作ら――。
作兵衞　えゝ、おのれ、つべこべと何ぬかすぞい。女は口數が少いものぢや。何にせいもう用はない。さあ戻れ／＼。
（二人を無理に引張つて上手へ行く。）
權十　（見送つて）　いや、用があるぞ。あのお松め、よう、俺を欺しくさつた。覺えてをれ。
（あとを追うて上手へ行く。）
太郎　（伸び上つて）　あゝあれ、權十が何やら庄屋殿とやかましう云うてゐる。こりや、この方が大事になつた。皆ござれ／＼。
（皆々上手へ去る。母は尚泣き伏してゐる。奥の障子

を明けて勘助が拜領の陣羽織を着て、片手に大きな風呂敷包を提げ、片手に矢張拜領の袴をもつて出る。羽織は寸法が與らぬので大男と思うて仕立てゝあるので、ゾロ／＼引ずる。）

勘助　ワハヽヽヽ、母者、これ見られい。武田家は大男揃と見えて、羽織も袴もこの通りぢや。（袴を前に當てゝ見て）こりや矢張前の方が似合ぢや。羽織も邪魔ぢや。（取つて包の中へ押し込み、懷中から、親父の位牌を出す）これさへもつて行けば外に惜しいものはなし。そなたも別に用意はござるまい。そろ／＼と出かけませうか。

母　（やう／＼に顏を上げて）では、どうあつてもお前は行くのかえ。

勘助　お案じなされな。勘助の年來の望が今達し申したのぢや。（ふとその顏を見て）や、泣いてござるさうな。目出度い首途ぢや。不吉な涙をお見せ下さるな。しかし。（思はず涙ぐむ）この年月の御心勞、思へば勘助も夢の樣な心地がいたしまする。（兩手をついて）志を得ぬまゝの今までの御無禮は偏に御免し下されい。（位牌に）父上ともたつた今より和睦いたしした。この上は身を粉にして御孝行いたしまする。

母　（傍白の樣に）やれ／＼、矢張蟲が知らすのぢや。死ぬ前には少しも優しうなるものぢや。

勘助　何を他愛のない。軍師なぞは滅多に死ぬ者ではござりませぬ。さ、御用意なされませ。そして、諸事勘助の母らしうして下さりませ。（向ふを見て）あゝ、早やあすこまで迎ひが來た。

（向ふより先刻の美濃守黑駒を曳きて先頭に、槍、薙刀等を擔ぎたる大勢の軍兵、美々しい行列を立てゝ來る。）

美濃守　（敬しく）はッ、美濃守お迎ひに參つた。御用意よくばすぐに御供仕る。

勘助　如何にも、別に用意もござらん。

美濃守　然らば御馬を參らす。（自分で曳いて來る）これぞ甲斐の黑駒とて信玄公の名代の御乘馬で御座る。いざ。

勘助　過分に存ずる。

（勘助傍に寄つて手綱を執つて馬に乘らうとする。しかし片足が短いので鐙に足がかゝらぬ。とかうあせる中に馬は腹を立て後足で蹴つける。勘助は驚いて後へひつくりかへる。美濃守は駈け寄つて抱へ起す。）

美濃守　お危うござつた。お怪我はござらぬか。

勘助　いや、何、少し……（顏をしかめてゐる）

美濃守　（家來に）それ、床几を持て。

勘助　あいや、其儘々々、勘助は返つて徒歩の方が勝手でござる。

美濃守　ではござれど――。
勘助　はて、ようござる。（荷物を持ちにかゝる）
美濃守　然らば其荷物を馬に乘せ申さう。
勘助　いや〱、これこそ勘助のためには一生の重寶、六韜三略ぢや、他人には扱はされぬ。（やつこらさと脊に負ふ）いざ、御案內。
美濃守　お立ち。
皆々　はゝツ。
（皆々平伏す。勘助その前を悠々と風呂敷包を負うて跛をひいて行く。續いて老婆、これは泣き乍ら行く。そのあとに美濃守栗駒を曳いて從ふ。上手より作兵衞、おせつ、お松、權十、太郎兵衞等大勢出て來りて煙に卷かれた樣にして見送る。鳥の聲、夕陽靜かに暮く。）
――幕――

月光の下に

人物

堀江泰　醫學士　（三十五歲）

その妹久子　（二十九歲）

その妻園子　（二十四歲）

園子の母　瀧澤松代　（四十五六歲）

同　妹　光子　（二十一歲）

小田垣達三　泰の故郷の友人、縣視學、（三十五歲）

看護婦

助手

患者前田

小間使

時

現代

處

私設鐵道の終點となれる或る山中の都會

舞臺

醫學士堀江泰の書齋兼第一診察室

洋風の室を上手より斜めに見たる體にて、下手に扉二ヶ所。手前は玄關及び患者溜へ赴く通路。奥は第一診察室を經て病室へ赴く出入口。扉を開きたる時にはその室の調度少しく見ゆ。二つの扉の間には硝子張の器械棚。その上の壁には餘り色彩の强からぬ油繪の風景畫を架けたり。上手は斜めに廣き硝子窓。ズッと手前に茶の間臺所へ通ずる扉。窓と扉との間にも硝子戸の書棚。上に置時計。壁には泰の父の肖像を架けたり。

正面奥は斜に窓硝子を透して、やゝ黃葉せんとする庭の樹木、更に奥まりて白塗の洋風二階建の病室見ゆ。木造なれど新しければ美し。漸く足場の取れたる體。

室の中央には長方形のテーブル、椅子。その後の窓に沿うて白の覆のかゝつた診察用の寢椅子。これは婦人科其他の祕密の病氣の診察にのみ用ふ。その傍に小形の物置臺一つ。

其他、凡て室内の調度は贅澤ならねど好く調ひたり。

初秋の午後。夕暮より夜へ。

幕上る時丁度診察を受け終りし三十歲許りの婦人患者前田、帶を締め居る。看護婦水島深切にそれを手傳ふ。

患者は一目にそれと知らるゝ婦人病より來れるヒステ

りーなり。下手には助手內田器具を片付けつゝあり。やがて下手第一診察室の方より泰が手を拭ひ乍ら出で來る。紳士らしき立派なる體格と容貌とを有す。但し何處となく沈鬱なる表情あり。白の手術服を纏ふ。

前田　どうも遲くから上りまして相濟みません。

泰　(心持顏を傾けて、然し柔和に)いや、私の方は何時いらしつても構ひません。病氣は人の都合でどうする事も出來ませんからね。

前田　(嬉し氣に)全くでございますよ。私達も只あゝして遊んでゐます樣なもの〻、それで又思ふ樣には出られませんものでねえ。こちら樣の樣に氣輕に云つて戴きますと、つい外々へ參りますよりはねえ。(水島を見る)

泰　(止めて)あゝ——お藥は今までの儘にして置きます。

前田　では——御免下さいまし。

(會釋して下手前の扉より去る。水島見送つて出づ。內田は第一診察室へ這入る。泰は手術服を脫いでテーブルの前に來り椅子に腰を下し煙草に火をつけようとして何か物音を聞きつけたる風に凝つと下手を見る。やがてホッと溜息を吐いて沈思す。

第一診察室より妹久子出づ。輪廓の正しい顏。年よりは若く見え、意志も强氣なれど、體の科に何處となく中年期の獨身の女に共通なる、或る惱しき樣子見ゆ。顏色は先に歸りし患者にやゝ類似して蒼白なる色を帶ぶ。白の看護婦服。處方箋を持つ。)

久子　兄さん。

泰　(恐しき者を見た樣に)久子か。

久子　前田さんのお藥は元の儘でいゝんですか。

泰　あゝ。今の處外に仕樣はあるまい。

久子　ぢやア、(前に寄つて)最ういけないんですか。

泰　いけない？　どう云ふ意味だ。

久子　だつてあのお藥が變らなければ——。

泰　あゝ。今日明日に大した變化はあるまいが、所詮長くはないね。あの人は最う精神的に恢復する道を失つてゐる。あまり長く一人で不自然に暮して來たからな。十年の尊い貞操の報酬があの人には死一つだつたのだ。

久子　まあ。お可哀相に！　まだ小さいお子さんがお有んなさるのに！

泰　それだ。その子があの人の命を取るんだ。

久子　え。子が親の命を取る——？

泰　あゝ。(强ひて冷靜にならうとして)世の中の生物は皆さうだ。皆親を殺し、兄弟を亡して榮えてゐるのだ。一番親しい者同志が一番激しく生きる爲に爭うてゐるのだ。あの人もあの子の母親でなかつたら今死なゝいで濟むのだ。

久子　だつて――違ひますわ。あの人達は兎も角、私達はお互にどう亡し合つて來たでせう？

泰　どうとは――（後へ振返つて父の肖像を見る）私達の兩親は最うこの世には生きてゐないんだ。

久子　たつてお二人は天命でお亡く成りなすつたのですわ。私達は出來る限りの御介抱をしましたわ。

泰　私達？　兄さんもかい。あの死目にも逢はなかつた――。

久子　（判然と）さうですとも！（凝視して）兄さん、何故今更に成つてそんな事を仰有るの。何だか近頃は考へ込んで計りいらつしやるのね。後生ですから元氣に成つて頂戴な。（窓の向ふを見て）貴郎の一生の望たと仰有つたあの病室の新築もすつかり出來上つて、三四日の中には患者が這入れるのです。町の人達はお祝をするとまで云つて呉れてゐるのです。あの遠い他國から來た私達のために！

泰　だが――それが果して正しい結果かどうだか――。

久子　（愕然として）え、何ですつて？

泰　（手を取つて）堪忍して呉れ、赦して呉れ。私は今迄その事に就て考へようともしなかつた。

久子　（強ひて笑つて）ホヽヽ、何ですね、今更――。貴郎は昔話をしようと仰有るの？

泰　（ハッとして）いや、さうぢや無い。それ程にまでしてお前を苦しめようとはしない、然し、（一寸言葉を切つて）お前も近頃は淋しく成つたね。

久子　え、私が――兄さんの樣に？

泰　あゝ。

久子　嘘――嘘ですわ。そんな事があるもんですか。

泰　隱さないでもいゝ。お前は昨夜こゝで一人で泣いてゐたゞらう。

久子　え、それを御存じなの？

泰　知つてゐるよ。然し、昨夜初めて見るまで、何故今迄その事に氣がつかなかつたかと――。

久子　（遮つて）最う〳〵云はないで下さい。（猶強ひて笑つて）何だかね、一月に一度位泣きたくなるんです。この頃の癖なんですわ。別に理由(わけ)なんかあるもんですか。只ね――ホヽ、本當に馬鹿々々しい。（引き吊る樣に笑うて語尾が怪しう慄へる）

内田　（第一診察室より顏を出す）あの――前田さんがお待ちに成つてゐます。

久子　（常に復して）濟みませんでした。今すぐに參ります。（内田去る。靜に）兄さん、本當はね、私も今迄考へなかつた事が色々と考へられる樣に成つて來ましたの。やつと安心した爲に心にゆるみが出來たのぢや無い

かとも思はれます。ともかく（思ひ返して）いゝえ、そんな事もありますまい。お互に何も考へない方がいゝかもしれません。（下手へ去る）

泰（呟く）考へない方がいゝ？　而し考へないで暮せるだらうか。

（再び凝つと考へ込む。）

（上手より妻園子出づ。丸髷。內氣に優しき性質。兩手に多くの書狀を持つ。）

園子　良人（あなた）、これでようございますか。

泰（目醒めた樣に）園子か。招待狀だな。

園子　えゝ、悉皆（みんな）書きました。こんなに澤山の方をお招きするのだと思ふと、書いて居てさへ肩身が廣い樣でしたわ。

泰　だが――お前がしなくつても宜かつたに。

園子　だつて私には別に用事がございませんもの――。

泰　用事がない？（やゝキッと成つて）お前は此家の主婦ぢやないか。

園子　だつて――久子樣が何もかもよくして下さいますから――ほんとに幸福すぎる程――

泰　それがいかん。久子は私の妹でも、何時までも此處にゐる者ぢやない。又置かれもしない。家內の事は悉皆お前がやる樣にして呉れなければ困る。それにあれは近頃勞れてゐる。どの道少し休ませなければならん。（起つ）

園子（追ひ縋る樣にして）貴郎どう遊ばしたのです。久子さんの事と云へば直ぐさう云ふ風に仰有います。先にはあの方が私達の事を手傳つて下さるのを、一番よろこんでいらしつた貴郎が――。

泰　そんな事はない。そんな事は――（二三步あゆんで立ち止り、いぢらし氣に見て）あゝ、惡かつた、惡かつた。お前は何にも知らないんだからな。

園子　え、それは――。

泰　いゝよ。いゝよ。實はね、何だか斯うこの頃は頭の工合が惡くつて仕樣が無いんだ。

園子（深く追求せず）あゝ、あんまりお忙しくなすつた故ですわ。病室の新築や何かで――お床でも取りませうか。

泰　むゝ、寢て見よう。あゝ、いゝよ。お前で無くとも誰かに取らせるから。お前は最う一度それを引合せて佐藤に出させて置いて呉れ。それから料理屋が來たら知らせて呉れ。

（上手へ去る。園子は扉の處まで見送つて、元へ戾り、封書と控とを引合せる。下手前の扉より、その母松代妹光子出づ。松代はやゝ小柄にて、山中の都會の舊家の家に相應（ふさは）しき姿。光子は母よりも姉よ

りも大柄にて顔立も調ひて、派手な理窟的な女。東京某女學校出。但しそれ故にさのみ氣障にはあらず。祝物の包みを持つ。）

松代　園さん。

園子　（顔を擡げて）あッ、いらつしやいまし。表には誰もゐませんでしたか。

松代　何、藥局の方に誰かゐた樣だつたけれど、取次を頼む程でもなからうしね。

園子　でも――。

光子　出し拔けはひどいとでも仰有るの。

園子　まさか――貴女ぢやあるまいし。

光子　まあ、いつ私が――。

園子　（笑つて）だつてよくそんな事をお云ひぢやないか。ホラ、この間私が行つた時だつて――。

光子　あの時――？　だつて默つて私の室へ入つて來るんですもの。

園子　ホヽヽ。こゝだつて同じですよ。若し私がいけないのなら――。

光子　だつて――それとこれとは違ふわ。私。電話をかけて置いたでせう。

園子　あの時私はさうしなかつたかしら？

松代　何ですね、來ると匆々から――。（包を取つて）あの何は？

園子　宅ですか。

松代　あゝ。

園子　奧で臥つてゐます。何だか近頃無闇に忙しかつたんで勞れたんですよ。いえ、大した事は無いんでせうけれど――。

松代　（一寸眉を寄せて）さう、それならいゝがね。（包をといて）これはね、今度のお祝のしるしだよ。

園子　まあ！　頂きます。（取つて棚の上に置く）

松代　それで、用意はすつかり出來たかえ。

園子　えゝ、宴會は公會堂ですから、こつちは只病室をお見せすればいゝんですの。

松代　さう。（起つて窓の向ふを見る）でもね、これ迄にするには泰さんも並大抵な苦勞ぢやなかつたね。

園子　（振返つて）さうですわねえ。口にこそ出して仰有らないけれど、お二人の御苦勞はほんとに血が出る樣でしたらうよ。キットね。

光子　（咎める樣に）お二人？　姉さんは何故私達三人と云はないの。

園子　だつて私なんか――。

光子　（前へ進んで）だから――姉さんは駄目なのよ。貴女はこの家の主婦ぢやなくつて？

園子　（うつむく）えゝ。
光子　えゝぢやないわ。確りなさいよ。大人しくしてさへ居ればいゝ奥様ぢや無いわ。自分のす可き事はズンズンしなくつちやア——第一自分に對して濟まないぢやありませんか。（母に同意を求める樣に）ねえ、阿母さん。
松代　そりやアさうだが——何かえ、矢張りあの人が家中の事を切り廻してゐるのかい。
園子　えゝ、藥局の方まで！　でも本當に優しくして下さいますわ。
光子　幾ら優しくされたつて自分の務まで奪はれて——。
園子　（宥める樣に）光ちやん、そんな事を云ふもんぢや無いよ。私はそれで幸福なんだから——。それにねえ阿母さん、今度からは私が何もかもする樣になるでせうよ。先刻も泰があの人もすこしは休ませなければならないと云つてゐましたし、私もねえ——。
（上手より泰出づ。洋服を脱いで樂な和服を着流す。）
園子　おや、お休みにはならなかつたのですか。
泰　むゝ、矢張晝間は働く癖が着いてゐるからな。貧乏人は困るよ。や、阿母さん。いらつしやい。
松代　今日は、何たかお加減がよくないんですつてね。
泰　なアに、大した事はないのです。
園子　（祝物を見せて）お祝物を頂きましたのよ。
泰　いや、有難う。色々とお世話になります。こんどの事なぞも全くお宅のお力です。
松代　だつて肝心の貴郎が駄目だつたらねえ——。然し氣をお付けなさい。
泰　え、どう？
光子　兄さんの仕事の邪魔をしようとしてゐる人があるんですよ。根も無い事を云ひふらして——。
泰　（ハツとして）根も無い事を——どんな事です？
松代　（止めて）いえ何、つまらない事なんだけれど——餘り貴郎の成功が立派なもんだから、他から妬まれたんですよ。生れが遠い國だからね。
泰　と云ふと——どんな事です？
松代　なアに、ほんとにつまらない事です。
泰　だが參考のために聞かせて置いて下さい。此方からは敢て爭ひ度くはありませんが、敵があればそれに備へる丈けの事はして置かなければなりませんからね。
松代　だつて有りさうにも無い事だから——氣にかけない方がようござんすよ。
泰　然し（光子に）光子さん、貴女は知つてゐますか。
光子　えゝ、私が聞いて來たんですの。
泰　聞かして下さい。どう云ふ事か——。
光子　そりやアねえ——。

松代　（強く）光ッ、お前そんな事を――。

光子　（平然と）だつて私が云はないからつてあの噂は消えはしないでせうよ。

泰　さうだ、それで――？

光子　あのね、久子さんが――。

泰　（愕然として）え、久子が――。

松代　（起つ）光子、お止しと云ふのに！　（云ひ譯する様に）本當につまらない事なんですよ。（凝（じつ）と見て）それはさうと泰さん、久子さんはどうしても結婚しないんですか。

泰　（心苦しく）えゝ、何時までも憐れな病人の友と成つて過すと云つてゐるのです。丁度私が勉強してゐて家の事を打棄つてゐたんで、たうとう婚期を失つて仕舞つたものですからな。

松代　だつてまだ三十ぢやアねえ。

泰　いや、僕も始終さう云つてゐるんですが、あれで中々剛情なんで――　（呟く様に）實際人間が一人でゐる事は道に背いてゐます。殊に女はねえ。

（久子急ぎ足に這入つて來る。）

久子　兄さん――（人々を見て）おや、いらつしやいまし。

光子　今日は。

泰　何か用かい。

久子　えゝ、五號の患者がどうも好くない樣ですから――。

泰　五號の？　あゝ、昨夜町役場から來た行き倒れの男か。

久子　えゝ、花柳病の――。何だかひどく關節が痛むさうです。

泰　見てやらう。切斷（アンプタチョン）した處でどうかと思ふが――。

久子　だつて可哀相に、牛の樣に呻つてゐるんですよ。

泰　よし。（起つて）とも角行つて見よう。（松代等に）一寸失禮します。（園子に）すぐ來るからね。何だつたら奧で御飯でも差しあげてお吳れ。

松代　いえ〳〵、私はもう――。

泰　まあいゝでせう。折角だから――。

久子　どうぞ御ゆつくりと。あとで私もお話を伺ひに參ります。

（兩人去る。）

松代　（見送つて）行き倒れだつて？

園子　えゝ、昨夕擔（かつ）がれて來たんです。惡疾（わるやまひ）でね。傍へ寄るのだつてゾッとする位潰れてゐるんですつて。

光子　まあ！　そんなの、醫者つて厭な商賣ね。

園子　（窘めて）光ちやん、そんな事を云ふもんぢやないわ。何にも自分が不攝生だと云ふのぢやなし――（不圖思ひ出して）それはさうと。先刻云つた惡い噂つてどんな事？

光子　それ？　（下手を見て）　久子さんがよく無い事をしてゐたつて。

松代　嘘には違ひなからうが、泰さんの學費を拵へるために、あの人が醜業婦に成つて稼いでゐたんだつて。

園子　（驚きの極）　まあ久子さんが――。

光子　だから國の方では開業が出來ないで、こんな遠い處へ來たんですつて。

園子　（叱る樣に）　光ちやん、阿母さん、何を云ふ――何を仰有るんです。二人して私を辱めようとなさるの？

松代　まあ、どうして？

園子　だつて――泰は私の良人です。久子さんはその妹です。

松代　（止めて）　まあそんなに高聲を出さないでも――。誰が本當だと云ひました。只噂たけだと斷つてゐるぢやないか。

園子　だつて、そんな噂を親身として默つて聞いてゐれらるでせうか。

光子　勿論だわ。若し事實ならね――。

園子　どうしようと云ふの？

光子　私は最うこの家へは來ません。

園子　（おろ／＼し乍ら）　嘘よ、嘘よ。久子さんに限つてそんな事は無いわ。あんな立派な方に――それに若しさうだとしても、兄さんの爲に一身を犧牲になすつた志を、尊いとは思はない？

光子　あれだ！　だから姉さんは古いと云ふのよ。女の持つてゐる唯一の寶は何でせう！――親や兄弟の爲に貞操を犧牲に供したのを賞讃したのは昔ですよ。昔の偏狹な道德ですよ。

園子　だつて。

光子　（抑へて）　女の一生の生活は凡て貞操が中心と成つてゐなければなりません。父母への孝行も兄弟への愛情も悉皆その操があつて初めて誠となるのですわ。その輝きを失つては千の德行も百の善行もみんな空ですわ。中核の無い生活をどうして本當だと云ふ事が出來るでせう。

園子　――。

光子　私達は新しい世界に生れてゐるのです。眞に強い女ならどんな場合に臨んでも、貞操を賣らないで立派に生きて行く事が出來る筈ですわ。百圓二百圓の金が産む一時の幸福より、永遠に魂を亡ぼす不幸の方がどれ丈け深刻でせう。

園子　（やゝ勇氣を得て）　だつて、若しさうしなかつた爲に、出來る孝行が出來なかつたらどうするの。その人の魂はやつぱり何時までも救はれはしますまいよ。それで

も光ちやんはその人を責めようとするの？
光子　駄目々々。そんな時には體を賣つてもいゝと云ふ在來の考へが先に立つからさう心が咎めるのよ。金錢にも物質にも代へられ無いものと知つてゐれば、それを穢さ無い爲に命が助からなくつても、親は不孝者だとは思はないでせうし、又、子は子として外に生きて行く道を見つけるでせうよ。少くとも私はね。
園子　だつて、私はそんなに冷たい心にはなれないわ。間違つてゐようがどうしようが、親が貧苦に迫つてゐるのを見たら――。
光子　まだ仰有るの。さうした心に先づお恥なさいよ。それから――。
松代　（止めて）お止しよ、お止しよ。そんな事はどうでもいゝぢや無いか。何も久子さんがさうだと云ふんぢやなし。
園子　だつて、阿母さん、若しさうだつたらどうなさるおつもり。
松代　どうつて判つてゐるぢや無いか。お前を連れて行く訃しだよ。
園子　え、私を――？
松代　あゝ、そんな淫な者を親類にはもたれないからね。
これでも私達の家は町中切つての家柄だ。御維新前にもチヤンと苗字帶刀を許されてゐた家だからね。
園子　だつて――いゝえ、私は歸りませんわ。今更そんな事を言ふ位なら、何故初めにもつとよく穿鑿して下さらなかつたの。
松代　（思ひ出して）何だねお前は、眞氣になつて――。
阿母さんだつてお前にひけを取らせる様な事はしないよ。この病院が建つ様になつたのも、半分は宅の阿父様の何んなんだからね。
園子　そりアさうですけれども――餘りな噂だから――。
阿母さん後生ですから泰には毛程もそんな事を云つて下さいますな。何だか近頃は久子さんの事と云ふとすぐ言葉に角を立てるんですから――。
松代　まあ、どうして？
園子　泰は優しい人ですから、餘計にあの方の事が氣にかかるのでせうよ。（起つて上手へ招じ）さあどうぞあちらへ。
松代　それぢやア御馳走にならうかね。
園子　光ちやんもどうぞ。
光子　私もいゝこと！
園子　皮肉ね。そんな言の言ひ方をすると人に憎まれますよ。
光子　はい、はい、どうせ本當の事を云ふものは何時も憎

まれてよ。

松代　またかい。いゝ加減におしよ。

（三人上手へ去る。舞臺暫く空虚。日暮る。下手より内田助手出でゝ無言のまゝ何か材料を求めて去る。間。やがて下手より泰と久子とが出て來る。）

久子　（振返つて）あれで少しは落着くでせうか。

泰　あゝ、まあ、あゝして罨法でも度々取り換へてやるんだね。（イヤな顏をして）しかし、妙な奴だ。いやにお前の顏ばかり見つめてゐたね。

久子　さうでしたかしら――。私氣がつきませんでしたわ。（四方を見て）おや、もう何はお歸りに成つたかしら？

泰　さあ、（下手の扉を開けて）與たらう。洋傘があるよ。

久子　さう。それで――貴郎お夕飯は？

泰　瀧澤の阿母さん達と一緒にしようと思つてゐたが、何だか食べたくない。お前は？

久子　私も！

泰　むゝ（見廻して）日が暮れたね。今夜は馬鹿に靜ぢやないか。

久子　えゝ、蟲が鳴いてゐる樣ですわ。

泰　月は出るかしら？　まあお掛け。少し話さう。（久子寢臺のはしに腰を下す）何だか斯う昔に戻つた樣な氣のする夕暮だね。

久子　えゝ、只つた二人限りで暮してゐた――。此の病院を開いた時は、好くかうして默つて向ひ合つてゐましたわねえ。お互に胸一杯に輝く樣な希望を持つて――。

泰　此頃は忙しいので沁々と話す事も出來なくなつたね。それに家の人も多くなつたし――。

久子　えゝ用事の外は一日口をきかない日もありますね。何だかお互の心が離れ〳〵に成つて行く樣な氣かしますわ。仕樣の無い成行でせうけれど――。

泰　ふむ、どうしてそれが――。

久子　（靜に）兄さんには園子さんがあります。あの方がこれまでの私に代つて下さるでせうよ。

泰　（爭ふ樣に）だつて園子にはまだお前の代りは出來ない。

久子　出來ますとも！　さして御覽なさいまし。機會さへあればどんな女でも私位な事はして來ます。只幸福な人にはその必要が無いと云ふ丈です。

泰　さうかしら？　然し身贔屓かしらんが私にはさうは思はれないよ。ともかくお前が居て呉れなければ困る。

久子　（やるせ無く）そりやア何時までも斯うして一緒に置いて戴きたいんですけれど――。

泰　――。

久子　（思ひ入つて）兄さん。

泰　え？

久子　（傍へ寄つて）私に暇を下さらない？

泰　暇を――？　どう云ふ意味だ。

久子　この家を出して頂きたいのです。

泰　（驚く）家を出る――？　さうしてどうするのだ！

久子　國へでも歸らうかと思ひます。あれきりお墓參りもしませんからね。

泰　（思ひ違へて）あゝ、それもいゝだらう。實は私もさう思つてゐたところだ。保養がてらに少し旅行でもして來たら――とねえ。

久子　いゝえ、旅行するんぢや無いんです。私は一人に成つて國へ行きたいのです。

泰　一人に成つて國へ行く――？

久子　えゝ。

泰　あの二人をこゝへ追出した、不人情な者許り集つてゐる國へ？

久子　其處で最う一度あの時の樣に皆と鬪つて見たいんです。

泰　鬪ふ？　ぢや元の樣な生活をすると云ふのか。（手を振つて）そりやいかん、そりやア斷じて私の良心が――。

久子　（抑へて）いゝえ、あんな事はしないでも暮らせると思ひます。あの時よりはともかく世間を多く見て來ましたからねえ。

泰　それぢやア何か外の事をして――？

久子　一人でやつて見ようと思ふんです。背負ひ切れ無い程な重荷を背負つてね。

泰　重荷を負つて――（凝つと見てやゝ鋭く）久子ッ。

久子　えッ。

泰　何故お前はそれ程の事を私に打ち明けて吳れん。それ程居づらい事があるのなら何故さう云つて吳れない。私はお前のためにならどんな事でもしてやるつもりだ。

久子　いゝえ、どうしてそんな事を思ひますものか。兄さんのして下さる事にこれ許しも不平に思つた事はありません。

泰　むゝ、そんならあの園子だな。馬鹿ッ何と思つて――（高く呼ぶ）園子、園子ッ。

久子　（慌てゝ止めて）あれ、いゝえ違ひます。園子さんに關係はありません。誰にも係り合ひはありません。

泰　ぢやア何故家を出るのだ。今の私はお前がして見たいと思ふ程の事なら、どんな樂しみでもさせる事が出來るのだ。何故この上に苦しみを求め樣とするのだ。

久子　だつて――さうなりともしなければ私は生きてゐられません。（唇を嚙む）

泰　え。

久子　（悲しく）そりやアねえ、私だつてこの上苦勞はしたうございませんわ。女が一人で生きて行くのはどんなに苦しいか、知りすぎる程知つてゐるのです。けれども矢張さうしないではゐられ無いのです。生きて行く張合が無いんです。兄さんは立派にお成んなさるし病院もあんなに立派に建ちましたから――。

泰　まつて呉れ。どうも腑に落ち無い。私達の仕事が完成したんだから喜ばしいのが本當ぢやあるまいか。一層と生きて行く張合が出來たと云ふものぢやなからうか。

久子　だつて兄さん御自身はどう？

泰　僕が――。

久子　先刻も云つたでせう。何だか元氣がなく成つたぢやありませんか！　あの頃はどんなに努れていらしつても顏ばかりは輝く樣に生々としてゐましたし、手足だつて動かさないでは居られ無いと云つた風に見えたぢやありませんか。それに今はどうでせう。貴方のお顏には悔みの色さへ見えてゐます。

泰　え。悔みの色が――。

（云ひさして口を噤む。第一診察室の方より電話のベルの音きこゆ。間。やがて看護婦の佐藤が這入つて來る。）

佐藤　お電話でございます。

泰　何處からだ？

佐藤　小田垣さんと仰有る方で、お目にかゝりたいが、御都合はどうだらうかとお聞きでございます。

泰　小田垣と云ふと――？

佐藤　あの、お國の方から來らつしやつた方ださうでございます。

泰　國の小田垣――ぢや達三君だらう、珍しい人が來たねえ。

久子　お逢ひになりますか。

泰　あゝ、さう云つて呉れ。（看護婦去る。久子に）お前も逢ふだらうね。

久子　えゝ、（顏を染めて）何だか逢ひたい樣にも思ひますし、逢ひたく無い樣な氣もします。

泰　だが、彼は僕達の唯一の同情者だつたからね。僕達が故郷を立つ時、ステーションまで見送つて來て呉れたのはあの男一人だつた。

久子　（涙ぐんで）確りやれと仰有つて下すつたお言葉が今も耳に殘つてゐますわ。

泰　深切な男だつたな。今では縣の視學とかに成つてゐるさうだ。ね、逢ふだらう。

久子　（躊躇ふ）ですけれど――。

（小間使お君出づ。）

お君　御飯のお支度が出來ました。おや、眞闇ですこと！
泰　電氣をつけて呉れ。何に月がすぐ上ると思つてね。
お君　(灯をつける)　それであの御夕飯は？
泰　すぐ行くから始めて貰つて呉れ。
お君　久子様も。
久子　私もすぐ行きます。(お君去る。立ち上つて)　あゝ、すつかり話しちまひましたね。
泰　(止めて)　まあいゝ、まだ話したい事が澤山ある。
久子　(腰を下して)　先刻のお話ですか。
泰　それもあるがね。(凝と見て)　久さん、お前は結婚して呉れない？
久子　(ハツかれた様に)　結婚？　あの私が――。
泰　あゝ、私には近頃お前の恐しい影ばかり見えてならぬ。その影を見詰めてゐると(視物を振返つて)何の喜びも無くなつて仕舞ふ。私はお前を幸福にしなければならぬ。お前が不幸であればお前に依つて築かれた私達の幸福も蠟の塔の様に崩れて了ふ――。
久子　(遮つて)　だつて――私は不幸ぢやありません。幸福です。
泰　然し私にはさうは思はれない。私は醫者だ。だから生理的方面からのみ論じすぎると云ふ者があるかも知れないが、ともかく人間の不幸の原因はすべてその肉體の缺陷から來てゐると思ふ。それは色々あるが――(云ひ憎くさうに)私はお前にあの前田の後を追はせ度くない。
久子　え、私があの前田さんの様に――(戰く様に云ひしが、又あきらめた様に)然し、こんな踏み荒された胸から、良人へ對する温かい愛情が湧いて來ようとは思はれません。たとひ結婚して呉れる人があつたとしても。
泰　むゝ。
久子　私に小兒が出來なく成つてゐる事は、貴方の方がよく知つていらつしやいます。私の體はこの上惠まれてはゐません。
泰　けれども若しあの小田垣の様な――。
久子　まあ、(抑へて靜に)　御兩親をそれ〴〵に見送つた事、貴郞に立派に成つて頂いた事、その二つさへ辱い私には惠まれすぎてゐた幸福でした。私の力は最う盡きてゐます。妻と成り母となり家庭の主となる事は、何の苦勞もしなかつた幼い時代の夢でした。
(淚をのむ。悲しき間。看護婦水島やゝ興奮したる體にて出づ。)
水島　失禮な――何と云ふ失禮な――あの先生。
泰　(僅に顏を擡げて)　どうしました。
水島　だつてね、あの五號の患者が――。
久子　え、また痛むのですか。

水島　いゝえ、さうぢや無いんですけれど、失禮な事を申しますの。
久子　まあ、どんな事を。
水島　（氣の毒さうに）　あれは扇屋のお玉だお玉だつて――幾らこちらの久子樣だと云つて聞かせても承知しないんでございますよ。
泰　（名狀し難き苦悶を隱して）　む、それで――？
水島　何でもその扇屋と云ふのは好くない女の宿でしてね、あの男はそのお玉とか云ふ女に隨分入れ上げたとか云ふんでございますよ。
泰　あ、あの男が――（思はず久子を見て）　その女に久子が似てゐる――ば、馬鹿なッ。
水島　全くでございますよ。餘りな事を申しますので、最う介抱してやるのも厭になつて了ひました。間違へるにも事を缺いて、こちら樣のやうな方と――本當に追ひ出してやりたい位でございますわ。
久子　（止めて）　いゝえ、どうぞそんな事はお思ひなさらないで――（兄を慰める樣に）　兄さん、貴郎もお氣にかけなさらないで――ね。みんな、皆病氣の故なんでせう。人の見境がなく成つてゐるんです。猶の事大事にしてやりたうございますわ。
水島　（感動して）　まあ、何と云ふおやさしい――。
久子　どうぞ。あちらへ行つてやつて下さいまし。
水島　では――。（去る）
久子　兄さん。
泰　久子。（顏を見合はす）
久子　私がたつた一つ恐れてゐたものが來ました。
（テーブルの上に俯伏す。看護婦佐藤下手より出づ。）
佐藤　小田垣樣がいらつしやいました。
泰　あゝ、お通しゝて與れ。久子、お前はどうする。
久子　（弱く起つて）　お目にかゝりますまい。それに少し頭痛がして來た樣ですから。
泰　ぢやアすぐ休んだらよからう。あとで何かもたせてやるから。
久子　はい。
（上手へ去る。入れ違うて下手より小田垣逵三、佐藤に案内されて出づ。普通の教育家らしき官吏。フロックコート。）
泰　や、ようこそ。
逵三　暫く。
（二人は握手す。）
泰　まあ掛け給へ。久しぶりだつたなア。然しあんまり突然なので、先刻の電話は誰かと思つたよ。何時來たんだい？

逵三　（云ひ惜くさうに）何に、例の視察でね、一週間ばかり前に來たんだが、あれやこれやでつい來る機會がなくつてね。今日やう／＼用事が片付いたのでやつて來たのさ。

泰　さうか。（少し不快氣に云つてすぐ思ひかへして）然し、よく來てくれた。妹もよろこんでゐたよ。

逵三　久子さんも無事かい。

泰　あゝ。今日は少し何たけれど――。

逵三　風邪でも引いたのかい。

泰　少し頭痛がすると云つてゐたが――。逢へないで殘念がつてゐるよ。

逵三　さうか。しかし、何しろ君も大成功だね。他國から來てこれ丈けに仕上げるのは並大抵ぢやないからね。僕もそれをきいて自分の事の樣によろこんだのさ。町の人も大層信頼もし尊敬もしてゐるやうだ。全く大成功だ。それにあの事でもきかしてやつたら、どんなに驚嘆するだらう。

泰　あゝ君、（恐れる樣に）町の人は妹の事なぞは何にも知らないんだから――。

逵三　だつて隱す必要の無い立派な犧牲的の行爲ぢや無いか。

泰　成る程、君はさう思つて呉れるかしらないが、世間はさうでないからね。そのために僕達は生れた國に居る事が出來なかつたのだ。それに今だつて――。

逵三　矢張過去の幽靈に惱まされてゐるのかい。

泰　あゝ、こゝは猶更敵が多いからね。

逵三　然し、そんな事は何んでもないぢやないか。本當の腕前さへあれば――。

泰　さうだ、君の樣に階段を上る樣にして順調に社會へ出た者の目にはさう見えるだらうが、僕の樣に嶮しい道を辿つて來た者には、他の人の持つ事の出來ない勇氣もあるが、同時に他の人が覺えないですむ恐怖も感じる。卑怯にもなる。臆病にもなる――（聲をひそめて）ともかく、僕はどうでもいゝが、妹の幸福のために何事も云はないでゐてやつて呉れ給へ。

逵三　それやア別に云ひふらす必要もないが――。それで何かい、久子さんはどうしてゐるんだい。何たか病氣だと云つたぢやないか。

泰　何に、大した事はあるまいが――。

逵三　平常は君の手傳をしてゐるのか。

泰　あゝ、妹だが感謝する言葉が無い程よくして呉れるよ。

逵三　だが、何時までさうしても置かれまい。何とかしなくちやア――。

泰　いや、それに就ては絶えず頭をいためてゐるが――あ

れの體が想像以上に傷つけられてゐるんでね。僕は妹を救ふ事が出來ない樣な氣がして來た。この頃は頻りに過去が悔まれてならない。

逵三　ふむ、どう云ふ譯で……

泰　つまり兩親の世話も自分の學費も、一切妹の孱弱い體に引負はせて來た事が、正しい事であつたかどうかとね。――勿論その時は妹もさう思つてゐたらうし、僕も亦その犧牲がやがて何千人を救ふ源となると信じてゐた。正しい道とも思つてゐた。又立派につぐなうて行く日が來るとも固く信じてゐた。

逵三　むゝ。

泰　それがどうだらう！　僕は今日まで何千と云ふ人を救つた。けれども、たつた一人の妹の靈を救ふ事は出來ないんだ。僕はどうしても過つてゐた樣な氣がする。犧牲があまりに尊すぎた樣な氣がする。兩親にあんな悲慘な死に方をさせないでも、妹の生命を亡さないでも、人間として生きて行く道が無かつたとは決して云はれない。僕にはどんな勞働にも堪へ得られる立派な體格があつたのだ。――僕はあやまつてゐた。仁術等と云ふ言葉の綾で目隱して、僕は自分一人の欲望のために生き樣としてゐたのだ――。

逵三　（慰める樣に）然し、十分に生活の保證もし、又結婚でもさしたら――。

泰　君にはそれが出來る事と思ふか。――實は僕も先刻自分でさう慫めて見たんだが、あれの前身を知つてゐるもので、誰が妻に持つて吳れるものがあらう。

逵三　さうぢや無い。それは餘りに僻み過ぎる。世の中にはさう／＼盲目ばかりはゐない。眞に人間の魂を見る事の出來る者もあるよ。

泰　（狂喜して）む、そ、さう信じて吳れるか。

逵三　勿論だとも！

泰　世間が何と云つても？

逵三　世間は世間さ。どうとも云はしておけばいゝぢや無いか。

泰　（手を取つて）有難う。有難う。よく云つて吳れた。妹がそれを聞いたらどんなによろこぶだらう。實はね君、妹はね――。

逵三　ふむ、何うした――？

泰　いや、僕も絕えず希うてゐたんだが――有難う。それで彼女は救はれるよ。僕も――。

逵三　むゝ――。

泰　ね、どうぞさうしてやつて吳れ。支度はどんなにでもする。

逵三　え？　いや――僕は、實はもう――。

泰　えッ、どう――?
達三　結婚したよ。
泰　君がッ。(愕然として) ちつとも知らなかつた。君は最う少し位置が向上しなければさうしないと云つてゐたぢやアないか。
達三 (曖昧に) む丶、しかし何かと不便でね。それに誤解される事も多いし。
泰 (がつかりして) さうか。ちつとも知らなかつた。僕は君に妹を救つて貰はうと思つてゐた。
達三 (ドヨッとして) む丶――。
泰　妹も幽にさう希うてゐたらしかつた。しかし、君がさうしたと云へば――。
達三　いや、僕も實は――その――實際久子さんには同情してゐるんだが――。
泰　む丶――。
(長き間。)
達三 (時計を出して) いや、隨分長くゐた。もう一ケ所行つて來る處があるから。――(起つ) 失敬しよう。
泰 (引き止めもせず) さうか、一緒に夕飯でも食はうと思つてゐたんだが――。
達三　有難う。まあ今度來る時まで預けておかう。
(下手へ去る。泰見送つて出づ。舞臺暫く空虛。やがて上手より久子出づ、質素なる餘所行の和服に着換へて手提を持つ。泰歸り來る。)
泰　あ、久さん、何處かへ出かけるのかい。
久子　え丶、今から國へ行かうと思ひます。まだ終列車には間に合ふでせうから。
泰 (呻く樣に) む丶、どうしても行くのか。然しそれにしても今夜の今夜とはあんまり急ぢやないか。
久子　え丶、私もこんなに急に行かうとは思つてゐなかつたのですが、色々な事情が一時も早く行かなければならない樣に迫つて來ました。
泰　だつてあと三日だ。せめてあの開院式の日まで居て一緒に祝つて立つて吳れ。
久子　い丶え、駄目です。私がゐては其式だつて無意味になります。一時間長くこ丶にゐれば、一時間だけ貴郎のために惡いのです。
泰　そんな事があるものか、そんな事が――。
久子　落着いて下さいまし。私も落つける丈け落着きますから。――私はね、先刻臺所へ參りますと、下女等が私の噂をしてゐるのを聞きました。
泰　む丶、(呻く樣に) 何んと云つてゐた?
久子　私の過去を責めてゐるのです。そしてあの五號の患者だつて――い丶え、私は些つとも覺えてゐないんです

けれど――。

泰　うむ、彼奴(あいつ)か。よし、追出して了ふ――。（走つてゆかうとする）

久子（止めて）駄目です。追ひ出したつて私の過去が美しくはなりません。

泰　だが――あゝ、外での噂は小田垣が來て喋つたんだな。あの僞詩者が――。

久子（抑へて）靜にして下さい。人は恨みますまい。兎に角私が身を引きさへすればいゝんです。私さへゐなければ噂は自然に消えるでせう。

泰　然し私はこの上お前一人に苦勞させて、自分ばかり幸福でゐようとは思はん。よし、何とでも云へ。私はお前と一緒に亡びよう。

久子（叫ぶ）何を仰有るんです。今更そんな――私のこれまでの苦勞を悉皆(みんな)無にして仕舞はうとなさるんですか！

泰　だが僕は過つてゐた。この生活を棄てる。

久子　棄てたとて私の體は元へは戻りません。

泰　むゝ。

久子　兄さん、私は貴郎(あなた)に悔いを與へ樣とするのではありません。私は最う何もかもあきらめてゐるのです。けれども、あの病室丈けは人手に渡したうございません。

泰（急き込んで）だから――何故こゝから出て行くと云ふのだ？

久子　それは先刻云つた樣に、私自身の生きて行く道を見付けるためです。――私は自分のものとして何一つ持つてゐません。何に縋るものもありません。この空虚(うつろ)になつた胸から湧いて來るものは冷たい涙ばかりです。

泰　あゝ。

久子　ね、行かせて下さいまし。――自分で自分の體を思ふまゝにする事の出來なかつた境遇にゐても、私は何かしら昔には希望を持つてゐました。男と云ふ男に殘らず虐げられた時に流した涙でも、今の樣に悲しい色ばかりは帶びて居ませんでした。こゝへ來てからも激しい闘ひに勞れ〳〵て倒れ込んだ床の中でも、私は何かしら確りとした物を摑んでゐました。

泰　判つた。判つた。それでお前が苦しみの中に新しい生活を見つけ樣と云ふ心は判つた。しかし、これからは何を目的(めあて)に生きて行くのだ？

久子　それは判りません。

泰　判らない――？

久子　いえ、その中に何か見つかるでせう。若しかすると見つから無いかも知れません。けれども私には其苦しみ乍らも樂しかつた昔が懷しいのです。苦しんでゐれば何か知ら慰められるものがある樣な氣がするのです。ねえ

行かせて下さい。

泰　あゝ。

（答なし。久子も流石に去り兼ねて暫く立ち盡す。間。上手より松代と光子とが急ぎ足に出て來りいとはしげに二人を見て無言のまゝに下手へ去る。すぐ後より「阿母さん」と呼びかけて園子が走り出て何か表にて云ひ爭ふ。やがて馳け入つて泰と眞人に縋る。）

園子　貴郎（あなた）！

泰　どうした？

園子　母が――母が私を連れて歸ると云ひます。

泰　え、お前を――？

園子　お二人のお話を殘らず伺つたのです。

久子　（詰寄る）え、それで――貴女は歸るつもりなのですか。

園子　まあ、（見上げて）情けない。たとひ誰が何と云つても、私にはこゝより外に歸る家はありません。

久子　ぢや、こんな私でも矢張姉妹（きやうだい）だと思つて下さるの。

園子　えゝ。

久子　あんな穢れた過去をもつてゐても？

園子　久子さん、（キッと）私は妹の様な女ではありません。

久子　（縋つて）有難う。私を信じて下すつたのは貴女（あなた）と兄さんとたつた二人ぎりでした。私、死、死んでも忘れはしません。

園子　あゝ。（やう／＼顔を擡げて）しかし、母等がやかましく申しますと、自然町の噂にも上るだらうと思ひますと――。

泰　それにつけ込んで甲田や橋本は色々な事を云ひふらすだらう。（窓を見て）折角あゝして立派に出來上つた病室も、塵にまみれて了ふだらう。

久子　（遮つて決然と）いゝえ、そんな事があるもんですか。どうなりと噂する者にはさして置けばいゝんです。やがて其噂をする事も出來ないまでに叩き潰して仕舞へばいゝんです。兄さん。私はもう何處へも行きません。ね、もう一度鬪ひませう。今度は味方が三人です。

泰　むゝ。

久子　（電燈を消す。外は月光がさやかに流れて病室がクッキリと見えて來る。指さして）二人の血と汗とで築き上げたあの病舍はびくともして居ません。あのクッキリと澄んだ大空を自分のものゝやうに奪つて聳えて居ます。今に三人の力であの病室へ入り切れないまでの患者を入れて見せるのです。月が私達の行く手に輝いてゐます。燃えてゐます！

二人　あゝ。

（三人等しく月光を仰ぐ。看護婦水島出づ。）
水島　あの、（云ひさして人々の樣子を見て）お邪魔でございましたかしら。
久子　いゝえ、關ひません。何か御用ですか。
水島　はい。あの五號の患者が――。
泰　どうかしました？
久子　又發作でもしましたか。
水島　いえ、貴女に是非來て戴きたいと申してゐます。何だか譫言の樣に――。もう長くはない樣でございます。
久子　さうですか。すぐ行きます。扇屋のお玉が逢ひに行くと云つて下さい。
水島　貴女がッ。
久子　（押へて）どうぞ。（水島去る）
泰　久子、何故お前はあんな事を云ふんだ。
久子　だつてもう隱す必要がなくなつたのです。私達の歩んで來た道は間違つては居ません。私達は正しいんです！　私達は何千と云ふ人を恐しい死から救つて來たのです！
二人　あゝ。
久子　兄さん、あの新築の病室には、誰よりも先にあの五號の患者を入れてやつて下さい。
（と立上つて靜に下手へ去る。二人は默然として顏を見合はす。月光いよ〳〵冴えたり。）

――幕――

小梶丸

人物

友右衞門　長榮丸後に小梶丸の荷主
小梶　梶屋抱遊女
よしの　その妹女郎
常二郎　小梶の情夫
榮藏　長榮丸の船頭
平六　同　梶取
儀兵衞　梶屋の亭主
お峰　花屋の內儀
他に、禿、仲居、若い者、船頭等

時

天明の頃

處

大阪堀江の廓

（一）

堀江に臨める花屋の下座敷。平舞臺にて室を上手よりやゝ斜に見たる體。正面奧淺く上手よりの柱を中心として下手へ斜めに堀江の上に張り出したる心にて肘かけ窓、欄干付。其向ふは堀江を隔てたる家々、雨に煙りて見ゆ。窓と並んで下手は栗色の壁、更に下手へ出入の障子、壁の前には茶棚、火鉢等を置きその前を二枚折の小屛風にて圍ふ。柱より上手は同じく窓。半ば障子を閉てたり。續いて出入の給襖。その外は二階への梯子段の上り口の心。其襖の前に邪魔に成らぬ樣に黃八丈の座蒲團を積む。其他煙草盆を片よせたり。

黃昏時。

まだ灯入れぬ室內はほの暗く只窓の外のみ灰色に明るく雨靜に續く。梶屋の遊女小梶(二十二)窓に依つて物思はし氣に外を眺む。やゝ長き間。堀江を通ふ櫓の音折々聞ゆ。やがて下手より妹女郎よしの(十九歲)出づ。

よしの　（呟く）暗いこと――。淵の底に居る樣な――。
（小梶を見て）おゝ姉さん。
小梶　（向ふへ向いたまゝ）よしのさんか。
よしの　（そばへ寄つて）どうしなんした。魂の拔けた人形の樣に何を見て居てぢや。
小梶　雨――。雨でござんす。

よしの　え。

小梶　（一人言の様に）　あの灰色の雲は何時になつたら晴れるのやら――。私の一生を押し包んでしまふ暗い影となるのではあるまいか。

よしの　ほんに、春雨なら手に受けて紅をとかうもの。斯う繁う降つては何の風情があらう。心の底まで腐つて仕舞ふ樣ぢや。梅雨時の習とあきらめては居れど、つい愚痴も出まするなあ。

小梶　しかし、其愚癡も恨も言うて居られる間が花かも知れぬ。やがて泣く事さへも出來ぬ身となるであらう。

よしの　え。（凝つと見てすがる）　姉さん短氣を起して下さんすな。

小梶　え――。

よしの　親方さんにもよう頼んで置きました。常さんにも文を出しました。今日に迫つてもその時まではこつちの體、仕樣が盡きたと言ふではござんすまい。あとの歎きに成らぬ樣に、片時の命を惜んで下さんせ。

小梶　（靜に手を拂うて）　よう言うて下さんした。嬉しうござんす。したが其案じは棄てゝ下され。私は一人では死なれぬ身ぢや。

よしの　おゝ。

小梶　浮草にも根はある。流の戀にも誠はある。只それ故に何時までも、物言はぬ日が續くと思ふと、他へ受出されるのは厭でござんす。察して下され。

よしの　あゝ。

（泣く。上手より長榮丸の荷主、友右衞門（三十歲、寛濶なる姿）出づ。同時に下手より仲居灯を持ちて出づ。）

友右　（立つたまゝ）　小梶――。

小梶　（物憂く）　主さんか。

友右　俺は愈々今宵出發ことに定めた。

小梶　え。

友右　荷物も大方積み入れた。遊びにも倦いた。和女さへ連れて行けば此の廓に用はないのぢや。

よしの　船を出すのでござんすか。

友右　むゝ。

よしの　でも、この時化續きに若しもの事があつたらどうしなさんす。

友右　と言うて、梅雨の晴れるまで待つても居られまい。（積み重ねた蒲團の上に腰を下して）　逆風にも帆をかけて走るのが舟乘の習慣ぢや。一筋に押し進めば波も風も人の心に從ふものぢや。

小梶　そんなら其船で私を連れて行きなさんすか。

友右　むゝ、月の無い海も和女が行けば輝くかも知れぬ。

（仲居第二の灯を持ちて出づ）亭主にもよう談合させておいた。和女も何かの用意をするがよい。
小梶（そむけて）厭でござんす。晴れた日にさへ板一枚の底は地獄と言ふ海の上へ、誰が今日の樣な日に行く者がござんせう。
友右　そんなら晴れるまで待てば行くのか。
小梶（ハッとして）いえ〳〵行きませぬ。空は晴れても此の心はつい晴れませぬ。
友右　然し、何時かその心の晴れる日も――。
小梶（やるせ無く）來る事やら來ぬ事やら――。（外を見て）雨が灯影に映つて居りまする。冷たい色ぢや。
（内儀お峰（三十歲餘り）出づ。）
お峰　梶屋の親方が見えました。（四方を見て）これはまあ、二人とも其處にゐながら、座敷もこしらへずにどうした事ぢや。
（座を作る。上手より梶取平六（四十歲餘り）出づ。）
平六（やゝ息をはずませて）親方こゝにか。俺は何時もの二階かと思うてをりました。
友右　何、別にどう言ふ事は無しに下へ來たのぢや。そしてあの話はどう成つた。
平六　さ、それについての話。一旦は三百兩と手を拍つて置き乍ら、いざと成つて金を渡さうとすれば、小梶は家の金箱故、倍の六百兩でも厭ぢやと――。
友右　むゝ。
平六　廓者とは言ひながら、あんまり足許につけ込み過ぎると、つい腹も立つたなれど、一存にも行かぬ事故、儀兵衞奴を連れて戻りました。
友右（眉を寄せる）はてな、儀兵衞は名代の男と聞いてゐたが、其言ひ分は腑に落ちぬ喃。
（打ち案ず。下手より梶屋の亭主、儀兵衞（五十歲位）出づ。）
儀兵　はい、はい。儀兵衞奴でござります。相變らずの長雨には――。
友右（さへぎつて）其挨拶は後できかう。何故三百兩の約束を變換して小梶を身請けさせぬのぢや。
儀兵　さあ、それは――。（凝つと小梶を見て）最前もあなたに申上げた樣に、何分小梶は手前共の金箱でござります故――。
友右　どうあつても身請は斷ると言ふのか。
儀兵　いや、たつてさうとも申しませぬが、まあ、さうと云うてもよいほど金が――。
友右（引取つて）金なら出さう。何程ぢや。
儀兵　さあ、（考へて）さうでござります。昔、仙臺樣は高尾の身請をなされる時、太夫の身の重量（めかた）だけの黃金を

積まれたと云ふ事なれど、世も末なれば人も昔ではござりますまい。まあ思ひ切つて、二千兩。
平六（驚く）二千兩。（膝を進めて）おい、いゝ加減にしておけ。今の世に女郎一人が二千兩たあ餘り業がすぎらあ。
儀兵 高いと仰有ればそれまで。又のお客が有るまで店に置く分の事でござります。
小梶 親方さん。（思はず伏し拜む）
友右（靜にそれを見て）宜からう。二千兩、如何にも承知した。
皆々 えゝッ。
友右 平六、氣の毒ぢやが船まで一走り行つて來て吳れ。（語氣を改めて）然し梶屋の御亭主。
儀兵（威壓された樣に）へ、へい。
友右 三百兩の變換は、男の此の友右衞門云ひ分もあるがそれは云はぬ。然し二千兩、その目の前に積んだ時、否應は有るまいな。
儀兵（幾分か輕蔑した樣に）へいへい。その時は二言と申しませぬ。若し間違うたら、斬り棄えもしますまいが、この首なりと胴なりと――。
友右 よし、確と約束した。平六駕籠で急いで吳れ。
平六 それでも二千兩と云やあ――。
友右 まあいゝ。俺の事は俺の思ふ通りにさして吳れ。内儀、駕籠を云うてやつて吳れ。
お峰 かしこまりました。（去る）
平六 それぢやア行つて來ようか。
友右 御苦勞だな。
（平六上手へ去る。）
儀兵 では私も――。
小梶 親方さん。
儀兵（制して）御免なされませ。
（下手へ去る。間。遠くより唄の聲きこゆ。）
友右（やがて重く）小梶――。
小梶 あい。
友右 今の亭主の言葉を何と聞いた。
小梶 え――。
友右 二千兩と言ひ出した時には、人を卑しめた色がその頰に浮んでゐたな。然し（力を込めて、そして嘲笑ふ樣に）二千兩は愚か三千兩五千兩、和女の爲めには用意して來た、この友右衞門を何と見たのか。
小梶 …………。
友右 又、これから先も身の廻り金銀に不自由はさせまい。長榮丸の荷主は北國筋の船乘り仲間でも、少しは人に知られて居る。

小棍　…………。

友右　然し。（思ひ出に沈んで）　それもこゝ二三年の事ぢや。初めてこの廓（くるわ）へ來て和女を見知つた時は、俺も見る影も無い男であつた。

よしの　（起つて）　私はあの――。

友右　何處へ行くのぢや。

よしの　でも何ぢややら。

友右　（微笑んで）　聞かれぬ話では無い。云ふ折りが無いまゝに今まで云はずにゐた昔話しぢや。

よしの　あゝ。

（元へ坐る。遠くより靜に三味線の音きこゆ。）

友右　（目を瞑つて）　丁度五年前の春ぢや。故郷の越後路はやう／＼雪が消え初めた頃であつたが、この浪花には櫻が咲いてゐた。荷上げを仕舞うた俺は、初めて見る町の賑やかさに小供の樣に心を躍らせながら、醉うてゆく人々の跡をあてどもなしに追うて歩いた。その中一層明るい町へ出た。美しい女が模樣の樣に並んで來るのが見えた。何處ぢやと傍の者に尋ねたら、その男は堀江の廓ぢやと云うた。

小棍　…………。

友右　（やゝ急く樣に）　その夜俺は初めて和女を見た。袖乞の樣に家々の門に立つて和女の家と名とを訊ねた。けれども和女を呼ぶ程の金は懷に無かつた。生れて初めて知つた心の淋しさを胸に抱いて、一人親船に戻つた時は、春とは云へど更けては川風が身に浸みた。俺は和女を恨みたい樣な心地がした。

小棍　（爭ふ樣に）　どうしてそれが――。私しには見も知らぬ客でさへも無かつた主さん、恨まれる理由はござんせぬ。

友右　（抑へて）　まあいゝ、それは俺の愚痴ぢや。（女中臺の物銚子等を持ちて出づ。杯を取つて）愚痴ぢや。愚痴ぢやが俺は泣いた。それが男かと思うた。生れて初めて戀しいと思うた女に、物云ひかける事さへ出來ぬ身の腑甲斐なさに此の世が棄てたかつた。（女中去る）一分の金にさへ事缺く身が味氣なかつた。果ては人目の無い折を見て、親方の金箱に手を入れようとまでした。その時ほど金が尊いと思うた時は無かつた。

小棍　待つて下さんせ。なるほど金は尊からう。私は金故に苦界の勤め、思はぬ人の前へも出る。したがその金故に心までは賣りはせぬ。

友右　俺も金で和女の心を買はうとは云はぬ。然し、その金を作る迄の、心と體の苦るしみは和女の誠を受ける事が出來るかも知れぬ。（大杯に酒を注いで）晝も夢を見乍らこゝを去つた俺は、最う一度和女を見たい爲め、骨

身の離れるまで働き續けた。和女を自分のものにする爲めにはどの様な艱難にも堪へて行かうと思ひ詰めた。

二人　…………。

友右　北の國の海の冬の物凄さは、云うたとてわかるまい。打ち上げる波のしぶきに船板は殘らず氷となる。それに思はず足を取られて波間へ落ちた時、命の曳き綱に縋つて俺は和女の名を呼んだ。

二人　…………。

友右　（杯を干してよしのにさす。よしのいなむ。杯を落す）又ある夏には暴風に吹き捲られて人の居ぬ離れ小島へ漂ひ着いた時もあつた。失望と飢とに餘の者は朽木の様に倒れて死んだ。然し俺は和女の姿(すがた)を思ひ出してそれに縋つて生きて歸る事が出來た。飢勞れた體にも和女を思うた時血が漲つた。力が湧いた。

二人　…………。

友右　（小梶の手を取つて）それは浪風との戰ぢや。人の中へ出ては罵られた。あたら男の生面を踏まれもした。蹴られもした。けれども和女を思ふ心の芽生丈けは兩手で確とかばうて來た。折られもくじかれもせなんだ。（情に激して來て確と女を抱く）小梶、もう何も云はぬ。俺は身も心もお前にやる。どこまでも、どこまでも一緒に行かうと晴れやかに云うてくれ。

小梶　（靜に手を解いて）嬉しう御座んす。數ならぬ身をそれ程までに思うて下さんした志は一生忘れますまい。なれども私には他に思ふ人がござんす故――。

友右　（引取つて）それも聞いてゐる。然しその男の思ひと此の友右衞門の心とが一つにならうか。

小梶　（ムッとして）ホヽ、こりや面白い。戀の重荷を量る器をお前は持つてゐてか。心の誠が一つなら、お前が思うて下さんした丈けはあの人も思うてぢや。お前が私の爲に千萬兩の黄金を積んで下さんすりや、その人は私の爲に死んで下さんせう。

友右　むヽ。

小梶　（猶も嘲る様に）北の國では、それ程の心中立は珍しい噂の種にも殘るであらうが、こヽらでは日毎夜毎、戀に死ぬは廓の女の常でござんす。

よしの　（はら／＼して）これ姉さん。

小梶　（大杯をあふつて）お前の苦勞はお前の勝手、それを恩に着せられて妾の身が何う立たう。あヽ、氣(け)うといこと。

（不貞てとんと腰を下ろす。上手より長榮丸の船頭榮藏（二十七八歳）襖を蹴散らして出てイキナリ小梶を突き倒す。）

小梶　あれ、お前は榮藏さん、どうして私を。

榮藏　胴も尻尾もあるもんかい。先刻から向うで聞いて居りやア、親方の氣のいゝのをつけ込んでツベコベとよう惡態を並べ立てたな。色には無粋でも北國の船頭の腕には鐵輪が入つてゐる。苦勞はお前の身勝手と、さ、もう一度云うて見ろ。

小梶　（棄鉢に）易いこと。もう一度云うたらどうしなさんす。

榮藏　斯うするのだツ。

（拳を振り上げる。よしのが止めかゝる。）

友右　（坐つたまゝ）榮藏まて。

榮藏　だつてお前さん。

友右　（起つて止めて）いゝから待て。

榮藏　（女を放して）待てと云ふなら待ちもしようが、親方、お前もいゝ加減にしなすつたらよからう。人事でも腹が立つ。

友右　むゝ。

榮藏　これまでにも幾度も云うたが、何も世の中にこの女が一人と云ふわけぢやなし、否だと言ふのを無理に根引するにもあたるまい。

友右　だが――。

榮藏　まあさ、意地づくなら意地づくで、何も苛嘶までして機嫌を取るには及ぶまい。賣り物に買ひ物、金さへ渡しやアこつちのもの。燒いて食はうと煮て食はうと勝手だ。

小梶　（引吊る樣に）オホヽヽ、鯉や鮒ぢやアあるまいし、煮て食ふには、この小梶にはチッと骨がござんせう。

榮藏　おのれ、其口をツ。

（又打つてかゝる。內儀お峰走り出づ。）

お峰　あこれ何事ぞ。榮藏さん、小梶さんも大人氣ない。（よしのに）お前には表に逢ひ度いと云ふ人があるぞや。

よしの　え、私に。

お峰　（目で知らせて）さ、早やう。（よしの去る）友右衞樣、どうした事でござんす。

友右　（靜に）何でもない。俺が小梶を身受けすると云うたら、無情ない女を思ふのは馬鹿ぢやと榮藏が笑うたのぢや。

お峰　（たしなめる樣に）まあ、お前は。

榮藏　やかましい。お前なぞの出る幕ぢア無いんだ。（友右衞門に）親方、ほんとにいゝ加減にしたらどうだ。今の女の性根ぢやあ、たとひ連れて行つても樂しみにはなるまい。

友右　むゝ。よう分つた。小梶が俺を嫌うてゐるのはあれでよう判つた。然し俺も男ぢや。命まで投げ出して思う

たからには、一度は必ず心に從へて、胸の奧底からいとしいとは思はせて見せる。この身の影を何時までもその心に刻みつけて見せる。俺は世の波風に戰うて勝つたのぢや。
榮藏　そんならどうでも根引して。
友右　今宵の船で一緒に行くのぢや。
（上手より平六出づ。）
平六　親方、金を渡して來ました。これが年季證文ぢや。
小梶　（思はず起つて）そんなら愈々。
平六　ハヽヽヽいや、お目出度う。
小梶　何のそれが。
友右　はて、今となつてどうならう。內儀、立ち振舞に二階で飮み直さう。榮藏、平六。
（上手へ行きかける。）
小梶　（追ひ縋つて）もし、あやまります。あやまります。堪忍して下さんせ。
友右　え。
小梶　最前云うたは、皆お前に愛想がつかされたさの惡態、あやまりまする。
友右　むゝ。
小梶　その代りに身受けだけは堪へて下さんせ。流の底へ沈んだ身は、いとしい男でも男と思へば傍へ寄るのさへ厭になることがござんすもの、たとひどの樣に可愛がられても、心から主さんの思ひのまゝに成る日は來ますまい。その仇な情を買はうより、町方の初心な娘衆でも嫁に取つて、私を放して下さんせ。
友右　わかつたわかつた。然し俺はどうでも連れて行く。俺はお前が幸福になる事ならどの樣な事でもする。やがて其悲しみの淚が暖かいよろこびに變る時が來るであらう。
（皆々を促して上手に去る。）
小梶　あゝ。
（絕望して泣き伏す。間。下手よりよしの窺ひ出づ。小梶の他に人なきを見定めて下手へ行て手でまねくまねく。小梶の情人常二郎（二十五歲）商家の手代風。おづおづとして出づ。）
よしの　姉さん。姉さん。
小梶　え、（顏を舉げてつと常二郎を見る）おゝ、お前はツ。（駈け寄つて縋る）
よしの　あれ聲が高い。（四方を見廻して）斯う成つては永う話す間はござんせぬ。あとに心の殘らぬやうに覺悟して下さんせ。私は表で人を見張つて居ります。
（下手へ去る。）
小梶　常さん。
常二　おゝ。

小棍　格子を開いて下さんしたか。
常二　おゝ。あらましは手紙で、今又表でよしのからそつと聞いた。愈々あの船頭奴が――。
小棍　さあ、厭と云はれぬ手詰の手詰。もう斯うなつたら豫ての覺悟、一緒に死んで下さんせ。
常二　（懐から短刀を出して）俺もそのつもりで來た。然しこゝでは人目が多い。仕損じたら彼奴等に笑はれよう。逃げる勝手は分らぬか。
小棍　さいな。（上手を見て）こちらは表二階。（下手を見て）こちらは勝手。（奥を見て）こゝから行くより外はござんすまい。（障子を開ける）
常二　（覗く）むゝ、幸ひ潮が上つてゐる。小船か筏か黒いものゝ影が見える。何よりの足溜りぢや。
小棍　（しごきを解いて）そんならこれを頼りにして……。
常二　おゝ。
（忙しく支度す。小棍は一つを殘して室の燈火を殘らず消す。）
常二　さあ。
（手を取つて向ふへ下りんとす。上手よりお峰走り出でて二人の帶を取つて引き戻す。）
常二　や、お前は。
小棍　お内儀さんか。

お峰　（小聲で）私ぢや。お峰ぢや。したがお前達は見のがして死なせて下さんせ。
小棍　（手を合せて）拜みます。素人衆ではござんすまい。
お峰　尤もぢや。私も思ひ詰めた昔はある。見のがして美しい淨瑠璃の主とさせたい。なれども今ばかりは死なせられぬ。
常二　さ、あとでの迷惑はさる事ながら、それを堪へて。
お峰　何の何の、私の家なぞ二人の戀を買うたと思へば安いが小棍さん、今死んでは親方の深切は無になるぞえ。
小棍　え、すりやどうして。
お峰　はて、お前とも思はれぬ。三百兩と手を拍つた身代金を、何の理由も無しに變換して、男をみがく儀兵衛さんの顔が立たうか。
小棍　あ。
お峰　その顔を潰して、二千兩と法外も無い云ひ條は、皆和女の心を汲んでの事ぢやぞえ。あれも長年店の爲に成つて呉れた女、萬一ひよんな事でもあつては――。とさ、先刻の歸りに私への愚痴。それを振り切つて死んでは、苦しい親方の深切は水の泡ぢや。
小棍　あゝ。
お峰　それに又、このまゝ姿をかくしても、相手は荒氣の船頭衆、あとの詮議が難かしからう。さうしたら親方は

又の難儀ぢや。
二人　…………。
お峰　喃、こゝの道理をかみ分けて、大人しう連れられて行て下され。人の世は何が幸にならうも知れぬ。大阪の土地さへ離れたら、親方の身にかゝる難儀も消もあるまい。（目交ぜす）な、な。
常二　分りました。分りました、そんなら小梶――。
小梶　あい、又逢ふ日まではお前も御無事で。
常二　おゝ。
（下手へ行かんとす。上手より友右衞門少しく醉うて出づ。）
友右　小梶、小梶――。
お峰　えツ。
（ハツとして逃げ出す小梶を捕へ、殘りの火を消す。その闇にまぎれて常二郎は下手へ去る。友右衞門不審氣に闇を透かす。）

――つなぎ幕――

（二）

大阪安治川口の船着場。舞臺は河岸の心にて、上手下手は桐油をかけたる荷物なぞを置く。中央に淋しき柳の木一木あり。奥は遠く川口より海を望む。その上手に大なる船の舳、半ば岸にかくれて見ゆ。
前場より一晌程の後。雨やみて雲少しく切れんとす。『エンサラホイ〳〵』と荷役をする聲高く低く闇に聞ゆ。やがて上手より長榮丸の船頭三人出でて舟篝を焚く。
船頭一　いゝ鹽梅に雨も歇んだな。
同二　雲も切れかけた樣ぢや。どうかするとお月樣が拜めるかも知れぬ。
同三　今日は十六日だな。明石の沖にかゝるのは夜明けだらうが、晴れたらよからうな。
同一　何しろ親方は運のつよい人ぢや。どう見定めてか今宵出發と云へば、この通りに空模樣が直つて來る。
同二　その運が無うて、五年や七年にこれだけの船の荷主にはなれぬわ。
同三　さうだ喃。
（上手より榮藏足早に出づ。それを追うて平六が駈けて來る。）
平六　これ〳〵榮藏、お前は何處へ行くのだ。
榮藏　堀江へ行つて親方に逢ふんだ。俺はどう思うてもあの女を此の船に乘せるのは否だ。
平六　さう云うても、親方が乘せると云へば仕方があるま

い。親方はこの船の持主ぢや。

榮藏　然し俺はこの船の船頭ぢや。船は親方の所有でもこれを動かすのは俺ぢや。船玉樣は俺が祭るのぢや。その清めに清めた船へ、あんな賣女がどうして乘せられるものか。

平六　さゝ、お前の氣象としてはさうであらうが、波に逆らへば梶が折れる。長い間と云ふではなし、只越後へかへるまでと云ふのだから――。

榮藏　ふん、あれ程にきらはれてゐながら。（下手へ行く）

平六　おいそつちへ行てどうするのだ。

榮藏　心配するな。こつちからは堀江へは行かれぬ。

（フイと影をかくす。）

平六　（見送つて）何處へ行く事やら――。然し困つた事だ。何か騷動が起らねばよいが――。（初めの船頭を見て）おい／＼、お前達はもう少し水を汲んでおいて吳れ。水の上に居て水が一番不自由ぢや。

船頭共　あい、あい。

（皆々上手へ去る。間。花道より常二郎覆面して身輕にいで立つて走り出づ。其處此處と窺ひ見て篝火を取つて舳の文字を讀む。薄く長榮丸の三字見ゆ。首肯きて上手へ去る。間。再び花道より賑やかなる人の跫音聞えて美しく飾りたる廓駕籠二挺、友右衞門（高足駄蛇の目の傘を持つ）梶屋の亭主儀兵衞若い者等出づ。）

友右　（駕籠を呼び止める）こゝだ／＼。（駕籠を下す。前の駕籠よりよしの六つばかりの禿を連れて出づ。後より小梶）

よしの　（友右衞門に）最うこゝが川口でござんすか。

友右　さうぢや。そこに俺の船がつないである。長榮丸と云ふ文字がほのかに見えてゐる。

よしの　あゝ。

友右　然し、俺の寶の小梶を乘せて行けば、今日から小梶丸と改めようか。亭主、喜助。御苦勞だつたな。

小梶　よしのさん、お前とは長い馴染、蔭になり日向になつてよう深切にして下さんした。死にゝ行く身には用のない私の衣裳、手道具、片身と思うて下さんせ。

よしの　（泣いて）よう云うて下さんした。お前と思うて朝夕肌に付けて居りませう。住みなれぬ國へ行て、仕馴れぬ業に身を痛めて下さんすなや。

小梶　お前も無事で勤めて下さんせ。身は賣られても魂はこゝに殘して行く。北から南へ渡る雁のたよりがあつたなら、私の聲と思うて下さんせ。

禿　姉樣。ごぶじで行て下さりませ。

小梶　お前も今日からはよしの樣を姉さんと思うて可愛がつて貰ひや。親方さん。

儀兵　おゝ。

小梶　これまでの御深切、其れに今宵のお志、お峰さんから聞いて私や――（むせんで）私や拜んでをりまする。

儀兵　これ〳〵、何も云ふまい。私もお峰どのから仔細をきいて、無慈悲な親方と思はれいですんだとよろこんでゐるのぢや。然し一層の事なら――喃。

小梶　（涙を拭うて）それも愚痴、目出度い身受の日に泣いて出發(たつ)のも私の不運。そんなら皆樣。

儀兵　名殘りは盡きぬが何時まで斯うしてもゐられまい。そんなら小梶、くどい樣ぢやが體に氣を付けて――。

よしの　煩うて下さんすな。友右樣、姉樣の事をたのみまする。

友右　（笑ふ）はて、案じぬがよい。鬼にさらはれて行くのではない。世界中の寶にも代へぬと思ふ俺がつれ行くのぢや。亭主、秋には又上らう。

儀兵　はツ。又のお上りを待つて居ります。

（皆々見返り乍ら花道へ引返す。小梶は延び上つて見送る。舟唄かすかに聞ゆ。）

友右　さゝ、もう見えぬ樣に成つた。

（促がして上手へ行きかける。途端上手より「盜賊」と叫ぶ聲きこえ常二郎逃げる如く走り出づ。平六跡より出てて逃がさじと爭ふ。下手より榮藏出てて聲を聞きて平六に加勢す。常二郎は遂に短刀を拔く。二人はそれをもぎとつて海へ投げ捨て組敷いて有合ふ繩にて縛る。上手より以前の船頭手籠を持ちていづ。）

友右　平六、どうしたぞ。

平六　親方か。何奴か知らぬが積荷の中にかくれてゐたので、誰ぢやと咎めたら一散に逃げ出した。

友右　（傍へ寄つて）むゝ、顏をかくしてゐるな。然し物取りとは思はれぬ風體ぢや。平六、それを取つて見い。

榮藏　むゝ。

（榮藏覆面を取る。一人が灯を差しつける。小梶はハッと驚いて駈けよる。）

小梶　あれッ、お前は。

皆々　むゝ。

（さてはと心づく。）

小梶　（縋つて）常さん、お前も別れにか。よう來て下さんしたな。これ、痛むところはござんせぬか。

（おろ〳〵しながら介抱す。友右衞門は燃ゆる如き嫉妬に身を慄はせ居りしが、イキナリ小梶を突きのけて男を蹴とばす。）

友右　おのれ何奴ぢや。こゝへは何しに來た。

常二　（觀念した樣に、そして勝利を誇る樣に）私は小梶と二世まで云ひかはした仲ぢや。こゝへ來たのは隙を見

て小梶を餘所へ連れ出さうためぢや。
友右　むゝ。
常二　それも見付けられたらこれまでぢや。荒氣のお前達はこのまゝに歸しはすまい。私も女を捨てゝ歸らうとは思はぬ。さ、その刀で斬つて呉れ。
友右　おゝ、望み通りに腹の癒えるまで切りきざんでやる。覺悟せい。
（脇差を拔く。小梶はあわてゝ其の手に縋る。）
友右　えゝ、退け、退け。
（突きのける。小梶はよろ／＼とよろけて常二郎の上に倒れかけて、身をもつて男を圍ふ。）
友右　えゝ退け、退かぬとおのれも一緒に殺すぞ。
小梶　（強く）本望ぢや。さ、斬つて下さんせ。思ひ合うた二人があの世まで一緒に行かるれば本望ぢや。
常二　よう云うた。心さへ殘ればそれで思ひ殘すことは無い。
小梶　死ぬれば二人の世になるのぢや。さ、斬つて。
（二人は潔く瞑目す。）
友右　むゝ。
（長く二人を見詰む。やがて其の刀は力なく其の手より落ちる。人々は驚く。友右衛門はハツトして叉手に取る、そしてツカ／＼と常二郎の後に廻りて繩目を切る。）
常二　（半ば起きて）や、こりやどうして――。
友右　――。（默つて刀で下手を指す）
小梶　二人を免して下さんすか。
友右　――。（首肯く）
榮藏　（ツカ／＼と前へ出て）親方。
友右　むゝ。
榮藏　二人を何處へやるのぢや。
友右　（重く）思ふまゝの處へ行かせるのぢや。
平六　それぢやア先刻に――。
榮藏　どうでも思ひ通りにさせると云うたのは嘘か。
友右　（淋しく）私の心が足らなんだのぢや。（二人を見て）あの二人は誰の力でも引放せまい。
榮藏　そんなら思ひ切るのか。
友右　いや、俺の心は棄てぬ。俺の力のあり丈けを盡して小梶を幸福にしようと誓うた言葉は反故にはせぬ。小梶は俺の一生に只一人の戀しい女であつた。
榮藏　それを無慙と人手に渡すのか。（船をふりかへつて）こなたの持船の長榮丸を、わざ／＼小梶丸と改めると云うたのも、心の寶と思ふ女子を乘せて行くためではないか。
友右　むゝ。

榮藏　それを他人に渡したあとは、何を代りに乘せて行くのぢや。男の意地は何で通すのぢや。（刀を奪ふ樣にして）いつそ殺して死骸を乘せて行くがいゝ。さうすれば何時までも女は自分のものぢや。

友右　（刀を平六に渡して）俺も一時はさう思うた。然し、殺された女の魂は誰を恨むであらう。其れでも自分の者と云はれようか。

榮藏　（吐きすてる樣に）意氣地なし。殺す事が出來ねば、自分で死ね。死んで二人をのろうてやれ。

友右　それもすまい。血みどろに成つた俺の姿を思ひ出に見て、二人の行末が心安からうとは思はれぬ。俺は死なぬ、世も棄てぬ。今までと同じ樣に、商賣を續けて生きられる丈生きて行かう。そこに俺の命もある。小梶の幸福もある。

榮藏　チエツ、もう云はぬ。顏を見るのも厭に成つた。（花道の方へ行きかける）

平六　おい、どこへ行くのだ。

榮藏　判るものか。こんな意氣地なしと一緒に舟にのつてゐたら男が腐らあ。

友右　それで行くのか。

榮藏　さうだ。お前もちつたあ骨のある男と思うてゐたが案外だ。糞忌々しいッ。（去る）

友右　行つたな。あれも男ぢや。

平六　然し船頭がなうては。

友右　よからう。俺が昔に戻らう。まだ腕はにぶるまい。お前達は碇を卷く支度をして呉れ。

平六　それぢやア——。

友右　（懐中より金入を出す）使ひ殘した金ぢやが、これを路用にして何處へでも行つて身を立てゝ下され。梶屋の證文はかうすれば反故ぢや。（年季證文を裂く）

小梶　（兩手を突いて）有りがたうございんす。お情に背いた憎い女とも思はず、何から何までの御心添。お禮の申し樣もございませぬ。

常二　それは重ねて世にでた時。

友右　あゝ、達者で仲よう長生して下され。

二人　お前樣も御無事で——。（起ち上る）

友右　（思はず追ふ樣に）小梶——。

小梶　え。

友右　いや、もう行くのか。

小梶　さらばでござんす。

（二人は見返り乍ら下手へ去る。雲やぶれて月出て海は銀の如く輝く。）

友右　（空を仰いで）月が出た。二人の行方は明るからう。海も穩かぢや。小梶——。小梶丸も無事に思ふ港へ着く

であらう。

（平六出づ。）

平六　親方用意が出來ました。

次右　むゝ。

（二三歩曳かれる樣に下手へ行き、凝つと長く〳〵二人の行方を見詰める。遠くより荷揚の聲きこゆ。）

——幕——

小傳及解說

池田大伍篇

濱村米藏

小傳

池田大伍氏は、舊名を銀次郎と云つて、明治十八年九月、東京市京橋區銀座四丁目八番地に生れた。

銀座で名の通つてゐる天ぷら屋「天金」の若旦那である。氏は次男で、兄の金太郎氏が三代の業を繼いで、現にこれが經營に當つてゐる。乳母日傘で育つた人、子供の時分から芝居好きであることも、凡そ分る譯である。

明治四十年早稻田大學英文科を卒業した。同窓には秋田雨雀、中村星湖の諸氏がゐる。四十二年文藝協會附屬演劇研究所が出來るや、坪內博士、東儀鐵笛、土肥春曙諸氏の下に助手になつて働いた。

大正二年文藝協會の解散に遭つて、東儀、土肥兩氏と計り、演劇無名會を起した。

文藝協會瓦解後の新劇運動が、手短かに云つて、全くの群雄割據で隨分羊頭をかゝげて狗肉を賣つたものである。併しそれも血氣の勇と容さなければならないやうな時代であつた。さうして派手な新思想の宣傳の方に忙しい時代でもあつた。その中で歌舞伎以外の新劇術の樹立といふやうな、甚だ地味な仕事をしてゐたのが、この演劇無名會のやうだつた。いひ換へれば坪內博士の理想を正しく繼承した唯一の團體であつたと思ふ。

無名會の第一回公演は、大正三年十月帝國劇場で行はれた。この時上演されたのが氏の多分處女作だと思ふ「瀧口時賴」である。

公演を重ねること七回、土肥氏の死に遭ひ、他の俳優も次第に離れて行つて、大正五年の暮には潰れて了つた。

氏は、都會人の案外な一面である、非常なはづかしがりやと聞く。さういへば私にもこんな記憶がある。或る文藝講演會が有樂座かにあつた。當時のお歷々の中に、池田氏は確か支那の脚本に就て話すことになつてゐた。一體池田氏は話上手で、どつちかと云へば談論風發する方の人らしい。さうして引證該博、あれからこれへいろ〳〵に花が咲いて盡きない性の人らしい。が、どういふものか、その時は、壇上に出て來て、机を前に腰をかけて、特に氏一人が机を出させ、腰をかけたのだから、十分落着いて話はするつもりだつたに相違ないけれど、まだ本題に入らないで、えゝとか、あゝとか、そのとか、頻に感投詞ともうめきと

もどつちつかずの、兎に角音を立てゝゐた。ずつと後に分つたが、この合の手がまた氏の特長で、これが早口の江戸つ子口調の間に入つて、次第に油が乘ると、合の手も盛んになるが、一方一層雄辯になるやうだ。併しその時は、その枕言葉のえゝや、あゝが少し永かつたと見えて、聽衆がやゝ湧いて來て、笑ひ出す者があつちこつちに起つた。無論惡意のあるものではなかつた。すると自然氏のあゝやええが烈しくなる。途端に大向うから「簡單……」の聲が飛び上つて來た。そこで、中には多少のくつろぎを感じたものもあらう、又笑聲が揚つて、聽衆席の大部分は今度こそ氏の本題に入つた重要な言葉を聽くであらうと待ち構へてゐると、いきなり氏は立ち上つて、はつきり覺えてゐないが、「ぢや、これだけでやめます」といふやうな言葉を殘して、サッサと演壇を引上げて了つた。面白いと思ふので、こんな話を書きつけて置く。

著書には、脚本集「池田大伍集」第一卷、「男達ばやり」「親友」等がある。

尙氏は、昭和三年七月、ロシヤの文化聯絡協會の招聘に應じて、左團次が歌舞伎紹介の旅に上るや、病氣で行かれなくなつた小山内氏の代りに、勞農ロシヤへ行つた。

解　說

○「瀧口時頼」

大正三年二月有樂座で、無名會の一座に依つて初演された。

○「名月八幡祭」

大正七年八月歌舞伎座で、左團次一座に初演された。後に宗十郎や延若や我童等がやつてゐる。

○「茨木屋幸齋」

書卸しは東儀氏であるが、大正四年五月帝國劇場に、梅幸、幸四郎等が上演するに及んで、非常な好評を得た。

○「男達ばやり」

大正十五年五月歌舞伎座に、幸四郎左團次で初演された。

○「西鄕と豚姫」

書卸しは東儀氏と川田芳子氏であるが、後に延若が當てて、今では河内屋のものゝやうに世間から云はれてゐる。

○「根岸の一夜」

大正十一年十月帝國劇場に、勘彌の文藝座が上演した。

○「師直打擲」

敵役の師直を群集の中で思ふさま擲ぐる、上品な皮肉のある喜劇で、作者の趣味や哲學が能く分る作である。

○「親友」

サルドーの飜案で、東儀と水谷八重子氏で初演したものである。

〇「南方女兒國」

昭和二年九月、水谷八重子が初演した。

〇「反黄梁」

支那の脚本研究の副産物らしく、邯鄲の夢の逆を行つたもので、氏一流の老練な手法を窺へる作である。

氏の脚本を讀んで敬服させられるのは、名文句の多いことである。勿論これ程の作家の脚本には、學ぶべきものは隨分多いが、間違つた文字を使はずに、あれだけの名臺詞を書くのは大變といふ氣がする。本當である。

仲木貞一篇

小傳

仲木貞一氏は、明治十九年九月十一日、石川縣金澤市に生れた。父は之楨、山口縣の人、陸軍少將、氏か十五の時歿す。母はシズ、沼津藩士の娘である。

山口縣立徳山中學校卒業後、早稲田大學に入つて明治四十二年英文科を卒業した。

氏は、早稲田大學卒業後、萬朝報の懸賞小説に當選し、金百圓を得、その金を資金として、遊んでゐた學友數名と共に、神田錦町に英語學校を經營し、約半年この仕事をやる。そのうち鐵道院の方に口があつて、その雇となつたので英語學校をやめる。次いで讀賣新聞記者になつて、藝術座舞臺主任を兼ねた。又中央新聞社に轉じ、それから新國劇の座附作者となり、下阪して大阪松竹合名社の文藝部員となる。再び讀賣新聞記者に戻つて、更に東京松竹合名社文藝部に入り、舞臺監督と脚本改作係をやる。松竹キネマが出來たので、蒲田撮影所に廻はつて、撮影監督となる。

最近は大正十二年春より昭和二年末まで文部省社會教育調査委員となる。昭和二年夏から東京中央放送局へ入つて、現在は同局社會教育課長の要職にある。別に大正十二年春から日本大學文學科で、演劇論と映畫論を講義して、今に及んでゐる。

右の如くに氏の生活は、一見「忠臣藏」七役早變りの觀がある。その千變萬化のうちで、忘れられない思ひ出は、澤田正二郎旗擧げの巻ではあるまいか。澤田氏は不思議な實際的魅力を以つて、劇壇に動かすべからざる一つの王國を造つてゐる。澤田王國が偉大になればなる程、この思ひ出は何ともいへない妙味を發揮する譯だ。

藝術座を脫退した澤田が、新富座の新國劇第一回公演に、少なからぬ借錢を背負つて、京阪の劇壇に背水の陣を敷くことになつた時、その帷幄にあつて、行くとして可ならざるなき才能を揮つて、ダムダム彈ならぬ大衆的脚本を書い

たのが氏だ。

先づ最初の京都南座上演用に書卸したのが所謂有名な「飛行曲」、第二に書いたのが「深川音頭」である。八月の暑い時分のことで、水の使へるもので、ありふれた本雨だけでは面白くないからといふ座方の註文に依つて、澤田の職工長が鐵管の破裂を止める筋で、奇想妙趣滾々として盡きないもの、無論立廻りがあつて、雨が上る、月がさして大見得になるといふのだから大抵想像はつく。

一意興味本位の脚本にしろ、一日の通し狂言、五幕六幕の長いものを、一晩位で書き上げたものださうだ。

氏はあるところで、「一夜漬で甘い〱新劇を製造しなければならん、然も少し濡場が過ぎると、警察へ呼出されて、どうも君は老子の說を信じてゐるやうだが、少し孔子の說を取入れ給へ、と途方もない御說法を喰はされたりしなければならん、歸るに如かずと思つて、一夜密かに下宿を拔け出し、たうとう東京へ歸つて了つた。」とかう述懷してゐる。こんな難行苦行も新劇のエピソオドにあるのである。

著書には、戲曲集「曉」飜譯集ハーデイの「テス其他」ゴルキーの「母親其他」ガルスワージーの「正義」「アメリカ童話集」「教育映畫論」「映畫劇の理論と作法」「飛行機の進步」等がある。

解說

○「柿實る村」

大正七年二月有樂座で、花田偉子一座の國民座が初演したものである。メーテルリンクの「ステイルモンドの市長」にヒントを得たもので、人道主義的平和論を說く村長が異彩を放つてゐる。

○「山賊と首」

大正十三年二月早稻田劇場で、山本裕三郎一座の民衆劇協會が初演したものである。功名立身にあせる者を皮肉つた喜劇、併せて戰爭といふ眞面目なものを茶化したものだ。

○「春霞墨田堤」

大正十四年十二月甲府市櫻座で、村田榮子一座の初演したものである。これは勞働爭議に際して、老猾な資本家、生一本の勞働者共に、勞働ブローカーにうまくしてやられることを諷刺した喜劇である。

○「首は飛ぶ」

大正十五年六月國民講堂で、新日本劇場一座で初演したものである。この作には小役人の不安定な生活ぶりを描きその卑劣な根性をひやかすと同時に、現代の若い男女の不眞面目さを嘲笑した喜劇である。

これらの作に見ても分る通り、一口に云つて作者の筆は

達者である。併し一向悪達者に墮してゐないのが眞打であらう。さうして材料やその取扱ひ方が、直に今日の我々の生活に直接通するものがあつて、巧みに見物の心を掴む力がある。

以上四篇のうちでは、私は「春霞蘂田堤」が好きだ。無論大作ではないが、一風變つたもので、作者の本質的なものゝ片鱗を窺ふに足るものだと思ふ。

灰野庄平篇

小傳

灰野庄平氏は、明治二十年四月十四日、新潟縣刈羽郡吉井村に生れた。そこは唄や謙信の事蹟で名の殘つてゐる米山の麓、數里に亙つた青田が連つてゐる農村だ。砂丘の彼方に日本海があつて、その遠鳴りを聞きながら、氏はその少年時代を送つた譯である。

氏の兩親は共におだやかな農民だつた。父は酒と謠曲が好きで、濶達な質だつたが、氏の七歳の時になくなつてゐる。母は淨土眞宗の信仰に終始したやうな仁だつた。一昨年なくなつた。

小學校、中學校も、日本海と米山に近い柏崎で卒つた。高等學校は仙臺で土井晩翠氏の教へを受けた。大學は東京の帝大で、美學を專攻した。卒業は明治四十四年だつた。その後、大塚保次教授の指導で、大學院に籍を置いたことがある。

丸見屋商店に入つて、久しく圖書の管理をしてゐて、一日も倦むところがないと聞く。

又この數年來、日本大學で日本演劇史の講義を續けてゐる。講義はアイヌ文化の研究から始まるもので、その高遠にして精緻な内容は、特に斯界の識者から注目されてゐる。この方面に於ける氏の學問が完成されたら、蓋し驚くべきものがあるに相違ない。

氏の著書としては、新潮社から出てゐる現代脚本叢書中に「秦の始皇」といふ脚本集がある。他には感想集「未知國への憧憬」がある。

尚、最近ベネットの「一里塚」と、アーギンの「船」の譯が、近く第一書房から出版される筈である。

氏の時折々に發表された短い劇評や、演劇論には、傑れた暗示を持つた好文字が少くない、いづれも氏の篤學を語るものである。

解說

○「秦の始皇」

大正十年十二月明治座で、澤田正二郎一座に依つて、澤

田の始皇、中井の呂不韋、久松の朱太后で演じたことがある。これは三篇で一つの戯曲になつてゐる。一篇宛でも一つの纏つた作品になつてゐるが、三篇で一人の英雄主義者の悲哀が語られてゐる。

○「サヴイエーの晴着」

眞面目な宣教師が心にもないことを勸められて、自分のものでない「世界」へ入ると忽ち、憐れな滑稽を演じて、一人の道化者になつて了ふといふやうな諷刺を、上品に書いたものである。

この作者には、先づ詩人的心境の淸純と氣稟とを感ずる。けれどコンストラクシヨンの單純と、技巧に何處か固いところがあつて、全體から受ける感銘はやゝ弱い。

傑れた材料を掴んで、取扱つてゐる態度も相當複雜でありながら、もう一呼吸押して行く力や餘裕に缺けてゐるといつた怨みが、ありはしないか、私にはそんな氣がする。

林和篇

小傳

林和氏は、明治二十年八月、千葉縣小見川町に生れた。氏は茨城縣鹿島郡輕野村高濱代官屋敷野口和七氏の三男である。母は利加といつて林家に生る。卽ち氏は母方の姓を繼いだのである。

土地の學校に學ぶ傍、土佐藩出の漢詩人延年翁に教へを受けた。東京遊學に上京してからは、江見水蔭、岡田三面子の世話になり、早稻田大學文科に學び、坪內博士の文藝協會演劇研究所に入る。同所の試演には「ハムレツト」の「ハムレツト」、「ヘツダ」のレオボルクに扮してゐる。

同所を卒業して、文藝協會が宿題である「ハムレツト」を、帝國劇場に上すやレアチイズをふられてゐる。

其の後、演劇雜誌「大正演藝」の主筆となつたが、暫くでやめ、大正三年三月有樂座で氏が中心になつて、黑猫座の公演といふ旗擧げがある。これが後の文藝座のはじまりともいへないことはない。

それは氏と尾上菊五郎とが中心になつて、帝大、早稻田、慶應の學生達で、「黑猫」なる雜誌を出したことがある。その學生の中には柳澤健氏も交つてゐた。さうして「黑猫」主催で演藝會をやつて、菊五郎が踊つたり、喜劇を出したりしてゐた。無論高踏的なヂレツタントの集りであつたらしい。ウヰードの「ねん〳〵はたご」を出した時は、六代目と氏が舞臺裏をやり、柳澤氏が取者をやつたりした。それから前にいふ公演といふ段取になつた。

五日間興行で、出物はシユニツレルの「戀愛三昧」と氏

の「どくろ小町」をやつた。「どくろ小町」では氏も舞臺に出て關寺小町をやり、友右衞門（當時東藏）の若僧、勘彌の文屋康秀、千歳の小町といふ役割で、氏は作者兼演出者兼役者で三人前の活動をやつた。これが勘彌が現代語の史劇をやつた最初であることはいふまでもない。

その年に文藝座は打つて出た。即ち六月下旬帝國劇場に第一回の公演を行つた。出物は武者小路實篤氏の「わしも知らない」と、氏自身の「惡魔の曲」だつた。その三日間の成績はどうかといへば、世間的には相當好評のやうだつたが、收支償ふことが出來ないで、その爲めに氏は青山の寓居で一年餘も引籠つて、再擧を計らねばならない始末だつた。無論これが使つても減らない程の金持ちなら知らないこと、一般の新劇運動者の更らぬ運命でもあつたのだ。

第二回は、大正五年三月の帝國劇場で、出物は「ロミオとヂユリエツト」武者氏の「或る日の一休」生田長江氏の「告白の後」で、氏は「ロミオとヂユリエツト」でマーキシオを勤めた。これが氏の最後の舞臺である。以後全く舞臺へ出ない。

第三回は、大正八年三月十五日有樂座で、出物は菊池寛氏原作「忠直卿行狀記」を氏が脚色し、他にアンドレーフの「人の一生」と近松原作、河竹繁俊氏脚色の「女殺油地獄」といふ並方だつた。この興行は文藝座の興行以外に、ある特別な意味があつた。それは勘彌が從來座附であつた市村座を脫けて、最初に踏んだ東京の舞臺だつたからである。

文藝座は第十回まで公演を行つたが、その後はずつと途絕えてゐる。

大正十四年九月囑託として、氏は帝國劇場に招聘された。氏は文藝座旗擧げ以來、山本專務の知遇を感じてゐて、偶偶久米秀治氏の歿後、遂に同劇場の人となつたといはれてゐる。

著書には、脚本集に「公暁」「惡魔」の曲があり、他に「江戸一代女」「俠客物語」「柳澤吉保評傳」等がある。

解　說

○「三右衞門の賣出し」

昭和元年七月帝國劇場で、幸四郎壽美藏で初演したものである。實力のない者が偶然評判になつて、男を賣出すことになるといふもので、輕薄な今日の世相を諷刺したと思はれる作である。これは氏の作中で佳作のうちに數へていいものである。

○「鼠小僧旅枕」

猿之助が大阪へ行つて上演したことがある。講釋種らしいが、鼠小僧が甲州路の侘しい旅籠で、偶然父親にめぐり

逢ふところに、一脈の哀愁を持つてゐる。

○「樽屋おせん」

云ふまでもなく西鶴の小説を脚色したものである。昭和三年九月帝國劇場で、勘彌浪子で上演した。割合ムラのない作で、迫に老練な筆でおせんが復讐に燃える徑路が好く描寫されてゐる。

○「田之助色懺悔」

洗錬された才筆が目立つ、色を漁る田之助の淋しい心境を摑へてゐるのが手柄である。しつくりした味ひで見せる方の作品だから、柄行のいゝ徘優がそこを覘つてやつたら、案外面白いものになるかも知れない。

○「心中兩國橋」

大正十三年秋、震災後復興された帝國劇場の初舞臺に、梅幸、幸四郎、勘彌で上場した力作である、女主人公のお妻が八郎兵衞を愛する氣持になるまでが、實に段取よく運んである。殊に銀猫の内部の描寫は、簡潔であるが一寸凄愴な感じに打たれる程、しつかりしてゐる。一體に三幕五場といふ長篇ではあるが、作者の筆に熱があつて緊張し、均整の美にも富んでゐる。恐らく作者の代表作の一つと云つても恥しくないものだらう。

○「荻江靈友」

圓朝の人情噺の脚色である。昭和二年九月帝國劇場で、勘彌と女優達に依つて初演されたものである。徘優の力量にもあるだらうが、露友の住居のところが、一番いゝ場面になつてゐたやうに記憶してゐる。

今日の見物と、今日の劇場の爲めに、作者は脚本を書いてゐる。その歌舞伎的な色彩に富んでゐるのは、劇場内部の人だけに、あてはめて書く徘優のせゐかも知れないが、一つは作者の覘ひどころも、そこにあるやうである。氏の作ではいかに徘優の柄を見て、書いてゐるかなど、さういふ實際的な問題を學ぶべきである。

清見陸郎篇

小傳

清見陸郎氏は、明治十九年十月十一日、東京神田猿樂町二ノ三に生れた。

將來畫家になれといふ父母の希望に從つて、小學時代既に岡本秋名、橋本雅邦、川端玉章の三家について、畫を描く修業をした。

東京中學卒業後、前からの行きがかりで東京美術學校に入學、それでも日本畫科に一ヶ年程ゐたけれども、この以前から動いてゐた文學に對する愛慕やみ難く、遂にそこを

飛び出して、早稻田大學文學科に入つた。

併し間もなく家が破産して、學業を暢氣に續けてゐられなくなつて、これも亦僅々數ヶ月で退學の止むを得ないことになつた。

それから「美術新報」「秀才文壇」の編輯をやつたあとで根岸興行部の脚本部に入つて、脚本を書くことになつた。そこで氏は不遇な秀才、(私はさういふやうな氣がするが)又五郎と相知る機會を得た。

この間の消息は、氏の脚本集「宮古路豐後掾」(大正十年四月出版)の序文に詳しい。次にそれを拔書きさせて貰ふことにする。

或偶然の機會が私を劇作家として根岸興行部に關係させるやうにした。併し所謂邪劇の製造に近い自分の仕事に、私は容易に興味を感ずる事が出來なかつた。私が本當に劇作家としての意義を痛感し、一生をこの道で立てようと決心するに至つたのは、私の「宮古路豐後掾」が故中村又五郎君に依つて演出された時以來だ。

又五郎君の技藝を充分に知つてゐる誰もが云ふ通り、君の豐後掾は君の一生を通じての傑作だと推賞するに躊躇しない程の出來榮であつた。作家としての私は、自己の作品に第三者的の批判を加へる冷靜を持たない。併し優れた君の技藝が私のこの戲曲に、更に熱い血汐と、強い生命(いのち)とを注ぎ込んでくれた事だけは決して疑はぬ。

この成功に力を得た私は、更に又五郎君の爲に「おこよ源三郎」を書いた。頁の都合でこの集に入れなかつたが「石田三成」をも提供した。四番目に「松平忠直卿」を演ぜんとして果さず、君は宿痾の爲に急に不歸の客となつた。去年三月十九日——私が君と識つて以來僅に一年を經るに過ぎない。

その當座、世界は私に取つて闇黑そのものだつた。光明は君と共に永遠に私から去つてしまつたやうな氣持がした兎に角お前は又五郎君に依つて、劇作家としての或自信を呼覺まされたのではないか。今意氣地なく倒れては、故人に對しても恥かしくはないか。——これだけの元氣を振ひ起して來るのは私に取つては容易の事ではなかつた。

から氏は書いてゐる。

脚本家が自分の友達である俳優を見出すことの、是非とも必要であることはいふまでもない。その友達を得るか、得ないかに依つて、脚本家の仕事は決定されるといつても、敢て過言ではないと思ふ。

清見氏は偶々又五郎に一人の必要缺くべからざる知己を見出した。さうして脚本家としての自信を與へられた。が、間もなく、それは餘りにも短かい月日だけを後に殘して、遠くへ行つて了つたのである。氏の不幸は能く私にも分る

やうな氣がする。

根岸興行部をやめて了つてから、氏は餘り脚本を書いてゐない。

著書には、脚本集「宮古路豐後掾」の他に、改造社から出した小說の飜譯がある。

解說

○「坂崎出羽」

大正八年十一月の作で、大正九年二月赤坂演技座で、市川新之助一座に依つて初演された。其の後新之助も再演してゐるが、嵐德三郎、諸口十九等もこれを演じてゐる。「坂崎出羽」にもいろ〳〵あるが、この作は有名な山本有三氏の「坂崎出羽守」より、二年も前に書かれてゐる。これでは不仕合な出羽守が家老の勘兵衞に弑せられることになつてゐる。舊友の柳生但馬守にも見放され、世を呪ひ、人を呪ひ、すべてを疑つて死んで行く出羽守が描かれてゐる。

○「故國の家」

大正十二年十月大阪角座で、喜多村綠郎の延多津、小織桂一郎の父親、梅島昇の悴で初演された。其の後木村操、大東鬼城等も上演してゐる。悴英一の氣持はかなり好く描かれてゐるが、もう少しと思ふ部分がある。父親は書きにくい割合に成功してゐる方だ。

○「裏切り」

大正十三年十一月の作である。「故國の家」時分から、作者は史劇の筆を轉じて、現代劇に興味を持つやうになつた。さうして作者はこの作に於て思想を階級鬪爭の方へ向け始めた。尤もこれは極めて初歩のもので、特に取立てゝいふことはない。併し作者が既に動いてゐるのであるから、そのうちに氏の研究勉强の報告を、十分に聞かせて貰へるやうな作に接することだらう。

氏も劇場内部にあつて苦勞した人である。從つて小說にト書を喰付けたやうな脚本を書いて、威張つてゐられない人である。が、その方の苦勞はもう十分のやうだ。作者も無論そこに氣付いてゐる。

小寺融吉篇

小傳

小寺融吉氏は、明治二十八年十二月八日東京に生れた。父は芳次郎、母はただ、共に美濃大垣の士族で實業家である。

四歲の時家族と一緒に、北海道小樽に移つて、土地の小學校に學ぶ。十四歲の春小學を終り、二人の兄の跡を追つ

て上京、東京開成中學へ入つて、やがて卒業、續いて早稻田大學文科英文科に入り、大正七年夏二十四歳で卒業した。早稻田を出る少し前から、歌舞伎の型を熱心に研究し出した。特に型の中でも所作事に目をつけた。

學校の卒業論文は「回顧期のイプセン」といふ題で、最後の數篇の作に就て主として研究した。この研究に氏はかなり熱心だつた。それに北海道に永くゐたので、イプセンの作に現はれるノオルウエイの自然に對して、特別な感興を抱いたのが、この研究の進行を助けたことは爭はれない。

氏はイプセンから多くのものを學んだが、中學時代に坪内博士に先立つて、戸澤、淺野兩氏の沙翁の飜譯から、かなり多くの影響をうけた。それから能からも大きな暗示を受けた。

學校を出てから氏は暫く書齋に籠つた。二十八歳の大正十一年に、近代史論叢書の一篇として、その二月に「近代舞踊史論」が出た。越えて六月、脚本「眞間の手古奈」を雜誌解放に發表した。それは直ぐ翌月帝國劇場で、勘彌律子に依つて初演された。併しこれは處女作ではない。「眞間の手古奈」以前に二つも書いてゐる。併し氏を有名にしたのは「眞間の手古奈」で、初演以後方々で上演してゐる。主なるものは林長三郎の五色座で二度、水谷八重子の藝術座では再々やつてゐる。改訂された定本が現代戲曲全集に收錄されてゐる。

「近代舞踊史論」を出してから、舞踊に關する論文や批評をいろ〳〵書いた。それから大正十四年に始まつた日本青年館の郷土舞踊と民謠の會に、柳田國男、高野辰之氏等と共に、審査顧問になつた。さうして別に演奏實演の舞臺監督をすることになつた。

「近代舞踊史論」以後七年目で、昭和三年九月春陽堂から、「舞踊の美學的研究」を出した。

尙氏は戸外劇と兒童劇とに立派な蘊蓄を持つてゐる。大正十一年以後三つの戸外劇を書いて、そのうち二つは自身で演出してゐる。一つは「お竹大日如來」で、芝公園で早稻田の學生を主として、素人俳優數十名が演じた。これは東京市主催の徒弟慰安會の爲にやつたものだが、この爲に增上寺の樂僧が雅樂を、戸山學校の軍樂隊と共に、さかんな演奏をした。次は舞臺協會が淺草出演の記念に、淺草觀世音の廻廊で演じた「石の枕」である。これは淺草寺の緣起を書いたもので、佐々木積、山田隆彌、東屋三郎、岡田嘉子の諸氏が出演した。因にこれは仲木貞一氏と協力の仕事で、仲木氏も自作を提供してゐた。他に未上演のものに「萬物は光あれ」といふ舞踊劇がある。女性日本人に出てゐる。

一方大正十一年の暮から、坪内博士の兒童劇の實演に從

つた。博士は翌年の夏にこの仕事を打切つたので、あとを氏は永田衡吉、小田內通久兩氏と、計つて兒童劇協會其の他で折々續けてやつてゐた。兒童劇の脚本は人形劇と共に相當あるが、未だ本に纏つてゐない。但し昭和二年春弘文社發行の「兒童劇の創作と演出」は、氏がこの六七年間に於けるこの方面の收獲を整理したものである。

大正十三年藝術座が再興されてから、氏は水谷竹紫氏を扶けて暫く內部で働いた。氏の篤學と相俟つて、このいろいろの實際的經驗が、脚本創作の上に活かされるの日は、きつと美事な花を開くであらう。

現在は民俗藝術の會の幹事の一人で、雜誌「民俗藝術」の編輯をしてゐる。

解説

○「人の世の嘆き」

これは作者が考へ出してから、いくたびか稿を變へ、構圖を練つて、七年目に發表したものである。これは讀めば分る通り、余吾の湖の傳說を潤色したものである。いかに創作の難しいものであるかゞ、これを見ても思ひ半ばに過ぎると思ふ。殊に作者の步いてゐるのは箱根の山ならぬ天下の嶮である。併し私もこの難關の向うにこそ演劇の天國が、門をひらいて居り、門の彼方に芝居の大道が坦々として縱橫に通じてゐるやうな氣がする。

○「久米の仙人」

これは大正十四年十月早稻田文學に發表されたものである。これも考へ出してから二三年目の作であると聞いてゐる。

以上二つの作を見ても分る通り、この作者の態度は普通と違つてゐる。つまり見る目、聞く耳で、詩と音樂と舞踊の統一を考へてゐる。必ずしも性格や心理の描寫や問題の提供をしてゐない。そんなことより詩と音樂と舞踊の三位一體の世界を作らうとしてゐる。

小傳及解說

額田君の人及び作品

澤田正二郎

由來體軀に缺陷のある人は、妙にこぢれてひねくれるものである。だがわが隻手の額田君には、些しもそんな暗さ畸形さがない。徹頭徹尾、明るい常識家である。健康な奮鬪兒である。氏が僕に嘗てかういふことを言つたことを深く記憶して忘れない「戲曲家としての僕は、何處までもこのまゝ常道を歩んで進む。それで世間から笑はれるなら幾ら笑はれてもかまはない」——體軀の不自由に心歪まずして、飽くまでも明るい常道を望んでやまない、素直な氏の魂を涙なしに見ることができない。隻手、しかも不自由な左片手に渾身の精力をこめて一歩々々手堅い常道を踏みしめて上る氏の姿を懷しまずにはゐられない。

○

額田君の戲曲は、從つて氏の曰ふ處の常道に脚をおいてゐる。そこに驚嘆するほど突飛な閃きはないかも知れない、戰慄するほどの鋭い尖角はないかも知れない、否、或は必ずしも價値を後世に傳へるべき底のものではないかも知れない。しかしながら、その時代の民衆が如何なるものを最も渇仰してゐたか、これを知る文化史的意義に於て、額田君の戲曲こそ、正に將來大いに遺し傳へらるべきものであらう。時代趣味の常道を歩んで已まない額田氏の戲曲こそ現今民衆の興味の最も正確なバロメーターでなくてはならない。

常に演劇の半歩主義を遵奉する私が、始終好んで額田君の戲曲を上演し、且つその成績のよい所以は全くこゝにある。

從つて、この選集中に出たものでも、私の手がけないものは甚だ少い。「月光の下に」「小梶丸」「山本勘助」「冬木心中」いづれも舞臺における馴染深いものである。その外にも額田君の上演狂言は實に數多い。

私はその全局を通じて以上の言葉を確言し得るものである。

編輯校訂責任
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戲曲全集・第三十七卷
現代篇第五輯・第七回配本

著作權者代表者檢印

昭和三年九月二十五日
昭和三年九月二十八日

（非賣品）

著作者　池田大伍
　　　　仲木貞一
　　　　灰野庄平
　　　　林和
　　　　清見陸郎
　　　　小寺融吉
　　　　額田六福

發行者　和田利彥
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋六五二
　　　　四四一五
振替東京一六一七

東京市本鄉區眞砂町・日東印刷株式會社印刷

